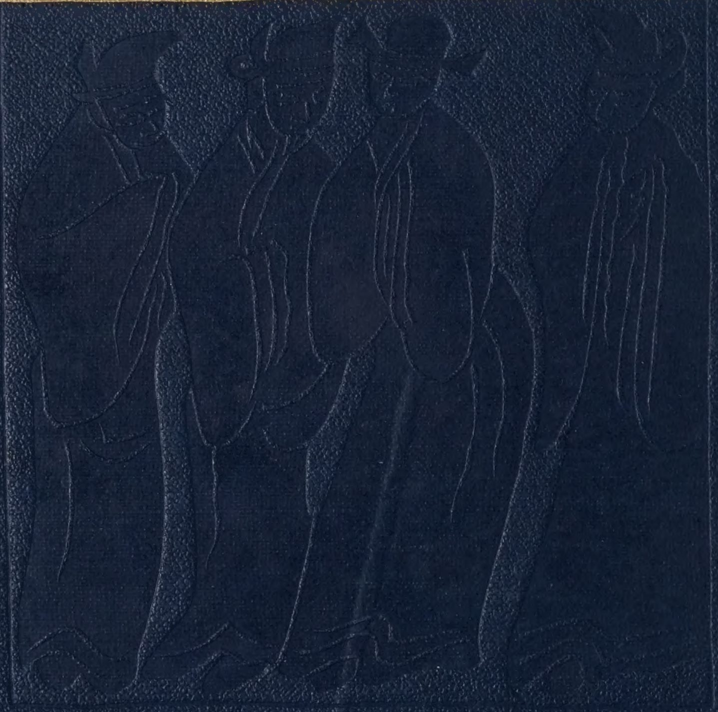
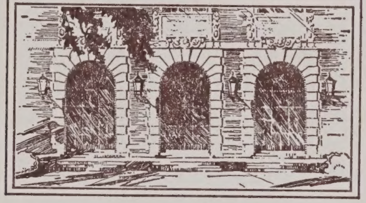






國譯漢文大成

文學部
第三卷

文選
中卷

目次

贈答一

詩丁

贈答二

行旅上

卷の第十四……三六四―四五三

詩戊

行旅下

軍戎

郊廟

樂府

國譯文選 中卷

梁 昭明太子蕭統 選

文學博士 岡田正之
佐久節 譯並註

卷の第十

賦 癸

情

高唐の賦並序 宋玉

昔者楚の襄王、宋玉と(一)雲夢の臺に游び、(二)高唐の觀を望む。其上に獨り雲氣あり、(三)崒として直に上り、忽として容を改め、須臾の間に變化して窮りなし。王、玉に問ひて曰く、此れ何の氣ぞやと。玉對へて曰く、所謂朝雲といふ者なりと。王曰く、何をか朝雲と謂ふと。玉曰く昔者(四)先王嘗て

【一】雲夢。楚の藪澤の名。其中に臺館あるなり。
【二】高唐。樓觀の名。
【三】崒。高く舉る貌。
【四】先王。楚の懷王なり。

高唐に游び、怠りて晝寢ね、夢に一婦人を見る。曰く妾は（五）巫山の女なり、高唐の客たり。聞く君高唐に游ぶと。願はくは枕席を薦めんと。王因つて之を（六）幸す。去るとき辭して曰く、妾は巫山の陽、高丘の（七）岨に在り。旦には朝雲となり、暮には行雨となり、朝朝暮暮、陽臺の下にありと。旦朝に之を視れば言の如し。故に爲に廟を立て號して朝雲といふと。王曰く朝雲始め出づるとき狀若何と。玉對へて曰く、其の始め出づるや、（八）嶵たること（九）松榯の若く、其の少しく進むや、（一〇）晣たると（一一）姣姬の袂を揚げ日を鄣へて、思ふ所を望むが若く、忽として容を改むるや、（一二）偈たること駟馬に駕し羽旗を建つるが若く、（一三）湫たること風の如く、淒たること雨の如く、風止み雨霽るれば雲處所なしと。王曰く、（一四）寡人方今以て游ぶべきかと。玉曰く可なりと。王曰く其れ何如と。玉曰く高し顯なり、臨望遠し。廣し普し、萬物の祖なり、上は天に屬し、下は淵に見れ、珍怪奇偉にして、稱論すべからずと。王曰く、試に寡人の爲に之を賦せよと。玉曰く（一五）唯唯と。

惟れ高唐の大體、殊えて物類の（一六）儀比すべきなし。巫山（一七）赫として其れ疇なく、道（一八）互折して（一九）曾

【五】巫山。山の名。
【六】幸。寵幸すること。
【七】岨。險なり。
【八】嶵。茂る貌。
【九】松榯。直竪の貌。
【一〇】晣。昭明の貌。
【一一】姣姬。美女なり。
【一二】偈。疾驅の貌。
【一三】湫。涼しき貌。
【一四】寡人。諸侯の謙稱。
【一五】唯唯。應諾の辭。
【一六】儀比。比類なり。
【一七】赫。盛なる貌。
【一八】互折。交互曲折なり。
【一九】曾累。かさなること。

累す。巉巖に登りて下望すれば、(二〇)大阺の稸水に臨めり。天雨の新に霽るるに遇ひ、百谷の倶に集るを觀る。(二一)濞洶洶として其れ聲なく、(二二)潰淡淡として竝び入り、(二三)滂洋洋として四に施し、(二四)蓊湛湛として止まず。長風至りて波起り、(二五)麗山の孤畝の若し。勢岸に薄りて相擊ち、(二六)隘して交り引いて卻き會ひ、崒として中ごろ怒りて特に高く、海に浮んで(二七)碣石を望むが若く、(二八)礫磥磥として相摩し、(二九)巆として天に震ひて(三〇)磕磕たり。巨石(三一)溺溺として(三二)瀺灂たり、沫(三三)潼潼として高く厲り、水(三四)澹澹として盤紆し、洪波(三五)淫淫として(三六)溶滴たり。奔揚踴して相擊ち、雲のごとく興りて聲(三七)霈霈たり。猛獸驚いて跳駭し、妄に奔走して馳せ邁き、虎豹豺兕、氣を失ひて恐喙し、鵰鶚鷹鷂、飛揚伏竄し、(三八)股戰脅息す。安んぞ敢て妄に摯らん。

【大意】高唐の臺たる、異常にして物の比類すべきなし。巫山其北に聳え、其道曲折して斜に上

【二〇】大阺。大陵なり。稸水は積水なり。
【二一】濞洶洶。水波の涌騰する貌。
【二二】潰淡淡。水平滿の貌。
【二三】滂洋洋。水勢の盛んなる貌。
【二四】蓊湛湛。水の聚りて深き貌。
【二五】麗山。麗は著なり。孤畝は孤隴なり。
【二六】隘。迫なり。
【二七】碣石。海畔の山の名。
【二八】礫磥磥。衆石の貌。
【二九】巆。石の相摩する聲。
【三〇】磕磕。大聲なり。
【三一】溺溺。沈むこと。
【三二】瀺灂。石の水中に在りて出沒する貌。
【三三】潼潼。高き貌。
【三四】澹澹。水の搖く貌。盤紆は廻旋なり。
【三五】淫淫。去ること遠き貌。
【三六】溶滴。蕩動といふが如し。
【三七】霈霈。水の聲なり。
【三八】股戰。股栗なり。脅息は氣息を收むること。

る。巖上に立ちて下瞰すれば、陵下の積水を見る。雨後衆谷の水盡く此に集り、洋洋として四方に注ぎ、其流絕えず。長風一たび至れば、波浪起りて孤隴の山に著くが如く、勢岸涯に激し、迫隘して交ゝ退き、忽然として復た起り、海上より碣石山を望むが如く、礫石相摩して其聲天に震ひ、巨石水中に在りて出沒し、霏沫潼潼然として高く擧り、水流回旋し、洪波蕩搖し、其狀雲の興るが如く、其聲霈然たり。猛獸之が爲に駭き走り、鷙鳥之が爲に潛み竄れ、戰慄して氣を收め、敢て攫執せず。

是に於て(三九)水蟲盡く暴れて、渚の陽に乘り、黿鼉鱣鮪、交積縱橫し、鱗を振ひ翼を奮ひ、(四〇)蜲蜲蜿蜿たり。中阪に遙望すれば、玄木冬榮き、(四一)煌煌熒熒として、人の目精を奪ひ、爛たること列星の若く、曾て殫く形すべからず。榛林鬱盛し、(四二)葩華覆蓋し、(四三)雙椅房を垂れ(四四)糾枝還り會ひ、(四五)徙靡澹淡として、波に隨つて闇靄し、東西に翼を施し、(四六)猗狔豐沛たり。綠葉(四七)紫裹、朱莖(四八)白蔕。纖條悲鳴して、聲(四九)竽籟に似、淸濁相和して、(五〇)五變

【三九】水蟲。魚龜の類なり。
【四〇】蜲蜲蜿蜿。龍蛇の貌。
【四一】煌煌熒熒。光り輝く貌。
【四二】葩華。花なり。覆蓋は掩ふこと。
【四三】雙椅。椅は木の名。房は花、房を成して生ずるなり。
【四四】糾枝。交枝なり。
【四五】徙靡。枝の往來して靡く貌。澹淡は水波の紋なり。
【四六】猗狔。柔弱にして下垂する貌。豐沛は多きをいふ。
【四七】紫裹。裹は果實の皮なり。
【四八】白蔕。白きシベ、白きへタ。
【四九】竽籟。籟は簫なり。共に樂器の名。
【五〇】五變。五聲皆變ずるなり。四會は四夷の樂と聲和會するなり。

四會し、心を感ぜしめ耳を動かし、腸を廻らし氣を傷り、孤子寡婦、(五一)寒心酸鼻し、長吏も官を隳て、賢士も志を失ひ、愁思已むなく、歎息して涙を垂れ、高きに登りて遠く望み、人心をして瘁ましむ。

【大意】水族驚き出でて陸に上り、背を渚北に曝して蜿蜿たり。中阪に遙望すれば、樹木冬花さき、其光人目を奪ひ、列星の輝くが如く、一一形容すべからず。衆木繁茂して花房を垂れ枝を交へ、風波に隨つて動くと羽翼の施くが如く、綠葉紫實朱莖白蔕各色を競ふ。風細枝を吹けば其聲簫竽の如く、清濁相和して變化一ならず。孤子寡婦をして其悲怨を增さしむ。されば長吏賢士も此を聞けば、皆官を廢て其本志を失ひ、悲歎して已まず、山頂を望んで心を傷ましめざるはなし。

(五二)盤岸巑岏として(五三)振陳して磑磑たり。盤石險峻にして、傾崎し(五四)崖隤し、巖嶇參差として、縱横に相追ひ、(五五)陬互横牾し、背穴(五六)偃蹠し、交加累積し、重疊增益し、狀(五七)砥柱に似たり。巫山の下に在り、仰いで山巓を視れば、肅として何ぞ(五八)芊芊たる、炫燿すること虹蜺の如し。俯視すれば(五九)崝嶸として、(六〇)窐寥

【五一】寒心。戰慄すること。酸鼻は鼻辛酸して涙出でんと欲するなり。
【五二】盤岸。繞れる岸。巑岏は峻險の貌。
【五三】振陳。陳列なり。磑磑は峻險の貌。
【五四】崖隤。くづるること。
【五五】陬互。互一に牙に作る、山角なり。横牾は横逆なり。
【五六】偃蹠。偃蹇なり。
【五七】砥柱。山の名。
【五八】芊芊。山の色なり。
【五九】崝嶸。深直の貌。
【六〇】窐寥。空深の貌。

窈冥たり、其底を見ず、虚しく松聲を聞く、傾岸洋洋として、立ちて熊のごとく經す。久うして去らず、足盡く汗出で、(六一)悠悠忽忽として、怊悵して自失し、人心をして動かしめ、故なくして自ら恐れ、(六二)賁育の斷も、勇を爲す能はず、卒に異物に愕き、出づる所を知らず。(六三)縰縰莘莘として鬼より生ずるが若く、神より出づるが若く、狀走獸に似、或は飛禽に象て、譎詭奇偉にして、究く陳ぶべからず。

【大意】岸崖その傍に陳列し、磐石傾いて勢相追ふが如く、路に橫石ありて其前に逆當し、却けば又山孔に當り、岩石相累りて峻險なること砥柱の如し。巫山の下に居りて山巔を仰視すれば、其色芊芊として虹の如く、俯して溪谷を視れば、空深にして底を見ず。ただ松聲を聞くのみ。岸傾き水流れ、觀る者恐懼して熊の樹に攀ぢて立つが如く、久しく其傍に立てば、汗を流して足に至り、悵然として自失し、驚恐して何の故なるを知らず。孟賁夏育と雖も、其勇を施す所なし。異物卒然として出で、人をして驚愕せしめ、從つて來る所を知らず。鬼神の出入するが如く、其狀走獸飛禽に似て、奇怪なること一一述べ盡し難し。

上りて(六四)觀側に至れば、地蓋し(六五)底平なり。(六六)箕踵漫衍し、芳草羅り生じ、(六七)秋蘭茝蕙、江離載

【六一】悠悠。遠き貌。忽忽は迷ふ貌。
【六二】賁育。孟賁、夏育、古の勇者の名。
【六三】縰縰莘莘。衆多の貌。
【六四】觀側。高唐觀の側。
【六五】底平。底も平なり。
【六六】箕踵。箕の踵の如きなり。
【六七】秋蘭。以下皆香草の名。

ち菁き、(六八)青荃射干揭車苞幷し、(六九)薄草靡靡として聯延(七〇)夭夭たり。(七一)越香掩掩として衆雀(七二)嗷嗷たり。雌雄相失ひ哀鳴して相號び、(七三)王雎鸝、正冥楚鳩、姊歸思婦、垂雞高く巢くひ、其の鳴くと(七四)喈喈として、當年に遨遊し、更ゝ唱ひ迭に和し、曲に赴き流に隨ふ。(七五)有方の士、(七六)羨門高谿あり。上に鬱林を成し、公に樂んで穀を聚め、(七七)純犧を進め、(七八)琁室に禱り、諸神を醮り、(七九)太一を禮し、(八〇)傳祝已に具り、(八一)言辭已に畢れば、王乃ち玉輿に乘り、(八二)蒼螭を駟にし、旒旌を垂れ、旆(八三)合諧す。(八四)大弦を紬きて雅聲流れ、(八五)洌風過ぎて悲哀を增す。是に於て謳を調へ、人をして(八六)惏悷憯悽として、脅息增欷せしむ。

【六八】青荃。以下皆香草の名。苞幷は叢生すること。
【六九】薄草。叢なり。靡靡は相依倚する貌。
【七〇】夭夭。美なる貌。
【七一】越香。香氣の發越すること。掩掩は香氣の貌。
【七二】嗷嗷、雀の聲。
【七三】王雎。鳥の名、ミサゴ。以下皆鳥の名。
【七四】喈喈。鳥の聲なり。
【七五】有方の士。方士なり。
【七六】羨門高谿。仙人の名。史記に始皇燕人盧生ヲシテ羨門高誓ヲ求メシムとあり。谿の字疑ふらくは誓の字の誤。
【七七】純犧。純色の犧牲。
【七八】琁室。玉を以て飾りし宮。
【七九】太一。天神なり。
【八〇】傳祝。神の語なり。
【八一】言辭。祝の傳ふる所の辭。
【八二】蒼螭。龍なり。
【八三】合諧。旌旆相和する貌。
【八四】大弦。大樂の弦なり。
【八五】洌風。寒風なり。
【八六】惏悷憯悽。悲傷の貌。

【大意】山に上りて高唐觀の側に至れば、地平衍にして箕踵の廣大なるが如く、其上に芳草羅列して生じ、香氣發揚して馥郁たり。衆鳥哀鳴して遨遊し、其の鳴くこと歌曲の如し。方士羨門高谿

の輩、鬱然として山上に林を成し、山阿に聚り食ひ。犧牲を供して諸神を祭る。神語已に下り巫祝之を王に傳ふれば、王乃ち玉輿に乘り龍馬を駕し、旆旗を建て、出でて此に遊ばんとす。忽ち大樂の弦を抽けば、雅聲流れて洌風悲哀を增し、人をして悲傷せしむ。

是に於て乃ち獵者を縱ち、(八七)基趾星の如くならしめ、言を傳へて羽獵し、(八八)枚を銜んで聲なからしめ、弓弩發せず、(八九)罘罳傾かず、(九〇)漭漭たるを渉り、(九一)莘莘たるに馳すれば、飛鳥も未だ起つに及ばず、走獸も未だ發するに及ばず、(九二)節を弭むると奄忽にして、蹄足に血を灑ぐ。功を擧ぐるに得るを先にし、獲車已に實つ。王將に往いて之を見んと欲すれば、必ず先づ齋戒して時を差び日を擇び、輿を簡びて(九三)玄服し、雲旆を建て、蜺を旗となし、(九四)翠を蓋となし、風のごとく起り雨のごとく止み、千里にして逝く。蓋し蒙を發し往いて自ら會す。萬方を思ひ、國害を憂へ、賢聖を開き、逮ばざるを輔く。(九五)九竅鬱を通じ、精神滯を察し、年を延べ壽を益すこと千萬歲なり。

【八七】基趾。足なり。
【八八】枚。形箸の如く、橫に之を銜み語を止むる具。
【八九】罘罳。網なり。
【九〇】漭漭。水の廣遠なる貌。
【九一】莘莘。草の叢生する貌。
【九二】節を弭む。勢をゆるむること。奄忽はタチマチなり。
【九三】玄服。黑衣を著ること。
【九四】翠。翡翠の羽。之を車蓋となす。
【九五】九竅。文子に九竅ハ精神ノ戸牖ナリとあり。

【大意】乃ち士卒を布くこと星の列るが如く、命を傳へて狩獵せしむ。弓弩發せず羅網施さず。水

草の間を馳驅すれば、鳥獸未だ飛走するに及ばざるに、蹄足の上皆既に血を灑ぐ。獲物既に車に滿つれば、王往いて之を見んと欲し、先づ齋戒し時日を擇び法服を纏ひ、雲霓を以て旌となし、疾驅すること風雨の如く、忽ち廟に至りて蒙を發き惑を解き、暗に神と會し、萬方の事を思ひ國の利害を憂へ、賢聖の路を開き、以て思慮の及ばざるを補はんとす。是に於て九竅通暢し精神明察し、年を延ぶること千萬歲なり。

(一)神女の賦竝序　　宋玉

楚の襄王、宋玉と(二)雲夢の浦に游び、玉をして(三)高唐の事を賦せしむ。其夜玉寢ね、夢に神女と遇ふ。其狀甚だ麗し。玉之を異とす。明日以て王に白す。王曰く其夢若何と。玉對へて曰く、(四)哺夕の後、精神(五)怳忽として喜ぶ所あるが若く、(六)紛紛擾擾として未だ何の意なるを知らず、目色髣髴として乍ち記するあるが若く、一婦人を見る、狀甚だ奇異なり。寐ねて之を夢み寤めて自ら識らず。罔として樂まず悵爾として志を失ふ。是に於て心を撫で氣を定め、復た夢みし所を見ると。王曰く狀如何と。玉曰く茂なり美なり諸好備はれり、盛なり麗なり測り究め難し。

【一】神女。巫山の神女なり。
【二】雲夢。楚の藪澤の名。
【三】高唐。高唐賦を見よ。
【四】哺夕。日暮なり。
【五】怳忽。自ら覺知せざる意。
【六】紛紛擾擾。心の亂るる貌。

上古にも既に無く、世未だ見ざる所なり。(七)瓌姿瑋態勝げて讃すべからず。其の始め來るや、耀乎たること白日の初めて出でて屋梁を照すが若く、其の少しく進むや、皎たること明月の其光を舒ぶるが如く、須臾の間に美貌横に生じ、(八)爗たること花の如く溫乎たること瑩の如く、五色竝び馳せ、殫く形るべからず。詳に之を視れば人の目精を奪ふ。其の盛飾は則ち(九)羅紈綺繢文章を盛にし、極服妙綵萬方を照し、繡衣を振へ(一〇)袿裳を被り、(一一)穠なれども短からず、纖けれども長からず。歩(一二)裔裔として殿堂を曜し、忽として容を改め、(一三)婉たること游龍の雲に乘りて翔るが若く、被服を嫋しうし薄裝を俛くし、蘭澤に沐し(一四)若芳を含み、性和適にして旁に侍るに宜しく、順序卑かにして心腸を調ふと。王曰く此の若く盛なり。試に(一五)寡人の爲に之を賦せよと。玉曰く(一六)唯唯と。

夫れ何ぞ神女の姣麗なる。陰陽の渥飾を含み、(一七)華藻の好すべきを被り、(一八)翡翠の翼を奮ふが若く、其象雙なく、其美極なし。(一九)毛嬙も袂を鄣ひて、(二〇)程式するに足らず、(二一)西施も面を掩ひて、之に比ぶるに色なし。之に近づけば既に妖に、之に遠ざかれば望むあり。骨法奇

【七】瓌姿瑋態。美しき姿。
【八】爗。盛なる貌。
【九】羅紈綺繢。うすぎぬ。
【一〇】袿裳。袿は婦人の上衣。
【一一】穠。肥なり。
【一二】裔裔。行く貌。
【一三】婉、美なる貌。
【一四】若芳。杜若は香草の名。
【一五】寡人。襄王の謙稱。
【一六】唯唯。應諾の辭。
【一七】華藻。美飾なり。
【一八】翡翠。鳥の名、かはせみ。其羽毛極めて美なり。
【一九】毛嬙。古の美女の名。
【二〇】程式。比較といふが如し。
【二一】西施。古の美女の名。

多く、〔二二〕君の相に應じ、之を視れば目に盈つ。孰者か克く尙へん。私心獨り悅び、之を樂むこと無量なり。交希に恩疎にして、盡く暢ぶべからず。他人は覩るなく、玉のみ其狀を覽たり。

【大意】 この美女や、天地陰陽の美飾を被り、翡翠の翅を振ふが如く、其美匹類なし。毛嬙西施と雖も到底之に比するに足らざるなり。近く之を視れば妖豔に、遠く之を視れば人をして凝望せしむ。その骨相實に君に侍するに足る。天下何物か克く之に勝るものあらんや。予獨り之を見て悅ぶこと甚し。然れども交情未だ密ならず、吾が志を暢ぶる能はざるなり。

其狀〔二三〕峩峩たり。何ぞ極言すべけん。貌〔二四〕豐盈にして以て〔二五〕莊姝に、溫潤の玉顏を苞ね、眸子炯として其れ精朗に、〔二六〕瞭として美多くして觀るべく、眉〔二七〕聯娟として蛾の揚るに似、朱脣的として其れ丹の若し。素より〔二八〕質幹の醲實なる、志〔二九〕解泰にして體閑なり。既に幽靜に〔三〇〕姽嫿し、又人間に〔三一〕婆娑す。宜しく高殿にして以て意を廣め、〔三二〕翼として放縱にして綽寛なるべし。〔三三〕霧縠を動かして以て徐步すれば、墀を拂うて聲〔三四〕珊珊たり。

【大意】 其狀たる高尙にして一一述べ盡すべからず。顏貌肥滿嚴美にして溫潤なること玉の如く、

〔二二〕君の相。正に君に侍すべきをいふ。
〔二三〕峩峩。高き貌。
〔二四〕豐盈、肥滿なり。
〔二五〕莊姝。嚴美なり。
〔二六〕瞭。明目なり。
〔二七〕聯娟。微しく曲れる貌。
〔二八〕質幹。體軀なり。
〔二九〕解泰。蕭散安舒なり。
〔三〇〕姽嫿。閑靜なり。
〔三一〕婆娑。放逸の貌。
〔三二〕翼。放縱の貌。
〔三三〕霧縠。うす絹。
〔三四〕珊珊。玉の聲。

眸子明朗にして眉蛾の如く、脣赤くして丹の如く、體軀壯實にして志操急躁ならず。閑靜を幽隱に習ひ、又よく人中に徜徉す。宜しく高殿の上に置き、翼然として放縱自ら寛うせしむべきなり。一たび綺穀の衣を動かして徐歩すれば、珮玉の聲珊珊として庭上に鳴る。

余が帷を望んで延視し、流波の將に瀾たたんとするが若し。長袖を奮つて以て衽を正うし、立つて（三五）躑躅して安んぜず。（三六）澹として淸靜にして其れ（三七）愔嫕に、性（三八）沈詳にして煩しからず。時に（三九）容與として以て微しく動き、志未だ原を得べからず。意近きに似て既に遠く、將に來らんとして復た旋るが若し。余が幬を褰げて（四〇）御せんと請ひ、心を盡して（四一）惓惓たらんことを願へば、貞亮の絜淸を懷き、卒に我と相難んず。嘉辭を陳べて云に對すれば、芬芬を吐くこと其れ蘭の若し。精交接して以て來往し、心（四二）凱康して樂歡し、神獨り亨りて未だ結ばず、魂（四三）煢煢として以て端なし。然諾を含んで其れ分らず、（四四）喟として音を揚げて哀歎すれば、（四五）頩として薄か怒りて以て自ら持し、曾て犯干すべからず。

【三五】躑躅。徘徊といふが如し。
【三六】澹。靜なる貌。
【三七】愔嫕。閑雅なり。
【三八】沈詳。沈默安詳なり。
【三九】容與。ゆつたりとせる貌。
【四〇】御。愛幸なり。
【四一】惓惓。心を盡す貌。
【四二】凱康。やはらぐこと。
【四三】煢煢。憂ふる貌。
【四四】喟。嘆息する貌。
【四五】頩。怒つて色青き貌。

【大意】余が帷を望んで延視し、其眼容恰も流水の波瀾をなさんとするが如く、衣襟を正して徘徊

し、閑雅沈靜にして躁しからず。或は逍遙として徐歩し、來らんとするが如く、去らんとするが如く、其志測り知るべからず。予乃ち帷を掲げて慇懃を結ばんことを願へば、潔清の志を抱き、之を難じて相近づかず。因つて相對して問語すれば芬芳蘭氣の如く、心情相往來して歡樂し、心相通ずと雖も竟に未だ愛を結ばず、然諾を含むと雖も猶ほ吾が心に當らず。予乃ち喟然として哀歎すれば、少しく怒りて自ら矜持し、その威敢て觸犯すべからず。

是に於て珮飾を搖し（四六）玉鸞を鳴らし、衣服を整へ容顏を斂め、（四七）女師を顧みて大傅に命じ、歡情未だ接せざるに、將に辭して去らんとし、（四八）遷延して身を引き、親附すべからず。逝くに似て未だ行かず、中ごろ相首ふが若く、（四九）目略して微に眄み、（五〇）精彩相授け、志態橫に出で、勝げて記すべからず。意離れて未だ絕えず、神心（五一）怖覆し、禮訖るに遑あらず、辭究むるに及ばず。須臾を假さんことを願へば、神女遽なりと稱す。腸を徊らし氣を傷り、顚倒して據を失ひ、闇然として冥く、忽として處を知らず。情に獨り私に懷ふ。誰者にか語るべき。惆悵して涕を垂れ、之を求めて曙に至る。

【大意】神女乃ち珮玉を鳴らし、衣飾を整へ、女傅に命じて將に歸らんとし、却行して近づくべか

【四六】玉鸞。玉の鈴。
【四七】女師。神女の女師なり。
【四八】遷延。却行して去らんとすること。
【四九】目略。輕く看るなり。
【五〇】精彩。精神光彩なり。
【五一】怖覆。恐怖して反覆すること。

らず。去らんとして未だ去らざるの間、又回顧して相向ひ、精神光彩を授與して未だ全く絶たず。予乃ち心恐怖して反覆し、須臾の歡を假さんことを乞へば、神女急を告げて肯ぜず。予因つて離別を惜み、精神闇然として神女の在る處を失ふ。抱懷誰にか語るべき。惆悵して天明に至るまで之を求む。

登徒子好色の賦 竝序　　宋玉

大夫（一）登徒子、楚の襄王に侍り、宋玉を短りて曰く、玉の人となり體貌閑麗にして口に（二）微辭多く、又性色を好む。願くは王與に後宮に出入する勿れと。王、登徒子の言を以て宋玉に問ふ。玉曰く體貌の閑麗は天より受くる所なり。口に微辭多きは師に學ぶ所なり。色を好むに至りては臣有ることなしと。王曰く子色を好まずといふ、亦（三）說ありや。說あらば則ち止む。說なくんば則ち退けんと。玉曰く天下の佳人は楚國に若くはなし。楚國の麗き者は臣が里に若くはなし。臣が里の美き者は臣が東家の子に若くはなし。臣が東家の子は之に增すこと一分なれば則ち太だ長く、之に減ずること一分なれば則ち太だ短し。粉を著くれば則ち太だ白く、朱を施せば則ち太だ赤し。眉は（四）翠羽の如く肌は白雪の如く、腰は（五）素を束ねた

【一】登徒子。登徒は姓なり。子は男子の通稱。
【二】微辭。妙詞なり。
【三】說。辨解の辭。
【四】翠羽。翡翠の羽、翡翠は鳥の名、其羽極めて美し。
【五】素。白絹なり。

るが如く、齒は貝を含めるが如し。（六）嫣然として一笑すれば（七）陽城を惑はし下蔡を迷はす。然るに此女牆に登りて臣を闚ふこと三年なるも、今に至るまで未だ許さざるなり。登徒子は則ち然らず。其妻（八）蓬頭攣耳、（九）齞脣歷齒、（一〇）旁行踽僂にして又（一一）疥且つ痔なり。登徒子之を悅んで五子あらしむ。王之を熟察せよ。誰か色を好む者となすかをと。

この時秦の（一二）章華の大夫側に在り。因つて進んで稱して曰く、今夫れ宋玉盛に隣の女を稱して以て美色となす。愚亂の邪臣自ら以爲らく、德を守ること彼の如くならずと謂へり。且夫れ南楚窮巷の妾、焉んぞ大王の爲に言ふに足らんや。臣の陋目曾て覩し所の者の若きは、未だ敢て云はざるなりと。王曰く試に（一三）寡人の爲に之を說けと。大夫曰く（一四）唯唯と。

臣少きとき曾て遠く游び、周く（一五）九土を覽、足（一六）五都を歷、（一七）咸陽を出でて（一八）邯鄲に熙び、鄭衛（一九）溱洧の間に從容す。この時春の末に向ふとし、夏の陽を迎ふ。（二〇）鶬鶊喈喈として、羣女出でて桑る。

【六】嫣然。笑ふ貌。
【七】陽城、下蔡。楚の二縣の名、蓋し貴人の居る所。
【八】蓬頭。亂髮なり。攣耳は耳の病なり。
【九】齞脣。脣短くして齒を掩はざるなり。歷齒は齒の稀疎なること。
【一〇】旁行。步行すること正しからざるなり。踽僂は身の曲めること。
【一一】疥。瘡なり。
【一二】章華。地名なり。
【一三】寡人。襄王の謙稱。
【一四】唯唯。應諾の詞。
【一五】九土。九州なり。支那全土をいふ。
【一六】五都。五方の都會。
【一七】咸陽。秦の都。
【一八】邯鄲。趙の都。
【一九】溱洧。川の名。
【二〇】鶬鶊。鳥の名。喈喈は鳥の聲。

此郊の（二）姝、華色光を含み、體美に容冶にして、飾粧を待たず。臣その麗なる者を觀、因つて詩を稱して曰く、大路に遵つて子の袪を攬らんと。贈るに芳華を以てす。辭甚だ妙なり。

【大意】臣少き時各地を周遊し、鄭衛溱洧の間に至る。時に春去り夏將に至らんとし、鶬鶊喈喈として鳴き、衆女桑葉を摘めり。中に一美女あり體美しく容冶しく、粧飾を假らずして天生の麗質なり。臣之を觀て詩を稱して曰く、子の衣袖を攬りて與に同じく往かんと欲すと。因つて贈るに芳花を以てせり。

是に於て（三）處子怳として望むあるが若くにして來らず、忽として來るあるが若くにして見えず。意密に體疏にして、俯仰觀を異にし、喜を含んで微笑し竊視流眄し、復た詩を稱して曰く、春風の鮮榮を發するを竊、挈齋して音聲を惠むを俟つ。我に贈ること此の如きは、生なきに如かずと。因つて（三）遷延して辭避す。蓋し徒に微辭を以て相感動し、精神相依憑し、目に其顏を欲するも、心に其義を顧み、詩を揚げ禮を守りて、終に（四）過差せず。故に稱するに足れりと。是に於て楚王善しと稱す。宋玉遂に退かず。

【大意】女子乃ち相望むあるが如きも、禮を守りて來らず。情意既に密なれども形體相離れて疏遠なり。ただ俯仰微笑して顧視するのみ。因つて詩を稱して大夫に答へて曰く、春風の萬物の榮華を發

【二】姝。美女なり。
【三】處子。處女なり。怳は失意の貌。
【三】遷延。却行して去らんとすること。
【四】過差。禮に違ふこと。

揚するを見、乃ち齋戒して以て惠和の音を待てり。然るに今我に贈るに大路の詩を以てし、恩情を結ばんと欲す。此の辱めを受けんよりは死するに如かずと。因つて却行して去る。かくて微詞を以て精神相感動せるのみにして、義を執り禮を守りて終に違はず。故に稱道するに足るなりと。楚王之を聽きて善しと稱す。宋玉大夫の義を顧るに及ばずと雖も、登徒子が色を好むに同じからず。故に退かず。

(一)洛神の賦竝序

(二)曹子建

(三)黃初三年、余(四)京師に朝し、還りて洛川を濟る。古人言へるあり、斯水の神名づけて宓妃といふと。宋玉が楚王に對へて神女の事を說けるに感じ、遂に斯賦を作る。其詞に曰く、

余京師より言に(五)東藩に歸る。(六)伊闕に背き(七)轘轅を越え、(八)通谷を經(九)景山に陵る。日既に西に傾き、車殆く馬煩る。爾して迺ち駕を(一〇)蘅皐に稅き、駟に(一一)芝田に秣ひ、(一二)楊林に容與し、洛川に

【一】洛神。伏犧氏の女宓妃、洛水に溺死して神となる。
【二】曹子建。曹植、字は子建、魏の武帝の第三子なり、初め東阿王に封ぜられ、後改めて雍丘王に封ぜられ、謚して陳思王といふ。
【三】黃初。魏の文帝の年號。
【四】京師。洛陽なり。還るとは雍丘に還るなり。
【五】東藩。雍丘なり。
【六】伊闕。山の名。
【七】轘轅。坂の名。
【八】通谷。谷の名。
【九】景山。山の名。
【一〇】蘅皐。香草の澤。
【一一】芝田。地名。
【一二】楊林。地名。容與は徜徉。

流眄す。是に於て精移り神駭き、忽焉として思散ず、俯して則ち未だ察せず。仰いで以て觀を殊にし、一麗人を巖の畔に觀る、爾して迺ち御者を援いて之に告げて曰く、爾彼者を覿るありや。彼は何人にして此の若く之れ艷なると。御者對へて曰く、臣聞く河洛の神、名を宓妃といふと。則ち君王の見し所や、迺ち是れなるなからんや。其狀若何。臣願くは之を聞かんと。

【大意】余洛陽より雍丘に歸らんとし、伊闕山を後にし轘轅坂を越え、通谷を渡り景山に登る。時に日既に西に傾き、車危く馬疲れぬ。因つて芝田に憩ひて馬に秣ひ、楊林に徘徊し洛水を顧望す。精神忽ち爽快にして憂思消散して跡なし。俯仰の間一異物を觀たり。凝視すれば一麗人の巖側に立てるあり。乃ち御者を招きて問うて曰く、汝彼の美女を見たるか、彼れ何物にして此の如く美艷なるかと。御者曰く河洛の女神を宓妃といふ。君王の見し所の美女は、乃ち是れならん。願くは其狀を聞かんと。

余之に告げて曰く、其形や、(一三)翩たること驚鴻の若く、(一四)婉たること游龍の若く、榮は秋菊よりも曜き、華は春松よりも茂り。髣髴たること輕雲の月を蔽ふが若く、飄飄たると流風の雪を廻らすが若く、遠くして之を望めば、皎として太陽の朝霞に升るが若く、迫して之を察れば、灼として芙蕖の(一五)淥波を出づるが若く、(一六)穠纖中を得、(一七)脩短度に

【一三】翩。身の輕きこと。

【一四】婉。美なること。

合ひ、肩は削り成せるが若く、腰は素を約ねたるが如く、(一八)延頸秀項、(一九)皓質呈露し、(二〇)芳澤加ふるなく、(二一)鉛華御せず。(二二)雲髻峩峩として脩眉(二三)聯娟たり。丹唇外に朗り、皓齒内に鮮に、明眸善く睞み、靨輔(二四)權を承け、(二五)瓌姿豔逸にして、儀靜に體閑なり。柔情(二六)綽態語言に媚び、奇服(二七)曠世にして骨像(二八)圖に應じ、羅衣の(二九)璀粲たるを披て、(三〇)瑤碧の華琚を珥み、(三一)金翠の首飾を戴き、明珠を綴りて以て軀を耀し、遠游の文履を踐み、(三二)霧綃の輕裾を曳き、幽蘭の芳藹たるに微れ、歩して山隅に(三三)踟躕す。

【大意】美女の狀貌たるや、翩輕なること鴻雁の驚翔するが如く、婉媚なること蛟龍の飛遊するが如く、榮茂は松菊にまさり、光彩の輕妙なること、雲の月を掩ふが如く、風の雪を廻らすが如く、遠く望めば旭日の朝霞の間に升るが如く、近く視れば芙蓉の綠波を出づるが如く、肥瘠長短その宜

【一五】淥波。綠の波。
【一六】穠纖。肥瘠なり。
【一七】脩短。長短なり。
【一八】延頸、秀項。延秀は長きなり。
【一九】皓質。白き肌。呈露は現れて見ゆること。
【二〇】芳澤。香油なり。
【二一】鉛華。おしろい。御は施すこと。
【二二】雲髻。美髮なり。峩峩は高き貌。
【二三】聯娟。微曲の貌。
【二四】權。兩頰なり。
【二五】瓌姿。美姿なり。
【二六】綽態。寬裕なる態度。
【二七】曠世。世に稀なること。
【二八】圖。圖相なり。
【二九】璀粲。衣の聲。
【三〇】瑤碧。玉なり。華琚は佩玉なり。
【三一】金翠。黃金及び翡翠。
【三二】霧綃。薄絹なり。
【三三】踟躕。たたずむこと。

きにかなひ、肩は削れるが如く腰は素を束ねたるが如く、頸長く項秀で、香油粉白を加へずして美なり。髻は高く眉は曲り、朱脣と皓齒と相映じ、目美しく靨婉なり。情思姿態柔媚艷冶にし骨相圖相に應じ、美衣を纏ひ珮玉を帶び、金翠を以て釵冠を飾り、明珠を綴りて身を輝かし、文飾せる履を穿ち、霧綃の裾を曳き、蘭香の晻藹たる處に微れて山隅に徘徊す。

是に於て忽焉として體を縱にし、以て遨び以て嬉み、左は(三四)采旄に倚り、右は(三五)桂旗に蔭れ、皓腕を(三六)神滸に攘げ、湍瀨の(三七)玄芝を采る。余が情その淑美を悅び、心振蕩して怡ばず。良媒なくして以て歡を接へんとし、微波に託して辭を通ず。(三八)誠素の先づ達せんことを願ひ、玉佩を解いて之を要す。嗟佳人の信脩なる、羌禮に習ひて詩に明なり。(三九)瓊珶を抗げて以て予に和し、潛淵を指して期となす。(四〇)眷眷の款實を執り、斯靈の我を欺かんことを懼れ、(四一)交甫の言を棄てたるに感じ、悵として猶豫して狐疑し、和顏を收めて志を靜にし、禮防を申べて以て自ら持す。

【三四】采旄。旄の類、擧げて以て號令する物。

【三五】桂旗。桂を以て旗竿とせるなり。

【三六】神滸。滸は水涯なり。洛神ここに遊ぶ、故に神滸といふ。

【三七】玄芝。靈草なり。

【三八】誠素。誠實なり。

【三九】瓊珶。玉なり。

【四〇】眷眷。戀慕の貌。款實は誠實なり。

【四一】交甫。神仙傳に江妃ノ二女、江濱ニ遊ビ鄭交甫ニ逢フ、交甫何人ナルヲ知ラズ、目シテ之ニ挑ム、女遂ニ佩ヲ解イテ之ニ與フ、交甫行クコト數步ニシテ空懷佩ナク、女モ亦見エズとあり。

【大意】神女是に於て忽然として輕く擧り、旌旗を翳し、皓腕を伸べて湍瀨の靈草を採る。余其美を見て眷戀の情に堪へず。既に良媒の歡情を通接するなし。故に假に水波に託して言辭を寄せ誠意の通ぜんことを願ひ、佩玉を解いて之に贈る。神女脩信にして禮に習ひ詩に明かなり。故に瓊玉を擧げて余に應和し、その潛居する所の淵を指して會合の處となす。余既に誠實を神女に捧ぐるも、神女猶ほ我を欺き、交甫の誑されし如くならんことを恐れ、悵然として狐疑し、容志を收靜し禮を以て自ら持す。

是に於て（四二）洛靈焉に感じ、（四三）徙倚彷徨す。神光離合し、乍ち陰く乍ち陽に、輕軀を竦げて以て鶴のごとく立ち、將に飛ばんとして未だ翔らざるが若く、（四四）椒塗の郁烈なるを踐み、（四五）蘅薄に歩して芳を流し、超として長吟して以て永く慕ひ、聲（四六）哀厲にして彌〻長し。爾して迺ち（四七）衆靈雜遝して儔に命じ侶に嘯き、或は淸流に戲れ或は神渚に翔り、或は明珠を采り或は翠羽を拾ひ、（四八）南湘の二妃に從ひ、（四九）漢濱の游女を攜へ、（五〇）匏瓜の匹なきを歎き、（五一）牽牛の獨り處るを詠じ、

【四二】洛靈。洛神なり。
【四三】徙倚彷徨。徘徊なり。
【四四】椒塗。香ばしき道。郁烈は香氣の甚しきなり。
【四五】蘅薄。香草の叢。
【四六】哀厲。厲は急なり。
【四七】衆靈。衆神なり。雜遝は多き貌。
【四八】南湘。湘は川の名。舜の妻娥皇女英死して湘水の神となる。
【四九】漢濱。漢水のほとり。游女は漢水の神なり。
【五〇】匏瓜。星の名。獨り河鼓の東に在り、故に匹なしといふ。
【五一】牽牛。星の名。天河の傍に在り、織女星と相隔る。故に獨處といふ。

(五二)輕袿の綺靡たるを揚げ、脩袖を翳して以て(五三)延佇し、體飛鳧よりも迅く、飄忽たること神の若し。波を陵いで微歩すれば、羅襪塵を生ず。動くに常則なく、危きが若く安きが若く、進止期し難く、往くが若く還るが若く、轉眄して精を流し、光潤なる玉顔あり。辭を含んで未だ吐かず、氣幽蘭の若く、華容(五四)婀娜として、我をして餐を忘れしむ。

【大意】神女余が禮を申べて自ら持せるに感じ、徘徊徜徉すれば、光彩離合して或は明に或は暗く、鶴の將に飛ばんとして未だ翔擧せざるが如く、香路を蹊んで芳を散じ、長吟哀厲す。時に衆神來り會し、淸流に戲れ神渚に翔り、明珠を採り翠羽を拾ひ、湘水の神女、漢水の神女と相伴ひ、伉儷の偶なきを歎ず。體輕疾なること鳧の飛ぶが如く、水波の上を歩むこと塵の生ずるが如く、安きが如く危きが如く、往くが如く還るが如く、精光を轉じて顏色玉の如し。言辭を含んで未だ芳香の氣を吐かず。余其美容を見て飮食を忘れぬ。

是に於て(五五)屛翳風を收め(五六)川后波を靜め、(五七)馮夷鼓を鳴し(五八)女媧淸歌し、(五九)文魚を騰げて以て乘を警め、(六〇)玉鸞を鳴して以て偕に逝く。六龍儼として其れ首を齊うし、雲車の(六一)容裔たるに載り、

【五二】輕袿。婦人の上衣なり。
【五三】延佇。久しくたちとまること。
【五四】婀娜。たをやかなること。
【五五】屛翳。風神なり。
【五六】川后。川神なり。
【五七】馮夷。水神なり。
【五八】女媧。黄帝の臣、始めて笙簧を作る。
【五九】文魚。魚の名、此魚翅ありて能く飛ぶ。
【六〇】玉鸞。鈴なり。
【六一】容裔。行く貌。

鯨鯢踊りて轂を夾み、水禽翔りて衞をなす。是に於て（六二）北沚を越え南岡を過ぎ、（六三）素領を紆し（六四）清陽を廻らし、朱脣を動かして以て徐に言ひ、交接の大綱を陳べ、人神の道殊なるを恨み、盛年の當るなきを怨み、羅袂を抗げて以て涕を掩ふ、淚襟に流れて（六五）浪浪たり。（六六）良會の永く絶ゆるを悼み、一たび逝いて鄕を異にし、微情の愛を效すなきを哀み、江南の（六七）明璫を獻ず。（六八）太陰に潛處すと雖も、長く心を君王に寄すと。忽ち其の舍る所を悟ず。悵として神宵くして光を蔽ひぬ。

【大意】是に於て風波忽ち收まり、馮夷鼓を鳴らし女媧唱歌し、文魚躍りて車輿を警戒し、玉鸞を鳴らして倶に往き、龍馬首を騈べて之を牽き、雲車に乘りて去る。鯨鯢水禽を以て侍衞となし、山川を過ぎ首を廻らして相視、脣を開いて交會の意を陳ぶ。幽明道を異にするを恨み、盛年にして予が意に當る能はざるを怨み、因つて袖を擧げて淚を掩ひ、良會の永く絶え、各〻別れて鄕を異にし、微情の愛を效すに足らざるを傷み、明璫を脫して予に贈り、身は太陰に潛居すと雖も、長く心を君王に寄すと言ふ。忽然として其處を見ず。暗然として其光彩を隱し去りぬ。

是に於て下に背き高きを陵り、足往き神留り、情を遺して想象し、顧望して愁を懷き、（六九）靈體の復た

【六二】北沚。北方の小流。
【六三】素領。白き首。
【六四】清陽。眉目の間をいふ。
【六五】浪浪。淚の流るる貌。
【六六】良會。夫婦の道。
【六七】明璫。耳珠なり。
【六八】太陰。衆神の居る處。
【六九】靈體。神女なり。

形れんことを冀ひ、輕舟に御りて上泝り、長川に浮んで反るを忘れ、思(七〇)緜緜として慕を增し、夜(七一)耿耿として寐ねられず、繁霜に霑ひて曙に至り、(七二)僕夫に命じて駕に就かしめ、吾將に(七三)東路に歸らんとす。騑轡を攬りて以て策を抗げ、悵として(七四)盤桓して去る能はず。

【大意】是に於て山川を上下し、予が足進むと雖も、心留り、神女の形狀を想像し、顧望して愁を生じ、神女の復た現れんことを冀ひ、輕舟に駕して泝り、遂に歸るを忘れ、思慕の情緜緜として已まず。繁霜に霑ひて天明に至る。乃ち御者に命じ、去つて東藩に歸らんと欲するも、徘徊して去る能はず。

【七〇】緜緜。密意なり。
【七一】耿耿。心安からざる貌。
【七二】僕夫。御者なり。
【七三】東路。東藩の路。
【七四】盤桓。徘徊して進まざる貌。

詩　甲

(一)補亡詩六首竝序　(二)束廣微

南陔は孝子相戒むるに養を以てするなり。

【一】補亡詩。詩經の詩は、もと三百十一篇ありしが、其內六篇ただ序を存するのみにて詩は亡びて傳はらず、之を六亡詩といふ、束晳己の意を以て之を作り補ひたるもの即ち是れなり。本篇の序は毛詩の原序なり。

【二】束廣微。束晳、字は廣微、

彼の(三)南陔に循ひ、言に其蘭を採る。庭闈を眷戀し、心追安せざれ。(四)彼居の子、(五)游盤すること或る罔れ、爾の夕膳を馨くし、爾の晨餐を絜くせよ。

【大意】彼の南岡に往き香蘭を採るも、親の居る所の庭闈を思ひて、心に安んずるなかれ。人の子たる者は盤游を事とすべきにあらず。當に朝夕の供養を馨絜にし、心を盡して親を養ふべきなり。

彼の南陔に循へば、厥草(六)油油たり。彼居の子、色其柔を思へ。庭闈を眷戀し、心追留せざれ。爾の夕膳を馨くし、爾の(七)晨羞を絜くせよ。

【大意】彼の南岡に往けば草生じて柔かなり。人の子たる者は宜しく之を見て顏色を柔げて親に事へんことを思ふべし。家庭を眷戀し安心して外に留るべからず。當に朝夕の食膳を馨絜にし、以て親を養ふべきなり。

獺あり獺あり、河の涘に在り。波を凌ぎ汨に赴き、(八)魴を噬み鯉を捕ふ。(九)嗷嗷たる林烏すら、哺を子に受く。養隆にして敬薄きは、惟れ禽に似たり。勗めて爾の虔を増し、以て(一〇)丕祉を介け

晉の陽平の人。
【三】南陔。南方の岡隴なり。
【四】彼居。居は助辭にして意義なし。

【五】游盤。遊びまはること。
【六】油油。草始めて生じて柔なる貌。
【七】晨羞。羞は滋味なり。

【八】魴。魚の名。
【九】嗷嗷。鳥の聲なり。
【一〇】丕祉。大福なり。

よ。

【大意】かの獺すら水流を淩ぎて魚を捕へ、以て其先を祭るなり。(禮記に獺魚を祭る云云とあり。)かの烏すら尙ほ食を其子に受く。ただ供養を厚くして、敬禮薄きときは禽獸と異ることなし。宜しく勉めて親を敬し、以て大福を受けんことを期すべし。

白華は孝子の絜白なるなり。

白華(二一)朱蕚、(二二)幽薄に被る。(二三)粲粲たる門子、磨ぐが如く錯くが如く、終晨三省して、其恪を惰らず。

【大意】孝子の潔白なること、朱蕚の白花を承けて幽叢の中に在るが如し。この子氣象粲粲として自ら切磋警勵し、終日吾が身を三省し、敢て勤恪を惰らず。

白華(二四)絳趺、陵の陬に在り。(二五)蒨蒨たる士子、(二六)涅にすれども渝らず。誠を竭し敬を盡し、(二七)亹亹として(二八)劬を忘る。

【大意】孝子の潔白なること、紅蕚の白花を受けて山隅に在るが如し。この子氣象鮮明にして染む

【二一】朱蕚。赤きウテナ。
【二二】幽薄。草の叢生する所を薄といふ。
【二三】粲粲。爽悟の貌。門子は嫡子なり。
【二四】絳趺。絳は赤・趺は蕚足なり。
【二五】蒨蒨。鮮明なる貌。
【二六】涅。染むること。
【二七】亹亹。勉むる貌。
【二八】劬。勞なり。

と雖も變ぜず。誠敬を盡して身の劬勞を忘る。

白華(一九)玄足、丘の曲に在り。(二〇)堂堂たる處子、營むことなく欲することなし。鮮なること晨葩に侔しく、之を點し辱むるなし。

【大意】孝子の潔白なること、黑萼の白花を承けて山丘の間に在るが如し。この子心淡然として營慾なく、鮮麗なること晨花の汙染する所なきが如し。

華黍は時和ぎ歲豐にして、黍稷に宜しきなり。

(二一)黮黮たる重雲、(二二)習習たる和風あり。黍陵巓に華さき、麥丘中に秀づ。田として播かざるはなく、九穀斯れ豐なり。

【大意】風雨時を得て、黍麥田畝に茂盛し、地として播種せざるはなし。九穀是に於て豐穰なり。

(二三)奕奕たる玄霄、(二四)濛濛たる甘霤あり。黍稠華を發き、禾其秀を挺んづ。田として殖ゑざるはなく、九穀斯れ茂る。

【大意】黑雲出でて甘雨降り、禾黍秀でて花を開く。地として耕殖せざるはなし。九穀是に於て豐

(一九)玄足。黑き足。
(二〇)堂堂。拔群の貌。處子は處士なり。
(二一)黮黮。黑き貌。
(二二)習習。和舒の貌。
(二三)奕奕。光なり。玄霄は黑雲なり。
(二四)濛濛。雨ふる貌。甘霤は雨なり。

穰なり。

高しとして播かざるはなく、下しとして植ゑざるはなし。(二五)芒芒たる其稼、(二六)參參たる其穡あり。我が(二七)王委を稽へて、我が民食に充つ。(二八)玉燭陽明にして、(二九)顯猷翼翼たり。

【大意】高田低田、一として播種せざるはなく、禾黍芒芒として長盛す。乃ち之を刈りて王の蓄積となし、以て民食に充つ。是に於てか四氣調和して王道明盛なり。

(三〇)由庚は萬物其道に由るを得るなり。

(三一)蕩蕩たる夷庚、物則ち之に由る。(三二)蠢蠢たる庶類、王亦之を柔じ、道既に由り化既に柔ぎ、木は秋を以て零ち、草は春を以て抽んで、獸は草に在り、魚は順流に躍る。

【大意】廣大なる陰陽の常道あり、萬物之に由りて生ず。王者亦之に由りて庶物を安んず。萬物既に道に由り、庶民亦王化に安んず。故に草木蟲魚の微に至るまで、皆其本性を遂ぐるを得。

(三三)四時遞に謝し、
(三四)八風代ゝ扇ぎ、
(三五)纖阿晷を案じ、
星其躔を變じ、(三六)五

【二五】芒芒。多き貌、種うるを稼といひ、斂むるを穡といふ。
【二六】參參。長き貌。
【二七】王委。王の蓄積。
【二八】玉燭。爾雅に四氣ノ和、之チ玉燭トイフとあり。
【二九】顯猷。王道なり。翼翼は明なる貌。
【三〇】由庚。庚は道なり。
【三一】蕩蕩。廣大なる貌。夷は常、庚は道なり。
【三二】蠢蠢。衆多の貌。庶類は萬物なり。
【三三】四時。春夏秋冬の四季なり。謝は去ること。

緯愆らず、(三七)六氣易るなし。(三八)愔愔たる我が王、(三九)文の跡を紹ぐ。

【大意】四時遞に去り、八風節を失はず。星月各〻其次序を案じて常を失はず。五緯六氣錯逆變易することなし。ああ我が成王、よく文王の跡を繼げりと謂ふべし。

崇丘は萬物其高大を極むるを得るなり。

彼の(四〇)崇丘を瞻れば、其林(四一)藹藹たり。(四二)植物斯れ高く、(四三)動類斯れ大なり。(四四)周風既に洽く、(四五)王猷允に泰なり。

【大意】彼の高丘を瞻れば、林木藹然として茂盛し、動植の物皆其性を遂げて高大なり。周室の風化既に天下に洽く、王道上下に通達す。

(四六)漫漫たる方輿、(四七)廻廻たる洪覆、何の類か繁らざらん、何の生か茂らざらん。物は其性を極め、人は其壽を永うす。

【三四】八風。八方の風。
【三五】纖阿。月の御者なり。
【三六】五緯。雨暘燠風時をいふ。
【三七】六氣。陰陽風雨晦明をいふ。
【三八】愔愔。安和の貌。我王は周の成王なり。
【三九】文。周の文王。
【四〇】崇丘。高丘なり。
【四一】藹藹。茂盛の貌。
【四二】植物。草木なり。
【四三】動類。禽獸なり。
【四四】周風。周の王室の威風。
【四五】王猷。王道なり。
【四六】漫漫。廣きこと。方輿は地なり。
【四七】廻廻。大なる貌。洪覆は天なり。

【大意】廣大なる天地の間、物として繁盛ならざるはなく、羣物その性を遂げ、人民皆長壽を保つ。

(四八)恢恢たる大圓、(四九)茫茫たる九壤、生を資り化を仰ぐ。何に于てか養はざらん。(五〇)人道夭するなく、物極めて則ち長ず。

【大意】ここに廣大なる天地あり。萬物皆生を之に取りて其徳化を仰ぐ。乃ち之を養育して拒むことなし。されば萬物其性を極めて夭傷することなし。

由儀は萬物の生、各〻(五一)其儀を得るなり。

(五二)肅肅たる君子、儀に由り性に率ひ、(五三)明明たる后辟、仁以て政をなす。魚は清沼に游び、鳥は平林に萃り、鱗を濯ひ翼を鼓し、(五四)振振たる其音あり。(五五)賓爾誠を寫し、主其心を竭す。時の和げる、何をか思ひ何をか脩めん。文化内に輯ぎ、武功外に悠なり。

【大意】君子其容儀を謹んで以て道に從ひ、明君仁愛を以て政を爲す。則ち魚鳥各〻其性を得、羣臣皆其誠信を表し、明主心を竭して之を撫す。是を以て時既に和平にして復た思慮脩治の要なく、

(四八)恢恢。大なる貌。大圓は天なり。
(四九)茫茫。廣き貌。九壤は九州、卽ち支那全土をいふ。
(五〇)道夭。中途にして夭死すること。
(五一)其儀。儀は宜なり。
(五二)肅肅。恭謹の貌。
(五三)明明。聰明なり。后辟は君主なり。
(五四)振振。音なり。
(五五)賓。羣臣なり。

文化內に和し、武功遠く外に及ぶ。

述德

(一)祖德を述ぶる詩二首

(二)謝靈運

達人は自我を貴び、高情天雲に屬す。兼ねて物を濟ふの性を抱き、而して(三)垢氛に纓らず。(四)段生魏國に藩とし。(五)展季魯人を救ふ。(六)弦高晉師を犒ひ、(七)仲連秦軍を却く。(八)組に臨んで乍ち緤がれず、(九)珪に對して寧ろ分つを肯ぜんや。物を惠んで賞せらるるを辭し、志を勵して故より人に絕す。(一〇)苕苕として千載を歷へ、遙遙として淸塵を播す。淸塵竟に誰か嗣げる、明哲時に經綸す。講を委てて道論を綴り、服を改めて(一一)世屯を康んず。屯難既に云に康んじ、主を尊んで斯民を隆にす。

【一】祖德。先祖謝安謝玄の德を述ぶるなり。
【二】謝靈運。宋の陽夏の人。玄の孫なり、羣書を博覽し文章の美、江左に及ぶ者なし、永嘉の太守となり山水に遨遊し旬日歸らず、疾と稱して職を去り、後臨川內史となる、遊放永嘉に異らず、有司の糾す所となり廣州に徙され、事を以て棄市せらる。嘗て康樂公を襲封す。故に亦謝康樂と稱す。

【三】垢氛。世俗の事なり。
【四】段生。魏の段干木なり。
【五】展季。柳下惠なり。
【六】弦高。人名。晉師は晉の軍勢。
【七】仲連。魯仲連なり。
【八】組。印綬なり。
【九】珪。封爵せらるる時賜はる瑞玉なり。
【一〇】苕苕。遠き貌。
【一一】世屯。世の難なり。

【大意】賢達の士は物を輕んじて身を重んじ、その高情天と相連屬す。天下を兼濟するの志を抱き、塵俗の拘牽する所とならず。昔段干木は魏國の藩屏となり、展季は魯人を救ひ、弦高は晉軍を犒ひ、魯仲連は秦軍を却け、然も封爵を受くるを肯ぜず、恩惠を施して賞を受けず、唯志を勉めて衆と同じからず。是れ皆賢達の士と謂ふべし。故に千載を經て高風嘖嘖として世に傳はれり。我祖玄能く其遺風を繼ぎ、明哲の才を以て國家を經綸し、講藝を棄て會稽山に隱れて道論を草し、後出でて將軍となり、苻堅を破りて國難を安んず。乃ち晉主を尊んで能く國人を盛にせり。是れ亦賢達の士と稱すべきなり。

(一二)中原昔喪亂す。喪亂豈(一三)解已せんや。(一四)永嘉の末に崩騰し、(一五)太元の始に逼迫し、(一六)河外正に反るなく、(一七)江介蹴圮あり。萬邦咸振懾し、橫流(一八)君子に賴る。溺を拯ひて道情に由り、暴に龕つは神理に資る。秦趙(一九)來蘇を欣び、燕魏(二〇)文軌を遲つ。(二一)賢相世運を謝し、(二二)遠圖事に因つて止む。

【一二】中原。洛陽をいふ。晉の懷帝愍帝の時、石勒劉聰等の賊あり、洛陽を破る。
【一三】解已。解けやむこと。
【一四】永嘉。晉の懷帝の年號。
【一五】太元。晉の孝武帝の年號。
【一六】河外。洛陽なり。
【一七】江介。介は界に同じ。江邊といふが如し。蹴圮は迫促して毀敗すること。
【一八】君子。謝玄を指す。
【一九】來蘇。書經に予が后ヲマツ、后來ラバ其レ蘇センとあり。
【二〇】文軌。中庸に書ハ文ヲ同ウシ車ハ軌ヲ同ウスとあり。
【二一】賢相。謝安をいふ。世運を謝すとは薨去するをいふ。
【二二】遠圖。遠謀なり。

高く(二三)七州の外に揖し、衣を(二四)五湖の裏に拂ひ、山に隨つて濬潭を疏ち、巖に傍うて(二五)枌梓を藝う。情を遣てて塵物を捨て、丘壑の美を(二六)貞觀す。

【大意】石勒、劉聰の輩中國を壞亂し、其禍永嘉の末より太元の始に渉り、洛陽は賊の破る所となりて、其正に反るを得ず。晉乃ち都を江間に遷して迫促狹小の中に國を保ち、萬國皆恐懼せざるはなし。幸に橫流の禍を免れしは、吾が祖謝玄の力に藉る。ああ吾が祖や、道情神理に由りて、暴に勝ち亂を靜めしを以て、秦趙燕魏皆その蘇息を欣び、以て天下一統の期を待てり。圖らざりき吾が祖謝安薨じて、遠謀竟に輟み、謝玄乃ち七州の命を辭し、五湖の間に隱れ、(會稽內史に任ぜらる)池を鑿ち樹を植ゑ、情を冠冕に絕ち、身を丘壑の間に託す。その功業德風誠に欽慕すべきなり。

【二三】七州。時に東晉は七州を領せり。揖は辭すること。
【二四】五湖。湖の名、太湖ともいふ。
【二五】枌梓。ともに木の名。
【二六】貞觀。正しく視るなり。

勸勵

諷諫の詩 並序　韋孟

孟は(一)元王の傅たり。子夷王及び孫王戊にさへ。

【一】元王。楚の元王交、字は游、漢の高祖の同父少弟なり。

戊荒淫にして道に遵はず。詩を作りて諷諫す。

(二)肅肅たる我が(三)祖、國(四)豕韋よりす。(五)黼衣朱黻、(六)四牡龍旂あり。(七)彤弓斯に征し、(八)遐荒を撫寧し、羣邦を摠齊し、以て(九)大商を翼け、彼の(一〇)大彭に迭し、勳績惟れ光なり。(一一)有周に至り、世を歷て(一二)會同す。(一三)王赧譖を聽き、寔に我邦を絕つ。我邦既に絕え、厥政斯れ逸なり。賞罰の行はるるは、王室に由るに非ず。(一四)庶尹羣后、扶くるなく衞るなく、(一五)五服崩離し、(一六)宗周以て墜ちぬ。

【大意】肅敬なる我が祖は、殷の豕韋氏より始まる。殷に仕へて諸侯となり、黼黻を服し龍旂を建て、彤弓を賜りて遠方を征伐し、以て殷室を輔佐し、彼の大彭氏と相竝んで功績顯著なり。殷滅び周之に代るに及び、亦歷世諸侯となり、會同の禮に預るを得たり。赧王讒を信じて我が豕韋

高祖の位に卽くに及び、封ぜられて楚王となり、薨ず。子郢客嗣ぐ。是を夷王となす。薨ず。子戊嗣ぐ。戊は七國と同じく叛す。故に謚なし。

【二】肅肅。敬なり。

【三】祖。韋孟の祖先。

【四】豕韋。國の名。左傳に商ニ在リテ豕韋氏トナスとあり。

【五】黼衣。斧の形のぬひを施せる衣。朱黻は赤色のひざかけ。皮を以て之を作る。上公の服なり。

【六】四牡。四頭の牡馬。龍旂は交龍を畫き端に鈴を懸けたる旗。

【七】彤弓。赤く塗りたる弓。

【八】遐荒。遠方なり。

【九】大商。殷なり。

【一〇】大彭。殷の諸侯なり。

【一一】有周。周なり。有は意義なし。

【一二】會同。諸侯の天子に會見すること。

【一三】王赧。周の赧王。譖は讒言なり。

【一四】庶尹。諸公卿なり。羣后は諸侯なり。

【一五】五服。甸、侯、綏、要、荒の五服をいふ。猶ほ天下といふが如し。

【一六】宗周。西周なり。

氏を絶つ。然も王政放逸にして周室微弱に赴き、賞罰の權王室に在らずして諸侯に在り。諸侯之を扶翼する者なく、天下離散して、周の社稷ここに衰廢す。

我が祖斯れ微にして、(一七)彭城に遷る。(一八)予小子に在りて、勤めて厥生を嘆く。此嫚秦に阨せられ、耒耜斯れ耕す。悠悠たる嫚秦、上天寧んぜず。乃ち眷みて(一九)南を顧み、漢に京を授く。於赫たる(二〇)有漢、四方是れ征し、適くとして懷かざるはなく、萬國の平なる攸なり。

【大意】我家此より衰微し、始めて彭城に遷居す。傳へて我身に至り、其生の微を歎き、秦の慢毒に苦みて野に耕す。然も上天慢秦を安んぜず。南顧して秦の京邑を漢高に授く。漢高四方を征し、適く所皆歸服す。是れ萬國の皆平なる所以なり。

乃ち厥弟に命じ、侯を楚に建てしめ、(二一)我小臣をして、惟れ傅け是れ輔けしむ。(二二)矜矜たる元王、恭儉にして靜一なり。此(二三)黎民を惠み、彼の輔弼を納れ、國を享け世を(二四)漸して、烈を後に垂る。乃ち夷王に及んで、剋く(二五)厥次を奉ず。咨命永からず、惟れ(二六)王祀を統ぶ。左右の陪臣、斯れ惟れ(二七)皇士なり。

【一七】彭城。地名なり。
【一八】予小子。韋孟自ら稱す。
【一九】南を顧。漢の高祖は豐沛より起り、秦に於て南に在り。故に云ふ。
【二〇】有漢。漢の皇室。
【二一】我小臣。韋孟自ら稱す。
【二二】矜矜。戒愼恭敬なり。
【二三】黎民。衆民なり。
【二四】漸。沒なり。
【二五】厥次。其緒なり。
【二六】王。王戊なり。祀を統ぶとは宗祀を嗣ぐなり。
【二七】皇士。美士なり。

【大意】漢高その弟元王を立てて楚王となし、我をして其傅たらしむ。元王戒愼恭儉にして靜一の德あり。庶民を惠愛し輔佐の言を納れ、沒して業を夷王に傳ふ。夷王亦よく其緖を承けしも、短命にして薨ず。乃ち王戊立つて宗祀を嗣ぎ、左右輔弼の臣皆美士なり。

如何ぞ我が王、守保せんことを思はざる。冰を履んで、以て(二八)祖考に繼がんことを惟はざる。邦事是れ廢て、逸游是れ娛み、犬馬悠悠として、是れ放ち、是れ驅り、此鳥獸を務め、此稼苗を忽にし、(二九)蒸民以て匱しく、我が王以て媮む。弘むる所は德にあらず、親む所は俊にあらず。唯囿を是れ恢にし、唯諛を是れ信ず。(三〇)睮睮たる諂夫、(三一)諤諤たる(三二)黃髮あり。如何ぞ我が王、曾て是を察せず、既に下臣を藐んじ、欲を追ひ逸を縱にし、彼の顯祖を媟り、此削黜を輕んずる。

【大意】王何ぞ祖業を守保せんことを思ひ、冰を履むの戒(詩經に戰戰兢兢として薄冰を履むが如しとあり)を守らざる。政事を廢して田獵を事とし、稼穡を忽にして民庶を乏しからしめ、以て自ら愉樂し、俊德を親用せずして、唯園囿を大にし、讒諛を信じて老臣の言を聽かず、己の慾を肆にして、祖業を輕んじ、自ら削黜に赴くは何ぞや。

【二八】祖考。父祖なり。
【二九】蒸民。庶民なり。
【三〇】睮睮。媚ぶる貌。
【三一】諤諤。直言の貌。
【三二】黃髮。老人なり。

嗟嗟我が王は、漢の睦親なり。曾て夙夜に以て令聞を休せず。(三三)穆穆たる天子、下土を臨照し、明明たる羣司、憲を執り顧ることなし。遐きを正すは近きよりす。其の茲怙を殆くせん。嗟嗟我が王、曷ぞ斯を思はざる。思ふにあらず監みるにあらず、嗣其れ則るなくんば、其逸を(三四)彌彌し、其國を(三五)岌岌せん。冰を致すは霜にあらずや。墜を致すは慢にあらずや。我が王を瞻惟するに、時れ(三六)練せざるはなし。國を興し顚を救ふは、孰か過を悔ゆるに違はん。黄髪を追思し、(三七)秦繆以て霸たり。

【大意】吾が王夙夜惰らず、以て美譽を求めんことを勉めず。今や天子上に在り明臣下に在り。王憲を執りて顧慮する所なし。遠人を正すには先づ親近より始まる。王たとひ漢室の至親なりと雖も、亦免るる所なからん。王曷ぞ之を思はざる。自ら思ふことなく監みることなく、後嗣をして則る所なからしめば、益放逸にして國家を危うせん。夫れ霜を履んで堅氷至る。怠慢は敗墜の本なり。王亦之を知らざるにあらざるべし。國を興し危きを救ふ者は、誰か肯て過を悔ゆる者に違はんや。昔秦の繆公は老臣の言を追思して霸業を成せり。王請ふ老臣の言を聽け。

歳月其れ徂き、年其れ(三八)耇に逮ばん。於赫たる君子、後に顯れんことを庶へり。我が王如何ぞ、

【三三】穆穆。深遠の貌。
【三四】彌彌。益〻甚しきなり。
【三五】岌岌。危き貌。
【三六】練。くはしく知ること。
【三七】秦繆。秦の繆公。
【三八】耇。老なり。

嘗て斯を覽ず、黃髮を近づけざる、胡ぞ時を鑒みざる。

【大意】歲月人を待たず、將に逝きて老に及ばんとす。故に古の君主は能く自ら悔悟し、遂に後世に顯れたり。我が王何ぞ其美を覽ず、老人を近づけず、其言を鑒戒とせざるや。

志を勵ます詩　張茂先

(一)太儀斡運して、天廻り地游り、(二)四氣鱗次して、寒暑環周す。(三)星火既に夕にして、忽焉として(四)素秋なり。涼風振落して、(五)熠燿宵流る。其一

【大意】太極廻轉し天をして左旋せしめ、地をして右轉せしめ、四時寒暑魚鱗の相次ぐが如く、循環して極なし。故に火星西に流るれば忽ち秋となり、涼風落葉を振ひ螢火夜飛ぶ。

(六)吉士秋を思ひ、寔に物化を感ず。日か月か、(七)荏苒として代謝す。逝く者は斯の如く、嘗て日夜なし。嗟爾庶士、胡ぞ寧んじて自ら舍まん。其二

【大意】夫れ士は秋に至りて哀思し、萬物の遷化を感ず。日月相推移し夏去り秋來る。その逝きて止まざること川流の如く、日夜に息むことな

【一】太儀。太極なり。太極天地を生ず、斡は轉なり。
【二】四氣。四時寒暑の氣。鱗次は鱗の如く連ること。
【三】星火。火星なり。
【四】素秋。秋なり。五行に於て秋は白にあたる。故に素秋といふ。
【五】熠燿。螢なり。
【六】吉士。良士なり。
【七】荏苒。漸く進むこと。

し。當に之に感じて志を勵すべし。何ぞ晏然として自ら舍むべけんや。

仁道遐からず、德の輶きこと羽の如し。求むれば斯に至る。衆克く擧ぐること鮮し。(八)大猷玄漠にして、將に厥緒を抽かんとす。先民作るあり、我に(九)高矩を貽せり。其三

【大意】論語に仁遠からんや、我仁を欲すれば斯に仁至るとあり。詩經に德の輶きこと毛の如きも、人克く之を擧ぐること鮮しとあり。大道は幽玄なりと雖も、其端緒を引いて以て之を知るべし。先聖既に法度を作り、我に遺すに大道を以てせり。

(一〇)淑姿ありと雖も、心を放にし、(一一)逸を縱にし、出でて游に般み、居ること暇日多くば、彼の梓材の、(一二)丹漆を勤めざるが如し。(一三)朴斲を勞すと雖も、終に素質に負かん。其四

【大意】資質美なる人と雖も、心を放にして遊樂し、暇居して道業を脩めずんば、木工の材を理め、丹漆を以て飾るを勤めず、削斲に勞すと雖も、終に器を成さざるが如し。

(一四)養由矢を矯むれば、獸林に號び。(一五)蒲盧繳を縈へば、神飛禽を感ぜしむ。(一六)末伎の妙、物を

【八】大猷。大道なり。玄漠は幽寂なり。
【九】高矩。高大なる規矩。
【一〇】淑姿。美質なり。
【一一】逸。安樂なり。
【一二】丹漆。赤く塗ること。
【一三】朴斲。削り理むること。
【一四】養由。古の善射者の名。
【一五】蒲盧。蒲且なり。古の善射者の名。
【一六】末伎。小技なり。射繳をいふ。

動かし心に應ぜしむ。精を研き道に耽らば、安んぞ幽深あらん。其五

【大意】 昔楚王林中に遊びしに、猨木に緣れり。之を射しも中らず。養由基に命じて之を射しむ。養由矢を矯めて未だ發せざるに、猨木を抱きて號きぬといふ。蒲盧雙鳧を射て其一に中る。然も一の未だ中らざるもの、亦之に隨つて下りきといふ。小技と雖も其妙に達すれば、よく禽獸を感動して心に應ぜしむること此の如し。況んや精を窮め道を樂まば、豈幽深として通ぜざることあらんや。

心を安んじ（一七）恬蕩に、志を浮雲に棲ましめ、之を體するに質を以てし、之を（一八）彪するに文を以てするは、彼の南畝の、耒を力めて既に勤むるが如し。（一九）藨蓘功を致さば、必ず（二〇）豐殷なるあり。其六

【大意】 其思慮を淸くし志を浮雲の上に棲ましめ、其質素を體し文德を以て其身を飾れば、農夫の耕耘を勤むれば必ず豐饒なるが如し。

水積りて川を成し、載ち瀾ち載ち淸し。土積りて山を成し、（二一）歊蒸鬱冥なり。山は塵を讓らず、川は盈を辭せず。志を含弘に勉め、以て德聲を隆にす。其七

【大意】 山川は水土の成す所なり。其大なるに及んでは、則ち波濤を起し雲霧を生ず。山川は塵盈

【一七】恬蕩。淡靜なり。
【一八】彪。文飾すること。
【一九】藨蓘。耕耘なり。
【二〇】豐殷。豐饒なり。
【二一】歊蒸。氣の上昇すること。

を辭せず。故に能く高深なり。人亦當に含弘光大にして、以て德業を隆にすべきなり。

高は下を以て基とし、(二二)洪は纖に由りて起る。川の廣きは源に自り、人を成すは始に在り。微を累ねて以て著なるは、乃ち物の理なり。(二三)纆牽の長きは、實に(二四)千里を累す。其八

【大意】物すべて小より大に至り、低より高に至る。川の廣きは源に由り、人の德を立つるは始に在り。微を積んで以て著に至るは物の通理なり。故に小を輕んずれば竟に大を累はすに至る。

(二五)禮に復すると終朝なれば、天下仁に歸す。金の礪を受くるが若く、泥の(二六)鈞に在るが若し。德に進み業を脩むれば、輝光日に新なり。(二七)隰朋仰慕せり。予亦何人ぞ。其九

【大意】一日禮に復すれば天下仁に歸す。德の人を化すること金の磨礪を受けて利く、泥の鈞に從

【二二】洪は大なり。纖は細なり。

【二三】纆牽。たづな。

【二四】千里。千里の馬なり。戰國策に段干越、韓相ニ謂ツテ曰ク、昔王良ガ弟子、千里ノ馬ニ駕シ、京父ガ弟子ニ過ル、京父ガ弟子曰ク、馬ハ千里ノ馬ナリ、服ハ千里ノ服ナリ、而モ千里ヲ取ル能ハザルハ何ゾヤト、曰ク子ガ纆牽長シ、故ニ纆牽ハ事ニ於テ萬分ノ一ナリ、而モ千里ノ行ヲ難カラシムト、今臣不肖ト雖、秦ニ於テ亦萬分ノ一ナリ、然モ相國臣ヲ見テ懌バザルハ是レ纆牽ノ長キナリとあり。

【二五】禮に復す。禮を履行するなり。論語に一日己ニ克チ禮ニ復スレバ天下仁ニ歸スとあり。

【二六】鈞。陶器を製する轆轤の圓輪。

【二七】隰朋。人名なり。莊子に其人トナリ黃帝ニ若カザルヲ愧ヂ、己ニ若カザル者ヲ哀ムとあり。

つて以て器を成すが如し。君子德に進み業を脩むれば、光輝益發揚す。彼の隰朋すら猶ほ德を慕へり。我何ぞ之を慕はざらんや。

獻詩

躬を責め詔に應ずる詩を上つる(一)表　曹子建

臣(二)植言す。臣、罪を抱いて(三)蕃に歸りてより、肌を刻み骨を刻みて罪戾を追思し、(四)晝分にして食し、(五)夜分にして寢ぬ。誠に以みるに(六)天網重ねて罹るべからず、聖恩再恃むべきこと難し。竊に(七)相鼠の篇の禮なくんば遄に死せよの義に感じ、形影相弔ひ、五情(八)愧赧す。罪を以て生を弃つれば、則ち(九)古賢の夕に改めよとの勸に違ひ、垢を忍んで苟も全うすれば、則ち詩人の(一〇)胡の顏かあるの譏を犯す。伏して惟みれば陛下、德天地に象り、恩父母よりも隆く、施春風よりも暢び、澤時雨の如し。是を以て(一一)荊棘

【一】表。天子に奉る上書。
【二】植。曹植、字は子建、魏の文帝の弟なり。
【三】蕃。鄄城なり。
【四】晝分。日中する時なり。
【五】夜分。夜半なり。
【六】天網。天子の法網なり。
【七】相鼠。詩經の篇の名。
【八】愧赧。慚ぢて赤面すること。
【九】古賢。曾子曰く君子朝に過ありて夕に改むれば則ち之に與す云云と。
【一〇】胡の顏。何の顏ありて速に死せざるとの意なり。
【一一】荊棘。惡木なり。

を別たざるは(一二)慶雲の惠なり。(一三)七子均く養ふは鳲鳩の仁なり。罪を舍てて功を責むるは明君の擧なり。愚を矜んで能を愛するは慈父の恩なり。是を以て愚臣恩澤に徘徊して敢て自ら弃てざる者也。前に詔書を奉け(一四)臣等朝を絶ち、心離れ志絕え、自ら(一五)黄耇まで永く(一六)執珪の望なきを分とす。圖らざりき聖詔猥に(一七)齒召を垂れんとは。(一八)至止の日心を輦轂に馳す。西館に僻處で未だ闕庭に奉せず、踊躍の懷瞻望して(一九)反側し、犬馬主を戀ふの情に勝へず。謹で拜表し幷せて詩二篇を獻ず。詞旨淺末にして采覽するに足らざるも、下情を露さんことを貴び、顏を冒して以聞す。臣植誠惶誠恐、頓首頓首死罪死罪。

躬を責むる詩

(二〇)於穆たる顯考、時れ惟れ(二一)武皇、命を天に受け、四方を寧濟す。(二二)朱旗の拂ふ所、(二三)九土披攘し、

【一二】慶雲。瑞雲なり。
【一三】七子。詩經に鳲鳩桑ニ在リ、其子七とあり。毛萇曰く、鳲鳩ノ其子ヲ養フヤ、旦ニハ上ヨリ下リ暮ニハ下ヨリ上ル其均平ナルコト一ノ如シと。
【一四】臣等。植嘗て楊脩・應瑒等と酒を飲み、醉ひて馬を司禁門に走らす。文帝之を責め西館に置き朝するを許さず。
【一五】黄耇。老年なり。
【一六】執珪。珪は諸侯の瑞玉なり。珪を執りて天子に朝すること。
【一七】齒召。よばひ召すこと。
【一八】至止。詩經に至止肅肅とあり。
【一九】反側。輾轉反側なり。
【二〇】於穆。歎美の辭。穆は深遠の貌。顯考は明顯なる父なり。魏の武帝曹操を指す。
【二一】武皇。魏の武帝なり。
【二二】朱旗。漢は火德、故に其旗赤し。曹操漢を輔けて赤旗を建つ。

〔二四〕玄化滂く流れて、〔二五〕荒服來王す。商に超え周に越え、〔二六〕唐と蹤を比ぶ。篤く〔二七〕我皇を生み、奕世聰を載せ、武は則ち肅烈、文は則ち〔二八〕時雍、禪を漢に受け、萬邦に君臨す。萬邦既に化し、舊則に率由す。廣く〔二九〕懿親に命じて、以て王國に藩とす。帝曰く爾侯、茲の〔三〇〕青土に君たれと。海濱を〔三一〕奄有し、周に魯に方ひ、車服輝あり、旗章敍あり。

〔三二〕濟濟たる俊乂、我を弼け我を輔く。

【大意】我が父武帝(曹操)天子の命を受けて四方を平定し、赤旗の向ふ所披靡せざるはなく、德化洽く流れて四夷來朝す。實に殷周に超越して蹤を唐堯に比すと謂ふべし。(殷周は放伐を以て天下を取り、唐虞は禪讓す。魏は漢の禪を受く。故にかくいふ)武帝既に聰明にして文帝又聰明なり。武帝は禍亂を定め、文帝は時和を敷く。遂に漢に代りて萬國に君臨す。乃ち舊法を脩め親戚を封建して王國の藩屏となす。因つて我に命じて青州海濱の地に侯たらしむること、周室の伯禽を封じて魯侯となししが如く、車服旗章各秩序あり。濟濟たる俊傑左右に侍して我を輔く。

【二三】九土。九州なり。支那全土をいふ。披攘は披靡といふが如し。

【二四】玄化。德化なり。

【二五】荒服。遠方の地をいふ。

【二六】唐。堯なり。

【二七】我皇。武帝の子、文帝を指す。

【二八】時雍。時和なり。

【二九】懿親。親戚なり。

【三〇】青土。建安十九年、植臨淄侯に封ぜらる。臨淄は古の青州の境なり、故に青土といふ。

【三一】奄有。おほひたもつこと。

【三二】濟濟。衆多の貌。俊乂は傑士なり。

伊れ（三三）余小子、寵を恃んで驕盈なり。擧（三四）時網に掛り、動（三五）國經を亂り、蕃と作り屏となり、（三六）先軌を是れ隳り、我が（三七）皇使に傲り、我が朝儀を犯す。國に（三八）典刑あり、我を削り我を黜け、將に（三九）理に寘いて、（四〇）元凶に是れ率かんとす。明明たる天子、時れ（四一）類を篤くせんことを惟ひ、忍びず。我を刑して、之を（四二）朝肆に暴すに。彼の（四三）執憲に違ひ、予小子を哀み、改めて（四四）兗邑に封じ、河の濱に于かしむ。（四五）股肱置かず、君あり臣なし。荒淫の闕、誰か余が身を弼けん。（四六）煢煢たる僕夫。彼の（四七）冀方に于く。嗟予小子、乃ち斯殃に罹る。赫赫たる天子、恩物を遺てず。我に（四八）玄冕を冠せしめ、我に（四九）朱紱を要にせしむ。光光たる大使、我を榮し我を華し、符を剖き玉を授け、王爵を是れ加ふ。仰いで（五〇）金璽に歯し、俯して（五一）聖策を執る。皇恩過隆、祇承けて（五二）怵惕す。

【三三】余小子。曹植自ら言ふ。
【三四】時網。法網なり。
【三五】國經。國法なり。
【三六】先軌。先帝の軌則。
【三七】皇使。監國使灌鈞をいふ。鈞奏す植酒に酔ひ使者を劫脅すと。
【三八】典刑。法律なり。
【三九】理。治獄の官なり。
【四〇】元凶。大罪人。
【四一】類。兄弟なり。
【四二】朝肆。朝市なり。
【四三】執憲。司法官なり。
【四四】兗邑。植改めて鄄城侯に封ぜらる。鄄城は古の兗州の境なり。
【四五】股肱。輔弼の臣。
【四六】煢煢。獨なり。僕夫は御者なり。
【四七】冀方。冀州なり。時に魏は鄴に都す。冀州の境なり。
【四八】玄冕。黒き冠、諸侯の儀服なり。
【四九】朱紱。赤綬なり。諸侯の儀服。
【五〇】金璽。諸侯の印。
【五一】聖策。天子の封册。
【五二】怵惕。戒懼なり。

【大意】我れ君寵を恃んで驕慢なり。王國の藩屏たる身を以て、先帝の軌則を破り、國使に傲り朝儀を犯せり。遂に國法により我が爵土を削り、獄官に付して罪人となさんとす。明天子兄弟に厚く、我を朝市に暴すに忍びず。執法官の意に違ひて我を哀み、改めて兗州に封じ濟河の濱に往かしむ。時に股肱の我を輔佐し、闕失を匡救するなく、ただ一介の御者を伴ひて京師に朝す。天恩赫赫、一物と雖も遺てず。我罪を免じて紱冕を賜ひ、使を遣して王爵を賜はしむ。是に於てまた諸侯の列に加はるを得たり。皇恩至大、謹み承けて常に恐懼す。

咨我小子、頑凶是れ嬰れり。(五三)逝いては陵墓に慙ぢ、存しては(五四)闕庭に愧づ。敢て德に傲るにあらず。寔に恩を是れ恃む。威靈改め加はる。以て齒を沒るに足る。(五五)昊天極なく、生命圖られず。常に(五六)顚沛して罪を(五七)黃壚に抱かんことを懼れ、矢石を蒙り旗を(五八)東嶽に建てんことを願ひ、(五九)毫釐を立て微功もて自ら贖はんことを庶ひ、軀を危くし命を授けば、戾を免るるに足るを知り、甘んじて江湘に赴き、戈を吳越に奮ふ。天その衷を啓き、京畿に會するを得、聖顏に奉ずるを遲つと、渴するが如く飢うるが如し。心の云に慕ふ、愴んで其れ悲む。天高けれども卑きを聽く。皇微を照すを

【五三】逝。死なり。陵墓は先帝の陵墓なり。
【五四】闕庭。文帝なり。
【五五】昊天。廣大なる天。
【五六】顚沛。僵仆なり。死に喩ふ。
【五七】黃壚。墓なり。
【五八】東嶽。吳の境を鎭する山。
【五九】毫釐。十毫を釐といふ。微功に同じ。

肯せよ。

【大意】我が身は罪戾の圍繞する所なり。死しては先帝に慚ぢ、生きては陛下に愧づ。敢て自ら傲らず、ただ皇恩の厚きを恃み、以て身を終るに足る。然も天恩廣大にして之を報ゆるも盡きず。況んや人命の天壽は豫め期すべからざるをや。常に德に酬ゆる能はずして罪を墳墓の中に抱かんことを懼れ、使を奉じて矢石に當り、旗を東嶽に建て、以て吳を鎭めて微功を立て、自ら往罪を贖はんことを願ひ、危難を冒して身命を擲たば、以て功を立て罪を兔るるに足るを知る。乃ち甘んじて吳越に使す。陛下中心を開いて我を眷み、陛下に京畿に會するを得るに至る。聖顏を拜するを待つこと飢渴の如し。陛下を慕ひて心爲に悲愴す。ああ天高しと雖もよく卑きを聽く。陛下それ亦我が微誠を降照せよ。

【六〇】星陳。朝早く星を見て車輿を陳列するなり。
【六一】掌徒。徒御を掌るなり。
【六二】鸞臺、【六三】蘭渚。路邊の地。美しく之を言ふなり。
【六四】芒芒。廣き貌、原は高原、隰は低隰の地。
【六五】祁祁。衆多の貌。

詔に應ずる詩

肅んで明詔を承け、皇都に會するに應じ、(六〇)星陳夙駕し、馬に秣かひ車に脂さし、彼の(六一)掌徒に命じ、我が征旅を肅む。朝に(六二)鸞臺を發し、夕に(六三)蘭渚に宿す。(六四)芒芒たる原隰、(六五)祁祁たる士女あ

り。彼の公田を經、我が稷黍を樂む。爰に(六六)樛木あり、重陰あれども息はず。(六七)糇糧ありと雖も、飢ゑて食ふに遑あらず。城を望めども過らず、邑に面へども游ばず。(六八)僕夫警策し、平路に是れ由る。

(六九)玄駟藹藹として、鑣を揚げ沫を漂はし、流風衡を翼け、輕雲蓋を承け、澗の濆を渉り、山の隈を緣り、彼の河の滸に遵ひ、黃坂に是れ階る。

【大意】天子の詔命に應じ、將に京師に會せんとす。乃ち夙に車輿を陳ね徒卒に命じて行事を戒め、朝に鸞臺を發して、暮に蘭渚に宿す。路に士女田野に滿ち黍稷の豐熟を樂むを見る。君命に赴くに急なれば、重陰あれども息はず、糧食あれども食はず、城邑を望めども遊ばず、馬に鞭つて疾く馳せ、崎嶇として山澗を渉り黃坂に登る。

西のかた關谷を濟り、或は降り或は升る。騑驂路に倦み、載ち寢ね載ち興く。將に(七〇)聖皇に朝せんとして、敢て晏寧せず。(七一)節を弭かして長く騖せ、日を指して遄に征く。前驅燧を擧げ、後乘旌を抗げ、輪は運るを輟めず、鑾は聲を廢むるなし。爰に帝室に曁り、此の(七二)西墉に稅る。嘉詔未だ賜らず、朝覲するに從なし。仰いで城闕を瞻、俯して闕庭を惟ひ、長懷永慕し、憂心(七三)醒の如し。

【六六】樛木。枝の曲り垂れたる木。
【六七】糇糧。食物なり。
【六八】僕夫。御者なり。警策は馬に鞭つこと。
【六九】玄駟。黑馬なり。藹藹は壯盛の貌。
【七〇】聖皇。天子なり。
【七一】節を弭。志を安んずること。
【七二】西墉　西館なり。
【七三】醒。酒病なり。

【大意】更に西して關谷を濟り、升降して馬疲れ人勞す。然も敢て暇逸せず、天日を指して疾驅し、前驅は火を執りて道を照し、後乘は旌を擧げて之に應じ、輪は廻轉を止めず、鑾は聲を止めず。ここに京師に至りて彼の西館に舍る。然も未だ朝見の詔を拜せず、朝禮に預るに由なし。君王を懷慕して、憂心酒に病めるが如し。

(一)關中の詩　　潘安仁

於皇なる時晉、命を受くること既に固し。(二)三祖天に在り、(三)聖皇祚を紹ぐ。德博く化光にして、刑簡に(四)枉錯く。微火戒めず、我が(五)寶庫に延ぶ。其一

【大意】晉天命を受くること既に堅固にして三祖崩じて其靈天に在り。惠帝皇位を嗣ぎて天下に君臨し、德化廣大にして刑法簡粗に、枉曲の者は必ず投棄す。ただ微火を愼まざりしを以て武庫を燒却せり。

(六)蠢爾たる戎狄、狡焉として肆を思ひ、我が(七)國

【一】關中詩。晉の惠帝の元康六年、氐賊齊萬年、楊茂と關中に反亂し、人多く疲斃す、帝諸臣に命じて關中詩を作らしむ。
【二】三祖。宣帝、文帝、武帝をいふ。
【三】聖皇。惠帝をいふ。祚は皇位なり。
【四】枉錯。枉は枉曲の者なり。錯は投棄なり。
【五】寶庫。武庫なり。惠帝の延康五年、武庫に火災あり。
【六】蠢爾。蟲のうごめく貌。
【七】國眚。國の災、卽ち火災なり。

眚を虞り我が(八)利器を窺ふ。(九)嶽牧慮殊に、(一〇)威懷理二なり。將專策なく、兵(一一)素肄せず。其二

【大意】氐賊齊萬年盟主となりて亂をなし、放縱を逞うせんことを思ひ、我が武庫の災を度り我が機變を窺ふ。時に梁王は戰を主張し、威力を以て服せんと欲し、解系は守禦を主張し、恩惠を以て懷けんと欲し、各意見を異にし、將に定策なく、兵に調練なし。

(一二)翹翹たる趙王、(一三)徒三萬を請ふ。朝議惟れ疑ひ、未だ斯願を逞うせず。(一四)桓桓たる梁征、(一五)高牙乃ち建つ。(一六)旗蓋相望み、(一七)偏師援を作す。其三

【大意】趙王倫兵三萬を請ひ、往きて氐羌を平げんとす。朝議之を疑ひ、未だ其請を許さず。時に梁王肜征西大將軍となりて、西のかた氐羌を討ち、既に大旗を建てて進軍す。乃ち偏軍を以て梁王の援兵となし、旗蓋路に相望めり。

(一八)虎視耽耽として、彼の(一九)好時を威し、(二〇)素甲日のごとく耀き、(二一)玄幕雲のごとく起る。誰か其れ

【八】利器。武器なり。
【九】嶽牧。嶽は古の四岳なり。朝廷の重臣。牧は州の長なり。
【一〇】威懷。威服すること、懷柔すること。
【一一】素肄。平素練習すること。
【一二】翹翹。出羣の貌。趙王名は倫、位相國に至る。
【一三】徒。兵卒。
【一四】桓桓。勇武の貌。梁征は梁王肜なり、征西大將軍となり、西して氐羌を討つ。
【一五】高牙。將軍の旗をいふ。
【一六】旗蓋。蓋は車蓋。
【一七】偏師。一部隊なり。
【一八】虎視耽耽。虎の如く深く視る貌。
【一九】好時。地名。
【二〇】素甲。明光甲なり。

繼ぐ。(二一)夏侯の卿士。惟れ(二二)系惟れ(二三)處、別營棊のごとく峙つ。其四

【大意】梁王彤關中の諸軍を督して好畤に屯し、虎視耽耽たり。素甲は日の如く耀き、軍幕は雲の如く起る。夏侯駿其後を繼ぎ、兵を領して氐羌を討ち、解系、周處等亦各營壘を守り、棊の列するが如し。

夫れ豈謀なからんや、(二五)戎士承平なり。守れば(二六)完郛あり、戰へば全兵なし。鋒交り卒奔る。孰か(二七)孟明を免れん。檄を秦郊に飛ばし、敗を上京に告ぐ。其五

【大意】戰謀策なきにあらずと雖も、士卒泰平に慣れて練習を缺けるを如何せん。守るに完城あれども、出でて戰へば敗れて復た全兵なし。鋒刃交りて士卒敗走す。軍將誰か孟明の敗を免れんや。因つて檄を飛ばして援兵を請ひ、敗を京師に告ぐ。

周(二八)師令に徇ひ、身(二九)氐斧に膏る。人の云に亡する、貞節克く擧ぐ。盧播命に違ひ、(三〇)朔土に投畀せらる。法の爲に惡を受く、誰か荼を苦しと謂はん。其六

【二一】玄幕。黒き軍幕。
【二二】夏侯。夏侯駿なり。
【二三】系。解系、字は少連、濟南の人、雍州刺史たり。
【二四】處。周處、字は子隱、吳興の人。

【二五】戎士。軍士なり。承平は泰平に慣れたること。
【二六】完郛。完全なる城郭。
【二七】孟明。秦將孟明視なり。敗軍の將に喩ふ。

【二八】師令。軍令なり。
【二九】氐斧。氐賊の斧。
【三〇】朔土。北方の地、北平なり。投畀は投げ與ふること。

【大意】周處は軍令に徇ひ、進み戰ひて勝たず。遂に氐賊の殺す所となる。其身は死せりと雖も、貞固の節は之を全うするを得たり。盧播は偏將となりて齊萬年を討ち、詐りて功を論じ、免ぜられて庶人となり、北平に徙さる。然も矯詐の爲に禍惡を招けるのみ。徙さると雖も當に自ら甘心すべきなり。

哀しいかな此（三一）黎元、罪なく辜なくして、肝腦地に塗れ、白骨衢に交り、夫行いて妻寡となり、父出でて子孤となり、我が晉民をして、化して（三二）狄俘とならしむ。其七

【大意】哀れむべし衆民罪なくして氐賊の爲に殺され、白骨衢路に交り、妻は夫を失ひ、子は父を失ひ、我が晉人をして戎狄の俘虜とならしめぬ。

亂離斯れ瘼み、日月其れ（三三）稔す。天子是れ矜み、旰けて食ひ晏く寢ぬ。主憂へ臣勞す。孰か（三四）祗懍せざらん。愧づらくは獻納なく、（三五）尸素以に甚しきことを。其八

【大意】亂離疲弊をなすこと既に久しく、日月既に一熟を經たり。天子乃ち之を憐み、宵衣旰食す。ああ君憂へ臣勞す。誰か敬懼せざらん。愧づらくは謀策の君に獻納するなく、ただ尸位素餐するを。

皇赫として斯に怒り、爰に精鋭を整へ、彼の（三六）上谷に命じ、日を指して遄に逝かしむ。親しく戎

【三一】黎元。衆民なり。
【三二】狄俘。夷狄の捕虜。
【三三】稔。熟なり。
【三四】祗懍。謹み危むこと。
【三五】尸素。官職に在りて無能なること。
【三六】上谷。孟觀、字は叔時、上谷郡公に封ぜらる。

之に規を奉じ、稜威遐く厲り、首として(三七)中亭を陷れ、聲を揚ぐること萬計なり。其九

【大意】天子怒を發し、精鋭の將卒を整へ、上谷郡公孟觀を以て建威將軍となし、速に往いて氐羌を撃たしむ。觀、親しく天子の策規を受くるや、稜威遠く揚り、首として賊を中亭に陷れ、聲を揚げて斬獲萬を以て數ふと誇稱す。

兵は固より(三八)詭道なり。聲を先にして實を後にす。之を聞ける有司、萬を以て一となす。紂の不善、我未だ之を必とせず。虛く(三九)滿德を昌し、繆りて(四〇)甲吉を彰す。其十

【大意】兵は譎詐の道なり。名を先にして實を後にす。觀の聲を揚げて誇稱せるは、誠に兵法に合へり。然も有司之を聞き、疑ひて萬を以て一となし、觀の妄言を以て紂の不善に同じとなせども、我未だ必ずしも然りとなさず。然も觀は虛く滿德、甲吉の二羌を誅せるの功を明にせるのみ。

(四一)雍門啓けず(四二)陳汧危偪なり。觀遂に虎のごとく奮ひ、恩に感じ力を輸す。重圍克く解け、危城載ち色めく。豈過なしと曰はんや。功も亦測られず。其十一

【大意】雍、陳倉、汧の諸縣、賊の重圍に陷る。孟觀天子の恩に感じ、力を盡して之を撃ち、危城

【三七】中亭。地名なり。
【三八】詭道。譎詐の道、司馬法に兵ハ詭道ナリとあり。
【三九】滿德。氐羌の將の名。
【四〇】甲吉。氐羌の將の名。
【四一】雍門。雍は縣名。
【四二】陳汧、陳倉縣、汧縣。

乃ち安きを得たり。虚稱の過なきにあらずと雖も、陳汧の重圍を解きし功、亦大なりと謂ふべし。

情固より萬端なり。何に于てか有らざらん。(四三)紛紜たる齊萬、亦孔だ之れ醜し。曰に其降を納れ、曰に其首を梟す。疇か眞掩ふべき、孰か僞久しかるべき。其十二

【大意】人情萬端なり、何の種かあらざらん。齊萬年の徒亦甚だ醜惡の行をなせり。孟觀は賊の降を納れんと稱し、夏侯駿は賊の首を梟さんと稱す。誰か眞事をなして掩蔽すべき、誰か僞事をなして久しく施すべき、眞僞の理立所に明かなり。(觀の言を眞となし、駿の言を僞となすなり)。

既に爾の辭を徵し、既に爾の訟を蔽にす。當れば乃ち實を明にし、否らざれば則ち空を證ぐ。好爵既に靡ぎ、顯戮亦從ふ。竇林を見ずや、尸を漢邦に伏せり。其十三

【大意】有司辭を驗して觀駿の爭訟を斷じ、其言當れる者には明示するに事實を以てし、其理當らざる者には之に告ぐるに狀の空しきを以てすべし。賞罰の法は功過を平にするに在り。當れる者は之に繫くるに好爵を以てし、虚妄の者は之に加ふるに顯戮を以てす。彼の竇林を見ずや。氐羌を討ちて妄に爵祿を加へられしも、後日漢主之を責めて之を殺せり。

【四三】紛紜。亂るる貌。
【四四】采薇。詩經の篇の名。
【四五】玁狁。後の匈奴なり。
【四六】昆夷。西戎の名。

周人の詩、寔を(四四)采薇といふ。北のかた(四五)玁狁に難み、西のかた(四六)昆夷を患ふ。古を以て今に況ぶるに、何ぞ威を曜すに足らん。徒に斯民を愍んで、我心傷悲す。其十四

【大意】周の文王の時、西に昆夷の患あり、北に玁狁の難あり。故に采薇の詩を作り、以て征戍を遣せり。今の齊萬年を以て、古の昆夷、玁狁に比するに、固より小醜微賊、其事を歌ふも、以て吾が威武を曜かすに足らず。吾が詩は唯斯民を愍むのみ。威武を曜かさんが爲にあらず。

斯民如何ぞ、秦に(四七)荼毒する。師旅既に加はり、饑饉是れ因る。(四八)疫癘淫行し、荆棘榛を成す。(四九)絳陽の粟、(五〇)渭濱に浮ぶ。其十五

【大意】秦(關中の地)地の民既に軍旅の苦を嘗め、更に饑饉の災に遇ひ、惡疫久しく行はれて衆皆死亡し、荆棘荒穢して榛蕪を成す。因つて絳陽の粟を渭濱に運び、以て秦人を濟へり。

明明たる天子、民を視ること傷めるが如し。申ねて(五一)羣司に命じて、爾の封疆を保たしむ。衆を暴することなかれ、彊を凌ぐことなかれと。(五二)惴惴たる寡弱、春陽に熙むが如し。其十六

【大意】天子。民を視ること瘡痍を被れる者の如く、重ねて有司に命じて封疆を保守せしめ、衆を

(四七) 荼毒。難儀すること。
(四八) 疫癘。流行病。
(四九) 絳陽。地名。
(五〇) 渭濱。渭水のほとり。
(五一) 羣司。衆官なり。
(五二) 惴惴。懼るる貌。

以て寡を暴するなく、强を以て弱を淩ぐことなからしむ。故に惴惴たる關中寡弱の民、天子の惠を被り、草木の春陽に樂むが如し。

公讌

(一)公讌の詩

曹子建

(二)公子客を敬愛し、宴を終るまで疲るるを知らず。清夜に西園に游び、(三)蓋を飛ばして相追隨す。明月清景澄み、(四)列宿正に參差たり。秋蘭長坂に被り、(五)朱華綠池を冒ひ、潛魚清波に躍り、好鳥高枝に鳴き、(六)神飇丹轂に接り、輕輦風に隨つて移る。(七)飄颻として志意を放にし、(八)千秋長く斯の若くならん。

【大意】公子賓客を愛し、宴を終るまで接遇して身の疲るるを知らず。我亦車を飛ばして西園の宴に侍す。時に明月清光を懸け、星宿參差として列り、蘭は長坂を被ひ、芙蓉は綠池に滿ち、魚は淸波の間に躍り、好鳥は高樹の上に囀

【一】公讌。臣下の公家の宴に侍するなり。この詩は鄴宮に在りて兄丕と讌宴して作れるなり。
【二】公子。魏の文帝をいふ。時に武帝尙ほ在り。
【三】蓋。車蓋なり。
【四】列宿。列星なり。
【五】朱華。芙蓉なり。
【六】神飇。疾風なり。丹轂は朱塗の車。
【七】飄颻。風の如く揚る貌。
【八】千秋。永遠にの意。

り、風は輦車を吹いて輕し。我が意之が爲に飄蕩し、千秋萬歲永く此の如くならんことを希ふ。

(一)公讌の詩

王仲宣

(二)昊天豐澤を降し、(三)百卉葳蕤を挺んづ。涼風蒸暑を撤け、清雲炎暉を却く。(四)君子の堂に高會し、坐を竝べて(五)華榱に蔭はる。(六)嘉肴圓方に充ち、旨酒(七)金罍に盈ち、管絃(八)徽音を發し、曲度淸く且つ悲む。(九)合坐樂む所を同うし、但盃の行ること遲きを愬ふ。常て(一〇)詩人の語を聞く、醉はずんば且つ歸るなしと。今日歡を極めずして、情を含んで誰をか待たんと欲する。眷せらるること良に翅ならず。分を守りて豈能く違はんや。古人遺言あり、君子は福の綏んずる所なりと。願くは我が賢主人の、天と(一一)巍巍を享け、克く(一二)周公の業に符し、(一三)奕世追ふべからざらんことを

【一】公讌。此詩は曹操の宴に侍して作る。時に操未だ天子とならず。故に公讌といふ。
【二】昊天。夏の天。豐澤は時雨なり。
【三】百卉。百草なり。葳蕤は草木初めて生ずる貌。
【四】君子。曹操を指す。
【五】華榱。華臺といふが如し。
【六】嘉肴。佳肴なり。圓方は圓形、方形の具、卽ち豆俎なり。
【七】金罍。金樽なり。
【八】徽音。美音なり。
【九】合坐。擧坐なり。一坐の人皆。
【一〇】詩人。詩經に載する詩の作者。詩經に厭厭タル夜飮、醉ハズンバ歸ルナシとあり。
【一一】巍巍。高大なり。
【一二】周公。成王を輔佐せり。
【一三】奕世。累世なり。

【大意】天、時雨を降して百草長茂し、涼風熱氣を掃ひ、清雲炎威を散ずる時、華堂に會して盛筵に侍す。美酒あり佳肴あり、歌曲歡興を添ふ。今日歡を極めずんば、復た何れの時をか待たん。主人の眷遇を蒙ること既に多きも、人皆分限を守りて敢て違はず。古人言ふあり、君子は福の安んずる所なりと。願くは我が賢主人の天と其德を同うし、能く周公輔佐の業に合ひ、後世復た及ぶ者なからんことを。

(一)公讌の詩　(二)劉公幹

(三)永日行いて游戲し、歡樂猶ほ未だ央ならず。(四)遺思玄夜に在り、相與に復た(五)翺翔す。輦車(六)素蓋を飛ばし、從者路傍に盈つ。月出でて園中を照し、珍木鬱として蒼蒼たり。清川(七)石渠を過ぎ、流波(八)魚防をなす。芙蓉其華を散じ、(九)菡萏金塘に溢れ、(一〇)靈鳥水裔に宿し、(一一)仁獸飛梁に飛ぶ。華館流波に寄り、豁達として風涼

【一】公讌。此詩は王植と同時の作なるが如し。
【二】劉公幹。劉楨、字は公幹、魏の東平の人。
【三】永日。長日なり。
【四】遺思。餘意に同じ。玄は黑なり、故に玄夜といふ。
【五】翺翔。追隨といふが如し。
【六】素蓋。白き車蓋。
【七】石渠。石を流るる溝。
【八】魚防。魚の逸出を防ぐ隄防。
【九】菡萏。蓮花なり。
【一〇】靈鳥。鳳凰なり。水裔は水畔なり。
【一一】仁獸。麒麟なり。飛梁は橋なり。

を來す。生平未だ始より聞かず、之を歌ふも安んぞ能く詳にせん。翰を投じて長く嘆息し、綺麗忘るべからず。

【大意】盡日游戲するも歡樂猶ほ未だ盡きず。尙ほ夜遊せんことを思ふ。卽ち輦車を驅り、從者を伴ひて西園に宴す。月光園中を照し佳木鬱蒼たり。淸水石上を走り流波隄防をなし、芙蓉蓮花池塘に溢れ、鳳は水濱に宿し鱗は橋上に飛び、華堂池邊に在りて涼風四方より到る。此の如き華筵は、未だ嘗て聞かざる所なり。之を賦するも安んぞ眞を描くを得んや。ただ筆を投じて綺麗を驚嘆するのみ。

(一)五官中郎將の建章臺の集に侍するの詩　(二)應　德　璉

(三)朝鴈雲中に鳴く。音響一に何ぞ哀しき。問ふ子何れの鄕にか游び、翼を戢めて正に徘徊すると。言ふ我(四)塞門より來り、將に(五)衡陽に就いて棲まんとす。往春北土に翔り、今冬南淮に客たり。遠行霜雪を蒙り、毛羽日に摧頹す。常に恐る肌膚を傷ひ、身隕ちて黃泥に沈まんことを。

【一】五官中郎將。官名なり。建安十六年正月、曹丕此官に任ぜらる。

【二】應德璉。應瑒、字は德璉、魏の詩人なり。

【三】朝鴈。鴈を以て自ら喩ふ。

【四】塞門。北邊の山の名。

【五】衡陽。衡山の南の地。

（六）珠を簡んで沙石に墮つ。何ぞ能く中に自ら諧はん。雲雨の會に因つて、翼を濯ぎて（七）高梯を陵がんと欲す。良遇値ふべからず、眉を伸べて路何にか階らん。（八）公子客を敬愛し、樂飲して疲るるを知らず。和顏既に以に暢べ、乃ち肯て細微を顧み、詩を贈つて存慰せらる。（九）小子宜しき所にあらず。爲に且つ歡情を極め、醉はずんば其れ歸ることなけん。（一〇）凡百爾の位を敬み、以て飢渴の懷に副はん。

【大意】我れ鴻鴈の悲鳴するが如く、卑賤に在りて未だ恩澤を蒙らず、常に命の薄きを嘆ず。身下位に沈淪して死滅せんことを恐れ、賢主を得て之に事へんことを思へども、却つて群小人と相隨ふ。何ぞ我が中心の望に諧はんや。賢主と相會するを得、此に因りて尊位に升らんと欲するも、良遇得べからず。何の時か愁眉を開かん。圖らざりき公子客を愛し、歡飲して疲るるを忘れ、溫顏を以て微臣に接し、詩を贈りて安慰し給はんとは、是れ小臣の敢て當る所にあらずと雖も、願くは公子の爲に歡情を盡し、醉はずんば敢て歸らじ。宴に侍するの士、亦皆其職位を謹み、以て賢主臣を待つの厚意に副ふ。

【六】珠。賢人に喩ふ。沙石は羣小人に喩ふ。
【七】高梯。尊位に喩ふ。
【八】公子。曹丕を指す。
【九】小子。應瑒自ら謂ふ。
【一〇】凡百。衆臣を指す。

(一)皇太子玄圃の宣猷堂に宴す。(二)令ありて詩を賦す

陸士衡

(三)三正迭に紹ぎ、(四)洪聖運を啓く。昔より(五)哲王、天に先だちて順なり。(六)羣辟崇替し、降りて近古に及ぶ。(七)黃暉既に渝り、(八)素靈祜を承く。乃ち眷み斯に顧み、之に宅土を祚ゆ。(九)三后始めて基し、(一〇)世武丕に承け、(一一)協風傍く駭き、(一二)天晷澄を仰ぎ、六合を淳曜す。皇慶の興る攸なり。彼の(一三)河汾より、奄に(一四)七政を齊ふ。時れ文なる惟れ晉、世々其聖を篤くし、(一五)昊天に欽翼し、(一六)對揚して命を成し、(一七)九區克く咸ぎ、讌歌して以て詠ず。

【大意】夏殷周の三代、列聖相繼いで皇運を啓く。古より明王、天に先だちて能く天に順ひ、衆

【一】皇太子。晉の惠帝の愍懷太子なり。玄圃は園の名。
【二】令。皇太子の命なり。
【三】三正。夏殷周なり。
【四】洪聖。大聖人なり。
【五】哲王。明王なり。
【六】羣辟。衆王なり。崇は終、替は廢なり。
【七】黃暉。魏は土德を以て王たり。土は黃なり。故に魏を黃暉といふ。
【八】素靈。晉は金德を以て王たり。金は白なり。故に晉を素靈といふ。
【九】三后。三人の君。宣、景文三帝をいふ。
【一〇】世武。世祖武皇帝なり。
【一一】協風。和風なり。
【一二】天晷。天日なり。
【一三】河汾。川の名、晉の封ぜられし地。
【一四】七政。日月五政なり。
【一五】昊天。大なる天。欽翼は謹むなり。
【一六】對揚。答へ明にすると。
【一七】九區。九州なり。支那全土をいふ。

君迭に隆替して近古に至り、魏終りて晉之に代る。天乃ち我が晉を眷顧し、之に降すに福を以てし、此土に主たらしむ。宣、景、文の三帝基を肇め、世祖武皇帝之を承け、和風天下に洽く、天日薄蝕することなく、六合に照臨す。是れ皇家慶福の興る所以なり。遂に河汾より起りて天下を奄有し、文化を盛にして世ゝ其德を厚くし、能く上天に敬事し、以て美命を成す。是を以て九州よく和し、謳歌して我が王の德を詠ず。

(一八)皇上隆を纂ぎ、敎を經め道を弘め、化に于て既に豊に、(一九)工に在りて載ち考し、俯して庶績を釐め、仰いで(二〇)大造を荒にし、祖宗に(二一)儀刑し、(二二)天保を妥綏す。篤く(二三)我后を生む。克く明に克く秀で、輝を重光に體し、規を(二四)景數に承け、茂德淵のごとく沖く、天姿玉のごとく裕なり。(二五)蕞爾たる小臣、彼の(二六)荒遐に邈なり。厥の負擔を弛め、(二七)纓を承華に振ふ。伊を始に願へるにあらず、惟れ命の嘉ければなり。

【大意】惠帝武皇の盛德を繼ぎ、以て敎を垂れ道を弘め、治化既に豊にして官功既に成り、庶績釐りて大成を收め、祖宗に則りて天位を保つ。太子亦明秀の德あり、歷代の光輝を體し、天の歷數

【一八】皇上。晉の惠帝なり。
【一九】工。官なり。
【二〇】大造。大成功なり。
【二一】儀刑。のつとること。
【二二】天保。天位なり。
【二三】我后。太子を指す。
【二四】景數。大なる歷數。
【二五】蕞爾。小なる貌。小臣は陸機自ら謂ふ。
【二六】荒遐。遠地なり。機は吳より來る。故にかく言ふ。
【二七】纓。冠のひも。承華は太子の宮門の名。

を承け、盛德は淵の深きが如く、姿質は玉の潤へるが如し。小臣遠地より來り、行李を卸して太子の門に仕ふ。今日の寵榮は始めより敢て願ふ所にあらず。ただ君命の善なる、此に至らしめしのみ。

(一)大將軍の宴會に命を被りて作れる詩　(二)陸士龍

(三)皇皇たる帝祜、誕に(四)駿命を隆にす。(五)四祖家を正し、(六)天祿安定す。叡哲なる惟れ晉、世々(七)明聖あり。彼の日月の如く、萬景の正す攸なり。其一

【大意】天美命を我が晉室に降し、宣景文武の四祖家を正うして、能く天の福祿を安定す。其後代々聖天子あり、聖德日月の照臨するが如く、萬影の則を取りて自ら正す所なり。

(八)巍巍たる明聖、道隆天よりす。明に則り(九)爽を分ち、(一〇)象を觀て玄を洞し、(一一)陵風紀に協ひ、絕輝淵を照す。(一二)肅雍往播して、福祿來り臻る。

其二。

【一】大將軍。成都王穎。字は章度、趙王倫の位を簒ふや、穎は齊王冏と之を誅す、因つて位を大將軍に進む。
【二】陸士龍。陸雲、字は士龍、兄機と名を齊うし、號して二陸といふ。
【三】皇皇。美なる貌。帝祜は天帝の降せる慶福。
【四】駿命。大命なり。
【五】四祖。宣、景、文、武の四帝。
【六】天祿。天の降せる福祿。
【七】明聖。賢王なり。
【八】巍巍。廣大なる貌。
【九】爽。明なり。
【一〇】象。天の象なり。玄は天の色。洞は通ずること。
【一一】陵風。升る風。紀は北辰なり。
【一二】肅雍。和睦なり。播は揚ること。

【大意】明聖の大德能く天に協ひ、天の明に則りて之を分ち、天の象を觀て其理に通じ、風敎上升して辰極に協ひ、光炎絕遠にして下深淵を照し、和睦の道洽く人間に布く。故に福祿竝び至る。

在昔（一三）姦臣、亂を（一四）紫微に稱ぐ。（一五）神風潛駭し、赫たる玆威あり。靈旗旆を樹て、電の斯に揮ふが如し。天の屆を致すこと、河の沂に于てす。（一六）有命再び集り、（一七）皇輿凱歸す。其三

【大意】昔趙王倫の王宮に叛亂するや、（倫は文帝の庶弟なり、賈后の暴逆を見、永康元年詔と矯り、兵を勒して宮中に入り、后を廢して之を殺し、明帝惠帝に迫りて位を讓らしむ）齊王冏、河間王顒等征伐の兵を擧げ、其威赫然として神風の振ふが如く、旌旗雷電の揮ふが如し。成都王潁遂に賊を破り河を過ぎて京師に入る。是に於て天命再び惠帝に歸し、鑾輿凱旋するを得たり。

頽綱既に振ひ、品物咸く秩づ。神道（一八）素を見し、華を遺てて質に反る。（一九）辰晷光を重ね、（二〇）協風律に應じ、（二一）函夏塵なく、海外（二二）謐たるあり。其四

【一三】姦臣。趙王倫を指す。
【一四】紫微。帝居なり。
【一五】神風。神兵といふが如し、齊王冏、河間王顒、兵十萬を擧げて四面より倫を攻む、倫惠帝を迎へて正に反す。
【一六】有命。天命なり。有は意義なし。
【一七】皇輿。鑾輿なり。凱歸は凱旋なり。
【一八】素。質素なり。
【一九】辰晷。天子に喩ふ。
【二〇】協風。和風なり。
【二一】函夏。華夏なり。中國といふが如し。
【二二】謐。靜なり。

【大意】頽廢せる綱紀既に整ひ、萬物皆秩序を恢復す。乃ち浮華を去り、專ら質素を旨とす。聖德光輝を加へ、和風律呂に協ひ、內外靜穩なり。

(二三)芒芒たる宇宙、天地交泰す。(二四)王華堂に在り、式て宴して嘉會す。(二五)玄暉峻朗にして、翠雲崇靄たり。(二六)冕弁纓を振ひ、(二七)服藻帶を垂る。其五

【大意】上下和睦し、天地通泰す。王乃ち華堂に於て盛宴を設け、以て賓客を會す。天日朗かにして翠雲靉靆たり。文武公卿皆法服を著て宴に侍す。

(二八)祁祁たる臣僚、來るありて(二九)雍雍たり。薄か言に載ち考し、顏を下風に承く。俯して嘉客を覿、仰いで玉容を瞻るに、己に施すこと惟れ約、禮に于て斯れ豐なり。天老い難きを錫ふこと、岳の崇きが如し。其六

【大意】衆官來りて宴に侍する者、皆雍雍として和悅す。我乃ち此詩を作り、下風に列して顏色を仰ぐ。俯して賓客を觀、仰いで王の姿容を瞻るに、己に施すこと甚だ薄くして、客を遇するの禮甚だ厚し。天當に老い難きの惠を錫ひ、無窮の壽を與ふべし。

(二三)芒芒。廣き貌。
(二四)王。成都王なり。
(二五)玄暉。天日なり。峻は高、朗は明なり。
(二六)冕弁。文官及び武官の冠。纓は冠の紐。
(二七)服藻。卿大夫の禮服なり。
(二八)祁祁。衆多の貌。
(二九)雍雍。和悅の貌。

晉の武帝の(一)華林園集の詩　(二)應吉甫

(三)悠悠たる太上、民の厥の初め、(四)皇極肇めて建ち、(五)彝倫の敍く攸なり。(六)五德更ゝ運り、(七)籙に膺り(八)符を受け、(九)陶唐既に謝り、(一〇)天歷虞にあり。其一

【大意】太古生民の初、大中の道始めて立ち、人倫(五倫の道)是によりて起る。五德の君かはるがはる符籙に應じて帝位を承け、堯死して舜繼ぐ。

時に於て(一一)上帝、乃ち顧み惟れ眷み、我が(一二)先祚を光にし、期に應じて禪を納る。位は以て龍のごとく飛び、文は以て虎のごとく變じ、(一三)玄澤滂く流れ、仁風潛き扇ぎ、(一四)區內心を宅き、(一五)方隅面を回らす。其二

【大意】天帝我が晉德を眷顧し、期運に應じて魏の禪を受けしむ。乃ち升りて天子の位(天子を龍

【一】華林園。城内の東北隅に在り。
【二】應吉甫。應貞、字は吉甫。
【三】悠悠。遠き貌。太上は上古なり。
【四】皇極。大中至正の道。
【五】彝倫。日常行ふべき人たるの道。
【六】五德。金木水火土の五德。
【七】【八】籙符。未來記なり。
【九】陶唐。堯の氏なり。
【一〇】天歷。天子たるの順序。虞は舜の姓。
【一一】上帝。天帝なり。
【一二】先祚。一本に晉祚に作る。晉の皇位なり。
【一三】玄澤。聖恩なり。
【一四】區內。天下といふが如し。
【一五】方隅。夷狄の國なり。

に喩ふ）を踐み、文章蔚然として虎豹の文の如く、恩澤洽く及びて仁風四方に布き、區宇の内・方隅の外、皆心を歸し德を仰ぐ。

天（二六）其象を垂れ、地（二七）其文を曜かし、鳳（二八）朝陽に鳴き、龍（二九）景雲に翔り、（二〇）嘉禾穎を重ね、（二一）蓂莢載ち芬しく、（二二）率土咸序で、人胥悅欣す。其三

【大意】是に於て天地其象文を輝かし、鳳凰は山東に鳴き、龍は瑞雲に翔り、瑞禾秀で、瑞草生じ、天下の中、和樂欣悅せざるはなし。

（二三）恢恢たる皇度、（二四）穆穆たる聖容、言は其順を思ひ、貌は其恭を思ひ、視に在りては斯れ明、聽に在りては斯れ聰、登庸するに德を以てし、明試するに功を以てす。其四

【大意】天子因つて度量を大にし容貌を美にし、言は順ならんことを期し、貌は恭しからんことを期し、視ることは明かならんことを勉め、聽くことは聰ならんことを勉め、德を考へて人材を登庸し、之を試驗するに事功を以てす。

其恭惟れ何ぞ、（二五）昧旦丕顯なり。理として經せざるはなく、義として踐まざるはなく、行は其華を

【二六】其象。日月星なり。
【二七】其文。四嶽五瀆なり。
【二八】朝陽。山の東をいふ。
【二九】景雲。瑞雲なり。
【二〇】嘉禾。瑞禾なり。一莖に九穗あり。穎は穗なり。
【二一】蓂莢。瑞草なり。
【二二】率土。天下中なり。
【二三】恢恢。大なる貌。
【二四】穆穆。深遠なる貌。
【二五】昧旦。未明、夜未だ明けざる時。丕顯は大明なり。

捨て、言は其辯を去り、心を至虛に游ばしめ、規を易簡に同うし、(二六)六府孔だ修り(二七)九有斯れ靖し。

其五

【大意】我が君恭勤にして、未明に政理の事を思ひ、道義を履行し、華美の行を去り辯給の言を捨て、心を至虛に寓し、法を簡易に取り、六府の政事よく整ひ、九州乃ち安寧なり。

澤被らざるはなく、化加はらざるなく、聲敎南に曁び、西のかた(二八)流沙に漸り、(二九)幽人嶮を肆て、遠國遐きを忘れ、(三〇)越裳譯を重ねて、我が皇家に充つ。其六

【大意】治化聲敎及ばざる所なく、遠人險を越えて來り、道の遠きを忘れ、化外の國、亦三譯を重ねて貢聘する者、我が皇家に滿てり。

(三一)峩峩たる列辟、(三二)赫赫たる虎臣、內には(三三)五品を和らげ、外には(三四)四賓を威し、時の貢職を脩め、入つて(三五)天人に覲す。備に言に命を錫ひ、(三六)羽蓋朱輪あり。其七

【大意】諸侯猛臣、內には五常を和らげ、外には四夷を威服し、貢職を脩めて天子に入覲す。天子

【二六】六府。水火木金土穀なり人生一日も缺くべからざるもの。
【二七】九有。九州なり。支那全土の稱。
【二八】流沙。西方沙漠の地。
【二九】幽人。遠國の民。
【三〇】越裳。外國の名。周の成王の時。越裳三譯を重ねて來朝す。
【三一】峩峩。衆盛の貌。列辟は諸侯なり。
【三二】赫赫。衆盛の貌。虎臣は猛臣なり。
【三三】五品。五常なり、仁義禮智信。
【三四】四賓。四夷の賓。
【三五】天人。天子なり。

乃ち之に命を錫ひ、車輿を賜ふ。宴を貽りて好會し、(三七)厥數を常にせず。神心の受くる所、言はずして喩る。是に於て射を肄し、弓矢斯に御る。彼の(三八)五的に發して、酒あり斯に飫く。其八

【大意】天子又宴を賜ひ、其禮數を常にせず。ただ聖心の與ふる所、言はずと雖も自ら喩る。是に於て射禮を行ひ、弓矢を執りて五的を射、終りて又酒を賜ふ。

(三九)文武の道、厥猷未だ墜ちず。在昔先王、射御を茲れ器とし、武を示し(四〇)荒を懼し、過ぐるも亦失となす。凡そ厥の羣后、位に懈ることなかれ。其九

【大意】文武の道未だ地に墜ちず。昔先王は射御を以て器とし、之を用ひて武力を示し、荒廢せる者を懼せり。然れども之を用ひて過ぐれば亦失となす。諸侯此を爲すも亦職位を懈ることなかれ。

(一)九日、(二)宋公が(三)戲馬臺の集に從ひ、孔令を送る詩

(四)謝　宣遠

【三六】羽蓋朱輪。諸侯の車の飾。
【三七】厥數。其禮といふが如し。
【三八】五的。五個の的。
【三九】文武。周の文王武王なり。
【四〇】荒。廢なり。

【一】九日。九月九日なり。
【二】宋公。宋の武帝劉裕、宋公たりし時、九月九日戲馬臺に遊び、尙書令孔靖の位を辭し鄕に歸るを送る。
【三】戲馬臺。今の江蘇省銅山縣の南に在り。
【四】謝宣遠。謝瞻、字は宣遠、宋の陳郡の人なり。

風至りて（五）寒服を授け、霜降りて（六）百工を休め、繁林陽彩を收め、密苑華叢を解き、幕に巢うて（七）留鷰なく、渚に遵つて來鴻あり。輕霞秋日を冠ひ、（八）迅商清穹に薄る。聖心（九）嘉節を眷み、（一〇）鑾を揚げて行宮に戾る。四筵（一一）芳醴に霑ひ、中堂に（一二）絲桐を起す。（一三）扶光西汜に迫り、歡餘りて宴に窮あり。逝け將に歸らんとするの（一四）客、素を養ひて克く終あれ。流に臨んで從ふなきを怨み、歡心飛蓬を歎く。

【大意】今や寒衣を授け百工を休するの秋となり、樹林葉落ち密苑花散り、燕去り鴈來り、輕霞日を蔽ひ、西風天を拂ふ。是に於て宋公佳節の樂を思ひ、馬を驅りて戲馬臺に遊ぶ。從ふ者皆美酒に醉ひ、琴瑟を弄し、歡を極めて日を終へ、餘歡未だ盡きず。孔令往け。淳素の道を養ひ以て終を克くすべし。余今流に臨んで足下の歸るを送り、之と相從ふ能はざるを怨み、身の飛蓬と同じく飄轉するを思ひ、歡心去つて嘆聲起る。

【五】寒服。詩經に九月衣ヲ授クとあり。
【六】百工。禮記に季秋ノ月霜始テ降ル、則チ百工休スとあり。
【七】留鷰。留まる燕。
【八】迅商。秋風なり。清穹は清天なり。
【九】嘉節。九月九日の節句をいふ。
【一〇】鑾。馬の鈴なり。行宮は戲馬臺をいふ。
【一一】芳醴。美酒なり。
【一二】絲桐。琴なり。
【一三】扶光。日なり。西汜は日の入る處。
【一四】客。孔靖をいふ。

(一)樂游にて詔に應ぜし詩

(二)范蔚宗

(三)崇盛朝闕に歸し、(四)虛寂川岑に在り。(五)山梁孔性に協ひ、(六)黄屋堯心にあらず。(七)軒駕時に未だ肅めず、(八)文囿照臨を降す。流雲(九)行蓋に起り、晨風(一〇)鑾音を引く。(一一)原薄信に平蔚、臺澗備く(一二)曾深。蘭池夏氣を淸くし、(一三)脩帳秋陰を含む。渚に遵つて蒙密を攀ぢ、山に隨つて(一四)嶇嶔に上る。(一五)睇目極覽あり、游情(一六)近尋なし。道を聞くこと既に積めりと雖も、年力互に頽侵す。己を探りて(一七)丹黻を謝し、事に感じて長林を懷ふ。

【大意】今や聖德天下に洽く、崇業の士は朝廷に在り、靜寂の士は山澤に在り。各時を得て自得せること、山梁の雌雉の如し。是れ孔子の嘆稱せる所なり。今上萬民の事を憂へて心黄屋に在ら

【一】樂游。苑の名、宮城の北三里に在り、晉時の藥園なり。此詩は宋の文帝の詔に應じて作りしなり。
【二】范蔚宗。范曄、字は蔚宗、宋の順陽の人。
【三】崇盛。業を崇ぶ人。朝闕は朝廷なり。
【四】虛寂。空靜の士。川岑は山澤なり。
【五】山梁。山の橋。論語に子曰ク山梁ノ雌雉、時ナルカナ時ナルカナとあり。孔性は孔子の性情。
【六】黄屋。天子の車をいふ。
【七】軒駕。天子の馬車。
【八】文囿。樂游苑をいふ。
【九】行蓋。馬車の幌。
【一〇】鑾音。馬の鈴の音。
【一一】原薄。草木の叢生せる處を薄といふ。
【一二】曾深。高深なり。
【一三】脩帳。長きとばり。
【一四】嶇嶔。高峻の地。
【一五】睇目。遠望すること。
【一六】近尋。近く尋ぬること。
【一七】丹黻。赤き膝蔽、榮祿に喩ふ。

ず。是れ堯が天子たるを樂まずして、位を許由に讓らんとせしと相似たり。今日車駕未だ戒めずして、此苑に遊ぶ。行雲車蓋に起り、曉風鑾聲を傳へ、原野繁茂し、臺淵盡く高深なり。乃ち池に臨み山に登り、涼を納れ熱を避け、目覽既に極り、遊情自ら遠し。ああ我道を聞くこと既に久しと雖も、年老い力衰へて之を行ふ能はず。榮祿の身に纏へるを斷ち、長林に歸休せんことを思ふや切なり。

(一)九日、宋公が戲馬臺の集に從ひ、孔令を送る詩

謝靈運

(二)季秋邊朔の苦、旅鴈霜雪を違く。(三)凄凄として(四)陽卉腓み、(五)皎皎として寒潭潔し。(六)良辰聖心を感せしめ、雲旗暮節に興る。(七)鳴葭朱宮に戻り、(八)蘭巵時哲に獻ず。餞宴孚あるを光にし、和樂缺く所を隆にす。(九)在宥天下理り、(一〇)吹萬羣方悅ぶ。(一一)歸客海隅に遂き、冠を脫して朝列

【一】九日。同題の詩前に出づ。
【二】季秋。晩秋なり。邊朔は北邊の地。
【三】凄凄。寒涼の貌。
【四】陽卉。草木なり。
【五】皎皎。白き貌。寒潭は寒淵なり。
【六】良辰。九月九日をいふ。
【七】鳴葭。笛を鳴らすこと。魏文帝書に從者笳ヲ鳴ラシテ以テ路ヲ啓クとあり。朱宮は戲馬臺をいふ。
【八】蘭巵。酒杯なり。時哲は時の賢者、卽ち孔令をいふ。
【九】在宥。在は察、宥は寬なり。

を謝し、棹を弭めて（一二）枉渚に薄り、景を指して（一三）樂闋を待つ。河流急瀾あり、（一四）浮驂綏轍なし。豈伊れ川途の念のみならんや。宿心將に別れんとするを愧づ。彼の丘園の道を美し、（一五）喟焉として薄劣を傷む。

【一〇】吹萬。天氣の萬物を養ふに喩ふ。
【一一】歸客。孔令なり。海隅は呉の會稽山陰なり。
【一二】枉渚。曲浦なり。
【一三】樂闋。音樂の終ること。
【一四】浮驂。浮は行なり。征馬といふが如し。
【一五】喟焉。嘆息する貌。

【大意】鴻鴈は北地霜雪の苦を避けて歸り來り、草木は慘悽として色衰へ、淵水は皎然として凍る。此の晩秋の佳節に方り、宋公雲旗を建て、笳を鳴らして戲馬臺に遊び、觴を賢士孔令に獻ず。餞宴信あり、和樂缺くる所なし。公の察の寛なるは天下の治まる所以にして、萬物を養ふは、物各其性を得て悅ぶ所以なり。今や孔令官を辭して海隅に歸らんとし、船を曲浦に艤し、日を指して樂の闋るを待つ。此より船上馬背、忽ち去つて復た歸らじ。余今之を送り、別路の隔るを念ふのみならず、宿心の永く違ふを慚づ。因つて孔令の丘園に歸るを美し、己の愚劣にして歸を同うするを得ざるを嘆ず。

詔に應じ（一）曲水に讌して作れる詩　（二）顏延年

【一】曲水。水を引きて酒盃を流すなり。水經注に舊ノ樂游

道は未形に隱れ、治は旣亂に彰る。(三)帝迹衡を懸け、(四)皇流貫を共にす。惟れ(五)王物を創め、永く(六)洪算を錫ふ。仁固に周を開き、義高くして漢に登る。其一

【大意】夫れ道は無形の中に隱れ、治は旣に亂るるの後に彰る。晉の亂離を承けて宋之を繼ぎ、先帝（劉裕、卽ち宋の武帝、晉の禪を受けて天子となる）立つて天子となる、亦此理なり。先帝の功業たる、旣に三皇五帝と衡を齊うし貫を共にす。今上（文帝）之に嗣ぎ、天之に年數の長久なるを錫ひ、仁義の道周漢よりも高し。

(七)祚世哲より融く、業列聖より光き、(八)太上位を正うし、天臨海鏡のごとし。制するに化裁を以てし、之が形性を樹て、惠(九)萌生を浸し、信(一〇)翔泳に及ぶ。其二

【大意】今上の位に在り大業を建つること、古先聖王に優り、天下を照臨すること天鏡の海を照すが如く、風化を制し形性を建て、恩惠萬物を養ひ、信義魚鳥に及ぶ。

(一一)虛を崇ぶこと徵あるにあらず、實を積むこと徇ふるなし。豈伊れ人の和げるのみならんや、寔に

苑ハ宋ノ元嘉十一年其地ヲ以テ曲水トナスとあり。

【二】顏延年。名は延之、字は延年、宋の瑯琊臨沂の人。

【三】帝迹。五帝の事蹟。衡は權衡なり。

【四】皇流。三皇の遺風。貫は事なり。

【五】王。宋の文帝を指す。

【六】洪算。長久なり。

【七】祚。福なり。世哲は代代の賢主なり。

【八】太上。天子なり。

【九】萌生。萬物といふが如し。

【一〇】翔泳。魚鳥なり。

【一一】虛。老子靜虛の道。

(一二)靈の貺ふ所なり。日は(一三)其朔を完うし、月は望を掩はず。琛を航にして水を越え、(一四)賮を輦して嶂を踰ゆ。其三

【大意】虚道を尙び實を積むこと能く勝る者あらず。是を以て民よく和するのみならず、上天の神靈亦其福を賜ひ、日月望朔皆全く、遠夷來りて貢を納る。

(一五)帝體明に麗き、(一六)辰に儀りて貳となり、彼の(一七)東朝に君として、金のごとく昭に玉のごとく粹し。德は身を潤すあり、禮は器を愆たず。(一八)柔中淵のごとく映り、(一九)芳猷蘭のごとく祕む。其四

【大意】太子上の副となりて能く其の明に附き、其德金玉の明美なるが如く、制度文章禮樂の器を愆らず。中心和明にして淵の映ずるが如く、其道蘭香の身に積むが如し。

昔在は(二〇)文昭、今は
惟れ(二一)武穆、烏赫たる
(二二)王宰、(二三)旦に
方んで叔に居り、(二四)
睟たる(二五)叡蕃あり。
爰に(二六)奠牧を履み、

【一二】靈。神靈なり。
【一三】其朔。朔は一日なり。望は十五日なり。漢書に天下太平、日、朔ナ蝕セズ、月、望掩ハズとあり。
【一四】賮。會同する時に執る財貨。
【一五】帝體。太子をいふ。
【一六】辰。北辰なり。文帝に喩ふ。貳は副貳なり。
【一七】東朝。東宮なり。
【一八】柔中。中心和明なること。
【一九】芳猷。猷は道なり。
【二〇】【二一】文昭。武穆。父を昭となし、子を穆となす。父たる宋の高祖武帝は、文王の如く、子たる文帝は武王の如しとの意。
【二二】王宰。宋の彭城王義康をいふ。義康時に司徒たり。
【二三】旦。周公旦なり。武王の弟にして成王を輔く。
【二四】睟。溫潤の貌。
【二五】叡蕃。賢王なり。江夏、

(二七)和鈞を寧極し、京に(二八)屏として(二九)服を維ぐ。其五

【大意】先帝の徳は文王の如く、今上の徳は武王の如く、彭城王は司徒の職に居り、周公と同じく叔父の親に在り。又溫潤明徳ある二王あり、藩王となりて牧守を定め、王宰を輔けて皇室の藩屏となり、以て諸侯を維持す。

(三〇)朏魄雙び交り、(三一)月氣參り變じ、榮を開き澤を灑ぎ、虹を舒べ電を爍し、化間なきに際り、皇情爰に眷る。伊に(三二)鎬飲を思ひ、毎に(三三)洛宴を惟ふ。其六

【大意】二十四氣日月と相交て氣候變ず。今や春候至れば萬物榮を敷き澤をあらはし、虹あらはれ電光輝く。且つ天下太平にして風化無間に入る。上乃ち春遊を思ひ宴を賜ひて武王周公の故事に倣ふ。

(三四)郊餞壇あり、君の擧禮あり。(三五)蘭甸に幙帷し、高陛に(三六)畫流し、庭を分ちて樂を薦め、波を析ちて醴を浮ぶ。豫は(三七)夏諺に同じく、事は(三八)出濟を兼ぬ。其七

衡陽の二王を指す。

【二六】奠牧。牧は地方の牧守なり。奠は鎮定すること。

【二七】和鈞。王宰をいふ。寧極は安治なり。

【二八】屏。藩屏なり。

【二九】服。五服の諸侯。

【三〇】朏魄。日月なり。

【三一】月氣。月と一年二十四氣。

【三二】鎬飲。鎬は周の都なり。詩經に王在リ鎬ニ在リ、酒ヲ飲ミテ樂凱スとあり。

【三三】洛宴。洛は洛邑なり。昔周公洛邑をトし、流水に因つて酒を汎ぶ。

【三四】郊餞。送別の祭。壇は祭壇

【三五】蘭甸。香蘭の生ずる地。幙帷は幔幕なり。

【三六】畫流。分流なり。

【三七】夏諺。孟子に夏ノ諺ニ云ク、吾ガ王豫マズンバ、吾何ヲ以テ助ケラレントとあり。

【三八】出濟。詩經に出デテ濟ニ宿ス云云とあり。

【大意】郊餞には祭壇の設あり、君の擧措必ず禮に依る。蘭苑に帷幕を張り、地を畫りて水を高階の側に通じ、東西廂を分ちて樂を作し、水を分ちて盃を流す。その愉快夏諺出濟と其趣を同うす。

豐施を仰閲するに、(三九)微物を降惟し、三たび(四〇)儲隷を妨げ、五たび(四一)朝黻を塵さしめ、途は泰くして命は屯み、恩は充ちて報は屈す。悔あり悛むべし、(四二)滯瑕拂ひ難し。其八

【大意】我れ上の豐厚の施を仰ぎ視るに、此の微賤の身を眷顧し、三たび東宮の官に任じ、五たび朝官に列せしむ。然も才疎に能薄きを以て、王道は泰きも吾が運拙く、王恩充つれども、吾が報常に足らず。過悔の自ら悛むべきものあるも、滯積して除去し難し。

皇太子(一)釋奠會の作　顏延年

國は師位を尙び、家は儒門を崇ぶ。道を稟け徳を毓ひ、藝を講じ言を立つ。

(二)浚明爽曙にして達義、茲れ昏し。永く先覺を瞻、顧みて(三)後昆を惟ふ。

其一

【三九】微物。作者自ら謂ふなり。降惟は降し思ふこと。

【四〇】儲隷。太子の臣職。

【四一】朝黻。朝官といふが如し。

【四二】滯瑕。滯積せる過失。

【一】釋奠。孔子の祭。宋の文帝の元嘉二十年三月、皇太子劭、國學に釋奠す。

【二】浚明。浚は大なり。爽曙は明なること。

【三】後昆　後生といふが如し。

【大意】國家は師傅儒士を尊崇し、之をして道德技藝を講習し、以て德を養ひ言を立てしむ。若し道既に明なるも、義に於て尙ほ暗き所あれば、永く先覺の意を瞻、顧みて後見を思ひて以て之を正す。

(四)大人物を長じ、天に繼ぎ聖に接ぐ。時(五)屯にして必ず亨り、運(六)蒙にして則ち正し。武術を(七)偃閉し、文令を闡揚す。(八)庶士風に傾き、(九)萬流鏡を仰ぐ。其二

【大意】聖天子天に繼ぎて萬物を長育し、時運の屯蒙に遇ふも、必ず能く通正し、武道を偃せ文敎を開く。故に衆士萬民、皆其風を慕ひ、之を仰いで以て鑒鏡となす。

(一〇)虞庠館を飾り、(一一)睿圖炳晬なり。仁を懷きて(一二)憬集し、智を抱きて(一三)麕至し、門に踵りて書を陳し、屩を躡んで(一四)器を獻じ、身を(一五)玄淵に澡ぎ、心を(一六)道祕に宅く。其三

【大意】學校を修築し孔聖の像を置き、釋奠の大禮を擧ぐるや、仁智の士遠きよりして羣り至り、

【四】大人。天子を謂ふ。
【五】屯。難なり。
【六】蒙。暗なり。
【七】偃閉。偃は息なり。
【八】庶士。衆士なり。
【九】萬流。萬民なり。
【一〇】虞庠。學校をいふ。禮記に有虞氏ハ國老ヲ上庠ニ養フとあり。
【一一】睿圖。睿は聖なり。孔子の畫像。炳晬は丹青の色の温潤なる貌。
【一二】憬集。遠くより集り來ること。
【一三】麕至。羣り至ること。
【一四】器。禮器なり。
【一五】玄淵。道德深遠の處。
【一六】道祕。前に同じ。

其書を陳列し、禮器を進獻し、道義の奥祕を窮めんとす。

伊れ昔(一七)周儲、聿に(一八)往記に光けり。(一九)思皇なる世哲、(二〇)元を體して嗣となり、此の夙知に資り、降りて經志に從ひ、(二一)邈たる彼の前文、矩のごとく周り規のごとく値ふ。其四

【大意】昔周の文王の太子たるや、恭しく其父王季に事へ、一日に三たび朝せり。其事既に前史に明記せらる。今吾が太子亦盛美の質を以て繼嗣となり、夙成の知に藉り經典を學ばんことを以て志となす。古文經典相去ること遠しと雖も、能く之を修めて規矩相當る。

(二二)正殿筵を虛うし、(二三)司分日を簡び、(二四)尙席杖を函れ、(二五)丞疑帙を奉じ、(二六)侍言辭を稱げ、(二七)惇史筆を秉り、(二八)幾音を妙識し、(二九)王載述ぶるあり。其五

【大意】太子正殿に御し、釋奠の禮を行ふ。乃ち司分の官は吉日を擇び、儒席を設けて杖を函るる

【一七】周儲。周の文王の太子たりし時を謂ふ。
【一八】往記。前史といふが如し。
【一九】思皇。思は發語にて意義なし、皇は美なり。世哲は太子を謂ふ。
【二〇】元。大なり、道を謂ふ。
【二一】邈。遠き貌。前文は古代の文學。
【二二】正殿。前殿なり。
【二三】司分。曆を主る官。
【二四】尙席。儒席なり。
【二五】丞疑。輔弼の官。帙は書帙なり。
【二六】侍言。太子の言語を傳ふる官。
【二七】惇史。直辭の官。
【二八】幾音。幾微の言。
【二九】王載。載は事なり。帝王の法則。

の餘地を置き、丞疑の官は書帙を捧げ、侍言は太子の言辭を傳へ、惇史は筆を乘りて之を記す。侍從の官皆よく幾徵の言を識る。帝王の法則是に於てか述作する所あり。

(三〇)肆議芳訊して、大敎克く明なり。敬んで祀典を躬し、奠を(三一)聖靈に告ぐ。禮は(三二)觀盥に屬し、樂は(三三)歌笙を薦む。(三四)昭事是れ肅み、(三五)俎實馨しきにあらず。其六

【大意】訊議宜しきを得て大道よく明なり。謹んで祀典を行ひ先聖の神靈を祭る。禮は盛美を盡し樂は雅樂を進む。祭事の嚴肅なるは、供物の馨香なるにあらず、其德の馨しきなり。(書經に黍稷馨しきにあらず、明德惟れ馨しとあり。)

(三六)獻終りて吉を襲ね、宮に卽いて(三七)廣讌す。堂には(三八)象筵を設け、庭には(三九)金懸を宿く。(四〇)台保徵を兼ね、(四一)皇戚彥を比べ、肴乾き酒澄み、服を端し弁を整ふ。其七

【大意】祭祀既に畢りて、重ねて吉祥を得、還りて宮に就いて讌樂を廣め、象牙を以て席となし、宿に金鼓を懸けて庭に列し、筵に列る台保皇戚皆賢哲の美士にして、肴

【三〇】肆議芳訊。よく議し、よく問ふこと。
【三一】聖靈。聖人孔子の靈。
【三二】觀盥。禮の盛なるをいふ。
【三三】歌笙。雅樂なり。
【三四】昭事。祭祀なり。
【三五】俎實。供物なり。
【三六】獻終。祭の畢ること。
【三七】廣讌。讌は宴に同じ。
【三八】象筵。象牙の席。
【三九】金懸。金鼓を懸くること。宿は宵に懸くること。
【四〇】台保。台は三公の位。保は太保なり。徵は美なり。
【四一】皇戚。皇家の親戚。彥は美士なり。

乾き酒澄むも、敢て飲食せず、衣冠を修整す。(四二)六官命を視、(四三)九賓儀を相け、(四四)纓笏序を匝り(四五)巾卷街に充ち、(四六)都莊雲のごとく動き、(四七)野馗風のごとく馳す。周に倫べ漢に伍ぶれば、超として邈に猗し。其八

【大意】六卿九賓王命を視て禮儀を助け、纓を垂れ笏を秉るの人、序に滿ち、巾箱書卷また衢に充ち、禮を觀る者道路に滿ちて、風雲の馳するが如し。之を周漢の徳に比するに、超然として夐に美なり。

(四八)清暉天に在れば、(四九)容光必ず照す。物其情を性のままにすれば、理其奧を宣ぶ。妄に(五〇)國冑に先ち、側に邦教を聞く。徒に(五一)微冥に愧ぢ、終に(五二)智效を謝す。其九

【大意】聖天子上に在れば、小隙の微と雖も照さざるはなく、道を以て下を治め、人よく其性を存すれば、治效必ず成る。今吾(顏延年)妄に國子祭酒の職に在り、國の教義を掌れども、徒に微賤にして暗愚なるを愧ぢ、智の職責を全うするなきは、偏に陳謝する所なり。

【四二】六官。六卿なり。
【四三】九賓。賓客を接待する官。
【四四】纓笏。冠の紐及びシャク。序はヒサシなり。
【四五】巾卷。巾は本箱。
【四六】都莊。莊は道なり。
【四七】野馗。野の道なり。
【四八】清暉。日なり、天子に喩ふ。
【四九】容光。小隙なり。
【五〇】國冑。冑は長子、國の長子なり。顏延年時に國子祭酒たり。國子學は國の冑子を教ふる學校なり。
【五一】微冥。微賤にして暗愚。
【五二】智效。莊子に智一官ニ效アリとあるに本づく。

宴に(一)樂游苑に侍し、(二)張徐州を送る。詔に應ぜし詩

(三)丘希範

(四)詰旦閶闔開き、(五)馳道鳳吹を聞く。(六)輕荑玉輦を承け、細草龍騎に藉く。風遲うして山尙ほ響き、雨息んで雲猶ほ(七)積り、巢空くして初鳥飛び、(八)荇亂れて新魚戲る。寔に惟れ(九)北門の重き、親にあらずんば孰か寄するをなさん。參差として、(一〇)別念擧り、(一一)肅穆として恩波被る。(一二)小臣信に幸多し。生を投ずるも豈義に酬いんや。

【一】樂游苑。前に出づ。
【二】張徐州。一本に張字なし。梁の武帝の弟宏の徐州刺史たるを送るなり。
【三】丘希範。丘遲、字は希範。吳興の人、齊梁に仕ふ。
【四】詰旦。平旦。よあけ。閶闔は天宮の門なり。
【五】馳道。天子の御成道。鳳吹は笙簫なり。
【六】輕荑。柔きチガヤ。
【七】積。集本に漬に作る。
【八】荇。水草なり。
【九】北門。徐州は梁の北門なり。
【一〇】別念。武帝の弟に別るゝ情。
【一一】肅穆。和睦なり。
【一二】小臣。丘遲自ら謂ふ。

【大意】平旦に天門を開き、天子笙を吹いて馳道を出づ。(樂游苑に行幸するなり。)玉輦は柔荑に軋り、六馬は細草を踏み。風緩しと雖も響山に傳はり、雨息めども雲猶ほ濕ひ、魚鳥各其所を得たるを樂む。徐州は是れ北門の重任なり。親王にあらずんば、誰にか此重任を寄託せん。天子離別に

感じ、恩情の一入濃かなるあり。余も亦寵幸を辱うし、身命を擲つと雖も以て恩義に答ふる能はざるなり。

詔に應じ(一)樂游苑にて(二)呂僧珍を餞する詩　(三)沈　休　文

(四)丹浦戰を樂むにあらず、(五)重きを負うて君臨に切なればなり。(六)我が皇至德を秉り、己を忘れて堯心を用ふ。愍む茲の區宇の內、魚鳥飛沈を失へるを。(七)轂を二崤の道に推し、旆を九河の陰に揚ぐ。(八)超乘盡く三屬、選士皆百金。(九)戎車細柳を出で、(一〇)餞席上林に樽す。師に命じて(一一)後服を誅し、律を授けて(一二)前禽を緩うす。(一三)函轘方に帶を解き、(一四)嶢武稍襟を披く。罪を(一五)芒山の曲に伐ち、民を(一六)伊水の潯に弔ふ。將に(一七)告成

【一】樂游苑。前に出づ。
【二】呂僧珍。字は元瑜、梁に仕へて左衞將軍となり、天監四年冬、北のかた魏を伐つ。
【三】沈休文。沈約、字は休文、梁の吳興の人。
【四】丹浦。丹水のほとり。六韜に堯有苗ト丹水ノ浦ニ戰フとあり。
【五】重きを負ふ。鄧析子に明君ノ人ヲ御スルハ、氷ヲ履シデ重キヲ負フ若シとあり。
【六】我が皇。梁の武帝なり。
【七】轂。車のコシキ。昔天子の將を遣るや、親しく其車轂を推して之を送れり。二崤は山の名。
【八】超乘。跳躍して車に上る者。三屬は甲なり。
【九】戎車。兵車なり。細柳は屯營なり。
【一〇】餞席。送別會の席。上林は樂游苑なり。
【一一】後服。後れて降服する者。
【一二】前禽。前に降りし者。
【一三】函轘。函谷關と轘轅坂。
【一四】嶢武。二關の名。
【一五】芒山。洛陽の北芒山なり。魏は洛陽に都す。故に云ふ。
【一六】伊水。川の名。

の禮に陪せんとし、此を待ちて未だ(一八)簪を抽かず。

【大意】 堯の有苗と丹水の浦に戰ひしは、敢て戰を樂むにあらず、切に國家に君臨し、百姓の安からざるを懼れたればなり。我が皇(梁の武帝)亦至德を執り、己を忘れて帝堯の心を以て心となし、百姓を安んぜんことを思ふ。今區宇の內、魏の侵掠に苦み、萬物其所を失へるを憐み、將を送り兵を遣る。超乘の卒は盡く三屬の甲を著、選士は皆百金に値す。兵車屯營を出で、上林(樂遊苑)に餞飲す。天子師旅に命じ、律を授けて曰く、降らざる者は執へ誅せよ、降る者は務めて寬にせよと。函谷の關、轘轅の坂、堯武の二關、皆披解して降附せんとす。乃ち進んで洛陽の根據を衝き、罪を伐ち民を弔ふの日、亦將に近きに在らんとす。余は王師凱旋の後、天地山川を祀り、告ぐるに武功の成れるを以てするの禮に陪せんと欲す。故に不肖と雖も未だ敢て官を辭して去らざるなり。

【一七】告成。天地山川を祀りて武功の成れるを告ぐること。

【一八】簪。髮に冠をとむるもの。官を辭するを簪を解くといふ。

(一)祖餞

(二)應氏を送る詩二首　曹子建

【一】祖餞。送別の詩なり。

【二】應氏。應璩、應瑒兄弟なり。第一首は北芒に在りて應氏の家に歸るを送るなり。應の家は汝南に在り、汝南は洛陽の東南に在り、故に歸途必ず洛陽を過ぐるなり。第二首は河陽に在りて應の朔方に往

歩して（三）北芒の阪に登り、遥に洛陽の山を望む。洛陽何ぞ寂寞たる。宮室盡く燒焚せらる。垣墻皆（四）頓擗し、（五）荊棘上天に參り、（六）舊耆老を見ず、但新少年を觀る。足を側つるに行徑なく、（七）荒疇復た田らず。（八）遊子久しく歸らず、（九）陌と阡とを識らず。（一〇）中野何ぞ蕭條たる。千里人煙なし。我が平常の居を念ひ、氣結ぼれて言ふ能はず。

【大意】君の行を送り北邙山に登りて洛陽を望めば、洛陽の宮室は董卓の燒く所となりて、寂寞を極め、垣墻崩れ荊棘荒れ、古老は亂に遇ひて殺され、ただ少年の往來するを見るのみ。足を擧ぐるも行徑なく、田圃は荒廢して耕作するなし。足下は他方に流寓して、久しく家郷に歸らざれば、當に道路の由る所を識らず、ただ千里蕭條たる無人の野を經るなるべし。余が平生游居せる地の荒廢せること此の如きを見、足下の行途の更に甚しからんことを思ひ、心鬱結して言ふ能はず。

（一一）淸時屢得難く、（一二）嘉會常にすべからず。天地終極なく、人命朝霜の若し。願くは（一三）嬿婉を展ぶ

くを送るなり。同一の題下に二首を包括すれども同時同處に成れるにはあらず。

【三】北芒。一に北邙に作る。洛陽の北に在る山の名。

【四】頓擗。崩れ倒るること。

【五】荊棘。イバラなり。

【六】舊耆老。もとの老人輩。

【七】荒疇。荒れたる田畑。

【八】遊子。旅客をいふ、ここは應氏兄弟を指す。

【九】陌と阡。東西に通ずる道を陌といひ、南北に通ずる道を阡といふ。

【一〇】中野。野原の中。

【一一】淸時。明時に同じ、太平の時。

【一二】嘉會。交友相會すること。

【一三】嬿婉。歡樂なり。

ることを得ん。我が友(一四)朔方に之く。(一五)親昵竝に集り送り、此の河陽に置酒す。(一六)中饋豈獨り薄からんや。賓飮觴を盡さず。愛至りて望苦だ深し。豈中腸に愧ぢざらんや。山川阻り且つ遠く、別促りて會日長し。願くは比翼の鳥となり、翮を施して起ちて高く翔らん。

【大意】太平は屢得べからず。嘉會は常にし難し。悲しいかな今時淸平ならず、君と相別るるに至れり。天地は悠久なれども、人命は朝露の如し。一たび別れては再會期すべからず。今君の朔方に往くに際し、暫く歡樂を共にせんと欲し、親友相集りて河陽に宴す。酒肴乏しきにあらざれども、君は離愁の爲に多く飮まず。君我を愛すること至り、我に望むこと深し。然も我微力にして君を振拔する能はず。中心豈愧づる所なからんや。(詩意を按ずるに、應氏朔方に往くを好まず、曹子建の盡力に因り、朔方の役を止めんことを願ひしも、時に子建は兄文帝の忌む所となり居たれば、復た如何ともすること能はざりしならん)夫れ朔方の地たる、山川阻隔、離別已に眼前に促り、再會の期近からず。ただ願はくは比翼の鳥となり、翼を附けて君と相竝んで去らんことを。

【一四】朔方。北方の地名。
【一五】親昵。親近の人。
【一六】中饋。膳羞なり。

(一)征西の官屬、(二)陟陽候に送りしとき作れる詩　(三)孫子荊

晨風岐路に飄り、(四)零雨秋草に被る。(五)城を傾けて遠く追送し、我を千里の道に餞す。(六)三命皆極あり、(七)咄嗟安んぞ保つべき。(八)殤子より大なるはなく、(九)彭聃も猶ほ夭となす。吉凶は(一〇)糾纆の如く、憂喜相紛繞す。天地我が(一一)鑪たり、萬物一に何ぞ小なる。達人は大觀を垂る。(一二)此を誡めて早からざるを苦む。(一三)乖離して長衢に卽けば、惆悵して懷抱に盈つ。孰か能く其心を察せん、之を鑒するに(一四)蒼昊を以てす。(一五)齊契今朝に在り、之を守りて與に偕に老いん。

【大意】曉風岐路を拂ひ、秋雨草木に注ぐ時、擧城の人、我を送りて遠く此地(陟陽候)に來る。夫れ人命には終極あり、我が身安んぞ長く保つべけんや。誠に嗟嘆すべきなり。然れども天理に達する者より觀れば、殤者も亦壽となすに足り、理に違ひて求むれば、彭聃と雖も尚ほ以て夭となすべし。畢竟するに吉凶は糾へ

【一】征西。扶風王司馬駿、征西將軍たり。官屬とは其屬僚なり。
【二】陟陽候。陟陽は亭の名。候は亭なり。
【三】孫子荊。孫楚、字は子荊、晉の太原の人。
【四】零。落つる雨。
【五】城を傾け。城下の人を盡して。
【六】三命。養生經に黃帝曰ク上壽ハ百二十、中壽ハ百年、下壽ハ八十とあり。
【七】咄嗟。憂嘆すること。
【八】殤子。七歲以下にて死亡せし者をいふ。
【九】彭聃。彭は彭祖、殷の賢大夫なり、其壽七百歲といふ。聃は老聃、其壽百六十餘、或は二百餘歲なりといふ。
【一〇】糾纆。より合せたるナハ。
【一一】鑪。火牀なり。鵩鳥賦に天地ヲ鑪トナシ、萬物ヲ銅トナスとあり。
【一二】此。生を愛すること。
【一三】乖離。別離なり。
【一四】蒼昊。天なり。
【一五】齊契。同じく合ふこと。晉書に允ニ靈休ニ應ジ、天人齊契スとあり。

る索の如く、憂喜は紛擾して因果をなす。天地は一大鑪にして萬物を陶冶す。人其間に在り、一に何ぞ微小なる。此身何ぞ深く惜むに足らんや。達人は大觀し死生を視ること一の如し。故に此生を愛するを誡め、人の早く悟らざるに苦む。今我衆に別れて長途に就けば、惆悵の情胸中に盈つ。ああ誰か我が此情を察せん、ただ上天之を鑒するのみ。我が心天意と冥合す。願くは之を守りて偕に老いん。

(一)金谷の集に作れる詩　潘安仁

(二)王生鼎實を和し、(三)石子海沂を鎮ず。親友各言に邁く。中心悵として違ふあり。何を以てか離思を敍べん。手を攜へて郊畿に游ぶ。朝に(四)晉京の陽を發し、夕に金谷の湄に次る。迴谿(五)曲阻を縈り、峻阪路(六)威夷たり。綠池泛として淡淡たり。青柳何ぞ(七)依依たる。濫泉龍鱗のごとく瀾たち、激波連珠のごとく揮ぐ。前庭に(八)沙棠を樹ゑ、後園に(九)烏椑を植う。(一〇)靈囿に(一一)石

【一】金谷。川の名。其源は河南太白原より出づ。其側に石崇の別莊あり。

【二】王生。王詡をいふ。王詡入りて國子祭酒となる。祭酒は三公を助けて鼎を和する職なり。

【三】石子。石崇をいふ。崇出でて城陽に守たり。城陽は海邊に在り、故に海沂を鎮ずといふ。

【四】晉京。洛陽なり。

【五】曲阻。屈曲せる山。

【六】威夷。險阻なる貌。

【七】依依。盛なる貌。

【八】沙棠。木の名。

榴を繁くし、茂林に芳梨を列ぬ。飲至りて華沼に臨み、坐を遷して（一二）隆坻に登る。（一三）玄醴朱顔を染め、但杯の行ること遲きを愬ふ。桴を揚げて靈鼓を撫ち、簫管淸くして且つ悲む。（一四）春榮誰か慕はざらん。（一五）歳寒良に獨り希なり。（一六）分を投じて（一七）石友に寄す。白首まで歸する所を同うせん。

【九】烏椑。木の名。
【一〇】靈圃。美園なり。
【一一】石榴。果木の名。
【一二】隆坻。高岸なり。
【一三】玄醴。黒黍の酒。朱顔は赤き顔。
【一四】春榮。少壯に喩ふ。
【一五】歳寒。老年に喩ふ。
【一六】分。猶ほ志といふが如し。
【一七】石友。朋友石崇なり。

【大意】今や王生は祭酒となりて此地を去らんとし、石子は城陽の守となりて此地を去らんとす。親友各離散するに遇ひ、中心惆悵の情に堪へず。因つて朝に洛陽を發し、夕に此の金谷に來り、手を携へて共に遊び、以て離思を敍べんとす。金谷の地たる谿廻り阪險しく、池水淡淡として楊柳依依たり。湧泉は龍鱗の如く、激波は連珠の如く、果樹其間に列植す。池に臨み岸に踞して酒を酌めば、醉顔紅を潮し、唯酒杯の行ること遲きを怨む。更に鼓を擊ち管を吹きて興を添ふれば、其聲淸くして悲し。ああ人誰か少壯を慕はざる者あらん。然も能く老年に達し得る者稀なり。我れ既に石生と親交を結べり。願くは白髮の老境に至るまで、共に歸する所を同うせんことを。

(一)王撫軍、(二)庾西陽の集に別るる作　(三)謝宣遠

(四)祗召せられて北京に旋り、守官して(五)南服に反る。舟を方べて(六)舊知に析れ、筵を對して(七)明牧を曠にす。觴を擧げて飲餞を(八)矜め、途を指して出宿を念ふ。(九)來晨定端なく、(一〇)別晷成速あり。(一一)潁陽通津を照し、夕陰平陸に曖し。(一二)榜人行艫を理め、(一三)輶軒歸僕に命ず。手を東城の闉に分ち、櫂を西江の隩に發す。離會(一四)相雜ると雖も、逝川豈往復せんや。誰か謂ふ情書すべしと、盡言(一五)尺牘にあらず。

【大意】庾は召されて帝京に歸らんとし、余は官を守りて南方に臨まんとす。因つて舟を方べ席を對して、王庾二友と飲餞し、各行途を指して獨宿の悲を思ふ。再會未だ期あらざるに、離別の時は刻刻に迫り、落日渡津を照し、夜陰四邊

【一】王撫軍。撫軍將軍王弘をいふ。
【二】庾西陽。西陽太守庾登之をいふ。
【三】謝宣遠。名は瞻、字は宣遠、庾徴されて都に還らんとす、王撫軍送りて湓口の南樓に至る、瞻も亦豫章太守となりて豫章に赴かんとす、三人此に會して別を敍す。
【四】祗召。天子の召を蒙ること。
【五】南服。南方の地方。
【六】舊知。舊友なり、庾西陽を指す。
【七】明牧。牧は地方長官の稱王撫軍を指す。
【八】矜。一本に務に作る。
【九】來晨。今後來り會する時。
【一〇】別晷。今別れ去る時。
【一一】潁陽。落日なり。
【一二】榜人。船頭なり。
【一三】輶軒。輕車なり。
【一四】相雜。一本相親に作る。
【一五】尺牘。書版なり。

を掩ひ、船手は船を戒め、軒車を僕御に命ず。乃ち東西に相別れて去る。離れて復た會ふ。相親むの理ありと雖も、歳月は逝川の如く、往復の義なし。再會期すべからず。誰か謂ふ一旦相別るるも尙ほ書信を以て情を通ずべしと。この情豈書信の能く盡す所ならんや。

鄰里(一)方山に相送る詩

謝靈運

(二)祇役して(三)皇邑を出で、相期して(四)甌越に憩ふ。纜を解いて流潮に及ぶも、舊を懷ひて發する能はず。(五)析析として衰林に就けば、(六)皎皎として秋月明なり。情を含んで(七)盈をなし易く、(八)物に遇ひて歇むべきと難し。痾を積んで(九)生慮を謝し、欲を寡くして(一〇)闕く所罕なり。(一一)此に資りて永く幽棲す。豈伊れ年歲の別ならんや。各(一二)日

【一】方山。江寧縣の東五十里に在り、もと揚州に四津あり方山を東となし、石頭を西となす。謝靈運永嘉郡守となり任に赴く時、鄰里相送りて此地に來る。因つて詩を作りて之に別るるなり。
【二】祇役。皇命を愼みて役に服すること、永嘉郡に赴任すること。
【三】皇邑。帝都卽ち建康なり。
【四】甌越。古の越國なり。
【五】析析。風の木を吹く聲。
【六】皎皎。月の明なる貌。
【七】盈。感慨の胸に充つること。
【八】物。上文の衰林秋月を指す。
【九】生慮。生存の願。謝は棄つること。
【一〇】闕く所。心に不滿を感ずること。
【一一】此。寡欲を指す。
【一二】日新。易經に日ニ其德ヲ新ニスとあり。

新の志を勉め、(三)音塵寂蔑を慰めよ。

【大意】われ朝命を奉じて永嘉に赴かんとし、帝都を出づれば、鄰里の知友相送りて此甌越の地に至れり。潮水に乘じて纜を解かんとするも、懷舊の情起りて船を發する能はず。析析たる枯林、皎皎たる明月を見ては、感慨更に胸に盈ちて歇め難し。われ既に宿痾の爲に生存に意なく、既に寡欲を務めて、心に不足あるなし。此の寡欲の理に資り、永く幽棲の道となさんとす。されば今日の別は一年一歳暫時の別にあらず。諸君願くは日新の德を勉め、時に音信を通じて、我が寂寞を慰められよ。

【三】音塵。音信なり。寂蔑は淋しき境遇。

(一)新亭の渚にて(二)范零陵に別るる詩

(三)謝玄暉

(四)洞庭樂を張るの地
(五)瀟湘帝子游ぶ。
雲は去る(六)蒼梧の野、
水は還る(七)江漢の流
驂を停めて我れ悵望

【一】新亭。十洲記に丹陽郡ノ新亭ハ中思里ニ在リ呉ノ舊亭ナリとあり。

【二】范零陵。零陵郡內史たる范雲をいふ。

【三】謝玄暉。謝朓、字は玄暉、齊の陳郡の人。

【四】洞庭。山の名。昔黃帝咸池の樂を其上に張る。

【五】瀟湘。洞庭湖に注ぐ川の名。帝子は堯の二女娥皇女英なり。舜に隨つて反らず、湘水に死す。

【六】蒼梧。瀟湘に近き地名。舜ここに崩ず。

【七】江漢。長江及び漢水。

し、棹を輟めて子（八）夷猶す。（九）廣平聽方に藉き、（一〇）茂陵將に求められんとす。心事倶に已ぬる矣、江上徒に離憂あり。

【大意】洞庭瀟湘は古來傳誦の地にして、行雲流水蒼梧の間を繞る。今君其地に向つて去らんとす。我れ馬を停めて、悵望すれば、君は棹を輟めて躊躇し、共に惜別の情に堪へず。君が治化は周處の如く、名聲籍甚なれども、我は茂陵の病相如の如く、徒に遺文を以て世に求められんとす。心事倶に灰す。已ぬるかな。此を思へば更に離憂の増すあるのみ。

【八】夷猶。猶豫すること。
【九】廣平。周處廣平太守となり、滯訟一朝にして斷決す。聽は名聲なり。周處を以て范雲に比す。
【一〇】茂陵。司馬相如病んで茂陵に在り、漢の武帝使を遣して其書を求めしむ、至れば已に卒せり。司馬相如を以て自ら比す。

（一）范安成に別るる詩　（二）沈休文

生平少年の日、手を分つも（三）前期を易しとす。爾と同じく（四）衰暮し、復た別離の時に非ず。言ふ勿れ一樽の酒と、明日重ねて持し難し。夢中路を識らず、何を以てか相思を慰めん。

【一】范安成。范岫、字は懋賓、齊の時、安成内史たり。
【二】沈休文。沈約、字は休文、宋齊梁三朝に仕ふ。
【三】前期。別るるに臨み、豫め再會を期すること。
【四】衰暮。衰老なり。

【大意】 少年の時は、一旦相別るるも更に再會の期あり。今や我と汝と共に衰老し、今相別れなば恐らくは復た相見る能はざらん。此の一樽の酒を以て輕しとなす勿れ。ああ生死は時なし。明日恐らくは重ねて樽酒を傾くる能はざらん。須らく痛飲して以て別を惜むべきなり。別後夢中に相尋ねんとするも路を識らず。何を以てか相思の情を慰むるを得んや。

卷の十一

詩　乙

詠史

史を詠ぜし詩

王仲宣

古より殉死なきは、達人の共に知る所なり。(一)秦穆三良を殺す。惜しいかな空しく爾爲せること。(二)結髪明君に事へ、恩を受くること良に訾れず。沒するに臨んで死に之かんことを要す。焉んぞ相隨はざるを得ん。妻子門に當りて泣き、兄弟路の垂に哭し、穴に臨んで蒼天を呼び、涕下ること(三)綆縻の如し。人生れて各ゝ志あり、終に此が爲に移らず。同じく知る身を埋むるの劇しきを。心亦施す所あらん。生きては百夫の(四)雄となり、死しては壯士の規となる。(五)黄鳥悲詩を作り、今に至るまで聲虧けず。

【大意】殉死の古禮にあらざるは、人の皆知る所なり。然るに秦の穆公

【一】秦穆。秦の穆公。三良は三人の良臣。左傳に秦伯卒ス、子車氏ノ三子、奄息、仲行、鍼虎ヲ以テ殉トナス、皆秦ノ良ナリとあり。
【二】結髪。元服すること。
【三】綆縻。繩索なり。
【四】雄。雄傑なり。
【五】黄鳥。詩經の篇の名。序に黄鳥ハ三良ヲ哀ムナリとあり。

が三良をして殉死せしめ、敢て非禮の事をなせるは、誠に惜むべきなり。かの三良や結髪して君に事へ、既に其重恩を荷へり。君沒するに及び殉死を要求す。焉んぞ其命に服せざるを得ん。乃ち身を殺して君に殉するや、妻子兄弟墓穴に臨み天を呼んで哭す。ああ人生れて各〻志あり、心に施行する所あらんとす。終に同じく自殺の慘劇を以て身を終へ、生きては百夫の雄傑たり、死しては壯士の規範となる。黃鳥の悲詩、是に於てか作られ、今に至るまで滅びず。

(一)三良の詩　曹子建

功名は爲すべからず。忠義は我が安ずる所なり。秦穆先づ(二)下世して、三臣皆自ら殘ふ。生時榮樂を等うし、既に沒して憂患を同うす。誰か謂ふ軀を捐つること易しと。身を殺すは誠に獨り難し。涕を攬りて君が墓に登り、穴に臨み天を仰いで歎く。(三)長夜何ぞ冥冥たる。一たび往いて復た還らず。(四)黃鳥爲に悲鳴す。哀いかな肺肝を傷ましむ。

【一】三良。前の詩に見ゆ。
【二】下世。死すること。
【三】長夜。墓中をいふ。冥冥は暗き貌。
【四】黃鳥。前の詩に見ゆ。

【大意】此詩は三良の其死を得ざるを哀みて作れるなり。子建皇室の尊を以て、常に不遇なるも、尙ほ死せざる所以は、國家を救はんとの念あればなり。故に詠史に託して自己の主張を述ぶ。功名

は期すべからず。ただ忠義在る所、即ち吾が心の安んずる所なり。秦の穆公の死するや、三臣自殺して君に殉ぜり。思ふに臣の君に於けるは、生時には君と榮樂を等うし、死しては君と憂患を同うすべきなり。然れども其事忠義に合ひ、中心一點の疑なくして、始めて死に就くべきなり。故に軀を捐つるは易きに似て、實は大に難きなり。三良の死は此義に協はず、曲げて君命に從ひしものにして、忠義に似て實は然らず。秦人其死を悲み、君（三良）の墓に登り、天を仰いで歎ぜしも、墓中暗きこと長夜の如く、一たび往いては復た還らず。因つて黄鳥の詩を作り、以て之を悲む、今我亦此篇を讀みて心を傷ましむ。

史を詠ぜし詩八首

左太沖

(一)弱冠にして柔翰を弄し、(二)卓犖として羣書を觀る。論を著して(三)過秦に准ひ、賦を作りて(四)子虛に擬す。邊城(五)鳴鏑に苦み、(六)羽檄京都に飛ぶ。甲冑の士にあらずと雖も、(七)疇昔穰苴を覽たり。長嘯清風に激し、志(八)東呉なき

【一】弱冠。年二十をいふ。柔翰は筆なり。
【二】卓犖。特達の貌。
【三】過秦。漢の賈誼過秦論を著せり。
【四】子虛。漢の司馬相如子虛賦を作る。
【五】鳴鏑。かぶら矢。
【六】羽檄。兵を徵す書なり。
【七】疇昔。前日なり、昔時なり。穰苴は戰國時代の兵法家。
【八】東呉。呉の孫氏なり。

が若し。(九)鉛刀は一割を貴ぶ。夢想に良圖を騁す。左眄江湘を澄ましめ、(一〇)右盻羌胡を定む。功成りて爵を受けず。(一一)長揖して田廬に歸る。

【大意】此詩は己の志を述べたるものにして、史實を詠ぜしにはあらず。我は弱冠の頃より好んで筆墨を弄し、磊落不羈にして群書を渉獵し、論を著しては賈誼の過秦論になぞらへ、賦を作りては相如の子虛賦に擬しぬ。時恰も邊城の民戰亂に苦み、羽檄頻に京都に飛ぶの際なりしかば、我もと武人にあらざれども、嘗て穰苴の兵術を脩めたれば、壯志自ら抑ふる能はず。風に臨んで長嘯し、以て激烈の氣を馳せ、眼中また東吳あるなし。鉛刀と雖も一割の用あり。乃ち壯圖を騁せ、左顧しては江湘の水を淸め(吳を平ぐるをいふ)右眄しては西戎を定め(蜀を平ぐること)功成り名遂げて然も封爵を受けず。長揖して故山に歸り、田廬の間に起臥し、其高節を守らんと欲す。

鬱鬱たり(一二)澗底の松、(一三)離離たり山上の苗、彼の徑寸の莖を以て、此の百尺の條を蔭ふ。(一四)世胄高位を躡み、英俊(一五)下僚に沈む。地勢之をして然らしむ。由來一朝にあらず。(一六)金張舊業に藉り、(一七)七葉

【九】鉛刀。鉛にて作れる刀。
【一〇】右盻。右顧といふが如し。羌胡は西戎なり。蜀を指す。
【一一】長揖。揖は禮の輕きなり。
【一二】澗底。谿谷の中。
【一三】離離。輕細の貌。
【一四】世胄。胄は長子。卿大夫の子弟なり。
【一五】下僚。低き官。
【一六】金張。漢の金日磾、張湯の子孫をいふ。
【一七】七葉。七世なり。金日磾の子孫、漢の武帝より平帝に至るまで七世、侍中常侍となれり。侍中常侍の冠は貂尾を飾となす。故に漢貂といふ。

漢貂を珥む。(一八)馮公豈偉ならざらんや、(一九)白首まで招かれず。

【大意】輕細なる小苗と雖も、山上に生ずれば能く澗底百尺の松を掩ふが如く、閥族の子弟は高位に昇り、英傑の士は常に下僚に沈淪す。然れども因襲の久しき、此弊容易に破り難し。歎ずべきかな。請ふ看よ金張の子弟は、祖先の遺澤に藉りて七世貂冠を被り、馮唐は偉ならざるにあらざれども、老年に至るまで郎署に沈淪せり。

吾(二〇)段干木を希ふ。(二一)偃息して魏君に(二二)藩たり。吾(二三)魯仲連を慕ふ。談笑して秦軍を却く。當世(二四)不羈を貴び、難に遭ひて能く紛を解く。功成りて賞を受くるを恥ぢ、高節卓として羣せず。(二五)組に臨めども緤ぐを肯んぜず。(二六)珪に對すれども寧んぞ肯て分たん。(二七)連璽前庭に曜くも、之を比すること猶ほ浮雲のごとし。

【大意】偃臥の間に魏國を安んじ、談笑の中に秦軍を却けたる、段干木と魯仲連とは、吾が常に慕ふ所なり。就中魯仲連が不羈放達にして、世の紛亂を解き、功成りて賞を受けず、封爵を辭すること浮雲の輕きが如

【一八】馮公。漢の馮唐をいふ。馮唐は老年に至るまで郎署にありて榮進すること能はざりき。
【一九】白首。老年なり。
【二〇】段干木。魏の文侯の師。
【二一】偃息。臥して休息すること。何事をもせざること。
【二二】藩。垣なり。國の守禦となること。
【二三】魯仲連。秦王を帝とすることを拒みし人。
【二四】不羈。束縛を受けざること。
【二五】組。印綬なり。
【二六】珪。諸侯の信印。分は受といふが如し。
【二七】連璽。璽は印なり。前には趙の封爵を辭し、後には齊の封爵を辭したる故、連といふ。

く、高節卓然たるに至りては、吾の最も慕ふ所なり。

(二八)濟濟たる京城の內、(二九)赫赫たる王侯の居、(三〇)冠蓋四術を蔭ひ、(三一)朱輪長衢に竟る。朝には(三二)金張の館に集り、暮には(三三)許史の廬に宿す。南鄰(三四)鐘磬を擊ち、北里(三五)笙竽を吹く。寂寂たる(三六)楊子の宅、門に卿相の輿なし。寥寥たる空宇の內、講ずる所は(三七)玄虛に在り。言論(三八)宣尼に准へ、辭賦(三九)相如に擬す。(四〇)悠悠たる百世の後、英名(四一)八區に擅にす。

【大意】京城に王侯の邸あり。冠蓋朱輪相往來し、朝には金張の館に集り、暮には許史の邸に宿し、南鄰北里管絃の聲耳に盈つ。翻つて楊雄の宅を見んか、寂寂寥寥として門に貴人の車輿なく、空室の內に在りて、玄虛の道を講じ、文を作りて孔子に倣ひ、賦を作りて相如に擬す。然も其英名百世に傳はりて滅びず。一時の榮華の夢幻に等しきを知るべし。

(四二)皓天白日を舒べ、(四三)靈景神州に耀く。宅を(四四)紫宮の裏に列ね、(四五)飛宇雲の浮べるが若し。

【二八】濟濟、美盛の貌。
【二九】赫赫。美盛の貌。
【三〇】冠蓋。冠及び車蓋。四術は四方の道。
【三一】朱輪。朱塗の車。
【三二】金張。金日磾及び張湯なり。共に漢代の寵榮の臣。
【三三】許史。漢の元帝の母許皇后の父許廣漢、及び宣帝の祖母史良娣の姪史高。
【三四】鐘磬。共に樂器の名。

【三五】笙竽。共に笛の類。
【三六】楊子。漢の楊雄、字は子雲、大玄經を著す。
【三七】玄虛。虛無の大道。
【三八】宣尼。孔子なり。
【三九】相如。漢の司馬相如。
【四〇】悠悠。久遠なり。
【四一】八區。八方なり。
【四二】皓天。大天なり。
【四三】靈景。日景なり。神州は京師をいふ。

(四六)峩峩たる高門の內、(四七)藹藹たるは皆王侯なり。(四八)攀龍の客にあらざるよりは、何爲れぞ欻ち來り遊ばん。(四九)褐を被りて(五〇)閶闔を出で、高步して(五一)許由を追ふ。衣を千仞の岡に振ひ、足を萬里の流に濯ふ。

【大意】此詩は左太沖が貴族の勢力盛なるを以て、當時の士大夫競つて之に阿附し、榮位を得んとするを見、許由の跡に倣ひ、世塵を避けんと欲するを述ぶ。白日天上に輝き、光を帝都に垂る。王侯の邸宅高く雲間に聳ゆ。吾れ貴人に阿り名利を貪る者にあらず。何ぞ此處に來り遊ばんや。ただ褐を被りて閶闔門を出で、高く許由の跡を學び、衣を千仞の岡に振ひ、足を萬里の流に濯ひ、塵俗を一洗せんと欲す。

(五二)荊軻燕市に飮み、酒酣にして氣益〻震ふ。哀歌して漸離に和し、謂へらく傍人なきが若しと。壯士の節なしと雖も、世と亦倫を殊にす。(五三)高眄四海に(五四)邈たり。(五五)豪右何ぞ陳ぶるに足らん。貴者自ら貴ぶと雖も、之を視ること埃塵の若し。賤者自ら賤むと雖も、之を重ずること(五六)千鈞の若し。

【四四】紫宮。天子の宮殿。
【四五】飛宇。高き軒。
【四六】峩峩。高き貌。
【四七】藹藹。雲氣の棚引ける貌。
【四八】攀龍の客。龍鱗を攀づること、貴顯の人に取入り從ふに喩ふ。
【四九】褐。布衣なり。
【五〇】閶闔。洛陽の西門の名。
【五一】許由。古の隱者の名。
【五二】荊軻。燕の人。燕の太子丹の爲に秦王を殺さんとした る人なり。史記に荊軻高漸離ト燕市ニ飮ミ、酒酣ナレバ高漸離筑ヲ撃チ、荊軻和シテ市中ニ歌ヒテ相樂ム、已ニシテ相泣ク、旁人ナキガ若シとあり。
【五三】高眄。高く構へて世俗の人を蔑視すること。
【五四】邈。遠き貌。
【五五】豪右。豪貴の人。
【五六】千鈞。三十斤を一鈞といふ。

【大意】荊軻は匹夫の勇にして稱するに足らずと雖も、よく四海を蔑視し勢位を輕んじ、有德を重んじたるを多とし、當時小人の高位に在る者を諷したる詩なり。荊軻は燕市に飲み、酒酣なるに至れば、氣ますます震ひ、高漸離の擊筑（筑は樂器の名）に和して、悲歌慷慨し、傍人なきが如し。彼は秦王を刺さんとして果さず、壯士たるの氣力なしと雖も、尙ほ世の俗物と類を同うせず、高く構へて四海を睥睨せり。之に比すれば、今の顯貴の人の如きは、言ふに足らざるなり。貴者は自ら貴ぶと雖も、彼は之を視ること塵芥の如く、賤者は自ら賤むと雖も、彼は之を視ること千鈞の如し。勢位を度外に置きて德義を貴びたるは、誠に多とするに足る。

(五七)主父は宦して達せず、骨肉も還つて相薄んず。(五八)買臣は樵采に困み、(五九)伉儷宅に安んせず。(六〇)陳平は產業なく、歸來(六一)負郭に翳る。(六二)長卿は成都に還り、(六三)壁立して何ぞ(六四)寥廓たる。四賢豈偉ならざらんや。(六五)遺烈篇籍に光る。其の未だ時に遇はざるに當りては、憂溝壑に塡つるに在り。英雄(六六)迍邅あり、由來古昔よりす。何の世か奇才なからん、之を遺てて

【五七】主父。主父偃なり、漢の人。宦は仕官すること。
【五八】買臣。朱買臣なり。漢の人。樵采は薪を採ること。
【五九】伉儷。妻なり。
【六〇】陳平。漢の功臣なり。產業は資產職業なり。
【六一】負郭。城郭外の地、卽ち郊外なり。
【六二】長卿。司馬相如なり。成都は蜀の都なり。
【六三】壁立。家に物なく四方の壁のみ立つこと。
【六四】寥廓。空虛なり。
【六五】遺烈。遺業といふが如し。
【六六】迍邅。志を得ずして困苦すること。

草澤に在り。

【大意】主父偃は仕官して榮達する能はず、骨肉の親も之を侮る。朱買臣は採薪を業とし、妻之を恥ぢて去る。陳平は資産なく郭外に窮居す。相如は成都に還り家貧にして唯四壁のみ立つ。然も此四賢終に偉業を成し、遺烈今に至るまで史上に輝けり。其の未だ時に遇はざるや、路傍に横死せんばかりなり。英雄と雖も不遇の時あるは、古來免れざる所なり。何れの世か英才なからん。之を遺てて草澤に置くは、誠に惜むべきなり。

（六七）習習たる籠中の鳥、翮を擧げて四隅に觸る。（六八）落落たる窮巷の士、影を抱いて空廬を守る。門を出づるも通路なく、（六九）枳棘中塗に塞がる。計策棄てて収められず、（七〇）塊たること枯池の魚の若し。外に望めども寸祿なく、内に顧れども（七一）斗儲なし。親戚還つて相蔑し、朋友日夜に疎し。蘇秦北に游說し、李斯西に上書す。俛仰榮華を生ぜしも、（七二）咄嗟に復た彫枯す。河に飲みて腹に滿つるを期し、足るを貴びて餘を願はず。林に巣ひて一枝に栖む。達士の模となすべし。

【大意】此詩は貧賤に安んせざる者の、終に禍に罹るを慨するなり。寂寞たる窮巷の士の、影を抱いて虚室に在るは、恰も籠中の鳥の、翼を擧げて四隅に觸るるが如し。榮進の道なく、讒佞に妨げ

【六七】習習。屢飛ぶ貌。
【六八】落落。疎寂の貌。
【六九】枳棘。いばら、讒佞に喩ふ。中塗は中途なり。
【七〇】塊。獨居の貌。
【七一】斗儲。一斗の貯蓄。
【七二】咄嗟。驚嘆なり。

られ、計策用ひられず、塊然として獨居すること涸池の魚の如し。外に寸祿なく內に斗儲なく、親戚朋友も棄てて顧みず。彼の蘇秦は北燕に遊說して六國の宰相となり、李斯は西秦に上書して遂に秦相となり。忽ちにして榮華を極めしも、又忽ちにして凋衰せり。莊子曰く鷦鷯林に巣ふも一枝に過ぎず。偃鼠河に飲むも滿腹に過ぎずと。要は足るを知るを貴ぶ。是れ達士の模楷となすべきなり。

（二）

史を詠ぜし詩　　（一）張景陽

昔在（二）西京の時、朝野歡娛多し。（三）藹藹たる（四）東都門、羣公（五）二疎を祖す。（六）朱軒金城に曜き、（七）供帳して長衢に臨む。達人止足を知り、榮を遺て忽ち無きが如し。（八）簪を抽いて朝衣を解き、髮を散じて（九）海隅に歸る。行人爲に涕を隕す。賢なるかな此丈夫。金を揮つて當年を樂み、歲暮れて儲を留めず。顧みて四座の賓に謂ふ、

【一】張景陽。張協、字は景陽、載の弟なり。晉の人。
【二】西京。西漢即ち前漢をいふ。
【三】藹藹。雲の棚引ける貌。
【四】東都門。長安の東門なり。
【五】二疎。疎廣太子大傅たり、年兄の子受亦太子家令たり。年老いたるを以て位を辭して故郷に歸老す。祖は送別の宴なり。
【六】朱軒。朱塗の車。公卿の車なり。金城は長安城なり。
【七】供帳。帳帷を張りて宴席を設くること。
【八】簪。冠を止むる笄、官を辭することを簪を抽くといふ。
【九】海隅。二疎は東海の人なり、故に云ふ。

多財愚を累はすをなすと。清風萬代に激し、名天壤と倶なり。(一〇)咄此の蟬冕の客、君が紳に宜しく書せらるべし。

【大意】張協祿位を貪る者の衆きを見、此詩を作りて之を刺れるなり。漢の盛時に當り、朝野ともに娛樂多し。此時二疏官を退いて去らんとす。公卿東都門外に供帳して之を送る。夫れ達人は止足を知る。敢て榮華に戀戀たらず。一朝位を辭して鄕里に歸る。行路の人皆二疏の賢なるを稱せり。既に鄕里に歸るや、恩賜の金を散じて、親戚鄕黨と樂を盡し、年老いて亦一錢の儲を留めず。四座の客を顧みて曰く、子孫若し愚にして財多ければ過を增すと。淸廉の風萬世の下に激し、其名天地と共に傳はる。ああ今の貴顯の人、宜しく之を其紳に書して銘記すべきなり。

【一〇】咄。嘆なり。蟬冕とは貴顯の人をいふ。

覽古の詩

(一)盧子諒

趙氏(二)和璧あり、天下傳へざるはなし。秦人來りて市はんことを求む。厥價徒に空言。之に與ふれば將に賣られんとし、與へずんば恐くは患を致さん。才を簡んで(三)行李に備へ、國命を全から

【一】盧子諒。名は諶、字は子諒、晉の范陽の人。
【二】和璧。楚の和氏の玉。
【三】行李。使者なり。

しめんとを圖る。(四)藺生下位に在り、(五)繆子其賢を稱す。辭を奉じて馳せて境を出で、(六)軾に伏して徑に關に入る。秦王殿に(七)御して坐し、趙使(八)節を擁して前む。袂を揮つて金柱を睨み、身と玉と倶に捐てんと要す。連城既に僞り往き、(九)荊玉亦眞に還る。爰に(一〇)澠池の會に在り、(一一)二主劬く歡を交ふ。(一二)昭襄力を負まんと欲し、相如其端を折く。眥血下りて襟を霑し、怒髮上りて冠を衝く。(一三)西缶終に雙び擊ち、(一四)東瑟隻り彈ぜず。生を捨つる豈易からずや、死に處するは誠に獨り難し。(一五)章臺の顚に(一六)稜威して、(一七)彊禦亦干さず。節を邯鄲の中に屈し、首を俛れて軒を廻らすを忍ぶ。(一八)廉公何爲る者ぞ、荊を負ひて厥の愆を謝す。智勇當世に冠たり。(一九)弛張我をして歎ぜしむ。

【大意】趙の惠文王、楚の和氏の璧を得たり。此璧や天下の共に傳へて寶とする所なり。秦の昭王之を聞き、十五城を以て璧に易へんことを請ふ。然も空言にして實は城を與へんことを欲せざるな

【四】藺生。藺相如なり。
【五】繆子。趙の宦者令繆賢なり。藺相如は繆賢の舍人なり。
【六】軾。車上の横木。
【七】御。進なり。
【八】節。使者のシルシなり。
【九】荊玉。荊は楚なり、楚の和氏の玉。
【一〇】澠池。地名。
【一一】二主。趙王と秦王。
【一二】昭襄。秦王なり。
【一三】西缶。秦は西にあり、澠池の會に秦王趙王の請を納れて缶を擊つ。故に西缶といふ。缶は瓦器。
【一四】東瑟。趙は東に在り、趙王の瑟を彈ぜしこと。
【一五】章臺。秦の宮殿の名。
【一六】稜威。勢を振ふこと。
【一七】彊禦。强秦を指す。
【一八】廉公。趙將廉頗なり。
【一九】弛張。廉頗に下るは弛なり、秦王を折くは張なり。

り。趙王以爲へらく、璧を與へなば欺いて取られんのみ、與へずんば强秦の來寇を被らんと。乃ち賢才を選んで使者となし、以て國命を全うせんとす。時に藺相如尙ほ下位に在り。然も宦者令繆賢其賢を稱す。以て其の人となりを知るに足る。相如因つて趙王の辭命を奉じて、西のかた秦に入る。秦王章臺に出御し、相如節を擁して秦王に見え璧を奉る。然れども秦王の城を償ふ意なきを觀破し、乃ち欺きて璧を取り、柱を睨んで却立し、身玉と俱に碎けんと欲す。かくて玉を完うして還るを得たり。秦王趙王と澠池に會して交歡するや、秦王暴力を以て趙王を凌がんとす。相如輙ち其端を折き、眥裂けて血出で髮立つて冠を衝く。趙王秦王の請を納れて瑟を鼓するや、秦王亦趙王の請を納れて缶を擊つ。それ生を捨てて死するは易く、死に處するは誠に難し。相如の威を章臺に奮ふや、暴秦も之を屈する能はず。然も相如よく廉頗に屈し、邯鄲（趙都）市中、廉頗を見れば車を引いて避け匿る。廉頗相如の國家の急を先にして私讎を後にするの言を聞くに及び、肉袒して荆を負ひ、相如の門に至りて罪を謝せり。ああ相如の如きは智勇當世に冠たりといふべし。其の一張一弛誠に贊歎すべきなり。

(二)張子房の詩　謝宣遠

【二】張子房。張良、字は子房、漢の高祖を輔けて大功あり。――晉の末、宋の高祖北伐して張良の廟の破るるを見、乃ち之

(二)王風哀んで以て思ふ。周道(三)蕩として章なし。(四)洛を卜して(五)隆替し易く、亂を興して亡びざるはなし。(六)力政九鼎を呑み、(七)苛慝三殤よりも綦なり。肩を息ひて民思を纏び、靈鑒(八)朱光に集る。(九)伊人代工に感じ、聿に來りて(一〇)興王を扶く。(一一)婉婉たる模中の畫、輝輝として天業昌なり。(一二)鴻門薄蝕を銷し、(一三)垓下攙搶を隕す。(一四)仇に爵して(一五)蕭宰を建て、都を定めて(一六)儲皇を護る。肇め允に(一七)幽叟に契

を修め、諸人に命じて詩を作らしむ。宣遠時に豫章太守たり。遂に以て和す。此詩是れなり。

【二】王風。毛詩の序に關雎麟趾ノ化ハ王者ノ風ナリとあり、又亡國ノ音ハ哀ンデ以テ思フとあり。

【三】蕩。滅盡の貌。

【四】洛。周の都。

【五】隆替。興廢なり。

【六】力政。秦をいふ。暴力を以て政をなせばなり。九鼎は王者の寶器。

【七】苛慝。秦の虐政をいふ。禮記に孔子泰山ヲ過グ、婦人アリ墓ニ哭ス、子貢ヲシテ之ヲ問ハシム、曰ク吾ガ舅虎ニ死シ、吾ガ夫又死シ、今吾ガ子又死スト、曰ク何ゾ去ラザルヤト、曰ク苛政ナシト、孔子曰ク小子之ヲ志セ、苛政ハ虎ヨリモ猛シトとあり。舅、夫、子を併せて三殤となす。

【八】朱光。漢は火德なり。故に朱光といふ。

【九】伊人。張良を指す。代工は天工に代るなり。書經に天工人ソレ之ニ代ルとあり。

【一〇】興王。漢の高祖を指す。

【一一】婉婉。和順の貌。模は幕に同じ。

【一二】鴻門。地名、漢の高祖と項羽と此地に會す。薄蝕は項羽に喩ふ。

【一三】垓下。地名、高祖と項羽と此地に戰ふ。攙搶は彗星、項羽に喩ふ。

【一四】仇。雍齒を指す。高祖洛陽宮に居る。諸將功を爭ひて定まらず。高祖以て張良に問ふ。良曰く、陛下ともに仇となる所の者を誰となすと。曰く、雍齒也と。張良曰く請ふ先づ雍齒を封ぜよと。高祖其計に從ふ。諸將之を聞いて曰く、雍齒すら侯たり、吾が屬患なしと。

【一五】蕭宰。蕭何を薦めて宰相となせしこと。

【一六】儲皇。皇太子なり。

【一七】幽叟。下邳圯上の老人。

り、翻り飛んで（一八）帝郷を指す。（一九）惠心千祀に奮ひ、（二〇）清埃無疆に播す。（二一）神武三正を睦げ、裁成（二二）八荒に被る。（二三）明兩河陰を燭し、（二四）慶霄汾陽を薄んず。（二五）鑾旍頽寢を歷、（二六）像を飾りて嘉嘗を薦む。聖心豈徒に甄れんや。惟れ德忘るるなきに在り。逝く者如し作すべくんば、揆る（二七）子が周行を慕はんことを。（二八）濟濟たる屬車の士、（二九）粲粲たる翰墨の場。（三〇）瞽夫盛觀に違ひ、竦踊して一方に企つ。四達平直なりと雖も、（三一）蹇步良なきを愧づ。和を餐ひて微遠を忘れ、首を延べて太康を詠ず。

【大意】夫れ亡國の音は哀んで以て思ふ。周の將に亡びんとするや、蕩然として綱紀文章なし。初め周公の洛を卜して之に都するや、以爲へらく德あれば以て盛なり易く、德なければ以て廢し易しと。然も復た亂道を興すに至りては、豈亡びざるを得んや。故に秦之に代りて天子となり。然も其虐政猛虎よりも甚しく、百姓忍ぶ能は

【一八】帝郷。天帝の居處。
【一九】惠心。明慧の心。千祀は千年なり。
【二〇】清埃。清風といふが如し。
【二一】神武。宋の高祖をいふ。三政は天地人の政。
【二二】八荒。八方なり。
【二三】明兩。宋の高祖に喩ふ。河陰は舜の居りし處。
【二四】慶霄。慶雲なり。宋の高祖に喩ふ。汾陽は堯の居りし處。
【二五】鑾旍。車駕の旌旗なり。頽寢は張良の廟の頽毀するをいふ。
【二六】嘉嘗。祭祀なり。
【二七】子。張良を指す。周行は周の列位なり。周を以て宋に喩ふ。
【二八】濟濟。美盛の貌。屬車は後車なり、宋の高祖の從者の車。
【二九】粲粲。盛なる貌。翰墨は文章なり。
【三〇】瞽夫。盲人なり、宣遠自ら謂ふ。
【三一】蹇步。跛行なり。

ず。重擔を卸して其肩を息めんことを思ふ。天乃ち鑒を漢高に降し、秦に代りて天子たらしめんとす。張良立つて天工に代り、來りて漢高を扶け、策を帷幄の中に運らし、帝業をして昌盛ならしめ、鴻門に垓下に能く項羽の害を免れしめ、漢高の仇たる雍齒を封じて、諸將の心を安んじ、蕭何を薦めて宰相となし、婁敬の說を贊して都を長安に奠め、廢立の非を聲らして太子を護り、嘗て下邳の圯上に老人に契り、功成りて世を避けて仙に歸す。慧心を以て漢の爲に謀り、よく千載の上に奮ひ、清風無窮の後代に傳はる。ああ偉なるかな良や。我が高祖三正の道を躬親し、裁制して治を成し、德八方に被り、遠く堯舜に過ぐ。たまたま張良の廟を過ぎ、その頹敗せるを見、その像を飾りて祭祀を行はしむ。高祖の意豈徒に表れんや。蓋し祖德を忘れざればなり。(宋の高祖は漢の後なり。)死者張良若し生くべくんば、必ず當に我が宋に仕へんことを思ふべし。從屬の士は皆文筆の傑、祭祀に列して各〻祠章を作れり。予もと盲人と同じく、此盛儀に與るを得ず、天の一方(豫章)に在りて足を企てて遠望するのみ。天下道あり衢路平直なれども、跛にして遠行する能はず。ただ和氣を餐ふに由りて、身の微賤を忘れ、目を擧げ首を延べて、太康の道を詠ずるのみ。

(二)秋胡の詩　顏延年

【二】列女傳に魯ノ秋胡潔婦ハ魯ノ秋胡子ノ妻ナリ、秋胡子――既ニ之ヲ納レ、五日ニシテ去ツテ陳ニ宦ス、五年ニシテ乃

(二)椅梧高鳳に傾き、寒谷(三)鳴律を待つ。影響豈懷はざらんや、遠きより每に相匹す。(四)婉たる彼の幽閑の女、君子の室に嬪となり、峻節秋霜を貫き、明豔朝日に侔し。(五)嘉運既に我に從ふ。欣願此より畢らん。其一

【大意】椅梧の樹は枝を傾けて鳳の來り棲まんことを待ち、寒冷の谷は人の來りて律を吹かんことを待つ。猶ほ影の形に隨ひ、響の聲に應ずるが如し。夫婦の儀亦此の如し。遠きより來りて相匹す。婉美柔順なる秋胡の妻秋胡に嫁して其妻となり、志節秋霜の厲なるが如く。明豔朝日の美なるが如し。自ら以爲へらく、好會既に遂ぐ。吾が願足れりと。

(六)燕居して未だ好するに及ばざるに、(七)良人顧つて違るあり。(八)巾を千里の外に脫ぎ、(九)綬を結んで

ヲ歸ル、未ダ其家ニ至ラズ、路傍ニ美婦人アリ桑ヲ採ルヲ見ル、秋胡子之ヲ悅ビ、車ヲ下リテ謂ッテ曰ク、今吾金アリ、願クハ以テ夫人ニ與ヘント、婦人曰ク、噫妾桑ヲ採リ二親ニ奉ズ、人ノ金ヲ願ハズト、秋胡子遂ニ去ル、歸リテ家ニ至リ、金ヲ奉ジテ其母ニ遺ル、其母人ヲシテ其婦ヲ呼バシム、婦至ル、乃チ嚮ノ桑ヲ採リシ者ナリ、秋胡子之ヲ見テ慙ヅ、婦曰ク、束髮シテ身ヲ修メ、親ヲ辭シ往キテ仕フルコト五年ニシテ還ル、當ニ親戚ヲ見ルベシ、今ヤ乃チ路傍ノ婦人ヲ悅ビ、子ノ裝ヲ下シ金ヲ以テ之ニ與ヘントス、是レ母ヲ忘ルルナリ不孝ナリ、妾不孝ノ人ヲ見ルニ忍ビズト、遂ニ去ツテ走リ、自ラ河ニ投ジテ死ス。

【二】椅梧。木の名。鳳凰此木に棲む。

【三】鳴律。鄒衍燕に在り、谷あり寒くして五穀を生ぜず、鄒子律を吹けば溫至りて黍を生ず。

【四】婉。美なる貌。幽閑は柔順の貌。

【五】嘉運。好運、好會といふが如し。

【六】燕居。安居なり。好は歡なり。

【七】良人。夫をいふ。

【八】巾。處士の服する所なり。

【九】綬。印綬なり。仕ふる者の佩ぶる所なり。

（一〇）王畿に登る。徒を戒ること（一一）昧旦に在り、左右來りて相依る。車を驅りて郊郭を出で、行路正に（一二）威遲たり。存しては久離別をなし、沒しては長不歸をなさん。　其二

【大意】　嫁して未だ好歡するに及ばざるに、忽ち夫と相別るるに至る。夫は千里の王畿に往き、仕宦せんとし、未明に從徒を戒め左右相依りて行き、車を驅りて遙に去る。因つて悲んで自ら以爲へらく、生死復た相見るを得ざるべしと。

嗟（一三）余行役を怨む。三たび陟りて晨暮を窮む。駕を嚴めて風寒を越え、鞍を解いて霜露を犯す。（一四）原隰悲涼多く、（一五）迴飇高樹を卷く。離獸荒蹊に起り、驚鳥縱横に去る。悲しいかな游宦の子、此の山川の路に勞る。　其三

【大意】　ああ余自ら行役の苦を怨む。屢〻險路を登りて朝夕を窮め、風霜を犯して進めば、平野迴風、離獸驚鳥、皆心目を傷ましむ。悲しいかな游宦の身は山川の路に疲勞せざるを得ず。

超遙として行人遠く、（一六）宛轉として年運徂く。（一七）良時此別をなし。日月方に除るに向とす。孰か知らん寒暑積るを、（一八）僶俛して榮枯を見る。歲暮（一九）空房に臨めば、涼風坐隅に起る。（二〇）寢興日已に寒く、

【一〇】王畿。陳は王者の起りし地なり。故にいふ。
【一一】昧旦。未明なり。
【一二】威遲。遠きを歷る貌。
【一三】余。秋胡の自稱。
【一四】原隰。高原及び低地。
【一五】迴飇。迴風なり。
【一六】宛轉。環る貌。
【一七】良時。始めて嫁ぎし時。
【一八】僶俛。須臾といふが如し。
【一九】空房。空閨なり。
【二〇】寢興。起臥なり。

白露(二一)庭蕪に生ず。　其四

【大意】夫既に去り、歳月忽ち移り、今や將に歳暮に垂とす。焉んぞ知らん暑往き寒來り、春榮去りて忽ち秋枯に及ばんとは。今や空閨風寒く白露庭草に繁し。

勤役(二二)歸願に從ひ、(二三)反路山河に遵ふ。昔辭せしとき秋未だ(二四)素せず、今や歳載ち華く。(二五)蠶月時暇を觀、桑野多く經過す。佳人務むる所に從ひ、(二六)窈窕として(二七)高柯を援く。(二八)傾城誰か顧みざらん、(二九)節を弭めて(三〇)中阿に停る。　其五

【大意】秋胡は勤役の功空しからず、歸願を聽され、山河を越えて歸鄉の途に就く。昔鄉を去りし時は、秋葉未だ落ちざりしも、今や草木皆春花を著く。時恰も蠶月にして、屢桑野の間を經過す。一美人あり高枝を引きて桑を採るを見る。其容姿極めて美なり。秋胡乃ち駕を駐めて之を觀る。

年往きて誠に思ひ勞するも、路遠くして(三一)音形闊し。(三二)五載の別をなす

【二一】庭蕪。庭草なり。
【二二】歸願。鄉に歸らんとの願。
【二三】反路。歸路なり。
【二四】素。木葉の落つること。
【二五】蠶月。養蠶の月。時暇は丁度其時に當れる休暇。
【二六】窈窕。美なる貌。
【二七】高柯。高き枝。
【二八】傾城。美人をいふ。李延年の歌に北方ニ佳人アリ、絕世ニシテ獨立ス、一顧スレバ人城ヲ傾ケ、再顧スレバ人國ヲ傾クとあるに本づく。
【二九】節。客使の旗印なり。
【三〇】中阿。丘陵の中。
【三一】音形云云。音信も通ぜず、顏も見ざりしこと。
【三二】五載。五年なり。

と雖も、相與に平生に昧し。車を捨てて往路に遵ひ、(三三)鳧藻して(三四)目成を馳す。(三五)南金豈重からざらんや、聊か自意の輕んずる所。義心(三六)苦調多し、密に金玉の聲に比す。

其六

【大意】秋胡、妻を思はざるにあらざれども、遠く隔りて音信を通ずるを得ず、又顏容に接するを得ず。況んや五歲相見ざれば、美人の吾が妻なるを識る由なし。乃ち車を下りて美人に近づき、目を以て情を送り、因つて其金を與へんとす。美人義を執り固辭して受けず。其聲金玉の如し。

高節久しく淹り難し。(三七)朅來して空しく復た辭す。(三八)遲遲として前途盡き、(三九)依依として門基に造る。堂に上りて(四〇)嘉慶を拜し、室に入りて何に之けると問ふ。日暮行き采りて歸る。物色(四一)桑楡の時。美人昏を望んで至り、前に相持せしを慙ぢ歎く。　其七

【大意】美人の節義既に高く、久しく留るべからず。秋胡乃ち辭し去りて我が家に至り、先づ母を拜し次に妻の何處に往けるやを問ふ。母答ふらく、行きて桑を採る。日暮れなば歸り來らんと。妻

【三三】鳧藻。鳧の水草を得たるが如く喜ぶこと。
【三四】目成。目を以て情を送ること。
【三五】南金、南國に產する良き黃金。錢をいふ。
【三六】苦調、固く辭すること。
【三七】朅來。去つて來るなり。
【三八】遲遲。歩みの遲きなり、美人を後に殘したれば進むこと速かならざるなり。
【三九】依依。離るるに忍びざる貌。
【四〇】嘉慶。母の稱。
【四一】桑楡。日の暮るる頃。

晩に歸り夫と相見るや、嚮に桑間に問語せるを慙ぢ歎けり。

懷あり誰か能く已まん。聊か用て苦難を申ぶ。離居年載を殊にし、一別河關を阻つ。春來るも時に豫むなく、秋至れば恆に早く寒し。(四二)明發愁心を動かし、閨中起つて長歎す。慘悽して歲方に晏れ、日は落つ(四三)游子の顏。其八

【大意】妻の胸中感慨に滿ち、自ら抑ふる能はず。因つて聊か其苦衷を述べて曰く、別後年改まり道遠く、春來るも樂しからず、秋至れば獨り先づ知る。愁心胸に盈ちて、明旦まで寐ねられず。起つて閨中に長歎せり。殊に情の最も悲しきは、歲將に暮れ日將に落ちんとする時に在り。此時愈ゝ游子の顏を思へりと。

(四四)高張は絕絃を生じ、(四五)聲急なるは調に由りて起る。昔(四六)光塵を枉げしより、言を結んで終始を固うす。如何ぞ久しく別をなし、百行諸を己に愆る。君子明義を失ふ。誰と偕にか齒を沒へん。彼の(四七)行露の詩に愧づ。甘んじて長川の汜に之かん。其九

【大意】妻尙ほ語を續けて曰く、吾は節を立て死に就かんことを期す。吾が言の急切なるは、恨の

【四二】明發。早朝なり。
【四三】游子。夫を指して言ふ。
【四四】高張。琴の絃を緊張すること。あまり緊しく絃を張れば絃絶つとの意にて節を立てて死するに喩ふ。
【四五】聲急云云。詞の切なるは恨の深きに由るに喩ふ。
【四六】光塵。己の娶られしを謙して言ふ。
【四七】行露。詩經の篇の名。貞女の事を歌へる詩なり。

深きが故なり。初め吾の嫁するや、終始相渝らじと約せり。如何ぞ久しく別れて歸らざる。夫れ孝は百行の本なり。母を措きて路傍の婦人に戲る。これ孝なきなり。卿實に之をなせり。卿既に道義を失へり。吾何ぞ偕に年を盡すを得ん。吾實に行露の詩に愧づるあり。甘んじて長川に投じて死する所以なりと。

(一)五君詠五首　顏延年

(二)阮歩兵

阮公迹を淪むと雖も、識密にして鑒亦洞し。沈醉照を埋むるに似て、辭を寓すること諷を託するに類たり。長嘯人を懷ふが若く、禮を越えて自ら衆を驚かす。物故より論ずべからず、途窮りて能く慟むなからんや。

【大意】阮公世を遯れたりと雖も、人事を鑒識すること頗る深く、沈醉して觀照力なきが如きも、能く辭章を作りて世を諷し、長嘯して達人を慕ふが如く、又禮儀を超越して世俗を驚かせり。世事既に論ずるに足らざれば、窮途に慟哭せるも怪むに足らず。

【一】五君詠。延年歩兵を領す。酒を好んで疎誕なり。劉諶彭城王義康に言ひ、出して永嘉太守となす。延年甚だ怨憤し、乃ち五君詠を作り以て竹林七賢を述ぶ。山濤王戎貴顯を以て斥けらる。五首中自況の語多し。

【二】阮歩兵。名は籍。歩兵校尉たり。

(三)嵇中散

中散世に偶せず、本自ら霞を餐ふの人。(四)形解けて默仙を驗し、論を吐いて凝神を知る。俗に立ちては(五)流議に迕ひ、仙を尋ねては(六)隱淪に洽し。(七)鸞翮時に鎩がるるあり、(八)龍性誰か能く馴さん。

【大意】嵇康の世に合はざるは、原來仙質あればなり。その形解は以て仙去せるを證すべく、その養生論は以て凝神の道を得たるを知るべし。世に在りては俗論に逆ひ、仙を尋ねては洽く神人と交る。夫れ達人は世俗の害を蒙ること多し。康の如き者豈亦世俗の容るる所とならんや。

(九)劉參軍

劉伶善く關を閉ぢ、情を懷いて聞見を滅す。鼓鐘も歡ばすに足らず、榮色も豈能く眩せんや。(一〇)精を韜んで日に沈飲す。誰か荒宴にあらざるを知らん。(一一)頌酒短章なりと雖も、深衷此より見る。

【大意】劉伶は情を閉ぢて發せず、耳目の欲を滅すること、猶ほ關を閉ぢて無事なるが如し。されば鼓鐘の樂も以て歡ばすに足らず、美色も以て眩惑する能はず。精明を韜んで日日沈飲を事とし、

【三】嵇中散。名は康、中散大夫たり。
【四】形解。身死し仙去すること。
【五】流議。流俗の議論。
【六】隱淪。古の神人の名。
【七】鸞翮。鳳翼なり、達人に喩ふ。
【八】龍性。嵇康に喩ふ。
【九】劉參軍。名は伶、建威參軍たり。
【一〇】精。明なり。
【一一】頌酒。劉伶酒德頌を作る。

人その眞意を解せず。ただ酒德頌の一篇、よく其深意を見るに足る。

(二二)阮始平

(二三)仲容は靑雲の器、實に生民の秀を稟く。音に達すること何を用てか深き、微を識ること(二四)金奏に在り。(二五)郭奕已に心醉し、(二六)山公虛しく覯るにあらず。屢〻薦むれども官に入らず、(二七)一麾乃ち出でて守たり。

【大意】阮咸は本高遠の士にして、天地の秀氣を稟けて生れ、特に音律に通ず。郭奕已に之に敬服し、山濤亦其の偉器なるを知り、屢〻君に薦めたれども用ひられず。竟に荀勗の爲に斥けられて、始平太守たりしは惜むべし。

(二八)向常侍

向秀淡薄に甘んじ、深心(二九)毫素に託す。道を探りて淵玄を好み、書を觀て章句を鄙む。(三〇)呂に交りて既に(三一)鴻軒し、(三二)嵇を攀ぢて亦(三三)鳳擧す。(三四)河裏の游に(三五)流連し、山陽の賦に(三六)惻愴す。

【大意】向秀は貧に安んじ、心を文墨に寄せ、道を探りて深邃を窮め、

【二二】阮始平。名は咸、籍の兄の子なり、官始平太守に至る。
【二三】仲容。阮咸の字。靑雲は高遠なり。
【二四】金奏。音樂なり。
【二五】郭奕。人名。
【二六】山公。人名、山濤なり。
【二七】一麾。一たび斥けらるること。
【二八】向常侍。名は秀、散騎常侍たり。
【二九】毫素。筆紙なり。
【三〇】呂。呂安なり。
【三一】鴻軒。鴻の如く飛ぶこと。
【三二】嵇。嵇康なり。
【三三】鳳擧。鳳凰の如く擧ること。
【三四】河裏。河內なり。
【三五】流連。涙を流すこと。
【三六】惻愴。悲傷なり。

人の章句を鄙んで自ら莊子に註す。其友呂安、嵆康の誅せらるるや、河内山陽の舊廬を經、笛を聽くに因つて思舊賦を作り、以て之を悲めり。

史を詠ぜし詩

鮑明遠

㈠五都財雄を矜り、㈡三川聲利を養ふ。百金市に死せず、明經高位あり。京城㈢十二衢、㈣飛甍各々鱗次す。㈤仕子華纓を彯し、遊客輕轡を竦ぐ。明星晨に未だ稀ならざるに、㈥軒蓋已に雲のごとく至る。㈦賓御紛として㈧颯沓し、鞍馬光地を照す。寒暑㈨一時に在り、繁華春に及んで媚ぶ。㈩君平獨り寂寞、身世兩ながら相棄つ。

【大意】漢の盛時に當り、五都三川皆財利の雄に誇り、或は百金の子の市に死せざるあり。（史記に陶朱公曰く、吾聞く千金の子は市に死せず云云とあり。）或は經術を脩めて高位を得るあり。長安市街には、高閣軒を竝べ、官吏は冠纓を飜し、遊客は肥馬を馳せ、夜未だ明けざるに、車馬雲の如く集り、繁華を一時に競ふ。ただ成都

【一】五都。雒陽、邯鄲、臨淄、宛、成都をいふ。
【二】三川。河、洛、伊をいふ。
【三】十二衢。西都賦に十二ノ通門ヲ立ツとあり。
【四】飛甍。高甍なり。鱗次は鱗の如く竝ぶこと。
【五】仕子。官人なり。華纓は冠の紐。
【六】軒蓋。車蓋なり。
【七】賓御。賓客と御者。
【八】颯沓。衆盛なり。
【九】一時。春を指す。
【一〇】君平。嚴君平なり。成都の卜者なり。

に一嚴君平あり。寂寞として孤居し、獨り世と相棄つ。ゆかしともゆかし。

(一)霍將軍の北伐を詠ぜし詩　(二)虞子陽

(三)旄を擁して漢將となり、(四)馬に汗して長城を出づ。長城は地勢險に、萬里雲と平なり。涼秋八九月、(五)虜騎幽幷に入り、(六)飛狐白日晩れ、(七)瀚海愁雲生ず。(八)羽書時に斷絶し、(九)刁斗晝夜驚く。(一〇)墉に乘りて寶劍を揮ひ、日を蔽ひて(一一)高旆を引く。(一二)雲屯七萃の士、(一三)魚麗六郡の兵、(一四)胡笳關下に思ひ、(一五)羌笛隴頭に鳴る。(一六)骨都先づ自ら讋れ、(一七)日逐次いで精を亡ふ。(一八)玉門

【一】霍將軍。漢の霍去病、驃騎將軍となり以て匈奴を破る。
【二】虞子陽。虞羲、字は子陽、梁の會稽の人。
【三】旄。旄旗なり。
【四】馬に汗す。馬汗を出して勞するなり。
【五】虜騎。匈奴の騎兵。幽幷は二郡の名。
【六】飛狐。代郡に在る城塞の名。
【七】瀚海。ゴビの沙漠をいふ。
【八】羽書。羽檄なり、兵を徵召する文書。
【九】刁斗。ドラなり、銅を以て作り、晝は飯を炊き、夜は撃ちて夜を警むるもの。
【一〇】墉。城墻なり。
【一一】高旆。高き旌。
【一二】雲屯。雲の如く集ること。七萃とは智力の士七等を聚むるなり。
【一三】魚麗。魚の列れるが如き陣形の名。六郡は金城、隴西、天水、安定、北地、上郡なり。
【一四】胡笳。匈奴の吹く笛。其聲悲し。
【一五】羌笛。匈奴の吹く笛。隴頭は隴山のほとり。
【一六】骨都。匈奴の侯の名。
【一七】日逐。匈奴の王の名。
【一八】玉門。匈奴の境に在る關の名。

斥候を罷め、(一九)甲第始めて修營す。位登りて(二〇)萬庾積み、功立ちて百行成る。天長く地自ら久しきも、人造(二一)虧盈あり。未だ(二二)激楚の樂を窮めざるに、已に高臺の傾くを見る。當に(二三)麟閣の上、(二四)千載雄名あらしむべし。

【大意】漢の霍將軍は馬を驅りて長城を越え、遙に匈奴を伐つ。時に匈奴の騎幽并二郡に入寇し、殺氣天地に充ち、道絶えて羽檄通せず、銅鑼晝夜に鳴る。將軍之を物ともせず、雲屯六郡の兵を指揮して城壁に登りて寶劍を揮ひ、敵旗を拔く。胡笳連りに鳴りて悲壯悽慘なりしかば、匈奴の王侯先づ膽落ちて降を乞ふ。是に於て玉門の警備始めて解くを得、將軍功を以て邸宅を賜はり、高位に登り厚祿を食むに至れり。ああ天地は長久なれども、人生には盛衰あり。將軍未だ歌舞の樂を窮めざるに、高臺早くも傾き、忽ち衰運に向ひぬ。霍將軍の如きは、宜しく麒麟閣上に其像を畫き、永く英名を後世に垂れしむべきなり。

【一九】甲第。邸宅なり。
【二〇】萬庾。庾は十六斗をいふ。
【二一】虧盈。盛衰といふが如し。
【二二】激楚。歌舞なり。
【二三】麟閣。前漢の宣帝の時、功臣の像を麒麟閣に畫くもの十一人、霍去病は與らず。
【二四】千載。千年なり。

百一

(一)百一の詩　(二)應璩

【一】百一。時事を譏切し、當事者或は百慮に一失あるを言ふ。
【二】應璩。字は休璉、魏の汝南の人、瑒の弟なり。

(三)下流には處るべからず。君子は厥初を愼む。名高宿め著れず。用て侵誣を受け易し。前者官を隳てて去る。人あり我が(四)閭に適く。田家有る所なし。醴を酌み枯魚を焚く。我に問ふ何の功德ありて、三たび(五)承明の廬に入る。(六)此土を占むる所、是を(七)仁智の居と謂ふ。文章國を經めず、(八)筐篋尺書なし。等を用て才學を稱せられ、往往歎譽せらるると。席を避け跪いて自ら陳ぶ。(九)賤子實に空虛なり。(一〇)宋人周客に遇ひ、慙愧して如ふ所なし。

【大意】人は下位に居るべからず、必ず其初を愼むべきなり。下位に居れば高名世に著れず、亦以て世の讒誣を被り易し。余嚮に官を罷めて去るや、人あり我が廬を訪ふ。田家人に饗すべき物なし。乃ち醴酒を酌み乾魚を供す。其人余に問うて曰く、足下何の功德ありて三たび承明廬に入れる。今居る所の地は是れ仁智の士の居るべき山水の勝地なり。足下の居るべき地にあらざるに似たり。且つ足下の文章は經國の用をなさず、足下の篋中諫諍の書なし。然も才學を以て世に稱せらるるは何故ぞやと。余因つて跪いて陳べて曰く、余は實に無能なり。妄に高位を竊み、心常に恥を抱けり。今足下の疑

【三】下流。下位といふが如し。
【四】閭。里門なり。
【五】承明。天子に謁し制を待つ處。璩初め侍中となり、又常侍となり、又侍中となる。故に三たび入るといふ。
【六】此土。璩の閭里をいふ。
【七】仁智。論語に智者ハ水ヲ樂ミ、仁者ハ山ヲ樂ムとあり。
【八】筐篋。本箱なり。尺書は諫諍の書。
【九】賤子。璩の謙辭なり。
【一〇】宋人。宋の愚人燕石を梧臺の側に得、之を藏して以て大寶となす。周客聞いて之を觀、笑つて曰く、此れただ燕石のみ、瓦甓と殊ならずと。

間に接し、宋人の周客に遇へるが如く。慚愧して身を容るるに地なしと。

遊仙

遊仙の詩

(一)何敬祖

青青たる陵上の松、(二)亭亭たる高山の栢。光色冬夏茂り、根柢凋落なし。(三)吉士貞心を懐き、(四)物を悟りて遠託を思ふ。志を(五)玄雲の際に揚げ、目を流して巖石を矚る。昔の(六)王子喬を羨み、道を友として(七)伊洛を發し、(八)迢遞として峻岳を陵ぎ、(九)連翩として飛鶴に御り、跡を抗げて萬里を遺る。豈生民の樂を戀はんや。長懷仙類を慕ひ、眇然として心(一〇)緜邈たり。

【大意】高山の松栢は常に青青として凋落することなし。余もと貞固の心を抱き、之を見て其間に任せんことを欲し、常に心を高雲に馳せ、目を巖石に屬し、王子喬に倣つて伊洛の間を發し、峻山を超え飛鶴に騎り、遠く萬里の上に登仙せんとす。固より人生の樂を希はず。一たび登

【一】何敬祖。何劭、字は敬祖。晉の陳國の人。
【二】亭亭。高き貌。
【三】吉士。美士なり。劭自ら謂ふ。
【四】物。松栢をいふ。
【五】玄雲。黒雲なり。
【六】王子喬。周の靈王の太子晉なり。好んで笙を吹き鳳鳴をなす。伊洛の間に遊ぶ。道人浮丘公携へて嵩高山に登る。因つて登仙す。
【七】伊洛。川の名。
【八】迢遞。遙なる貌。
【九】連翩。翻る貌。
【一〇】緜邈。遠き貌。

仙の樂を思へば、心洋洋として廣きを覺ゆ。

遊仙の詩七首

郭景純

(一)京華は游俠の窟、山林は隱遯の(二)棲なり。(三)朱門何ぞ榮とするに足らん。未だ(四)蓬萊に託するに若かず。源に臨んで清波を挹み、岡に陵りて(五)丹荑を掇る。(六)靈谿潛盤すべし。安んぞ(七)雲梯に登るを事とせん。(八)漆園に傲吏あり。(九)萊氏逸妻あり。進んでは則ち(一〇)龍見を保てども、退いては藩に觸るるの羝となる。風塵の外に高蹈し、長揖して(一一)夷齊に謝す。

【大意】帝都は遊俠の居るべき地にして、山林は隱者の住むべき地なり。朱門の富貴は何ぞ草野に隱るるの樂に如かん。清泉を挹み丹芝を食ひ、谿谷の間に盤遊すれば、復た臺閣を戀ふる心なし。漆園の傲吏、萊氏の逸妻は實に我が

【一】京華。帝都なり。
【二】棲。住處なり。
【三】朱門。貴人の邸宅。
【四】蓬萊。草深き山林。
【五】丹荑。丹芝とて延命の効ある草の嫩芽なり。
【六】靈谿。溪の名。荊州に在り。潛盤。潛行して樂しむこと。
【七】雲梯。高き梯、榮達に喩ふ。
【八】漆園。河南歸德府の南に在る地。傲吏は莊周を指す。楚王の聘に應ぜざりしを以てなり。
【九】萊氏。老萊子なり。逸妻は老萊子の妻をいふ。老萊子の楚王の聘に應ぜんとするを見て、逃げ去りたればなり。
【一〇】龍見。明主に遇ふこと。易經に見龍田ニアリ、大人ヲ見ルニヨロシとあり。
【一一】夷齊。伯夷叔齊なり。周の武王の殷の紂王を伐つを諫め、後周に仕ふるを恥ぢ、首陽山に隱れて餓死す。

意を得たり。夫れ仕官は進んで明主に遇ふべしと雖も、一たび斥けられなば、羝羊の角を垣に觸るが如き困窮に陷ることあり。如かず塵外に高蹈し、夷齊の如き小節を棄て、山林の間に逍遙せんには。

(一二)靑谿千餘仞、中に一道士あり。雲は梁棟の間に生じ、風は窓戶の裏より出づ。借問す此れ何誰ぞ、云ふ是れ(一三)鬼谷子と。迹を翹げて(一四)潁陽を企て、河に臨んで耳を洗はんことを思ふ。(一五)閶闔西南より來り、潛波(一六)渙として鱗起す。(一七)靈妃我を顧みて笑ひ、(一八)粲然として玉齒を啓く。(一九)蹇脩時に存せず。之を要ふるに將た誰をか使さん。

【大意】靑谿に道士の居あり、風雲窓戶の間に去來す。道士名を鬼谷子といふ。常に許由の跡を慕へり。風西南より至り水波一たび起るや、虙妃楚楚として至り、一顧一笑す。道士この仙女に會せんと欲すれども、良媒なきを如何せん。

(二〇)翡翠蘭苕に戲れ、容色更に相鮮なり。(二一)綠蘿高林に結び、(二二)蒙籠として一山を蓋ふ。中に(二三)冥寂の士あり、靜嘯して淸絃を撫し、情を放に

【一二】靑谿。山の名、荊州に在り。
【一三】鬼谷子。隱者の名。景純自ら比す。
【一四】潁陽。潁水の北。許由の居りし地。堯天下を許由に讓らんとす。許由其言を汚として河に臨んで其耳を洗へり。
【一五】閶闔。西南風をいふ。
【一六】渙。波の起る貌。鱗起は魚鱗の如く起ること。
【一七】靈妃。古の仙女宓妃なり。
【一八】粲然。笑ふ貌。
【一九】蹇脩。古の賢媒なり。
【二〇】翡翠。鳥の名。羽毛極めて美し。蘭苕は蘭莖なり。
【二一】綠蘿。ツルクサの名。
【二二】蒙籠。蔽ふ貌。
【二三】冥寂。幽默なり。

して霄外を淩ぎ、藥を嚼んで飛泉を挹む。(二四)赤松上游に臨み、鴻に駕して紫煙に乘り、左には(二五)浮丘の袖を挹り、右には(二六)洪崖の肩を拍つ。借問す(二七)蜉蝣の輩、寧んぞ(二八)龜鶴の年を知らん。

【大意】翡翠飛び綠蘿茂れる山中、一隱士あり。心を天外に馳せ、放に絃歌吟嘯し、常に赤松、浮丘、洪崖等の仙人と相伍して優遊せり。憐むべし世間短命の輩、何ぞ能く吾が長年を保つを得ん。

(二九)六龍安んぞ頓むべき、運流(三〇)代謝あり。時變人の思を感ぜしめ、已に秋にして復た夏を願ふ。(三一)淮海微禽を變ず。吾が生獨り化せず。(三二)丹谿に騰らんと欲すと雖も、(三三)雲螭我が駕にあらず。愧づらくは(三四)魯陽の德あり、日を廻らして(三五)三舍に向ふなきを。川に臨んで年の邁くを哀み、心を撫して獨り(三六)悲吒す。

【大意】此首は歲月逝き易く、仙を學ぶの志未だ酬いざるを嘆く。日月運行して止まざるも、之

【二四】赤松。古の仙人の名。上游は上流といふが如し。
【二五】浮丘。古の仙人の名。
【二六】洪崖。古の仙人の名。
【二七】蜉蝣。カゲロフ、朝に生れて夕に死する蟲の名。世人に比す。
【二八】龜鶴。共に長壽の物。仙人に比す。
【二九】六龍。日車を挽く龍。
【三〇】代謝。去來といふが如し。四時の變遷をいふ。
【三一】淮海。淮水と海。國語に趙簡子嘆ジテ曰ク、雀海ニ入リテ蛤トナリ、雉淮ニ入リテ蜃トナル、黿鼉魚鼈能ク化セザルハナシ、唯人ノミ能クセズ哀シイカナトとあり。
【三二】丹谿。仙人の居る處。
【三三】雲螭。龍なり。
【三四】魯陽。淮南子に魯陽公韓ト難ヲ構ヘ、戰酣ニシテ日暮ル、戈ヲ援イテ之ヲ麾ク、日之ガ爲ニ三舍ヲ返スとあり。
【三五】三舍。二十八宿の一宿を一舍とす。
【三六】悲吒。悲嘆なり。

を挽いて留むべからず。人をして徒に逝水の嘆を發せしむ。雀は海に入りて蛤と化し、雉は淮水に入りて蜃と化すれども、人は化して登仙する能はず。仙居に入らんとするも、雲螭の我を導くなし。我に魯陽の徳なきを以て、日輪を挽き廻す能はず。ただ逝水に臨んで歳月の移るを哀み、胸を打つて獨り自ら嘆息するのみ。

(三七)逸翮霄を排はんことを思ひ、(三八)迅足遠く遊ぶを羨む。(三九)清源增瀾なし。安んぞ(四〇)呑舟を運すを得ん。(四一)珪璋特り達すと雖も、(四二)明月闇に投じ難し。(四三)潛穎青陽を怨み、(四四)陵苕素秋を哀む。悲來りて(四五)丹心を惻ましめ、零涙(四六)纓に緣りて流る。

【大意】人仙質あれば必ず遠く天外に遊ばんことを願ふ。小水は呑舟の魚を容るる能はず。塵世は仙者を容るるに足らざればなり。珪璋明月の玉は重寶なりと雖も、暗夜に人に投ずれば人驚いて劍を按ず。今仙道を以て俗に示すも亦此の如し。世俗の仙を求むるを娯まずして、浮生の短きを怨むは、猶ほ潛處の草の春光に浴せざるを怨み、陵上の草の早く秋に遇ふを悲むが如し。我れ世俗の惑へるを悲み、涙流れて襟をうるほす。

【三七】逸翮。疾飛する鳥。
【三八】迅足。疾走する馬。
【三九】清源。水源なり。增瀾は層波なり。
【四〇】呑舟。大魚なり。
【四一】珪璋。玉なり。
【四二】明月。玉の名。
【四三】潛穎。潛隱の處に生ずる草木。青陽は春光なり。
【四四】陵苕。陵上に生ずる草。素秋は秋なり。
【四五】丹心。赤心なり。
【四六】纓。冠の紐。

（四七）雜縣魯門に寓し、風煖にして將に災をなさんとし、呑舟海底に涌き、高浪（四八）蓬萊に駕す。神仙雲を排して出で、但金銀の臺を見る。（四九）陵陽丹溜を挹み、（五〇）容成玉杯を揮ひ、（五一）姮娥妙音を揚げ、（五二）洪崖其頤を頷し、升降して長煙に隨ひ、飄飄として（五三）九垓に戲る。（五四）奇齡五龍に邁ぎ、千歲方に（五五）嬰孩なり。（五六）燕昭は靈氣なく、（五七）漢武は仙才にあらず。

【大意】此首は羣仙の樂を敍し、仙を學ぶ者の皆要領を得ざるを慨せるなり。海風高浪空を排し、大魚波間に躍り、蓬萊山上の雲氣を振蕩する時、山上の宮闕始めて分明にして、群仙の宴樂せる狀を望見し得べし。陵陽、容成は玉杯を揮ひて丹溜を酌み、姮娥善く歌ひ、洪崖其妙に感じて頻にうなづき、雲霧に乘りて九天に上下し、千歲を歷れども猶ほ嬰兒の如し。是れ皆仙道を修めて、その要領を得たればなり。之に比ぶれば、彼の燕昭、漢武の如きは、靈仙の才なしと謂ふべきなり。（燕昭、漢武、皆嘗て人を遣して海に入り、神仙の藥を求めしめたり。）

【四七】雜縣。鳥の名、爰居ともいふ。國語に爰居魯ノ東門ノ外ニ止ルコト三日、展禽曰ク、今玆海ソレ災アランカ、夫レ廣川ノ鳥獸ハ、恆ニ知リテ其災ヲ避ク、是歲ヤ海ニ大風多ク冬暖ナランとあり。

【四八】蓬萊。東海中にある三神山の一。其上に金銀の樓閣あり。

【四九】陵陽。仙人の名。丹溜は不老不死の藥。

【五〇】容成。仙人の名。

【五一】姮娥。仙女なり。

【五二】洪崖。仙人の名。

【五三】九垓。九天といふが如し。

【五四】奇齡。極めて稀れなる長壽。五龍は仙人の名。

【五五】嬰孩。小兒なり。

【五六】燕昭。燕の昭王。

【五七】漢武。漢の武帝。

（五八）晦朔循環の如く、月盈ちて已に復た魄し。（五九）蓐收西陸を淸め、（六〇）朱羲將に白に由らんとす。寒露陵苕を拂ひ、（六一）女蘿松栢を辭す。（六二）蕣榮朝を終へず、蜉蝣豈夕を見んや。（六三）圓丘に奇草あり。（六四）鍾山に靈液を出す。（六五）王孫八珍を列ね、（六六）安期五石を鍊る。（六七）當塗の人に（六八）長揖し、山林に去來するの客たらん。

【大意】此首も亦歲月の逝き易きを嘆じ、志を決して仙を學ばんとすることを述ぶ。日月速に過ぎて既に秋となり、寒露降り女蘿枯るるを見ては、人生の短きこと槿花の朝に榮えて夕に凋み、蜉蝣の朝に生れて夕に死するが如くなるを悲まざるを得ず。幸に圓丘に奇草あり、鍾山に靈藥あり。之を服すれば以て壽を延ぶべし。貴人は美食すれども死を免れず、安期先生は五石を鍊りて不死を得たり。ああ吾が志決せり。長く仕宦の念を絕ち、山林に去來して仙術を學ぶの人とならん。

【五八】晦朔。晦は三十日、朔は一日。
【五九】蓐收。七月の神。續漢書に日北陸ヲ行ク、之ヲ冬ト謂ヒ、西陸之ヲ秋ト謂フとあり。
【六〇】朱羲。日なり。白は月の通路、漢書に月ニ九行アリ、立秋秋分ニハ西ノカタ白道ニヨルとあり。
【六一】女蘿。ツルクサの名。
【六二】蕣榮。槿花なり。
【六三】圓丘。山の名。
【六四】鍾山。山の名。靈液は靈藥なり。
【六五】王孫。王公の子孫、貴公子といふが如し。八珍は美味なり。
【六六】安期。仙人の名。五石は丹砂、雄黃、白礬、石曾、青磁なり。之を鍊りて不老不死の藥を製す。
【六七】當塗。塗は途なり。仕途に在る人。
【六八】長揖。會釋して別れ去るなり。

招隱

(一)招隱の詩二首

左太沖

策を杖いて隱士を招ぬ。(二)荒塗古今に横る。巖穴(三)結構なく、丘中鳴琴あり。白雲陰岡に停まり、(四)丹葩陽林を曜す。石泉(五)瓊瑤を漱ぎ、(六)纖鱗或は浮沈す。必ずしも絲と竹とのみにあらず、山水清音あり。何事ぞ嘯歌を待たん。(七)灌木自ら悲吟す。秋菊(八)糇糧を兼ね、幽蘭重襟に間る。(九)躊躇して足力煩ふ。聊か吾が(一〇)簪を投せんと欲す。

【大意】古來世溷濁して道通ぜず。余之を厭ひ、山林に入りて隱士を尋ぬれば、山居結構の美なきも、鳴琴の耳に佳なるあり、白雲は北岡に去來し、紅花は南林を照し、泉ありて玉巖に注ぎ、小魚ありて此に浮沈し、絲竹嘯歌を借らずして、山林谿澗自然の妙樂を奏し、菊花は亦以て食ふべく、幽蘭は亦以て衣となすべし。世途に彷徨すれば、徒に足を勞するのみ。如かず官を退きて山林の遊をなさんには。

【一】招隱。世の溷濁に苦み、隱者を尋ねて共に交らんとする意を述ぶ。
【二】荒塗。荒蕪せる道。
【三】結構。工を施すこと。
【四】丹葩。赤き花。
【五】瓊瑤。玉なり。
【六】纖鱗。小魚なり。
【七】灌木。叢木なり。
【八】糇糧。食物なり。
【九】躊躇。周行の貌。
【一〇】簪。冠を持する笄、官を退くことを簪を投ずといふ。

(一一)東山の廬を(一二)經始すれば、果下ちて自ら(一三)榛を成す。前に寒泉の井あり、聊か心神を瑩くべし。(一四)悄蒨青葱の間、竹栢其(一五)眞を得たり。(一六)弱葉霜雪を栖ましめ、(一七)飛榮餘津を流す。(一八)爵服常玩なく、好惡屈伸あり。(一九)綬を結べば(二〇)纏牽を生じ、冠を彈くも埃塵を去るのみ。(二一)惠連は吾が屈にあらず、(二二)首陽は吾が仁にあらず。相與に尙ぶ所を觀、逍遙して(二三)良辰を撰ばん。

【大意】廬を東山に結んで隱居すれば、果實落ちて自然に林木を成し、前に寒泉あり以て心神を淸むべく、竹栢四時靑靑として天眞の操を保ち、花葉常に餘潤あり。官に仕へて爵服を加ふるも、常に之を保つべからず。時に好惡あり之に隨つて屈伸せざるべからず。印綬を佩び官職を守れば、一身之が爲に束縛を受く。余は冠を彈くも、唯塵を拂ふのみ。仕途に心あるにあらず。(漢の禹貢冠を彈きて出仕せんことを希ひし故事あり。)柳下惠、少連の屈、伯夷叔齊の仁の如きは、余の學ばんと欲する所にあらず。ただ山中の隱士と好尙を共にし、從容自適せんのみ。

【一一】東山。洛陽城東の山。左思ここに廬を結びて住めり。
【一二】經始。始めて作り營むこと。
【一三】榛。叢木なり、林をいふ。
【一四】悄蒨、青葱。草木鮮明なる貌。
【一五】眞。凋まざるをいふ。
【一六】弱葉。わかき葉。
【一七】飛榮。榮は花なり。餘津は餘分の滴。
【一八】爵服。官爵及び服章。
【一九】綬。印綬なり。
【二〇】纏牽。束縛といふが如し。
【二一】惠連。論語に柳下惠、少連ヲ謂フ、志ヲ降シ身ヲ辱ムトあり。
【二二】首陽。伯夷叔齊の餓死せし山。孔子伯夷を評して曰く、仁を求め仁を得たりと。
【二三】良辰。よき時節。

招隱の詩　　陸士衡

(一)明發心夷ならず。衣を振ひて聊か(二)躑躅す。躑躅して安に之かんと欲する。幽人(三)浚谷に在り。朝には南澗の(四)藻を采り、夕には西山の足に息ふ。(五)輕條雲構に象り、密葉(六)翠幄を成す。(七)激楚蘭林に佇り、(八)回芳秀木に薄る。(九)山溜何ぞ冷冷たる。飛泉鳴玉を漱ぐ。哀音靈波に附き、頽響(一〇)曾曲に赴く。至樂假るあるにあらず。安んぞ淳樸を澆くするを事とせん。富貴苟に圖り難し。(一一)駕を稅して欲する所に從はん。

【大意】早起心樂まず。乃ち去つて深谷の隱士を訪ふ。隱士は朝には南澗の水草を採り、夕には西山の麓に息ひ、塵俗の累なし。枝葉密茂して帳帷を成し、香氣迴轉して自然の樂を奏し、飛泉注いで金玉の聲を成し、餘響遙に山曲に盡く。實に天下の至樂と謂ふべし。何ぞ淳樸の風を澆くし、榮利に趨るを事とせん。ああ富貴は求め易からず。我亦榮華を棄てて隱居の志に從はんかな。

【一】明發。早朝なり。
【二】躑躅。將に行かんとする貌。
【三】浚谷。深き谷。
【四】藻。水草なり。
【五】輕條。輕き枝。雲構は雲に聳ゆる大廈。
【六】翠幄。綠の帳。
【七】激楚。音樂の聲。
【八】回芳。風に漂ふ香氣。
【九】山溜。谷川の流。
【一〇】曾曲。幽深なる山曲。
【一一】駕を稅す。車を捨つること。

反招隱

(一)反招隱の詩

王康琚

小隱は(二)陵藪に隱れ、大隱は朝市に隱る。伯夷は(三)首陽に竄れ、(四)老聃は柱史に伏す。昔在太平の時、亦(五)巢居子あり。今盛明の世なりと雖も、能く(六)中林の士なからんや。神を青雲の外に放にし、迹を窮山の裏に絕つ。(七)鵾雞晨に先ちて鳴き、哀風夜を迎へて起る。凝霜(八)朱顏を凋まし、寒泉(九)玉趾を傷ましむ。(一〇)周才は衆人に信ぜられ、(一一)偏智は諸を己に任す。分を推せば天和を得、性を矯むれば至理を失ふ。歸來せよ安んぞ期する所あらん。物と終始を齊うせん。

【大意】小隱は山野に隱れ、大隱は朝市に隱る。故に伯夷は首陽山に隱れ、老子は柱下史に隱れぬ。昔泰平の時と雖も、尚ほ山林の隱士あり。今盛明の世なれども、亦此輩なきにあらず。然も山中の

【一】反招隱。俗に混じて居れば以て患を免るるに足る、何ぞ必ずしも山林に入るを用ひんやとの意を述ぶ。故に反招隱と題す。
【二】陵藪。山野なり。
【三】首陽。山の名。
【四】老聃。老子なり、名は耳、字は聃、周に仕へて柱下史たり。
【五】巢居子。逸士傳に巢父ハ堯ノ時ノ隱人ナリ、常ニ山居シテ世利ヲ營マズ、樹ヲ以テ巢トナシ其上ニ寢ヌとあり。
【六】中林。林中なり。
【七】鵾雞。鳥の名。
【八】朱顏。紅顏なり。
【九】玉趾。足なり。
【一〇】周才。俗に從つて出で仕ふる者をいふ。
【一一】偏智。隱居して仕へざる者をいふ。

鳥音風聲愁思を增すに足り、霜降り氷結んで肌膚を傷るに足る。隱居は決して好むべきにあらず。俗に從へば衆人の信ずる所となり、偏屈なれば衆人に棄てられ、己の命分に從へば天和を得、性命を枉ぐれば至理を失ふ。ああ山中の隱士須らく歸り來るべし。何ぞ期する所あらんや。ただ俗に從つて萬物と歸を同うすべきのみ。

遊覽

(一)芙蓉池の作　(二)魏文帝

輦に乘りて夜行いて遊び、逍遙して(三)西園に步す。(四)雙渠相漑灌し、(五)嘉木通川を繞る。(六)卑枝羽蓋を拂ひ、(七)脩條蒼天を摩す。驚風輪轂を扶け、飛鳥我が前に翔る。丹霞明月を夾み、華星雲間を出づ。上天光采を垂れ、五色一に何ぞ鮮き。壽命(八)松喬にあらず、誰か能く神仙を得ん。遨遊して心意を快くし、己を保ちて(九)百年を終へん。

【一】芙蓉池。池の名。
【二】魏文帝。諱は丕、字は子桓、曹操の長子なり。
【三】西園。鄴都の西園なり。
【四】雙渠。相竝べる溝。
【五】嘉木。美しき樹木。
【六】卑枝。低き枝。羽蓋。羽を以て飾れる車蓋。
【七】脩條。長き枝。
【八】松喬。赤松子、王子喬、ともに古の仙人の名。
【九】百年。生涯なり。養生經に中壽ハ百年とあり。

【大意】車に駕して夜西園に遊べば、溝渠流れ灌ぎ佳木之を繞り、樹枝或は高く或は低く、或は車蓋を拂ひ或は蒼天を摩す。驚風飛鳥前後に去來し、月星雲間を出で、雲氣五彩を成し、其色鮮明なり。人誰か不死なるを得ん。須らく遊樂を事とし、以て人生を終ふべきのみ。

(一)南州桓公が九井の作　(二)殷仲文

(三)四運鱗次すと雖も、(四)理化各ゝ準あり。獨り清秋の日あり、能く高興を盡さしむ。景氣多くは明遠、風物自ら凄緊。(五)爽籟幽律を驚かし、哀壑(六)虛牝を叩く。歲寒早秀なく、浮榮夙隕を甘んず。何を以てか貞脆を標せん。薄か言に(七)松菌に寄る。(八)哲匠蕭晨に感じ、此の塵外の(九)軫を肅め、廣筵(一〇)泛愛を散じ、(一一)逸爵勝引を紆らす。伊れ余仁を好むを樂む。惑祛りて吝亦泯きぬ。猥に(一二)阿衡の朝に首とし、將に匈奴の晒

【一】南州。姑熟をいふ。桓公は桓玄をいふ。九井は山の名。桓玄此に府第を築く。
【二】殷仲文。晉の陳郡の人、桓玄の姊の夫なり、仲文玄に從ひて九井山に遊び、是詩を作る。
【三】四運。四時の運行。鱗次は鱗の如く相次ぐこと。
【四】理化。物理の變化。準は平なり。
【五】爽籟。清風なり。幽律は幽韻といふが如し。

【六】虛牝。谿谷なり。
【七】松菌。松は貞固にして菌は脆弱なり。
【八】哲匠。匠は善く萬物を宰する者、桓玄を指す。蕭晨は蕭瑟たる秋の朝。
【九】軫。輿後の横木。
【一〇】泛愛。博く士を愛すること。
【一一】逸爵。爵は杯、杯を飛ばすこと。勝引は良友なり。
【一二】阿衡。宰相なり。桓玄大司馬たり。

を貽さんとす。

【大意】四時の運行、魚鱗の相次ぐが如く、物理の變化亦各〻均平にして一の如し。殊に淸秋の時最も人をして高興を發せしむ。景物寒涼緊急にして、淸風幽深の響を起し、壑谷を銜いて哀韻を揚げ、草木復た秀榮を見ず。ただ松栢の貞固を守りて獨り存するのみ。賢相秋に感じ駕を高山に進めて、塵外の遊をなし、大に宴席を開いて博く衆士を愛し、杯を飛ばし良友を引いて飲む。余桓公の仁を好むを樂み、疑惑鄙吝一時に泯滅す。余不才の身を以て公の朝に首班たり。匈奴之を聞かば、恐らくは我を笑はん。

西池に游ぶ　(一)謝叔源

彼の(二)蟋蟀の唱を悟り、此の(三)勞者の歌を信ず。(四)有來豈疾からざらんや。良遊常に(五)蹉跎す。逍遙して(六)城肆を越え、(七)願言して屢〻經過す。(八)廻阡陵闕に被り、高臺飛霞

【一】謝叔源。謝混、字は叔源、安の孫なり。晉の陳郡陽夏の人。

【二】蟋蟀。詩經の篇の名。蟋蟀堂ニアリ、歲聿ニソレ莫レン、今我樂マズンバ、日月ソレ除ランの句あり。

【三】勞者云云。詩經の伐木篇は朋友故舊を燕する詩なり。韓詩に伐木廢シテ朋友ノ道缺ク、勞者ソノ事ヲ歌フ、詩人木ヲ伐リ自ラ其事ヲ苦ム、故ニ以テ文ヲナスとあり。

【四】有來。歲月の來るなり。

【五】蹉跎。時を失ふ貌。

を眺む。(九)惠風繁圃に蕩き、白雲(一〇)曾阿に屯る。影昃いて鳴禽集り、(一一)水木清華を湛ふ。裳を褰げて(一二)蘭沚に順ひ、(一三)徙倚して芳柯を引く。(一四)美人歲月を愆つ。(一五)遲暮獨り如何せん。思ふ所に牽かるるを爲すなかれ、(一六)南榮其多きを戒む。

【大意】此れ遊に因りて友を思ふの詩なり。余今眞に友を宴するの早かるべきを悟れり。歲月は過ぎ易く、遊宴は時を失ひ易し。須らく時に及んで行樂すべきなり。余都城を出でて郊外を逍遙し、高臺に登りて飛霞を望めば、春風園花を動かし白雲山阿に集り、日斜にして歸鳥集り、花木影を水中に蘸す。因つて衣を褰げて渚に沿ひ、進んで蘭枝を折り、以て朋友に贈らんとす。朋友期を違ひて待てども來らず。同遊するを得ざるを如何せん。さはれ南榮の誡あり。徒に友を思ひて心を傷ましむべきにあらず。

【六】城肆。都會の商店。
【七】願言。毎毎といふ意。
【八】廻阡。廻れる道。陵闕は山陵及び城闕。
【九】惠風。春風なり。
【一〇】曾阿。曾は層なり。重れる山。
【一一】水木。水中に映ずる木。
【一二】蘭沚。蘭の生ひたる渚。
【一三】徙倚。徘徊する貌。芳柯は蘭枝なり。
【一四】美人。友人を謂ふ。
【一五】遲暮。晩なり。
【一六】南榮。莊子に庚桑楚、南榮趎ニ謂ツテ曰ク、汝ガ形ヲ全ウシ、汝ガ生ヲ抱キ、汝ガ思慮ヲシテ營營セシムルナカレトあり。

湖に泛び歸りて樓中に出で月を翫ぶ　謝惠連

日落ちて(一)澄瀛に泛び、星羅りて(二)輕橈を游ばしむ。(三)謝に憩ひて(四)曲汜に面し、流に臨んで迴潮に對す。策を輟めて共に筵を騈べ、坐を竝べて相招要す。哀鴻沙渚に鳴き、(五)悲猨山椒に響く。(六)亭亭たり江に映ずる月、(七)瀏瀏たり谷を出づる飈。(八)斐斐として氣(九)岫を幕ひ、(一〇)泫泫として露條に盈つ。近く矚みて(一一)幽蘊を袪き、遠く覩て(一二)諠囂を盪ぐ。(一三)晤言して罷るるを知らず、夕より清朝に至る。

【一】澄瀛。澄みたる池水。
【二】輕橈。輕き棹。橈音ゼウ。
【三】謝。一本榭に作る。臺上に木あるを榭といふ。
【四】曲汜。水決して復た入るを汜といふ。
【五】悲猨。悲しげに啼く猿。山椒は山頂なり。
【六】亭亭。高き貌。
【七】瀏瀏。風の疾き貌。
【八】斐斐。輕き貌。
【九】岫。山峰なり。
【一〇】泫泫。垂るる貌。
【一一】幽蘊。幽鬱の心。
【一二】諠囂。世俗の騷がしき事。
【一三】晤言。人と相對して語ること。

【大意】日暮るる頃舟を湖上に泛べ、星を仰ぎつつ輕棹を弄し、歸りて樓に就き、榭に憩ひて曲流に對し、筵を騈べて共に月を賞す。鴻雁沙渚に鳴き猿猴山頂に啼き、其聲悲哀あり。月江を照して亭亭たり。風谷を出でて瀏瀏たり。山氣輕くして山を罩め、露氣澹として枝に垂る。遠近の眺實に塵紛を一掃するに足る。幽興盡くる所を知らず、覺えず明旦に至りぬ。

(一)從ひて京口の北固に游び詔に應ず

謝靈運

(二)玉璽誠信を戒め、(三)黄屋崇高を示す。(四)事は名教の爲に用ひ、道は神理を以て超ゆ。昔は聞く(五)汾水の游、今は見る塵外の鑣。(六)笳を鳴して春渚を發し、(七)鑾を稅して山椒に登る。(八)組を張りて倒景を眺め、筵を列ねて歸潮を矚る。遠巖(九)蘭薄に映じ、白日(一〇)江皐に麗く。(一一)原隰綠柳を荑し、(一二)墟囿紅桃を散ず。皇心(一三)陽澤を美し、萬象咸く(一四)光昭す。己を顧ふに(一五)維縶を枉げ、志を撫して(一六)場苗に慙づ。工拙各ゝ宜しき所あり、終に以て(一七)林巢に返らん。曾ち是に(一八)舊想に

【一】從。宋の高祖武帝に從ふなり。京口は丹徒縣。北固は山の名、縣城の西北にあり。
【二】玉璽。天子の印。
【三】黄屋。天子の車。
【四】事。玉璽黄屋の二事。
【五】汾水。川の名。堯四子を藐姑射の山、汾水の陽に見、窅然として天下を喪ふ。事莊子に見ゆ。
【六】笳。簫なり。大駕の行く時は必ず簫を吹くなり。

【七】鑾。鑾駕なり。山椒は山頂なり。
【八】組。帷なり。倒景は水にうつれる山影。景は音エイ。
【九】蘭薄。蘭叢なり。
【一〇】江皐。江澤なり。
【一一】原隰。高平を原といひ、下濕を隰といふ。荑は芽を吹くこと。
【一二】墟囿。丘園なり。
【一三】陽澤。陽春の德澤。
【一四】光昭。時を得たること。

【一五】維縶。繫縛なり。
【一六】場苗。農場の苗、詩經に皎皎タル白駒、我ガ場苗ヲ食ム、之ヲ縶シ之ヲ維シ、以テ今朝ヲ永ウスとあり。白駒を以て賢人に喩へ、場苗を以て祿に喩ふ。
【一七】林巢。林中に返りて巢居すること。
【一八】舊想。隱居の志をいふ。

縈はれ、(一九)物を覽て長謠を奏す。

【大意】天子（宋の高祖を指す）玉璽を佩びて誠信を戒め、黄屋に乘りて崇高を示す。此の二事もと名教の爲に用ふと雖も、治國の大道に至りては儀容を待たずして自然に發揚す。今日の淸遊は昔日堯が汾水の遊に比すべし。簫を吹いて渚を發し駕を舍てて山に登り、帷幕を張り、宴席を列ねて歸潮倒景を眺め、遠巖白日綠柳紅桃盡く之を雙眸の中に收む。高祖是に於て陽春の德を嘉し給へば、萬物更に光を添ふ。翻つて自ら顧るに、不才にして枉げて官職に繫がれ、徒に厚祿を食むを慚づ。拙劣余の如きは山居を以て分とすべきなり。今此の風景を覽るに方り、隱居の志を述べて長歌を奏す。

【一九】物。風景なり。長謠は長歌なり。

晩に(一)西射堂を出づ　　謝靈運

歩して西城の門を出で、遙に城西の岑を望む。(二)連障巘崿を疊み、(三)靑翠杳として深沈。曉霜楓葉丹く、(四)夕曛嵐氣陰る。(五)節往きて慼淺からず、感來りて念已に深し。(六)羇雌舊侶を戀ひ、

【一】西射堂。射堂は永嘉郡の西にあり、靈運獨處して常に意を得ず。故に是詩を作る。
【二】連障。連山なり。巘崿は崖なり。
【三】靑翠。山の色なり。杳は深冥なり。
【四】夕曛。黄昏なり。
【五】節。時節なり。
【六】羇雌。迷鳥に同じ。

迷鳥故林を懷ふ。情を含んで尙ほ勞愛す。如何ぞ賞心を離れん。鏡を撫りて(七)緇鬢を華にし、帶を攬りて(八)促衿を緩うす。(九)安排徒に空言、幽獨(一〇)鳴琴に賴る。

【大意】城門を出でて連山を望めば、山嶺相累り其色青翠なり。楓葉朝に紅に嵐氣夕に暗し。歲月の疾きに感じ憂念殊に深し。それ迷鳥すら故林を戀ひ、情を含んで尙ほ疇類を愛す。離居の人何ぞ友を戀ふの心なきを得んや。鏡を執りて白髮を見、老瘦して衣衿を緊む。安排の理は空言にして信ずるに足らず。ただ鳴琴に賴りて寂寞を慰むるのみ。

【七】緇鬢。黑き鬢髮。華は白なり。
【八】促衿。衣衿を緊すること。
【九】安排。程よくすること。莊子に仲尼顏回ニ謂ツテ曰ク、安排シテ去化スレバ乃チ寥天一ニ入ルとあり。
【一〇】鳴琴。琴賦に窮獨ニ處テ悶ヘザル者ハ音聲ヨリ近キハナシとあり。

(一)池上樓に登る　謝靈運

(二)潛虬幽姿媚び、飛鴻遠音を響かす。霄に薄りて雲の浮べるに愧ぢ、川に棲んで淵の沈めるに怍づ。進德は智の拙なる所、退耕は力任へず。祿を徇めて(三)窮海に反り、痾に臥して空林に對す。衾枕(四)節候に昧く、(五)褰開暫く窺臨す。耳を傾け

【一】池上樓。永嘉郡にあり、靈運讒せられ出でて永嘉に守たり。病起、樓に登りて是詩を作る。
【二】潛虬。水に潛める龍。媚は美好なり。
【三】窮海。永嘉は海邊なる故窮海といへるなり。

て波瀾を聆き、目を擧げて（六）嶇嶔を眺む。（七）初景緒風を革め、（八）新陽故陰を改む。池塘春草を生じ、園柳鳴禽を變ず。（九）祁祁として豳歌に傷み、（一〇）萋萋として楚吟に感ず。（一一）索居永久なり易く、離羣心を處き難し。（一二）持操豈獨り古のみならんや。悶なきは（一三）徵今に在り。

【大意】龍は水に潛みて其眞を保ち、雁は高く飛びて害に遠ざかる。余旣に世網に罹り龍雁に恥ぢざるを得ず。德を進め世を濟ふの智疎拙にして、退耕自ら給するは、體力の堪ふる所にあらず。因つて俸祿を食みて海邊の守となり。病に臥して空林に對す。常に枕衾を侶として氣候の移るを知らず。僅に簾帷を掲げて景物を窺ひ、仰いでは山丘を觀、俯しては波瀾を聽くのみ。今や陰冬去りて陽春來り、春草地塘に生じ鳴禽園柳に鳴く。豳歌の祁祁として蘩を採るに傷み、楚辭の王孫遊んで歸らざるに感じ、吾が一歩も戸庭を出づる能はざるを嘆ず。離羣索居すること已に久しく、心を傷しむること甚しけれども、操を守りて動かざるは、唯古人のみにあらず、吾亦現に晏然たり。

【四】節候。氣節風候。
【五】褰開。帷簾を掲げ開くこと。
【六】嶇嶔。山の高き貌。
【七】初景。初春の景。緒風は餘風なり。
【八】新陽。春を陽となし、冬を陰となす。
【九】祁祁。衆多の貌。豳歌は詩經の豳風七月の詩。詩に春日遲遲トシテ蘩ヲ采ルコト祁祁タリとあり。
【一〇】萋萋。草の茂る貌。楚吟は楚辭の招隱士篇。王孫遊ンデ歸ラズ、春草生ジテ萋萋タリとあり。
【一一】索居。離居なり。
【一二】持操。操守を失はぬこと。
【一三】徵。證據なり。

(一)南亭に游ぶ　謝靈運

(二)時竟りて夕に澄霽し、雲歸りて日西に馳す。密林餘清を含み、遠峯(三)半規を隱す。久しく(四)昏墊の苦に痗み、旅館(五)郊岐を眺る。澤蘭漸く徑に被り、(六)芙蓉始めて池に發く。未だ青春の好に厭かざるに、已に(七)朱明の移るを觀る。(八)慼慼として物に感じて歎き、(九)星星として白髮垂る。藥餌は情の止むる所、衰疾忽ち斯に在り。逝ゝ將に秋水を候ひ、(一〇)景を息めて(一一)舊崖に偃せんとす。我が志誰と與にか亮なる、賞心惟れ(一二)良知。

【大意】夕に至りて雲收まり雨霽れ、密林洗ふが如く、遠峯半日を呑む。ここに淫雨の苦を免れて南亭に遊び郊外を望めば、蘭茂り蓮開きて、夏去り秋來るを觀、節物の變に感じ白髮の垂るるを歎く。久しく藥餌を廢したれば、忽ち此の衰疾を増しぬ。願くは秋潦の激せざる時を候ひ、山崖の舊居に歸り、ただ風月を侶とせん。

【一】南亭。永嘉郡にあり。
【二】時。日暮の時。
【三】半規。半圓なり。太陽の半。
【四】昏墊。霖雨の苦。
【五】郊岐。郊外の路。
【六】芙蓉。蓮花なり。
【七】朱明。夏をいふ。
【八】慼慼。憂思の貌。
【九】星星。白髮の貌。
【一〇】景。身影なり。
【一一】舊崖。舊居の山崖。
【一二】良知。良友なり。

(一)赤石に遊び進んで海に(二)帆す　謝靈運

(三)首夏猶ほ清和、芳草亦未だ歇きず。(四)水宿晨暮を淹うし、(五)陰霞屢〻興沒す。周覽(六)瀛壖に倦む。況んや乃ち(七)窮髮を凌ぐをや。(八)川后時に流を安んじ、(九)天吳靜にして發せず。帆を揚げて(一〇)石華を采り、(一一)席を挂けて(一二)海月を拾ふ。(一三)溟漲端倪なく、虛舟超越あり。(一四)仲連齊組を輕んじ、(一五)子牟魏闕を眷る。名に矜れば道足らず、己に適すれば物忽るべし。請ふ(一六)任公が言に附き、(一七)終然天伐を謝せん。

【一】赤石。山の名。山は海に枕めり。
【二】帆す。帆を揚げて海に泛ぶなり。
【三】首夏。初夏なり。清和は時和し氣淸きこと。
【四】水宿。舟中に宿ること。
【五】陰霞。雲氣なり。興沒は現滅なり。
【六】瀛壖。海岸なり。
【七】窮髮。不毛の地。
【八】川后。波の神。
【九】天吳。水の神。
【一〇】石華。石に附きて生ず、其肉食ふべし。
【一一】席を挂け。帆を揚ぐること。
【一二】海月。くらげ。
【一三】溟漲。海なり。端倪は際涯なり。
【一四】仲連。魯仲連なり。齊組は齊國の印綬。齊、魯仲連を爵せんとす。仲連、海上に逃げ隱る。
【一五】子牟。人名なり。呂氏春秋に中山ノ公子牟、詹子ニ謂ツテ曰ク、身ハ江海ノ上ニ在リ、心ハ魏闕ノ下ニ居ル云云トあり。魏闕は魏國の宮闕。
【一六】任公。莊子に孔子陳ニ圍マル、太公任往キテ之ヲ弔シテ曰ク、直木ハ先ヅ伐ラレ、甘泉ハ先ヅ竭ク、子ソレ意フニ智ヲ飾リ以テ愚ヲ驚シ、身ヲ脩メ以テ汙ヲ明ニシ、昭昭トシテ日月ヲ掲ゲテ行クガ若シ、故ニ免レザルカト、孔子曰ク善シト云云とあり。
【一七】終然。終に。天伐は早く伐らるること。

【大意】初夏赤石に遊べば風物清和にして猶ほ陽春の如し。連日舟中に宿し、雲氣の現滅を周覽し、殆ど海岸の遊に倦みたり。況んや不毛にして竹樹の粧點するものなきをや。因て帆を揚げて海上に遊ばんとす。時に水神流を靜めて波浪興らず。石華海月を採り、輕舟を泛べて大海に縱遊せり。昔魯仲連は齊爵を辭して海上に逃れ、公子牟は海上に在りて魏闕を戀へり。名を求むるは（公子牟の如く）道に於て未だ足れりとなさず。己に適して自ら恣にすれば、（魯仲連の如く）世界を忘るるに足る。故に太公任の言に從ひ、自ら韜晦して危害を免れんと欲す。

(一)石壁精舍より(二)湖中に還る　謝靈運

(三)昏旦氣候變じ、山水(四)清暉を含む。清暉よく人を娛ましめ、游子(五)澹として歸るを忘る。谷を出でしとき日尚ほ早かりしに、舟に入るとき陽已に微なり。林壑(六)暝色を斂め、雲霞(七)夕霏を收む。(八)芰荷迭に映蔚し、(九)蒲稗相因り依る。(一〇)披拂して南徑に趨り、愉悅して(一一)東扉に偃す。慮澹にして物自ら輕く、意愜ひて理違ふなし。

【一】石壁精舍。精舍とは讀書齋なり。
【二】湖中。湖は巫湖なり。
【三】昏旦。朝夕なり。
【四】清暉。清鮮なる色。
【五】澹。一本憺に作る。憺は安なり。
【六】暝色。晩景なり。
【七】夕霏。夕霧なり。
【八】芰荷。菱及び蓮。
【九】蒲稗。共に水草の名。
【一〇】披拂。草を排すること。
【一一】東扉。東の扉。

言を寄す攝生の客、試に〔三〕此道を用て推せ。

【大意】石壁の氣候朝暮に變り、山水皆清鮮の色あり。よく人をして樂ましむ。故に一たび此に遊べば安然として歸るを忘る。われ精舍を出でし時は、日尙ほ高かりしに、歸途舟に乘りし時は日已に暮れんとし、林壑は煙霧に鎖され、芰荷蒲稗の相依りて映發するを見るのみ。われ之を排して陸に上り東扉に就きて偃息すれば、思慮淡然として外物の累なく、心意自ら適し至理に於て違ふなし。因つて攝生の客に告ぐ。攝生の術は虛心適意に在り。

【三】此道。虛澹恬愉の道。

〔一〕石門の最高頂に登る

謝靈運

晨に策ついて絕壁を尋ね、夕に息ひて〔二〕山棲に在り。峯を疏りて高館を抗げ、嶺に對して廻谿に臨む。長林戶庭に羅り、積石基階を擁す。連巖路の塞がれるを覺え、密竹徑をして迷はしむ。來人〔三〕新術を忘れ、〔四〕去子故蹊に惑ふ。〔五〕活活として夕流駛り、〔六〕噭噭として夜猨啼く。〔七〕沈冥豈理を別にせんや。道を守りて自ら携れず。心は〔八〕九秋

【一】石門。山の名。
【二】山棲。山中の居處。
【三】新術。術は道なり。
【四】去子。去人なり。故蹊はもと來し路。
【五】活活。水の聲。
【六】噭噭。猿の聲。
【七】沈冥。深沈玄默なり。

の幹に契り、目は(九)三春の荑を翫ぶ。常に居て以て終を待ち、順に處て故に(一〇)安排す。惜むらくは懷を同うするの客、共に(一一)青雲の梯に登るなきを。

【大意】朝には杖を曳いて石壁の間に遊び、夕には山居に歸りて休息す。山居は峯嶺に對し廻溪に臨み、長林戸庭に連り積石階を擁す。連巖密竹ありて道通ぜざるが如し。故に來る者は其道を忘れ、去る者は故路に惑ふ。溪流其下に活活として猿聲其上に噭噭たり。余常道を守りて天年を終へんことを待ち、順理に居て世事を安排し、憂樂をして我が心に入る能はざらしめんとす。惜むらくは同懷の友の與に雲梯に登るなきを。

【八】九秋の幹。松柏の類をいふ。
【九】三春の荑。草芽をいふ。
【一〇】安排。事を程よくすること。
【一一】青雲の梯。仙者は雲に因りて升る、故に青雲梯といふ。

南山より北山に往き(一)湖中を經て瞻眺す　謝靈運

(二)朝旦陽崖を發し、(三)景落ちて陰峯に憩ふ。舟を舍てて迴渚を眺め、策を停めて茂松に倚る。(四)側徑既に窈窕たり、環洲亦(五)玲瓏たり。俛し

【一】湖中。湖は巫湖なり。
【二】朝旦。朝なり。陽崖は南山。陰峯は北山。
【三】景落。日の暮ること。
【四】側徑。岐路なり。窈窕は長遠の貌。
【五】玲瓏。鮮明なる貌。

て喬木の杪を視、仰いで大壑の（六）淙たるを聆く。石横りて水流を分ち、林密にして蹊蹤を絕つ。（七）解作竟に何をか感せしむる、升長皆（八）丰容たり。（九）初篁綠籜に苞まれ、新蒲（一〇）紫茸を含む。海鷗春岸に戲れ、（一一）天雞和風を弄す。（一二）化を撫して心厭くなく、物を覽て眷彌〻重る。惜まず（一三）去人の遠きを、但恨む與に同うするなきを。孤遊情の歎ずるにあらず、賞廢せば理誰か通せん。

【大意】題は湖に在りて瞻眺するが如きも、詩意を詳にすれば、湖を過ぎて後、正に北山に在りて瞻眺するなり。吾れ朝に南山を發し、夕に北山に息ふ。已に舟を舍て杖を停め、茂松に倚りて迴渚を眺むれば、徑路遠く續き洲渚鮮に、俯しては高木の梢を見、仰いでは壑流の淙然たるを聽き、石横りて流を分ち、樹密にして道を沒せり。天地の化育何物をか生成せる、草木皆發育して悅茂し、筍出で蒲花さき、禽鳥春風を弄して樂めり。萬物の變化を見れば、倦厭する所なく益〻眷愛の念を深からしむ。古人の去れるは今更ら惜まざれども、與に之を賞する者なきは恨むべし。吾れ獨り遊賞するは敢て歎ぜざれども、ただ賞心若し廢せば、理與に通ずるなし。是れ恨むべきなり。

【六】淙。水聲なり。
【七】解作。易經に天地解ケテ雷雨作リ、雷雨作リテ百果草木皆甲坼スとあり。感は動なり。
【八】丰容。悅茂の貌。
【九】初篁。篁は叢竹なり。籜は竹皮なり。
【一〇】紫茸。蒲の花。
【一一】天雞。鳥の名。
【一二】化。萬物の變化。
【一三】去人。古人なり。

(一)斤竹澗より嶺を越えて溪行す　謝靈運

猨鳴いて誠に曙を知れども、谷幽にして光未だ顯かならず。巖下雲方に合ひ、花上露猶ほ泫る。(二)透迤として隈隩に傍ひ、(三)迢遞として陘峴を陟る。澗を過ぎて既に(四)急を厲り、棧に登りて亦(五)緬を陵ぐ。川渚屢ゝ(六)逕復し、流に乘りて廻轉を翫ぶ。(七)蘋萍沈深に泛び、(八)菰蒲淸淺を冒ふ。石に企てて飛泉を挹み、林を攀ぢて(九)葉卷を摘む。(一〇)山阿の人を想見すれば、(一一)薜蘿眼に在るが若し。蘭を握りて勤に徒に結び、(一二)麻を折れども心展ぶるなし。情は賞を以て美となす。事昧うして竟に誰か辨ぜん。此を觀て物慮を遣れ、一悟遣る所を得たり。

【一】斤竹澗。溫州府樂淸縣の東七十五里にあり。
【二】透迤。斜に行く貌。隈隩は山曲水涯なり。
【三】迢遞。遙なる貌。陘峴は連山なり。
【四】急。急流なり。
【五】緬。遠きこと。
【六】逕復。往來なり。
【七】蘋萍。水草の名。
【八】菰蒲。水草の名。
【九】葉卷。嫩葉の未だ伸びざるもの。
【一〇】山阿。山曲なり。山阿の人とは仙人をいふ。楚辭に山ノ阿ニ人アルガ若シ、薜荔ヲ被リテ女蘿ヲ帶ブとあり。
【一一】薜蘿。蔓草の名。
【一二】麻。神麻なり。

【大意】猿聲を聞きて夜の明けたるを知れども、谷深ければ日光未だ顯かならず。巖下には雲尙ほ結ばれ、花上には露猶ほ滴れり。吾れ山曲水涯に沿ひ、連山に登り急湍を涉り、棧道を過ぎて往き、

幾度か川渚を往來し、廻轉せる流を越え、水草の繁茂せるを賞し、石に立ちて飛泉を酌み、林を攀ぢて嫩葉を摘む。偶ゝ仙人を想見すれば、髣髴として其の薜蘿を纏へる姿の目前に在るを見、因つて蘭麻を折りて之に贈り、慇懃を通ぜんとせしも、徒に勤苦するのみにして相知の心を展ぶる能はず。抑ゝ事は己の心に適するを以て美となす。世人此理を辨知する者少し。然も我は能く此を知れり。則ち此山水を觀て、物欲塵慮を遣れ、釋然として一たび悟り、ここに始めて憂を遣るの道を得たり。

詔に應じて北湖の㈠田收を觀る　顏延年

㈡周御轍跡を窮め、㈢夏載山川を歷。㈣蓄軫豈明懋ならんや。善游皆聖仙なり。㈤帝暉順動に膺り、㈥清蹕廣塵を巡る。㈦樓觀豐穎を眺め、㈧金駕松山に映ず。㈨飛奔互に流綴し、㈩緹轂代ゝ廻環

【一】田收。延年、宋の文帝に從ひて曲阿の北湖に遊び、田を收めて勤苦するを觀、詔に應じて是詩を作る。

【二】周御。周の穆王の御者。穆王は八駿に乘り、天下を周行せりといふ。轍跡は車轍馬迹なり。

【三】夏載。夏の禹王、水を治めしとき、水行には舟に乘り、陸行には車に乘り、泥行には輴に乘り、山行には樏に乘れり。

【四】蓄軫。車を止めて遊行せざること。明懋は賢明にして德に勉むること。

【五】帝暉。文帝の光德。順動は易經に聖人順テ以テ動キテ民服スとあるに本づく。

【六】清蹕。天子の遊行をいふ。塵は田百畝をいふ。

す。神行(一一)浮景に埒く、爭光中天に溢る。(一二)開冬徂物を眷み、(一三)殘悴化先に盈つ。陽陸精氣を圍び、陰谷寒煙を曳く。(一四)攢素既に森藹、(一五)積翠亦葱芊。(一六)息饗嘉歳を報じ、(一七)通急無年を戒む。(一八)溫渥輿隸に浹く、和惠後筵に屬す。風を觀て久しく作あり。詩を陳べて未だ妍ならざるを愧づ。疲弱にして(一九)凌遽を謝す。累を取るは(二〇)纆牽にあらず。

【七】樓觀。曲阿城上の樓閣。穎は穗なり。【八】金駕。天子の車。【九】飛奔。車の走ること。流綴は或は流散し或は連綴すること。【一〇】緹騎。騎士なり。【一一】浮景。日輪なり。【一二】開冬。初冬なり。徂物は徂落する物。【一三】殘悴。凋衰なり。化先の化は生なり、春生の先なり。【一四】攢素。霜を結ぶこと。森藹は霜の盛なる貌。【一五】積翠。松柏の緑をなせること。葱芊は鬱茂の貌。【一六】息饗。十二月に蜡の祭を行ひ、田夫を息め之を饗すること。嘉歳は豐年なり。【一七】通急。百姓の窮乏を融通すること。無年は凶年なり。【一八】溫渥。文帝の厚恩。輿隸は卑賤の者。【一九】凌遽。迅速なり。【二〇】纆牽。纏なり。

【大意】昔周の穆王は天下を周遊し、禹王は四載に乘りて山川を跋渉せり。車を罷めて遊ばざるは明勉の君にあらず。善く天下を遊行する者之を聖人となす。わが文帝よく時に順つて動き郊野を巡行し給ひ、憩ひては樓上に豐穗を見、往きては金輿松山に映ず。乘車聚散し騎士周馳し、日輪の運行するが如く、光輝中天に溢る。時たまたま初冬にして萬物凋落せりと雖も、尚ほ春生の兆を含み、

復た觀るに足るものあり。山陽には精氣盈ち山陰には寒煙籠め、霜氣嚴肅なれども、松柏の尙ほ綠を湛ふるあり。蜡祭を行ひて人を息饗すれば、人皆豐年を報じ、窮乏を通じて以て饑年に備ふ。厚恩微賤に及び、皆饗宴を賜ふ。われ帝に從ひて土風を觀、ここに詩を作りたれども、其妍美ならざるを愧づ。是れ偏に疲弱にして捷速なる能はざる結果にして、轡の拘束するが爲にあらず。

(一)車駕京口に幸せしとき、(二)蒜山に侍遊せし作

顏延年

(三)元天北列に高く、
(四)日觀東溟に臨む。
河に入りて(五)陽峽に起り、華を踐んで削成に因る。巖險(六)漢宇を去り、(七)襟衞吳京に從る。流池自ら化造、山關固に神營。(八)園縣方望を極め、(九)邑社地靈を摠ぶ。(一〇)宅道星緯に炳り、(一一)誕

【一】車駕。宋の文帝の御車。京口は潤州に在り。
【二】蒜山。潤州の西二里にあり。詩意を按ずるに從遊するを得ざりしなり。題誤れり。
【三】元天。山の名。北列は山方なり。
【四】日觀。泰山の東南峰。東溟は東海なり。
【五】陽峽。陽山なり。
【六】漢宇。漢室といふが如し。
【七】襟衞。襟帶周衞なり。宋は吳地に都す。故に吳京といふ。
【八】園縣。山陵なり。方望は四方の羣神を祭ること。
【九】邑社。城邑の社。社は地神なり。地靈は地祇なり。
【一〇】宅道。天子の居る所の界。星緯は星紀なり。
【一一】誕曜。大なる光輝。辰明は北方の水精なり。宋は水德を以て王たり。

曜辰明に應ず。(一二)睿思故里に纏り、巡駕(一三)舊坰を匝る。峯に陟りて輦路に騰り、雲を尋ねて瑤甍を抗ぐ。春江風濤壯に、蘭野(一四)蕙英茂る。(一五)宣游して下濟を弘め、遠きを窮めて聖情を凝す。(一六)岳濱和會あり。(一七)祥習卜征に在り。(一八)周南昔老を悲み、留滯(一九)遺萌を感ず。(二〇)空食して廊肆に疲る。(二一)反税巖耕を事とせん。

【大意】 秦の時、元天山は北方に聳え、日観峯は東海に臨み、更に長城を築き黄河を渡りて陽山に據り、華山を踐んで城となし、峻嶮にして削れるが如し。漢その關塞を承けて之に居る。漢の衰ふるや吳京ここに開け、巖谷の險、襟帶の衞皆ここに遷り、流に因りて池となし、山に據りて城となし、化造神營の如く、人力の能く致す所にあらず。山陵邑社天地の神靈を總括し、帝居星紀にかなひ、光德水精に應ず。文帝故郷を思ひ、乃ち京口に巡幸し給ひ、山峯を鑿ちて輦路を通じ、雲を衝きて瑤臺を建つ。春江蘭野恰も其行を歡迎するが如し。帝乃ち徧

【一二】 睿思。文帝の心。故里は京口を指す。
【一三】 舊坰。坰は郊外なり。
【一四】 蕙英。初生の草なり。
【一五】 宣遊。徧く遊ぶこと。下濟は易經に天道下濟シテ光明とあり。
【一六】 岳濱。國語に齊ノ桓公ノ時、岳濱ノ諸侯來服セザルハナシとあり。
【一七】 祥習。左傳に鄭ノ太宰石㚟曰ク、先王征ヲトスルコト五年、歲ゴトニ其祥ヲトス、祥習ナレバ則チ行クとあり。習は重なり。
【一八】 周南。漢の武帝泰山を封ず、司馬談周南の地に留滯し、事に與るを得ず、自ら嘆じて曰く是れ命なりと。昔老とは司馬談を指す。
【一九】 遺萌。延年自ら謂ふなり。
【二〇】 空食。素餐なり。廊肆は朝廷なり。
【二一】 反税。租税を納むること。

遊して下濟の惠を弘め、聖人の情を成す。則ち四方來服せざるはなく、祥瑞屢〻あらはる。われ不幸にして蒜山に從遊するを得ず。感慕の情司馬談と相似たり。已に祿を食んで官を曠うし、廟堂の下列に疲倦す。今租稅を納めて巖石の下に耕作せんと欲す。

車駕京口に幸せしとき、三月三日曲阿の後湖に侍遊せし作　顏延年

(一)虞風帝狩を載せ、(二)夏諺王遊を頌す。(三)春方宸駕を動かし、幸を望んで(四)五州を傾く。(五)山祇嶠路に蹕し、(六)水若滄流を警む。(七)神御瑤軫を出で、(八)天儀藻舟に降る。(九)萬軸胤として行衞し、(一〇)千翼泛として飛浮す。彫雲(一一)琁蓋に麗き、(一二)祥飈緌旍に被り、江南(一三)荊豔を進め、(一四)河激趙謳を獻ず。(一五)金練海浦を照し、

【一】虞風。書經虞書に歲ノ二月、東ニ巡狩スとあり。載は記載なり。

【二】夏諺。孟子に夏ノ諺ニ曰ク、吾ガ王遊バズンバ、吾何ヲ以テ休センとあり。

【三】春方。東方なり。宸駕は天子の駕なり。

【四】五州。九州の地、宋其五州を得たり。

【五】山祇。山神なり。嶠路は山路なり。

【六】水若。水神なり。

【七】神御。天子の行幸。瑤軫は玉車なり。

【八】天儀。天子の容儀。藻舟は書船なり。

【九】萬軸。多くの車。胤は續くこと。

【一〇】千翼。多くの舟。泛は輕き貌。

【一一】琁蓋。玉を以て飾りし車蓋。

【一二】祥飈。瑞風なり。緌旍は旗なり。

【一三】荊豔。楚歌なり。

【一四】河激。歌の名。趙謳は趙

(二六)笳鼓溟洲に震ふ。

(二七)藐眄として靑崖を觀、(二八)衍漾として綠疇を觀る。民靈都野に讋れ、(二九)鱗翰淵丘に聳る。德禮既に普洽し、(三〇)川岳徧く懷柔す。

の歌。
【二五】金練。金甲なり。
【二六】笳鼓。簫鼓なり。溟洲は海邊の地。
【二七】藐眄。廻顧の貌。
【二八】衍漾。廣大なり。綠疇は綠田なり。
【二九】鱗翰。魚鳥なり。
【三〇】川岳。山川の神。

【大意】虞書には巡狩の事を載せ、夏の諺には遊幸を頌美せり。因つて吾が君ここに東方に巡幸するや、五州の民心を傾けて臨幸を望み、山水の神道路を警衛し、陸路には衆車相繼いで衛り、水行には衆船相從つて浮び、雲氣車蓋に附き、瑞風彩旗を飜し、歌謠を擧げて之を送迎す。從士の金甲海浦を照し、舟中の簫鼓洲渚に震ふ。四顧して靑崖綠疇を見れば、民人魚鳥その盛を見て驚懼せざるはなし。道德禮儀洽く至り、川岳の神亦歡欣して此地に來る。

(一)行藥して城東の橋に至る　鮑明遠

雞鳴いて關吏起き、鼓を伐ちて早く晨を通ず。車を嚴へて(二)迴陌に臨み、(三)延瞰して城闉を歷。蔓草(四)高隅に緣り、(五)脩楊廣津を夾む。迅風

【一】行藥。明遠疾に因りて藥を服し、行いて之を宣導し、遂に建康城東の橋に至り、游宦の子を見て是詩を作る。
【二】迴陌。遠き街衢。
【三】延瞰。長視なり。城闉は城曲なり。
【四】高隅。城角なり。

（六）首旦に發し、平路飛塵塞る。（七）擾擾たる遊宦の子、（八）營營たる市井の人。金を懷にして近く利に從ひ、劍を撫して遠く親を辭す。萬里の途に先だたんことを爭ひ、各々百年の身を事とす。開芳（九）稚節に及び、含彩（一〇）驚春を吝む。尊賢永く（一一）照灼、孤賤長へに（一二）隱淪。（一三）容華坐に消歇す。端に誰が爲にか苦辛する。

【大意】　闤吏雞鳴に起き、鼓を擊ちて天明を報ず。余乃ち車に駕して市街を過ぎ、城東に至れば、蔓草は城壁に纏ひ、楊柳は橋岸を夾み、疾風起りて塵埃を飛ばす。時に游宦の人、商賈の輩と相交りて右往左往するを見たり。ああ彼の徒や金を懷にし親戚を離れ、遠く此都に來り利達を求めんとし、先を爭ひ榮を競ひ、之が爲に身命を賭す。夫れ芳を開くこと早きものは、衰ふること亦速なり。よろしく彩華を含んで驚春の時を待つべし。要するに尊貴賢明なる者は榮進を得れども、孤獨賤陋の者は終に淪沒の厄を免れざるなり。徒に榮進を希ひて青春の時を過し、一生苦辛するは誠に憐むべきなり。

【五】脩楊。長き楊柳。
【六】首旦。朝なり。
【七】擾擾。馳逐の貌。遊宦の子とは遠方より來りて仕官せる人。
【八】營營。馳逐の貌。市井の人とは商賈をいふ。
【九】稚節。少節なり、幼稚の時に喩ふ。
【一〇】驚春。春になりて芳を開くこと。
【一一】照灼。勢の盛なること。
【一二】隱淪。埋沒して顯れぬこと。
【一三】容華。はなやかなる容姿。消歇は消滅すること。

東田に遊ぶ　謝玄暉

(一)戚戚として悰なきに苦み、手を攜へて共に行樂す。雲を尋ねて(二)累榭に陟り、山に隨つて(三)菌閣を望む。遠樹(四)曖として阡阡たり、生煙(五)紛として漠漠たり。魚戲れて(六)新荷動き、鳥散じて(七)餘花落つ。芳春の酒に對せず、還つて青山の郭を望む。

【大意】憂心の消し難きに苦み、親友と相攜へて東田に遊び、雲を尋ねては高臺に登り、山に登りては菌閣を望み、遠くは樹林の芊芊として茂り、煙霧の亂れて散布するを見、近くは池魚の蓮葉の間に戲れ、鳥飛んで殘花の散るを見る。この好景を見ては、坐して春酒を酌まんより、却つて青山の郭を望むの勝れるを知る。

【一】戚戚。憂嘆の貌。
【二】累榭。高臺なり。
【三】菌閣。菌は香草。閣の美しきをいふ。
【四】曖。蔽ふ貌。阡阡は茂る貌。
【五】紛。亂なり。漠漠は散布する貌。
【六】新荷。新に出でし蓮葉。
【七】餘花。咲き殘れる花。

(一)冠軍建平王に從ひ、(二)廬山の香鑪峯に登る　江文通

(三)廣成神鼎を愛し、

【一】冠軍建平王。宋の建平王（景素、冠軍將軍湘州刺史たり。）【二】廬山。山の名、その東南

(四)淮南丹經を好む。此山(五)鸞鶴を具へ、往來盡く仙靈。(六)瑤草正に翕絶、玉樹信に(七)葱青。(八)絳氣下りて縈薄し、白雲上りて(九)杳冥なり。(一〇)中坐に蜿虹を瞰、俛伏して流星を視る。(一一)遐怪の極を尋ねずして、則ち耳目の驚くを知る。日(一二)長沙の渚に落ち、(一三)曾陰萬里に生ず。蘭を藉きて素より(一四)意多く、風に臨んで默して情を含む。方に松栢の隱を學び、市井の名を逐ふを羞づ。幸に(一五)光誦の末を承く。伏して(一六)後旍に託せんことを思ふ。

に香鑪峯あり。詩意を按ずるに王の詩に和せるなり。
【三】廣成。古の仙人なり。神鼎は仙藥を錬る鼎。
【四】淮南。淮南王劉安なり。丹經、仙書なり。
【五】鸞鶴。共に靈鳥の名。
【六】瑤草。玉芝なり。翕絶は鬱茂の貌。
【七】葱青。欝茂の貌。
【八】絳氣。赤霞なり。縈薄は繞り迫ること。
【九】杳冥。深暗の貌。
【一〇】中坐。半山の坐なり。蜿虹は虹なり。
【一一】遐怪。遠方の怪異。
【一二】長沙。地名なり。
【一三】曾陰。重陰なり。
【一四】意。佳意なり。
【一五】光誦。華篇といふが如し。王の原作を指す。
【一六】後旍。後旌なり。後車といふが如し。

【大意】昔廣成、淮南皆仙術を好めり。此山には仙禽棲み仙人往來し、仙草繁茂し、雲霞搖曳し、中峰には虹を仰ぐべく、伏しては流星を視るべし。遠く怪異を求めざるも、此山に至れば則ち耳目を驚すに足るものあり。忽ち日長沙の渚に落ち重陰遠く生ず。余山間に於て蘭を敷きて坐し、そぞろに仙を慕ふの情を起し、まさに山中に隱れんことを思ひ、世俗の名を求むるを羞づ。今幸に華

篇を拜する得、因つて之に和せんとす。

(一)鍾山の詩、(二)西陽王の敎に應ず　沈休文

靈山地德を紀し、險峭岳靈に資る。(三)終南秦觀を表し、(四)少室王城に邇し。(五)翠鳳淮海に翔り、(六)衿帶神坰を繞る。(七)北阜何ぞ其れ峻なる、(八)林薄杳として(九)葱青たり。其一

【大意】建康の都には靈山ありて地德を表し、地の險固なるは岳靈の致す所なり。恰も終南山の秦の宮闕を表し、少室山の周の王城に近きが如し。宋淮海の地に興り、山河襟帶の固、乃ち此地に在り。鍾山高く北に聳え、草木青青として鬱茂す。地より發して奇嶺多く、雲を干して一狀にあらず。(一〇)合沓として共に天を隱し、(一一)參差として互に相望む。(一二)鬱律として丹巘を構へ、(一三)崚嶒として

【一】鍾山。建康の北十里にある山の名。
【二】西陽王。宋の孝武帝、皇子尙を封じて西陽王となす。王の命を敎といふ。
【三】終南。山の名。秦觀は秦の宮闕。
【四】少室。山の名。王城は周王の城。
【五】翠鳳。鳳の翔るとは宋の興れるに喩ふ。淮海、淮水及び海。
【六】衿帶。衿は襟なり。野外を坰といふ。
【七】北阜。鍾山は建康の北にあり、故に北阜といふ。
【八】林薄。草木の叢生するを薄といふ。杳は深きなり。
【九】葱青。茂盛の貌。
【一〇】合沓。高大の貌。
【一一】參差。整齊ならざる貌。
【一二】鬱律。直上の貌。丹巘は赤き山。
【一三】崚嶒。重疊する貌。

青嶂を起す。勢は（一四）九疑に隨つて高く、氣は（一五）三山とともに壯なり。其二

【大意】大地より起りて奇嶺多く、其形狀一樣ならず。衆峰高大にして天を隱し、分散して互に相望み、重疊して丹青の色をなし、高さは九疑山に比すべく、雲氣の壯なるは蓬萊、方丈、瀛洲の三神山と相同じ。

事に卽いて既に美多く、臨眺殊に復た奇なり。南のかた（一六）儲胥の觀を瞻、西のかた（一七）昆明の池を望む。山中咸悅ぶべく、賞四時を逐ひて移る。春光（一八）隴首に發し、秋風（一九）桂枝に生ず。其三

【大意】山中の事既に美多く、四方を臨眺すれば復た奇迹あり、南には儲胥觀を見るべく、西には昆明池を望むべく、（これ唯擬して言ふのみ）山中の景四時變化し、山頂を仰ぎて春の來れるを知り、桂樹の動くを見て、秋風の至れるを知る。

多く（二〇）息心の侶に値ふ。（二一）架を山の足に結ぶ。（二二）八解潤流に鳴り、（二三）四禪巖曲に隱る。（二四）窈冥にして終に見えず、（二五）蕭條として欲すべきなし。願ふ所は之に從つて遊ばば、（二六）寸心此に於てか足らん。其四

【一四】九疑。山の名。
【一五】三山。蓬萊、方丈、瀛洲の三神山なり。
【一六】儲胥。儲胥觀は長安に在り。觀は宮闕なり。
【一七】昆明。池の名。長安に在り。
【一八】隴首。山頂なり。
【一九】桂枝。桂樹の枝。
【二〇】息心の侶。佛僧なり。
【二一】架。廬なり。
【二二】八解。佛經に見ゆる池の名。
【二三】四禪。四種の禪僧。
【二四】窈冥。深遠の貌。
【二五】蕭條。寂寥なり。
【二六】寸心。心をいふ。

【大意】山中佛僧多く廬を結んで山麓に住す。八解池澗水と共に流れ、四禪の人巖曲に隱居す。然も深遠にして見るべからず、寂寥にして欲念を絕たしむ。吾若し此輩に從つて遊ばば、以て吾が心を慰するに足らん。

(二七)君王逸趣を挻で、(二八)羽旆崇基に臨む。白雲(二九)玉趾に隨ひ、靑霞(三〇)桂旗に雜る。(三一)淹留して五藥を訪ひ、顧步して(三二)三芝を佇つ。於焉に(三三)鑣駕を仰ぎ、(三四)歲暮以て期となさん。其五

【大意】わが王逸志を馳せ車に駕して鍾山に遊ぶや、白雲其足に隨ひ、靑霞其旗に雜る。王乃ち憩留して仙藥を求む。已に王駕を此に仰ぐ。願くは老年に至るまで此山中に隱居せんことを。

【二七】君王。西陽王をいふ。逸趣は高尚なる志。
【二八】羽旆。旌旗なり。崇基は鍾山をいふ。
【二九】玉趾。王の足なり。
【三〇】桂旗。旗の名。
【三一】淹留。滯留なり。五藥は草木蟲石穀なり。
【三二】三芝。石芝、靈芝、肉芝の三仙藥なり。
【三三】鑣駕。王の車。鑣はクツワなり。
【三四】歲暮。老年に喩ふ。

(一)東園に宿す

沈休文

(二)陳王鬪雞の道、(三)安仁釆樵の路。東郊

【一】東園。沈の家園なり。
【二】陳王。陳思王曹植なり。其作名都篇に雞ヲ東郊ノ道ニ鬪ハス云云とあり。
【三】安仁。潘岳、字は安仁。其詩に東郊ヨリ出デ、憂心搖

豈昔に異らんや、聊か余が歩を閑うすべし。野徑既に(四)盤紆、(五)荒阡亦交互。(六)槿籬疎にして復た密、(七)荊扉新且つ故。樹頂風飈鳴り、草根霜露積る。(八)驚麕去つて息はず、(九)征鳥時に相顧る。茅棟(一〇)愁鴟嘯き、平岡寒兎走る。夕陰(一一)曾阜を帯び、長煙(一二)輕素を引く。(一三)飛光忽ち我に遒る。豈止歲の云に暮るるのみならんや。若し(一四)西山の藥を蒙らば、(一五)頽齡儻くは能く度らん。

【大意】此の東郊の道は昔陳王の雞を闘はせし處、潘安仁の薪を採りし處にして、今も昔に異らず。緩歩逍遙の好適地なり。野徑荒れて屈曲交互し、槿籬ありて或は密に或は疎に、荊扉ありて或は古く或は新し。風樹梢に鳴り露草根に積り、鹿は人に驚いて走り、鳥は時に相顧み、鴟茅屋に鳴き、兎岡上を走り、夕陽山丘に傾き、長煙長く曳く。日月相迫りて歲將に暮れんとす。若し西山の仙藥を服するを得ば、冀はくは老齡を終ふるを得ん。

搖ぶり、彼ノ萊田ニ遵ヒ、ココニ其樵ヲ采ルとあり。
【四】盤紆。屈曲なり。
【五】荒阡。荒れたる道。
【六】槿籬。ムクゲの垣。
【七】荊扉。イバラの門扉。
【八】驚麕。人を見て驚く鹿。
【九】征鳥。飛鳥なり。
【一〇】愁鴟。愁ふる梟。
【一一】曾阜。層丘なり。
【一二】輕素。うすぎぬ。
【一三】飛光。日月なり。
【一四】西山。仙人の居る山。
【一五】頽齡。老年なり。

(一)沈道士の館に遊ぶ　沈休文

【一】沈道士の館。道士沈恭の館なり。

(二)秦皇宇宙を御し、(三)漢帝武功を恢にす。歡娯人事盡れども、情性猶ほ未だ充たず。意を(四)三山の上に鋭くし、慕を(五)九霄の中に託し、既に(六)祈年觀を表し、復た(七)望仙宮を立つ。寧んぞ心道を好むが爲ならんや、直意の窮なきに由る。曰に余止足を知る。是れ願豐なるを須たず。(八)淹留すべき處に遇はば、便ち(九)微躬を息めんと欲す。山嶂遠く重疊し、竹樹近く(一〇)蒙籠たり。衿を開いて寒水に濯ぎ、帶を解いて清風に臨む。累ふ所は外物にあらず、念をなすこと(一一)玄空に在り。朋來れば(一二)石髓を握り、賓主輕鴻に駕し、都て人徑をして絶えしめ、唯雲路をして通ぜしめ、一擧(一三)倒景を凌ぎ、(一四)華嵩に適くを事とするなけん。言を寄す(一五)賞心の客、(一六)歳暮爾來りて同うせよと。

【大意】昔秦皇漢武天下を統御し、人世の歡樂を極めたれども、心尚ほ未だ足れりとせず。三山九天を慕ひ宮觀を建てて不老不死の仙道を修めんとせり。是れ心に道術を好めるにあらず、ただ人

【二】秦皇。秦の始皇帝。御は治なり。
【三】漢帝。漢の武帝。
【四】三山。蓬萊、方丈、瀛洲の三神山なり。
【五】九霄。九天なり。仙人の居る處。
【六】祈年觀。道觀の名。秦の穆公の造る所なり。
【七】望仙宮。漢の武帝の建つる所。
【八】淹留。滯留なり。
【九】微躬。微賤の身。
【一〇】蒙籠。茂ること。
【一一】玄空。虚無の大道。
【一二】石髓。仙藥なり。
【一三】倒景。天上なり。
【一四】華嵩。二山の名。仙人の居る處。
【一五】賞心の客。此館に遊びて幽賞する人。
【一六】歳暮。老年なり。

慾に驅られしのみ。余の如きは則ち然らず。既に止足の理（老子に足るを知れば辱められず、止るを知れば殆からずとあり）を知る。故に慾念深からず。留滯すべき地を得ば、便ち微軀を息めんことを期せり。今沈道士の館に遊ぶや、山重り樹茂り、寒水は以て塵襟を濯ぐべく、淸風は以て衣帶を淸むべし。ここに始めて外物の累を脫し、玄虛の道を樂むを得。若し朋の來るあらば共に仙藥を採り、賓主相携へて飛鴻に乘り、俗人の路を絕ちて仙路を開き、一たび天上に升りて登仙せん。敢て華嵩に入るを須ひざるなり。因つて幽賞を好む者に告げん、汝等若し世事に倦まば、來りて我と共に仙道を求めよと。

古意、(一)到長史溉が(二)瑯邪城に登るに酬ゆ　(三)徐　敬　業

(四)甘泉烽候を警め、
(五)上谷樓蘭を抵ぐ。
(六)此江谿險と稱す。
(七)茲山復た鬱盤。表裏形勝を窮め、襟帶盡く巖巒。(八)脩篁壯に下に屬り、(九)危樓峻く上を干す。(一〇)陴に登り起ちて

【一】到長史溉。到溉、字は茂灌、梁の司徒長史たり。
【二】琅邪城。潤州江寧縣の西北十八里にあり。
【三】徐敬業。徐悱、字は敬業。
【四】甘泉。山の名。烽候は烽火及び斥候。
【五】上谷。郡名。樓蘭は鄯善國なり。
【六】此江。岷江なり。
【七】茲山。鍾山なり。鬱盤は重厚の貌。
【八】脩篁。長き竹。
【九】危樓。高樓なり。
【一〇】陴。城上の女牆ひめがき。

(二一)遐望し、首を廻らして(二二)長安を見る。(二三)金溝灞滻に朝し、(二四)甬道鴛鸞に入る。(二五)鮮車華轂を鶩せ、馬に汗して銀鞍を躍らす。少年壯氣を負み、(二六)耿介立つて冠を衝く。(二七)燕山の石に紀さんことを懷ひ、(二八)函谷の丸を開かんことを思ふ。豈(二九)霸上の戯の如くならんや、路傍の觀を取るを羞づ。言を寄す封侯の者、(三〇)數奇良に歎ずべし。

【大意】昔匈奴の邊塞を犯すや、候騎烽火を甘泉に警め、又上谷郡を置き以て樓蘭國を拒げり。今この岷江險谿にして鍾山復た鬱盤たり。亦以て甘泉と上谷とに比するに足る。表裏ともに形勝をなし、山河襟帶して固をなし、美竹山の上下に叢生して壯色を加へ、高樓峻く聳えて雲を干せり。女牆に登りて遠く望めば、遥に長安城を見る。金溝水の洋洋として灞滻に入る、閣道相連りて鴛鸞殿に接する、(皆長安に比擬して言ふなり)輕車銀鞍往來織るが如き、亦皆之を雙眸の中に收むべし。余や少年、天下の未だ平ならざるを慨し、怒髪上りて冠を衝き、武功を燕然山に紀し、函谷の關門を開かんこと

【二一】遐望。遠望なり。
【二二】長安。丹陽城をいふ。
【二三】金溝。川の名。灞滻は二川の名。小水、大水に入るを朝といふ。
【二四】甬道。閣道なり。鴛鸞は殿の名。
【二五】鮮車、華轂。美しき車。
【二六】耿介。堅く節操を執り守ること。
【二七】燕山。後漢の竇憲、匈奴を破り、燕然山に登りて石に刻し功を紀せり。
【二八】函谷。後漢の王元、隗囂に說いて曰く、請ふ一丸の泥を以て大王の爲に函谷關を封ぜんと。
【二九】霸上。漢の時匈奴邊に寇す。劉禮をして霸上に屯せしむ。文帝其軍容を見て曰く、霸上の軍は兒戯のみと。
【三〇】數奇。不遇なり。

を期す。彼の劉禮の如く兒戲をなし、路傍の人をして之を觀て竊笑せしむるに倣ふ能はず。世の功成りて封侯を得る者に寄語す。余不遇にして功未だ立たず、良に慨歎すべしと。

巻の十二

詩　丙

詠　懐

詠懐詩十七首　（一）阮　嗣　宗

夜中寐ぬる能はず、起坐して鳴琴を彈ず。（二）薄帷明月を鑒み、清風我が衿を吹く。（三）孤鴻外野に號き、（四）翔鳥北林に鳴く。徘徊して將に何をか見んとする。憂思獨り心を傷ましむ。

【大意】此首は君（晉の文王、即ち司馬昭なり）の賢を遠ざけ佞を親むを傷むなり。（魏の末、司馬昭漸く權勢を得たるを以て、魏の步兵校尉たる阮籍は、禍の己に及ばんことを憂ふ）憂思のあまり夜眠る能はず。因つて琴を彈じて自ら慰むれば、明月薄帷を照し、清風襟を吹き、孤雁野外に鳴き、飛鳥北林に鳴き、轉た愁思を增しぬ。余獨り徘徊して何をか

【一】阮嗣宗。阮籍、字は嗣宗。晉の陳留尉氏の人なり。官步兵校尉に至る。
【二】薄帷。薄きトバリ。鑒は照なり。
【三】孤鴻。一羽の雁。賢臣の孤獨にして外に在る者に喩ふ。
【四】翔鳥。權臣の君側に在る者に喩ふ。君北に在り。故に北林といふ。

見んとする。ただ憂思の徒に心を痛ましむるのみ。

(五)二妃江濱に遊び、逍遙して風に順つて翔る。(六)交甫環珮を懷く。(七)婉孌として芬芳あり。(八)猗靡として情に歡愛し、(九)千載相忘れず。(一〇)傾城下蔡を迷はし、(一一)容好中腸に結ぼる。感激して憂思を生じ、(一二)萱草蘭房に樹う。(一三)膏沐誰が爲にか施さん。其れ雨ふれよとて(一四)朝陽を怨む。如何ぞ金石の交、一旦にして更に離傷する。

【大意】此首は男女の情篤きも、時ありて乖く事を述べ、君臣の道終へ難きに比するなり。江濱に二仙女あり、風に順つて逍遙し、交甫に遇ひて其珮を贈る。交甫之を懷けば芬芳馥郁たり。乃ち歡愛して千載相忘れざらんと期す。然も新人の美貌を見れば心之が爲に奪はれ、忽ち舊人を忘れて之を顧みざるに至り、舊人感激して憂思を生じ、萱草を閨房に植ゑて其憂

【五】二妃。江上の二仙女。
【六】交甫。韓詩外傳に鄭交甫將ニ楚ニ適カントス乃チ二女ニ遇フ、兩珠ノ大サ荆雞ノ卵ノ如クナルヲ佩ブとあり。劉注に珠ヲ解キテ甫ニ贈ル、甫受ケテ之ヲ懷ニシ、行クコト數步、女忽チ見エズ佩モ亦隨ツテ失スとあり。環珮は腰に佩ぶる玉。
【七】婉孌。美なる貌。
【八】猗靡。相思ひて忘れざる貌。
【九】千載。千年なり。
【一〇】傾城。美貌をいふ。李延年の歌に一顧スレバ人城ヲ傾クとあり。下蔡は地名。登徒子好色賦に臣ガ東家ノ子、嫣然トシテ一笑スレバ、陽城ヲ惑ハシ下蔡ヲ迷ハスとあり。
【一一】容好。美容なり。中腸は中心なり。
【一二】萱草。憂を忘るる草。蘭房は閨房。
【一三】膏沐。化粧なり。
【一四】朝陽。朝日なり。詩經衛風伯兮篇に其レ雨フレ其レ雨フレトイフトキ、杲杲タル出日アリとあり。夫の來れかしと祈るに、來らざるに喩ふ。

を忘れんとし、化粧を廢して情人の歸らざるを怨む。ああ金石の交も、忽ちに乖離して此に至るは何故ぞや。

(二五)嘉樹の下蹊を成す。東園に桃と李とあり。秋風(二六)飛藿を吹き、零落此より始まる。繁華も(二七)憔悴あり、堂上に(二八)荊杞を生ず。馬を驅り之を舍てて去り、去つて(二九)西山の趾に上る。一身自ら保んぜず。何ぞ況んや妻子を戀ひんや。凝霜野草に被り、歳暮れて亦云に已みぬ。

【大意】此首は桃李の開落を以て魏室の盛衰に比し、禍を避けて隱るるに如かざるを述ぶ。美樹は人の賞觀する者多く、其下自ら蹊を成すに至る。東園の桃李も滿開の時には人之を賞せしも、秋風一たび落葉を吹くに至れば、零落ここに始まり、復た顧るものなきに至る。夫れ繁華の後には必ず憔悴あり。歌舞宴樂の宮殿も今は堂上に荊杞を生じ、昔日の忠臣も今は却つて奸臣となる。余此に感じ馬を驅りて此を去り、伯夷叔齊の跡を慕ひて西山に隱る。かく己一身すら保んずる能はず。何ぞ妻子を顧るに遑あらんや。凝霜の野草に被るが如く、禍に罹れるもの少からず。萬事は茲に休せり。

昔日(三〇)繁華の子、(三一)安陵と龍陽と。(三二)夭夭たる桃李の花、(三三)灼灼として

【二五】嘉樹。美樹なり。諺に桃李言ハズ、下自ラ蹊ヲ成スとあり。
【二六】飛藿。落葉といふが如し。
【二七】憔悴。衰ふること。
【二八】荊杞。イバラとクコ。奸臣に喩ふ。卽ち晉の文王なり。
【二九】西山。伯夷叔齊の隱れし山。
【三〇】繁華の子。時めく人をいふ。
【三一】安陵。安陵君、名は纏、

輝光あり。(二四)悅懌九春の若く、(二五)磬折秋霜に似たり。(二六)流眄して姿媚を發し、言笑して芬芳を吐く。手を攜へて歡愛を等うし、(二七)宿昔衣裳を同うす。願くは雙飛の鳥となり、翼を比べて共に翺翔せん。(二八)丹靑明誓を著し、永世相忘れず。

【大意】此首は美人の色を以て君に事ふる事を述べ、晉の文王が魏に仕へて厚恩を受け、臣節を竭す能はず、將に簒奪を行はんとするを恨むなり。昔安陵君と龍陽君とあり、一は楚王に事へ一は魏王に事へ、共に一時に時めき、其容姿の美好なること、恰も桃李の豔を競ふが如く、よく君を懌ばし自ら屈すること、秋霜の萬物を摧折するが如く、顧眄言笑して歡樂を共にし、枕席を拂ひ、比翼の鳥となりて雙び翔けらんことを誓ひ、永世相忘れざらんことを期せり。今晉の文王かくの如くなる能はず。恨むべきの至なり。

(二九)天馬西北より出づ。由來東道に從ふ。(三〇)春秋託するあるにあらず。富貴焉んぞ常に保たん。淸露(三一)皐蘭に被り、凝霜野草を霑す。朝には媚少年たれども、夕暮には醜老と

寵を楚の恭王に得たり。龍陽君は魏王の寵嬖なり。

【二二】夭夭。美なる貌。

【二三】灼灼。明なる貌。

【二四】悅懌。悅樂なり。九春は春九十日なり。

【二五】磬折。磬は樂器の名。其形曲れり。己を曲げて君に事ふること。

【二六】流眄。秋波を送ること。

【二七】宿昔。昔時。

【二八】丹靑。繪具の分明なるが如く。

【二九】天馬。漢大宛國を伐ち駿馬を得、乃ち天馬歌を作る。

【三〇】春秋。歲月なり。託は止なり。

【三一】皐蘭。皐は澤なり。

成る。(三二)王子晉にあらざるよりは、誰か能く常に美好ならん。

【大意】此首は歳月の過ぎ易く、富貴の常にすべからざるを述ぶ。天馬はもと西北の國に產れたるも、終に東方漢國に來歸せるが如く、歳月は常に移りて須臾も止まらず、富貴も亦焉んぞ常にすべけんや。春露蘭澤を霑すと見るまに、忽ち秋霜の野草を枯らすに至る。朝には美少年なるも、夕には醜老の人となる。仙人にあらざるよりは、誰か永く其美を保つを得んや。

高きに登りて四野に臨み、北のかた(三三)青山の阿を望む。松栢岡岑を翳ひ、飛鳥鳴いて相過ぐ。感慨して辛酸を懷き、(三四)怨毒して常に苦多し。(三五)李公東門に悲み、(三六)蘇子三河を狹しとす。仁を求めて自ら仁を得、豈復た歎いて咨嗟せんや。

【大意】此首は人皆死あり、宜しく其分に安んじ、天命に委すべきを言ふ。高きに登りて四方を望めば、北方に丘墓あり松栢鬱然として茂り、飛鳥鳴いて過ぐ。誠に悲むべし。然も死は人の常分にして、避くべからざる所なり。かの李斯、蘇

【三二】王子晉。周の靈王の太子なり。仙人となる。
【三三】青山。丘墓なり。墓には松栢を植う。
【三四】怨毒。怨痛なり。
【三五】李公。李斯なり。秦に仕へて丞相となる。刑せらるるに臨み其子に謂つて曰く、吾汝と黃犬を牽き、上蔡の東門を出で、狡兎を逐はんと欲するも、其れ得べけんやと。
【三六】蘇子。蘇秦なり。河南、河東、河內を三河といふ。蘇秦三河の地狹少にして其志を逞うするに足らずとなし、乃ち六國に游說して其相印を佩ぶ。後刺客の殺す所となれり。

秦の如きは天命に安んずるを知らず、富貴を求めたるを以て、終に刑殺の禍を蒙れり。然ももと是れ己の招く所にして、論語に所謂仁を求めて仁を得たるものなり。敢て嗟嘆すべきにあらざるなり。

（三七）開秋涼氣を兆し、（三八）蟋蟀牀帷に鳴く。物に感じて（三九）殷憂を懷き、（四〇）悄悄として心を悲ましむ。多言焉んぞ告ぐる所あらん、繁辭將た誰にか訴へん。（四一）微風羅袂を吹き、（四二）明月淸暉を耀かす。晨雞高樹に鳴く。駕を命じて起つて旋歸す。

【大意】初秋始めて涼氣を催し、蟋蟀來りて我が牀帷に鳴く。物候の變遷に感じ、憂心悄悄として心を傷ましめ、告訴するに所なし。今や魏室凋衰して晉王權勢を專にす。雞は時を知りて高樹に鳴く。我亦時を知ること雞の如し。因つて駕を命じて山林に歸隱し、以て禍を避けんとす。

平生少年の時、輕薄にして絃歌を好み、西のかた咸陽の中に游び、（四三）趙李相經過す。娛樂未だ終極せざるに、白日忽ち（四四）蹉跎たり。馬を驅りて復た來り歸り、反顧して（四五）三

【三七】開秋。初秋なり。
【三八】蟋蟀。こほろぎ、詩經に十月蟋蟀我ガ牀下ニ入ルとあり。
【三九】殷憂。憂なり。
【四〇】悄悄。憂ふる貌。
【四一】微風。魏の將に滅びんとするに喩ふ。羅袂は薄絹の袂。
【四二】明月。晉王の權勢を專にするに喩ふ。
【四三】趙李。漢の成帝の寵姬・趙飛燕、漢の武帝の寵姬、李夫人なり。共に咸陽の人にして歌舞を善くす。
【四四】蹉跎。空しく時を失ふこと。
【四五】三河。前に見ゆ。

河を望む。黃金（四六）百鎰盡き、資用常に苦多し。北のかた（四七）太行の道に臨む。路を失ひて將に如何せんとする。

【大意】此首は歡樂常なく、歸來貧困、終に路を失ひて事願と違ふを言ふ。われ少年の時、絃歌の樂を好み、咸陽に遊びて、趙李の家に出入せり。歡樂未だ盡きざるに、日月早くも過ぎ去り、馬を驅りて歸り來りぬ。更に三河の名都に遊ばんとすれども、黃金用ひ盡して資用足らず。恰も楚に之かんとして北行するが如く（楚は南方の國なり）事志と違ひ今更詮方なし。

昔聞く（四八）東陵の瓜、近く（四九）青門の外に在り。畛を連ねて（五〇）阡陌に距り、（五一）子母相鉤帶し、五色朝日に曜き、（五二）嘉賓四面に會す。（五三）膏火は自ら煎熬し、多財は患害をなす。布衣身を終るべし。寵

【四六】百鎰。二十四兩を一鎰となす。

【四七】太行。山の名。戰國策に魏王邯鄲ヲ攻メント欲ス、季良往イテ王ニ見エテ曰ク、今臣來ルトキ人ヲ太行ニ見ル、乃チ北面シテ其馬ヲ持シ、臣ニ告ゲテ曰ク、我レ楚ニ之カント欲スト、臣曰ク、楚ニ之クニ奚爲レゾ北面スルト、曰ク吾ガ馬良シト、臣曰ク良シト雖此レ楚ノ道ニアラズト、曰ク吾ガ用多シト、臣曰ク多シト雖此レ楚ニ之クノ路ニアラズト、曰ク吾御ヲ善クスト、此ノ數者愈善クシテ楚ヲ離ルルコト愈遠キノミ、今王霸王タラント欲シ、國ノ大、兵ノ精鋭ヲ恃ミ、邯鄲ヲ攻メテ以テ地ヲ廣メント欲スルハ、猶ホ楚ニ之カントシテ北行スルガ如シとあり。

【四八】東陵。邵平は秦の東陵侯たり。秦の滅ぶるや布衣となり瓜を長安城東に種う。瓜美なり。故に時俗之を東陵の瓜といふ。

【四九】青門。漢書に霸城門ハ民間ニ謂ハユル青門ナリとあり。

【五〇】阡陌。田間の道。

【五一】子母。瓜の大なるもの小なるもの。鉤帶は連綴なり。

【五二】嘉賓。賓客なり。

【五三】膏火。あぶら。煎熬は燒くこと。

祿豈賴むに足らんや。

【大意】此首は邵平の事を借りて、寵祿の恃むに足らざる事を言ふ。昔東陵侯邵平布衣となり、瓜を青門の外に種ゑ、阡陌を連ね、子母累累として五色をなす。啻に身を養ふに足るのみならず、亦以て賓客に供するに足れりと。夫れ油は明を以て燒かれ、人は財多きを以て禍を招く。人宜しく布衣を以て一生を終るべし。寵祿は賴むに足らざるなり。

步して(五四)上東門を出で、北のかた(五五)首陽の岑を望めば、下に(五六)采薇の士あり、上に(五七)嘉樹の林あり。(五八)良辰何許にか在る。(五九)凝霜衣襟を霑し、寒風山岡に振ひ、玄雲重陰を起し、(六〇)鳴雁飛んで南に征き、(六一)鶗鴂哀音を發す。(六二)素質商聲に由る。(六三)悽愴として我が心を傷ましむ。

【大意】此首は魏衰へ忠臣義士斬艾せられて餘すなきを悲み、惟伯夷叔齊に倣ひ自ら全うすべきを言ふ。步して上東門を出で首陽山を望めば、山下に採薇の士あり、山上には美樹あり。吾亦かの山中に棲隱すべきなり。和平の時今何處にか在る。風霜更〻至り凋衰一にあらず。賢臣は遠く去りて邪臣は讒佞を事と

【五四】上東門。洛陽の東門なり。
【五五】首陽。山の名。伯夷叔齊の隱れし處。
【五六】采薇。采は採、薇はワラビ、伯夷叔齊首陽山に隱れ、薇を採りて之を食ふ。
【五七】嘉樹。美樹なり。
【五八】良辰。和平の時なり。
【五九】凝霜。寒風、玄雲、晉の文王に喩ふ。
【六〇】鳴雁。賢臣に喩ふ。
【六一】鶗鴂。鳥の名。邪臣に喩ふ。
【六二】素質。凋衰の質。商聲は秋聲なり。
【六三】悽愴。悲痛なり。

す。草木の凋衰は秋聲の吹き荒ぶに由り、國家の衰弱は姦臣事を用ふるに由る。是を以て我が心をして悲傷せしむ。

昔年十四五、(六四)志尙書詩を好む。(六五)褐を被りて珠玉を懷き、(六六)顏閔と相與に期す。軒を開いて四野に臨み、高きに登りて思ふ所あり。丘墓山岡を蔽ふ。萬代同じく一時。千秋萬歲の後、榮名安んぞ之く所あらん。乃ち悟る(六七)羨門子、(六八)噭噭として今自ら嗤はしむ。

【大意】昔少年の時、聖賢の道を慕ひ、好んで詩書を讀み、身には褐衣を纏へども心には珠玉を抱き、顏閔と相伍せんことを願ひしも、今軒を開いて四方を望み、高處に登りて思ひめぐらすに、死は萬代同一の歸結にして、人の免れざる所、丘墓の累累たるを見て明かなり。たとひ榮名を立つるも、死後復た何の用をかなさん。因つて羨門子が暴秦の禍を避け、神仙に託して世を逃れたるを悟り、禮法を蔑視し詩酒に放浪して世人をして笑はしめん。

(六九)蓬池の上に徘徊し、還顧して(七〇)太梁を望めば、(七一)綠水洪波を揚げ、(七二)曠野莽として茫茫たり。走

【六四】志尙。尙はたつとび喜ぶこと。
【六五】褐。布衣なり。
【六六】顏閔。顏回及び閔損、ともに孔子の弟子。
【六七】羨門子。古の仙人の名。
【六八】噭噭。叫ぶ聲。
【六九】蓬池。池の名。河南開封縣の東北にあり。
【七〇】太梁。戰國の時の魏の都今借りて魏の王室を指す。
【七一】綠水。權臣に喩ふ。權臣とは司馬師なり。洪波は大波なり。
【七二】曠野。廣き野。莽は草なり。茫茫は廣大なる貌。

獸交横して馳せ、飛鳥相隨つて翔る。是時（七三）鶉火中し、（七四）日月正に相望む。（七五）朔風嚴寒を厲くし、陰氣微霜を下す。（七六）羈旅疇匹なく、（七七）俛仰して哀傷を懷く。小人は其功を計り、君子は其常を道とす。豈終に（七八）憔悴するを惜まんや、詠言して斯章を著す。

【大意】此首は眺望の景を借りて、時事を慨するなり。蓬池の上に在りて太梁を望めば、綠水大波を揚げ曠野徒に荒れ、鳥獸亂れ奔る。時しも鶉火中し日月正に相望むや、北風吹き荒びて霜露を降し、其害忍ぶべからず。（當時司馬師暴威を振ひ、嘉平六年三月、魏の張皇后を廢し、九月遂に帝を廢して齊王となす。帝を廢せるは所謂鶉火中し日月相望む頃なり。）余は行旅の中に在りて、同志の士の相伴ふ者なく之を見て徒に哀傷するのみ。夫れ小人は邪諂を以て功を計るも、君子は正直を守りて常道となす。余豈己の凋衰を惜まんや。聊か思ふ所を述べて此詩を作る。

炎暑惟れ茲夏、三旬將に移らんと欲す。芳樹綠葉を垂れ、清雲自ら（七九）透迤たり。四時更〻代謝し、日月遞に（八〇）差馳す。空堂の上に徘徊し、（八一）忉怛として我を知るなし。願くは歡好を卒ふるを覩ん。別

【七三】鶉火。星の名。此の星夕方に正南に現るゝを鶉火中すといふなり。鶉火の中するは九十月頃なり。
【七四】日月。日月の正しく相對するは十五日なり。
【七五】朔風。北風なり。奸臣に喩ふ。
【七六】羈旅。行旅の客。疇匹は相手なり。
【七七】俛仰。俯仰なり。
【七八】憔悴。凋衰なり。
【七九】透迤。長遠なり。
【八〇】差馳。相次いで奔馳するをいふ。
【八一】忉怛。憂傷なり。

離を悲むを見じ。

【大意】夏節過ぎて氣化將に移らんとす。時に綠樹葉を垂れ、青雲逶迤たり。四時代〻移り日月遞に運り、年壽將に盡きんとすれども、人の己を知る者なし。誠に悲むべきなり。恐らくは讒邪を被り横まに擯斥せられんことを。希はくは歡好を終ふるを得て、離別の悲に遇はざらんことを。

(八二)灼灼として西に頽る日、餘光我が衣を照す。(八三)廻風四壁を吹き、寒鳥相因り依る。(八四)周周尚ほ羽を銜み、(八五)蛩蛩亦飢を念ふ。如何ぞ(八六)當路の子、(八七)磬折して歸る所を忘るる。豈(八八)夸譽の名の爲にせんや。憔悴して心を悲ましむ。寧ろ(八九)鷰雀と與に翔るも、(九〇)黄鵠に隨つて飛ばされ。黄鵠四海に遊ぶ。中路將に安にか歸らんとする。

【大意】今や魏室既に衰へたれども、尚ほ餘德の人に及ぶあり。然るに晉の權勢を得たるを以て、

【八二】灼灼。光明の貌。灼灼の二句は魏に喩ふ。

【八三】廻風。以下二句は晉に喩ふ。

【八四】周周。鳥の名。韓非子に鳥周周トイフ者アリ、首重クシテ尾屈ス、將ニ河ニ飲マント欲スレバ、則チ必ズ顚ル、乃チ羽ヲ銜ンデ飲ムとあり。

【八五】蛩蛩。卬卬に同じ。蟲の名。爾雅に西方ニ比肩獸アリ卬卬岠虛ト比ス、卬卬岠虛ノ爲ニ甘草ヲ齧ム、モシ難アレバ卬卬岠虛負ヒテ走ルとあり。

【八六】當路。仕途に在る人をいふ。

【八七】磬折。磬は樂器の名。其形曲れり。曲從するをいふ。

【八八】夸譽。名譽に誇ること。

【八九】鷰雀。ともに小鳥なり。

【九〇】黄鵠。大鳥の名。

小臣相率ゐて之に依り、晉の君臣相救援すること、周周の河に飮むとき其羽を銜み、蛩蛩の飢ゑて食はんとするとき、比肩獸の美草を齧むが如し。當路の大臣皆曲從して晉氏に媚ぶるも、豈名譽を得るを得んや。ただ人をして悲傷せしむるに終らんのみ。人は宜しく分に安んずべし。沖天の質なくして高飛遠擧せんと欲するも、必ず家の歸るべきなきに至らんのみ。

獨り空堂の上に坐す。誰か與に歡すべき者ぞ。門を出でて永路に臨むに、行く車馬を見ず。高きに登りて(九一)九州を望めば、(九二)悠悠として曠野分る。(九三)孤鳥西北に飛び、離獸東南に下る。日暮親友を思ふ。(九四)晤言して用て自ら寫かん。

【大意】　此首は己の世と合はざるに因り、故人を眷戀する意を述ぶ。余獨り堂上に坐し歡樂を共にする者なし。因つて門を出でて望むも、車に駕して來り訪ふ者なし。乃ち去つて高處に登りて遙に望めば、曠野遠く連り、孤鳥離獸の飛走するを見て益々悲傷を加へぬ。時に日既に暮れ親友を思ふの情に堪へず。願くは之と相會談して胸中の憂を除くを得んことを。

(九五)北里奇舞多く、(九六)濮上微音あり。輕薄閑游の子、俯仰して乍ち浮沈す。捷徑狹路に從ひ、(九七)僶俛し

【九一】九州。天下といふが如し。
【九二】悠悠。平遠の貌。曠野は廣き野。
【九三】孤鳥。以下二句は人民東西に離散するに喩ふ。
【九四】晤言。相對して語ること。
【九五】北里。史記に紂師涓ヲシテ新聲北里ノ舞ヲ作ラシムとあり。
【九六】濮上。禮記に桑間濮上ノ音ハ亡國ノ音ナリとあり。
【九七】僶俛。俯仰なり。

て荒淫に趣く。焉んぞ（九八）王子喬を見ん、雲に乘りて（九九）鄧林に翔る。獨り延年の術あり、以て我が心を慰むべし。

【大意】世の輕薄兒は俗に隨つて浮沈し、淫靡なる歌舞に耽り、彼の大道を棄てて捷徑を取り、恬淡を尙ばずして荒淫に赴く。誠に憐むべきなり。昔王子喬は俗を離れて輕擧し、性を全うし眞を保てり。其人已に見るべからざるも、其法尙ほ未だ滅びず。余則ち其延年の術を學び、以て我が心を慰めんとす。

（一〇〇）湛湛たる長江の水、上に楓樹林あり。（一〇一）皐蘭徑路に被り、（一〇二）靑驪逝いて駸駸たり。遠く望めば人をして悲ましめ、春氣我が心を感ぜしむ。（一〇三）三楚に秀士多く、（一〇四）朝雲荒淫を進む。（一〇五）朱華芬芳を振ひ、（一〇六）高蔡相追尋す。一たび（一〇七）黃雀の爲に哀み、涕下りて誰か能く禁せん。

【大意】此首は人生老い易し。高位に居りて

【九八】王子喬。古の仙人の名。
【九九】鄧林。林の名。山海經に夸父、日ト競逐シテ渴死ス、其杖化シテ鄧林トナルとあり。
【一〇〇】湛湛。水の平なる貌。長江は楊子江なり。
【一〇一】皐蘭。皐は澤なり。
【一〇二】靑驪。黑馬なり。駸駸は馬の行き進む貌。
【一〇三】三楚。郢、鄂、壽春をいふ。ただ楚といふに同じ。秀士は英士といふが如し。宋玉を指す。
【一〇四】朝雲。宋玉高唐賦を作りて曰く、朝ニハ朝雲トナリ、暮ニハ行雨トナルと、以て荒淫の事を其君にすすむ。
【一〇五】朱華。榮盛に喩ふ。
【一〇六】高蔡。地名。追逐は蔡の靈侯の如く高蔡の地に佳人を追尋するなり。
【一〇七】黃雀。戰國策に莊辛、楚王ヲ諫メテ曰ク、郢必ズ危カラン、王獨リ黃雀ノ俯シテ白粒ヲ啄ミ、仰イデ茂樹ニ栖ミ、自ラ以テ人ト爭フナシトナス夫ノ公子王孫、其頸ヲ以テ的トナスヲ知ラザルナリ、黃雀ハ其小ナル者ナリ、蔡ノ靈侯

荒淫なれば、徒に禍を速くべき事を述ぶ。

長江湛湛として楓樹の下に流れ、青驪駸駸として蘭徑の中に走る。日月の過ぎ易きは、恰も此馬と此江との如し。之を望めば我をして悲傷せしむ。昔楚に英士あり宋玉といふ。高唐賦を作りて君に荒淫を勸めぬ。人もし邪言に惑ひ荒淫を事とし、朱華の芬香を吐き蔡侯の美女を追ふに傚はば、末路必ず敗亡を速き、黄雀の危きに遇ふべし。余之を悲み涙流れて自ら禁ずる能はず。

是ニ因リテ左ニ幼妾ヲ抱キ右ニ嬖女ヲ擁シ、之ト高蔡ノ中ニ馳騁シ、國ヲ以テ事トナサズ、太子發命ヲ靈王ニ受ケ、繫クルニ朱絲ヲ以テスルヲ知ラザルナリ、蔡ノ靈侯ノ事ハ其小ナル者ナリ、君王是ニ因リテ州侯ヲ左ニシ夏侯ヲ右ニシ、雲夢ノ中ニ馳セ、天下國家ヲ以テ事トナサズ、カノ穰侯命ヲ秦王ニ受ケ、己ヲ黽塞ノ外ニ投ゼントスルヲ知ラズト、楚王聞テ顏色變ジ四體戰慄スとあり。

秋懷の詩　　　謝惠連

平生志意なく、(一)少小にして憂患に嬰る。如何ぞ苦心に(二)乘せん。矧や復た秋の晏るに値ふをや。(三)皎皎として天月明に、(四)奕奕として(五)河宿爛たり。(六)蕭瑟たり風を含むの蟬、(七)寥唳た

【一】少小。少年の時。
【二】乘。淩ぎ勝つこと。
【三】皎皎。明なる貌。
【四】奕奕。盛なる貌。
【五】河宿。あまのがは。爛は光る貌。
【六】蕭瑟。物さびしき貌。
【七】寥唳。鴈の聲。

り雲を度るの鴈。(八)寒商淸閨に動き、孤燈(九)幽幔に曖し。(一〇)耿介にして繁慮積り、(一一)展轉して長宵半なり。(一二)夷險豫め謀り難く、(一三)倚伏前算に昧し。(一四)相如が達を好むと雖も、(一五)長卿が慢に同うせず。頗る(一六)鄭生が偃を悦ぶも、(一七)白衣の官を取るなし。未だ古人の心を知らず、且く性の翫む所に從ふ。賓至らば觴を命ずべく、朋來らば當に翰を染むべし。高臺驟〻登踐し、淸淺時に(一八)陵亂す。(一九)頽魄再び圓ならず、(二〇)傾羲兩たび且なり難し。金石も終に消毀し、丹靑も蹔く(二一)彫煥す。各(二二)玄髮の歡を勉め、(二三)白首の歎を貽すなかれ。歌に因りて遂に賦を成し、聊か以て(二四)親串に布く。

【大意】余平生思慮淺きを以て、少年にして憂患に罹れり。如何ぞ自ら此苦に克つを得ん。況んや此の悲秋に遇へるをや。天上の明月河漢、蕭瑟たる蟬聲鴈語、閨中の寒風孤燈、いづれか

【八】寒商。秋風なり。
【九】幽幔。幽閨のとばり。
【一〇】耿介。孤獨なり。
【一一】展轉。眠られずして寢返りすること。
【一二】夷險。安危なり。
【一三】倚伏。禍福なり。鶡冠子に禍ハ福ノ倚ル所、福ハ禍ノ伏スル所とあり。前算は豫測なり。
【一四】相如。漢の司馬相如なり。達は禮法に拘らぬこと。
【一五】長卿。司馬相如の字。
【一六】鄭生。後漢の鄭均、東平任城の人、再び尙書に遷る、後病んで官を辭して歸る、帝東巡して任城を過ぎ、均が家に幸し、尙書の祿を賜ひ以て其身を終へしむ、故に人號して白衣尙書といふ。偃は偃息して仕へざるをいふ。
【一七】白衣官。白衣は布衣なり。仕へずして祿を食むをいふ。
【一八】陵亂。流を渡ること。
【一九】頽魄。缺けたる月。
【二〇】傾羲。傾きたる日。
【二一】彫煥。光明の貌。
【二二】玄髮。黑髮なり。少年の時をいふ。
【二三】白首。白頭なり。衰老なり。
【二四】親串。親狎の人。

物を思はしめざる。是を以て半夜寢ねられず、獨り展轉反側するのみ。夫れ人の安危禍福は豫め測るべからず。放達隱居は好む所なるも、徒食驕慢は余の取らざる所なり。古人はいさ知らず、余は余が性の好む所に從ひ、賓至り朋來らば、共に杯を銜み筆を揮ひ、時に高樓に登り清淺を涉りて行樂せん。少年は再び來らず。たとひ功名を金石に勒し、形像を丹青に圖するも、皆長久なる能はず。功名を建つるは不用に屬せり。ただ當に歡樂を勉め、衰老の歎を貽すべからず。歌詠に因つて此詩を賦し、以て親狎の人に贈る。

臨終の詩　（一）歐陽堅石

（二）伯陽は西戎に適き、孔子は（三）蠻に居らんと欲す。苟も四方の志を懷かば、（四）所在游盤すべし。況んや乃ち（五）屯蹇に遭

【一】歐陽堅石。名は建、字は堅石、晉の渤海の人、石崇の外甥なり。馮翊太守たり、趙王倫の關中を擾亂するや、建每に匡正して從はず、私に楚王偉を迎へて之を立てんと欲す、是に由りて隙あり、倫の簒立するに及び、淮南王允に勸めて倫を誅せんとす、未だ行はずして事覺る、倫乃ち建及び母妻を收め、少長となく皆斬す、建刑に臨んで是詩を作る。

【二】伯陽。老子なり。姓は李、字は伯陽、周の無道なるを見て遂に胡に入る、卽ち西戎なり。

【三】蠻。論語に子九夷ニ居ラント欲スとあり。夷は卽ち蠻なり。

【四】所在。到る處。游盤は遊樂なり。

【五】屯蹇。艱難なり。

ひ、(六)顚沛して災患に遇ふをや。(七)古人は機兆に達す、馬に策うちて近關に游ぶ。咨余(八)沖にして且つ暗、責を抱いて微官を守り、(九)潛圖密に已に構へ、此(一〇)禍福の端を成す。(一一)恢恢たる六合の間、四海一に何ぞ寬き。(一二)天網紘綱を布き、足を投じて安きを獲ず。松栢(一三)隆冬に悴み、然る後歲寒を知る。(一四)太行の險を涉らずんば、誰か斯路の難きを知らん。直僞事に因りて顯れ、人情豫め觀難し。窮達(一五)定分あり、慷慨して復た何をか歎かん。上は慈母の恩に負き、(一六)痛酷して心肝を摧き、下は憐む所の女を顧ひ、(一七)惻惻として心中に酸む。二子弃てて遺るるが若し、念ふに皆(一八)凶殘に遘ふ。一身の死を惜まず、此を惟ひて循環の如し。紙を執れば五情塞り、筆を揮へば涕(一九)汍瀾たり。

【大意】昔老子は西戎に適き、孔子は九夷に居らんと欲す。苟も四方の志を抱く者は隨處に遊樂すべきなり。況んや世路の難に遇ひ災患に罹るをや。蘧伯玉は機先を達觀し、近關より衞國を去れ

【六】顚沛。傾覆なり。
【七】古人。衞の蘧伯玉をいふ。衞の大夫孫林父將に亂を作さんとす、蘧伯玉遂に去り、近關より出づ。機兆は事の起る前兆。
【八】沖。童なり。
【九】潛圖。趙王倫を廢せんとの陰謀なり。
【一〇】禍福。禍なり。福の字は意極めて輕し。
【一一】恢恢。廣大なる貌。六合は上下四方をいふ。
【一二】天網。趙王倫の忠良の士を捕ふるに喩ふ。紘綱は網を繫ぐ索なり。
【一三】隆冬。嚴冬なり。
【一四】太行。山の名。
【一五】定分。定まれる分限。
【一六】痛酷。苦痛なり。
【一七】惻惻。悲傷の貌。
【一八】凶殘。賊害なり。
【一九】汍瀾。涙の流るる貌。

り。余幼稚にして暗愚、微官を守りて去就を知らず、陰謀を構へて此禍に罹る。今や趙王倫忠良を網捕し、將に之を害せんとす。足を投ずるに處なし。松栢の凋むを見て歲寒を知るべく、世亂れて忠良始めて見はる。世路の難は太行の險よりも甚し。然も人情の曲直は事實に因つて分明なり。窮達もとより定分あり。今に及んで何をか歎かん。ただ慈母の恩に背き妻女の憐むべきを思へば、心悲痛して忍ぶべからず。思ふに二子亦危害に遇ひしなるべし。吾が身は惜むに足らざれども、此を思へば憂愁の情窮りなし。今紙筆を執りて之を賦せんとすれば、涕流れて止むる能はず。

哀傷

(一)幽憤の詩

嵆叔夜

嗟余(二)薄祜にして、少うして(三)不造に遭ひ、(四)哀煢にして識なく、越に(五)繦褓に在り。母兄(六)鞠育し、慈ありて威なし。愛を恃んで姐を肆にし、訓へず師あらず。爰に(七)冠帶に及ぶも、寵を憑んで自ら放にし、心を抗げて古を希ひ、

【一】幽憤。嵆叔夜、呂安の事の爲に詩を作りて自ら責む。呂安の事は思舊賦に見ゆ。
【二】薄祜。祜は福なり。叔夜少うして父を失へるをいふ。
【三】不造。造は成なり。家道の成らざるをいふ。
【四】哀煢。孤獨なり。
【五】繦褓。小兒を背上に約する紐。
【六】鞠育。養育なり。
【七】冠帶。元服すること。

其の尙ふ所に任す。好を老莊に託し、物を賤んで身を貴ぶ。志(八)樸を守るに在り、素を養ひて眞を全うす。曰に余不敏にして、善を好み人に闇し。(九)子玉の敗るる、屢(一〇)惟塵を增す。(一一)大人含弘にして、垢を藏し恥を懷す。民の僻多き、政己に由らず。惟れ此(一二)褊心、(一三)臧否を顯明し、感悟して愆を思ひ、(一四)怛として創痏の若し。其過を寡くせんと欲すれども、謗議沸騰す。性物を傷らざるに、頻に怨憎を致す。昔は(一五)柳惠に慙ぢ、今は(一六)孫登に愧づ。内は(一七)宿心に負き、外は良朋に恧づ。仰いで(一八)嚴鄭を慕ひ、道を樂んで閑居す。世と營むことなければ、神氣(一九)晏如たり。咨予淑からず、(二〇)嬰累虞ること多し。天より降るにあらず、寔に頑疎に由る。理弊れて患結び、卒に(二一)囹圄を致す。(二二)對答鄙訊、此の(二三)幽阻に繫がる。實に(二四)訟寃に

【八】樸。質朴なり。
【九】子玉。楚の大夫なり。
【一〇】惟塵。詩經に大車ヲ將フルナカレ、コレ塵冥冥タリとあり。鄭玄曰く、大夫小人を進擧し、たまたま自ら憂患をなすに喩ふと。
【一一】大人。天子なり。
【一二】褊心。狹小の心、叔夜自ら謙して言ふ。
【一三】臧否。善惡なり。
【一四】怛。傷み悲むこと。創痏はキリキズ。
【一五】柳惠。柳下惠なり。三たび黜けらるれども慍色なし。
【一六】孫登。人名。叔夜初め藥を中山の北に採り、隱者孫登を見、之と言はんと欲す、登默然として對へず、年を踰へて將に去らんとす、康曰く先生竟に言ふなきかと、登乃ち曰く、子は才多くして識寡し難いかな人の世に免るることと。
【一七】宿心。素志なり。
【一八】嚴鄭。嚴君平、鄭子眞、皆道を樂んで隱居せし人。
【一九】晏如。無事なり。
【二〇】嬰累。罪に罹ること。
【二一】囹圄。獄舍なり。
【二二】對答。訊問に答ふること。鄙訊は訊問を鄙むなり。
【二三】幽阻。牢獄なり。
【二四】訟寃。訴訟の寃濫なること。

恥づ。時我と與ならず。義直なりといふと雖も、神辱められ志沮む。身を（二三）滄浪に濯ぐも、豈云に能く補あらんや。

【大意】余は不幸にして、幼少の時、父を失ひ、孤獨にして襁褓の中に在り。母と兄とに養育せられ、ただ慈愛を蒙りて明嚴の訓戒を受けず。故に愛を恃みて驕恣なり。長じて元服を加ふるも、尚ほ母兄の寵を憑みて放逸なり。心を擧げて古人の道を慕ひ、己の好む所に任せ、老莊の道を脩め、物を賤み身を貴び、質朴を守りて天眞を全うせんことを期す。ああ余不敏にして善道を好むも人事に暗し。(呂安と交りしをいふ) 今や楚の令尹子文が子玉を擧げて令尹となし、屢失敗を招けるが如し。(鍾會叔夜を怨む。時に呂安の兄巽、安が妻と姦通す。巽大將軍の長史たり。遂に誣を構へて將に安を害せんとす。鍾會大將軍と善し。屢ゝ大將軍に叔夜を誅せんことを勸め、呂安と同罪にす。大將軍呂巽を用ひて長史となすは、恰も子文が子玉を用ひて當らざるが如し。呂巽・鍾會皆小人なり。大將軍其言を用ふるは、即ち惟塵の刺に當る) 天子含弘の德あり、垢穢を包藏して吾が過を察せず。ただ左右の邪臣事を用ひ、政天子の己に由らざらしめ、無辜の人をして罪を得しむ。吾が狹小の心朝廷の善惡を明にし、感悟して其過を思へば、痛割傷の如し。自ら其過を寡くせんとすれば、謗議沸騰す。吾が性物を傷害

【二三】滄浪。川の名。

せざるに、何ぞ頻に怨憎の辭を招くや。實に吾が素志に違ひ亦友朋に愧づる所なり。偏に嚴鄭の隱居して道を樂み、世と交らず心常に無事なるに倣はんとす。然も我不善にして此の罪累に罹る。思ふに此罪累たる、天より降れるにあらず、皆我が頑疎の致す所なり。邪臣私情を用ひ、政理の道を擁蔽し、遂に患難を結成して我を獄に投ずるに至る。謗訟の寃濫なるに恥づるも、時我に利あらず。自ら義直なりといふも、獄吏の辱を如何せん。心志已に辱を蒙る。身を滄浪の水に洗ふとも、何の補あらんや。

（二六）嗈嗈たる鳴鴈、翼を奮ひて北に游び、時に順つて動き、意を得て憂を忘る。嗟我れ憤歎し、曾て能く儔きことなし。事願と違ひ、この（二七）淹留に遘ふ。窮達命あり、亦又何をか求めん。（二八）古人言ふあり。善も名に近づく莫れと。時に奉じて恭默すれば、咎悔生せず。（二九）萬石周愼にして、親を安んじ榮を保てり。世務（三〇）紛紜して、祗に予が情を攪す。安樂必ず誡むれば、乃ち利貞を終る。（三一）煌煌たる靈芝、一年に三たび秀づ。予獨り何をかする、志あれども就らず。難に懲りて復せんことを思へば、心焉に內に疚む。庶はくは將來を勗め、馨もなく臭もなけん。

【二六】嗈嗈。鴈の聲。鴈は春北に往き秋南に歸る。
【二七】淹留。囚繫せられて久しく留ること。
【二八】古人。莊子なり。莊子に善ヲナスモ名ニ近ヅクナカレ惡ヲナスモ刑ニ近ヅクナカレとあり。
【二九】萬石。漢の石奮、父子五人各二千石なり。天子號して萬石君となす。
【三〇】紛紜。亂るるなり。
【三一】煌煌。光る貌。靈芝は仙草なり。一年に三たび花咲く、之を服すれば長生す。

薇を（三二）山阿に采り、（三三）髮を巖岫に散じ、永嘯長吟して、性を頤ひ壽を養はん。

【大意】春鴈飛んで北に往き、時節に順ひ意を得て憂を忘る。われ獨り自ら嗟歎し、能く之と比するなし。事志と違ひ遂に囚繋せられたるも、窮達は天命の致す所なれば、苟も免れんことを求めず。莊子曰く、善をなすも名に近づく勿れと。時に隨つて恭默すれば、禍悔起るなし。彼の萬石君父子皆周愼謹密にして、親を安んじ榮位を保てり。今世亂れて紛紛たるも、安樂の時自ら誡むれば、必ず利貞を終るを得。靈芝一年に三秀す。吾之を服して長生を計れども志未だ就らず。患難に懲りて自ら反復せんと欲すれば、心之を疚む。ただ將來を勉めて譽もなく毀もなからしめ、巖穴の間に隱居し、性を養ひ壽を全うせんのみ。

【三二】山阿。山隈なり。
【三三】髮。冠冕の爲に拘束せられざるを散髮といふ。

（一）七哀の詩　　曹子建

明月高樓を照し、流光正に徘徊す。上に愁思の婦あり、悲歎して餘哀あり。借問す歎ずる者は誰ぞ。言ふ是れ（二）宕子の妻。君行きて十年を踰

【一】七哀。呂向云く痛ンデ哀ミ、義ニシテ哀ミ、感ジテ哀ミ、怨ンデ哀ミ、耳目聞見シテ哀ミ、口嘆ジテ哀ミ、鼻酸シテ哀ム、之ヲ七哀トイフと。
【二】宕子。宕一に蕩に作る、蕩子は放蕩者なり。

え、孤妾常に獨棲す。君は淸路の塵の若く、妾は濁水の泥の若し。浮沈各〻勢を異にす。會合何れの時にか諧はん。願くは㊂西南風となり、長逝して君が懷に入らん。君が懷良に開かずんば、賤妾當に何にか依るべき。

【大意】子建は文帝の同母弟なれども、今は浮沈勢を異にし、兄弟和親せず。故に孤妾を以て自ら喩へ、文帝を以て夫に喩へ、此詩を作れるなり。明月高樓を照し、流光恰も水の漂ふが如し。樓上に愁婦あり、悲歎して餘哀を含む。其名を問へば蕩子の妻なりといふ。夫既に去つて十年歸らず、妻獨り空閨を守る。之を譬ふれば夫は淸路の塵の如く、妻は濁水の泥の如し。各〻浮沈の勢を異にし相遇ふの期なし。西南風となりて夫の懷に入らんことを願へども、夫の懷若し開かずんば、歸依する所なし。

【三】西南風。西南は坤地なり。坤は妻の道なり。此詩雍丘に在る時の作なり、雍丘は魏都の西南に在り、故にいふ。

㈠七哀の詩二首　　王仲宣

㈡西京亂れて象なく、㈢豺虎方に患を遘す。復た中國を棄てて去り、身を遠ざけて㈣荊蠻に適く。親戚我に對して悲み、朋友相追攀す。門を出れども見る所なく、白骨平原を蔽ふ。路に飢婦人あ

【一】七哀。前詩に見ゆ。
【二】西京。長安なり。
【三】豺虎。羣盗に喩ふ。
【四】荊蠻。荊州をいふ。

り、子を抱きて草間に棄つ。顧みて號泣の聲を聞き、涕を揮ひて獨り還らず。未だ身の死處を知らず、何ぞ能く兩ながら相完からん。馬を驅り之を棄てて去る。(五)此言を聽くに忍びず。南のかた(六)霸陵の岸に登り、首を廻らして長安を望む。悟る彼の(七)下泉の人、(八)喟然として心肝を傷ましむるを。

【大意】漢末の亂を避け荊州に赴く時の事を述ぶ。漢末羣盜起りて天下騷亂す。予因つて中原の地を去り、難を荊州に避けんとす。親戚朋友相纏ひて別を悲む。門外に出づれば唯白骨の累累たるを見るのみ。途に一婦人あり幼兒を草間に棄つ。其悲鳴を聞くも、唯回顧して、涙を拭ふのみ。復た還り救ふことをなさず。因つて婦人に問へば、婦人答へて曰く、吾が身すら救ふ能はず、何ぞ母子相共に完きを得んやと。予此言を聽くに忍びず、馬を驅りて疾く去り、霸陵に登りて長安を顧望し、亂に死せし者の地下に悲めるを悟りぬ。

荊蠻は我が鄕にあらず、何爲れぞ久しく(九)滯淫せん。舟を方べて大江を溯れば、日暮れて我が心を愁へしむ。山岡(一〇)餘暎あり、(一一)巖阿重陰を增す。狐狸馳せて穴に赴き、飛鳥故林に翔る。流波淸響を激し、(一二)猨猴岸に臨んで吟ず。迅風裳袂を拂ひ、白露衣襟を霑す。獨夜寐ぬる能はず、衣を攝めて起

【五】此言。婦人の言なり。
【六】霸陵。地名。
【七】下泉。黃泉なり。戰死せる人をいふ。
【八】喟然。なげく貌。
【九】滯淫。滯留なり。
【一〇】餘暎。暎は映なり。
【一一】巖阿。巖曲なり。
【一二】猨猴。猿なり。

つて琴を撫す。(一三)絲桐人情を感ぜしめ、我が爲に悲音を發す。(一四)羇旅終極なく、憂思壯にして任へ難し。

【大意】荊州は我が故鄉にあらざれば、永く留るべきにあらず。舟を並べて大江を泝れば、日暮の景益我を愁へしむ。日將に沒せんとして餘光を映じ、巖曲に重陰を垂れ、狐狸は穴に歸り飛鳥は塒に急ぎ、水波石に激し、猿岸上に鳴き、疾風袂を吹き、白露衣を沾す。夜寐ぬる能はず、起つて琴を彈ずれば、琴亦哀韻を發す。あゝ我れ他鄉に放浪して歸期なし。憂思心に滿ちて自ら任へ難し。

【一三】絲桐。琴をいふ。
【一四】羇旅。行旅なり。

七哀の詩二首

(一) 張孟陽

(二)北芒何んぞ壘壘たる、(三)高陵四五あり。借問す誰が家の墳ぞと。皆云ふ漢の世主と。(四)恭文遙に相望み、(五)原陵鬱として(六)膴膴たり。(七)季世喪亂起り、賊盜豺虎の如し。(八)毀壞一

【一】張孟陽。張載、字は孟陽、晉の武邑の人。
【二】北芒。山の名。洛陽の北に在り、王公貴人多く此山に葬る。壘壘は重なる貌。
【三】高陵。高き墓。
【四】恭文。後漢の孝安帝の陵を恭陵といひ、靈帝の陵を文陵といふ。
【五】原陵。光武帝の陵の名。
【六】膴膴。草木多き貌。
【七】季世。末世なり。
【八】毀壞。陵墓の土を削り取ること。一抔は一掬なり。

抔に過ぎ、(九)便房幽戸を啓く。(一〇)珠柙玉體を離れ、珍寶(一一)剽虜せらる。(一二)園寢化して墟となり、(一三)周墉遺堵なし。(一四)蒙蘢として荊棘生じ、(一五)蹊逕童豎登り、狐兎其中に窟し、蕪穢して復た掃はず、(一六)頽隴竝に墾發せられ、(一七)萌隸農圃を營む。昔は萬乘の君たり、今は丘山の土となる。彼の(一八)雍門の言に感じ、(一九)悽愴して往古を哀む。

【大意】北芒山上陵墓壘壘として重る。之を問へば皆漢帝の陵にして、樹木鬱鬱として茂れり。漢の末羣盜竝び起り、勢猛虎の如く、帝陵を發きて寶器を掠め、陵廟化して丘墟となり、垣牆崩れて完からず。荊棘生じ雜草茂り、狐兎棲み牧童登り、既に崩されて田圃となれるあり。昔は萬乘の君たりしも、今や山上の土となりぬ。因つて雍門周の言に感じ、坐に往時を悲みぬ。

秋風(二〇)商氣を吐き、(二一)蕭瑟として前林を掃ふ。(二二)陽鳥和響を収め、寒蟬餘音なし。白露(二三)中夜に結

【九】便房。冢中の室なり。幽戸は地下の戸。
【一〇】珠柙。玉のはこ。
【一一】剽虜。掠め取らるること。
【一二】園寢。陵傍の廟。
【一三】周墉。周圍の墻。遺堵は殘れる墻。
【一四】蒙蘢。草木の蔽へる貌。荊棘はイバラ。
【一五】蹊逕。こみち。童豎は兒童。
【一六】頽隴。くづれたる塚。
【一七】萌隸。賤民なり。
【一八】雍門。雍門周なり。周孟嘗君に謂つて曰く、君が百歳の後、高臺既に傾き、曲池も又平ならん、豈悲しからずやと。
【一九】悽愴。悲傷すること。
【二〇】商氣。秋氣なり。
【二一】蕭瑟。秋風の聲。
【二二】陽鳥。陽に隨ふの鳥。鴻鴈の類なり。
【二三】中夜。一本に朝夜に作る。

び、木落ちて(二四)柯條森たり。(二五)朱光北陸に馳せ、(二六)浮景忽ち西に沈む。顧望して見る所なく、唯(二七)松栢の陰を覩る。(二八)肅肅たる高桐の枝、翩翩として孤禽棲む。仰いで(二九)離鴻の鳴くを聴き、俯して(三〇)蜻蛚の吟ずるを聞く。哀人は感傷し易く、物に觸れて悲心を増す。(三一)丘隴日已に遠く、(三二)纒緜として彌ゝ思深し。憂來りて髪を白からしむ。誰か云ふ愁任ふべしと。徘徊して長風に向へば、淚下りて衣襟を霑す。

【大意】秋風起りて林木を掃ひ、鴻鴈も聲をひそめ、寒蟬も影を止めず、白露結んで落木蕭蕭たり。日は北陸を馳せ將に西に沈まんとす。四顧するも見る所なく、ただ墓上の松栢と、高桐枝葉凋み、孤禽之に棲むを見る。仰いでは離雁の聲を聞き、俯しては蟋蟀の聲を聞く。余此景を見聞して益ゝ悲を増し、古人を思ふこと轉た切なり。憂愁して自ら任へず。長風に向つて淚を濺ぎぬ。

【二四】柯條。枝なり。森は寒風の振ふ聲。
【二五】朱光。日なり。續漢書に日北陸ヲ行ク、之ヲ冬トイフとあり。
【二六】浮景。運行する日輪。
【二七】松栢。丘墓に植うる木。
【二八】肅肅。枝葉の縮栗する貌。
【二九】離鴻。羣を離れたる孤鴈。
【三〇】蜻蛚。蟋蟀なり。こほろぎ。
【三一】丘隴。墓なり。ここには先人をいふ。
【三二】纒緜。憂思多きをいふ。

(一)悼亡の詩三首　　潘安仁

【一】悼亡、妻の死を傷むなり。

(二)荏苒として冬春謝り、寒暑忽ち流易す。(三)之子窮泉に歸し、(四)重壤永く幽隔す。(五)私懷誰か克く從はん。(六)淹留するも亦何の益あらん。(七)僶俛して朝命を恭み、心を廻らして(八)初役に反る。廬を望んで其人を思ひ、室に入りて歷し所を想ふ。(九)幃屏髣髴たるなく、(一〇)翰墨餘跡あり。(一一)流芳未だ歇るに及ばず、(一二)遺挂猶ほ壁に在り。(一三)悵怳として存する或るが如く、(一四)周遑として忡へて驚惕す。彼の(一五)翰林の鳥、雙棲して一朝に隻なるが如く、彼の游川の魚、(一六)比目中路に析るるが如し。春風隙に緣りて來り、(一七)晨霤簷を承けて滴る。(一八)寢息何の時か忘れん。沈憂日に盈積す。庶幾くは時に衰ふるあらば、(一九)莊缶猶ほ擊つべし。

【大意】既に葬りて後、官に之かんと欲する時の情景を述ぶ。歲月移り易く、妻死して既に寒暑を歷、既に黃泉の客となりて、幽明永く相隔る。喪既に闋り一年の休暇も盡きたれば、私情を抑へて

【二】荏苒。歲月の去る貌。
【三】之子。妻を指す。窮泉は黃泉なり。
【四】重壤。深き土の中。
【五】私懷。仕官せざらんとする私情。
【六】淹留。躊躇といふが如し。
【七】僶俛。俯仰なり。
【八】初役。前官の任務。
【九】幃屏。帳帷及び屏風。髣髴は相似たる貌。
【一〇】翰墨。妻の作りし文書。
【一一】流芳。妻の衣に薰ぜし香氣。
【一二】遺挂。平生の翫用品の尙ほ壁に懸れるもの。
【一三】悵怳。失意の貌。
【一四】周遑。周章惶懼すること。
【一五】翰林。羽を振ひて林中に飛ぶこと。
【一六】比目。魚の名。此魚比せざれば行かず。中路は中途。
【一七】晨霤。晨は朝。霤はアマダレ。
【一八】寢息。漸くやむこと。
【一九】莊缶。缶は瓦器なり。莊子の妻死し、莊子缶を擊ちて歌ふ。

官に赴かんと欲し、廬を望み室に入りて亡妻を思へば、帷帳の間其人を見ざれども、其の文書は儼として遺り、衣薫尙ほ存し、遺愛壁に懸れり。之を見ては尙ほ生存せるかと疑はれ、周章して驚嘆す。然も音容復た接すべからず。吾が身は番を離れし鳥の如く、匹を失ひし魚の如し。折しも春風戸隙を漏れて來り、晨霤簷を傳りて落ち、坐に悲を增す。この憂いつか忘れん。幸に情の衰ふるに至らば、莊子の如く缶を擊ちて歌ふこともあらんと。強ひて排悶の語を以て結ぶ。

(二〇)皎皎たる窓中の月、我が室の南端を照す。(二一)淸商秋に應じて至り、(二二)溽暑節に隨つて闌なり。(二三)凜凜として涼風升り、始めて夏衾の單なるを覺ゆ。豈(二四)重纊なしと曰はんや、誰と與にか歲寒を同うせん。歲寒與に同うするなく、(二五)朗月何ぞ朧朧たる。(二六)展轉して枕席を眄みれば、(二七)長簟牀の空しきに竟る。牀空うして淸塵委り、室虛しうして悲風來る。獨り(二八)李氏の靈、髣髴として爾の容を覩るなし。衿を撫して長く歎息すれば、覺えず涕胸を霑す。胸を霑して安んぞ能く已まん。悲懷中より起る。(二九)寢興目形を存し、遺音猶は耳に

【二〇】皎皎。明なる貌。
【二一】淸商。秋風なり。
【二二】溽暑。むし暑きこと。闌は微なり。
【二三】凜凜。涼しき貌。
【二四】重纊。厚き綿入。
【二五】朗月。明月なり。朧朧は月光の貌。
【二六】展轉。ねがへりすること。
【二七】長簟。長き敷物。
【二八】李氏。桓子新論に漢ノ武帝幸セシ所ノ李夫人死ス、方士李少君言フ能ク其神ヲ致サント乃チ夜燭ヲ設ケ幄ヲ張リ帝ヲシテ他帳ニ居リテ遙ニ見シム、好女ノ夫人ノ狀ニ似タル者、帳ヲ還リテ坐スとあり。
【二九】寢興。ねても起きても。

在り。上は(三〇)東門呉に慙ぢ、下は(三一)蒙莊子に愧づ。詩を賦して志を言はんと欲するも、此志具に紀し難し。命や奈何すべき、長く戚へて自ら鄙からしむ。

【大意】明月我が室を照し、暑氣漸く微にして涼風起り、始めて衣衾の單なるを感ず。重纊なきにあらざれども、共に之を同うする者なし。展轉反側して枕席を見れば、空牀塵積り、ただ悲風の來り訪ふのみ。吾が妻、李夫人の靈なく、復た其形を見るべからず。長嘆して涙を濺ぐの外なし。起臥ともに其形を見るが如く、其聲を聞くが如し。哀傷の感古人に慚づるあり。詩を賦して此情を述べんとすれども能はず。常に憂へて自ら鄙からしむるのみ。

(三二)曜靈天機を運らし、(三三)四節代〻遷逝す。(三四)淒淒として朝露凝り、(三五)烈烈として夕風厲し。奈何ぞ(三六)淑儷を悼む。儀容永く(三七)潛翳す。此を念ふこと昨日の如きも、誰か知らん已に歲に卒ふとは。服を改めて朝政に從ふも、哀心(三八)私制を寄す。(三九)茵幬故房に張り、(四〇)朔望爾に臨んで祭る。爾の祭詎幾時ぞ、朔望忽ち復た盡き、(四一)衾裳一たび毀撤し、(四二)千載復た引ねず。

【三〇】東門呉。列子に魏ニ東門呉トイフ者アリ、子死スレドモ憂ヘズとあり。
【三一】蒙莊子。莊子は蒙縣の人、妻死すれども哭せず。
【三二】曜靈。日なり。
【三三】四節。春夏秋冬なり。
【三四】淒淒。寒涼の貌。
【三五】烈烈。風の急なる貌。
【三六】淑儷。善良なる妻。
【三七】潛翳。隱れて見えざること。
【三八】私制。私の禮法。
【三九】茵幬。牀帳なり。故房はもとの閨房。
【四〇】朔望。一日と十五日。
【四一】衾裳。祭の時の衣裳。毀撤は除き棄つること。
【四二】千載。千年なり。

(四三)亹亹として朞月周り、(四四)戚戚として彌〻相愍む。悲懷物に感じて來り、泣涕情に應じて隕つ。駕して言に(四五)東皐に陟り、墳を望んで思(四六)紆軫す。墟墓の間を徘徊し、去らんと欲するも復た忍びず。徘徊して去るに忍びず、(四七)徙倚して歩して(四八)踟蹰す。落葉(四九)埏側に委り、(五〇)枯荄墳隅を帶る。孤魂獨り(五一)煢煢たり。安んぞ知らん靈と無と。心を投じて朝命に遵ひ、涕を揮って强ひて車に就く。誰か(五二)帝宮を遠しと謂はん、路極りて悲餘あり。

【大意】時遷り節換りて、今や西風白露の秋となる。われ亡妻を悼んで形の見るべからざるを悲む。其死昨日の如きも旣に一年の昔となりぬ。喪服を改めて朝政に從へども、尙ほ朔望には私禮を以て其靈を祭る。然も靈筵の被裳一たび除きて、復た重ねて陳設するの時なし。ただ遺物を見て涙を落すのみ。乃ち東岡に登りて其墓を望み、徘徊して去るに忍びず。落葉墓道を埋め枯草墳隅を繞るを見て、絕えて其形象を見ず。自ら靈の有無を疑はざるを得ず。やがて情を抑へて朝命に遵はんとし、涙を拭ひて車に乘り、旣に帝城に至るも餘哀尙ほ已まず。

【四三】亹亹。漸く進む貌。朞月は一年の喪期なり。
【四四】戚戚。憂ふる貌。
【四五】東皐。東方の岡。
【四六】紆軫。痛思して心の舒びざるをいふ。
【四七】徙倚。佇立すること。
【四八】踟蹰。進まざる貌。
【四九】埏側。墓道なり。
【五〇】枯荄。荄は草の名。
【五一】煢煢。孤獨の貌。
【五二】帝宮。帝城なり。

(一)盧陵王墓下の作　謝靈運

曉月に(二)雲陽を發し、落日に(三)朱方に次る。懐を含んで廣川に泛び、涙を灑ぎて(四)連岡を眺る。眷みて言に(五)君子を懷ひ、沈痛して中腸結ぼる。道消えて憤懣を結び、運開いて悲涼を申ぶ。(六)神期恆に存するが若く、德音初めて忘れず。徂謝永久なり易く、(七)松栢森として已に行る。(八)延州心許に協ひ、(九)楚老蘭芳を惜む。劍を解くも竟に何ぞ及ばん、墳を撫して徒に自ら傷む。平生(一〇)若人を疑ふ。(一一)通蔽互に相妨ぐ。理感は情の慟を深うす。定めて識の將ふ所にあらず。(一二)脆促良に哀むべし。(一三)夭枉特に常を兼ぬ。一たび(一四)往化に隨つて滅ぶ。安んぞ用ひん空名

【一】盧陵王。宋の武帝の子義眞、盧陵王に封ぜらる、未だ藩に就かざるに武帝崩ず、時に少帝位を嗣ぎて遊戲度なし朝廷廢立の事を謀る、次盧陵王にあり、徐羨之等奏して王を廢して庶人となし新安郡に徙し、又人を遣して王を殺さしむ。

【二】雲陽。地名、曲阿なり。

【三】朱方。地名、丹徒なり。

【四】連岡。青烏子相冢書に天子ハ高山ニ葬リ諸侯ハ連崗ニ葬ルとあり。

【五】君子。盧陵王をいふ。

【六】徂謝。死亡なり。

【七】松栢。墓上の木。

【八】延州。地名、延陵季子此に封ぜらる。季子上國に使し道に徐君に過る、徐君其寶劍を愛し、言はざれども心に之を欲す、季子心に之を許す、歸途徐を過れば徐君既に死せり、因つて其劍を墓に懸けて去る。

【九】楚老。漢書に龔勝ハ楚人ナリ、勝卒ス、一老父アリ來リ弔ス、既ニシテ曰ク、アア薰ハ香ヲ以テ自ラ燒キ、膏ハ明ヲ以テ自ラ銷ス、龔先生天年ヲ夭ス、吾ガ徒ニアラザルナリト、遂ニ趨リテ出ヅとあり。

【一〇】若人。盧陵王をいふ。

【一一】通蔽。通は聰明にして古を好むをいふ。蔽は羣邪と協

の揚るを。聲を擧げて泣已に灑ぐ。長歎して章を成さず。

【大意】曉に雲陽を發し夕に朱方に宿る。途に舟を泛べて大川を渡り、廬陵王の墓を望んで涙を灑ぎぬ。王の事を追想すれば悲傷の情胸に滿つ。王は道行はれずして憤懣を結び、(羣佞の妨ぐる所となりて廢せられし事をいふ) 後大運開けて積日の悲愁を申ぶるを得たり。(文帝位に卽き王を追崇して侍中王となしし事をいふ) 吾が心に於て尙ほ生存するが如く、德音を蒙りし事を念ひ、今に至るまで忘れず。王死して日を歷ること久しく、墓上の松栢今既に森森たり。王の生時には忠を以て事へんことを期せしも、今既に及ぶ能はず徒に哀傷するのみ。王は聰明通達の德あれども、羣邪と協はずして遂に滅亡を取る。之を思へば心痛みて任ふる能はず。死亡は悲むべきも、橫死は特に哀むべきなり。今既に死して形體なし、爵位を追贈せられ、虛名を揚ぐるも何の益あらん。余今聲を擧げて悲嘆し、心錯亂して文章を成さず。

はず自ら滅亡するをいふ。
【一二】脆促。人生の果敢なきこと。
【一三】夭枉。枉げて殺戮せらるること。
【一四】往化。死亡の運命。

(一)陵廟を拜する作　　顏延年

周德(二)明祀を恭み。漢道(三)光靈を尊ぶ。哀敬祖

【一】陵廟。延年宋の文帝に從ひて高祖(武帝)の陵を拜し此

廟を隆にし、(四)崇樹園塋に加ふ。(五)休命の始に事ふるに逮び、迹を投じて王庭に踏む。(六)陪廁して天顧を廻らし、(七)讌に朝して聖情を流く。早く(八)服して身義重く、晩く(九)達して生戒輕し。(一〇)否來りて王澤竭き、(一一)泰往いて人悔形る。躬を勑めて(一二)積素に慙ち、復た昌運と幷す。(一三)恩合漸漬にあらず、(一四)榮會逢迎に在り。夙に御して淸制を嚴にし、朝に駕して禁城を守る。(一五)紳を束ねて(一六)西寢に入り、(一七)軫に伏して東坰に出づ。(一八)衣冠終に冥漠、(一九)陵邑轉た蔥靑、松風路に遵つて急に、山烟壠を冒うて生ず。(二〇)皇心容物に憑り、民思歌聲に被る。(二一)萬紀絃吹を載せ、千歲(二二)旒旌に託す。未だ帝世の遠きを殊にせず、已に(二三)淪化の萠に同うす。(二四)幼壯

詩を作る。陵に廟あり、故に陵廟といふ。
【二】明祀。祭祀なり。
【三】光靈。祖宗の神靈。
【四】崇樹。高き樹木。園塋は陵墓。
【五】休命。休は美なり。天の美命を受けて天子となりしこと。
【六】陪廁。天子の側に侍すること。天顧は天子の恩顧。
【七】讌。宴なり。
【八】服。服事すること。
【九】達。榮達なり。生戒は養生の戒。
【一〇】否。惡運なり。
【一一】泰。好運なり。
【一二】積素。素は故なり。積日の恩。
【一三】恩合。恩惠の加はること。漸漬は徐徐に及ぶこと。
【一四】榮會。榮華會遇なり。
【一五】紳。大帶なり。
【一六】西寢。文帝の寢殿なり。
【一七】軫。文帝の車。東坰は東郊なり。
【一八】衣冠。武帝の衣冠。冥漠は虛無なり。
【一九】陵邑。陵墓を守る爲に置く邑。蔥靑は草木の色。
【二〇】皇心。文帝の心。容物は陵廟に在る物。
【二一】萬紀。十二年を紀といふ。絃吹は管絃なり。
【二二】旒旌。旗なり。
【二三】淪化。崩御なり。
【二四】幼壯。少年の時。孤介は孤獨なり。

にして孤介に困み、(二五)末暮に幽貞を謝す。(二六)發軔夷易を喪ふ。(二七)歸軫崎傾を愼む。

【大意】 周漢皆祖宗を尊び祭祀を重んず。今わが文帝の高祖の陵廟に謁するは、周漢と其德を等うするものなり。吾れ高祖の初年に仕へ、側に侍して恩顧を蒙り、宴に侍して聖情に浴す。早く君に服事し身を存するの義を重しとなし、晩年榮達して養生の戒を輕しとなす。否來り泰往き王澤竭きて民悔起るや（武帝崩じて少帝位に卽き、遊戲度なく小人位に在りし事をいふ）高祖積日の恩を顧みて志節を易へず。又文帝の盛運に會して君臣となる。恩惠忽ち加はり、榮會して君の送迎を辱うするに至りぬ。今日夙に駕して宮城に入り、寢殿に謁し車前に拜し、東郊に出で倶に陵廟を拜す。先帝の衣冠復た見るべからず。ただ陵邑の樹木の森森たるを見るのみ。文帝之を見て哀敬し、臣民思慕して歌頌の聲を揚ぐ。高祖の德音永く管絃の上に行はれ、功銘常に旌旗の中に傳はらん。威靈尙ほ存するが如く、遠く去れるを覺えざれども、今や已に淪化の運に遇ひて崩御し給ひぬ。われ少時孤危に苦み平安の路を失へり。衰老して當に傾覆の難を愼まんと欲す。

【二五】末暮。老年なり。
【二六】發軔。車の行くを以て己の任ずるに喩ふ。夷易は安全なり。
【二七】歸軫。車の歸途。晩年に喩ふ。崎傾は險難なり。

(一)謝諮議が(二)銅爵臺の詩に同うす　謝玄暉

(三)繐帷井幹に飄り、(四)罇酒平生の若し。鬱鬱たる(五)西陵の樹、詎ぞ歌吹の聲を聞かん。(六)芳襟淚迹を染め、(七)嬋媛として空しく情を傷ましむ。(八)玉座猶ほ寂寞たり。況んや廼ち妾が身の輕きをや。

【大意】臺上に繐帳を張り、樽酒を具ふること生時に異らざるも、今や西陵の主となりては、伎人の歌聲復た聞くべからず。伎人悲泣して淚衣襟を沾し、之を牽いて空しく哀情を含むも、君王終に見るべからず。ああ玉座すら寂寞たること此の如し。況んや羣妾至微、何を以て長久なるを得んや。魏武の遺令は眞に徒事のみ。

【一】謝諮議。名は璟。
【二】銅爵臺。又銅雀臺ともいふ。魏志に建安十五年冬、銅雀臺ヲ作ル、魏武(曹操)遺令シテ曰ク、吾ガ伎人ヲバ皆銅雀臺ニ著ケ、臺上ニ六尺ノ床繐帳ヲ施シ、朝晡ニ脯糒ノ屬ヲ上リ、月朝十五日、輒チ帳ニ向ヒテ伎ヲナセ、汝等時時銅雀臺ニ登リ吾ガ西陵ノ墓田ヲ望メトあり。同は和なり。
【三】繐帷。ほそぬののとばり。井幹は臺上の欄干。
【四】罇酒。樽酒なり。平生は魏武生存の時をいふ。
【五】西陵。魏武帝の陵墓。
【六】芳襟。伎人の衣襟。
【七】嬋媛。牽引なり。
【八】玉座。武帝の座席。

(一)郡の傳舍を出でて(二)范僕射を哭す三首　(三)任彥昇

平生(四)禮數絕え、(五)式瞻國楨に在り。一朝にし

【一】郡。義興郡なり。傳舍は客舍。彥昇義興郡太守となり

て(六)萬化盡くるも、猶ほ我れ(七)故人の情あり。時を待ちて(八)興運に屬し、(九)王佐民英を俟つ。歡を結ぶこと(一〇)三十載、生死交情を一にす。手を攜へて(一一)衰孽を遁れ、景を接へて(一二)休明に事ふ。運阻りて(一三)衡言革り、時泰くして(一四)玉階平なり。(一五)濬沖茂彦を得、(一六)夫子狂生に値ふ。(一七)伊人涇渭あり。余が濁淸を揚るにあらず。將に乖かんとして別るるに忍びず、以て離情を遣らんと欲す。(一八)一辰の意に忍びず、(一九)千齡萬恨生ず。

【大意】余と范公とは名位同じからずと雖も余は常に國家の支柱として公を仰望したり。公今既に死亡したるも、故人の情何れの時か能く忘れん。公は時を待ちて梁室の興隆を期し、王者の輔佐として民間の英才を求めたり。余之に

て赴任せし時、客舍を出で位を設けて哭せしなり。

【二】范僕射。僕射は官名。梁の天監二年、僕射范雲卒す。

【三】任彦昇。任昉、字は彦昇、梁の樂安の人。

【四】禮數絕。左傳に名位同ジカラズ、禮亦數ヲ異ニスとあり。已と范雲と名位の同じからざるをいふ。

【五】式瞻。瞻仰といふが如し仰望すること。國楨は國家を支ふる幹。范雲に喩ふ。

【六】萬化。萬事化し盡すこと。死亡をいふ。

【七】故人。舊友なり。

【八】興運。梁室の興隆をいふ。范雲は少くして梁の武帝と友とし善し。

【九】王佐。王者の輔佐。民英は民間の英才。

【一〇】三十載。三十年なり。

【一一】衰孽。齊朝の衰災をいふ。

【一二】休明。美明なり。梁の武帝を指す。

【一三】衡言。平常の言。

【一四】玉階平。天下泰平なり。

【一五】濬沖。王戎の字、王戎吏部尙書となり、李茂彦を得て吏部郞となし、禮を以て之を待つ。

【一六】夫子。范雲を指す。狂生は彦昇自ら謂ふ。

【一七】伊人。范雲を指す。涇渭は二水の名、涇は濁り渭は淸し。

【一八】一辰。一時なり。

【一九】千齡。千歲といふが如し。

因りて公と交を結ぶこと三十年、生死一の如くにして復た變ぜず。嘗て相携へて齊を去り、梁の武帝に事ふ。是に於て齊室亂れて梁朝治化を布く。公は吏部尚書となり、余は吏部郎となりしこと、恰も王濬沖の李茂彦を得たるが如し。夫れ吏部の職は、濁を激し清を揚ぐるを以て務となす。公自ら清濁を分別して其源流を殊にす。我の能く揚ぐる所にあらざるなり。交情既に此の如し。故に平生暫時の別と雖も、手を分つに忍びず、暫く留りて言笑し、以て離情を遣らんと欲せり。ああ既に暫時の別に忍びざるに、公今や死亡し去り、終に永久の別となりぬ。

已ぬるかな平生の事、詠歌（二〇）篋笥に盈つ。兼ねて復た（二一）相嘲謔し、常に（二二）虛舟と値ふ。何れの時か（二三）范侯を見、還た平生の意を敍べん。

【大意】平生贈答せし詩文、今尚ほ我が篋中に在り。互に嘲謔して相凌辱することありしも、虛舟の觸るるが如く、敢て怒を發することなかりき。今や復た范侯を見て平生の歡を盡さんと欲するも能はず。悲しいかな。

子と別れて（二四）幾辰ぞ、塗を經ること旬に盈たず。（二五）朱顏の改まるを覩ず。徒に平生の人を想ふ。寧んぞ知らん（二六）安歌の日、君が（二七）瑟を撤するの

【二〇】篋笥。文書を盛る箱。
【二一】相嘲謔。互に冗談を言ふこと。
【二二】虛舟。莊子に舟ヲ方ベテ河ヲ濟ルトキ、虛舟アリ來リテ舟ニ觸ル、褊心ノ人アリト雖怒ラザルナリとあり。
【二三】范侯。范雲なり。
【二四】幾辰。幾時なり。
【二五】朱顏。紅顏なり、健康なる顏色。
【二六】安歌。安息して歌ふこと。義興郡に著任せしことをいふ。
【二七】瑟を撤す。儀禮に疾病ア

晨にあらずや。已ぬるかな余何をか歎ぜん。(二八)春を輟めて　(二九)國均を哀む。

【大意】公と別れて未だ幾何ならず。余は赴任の途に在りて未だ旬日を經過せず。又顏色の衰へたるをも見ざれば、心中平生の公を追想するのみ。意はざりき余が著任の日は即ち公が終焉の日ならんとは。今や悲むとも詮なし。ただ業を休みて大臣の死を弔せんのみ。

ル者ハ琴瑟ヲ撤スとあり。疾病の時を撤瑟の晨といふ。然しここは死亡の日の意に用ひたり。

【二八】春。うすつくこと。史記に五羖大夫死ス、秦國ノ男女涕ヲ流シ、春ク者杵ヲ相セズとあり。大臣の死を悲む意也。【二九】國均。國權を執行する大臣。

贈答

(一)蔡子篤に贈る詩　王仲宣

(二)翼翼たる飛鸞、載ち飛び載ち東す。我が友云に徂き、言に(三)舊邦に戻る。(四)舫舟翩翩として、以て大江を泝る。(五)蔚たる荒塗、時れ行通ずるなし。慨として我

【一】蔡子篤。蔡睦、字は子篤、尚書たり。仲宣之と友たり、同じく難を荊州に避く、子篤の郷に還る時此詩を贈る。【二】翼翼。飛ぶ貌。飛鸞は子篤に喩ふ。鸞は鳥の名。【三】舊邦。故郷なり。子篤は濟陽の人。【四】舫舟。舟なり。翩翩は舟の行く貌。【五】蔚。草の荒る貌。荒塗は荒れたる路。

れ懷慕す、(六)君子の同うする所。(七)悠悠たる世路、亂離して多く阻る。(八)濟岱江行、(九)邈焉として處を異にす。(一〇)風流雲散して、一別雨の如し。人生實に難く、願其れ與ならず。(一一)遐路を瞻望して、允に企てて伊に佇る。(一二)烈烈たる冬日、(一三)肅肅たる凄風、潛鱗淵に在り、歸鴈載ち軒ぶ。苟に(一四)鴻鶤にあらず、孰か能く飛翻せん。則ち追慕すと雖も、予が思宣ぶるなし。東路を瞻望し、慘愴して歎を增す。彼の江流に率ひ、爰に逝いて期なし。君子誓を信じ、時に遷らじ。子と(一五)寮を同うし、生死之を固うせん。何を以てか行に贈らん。言に斯詩を授く。中心孔だ悼み、涕涙(一六)漣洏たり。嗟爾君子、如何ぞ思ふなけん。

【大意】君は此を去りて故郷に歸らんとし、舟を泛べて大江を泝り、世亂れ道通せざるの難を冒して行く。我れ慨嘆して思慕す。思ふに君も亦別を悲むべし。今や世亂れて人別離に苦む。君は濟岱に去らんとし、余は江衡の間に留まり、一別の後は雨の一たび降りて復た雲中に歸るなきが如くならん。人生多難にして志遂げず。君の去るに當り、佇立瞻望するのみ。今や寒風肅肅

【六】君子。子篤を指す。
【七】悠悠。遠き貌。
【八】濟岱。濟は川の名。岱は山の名、子篤の往く處に近し。江行は一本に江衡に作る、江は長江、衡は衡山、仲宣の居る處、荊州をいふ。
【九】邈焉。遠き貌。
【一〇】風流雲散。風雲の如く別れ去ること。
【一一】遐路。遠路なり。
【一二】烈烈。寒き貌。
【一三】肅肅。風急なる貌。凄風は寒風。
【一四】鴻鶤。鴈及びクマダカ。
【一五】寮。官職なり。
【一六】漣洏。涙の流るる貌。

として魚は淵に潛み、鴻鴈獨り天上に飛ぶ。われ鴻鴈にあらず、何ぞ能く飛翻として此亂世の險を離るるを得ん。われ君と共に去らんと欲するも能はず。ただ君を望んで歎を增すの外なし。今たとひ相別ると雖も、君は從來の誓を信じ、時の險なるを以て志を遷すことなからん。必ず生死相共に同寮の誼を結ばん。茲に君の行を餞するに詩を以てすれば、中心悲んで涙雨の如し。

(一)士孫文始に贈る

王仲宣

天(二)喪亂を降し、國として夷びざるはなし。我と我が友と、彼の京師よりす。(三)宗守盪失し、越に用て遁れ違り、(四)荊楚に遷り、(五)漳の湄に在り。漳の湄に在り、亦克く(六)宴處す。(七)篪塤を和通し、德を(八)車輔に比ぶ。既に禮儀を度り、卒に笑語を獲。茲の(九)永日を庶ひ、厥緒を僭ふなけん。僭ふなしといふと雖も、時我と已まらず。心を同うして(一〇)事を離れ、乃ち(一一)逝止あ

【一】士孫文始。士孫萌、字は文始、魏の時、澹津亭侯に封ぜらる、國に就くに當り、王仲宣等各詩を作りて之に贈る。
【二】喪亂。漢末の亂をいふ。
【三】宗守。國家の主權。盪失は亡失なり
【四】荊楚。荊州なり。
【五】漳。川の名。荊川に在り。
【六】宴處。安居なり。
【七】篪塤。ともに樂器の名、よく應和す。
【八】車輔。車と輔とは互に助け合ふものなり。左傳に輔車相依り、唇亡ブレバ齒寒シとあり。
【九】永日。詩經に且ツ以テ喜樂シ、且ツ以テ日ヲ永ウセンとあり。
【一〇】事を離る。別離することゝ。
【一一】逝止。一は往き一は止まるなり。

り。此の大江を横り、彼の（一二）南汜に淹る。我が思及ばず、載ち坐し載ち起つ。彼の南汜を惟ふ、（一三）君子之に居る。（一四）悠悠たる我が心、薄か言に之を慕ふ。人亦言ふあり、（一五）喆として思はざるはなしと。矧や伊の（一六）嬿婉、胡ぞ悽まざらん。（一七）晨風夕に逝く。託して之と期す。王室を瞻仰し、慨として其れ永歎す。（一八）良人外に在り、誰か（一九）天官を佐けん。四國方に阻り、爾をして（二〇）藩に歸らしむ。爾の藩に歸る、下國に式となる。（二一）蠻裔として汝の德を虔まずといふなかれ。爾の主とする所を愼み、（二二）嘉則に率ひ由れ。龍用ふるなしと雖も、志亦忒ふなし。悠悠たる（二三）澹澧、鬱たる彼の（二四）唐林、則ち域を同うすと雖も、（二五）邈として其れ（二六）迥深なり。（二七）白駒の遠志は、古人の箴むる所。允なる君子、厥心を遐くせず。既に往き既に來り、爾の音を（二八）密にするなかれ。

【一二】南汜。南浦なり。澹津は荊州の南に在り。
【一三】君子。文始を指す。
【一四】悠悠。遠き貌。
【一五】喆。哲なり、智なり。
【一六】嬿婉。情好なり。
【一七】晨風。鳥の名、鸇なり。
【一八】良人。賢人なり。
【一九】天官。天子の官。
【二〇】藩。澹津なり。
【二一】蠻裔。南方の夷地。
【二二】嘉則。善法なり。
【二三】澹澧。川の名。文始の封國に在り。
【二四】唐林。地名なり。
【二五】邈。遠き貌。
【二六】迥深。迥は遠なり。
【二七】白駒。詩經の篇の名。中に爾ノ音ヲ金玉ニシ、遐心アルナカレの句あり。別れて後も音信を絕つなかれとの意。
【二八】密。絕なり。

【大意】今や天下騷亂し天子主權を失ふに至りしかば、我と君とは彼の京師より遁れて荊州に來り與に漳水の湄に安居し、相和すること篪塤の如く、相助くること輔車の如く、始めは禮儀を以て交

りしも、終に笑語して相歡するに至り、相喜樂して日を永うせり。然るに歲月流れて已まず。同心の友も相別れざるを得ざるに至り、一は澹津に去り一は荊州に留まる事となりぬ。君今大江を横りて南のかた澹津に往かんとす。我れ起坐して之を思慕すれども及ばず。ただ澹津は君子の居る所なり。吾が心遙に之を慕はんのみ。古人曰く賢智の人をば之を思はざるはなしと。況んや君と我との親交あるをや。何ぞ此別を悲まざるを得ん。願くは南飛の鵠に託して、音信を通ぜん。今や王室を望んで其衰微を歎く。君の如き賢人去つて外に在り。誰か當に天子の官を佐くべき者ぞ。君去つて藩に就かば、當に諸國の範たるべし。蠻地なりとて汝の德を愼まざるなかれ。潛龍用ふるなしと雖も、志差ふべきにあらず。かの澹澧唐林は吾が荊州と域を同うすと雖も、遙遠にして往き易からず。古人白駒の詩を作り、別後音信を通ずべき事を戒めたり。君亦音信を通ずるを怠るなかれ。

(一)文叔良に贈る　王仲宣

(二)翩翩たる鴻、彼の江濱に率ふ。(三)君子于に征き、爰に(四)西

【一】文叔良。文穎、字は叔良、南陽の人。劉表の從事となり、益州の牧劉璋に使す、仲宣贈るに此詩を以てす。

【二】翩翩。飛ぶ貌。

【三】君子。文叔良を指す。

【四】西鄰。益州をいふ。聘は使者となりて往くこと。

鄰に聘す。(五)此洪渚に臨み、伊に(六)梁岷を思ふ。爾の行孔だ遼なり、如何ぞ勤むるなからん。君子は始を敬み、爾の主とする所を愼む。言を謀ること必ず賢に、說を錯いて輔を申べよ。(七)延陵作るあり、(八)喬肸に是れ與す。(九)先民の遺跡は、(一〇)來世の矩なり。既に爾の主を愼み、亦(一一)知幾を廸み、情を探るに(一二)華を以てし、著を覩て微を知れ。視ること明に聽くこと聰に、事として惟はざるなかれ。(一三)董褐名を荷へり。胡寧ぞ師とせざらん。衆は蓋ふべからず、我が言を尙しとするなかれ。(一四)梧宮辯を致し、齊楚患を構ふ。成功は要あり、衆に在り歡を思ふ。人の忌むこと多き、之を掩ふ實に難し。彼の(一五)黑水を瞻るに、滔滔として其れ流る。(一六)江漢倦くあり、允に來らば厥れ(一七)休なり。二邦の(一八)若否は、

【五】此洪渚。大江なり。
【六】梁岷。益州に在る山の名。
【七】延陵。延陵季子、卽ち吳の季札、春秋時代の賢者なり。
【八】喬肸。喬は公孫喬卽ち鄭の子產なり。肸は羊舌肸、卽ち晉の叔向なり。左傳に吳ノ公子札、鄭ニ聘シ子產ヲ見テ舊相識ノ如シ、晉ニユキ叔向ニ謂ッテ曰ク、吾子之ヲ勉メヨ、君侈リテ良大夫多ク、皆富メリ　政將ニ家ニ在ラントス、吾子直なり、必ズ自ラ難ヲ免レンコトヲ思ヘトとあり。
【九】先民。古人なり。季札を指す。
【一〇】來世。後世なり。
【一一】知幾。事の機微を見ぬくこと。
【一二】華。容貌なり。
【一三】董褐。晉の大夫司馬寅なり。吳に使して國難を解き、重名を荷へり。
【一四】梧宮。齊の宮の名。楚の使者齊に使せし時、齊王之を梧宮に饗す。時に使者と事を辯じ、遂に齊楚怨を構へ兵を擧げて相伐つに至る。
【一五】黑水。川の名。益州に在り。
【一六】江漢。益州にある川。ここには劉璋に喩ふ。
【一七】休。美なり。汝の功績なりとの意。
【一八】若否。若は順なり。順逆なり。

職として汝に由る。(一九)緬たる彼の行人、克く留められざること鮮し。尙いかな君子、他の(二〇)仇に異なれ。人誰か勤めざらん。我が憂を厚うするなかれ。惟れ詩作贈す。敢て(二一)在舟を詠ず。

【大意】君往きて益州に使す。遠路必ず勤勞多からん。君子は始を愼み其の行ふ所を謹む。宜しく善謀を出し、匡輔の志を成すべし。昔季札あり子産と叔向とを戒む。季札の事は實に後世の規矩なり。我故に今君を戒めんとす。君宜しく事を愼み幾微を穿ち、貌を見て情を察し、視聽を聰明にし熟思して事を處し、董褐が國難を解きて重名を荷へるに倣ふべし。天下の衆事は一人を以て蔽ふべからず。我が此言を以て徒に高遠なりとなすなかれ。ゆめ梧宮に辯を戰はし國難を釀ししに倣ふなかれ。成功の要は衆を懽ばすに在り。人には忌諱多し。其意に逆はざるは實に難し。彼の江漢の國席卷して來らば、是れ君の大功績なり。若し之に反せば其罪亦君に在り。從來益州に使せし者、多くは劉璋の淹留する所となれり。君務めて之と類を同うすることなかれ。必ず國家の爲に勤勞し、我をして憂へしむるなかれ。今此詩を作りて君に贈るは、君と我と憂患を同うすればなり。

【一九】緬。遠きなり。行人は使者なり。

【二〇】仇。類なり。

【二一】在舟。鄧析子に舟ヲ同ウシテ海ヲ渡リ、中流ニ風ニ遇ヘバ、患ヲ救フコト一ノ若シとあり。憂患同じきをいふ。

(一)五官中郎將に贈る四首　劉公幹

昔我(二)元后に從ひ、駕を整へて(三)南鄕に至る。彼の(四)豐沛の都を過ぎ、(五)君と共に翺翔す。(六)四節相推斥し、(七)季冬に風且つ涼し。衆賓廣座に會し、(八)明鐙炎光を熺にす。清歌妙聲を製し、(九)萬舞中堂に在り。(一〇)金罍甘醴を含み、(一一)羽觴行りて方なし。長夜歸來を忘れ、聊か且つ(一二)大康をなす。(一三)四牡路に向つて馳せ、歡悅誠に未だ央きず。

【大意】昔武帝に從つて荊州の劉表を征せし時、武帝の鄕里に過り、君と共に遊樂せり。時恰も晩冬なりしが、衆賓を會し燈火を明にし、清歌を奏し萬舞をなし、酒金樽に滿ち、之を酌むこと算なく、歸るを忘れて大に樂み、馬を驅りて歸途に就けるも、歡樂未だ盡きざりき。

【一】五官中郎將。魏の文帝、初め五官中郎將、副丞相たり。來りて公幹が病を視る、去つて後公幹此詩を賦して贈る。
【二】元后。元は大、后は君、魏の武帝(文帝の父)を指す。
【三】南鄕。荊州をいふ。
【四】豐沛。漢の高祖の鄕里。ここには武帝の鄕里なる譙に喩ふ。
【五】君。五官中郎將を指す。翺翔は遊ぶこと。
【六】四節。春夏秋冬なり。推斥は推移なり。
【七】季冬。晩冬なり。
【八】明鐙。明かなる燈火。
【九】萬舞。舞の名。
【一〇】金罍。金樽なり。甘醴は美酒。
【一一】羽觴。酒杯なり。
【一二】大康。大に樂むこと。
【一三】四牡。四馬なり。

余(一四)沈痼の疾に嬰り、身を(一五)淸漳の濱に竄し、夏より玄冬に涉り、(一六)彌曠十餘旬。常に恐る(一七)岱宗に游び、復た(一八)故人を見ざらんことを。親む所一に何ぞ篤き、趾を步して我が身を慰む。淸談して日夕を同うし、情眄憂勤を敍ぶ。便ち復た別辭をなし、游車(一九)西鄰に歸る。(二〇)素葉風に隨ひて起り、廣路埃塵を揚ぐ。逝く者は流水の如し。此に遂に離分せんことを哀む。追問す何れの時か會せんと。我を要するに陽春を以てす。望慕結んで解けず。爾に新詩文を貽る。勉めよや(二一)令德を脩め、(二二)北面して自ら寵珍せよ。

【大意】余痼疾に罹り漳水の濱に退居し、夏より冬に至るまで、十餘旬の間疎遠に過ぎ、遂に死亡して復た君と相見るの期なからんことを恐れぬ。君我を思ふこと篤く、來りて吾が病を看る。因りて共に談說して夜に至り、大に我が憂勞を慰むるを得たり。君別を告げて鄴都に歸る。我れ君の歸るを望めば寒風落葉を卷き、廣路塵埃を揚ぐ。思へらく人命は流水の如し。遂に永久の別とならんと。乃ち君を追ひて再會の期を問へば、君答ふるに來春相會すべきを以てす。爾來君を思ふの情に堪へず。因つて此詩を贈る。願くは美德を修め、よく天子に

(一四)沈痼。久病なり。
(一五)淸漳。漳は川の名。
(一六)彌曠。疎遠なり。
(一七)岱宗。泰山なり。援神契に泰山ハ天帝ノ孫ナリ、人魂ヲ召スヲ主ルとあり。岱宗に遊ぶとは死することなり。
(一八)故人。舊友、五官中郎將を指す。
(一九)西鄰。鄴都をいふ。
(二〇)素葉。落葉なり。
(二一)令德。美德なり。
(二二)北面。君に事ふること。

事へ以て寵貴を保つべし。

秋日悲懷多く、感慨して以て長歎す。終夜寐ぬるに遑あらず。意を（二三）濡翰に敍ぶ。明鐙閨中を曜し、清風（二四）凄として已に寒し。白露前庭を塗し、（二五）應門重ねて其れ關せり。四節相推斥し、歲月忽ち殫きんと欲す。（二六）壯士遠く出征し、（二七）戎事將た獨り難し。涕泣衣裳に灑ぐ。能く（二八）所歡を懷はざらんや。

【大意】秋は人をして悲傷せしむ。予終夜眠る能はず、詩文を作りて自ら慰むれば、孤燈閨中に明に、寒風隙を漏れ、白露庭に結び、門閉ぢて來り訪ふ者なし。歲月推移して歲將に改まらんとす。君今遠く出征すと聞く。軍事は殊に艱難なり。乃ち君を思ひて涙を流しつつあり。

涼風（二九）沙礫を吹き、霜氣何ぞ（三〇）皚皚たる。明月（三一）緹幕を照し、華燈炎輝を散ず。詩を賦して篇章を連ね、夜を極めて歸るを知らず。（三二）君侯壯思多く、文雅縱橫に飛ぶ。（三三）小臣信に頑魯、（三四）僶俛するも安んぞ能く追ばん。

【大意】君が軍中に在るを思ふに、寒風礫を飛ばし、霜白く月明なる處、詩を賦して疲るるを知らず、文雅の志縱橫に飛ばん。予は素より頑愚なり。徒に勉強するも到底及ぶ能はざるなり。

【二三】濡翰。筆を沾して詩を作ること。
【二四】凄。寒き貌。
【二五】應門。正門なり。
【二六】壯士。五官中郎將を指す。
【二七】戎事。軍事なり。
【二八】所歡。友人なり。五官中郎將を指す。
【二九】沙礫。小石なり。
【三〇】皚皚。白き貌。
【三一】緹幕。丹黃色のテント。
【三二】君侯。五官中郎將を指す。
【三三】小臣。公幹自ら謂ふ。
【三四】僶俛。黽勉、勉強なり。

(一)徐幹に贈る　　劉公幹

誰か謂ふ相去ること遠しと。此の(二)西掖の垣を隔つるのみ。(三)清切の禁に拘限せられ、中情宣ぶるに由なし。子を思ひて心曲を沈め、長歎して言ふ能はず。起坐して次第を失ひ、一日に三四たび遷る。歩して(四)北寺の門を出で、遙に(五)西苑の園を望めば、細柳道を夾んで生じ、(六)方塘清源を含む。輕葉風に隨ひて轉じ、飛鳥何ぞ(七)翻翻たる。(八)乖人感動し易く、涕下りて衿と連る。仰いで白日の光を視れば、(九)皦皦として高く且つ懸り、兼ねて(一〇)八紘の内を燭し、物類(一一)頗偏なし。我れ獨り深感を抱き、與に比するを得ず。

【大意】君と我と相距ること遠きにあらず。僅に西掖門の垣を隔つるのみ。然れども嚴重なる禁裏に在りては、往來して所思を宣迪する能はず。君を思へば氣結んで言ふ能はず。安居に堪へずして、起坐すること一日三四回に及ぶ。北寺の門を出でて君の居る處を望めば、柳は道を夾みて生じ、池には清流を湛へ、落葉散じ飛鳥翔るを見て、君を見る能はず。離居の人は感動し易く、涙

【一】徐幹。この時西掖に在り、公幹は禁省に在り。
【二】西掖。洛陽宮に東掖門、西掖門あり。
【三】清切の禁。嚴重なる禁裏。
【四】北寺。官署の名。
【五】西苑。御苑なり。
【六】方塘。池なり。清源は清流なり。
【七】翻翻。飛ぶ貌、音ヘン。
【八】乖人。離人なり。公幹自ら謂ふ。
【九】皦皦。白き貌。
【一〇】八紘。八方なり。
【一一】頗偏。偏頗なり。

襟を沾すに至る。仰いで白日を見れば、洽く天下の萬物を照し偏頗あることなし。我れ獨り深憂を抱きて志を失ひ、萬物と同じく其光に浴するを得ず。

從弟に贈る三首

劉公幹

(一)汎汎たる東流の水、(二)磷磷たる水中の石。(三)蘋藻其涯に生じ、華葉紛として(四)擾溺たり。之を采りて宗廟に薦め、以て(五)嘉客に羞むべし。豈園中の(六)葵なからんや。此の深澤より出づるを懿す。

【大意】人清廉なれば必ず用ひらるるを言ふ。蘋藻清流の岸に生ず。之を採りて宗廟に供すべく賓客に饗すべし。園中別に葵なきにあらざれども、蘋藻の深澤より生じて潔白なるに如かざるなり。

(七)亭亭たる山上の松、(八)瑟瑟たる谷中の風。風聲一に何ぞ盛なる、松枝一に何ぞ勁き。冰霜正に(九)慘悽なるも、終歲常に端正なり。豈(一〇)凝寒に罹はざらんや。松栢本性あり。

【大意】節義の守るべきを言ふ。山上の松は疾風冰霜にも傷つかず、常に儼然として立てり。是れ

【一】汎汎。流るる貌。
【二】磷磷。水中に石の見ゆる貌。
【三】蘋藻。水草の名。祭の時之を神前に供す。從弟に喩ふ。
【四】擾溺。多き貌。
【五】嘉客。賓客なり。
【六】葵。蔬菜の名。
【七】亭亭。高き貌。松を以て從弟に喩ふ。
【八】瑟瑟。風の聲。
【九】慘悽。寒き貌。
【一〇】凝寒。嚴寒なり。

本性の然らしむる所なり。

(一)鳳凰南嶽に集り、孤竹の根に徘徊す。心に於て厭かざるあり、翅を奮つて(二)紫氛を淩ぐ。豈常に勤苦せざらんや。(三)黄雀と羣するを羞づ。何れの時か當に(四)來儀すべき、將に聖明の君を須たんとす。

【大意】盛德の養ふべきを言ふ。鳳凰南嶽の竹根に徘徊すれども、心に滿たざる所あり、高く天上に升らんと欲す。天上に升るは勤勞ならざるにあらねど、俗士と伍するを恥づればなり。後日聖君の出づるを待ち、來りて其庭に舞ふべし。

【一】鳳凰。鳥の名。丹穴に生る、南に在り、故に南嶽といふ。竹實に非ざれば食はず。以て從弟に喩ふ。
【二】紫氛。天上の氣なり。
【三】黄雀。俗士に喩ふ。
【四】來儀。來り舞ひて容儀の美なること。書經に鳳凰來儀スとあり。

徐幹に贈る　　曹子建

驚風(一)白日を飄へし、忽然として西山に歸る。(二)圓景光未だ滿たず、(三)衆星粲として以て繁し。(四)志士世業を營み、(五)小人亦閑ならず。聊か且つ夜行きて游び、彼の(六)雙闕の間に游ぶ。(七)文

【一】白日。天子なり。曹操（魏の武帝）の死せるに喩ふ。
【二】圓景。月なり、魏の文帝に喩ふ。文帝位を嗣ぎたるも功德未だ徧からざるをいふ。
【三】衆星。羣小人に喩ふ。粲は明なり。
【四】志士。上に居る者。卽ち君子なり。世業は當世の功業。
【五】小人。下に居る者。

昌鬱として雲のごとく興り、(八)迎風中天に高し。(九)春鳩飛棟に鳴き、(一〇)流猋櫺軒に激す。(一一)蓬室の士を顧念するに、貧賤誠に憐むに足る。(一二)薇藿虛きに充たず、(一三)皮褐猶ほ全からず。忼慨して悲心あり、文を興して自ら篇を成す。(一四)寶棄てられて何人をか怨む。(一五)和氏其愆あり。(一六)冠を彈きて知己を俟つも、知己誰か然らざらん。(一七)良田晩歲なく、(一八)膏澤豐年多し。亮に(一九)璵璠の美を懷けば、久しきを積んで德逾ゝ宣ぶ。親交義敦きに在り、章を申ねて復た何をか言はん。

【六】雙闕。宮闕なり。
【七】文昌。殿の名、鄴都にあり。鬱は高起の貌。
【八】迎風。樓觀の名、亦鄴都にあり。
【九】春鳩。小人に喩ふ。飛棟は高き棟、高貴の位に喩ふ。
【一〇】流猋。暴風なり。君命の定まりなきに喩ふ。櫺軒は廊下の格子窓。
【一一】蓬室。あばらや。蓬室の士とは徐幹を指す。
【一二】薇藿。共に蔬菜の名。虛は空腹。
【一三】皮褐。皮の短衣。
【一四】寶。徐幹に喩ふ。
【一五】和氏。楚の和氏璞玉を得て楚王に獻ず、楚王以て石となして和氏を刖る。知己に喩ふ。暗に自己を指す。
【一六】冠を彈き。冠の塵を掃ひて出仕を待つこと。
【一七】良田。美田なり。有德の士、徐幹に喩ふ。晩歲なしとは晩しと雖必ず收穫あるをいふ。
【一八】膏澤。有德の士、徐幹に喩ふ。
【一九】璵璠。美玉なり、美德に喩ふ。

【大意】此詩は徐幹の不遇を慰むるなり。驚風起りて天日を飜し、日は忽ち西山に沈み、月出でたるも光未だ十分ならず、ただ衆星の閃くのみ。(魏の武帝崩じて文帝位を嗣ぎたれども、其德未だ徧からず、羣小人權勢を弄するに喩ふ)この時君子小人各功業を建てんと欲して營營たり。余も亦時に乘じて爲す所あらんと欲し、聊か雙闕の間に遊べるに(出遊に託言せるなり)殿閣は高大なれ

ども春鳩高棟に鳴き、疾風軒窓を拂ひ、久しく留るべきにあらず。(君命定まりなく邪臣權を弄するに喩ふ）飜つて貧賤の士（徐幹に喩ふ）を思ふに、衣食ともに足らず。慷慨して文章を作り、僅に餘憤を漏らしつつあり。昔寳玉（徐幹に喩ふ）の棄てらるるや、何人をか怨める。寳玉の棄てられしは、其の知己たる和氏の獻ずるに其人を得ざるに由るを以て、罪和氏に在りと謂はざるべからず。(己徐幹の知己なるも、徐幹を推擧する能はざるは、己の罪なりとの意）冠を彈きて知己の推擧を待つも、知己も亦同じく棄てらるるを以て、推擧すること能はざるなり。(子建も徐幹と同じく不遇の地位に在るをいふ）。然りと雖も請ふ君安んぜよ。良田膏澤は必ず收穫あり。盛德の士は必ず榮達すべきなり。親交の義は敦厚にして終始渝らざるに在り。君と我と榮枯を以て交を變ずるなけん。此他は復た何をか言はん。

(一)丁儀に贈る

曹子建

初秋涼氣發し、庭樹微く銷落す。凝霜(二)玉除に依り、清風(三)飛閣に飄る。朝雲山に歸らず、(四)霖雨川澤を成す。黍稷(五)疇隴に委す。農夫安ん

【一】丁儀。字は正禮、文才あり。魏の武帝辟して掾となす。
【二】玉除。玉階なり。
【三】飛閣。高閣なり。
【四】霖雨。ながあめ。
【五】疇隴。田のあぜ。委は棄なり。

ぞ獲る所あらん。貴に在りては多く賤を忘る。恩を爲す誰か能く博からん。(六)狐白冬を禦ぐに足る。焉んぞ(七)無衣の客を念はん。(八)延陵子を思慕し、寶劍惜む所にあらず。子其れ爾の心を寧んぜよ。親交義薄からず。

【大意】丁の不遇を慰むる詩なり。秋氣至りて木葉落ち、凝霜悲風朝閣に滿ち、陰陽和せずして霖雨川澤を成し、黍稷は田疇に委棄せられ、農夫に收穫なし。(小人起りて老臣衰へ、陰謀漸く長じて嚴令下り、朝臣相和せずして、横暴已まざるに喩ふ)然も上位に在る者は下位に在る者を顧みず、恩義を施すこと博からず。己狐白裘を著て他の無衣の人を憐まず。(暗に丁の如き正士を顧る者なきを言ふ)。余は常に延陵子に倣はんと期せり。寶劍は敢て惜む所にあらず。君請ふ安んぜよ、從來の交誼を以て必ず君を推輓せん。

王粲に贈る　曹子建

端坐して愁思に苦み、衣を攬りて起ちて(一)西游す。樹木春華を發き、淸池

【六】狐白。狐の腋の皮にて作れる裘。

【七】無衣の客。寒を防ぐ衣なき人。

【八】延陵子。呉の季札なり。季札上國に使し、徐君に過る。徐君其寶劍を見、言はざれども心に之を欲す、季札之を知り亦心に之を與へんことを許し、使命を果して歸る時、亦徐を過ぐ、時に徐君既に死せり、季札乃ち劍を其墓に懸けて去れり。

【一】西游。王粲西に在り、故に西游といふ。

長流を激す。中に（二）孤鴛鴦あり、哀鳴して（三）匹儔を求む。我此鳥を執へんことを願ふも、惜いかな輕舟なし。歸らんと欲して（四）故道を忘れ、顧望して但愁を懷く。悲風我が側に鳴り、（五）羲和逝きて留まらず。（六）重陰萬物を潤す。何ぞ懼れん澤周からざるを。誰か（七）君をして念多からしめ、自ら百憂を懷かしむる。

【大意】王粲の不遇を憐むなり。余愁思に堪へずして西に遊べば、樹木は春の花を著け、池には清流激す。中に番を離れし鴛鴦あり。悲鳴して其友を求むるが如し。（王粲が子建の推輓を求むるに喩ふ）我此鳥を執へんことを望めども、輕舟の以て濟るべきなし。（王粲を推輓する能はざるに喩ふ）歸らんと欲して來路を忘れ、ただ顧望して之を憐むのみ。歳月移りて今や秋風の時となり、重陰正に萬物を潤さんとす。何ぞ恩澤の周く及ばざるを憂へんや。（天子必ず王粲を登庸すべきに喩ふ）君をして憂思を懷かしむる者は何人ぞや。一に我が無力の致す所なり。請ふ君之を恕せよ。

【二】孤鴛鴦。番をはなれしヲシドリ。王粲に喩ふ。
【三】匹儔。同類なり。
【四】故道。もと來し道。
【五】羲和。日輪の御者。
【六】重陰。魏の太祖に喩ふ。
【七】君。王粲を指す。

又丁儀・王粲に贈る

曹子建

(一)軍に從つて函谷を度り、馬を驅りて(二)西京を過ぐ。(三)山岑高くして極なく、(四)涇渭濁淸を揚ぐ。壯なるかな帝王の居。佳麗百城に殊なり。(五)員闕浮雲を出で、(六)承露泰淸に槩る。(七)皇佐天惠を揚げ、四海兵を交ふるなし。(八)權家勝を愛すと雖も、國を全うするを(九)令名となす。(一〇)君子末位に在り、(一一)德聲を歌ふ能はず。(一二)丁生は怨んで朝に在り、(一三)王子は歡んで自ら營む。歡怨は(一四)貞則にあらず、中和誠に經るべし。

【大意】われ征西の軍に從ひ、馬を驅りて長安に至る。山峰高く聳え、淸渭濁涇其間を流れ、員闕雲を凌ぎ、承露天を衝く。始めて帝居の壯麗なるを見たり。今や吾が父(曹操)天子の惠を闡揚し、四海皆服從して復た兵を交ふるなし。兵家は戰勝を尙べども、戰勝必ずしも貴ぶに足らず。要は國家を安全にするに在り。二君(丁王を指す)は卑位に居りて其德聲を歌ふ能はず。一は朝に在りて卑位を怨み、一は朝を退きて家居を歡べり。夫れ歡と怨とは共に中正の道に

【一】軍。建安二十三年七月、西劉備を征し、九月長安に至る。函谷は關の名。
【二】西京。長安なり。
【三】山岑。山峰なり。
【四】涇渭。二川の名、涇水は濁り渭水は淸し。
【五】員闕。闕の名。
【六】承露。仙人掌上の承露盤なり。泰淸は天なり。
【七】皇佐。曹操を指す。天惠の天は君なり。孔子家語に君惠ナレバ臣忠ナリとあり。
【八】權家。兵法家なり。
【九】令名。名譽なり。
【一〇】君子。丁王を指す。
【一一】德聲。曹操令德の聲。
【一二】丁生。丁儀は曹操の掾となり、常に職の卑きを怨む。
【一三】王子。王粲は侍中となり、後官を免じて家に在り、故に自ら營むといふ。
【一四】貞則。忠貞の法則。

あらず。宜しく中和を以て法となすべきなり。

(一)白馬王彪に贈る　　曹子建

帝に(二)承明の廬に謁し、逝いて將に(三)舊疆に歸らんとす。清晨(四)皇邑を發し、日夕(五)首陽を過ぐ。(六)伊洛廣く且つ深し。濟らんと欲すれども川に梁なし。舟を汎べて洪濤を越え、彼の(七)東路の長きを怨む。顧瞻して城闕を戀ひ、領を引きて情内に傷む。

其一

【大意】黄初四年、吾れ天子（魏の文帝、卽ち子建の同母兄なり）に承明廬に謁し、終りて舊邑に歸らんとし、晨に帝都を發して夕に首陽山を過ぐ。伊洛の二川あり。橋なきが故に舟を泛べて之を渡り、進んで東路の長きを往く。幾度か宮闕を顧戀し、心中悲傷せり。

(八)太谷何ぞ寥廓たる。山樹鬱として蒼蒼たり。(九)霖雨我が塗を泥し、(一〇)流潦浩として縱橫す。(一一)中逵

【一】白馬王。名は彪、字は朱虎、魏の武帝の子なり、白馬王に封ぜらる。
【二】承明廬。承明は門の名。廬は禁中寓直の所。
【三】舊疆。鄄城なり。時に子建雍邱に封ぜられたるも、尙ほ鄄城に居たり。
【四】皇邑。帝都なり。
【五】首陽。山の名、洛陽の東北二十里にあり。
【六】伊洛。二川の名。
【七】東路。鄄城に歸る道。
【八】太谷。谷の名、洛陽の西南に在り。寥廓は廣くして中空しき貌。
【九】霖雨。ながあめ。
【一〇】流潦。雨水の路上を流るるもの。
【一一】中逵。中路、道の中央。

絶えて軌なく、轍を改めて高岡に登る。(一二)脩坂雲日に造り、我が馬(一三)玄以て黃す。　其二

【大意】往いて太谷に至れば、樹木鬱蒼として茂り、雨水路上に流れて車を行るべからず。乃ち道を轉じて高岡の上を往くに、長坂高く天を衝く。我が馬之が爲に疲勞せり。

玄黃して猶ほ能く進めども、我が思鬱として以て紆たり。(一四)鬱紆として將た(一五)進み難し。(一六)親愛離居に在り。本相與に偕にせんと圖りしも、中ごろ更めて倶にする克はず。(一七)鴟梟衡梔に鳴き、(一八)豺狼路衢に當る。(一九)蒼蠅白黑を間へ、讒巧親をして疎ならしむ。還らんと欲すれども絶えて蹊なく、轡を攬り止りて(二〇)踟躕す。　其三

【大意】疲馬猶ほ能く進めども、我が心結ぼれて解けず。何故に解けざるかといふに、兄弟道を同うして藩國に歸らんとせしに、朝命を以て同行を禁ぜられたればなり。是れ皆鴟梟豺狼にも比すべき小人の、朝廷の要路に立ちて讒巧を事とし、白黑を變亂するの致す所なり。ああ讒人路を塞ぎて還るに道なし。徒に顧戀徘徊するのみ。

【一二】脩坂。長き坂。
【一三】玄黃。馬の疲勞すること。
【一四】鬱紆。愁思の繁きをいふ。
【一五】進み難し。一本に何ヲカ念フに作る、從ふべし。
【一六】親愛。兄弟なり。黃初四年正月、白馬王、子建と京師に朝し、七月相偕に藩國に歸る。然るに有司其同行を禁ぜり。
【一七】鴟梟。ふくろふ、惡鳥なり。小人に喩ふ。衡梔は車轂なり。
【一八】豺狼。小人に喩ふ。路衢は郭内の道なり。
【一九】蒼蠅。讒佞の人に喩ふ。
【二〇】踟躕。躊躇なり。

踟蹰するも亦何にか留まらん、相思うて終極なし。秋風微涼を發し、寒蟬我が側に鳴く。原野何ぞ(二一)蕭條たる。白日忽として西に匿る。歸鳥(二二)喬林に赴き、(二三)翩翩として羽翼を厲ぐ。孤獸走りて羣を索め、草を銜んで食ふに遑あらず。物に感じて我が懷を傷ましむ。心を撫でて長太息す。　其四

【大意】踟蹰して留まる所なく、君を思ふの情已む所なし。時に秋風寒蟬の聲を聞き、荒野落日の間、歸鳥孤獸の羣を求むる（我の兄弟と離隔して思慕の情禁ずる能はざるが如し）を見、感傷して長歎太息せり。

太息して將に何をか爲さんとする、天命我と違ふ。奈何せん(二四)同生を念ふも、一たび往きて形歸らず。孤魂(二五)故域に翔り、靈柩京師に寄る。存する者忽ち復た過ぎ、亡沒して身自ら(二六)衰ふ。人生れて一世に處る。去ること朝露の晞くが若し。年(二七)桑楡の間に在り、影響追ふ能はず。自ら顧るに金石にあらず。(二八)咄唶して心を悲ましむ。　其五

【大意】たとひ太息すとも天命我と違ふを如何ともすべからず。然も尚ほ吾が兄京師に薨じ、一たび去つて復た歸らざるを念はざるを得ず。ああ人命は朝露の如し。吾亦忽ち沒して自ら悲むに至ら

【二一】蕭條。草木衰落の貌。
【二二】喬林。高き林。
【二三】翩翩。飛ぶ貌。
【二四】同生。兄弟なり。子建の同母兄任城王をいふ。黄初四年正月、任城王も亦白馬王子建とともに京師に朝し、任城王京師に薨ず。
【二五】故域。任城郡なり。
【二六】衰。一本哀に作る。從ふべきが如し。
【二七】桑楡。日の沒する處。老年に喩ふ。
【二八】咄唶。大に驚嘆する聲。

ん。況んや年既に老いて再び少年なる能はず。此身金石にあらざるをや。是亦長嘆に堪へざるなり。心悲んで我が神を動かすも、棄て置いて復た陳ぶるなからん。(二九)丈夫四海に志す。萬里猶ほ比隣のごとし。恩愛苟も虧けずんば、遠きに在るも(三〇)分日に親し。何ぞ必しも(三一)衾幬を同うし、然る後(三二)殷勤を展べん。憂思(三三)疾疢を成すは、乃ち兒女の仁なるなからんや。(三四)倉卒骨肉の情、能く苦辛を懷かざらんや。其六

【大意】吾が心悲に堪へざれども、棄てて復た言ふことなけん。男子は志四海に在り、たとひ萬里に相別るるも、猶ほ比隣の如し。恩愛だに存せば遠きに居るも日に相親むを得。何ぞ必しも衾帳を共にして、然る後親愛すとなさんや。別離を憂へて病を成すは、兒女子の事なり。然も倉卒にして相別れては、尙ほ兄弟相思ふの悲なき能はず。

苦辛して何をか慮思する。天命信に疑ふべし。虛無(三五)列仙を求むるも、(三六)松子久しく吾を欺く。(三七)變故須臾に在り。百年誰か能く持せん。離別して永く會ふなし。手を執るは將た何れの時ぞ。王其れ玉體を愛せよ。倶に(三八)黃髮の期を享けん。淚を收めて長路に即き、筆を援りて此れより辭す。其七

【二九】丈夫。男子なり。
【三〇】分。志といふが如し。
【三一】衾幬。被帳なり。
【三二】殷勤。親愛なり。
【三三】疾疢。熱病なり。
【三四】倉卒。急遽なり。倉卒の間に別るるをいふ。
【三五】列仙。多くの仙人。
【三六】松子。赤松子、古の仙人。
【三七】變故。變事なり。死をいふ。
【三八】黃髮。長壽なり。

【大意】天命誠に疑ふべく、心を虛無に託し列仙の道を求めんとするも、其道亦信ずべからず。死亡は將に須臾にして來らんとす。誰か百年の壽を保たん。今や王と相別る。何れの時か復た相逢ふを得ん。王請ふ自愛せよ。願くは相俱に長壽を保たん。ここに涙を拭ひて歸路に就き、筆を援りて此詩を賦す。

(一)丁翼に贈る　　曹子建

(二)嘉賓城闕に塡ち、豐膳(三)中廚より出づ。吾と二三子と、此城隅に(四)曲宴す。(五)秦箏西氣を發し、(六)齊瑟東謳を揚ぐ。肴來りて虛く歸らず、觴至りて反つて餘すなし。我れ豈異人に狎れんや、朋友我と俱にす。大國良材多く、海の明珠を出すに譬ふ。君子は義休く侍はり、小人は德儲ふるなし。善を積めば餘慶あり、榮枯立どころに須つべし。(七)滔蕩固に大節、時俗拘る所多し。君子は大道に通ず。(八)世儒たるを願ふなかれ。

【一】丁翼。字は敬禮、儀の弟なり。魏の黃門侍郎たり。
【二】嘉賓。よき客。
【三】中廚。宮中の大膳職。
【四】曲宴。臣下に宴を賜ふこと。
【五】秦箏。秦女箏を善くす。秦は西に在り、故に西氣といふ。
【六】齊瑟。齊女よく瑟を鼓す。齊は東に在り、故に東謳といふ。
【七】滔蕩。大なる貌。
【八】世儒。俗儒なり。

【大意】中厨より酒肴を賜はり、諸君と此城角に宴し、箏を彈じ謳を歌ひ、飲食して餘す所なし。我が倶に宴する所の諸君は、皆大國の良材にして、大海の明珠の如し。夫れ君子は德義を具ふれども小人は之に反す。善を積めば榮え、惡を爲せば衰ふ。よろしく滔蕩たる大節を立つべし。小節に拘束せらるるなかれ。君子は大道に通達するを要す。記誦の俗儒となるなかれ。

(一)秀才の軍に入るを贈る五首　嵇叔夜

良馬既に閑ひ、(二)麗服暉あり。左に(三)繁弱を攬り、右に(四)忘歸を接け、風のごとく馳せ電のごとく逝き、景を躡み(五)飛を追ふ。中原を(六)淩厲し、顧盼して姿を生ず。我が(七)好仇を攜へ、我が輕車に載り、南のかた長阜に凌り、北のかた清渠を厲り、仰いで驚鴻を落し、俯して淵魚を引く。(八)游田に盤んで、其れ樂き(九)只且。

【大意】馬は能く進退に閑ひ、軍服美しくして光輝あり。左に弓を持ち右に矢を持ち、士卒風電の馳するが如く、疾きこと飛鳥を追ふが如し。

【一】秀才。嵇喜、字は公穆、叔夜の兄なり。
【二】麗服。うるはしき軍服。
【三】繁弱。弓の名。
【四】忘歸。矢の名。
【五】飛。飛鳥なり。
【六】淩厲。馳せ上ること。
【七】好仇。よき儔匹なり。秀才を指す。詩經に赳赳タル武夫ハ公侯ノ好仇とあり。
【八】游田。遊獵なり。
【九】只且。助辭にして意義なし。

中原を顧みて雄姿を示し、我が秀才亦車を同うして往く。或は長岡に登り或は清川を渡り、仰いでは鴻雁を射、俯しては淵魚を捕へ、途中に遊獵して樂を盡す。

輕車迅く邁き、彼の長林に息ふ。春木載ち榮え、葉を布き陰を垂れ、(一〇)習習たる谷風、我が(一一)素琴を吹き、(一二)咬咬たる黃鳥、疇を顧みて音を弄す。感悟して情を馳せ、我が(一三)欽する所を思ふ。心の憂ふる、永嘯長吟す。

【大意】輕車疾く馳せて長林に息へば、春木花を開き葉を展べ、春風習習として琴を鼓するが如く、黃鳥其友を顧みて鳴くあり。我之を見て坐に秀才を思ひ、心憂へて吟嘯す。

(一四)浩浩たる洪流、我が邦畿を帶り、(一五)萋萋たる綠林、榮を奮ひ暉を揚げ、魚龍(一六)瀺灂として、山鳥羣飛す。駕して言に出遊し、日夕歸るを忘る。我が(一七)良朋を思ひ、渴するが如く飢うるが如し。願うて言に獲ず、愴んで其れ悲む。

【大意】大川浩浩として邦畿を繞り、林木萋萋として茂り、魚鳥各〻其所を得て樂めり。我れ出遊して日暮に至るも歸るを忘れ、秀才を思ふこと飢渴の飲食を思ふが如し。然も相見る能はず。爲に

【一〇】習風。風和なる貌。谷風は春風。
【一一】素琴。飾なき琴。
【一二】咬咬。鳥の聲。黃鳥は鳥の名。
【一三】欽。敬なり。欽する所とは秀才をいふ。
【一四】浩浩。水の流るる貌。洪は大なり。
【一五】萋萋。盛なる貌。
【一六】瀺灂。魚龍の水に游ぐ貌。
【一七】良朋。秀才を指す。

愴然として悲めり。

(一八)徒を蘭圃に息はしめ、馬を(一九)華山に秣ひ、(二〇)磻を平皐に流し、綸を長川に垂れ、歸鴻を目送し、手に(二一)五絃を揮ひ、俯仰して自得し、心を(二二)太玄に游ばしむ。彼の釣叟を嘉す、魚を得て(二三)筌を忘るるを。(二四)郢人逝きぬ。誰と與にか言を盡さん。

【大意】士卒を蘭園に息はしめ、馬を華山に秣ひ、箭を平澤に飛ばし、釣を長川に垂れ、以て途中に漁獵し、歸雁を目送して五絃の琴を彈じ、俯仰して大道を心得し、かの釣叟（莊子に見ゆ）の魚を得て筌を忘れしが如く、秀才亦よく大道に冥合せん。今や此人去りぬ。我れ誰と與にか大道を語らん。

閑夜肅淸にして、朗月軒を照す。微風袪を動かし、(二五)組帳高く褰ぐ。(二六)旨酒樽に盈つるも、與に歡を交ふるなし。鳴琴(二七)御に在るも、誰と與にか鼓彈せん。仰いで(二八)同趣を慕ひ、其馨蘭の若し。(二九)佳人在らず、能く永歎せざらんや。

【一八】徒。兵士なり。蘭圃は蘭の生ずる園。
【一九】華山。山に光華あるなり。
【二〇】磻。箭鏃なり。平皐は平澤なり。
【二一】五絃。琴なり。
【二二】太玄。虛無恬淡の大道。
【二三】筌。魚を捕ふる竹器。魚を得て筌を忘るとは道を得たるをいふ。
【二四】郢人。莊子に郢人堊ニテ其鼻端ヲ墁スとあり。ここは秀才を指すなり。
【二五】組帳。とばり。
【二六】旨酒。美酒なり。
【二七】御。用なり。
【二八】同趣。心を同うする人、秀才を指す。
【二九】佳人。秀才を指す。

【大意】夜静にして明月軒を照し、微風衣裾を吹く時、獨り帷帳を掲げて明月に對す。美酒あれども與に酌むべき人なく、琴瑟の用ふべきあるも與に彈ずべき人なし。秀才は吾が同心の友にして、其交蘭の馨しきが如し。今此人在らず。何ぞ歎息せざるを得んや。

山濤に贈る

(一)司馬紹統

(二)苕苕たる椅桐樹、南岳に寄生す。上は青雲霓を凌ぎ、下は千仞の谷に臨む。身を處くこと孤且つ危、何に於てか余が足を託せん。昔は(三)朝陽に植ち、枝を傾けて(四)鸞鷟を俟つ。今者は世用を絕ち、(五)倥傯として迫束せらる。(六)班匠我を顧みず、(七)牙曠我を錄せず。焉んぞ琴瑟を成すを得ん。何に由りてか妙曲を揚げん。(八)冉冉として三光馳す。逝く者一に何ぞ速なる。中夜寐ぬる能はず、劍を撫して起つて(九)躑躅す。彼の(一〇)孔聖の

【一】司馬紹統。司馬彪、字は紹統、晉に仕へて散騎侍郎となる。初め山濤、吏部侍郎たり、時に紹統未だ仕へず、故に此詩を贈りて山濤の推薦を求むるなり。

【二】苕苕。高き貌。椅桐は木の名。以て琴瑟を作るべし。紹統自ら喩ふ。

【三】朝陽。山陽なり。詩經に梧桐生ズ、カノ朝陽ニとあり。

【四】鸞鷟。鳳凰の類の神鳥。鳳凰は梧桐にあらざれば棲まず、竹實にあらざれば食はず。

【五】倥傯。困苦なり。

【六】班匠。公輸般及び匠石、共に技術に巧なる人。執政に喩ふ。

【七】牙曠。伯牙及び師曠、共に音樂の妙手。執政に喩ふ。

【八】冉冉。進む貌。三光は日月星なり。

【九】躑躅。徘徊といふがごとし。

【一〇】孔聖。孔子なり。孔子逝水の嘆あり。

歎に感じ、此の年命の促なるを哀む。(一)卞和幽冥に潛まば、誰か能く(二)奇璞を證せん。冀願くは(三)神龍來り、光を揚げて以て燭されんことを。

【大意】南岳に椅桐樹あり。上は青雲を淩ぎ、下は千仞の谷に臨めり。然も孤危の地に在るを以て、根を託するの地なし。昔は朝陽に在りて鳳凰の來り棲まんことを待ち(入りて君に仕へんとするに喩ふ)。今は世に棄てられて困苦せり。されば匠人も我が材を認めず、樂師も我が材を收錄せず。故に琴瑟となりて妙音を發するに由なし。(執政者の登庸を得ざるを以て、伎倆を發揮する能はざるに喩ふ。)日月は過ぎ易く老將に至らんとす。之を思へば中夜眠る能はず、獨り起つて徘徊し、逝水の嘆を發し、人命の速なるを哀まざるを得ず。良材ありと雖も之を證する者なければ、何ぞ世に用ひらるるを得んや。願くは君の之を推薦せられんことを。

【一】卞和。璞を得て楚王に獻じたる人。推薦者に喩ふ。
【二】奇璞。彫琢を加へざる玉。璞は音ボク、叶韻。
【三】神龍。山濤に喩ふ。鍾山に燭龍あり、能く萬物を照す。

(一)何劭に答ふ二首　　張茂先

(二)吏道何ぞ其れ迫れる。(三)窘然として坐して自ら拘る。(四)纓緌徽纆となる。(五)文憲焉んぞ踰ゆ

【一】何劭。字は敬祖。晉に仕へて太子太師となる。
【二】吏道。官吏たること。
【三】窘然。窮屈なる貌。

べけん。(六)恬曠足らざるを苦み、(七)煩促每に餘あり。(八)良朋新詩を貽り、我に示すに游娯を以てす。(九)穆たること淸風を灑ぐが如く、(一〇)煥たること春華の敷くが若し。昔より(一一)寮寀を同うし、今に於て(一二)園廬を比ぶ。衰疾(一三)辱殆に近し。庶幾はくは竝に(一四)輿を懸けんことを。(一五)髮を重陰の下に散じ、杖を抱いて淸渠に臨み、耳を屬けて(一六)鸎鳴を聽き、目を流して(一七)鯈魚を翫び、從容として(一八)餘日を養ひ、樂を(一九)桑楡に取らん。

【大意】官吏たるは甚だ窮屈にして自ら我が身を束縛せるが如く、法規ありて之を踰ゆるを得ず。常に閑暇なきに苦み、齷齪として日を送る。君新詩を我に寄せ、我に遊樂を勸む。其詩恬和の氣ありて淸風の吹くが如く、爛然たること春花の笑ふが如し。君と我とは昔より官職を同うし、居宅も亦相接せり。交誼一日にあらず。衰疾の身を以て官に在るは、危辱を招くの道なり。願くは相與に官を辭し、重陰の下に息ひ、淸流の上に臨み、鸎鳴を聽き游魚を視、從容游樂して晩年を送らん。

【四】纓緌。冠の紐。徽纆は人を縛る索。
【五】文憲。法規なり。
【六】恬曠。閑暇なり。
【七】煩促。急迫なり。
【八】良朋。何劭を指す。
【九】穆。和なり。
【一〇】煥。光り輝くこと。
【一一】寮寀。官職なり。
【一二】園廬。居宅なり。
【一三】辱殆。危辱なり。老子に足ルヲ知レバ辱メラレズ、止ルヲ知レバ殆カラズとあり。
【一四】輿を懸く。官を辭すること。
【一五】髮を散ず。冠をかぶらざること。
【一六】鸎鳴。黃鸝の鳴くこと。
【一七】鯈魚。小魚なり。
【一八】餘日。餘年なり。
【一九】桑楡。日の入る處。老年に喩ふ。

(二〇)洪鈞萬類を陶し、(二一)大塊羣生を稟く。(二二)明闇信に姿を異にし、靜躁亦形を殊にす。予有識に及んでより、志功名に在らず。(二三)虛恬は竊に好む所、文學は少うして經めし所なり。忝く(二四)旣過の任を荷ひ、白日已に西に傾く。道長うして智の短きを苦み、責重くして才の輕きに困む。(二五)周任遺規あり、其言明にして且つ清し。(二六)負乘我が戒をなす。(二七)夕まで惕れ坐して自ら驚く。是を用て(二八)嘉貺に感じ、心を寫して中誠を出す。篇を發すること溫麗なりと雖も、乃ち其情に違ふなからんや。

【大意】天地萬物を生成す。人の性明暗靜躁各〻異る所あり。予は智識ありてより以來、志を功名に置かず。竊に虛淡の道を慕ひ、少年より文學を脩む。久しく重任を忝うして、今や已に衰老に及び、常に任重く道遠くして、我が才智の足らざるに苦む。昔周任は力量ありて官に就くべく、然らざる者は退くべきを戒め、易經には小人をして君子の事を爲さしむれば、必ず失敗を招くべきことを戒めたり。故に予常に自ら戒

【二〇】洪鈞。天をいふ。萬類は萬物。陶は作なり。
【二一】大塊。地なり。
【二二】明闇。明暗なり。
【二三】虛恬。老莊の道。
【二四】旣過。從來といふが如し。
【二五】周任。古の賢人なり。遺規は後世に遺せる訓戒。論語に周任言ヘルアリ、曰ク力ヲ陳ベテ列ニ就ク、能ハザル者ハ止ムトとあり。
【二六】負乘。易經に負ヒテ且ツ乘レバ寇ノ至ルヲ致スとあり。負は負擔、小人の事なり。乘は乘車、君子の事なり。
【二七】夕まで。易經に夕マデ惕若スレバ厲ケレドモ咎ナシとあり。常に戒愼驚懼し居れば咎を蒙むることなしとの意。
【二八】嘉貺。よき賜物。詩を贈られしこと。

愼驚懼しつゝあり。今新詩を贈り、游樂を勸められしに因り、わが中情を述べて、之に答ふる所以なり。ただ章句溫麗なりと雖も、今倶に朝に在りて尙ほ隱退する能はざるは、未だ我が眞情に協へりとなす能はざるを憾むのみ。

張華に贈る

(一)何敬祖

四時更ゝ代謝し、(二)懸象迭に卷舒す。暮春忽ち復た來り、和風(三)節と倶にす。俯して淸泉の涌くに臨み、仰いで(四)嘉木の敷くを觀る。我が(五)陋圃に周旋し、西のかた(六)廣武の廬を瞻る。旣に貴くして儉を忘れず、(七)有に處て能く無を存す。俗を鎭ずるは簡約に在り、(八)樹塞焉んぞ慕るに足らん。在昔(九)班司を同うし、今者園墟を竝ぶ。私に願くは(一〇)黃髮を偕にし、逍遙して琴書を綜べ、爵を茂陰の下に擧げ、手を攜へて共に(一一)躊躇せんことを。奚を用てか形骸を遺れん。(一二)筌を忘るる

【一】何敬祖。前詩に出づ。
【二】懸象。日月なり。卷舒は往來といふが如し。
【三】節。氣節なり。氣節と倶に來ること。
【四】嘉木。佳樹なり。
【五】陋圃。敬祖の園なり。周旋は周遊なり。
【六】廣武。張華廣武侯に封ぜらる。
【七】有。富なり。無は貧なり。
【八】樹塞。門外に樹木を植ゑて屛とすること、諸侯の爲すべき事なり。論語に邦君樹シテ門ヲ塞グ、管氏モ亦樹シテ門ヲ塞グとあり。
【九】班司。官職なり。
【一〇】黃髮。老壽をいふ。
【一一】躊躇。緩步なり。
【一二】筌。秀才の軍に入るに贈る詩に見ゆ。

は魚を得るに在り。

【大意】四時往來して忽ち暮春の節となりぬ。余乃ち淸泉の湧出するを見、佳樹の花を著くるを眺めつつ庭内を遊歩し、因つて西隣なる君の居宅を望む。君は富貴に在りて貧賤を忘れず、簡約節儉を以て俗情を鎭め、樹塞の僭越に倣はず。實に高德の士なり。予は昔君と官職を同うし、今亦居宅を接せり。願くは相與に老壽に上り、琴書の樂をなし、遊樂を俱にせん。何を以てか形體を遺るべき。ただ大道を悟得するに在り。

(一)馮文羆が斥丘の令に遷れるに贈る　陸士衡

於皇なる聖世、時れ文惟れ晉。命を受くること天よりし、奄に(二)黎獻を有つ。(三)閶闔既に闢き、(四)承華再び建つ。明明として上に在り、集るあるは惟れ(五)彥なり。　其一

【大意】わが晉は文德を以て天下を和げ、天命を受けて天子となり、衆賢を臣とし、閶闔門既に開きて、又承華門を建て（武帝始めて天子となり、愍懷太子既に立ちし事をいふ）俊秀の士を集めて左右に置く。

【一】馮文羆。太子洗馬より斥丘令に遷る。士衡贈るに此詩を以てす。斥丘は縣の名、縣の長官を令といふ。
【二】黎獻。衆賢なり。
【三】閶闔。洛陽城門なり。
【四】承華。太子の門の名。
【五】彥。秀士なり。

（六）奕奕たる馮生、哲問允に迪む。天（七）子を保定し、徳として鑠からざるはなし。心を邁ふと（八）玄曠、志を矯ぐること（九）崇邈なり。彼の承華に遵ひ、其容（一〇）灼灼たり。　其二

【大意】　馮生盛美にして賢知の道を蹈み、天其徳を賦與して美ならざるはなく、行事美大にして志を擧ぐること高遠なり。よく太子に奉事し、其容灼灼として光輝あり。

嗟我人（一一）斯、翼を（一二）江潭に戢む。命ありて集り止、翻飛して南よりす。幽谷より出でて、爾と林を同うす。雙情交ゝ映し、物を遺れて心を識る。　其三

【大意】　我れ江南に生る。天子の命を受けて京師に到り、君と同じく太子洗馬となる。鳥の幽谷より出で相與に林を同うするが如し。因つて交情互に密に、深く同心の誼を結ぶ。

人亦言へるあり、交道實に難しと。（一三）頽たるある弁、（一四）千載一たび彈ず。今我と子と、世を曠うして歡を齊うす。利は（一五）金石を斷ち、氣は秋蘭より（一六）惠なり。　其四

【六】奕奕。美盛の貌。
【七】子。馮生を指す。
【八】玄曠。玄は美、曠は大。
【九】崇邈。崇は高、邈は遠。
【一〇】灼灼。光ろ貌。
【一一】斯。助辭なり意義なし。下文の止も亦同じ。
【一二】江潭。士衡は吳の人、故にいふ。
【一三】頽。弁の貌。弁は冠なり。
【一四】千載。千年なり。漢書に王陽位ニアレバ貢公冠ヲ彈ズとあり。貢禹は王吉と友たり、吉既に貴顯なり。貢禹乃ち其冠の塵を拂ひ、王吉の推擧に由りて出で仕へんことを待つなり。
【一五】金石。易經に二人心ヲ同ウスレバ其利金ヲ斷ツ、同心ノ言ハ其臭蘭ノ如シとあり。
【一六】惠。美なり。

【大意】古人既に交道の難きをいへり。然も君と我とは千歳の後に生れて、貢禹、王吉と其交情を同うし、其の堅利は以て金石をも斷つべく、其氣は秋蘭の香よりも美なり。

(一七)羣黎未だ綏んぜず。帝用て勤む。(一八)我れ明德を求め、(一九)百里に肆ぬ。僉いふ(二〇)爾諧へよと。民を是れ(二一)紀せしむ。乃ち眷みて北に徂き、(二二)帝祉を對揚す。 其五

【大意】庶民未だ安からず。帝因つて大に政事に勤め、明德の士(馮生)を求めて縣令となさんとす。宰臣皆言ふ馮生其政を諧和すべしと。帝乃ち馮生をして斥丘の民を治めしむ。馮生是に於て北のかた斥丘に往き、帝德を發揚す。

疇昔の游、(二三)好合纏緜たり。借ひ未だ給らずといふも、亦既に三年なり。居ては(二四)華幄に陪し、出でては(二五)朱輪に從ひ、(二六)驥を方べ鑣を齊うし、迹を比べ塵を同うす。 其六

【大意】君と我とは從來親交極めて密なり。未だ足れりとなすを得ざれども、既に三年の久しきに

【一七】羣黎。庶民なり。
【一八】我。帝をいふ。明德とは善德ある人。馮生を指す。
【一九】百里。縣なり。縣は凡そ方百里なり。
【二〇】爾諧。爾は馮生を指す。其政を諧和せよとなり。
【二一】紀。治むること。
【二二】帝祉。帝の福なり。對揚は天意に答へて發揚すること。
【二三】好合。親交なり。纏緜は密なる貌。
【二四】華幄。太子の帳なり。
【二五】朱輪。朱塗の車。太子の車なり。
【二六】驥。駿馬なり。

及べり。其間居ては倶に太子の帳帷に侍し、出でては駒を竝べ迹を連ねて太子に從へり。

(二七)之子既に命ぜられ、(二八)四牡項領す。塗に遵ひて遠く蹈み、軌を騰げて高く騁す。(二九)慶雲質を扶け、淸風景を承く。嗟我れ人を懷ふ。其の邁く惟れ永し。　其七

【大意】馮生既に帝命を受け、車に駕して任に斥丘に赴く。我れ之を見送れば瑞雲其身を扶け、淸風其影を護る。因つて此の遠行の人を思ふこと深し。

(三〇)否泰殊なるあり、窮達違ふあり。子が(三一)春華に及ぶも、爾が(三二)秋暉に後る。逝いて將に我を去り、彼の(三三)朔陲に陟らんとす。子を之れ念ふにあらずんば、心孰が爲にか悲まん。　其八

【大意】人には運と不運とあり、窮達亦各ゝ異り、故に我は君と少年の榮華を倶にするを得たるも、晩年の盛貴を倶にするを得ず。(士衡時に官を免ぜられて家居す。故に此言あり。)君既に往き、將に斥丘に到らんとす。君の如き親交ある友を思はずして、復た誰をか思はんや。

(一)賈長淵に答ふ　陸士衡

【二七】之子。馮生を指す。
【二八】四牡。四匹の馬。一車に四馬を駕す。項領はクビキを項上に著くること。
【二九】慶雲。瑞雲なり。質は軀なり。
【三〇】否泰。好運と不運なり。
【三一】春華。少年なり。
【三二】秋暉。老成なり。
【三三】朔陲。北邊なり。斥丘をいふ。

【一】賈長淵。賈謐、字は長淵。

余昔（二）太子洗馬たり。魯公賈長淵、（三）散騎常侍を以て、一（四）東宮に侍すること年を積めり。余出でて（五）吳王の郞中令に補し、元康六年、入りて（六）尙書郞となる。魯公詩一篇を贈る。此詩を作りて之に答ふと云爾。

伊れ昔皇あり、肇めて（七）黎蒸を濟ふ。天に先だちて物を創め、（八）景命に是れ膺る。降りて（九）羣后に及び、迭に毀れ迭に興る。（一〇）邈たるかな終古、（一一）崇替徵あり。　其一

【大意】昔三皇天下を統べ、天意に先だちて萬物を化成し、始めて天命を受けて天子となる。爾來衆君主或は興り或は亡び、その興廢の徵歷然として存せり。

漢の季に在りて、（一二）皇綱幅裂し、（一三）火辰暉を匿し、（一四）金虎質を曜かし、雄臣（一五）馳騖し、義夫節に赴き、位を釋て戈を揮ひ、言に王室を謀る。　其二

【大意】漢の末に至り、皇威衰へて天下騷亂するや、英雄義士奔走して忠節を蹈み、己の守位を棄

【二】太子洗馬。官名。
【三】散騎常侍。官名。
【四】東宮。皇太子なり。
【五】吳王。名は晏、字は平度、晉の武帝の第二十三子、吳に封ぜらる。郞中令は官名。
【六】尙書郞。官名。
【七】黎蒸。衆庶なり。
【八】景命。景は大、天の大命なり。
【九】羣后。衆君主なり。
【一〇】邈。遠きこと。終古は太古より以來。
【一一】崇替。興廢なり。
【一二】皇綱。皇室の權力。幅裂は帛幅の如く裂くること。
【一三】火辰。心星なり。この星明かなれば天下和平なり。暗ければ天下爭亂す。
【一四】金虎。金は太白星、虎は昴星、この二星相薄れば兵亂あり。
【一五】馳騖。奔走といふが如し。

て戈を揮つて王室を救はんことを謀る。

王室の亂るる、邦として泯びざるはなし。彼の(二六)墜景の如く、曾て振ふべからず。乃ち(二七)三哲を眷み、斯民を乂めしむ。土を啓くこと難しと雖も、物を改めて天に承く。　其三

【大意】王室亂るれば、國として滅びざるはなし。恰も落日の再び回らすべからざるが如し。天乃ち劉備、孫權、曹操の三雄を眷顧し、天下の民を治めしむ。三雄乃ち艱難を排して國土を拓き、漢の物制を改めて天命に奉承す。

爰に茲の(二八)有魏、宮に(二九)天邑に卽く。(三〇)吳實に龍のごとく飛び、(三一)劉も亦岳のごとく立つ。(三二)干戈載ち揚り、(三三)俎豆載ち戢まる。民は師の興るに勞れ、國は(三四)凱の入るに玩ふ。　其四

【大意】ここに於て吳魏蜀の三國、天下を三分して各ゝ帝位に卽き、その勢龍の如く山の如し。遂に三國分爭の端を開き、干戈頻りに動いて、禮樂を脩むるに遑なく、民は戰亂に苦み、國は唯戰勝を尙ぶに至れり。

天(三五)霸德を厭ひ、(三六)黃祚釁を告ぐ。(三七)獄訟魏を

【二六】墜景。落日なり。

【二七】三哲。劉備、孫權、曹操なり。

【二八】有魏。有は意義なし。曹操天子となり、國を魏と號す。

【二九】天邑。帝都なり。

【三〇】吳。孫權天子となり、國を吳と號す。

【三一】劉。劉備なり、天子となり、國を蜀漢と號す。

【三二】干戈。タテ及びホコ。武器なり。

【三三】俎豆。祭の時供物を盛る器。戢は藏なり。

【三四】凱。凱歌なり。戰勝ちて歸る時の歌。

【三五】霸德。魏をいふ。

【三六】黃祚。魏は土德なり、土

違り、謳歌晉に適く。(二八)陳留藩に歸し、我が皇禪に登る。(二九)庸岷稽顙し、(三〇)三江獻を改む。

其五

【大意】天魏主の無德を厭ひ、乃ち其凶兆を示す。是に於て獄を決し訟を定め、道德を謳歌する者、皆魏を去りて晉に往く。魏主乃ち位を禪りて藩臣の位に就き、我君(晉の武帝)帝位に卽く。吳蜀亦晉德に歸服して臣となる。

(三一)赫たるかな隆晉、奄に(三二)率土に宅り、天人に對揚して、(三三)有秩斯れ祜す。惟れ(三四)公太宰として、光に(三五)二祖を翼け、(三六)洪胄を誕育して、(三七)戎に魯に纂がしむ。其六

【大意】赫赫たる我が晉、天下を統御し、天人の意を得て、茲に天子の位に在り。君の父賈公太宰として二祖(晉の太祖世祖)を輔佐し、君を生長して魯公の封爵を繼がしむ。

の色は黃なり。故に黃祚といふ。祚は皇位なり。

【二七】獄訟。孟子に天下ノ朝覲獄訟スル者、堯ノ子ニ之カズシテ舜ニ之キ、謳歌スル者堯ノ子ヲ謳歌セズシテ舜ヲ謳歌スとあり。

【二八】陳留。魏帝位を晉に禪る。乃ち魏帝を封じて陳留王となす。

【二九】庸岷。庸は國の名。岷は山の名。蜀をいふ。稽顙は頓首といふが如し。

【三〇】三江。吳をいふ。

【三一】赫。盛なる貌。

【三二】率土。天下なり。

【三三】有秩。秩は次なり。天子の位次にのぼること。

【三四】公。賈謐の父、賈充を指す。

【三五】二祖。晉の太祖大將軍となりし時、賈充を以て司馬右長史となし、世祖禪を受くるに及んで太宰となす。

【三六】洪胄。長子なり。謐を指す。誕育は生みそだてしこと。

【三七】戎。汝なり。賈充を指す。

(三八)東朝既に建ち、(三九)淑問峩峩たり。(四〇)我れ明德を求め、同を濟ふに和を以てす。魯公戾りて、(四一)袞服委蛇たり。(四二)皇儲を思媚して(四三)承華に高步す。其七

【大意】太子（愍懷太子なり）立ちて美譽頗る高し。明德の士を求めて共に王事を濟し、心を同うして和穆せんとす。魯公（賈謐）乃ち京師に至り、散騎常侍に任ぜられ、太子の宮に事ふることとなれり。

昔我れ茲に逮び、時れ惟れ(四四)下僚なり。子と(四五)棲遲し、林を同うして條を異にす。年殊にして志比し、(四六)服舛ひて義稠し。游三春に跨え、情(四七)二秋に固し。其八

【大意】昔我亦太子洗馬となり、君が下僚たり。同じく太子の宮に事へたれども、君は尊にして我は卑（林を同うして條を異にす）。年齡異れども（謐は少、士衡は長）志は同じく、服は異れども交義は密なり。三春の行樂を偕にし、二年を歷て情誼益〻堅し。

祗んで皇命を承け、(四八)出納違ふなく、往きて(四九)藩朝を踐み、來りて(五〇)紫

【三八】東朝。太子をいふ。
【三九】淑問。問は聞なり。美譽なり。峩峩は高き貌。
【四〇】我。太子を指す。明德は善德ある人。
【四一】袞服。王公の服なり。委蛇は美なる貌。
【四二】皇儲。太子なり。思媚の媚は愛なり。
【四三】承華。太子の宮門なり。
【四四】下僚。したやく。太子洗馬をいふ。
【四五】棲遲。遊息なり。
【四六】服。章服なり。章服は尊卑によりて制を異にす。
【四七】二秋。二年なり。
【四八】出納。王言を出すといふこと。
【四九】藩朝。吳なり。
【五〇】紫微。天子の宮なり。

微を歩み、(五一)祕閣に升降して、(五二)我が服載ち暉る。孰か懼れずと云はん、仰いで(五三)明威を肅む。其九

【大意】君は謹んで王言を出納して過失あるなく、出でて吳王に仕へて郎中令となり、歸りて皇宮に仕へて尙書郎となり、光榮ますます其身に加はり、仰いで天子の明威を敬す。

(五四)分索は則ち易く、手を攜ふるは實に難し。昔の良游を念ひ、茲焉に永歎す。公の云に感ずる、此の(五五)音翰を貽る。(五六)蔚たる彼の高藻、玉の如く蘭の如し。其十

【大意】夫れ離別は易く、集會は難し。昔日の同遊を思へば、永嘆せざるを得ず。公亦我を思ひ詩筆を寄せらる。其文彩あること玉の如く蘭の如し。

惟れ(五七)漢に木あり、曾て境を踰えず。惟れ南に金あり、萬邦詠を作す。(五八)民の胥好する、(五九)狂狷聖を厲き、在昔に(六〇)儀形せしむ。予子が命を聞けり。其十一

【大意】江漢に木あり柑といふ。之を江北に移せば變じて橙となる。故に境を超えて他に移すべか

【五一】祕閣。尙書省なり。
【五二】我。賈謐を指す。
【五三】明威。天子の威嚴なり。
【五四】分索。索は散なり。
【五五】音翰。翰は筆、詩章なり。
【五六】蔚。文彩ある貌。高藻は美しき詩。
【五七】漢。川の名、南方に在り。
【五八】民。人なり。賈謐を指す。
【五九】狂狷。狂は進取の氣象に富むも行の及ばざる人。狷は律義にして固く義を守る人。中庸を得ざる人をいふ。
【六〇】儀形。範を取りのつとること。

らず。南に金あり百錬すれども銷せず。故に藩國之を詠ず。（賈謐の贈詩に「南に在りては柑と稱し、北に度れば則ち橙」の句あり。士衡を戒むるに節を變ずべからざるを以てせるなり。士衡因つて、答ふるに金の堅剛に倣ひて、節を變ぜざるべきを以てするなり）君よく我を愛好し、我に訓戒の詩を賜ひ、此の狂狷の心を厲き、聖人の心となさしむ。則るに古人の道を以てせよとの言、亦謹んで之に從はん。

（一）承明に於て作り（二）士龍に與ふ　陸士衡

世に牽かれて（三）時網に嬰り、駕して言に遠く（四）徂征す。飲餞豈異族ならんや。親戚弟と兄と。（五）婉變たる居人の思、（六）紆鬱たる游子の情、（七）明發まで安寐を遺れ、（八）寤言して涕纓に交る。塗を（九）長林の側に分ち、袂を（一〇）萬始の亭に揮ふ。（一一）佇眄して遐景を要し、耳を傾けて餘聲を玩る。南に歸りて（一二）永安に憩ひ、北に邁きて承

【一】承明。亭の名。亭とは驛といふが如し。
【二】士龍。士衡の弟、陸雲也。
【三】時網。世網といふが如し。世間の係累なり。
【四】徂征。行くこと。吳より洛陽に行くなり。
【五】婉變。思慕の貌。居人は後に留まる人、陸雲等を指す。
【六】紆鬱。愁思の貌。游子は旅客、士衡自ら謂ふ。
【七】明發。曉なり。
【八】寤言。目の覺むること。言は助辭。纓は冠の紐。
【九】長林。亭の名。
【一〇】萬始。亭の名。
【一一】佇眄。立どまりて見廻すこと。遐景は遠影なり。要は覲んと心に求むること。
【一二】永安。亭の名。

明に頓る。永安に（一三）昨軌あり、承明に子予を弃つ。俯仰して（一四）林薄を悲み、慷慨して（一五）辛楚を含めり。往を懷ひて歡端を絶ち、來を悼んで憂緒を成す。別を感じて翮を舒べんことを慘み、歸を思ひて渚に遵はんことを樂む。

【大意】われ世累に罹りて遠く洛陽に往かんとすれば、君（士龍）は我を送りて此に來れり。君は我を慕ひつつ故鄕に留まり、我は愁を懷いて此地を去らんとす。悲愁のあまり曉に至るまで眠られず、眠覺れば涙流れて纓を沾す。心を決して萬始亭に相別れしも、尙ほ立つて君の影を望み、耳を傾けて君が聲を聽かんと欲す。君南に歸りて永安亭に至らば、昨日の車迹あるを見ん。我北に往きて承明亭に至るも復た君を見ず。ただ叢林の間に俯仰して悲痛するのみ。往時の歡を思へば、今や已に其端を絶てり。將來を思へば憂心起りて心緒を亂す。離別を悲むの情は翮を舒ぶるの飛鵠よりも痛み、歸鄕を思ふの情は渚に遵ふの歸雁よりも樂むなり。

【一三】昨軌。兄弟二人にて昨日通りし車の跡。
【一四】林薄。叢林なり。
【一五】辛楚。悲痛なり。

（一）尙書郎顧彥先に贈る二首　陸士衡

（二）大火朱光を貞し、

【一】尙書郎。官名。顧榮、字は彥先、吳人なり、晉に仕へて尙書郎たり。

(三)積陽南より熙る。
(四)望舒金虎に離り、
(五)屏翳重陰を吐く。
(六)淒風時序に迕ひ、
(七)苦雨遂に霖を成す。朝に游んで(八)輕羽を忘れ、夕に息ひて重衾を憶ふ。物に感じて百憂生じ、(九)纏緜として自ら相尋ぐ。子と(一〇)蕭牆を隔て、蕭牆阻り且つ深し。形影曠にして接せず、託する所は聲と音とのみ。音聲日夜闊し。何を用てか吾が心を慰めん。

【大意】今や盛夏の時なるに日夜雨ふりつづき、寒風時ならざるに至り、人人皆患苦に堪へず。朝には暑くして扇を欲し、夕には寒くして重衾を擁せばやと思ふ。此の風雨の序を失へるに感じ、遂に百憂交ゝ起りて絕ゆる事なし。君と僕とは垣一重を隔てて住すれば、姿は相見る能はず、ただ時時音信を通ずるのみ。若し音信疎濶なるに至らば、如何ぞ我が此憂を慰むるを得んや。

朝游して(一一)曾城に游び、夕に息ひて(一二)直廬に旋る。迅雷中宵激し、驚電光夜舒ぶ。(一三)玄雲朱閣に拖き、振風(一四)綺疏に薄る。(一五)豐注脩霤に溢れ、(一六)潢

【二】大火。星の名。朱光は朱明なり、夏を朱明といふ。
【三】積陽。熱氣なり。
【四】望舒。月の御者。金虎は畢星なり。月畢にかかれば雨ふるなり。
【五】屏翳。雨の神。
【六】淒風。寒風なり。時序は時候の順序。
【七】苦雨。霖なり。ながあめ。
【八】輕羽。扇なり。
【九】纏緜。思亂るる貌。
【一〇】蕭牆。庭の垣。
【一一】曾城。層城に同じ。
【一二】直廬。宿直所なり。
【一三】玄雲。黑雲。
【一四】綺疏。窓なり。
【一五】豐注。多量の雨水。脩霤は長きアマドヒ。
【一六】潢潦。雨水なり。階除は

潦階除を浸す。(一七)停陰結んで解けず、(一八)通衢化して渠となる。(一九)沈稼梁潁に湮み、流民(二〇)荆徐に泝る。(二一)眷言して桑梓を懷ふ。乃ち將に魚とならんとするなからんや。

【大意】朝に城闕の間に出仕し、夕に宿直所に歸れば、中夜雷霆轟き電光閃き、黑雲朱閣に曳き疾風窓を打ち、雨水高簷の霤に溢れ、階庭を浸し、雲結んで開けず、通路化して溝となる。梁潁の間稻粱水に沒し、人民泝りて荆徐に避難す。因つて思ふに、吾が故郷は水國なり。其民或は化して魚となるに至らんか。憂ふべきなり。

殿階及び庭。
【一七】停陰。あまぐも。
【一八】通衢。通路なり。
【一九】沈稼。稼は田苗なり。梁潁は二郡の名。
【二〇】荆徐。二州の名。
【二一】眷言。顧ること。言は助辭。桑梓は故郷なり。士衡は吳の人。吳は水國なり。

(一)顧交阯公眞に贈る　陸士衡

顧侯明德を體し、清風肅くして已に邁し。迹を發して(二)藩后を翼け、改め授けられて(三)南裔を撫す。鼓を(四)五嶺の表に伐ち、旌を萬里の外に揚ぐ。績を遠くして小を辭せず、德を立てて大

【一】顧交阯。顧祕、字は公眞、晉に仕へて交州刺史たり。交阯は交州なり。
【二】藩后。后は君なり。公眞初め吳王の郎中令となる。
【三】南裔。南方の邊地。交阯なり。
【四】五嶺。大庾、始安、臨賀、桂陽、揭陽をいふ。支那の南方にある山なり。

に在らず。高山安んぞ凌ぐに足らん、巨海猶ほ(五)縈帶す。惆悵して飛駕を瞻、領を引いて(六)歸旆を望む。

【大意】顧公は身に明德を抱き、威風肅厲なり。初め吳王の郞中令となり、今や改めて交州刺史に任ぜられ、南方萬里の外に征戰せられんとす。よく遠地に功績を立てんとして小位を辭せず、德を立てんことを主として必ずしも大國を求めず。其人品想ふべきなり。交州は帝京を距ること遠く、途に高山ありと雖も、その險越え易く、大海之を繞れば、水路また渡り難からず。われ公の去るを見て悲に堪へず。願くは早く帝京に歸られんことを。

【五】縈帶。衣帶の如く繞る。
【六】歸旆。旗を歸して京に歸ること。

從兄(一)車騎に贈る　　陸士衡

孤獸故藪を思ひ、離鳥舊林を悲む。(二)翩翩たる游宦の子、辛苦誰か心をなさん。(三)谷水の陽を髣髴し、(四)崐山の陰を婉孌し、(五)營魄茲土を懷ひ、(六)情爽飛沈の若

【一】車騎。官名。從兄は陸士光なり。
【二】翩翩。旅遊の貌。游宦は官吏として他鄕に在ること。
【三】谷水。吳地に在る川。髣髴は見て明かならざる貌。
【四】崐山。吳地に在る山。婉孌は思慕する貌。
【五】營魄。心魂なり。茲土は吳なり。
【六】精爽。心魂なり。

し。(七)寤寐安豫するなく、(八)顧言して欽する所を思ふ。彼の(九)歸塗の艱に感じ、我をして怨慕深からしむ。安んぞ忘歸草を得て、言に背と襟とに樹ゑん。斯言豈虛作ならんや。思鳥悲音あり。

【大意】故鄕に在る從兄を思ひて作れるなり。鳥獸すら尙ほ故林を思ふ。況んや人に於てをや。遊宦して他鄕に在れば心常に苦んで安き時なく、吳地の山水を思ひて戀戀の情に堪へず。心之が爲に飛ぶが如く沈むが如く、定あることなく、起臥の間常に敬慕する所の君を思ひつつあれども歸塗の險難を思へば、益〻怨慕の心に堪へざるなり。ただ忘歸草を得て之を前後に植ゑ、之を見て歸鄕の情を忘るるの外なし。我が此言あるは、決して徒爾にあらず、鳥すら故林を思ひて悲しむにあらずや。

【七】寤寐。ねてもさめても。安豫は安樂なり。
【八】顧言。思ふこと。言は助辭。
【九】歸塗。歸途なり。

(一)張士然に答ふ　陸士衡

身を絜くして(二)祕閣に躋る。祕閣は(三)峻且つ玄なり。終朝文

【一】張士然。張悛、字は士然、少くして文章を以て士衡と友とし善し。
【二】祕閣。祕書省なり。士衡は著作郎として祕書省に在り。
【三】峻。高なり。玄は幽深な

案を理し、薄暮眠るに遑あらず。駕して言に(四)明祀を巡ひ、敬を致して年を祈るに在り。(五)春王の圃に逍遙し、(六)千畝の田に躑躅す。廻渠(七)曲陌を繞り、通波(八)直阡を扶く。(九)嘉穀重穎を垂れ、芳樹(一〇)華顚を發く。余は固より水鄕の士、轡を摠りて清淵に臨み、(一一)戚戚として遠念多く、行行遂に篇を成す。

【大意】余は著作郎として祕書省に仕ふ。この省は高深幽遠の地に在り。朝には文案を作り、夜も眠るに遑なし。天子の駕に從ひ百神を祭りて豐年を祈り、春王圃に從遊し、籍田の儀に陪す。阡陌縱橫して溝渠其間を繞り、稻粱穗を垂れ、樹梢に花を著く。余は吳地水鄕の人なり。水を慕ふこと常人と異り。故に忽ち清淵に臨み、故鄕を思ひ、遂に此篇を成せり。

【四】明祀。祭祀なり。
【五】春王圃。洛陽宮にある圃の名。
【六】千畝。天子の籍田なり。躑躅は徘徊といふが如し。
【七】曲陌。曲れるアゼミチ。
【八】直阡。眞直なるアゼミチ。
【九】嘉穀。美穀なり。重穎は穗なり。
【一〇】華顚。花咲く梢。
【一一】戚戚。憂ふる貌。

(一)顧彦先が爲に婦に贈る二首　陸士衡

家を辭して遠く行遊す。(二)悠悠三千里。

【一】顧彦先。名は榮、字は彦先、吳の人、吳平ぎて後、士衡兄弟と同じく洛に入り、三俊の號あり。
【二】悠悠。遠き貌。

(三)京洛風塵多く、(四)素衣化して緇となる。身を脩めて憂苦を悼み、(五)同懷の子を感念す。(六)隆思心曲を亂し、(七)沈歡滯りて起らず。歡沈みて剋く興し難く、心亂れて誰が爲にか理せん。願くは(八)歸鴻の翼を假り、翻飛して(九)江汜に游ばん。

【大意】此首は顧彥先が洛陽に客遊せし時、顧に代りて、其妻に寄せし詩なり。われ家を離れて三千里外の洛陽に客たり。京師は風塵多く、白衣も忽ち化して黑となるほどなり。身を脩めんとして志を得ず、常に憂苦を抱くに因り、頻に鄕里に在る汝を思ひ、歡情沈滯して復た起らず。心亂れて理めんやうなし。願くは歸雁の翼を借り得て、汝の所に飛び返らんことを。

(一〇)東南に思婦あり、長歎(一一)幽閨に充つ。借問す歎ずるは何が爲ぞ、(一二)佳人天末に眇なり。(一三)遊宦して久しく歸らず、山川脩く且つ濶し。形影(一四)參商乖き、(一五)音息曠うして達せず。離合常あるにあら

【三】京洛。洛陽・晉の都。
【四】素衣。白衣なり。緇は黑色。
【五】同懷の子。心を同うする人、妻をいふ。
【六】隆思。繁きおもひ。心曲は中心なり。
【七】沈歡。憂の爲に沈滯せる歡情。
【八】歸鴻。北より南に歸る雁。
【九】江汜。江岸なり。吳は江南に在り。
【一〇】東南。吳をいふ。思婦は夫を思慕する妻。
【一一】幽閨。深閨なり。
【一二】佳人。彥先を指す。天末は遠方。
【一三】遊宦。前詩に見ゆ。
【一四】參商。二星の名、この星出沒して相見ることなし。
【一五】音息。音問消息。

ず、彼の弦と（一六）筈とに譬ふ。願くは（一七）金石の軀を保ち、妾が（一八）長饑渴を慰めんことを。

【大意】此首は婦に代りて顧に答ふるなり、題誤れり。吳國に思婦あり。長嘆して深閨の中に在り。何故に長嘆するかといふに、夫遠く京師に宦し、山川長遠にして、相隔たること參と商との如く、音信も久しく通ぜざればなり。人生の離合は常にすべからず。猶は弓弦と箭筈と暫く相會ふも、忽ち相離るるが如し。ただ身體を保養し、早く歸りて妾が相思の情を慰め給へ。

【一六】筈。矢端の弦を受くる所。
【一七】金石。堅固なること。
【一八】長饑渴。相思の情に喩ふ。

（一）馮文羆に贈る　陸士衡

昔（二）二三子と、承華の南に游息し、翼を拊ちて（三）枝條を同うし、翻飛して各々（四）尋を異にす。苟に風を凌ぐの翮なく、徘徊して故林を守る。慷慨して誰が爲にか感ずる、（五）願言して欽する所を懷ふ。軫を（六）清洛の汭に發し、馬を（七）大河の陰に驅せ、佇立して（八）朔塗を望めば、悠悠として迥に且つ深し。（九）分索は古も悲みし所、志士苦心

【一】馮文羆。前に見ゆ。
【二】二三子。馮文羆等を指す。承華は太子の宮門、士衡文羆と同じく太子洗馬たり。
【三】枝條。條も枝なり。
【四】尋。仞なり。八尺をいふ。
【五】願言。思ふこと。言は助辭。
【六】清洛。洛陽の南にある川。
【七】大河。黄河なり。
【八】朔塗。北方の道。斥丘縣は北に在り。
【九】分索。離別なり。

多し。悲情川に臨んで結び、苦言風に隨つて吟ず。愧づらくは(一〇)雜佩の贈なし。(一一)良訊兼金に代ふ。(一二)夫子遠猷を茂くし、(一三)欵誠惠音を寄せよ。

【大意】われ君と共に太子に仕へて洗馬たり。恰も鳥の枝を同うして栖めるが如し。然も羽翼力を同じうせず、君は翻飛して斥丘縣令となりしも、余は舊宮を守りて此に留る。ただ悲嘆して君を思慕するのみ。因つて車馬を驅りて洛外に出で、君の行を送りて斥丘を望めば、悠悠として遼遠なり。夫れ別離は古人の悲みし所、我豈心を苦めざるを得んや。川に臨んで悲情を抱き、風に隨つて苦吟を發す。今別るるに臨み、君に贈るに雜佩を以てせんと思へども、貧にして力能はず。已むなく訓戒の辭を呈して餞別となす。願くは美遠の德を養ひ、誠心の志を抱き、時に音信を寄せられよ。

【一〇】雜佩。寶重の物。
【一一】良訊。善き戒の辭。兼金は好金なり。
【一二】夫子。文羆を指す。遠猷は美遠の德。
【一三】欵誠。誠信なり。惠音は音信なり。

弟(一)士龍に贈る　陸士衡

行きて路の長きを怨み、(二)惄焉として別の促なるを傷む。途を指して悲餘あり、觴に臨んで歡足らず。我は(三)西流の水の若く、子は(四)東跱の岳と

【一】士龍。陸雲なり。
【二】惄焉。憂ふる貌。
【三】西流。士衡は呉より洛陽に往く。故に西流といふ。
【四】東跱。東に止ること。士龍は呉地に留る。故に東跱の

なる。慷慨して(五)逝言感じ、徘徊して(六)居情育す。安んぞ手を攜へて倶にするを得て、(七)契闊騑服と成らん。

【大意】われ郷里を離れて洛陽に往かんとし、道途の長遠なるを怨み、君と忽ち相別れざるを得ざるを悲む。行程の遠きを見ては、悲益ゝ加はり、離杯を擧ぐるも歡情少しも起らず。是れより我は西を指して去り、君は永く郷に留る。往く身は感慨の言多く、留る者は情思深し。願くは將來勤苦すと雖も、兄弟相隨ひて相離るるなからんことを。

山といふ。
【五】逝言。往く人の言、士衡の言なり。
【六】居情。留り居る人の情、士龍の情なり。育は生なり。
【七】契闊。勤苦なり。騑服は馬なり。一車に四馬を駕す。中央の二を服馬といひ、服馬の兩傍にあるを騑馬といふ。騑服は常に相隨ふ。

(一)賈謐の爲に作り陸機に贈る

潘安仁

肇め(二)初創せしより、(三)二儀烟煴たり。粤に生民あり、(四)伏羲始めて君たり。繩を結び化を闡き、(五)八象文を成す。(六)芒芒たる九有、區域以て分る。其一

【大意】太古草昧の初、天氣下降し地氣上升して、ここに人を生じ、伏羲始めて天子となり、結繩

【一】賈謐。字は長淵。前の陸士衡の詩に見ゆ。
【二】初創。太古草昧の時。
【三】二儀。天地なり。烟煴は天地の氣の蒸しあがる貌。
【四】伏羲。太古の帝王の名。
【五】八象。八卦なり。
【六】芒芒。廣き貌。九有は九州なり。支那全土の稱。

の政をなし、八卦を畫し文字を成せり。九州の都邑ここに始めて區分せらる。(七)神農更りて王たり、(八)軒轅紀を承け、野を畫り疆を離ち、爰に衆子を封ず。夏殷既に襲り、宗周(九)祀を繼ぎ、(一〇)緜緜たる瓜瓞、(一一)六國互に峙つ。其二

【大意】神農代りて天子となり、黄帝その統を繼ぎ、國土を分ちて九子を封じ、夏殷之に因り、周亦その統を繼ぎ、六國瓜蔓の相引くが如く互に立てり。

(一二)彊秦兼幷し、(一三)四隅を呑滅す。(一四)子嬰面櫬して、(一五)漢祖圖に膺る。(一六)靈獻微弱にして、(一七)涅に在りて則ち渝る。(一八)三雄鼎足して、孫南呉を啓く。其三

【大意】强秦立ちて六國を幷呑し、天下を一統せしも、子嬰に至りて面縛輿櫬して降り、秦ここに滅ぶ。漢の高祖乃ち圖錄に應じて天子となる。靈獻二帝に至り、王室微弱にして震はず。姦雄の爲に移され、ここに三國分立の端を開き、孫權遂に南に呉國を建つ。

【七】神農。太古の帝王の名。
【八】軒轅。太古の帝王の名。黄帝なり。紀は統といふが如し。
【九】祀。世なり。
【一〇】緜緜。絶えざる貌。瓜瓞は瓜の蔓。
【一一】六國。韓燕趙魏齊楚なり。
【一二】彊秦。暴秦なり。
【一三】四隅。四方なり。
【一四】子嬰。秦王の名。面櫬とは面縛し棺を負ひて降ること。櫬は棺なり。
【一五】漢祖。漢の高祖。圖に膺るとは未來記に應ずること。
【一六】靈獻。後漢の二帝の名。
【一七】涅。水底の黒土。どぶどろ。曾子の言に沙泥ニ在レバ之ト皆黒シとあり。
【一八】三雄。魏の曹操・蜀の劉備、呉の孫權なり。鼎立とは天下を三分して立つこと。

南呉伊れ何ぞ、僭號して王と稱す。大晉天を統べ、仁風遐く揚る。(一九)僞孫璧を銜み、士を奉げ疆を歸す。(二〇)婉婉たる長離、江を淩ぎて翔る。其四

【大意】呉國是れ何物ぞ、僭號して王と稱するのみ。わが晉の武帝天下を統べ、仁風天下に洽きに至り、呉王孫皓晉に降りて國土を捧げ、呉ここに滅ぶ。時に鳳鳥あり江を渡りて帝京に翔る。(陸機は呉の人なり、呉の滅ぶるや、洛陽に來り仕ふるに喩ふ。)

長離を誰とか云ふ、咨爾(二一)陸生なり。(二二)鶴九皐に鳴くすら、猶ほ厥聲を載す。況んや迺ち(二三)海隅にして、名を上京に播くをや。爰に(二四)旌招に應じ、翼を(二五)宰庭に撫ふ。其五

【大意】鳳とは卽ち君(陸機を指す)なり。鶴の九皐に鳴くすら、猶ほ詩經に之を記載せり。況んや大鳳遠く呉地に居り、遙に其名を京師(晉都洛陽)に馳せたるをや。乃ち宰臣楊駿の辟に應じて來り仕ふるに至りぬ。

【一九】僞孫。孫皓なり。僭號して王と稱す。故に僞といふ。璧は國寶、降る者之を君に奉る。面縛して手の執るべきなし。故に銜むといふ。

【二〇】婉婉。美なる貌。長離は鳳なり、以て陸機に喩ふ。

【二一】陸生。陸機なり。

【二二】鶴。詩經に鶴九皐ニ鳴キ聲天ニ聞ユとあり。九皐は深き澤。

【二三】海隅。呉をいふ。

【二四】旌招。孟子に士ヲ招クニ旌ヲ以テスとあり。

【二五】宰庭。晉の太傅楊駿、陸機をめして祭酒となす。宰とは駿を指す。

（二六）儲皇の選、實に（二七）惟良を簡ぶ。（二八）英英たる朱鸞、來ること南岡よりす。（二九）藻を崇正に曜し、（三〇）玄冕丹裳す。彼の蘭蕙の如し。載ち其芳を採る。　其六

【大意】太子の師友は必ず天下の英俊を擇ぶ。陸生南より來り、太子洗馬となり、文章を崇正殿に輝かし、其芳蘭蕙の如し。太子則ち其道德の芳を取る。

（三一）藩岳鎭を作し、我が京室を輔く。（三二）桑梓に旋反し、帝弟に弼と作る。或は云ふ（三三）國宦は、清塗の失ふ攸なりと。（三四）吾子洗然とし、恬淡にして自ら逸む。　其七

【大意】惠帝の弟晏、吳王となりて吳を鎭じ、以て皇室に藩屛となるや、君その郎中令に任ぜられ、故國に歸る。人或は言ふ太子洗馬より出でて吳王の郎中令となれるは、卽ち左遷なりと。君少しも意に介せず、洒然として自ら樂めり。

（三五）郞廟惟れ清く、（三六）俊乂是れ延む。擢でられて（三七）嘉擧に應じ、（三八）國よりして遷り、轡を（三九）羣龍に

【二六】儲皇。太子なり。
【二七】惟良。賢良なり。
【二八】英英。鮮明なる貌。朱鸞は瑞鳥、陸機に喩ふ。
【二九】藻。文章なり。崇正は太子の宮なり。
【三〇】玄冕。黑き冠、丹裳は赤き裳、大夫の儀服なり。
【三一】藩岳。諸侯をいふ。晉の惠帝の弟、吳王晏出でて大將軍となり以て吳を鎭ず。陸機之に仕へて郎中令となる。
【三二】桑梓。鄕里なり。吳をいふ。旋反は歸ること。
【三三】國宦。諸侯の官。清塗とは清官の途なり。
【三四】吾子。陸機を指す。洗然は洒然なり。
【三五】廊廟。天子の朝廷。
【三六】俊乂。俊傑なり。
【三七】嘉擧。拔擢といふが如し。
【三八】國。吳をいふ。
【三九】羣龍。衆賢に喩ふ。

齊うし、(四〇)納言を光讃し、(四一)省闥に優游し、筆を(四二)華軒に珥む。　其八

【大意】朝廷よく理まり、俊傑皆進用せらる。君亦拔擢せられて郎中令より入りて尚書郎に任ぜられ、衆賢と相伍して納言を輔佐し、尚書省に出仕し、筆を殿上に援りて王命を起草す。

昔余と子と、(四三)東朝に繾綣す。禮するに賓を以てすと雖も、情は(四四)友僚に同じ。絲竹を嬉娛し、(四五)鞞を撫ち韶を舞ひ、(四六)脩日朗月、手を攜へて逍遙す。　其九

【大意】昔君と僕とは同じく太子に仕へ、禮を以て相敬せりと雖も情に於ては同僚と異らず、(謐は散騎常侍にして位尊く、陸機は太子洗馬にして位卑し)常に絲竹舞樂を以て與に樂み、永日を消し明月を賞せり。

我れ羣を離れてより、今に(四七)二周なり。其面を簡てりと雖も、(四八)分は情深に著る。子其れ(四九)超たり。實に我心を慰む。言に發して詩を爲り、(五〇)好音を俟ち望む。　其十

【大意】我れ君と別れてより已に二年なり。面は相見ずと雖も、朋友の分義は深情に明かなり。今

(四〇) 納言。官名、帝命を出納することを掌る、尚書の任なり。光讃は輔くること、陸機は郎たり、故にいふ。
(四一) 省闥。尚書省なり。
(四二) 華軒。殿上の曲欄。
(四三) 東朝。太子の朝廷。繾綣は情思の厚きこと。
(四四) 友僚。同僚なり。
(四五) 鞞。小鼓なり。韶は舜の樂の名。
(四六) 脩日。長き日、朗月は明月なり。
(四七) 二周。二年なり。
(四八) 分。朋友たるの分義。
(四九) 超。のぼりて尚書郎となれること。
(五〇) 好音。音信なり。

擢んでられて尙書郎となれるは、實に吾が心を慰むるに足る。因つて詩を作りて君に贈り、君が返詩を望む所以なり。

其の高さを崇さんと欲すれば、必ず其層を重ぬ。徳を立つるの柄、(五一)安恆にあらざるはなし。南に在りては(五二)甘と稱し、北に度れば則ち橙。子が(五三)鋒穎を崇くし、穎かず崩れざれ。其十一

【大意】徳を高くせんと欲せば自ら修養を積まざるべからず。徳を立つるは常道を安守するに在り。江南の柑は之を江北に移せば橙となる。人も亦此の如くなり易し。君よく之を戒め境遇に因りて其節を變ずる勿れ。益その徳を高うして、崩壞せざらんことを勉めよ。

【五一】安恆。常道を安守すること。
【五二】甘。柑なり。
【五三】鋒穎。ほこさき。

陸機が出でて吳王の郎中令となるに贈る　(一)潘正叔

(二)東南の美、(三)曩に惟れ延州。(四)顯允なる陸生、今に於て儔尠し。鱗を(五)南海に振ひ、翼を(六)淸流に濯ぎ、(七)翰林に婆娑し、(八)墳丘に容與す。

其一

【一】潘正叔。名は尼、字は正叔、晉に仕へて位太常卿に至る。
【二】東南。吳をいふ。陸機は吳の人。
【三】延州。延陵の季子、即ち吳の季札なり。
【四】顯允。明信なり。陸生は陸機なり。
【五】南海。吳をいふ。

【大意】昔季札は呉の俊傑と稱せられしが、今日に於て陸生あり、亦絶倫の英才なり。嘗て呉主に仕へ、呉の滅ぶるや來りて晉に仕へ、儒林に交り古書を涉獵す。

玉は(九)瑜を以て潤ひ、(一〇)隋は光を以て融なり。乃ち上京に漸み、(一一)儲宮に羽儀す。爾の(一二)清藻を玩び、爾の芳風を味ひ、之を泳げば彌〻廣く、之を挹めば彌〻冲し。　其二

【大意】玉は瑜を以て潤ひ、珠は光を以て朗なるが如く、人は學を加ふるを以て美となす。陸生既に學を積んで美なり。乃ち洛陽に至り太子洗馬に任ぜられ、太子の儀表となる。太子その文章高風に倣ふ。然も其道德の源を酌めば、益〻深遠なるを覺ゆ。

(一三)崑山に何かある。(一四)瑤あり珉あり。爾と同僚にして、具に惟れ近臣なり。予は(一五)素秋を涉り、子は(一六)青春に登る。愧づらくは老成なくして、彼の日新に則るを。　其三

【大意】省閣に君子多し。我と君と亦同僚にして太子の近臣たるも（正叔は太子舍人にして、陸機

【六】淸流。晉をいふ。
【七】翰林。學者仲間。婆娑は遊ぶこと。
【八】墳丘。古書なり。左傳に三墳五典八索九丘ヲ讀ムとあり。容與は逍遙といふが如し。
【九】瑜。玉の中間の美なる者
【一〇】隋。隋侯の珠。
【一一】儲宮。太子なり。羽儀は儀表となること。
【一二】淸藻。機の文章なり。
【一三】崑山。山の名。美玉を產す。省閣に喩ふ。
【一四】瑤。美玉なり。珉は美石なり。君子に喩ふ。
【一五】素秋。老年に喩ふ。
【一六】青春。少年に喩ふ。

は太子洗馬なり）我は老いて君は少し。我に老成人の德なくして、日新の德ある君と相伍するは、私に愧づる所なり。

(一七)祁祁たる大邦、惟れ(一八)桑惟れ梓。(一九)穆穆たる伊人、南國の(二〇)紀なり。帝曰く爾諧へよと。惟れ(二一)王の卿士たり。(二二)俯僂して命に從ふ。奚をか恤へ奚をか喜ばん。其四

【大意】衆盛なる吳國は、實に陸生の鄉里にして、穆穆たる陸生は、吳國の綱紀なり。帝陸生に命じて吳王の郎中令となす。陸生乃ち身を屈して王命に從ふ。是を以て王の心中憂あることなけん。

(二三)我が車既に巾り、我が馬既に秣ふ。(二四)星陳夙駕し、載ち脂さし載ち轄さし、(二五)二宮を婉孌し、殿闥に徘徊す。(二六)醪澄みて饗するなし。孰か饑渴を慰めん。其五

【大意】陸生乃ち車馬を整へて早朝に出發せんとす。因つて二宮を顧戀し殿閣に徘徊す。濁酒已に澄み、之を酌んで離杯を擧ぐるも陸生憂へて饗けず。何ぞ我が君（陸生）を慕ふの深情を慰するを得ん。

【一七】祁祁。衆多の貌。大邦は吳をいふ。
【一八】桑梓。鄉里なり。
【一九】穆穆。美なる貌。
【二〇】紀。綱紀なり。
【二一】王。吳王なり。
【二二】俯僂。身を屈して王命に從ふこと。
【二三】我。陸機を指す。
【二四】星陳夙駕。朝早く出發すること。
【二五】二宮。帝及び太子の宮。婉孌は顧み慕ふ貌。
【二六】醪。濁酒なり。

昔子(二七)私を忝うし、我に(二八)蕙蘭を貽る。今子(二九)東に徂く。何を以てか旃に贈らん。(三〇)寸晷惟れ寶なり。豈(三一)璵璠なからんや。彼の美なる陸生、與に(三二)晤言すべし。　其六

【大意】昔君我れに佳詩を贈る。今君の呉に赴くに際し、我何を以て君に餞すべき、只規箴の言を贈らんとす。夫れ世に美玉なきにあらざれども、美玉は寶とするに足らず。ただ寸陰以て寶となすべし。ああ陸生の美なる、いつか復た與に相語るを得べき。

【二七】私。恩惠の意。
【二八】蕙蘭。香草の名。詩に喩ふ。
【二九】東。呉なり。
【三〇】寸晷。一寸の光陰。僅の時間。
【三一】璵璠。美玉なり。
【三二】晤言。對談なり。

(一)河陽に贈る　潘正叔

(二)虙生單父を化し、(三)子奇東阿に涖む。(四)桐鄉遺烈を建て、(五)武城絃歌を播く。(六)逸驥夷路に騰り、

【一】河陽。潘岳河陽令たり、岳は正叔の從父なり。故に其名を言はざるなり。
【二】虙生。虙子賤なり。よく單父を治めたり。
【三】子奇。人名。よく東阿を治めたり。
【四】桐鄉。地名。漢の朱邑、字は仲卿、桐鄉の嗇夫となり。遺業後世に傳はる。遺烈は遺績なり。
【五】武城。地名、孔子の弟子子游、武城の宰となり、其敎上下に及び、學問隆盛にして絃歌の聲絶えず。
【六】逸驥。駿馬なり。潘岳に喩ふ。夷路は坦途なり。

潛龍（七）洪波に躍る。弱冠にして（八）鼎鉉に步し、既に立つて（九）三河に宰たり。聲を流すこと秋蘭より馥しく、（一〇）藻を摛ぶること春華より艷なり。徒に（一一）天姿の茂を美す。豈人爵の多きを謂はんや。

【大意】君（潘岳を指す）の地方官として大功績あるは、恰も、虙生の單父を治め、子奇の東阿を治め、朱邑の桐鄕に遺績を傳へ、子游の武城に絃歌を敎へたるが如し。實に良馬を平路に縱にし、潛龍を大波に躍らしむるが如く、才能官途と相協へるものといふべきなり。君は弱冠にして賈充公の府掾となり、又出でて三河の令となり。其聲譽は秋蘭よりも芳しく、其文雅は春花よりも麗し。今予の君を稱美するは、天質の茂盛なるに在り。その人爵の如きは敢て論せざるなり。

【七】洪波。大波なり。
【八】鼎鉉。鼎は三公の象なり鉉は鼎耳の環なり。岳二十にして賈充が府掾となる。
【九】三河。河東、河內、河陽なり。宰は長官なり。
【一〇】藻。文章なり。
【一一】天姿。天性なり。

（一）侍御史王元貺に贈る　潘正叔

（二）崑山瓊玉を積み、廣廈衆材を構ふ。（三）游鱗靈沼に萃り、翼を撫つて（四）天階を希ふ。膏蘭孰が爲にか消さん。治を濟すは賢能に由る。（五）王侯

【一】侍御史。官名。
【二】崑山。山の名、玉を産す。瓊玉は美玉なり。
【三】游鱗。龍なり、君子に喩ふ。靈沼は省閣に喩ふ。
【四】天階。省閣に喩ふ。
【五】王侯。王元貺をいふ。崇禮は門の名。王元貺前に尙書

崇禮を厭ひ、迹を廻らして（六）憲臺を淸うす。（七）蠖屈固に小往き、（八）龍翔迺ち大來る。心を協せて聖世を毗け、力を畢して（九）康哉を讚せよ。

【大意】崑山は美玉を積み、大廈は衆材を構へて成るが如く、衆賢相聚りて國家を構成す。今や龍鳳の如き君子、皆仁義の道を以て天子の左右に集れり。夫れ膏蘭の物たるや、明を以て暗を燭し、香を以て臭を化し、自ら銷爍を致すも、敢て勞となさず。賢能の國家を治むるも亦此の如し。王公（元晛を指す）嘗て尙書郎となりて崇禮門に在りしが、今之を厭ひ迹を廻らして侍御史となれり。是れ蠖屈の小を出でて、龍翔の大に入れるものなり。宜しく衆賢と心を協せて聖世を輔け、康哉の化を讚頌すべきなり。

郎となり。朝奏皆此門に在り。

【六】憲臺。御史の署。

【七】蠖屈。シヤクトリムシの如く屈すること。

【八】龍翔。龍の如く天を翔ること。

【九】康哉。世の安らかに治ること。書經に咎繇乃チ歌ヒテ曰ク、元首明ナル哉、股肱良キ哉、庶事康キ哉とあり。

卷の第十三

詩　丁

贈答　二

何劭、王濟に贈る　（一）傅長虞

（二）朗陵公何敬祖は咸の（三）從內兄なり。（四）國子祭酒王武子は咸の（五）從姑の外孫なり。竝に明德を以て世に重んぜられ、咸之に親み之を重んず。情は猶ほ（六）同生のごとく、義は則ち師友なり。何公既に（七）侍中に登り、武子俄にして（八）亦作る。二賢相得て甚だ歡び、咸も亦之を慶ぶ。然れども自ら（九）闇劣なるを恨み、其（一〇）繾綣を願ふと雖も、之に從ふこと由末し。（一一）歷試効なく、且つ（一二）家艱あり、（一三）心存し目替

【一】傅長虞。傅咸、字は長虞、晉の北地泥陽の人なり。孝廉に擧げられ太子洗馬に拜せられ、後司隸校尉となる。
【二】朗陵公。何劭、字は敬祖、朗陵公に襲封せらる。
【三】從內兄。妻の從兄。
【四】國子祭酒。官名。王濟、字は武子。
【五】從姑。父の從父姉妹をいふ。
【六】同生。兄弟なり。
【七】侍中。官名なり。
【八】亦作る。王濟も亦侍中となる。
【九】闇劣。暗愚なり。
【一〇】繾綣。敬慕の情深きこと。
【一一】歷試。諸官に歷仕せること。
【一二】家艱。父母の喪。
【一三】心存し。心には常に何王

る。詩を賦し懐を申べ、以て之に貽ると云爾。

日月（一四）太清を光し、（一五）列宿紫微を曜す。（一六）赫赫たる大晉の朝、（一七）明明として皇闈を闢く。（一八）吾兄既に鳳のごとく翔り、王子亦龍のごとく飛ぶ。（一九）雙鸞蘭渚に游び、（二〇）二離清暉を揚ぐ。手を攜へて玉階に升り、坐を竝べて（二一）丹帷に侍す。（二二）金璫恵文に綴り、（二三）煌煌として令姿を發す。斯榮庶ふ攸にあらず、繾綣たるは情の希ふ所なり。豈（二四）高蹤を企まざらんや。（二五）麟趾邈として追ひ難し。川に臨むも（二六）芳餌なし。何爲れぞ（二七）空坻を守らん。（二八）槁葉風を待ちて飄り、逝いて將に君と違れんとす。君に違れて能く戀ふなからんや、（二九）尸素當に言に歸るべし。身を（三〇）蓬蓽の廬に歸し、道を樂んで以て飢を忘れん。進んでは則ち云に補ふなく、退いては則ち其私を恤ふ。但願くは弘美を隆にし、（三一）王

を思へども目に見るを得ずとの意。

【一四】太清。天なり。

【一五】列宿。二十八宿なり。紫微は天帝の宮。

【一六】赫赫。盛なる貌。

【一七】皇闈。宮門なり。

【一八】吾兄。何劭を指す。

【一九】雙鸞。二匹の鳳凰、王何に喩ふ。蘭渚は中書省に喩ふ。

【二〇】二離。二匹の長離、長離は靈鳥なり。王何に喩ふ。

【二一】丹帷。赤きトバリ、天子の宮殿をいふ。

【二二】金璫。耳珠なり。侍中は冠に金璫を附く。恵文は冠の名。

【二三】煌煌。輝く貌。令姿は美姿なり。

【二四】高蹤。高軌といふが如し。

【二五】麟趾。麒麟の足。邈は遠き貌。

【二六】芳餌。善徳に喩ふ。

【二七】空坻。空岸なり。

【二八】槁葉。枯葉なり。作者自ら喩ふ。

【二九】尸素。官吏として無能なること。

【三〇】蓬蓽の廬。草屋なり。

【三一】王度。天子の法度。清夷は清平なり。

度日に清夷ならんことを。

【大意】日月天に輝き、列星紫宮を曜すが如く、赫赫たる晉朝に於ては宮門を開いて賢士を待つ。是に於て何公先づ侍中に任ぜられ、王公亦之に次ぐ。二賢相竝んで天子に侍するは、恰も鸞鳳の蘭渚に遊び、羽を振ひて光輝を揚ぐるが如し。二賢手を攜へて殿陛に侍し、冠に金璫を附けて美姿を輝かせり。かかる榮貴は固より予輩の冀ふ所にあらざれども、親密の情誼を結ばんことは常に希ふ所なり。ただ其位高くして追攀する能はざるを恨むのみ。然れども餌なくして空岸を守るは、魚を得るの道にあらず。身に善德なくして徒に高貴の人を慕ふも詮なきなり。われ今枯葉の風に飄るが如く、將に二君と相離れんとす。(傅咸時に出でて冀州刺史となり、將に赴任せんとす)よく眷戀の情なからんや。然れども身暗愚にして吏才なければ、當に職を退いて茅屋に歸り、先王の道を樂んで飢を忘るべきなり。進んでは闕を補ふなく、退いては其私を憂ふるを悲む。二君よろしく其德を弘美にし、王度をして益〻清平ならしめんことを勉むべし。

傅咸に答ふ　郭泰機

(一)皎皎たる白素の絲、織りて(二)寒女の衣となす。寒女妙巧なりと雖も、(三)杼

【一】皎皎。潔白なる貌。白素は白色なり。白素絲は美才に喩ふ。

【二】寒女。貧賤なる女。賤士

機を乘るを得ず。天寒くして（四）運の速なるを知る。況んや復た鴈の南に飛ぶをや。（五）衣工刀尺を乘り、我を棄てて忽ち遺るるが若し。（六）人諸を身に取らずんば、世事焉んぞ希ふ所あらん。況んや復た已に朝餐しぬ。曷に由りてか我が飢を知らん。

【大意】傅咸の己を薦めざるを諷するなり。通篇皆比喩より成る。故に其直言を嫌はざるなり。我れ卑賤なれども美材あり。美材あれども世に用ひらるる能はず。徒に日を送らば老將に至らんとす。是れ我が仕進に急なる所以なり。然るに君は少しも我を推薦することなし。君の如き同情心なき者には、何事を望むも亦そのかひなし。況んや君は既に高官に登りたれば、他人の卑賤をば敢て意に介せざるをや。

に喩ふ。
【三】杼機。杼はヒ、機はハタ。
【四】運。時の運行。
【五】衣工。傅咸に喩ふ。刀尺はハサミとモノサシ。
【六】人諸云云。己の心を以て人の心を度らざればとの意。

（一）顧彦先が爲に婦に贈る二首　陸士龍

（二）悠悠として君行邁く。（三）煢煢として妾獨り止まる。山河安んぞ踰ゆべき、永路萬里を隔つ。京室に（四）妖冶多く、（五）粲粲たる都人子あり。（六）雅

【一】顧彦先。卷第十二に見ゆ。
【二】悠悠。遙なる貌。
【三】煢煢。孤獨の貌。
【四】妖冶。美女なり。
【五】粲粲。衣服の鮮明なる貌。都人子は都會の婦女。
【六】雅步。なまめきたる歩みかた。纖腰は細腰なり。

歩して纖腰を擢で、巧笑して(七)皓齒を發す。佳麗良に美すべし。(八)衰賤焉んぞ紀するに足らん。遠く眷顧の言を蒙れるも、恩を銜んで始を望むにあらず。

【大意】　士龍の集に『顧彦先が爲に婦に贈る二首』、『婦の爲に答ふ二首』ありといふ。此は婦に代りて答ふる詩なり。婦に贈る詩にあらず、題誤れり。君(顧彦先を指す)は遠く洛陽に客となり、妾は孤影蕭然として此(妻は吳に在り)に止まる。山河千里の遠地なれば、行きて相見ん術もなし。京師には美女多く、美服をまとひ、細腰を振り、好笑して媚を呈するならん。容色も早や衰へたる妾の如きは、復た言ふに足らざるなり。されば遠く眷顧の言(詩を寄せたるをいふ)を賜りたるも、ただ其恩を忝しと思ふのみにて、始めの如き愛情を垂れ給へとは言はず。

(九)海に浮んでは水をなし難く、(一〇)林に游んでは觀をなし難し。容色は時に及ぶを貴び、(一一)朝華は日の晏くるを忌む。(一二)皎皎たる彼の姝子、(一三)灼灼たる春を懷ふ粲、(一四)西城雅舞を善くし、(一五)總章清彈に饒なり。(一六)鳴簧丹脣を發し、(一七)朱絃素腕を繞る。輕裾猶ほ電の揮ふがごとく、雙袂霧の

【七】皓齒。白き齒。
【八】衰賤。妻自ら謂ふ。紀は錄なり。

【九】海。京師に喩ふ。
【一〇】林。京師に喩ふ。
【一一】朝華。木槿なり。
【一二】皎皎。明淨の貌。姝子は都の美女。
【一三】灼灼。盛なる貌。粲は美女なり。
【一四】西城。洛陽の西北角に在り、妓女の居る處。
【一五】總章。古の女樂なり。清

散ずるが如し。(一八)華容藻幄に溢れ、哀響(一九)雲漢に入る。(二〇)知音は世に希なる所、君にあらずんば誰か能く讃せん。(二一)北辰の星を棄て置き、此の(二二)玄龍の煥たるを問ふ。(二三)時暮れて復た何をか言はん。華落つれば理必ず賤し。

【大意】君は京師に在りて見る所既に廣ければ、鄙野の陋婦の如きは復た觀るに足らざるべきも、木槿の日の晏くるを畏るると同じく、美女も年歴れば色衰ふるものにて、妾も昔は今に勝りしなり。京師には西城摠章の歌妓あり、丹脣素腕輕裾雙袂、運轉の微妙迅速なること電霧の如く、帳に溢れ雲に入ると聞く。君もと歌舞に通ず。定めて其妙を讃歎しつつあらん。此の定まれる妻を措きて、美艷の色を求むるは、誠に怨むべきなり。然れども容色衰へて賤まるるは亦理の常なれば、今更怨むを要せざるなり。

彈は琴瑟を彈奏すること。

【一六】鳴簧。笙なり。丹脣は赤き脣。

【一七】朱絃。琴箏なり。素腕は白き腕。

【一八】華容。美しき容姿。藻幄は美しき帳。

【一九】雲漢。雲なり。

【二〇】知音。よく音樂の妙を聞きわくる人。

【二一】北辰。北極星なり。この星は移動することなし。故に定まれる妻に喩ふ。

【二二】玄龍。美女に喩ふ。煥は輝くこと。

【二三】時暮。老いたるをいふ。

(一)兄機に答ふ　　陸士龍

悠遠なるも塗極むべし。別促にして(二)會の長きを怨む。思を銜んで(三)行

【一】兄機。卷第十二の弟士龍に贈ると題する詩を參照すべし。

【二】會。再會の時。

邁を戀ひ、言を興して(四)臨觴に在り。南津に(五)絶濟あり、北洛に(六)河梁なし。神往いて逝感を同うし、形留りて(七)參商を悲む。(八)衡軌若し迹を殊にせば、(九)牽牛も(一〇)箱に服くにあらず。

【大意】君が行程遠しと雖も、いつかは行き盡すことを得べきも、今や別離の期既に促りて、再會の期すべからざるは、誠に怨むべし。情を抱いて君の行を慕ひ、離杯を擧ぐるに臨みて此言を發せざるを得ず。われ南に歸るに渡津の以て渡るべきあるも、君の北行には橋の渡るべきなし。道途の苦辛思ひやるべし。されば心は君に隨つて共に逝き、身は留りて參と商と相見ざるが如し。夫れ兄弟の相依るは、當に衡軌の如くなるべし。然も若し迹を殊にすれば、たとひ牛ありと雖も、復た車に駕するを得ざるなり。(兄弟の名あるも同く聚會するを得ざるに喩ふ。)

【三】行邁。行き去ること。
【四】臨觴。離杯を擧ぐること。
【五】絶濟。わたしば。絶は水を渡ること。
【六】河梁。橋なり。
【七】參商。二星の名。この二星出沒して相見ることなし。
【八】衡軌。車のクビキ。
【九】牽牛。星の名。ここには牛の意に用ふ。
【一〇】箱。車なり。

(一)張士然に答ふ　陸士龍

行き邁きて長川を越え、(二)飄颻して風塵

【一】張士然。吳平ぎて後洛陽に入り、詩を雲に贈る。雲故に之に答ふ。
【二】飄颻。飄ること。行旅に喩ふ。

を冒す。通波(三)枉渚に激し、悲風(四)丘榛に薄る。(五)脩路窮迹なく、(六)井邑自ら相循ふ。(七)百城各ゝ俗を異にし、(八)千室良鄰にあらず。舊を歡んで(九)假合し難く、風土豈虛しく親まんや。(一〇)桑梓の域に感念し、(一一)眼中の人を髣髴す。(一二)靡靡として日夜遠く、(一三)眷眷として苦辛を懷く。

【大意】君は風塵を冒して遠く洛陽に往くに曲浦を涉り悲風を聞き、長途行けども窮らず、幾たびか城邑を過ぎ、然も各地風俗を異にすれば、親善すべき鄰となし難く、故鄉の舊友のみ慕はしくして、妄に親交を結び難く、ただ故鄉の山川、親友をのみ思ひつづけつつ、顧みがちに日夜進み行くならん。

【三】枉渚。曲渚なり。
【四】丘榛。叢木を榛といふ。
【五】脩路。長途なり。
【六】井邑。城邑といふが如し。
【七】百城。郡をいふ。
【八】千室。千戸なり。邑なり。
【九】假合。かりに親交すること。
【一〇】桑梓。鄉里なり。吳をいふ。
【一一】眼中の人。親友をいふ。
【一二】靡靡。行く貌。
【一三】眷眷。顧み慕ふ貌。

(一)盧諶に答ふ　(二)劉越石

琨頓首、書及び詩を(三)捐て、辛酸の苦言を備へ、(四)經通の遠旨を暢ぶ。執玩反覆し、手を釋く能

【一】盧諶。字は子諒、劉琨盧志と親善なり。故に志の子諶を辟して主簿となし、後從事中郎となす。段匹磾の幽州を領するや、諶求めて其別駕となる。
【二】劉越石。名は琨、字は越石、中山の人、永嘉の初、幷州刺史たり。建興二年、大將軍を加へられ、幷州に都督た

はず。慨然として以て悲み、歡然として以て喜ぶ。昔在少壯のとき未だ嘗て（五）檢括せず。遠く老莊の（六）齊物を慕ひ、近く（七）阮生の放曠を嘉し、厚薄何に從りてか生じ、哀樂何に由りてか至るを怪む。自頃（八）輈張して逆亂に困む。國破れ家亡びて親友（九）彫殘す。（一〇）塊然として獨坐すれば則ち哀憤兩ながら集り、杖を負ひて行吟すれば、則ち百憂俱に至る。時に復た相與に觴を擧げ膝を對し、涕を破りて笑となし、終身の（一一）積慘を排し、數刻の暫歡を求む。譬へば由ほ（一二）疾疢年を彌りて（一三）一丸之を銷さんと欲するがごとし。其れ得べけんや。夫れ才は世に生じ、世實に才を須つ。和氏の璧は焉んぞ獨り（一四）郢握に曜くを得ん。夜光の珠は何ぞ專ら（一五）隨掌に玩ばるるを得ん。天下の寶は固に當に天下と之を共にすべし。但（一六）分析の日、悵恨せざる能はざるのみ。然る後（一七）聃周の虛誕たり、嗣宗の（一八）妄作たるを知るなり。昔（一九）騄驥

り。三年司空に進む。

【三】捐。賜ばるといふがごとし。

【四】經通。古今一貫して變らざる意。

【五】檢括。行を愼むこと。

【六】齊物。莊子に齊物論あり、萬物を視て以て一となす。

【七】阮生。阮籍、字は嗣宗、放誕にして禮敬に拘らず。放曠は放縱なり。

【八】輈張。驚懼の貌。逆亂とは劉聰の亂を指す。

【九】彫殘。傷害せらるること。

【一〇】塊然。獨居の貌。

【一一】積慘。積憂なり。

【一二】疾疢。熱病なり。

【一三】一丸。一個の丸藥。

【一四】郢握。郢は楚の都、楚王の掌中なり。此れ謂のただ現の處に留るべきにあらざるに喩ふ。

【一五】隨掌。隨侯の手なり。

【一六】分析。離別なり。

【一七】聃周。老子、名は聃、莊子名は周。虛誕は虛欺なり。

【一八】妄作。虛欺の行。

【一九】騄驥。駿馬なり。戰國策に昔騏驥鹽車ニ駕シテ呉阪ヲ

の軛に吳阪に倚り（二〇）良樂に鳴けるは、（二一）知と不知となり。（二二）百里奚の虞に愚にして秦に智なりしは、（二三）遇と不遇となり。（二四）今君之に遇へり之を勗めんのみ。復た意を文に屬せざると二十餘年、久しく廢して則ち（二五）次なし。想ふに必ず其の一たび（二六）反さんとを欲するならん。故に（二七）指に稱へて一篇を送る。適ゝ以て（二八）來詩の益ゝ美なるを彰すに足らんのみ。琨頓首頓首。

厄運初めて遘ひ、（二九）陽爻六に在り。（三〇）乾象棟のごとく傾き、（三一）坤儀舟のごとく覆る。（三二）横厲糾紛し、（三三）羣妖競ひ逐ふ。火（三四）神州を燎き、（三五）洪華域に流る。彼の黍（三六）離離たり、彼の稷（三七）育育たり。我が皇晉を哀み、痛心目に在り。其一

【大意】晉帝の隆運極りて窮厄の災あり、

上ル、遷延シ轅ヲ負ヒテ進ム能ハズ、伯樂ニ遭ヒ仰イデ之ニ鳴ク、伯樂ガ己ヲ知ルヲ知レバナリとあり。

【二〇】良樂。王良及び伯樂。共に馬を知るを以て名あり。

【二一】知。琨諶を知る能はず、匹磾之を知るをいふ。

【二二】百里奚。人名。もと虞に仕へて虞亡び、秦に仕へて秦霸たり。漢書に僕聞ク百里奚虞ニ居テ虞亡ビ、秦ニ之キテ秦霸タリト、虞ニ愚ニシテ秦ニ智ナリシニアラズ、用ト不用トナリとあり。

【二三】遇。明君に遇ふこと。不遇は明君に遇はざること。

【二四】今君。諶の匹磾に用ひられしことをいふ。

【二五】次。次序、次第なり。

【二六】反。返書すること。

【二七】指に云云。指は旨なり。返書を望まるる貴意に從つての意。

【二八】來詩。諶の琨に贈りし詩を指す。

【二九】陽爻云云。爻とは易の卦を成す六つの畫段の稱。陽爻六に在りとは乾の卦の下より數へて第六爻、即ち上九をいふ。其辭に「亢龍悔あり」とあり。龍ものぼりつめては災厄あるをいふ。晉の災に遇ふをいふなり。

【三〇】乾象。天なり。

【三一】坤儀。地なり。

【三二】横厲。狂暴なり。糾紛は亂るる貌。

【三三】羣妖。劉聰等をいふ。

【三四】神州。帝都なり。

【三五】洪。洪水なり。華域は帝都なり。

天地崩亂して棟の傾くが如く、舟の覆るが如く、羣賊競つて相奔逐すること洪水燎火の如し。(劉聰僭號して平陽に卽位し、從弟曜を遣し晉を攻めて洛陽を破り、子粲を遣はし長安を攻めて之を陷れしむ)皇都化して田畝となり、黍稷繁茂するに至り、人をして心を痛めしむ。

天地心なし。萬物塗を同うす。(三八)淫に禍すること驗なく、善に福すること則ち虛し。(三九)逆は邑を全うするあり、(四〇)義は都を完うするなし。(四一)英蘂夏落ち、(四二)毒卉冬敷く。彼の(四三)龜玉の、韞櫝して諸を毀れるが如し。(四四)芻狗の談、其れ最も得たるか。其二

【大意】天地は萬物を愛育するの心なく、是非善惡を分たず、視て以て一途となす。今羣賊惡を爲して福を受け、晉室善を爲して禍を受く。是れ應報驗なしといふべきなり。逆賊は榮え義主は衰へ、恰も美花の夏(夏は花落つるの時にあらず)落ち、毒草の冬(冬は花咲く時にあらず)花咲くが如し。龜玉の櫝中に破れしが如く、晉室今や敗れて復た救ふ者なし。老子の『天地は不仁

【三六】離離。穗の垂るる貌。

【三七】育育。生長する貌。

【三八】淫。過罪なり。

【三九】逆。劉聰をいふ。

【四〇】義。晉室をいふ。

【四一】英蘂。美花なり。晉室に喩ふ。

【四二】毒卉。毒草なり、亂賊に喩ふ。敷は花咲くこと。

【四三】龜玉。龜甲と玉、皆國寶なり。韞櫝は箱に藏めて置くこと。

【四四】芻狗。草にて作りし犬、祭祀に之を用ふ。祭終れば之を棄つ。

なり。萬物を以て芻狗となす』（晉盛なれば人之を貴び、衰ふるに及んで人之を棄つるに喩ふ）との言は、實に其理を得たり。

咨余軟弱にして（四五）負荷に克へず。（四六）愆釁仍に彰れしに、榮寵屢加はる。威の建たざる、禍延き凶播く。忠國に隕ち、孝家に愆つ。斯罪の積れること、彼の山河の如く。斯釁の深きこと、終に能く磨するなし。其三

【大意】われ并州都督たりしも、軟弱にして興復の任に勝へず。國恩に負くの罪淺からざるに、却つて屢寵榮を蒙り、威力建たずして劉聰の爲に敗られ、父母害に遇ひ、我亦禍に遭ひて播遷す。國に對しては不忠の臣となり、家に對しては不孝の子となる。此罪積んで山河の高深なるが如し。能く消磨すべきにあらず。

（四七）郁穆たる舊姻、（四八）嬿婉たる新婚。其敗を慮らず、唯義を是れ敦うす。糧を裹み弱を攜へ、（四九）匍匐して星のごとく奔る。未だ爾の駕を輟めざるに、已に我が門を隳る。（五〇）二族偕に覆りて、（五一）三孽根を竝ぶ。長く（五二）舊孤に慙ぢ、

【四五】負荷。國の大事を引受くること。

【四六】愆釁。罪過なり。

【四七】郁穆。和美の貌。舊姻は古き姻戚、琨が妻は諶が從母なり。

【四八】嬿婉。和美の貌。新婚とは諶が妹、琨が弟に嫁せるをいふ。

【四九】匍匐。手を地に著けてはふこと。

【五〇】二族。琨と諶との族。

【五一】三孽。三人の子孫の意。諶と琨と琨が兄の子とをい

(五三)永く寃魂に負く。其四

【大意】我が家と汝の家とは、舊姻新婚の親戚なりしかば、汝は吾が敗北すべきを知らず、ただ親戚の義を頼み、糧を持ち老幼を攜へて我に來り投ず。汝未だ車を下らざるに、我が家已に賊に破られ、劉盧の二族倶に害に遭ひ、僅に三遺孤を存するのみ。(琨が父母は令狐泥の害する所となり、諶が父母は劉粲の害する所となる。)今當に三遺孤を扶けて父母の仇を報ずべし。然も其術なきを悲む。

(五四)亭亭たる孤幹、獨生して伴なく、綠葉(五五)繁縟にして、(五六)柔條脩竿なり。朝には爾の實を捋り、夕には爾の竿を捋る。竿翠(五七)尋に豐ち、(五八)逸珠椀に盈つ。寔に我が憂を消し、憂急なるも用て緩し。逝いて將に去らんとす。庭虛しくして情滿つ。其五

【大意】汝は孤生の竹の葉繁り枝長きが如し。(美材あるに喩ふ)われ朝には汝の實(竹實は食ふべし)を採り、夕には汝の竿を採るに、竿翠にして長さ尋に滿ち、其實美にして椀に滿つ。(己の諶に親んで大に益を得たるに喩ふ)此に因つて我が憂を消すを得たり。今汝

ふ。

【五二】舊孤。三孽をいふ。

【五三】寃魂。罪なくして死せる亡靈、上の二族を指す。

【五四】亭亭。高き貌。孤幹は孤生の竹、以て諶に喩ふ。

【五五】繁縟。繁くして文彩あること。

【五六】柔條。わかき枝。脩竿は枝長くして節稀れなること。

【五七】尋。八尺なり。兩節の間長さ八尺ありとなり。

【五八】逸珠。すぐれたる實。德に喩ふ。

將に我を棄てて去らんとす。(段匹磾の所に往くなり。)わが憤怨の情心に滿つ。虛滿伊れ何ぞ。蘭桂移し植ゑん。彼の(五九)春林を茂くし、此の(六〇)秋棘を瘁す。(六一)鳥あり翻飛して、休息するに遑あらず。(六二)桐にあらざれば棲まず、竹にあらざれば食はず。永く(六三)東羽を戢め、翰びて(六四)西翼を撫ぐ。我の之を敬する、歡を廢し職を輟む。其六

【大意】庭虛しく情滿つれば如何にすべき、ただ蘭桂(君子に喩ふ)を移し植うべきのみ。汝の我を去りて匹磾に歸するは、惜みても餘あれども、鳳凰は桐にあらざれば棲まず竹實にあらざれば食はざる鳥なれば(諶の賢主を擇ぶに喩ふ)永く此に休息すべきにあらず。今汝の此地を去りて西のかた幽州に赴かんとするに臨み、汝を敬慕し殆ど歡と職とを廢せんばかりなり。

音は賞せらるるを以て奏し、味は殊なるを以て珍とせらる。文は以て言を明にし、言は以て神を暢ぶ。之子の往く、(六五)四美臻らず。(六六)澄醪觴を覆ひ、(六七)絲竹塵を生じ、(六八)素卷啓くなく、(六九)幄に談賓なし。既に我が德を孤にし、又我が鄰を闕く。其七

【大意】盧諶の既に去りし後、獨居無聊の情

【五九】春林。匹磾に喩ふ。

【六〇】秋棘。棘はイバラ、惡木なり、琨自ら喩ふ。

【六一】鳥。鳳凰なり、以て諶に喩ふ。鳳凰は桐に棲み竹實を食ふといふ。

【六二】桐、竹。賢明の主に喩ふ。

【六三】東羽。諶の幷州を去るに喩ふ。

【六四】西翼。諶の幽州に赴くをいふ。時に匹磾幽州刺史たり。

【六五】四美。音味文言なり。

【六六】澄醪。澄みたる濁酒。

【六七】絲竹。管絃なり。

況を述ぶ。音樂は賞識者あるに因りて奏せられ、滋味は新異なるを以て珍重せられ、文章は以て言語を明にし、言語は以て精神を述ぶるなり。汝既に去りて我に此の四美なし。故に杯を掩ひて復た飲まず、（味を受く。）管絃は塵に埋まり（樂を受く。）書卷は繙かず（文を受く。）帳中に談論の客なし。（言を受く。）此の如くにして我れ竟に孤獨となりぬ。

（七〇）光光たる段生、（七一）幽を出でて喬に遷り、忠に資り信を履み、武烈しく文昭かなり。旌弓（七二）騂騂として、輿馬（七三）翹翹たり。乃ち（七四）長縻を奮ひ、是に轡し是に（七五）鑣す。何を以て子に贈らん。心を公朝に竭せ。何を以て懷を叙べん。領を引いて長く謠はん。其八

【大意】段生は微賤より出でて高貴に登り、忠信文武の徳を兼ぬ。今儀衛を盛にし厚祿を以て汝を辟す。汝よろしく往くべし。往きて善く段生に事へ、以て時艱を救ふべし。われ汝の往くを望み、長歌して別を惜まん。

【六八】素卷。飾なき書卷。
【六九】幄。帳なり。談賓は話相手。
【七〇】光光。徳の輝く貌。段生は段匹磾。
【七一】幽。幽谷なり、微賤に喩ふ。喬は喬木なり、高き木、高貴に喩ふ。
【七二】騂騂。調利なり。
【七三】翹翹。衆き貌。
【七四】長縻。長き索。厚祿に喩ふ。
【七五】鑣。くつわ。

重ねて盧諶に贈る　劉越石

(一)握中懸璧あり、本自ら(二)荊山の璆なり。彼の太公望を惟ふに、昔在(三)渭濱の叟なり。(四)鄧生何ぞ感激して、千里來りて相求むる。(五)白登曲逆を幸とし、(六)鴻門留侯に頼る。(七)重耳五賢に任じ、(八)小白射鉤を相とす。苟も能く(九)二伯を隆にせば、安んぞ黨と讎とを問はん。中夜枕を撫して歎じ、數子と游ばんことを想ふ。吾が衰へたること久しいかな、何ぞ其れ(一〇)周を夢みざる。誰か云ふ聖は節に達す、(一一)命を知りて故より憂へずと。(一二)宣尼獲麟を悲み、西狩(一三)孔丘を涕かしむ。功業未だ建つに及ばず、夕陽忽ち西に流る。時か我と與ならず、去りて雲の浮

【一】握中。掌中なり。懸璧は一本に玄璧に作る。黑き玉なり。盧諶に喩ふ。

【二】荊山。山の名。

【三】渭濱。渭水のほとり。太公望渭濱に釣す。文王の獵するに遇ひて其臣となり、遂に大功を建つ。

【四】鄧生。鄧禹なり。鄧禹は南陽の人なり、光武皇帝の河北を安集するや、南陽より河を渡り、追ひて鄴に至りて拜謁す。

【五】白登。地名、匈奴漢の高祖を白登に圍む、高祖曲逆侯陳平の計を用ひて免るるを得たり。

【六】鴻門。地名、漢の高祖と楚の項羽と此地に會す。項羽高祖を殺さんとす。留侯張良の謀を以て免るるを得たり。

【七】重耳。晉の文公の名。晉に內亂ありて文公狄に奔る。其臣五人皆賢なり。よく文公を輔佐す。五賢とは狐偃・趙衰、顚頡、魏武子、司空季子なり。

【八】小白。齊の桓公の名。管仲嘗て小白を射て帶鉤に中つ。小白齊に君たるに及び、怨を措きて管仲を相とす。

【九】二伯。二人の霸者、齊の桓公、晉の文公なり。

【一〇】周を夢む。論語に「甚しいかな吾が衰へたるや、久しいかな吾復た夢に周公を見ず」とあり。

【一一】命。天命なり。

【一二】宣尼。孔子なり。獲麟とは魯の哀公十四年、西に狩して麟を獲たること。孔子麟の出づること時ならざるを悲み

べるが若し。(一四)朱實勁風に隕ち、(一五)繁英素秋に落つ。狹路(一六)華蓋を傾け、(一七)駭駟雙輈を摧く。何ぞ意はん百錬の剛、化して指を繞るの柔とならんとは。

て泣けりといふ。
【一三】孔丘。孔子、名は丘。
【一四】朱實。赤き果實。勁風は强風。
【一五】繁英。繁き花。秋の色は白し、故に素秋といふ。
【一六】華蓋。車蓋なり。
【一七】駭駟。驚く馬。輈は車の轅。

【大意】前詩の意未だ盡きざるに因り、故に復た此詩を贈れるなり。わが掌中に美玉あり。(盧諶が才質の偉なるをいふ。)古代にも亦此に比すべき人傑あり。太公望、鄧禹、陳平、張良、晉の五賢齊の管仲の如き皆然り。夫れ人傑たる者は宜しく大に爲すあるべきなり。文公を輔け、光武を佐け、白登の圍を脱せしめ、鴻門の厄を免れしめたるが如き以て見るべし。苟も己を輔くる者は、其の黨與たると仇敵たるとは復た論ぜざるなり。予中夜枕を撫ちて嘆息し、以上の諸子と同じく偉業を建て、晉室を興復せんとを望むも、徒に衰老の嘆を發するのみ。人或は云ふ聖人は天命を知る、故に憂なしと。是れ大に然らず。孔子も西に狩して麟を獲たるを見て、涙を流せるにあらずや。われの悲嘆する固より怪むに足らず。況んや興復の業未だ成らずして、老將に至らんとするをや。今や疾風秋霜の亂世にして志士皆傾倒す。狹路の車蓋を破り、驚駟の轅を摧くが如し。われ嘗て百錬の剛鐵を以て自ら許したるに、今や賊の破る所となりて意氣柔弱なるに至りぬ。汝早く功を建て亦

沮喪することなかれ。

(一)劉琨に贈る並書　盧子諒

(二)故吏從事中郎盧諶、死罪死罪。諶性を稟くること短弱、世に當りて(三)任冐なり。其の自然に因りて用て靜退に安んず。木に在りては(四)不材の資を闕き、鴈に處りては(五)善鳴の分に乏し。卷くこと(六)蘧子に異り、愚なること(七)甯生に殊なり。(八)匠者時に眄み、(九)餞賓を免れず。嘗て自ら思惟するに、(一〇)運會に因緣し、(一一)接事を蒙るを得たり。(一二)清塵に奉せしより、今に(一三)五稔なり。(一四)謨明の效著はれず、(一五)候人の譏已に彰る。(一六)大雅含弘にして山藪を量苞す。加以待接彌ゝ優に、(一七)款眷逾ゝ昵し。(一八)運籌の謀

【一】劉琨。前詩を見よ。
【二】故吏。もとの部下の官吏。從事中郎は官名。
【三】任。用なり。
【四】不材。役に立たざる木。莊子に「此木は不材を以て其天年を終るを得たり」とあり。
【五】善鳴。よく鳴くこと。莊子に「鳴く能はざる者を殺す」とあり。
【六】蘧子。蘧伯玉なり。論語に「蘧伯玉は邦に道あれば則ち仕へ、邦に道なければ則ち卷いて之を懷にすべし」とあり。
【七】甯生。論語に「甯武子は邦に道あれば則ち智なり、邦に道なければ則ち愚なり」とあり。
【八】匠者　大工なり。木に在りて不材を闕く、故に匠者時に之を顧みて用ひんとするなり。段匹磾の眷顧を受くるに喩ふ。
【九】餞賓。客に供すること。鴈善鳴に乏しきを以て殺して客に供せらるるなり。喩意前に同じ。
【一〇】運會。好運といふが如し。
【一一】接事。從事中郎となりて事へしこと。
【一二】清塵。足下に事へてといふこと。
【一三】五稔。五年なり。
【一四】謨明。謀の賢明なること。
【一五】候人。戈を執りて道路を護る人。毛詩の序に「候人は小人を近づくることを刺るなり」とあり。
【一六】大雅。君子なり。劉琨な

に與り、(一九)讌私の歡に厠り、(二〇)綢繆の旨、骨肉に同じきあり。其の知己たる古人も喩ふるなし。昔(二一)聶政は嚴遂の顧に殉し、(二二)荆軻は燕丹の義を慕ひ、意氣の間、軀を糜かすも悔いず。節に達すると微しと雖も、之を庶ふべしと謂へり。然も苟も情ありといふ、孰か能く(二三)懷はざらん。故に身を委するの日、(二四)夷險之を已にし、事願と違ひ、(二五)外役を忝うするに當り、遂に左右を去り、迹を府朝に收む。蓋し本同じくして末異るは(二六)楊朱哀を興し、始め素くして終玄ければ(二七)墨翟涕を垂る。(二八)分乖の際咸歎慨すべし。感を致すの途或は茲より迫なり。亦奚ぞ必ずしも路に臨んで後(二九)長號し、絲を覩て後(三〇)歔欷せんや。是を以て仰いで(三一)先情を惟ひ、俯して(三二)今遇を覽、存に感じ亡を念ひ、物に觸れて眷を增す。易に曰く書は言を盡さず、言は意を盡さずと。然らば則ち書は言を盡すの器にあらず、言は意を盡すの具にあらず。況んや言も意を盡すに至

指す。含弘は寛大なること。

【一七】款眷。誠意を以て愛顧すること。

【一八】運籌。謀をめぐらすこと。

【一九】讌私。私宴なり。

【二〇】綢繆。相親むこと。

【二一】聶政。嚴遂の依頼を受け韓相俠累を殺し、己も亦自殺す。顧は恩顧なり。

【二二】荆軻。燕の太子丹の依頼を受け、秦王を刺さんとして果さず。

【二三】懷。報恩を思ふこと。

【二四】夷險。治亂なり。

【二五】外役。段匹磾に事へて別駕となりしをいふ。

【二六】楊朱。人名。楊朱は岐路を見て歎ず、本同じくして末異ればなり。

【二七】墨翟。人名。墨翟白き絲を見て泣く、其の黑くすべく、黃にすべきを以てなり。

【二八】分乖。分離なり。

【二九】長號。泣くこと。

【三〇】歔欷。悲嘆なり。

【三一】先情。諶が亡父の情をいふ。

【三二】今遇。現に遇へるをいふ。

るを得ざるあり、書も言を盡すに至るを得ざるあるをや。(三三)猥懣に勝へず、謹で詩一篇を貢す。抑も以て(三四)弘美を揄揚するに足らず、亦以て其の抱く所を攄ぶるのみ。若し公大恵を肆べ其厚恩を遂げ、錫ふに(三五)咳唾の音を以てし、其の違離の意を慰めば、則ち所謂(三六)咸池もて北里に酬い、(三七)夜光もて魚目に報ゆるなり。諶の願なり、敢て望む所にあらざるなり。諶死罪死罪。

(三八)濬哲なる惟れ皇、紹いで(三九)有晉を熙し、厥の(四〇)弛維を振ひ、光に(四一)遠韻を闡く。來るあるは斯れ(四二)雍、至り止るは伊れ順なり。(四三)三台朗を摛べ、(四四)四岳峻を增す。其一

【大意】盧諶既に段匹磾の處に在り、琨が前恩を憶ひ此詩を贈る。懷帝深智の德あり、能く晉統を繼ぎ、已に廢れたる綱紀を振ひ、先帝の遺德を輝かし、來り至る者皆和順にして之に從ふ。是に於て君臣よく和し、諸侯其人を得たり。(劉琨の幷州刺史たるをいふ。)

(四五)伊陟商を佐け、(四六)山甫周を翼け、艱難を(四七)弘濟し、(四八)王休を對揚す。苟に德を異にするにあら

【三三】猥懣。煩怨なり。

【三四】弘美。劉琨の寛弘なる德。揄揚は贊稱すること。

【三五】咳唾の音。琨の返詩をいふ。

【三六】咸池。堯の音樂。北里は紂の音樂。

【三七】夜光。珠の名。魚目は魚の眼球なり。

【三八】濬哲。深智なり。皇は晉の懷帝を指す。

【三九】有晉。晉なり、有は意義なし。

【四〇】弛維。廢れたる綱紀。

【四一】遠韻。德音なり。

【四二】雍。和なり。

【四三】三台。星の名、其色齊明なれば君臣和す。

【四四】四岳。諸侯なり。峻は高なり。

【四五】伊陟。殷の賢臣なり。商

ず、世を（四九）曠うして流を同うす。其忠貞を加へ、（五〇）其徽猷を宣ぶ。其二

は殷なり。

【四六】山甫。周の賢臣仲山甫なり。

【四七】弘濟。救ふこと。

【四八】王休。休は美なり、王の美命。對揚は天意に答へ揚ぐること。

【四九】曠。遠なり。

【五〇】徽猷。美道なり。

【大意】昔伊陟は殷を佐け、仲山甫は周を翼け、よく國家の大難を匡救し、王の美命を對揚せしが、今足下（琨を指す）の功德また伊陟山甫と異らず。遠く世を隔つと雖も、全く其風を一にす。乃ち忠貞の節を致し、善謀を宣揚す。

伊れ諶の（五一）陋宗、昔（五二）嘉惠に遭ひ、申ぬるに（五三）婚姻を以てし、著すに（五四）累世を以てす。義は（五五）休戚を等うし、好は興廢を同うす。孰か云ふ諧ふにあらずと。樂の（五六）契の如し。其三

【大意】吾が家嘗て足下の恩惠を蒙り、且つ婚姻を結ぶこと父子二世に及ぶ。故に兩家の關係は喜憂興廢皆之を同うす。誰か相和せずといふや、其の相和すること樂聲の和合するが如し。

王室（五七）師を喪ひ、（五八）私門播遷す。公を望んで之に歸し、險を視て艱を忽にせんとす。茲願遂げず、（五九）中路に阻顚す。仰いで（六〇）先意を悲み、俯

【五一】陋宗。卑陋の姓。

【五二】嘉惠。恩惠なり。

【五三】婚姻。前詩に見ゆ。

【五四】累世。父子二代なり。

【五五】休戚。喜憂なり。

【五六】契。和合なり。

【五七】師を喪ふ。劉聰の爲に敗られしをいふ。

して（六一）身愆を思ふ。其四

【大意】王師劉聰の爲に敗られ、吾が家爲に離散するや、われ足下を望んで之に歸し、以て險難を緩うせんことを希ひしに、目的を達する能はずして、父母皆劉粲（聰の子）の爲に殺害せらる。我れ乃ち仰いでは父母の怨恨を悲み、俯しては身の過を思ふ。

（六二）大鈞運を載ひ、（六三）良辰遂に往く。彼の日月を瞻るに、迅きこと俯仰に過ぐ。今を感じ昔を惟ひ、口に存し心に想ふ。借ひ昨の如しといふも、忽ち（六四）疇曩となる。其五

【大意】造化運行し良時忽ち去る。日月の迅きこと俯仰よりも甚し。現時を感じ足下の處に在りし昔時を思ひて、心口を離れず。足下の處に居りしは眞に昨日の如きも既に五年の昔となりぬ。

疇曩伊れ何ぞ、逝く者は彌ゝ疎なり。（六五）温温たる恭人、終を愼むこと初の如し。彼の（六六）遺音を覽るに、此の（六七）窮孤を恤ふ。彼の（六八）樛木の、蔓葛以て敷くに譬ふ。其六

【大意】既往の事を思ふも、去る者の日日に疎きは人情の常なり。ただ足下は寛弘の君子なれば、

【五八】私門。諶の家なり。播遷は離散なり。
【五九】中路。中途なり。阻顚とは諶の父母劉粲の爲に害されしをいふ。
【六〇】先意。父母害に遭ひて死せし意恨。
【六一】身愆。わが身の過失。
【六二】大鈞。造化なり。運は運行。

【六三】良辰。良時なり。
【六四】疇曩。昔遠なり。
【六五】温温。寛柔の貌。恭人は琨をいふ。
【六六】遺音。琨が先に諶に贈りし詩をいふ。
【六七】窮孤。諶自ら謂ふ。
【六八】樛木。枝の下り曲れる木。詩經に「南に樛木あり、葛藟之に纍ふ」とあり。

終始その眷顧を變ずるなく、遙に詩を寄せて我を憂へ我を勵ます。我之を恃むこと恰も曲木ありて蔓草之に縈ふが如し。

妙なるかな蔓葛、樛木に託するを得たるも、葉雲のごとく布かず、華星のごとく燭らず。(六九)承くると卞和に侔く、質(七〇)荊璞にあらず。眷(七一)尤良に同じく、用(七二)驥騄より乏し。其七

【大意】奇なるかな蔓葛樛木に著くことを得たるも、性疎薄にして枝葉繁らず、隨つて光明を發せず。恩を蒙ること卞和の玉に等きも、其質楚山の璞にあらざるを以て、美玉と成らず。眷顧を受くること王良に同じきも才能は其駿馬に劣れり。(琨の恩遇を受けたるも、功を建つる能はざるに喩ふ。)

承くること亦既に篤く、眷亦既に親し。(七三)駑猥を飾奬し、駑を(七四)駿珍に方べ、(七五)弼諧成るなく、(七六)良謨陳ぶるなし。(七七)狐趙を覬むなく、五臣に與るあり。其八

【六九】承。受なり。琨の恩を蒙るをいふ。卞和は璞玉を楚の山中に得、之を王に獻ぜし人。因つて玉の名とす。

【七〇】荊璞。卞和の楚の山中より得たる璞玉。璞は音ホク。

【七一】尤良。左傳に「晉の趙鞅、衞太子を戚に納れ將に戰はんとす、郵無恤簡子に御たり」杜預の註に「郵無恤は王良なり」とあり。

【七二】驥騄。駿馬なり。

【七三】駑猥。鈍馬なり。己に喩ふ。

【七四】駿珍。駿馬なり、賢良に喩ふ。

【七五】弼諧。輔和なり。

【七六】良謨。よき謀略。

【七七】狐趙。狐偃、趙衰なり。晉の文公内亂を避けて狄に奔るや、其臣五人あり、よく文公を輔佐す。狐偃、趙衰、顚頡、魏武子、司空季子是れなり。

【大意】恩顧を蒙ること親厚にして駑鈍を以て叨に賢良の士に伍し、輔和の道成らず、奇謀の陳ぶべきなく、趙孤の大功を建つるを望む能はざるに、然も五臣の列に加はれり。

五臣奚にか與る。(七八)百罹に契闊す。身は險阻を經、足は(七九)幽遐を蹈む。義は恩に由りて深く、(八〇)分は昵に隨つて加はる。(八一)綢繆して心を委ね、自ら(八二)匪他に同じ。其九

【大意】かの五臣は何事にか與れる。主君に從つて百憂に遇へり(諶と琨と倶に危難に遇へるに同じ)。險阻艱難備に之を嘗め、節義は恩親によりて益ゝ深し。因つて心を委ねて相親むこと兄弟に異らず。

【七八】百罹。百憂なり。契闊は勤苦すること。
【七九】幽遐。遐は遠、危難なり。
【八〇】分。猶ほ節といふが如し。昵は親密なり。
【八一】綢繆。相親むこと。
【八二】匪他。兄弟なり。詩經に「豈伊れ異人ならんや、兄弟にして他に匪ず」とあり。
【八三】趣舍。進止なり。

昔在暇日、通理を妙尋し、彼の意氣を尤め、是の節士を狹しとす。情は體を以て生じ、感は情を以て起る。(八三)趣舍要を同うし、窮達斯に已む。其十

【大意】昔閑暇の日、道義を尋ねて、意氣を以て身命を隕すは、皆正道にあらざるを知る。故に節士を狹しとして、之に倣はんことを欲せず。彼の節士の如きは身に由りて情を生じ、情に由りて感激を發せるのみ。進止の理は畢竟相同じ、窮達は自然に任すべきのみ。

(八四)由余の片言、秦人是れ憚る。(八五)日磾忠を效し、(八六)聲を有漢に飛ばす。(八七)桓桓たる撫軍、古賢に冠たり。來りて(八八)幽都に牧たり、厥の(八九)塗炭を濟ふ。其十一

【大意】由余穆公の宮室壯大なるを言ふや、穆公之を難りて以て德を修め、金日磾は忠孝の名を漢代に馳す。わが撫軍將軍段匹磾亦此等衆賢の上に出で、この幽州に牧となり、民の苦艱を救ふ。塗炭既に濟ひ、寇挫け民阜なり。其(九〇)疲隸を謬り、之に(九一)朝右を授く。上は任の大なるに懼れ、下は施の厚きを欣ぶ。實に(九二)高明を祇み、敢て守る所を忘れんや。其十二

【大意】匹磾已に民の苦を救ひ、寇賊去りて庶民殷富なり。乃ち誤りて我を舉げて別駕(官名)となす。我乃ち上は任の大なるを懼れ、下は恩の厚きに感じ、名譽を失墜せざらんことを謹み、敢て其職守を忘れず。

彼の(九三)反哺を相るに、倘ほ翔禽に在り、孰か是れ人にして、(九四)斯の心に忍びんや。毎に山海に憑り、

【八四】由余。人名なり、秦の穆公の時の人、穆公其謀を用ひて地を拓くこと千里、遂に西戎に霸たり。片言は一言なり。

【八五】日磾。漢の金日磾なり。ここは匹磾に喩ふ。

【八六】聲。名聲なり。有漢は漢室なり。

【八七】桓桓。武勇の貌。撫軍は匹磾をいふ。撫軍將軍幽州の牧たり。

【八八】幽都。幽州をいふ。牧は長官なり。

【八九】途炭。塗炭に同じ、水火の難なり。

【九〇】疲隸。賤民なり。謙自ら謂ふ。

【九一】朝右。右は上なり。匹磾の諶を舉げて別駕となししことを言ふ。

【九二】高明。身の譽をいふ。

【九三】反哺。哺は口中にある食物をいふ。子が親に養はれし恩を、長じて後に報ゆるをいふ。

(九五)高深を覿んことを庶ひ、遐に存亡を眺、緬に飛沈を成す。其十三

【大意】彼の烏を視るに尚ほ反哺の孝あり。人にして父母の讐を忍ぶを得んや。又毎に山海に依りて足下(琨を指す)を見んことを庶ひ、遙に存亡を視て、喜憂を成しつつあり。

(九六)長徽已に纓り、逝いて將に徙り擧らんとす。迹を(九七)西踐に收め、哀を(九八)東顧に銜む。曷ぞ途遼なりと云はん、曾て(九九)咫歩だもあらず。豈(一〇〇)夙夜せざらんや、行に露多きを謂ふ。其十四

【大意】われ既に匹磾の辟す所となり、身に別駕の任を帶ぶるも、將に西幽州を去りて、東幷州に徙らんことを思ふ。其道決して遠きにあらず、而も敢て往かざるものは、匹磾の我に二心あるを疑はんことを懼るればなり。

(一〇一)緜緜たる女蘿、(一〇二)松標に施ひ、澤を(一〇三)洪幹に稟け、陽に(一〇四)豐條を晞かせども、根淺くして固うし難く、莖弱くして彫み易し。彼の(一〇五)纖質を操り、此の(一〇六)衝飈を承く。其十五

ふ。烏に反哺の孝あり。

【九四】斯心。父母の讐に報いんとの心。

【九五】高深。琨をいふ。

【九六】長徽。長き索。

【九七】西踐。幽州は西に在り。

【九八】東顧。幷州は東に在り。

【九九】咫歩。咫は八寸なり。

【一〇〇】夙夜。朝晩行くこと。

【一〇一】緜緜。長き貌。女蘿は蔓草の名。諶自ら喩ふ。

【一〇二】松標。松の梢。琨に喩ふ。

【一〇三】洪幹。大なる幹。

【一〇四】豐條。太き枝。

【一〇五】纖質。微弱の身。

【一〇六】衝飈。疾風なり。匹磾の辟召に喩ふ。

【大意】我れ足下の庇護を受けしこと、恰も女蘿の松梢に附けるが如し。常に恩澤に浴せりと雖も、質微弱にして自ら本根を固うする能はず。況んや匹磾の召辟に遭へるをや。

纖質寔に微にして、衝飇に斯れ値ふ。誰か謂ふ言精しと、致は意を賞するに在り。魚を得るを見ずして、亦厥餌を忘る。其形骸を遺て、之を(一〇七)深識に寄す。其十六

【大意】身微弱なるを以て忽ち匹磾の辟に誘はる。今敢て之を辯解せず。請ふ足下の我が意を諒せられんことを。(莊子に「言論を以てすべき者は物の粗なる者なり。意致を以てすべき者は物の精なる者なり」とあり。)我が行は既に理に當らず、亦自ら辯解する能はず。因つて我が形骸を遺て、足下の深識判斷を請ふ。

(一〇八)先民意を頤ひ、山に潛み(一〇九)几に隱り、仰いで丹崖に熙し、俯して綠水に漱ぎ、和を求むるなく、自ら衆美に附く。(一一〇)遐蹤に慷慨し、(一一一)高旨に愧づるあり。其十七

【大意】古人の意を養ふや、或は山に隱れ或は几に憑り、仰いでは丹崖に燥かし、俯しては綠水に漱ぎ、人に和することを求めずして、人自ら其美に附和す。われ此に倣はんことを欲すれども能はず。故に古人の高旨に愧づるあり。

【一〇七】深識。琨の意をいふ。
【一〇八】先民。古人なり。
【一〇九】几。坐する時よりかかる具。莊子に「南郭子綦几に隱りて坐し、嗒焉として其耦を喪へるに似たり」とあり。
【一一〇】遐蹤。古人の高遠なる行。
【一一一】高旨。古人の高尚なる旨意。

爰に異論を造せば、(二二)肝膽も楚越なり。惟れ大觀を同うすれば、(二三)萬塗も一轍なり。死生既に齊し、榮辱奚ぞ別たん。其(二四)玄根に處て、廓焉として結ぶなし。其十八

【大意】世に足下を匹磾に讒する者あり。故に匹磾と足下との間阻遠となれるも（異論とは讒に喩ふ。莊子に「其異る者よりして之を視れば、肝膽も楚越なり」とあり）足下は常に大觀を抱くを以て萬物を以て一となす（鶡冠子に「達人は大觀す」とあり、文子に「聖人は萬異を以て一同となす」とあり）既に死生を以て一となす。何ぞ榮辱を別たんや。よく大道を體得して心怨結するなし。

福は禍の始たり、禍は福の階たり。天地は盈虛し、寒暑は周廻す。(二五)夫差の祀られざるは、釁齊に勝つに在り。(二六)句踐の伯たるは、祚會稽よりす。其十九

【大意】福は禍の本にして、禍は福の本なり。天地は盈虛し寒暑は往來す。物皆然り。夫差の滅びたるは其兆齊と戰ひて勝ちしに在り。（福化して禍となる）句踐の霸業を成せるは、會稽山に敗れたるに由る。（禍化して福となる。）

【二二】肝膽。內臟の名。相近きに喩ふ。楚越は二國の名。相遠きに喩ふ。

【二三】萬塗。萬途なり。

【二四】玄根。道なり。廓焉は心の空虛なること。

【二五】夫差。吳王の名。齊を艾陵に伐ちて之に勝ち、驕りて越王句踐の爲に滅さる。祀られずとは滅亡するをいふ。

【二六】句踐。越王句踐なり。夫差と戰ひて敗れ會稽山に棲む。後之を滅す。伯は霸なり。

(二七)邈たるかな達度、唯道に是れ杖る。形未だ泰からざるあるも、神暢びざるなし。川の流るるが如く、淵の量きが如し。上は(二八)棟隆を弘め、下は民望に塞たん。其二十

【大意】足下は高遠の度量を有し、ただ道に據りて行ふ。故に身は屈する所あるも、神智は則ち通ぜざるなく、川の流るるが如く、淵の深きが如し。上は晉室を興復して棟梁の臣となり、下は萬民の望に滿たん。

【二七】邈。遠き貌。達度は弘大なる度量。琨をいふ。
【二八】棟隆。高き棟。

(一)崔溫に贈る　盧子諒

逍遙して城隅に歩し、暇日聊か(二)游豫す。北のかた沙漠の垂を眺、南のかた(三)舊京の路を望む。(四)平陸長流を引き、(五)岡巒茂樹を挺んで、中原(六)迅飈を厲し、(七)山阿雲霧を起す。(八)游子恆に悲懷し、目を擧げて永慕を增す。(九)良儔偕にするを獲ず、情を舒べて將た焉にか訴へん。遠く(一〇)賢士の風を念ひ、遂に往古の務を存す。(一一)朔鄙俠氣多し、豈唯地の固しとする所なるのみならん

【一】崔溫。崔悅、字は道儒、溫嶠、字は太眞。
【二】游豫。遊樂なり。
【三】舊京。洛陽なり。賊軍に燒破せらる。故に舊京といふ。
【四】平陸。平地なり。
【五】岡巒。山なり。
【六】迅飈。疾風なり。
【七】山阿。山の隈なり。
【八】游子。客遊の人、盧子諒時に幽州に宦遊せり。
【九】良儔。良友なり。崔溫を指す。
【一〇】賢士。古の良將をいふ。
【一一】朔鄙。北方の邊地。幽州

や。(一二)李牧邊城を鎭じ、(一三)荒夷南懼を懷ふ。(一四)趙奢疆場を正し、秦人北慮を折く、(一五)羈旅して寬政に及び、(一六)質を委ねて時と遇ふ。恨むらくは(一七)駑蹇の姿を以て、徒に(一八)非子の御を煩すを。亦既に負擔を弛て、位を忝うして(一九)黔庶に宰たり。苟も(二〇)罪戾を免れんと云ふ。何の暇ありてか民譽を收めん。(二一)倪寬殿たるを以て黜けられ、終に乃ち(二二)衆賦に最たり。(二三)何武赫赫たらざるも、遺愛常に去るに在り。(二四)古人は希ふ所にあらず。短弱自ら(二五)素あり。何を以てか斯辭を敷く。惟れ(二六)二子の故を以てなり。

【大意】暇日に當りて城角を遊歩し、北のかた沙漠を眺め、南のかた洛陽を望めば、長川平地を流

をいふ。

【一二】李牧。趙の北邊の良將なり。匈奴懼れて敢て邊城に近づかず。

【一三】荒夷。匈奴なり。

【一四】趙奢。趙の將なり。疆場は趙の邊界。

【一五】羈旅。客遊なり。寬政は寬容の政。

【一六】質。身なり。

【一七】駑蹇。鈍馬なり。

【一八】非子。古の善御者の名。

四碑に喩ふ。

【一九】黔庶。人民なり。

【二〇】罪戾。罪過なり。

【二一】倪寬。漢人なり。左内史に遷るや、民の爲に假貸す。故を以て租多く入らず。後軍發するあり。左内史租課を負へるを以て殿たり。免ぜらるるに當り民皆之を失はんことを恐れ、負擔して租を輸す。課更に以て最上なり。殿は最下なり。

【二二】衆賦。租課なり。最は最上なり。

【二三】何武。字は君公、楚の内史となり仁厚なり、官に居て赫赫の名なきも、去つて後常に遺愛あり。

【二四】古人。倪寬何武を指す。

【二五】素。素より仁厚の性あるをいふ。

【二六】二子。崔温をいふ。

れ、茂樹高山に聳え、中原に疾風あり、山曲に雲霧起る。われ他郷に宦遊して常に悲を抱く。足下の如き良友あるも、之と與に遊樂する能はず。ただ永慕を增すのみにして、衷情誰にか吐露せん。此の地は古名將の遺跡を存し、ただ游俠の風あるのみならず、地勢も亦堅固なり。彼の李牧の邊城を守るや、匈奴懼れて南侵せず、趙奢の邊界を守るや、秦人北來の意を絶てるが如き、以て見るべし。われ今宦遊して寬容の政（段匹磾の別駕たるをいふ）を蒙り、身を委ねて之に事ふるも、駑馬の非子の御を煩すが如く、功績の觀るべきものなく、負擔の役を免れ、庶民を治むるの任を辱うす。ただ身の罪戾を免れんとするに急にして、未だ民譽を收むるに暇あらず。昔倪寬は民租の入らざるを以て黜けられしも、後終に租入の最たるを得、何武は赫赫たる盛名なかりしも、去つて後人民之を愛慕せりといふ。われ固より此の二人に如かずと雖も、仁厚の性なきにあらず、窃に之に倣はんと期せり。足下はよく我が情を知る、故に此辭を發するなり。

（一）魏子悌に答ふ　盧子諒

（二）崇臺は一幹にあらず、珍裘は（三）一腋にあらず。
多士大業を成し、羣賢（四）弘績を濟す。（五）時來の

【一】魏子悌。劉琨の從事たり、子諒と官を同うす。
【二】崇臺。高臺なり。
【三】一腋。一狐の腋の皮。

會を蒙るに遇ひ、聊か(六)朝彦の跡を齊うす。此の腹背の羽を顧み、彼の(七)排虛の翮に愧づ。身を寄せて(八)四岳に蔭れ、好を託して(九)三益に憑る。(一〇)傾蓋終朝なりと雖も、(一一)大分は疇昔に邁ぐ。危に在りては每に險を同うし、安に處ては(一二)易を異にせず。倶に(一三)晉昌の艱を涉り、共に(一四)飛狐の厄を更、恩は(一五)契闊に由りて生じ、義は(一六)周旋に隨つて積る。豈(一七)鄕曲の譽を謂はんや、謬りて(一八)本州の役に充てらる。(一九)乖離我をして感せしめ、悲欣情をして惕れしむ。理は精神を以て通ず。形骸の隔れるを曰はず。妙詩篤好を申べ、清義(二〇)幽賾を貫く。恨むらくは(二一)隨侯の珠の、以て(二二)荊文の璧に酬ゆるなきを。

【四】弘績。大功なり。

【五】時來の會。偶來る好運。

【六】朝彦。朝は劉琨の府朝、彦は秀士。子悌を指す。

【七】排虛の翮。空中を飛翔する翼、子悌に喩ふ。韓詩外傳に「夫れ鴻鵠一擧千里、恃む所の者は六翮のみ。背上の毛、腹下の毳、一把を益すも飛ぶこと爲に高きを加へず、一把を損するも飛ぶこと爲に下きを加へず」とあり。

【八】四岳。諸侯。劉琨を指す。

【九】三益。論語に「益者三友、直を友とし、諒を友とし、多聞を友とするは益なり」とあり。子悌を指す。

【一〇】傾蓋。親交を結ぶこと。孔子程子に途に遇ひ、蓋を傾けて語る。

【一一】大分。友誼なり。疇昔は古人なり、孔子を指す。

【一二】易。平安なり。音エキ、叶韻。

【一三】晉昌。郡名、石勒の攻むる所となる。

【一四】飛狐。塞の名。嘗て賊の得る所となる。劉琨、子諒子悌と往きて之を伐ち、賊の敗る所となりて安次に奔る。

【一五】契闊。勤苦すること。

【一六】周旋。追逐なり。

【一七】鄕曲。鄕里なり。

【一八】本州。幽州を指す。子諒は涿郡の人、涿郡は幽州に屬す。段匹磾の辟に應じ幽州別駕となりしことを言ふ。

【一九】乖離。別離なり。

【二〇】幽賾。深遠なる道理。

【二一】隨侯の珠。珠の名。妙詩に喩ふ。

【二二】荊文の璧。楚人卞和璞玉を得て王に獻ず。楚の文王之を理めしめ寶を得たり、命じ

て和氏の璧といふ。子悌の詩〜〜に喩ふ。

【大意】高臺は一木の枝の成す所にあらず、狐白裘は一狐腋の成す所にあらず、國を治むるも亦然り、衆賢相賴りて始めて大業を成すを得るなり。われ好機會を得、足下と官を同うして劉琨に事へしも、毎に身の不能を顧みて、足下の英俊なるに愧づ。既に身を寄せて劉氏に事へ、亦足下と好を結び、倐交短日月なりしも、情誼は古人に過ぎ、常に安危を共にし、晉昌飛狐の間に艱苦し、恩義益〻深かりき。われ固より鄉里の譽を求めざれども、誤りて本州の別駕に任せられ、足下と相別るるに至り、今の別離を悲み、昔の同聚を欣び、感慨殊に切なりき。然れども精神相通ずれば、身の遠隔は敢て悲む所にあらず。今足下妙詩を寄せ、深理を述べらる。ただ我れ不才にして好詩を以て酬ゆる能はざるを恨むのみ。

靈運に答ふ　謝宣遠

夕霽風氣涼しく、閑房(一)餘清あり。軒を開いて(二)華燭を滅せば、月露(三)皓として已に盈つ。(四)獨夜物役なく、寢ぬれば亦云に寧し。忽ち(五)愁霖

【一】餘清。殘りの涼しさ。
【二】華燭。飾れる燈火。
【三】皓。白き貌。
【四】獨夜。客なき夜。
【五】愁霖の唱。謝靈運が宣遠に寄せたる詩をいふ。

の唱を獲、勞を懷ひて（六）所誠を奏す。彼の行旅の艱を歎き、茲の（七）眷言の情を深うす。伊れ余慰寡しと雖も、（八）殷憂蹔く爲に輕し。（九）牽率して嘉藻に酬い、長揖して（一〇）吾生に愧づ。

【大意】積雨夕に霽れ、室に餘涼あり。窓を開き燈を消して坐すれば、月色露光室内に滿ち、身既に無事なるを以て、起臥ともに安し。忽ち足下の愁霖の詩を得たり。詩中に雨中行役の苦を歎き、我を眷戀するの深情を述ぶ。余が情慰安少しと雖も、足下の詩を得て暫く深憂を輕くするを得たり。今足下の好意に牽かれて答詩を作れりと雖も、詩の妙足下に及ばざるを愧づ。

【六】所誠。懇誠の情。
【七】眷言。眷戀なり。
【八】殷憂。殷も亦憂なり。
【九】牽率。來詩に牽かれてとの意。嘉藻は妙詩なり、靈運の詩を指す。
【一〇】吾生。靈運を指す。

（一）安城に於て靈運に答ふ　謝宣遠

條繁くして林彌ゝ（二）蔚たり。波清くして源逾ゝ濬し。（三）華宗吾が秀を誕し、（四）之子前胤を紹ぐ。（五）綢繆して風徽を結び、（六）烟熅して芳訊を吐く。（七）鴻漸事に隨つて變じ、（八）靈臺年と與に峻

【一】安城。宣遠・安城の守たり。
【二】蔚。盛に茂ること。
【三】華宗。貴族をいふ。謝氏を指す。秀は美なり。誕は生むこと。
【四】之子。靈運を指す。
【五】綢繆。情緒の纏綿すること。風徽は美詩なり。
【六】烟熅。氣の蒸升する貌。

し。其一

【大意】枝繁くして林益〻茂り、波清くして源益〻深きが如く、吾が謝氏足下の如き俊秀の士を生み、祖先の遺業を繼がしむ。情思結んで妙詩となり、仕進の途漸く進み、其德年と共に高し。

(九)華蕚相光飾し、(一〇)嚶鳴同響を悦ぶ。親を親んで子余を敦くし、賢を賢として吾れ爾を賞す。景を比ぶれば鮮輝後れ、年を方ぶれば一日長ず。萎葉は(一一)榮條を愛し、涸流は河廣を好す。其二

【大意】我と足下とは兄弟の義あるを以て、互に相推重し、また詩章を以て唱和するを樂む。足下は親親の道を以て我に厚くし、我は尊賢の道を以て足下を尊ぶ。其德を比ぶれば、我れ足下に及ばざるも、年齡を比ぶれば、我れ足下より長ぜり。萎葉は榮枝を愛し、涸流は廣川を好むが如く、我れ卑德なるを以て足下の高德を愛す。

業を殉みて(一二)成操を謝し、禮に復して貧樂に愧づ。幸に(一三)代耕を果すに會ひ、江南の曲に(一四)符守す。運を履んで(一五)荏苒を傷み、塗に遵つ

芳訊は芳言なり。美詩なり。

【七】鴻漸。漸は進なり。易經に「鴻陸に漸む」とあり。仕進に喩ふ。

【八】靈臺。德に喩ふ。

【九】華蕚。兄弟なり。宣遠は靈運の從兄なり。

【一〇】嚶鳴。二鳥の和鳴すること。

【一一】榮條。榮ゆる枝。

【一二】成操。志を成就すること。謝は去なり。

【一三】代耕。禮記に「祿は以て耕に代ふるに足る」とあり。

【一四】符守。漢書に「初めて郡守の與に竹使符をつくる」とあり。符を剖きて安城に守たるをいふ。

て（二六）緬邈を歎く。懷を布いて欽する所を（二七）存す。我が勞一に何ぞ篤き。其三

【大意】われ事業を營みて素志を遂ぐる能はず、又克己復禮し貧に居り道を樂む能はず。幸に祿仕を得て江南に太守たるも、每に歲月の過ぎ易く、歸路の遠隔なるを歎く。今感慨を述べて敬慕する所の足下に寄す。足下宜しく我が相思の勞を想見すべきなり。

肇は允に規を同うすと雖も、翻飛各〻槃を異にす。（一八）封畿の外に迢遞し、（一九）承明の内に窈窕たり。塗を尋ぬれば塗既に睽き、理に卽けば理已に對す。（二〇）絲路恆悲あり、矧んや迺ち吾が愛に在るをや。其四

【大意】我れ初め足下と規模を同うせるも、陞進飛躍に至りては亦及ばず。我は遠く安城に在りて太守となり、足下は深く殿中にありて祕書監たり。仕途を尋ぬれば、內外職を異にせるも、理を考ふれば賢者は內に在り、不賢者は外に在りて、理よく當れり。昔楊墨の二子絲路を見て悲めりといふ。況んや我と足下と相愛して然も離居するをや。豈悲嘆せざるを得んや。

【二五】荏苒。歲月の過ぎ易きこと。
【二六】緬邈。遙遠なり。
【二七】存。存問なり。
【一八】封畿。畿內なり。迢遞は遠き貌。
【一九】承明。殿の名。窈窕は幽深の貌。
【二〇】絲路。墨子は練絲を見て泣く。以て黃にすべく以て黑にすべきを以てなり。楊子は岐路を見て哭す。以て南すべく北すべきを以てなり。

(二一)跬行して歩武を安んじ、翮を鎩いで(二二)數仞を周る。豈高遠を識らざらんや、方に違ひ往きて(二三)吝あり。(二四)歲寒くして霜雪嚴に、(二五)過半にして路愈〻峻し。己を量りて友朋を畏れ、勇退して敢て進まず。行いて(二六)令猷を勵めよ。誠を寫して(二七)來訊に酬ゆ。其五

【大意】我れ足を擧げて行くも、一迹の内に安んじ、羽を傷へるを以て、飛躍するも數仞の上に過ぐるなし。高遠に登るを知らざるに非れども、既に道に違へるを以て進めば悔あり。年老いて世路の益〻難きを覺ゆ。吾が材の薄劣なるを以て友朋を畏れ、故に敢て進まず。足下宜しく益〻善道を勉むべし。聊か誠心を述べて來問に答ふ。

【二一】跬行。一足を以て行くこと。步武は足迹なり。
【二二】數仞。仞は八尺なり。
【二三】吝。悔なり。
【二四】歲寒。老年に喩ふ。
【二五】過半。人生の半を過ぐること。
【二六】令猷。善道なり。
【二七】來訊。來問なり。

西陵にて風に遇ひ(一)康樂に獻ず　謝惠連

我が行(二)孟春を指し、春仲尚ほ未だ發せず。途に趣いて遠く期あり、離を念ひて情歇むなし。裝を成して(三)良辰を候ち、舟を漾べて(四)嘉月

【一】康樂。謝靈運なり。靈運は康樂侯に封ぜらる。
【二】孟春。初春なり。
【三】良辰。良き時、安靜にして風なき時。
【四】嘉月。春月なり。

を陶む。途を瞻て意悰むこと少く、還顧して情闕くること多し。其一

【大意】われ初春に行途に上らんと擬し、然も仲春に至るも尚ほ出發せず、以て今日に及べり。行程既に遠く、離情亦禁じ難し。旅裝を成して好時を待ち、舟を泛べて春景を賞し、往路を見ては心を痛ましめ、故鄕を顧みては情を傷ましむ。

(五)哲兄仳別を感じ、相送りて(六)坰林を越ゆ。(七)野亭の館に飲餞し、袂を澄湖の陰に分つ。(八)悽悽たる留子の言、(九)眷眷たる浮客の心。廻塘(一〇)艫栧を隱し、遠望すれども形音を絕つ。其二

【大意】賢兄また別離を悲み、我を送りて野外に來り、驛路の館に離杯を擧げ、湖陰に袂を分ち、行く者留る者與に悲戀の語あり。回顧すれば、舟廻塘に隱れ、遠望すれども影響を見ず。

(一一)靡靡として長路に卽き、(一二)戚戚として遙悲を抱く。悲遙にして但自ら弭る。路長くして當に誰にか語るべき。行き行きて道轉た遠く、去り去りて情彌〻遲し。昨(一三)浦陽の汭を發し、今(一四)浙江の湄に宿る。其三

【大意】既に長途に就くも憂傷して遠悲を抱き、ただ自ら止るのみにして人の語るべきなし。道を

【五】哲兄。賢兄なり。靈運を指す。仳別は離別なり。
【六】坰林。爾雅に「野外を林といひ、林外を坰といふ」とあり。
【七】野亭。野驛なり。
【八】悽悽。悲戀の貌。留子は後に留る人、靈運をいふ。
【九】眷眷。悲戀の貌。浮客は行客なり、惠連自ら言ふ。
【一〇】艫栧。船首の楫。
【一一】靡靡。行く貌。
【一二】戚戚。憂傷なり。
【一三】浦陽。江の名。
【一四】浙江。江の名。

行くこと遠しと雖も、想戀の情遲遲として絶つ能はず。昨日浦陽江の汭を發して、今日始めて浙江の湄に達しぬ。

(一五)屯雲曾嶺を蔽ひ、驚風飛流を涌かしめ、(一六)零雨墳澤を潤し、落雪林丘に灑ぎ、浮氛崖巘に晦く、(一七)積素原疇を惑る。(一八)曲汜薄か停旅し、通川行舟を絶つ。其四

【大意】雲聚りて重嶺を蔽ひ、風急にして波浪を擧げ、雨雪山丘に灑ぎ、烟雲暗くして積雪道を埋め、江流窮りて舟皆停止して行かず。

(一九)津に臨めども濟るを得ず、楫を佇めて風波に阻てらる。(二〇)蕭條たる洲渚の際、氣色諧和すること少し。(二一)西瞻して游歎を興にし、(二二)東睇して悽歌を起す。積憤(二三)疢痗を成すも、(二四)萱なし將た如何せん。其五

【大意】渡津に臨めども風波に阻てられて濟るを得ず、徒に楫を止めて天候の定まるを待つ。洲渚の際を望めば、風雲錯起して景色の諧和するなし。西を眺めては、兄と遊びし昔を思ひて歎息を發し、東を望みては行路の遠きを見て獨り悲歌を吐く。

【一五】屯雲。聚れる雲。曾嶺は層嶺なり。
【一六】零雨。落つる雨。
【一七】積素。積雪なり。原疇は原野。
【一八】曲汜。水の分流する處。停旅は旅客の停止すること。
【一九】津。わたしば。
【二〇】蕭條。空寂の貌。
【二一】西瞻。西方を見ること。
【二二】東睇。東方を見ること。悽歌は悲しき歌，即ち此詩なり。
【二三】疢痗。熱病なり。
【二四】萱。わすれぐさ。此草を植うれば，よく人をして憂を忘れしむといふ。

(一)舊園に還りて作り、(二)顏范二中書に見す　謝靈運

滿を辭す豈(三)秩を多しとせんや、病を謝して年を待たず。偶ゝ(四)張邴と合ひ、久しく(五)東山に還らんと欲す。(六)聖靈昔廻眷し、(七)微尙宣ぶるに及ばず。何ぞ意はん(八)衝飇激し、烈火炎煙を縱にせんとは。玉を焚くこと(九)崐峯より發し、(一〇)餘燎遂に遷さる。(一一)沙に投じて理既に迫り、(一二)邛に如きて願亦愆る。長く(一三)歡愛と別れ、永く平生の緣を絕つ。舟を千仞の壑に浮べ、轡を萬尋の巓に摠る。流沫險とするに足らず、(一四)石林豈艱となさんや。(一五)閩中安んぞ處るべけん、日夜歸旋を念ふ。事は(一六)兩如の直に躓き、心は(一七)三避の賢に慨ふ。身を青雲の

【一】舊園。會稽始寧縣の園なり。
【二】顏范二中書。中書侍郞顏延之、范泰。
【三】秩。俸祿なり。
【四】張邴。張良及び邴漢、共に漢の人にて晚年官を辭して隱居せり。
【五】東山。會稽の始寧縣をいふ。
【六】聖靈。宋の高祖（武帝）。廻眷は己を眷顧すること。
【七】微尙。己の好尙する所、歸隱の志をいふ。
【八】衝飇。疾風なり。徐羨之等亂をなし廬陵王及び賢良を殺す、故に玉を焚く云云といふ。
【九】崐峯。書經に「火崐崗に炎れば玉石俱に焚かる」とあり。
【一〇】餘燎。餘炎なり。靈運時に廬陵王の司馬たり。初めて永嘉の守に遷さる。故に餘燎云云といふ。
【一一】沙。長沙なり。漢の賈誼長沙に謫せらる。
【一二】邛。蜀の臨邛なり。漢の司馬相如、卓文君と與に臨邛に往く。然も志の如くならず。
【一三】歡愛。顏范を指す。
【一四】石林。險山の名。
【一五】閩中。東越なり。永嘉郡の地方。
【一六】兩如。論語に「子曰く直なるかな史魚、邦に道あるも

上に託し、巖に栖んで飛泉を挹む。(一八)盛明氛昏を盪し、(一九)貞休屯邅を康んず。(二〇)殊方咸な貸を成し、(二一)微物采甄に豫る。感深うして(二二)操固からず、質弱くして(二三)板纏し易し。曾ち是れ昔園に反り、(二四)往を語りて實に(二五)款然たり。(二六)曩基卽ち先づ築き、(二七)故池更に穿たず。果木(二八)舊行あり、(二九)壤石遠延なし。休憩の地にあらずと雖も、聊か永日の閑を取る。生を衞る自ら經あり、陰を息めて(三〇)牽く所を謝す。(三一)夫子情素を照にす。懷を探りて往篇を授く。

【大意】我れ盈滿を辭して俸祿を思はず。病を以て官を退き身の老ゆるを待たず。偶然張良邴漢二賢と其志を同うし、茲に始めて會稽の舊園に歸隱するを得たり。高祖皇帝嘗て我を眷顧し給へるにより、高臥の素志を果す能はず。乃ち出で

矢の如く、邦に道なきも矢の如し」とあり。事は兩つながら矢の如きの直に躓くといふ意。

【一七】三避。史記に「孫叔敖楚に相たり、三たび相を去りて悔いず、其の己が罪にあらざるを知ればなり」とあり。三避は三黜なり。

【一八】盛明。太祖（文帝）を指す。氛昏は徐羨之等をいふ。盪は掃なり。

【一九】貞休。正美の德、太祖を指す。屯邅は國難をいふ。

【二〇】殊方。異域といふが如し。貸は恩惠なり。

【二一】微物。己が身を謙していふ。采甄は採錄といふがごとし。

【二二】操。守操なり、前文の徵倚をいふ。

【二三】板纏。牽引といふが如し。太祖の徵召に應じたるをいふ。

【二四】往。往時なり。

【二五】款然。よろこぶこと。

【二六】曩基。以前に築きし基礎。

【二七】故池。もと穿ちし池。

【二八】舊行。もとの行列。

【二九】壤石。土石なり。遠延は遠方より引き來ること。

【三〇】牽。俗務なり。

【三一】夫子。顏范を指す。情素は情實なり。

仕ふ。時に徐羨之等亂を構へ廬陵王以下の賢良を殺す。我亦遷されて永嘉太守となれり。恰も賈誼の長沙に謫せられて窮厄し、司馬相如の臨卭に往きて願の遂げられざりしが如し。かくて二君（顏范）と別れ舊來の因縁を絕ち、山川の危難を冒して任に赴く。その艱難たるや流沫、石林の比にあらず。且つ永嘉の地たるや、安居の處にあらず。故に日夜歸臥を思はざるはなし、我れ既に世の治亂に隨つて直道を變せざるを以て遷さる。遷さると雖も、己の罪にあらざるを以て敢て悔いず。高山に登り、飛泉を掬みて、山水の間に放にす。太祖皇帝盛明の德を以て徐羨之等を誅し、正美の道を以て國難を安んじ給ふや、四方遠國皆その恩惠を蒙り、我亦採錄せられて祕書監に任ぜらる。我れ恩に感ずること深くして、歸隱の操守固からず。資質弱きを以て牽引せられ易し。故に徵召に應じて官に就きぬ。今始めて歸隱の志を全うし、官を辭して舊園に歸り、往時を語りて欣び、舊居の基池また穿築を加へず、果樹舊の如く竝び、土石遠引を勞せず。この園は休憩の地にあらずと雖も、永日の閑を消するに足る。攝生息身以て俗務の拘牽を避けんと欲す。二君は能く我が眞情を知れり。故に己の誠心を吐露して此詩を寄す。

(二)臨海嶠に登り初めて(三)彊中を發して作

【二】臨海。郡の名。嶠は山頂なり。

る。從弟惠連に與ふ。(三)羊何に見して共に之に和すべからしむ

謝靈運

(四)杪秋遠山を尋ぬ。山遠くして行くに近からず。子と(五)山阿に別れ、酸を含んで(六)修畛に赴く。中流袂判に就き、去らんと欲して情忍びず。顧望して脰未だ悁れざるに、(七)汀曲舟已に隱る。汀に隱れて望舟を絶ち、棹を鶩せて驚流を逐ふ。一生の歡を抑へて、千里の游に弁奔せんと欲す。日落ちて(八)棲薄に當り、纜を繫いで江樓に臨む。豈惟だ夕情の斂まるのみならんや、爾と共に(九)淹留せんことを憶ふ。昔時の歡に淹留して、復た今日の歎を增す。茲情已に慮を分つ。況んや乃ち(一〇)悲端に協へるをや。秋泉北澗に鳴り、哀猿南巒に響く。(一一)戚戚たる新別の心、(一二)悽悽として久念攢る。攢念別心を攻む。旦に(一三)靑谿の陰を發し、暝に(一四)剡中に投じて宿し、明に(一五)天姥の岑に登る。高高として雲霓に入る、還期那ぞ尋ぬべき。儻し(一六)浮丘公に遇はば、長く子が(一七)徽音を絕たん。

【二】疆中。地名。
【三】羊何。羊は羊璿之、何は何長瑜。
【四】杪秋。晩秋なり。
【五】山阿。山隈なり。
【六】修畛。長徑なり。
【七】汀曲。汀は水岸なり。
【八】棲薄。籬なり。
【九】淹留。久しく留ること。
【一〇】悲端。秋をいふ。
【一一】戚戚。憂ふる貌。
【一二】悽悽。悲傷の貌。
【一三】靑谿。溪の名。
【一四】剡中。剡は縣の名。
【一五】天姥。山の名。剡縣に在り。
【一六】浮丘公。古の仙人の名。
【一七】徽音。よき音信。

【大意】晩秋に方りて遠山を尋ね登れば、道遠くして行けども盡きず。汝と山曲に分れ、悲を含み長徑を取りて進む。中流に袂を分つとき、我れ離情に忍びず、回顧して汝を見、頸未だ疲るるに及ばずして吾が舟既に汀曲に隱れぬ。舟既に汀曲に隱れて復た汝を望むべからず。乃ち驚流を破りて舟を進む。因つて一生の歡を止めて汝と共に千里の遊をなさんことを思ふ。落日簾帷を射るころ、江樓に臨んで纜を繫ぐ。夕情斂まれりと雖も、尚ほ汝と共に留滯せんことを思ふ。昔歡を追念して、更に悲嘆を增し、以て思慮を分つ。況んや悲秋の時に遇へるをや。澗泉の響、山猿の聲を聞きて、新別舊念交〻心に攢まり、攢念更に又別離の心を攻激す。旦に青谿を發して夕に剡縣に宿し、翌日天姥山に登る。高く雲を凌いで登り、歸期豫め期すべからず。山中若し仙人に遇はば永く汝と音信を絶つに至らん。

從弟惠連に酬ゆ　　謝靈運

瘵に寢ねて（一）人徒を謝し、迹を滅して雲峯に入る。（二）巖壑耳目を寓せ、（三）歡愛音容を隔つ。永く賞心の望を絕ち、長く與に同うするなきを懷ふ。（四）末路令弟に値ひ、顏を開いて心胷を披く。其一

【一】人徒。衆人なり。
【二】巖壑。山水なり。
【三】歡愛。惠連を指す。音容は聲と姿。
【四】末路。晩年なり。令弟は惠連を指す。

【大意】我れ病に臥して交遊を絶ち、深く山峯の中に隱れ、心目を山水の間に放にし、汝と音容を隔つ。敢て我が心を識る者あるを望むなく、又共に事を同うする者なきを思へり。晩年汝に遇ひ、始めて我が心胸を開くを得たり。

心胷既に云に披けり、意得て咸く斯に在り。澗を淩いで我が室を尋ね、（五）帙を散じて知る所を問ふ。夕に曉月の流るるを慮り、朝に（六）曛日の馳するを忌む。（七）悟對厭歇なきも、聚散分離を成す。其二

【大意】既に汝に遇ひて我が心胸を開き、始めて得意揚揚たるを得たり。汝來りて我が室を訪へば、書帙を開きて互に知る所を問ひ、欣然として相樂み、日月の流れ去るを畏る。相對晤して厭ふことなきも、人理に聚散あり、遂に分離するに至りぬ。

分離して（八）西川に別れ、景を廻らして（九）東山に歸る。別時悲已に甚し、別後情更に延く。傾想して（一〇）嘉音を遲つ。果して（一一）濟江の篇を枉ぐ。風波の事に（一二）辛勤し、洲渚の言に（一三）款曲す。其三

【大意】汝と西川に別れて、我は東山に歸りぬ。別るる時、悲已に甚しかりしも、別後に至りて

【五】帙。書帙なり。
【六】曛日。夕日なり。
【七】悟對。悟一本に晤に作る。相對して語ること。厭歇はいとひやむること。
【八】西川。地名。
【九】東山。靈運の居る處。
【一〇】嘉音。よきおとづれ。
【一一】濟江の篇。惠連の靈運に贈りし詩なり。枉とは惠むといふが如し。
【一二】辛勤。辛苦なり。
【一三】款曲。委曲といふが如し。ねんごろなること。

更に深きを加へ、偏に心を傾けて汝の音信を待ちしが、汝果して濟江の詩を寄せ來る。其詩を讀むに、風波を渡りて苦勞せし事を委曲に叙述せり。

洲渚既に時を淹うす。風波子行くこと遲し。務めて（一四）華京の想に協ふ。詎ぞ空谷の期を存せん。猶ほ復た（一五）來章を惠むも、祇に余が思を攪すに足る。黨若（一六）歸言を果さば、共に暮春の時を陶まん。其四

【大意】汝洲渚の際に留滯し、風波に阻てられて行く能はず。然も遊宦の念急にして復た意を山谷に存せず。我に惠むの詩も、誰我が心を亂すに足るのみ。若し別時の約を果して歸り來らば、當に共に暮春の時を樂まん。

暮春未だ交ばずと雖も、仲春善く（一七）遊遨せん。山桃（一八）紅萼を發き、野蕨（一九）紫苞を漸め。（二〇）嚶鳴已に悅豫するも、幽居して猶ほ（二一）鬱陶たり。夢寐に歸舟を佇ちて、我が吝と勞とを釋かん。其五

【大意】未だ暮春の好氣節に及ばずとも、仲春ならば亦よく遊樂を共にせん。今や山桃紅花を著け野蕨紫芽を長じ、鳥啼いて樂めども、我れ獨り汝を思ひて哀み、夢寐にも汝の歸を待てり。汝來ら

【一四】華京。京華なり。京師なり。
【一五】來章。贈詩なり。
【一六】歸言。惠連別る時。歸隱せんとの言ありしなり。
【一七】遊遨。あそぶこと。
【一八】紅萼。紅花なり。
【一九】紫苞。紫色の叢なり。
【二〇】嚶鳴。鳥の啼くこと。悅豫はよろこぶこと。
【二一】鬱陶。憂思するなり。

ば始めて我が吝恨と憂勞とを解くを得ん。

(一)王太常に贈る

顏延年

(二)玉水方流を記し、(三)琁源圓折を載す。寶を蓄へて每に聲希なり。祕すと雖も猶ほ彰徹す。龍を聆いて(四)九淵を睽、鳳を聞いて(五)丹穴を窺ふ。歷聽するに豈多士ならんや、唯然も(六)時哲を覩る。文を舒べて(七)國華を廣め、言を敷いて(八)朝列を遠くす。德輝(九)邦懋を灼し、芳風(一〇)鄉耋に被る。(一一)側きと幽人の居に同じく、(一二)郊扉常に晝閉ぢたり。(一三)林閭時に晏く開き、亟々(一四)長者の轍を廻らす。庭昏くして野陰を見、山明にして松雪を望む。靜に惟ひて(一五)羣化を浹くし、(一六)徂生窮節に入る。豫の往くは誠に歡の歇ればなり、悲の來るは樂の閡れるにあらず。

【一】王太常。太常は官名。王僧達なり。
【二】玉水。尸子に「凡そ水は其方折なる者には玉あり、其圓折なる者には珠あり」とあり。
【三】琁源。琁は珠玉なり。圓折は圓く曲ること。
【四】九淵。深き淵。莊子に「千金の珠は必ず九重の淵、驪龍の頷下に在り」とあり。
【五】丹穴。山の名、鳳凰其中より出づ。
【六】時哲。現時の賢人。王僧達を指す。
【七】國華。國の光華。
【八】朝列。列一本に烈に作る。烈は業なり。
【九】邦懋。國の美華。
【一〇】鄉耋。鄉里の老人。顏延年自ら謂ふ。王顏ともに瑯琊臨沂の人。
【一一】側。陋なり。
【一二】郊扉。林外の門扉。
【一三】林閭。野外の門。
【一四】長者。尊貴の人。
【一五】羣化。萬物の變化。
【一六】徂生。徂は往なり。生命の過ぎ往くこと。窮節は衰老

美を（一七）屬して繁翰を謝し、遙懷（一八）短札に具す。

なり。【一七】屬。詩に綴ること。繁翰は長文句。謝は去なり。【一八】短札。短き手紙。

【大意】水方流すれば玉あり、圓折すれば珠あり。水の珠玉を蓄ふるや、其聲を靜め、珠玉あるを祕すと雖も、其光明必ず上に通徹す。（王太常の赫赫の名なきも明德あるに喩ふ）龍嘯を聽いては深淵を視、鳳鳴を聞けば丹穴を窺ふ。（珠玉あるを知りて人皆視聽を峙つるを謂ふ）歷聽すれども天下に秀士多からず。唯足下を以て現時の賢哲となすべきのみ。足下よく其文章を舒べ、其言語を布き、以て國朝の美を廣め、德輝以て邦國の美を盛にし、又芳風を垂れて鄉老に加ふ。（王太常の顏延年を訪問せるをいふ）我が廬は側陋にして幽人の居に同じく、門扉晝尙ほ閉ぢ、林門晚く開くと雖も、數ふ貴人（王太常を指す）の駕を迎ふ。我れ野陰松雪を望み、靜に物理を考察して、萬物變化の理に及び、我が生漸く老境に入れるを悲む。逸樂の去れるは歡の盡きたればなり。悲の來るは音樂の終れるが爲ならず。（淮南子に「樂を奏して喜び、曲終りて悲む」とあり）今君の美事を綴りて詩章となし、敢て長句を累ぬるを避け、悠遠の情を短札の中に籠め以て呈す。

夏夜（一）從兄散騎（二）車長沙に呈す

顏延年

炎天方に(三)埃鬱、暑晏けて塵紛を闋む。獨靜(四)偶坐を闕き、堂に臨んで(五)星分に對す。側に聽く風の木に薄るを、遙に睇る月の雲に開くを。夜蟬夏に當りて急に、(六)陰蟲秋に先ちて聞ゆ。歳候初めて半を過ぐ。(七)荃蕙豈久しく芬しからんや。(八)屏居して物變を惻み、類を慕ひて(九)情殷を抱く。(一〇)九逝思を空うするにあらず、(一一)七襄文を成すなし。

【大意】炎熱の時、塵氛煩鬱し、晩に至りて乃ち息む。堂上に獨坐して星を眺め、風の木を拂ふを聽き、月の雲を逗るるを見、蟬聲時を得て急に、蛩秋に先ちて鳴くを聞く。今や既に一歳の半を過ぎたり。香草も豈久しく其芬を保つを得んや。我れ隱居して萬物の變化するを傷み、朋友を慕ひて深憂を抱く。我が魂一夕に九回すと雖も、此の思を空うする能はず、恨七反すと雖も、文章を成す能はず。

【一】從兄散騎。散騎は官名。延年の從兄顏敬宗なり。
【二】車長沙。字は仲遠。
【三】埃鬱。埃は當に焕に作るべし。焕は熱なり。
【四】偶坐。人と相對して坐すること。
【五】星分。星の分布すること。
【六】陰蟲。蛩なり。
【七】荃蕙。香草の名。
【八】屏居。隱居なり。
【九】情殷。殷は憂なり。
【一〇】九逝。楚辭に「魂一夕にして九たび逝く」とあり。
【一一】七襄。七反といふが如し。韓詩に「跂たる彼の織女、終日七襄す。則ち七襄すと雖、報章を成さず」とあり。

(二)東宮に直し(三)鄭尚書に答ふ　顏延年

皇居（三）環極に體り、（四）險を設けて天工を祗む。（五）兩闈通軌を阻て、（六）對禁清風を限る。跂てて予東館に旅り、（七）徒歌して（八）南墉に屬す。（九）寢興鬱として已むなし。起つて（一〇）辰漢の中するを觀る。（一一）流雲靑闕に藹く、（一二）皓月丹宮を鑒す。（一三）踟蹰して淸防密に、（一四）徙倚して（一五）恆漏窮る。（一六）君子芳訊を吐き、物に感じて余が衷を惻ましむ。惜むらくは（一七）丘園の秀なく、彼の（一八）高松に景行す。知言（一九）誠貫あるも、（二〇）美價克く充り難し。何を以てか（二一）嘉貺を銘せん、言に（二二）絲と桐とを樹ゑん。

【大意】天子の宮居は衆星の北極星を環るに象り、禁衛の士ありて之を護る。故に足下の居る處と我の宿直せる處とは、通路絶えて、

【一】東宮。太子の宮。直は宿直なり。延年時に太子舍人たり。
【二】鄭尚書。尚書は官名。鄭鮮之、字は道子、都官尚書たり。
【三】環極。衆星の北極星を環ること。
【四】險。禁衛をいふ。天工は天子を守衛する官。
【五】兩闈。皇居及び太子の宮。通軌は通路なり。
【六】對禁。二宮禁中に在り故に對禁といふ。清風は鄭尚書に喩ふ。
【七】徒歌。樂器に合せずして歌ふこと。
【八】南墉。墉は墻なり。尚書省は南に在り。故にいふ。屬は意を注ぐこと。
【九】寢興。詩經に「ここに君子を念ひ、載ち寢ね載ち興く」とあり。鬱は心の舒散せざる貌。
【一〇】辰漢。星の名。
【一一】流雲。行雲なり。
【一二】皓月。明月なり。
【一三】踟蹰。徘徊なり。清防は屛風なり。
【一四】徙倚。徘徊なり。
【一五】恆漏。長き時刻。
【一六】君子、鄭尚書を指す。芳訊は鄭の贈りし詩をいふ。
【一七】丘園の秀。園中の美草。
【一八】高松。節を守りて移らざるに喩ふ。鄭尚書を指す。景行は倣ふ意なり。
【一九】誠貫。貫は條理なり。
【二〇】美價。鄭の贈りし詩をいふ。
【二一】嘉貺。結構なる賜。
【二二】絲桐。琴瑟なり。

足下と相見る能はず。ただ東宮に在りて南墉を思ふのみ。或は起き或は寢ねて心息むべからず、起つて大辰天河の天に中するを見る。雲行き月輝きて宮殿を繞り、我れ徘徊して覺えず曉に至りぬ。足下嘗て詩を我に賜ふ。我れ之を見て感慨を增す。我に丘園の美なし、ただ足下の高節を仰ぐのみ。足下の詩に知言誠實あるも、我之に答ふる能はず。ただ之を琴瑟に播し以て好意に答へんのみ。

(一)謝監靈運に和す　顏延年

(二)弱植にして端操を慕ひ、(三)窘步して先迷を懼る。立つこと寡くして方を擇ぶにあらず、意を刻んで(四)窮棲に藉る。伊れ昔多幸に遘ひ、筆を秉りて(五)兩閨に侍す。(六)丹雘の施に慙づと雖も、未だ(七)玄素の睽けるを謂はず。徒に(八)良時の詖けるに遭ひ、王道奄ち(九)昏霾す。(一〇)人神幽明絕え。(一一)朋好雲雨乖ふ。(一二)屈を汀洲の浦に弔し、(一三)帝に蒼山の蹊に謁す。巖に倚りて(一四)緒

【一】謝監。謝靈運・時に祕書監たり。
【二】弱植。植は志なり。端操は端直なる操守。
【三】窘步。急步なり。
【四】窮棲。山居なり。
【五】兩閨。二宮なり。宋の文帝及び太子に事へしこと。
【六】丹雘。君恩に喩ふ。
【七】玄素。始は白くして後に黑くなること。
【八】良時。明時なり。
【九】昏霾。世の亂るるに喩ふ。
【一〇】人神云云。世亂れて祭祀行はれず、人と神と隔れること。
【一一】朋好。朋友なり。
【一二】屈。楚の屈原。忠にして逐はれ自ら水に投じて死す。
【一三】帝。舜なり、舜蒼梧の野に葬る。
【一四】緒風。續きて絕えざる風。

風を聽き、林を攀ぢて（一五）留荑を結ぶ。跂てて予（一六）衡嶠を間つ。曷の月か（一七）秦稽を瞻ん。（一八）皇聖天德を昭にし、豐澤（一九）沈泥を振ふ。惜むらくは（二〇）雀雉の化なし。何を用てか海淮に充てん。（二一）國を去りて故里に還り、幽門（二二）蓬藜を樹ゑ、茨を采りて（二三）昔宇を葺き、棘を翦りて（二四）舊畦を開く。物謝りて時既に晏れ、年往きて志偕ならず。（二五）仁に親んで情昵を敷き、（二六）興玩して辭悽を究む。（二七）芬馥蘭若を歇し、（二八）清越琳珪を奪ふ。言を盡すは報章にあらず、聊か用て所懷を布く。

【大意】われ弱志にして端直の操を慕ひ、急步して之を追求するも、常に其正道を誤れるを恐れ、身を立つるに拙にして、方正の道を擇んで世を佐くる能はず。志意を刻んで幽棲を假り、以て其節を成す。昔多幸に遇ひ、筆を秉りて二宮に事ふ。固より高恩に報ゆるに足らずと雖も、始終操守を變せざるは、私に自ら信ずる所なり。明時忽ち傾き、王道既に亂れ、（宋の武帝の崩ずるや少帝位を嗣ぎ遊戲度なし）祭祀行はれずして人神相隔り、朋友離散すること雲雨の如し。

【一五】留荑。香草なり。
【一六】衡嶠。衡山の巓。
【一七】秦稽。會稽山なり。靈運此山に隱居す。
【一八】皇聖。宋の文帝を指す。
【一九】沈泥。顏延年自ら喩ふ。
【二〇】雀雉の化。國語に「雀海に入りて蛤となり、雉淮に入りて蜃となる」とあり。
【二一】國。國都なり。
【二二】蓬藜。草の名。
【二三】昔宇。昔の家。
【二四】舊畦。舊田なり。
【二五】仁。仁者なり。暗に己をいふ。情昵は親近の情。
【二六】興玩。悅愛なり。辭悽は悽切なる辭。
【二七】芬馥。芬香なり。蘭若は香草。
【二八】清越。玉聲の清く揚ること。琳珪は美玉。

我れ亦始安郡の太守に遷さる。因つて屈原を洲渚の間に弔ひ、帝舜に蒼梧の野に謁し、緒風を聽いて心を傷ましめ、香草を結んで遠人に贈る。我れ既に衡山を隔てて遠く始安に在り、何れの時か會稽山（靈運此山中に在り）を見るを得ん。文帝立ちて天德を明にし、恩澤を敷く。我れ徵されて中書侍郎となりしも、德の以て人を化するなし。何ぞ其職に當るを得ん。因つて國都を去りて鄉里に還り、幽居を結んで隱棲す。萬物退落して、吾が年既に老ゆるも志遂ぐる能はず。足下我を親昵し、詩を寄せて悽切の辭を述べらる。其詩芬芳淸揚、以て美玉香草の韻氣を奪ふに足る。我れ今言を盡すは、敢て詩章に報ゆるにあらず、聊か我が心中を述ぶるのみ。

顏延年に答ふ　（一）王僧達

（二）長卿華陽に冠たり、（三）仲連海陰に擅なり。

（四）珪璋既に文府、（五）精理亦道心。（六）君子高駕を聳げ、塵軌實に林をなす。（七）崇情遠迹に符ひ、淸氣（八）素襟に溢る。（九）結游して年義を略し、篤顧して（一〇）浮沈を棄つ。（一一）寒榮共に偃曝し、（一二）春

【一】王僧達。宋の瑯邪の人、始興王の行軍參軍となり、稍く遷りて中書令に至る。
【二】長卿。漢の司馬相如、字は長卿。華陽は益州の縣名。
【三】仲連。魯仲連なり。齊人なり。
【四】珪璋。玉なり、長卿に喩ふ。文府は文章の林府。
【五】精理。精微の理。魯仲連をいふ。
【六】君子。顏延年を指す。
【七】崇情。高尙なる心情。遠迹は古人の跡。
【八】素襟。白き襟、延年の心に喩ふ。
【九】結游。交を結ぶこと。年義は年齡及び禮義。
【一〇】浮沈。盛衰なり。
【一一】寒榮。榮は屋の南簷。偃

醞時に獻斟す。聿に來りて（一三）歲序暄かなり。輕雲（一四）東岑を出づ。（一五）麥隴秀色多く、楊園好音を流す。此の（一六）乘日の暇を歡び、忽ち（一七）逝景の侵すを忘る。幽衷何を用てか慰めん、（一八）翰墨久しく謠吟す。棲鳳條をなし難く、（一九）淑貺臨む所にあらず。誦して以て永く周旋し、匣にして以て（二〇）兼金に代へん。

【大意】昔司馬相如は文章の美を以て益州に冠たり、魯仲連は道理の精を以て海畔に冠たり。足下の高風亦實に此二賢と羣を成すべく、高情古人の迹に合ひ、淸氣自ら本心に盈つ。我れ足下と交を結んで、年齡と禮義とを忘れ、足下我を眷顧すること篤くして、身の盛衰を顧みず。冬は共に背を日に曝し、春は杯を擧げて共に酒を酌む。今や春暖の好季にして、雲東嶺を出で麥初めて秀で禽鳥柳に鳴く。此光景に歡遊すれば、歲月の我を侵すを忘る。我れ常に足下の文章を吟誦し、以て我が心を安んず。足下の文章は鳳の如し。然も我は梧桐にあらず。（鳳は梧桐にあらざれば棲まず）故に鳳を待つの枝となり難し。賜ふ所の詩亦我の能く當る所にあらず。ただ常に諷誦し之を匣中に珍藏し以て好金に代へんとす。

・曝は臥して背を日光にさらすこと。
【一二】春醞。春酒なり。獻斟は杯を捧げて共に酌むこと。
【一三】歲序。氣候なり。
【一四】東岑。東方の山。
【一五】麥隴。麥畠。
【一六】乘日。莊子に「日の車に乘りて襄城の野に遊ぶ」とあり。
【一七】逝景。歲月なり。
【一八】翰墨。文章なり。
【一九】淑貺。善き賜。
【二〇】兼金。好金なり。

(一)郡内の高齋に閑坐す、(二)呂法曹に答ふ　謝玄暉

結構何ぞ(三)迢遰たる、(四)曠望高深を極む。窗中(五)遠岫を列ね、庭際(六)喬林俯す。日出で衆鳥散じ、山暝くして孤猨吟ず。已に池上の酌あり、復た此れ風中の琴。(七)君子の度なきにあらずんば、孰が爲にか(八)寸心を勞せん。惠ありて能く我を好し、問るに(九)瑤華の音を以てす。(一〇)金門の歩を遺れて、(一一)玉山の岑に就くを見るが若し。

【大意】高齋の結構高峻にして、四方の江山悉く一望の中に在り。朝には衆鳥の散ずるを見、夕には孤猿の啼くを聞き、池邊に酒を酌み、風中に琴を彈じ、以て自ら慰むべし。然も足下の美測るべからず。故に相思ふこと最も切なり。足下我に贈るに好詩を以てせらる。之を讀めば官を棄てて我が山居を訪へるに會せるが如きを覺ゆ。

【一】郡内。郡は宣城郡なり。高齋は高樓の室。
【二】呂法曹。呂僧珍、齊王の法曹なり。
【三】迢遰。高き貌。
【四】曠望。遠望なり。高深は江山をいふ。
【五】遠岫。遠山なり。
【六】喬林。喬木の林。
【七】君子。呂法曹を指す。度なしとは測るべからざるをいふ。
【八】寸心。玄暉の心。
【九】瑤華の音。瑤華は玉なり。呂法曹の贈れる詩をいふ。
【一〇】金門。金馬門、法曹の官署。
【一一】玉山。仙人西王母の居る處。玄暉の高齋に喩ふ。

(一)郡に在りて病に臥す。(二)沈尚書に呈す　　謝玄暉

(三)淮陽股肱の守、高臥して猶ほ(四)茲に在り。況んや復た(五)南山の曲をや。何ぞ幽棲の時に異らん。(六)連陰盛農の節、(七)簦笠東菑に聚る。高閣常に晝掩ひ、荒階(八)諍辭少し。(九)珍簟夏室に清く、輕扇(一〇)涼颸を動かす。(一一)嘉魴聊か薦むべく、(一二)綠蟻方に獨り持す。夏李(一三)朱實を沈め、(一四)秋藕輕絲を折る。(一五)良辰竟に何れの許ぞ、(一六)夙昔佳期を夢む。(一七)坐嘯徒に積るべし。邦を爲むること歳已に(一八)朞なり。(一九)絃歌終に取るなし。(二〇)机を撫して自ら嗤はしむ。

【大意】昔淮陽の太守汲黯あり、一室に臥して尚ほ能く淮陽を治めたり。況んや此の宣城

【一】郡。宣城郡なり。
【二】沈尚書。尚書は官名。沈約をいふ。
【三】淮陽。地名。漢の淮陽の太守汲黯上書して病と稱す、帝曰く、淮陽は吾が股肱の地なり、卿我が爲に臥して之を治めよと。
【四】茲。淮陽を指す。
【五】南山の曲。宣城郡をいふ。
【六】連陰。久雨なり。
【七】簦笠。笠なり。東菑は東方の田。
【八】諍辭。訟なり。
【九】珍簟。竹の席。
【一〇】涼颸。涼風なり。
【一一】嘉魴。嘉は良きこと。魴は魚の名。
【一二】綠蟻。酒なり。
【一三】朱實。赤き果實。沈は水中に浸すこと。
【一四】秋藕。蓮根なり。
【一五】良辰。よき時、沈約と面會する時をいふ。
【一六】夙昔。嘗て。佳期は沈約と會合の時。
【一七】坐嘯。漢人語をなして曰く、「南陽の太守は岑公孝、弘農の成瑨ただ坐嘯す」と。
【一八】朞。滿一年をいふ。
【一九】絃歌。子游武城の宰となり、絃歌を以て民を化す。
【二〇】机。坐する時よりかかる具。

郡の如きは、之を治むるの易易たること猶ほ幽棲の時に異らず。（玄暉は宣城太守なり。）今や農耕の盛時なれば、農夫は蒻笠を載きて東田に聚り、太守は高閣を掩ひ珍簟に坐し、輕扇を弄して酒肴に厭き、李實を水中に浸し、蓮根を折りて食ふ。涼味掬すべし。而して庭に諍訟なし。ただ足下に相會せんと欲するも能はず、夢裡に相見るのみ。常に坐嘯を事とし、彼の子游の如き絃歌の化なく、空しく既に一年を經たり。机を撫でて我をして自ら輕笑せしむるのみ。

暫く㈠下都に使し夜㈡新林を發し㈢京邑に至り、㈣西府の同僚に贈る

謝玄暉

大江日夜流れ、客心悲未だ央きず。徒に㈤關山の近きを念ひ、終に㈥返路の長きを知る。㈦秋河曙に耿耿たり、寒渚夜

【一】下都。下の字疑ふらくは還に作るべし、都は丹陽を指す、卽ち金陵なり。

【二】新林。浦の名。白鷺洲の南に在り。

【三】京邑。卽ち金陵なり。

【四】西府。初め玄暉、隋王子隆の文學たり、子隆荊州に在り、辭賦を好み屢僚友を集む、玄暉文才を以て尤も賞愛せらる、長史王秀之之を妬み、密に以て啓聞す、武帝玄暉に都に還るべしと敕す。玄暉道中此詩を作り以て西府に寄す、西府は卽ち荊州なる隋王府なり。

【五】關山。關塞を設けたる山。關山近しとは都を距ること近きをいふ。

【六】返路。歸路なり、返路長しとは西府を距ること遠きをいふ。

【七】秋河。天漢卽ちアマノガハ。耿耿は小明の貌。

（八）蒼蒼たり。頸を引いて（九）京室を見れば、（一〇）宮雉正に相望み、（一一）金波鳷鵲に麗き、（一二）玉繩建章に低る。車を（一三）鼎門の外に驅り、（一四）昭丘の陽を見んことを思ふ。（一五）馳暉接ぐべからず、何ぞ況んや（一六）兩郷を隔つるをや。風雲に鳥路あるも、（一七）江漢限られて梁なし。常に恐る（一八）鷹隼撃ち、（一九）時菊嚴霜に委せんことを。言を（二〇）罻羅の者に寄す、（二一）寥廓已に高く翔れりと。

【大意】大江の水日夜流れて還らず、吾も亦此水と同じく再び西府に還るべからざるを思へば、客心殊に悲を増す。歩歩金陵に近づくは卽ち歩歩西府に遠ざかる所以なり。仰げば天河の曉に耿耿として明なるあり、俯せば蒹葭の夕に蒼蒼として茂るあり。見る所悉く悲秋の色ならざるはなし。頸を延ばして金陵を望めば、宮牆正に相對し、月色鳷鵲館を照し、星光建章宮に低るるを見る。車を都門の外に驅りて、荊州を望まんとすれば、日は箭の如く馳せて追ふべからず。況んや山川遠く兩地を隔つるをや。風雲には鳥の飛ぶべき道あれども、江

【八】蒼蒼。青黒き貌。
【九】京室。金陵の都。
【一〇】宮雉。宮牆なり。
【一一】金波。月光なり。鳷鵲は館の名。
【一二】玉繩。星の名。建章は宮の名。
【一三】鼎門。金陵の門。
【一四】昭丘。楚の昭王の陵墓、荊州に在り、ここは隋王府に喩ふ。
【一五】馳暉。日なり。
【一六】兩郷。金陵と荊州。
【一七】江漢。楊子江と漢水。
【一八】鷹隼。はやぶさ。讒人に喩ふ。秋殺の氣至れば鷹隼擊搏す。
【一九】時菊。秋菊なり。玄暉自ら喩ふ。委は萎むこと。
【二〇】罻羅。鳥を捕ふる網。讒人に喩ふ。
【二一】寥廓。天空なり。

漢には人の渡るべき橋なきを如何せん。我れ常に鷹隼の搏擊を逞うし、菊花の嚴霜に萎まんことを恐る。(讒邪の臣勢を得て、良臣の害せらるるに喩ふ)因つて網を以て鳥を捕へんとする者(讒邪の人に喩ふ)に寄語す。鳥は既に天空高く飛び去りたれば、復た捕ふべくもあらずと。(己遠く荊州を去りたれば、復た讒せんやうなかるべしとの意)

(一)王晉安に酬ゆ　謝玄暉

(二)梢梢として枝早く勁く、(三)塗塗として露晩く晞く。(四)南中に橘柚榮ゆ。寧んぞ(五)鴻鴈の飛ぶを知らんや。霧を拂つて(六)青閣に朝し、日旰けて(七)彤闈に坐す。悵望すれば(八)一塗阻り、(九)參差として百慮依る。(一〇)春草秋更に綠なるも、(一一)公子未だ西に歸らず。誰か能く(一二)京洛に久うせんや、(一三)緇塵素衣を染む。

【大意】晉安地方は暖國なれば、秋冬に至る

【一】王晉安。晉安の郡守王德元なり。晉安は唐の泉州、後の福州なり。
【二】梢梢。樹枝勁强にして葉なき貌。
【三】塗塗。露の厚き貌。
【四】南中。南方の地方、晉安をいふ。
【五】鴻鴈。鴈は南は衡山に至りて又北に還り、衡山以南に行くことなし。故に晉安地方にては鴈の飛ぶを知らず。
【六】青閣。朝堂なり。
【七】彤闈。宮門なり、尙書省なり。時に玄暉は尙書吏部郞たり。
【八】一塗。塗は途なり。晉安に行くべき道。
【九】參差。往來する貌。
【一〇】春草。楚辭に「王孫遊んで歸らず、春草生じて萋萋たり」とあり。
【一一】公子。王德元を指す。晉安は東に在り。故に都に歸るを西に歸るといふ。
【一二】京洛。都。
【一三】緇塵。黑き塵。素衣は白衣なり。

も樹枝勁く露繁かるべく、橘柚の茂るを見て、鴻雁の飛ぶを知らざるべし。我れ夙に朝堂に朝し、日旰けて尚書省に坐し、遙に足下を思へども、道隔りて通ぜず、百感交〻心に攢まるのみ。此地は春草秋に至りて更に綠を加へたれば、足下宜しく早く西歸せらるべし。然し都門は塵紛繁くして久しく留るべからざれば、行〻將に相攜へて幽棲を共にせん。

(一)內兄希叔に奉答す　　(二)陸韓卿

嘉惠を(三)帝子に承け、(四)躧履して(五)王孫に奉ず。
(六)金馬の署を叨にし、又(七)銅龍の門を點す。
(八)平津の邸に出入し、一たび(九)孟嘗の尊を見る。
(一〇)歸來桑柘に翳れ、朝夕(一一)涼溫を異にす。其一

【大意】 われ嘗て竟陵王の惠を受けて秀才に擧げられ、衣冠して之に奉侍す。後遷りて金馬銅龍の門に事へ、更に太傅王晏の拔擢を

【一】內兄。妻の兄。希叔は顧昐、字は希叔。邵陵王國の常侍たり。
【二】陸韓卿。陸厥、字は韓卿、齊の吳の人なり、竟陵王秀才に擧ぐ、後王晏太傅の主簿たり。
【三】帝子。竟陵王を指す。
【四】躧履。步履なり、衣冠といふが如し。
【五】王孫。竟陵王を指す。奉は侍なり。
【六】金馬の署。官署の名。
【七】銅龍。太子の門の名。
【八】平津。漢の公孫弘、平津侯に封ぜられ、東閤を開いて士を待つ。太傅王晏に喩ふ。
【九】孟嘗。齊の公子孟嘗君、賓客を好む。太傅王晏に喩ふ。
【一〇】歸來。官を罷めて私家に歸りしこと。桑柘は木の名。
【一一】涼溫。貴賤といふが如し。

蒙り、其邸に出入したるも、官を罷めて茅屋に歸り、貴賤忽ち地を易ふるに至れり。

(二二)殂落固より云に是なり。(二三)寂蔑として終に斯の如し。門を杜ぢて(二四)三徑を淸め、(二五)檻に坐して曲池に臨めば、(二六)鳧鵠儔侶に嘯き、(二七)荷芰始めて參差たり。(二八)田田たる葉なしと雖も、爾と(二九)漣漪に汎ばん。其二

【大意】我の凋衰せるは固より當然なり。故に寂寞として此に隱居し、門を閉ぢて庭徑を淨め、欄干に憑りて曲池に臨めば、水禽友を呼び、水草葉を延べ、其景また賞するに足る。其葉未だ繁らずと雖も、足下と舟を其間に泛べて樂まんと欲す。

(三〇)春華と秋實と、庶子と家臣と、(三一)王門の貴き所以は、古より(三二)俊民多ければなり。(三三)離宮杞梓を收め、(三四)華屋徐陳に富み、(三五)上林苑に平

【二二】殂落。凋落なり。
【二三】寂蔑。寂寞なり。
【二四】三徑。蔣詡、字は元卿、舍中に三徑あり。
【二五】檻。欄干。
【二六】鳧鵠。水鳥の名。儔侶は同類の友。
【二七】荷芰。蓮及び菱。共に水草の名。參差は葉の齊一ならざること。
【二八】田田。蓮葉の貌。
【二九】漣漪。さざなみ。
【三〇】春華。魏志に「邢顒、平原侯植の家丞となる、顒防閑するに禮を以てし屈撓する所なし、是に由りて庶子劉楨と合はず、書して植を諫めて曰く、家丞邢顒は北土の彥なり、而して植禮遇殊特なるも、顒反つて疎簡なり、私に懼る觀る者將に君侯不肖を習近し賢を禮すること足らず、庶子の春華を采り、家丞の秋實を忘ると謂はんとするを」とあり。
【三一】王門。邵陵王の家。
【三二】俊民。賢臣なり。
【三三】離宮。太子の宮なり。杞梓は良木の名。賢才に喩ふ。收は取なり。

旦し、(二六)伊水の濱に日入す。其三

【大意】王侯の貴きは其門に俊賢多ければなり。故に春華の庶子、家丞の秋實皆一門に集れり。太子の門亦賢才を收採し、才華あること徐幹、陳琳の如き者少からず。此等の賢才晨夕側に侍して、或は上林苑に遊び、或は伊水の濱に遊ぶ。

(二七)書記既に翩翩として、(二八)賦歌能く妙絶なり。(二九)相如も溫麗を恧ぢ、(三〇)子雲も筆札を慙づ。(三一)駿足長阪を思ひ、(三二)柴車危轍を畏る。茲の(三三)山陽の讌に愧ぢ、此の(三四)河陽の別を空うす。其四

【大意】足下は書記敏捷にして、詩賦亦絶妙なり。司馬相如も溫麗を讓り、谷子雲も筆札を恥づ。足下の如き駿才は長阪に遇ひて足を展べんことを思ひ、己の如き鈍才は常に世路の險を懼る。故に共に歡宴するを恥ぢ、送別の辭を缺く所以なり。

【二四】華屋。太子の宮。徐陳は徐幹及び陳琳なり、竝に才華あり、魏の文帝と友とし善かりき。亦賢友に喩ふ。

【二五】上林苑。天子の御苑なり、平旦は曉なり。

【二六】伊水。川の名。日入は暮なり。

【二七】書記。書牘奏記の類をいふ。翩翩は輕く擧る貌。

【二八】賦歌。詩章なり。

【二九】相如。漢の司馬相如なり。其文溫麗なり。

【三〇】子雲。漢の谷永、字は子雲、筆札に妙なり。筆札は筆蹟なり。

【三一】駿足。駿馬なり。希叔に喩ふ。

【三二】柴車。弱車なり、己に喩ふ。危轍は險路。

【三三】山陽。魏の嵆康、向秀と山陽縣に寓居し、常に竹林の讌をなす。

【三四】河陽。魏の曹植應氏を送る詩に「親昵竝に集り送り、此の河陽に置酒す」とあり。

(三五)平原が十日の飲、(三六)中散が千里の遊、(三七)渤海方に淫滯す。(三八)宣城誰か獻酬せん。南山の下に(三九)屛居し、此歲の方に秋なるに臨めり。惜い哉時與ならず、日暮れて輕舟なし。其五

【大意】足下と十日の飲をなし、千里駕を命じて訪はんと欲すれども、足下は邵陵王に事へて遠方に淫滯し居れば、共に宣城の美酒を酌むこと能はず。われ今南山の下に隱居し、且つ衰老に及べり。惜いかな歲月我を待たず、人の我を推薦する者なきこと、恰も舟の以て濟るべきなきが如し。

【三五】平原。平原君趙勝なり、秦の昭王、平原君に書を遺りて曰く、「寡人願くは君と十日の飲をなさん」と。

【三六】中散。中散大夫嵇康。初め呂安、嵇康と友たり、相思へば則ち駕を命じて千里之に從ふ。

【三七】渤海。郡名、魏の文帝の吳質、徐幹と遊びし處。希叔が邵陵王に事ふるに喩ふ。淫滯は久しく留ること。

【三八】宣城。酒の名。

【三九】屛居。隱居なり。

(一)張徐州謖に贈る　(二)范彥龍

田家(三)樵採し去り、薄暮方に來り歸る。還つて(四)稚子の說く

【一】張徐州。張謖、徐州の刺史となり、去るに臨み彥龍に就いて別を告ぐ、相見ず、故に彥龍此詩を作りて之に贈る。

【二】范彥龍。名は雲、字は彥龍、武興の人なり、齊の竟陵王子良の文學となり、梁に至りて散騎侍郎となる。

【三】樵採。採樵なり。薪を採りに行くこと。

【四】稚子。幼兒なり。

を聞く、客あり(五)柴扉を款く。(六)儐從皆珠玳、(七)裘馬悉く輕肥、(八)軒蓋墟落を照し、(九)傳瑞光輝を生ずと。疑ふらくは是れ(一〇)徐方牧か。既に是として復た非かと疑ふ。舊を思ふ(一一)昔言あり、此道今已に微なり。(一二)物情疵賤を棄つ、何ぞ獨り(一三)衡闈を顧みる。恨むらくは雞黍を具へて、(一四)故人と揮ふを得ざりしを。情を懷いて徒に(一五)草草たり。淚下りて空しく(一六)霏霏たり。書を雲間の鴈に寄す、我が爲に(一七)西北に飛べ。

【大意】われ薪を採りて山に入り、晩に歸り來れば、童子言ふ、客あり來り訪へり、隨從の士卒皆珠玉玳瑁を以て飾となし、肥馬に跨り輕裘を著、車馬村里に輝き、瑞節光輝を發せりと。我之を聞きて是れ必ず足下ならんと思ひしも、或は然らざるかと疑へり。古人は舊を忘るべからざるを戒めたるも、今人復た此道を用ひず。凡そ人の情卑賤を棄てて顧ず。足下獨り舊交を思ひて我を訪へり。世俗と類を同うせずと謂ふべきなり。ただ雞を殺し黍を蒸し、足下と離杯

【五】柴扉。柴門なり、己の家をいふ。
【六】儐從。前後に隨從する者。珠玳は珠玉玳瑁を以て飾とすること。
【七】裘馬。衣裘及び乘馬。
【八】軒蓋。馬車の蓋。墟落は村里。
【九】傳瑞。傳は驛馬、瑞は刺史の節信(しるし)なり。
【一〇】徐方牧。徐州の長官。卽ち徐謖。
【一一】昔言。昔人の言。
【一二】物情。人情なり。疵賤は卑賤なり。
【一三】衡闈。衡門なり。木を横たへて門となせるなり。賤者の居なり。
【一四】故人。舊友なり、張徐州を指す。
【一五】草草。心を勞する貌。
【一六】霏霏。淚の落つる貌。
【一七】西北。徐州は揚州の西北に在り。

を擧ぐる能はざりしを恨むのみ。因つて草草として憂へ、霏霏として涙を落し、鴈の西北に飛ぶに託し、音信を足下に傳ふ。

(一)古意、(二)王中書に贈る

范彥龍

官を(三)靑瑣闥に攝し、遙に(四)鳳凰池を望む。誰か云ふ相去ること遠しと、(五)脈脈として光儀を阻つ。(六)岱山靈異饒く、(七)沂水英奇に富む。(八)逸翮北海を陵ぎ、(九)摶飛して南皮を出づ。聖明の后に遭逢し、來りて(一〇)桐樹の枝に棲む。(一一)竹花何ぞ莫莫たる。桐葉何ぞ(一二)離離たる。棲むべく復た食ふべし。此外亦何をかせん。豈知らんや(一三)鶺鴒なる者、一粒(一四)餘貲あるを。

【大意】我れ靑瑣門に在りて、遙に足下の居る鳳凰池を望めば、兩處相去ること、遠きに

【一】古意。古詩の意に象るをいふ。
【二】王中書。中書監王融なり。
【三】靑瑣闥。宮門の名、彥龍通直郎となり、ここに宦す。
【四】鳳凰池。禁苑中の池の名。中書省の在る處。
【五】脈脈。見えざる貌、光儀は尊容といふが如し。
【六】岱山。泰山なり。靈異は賢俊なり。
【七】沂水。川の名。英奇は賢俊なり。岱山沂水は王氏の出でし處なり。
【八】逸翮。すぐれたる翼。賢才に喩ふ。北海は魏の徐幹なり。
【九】摶飛。大風を羽下にまるめ込みて飛ぶこと。南皮は魏の吳質をいふ。
【一〇】桐樹。鳳凰は桐にあらざれば棲まず。
【一一】竹花。鳳凰は竹實にあらざれば食はず。莫莫は盛なる貌。
【一二】離離。下に垂るる貌。
【一三】鶺鴒。みそさざい、小鳥の名。
【一四】餘貲。餘財なり。

あらねど、絶えて足下の容儀を見る能はず。岱山沂水は足下の郷里にして足下の如き英才を出せり。足下の才は遠く徐幹、吳質（共に魏の文帝の恩寵を蒙りし人）に勝り、殊に聖明の天子に遇ひ、其朝に來り仕ふ。恰も鳳凰の桐樹の枝に棲むが如し。而して竹實桐葉繁茂せるを以て、食ふにも棲むにも不足あることなし。何ぞ其外を望むべけんや。（官祿の厚きに喩ふ）鷦鷯の如きは少食なるを以て、一粒にて尙ほ餘あるを知らずや。（我の如きは卑官に甘んずるに、足下の高官を望むは宜しからずとの意なり）

㈠郭桐廬、谿口を出でて㈡候せらる、余既に未だ至らず、郭仍つて村に進む、舟を維ぐこと之を久うして、郭生方に至れるに贈る　任彥昇

朝に㈢富春の渚を發し、意を蓄へて相思を忍ぶ。㈣涿令春を行りて返り、㈤冠蓋川坻に溢る。望むこと久うして方に來り萃り、悲歡して自ら持せず。㈥滄江路此に窮り、湍險方に茲よりす。

【一】郭桐廬。桐廬は縣名、會稽郡に屬す、ここに桐廬溪あり、郭峙桐廬縣令たり。
【二】候。待ち受くること。彥昇、時に新安太守たり、故に伺候せるなり。
【三】富春。縣名、會稽郡に屬す。
【四】涿令。後漢の滕撫、初め州郡に仕へ稍遷りて涿縣の令

(七)疊嶂響を成し易く、重ぬるに夜猨の悲きを以てす。客心幸に自ら弭む。(八)中道にして(九)心期に遇ふ。(一〇)親好斯より絶え、孤游此より辭せん。

【大意】われ早朝富春縣を發し、足下を見んと欲するの熱情を忍んで此に來る。適〻足下春耕を巡視して還り來るや、其德を慕ひて望觀する者川岸に溢るるばかりなり。われ舟を維ぎ足下を望むこと久しうして、始めて相見るを得、自ら悲歡に堪ふる能はず。(望むこと久しきを悲み、來り萃れるを歡ぶなり)江流ここに窮りたれば、此より路益〻險を加へ、山中ただ反響と猿聲とを聞くならん。悲しとも悲し。今幸に足下に會して旅愁を慰め得たるに、今ここに相別れて獨り山中を行かば、又又悲哀を感ずるならん。

となり、風政脩明なり。借りて郭峙に喩ふ。

【五】冠蓋。冠及び車蓋。鹵簿を觀る者をいふ。川抵は川岸。

【六】滄江。川流なり。

【七】疊嶂。重れる山。

【八】中道。中途なり。

【九】心期。親友なり。郭峙をいふ。

【一〇】親好。郭峙をいふ。

行旅上

河陽縣の作二首　潘安仁

微身蟬翼よりも輕く、弱冠にして(一)嘉招を忝くし、疢に在りて賢路を

【一】嘉招。徵召なり。

妨げ、再び（二）上宰の朝に升り。猥に（三）公叔の擧を荷ひ、（四）陪を連ねて（五）王寮に厠る。長嘯して東山に歸り、耒を擁して時苗を耨る。幽谷（六）纖葛茂り、峻巖（七）榮條を敷き、（八）落英林趾に隕ち、（九）飛莖陵喬に秀づ。（一〇）卑高亦何の常あらん、升降一朝に在り。徒に恨む（一一）良時の泰にして、（一二）小人の道遂に消するを。譬へば野田の蓬の如く、（一三）斡流して風に隨つて飄る。昔は（一四）都邑の游に倦み、今は（一五）河朔の傜を掌る。城に登りて眷みて（一六）南顧すれば、（一七）凱風微綃を揚ぐ。（一八）洪流何ぞ浩蕩たる、（一九）脩芒鬱として岩嶤たり。誰か謂ふ（二〇）晉京遠しと、（二一）室邇くして身實に遼なり。誰か謂ふ（二二）邑宰輕しと、令名劭からざるを患ふ。人天地の間に生れて、百年孰か能く要せん。熲ること石を槁つの火の如く、瞥なるこ

【二】上宰。宰相楊駿、賈充を指す。
【三】公叔。論語に「公叔文子の臣、大夫僎、文子と同じく公に昇る」とあり。
【四】陪。陪臣なり。
【五】王寮。王官なり。
【六】纖葛。細き葛。
【七】榮條。花咲く枝。
【八】落英。落花なり。林趾は林麓なり。
【九】飛莖。高き莖。陵喬は高き岡。
【一〇】卑高。高低なり。
【一一】良時。明時なり。泰は安泰なり。
【一二】小人。微賤の人。安仁自ら謂ふ。
【一三】斡流。流轉なり。
【一四】都邑。都なり、尙書郎たりしをいふ。
【一五】河朔。河陽縣令となりしをいふ。傜は傜役。
【一六】南顧。都の方を望む。
【一七】凱風。南風。微綃は薄き幕。
【一八】洪流。黄河をいふ。浩蕩は廣き貌。
【一九】脩芒。洛陽の北に在る北邙山。岩嶤は高き貌。
【二〇】晉京。晉の都、卽ち洛陽。
【二一】室邇。詩經に「其室則ち邇し、其人甚遠し」とあり。
【二二】邑宰。縣令なり。
【二三】齊都。論語に「齊の景公馬千駟あり、死するの日人得て稱するなし」とあり。是れ遺聲なきなり。

と道を截る颷の若し。(三三)齊都に遺聲なく、(三四)桐郷に餘謠あり。謙に福するは純約に在り、盈を害するは矜驕に由る。人に君たるの德なしと雖も、民を視ること恌からざらんことを庶ふ。

【三四】桐郷。漢の朱邑、桐郷の嗇夫となる、吏人愛して死後に至るまで其德を謳歌す。

【大意】われ微賤の身を以て、弱冠にして秀才に擧げられ、病敗不才を以て再び宰府の掾となり、宰相の陪臣として王官に伍するを得たるも、後東山に歸りて農耕を事とす。今幽谷の葛巖上の花枝を見るに、其花林下に落ち、其莖陵上に立つ。されば高低升降は常あるにあらず、其變化一旦夕の間に在るを知る。人の榮辱も亦此の如し。身の沈淪また何ぞ歎ずるに足らんや。然りと雖も生れて聖明の世に遇ひ、我が道獨り窮し、恰も蓬の風に飄るが如く、嘗て帝都に宦遊せし身を以て、河陽縣令となれるは、遺恨なき能はず。因つて城に登りて帝都を望めば、南風わが帳を揚げ、黃河洋洋として流れ、北邙山高く聳え、見るべくして復た往くべからず。悲しいかな。抑ゝ縣令の職は輕きにあらず、美名を得るは易しとなさず。人生は百年に滿たず、其の迅速なること石を擊つの火、道を截るの風の如し。務めて美名を擧げざれば、死して餘悔あり。死して遺響なきは我の恥づる所にして、死して餘謳あるは我の望む所なり。天は謙約なる者を見ては福を與へ、矜驕なる者を見ては之を害す。われ縣令たるの德なしと雖も、民を愛養し美名を得んことを希へり。

日夕陰雲起る。城に登りて（二五）洪河を望む。川氣山嶺を冒ひ、驚湍（二六）巖阿に激す。歸鴈（二七）蘭時に映じ、游魚圓波を動かす。鳴蟬寒音を厲うし、（二八）時菊秋華を耀かす。領を引いて（二九）京室を望めば、（三〇）南路伐柯に在り。（三一）大厦緬として覿るなく、（三二）崇芒鬱として嵯峨たり。（三三）摠摠たる都邑の人、（三四）擾擾たる俗化の訛。水に依りて（三五）浮萍に類し、松に寄りて（三六）懸蘿に似たり。（三七）朱博舒慢を糺し、楚風琅邪に被る。曲蓬何を以てか直き、身を託して叢麻に依ればなり。（三八）黔黎竟に何の常あらん、政の成るは民の和に在り。位は（三九）單父の邑に同じきに、子賤の歌なきを愧づ。豈敢て徹官を陋とせんや、但恐くは（四〇）所荷を忝しめんことを。

【大意】夕に河陽城に登りて黄河を望めば、雲氣山を覆ひ奔湍巖角を衝き、鴈蘭渚に映じ、魚波紋を起し、寒蟬鳴き秋菊開く。頸を延べて京師

（二五）洪河。黄河なり。
（二六）巖阿。巖角なり。
（二七）蘭時。蘭の生ぜる渚。
（二八）時菊。秋菊なり。
（二九）京室。京師なり。
（三〇）南路。京師に往く道。伐柯は詩經に「柯を伐り柯を伐る、其則遠からず」とあるにより、近きをいふ。
（三一）大厦。厦一に夏に作る。大夏は洛陽の門の名。緬は遠なり。
（三二）崇芒。高き北邙山。嵯峨は高き貌。
（三三）摠摠。衆き貌。
（三四）擾擾。衆き貌。訛は僞なり。
（三五）浮萍。水に浮べるウキクサ。
（三六）懸蘿。松に懸れるツルクサ。
（三七）朱博。漢の杜陵の人なり。琅邪太守に遷り、事を視ること數年、大に其俗を改む。掾吏の禮節皆楚趙の如し。舒慢は禮節の行はれざること。
（三八）黔黎。衆民なり。
（三九）單父。地名。宓子賤、單父を治め、常に琴を鳴して能く治まれり。
（四〇）所荷。責任、職責。

を望めば、其道甚だ近きも、大夏門邈として見えず、ただ北邙山の聳ゆるを見るのみ。都邑の人衆には俗化の僞訛あり。人俗の政化によりて變遷するは、猶ほ萍の水に隨つて去留し、蘿の松に寄りて高下あるが如し。故に朱博の琅邪を治むるや、掾吏の禮節楚趙の風ありといふ。蓬の性は曲れり。もし麻中に生ずれば扶けずして直し。民を治むるも亦然り。政の成るは民の和するに在り。我れ子賤と職を同うするも、絃歌の化を同うする能はざるを愧づ。豈此官を以て微小となさんや、ただ職責を果す能はざらんことを恐るるのみ。

(一)懷縣に在りて作る二首

潘安仁

(二)南陸修景を迎へ、(三)朱明末垂を送る。(四)初伏新節を啓き、隆暑方に(五)赫羲たり。朝には(六)慶雲の興らんことを想ひ、夕には白日の移るを遲つ。汗を揮つて(七)中宇を辭し、城に登りて清池に臨む。(八)涼飈遠きより集り、輕襟風の吹くに隨ふ。靈圃華果を耀し、(九)通衢高椅を列す。

【一】懷縣。安仁河陽縣令より懷縣の令に遷る。
【二】南陸。續漢書に「日南陸を行く之を夏といふ」とあり。修景は日の長きこと。
【三】朱明。爾雅に「夏を朱明となす」とあり。末垂は末なり。
【四】初伏。三伏の初。
【五】赫羲。炎盛の貌。
【六】慶雲。瑞雲なり。
【七】中宇。屋中なり。
【八】涼飈。涼風なり。
【九】通衢。通道なり。高椅の椅は桐の類の木。

（一〇）瓜瓞長苞を蔓し、（一一）薑芋廣畦に紛たり。稻栽肅として（一二）仟仟たり、黍苗何ぞ（一三）離離たる。虚薄にして時用に乏しく、位微にして名日に卑し。驅役せられて（一四）兩邑に宰たるも、政績竟に施すなし。我が（一五）京輦を違りしより、（一六）四載斯に迄る。器は（一七）廊廟の姿にあらず、屢出づる固に其れ宜なり。徒に（一八）越鳥の志を懷き、眷戀して南枝を想ふ。

【大意】懷縣に在りて京師を戀ふなり。今や夏も末となり、初伏に入りて炎暑方に盛なり。故に雲興り日移るを望み、屋内を出で城に登り、池に臨んで涼を納るれば、庭園には花あり實あり、通路には椅桐列り、瓜は蔓を叢草の下に引き、薑芋は紛然として廣圃に滿ち、稻茂り黍垂るるを見る。われ才德なくして時用に乏しきを以て、位名ともに卑しく、河陽懷二縣の令たるも、政績の觀るべきなく、京師を去りてより既に四年を經たり。固より廟堂に立つべき器量なければ、屢出でて外職に就くは當然なれども、南方京師に還りたき望は常に心を離るることなし。

【一〇】瓜瓞。瓜なり。長苞は叢草。
【一一】薑、芋。野菜の名。廣畦は廣き畑。
【一二】仟仟。長茂の貌。
【一三】離離。長茂の貌。
【一四】兩邑。河陽と懷となり。宰は長官。
【一五】京輦。京師なり。
【一六】四載。四年なり。
【一七】廊廟。朝廷なり。
【一八】越鳥。越は南方の國の名。古詩に「越鳥南枝に巣くふ」とあり。

春秋代ゝ遷逝し、(一九)四運紛として喜ぶべし。寵辱驚かざること易く、本を戀ひて思をなし難し。我れ來るとき氷未だ泮けざりしに、時暑にして忽ち(二〇)隆熾なり。此の還期の淹きに感じ、彼の年往の駛なるを歎く。城に登りて(二一)郊甸を望み、目を游ばしめて(二二)朝寺を歷。(二三)小國民務寡く、終日寂として無事なり。白水庭を過ぎて激し、綠槐門を夾んで植つ。信に美なれども吾が土にあらず、秪(二四)懷歸の志を攪す。(二五)眷然として鞏洛を顧みれば、山川(二六)邈として離異なり。(二七)願言して舊鄕に旋らんとすれば、此の(二八)簡書の忌を畏る。祗で(二九)社稷の守に奉じ、(三〇)恪居して職司に處る。

【大意】此首は鄕里を思ふなり。歲月の遷り代はるは誠に喜ぶべし。寵辱の事は敢て驚くに足らざれども、鄕里を思ふの心は實に忍ぶべからず。我の懷縣に來りしは早春なりしも、今や既に盛夏の候となれり。還期の遲きを感じ、年運の速なるを傷みつつ、或は郊甸を視察し、或は諸官署を巡回す。懷縣は小邑なれば、官事も極めて閑散にて、庭前には白水激し、門外には綠槐立ち、棄て難き風情あれども、わが鄕土ならねば、唯歸鄕の心を

【一九】四運。四季なり。
【二〇】隆熾。盛なること。
【二一】郊甸。郊外の地。
【二二】朝寺。役所なり。
【二三】小國。懷縣を指す。
【二四】懷歸。故鄕に歸らんことを思ふなり。
【二五】眷然。慕ふ貌。鞏洛は二縣の名。安仁の父の墓のある處。
【二六】邈。遠き貌。離異は隔ること。
【二七】願言。思ふこと。
【二八】簡書。刑書なり。
【二九】社稷。縣邑といふが如し。懷縣を指す。
【三〇】恪居。勤居なり。

催すの種となる。因つて鞏洛の地を望めば、山川遠く隔れり。故郷に歸らんとすれば、刑罰を蒙るを恐れて歸る能はず。故に職司を勤めて此地に留るなり。

(一)大駕を迎ふ　　潘正叔

南山鬱として(二)岑崟たり、(三)洛川迅くして且つ急なり。青松(四)修嶺を蔭ひ、(五)綠蘩廣隰に被る。朝日(六)長塗に順ひ、夕暮集る所なし。歸雲(七)轞に乘りて浮び、淒風(八)帷を尋ねて入る。道に深識の士に逢ふ。手を擧げて吾に對して揖す。(九)世故尙は未だ夷ならず、(一〇)崤函方に嶮澁なり。(一一)狐貍兩轅を夾み、(一二)豺狼路に當りて立ち、(一三)翔鳳籠檻に嬰り、(一四)騏驥維縶せらる。(一五)俎豆は昔常て聞けり、軍旅は素より未だ習はず。且少く(一六)君が

【一】大駕。天子の乘輿なり。晉の東海王越、大駕に從つて鄴を討ち、軍敗れて輕騎下邳に奔る。永康二年、越天下の甲士三萬人を率ゐ大駕を奉迎して洛陽に還る。正叔時に之に與る、故に此詩あり。
【二】岑崟。峻なる貌。
【三】洛川。川の名。
【四】修嶺。長き山脈。
【五】綠蘩。蘩は草の名。廣隰は廣き澤。
【六】長塗。長途なり。
【七】轞。車の幌。
【八】帷。車幔なり。
【九】世故。世の騷亂。
【一〇】崤函。崤關及び函谷關。
【一一】狐貍。貪亂の臣に喩ふ。
【一二】豺狼。貪亂の臣に喩ふ。
【一三】翔鳳。賢者に喩ふ。籠檻はカゴ及びヲリ。
【一四】騏驥。駿馬なり。賢者に喩ふ。維縶は束縛といふが如し。
【一五】俎豆。祭器の名。禮事に喩ふ。論語に「衞の靈公陳を孔子に問ふ、孔子對へて曰く、俎豆の事は嘗て之を聞けり、軍旅の事は未だ之を學ばざるなり」とあり。軍旅は戰事な

り。

【六】君。前文の深識の士が正叔を指して言ふ。

駕を停めて、徐に干戈の戢まるを待て。

【大意】我れ大駕を迎ふれば南山高く聳え洛水奔流し、山には青松茂り、澤には綠蘩生ずるを見る。晝は長途に循つて行き、夜に至りて止宿する所なく、風雲車幰を侵して入る。道に深識の士あり、(假設して下の語を發せしむるなり。)余に揖して言つて曰く、今や世亂未だ熄まず、崤函の路嶮澁にして未だ通ぜず、貪亂の臣親近して權勢を握り、賢者は拘繫せられて用に施すを得ず。我れ嘗て禮儀の事を學びしも、戰事は未だ之を學ばず、故に今日の世亂を鎭めんやうなし。君も姑く駕を留めて世亂の鎭まるを待つべきなりと。深識の士余に告ぐるの言此の如し。(此れ假設の言にて、實は正叔の晉君に對する意見を述べしなり。)

(一)洛に赴く詩二首　陸士衡

世を希ひて(二)高符なく、道を營んで(三)烈心なし。(四)靖端にして(五)有命を肅み、檝を假りて江潭を越ゆ。親友予が邁くに贈り、淚を廣川の陰に揮ふ。膺を撫ちて攜手を解き、永歎して(六)遺音を結ぶ。迹なくして匿す所あり、

【一】洛。晉都洛陽なり。
【二】高符。瑞命なり。
【三】烈心。勇猛心なり。
【四】靖端。清正なり。
【五】有命。君命なり。
【六】遺音。遺る所の音信。

寂漠として聲必ず沈む。目を肆にするも(七)眇として及ばず。(八)緬然として雙び潛るが若し。南を望んで(九)玄渚に泣き、北に邁きて長林を渉る。谷風(一〇)修薄を拂ひ、(一一)油雲高岑を翳ふ。(一二)麞麞として孤獸騁せ、(一三)嚶嚶として思鳥吟ず。物に感じて(一四)堂室を戀ひ、離思一に何ぞ深き。佇立して(一五)愾として我れ歎き、(一六)寤寐に涕衿に盈つ。惜むらくは懷歸の志なきを、辛苦して誰か心をなさん。

【大意】われ世俗の富貴を望めども、好運なく、道藝の術を營むも又勇猛心なし。今晉室の命令を蒙り、舟楫を借りて江水を渡り、以て洛陽に赴かんとす。親友吾が行を送り、涙を江岸に拭ふ。我れ胸を拊ち手を解きて別れ、別後長嘆して贈遺の言を思ふ。然も親友の迹復た見る所なく、其聲亦聞く所なし。目を縱にして遠く望めども見えず、彼我遠く相隔つるが如し。乃ち南望して涙を濺ぎ、北行して長林を過ぐれば、風雲鳥獸一として悲を添ふるの料たらざるはなし。因つて故郷の母妻を思ひ、益〻別離の感を深からしむ。乃ち佇立して歎き、寤寐に涙を流す。既に晉に仕ふれば、又歸志を抱くを得ず。他郷に辛苦するの情豈自ら堪ふる所ならんや。

【七】眇。遠視の貌。
【八】緬然。遠き貌。
【九】玄渚。江中の洲渚。
【一〇】修薄。草木の叢生するを薄といふ。修は長なり。
【一一】油雲。油然として起る雲。高岑は高山。
【一二】麞麞。走る貌。
【一三】嚶嚶。鳥の聲。
【一四】堂室。母及び妻。
【一五】愾。一本慨に作る。
【一六】寤寐。ねてもさめても。

（二七）羈旅して遠く游宦し、身を（二八）承華の側に託す。劍を撫して（二九）銅輦に遵ひ、（三〇）纓を振へて祗肅を盡す。歲月一に何ぞ易る、寒暑忽ち已に革まる。載ち離れて悲心多く、物に感じて情（三一）悽惻す。慷慨して安愈を遺れ、永歎して餐食を廢す。樂を思ふも樂誘き難く、曰に歸らんとするも歸ること未だ克はず。憂苦して何をか爲さんと欲する、（三二）纏緜たり胷と臆と。仰いで霄を陵ぐの鳥を瞻、爾の歸飛の翼を羨む。

【大意】われ洛陽に在りて仕官し、常に太子に侍して職責を愼む。歲月流轉すること早く、鄉を離れて年歲を經、物侯の變に感じて心を傷ましめ、餐食を廢するに至り、樂を思ふも樂來らず、歸らんと欲するも歸る能はず、憂苦の情常に心胸に盈つ。乃ち空を翔るの鳥を見、其翼を借り以て鄉に歸らんことを願ふや切なり。

【二七】羈旅。行旅なり。游宦は他鄉に往きて仕官すること。
【二八】承華。太子の宮門の名。士衡は晉に仕へて太子洗馬となれり。
【二九】銅輦。太子の車。
【三〇】纓。冠の紐。祗肅は愼みて事ふること。
【三一】悽惻。悲傷すること。
【三二】纏緜。心にまつはること。

（一）洛に赴く道中の作二首　陸士衡

轡を摠りて長路に登り、（二）嗚咽して密親を辭す。借問す子何にか之くと、

【一】洛。晉都洛陽。
【二】嗚咽。悲泣なり。密親は近親の人。

(三)世網我が身に嬰る。永歎して北渚に遵ひ、思を遺して(四)南津に結ぶ。行き行きて遂に已に遠く、野途曠にして人なし。山澤紛として(五)紆餘し、(六)林薄杳として(七)阡眠たり。虎は深谷の底に嘯き、雞は高樹の巓に鳴く。哀風中夜に流れ、孤獸我が前を更。悲情物に觸れて感じ、沈思鬱として(八)纏緜す。佇立して故郷を望み、影を顧みて(九)悽として自ら憐む。

【大意】われ涙を飲んで近親に別れ、長途に向つて去らんとすれば、近親則ち問ふ足下何に往かんとするやと。因つて官事に繫がれて洛陽に往く由を答ふ。是に於て身は北に向つて去れども、思は永く南津に留まる。曠野無人の境を進み行けば、山澤紛然として曲折し、叢林青色を帶び、虎嘯き雞鳴き、悲風起り孤獸走る。之を見て悲哀の情に堪へず。佇立して故郷を望むこと屢ゝなり。

遠遊して山川を越ゆれば、山川修うして且つ廣し。策を振げて(一〇)崇丘に陟り、轡を(一一)案じて(一二)平莽に遵ふ。夕に息ひ影を抱いて寐ね、朝に徂き思を銜んで往く。轡を頓めて(一三)嵩巖に倚り、側に悲風の響を聽く。清露素輝を墜し、明月一に何ぞ朗

【三】世網。官事に喩ふ。
【四】南津。江南の渡津。別處なり。
【五】紆餘。屈曲なり。
【六】林薄。草木叢生するを薄といふ。杳は遙なり。
【七】阡眠。原野の色なり。
【八】纏緜。心にまつはること。
【九】悽。悲なり。
【一〇】崇丘。高山なり。
【一一】案。ゆるむること。漢書に「轡を案じて徐行す」とあり。
【一二】平莽。草野なり。
【一三】嵩巖。高山なり。

なる。几を撫して寐ぬる能はず、衣を振ひて獨り長く想ふ。

【大意】幾度か山川を越え、或は高山に陟り、或は平野を渉り、夕には孤影蕭然として寐ね、朝には感慨を抱いて獨り行く。馬を留めて高山に倚れば、悲風の聲を聞き、明月を仰いで露色を見ては望郷の嘆を發す。中夜眠る能はず、起つて徘徊して沈思す。

吳王の（一）郎中たりし時（二）梁陳に從ひし作　陸士衡

在昔（三）嘉運を蒙り、迹を矯げて（四）崇賢に入り、翼を（五）鳴鳳の條に假り、足を（六）升龍の淵に濯ぐ。（七）玄冕醜士なく、（八）冶服我をして妍しからしむ。輕劍（九）鞶厲を拂ひ、（一〇）長纓麗且つ鮮なり。誰か謂ふ事に伏すること淺しと。（一一）契闊して三年を踰ゆ。薄か言に（一二）後命を肅み、服を改めて藩臣に就く。夙に駕して（一三）淸軌を尋ね、遠く游んで梁陳を越ゆ。物に感じて遠念多く、慷慨して（一四）古

【一】郎中。官名、郎中令なり。
【二】梁陳。二國の名。
【三】嘉運。好運なり。
【四】崇賢。太子の宮門の名。太子洗馬となりしことをいふ。
【五】鳴鳳。太子に喩ふ。
【六】升龍。淵にのぼる龍。太子に喩ふ。
【七】玄冕。黑冠なり、周禮に「大夫は玄冕す」とあり。
【八】冶服。美服なり。
【九】鞶厲。鞶は大帶、厲は帶の垂。
【一〇】長纓。纓は冠の紐。
【一一】契闊。勤苦なり。
【一二】後命。天子の後命、吳王の郎中令となりしこと。
【一三】淸軌。軌は道なり。
【一四】古人。漢の時、梁の孝王に事へたる枚皐、司馬相如等をいふ。

人を懷ふ。

【大意】嘗て好運に遭ひ太子に事へて洗馬たり。既に玄冕を服すれば、醜惡の人なし。況んや衣服鮮美なるを以て、益々我をして妍美ならしむ。長劍を佩びて鞶帶を垂れ、長纓亦鮮麗なり。かくて太子に事ふること既に三年を過ぎたり。時に天子の命あり、我をして吳王の郎中令たらしむ。卽ち命を敬んで任に赴き、梁陳二國を過ぐ。因つて我が吳王に事ふるに感じ、遠く古人を念ふ。

始めて鎭軍參軍と作り、(一)曲阿を經し作　(二)陶淵明

(三)弱齡事外に寄せ、懷を委ねて琴書に在り。(四)褐を被りて自得を欣び、屢々空きも常に(五)晏如たり。時來りて苟に宜しく會ふべし。轡を宛ねて(六)通衢に憩ふ。策を投じて晨旅を命じ、暫く園田と疎なり。(七)眇眇として孤舟逝き、(八)緜緜として歸思紆る。我が行豈遙ならざらんや、登降すること千餘里。目は(九)修塗の異に倦み、心は山澤の居を念ふ。雲を望んで高鳥に慙ぢ、水に臨ん

【一】曲阿。縣名。
【二】陶淵明。名は潛、字は淵明、或は云く字は元亮、晉の潯陽柴桑の人、少くして高趣あり、鎭軍建威參軍となり、後彭澤の令となり、縣に在ること八十餘日にして解き去る。
【三】弱齡。少年なり。
【四】褐。短衣なり。自得は得意なり。
【五】晏如。境遇に安んずる貌。
【六】通衢。大道なり。仕途に喩ふ。
【七】眇眇。遠行の貌。
【八】緜緜。絶えざる貌。
【九】修塗。長途なり。

で遊魚に愧づ。(一〇)眞想初より衿に在り、誰か謂ふ(一一)形迹拘ると。聊か且つ(一二)化の遷るに憑り、終に
(一三)班生の廬に反らん。

【大意】我れ少年の時、心を事物の外に寄せ、琴書を以て自ら慰め、身に短褐を被り、家貧にして資なしと雖も、心欣然として常に自得せり。今時運の到來に遇ひ、仕へて參軍となり、杖を棄て馬に跨りて、暫く田園と離るるに至りぬ。孤舟に乘り歸思を抱きて曲阿千里の山川を越え行けば、目は長途の異觀に倦み、心は舊居を念ふこと益々切なり。因つて魚鳥を見れば、皆其性を得て樂めるに、己獨り其性に違へるに愧づ。我れ本より隱遁の志あり、然も今既に名利の拘束を受く。願くは時運の遷移に憑り、班固と同じく上仁の廬る所に歸り居らんことを。

【一〇】眞想。名利に惑はぬ本性、衿は心なり。
【一一】形迹。行爲といふが如し。
【一二】化。時の運行。
【一三】班生。漢の班固なり。其幽通賦に「終に己を保ちて則を貽し、上仁の廬する所に里る」とあり。

(一)辛丑の歳七月、假に赴き、(二)江陵に還りて、夜塗口を行く作

陶淵明

閑居(三)三十載、遂に

【一】辛丑。晉の隆安五年。假に赴くとは休暇を得て郷里に歸りしなり。

(四)塵事と冥なり。詩書(五)宿好を敦うし、林園世情なし。如何ぞ此を舍てて去り、遙遙として(六)西荊に至る。栧を(七)親月の船に叩き、流に臨んで(八)友生に別る。涼風起りて將に夕ならんとし、(九)夜景湛として虛明なり。昭昭として(一〇)天宇闊く、(一一)皛皛として川上平なり。(一二)役を懷ひて寐ぬるに遑あらず、中宵尚ほ孤り征く。(一三)商歌吾が事にあらず、(一四)依依として耦耕に在り。冠を投じて(一五)舊墟に旋り、好爵に縶はれず。(一六)眞を衡茅の下に養ひ、庶はくは善を以て自ら名づけん。

【大意】われ閑居すること三十年、全く世俗の事に關せず、詩書を讀み林園に住して自ら樂みしに、自ら此樂を棄てて、荊州に向ふは、果して何の心ぞや。自ら解する能はざる所なり。今塗口を過ぎ栧を叩きて月を賞し、流に臨んで友人と別るれば、涼風起りて月光澄み、天闊くして川流

【二】江陵。郡名、休暇滿ちて江陵に還るなり。塗口は江口の名。
【三】三十載。三十年なり。
【四】塵事。世事なり。
【五】宿好。舊來の嗜好。
【六】西荊。時に帝都東に在り、故に荊州を西荊といふ。江陵は卽ち荊州府治。
【七】親月。月を愛するなり。
【八】友生。朋友なり。
【九】夜景。月光なり。湛は澄める貌。
【一〇】天宇。天空なり。
【一一】皛。明なる貌。
【一二】役。職務なり。
【一三】商歌。寗戚の飯牛歌をいふ。人に知られんことを求むる歌なり。
【一四】依依。深く慕ふ貌。耦耕は論語に「長沮桀溺耦して耕す」とあるにより、隱遁をいふ。
【一五】舊墟。故郷なり。
【一六】眞。天眞の本性。衡茅は衡門茅屋なり。

靜なり。職責を思へば寐ぬるに遑なし。因つて中夜獨り道を行く。商歌して知遇を求むるは、吾が願にあらず。退耕は吾が慕ふ所なり。願くは官を辭して故郷に歸り、官爵の拘束する所とならず、茅屋の下に天眞の性を養ひ、善人を以て稱せられんことを。

永初三年七月十六日(一)郡に之かんとして初めて都を發す　　謝靈運

(二)述職して闌暑を期し、棹を理むれば(三)金素變ず。秋岸夕陰澄み、(四)火旻朝露團なり。辛苦誰か情をなさん、(五)遊子頽暮に値ふ。似たるを愛して(六)莊昔を念ひ、久しく敬して(七)曾故を存す。如何ぞ(八)懷土の心、(九)此を持して遠度を謝せん。(一〇)李牧長袖を愧ぢ、(一一)郤克躧步を慙づ。(一二)良時遺てられず、醜狀惡を成さず。曰に余亦(一三)支離なるも、方に依るは早く慕ふあり。生

【一】郡。永嘉郡なり、永初三年五月、宋の武帝崩じ、廢帝位に卽き、靈運を出して永嘉郡守となす。都は宋都建康なり。
【二】述職。諸侯天子に朝して其職事を述ぶるをいふ。闌暑は夏の末、暑氣闌なるをいふ。
【三】金素。秋は五行に於て金となし白となす、故に金素といふ。
【四】火旻。秋天をいふ。
【五】遊子。旅客なり、靈運自ら謂ふ。頽暮は衰老なり。
【六】莊。莊子に「越の流人國を去ること旬月、嘗て國中に見し所を見て喜ぶ、期年に及び、人に似たる者を見て喜ぶ」とあり。
【七】曾。曾子なり。故は故舊なり。
【八】懷土。故土を懷ふこと。
【九】此。懷土の心なり。
【一〇】李牧。趙將なり。戰國策

れて（一四）休明の世に幸し、親しく（一五）英達の顧を蒙り、空しく（一六）趙氏の璧を班ね、徒に（一七）魏王の瓠に乖く。從來漸く（一八）二紀、始めて（一九）歸路に傍づくを得たり。將に山海の迹を窮め、永く（二〇）賞心の悟を絕たんとす。

【大意】我が天子に朝して述職するや、期晚夏に在りしも、舟楫を整へて都を發せんとすれば、已に秋となり、岸渚秋景澄み、秋天白露結ぶ。辛苦の情既に堪へ難し。況んや身又衰老に及べるをや。物を見て戀慕の情を增し、似たるを愛すること莊子の疇昔を念ふが如く、久うして愈ゝ敬すること、曾子の故舊を存問するが如し。願くは此の懷土の心を以て、遠遊を中止せんことを。昔李牧、郤克竝

に「李牧至る、趙王韓倉をして之を數めしめて曰く、將軍戰勝つ、王將軍を觴す、將軍壽を前に爲し上首を捍つは死に當すと、李牧曰く、身大に臂短く、地に及ぶ能はず、起居不敬なり、恐くは死罪を前に獲ん、故に工人をして木杖を爲り以て手に接せしむ、上若し信ぜずば請ふ之を視よと」とあり。

【一一】郤克。春秋晉の大夫なり、左傳に「郤克をして會を齊に徵せしむ、頃公婦人を帷して之を觀しむ、郤克登る、婦人房に笑ふ」とあり、杜預註に「跛して階を登る、故に笑ふなり」とあり。躧步は舞ふが如く步むこと。

【一二】良時。明時なり。

【一三】支離。毀瘁なり。

【一四】休明。明盛の時をいふ。

【一五】英達。賢明の人、廬陵王を謂ふ。

【一六】趙氏璧。古の寶玉の名。

【一七】魏王の瓠。莊子に「惠子、莊子に謂つて曰く、魏王我に大瓠の種を貽る、我れ之を樹ゑて成り、五石を實る、以て水漿を盛れば其堅自ら擧ぐる能はず、之を剖きて以て瓢を爲る、瓠落として容るる所なし云云」とあり。

【一八】二紀。十二年を一紀といふ。

【一九】歸路。故鄉始寧縣に歸る路。

【二〇】賞心。親友なり、悟は晤に同じ。對談なり。

に不具癈疾の人なり。然も明時に於ては決して之を遺棄せず、醜貌も身の害とならざりき。我が身亦既に毀瘁すと雖も、常に道に依りて形を養はんことを願へり。既に生れて聖明の世に遇ひ、嘗て廬陵王の拔擢を蒙りしも、徒に珍重せられて用に施すこと能はず。從仕より以來既に二十四年を經、茲に永嘉太守に任ぜられ、始めて歸家の路に近づくを得たり。願くは山水を尋ねて其迹を窮め盡し、永く親友と交遊を絶たんことを。

㈠始寧の墅に過る　謝靈運

㈡束髮耿介を懷き、物を逐ひて遂に推し遷る。志に違ふこと昨の如きに似たるも、㈢二紀にして茲年に及ぶ。㈣緇磷淸曠を謝し、㈤疲薾貞堅に慙づ。㈥拙疾相倚薄し、還つて㈦靜者の便を得たり。㈧竹を剖いて滄海に守たり、帆を枉げて舊山に過る。山行㈨登頓を窮め、水涉(一〇)洄沿を盡す。巖峭うして嶺(一一)稠疊し、洲縈りて渚

【一】始寧。縣名、靈運の父祖並に此に葬る。故宅及び別墅あり。
【二】束髮。結髮に同じ、元服すること。耿介は節操。
【三】二紀。十二年を一紀といふ。
【四】緇磷。白き物の黑くなり、堅き物の磨り耗さるること。
【五】疲薾。疲困なり。
【六】拙疾。拙宦と疾病。倚薄は身に迫ること。
【七】靜者。論語に「智者は動き、仁者は靜なり」とあり。仁德を脩むる便。
【八】竹。漢書に「郡守の與に竹使符を作る」とあり、郡守には竹符を與へて信となすなり。滄海は海なり、永嘉郡は海邊にあり。

(二二)連緜たり。白雲幽石を抱き、綠篠清漣に媚ぶ。宇を葺いて迴江に臨み、(二三)觀を築いて曾巔に基す。手を揮ひて(二四)鄕曲に告ぐ。(二五)三載歸旋を期す。且く爲に(二六)枌檟を樹ゑよ。(二七)願言に孤かしむるなかれと。

【大意】此詩は永嘉郡に赴任する時、墅に過りて作れるなり。我もと耿介の志を抱きしも、世事に隨ひて俗と推し遷り、誤つて官に就きしは、昨日の如く思はるるも、已に二十四年を經、壯志消磨し官途に疲るるは、實に淸曠貞堅の士に慚づる所なり。今や官拙に體病み、少しく仁德を養ふの便を得、因つて永嘉郡守に任ぜられ、舟路を枉げて此墅に過るを得たり。乃ち山嶺を登降し、川流を上下して、其景を賞すれば、巖聳え洲縈り、白雲幽石を抱き、綠竹波際に茂り、その勝誠に掬すべし。是に於て江に臨みて宇を構へ、山頂に就いて樓を築く。因つて鄕人に告げて曰く、吾れ三年の後將に官を退いて歸らんとす。願くは吾が爲に枌檟を樹ゑよ。吾が言に違ふなかれと。(枌檟を樹うるは老死して出でざるの意を示すなり)

【一九】登頓。登降なり。
【二〇】洄沿。水流を上下すること。
【二一】稠疊。重疊なり。
【二二】連緜。絶えざる貌。
【二三】觀。樓臺なり。曾巔は高山の頂。

【二四】鄕曲。鄕里なり。
【二五】三載。三年なり。歸旋は歸鄕なり。
【二六】枌檟。木の名。棺を作る材となる。
【二七】願言。願ふ所の言。

（一）富春の渚

謝靈運

宵（二）漁浦の潭を濟り、旦に富春の郭に及ぶ。（三）定山雲霧緬に、（四）赤亭淹薄なし。流に遡りて（五）驚急に觸れ、圻に臨んで（六）參錯を阻つ。亮に（七）伯昏の分に乏しく、險は（八）呂梁の壑に過ぐ。（九）洊至は便習に宜しく、兼山は止託を貴ぶ。平生（一〇）幽期を協へんとするも、（一一）淪躓微弱に困む。久しく（一二）干祿の請を露し、始めて遠遊の諾を果す。宿心漸く（一三）申寫し、萬事俱に（一四）零落す。懷抱既に（一五）昭曠、外物徒に（一六）龍蠖。

【大意】夜漁浦を濟りて翌朝富春の城下に達す。定山は遠く雲霧の中に聳え、赤亭は水急にして停泊すべからず。流に遡りては驚濤急浪に懼れ、岸に臨みては巖石の交錯に阻てらる。我れ既に伯

【一】富春。郡の名、錢塘江上にあり。
【二】漁浦。浦の名、富春渚の東三十里にあり。
【三】定山。山の名。
【四】赤亭。定山の東十餘里にあり。淹薄は停留なり。薄は泊と同じ。
【五】驚急。驚濤急浪なり。
【六】參錯。巖石の交錯。
【七】伯昏。險に臨んで懼れざりし人、詳に列子に出づ。分は節といふが如し。
【八】呂梁。急流の名、列子に出づ。
【九】洊至。水の相仍りて至ること。
【一〇】幽期。幽隱の志。
【一一】淪躓。沈淪困頓なり。
【一二】干祿。俸祿を求むること。仕官なり。
【一三】申寫。志を遂ぐること。
【一四】零落。棄捨といふが如し。
【一五】昭曠。明遠なり。
【一六】龍蠖。易經に「尺蠖の屈するは以て伸びんことを求むるなり、龍蛇の蟄するは以て身を存するなり」とあり。

昏の志節なきに、經る所の險は呂梁に過ぎたり。然れども險阻を經るは水に便習するに宜しく、危山に遇ひては止りて往かざるを貴ぶを知る。平生幽隱の志を抱きしも、常に沈淪困頓して遂ぐる能はず。久しく干祿の情を絶ちしが、今始めて其志を果すを得、因つて萬事を一擲して復た顧慮する所なし。乃ち心胸明遠にして世間の萬事を視ること、龍蠖の屈伸を見るが如し。

(一)七里瀨　謝靈運

(二)羈心秋晨に積り、晨に積りて遊眺を展ぶ。孤客(三)逝湍を傷み、(四)徒旅奔峭に苦む。石淺くして水(五)潺湲たり、日落ちて山照曜す。荒林紛として(六)沃若たり、哀禽相叫嘯す。物に遭ひて(七)遷斥を悼み、(八)期を存して要妙を得。既に(九)上皇の心を秉る。豈末代の誚を屑みんや。日に(一〇)嚴子の瀨を覩、(一一)任公の鉤を屬せんことを

【一】七里瀨。水沙上を流走するを瀨といふ。桐廬縣に七里瀨あり、其長さ七里に亙る。此瀨下數里に嚴陵瀨あり。
【二】羈心。客心なり。
【三】逝湍。急流なり。
【四】徒旅。旅客なり。奔峭は崩落せる岸。
【五】潺湲。水の流るる貌。
【六】沃若。茂盛の貌。
【七】遷斥。貶謫なり。
【八】期。幽隱の期。要妙は善道といふが如し。
【九】上皇。莊子に「下土を監照し天下之を載す、此を上皇といふ」とあり。
【一〇】嚴子。後漢の嚴光、字は子陵、光武帝諫大夫となさんとす、屈せず、富春山に退耕す、後人其釣處を名づけて嚴陵瀨となす。
【一一】任公。鉤はツリバリ、任公子は有道の人なり、大鉤巨綸を以て東海に釣りて大魚を

想ふ。誰か謂ふ古今殊なりと。異代調を同うすべし。

得、離ちて之を腊にす、淛河より以東、蒼梧より以北、皆此魚に饜く、詳に莊子に見ゆ。蓋し道を以て人を養ふに喩ふ。

【大意】客心秋曉に積る。因つて遊眺して之を慰めんとすれば、急湍峻岸却つて孤客の心を傷ましむ。往きて七里瀨を過ぐれば、水石上を走りて潺湲たり、日落ちて山に映じ、林茂り鳥鳴く。我れ此景を視て、己の貶謫を悼み、幽隱を期して善道に入らんことを思ふ。ああ我れ既に上皇道德の心を持せり、豈末代人の譏を顧みんや。進んで嚴陵瀨を經るに及び、幽隱して道を以て人を養はんことを想ふこと愈ゝ切なり。古今時を異にすと謂ふなかれ、我れ能く嚴子陵、任公子と隱遁の調を同うするを得べし。

江中の(一)孤嶼に登る　謝靈運

江南歷覽に倦み、江北曠に(二)周旋す。(三)雜を懷ひて道轉た迥く、異を尋ねて(四)景延からず。流を亂りて(五)正絕に趨けば、孤嶼(六)中川に媚ぶ。

【一】孤嶼。溫州の南四里、永嘉江中に在り。

【二】周旋。周遊なり。

【三】雜。一本に新に作る、是なり。

【四】景。日景なり、日の短きを覺えし意。

【五】正絕。兩岸より絕えて續

雲日相輝映し、空水共に澄鮮。靈を表するも(七)物賞するなく、(八)眞を蘊めども誰か傳ふるをなさん。(九)崑山の姿を想像して、(一〇)區中の緣に緬邈たり。始めて信ず(一一)安期の術、養生の年を盡すを得るを。

かざる處、即ち孤嶼。
【六】中川。川の中央。
【七】物。人なり。
【八】眞。仙人なり。
【九】崑山。崑崙山なり。此山に仙人西王母あり。
【一〇】區中の緣。世上の塵緣。緬邈は遙に遠ざかる意。
【一一】安期。古の仙人の名。

【大意】我れ既に江南を歴遊して其景に倦み、更に遠く江北を周遊し、新異の地を尋ぬれば、道愈々遠くして日の暮れ易きを怨む。永嘉江を渡り、正絕の處に到れば、孤嶼中流に立てり。之に登れば雲日相映じ、空水共に澄み、其景愛すべし。神靈を表すこと此の如くなるも、世人之を賞するなく、中に仙人を藏むるも、之を傳述する者なし。余今此に遊び、崑崙山の神仙を想像し、遠く世上の俗緣を離れたるが如きを覺えぬ。是に於て彼の安期生の長生術に由れば、必ず養生の結果天年を盡すを得るを信じぬ。

初めて(一)郡を去る　　謝靈運

(二)彭薛裁に恥を知り、

【一】郡。永嘉郡なり。靈運永嘉郡守たること二年、疾と稱して職を去り。始寧に歸る。

（三）貢公未だ榮を遺れず。或は貪競に優るべきも、豈（四）達生と稱するに足らんや。伊れ予（五）微尚を秉り、拙訥（六）浮名を謝す。（七）廬園棲巖に當て、卑位躬耕に代ふ。己を顧みて自ら許すと雖も、（八）心迹猶ほ未だ幷せず。（九）庸なくして周任を妨げ、疾ありて（一〇）長卿に像たり。娶を畢りて（一一）尙子に類し、（一二）薄游して邴生に似たり。恭しく古人の意を承け、（一三）促裝して柴荊に返る。（一四）絲を牽いて元興に及び、（一五）龜を解いて景平に在り。心に負くこと（一六）二十載、今に於て（一七）將迎を廢す。棹を理めて還期を遄にし、渚に遵ひて

【二】彭薛。彭宣、漢の哀帝の時、大司空となる。王莽政を秉り權を專にするや、上書して骸骨を乞ふ。薛廣德、御史大夫となり、亦骸骨を乞ふ。

【三】貢公。貢禹、漢の宣帝の時、河南令となり、職事を以て府官の責むる所となり、遂に官を去る、元帝の位に卽くや。徵されて諫大夫となり光祿大夫に遷る、上書して生きて鄕里に歸らんことを願ふ。然も官情の縻する所となり、御史大夫となりて卒す、故に未だ榮を遺れずといふ。

【四】達生。眞理に通達せる人。

【五】微尙。己の主義好尙。

【六】浮名。實に合はざる名。

【七】廬園。郡守の官舍を指す。棲巖は棲むべき巖穴。

【八】心迹。心と行とをいふ。

【九】庸。功なり。周任は人名、論語に「周任言へるあり、曰く力を陳べて列に就く、能はざれば止む」とあり。

【一〇】長卿。漢の司馬相如、字は長卿、消渴の疾あり、閑居して仕へず。

【一一】尙子。尙長、字は子平、隱遯して仕へず、子の爲に嫁娶し畢り、家事を勅めて之を斷ち、復た相關するなし。

【一二】薄遊。薄祿を得て仕宦すること。邴生は邴曼容なり、志を養ひて自ら脩め、官となり肯て六百石に過ぎず、輒ち自ら免じ去る。

【一三】促裝。いそぎて旅裝を整ふること。柴荊は柴門荊扉、卽ち己の家。

【一四】絲を牽く。初めて仕ふるをいふ。元興は晉の安帝の年號。

【一五】龜を解く。龜印を解きて官を去ること。景平は宋の廢帝の年號。

【一六】二十載。二十年なり。

【一七】將迎。送迎なり。

(一八)修坰を鶩す。谿を遡りて終に水渉し、嶺に登りて始めて山行す。野曠うして沙岸淨く、天高くして秋月明なり。石に憩ひて飛泉を挹み、林を攀ぢて(一九)落英を搴る。戰勝ちて(二〇)臞者肥え、(二一)流に監みるを止めて停に歸す。是の(二二)義唐の化に卽いて、我が(二三)擊壤の聲を獲たり。

【大意】漢の彭宣、薛廣德は僅に恥を知りて官を辭したるも、貢禹の如きは未だ榮華を遺れたりといふべからず。この三者は世の名利を競貪する者に比すれば、稍優れりと雖も、未だ以て達識の士と謂ふに足らざるなり。我れ素より幽棲の志あり、故に常に拙訥を守りて、名の實に過ぐるを恥ぢ、官舍を以て巖穴に當て微祿を以て農耕に代へ、以て永嘉に郡守たり。既に自ら認めて正しとなせども、心は棲隱に在り身は官に在るを以て、迹心と一致せりと爲すべからず。既に無能は周任の言に違ひ、疾を抱くは長卿に像、子の爲に嫁娶を終れるは向子と同じく、薄官は邴生に似たり。故に此の四者に倣ひて官を退き、旅裝を整へて鄕に歸るなり。回想すれば、始めて官に元興に就き、職を景平に辭す。其間正に二十年なり。今官を退きて上官を送迎するの禮を廢するを得たり。因つて舟を整へて歸路に就き、長途を涉り、溪山を越

(一八) 修坰。長野なり。
(一九) 落英。落花なり。
(二〇) 臞者。痩せたること。
(二一) 流に云云。文子に「流潦に監るなくして止水に監るは、其の心を保ちて外に蕩せざるを以てなり」とあり。停は定なり。卽ち止水なり。
(二二) 義唐。伏義及び唐堯なり、共に太古の帝。
(二三) 擊壤。堯の時天下無事にして老人擊壤の歌を作れり。

え、泉を酌み花を摘みて自ら樂む。嘗て心に幽棲の道を欲し、亦富貴の道を欲し、二者胸中に戰ひしが、今幽棲の道勝てり。故に嘗て瘦せたるも今肥えたり。又止水に監みて止足の道を悟れり。是に於てか伏義唐堯の化に浴し、鼓腹擊壤の民となるを得たり。

初めて(一)石首城を發す　謝靈運

(二)白珪は尙ほ磨くべし。(三)斯言は緇をなし易し。(四)中孚の爻を抱くと雖も、猶は(五)貝錦の詩を勞す。寸心若し亮ならずんば、(六)微命察するに絲の如し。(七)日月光景を垂れ、(八)貸を成して遂に茲を兼ねしむ。出宿して京畿に薄り、晨に裝ひて(九)曾飇を搏つ。重ねて平生の別を經、再び朋知と辭す。故山日に已に遠く、風波豈還時あらんや。(一〇)迢迢

【一】石首城。石頭城なり。建康の西界、臨江城なり。ここに京師といふ。謝靈運疾を謝して東に歸る。會稽太守孟顗乃ち其異志を表す。靈運馳せて京師に往き。闕に詣りて上表す、太祖其誣を知れども東に歸らしむるを欲せず、以て臨川內史となす。

【二】白珪。白玉なり。詩經に「白珪の玷けたるは尙ほ磨くべし、斯の言の玷けたるは爲むべからず」とあり。

【三】斯言。惡言をいふ。緇は黑色、汙染をいふ。

【四】中孚。忠信なり。易經に「中孚以て貞に利し、乃ち天に應ず」とあり。

【五】貝錦。詩經に「萋たり菲たり、是の貝錦を成す」とあり。鄭玄曰く「讒人集りて己が過を作し以て罪を成すは、猶ほ女功の彩色を集めて以て錦文を成すが如し」と。

【六】微命。微弱なる生命。

【七】日月。天子に喩ふ。

【八】貸。恩惠なり。茲とは內史を指す。

【九】曾飇。高風なり。

【一〇】迢迢。遠き貌。

たる萬里の帆、(二)茫茫として終に何にか之く。游んでは當に(三)羅浮に行くべく、息ひては必ず(三)盧霍を期す。海を越えて(四)三山を陵ぎ、湘に游んで(五)九嶷を歴。(六)聖を欽ふこと旦暮の若く、(七)賢を懷ひて亦悽其す。(八)皎皎たる明發の心、歳寒の爲に欺かれず。

【大意】玉の缺けたるは磨きて之を滅すを得れども、惡言の身に及ぶは汙染を爲し易く、之を去ると極めて難し。故に我れ忠信の德を抱けるも、讒人ありて巧に此罪を構成せり。我が心若し人の爲に信明せられずんば、身命の危きこと絲の將に絶えんとするが如し。幸にして天子恩惠を垂れ、我に生命を貸し、更に内史の官を兼ぬるを得しむ。因つて京畿を出で曉風を冒して往き、重ねて朋友と別れ波に隨つて去る。一たび臨川郡に至らば、豈復た故山に歸るを得んや。江水萬里之く所を知らず。羅浮廬霍の諸山に游息すべく、海を越えては三山に登り、湘江を渡りては九嶷山を歴べく、旦暮に聖賢を欽慕して、心を傷ましむべし。然れども吾が清明の心は松柏と節操を同じくし、歳寒の爲に欺損することなかるべし。(讒人に遇ふも己を欺辱せざるに喩ふ。)

【二】茫茫。廣大の貌。
【三】羅浮。二山の名。
【三】盧霍。二山の名。
【四】三山。蓬萊、方丈、瀛洲の三神山。
【五】九嶷。山の名。舜ここに葬る。
【六】聖。舜を指す。
【七】賢。屈原を指す、屈原は湘江に沈んで死す。悽其は心を痛ましむること。
【八】皎皎。明かなる貌。明發は早曉なり。

(一)道路にて山中を憶ふ　謝靈運

(二)采菱調急なり易く、(三)江南歌緩ならず。楚人心昔絶え、(四)越客腸今斷ゆ。斷絶念を殊にすと雖も、倶に(五)歸慮の款をなす。鄕を存して爾が思積り、山を憶ひて我れ(六)憤懣す。(七)栖息の時を追尋すれば、偃臥して縱誕に任せ、性を得て外求にあらず、自ら已めて誰が爲にか纂がん。秋夕の長きを怨みず、恆に夏日の短きに苦む。流に濯げば浮湍激し、陰に息ひて(八)密竿に倚る。故を懷ひて新歡亘く、悲を含んで(九)春嘆を忘る。(一〇)悽悽たる明月の吹、(一一)惻惻たる廣陵の散。(一二)殷勤に危柱に訴へ、慷慨して(一三)促管に命ず。

【大意】我れ臨川に赴かんとする道中、採菱江南、楚越の歌曲、或は急に或は緩なるを聞き、坐に斷腸の思をなす。昔楚人亦此聲を聞きて心魂を摧きしといふ。楚人と我れと念を異にすと雖も、鄕

【一】道路。臨川郡に往く途中にて始寧の山中を憶ふなり。
【二】采菱。楚人の歌曲の名。
【三】江南。楚越の歌曲の名。
【四】越客。靈運自ら謂ふ。
【五】歸慮。鄕里に歸りたき思。
【六】憤懣。怨嘆なり。
【七】栖息。隱居なり。
【八】密竿。密生せる竹。
【九】春嘆。春暖なり。
【一〇】悽悽。哀聲なり。明月吹は琴曲の名。
【一一】惻惻。悲傷なり。廣陵散は琴曲の名。
【一二】殷勤。ねんごろなる貌。危柱は琴をいふ。
【一三】促管。急管なり。笛をいふ。

山を懷ふの誠は則ち一なり。飜つて幽居の時を追想すれば、一室に高臥して縱恣傲誕し、靜を好むの本性を全うし得て外に求めず、足るを取りて自ら止め、人の爲に繼がず。秋夜樂むべし。故に其長きを怨みず。夏時遊ぶべし。故に其日の短きを苦む。流に濯げば湍水激し、密竹に倚りて涼を納る。今や則ち然らず。故山を懷ひて新歡をなすを得ず、常に悲を含んで春暖を忘る。僅に心を琴笛に託し、悲哀の韻を發するのみ。

(一)彭蠡湖口に入りて作る　謝靈運

客游して水宿に倦む。風潮具に論じ難し。洲島驟ゝ廻合し、(二)圻岸屢ゝ崩奔す。月に乘じて(三)哀狖を聽き、露を浥めば(四)芳蓀馥し。春晩れて綠野秀で、巖高うして白雲屯る。千念日夜に集り、萬感朝昏に盈つ。崖を攀ぢて(五)石鏡に照し、葉を牽いて(六)松門に入る。(七)三江事多く往き、(八)九派理空しく存す。靈物珍怪を吝み、異人精魂を祕す。(九)金膏明光を滅し、(一〇)水碧流溫を綴む。

【一】彭蠡。湖の名。臨川郡に至る途中に在り。
【二】圻岸。川岸なり。
【三】哀狖。悲しき猿聲。
【四】芳蓀。香草の名。
【五】石鏡。山の名。
【六】松門。澗の名。
【七】三江。江流なり。
【八】九派。江水の分派。
【九】金膏。仙藥なり。
【一〇】水碧。水玉なり。流溫は溫潤なり。綴は一本に輟に作る。
【一一】千里の曲。黃鵠一たび遠別し、千里顧みて徘徊す云云

徒に㈡千里の曲を作せば、㈢絃絶えて念彌ゝ敦し。

【大意】われ日日水路を歴て風潮の變述べ盡し難し。洲島の廻合し、岸崖の崩壞するを見、月下に猿聲を聞き、露を挹んで芳香を嗅ぎ、綠野の秀色、巖上の屯雲を見れば我をして千念萬感往來して絶えざらしむ。山に登り澗を渉り、三江九派已に之を經て、空しく其狀を心に留むるのみ。山中に靈怪神異の人多きも、皆其精魂を祕して見るべからず。江中に金膏水玉あれども、亦皆明光と溫潤とを滅して見るべからず。因つて憂を消さんとして千里の曲を奏すれば、曲終りて別念いよいよ厚し。

の詩。

【三】絃絶。曲の終るをいふ。

㈠華子崗に入る。是れ㈡麻源の第三谷なり　謝靈運

㈢南州實に炎德あり、㈣桂樹寒山を陵ぐ。㈤銅陵碧澗に映じ、㈥石磴紅泉瀉ぐ。既に隱淪の客を枉げ、亦㈦肥遁の賢を棲ましむ。險徑測度する

【一】華子崗。華子期は商山四皓の一たる角里先生の弟子にして、此山頂に居る、故に名づく。

【二】麻源。山の名。

【三】南州。南方の國。

【四】桂樹。木の名。

【五】銅陵。山の名。

なく、天路（八）術阡にあらず。遂に羣峯の首に登れば、（九）邈たること雲煙に升るが若し。（一〇）羽人絕えて髣髴、（一一）丹丘徒に（一二）空筌。（一三）圖牒復た摩滅し、（一四）碑版誰か聞き傳へん。百世の後を辨ずるなし。安んぞ（一五）千載の前を知らん。且く（一六）獨往の意を申べ、月に乘じて（一七）潺湲を弄す。恆に（一八）俄頃の用に充つ。豈（一九）古今の爲に然らんや。

【六】石磴。石段なり。
【七】肥遁。隱遯なり。
【八】術阡。道なり。
【九】邈。遙なる貌。
【一〇】羽人。仙人なり。髣髴は見えざること。
【一一】丹丘。仙人の居る處。楚辭に「羽人を丹丘に仰ぐ」とあり。
【一二】空筌。空しく迹を留むるのみとの意。
【一三】圖牒。仙書なり。
【一四】碑版。仙書なり。
【一五】千載。千年なり。
【一六】獨往。自然に任せて世を顧みざる心。
【一七】潺湲。水聲なり。
【一八】俄頃。暫時なり。
【一九】古今。長久といふが如し。

【大意】南國は炎熱にして桂樹冬に榮え、銅陵の山碧澗と相映じ、石磴の間に紅泉湧く。山中に嘗て隱居の人あり。山徑險高にして測るべからず、天路の道なきが如し。我れ羣峯の頂に登れば、高遠にして雲煙に升るが如く、仙人華子期復た見るべからず。空しく其跡を留むるのみ。仙書亦亡滅して傳はらず。夫れ百世の後知るべからず。千歲の前豈知るべけんや。我唯無爲の心を以て川流を弄し、暫時の樂に充つ。久長の計をなすにあらざるなり。

卷の第十四

詩　戊

行旅下

北のかた(一)洛に使す　　顏延年

(二)服を改めて徒旅を飭へ、路に首つて險艱を躡む。楫を振ひて吳洲を發し、馬に秣ひて楚山に陵る。塗(三)梁宋の郊に出で、道(四)周鄭の間に由る。前んで(五)陽城の路に登り、日夕(六)三川を望む。在昔(七)期運輟み、(八)經始聖賢闊し。(九)伊瀔津濟絶え、臺館(一〇)尺椽なし。宮陛巢穴多く、城闕雲煙を生ず。(一一)王猷八表に升り、(一二)嗟行方に暮年。陰風(一三)涼野に振ひ、飛雲(一四)窮天に瞀し。塗に臨んで未だ引むに及ばず。置酒して慘んで言なし。

【一】洛。洛陽なり。宋書に「延之は豫章の世子の中軍行參軍たり、義熙十二年、宋の高祖北伐して宋公の授あり、府一使を遣し殊命を慶す、延之洛陽に至り、道中にて詩一首を作る、文辭藻麗なり、時に年三十二」とあり。

【二】服云云。旅裝を整ふること。徒旅は鹵簿。

【三】梁宋。魏宋の二國、河南省の東部。

【四】周鄭。二國の名、河南省の中部。

【五】陽城。縣名、汝南郡に在り。

【六】三川。河洛伊なり。河南郡に在り。

【七】期運。王者代興の期運なり。

(一五)隱憫して徒御悲み、(一六)威遲して良馬煩ふ。
遊役(一七)芳時を去り、(一八)歸來屢ゝ徂き愆る。(一九)蓬
心既に已ぬるかな、(二〇)飛薄殊に亦然り。

【大意】旅裝を整へ險難を冒し、江を渡り山に登り、梁宋周鄭の道を經て、夕に洛陽を望めば、晉室久しく衰へて經綸の士なく、津梁宮館悉く戰亂に壞破し、狐兎の巢穴と化し、寒煙の升るを見るのみ。今や宋業八方に輝く。我乃ち之を慶せんが爲、歳寒の時に方りて洛陽に向へば、寒風飛雲天地に滿ち、徒卒悲みて馬進まず。吾が行既に芳春の時に及ばず、歸期亦本意に違ふこと多かるべし。吾れもと俗に隨ふの心あり蓬の直達ならざるが如きも今や事已に已めり。身の飄迫すること亦蓬と相似たり、悲むべきかな。

【八】經始。國家を經綸すること。
【九】伊瀔。河南省の二水の名。津濟は渡津。
【一〇】尺椽。タルキの斷片。
【一一】王猷。王業なり。八表は八方。宋業の日に隆なるをいふ。
【一二】嗟行。宋の王業を嗟稱しつつ行くこと。暮年は冬季。
【一三】涼野。寒野なり。
【一四】窮天。窮冬の天。
【一五】隱憫。憂歎の貌。徒御は徒從。
【一六】威遲。馬行いて速ならざる貌。
【一七】芳時。春なり。
【一八】歸來云云。歸來に當りても屢本意に違へるをいふ。
【一九】蓬心。俗に隨ふ心。
【二〇】飛薄。飄迫なり。

(一)還りて梁城に至る作　顏延年

【一】還。洛陽より還るなり。

(二)眇默として軌路長し、(三)憔悴して征戍勤む。昔邁きしとき(四)徂師に先だち、今來るとき歸軍に後る。策を振げて東路を睠み、(五)傾側して羣に及ばず。徒を息へて顧つて將に夕ならんとす。梁陳の(六)分を極望す。(七)故國喬木多く、空城寒雲凝る。(八)丘隴郛郭に塡ち、銘誌滅えて文なし。木石(九)幽闥を扃し、黍苗高墳に延ぶ。惟ふ彼の(一〇)雍門子、吁嗟す孟嘗君、愚賤同じく煙滅す。尊貴誰か獨り聞かん。曷爲れぞ久游の客たる、憂念坐に自ら殷なり。

【大意】歸路遙遠にして我れ行旅に苦む。嘗て洛陽に使する時は、北伐の軍に先だちしも、今歸るに方りて歸軍に後る。鞭を揚げて疾く歸らんとするも、道路險阻にして進んで其羣に及ぶ能はず。夕に遠く望めば、梁城に喬木多く寒雲の聚るを見る。進んで此に至れば、墳墓纍纍たるも、銘文磨滅して見るべからず、木石交横して墓門を塞ぎ、黍稷墓上に茂れり。因つて雍門周の孟嘗君の將來を嗟きたるを思ひ、貴賤賢愚皆死を同うするを嘆じぬ。況んや我れ既に久游の客となり、行路の間に苦めるをや。之を思ひて憂念殊に深し。

【二】眇默。遠き貌。軌は車跡。
【三】憔悴。憂へて痩せ衰ふること。征戍は行き守るなり。
【四】徂師。北征する軍。
【五】傾側。道路の險阻なるをいふ。
【六】分。境界なり。
【七】故國。梁城をいふ。喬木は高樹。
【八】丘隴。墳墓なり。郛郭は郊外なり。
【九】幽闥。墓門なり。
【一〇】雍門子。雍門周、孟嘗君に見えて曰く、「臣竊に悲む、千秋萬歲の後、墳墓に荊棘を生じ、行人之を見て、孟嘗君の尊貴乃ち是の如きかと曰はんことを」と。

(一)始安郡より都に還るとき、(二)張湘州と巴陵城樓に登りし作

顏延年

(三)江漢楚望を分ち、(四)衡巫南服を奠め、(五)三湘洞庭に淪ひ、(六)七澤荊牧に藹たり。塗を經て(七)舊軌を延ひ、(八)闉に登りて川陸を訪ふ。水國地險を周り、河山信に重複。却いて(九)雲夢の林に倚り、前んで(一〇)京臺の囿を瞻る。(一一)淸雰岳陽に霽れ、(一二)曾暉瀾澳に薄る。悽たる矣遠きよりする風、傷ましい哉千里の目。萬古往還を陳じ、百代起伏を勞す。存沒竟に何人ぞ、(一三)炯介明淑に在り。請ふ上世の人に從ひ、歸り來りて桑竹を蓺ゑん。

【一】始安郡。延年始安太守より徵されて中書侍郎となる。都は建業なり。
【二】張湘州。湘州刺史張劭。
【三】江漢。二川の名。左傳に「楚の昭王曰く、江漢雎漳は楚の望なり」とあり。
【四】衡巫。二山の名。南服は南方の地。
【五】三湘。江湘沅の三川をいふ。洞庭は巴陵郡に在る湖。
【六】七澤。楚に七澤あり。荊牧は楚郊なり。藹は草の茂生する貌。
【七】舊軌。もと經し車迹。延は迫なり。
【八】闉。城曲の重門。
【九】雲夢。楚の大澤の名。
【一〇】京臺。楚の遊觀の地。京疑ふらくは荊に作るべし。
【一一】淸雰。淸氣なり。
【一二】曾暉。日光なり。瀾澳は水隈なり。
【一三】炯介。耿介に同じ、固く節操を執り守ること。明淑は明善。

【大意】城樓より四方を望めば、江漢の水洋洋として楚國の望をなし、衡巫の二山南服の地を鎭じ、

三湘の水洞庭湖中に注ぎ、七澤の草萋萋として茂るを觀る。始安郡を發し、舊路を經て此地に到るまで、時に城門に登りて山水を望めば河山重複し、後に雲夢澤を見、前に荊臺の園を見、雲岳陽に散じ、日光水隈を照し、悲風遠きより至り、我をして心目を傷めしむ。この地古來幾變遷、人亦存沒幾人なるを知らず。ただ耿介の士獨り其名を留むるのみ。我れ亦古賢の迹に從ひ、官を辭して退耕を事とせん。

(一)都に還る道中の作

鮑明遠

昨夜(二)南陵に宿り、今旦(三)蘆洲に入る。客行日月を惜む。(四)崩波留るべからず。星を侵して早路に赴き、(五)景を畢へて前儔を逐ふ。(六)鱗鱗として夕雲起り、(七)獵獵として晚風遒なり。沙を騰げて黃霧を鬱にし、浪を翻して白鷗を揚ぐ。艫に登りて(八)淮甸を眺め、泣を掩ひて(九)荊流を望む。目を絕めて平原を盡し、時に遠煙の浮ぶを見る。倏悲坐に還つて合ひ、俄思(一〇)兼秋より甚し。

【一】都。揚州をいふ。明遠臨海王の參軍たり、荊州より還るなり。
【二】南陵。縣名。
【三】蘆洲。地名。
【四】崩波。奔波といふが如し。
【五】景。日景なり。前儔は先きに行きし仲間。
【六】鱗鱗。雲の貌。
【七】獵獵。風の聲。
【八】淮甸。淮水の地方、揚州を指す。
【九】荊流。楚水、臨海王を憶ふなり。
【一〇】兼秋。三秋なり。秋は三

未だ嘗て戸庭を違らず、安んぞ能く千里に游ばん。誰か古節に乏しく、此の（二）越郷の憂を貽さしむる。

個月あり。

【二】越郷。郷里を去ること。

【大意】昨夜は南陵縣に宿りて、今朝は蘆洲に到れり。日月を惜みて疾く都に還らんと務むる故、奔走して暫も留まるを得ず。夙に起きて途に上り、前侶を逐ひて夕に至る。風雲急疾にして沙を揚ぐること黄霧の如く、浪を飜すこと白鷗の如し。船上より遙に揚州を望み、又顧みて荊州（臨海王の居る處）を思ひ、倏忽俄頃の際、悲思既に心に合し、三秋の悲を經るが如し。我れ未だ嘗て家を離れざりしに、今忽ち千里の客となる。何ぞ悲まざるを得んや。然れども是れ決して他人の罪にあらず、我に古人の高節なきを以て、（官爵を辭して隱棲する能はざるをいふ）かくは離郷の憂に遇へるなり。

（一）宣城に之かんとし（二）新林浦を出で（三）版橋に向ふ

謝玄暉

江路西南に永く、

【一】宣城。郡名、玄暉宣城郡の太守たらんとするなり。

【二】新林浦。浦の名。

(四)歸流東北に鶩す。(五)天際歸舟を識り、雲中江樹を辨ず。旅思(六)搖搖に倦み、孤游昔已に屢〻す。既に祿を懷ふの情を懽ばしめ、復た(七)滄洲の趣に協ふ。(八)囂塵茲より隔り、賞心此に於て遇ふ。(九)玄豹の姿なしと雖も、終に南山の霧に隱れん。

【大意】吾れ宣城に赴任せんとし、長江を西南に遡れば、水路遠くして盡きず、江水獨り海に歸向し、洋洋として東北に流る。江廣くして一望空濶、ただ歸舟江樹を天雲の際に望むのみ。われ既に各地に轉轉して、客遊に倦み、獨行すること亦屢〻なり。既に祿を得て宦せるを歡べるに、今宣城太守となり、閑散にして風景よき地に赴くは、復た隱居の趣をも幷せ得たりといふべし。此に俗塵を離れて會心の事に遇ふ。我に玄豹の姿なしと雖も、願くは宣城に隱居して、世の害を免れんことを。

【三】販橋。一に板橋に作る。販板相通ずるなり。浮橋を結んで水を渡す處。
【四】歸流。東海に適歸する江流。
【五】天際。此二句は江水の極めて廣きをいふ。
【六】搖搖。不定の貌。
【七】滄洲。隱者の居る處。
【八】囂塵。俗塵といふが如し。
【九】玄豹。列女傳に『陶荅子陶を治むること三年、名譽興らず、家富三倍す、其妻兒を抱いて泣く、姑怒りて以て不祥となす、妻曰く、「妾聞く南山に玄豹あり、霧に隱れて七日食はず、以て其衣毛を澤し其文章を成さんと欲す、故に藏れて以て害に遠ざかる、犬豕に至るまで肥以て之を取らば、禍に逢ふこと必せりと」と、期年にして荅子の家果して盜誅せらる』とあり。

(一)敬亭山　謝玄暉

茲山百里に亙り、(二)合沓として雲と齊し。(三)隱淪既已に託し、(四)靈異居然として棲む。上に干して白日を蔽ひ、下に屬りて廻谿を帶ぶ。交藤荒れて且つ蔓ひ、(五)樛枝聳えて復た低る。獨鶴方に朝に唳き、(六)饑鼯此に夜啼く。(七)渫雲已に漫漫たり、多雨亦(八)淒淒たり。我が行(九)組を紆ふと雖も、兼ねて(一〇)幽蹊を尋ぬるを得たり。源に縁る殊に未だ極らず、歸徑窅くして迷ふが如し。要して(一一)奇趣を追はんと欲し、此に即いて(一二)丹梯に陵る。皇恩竟に已んぬる矣、茲理庶くは睽くなからんことを。

【一】敬亭山。宣城縣の北十里に在り。
【二】合沓。高き貌。
【三】隱淪。隱逸なり。
【四】靈異。靈仙なり。居然は安んずる貌。
【五】樛枝。曲れる枝。
【六】饑鼯。飢ゑたるムササビ。
【七】渫雲。舒びひろがれる雲。漫漫は廣布する貌。
【八】淒淒。寒冷の貌。
【九】組。綬なり。
【一〇】幽蹊。山徑なり。
【一一】奇趣。仙奇なり。
【一二】丹梯。山峰の雲霞に入る處。

【大意】此山は横には百里に亙り、縱には高く雲に入る、中に隱者あり、靈仙ありて棲めり。藤蔓交り荒れ、曲枝高低し、鶴朝に唳き鼯夜號び、雲まとひ雨そそぐ。吾が此行郡守（宣城太守）の組綬を帶ぶと雖も、然も兼ねて幽隱の迹を尋ぬるを得たり。山徑を尋ぬること、未だ深からざれど

も、歸路遠くして迷はんと欲す。然も仙奇を求めんと欲して、更に山巓に登りぬ。天子の恩我に於て終に止みぬ。この仙奇を求むの理、ただ乖くなからんことを庶幾ふのみ。

(一)休沐重ねて還る道中

謝玄暉

(二)薄游して第く(三)告に從ふ。思閑にして罷め歸らんことを願ふ。(四)卭に還りて歌賦似たり、(五)汝に休ひて車騎非なり。(六)灞池別るべからず、(七)伊川重ねて違り難し。(八)汀葭稍〻靡靡たり、(九)江菼復た依依たり。田鶴遠く相叫び、(一〇)沙鴇忽ち爭ひ飛ぶ。雲端に楚山見え、(一一)林表に吳岫微なり。試に(一二)征徒と望めば、鄕涙盡く衣を霑す。此の(一三)盈罇の酌に賴り、景を含んで(一四)芳菲を望む。我に問ふ何事にか勞する、(一五)霑沐して淸徽を仰ぐ。志

【一】休沐。休暇なり。還とは丹陽より還るなり。丹陽は卽ち金陵なり。
【二】薄游。薄宦なり。
【三】告。休沐なり。
【四】卭。蜀の臨卭なり。漢の司馬相如臨卭令と相善し。相如往きて臨卭の都亭に舍す。
【五】汝。後漢の許劭は汝南の人なり、郡の功曹たり、同郡の袁紹は濮陽令たり、車徒甚だ盛なり、將に界内に入らんとして曰く、吾が輿服豈許子をして見しむべけんやと、遂に單車を以て家に歸る。
【六】灞池。池の名、長安にあり、漢の枚乘に臨灞池遠訣賦の作あり。
【七】伊川。川の名、洛陽の附近にあり。
【八】汀葭。渚に生ずるアシ。靡靡は風に隨ふ貌。
【九】江菼。水邊に生ずるヲギ。依依は風に隨ふ貌。
【一〇】沙鴇。鴇は水鳥の名。
【一一】林表。林外なり。吳岫は吳山なり。
【一二】征徒。行旅を倶にする從者。
【一三】盈罇。酒を滿せる樽。

狹くして(一六)軒冕を輕んじ、恩甚しくして(一七)重闈を戀ふ。
(一八)歳華春酒あり、(一九)初服郊扉に偃せん。

【一四】芳菲。春景なり。
【一五】霑沐。天子の恩澤に浴すること。淸徽は淸美の道。
【一六】軒冕。車冠なり。官位に喩ふ。
【一七】重闈。天子の重門。
【一八】歳華。春景色をいふ。
【一九】初服。未だ仕へざる以前の服。

【大意】吾れ休暇を賜りて歸らんとするに臨み、坐に骸骨を乞ひて罷め歸らんことを思ふ。我れ鄕に歸るも、歌賦は司馬相如の妙なるに似たれども、車騎の盛は袁紹の如くなる能はざるを恥ぢ、灞池伊川亦別れ去り難きを感ず。(洛陽長安二京の別れ去り難きを以て、丹陽の去り難きに喩ふるなり)途に荻葭の風に靡くを見、水禽の叫ぶを聞き、呉楚の山岳を望み、因つて望鄕の涙を灑ぎ、僅に樽酒を酌み春色を眺めて、鄕愁を解くのみ。我れの心を勞する所以は、天子の恩澤に浴するが爲なり。我もとより官位を重んぜざれども、主恩の渥きを思ひては、宮闕を戀はざる能はず。願くは休沐により、官を退き、此の春華の時に方り、春酒を酌みて故居に高臥せんことを。

晩に(一)三山に登り、還りて(二)京邑を望む　謝玄暉

(三)灞涘に長安を望

【一】三山。山の名、江寧縣の北十二里にあり。
【二】京邑。丹陽。卽ち金陵。

み、(四)河陽に京縣を視れば、白日(五)飛甍に麗き、(六)參差として皆見るべし。(七)餘霞散じて綺を成し、澄江靜にして練の如し。喧鳥春洲を覆ひ、(八)雜英芳甸に滿つ。去りて方に(九)滯淫し、懷ひて歡宴を罷む。(一〇)佳期悵として何れの許ぞ、淚下りて流霰の如し。情ありて郷を望むを知る、誰か能く鬒變せざらんや。

【三】灞涘。灞水の岸、長安は漢の西京。ここは丹陽に喩ふ。
【四】河陽。縣名。京縣は洛陽ここは丹陽に喩ふ。
【五】飛甍。高き棟瓦。
【六】參差。高低不齊の貌。
【七】餘霞。日沒後のユフヤケ。綺はアヤギヌ。
【八】雜英。色色の花。芳甸は春野なり。
【九】滯淫。久留なり。
【一〇】佳期。郷に歸るの期。

【大意】昔王粲は七哀詩を作りて、「南、灞陵の岸に登り、首を回らして長安を望む」と詠じ、潘岳は河陽縣の詩を作りて、「領を引いて京室を望めば、南路伐柯に在り」と詠じぬ。今我れ之に倣ひ、三山より丹陽を望めば、丹陽の屋瓦參差として雙眸の中に收まる。日落ちて紅霞錦綺の如く、江流靜にして練の如く、花鳥の春郊に相雜るを見る。我れ郷を去りて既に久しく、郷を懷ひて歡宴をなす能はず。歸期亦何れの時なるを知らず、淚下りて霰の如し。ああ有情の人望郷の愁を抱く者誰か鬒變じて白とならざらんや。

(二)京路夜發　謝玄暉

【二】京路云云。丹陽より宣城郡に行くなり。

(二)擾擾として夜裝を整へ、(三)肅肅として徂兩を戒む。曉星正に(四)寥落たり、晨光復た(五)泱漭たり。猶ほ餘露の團なるを霑し、稍朝霞の上るを見る。故郷(六)邈として已に夐に、山川倏く且つ廣し。(七)文奏方に前に盈ち、人を懷ひて心賞を去る。躬を勑へて每に(八)跼蹐し、恩を瞻て唯(九)震蕩す。行いて路の長きに倦めども、(一〇)歸鞅を稅すに由なし。

【大意】われ宣城に之かんとし、夜旅裝を整へて丹陽を發すれば、夜將に明けんとして星稀に、日光未だ明ならず、草露尙ほ團團として東天に紅霞を見る。道長遠にして山川相錯る。思ふに郡に至るの後は、簿書定めて前に盈つらん。京邑の故人を懷へば亦既に心賞に違ふ。我れ常に自ら戒愼し、皇恩を思ひて恐懼す。故に行路長しと雖も、駕を駐めて休息する能はず。

【二】擾擾。混雜する貌。
【三】肅肅。嚴敬の貌。徂兩は往く車輛。
【四】寥落。星の稀なる貌。
【五】泱漭。不明の貌。
【六】邈。遠き貌。
【七】文奏。簿書なり。
【八】跼蹐。愼み恐るること。
【九】震蕩。畏懼なり。
【一〇】歸鞅。宣城に歸る駕。

荆山を望む

江文通

(一)義を奉じて江漢に至り、始めて(二)楚塞の長きを知る。南關(三)桐栢繞り、西岳(四)魯陽出づ。寒

【一】義を奉ず。義を慕ふといふが如し。江漢は荆楚の境に在る二川の名。
【二】楚塞。楚地なり。

郊留影なく、秋日清光を懸く。悲風重林を橈し、雲霞川漲肅し。(五)歳晏れて君如何、(六)零涙衣裳を霑す。(七)玉柱空しく露に掩はれ、金樽坐に霜を含む。一たび(八)苦寒の奏を聞かば、再び(九)豔歌をして傷ましめん。

【三】桐栢。山の名。
【四】魯陽。山の名。
【五】歳晏。年老いたるに喩ふ。君とは文通自ら謂ふ。
【六】零涙　落涙なり。
【七】玉柱。琴なり。
【八】苦寒。古の歌曲の名。
【九】豔歌。古の歌曲の名。

【大意】吾れ建平王の高義を慕ひて楚地に來り、(時に文通、建平王景素に五經を授く。高義を慕ふとは王を尊んで言へるなり)始めて楚地の廣大なるを知る。南には桐栢山の關塞をなすあり、西には魯陽山の聳ゆるあり。今や時正に秋、郊野蕭條として片影を留めず、天日澄みて光輝清く、風雲山川を振ひて寒し。我れ年老いて此の悲秋に遇ひ、涙流れて衣裳を沾し、琴を彈じ酒を酌むも、霜露の氣に勝つ能はず。此時一たび苦寒の曲を聞かば、則ち美豔の歌をして亦悲傷せしめん。

旦に(一)漁浦潭を發す　丘希範

(二)漁潭霧未だ開けず、
(三)赤亭風已に颺る。

【一】漁浦潭。富春の東三十里にあり。希範新安郡太守となり、此潭を經て宿し、明日早く發し、中流に至りて此詩を作る。

(三)櫂歌中流に發し、(四)鳴鞞沓障に響く。村童忽ち相聚り、野老時に一望す。詭怪石象を異にし、嶄絶峰狀を殊にす。(五)森森として荒樹齊しく、(六)析析として寒沙漲る。藤垂れて島陟り易く、崖傾いて嶼傍ひ難し。信に是れ永く幽棲せん、豈徒暫く淸曠なるのみならんや。(七)坐嘯昔委するあり、(八)臥治今尚ふべし。

【大意】 旦に漁浦潭を發すれば、霧深く罩めて未だ開けず、赤亭山に風の吹き颺るを見る。中流に櫂歌を揚げ、山中に鞞を鳴らして興すれば、村童野老集りて之を見る、純朴の風以て見るべし。潭には怪石ありて各象を異にし、山は峻嶮にして其狀同じからず。野樹長密し寒風沙を拂ひ、藤垂れて島に陟ること易く、崖の傾く所は又往き難し。誠に永く幽棲すべき好地にして、ただ一時淸遊すべきのみにあらず。坐嘯の事昔人既に賢才に委任したり。臥治の事我今自ら庶幾ふ所なり。

【二】赤亭。山の名。
【三】櫂歌。櫂を鼓して歌ふこと。
【四】鳴鞞。鞞は小鼓なり。沓障は重疊せる山。
【五】森森。長密の貌。荒樹は野樹なり。
【六】析析。風の聲。
【七】坐嘯。後漢の岑晊、字は公孝、幹國の器あり、太守成瑨請ひて功曹となす、時に諺つて曰く、南陽太守岑公孝、弘農成瑨但坐嘯と。
【八】臥治。漢の武帝、汲黯を拜して淮陽太守となさんとす。黯受けず、帝曰く、君淮陽を薄しとするか、顧ふに淮陽の吏人相得ず、朕ただ君の重きを得て臥して之を治めしめんと。

早に(一)定山を發す　沈休文

(二)夙齡遠壑を愛す、(三)晚沿奇山を見る。峰を綵虹の外に標げ、嶺を白雲の間に置く。傾壁忽ち斜に竪ち、絕頂復た孤り圓なり。海に歸して流(四)漫漫たり、浦を出でて水(五)濺濺たり。野棠開いて未だ落ちず、山櫻發いて然えんと欲す。歸るを忘れて(六)蘭杜に屬し、祿を懷ひて(七)芳荃に寄す。眷みて言に(八)三秀を採り、徘徊して九仙を望む。

【一】定山。山の名、休文東陽太守となり、定山に宿して早發す。
【二】夙齡。少年の時。
【三】晚沿。沿は臨なり。晚年に官職に臨むこと。
【四】漫漫。平流の貌。
【五】濺濺。流急なる貌。
【六】蘭杜。香草の名。
【七】芳荃。香草の名。
【八】三秀。仙草なり。

【大意】われ少年の時より此山（定山）を見んことを思ひしが、今晚年に至り赴任の途始めて之を見るを得たり。峯嶺高く雲霓の外に聳え、崖壁斜に立ち、頂は孤圓なり。江水其下を流れ、濺濺として海に入る。棠櫻花を開いて其色燃ゆるが如し。我が心蘭杜に屬して歸るを忘れ、祿を懷ひて去らんとするも、永く其心を芳荃に寄せて去るに忍びず。願くは此山に靈草を採り、之を服して九仙の道を得んことを。

（一）新安江水至つて清く、淺深にして底を見る（二）京邑の游好に貽る

沈休文

眷みて言に（三）舟客に訪ふ。（四）茲川信に珍とすべしと。（五）洞徹深淺に隨ひ、（六）皎鏡冬春なし。千仞（七）喬樹を寫し、百丈（八）游鱗を見る。（九）滄浪も時に濁るあり、（一〇）清濟も涸れて津なし。豈若かんや斯に乘りて去り、俯して石の（一一）磷磷たるに映ぜんには。紛として吾れ（一二）囂滓を隔つ、寧んぞ衣巾を濯ぐを假らんや。願くは（一三）潺湲の水を以て、

（一四）君が纓上の塵を霑さん。

【大意】休文、齊の文惠太子（武帝の子）に親任せられ、其家令となり、吏部郎に累遷し、出でて東陽太守となる、此詩蓋し其途中の作なり、吾れ顧みて同舟の客に謂つて曰く、此川信に珍重すべし。深淺を論ぜず共に澄徹にして、清明なること春冬の別なく、千仞の高樹も影を水底に寫

【一】新安江。十洲記に「桐廬縣、新安東陽の二水ここに合し、仍つて東流して浙江となる」とあり。

【二】京邑。丹陽、即ち金陵なり。游好は朋友。

【三】舟客。同舟の客。

【四】茲川。新安江をいふ。

【五】洞徹。澄みて底の見ゆること。

【六】皎鏡。清明なること鏡の如きをいふ。

【七】喬樹。高き樹。

【八】游鱗。游魚なり。

【九】滄浪。川の名。

【一〇】清濟。川の名。津は液なり。

【一一】磷磷。水中の石の貌。

【一二】囂滓。塵囂の地。

【一三】潺湲。水の流るる貌。

【一四】君。京邑の游好を指す。纓は冠の紐。

し、百丈の底にも尙ほ游魚を見る。滄浪の水淸しと雖も、時に濁ることあり、淸濟の流も涸れて一滴を留めざることあり。然も此川獨り濁らず涸れず。豈此流に乘じ水石磷磷たる處に我が影を寫すに如かんや。（東陽太守たるの勝れるをいふ。）吾れ既に京師塵囂の地を去り、以て東陽に行けば、亦衣巾を洗ふの要なし。ただ此水を以て君が冠上の塵を一洗せんことを思ふ。

軍戎

（一）從軍の詩五首　王仲宣

軍に從ひて苦樂あり、ただ問ふ從ふ所誰ぞと。從ふ所神且つ武ならば、焉んぞ久しく（二）師を勞するを得ん。（三）相公關右を征し、（四）赫怒して天威を震ふ。一擧して（五）獯虜を滅し、再擧して（六）羌夷を服す。西のかた邊地の賊を收へ、忽たること俯して遺を拾ふが若し。賞を陳ぬること丘山に越ぎ、酒肉（七）川坻に踰ゆ。軍中（八）飫饒多く、人馬皆溢肥す。（九）徒行乘を兼ねて還り、空しく出で

【一】從軍。魏志に「建安二十年三月、公（曹操）西のかた張魯を征す、魯及び五子降る、十二月南鄭より至る、この行や侍中王粲五言詩を作り以て其事を美す」とあり、此詩是れなり。
【二】師。軍旅なり。
【三】相公。曹操をいふ。關右は關西。
【四】赫怒。盛怒なり。天威は天子の威力。
【五】獯虜。獯鬻なり。外夷の名。
【六】羌夷。外夷の名。

て餘資あり。地を拓くこと三千里、往返速なること飛ぶが如し。歌舞して鄴城に入り、願ふ所獲て違ふなし。晝日(一〇)大朝に處り、日暮薄か言に歸る。外は時の明政に參し、內は家の私を廢せず。禽獸(一一)犧となるを憚るも、(一二)良苗實已に揮く。(一三)負鼎の翁を竊慕し、願くは朽鈍の姿を厲まさんことを。(一四)沮溺に效ひ、相隨つて鋤犁を把る能はず。(一五)夫子の詩を熟覽し、信に言ふ所の非なるを知る。

【七】川坻。川岸なり。
【八】飫饒。飽饜なり。
【九】徒行。步卒なり。乘は騎兵。
【一〇】大朝。曹操の朝廷。
【一一】犧。犧牲なり。
【一二】良苗。嘉穀なり。

【一三】負鼎の翁。伊尹鼎を負ひて湯を干し、遂に湯を扶けて天下に王たらしむ。
【一四】沮溺。長沮と桀溺との二人。論語に「長沮桀溺耦して耕す」とあり。
【一五】夫子。孔子をいふ。孔叢子に「趙簡子夫子を聘す、將に至らんとし、河に及び鳴犢と竇犨との殺されしを聞き、輿を廻らして趣き、操をつくりて曰く、衞に翺翔し、我が舊居に復り、吾が好む所に從はん云云」とあり。

【大意】從軍に苦樂あるは、其主將の如何に由る。主將にして神武ならば、焉んぞ久しく軍旅を勞することあらんや。我が相公（曹操）關西を征して天子の威を震ひ、更に外夷を滅し、西のかた邊地の賊張魯を捕へ、其の易きことを遺ちたるを拾ふが如し。是に於て賞施山丘の如く、酒肉川岸の如く、人馬皆望に飽かざるはなく、步騎相率ゐて還り、嘗て空乏なりし者、今皆餘財あり。地を拓くこと三千里にして、往復の速なること飛ぶが如し。凱歌を奏して鄴城に入り、願ふ所盡く

之を獲たり。吾れ朝に此君（曹操）に侍し、夕に我家に歸り、外は朝政に參與し、又わが家事を廢せず。われ他人の犧牲となるを憚り、人に用ひられざらんことを願ふも、曹公の徳に浴する事實は恰も黍苗の陰雨に浴するが如し。是を以て伊尹の湯王を扶けしに倣はんと欲し、沮溺の退耕に倣はざるなり。かの孔子の詩に『我が舊居に復り、吾が好む所に從はん』といふが如きは、吾が意にあらざるなり。

涼風秋節に厲く、（一六）司典詳刑を告ぐ。（一七）我が君時に順つて發し、（一八）桓桓として東南に征く。舟を汎べて長川を蓋ひ、卒を陳ねて（一九）隰坰を被ふ。征夫親戚を懷ふ。誰か能く戀情なからん。衿を拊ちて舟檣に倚り、（二〇）眷眷として鄴城を思ふ。彼の（二一）東山の人を哀み、喟然として（二二）鸛鳴を感ず。日月安處せず、人誰か恆に寧きを獲ん。昔人（二三）公旦に從ひ、一たび徂きて輙ち（二四）三齡。今我が神武の師、暫く往きて必ず速に平がん。余が（二五）親睦の恩を弃て、力を輸して忠貞を竭す。懼らくは一夫の用、我が（二六）素餐の誠に報ゆるな

【一六】司典。主司なり。禮記に「孟秋の月涼風至る、用つて始めて戮を行ふ、天子乃ち將帥に命じ、士を選び兵を厲くし、以て不義を征す」とあり。

【一七】我が君。曹操を指す。時は秋なり。

【一八】桓桓。武勇の貌。建安二十一年、曹操吳の孫權を征す。

【一九】隰坰。郊野なり。

【二〇】眷眷。顧戀の貌。

【二一】東山。詩經の篇名。征戰を詠ぜし詩なり。

【二二】鸛鳴。東山の詩に「我れ東山に徂き、滔滔として歸らず、我れ東より來れば、零雨其れ濛たり、鸛垤に鳴き、婦室に歎く」とあり。

【二三】公旦。周公旦なり。周公東征三年にして歸る。

からんことを。夙夜自ら（二七）悱性し、逝かんことを思ひて縈を抽くが若し。將に先登の（二八）羽を秉らんとす。豈敢て（二九）金聲を聽かんや。

【大意】今や秋風嚴厲にして、主司刑戮を告ぐるの時となり、我が君（曹操）また此時に乘じて孫權を征し、師旅を陳ねて山川を壓す。吾れ亦遠征に從つて行く。何ぞ親戚を懷ひ、戀情を起さざらんや。乃ち胸を撫して舟に倚り、鄴城を顧戀し、周公東征の士卒を憶ひ、鸛鳴婦嘆の事に感ず。然りと雖も日月すら安居せず、人何ぞ常に寧きを得んや。周公の東征は三年に亙りしも、我が神武の軍は暫くにして平定するを得ん。我れ甘んじて親戚を離れ、忠貞の節を竭す所以なり。ただ我の微力なる、平生素餐の恩に報ゆる能はざらんことを恐る。因つて夙夜忼慨し、遠征を思ふこと縈繞を抽んづるが如し。將に羽旗を負ひて先登せんとす。豈金聲を聞いて退くをなさんや。

軍に從ひて（三〇）遐路に征き、彼の東南の（三一）夷を討つ。舟を方べて廣川に順ひ、薄暮未だ（三二）安坻せず。白日西山に半に、（三三）桑梓餘暉あり。（三四）蟋蟀岸を夾んで鳴き、孤鳥翩翩として飛ぶ。征夫

【二四】三齡。三年なり。
【二五】親睦。親戚なり。
【二六】素餐。無能にして祿を食むこと。
【二七】悱性。忼慨なり。
【二八】羽。羽旗なり。
【二九】金聲。退却の合圖。古は鼓を聞いて進み、金を聞いて退く。
【三〇】遐路。遠路なり。
【三一】夷。吳の孫權を指す。
【三二】安坻。舟を岸に繫ぐこと。
【三三】桑梓。二木の名。餘暉は

心に懷多く、(三五)悽悽として吾をして悲ましむ。船を下りて(三六)高防に登れば、草露我が衣を霑す。身を廻して牀寢に赴く。此愁當に誰にか告ぐべき。身干戈の事に服す。豈私する所を念ふを得んや。(三七)戎に卽て命を授くるあり、茲理違ふべからず。

【大意】吾れ從軍して遠く吳の孫權を討ち、舟を方べて大江を渡り夕に至るも尙ほ舟を泊する能はず、日將に西山に沒せんとして、桑梓の梢僅に餘光を帶び、蟋蟀夕を告げ、飛鳥塒に歸るを見るや、感慨心に盈ち悲傷して已まず。舟を下りて岸に登り、草露の衣を霑す處僅に一夜の夢を結び、愁思語るに人なし。然りと雖も既に軍に從へば、復た私事を思ふべきにあらず。生命を拋ちて君事に勉めざるべからず。

朝に鄴都の橋を發し、暮に(三八)白馬の津を濟り、河隄の上に逍遙し、左右に我が軍を望めば、(三九)連舫萬艘に踰え、(四〇)帶甲千萬人。彼の東南の路に率ひ、將に一擧の勳を定めんとす。(四一)籌策帷幄に運るは、一に我が(四二)聖君に由る。恨むらくは我に(四三)時謀なく、諸を(四四)具官の臣に譬へられんことを。(四五)中

餘光。
【三四】蟋蟀。こほろぎ。
【三五】悽悽。悲傷の貌。
【三六】高防。高隄なり。
【三七】戎。軍なり。卽は就なり。

【三八】白馬。渡津の名。
【三九】連舫。舫は并舟なり。
【四〇】帶甲。甲士なり。
【四一】籌策。戰略なり。帷幄は帳幕。
【四二】聖君。曹操を指す。
【四三】時謀。時に應ずる謀。
【四四】具官の臣。具に備はるのみの臣，無能の臣なり。
【四五】中堅。卒伍の名。鞠躬は盡瘁なり。

堅の内に鞠躬し、(四六)微畫陳ぶる所なし。(四七)許歷は完士たり、一言猶ほ秦を敗る。我に(四八)素餐の責あり、誠に(四九)伐檀の人に愧づ。(五〇)鉛刀の用なしと雖も。庶幾はくは(五一)薄身を奮はん。

【大意】朝に鄴都を發し、暮に白馬津を渡り、隄防の上を徘徊し、我が軍士を望めば、船艦萬艘に餘り、甲士千萬人なり。皆吳に征きて孫權を平ぐるの功を立てんとす。謀略の神速なるは、我が君曹公の聖に由る。我れ時に應ずるの謀なく、不才にして員に備はるのみ。中堅に伍して盡力すと雖も、策略の陳ぶべきなきを恨む。昔許歷は一個の凡士なるも、猶ほ能く策を陳べて秦軍を敗れり。我れ既に德なくして祿を受け、彼の伐檀の人に愧づ。鉛刀一割の用なしと雖も、ただ微力を盡して事功を立てんことを願ふのみ。

(五二)悠悠として荒路を渉り、(五三)靡靡として我が心愁ふ。四望するに煙火な

【四六】微畫。微細なる謀略。
【四七】史記に「秦韓を伐つ、趙奢をして之を救はしむ、許歷曰く秦人は趙師の此に至るを意はず、其來るや氣盛ならん、將軍必ず厚く其陣を集めて以て之を待て、然らずんば必ず敗れんと、後許歷復た曰く、先づ北山の上に據る者は勝ち、後れて至る者は敗れんと、趙奢乃ち萬人を發して之に赴かしむ、秦兵後れて至り山を爭ひて上るを得ず、趙奢兵を縱にして之を擊ち大に秦軍を敗る」とあり。完士は全具の士、奇才あるにあらざるをいふ。
【四八】素餐。前に見ゆ。
【四九】伐檀。詩經魏風の篇名、中に「坎坎として檀を伐る」「彼の君子、素餐せず」の句あり。
【五〇】鉛刀。東觀漢記に「班超曰く冀くは鉛刀一割の力を立てん」とあり。
【五一】薄身。微力といふが如し。
【五二】悠悠。長き貌。

く、ただ林と丘とを見る。城郭（五四）榛棘を生じ、（五五）蹊徑由る所なし。（五六）萑蒲廣澤に亘り、（五七）葭葦長流を夾む。日夕涼風發し、翩翩として吾が舟を漂す。寒蟬樹に在りて鳴き、（五八）鸛鵠天を摩して游ぶ。（五九）客子悲傷多く、涙下りて收むべからず。朝に（六〇）譙郡の界に入れば、曠然として人憂を消す。雞鳴四境に達し、黍稷（六一）原疇に盈つ。館宅（六二）鄽里に充ち、士女（六三）莊馗に滿つ。聖賢の國にあらざるよりは、誰か能く（六四）斯休を享けん。（六五）詩人樂土を美す。客たりと雖も猶ほ留まらんことを願ふ。

【大意】遠く荒路を行きて我が心愁に滿ち、四方を望むも唯林丘を見るのみ、城郭に叢木茂り徑の通ずべきなし。水邊に至れば水草長流を夾み、晩風吾が舟を漂はし、寒蟬樹頭に鳴き、鸛鵠天上に飛ぶ。之を見聞して益悲傷を加へ、涙落ちて拭ふに由なし。翌朝始めて譙郡に入り、忽ち憂情を一洗するを得たり。此地や村落相次ぎて黍稷野に滿ち、家屋稠密にして士女道に滿つ。曹公の如き聖賢にあらざれば、何ぞ能く斯の美を享くるを得ん。昔詩人も有德の國を美せり。故に吾に於て客地なりと雖も尚ほ永く此土に留まらんことを願ふ。

【五三】靡靡。愁ふる貌。
【五四】榛棘。叢林なり。
【五五】蹊徑。徑路なり。
【五六】萑蒲。水草の名。
【五七】葭葦。水草の名。
【五八】鸛鵠。水鳥の名。
【五九】客子。遊子といふに同じ仲宣自ら謂ふ。
【六〇】譙郡。曹操は譙郡の人なり、故に之を美す。
【六一】原疇。田野なり。
【六二】鄽里。郭外の地。
【六三】莊馗。道なり。
【六四】斯休。休は美なり。
【六五】詩人。詩經の詩の作者。樂土は有德の國なり。

郊廟

宋の(一)郊祀歌二首

顏延年

(二)寶命を寅威し、(三)帝祖を嚴恭し、(四)海を炳にし岱を表し、(五)唐に系ぎ楚に胄ぐ。(六)靈は睿文を監み、民は睿武に屬し、奄いに受け敷いに錫り、中に宅り(七)宇を拓く。地を亙りて皇と稱し、天を馨して主たり。(八)月竁來賓し、(九)日際土を奉ず。(一〇)元を開き正を首め、禮交り樂擧り、(一一)六典事を聯ね、(一二)九官序を列ぬ。(一三)牷あり滌に在り、(一四)絜あり俎に在り、以て(一五)王衷を薦め、以て(一六)神祜に答ふ。

【大意】吾が君ここに天命を敬畏し、先祖を尊敬し、海岱の地を明表し、唐堯楚元の後を

【一】郊祀歌。宋の文帝の時、天地を郊祀し、延年をして詞を作らしむ。

【二】寶命。天命なり。寅威は敬み畏ること。

【三】帝祖。天帝及び祖先。嚴恭は尊敬なり。

【四】海を云云。岱は山の名。書經に「海岱及び淮までは惟れ徐州」とあり、徐州は即ち彭城の東界なり。

【五】唐。堯なり。宋の高祖はもと彭城の人にして、唐堯及び楚の元王(漢の高祖の弟)の後なり。

【六】靈。神なり。睿は聖なり。

【七】宇。國土なり。

【八】月竁。月窟なり。西極をいふ。

【九】日際。東極をいふ。

【一〇】元。年號なり。正は暦なり。

【一一】六典。周禮に六典の官あり、以て萬邦を掌る。

【一二】九官。舜九官に命じ以て天下を治む。

【一三】牷。神前に供する犧牲。滌は牲を養ふ室。

【一四】絜。清潔の物。俎は供物を載する具。

【一五】王衷。王の中心。

【一六】神祜。神靈の降せる福。

承け、神人倶に其文武の德に服す。乃ち大に天の賜を受け、中央に位して國土を拓き、普天率土皆之を戴いて君主となし、遠近皆王庭に來服し土物を奉獻す。ここに政教の基を建て、禮交り樂擧り、上下相和し、治國の宮各其事を聯ねて、皆次序あり。因つて犧牲清潔の物を供へ、至誠の心を盡して天地を祭り、以て神靈の福に答ふ。

維れ（一七）聖帝を饗し、維れ孝親を饗し、（一八）皇乎として備はり、上春に（一九）事あり。禮（二〇）宗祀を行ひ、敬（二一）郊禋に達す。（二二）金枝中に樹ち、（二三）廣樂四に陳り、（二四）陟配京に在り、德を降して民に在り。（二五）奔精夜を昭し、（二六）高燎晨を煬し、（二七）陰明浮燦し、（二八）沈祭深淪す。成を告げて大に報じ、釐を元神に受く。（二九）月御節を案じ、星驅輪を扶け、遙に興り遠く駕し（三〇）曜曜振振たり。

【一七】聖。宋の文帝を指す。帝は天帝。
【一八】皇乎。大なる貌。
【一九】事。祭事なり。
【二〇】宗祀。祖先の祭。
【二一】郊禋。天を祭ること。
【二二】金枝。金を以て飾れる燈。
【二三】廣樂。天子の音樂。
【二四】陟配。天子の德上りて天に配し、身は京師に在り。
【二五】奔精。流星なり。
【二六】高燎。柴を燒くカガリビ。
【二七】陰明。北方の星なり。宋は水德を以て王たり、故に此星光を揚ぐ。
【二八】沈祭。祭の名。
【二九】月御。月の御者、節を案ずとは徐行するなり。
【三〇】曜曜。光明の貌。振振は盛なる貌。

【大意】吾が君ここに天帝を祭り、又孝道を盡して祖先を祭らんとし、上春に當りて祭事を擧げ、よく禮敬を竭す。金燈中に立ち、廣樂四方に陳り、其德上天に配して京師に在り。恩德降りて下民

に及び、流星祠壇を繞り、柴を燒くの煙曉に達し、陰明星その光を揚げ、其祭深靜なり。乃ち成功を告げて天に報じ、遂に福を天神に受く。天福の降下するや、月御車を馳せ、星辰輪を扶け、遙に興りて遠く地に至り、曜曜として盛なり。

(一)樂府上

樂府四首

（二）古辭

(三)飲馬長城窟行

青青たる河畔の草、(四)緜緜として遠道を思ふ。遠道思ふべからず、(五)夙昔夢に之を見る。夢に見しとき我が傍に在り、忽ち覺むれば他鄕に在り。他鄕各〻縣を異にし、(六)展轉して見るべからず。(七)枯桑天風を知り、海水天寒を知る。門に入りて各自に媚ぶ。誰か肯て相爲に言はん。客遠方より來り、我に雙鯉魚を遺る。兒を呼んで鯉魚を烹る。中に(八)尺素の書あり。長跪して素書を讀む。書中竟に何如。上には(九)餐食を加へよとあり、下に

【一】樂府。役所の名、漢の武帝、郊祀の禮を定めて樂府を立つ。後樂器に合せて歌ふ詩の名稱となる。

【二】古辭。作者の姓名を知らず、故に古辭といふ。

【三】飲馬。馬に水かふこと。長城は萬里長城。行は曲といふが如し。征戍の士長城に至りて馬に飲ふ、婦之を思ひて是行を作る。

【四】緜緜。絶えざる貌。

【五】夙昔。昨夜なり。

【六】展轉。ねがへりすること。

は長く相憶ふとあり。

【大意】此詩は閨怨の作なり。今や春草萋萋たる春となり、吾が夫を想ふの心緒亦春草の生ずるが如くに起り、緜緜として絶えず。昨夜夢中夫と相見る。夢覺むれば遠く隔りて、展轉反側するも相見る能はず。それ獨居する者能く寂寥の苦を知る。世の耦ある者は門に入りて互に媚愛す。何ぞ吾が情を訴ふるを得んや。偶〻客の夫の處より來るあり。我に二鯉魚を贈る。僮をして之を烹しむるに、中に書信あり。我れ長跪して之を讀めば、上には攝養を加へて健康を保たれよとあり。下には遙に御身を想ひつつありとあり。此詩一說に蔡邕の作なりといふ。

君子行

君子は未然に防ぎ、嫌疑の間に處らず。(一〇)瓜田に履を納れず、(一一)李下に冠を正さず。(一二)嫂叔は親授せず、長幼は比肩せず。(一三)勞謙其柄を得。(一四)和光甚だ獨り難し。(一五)周公白屋に下り、(一六)哺を吐いて餐に及ばず。(一七)一沐に三たび髮を握

【七】枯桑。以下二句ただ獨居する者寂寥の況味を知るに喩ふ。

【八】尺素。白絹なり、古人の書信多く絹に書す。

【九】餐食。食事なり、餐食を加ふとは攝養すといふがごとし。

【一〇】瓜田。うりばたけ。

【一一】李下。すももの木の下。

【一二】嫂叔。嫂は兄の妻、叔は弟。親授は直接に物のやりとりすること。

【一三】勞謙。勞は功なり、功ありて之に處るに謙を以てするは、物を持つに其柄を得たるが如しとの意。

【一四】和光。才智を誇示せざるをいふ。老子に「其光を和し其塵を同うす」とあり。

【一五】周公。名は旦、周の成王の攝政たり。白屋は賤士の居

る。後世聖賢と稱す。

【大意】人は當に嫌疑を避くべく、尤も當に謙和を守るべきを言ふ。君子の世に處するや、未然に警戒し嫌疑を避くべし。瓜田には履を納るべからず、李下には冠を正すべからず。（盜の嫌疑を避く）嫂と弟とは親く物を授受すべからず。（姦通の嫌疑を避く）長幼は肩を比べて行くべからず。（無禮の嫌疑を避く）又己の功に誇り能を輝すべからず。昔周公は能く賤士に下り、吐哺握髮して以て天下の士を待てり。故に後世之を稱して聖賢となす。

ろ家。
【一六】哺。口中に含める食物。餐は食ふこと。一食の間に三たび哺を吐きて天下の士を待てるをいふ。
【一七】一沐。一たび髮を洗ふこと。

傷歌行

（一八）昭昭たる素明の月、（一九）暉光我が牀を燭らす。憂人寐ぬる能はず、（二〇）耿耿として夜何ぞ長き。微風（二一）閨闥を吹き、（二二）羅帷自ら飄颻す。衣を攬りて長帶を曳き、（二三）屣履して高堂を下る。東西安んぞ之く所あらん、徘徊して以て彷徨す。春鳥翻りて南に飛び、（二四）翩翩として獨り翺翔す。悲聲（二五）儔匹に命じ、哀鳴我が腸を傷ましむ。物に感じて思ふ所を懷へば、（二六）泣涕忽ち裳を霑す。

【一八】昭昭。明なる貌。素明は白くして明なること。
【一九】暉光。光なり。
【二〇】耿耿。安からざる貌。
【二一】閨闥。閨門なり。
【二二】羅帷。薄絹の帳。
【二三】屣履。履をはくこと。
【二四】翩翩。鳥の飛ぶ貌。
【二五】儔匹。仲間の鳥。
【二六】泣涕。なみだ。

佇立して高吟を吐き、憤を舒べて（二七）穹蒼に訴ふ。

【大意】此れ思婦の詩なり。天上の明月我が孤居の牀を照し、憂思して眠る能はず。夜の長きを怨みつつあれば、微風來りて閨帷を飜す。乃ち衣を攝げ履を穿ちて堂を下り、足にまかせて園中を徘徊す。偶ゝ春鳥飛鳴して其友を呼ぶ。之を聞きて、我益ゝ夫を思ひて涙を灑ぎ、高吟して蒼天に訴ふ。

長歌行

靑靑たる園中の葵、朝露日を待ちて晞く。陽春德澤を布き、萬物光輝を生ず。常に恐る秋節至り、（二八）焜黃して華葉の衰ふるを。百川東して海に到る。何の時か復た西に歸らん。少壯にして努力せずんば、老大にして徒に傷悲せん。

【大意】園中の葵を見るに、湛湛たる朝露日を待ちて忽ち晞く。露澤の久うすべからざること以て見るべし。春和澤を布き、萬物倶に光輝を生ずるも、常に秋節至りて、華葉の衰へんことを恐る。百川東流して海に到れば、復た歸るべからず。人生も亦此に同じ。少壯の時努力せずんば、老年に至りて徒に自ら傷まんのみ。

怨歌行

（一）班婕妤

【二七】穹蒼。天なり。

【二八】焜黃。色の衰ふる貌。

【一】班婕妤。漢の成帝の宮人にして趙飛燕の爲に寵を奪は

新に齊の(二)紈素を裂けば、鮮絜にして霜雪の如し。裁して(三)合歡扇を成し、(四)團團として明月に似たり。君が懷袖に出入し、動搖して微風發す。常に恐る秋節至り、(五)涼飈炎熱を奪ふを。(六)篋笥の中に弃捐せられ、恩情(七)中道に絕ゆ。

【大意】齊國に產する白絹を裂けば、その潔白なること雪の如し。之を裁ちて合歡扇を作れるに、圓きこと明月の如し。ここに君の懷中に出入し、時に之を搖かして微風を發す。然も一旦秋風起りて炎熱を奪ひ、また扇を要せざるに至らんことを恐る。果せるかな終に箱中に棄てられ、また君寵を辱うする能はざるに至りぬとて、通首扇を借りて自ら比したるなり。首二句は己の美貌、三四句は宮中に入りしこと、五六句は君寵を得しこと、七八句は飛燕を恐れしこと、末二句は寵を失へることに喩ふ。

れ、此詩を作る。婕妤は后妃の位の名。
【二】紈素。細絹なり。齊國より出づ。
【三】合歡扇。兩面より絹を貼り合せたる扇。
【四】團團。圓き貌。
【五】涼飈。涼風なり。
【六】篋笥。箱なり。弃捐は棄つること。
【七】中道。中途なり。

樂府二首　(一)魏武帝

短歌行

【一】魏武帝。曹操、字は孟德。

酒に對して當に歌ふべし、人生幾何ぞ。譬へば朝露の如し。去日苦だ多し。慨して當に以て慷すべし。憂思忘れ難し。何を以て憂を解かん。唯(二)杜康あり。(三)青青たる子が衿、悠悠たる我が心。但(四)君が爲の故に、沈吟して今に至る。(五)呦呦として鹿鳴き、野の苹を食ふ。我に嘉賓あらば、瑟を鼓し笙を吹かん。明明として月の如し。何の時にか掇るべき。憂中より來り、斷絶すべからず。(六)陌を越え阡を度り、枉げて用て(七)相存す。(八)契闊談讌して、心に舊恩を念ふ。(九)月明かに星希に、(一〇)烏鵲南に飛び、樹を繞ること三匝、何れの枝にか依るべき。山は高きを厭はず、海は深きを厭はず。(一一)周公哺を吐いて、天下心を歸せり。

【大意】此れ歳月の逝き易きを歎じ、賢才を得て以て早く王業を建てんことを欲するの詩なり。酒に對して當に歌ふべし。人生は朝露の如く、去日甚だ多し。何ぞ慷慨悲歌せざるを得んや。此憂を消すものは唯酒あるのみ。われ賢才を得んことを思ひ、心常に沈吟して置かず。誠に賢才を得て治を輔くるを得ば、當に鹿鳴の章の嘉賓を讌樂

【二】杜康。酒の異名。
【三】青青。以下二句は詩經鄭風子衿篇の語なり。昔學生は皆青き襟の衣を著たり。故に學生を青衿といふ。悠悠は憂思の貌。青衿の見難きに由りて之を憂思するなり。
【四】君。青衿を指す。
【五】呦呦。以下四句は詩經小雅鹿鳴篇の語なり。此篇は嘉賓を讌することを詠ず。呦呦は鹿の鳴く聲。苹は草の名。
【六】陌。陌も阡も道なり。
【七】相存。問ふこと。
【八】契闊。勤苦すること。
【九】月明。月明かなれば星稀なり。大賢出でて小人勢を失ふに喩ふ。月は曹操自ら比す。
【一〇】烏鵲。世の賢才に喩ふ。樹を繞る三匝とは依るべき所を知らざるに喩ふ。
【一一】周公。前詩に見ゆ。

するが如くなるべし。然も賢才の得難きは、月光の掇るべからざるが如し。是を以て憂思心に絶ゆることなし。時に道を枉げて故舊を存問すれば、談讌に勤苦して唯舊情を念ふのみ。肯て來りて我に就かず。我れ今獨り權勢を得て、餘子は碌碌たれども、世の賢才我に依るを知らず。我の深く惜む所なり。夫れ山は土を辭せず、故に能く其高きを成し、海は水を辭せず、故に能く其深きを成し、明主は人を厭はず、故に能く其衆きを成す。周公は王者の親を以て、吐哺握髮して天下の士を待つ。故に天下皆心を之に歸せり。我亦此を慕ふ者なり。

苦寒行

北のかた〔一二〕太行山に上る。艱い哉何ぞ〔一三〕巍巍たる。〔一四〕羊腸阪詰屈たり。車輪之が爲に摧く。樹木何ぞ〔一五〕蕭索たる、北風聲正に悲む。熊羆我に對して蹲り、虎豹路を夾んで啼く。谿谷人民少く、雪落ちて何ぞ〔一六〕霏霏たる。頸を延べて長く歎息し、遠行して懷ふ所多し。我が心何ぞ〔一七〕怫鬱たる、一たび〔一八〕東歸せんと思欲す。水深くして橋梁絕え、中道正に徘徊す。迷惑して故路を失ひ、薄暮〔一九〕宿栖するなし。行き行きて日已に遠く、人馬同時に饑う。囊を擔ひ行きて薪を取り、冰

【一二】太行山。山の名、河内野王縣の北に在り。
【一三】巍巍。高き貌。
【一四】羊腸阪。阪の名、太原晉陽の北に在り。詰屈は曲れる貌。
【一五】蕭索。寂寥なり。
【一六】霏霏。雪のふる貌。
【一七】怫鬱。憂悲の貌。
【一八】東歸。故郷に歸るをいふ。

を斧り持ちて糜を作る。彼の(一〇)東山の詩を悲み、(一一)悠悠として我を哀ましむ。

【九】宿栖。宿泊なり。
【一〇】東山。詩經豳風の詩篇の名。行役を歌へる詩なり。
【一一】悠悠。憂思の貌。

【大意】此れ行役苦寒に因りて作る。恐らくは北のかた烏桓を討ちし時の作ならん。北のかた太行山に登れば、路嶮にして行き難く、羊腸阪は屈曲して車輪も之が爲に碎けんとす。樹木葉落ちて北風之を拂ひ、虎豹熊羆路に當りて蹲り、行人絶えて雪繁し。頸を延べて顧望すれば、心鬱結して故郷に歸らんことを思ふ。水深くして橋なく、中途にさまよひて夕に至るまで宿泊するを得ず。日は已に遠く西山に沒し、人馬倶に飢う。因つて袋を擔ひて柴を採り、氷を碎きて粥を煮る。時に周公東征して東山の詩を作り、兵士の勞苦を悲みしを思ひ、我をして悲哀の情に堪へざらしむ。

樂府二首　　魏文帝

善哉行

山に上りて薇を采り、薄暮饑に苦む。谿谷風多く、霜露衣を沾す。野雉羣り雊き、猴猨相追ふ。還つて故郷を望めば、鬱として何ぞ(一)壘壘たる。高山に崖あり、林木に枝あり。憂來りて(二)方なく、人之を知る莫し。人生寄るが如し。多く憂ふるも何を

【一】壘壘。山の重れる貌。
【二】方。定方なり。

か爲ん。今我れ樂まずんば、日月馳するが如し。(三)湯湯たる川流、中に行舟あり。波に隨つて(四)轉薄し、客遊に似たるあり。我が良馬に策うち、我が輕裘を被り、載ち馳せ載ち驅り、聊か以て憂を忘れん。

【大意】これ客遊の所感を述べし詩なり。客地に在りて暮に薇を採り、以て飢を療せんとすれば、谷中の風霜衣を沾して堪へ難し。彼の猿鳥を見るに、各羣を成して自適せるも、我れ獨り離居して故郷を望み、徒に悲を增すのみ。山には崖あり木には枝あり。凡そ皆定向あらざるはなし。獨り憂の定方なきは、人の知り難き所なり。然りと雖も人生は寄寓の如し。何ぞ必しも多く憂ふるをなさんや。宜しく時に及んで行樂すべきなり。舟の流に漂ふは、恰も客遊の人に似たり。いでや肥馬に鞭うち輕裘を著て、山水の間を遨遊し、以て吾が憂を除かん。

【三】湯湯。水の流るる貌。
【四】轉薄。回轉して岸に至り著くこと。

燕歌行

秋風(五)蕭瑟として天氣涼しく、草木搖落して露霜となり、羣燕辭し歸りて鴈南に翔る。念ふ君客遊して思斷腸。(六)慊慊として歸を思ひて故郷を戀はん。何爲れぞ(七)淹留して他方に寄る。賤妾

【五】蕭瑟。淋しき貌。
【六】慊慊。心に滿たざる所ある貌。
【七】淹留。久しく滯留するこ

(八)煢煢として空房を守る。憂來りて君を思ひて敢て忘れず、覺えず涙下りて衣裳を霑す。琴を援き絃を鳴らして(九)清商を發し、短歌微吟長きこと能はず。明月(一〇)皎皎として我が牀を照し、(一一)星漢西に流れて夜未だ央ならず。(一二)牽牛織女遙に相望む。(一三)爾獨り何の辜ありて(一四)河梁を恨む。

と。
【八】煢煢。孤獨の貌。空房は空閨。
【九】清商。清苦にして愁を含む音調。
【一〇】皎皎。明かなる貌。
【一一】星漢。あまのがは。
【一二】牽牛織女。二星の名。
【一三】爾。牽牛織女を指す。
【一四】河梁。梁は橋なり。

【大意】婦人遠行の夫を思ふ事を作れるなり。今や霜飛び木落ち、鴈燕亦各南北に歸る。君獨り客遊して歸らず。客中必ず慊慊として故郷を戀ひつつあらん。宜しく早く歸るべし。妾今獨り空閨を守れば、憂へ來りて涙衣を沾す。琴を彈じて自ら慰めんとすれば、音調清苦にして吟聲續ぎ難し。明月牀を照して銀河西に流るる處、牽牛織女の二星天河を隔てて相望むを見る。ああ此の二星何の罪ありて、河梁を隔てて相會ふを得ざるやとなり。末二句は己の夫に會ふを得ざるに比して言ふ。

樂府の詩四首　曹子建

(一)箜篌引

高殿の上に(二)置酒し、親友我に從つて遊ぶ。中厨(三)豐膳を辦へ、羊を烹て肥牛を(四)宰む。(五)秦箏何ぞ慷慨、(六)齊瑟和にして且つ柔。(七)陽阿奇舞を奏し、(八)京洛名謳を出す。樂飲(九)三爵を過ぎ、帶を緩めて(一〇)庶羞を傾く。主は(一一)千金の壽を稱し、賓は萬年の酬を奉ず。(一二)久要忘るべからず、終に薄きは義の尤むる所なり。謙謙たる君子の德、(一三)磬折して何をか求めんと欲する。驚風白日を飄し、光景馳せて西に流る。盛時再びすべからず、(一四)百年忽として我に遒る。(一五)生在しては華屋に處り、(一六)零落しては山丘に歸る。(一七)先民誰か死せざらん。(一八)命を知らば復た何をか憂へん。

【一】箜篌。もと樂器の名。引は曲といふが如し。
【二】置酒。酒宴を設くること。
【三】豐膳。饒多なる食物。
【四】宰。料理すること。
【五】秦箏。秦人よく箏を彈ず故に秦箏といふ。慷慨は激揚といふが如し。
【六】齊瑟。齊人よく瑟を鼓す故に齊瑟といふ。
【七】陽阿。漢の成帝の時の歌舞の妙手。
【八】京洛。京師の人。名謳は巧妙なる歌。
【九】三爵。爵は杯なり。君子の宴は三爵を度とす。
【一〇】庶羞。諸種の珍味。
【一一】千金。史記に「平原君千金を以て魯仲連の壽をなす」とあり。
【一二】久要。舊約なり。
【一三】磬折。身を屈すること。
【一四】百年。人の一生を假に見積りて言ふ。
【一五】生在。一本に生存とあり。
【一六】零落。死亡なり、山丘は墳墓。
【一七】先民。古人なり。
【一八】命。天命なり。

【大意】この詩は世俗讌會の華奢なるを見、曉すに交道は唯終あるを貴ぶ。徒に長壽の頌禱をな

すの愚なるを以てせるなり。高堂に盛宴を設け、親友相會して樂み、酒肴音樂歌舞座に滿ち堂に溢る。飲むこと既に三杯を過ぎ帶を緩めて佳味を盡し、主人は杯を獻じて千金の壽を頌し、客は杯を酬いて萬年の壽を禱る。此れ世俗の爲す所なり。然も全く無益の事なり。君子の交は舊約を忘れざるを貴ぶ。始に厚くして終に薄きは、義に於て過れりとなす。謙恭は君子の德なり。吾の其身を屈するは、唯德を失はざらんことを期するのみ。千萬年の壽を求めんが爲にあらず。見よ驚風白日を飄し、日景西に馳すれば、盛年再び得べからず、百年の生涯忽にして身に迫る。生きては華屋に住するも、死すれば墳墓の主となる。古人誰か死せざる者あらん。長壽を禱るの益なきこと以て見るべし。ただ天を樂み命を知る者、獨り憂なきのみ。

(一九)名都篇

名都に(二〇)妖女多く、(二一)京洛に少年を出す。寶劍千金に直し、被服麗にして且つ鮮なり。雞を東郊の道に鬪はし、馬を(二二)長楸の間に走らす。馳騁未だ半なる能はず、雙兎我が前を過ぐ。弓を攬りて(二三)鳴鏑を捷み、長驅して南山に上る。左に挽き右に因りて發すれば、一たび縱ちて(二四)兩禽連る。餘巧未だ展ぶるに及ばず、手を仰ぎて飛

【一九】名都篇。篇首の二字を取りて題とす。名都とは有名なる都會の意にて邯鄲・臨淄などをいふ。

【二〇】妖女。美女なり。

【二一】京洛。京師、洛陽なり。

【二二】長楸。楸は木の名。古人楸を道に植う。

鳶を(二五)接る。觀る者咸善しと稱し、(二六)衆工我に妍を歸す。歸り來りて(二七)平樂に宴し、美酒(二八)斗十千。鯉を膾にして(二九)胎鰕を臇にし、鼈を炮きて(三〇)熊蹯を炙にす。(三一)鳴儔匹侶を嘯き、列坐長筵に竟る。(三二)連翩として鞠壤を撃ち、(三三)巧捷惟れ萬端。白日西南に馳せ、光景攀むべからず。(三四)雲散して城邑に還り、淸晨復た來り還る。

【大意】時人の騎射遊戯を事とするを刺れる詩なり。名都には美女多く、洛陽には少年多し。佩ぶる所は千金の寶劍にして、衣服は鮮麗なり。此の少年鬪雞騎馬を樂となし、馬を馳すること半途にして、雙兎の馬前に走るを見る。弓を執り矢を挿み、長驅して南山に登り、左手に弓を挽き、右手に矢を縱てば、一發にして雙兎を貫く。妙技未だ施し盡すに及ばざるに、又手を擧げて飛鳶を射る。觀る者皆其巧を稱し、衆手皆妙技を推して我に歸す。歸り來りて平樂觀に宴し、美酒あり佳肴あり、友を呼びて席を列ね、起つて蹴鞠、撃

【二三】鳴鏑。かぶら矢。
【二四】兩禽。雙兎なり。
【二五】接。射なり。
【二六】衆工。諸の善射者。妍は美なり、妙なり。
【二七】平樂。宮觀の名。洛陽の西門外に在り。
【二八】斗十千。一斗の價一萬錢との意にて高價なるをいふ。
【二九】胎鰕。鰕の卵。
【三〇】熊蹯。熊の掌、古來美味の稱あり。
【三一】鳴儔。鳴は呼、儔は友。友を呼ぶこと。匹侶は友、嘯も呼ぶこと。
【三二】連翩。輕迅の貌。鞠壤は蹴鞠及び撃壤の遊技をなすこと。
【三三】巧捷。巧妙にして敏捷なること。萬端は一一變化あるをいふ。
【三四】雲散。雲の如く散ずること。

壤の戯をなし、敏捷にして變化百出す。忽ち日西に沒して、又挽き留むべからず。因つて各〻城邑に歸り、明晨また此に來る。日日遊樂に耽ること斯の如し。嘆ずべきかな。

美女篇

美女(三五)妖にして且つ閑かなり。桑を岐路の間に采る。(三六)柔條紛として冉冉たり。葉落つること何ぞ(三七)翩翩たる。袖を攘げて(三八)素手を見し、(三九)皓腕に金環を約ぶ。頭上(四〇)金爵の釵、腰に(四一)翠琅玕を佩ぶ。明珠玉體を交へ、(四二)珊瑚木難に間る。(四三)羅衣何ぞ飄颻たる。輕裾風に隨つて還る。顧眄すれば光彩を遺し、長嘯すれば氣蘭の若し。(四四)行徒用て駕を息め、休者以て餐を忘る。借問す女安にか居る。乃ち城の南端に在り。(四五)青樓大路に臨み、高門(四六)重關を結ぶ。(四七)容華朝日に耀く。誰か(四八)令顔を希はざらん。(四九)媒氏何の營む所ありて、(五〇)玉帛時に安んぜざる。(五一)佳人高義を慕ひ、賢を求むること良に獨り難

【三五】妖。美なり。閑は雅なり。
【三六】柔條。嫩枝なり。紛は亂、冉冉は動く貌。
【三七】翩翩。飛ぶ貌。
【三八】素手。白き手。
【三九】皓腕。白き腕。金環は黄金のウデワ。
【四〇】金爵。黄金製の雀。釵の飾なり。
【四一】翠琅玕。玉に似たる美石。
【四二】珊瑚。珠の名。木難は碧色の珠。
【四三】羅衣。薄絹の衣。飄颻は飄る貌。
【四四】行徒。行路の人人。
【四五】青樓。青漆を施せる樓閣。
【四六】重關。重門なり。
【四七】容華。美しき容貌。
【四八】令顔。美貌なり。
【四九】媒氏。結婚の媒介者。
【五〇】玉帛。玉と絹、結納の贈物。
【五一】佳人。美女なり。

し。衆人徒に（五二）嗷嗷たり。安んぞ（五三）彼の觀る所を知らん。盛年（五四）房室に處り、中夜起ちて長歎す。

【大意】美女を以て君子に喩へ、君子美行あり、賢君を得て之に事へんことを願ひ、若し時に遇はずんば、徵さると雖も終に屈せざることを言ふ。美女あり妖冶にして閑雅なり。出でて桑を路傍に摘む。嫩枝冉冉として橈み、桑葉翩翩として落つ。雪白の腕に金環を結び、金雀の釵を戴き、琅玕の佩を腰にし、珠玉相交りて耀き、羅衣風に飄り、顧眄すれば光彩永く遺り、長吟すれば其氣蘭の如く芳し。此の美女を見ては行路の人も足を留め、憩ふ者も食ふを忘る。問ふ此女何處にか住すると。答へて曰く、家は城市の南端にあり、高樓路に臨み、重門堅く閉ぢたりと。ああ彼の美貌を見ては、誰か之を娶るを欲せざらん。媒氏何ぞ早く婚事を定めざるや訝しき限りなり。そは他にあらず。此の美女高義を慕ひ賢婿を求むれども得難ければなり。衆人徒に喧騷するも、何ぞ彼女の意中を知らんや。彼女既に佳婿を擇ぶ。故に盛年に至るまで獨り閨中に在り。然も中夜起ちて志願の遂げざるを嘆息しつつあるなり。

【五二】嗷嗷。喧騷すること。
【五三】彼の云云。彼の美女の意中を知らんやとの意。
【五四】房室。閨房なり。

白馬篇

白馬(五五)金羈を飾り、(五六)連翩として西北に馳す。借問す誰が家の子ぞ、(五七)幽幷の遊俠兒。少小にして鄉邑を去り、聲を(五八)沙漠の垂に揚ぐ。(五九)宿昔良弓を秉り、(六〇)楛矢何ぞ參差たる。弦を控いて(六一)左的を破り、右に發して(六二)月支を摧く。手を仰ぎて(六三)飛猱を接、身を俯して(六四)馬蹄を散ず。(六五)狡捷猴猨に過ぎ、勇剽(六六)豹螭の若し。邊城(六七)警急多く、(六八)虜騎數〻遷移す。(六九)羽檄北より來り、馬を厲して高隄に登る。長驅して匈奴を蹈み、左顧して(七〇)鮮卑を陵ぐ。身を鋒刃の端に弃て、(七一)性命安んぞ懷ふべき。父母すら且つ顧みず、何ぞ子と妻とを言はん。名壯士の籍に編し、(七二)中に私を顧るを得ず。軀を捐てて國難に赴き、死を視ること忽ち歸するが如し。

【五五】金羈。黄金のオモツラ。
【五六】連翩。馬の馳する貌。
【五七】幽幷。二州の名。今の山西直隸の地。此地古來勇俠多し。
【五八】沙漠。支那の西北なる沙漠の地。
【五九】宿昔。昔時。
【六〇】楛矢。竹箭なり。參差は長短齊しからざる貌。
【六一】左的。左方に設けたるマト。
【六二】月支。射帖なり。布帛に畫きて的とせるもの。
【六三】飛猱。敏捷なる猿。接は射なり。
【六四】馬蹄云云。馳騖するをいふ。
【六五】狡捷。動作の敏捷なること。猴猨は猿、
【六六】豹螭。猛獸の名。
【六七】警急。警戒すべき事變。
【六八】虜騎。外夷の騎兵。
【六九】羽檄。兵を徵す文書。
【七〇】鮮卑。外夷の名。
【七一】性命。生命なり。
【七二】中。心中なり。

【大意】白馬に乘る者を見て此篇を作る。人當に事功を立て力を國家に盡すべく、私を念ふべからざる事を言ふ。白馬に金勒を飾り、西北に向つて疾驅する者あり。これ何人ぞや。答者曰く、幽

幷の遊俠兒にして、少年の時鄕里を去りて此地に來り、勇名を蕃夷の間に轟かせる者なり。昔嘗て弓矢を負ひ、左に發して的を破り、右に發して射帖を摧き、仰いで飛猿を射、俯して馬を馳せ、敏捷なること猿に過ぎ、勇猛なること虎豹の如し。今馬を驅りて西北に向ふは、邊城に胡夷來寇し、檄を飛ばして兵を徵すを以て、將に征きて匈奴鮮卑の賊を破らんが爲なり。此人既に身を鋒刃に委し、また生命を惜まず、父母妻子をも敢て顧みず。名を壯士の籍に置けば、心に私事を顧るを許さず。去つて外夷を攘ひて國難を救はんとす。死を視ること尙ほ故鄕に歸るが如し。

(一)王明君の辭竝序　(二)石季倫

王明君は本是れ王昭君、(三)文帝の諱に觸るるを以て之を改む。匈奴盛にして婚を漢に請ふ。元帝後宮(四)良家の子昭君を以て配す。昔(五)公主烏孫に嫁ぐとき、琵琶をして馬上に樂を作し、以て其道路の思

【一】王明君。王昭君なり、年十七にして漢の元帝の宮人となる、宮人甚多きを以て畫工をして其形を圖せしめ、圖を按じて召幸す、宮人皆畫工に賂す、昭君獨り其美を恃みて賂はず、工人乃ち之を醜圖す後匈奴婚を漢に求む、帝圖を按じ昭君をして匈奴に嫁せしむ、昭君入りて辭するに及び光彩人を射る、帝悔恨すれども及ばず、遂に匈奴に嫁せしむ。

【二】石季倫。石崇、字は季倫、晉の渤海南皮の人。

【三】文帝。晉の文帝、諱は昭。

【四】良家の子。淸白人家の子女をいふ。

【五】公主。天子の女の稱、漢の武帝の時、烏孫使を遣して馬を獻じ、公主に尙せんこと

を慰めしむ。其の明君を送るとき、亦必ず爾りしならん。其の新曲を作る、哀怨の聲多し。故に之を紙に敍すと云爾。

(六)我れ本漢家の子、將に(七)單于の庭に適かんとす。(八)辭訣して未だ終るに及ばず、前驅已に旌を抗ぐ。(九)僕御涕流離し、轅馬悲み且つ鳴く。哀鬱(一〇)五内を傷ましめ、泣涙(一一)珠纓を霑す。行き行きて日已に遠く、遂に匈奴の城に造る。我を(一二)穹廬に延き、我に(一三)閼氏の名を加ふ。(一四)殊類は安んずる所にあらず、貴しと雖も榮とする所にあらず。(一五)父子に陵辱せらる。之に對して慙ぢ且つ驚く。身を殺すは良に易からず、默默として以て苟も生く。苟も生きて亦何をか聊んせん、積思常に憤盈す。願くは飛鴻の翼を假り、之に乘りて以て遐く征かん。飛鴻我を顧みず、佇立して以て(一六)屛營す。昔は(一七)匣中の玉たり、今は(一八)糞土の英たり。朝華は歡ぶに足らず、秋草と并せられんことを甘んず。語を後世の人に傳ふ。遠嫁情を爲し難しと。

を願ふ、乃ち江都王建の女を以て公主となし以て烏孫に妻す。烏孫は夷國の名。

【六】我。昭君の自稱。

【七】單于。匈奴の王なり。

【八】辭訣。陛下に暇乞すること。

【九】僕御。馭者なり。流離は涙の流るる貌。

【一〇】五内。五臟なり。

【一一】珠纓。冠の紐。

【一二】穹廬。まるてんじやう。匈奴は穹廬の中に住す。

【一三】閼氏。單于の后の稱。

【一四】殊類。異人種なり。

【一五】父子。父子二人にて昭君を妻とせるなり。

【一六】屛營。うろうろする貌。

【一七】匣中。箱の中、漢土の人たるをいふ。

【一八】糞土。匈奴に喩ふ。

【大意】われ本と漢人なるに、將に匈奴の王に嫁せんとす。陛下に別を告ぐること未だ終らざるに先驅の士卒早くも旗を擧げて行を促す。因つて車に駕して去らんとすれば、僕馬皆悲鳴す。吾が心亦悲傷し、五臟も爲に裂けんとす。行きて匈奴の城に至れば、我を穹廬の中に迎へ入れ、我を以て后となす。異人種は心に安んずる所にあらざれば、后妃の貴きに升るも敢て榮とする所にあらず。況んや父子二人我を凌辱して妻となすをや。之に對して唯慚ぢ且つ驚くのみ。自殺するの難きを以て、隱忍して生を保てども、幽憤常に心に滿つ。飛鴈の翼を借りて漢土に飛び歸らんと思へど、飛鴈敢て我を顧みず。獨り徘徊して沈吟するのみ。昔は漢土の玉たりしも、今や夷地の花となる。一朝の榮華は吾が希ふ所にあらず、ただ秋草と共に凋落せんことを願ふ。後世の人に寄語す。遠く外夷に嫁しては悲に堪へざることを。

樂府詩十七首　　陸士衡

猛虎行

渴すれども盜泉の水を飲まず、熱けれども惡木の陰に息はず、惡木豈枝なからんや、志士苦心多し。駕を整へて（一）時命を肅み、策を杖ついて將に遠

【一】時命。時君の命。

く尋ねんとす。饑ゑて猛虎の窟に食し、寒えて野雀の林に栖む。日歸りて功未だ建たず、時往いて歲載ち陰れぬ。(二)崇雲岸に臨んで駭き、(三)鳴條風に隨つて吟ず。幽谷の底に(四)靜言し、高山の岑に長嘯す。急絃(五)懦響なく、(六)亮節音を爲し難し。人生誠に未だ易からず、曷ぞ云に此衿を開かん。我が(七)耿介の懷を眷み、俯仰して古今に愧づ。

【大意】此れ耿介の志を抱き事功を建てんと欲する意を述ぶ。昔孔子盜泉を過ぎ、渴すれども飲まず。其名を惡みてなり。志士は惡木の陰に息ふを恥づ。何ぞ況んや惡人と同じく處るをや。夫れ惡木には枝多く、之に息ふ者衆し。然も志士は苦心して其下に息はざらんことを期す。われ車馬を整へ時君の命を愼み、馬に鞭ちて遠く適かんとし、途に猛虎の窟に食ひ、野雀の林に宿す。是れ惡木盜泉を去ること、尙ほ未だ遠からず。豈久しく此に食息すべけんや。忽ち日月逝き歲云に暮るるを致し、功業未だ建たず。徒に岸雲變幻し、秋風枝を鳴らすを見、無限の感慨を起し、乃ち谷底山巓に沈思長嘯す。我れ時に因りて節を屈せず。急絃の下自ら弱響なきも、貞亮の節は知音を得難し。此れ卽ち志士苦心の處なり。世路を涉るは誠に至難とす。何ぞ此遠行の襟懷を開かん。われ唯耿介の節を眷愛するは、古今人に恥づるを恐るればなり。

【二】崇雲。高き雲。
【三】鳴條。風に鳴る枝。
【四】靜言。沈思すること。
【五】懦響。懦弱の響。
【六】亮節。貞亮の節。
【七】耿介。正直なり。

君子行

天道は(八)夷且つ簡なり、人道は嶮にして難し。(九)休咎相乘躡し、翻覆すること波瀾の若し。疾を去りて遠からざるに苦み、疑似實に患を生ず。火に近づけば固に熱かる宜く、冰を履んで豈寒を惡まんや。(一〇)蜂を掇りて天道を滅し、塵を拾ひて(一一)孔顏を惑はす。(一二)逐臣尚ほ何か有らん、(一三)弃友焉んぞ歎くに足らん。福の鍾るは恆に兆あり、禍の集るは端なきにあらず。天損未だ辭し易からず、人益猶ほ懽ぶべし。(一四)朗鑒豈遠く假らんや、之を取るは傾冠に在り。近情自ら信ずるに苦み、君子は未然を防ぐ。

【大意】君子は嫌疑に遠ざかり、天道に從ふべきを言ふ。天道は私なし。故に夷簡なり。

【八】夷。平なり、簡は略なり。
【九】休咎。禍福なり。乘躡は往來なり。
【一〇】蜂を云云。尹吉甫が前妻の子は伯奇、後妻の子は伯封、後妻其子の太子たらんことを欲し、吉甫に言つて曰く、伯奇妾を好めり、若し信ぜずんば玉臺に上りて之を觀よと。後妻蜂を取り其毒を除きて衣領の中に置き、伯奇をして之を殺さしむ、吉甫伯奇を責めしむ、使者袖に死蜂あるを見て以て吉甫に白す、吉甫之を追はしむれば、已に河に投ぜり。父子の道は天性の常なり、故に天道といふ。
【一一】孔顏。孔子陳蔡の間に窮すること七日、嘗て粒食せず、顏回米を得て之を炊ぐ、孔子望見すれば、回甑中の飯を攫みて之を食へり、飯熟して孔子に進む、孔子起ちて曰く、今夢に先君を見たり、食絜くし之を饋らんと欲すと、回曰く不可なり、さきに炱煤甑中に入る、食を棄つるは不祥なり回因つて攫んで之を食へりと孔子歎じて曰く、信ずる所のものは目、恃む所のものは心、今心目信じて恃むに足らず、弟子之を記せと。炱煤とは煙塵なり。
【一二】逐臣。君に逐はれし臣。
【一三】弃友。棄てられし友。
【一四】朗鑒。明鏡なり。抱朴子に「明鏡舉れば則ち冠を傾けて見る」とあり。荀悦申鑒に「側弁垢顏は明鏡に鑒みず」とあり。

人道は僻多し。故に險難なり。禍福の往來反覆するは、波瀾の定めなきが如し。惡を去ること遠からず、事疑似に涉るあれば、則ち禍患を生じ、氷火に近づけば、必ず寒熱の患に罹り、讒佞に近づけば、則ち禍難を致す。蜂を取りて父子の天常を滅し、塵を拾ひて孔顏疑惑を生ず。況んや逐臣棄友をや。何の恨むべく歎ずべきことか之れあらん。禍福の至る皆漸あり。天損の至る己の招く所にあらず。故に之に安んじて辭せず。人益の來る、己の求むる所にあらず。故に之を受けて歡となすべし。傾冠の明鏡に掩ひ難きは、皆自ら之を取るのみ。小人は近情にして自ら信ずるに苦みて禍に遇ひ、君子は遠く慮り嫌疑に遠ざかり、夷簡の天道に從ひて福を蒙る。

從軍行

苦しいかな遠征の人、(一五)飄飄として四遐を窮む。南のかた(一六)五嶺の巓に陟り、北のかた(一七)長城の阿を戍る。深谷(一八)邈として底なく、(一九)崇山鬱として嵯峨たり。臂を奮ひて(二〇)喬木に攀ぢ、迹を振げて(二一)流沙を涉る。隆暑固に已に慘たり、(二二)涼風嚴にして且つ苛なり。(二三)夏

【一五】飄飄。遠行の貌。四遐は四方なり。
【一六】五嶺。江南に在る五山の稱。
【一七】長城。萬里長城。
【一八】邈。深き貌。
【一九】崇山。高山なり。嵯峨は高き貌。
【二〇】喬木。高き木、詩經に「南に喬木あり」とあり。
【二一】流沙。西北沙漠の地、書經に「西のかた流沙に被る」とあり。
【二二】涼風。寒風なり。苛は切なり。
【二三】夏條。夏の枝。

條鮮藻を焦し、寒冰衝波を結ぶ。(二四)胡馬雲屯の如く、(二五)越旗亦星羅す。飛鋒影を絶つなく、(二六)鳴鏑自ら相和す。朝に食ふに冑を免がず、夕に息ふに常に戈を負ふ。苦しいかな遠征の人、心を撫でて悲むこと如何。

【大意】遠征の人は誠に苦し。遠く四方を窮め、南は五嶺に至り、北は長城に至る。深谷を踏み高山に登り、喬木を攀ぢ沙漠を渉り、酷暑燒くが如くにして、鮮藻も其枝を焦し、寒風凜冽にして、衝波も爲に凍り、胡馬雲の如く集り、越旗星の如く布き、鋒刃飛んで影を絶たず、鳴鏑鳴つて響相和し、食ふにも冑を脱がず、息ふにも戈を釋てず。艱苦誠に甚しといふべし。その悲果して如何ぞや。

【二四】胡馬。北狄の馬。雲屯は雲の如く集ること。
【二五】越旗。南國の旗。星羅は星の如く列ること。
【二六】鳴鏑。かぶら矢。

(二七)豫章行

舟を(二八)淸山の渚に汎べ、遙に高山の陰を望めば、川陸(二九)途軌殊なり、(三〇)懿親將に遠く尋ねんとす。(三一)三荊株を同うするを歡び、(三二)四鳥林を異にするを悲む。會ふを樂むは良に古よりす。別を悼むは豈獨り今のみならんや。世に寄る將

【二七】豫章。郡名なり。
【二八】淸山。一本淸川に作る。
【二九】途軌。道なり。
【三〇】懿親。兄弟なり。遠く尋ぬとは遠く別るるをいふ。
【三一】三荊。荊はイバラ。三枝本を共にするなり。昔田廣、田眞、田慶兄弟三人、將に別れんとす、庭に荊樹あり宿を經て萎黄す、乃ち相謂つて曰く荊樹すら尙ほ然り、況んや我が兄弟をやと、遂に別れず荊復た悅茂す。
【三二】四鳥。孔子衞に在り哭す

た幾何ぞ、日昃いて陰を停むるなし。(三三)前路既已に多く、(三四)後途年に隨つて侵す。(三五)促促たる薄暮の景、(三六)亹亹として克く禁むること鮮し。曷爲れぞ復た茲を以て、曾ち是に苦心を懷く。(三七)遠節物に嬰ること淺く、近情能く深からず。行いて嘉福を保て、景絕えば繼ぐに(三八)音を以てせん。

る者を聞く、甚だ哀し、顏回に問ひて曰く、汝知るや此れ何ぞ哭すると、回曰く此れ唯死の爲にあらず、又生離の爲なり、昔桓山の鳥四子を生み羽翼既に成り、將に四海に分れんとす、其母悲鳴して之を送る、其の往いて返らざるが爲なり、竊に音を以て類して之を知れりと、之を問ふに果して然り。

【三三】前路。今日までの生涯。

【三四】後塗。餘年なり。

【三五】促促。速かなる貌。

【三六】亹亹。進む貌。

【三七】遠節。遠大の節。物は物累なり。

【三八】音。音信なり。

【大意】兄弟の遠行を送る意なり。舟を汎べて遙に往路を望めば、川陸道を異にす。兄弟茲に遠く別れ去らんとす。荊樹も共に居るを歡び、鳥類も別れ棲むを悲む。會ふを樂み別るるを悼むは、古今となく一なり。況んや人生は寄寓の如く、歲月逝き易きをや。齡を重ぬること既に多く、餘年亦幾何もなし。忽ち將に衰老せんとす。何爲れぞ復た離別の事をなし、此の愁苦の心を抱く。然りと雖も遠大の節あれば、物累に嬰ること淺く、哀情亦隨つて深からざるを得ん。去つて宜しく善福を保つべし。形影若し絕えなば、之に繼ぐに音信を以てせん。

苦寒行

北のかた（三九）幽朔の城に游べば、（四〇）凉野嶮難多し。俯して（四一）穹谷の底に入り、仰いで高山の盤に陟る。凝冰重澗に結び、積雪長巒に被る。陰雲巖側に興り、悲風樹端に鳴る。白日の景を覩ず、但寒鳥の喧しきを聞く。猛虎林に憑りて嘯き、玄猿岸に臨んで歎く。夕に（四二）喬木の下に宿し、（四三）慘愴して恆に歡鮮し。渴して堅冰の漿を飲み、饑ゑて（四四）零露の餐を待つ。離思固に已に久し、（四五）寤寐與に言ふなし。劇しいかな行役の人、（四六）慊慊として恆に寒に苦む。

【大意】北方寒冷の野を行き、窮谷に入り山巓に登れば、堅冰積雪山を覆ひ谿を埋め、風雲樹を拂ひ、日光を見ずして唯寒鳥の聲と、虎嘯き猿啼くを聞く。夕に高樹の下に宿すれば、悲傷して歡をなし難し。渴しては堅冰の漿をすすり、飢ゑては墜露を掬んで食ふ。別離の情語るに人なし。行役の人苦寒の狀かくの如く其れ甚し。

【三九】幽朔。北なり。
【四〇】凉野。寒野なり。
【四一】穹谷。窮谷なり。
【四二】喬木。高樹なり。
【四三】慘愴。悲傷なり。
【四四】零露。落つる露。
【四五】寤寐。ねてもさめても。
【四六】慊慊。滿足せざるを恨む貌。

飲馬長城窟行

馬を驅りて（四七）陰山に陟れば、山高くして馬前まず。往いて陰山の（四八）候に問へば、（四九）勁虜燕然に

【四七】陰山。北邊の山の名。
【四八】候。斥候兵。
【四九】勁虜。强狄なり。燕然は山名。

在り。(五〇)戎車軌を停むるなく、(五一)旌旆屢徂き還る。仰いで積雪の巖に憑り、俯して堅冰の川を渉る。冬來りて秋未だ反らず、家を去ること(五二)邈として以て緜し。(五三)玁狁亮に未だ夷がず、征人豈に徒に旋らんや。(五四)末德先鳴を爭ひ、(五五)凶器兩全なし。師克ちて薄賞行はれ、軍沒して(五六)微軀捐てらる。將に(五七)甘陳の迹に遵ひ、功を(五八)單于の旆に收めんとす。(五九)振旅して歸士を勞ひ、爵を(六〇)槀街の傳に受く。

【大意】馬を驅りて陰山に陟れば、山險にして馬前まず。往いて斥候に問へば、匈奴尚ほ燕然山に在りといふ。乃ち更に兵車を進め旌旗を徙し、積雪を履み堅氷を渉る。昨冬來り征して、今秋尚ほ家に歸らず、家を離るること益遼遠なり。然も匈奴未だ平がず、何ぞ空しく歸るを得ん。進み戰つて先登を爭ひ、兵刃交りて彼我孰か傷く。克てば薄賞を得、敗るれば命を捐つ。ただ甘延壽、陳湯に倣ひて單于を捕へ、凱旋して戰士を勞ふの時、槀街の傳舍に於て、封爵を受けんことを願ふ。

【五〇】戎車。兵車なり。
【五一】旌旆。旗なり。
【五二】邈。遙なり。
【五三】玁狁。匈奴なり。
【五四】末德。莊子に「三軍五兵の運は德の末なり」とあり、戰をいふ。先鳴は先登して大に呼ぶこと。
【五五】凶器。武器なり。
【五六】微軀。微賤の身。
【五七】甘陳。甘延壽は漢の北地の人、西域に使し副校尉陳湯と共に郅支單于を斬り義成侯に封ぜられ、陳湯は爵關內侯を賜ふ。
【五八】單于。匈奴の王の稱。
【五九】振旅。凱旋なり。
【六〇】槀街。長安城內にある蕃夷の居留地。傳は傳舍なり。

門有車馬客行

門に車馬の客あり、駕して言に故郷を發す。(六一)君が久しく歸らざるを念ひ、跡を濡して(六二)江湘を渉る。袂を投じて(六三)門塗に赴き、衣を攬りて裳に及ばず。膺を撫で客を攜へて泣き、涙を掩ひて(六四)溫凉を敍ぶ。(六五)邦族の間を借問し、(六六)惻愴して存亡を論ず。親友多くは(六七)零落し、(六八)舊齒皆凋喪しぬ。市朝互に遷易し、城闕或は丘荒となる。(六九)墳壟日月多く、松栢鬱として(七〇)芒芒たり。天道信に(七一)崇替す。人生安んぞ長きを得ん。慷慨して平生を惟ひ、(七二)俛仰して獨り悲傷す。

【大意】門に訪客あり、吾が故郷より來れるなり。客曰く、足下の久しく歸らざるに由り、足を漬して江湘を渉り、來りて足下を訪へるなりと。因つて疾く起ち、未だ衣を整ふるに暇あらず、出でて客を見、胸を撫で涙を掩ひて寒暄を敍し、鄕里の親族の事を問ひ、其の生死を聞きて悲喜す。親友多くは死し、耆老存する者なし。市朝城闕或は化して丘墟となり、墳墓日に增して松栢鬱茂すと聞く。夫れ天道には興廢あり、人生獨り長きを得んや。慷慨し

【六一】君。陸士衡を謂ふ。
【六二】江湘。川の名。
【六三】門塗。門途なり。
【六四】溫凉。寒暖の挨拶をすること。
【六五】邦族。鄕里の親族。
【六六】惻愴。悲傷なり。
【六七】零落。死亡なり。
【六八】舊齒。耆老なり。凋喪は死すること。
【六九】墳壟。士衡の家の墳墓をいふ。
【七〇】芒芒。盛なる貌。
【七一】崇替。興廢なり。
【七二】俛仰。俯仰なり。

て往時を憶ひ、俯仰して悲傷しぬ。

君子有所思行

駕を命じて北山に登り、(七三)延佇して城郭を望む。(七四)廛里一に何ぞ盛なる、街巷紛として(七五)漠漠たり。(七六)甲第高闥を崇うし、(七七)洞房阿閣を結ぶ。曲池何ぞ(七八)湛湛たる、淸川(七九)華薄を帶ぶ。(八〇)邃宇綺窻を列ね、(八一)蘭室羅幕に接す。(八二)淑貌色のままに斯に升り、哀音顏を承けて作る。人生誠に(八三)行邁し、(八四)容華年に隨つて落つ。善い哉(八五)膏粱の士、生を營むこと奧にして且つ博なり。(八六)宴安靈根を消し、(八七)酖毒恪むべからず。(八八)肉食の資を以て、笑を(八九)葵と藿とに取るなかれ。

【大意】北山に登りて城市を望めば、街衢交錯し、高第樓閣軒を竝べ、池あり川あり、叢林あり。深屋には綺窓を列ね、蘭室には羅帳を張り、中に美女あり容色の美を以て擧げらる。然も容色の衰ふるや、哀音忽ち起る。人生は行客の如し。

【七三】延佇。久しく立ちどまる。
【七四】廛里。城邑なり。
【七五】漠漠。布列する貌。
【七六】甲第。甲乙の次第ある邸宅。高闥は高門。
【七七】洞房。房室なり。阿閣は大閣。
【七八】湛湛。水の平なる貌。
【七九】華薄。草木の叢生する處を薄といふ。
【八〇】邃宇。深屋なり。綺窻は錦綺を以て飾れる窓。
【八一】蘭室。香木にて造れる室羅幕は薄絹の帳。
【八二】淑貌。美貌なり。
【八三】行邁。行き過ぐること。
【八四】容華。美しき容色。
【八五】膏粱。美食なり。
【八六】宴安。左傳に「宴安は酖毒なり懷ふべからず」とあり。靈根は身に喩ふ。
【八七】酖毒。害毒なり。
【八八】肉食。高位にある人をいふ。
【八九】葵藿。野菜の名。貧賤の人をいふ。

容色も亦年に隨つて衰ふ。宜なるかな富貴美食の士、生を營むこと深奧にして廣博なるや。然りと雖も安逸は身を滅すの酖毒なり、之を懷ふべきにあらず。高貴の身を以て貧士の笑となるなかれ。

齊謳行

(九〇)營丘海曲を負ひ、(九一)沃野爽且つ平なり。(九二)洪川河濟を控き(九三)崇山高冥に入る。東のかた(九四)姑尤の側に被り、南のかた(九五)聊攝の城に界す。海物萬類を錯へ、陸產尙ほ千名。(九六)孟諸楚夢を呑み、(九七)百二秦京に侔し。惟れ(九八)師東表を恢いにし、(九九)桓后周の傾くを定む。天道迭に代るあり、人道久しく盈つるなし。鄙しい哉(一〇〇)牛山の歎、未だ至人の情に及ばず。(一〇一)爽鳩苟も已に徂きぬ、(一〇二)吾子安んぞ停るを得ん。行き行きて將に復た去らんとす。長存は營む所にあらず。

【九〇】營丘。齊の地名。
【九一】沃野。豐饒なる野。
【九二】洪川。大川なり。河濟は齊國にある川の名。
【九三】崇山。高山なり。
【九四】姑尤。齊の東界の地名。
【九五】聊攝。齊の西界の地名。
【九六】孟諸。齊の澤の名。楚夢は楚の雲夢澤。
【九七】百二。史記に「秦は形勝の國、持戟百萬、秦百二を得たり」とあり、蘇林註に「秦地堅固、二萬人諸侯の百萬人に當るに足るなり」とあり。
【九八】師。師尙父、卽ち太公望なり、始めて齊に封ぜらる。東表は東方の儀表。
【九九】桓后。齊の桓公、霸業を成し王事に勤む。
【一〇〇】牛山。晏子春秋に「齊の景公牛首山に遊び北其國に臨み流涕して曰く、若何ぞ此を去りて死するやと、艾孔、梁丘據皆泣く、晏子獨り笑ふ、公涕を收めて之に問ふ、晏子曰く、賢者をして常に守らしめば則ち太公桓公之を守らん、勇者をして常に守らしめば則ち莊公之を有たん、吾が君安んぞ之を有つを得ん、而るに流涕をなすは是れ不仁なり、不仁の君一、諂諛の臣二を見

【大意】齊の地たる、東に海を負ひ、沃野千里、大川には淸濟濁河あり、高山聳えて雲表に入る。其廣袤東は姑尤に至り、南は聊攝に至り、海陸の物產千種萬類なり。孟諸の澤は楚の雲夢より大に、國土の險は秦の百二に侔し。師尙父嘗て東方の儀表たり、桓公周室の傾けるを扶けぬ。然も天人の道は興廢して、暫くも留まらず。故に景公は牛山の嘆を發せり。是れ未だ至人の心に達せざるなり。爽鳩氏已に滅びぬ。齊侯豈獨り永く存するを得んや。長存は求めて得べからざる所なり。

ろ、獨り笑ふ所以なり」とあり。

【一〇一】爽鳩。昔齊國を領せし諸侯なり。左傳に「齊侯酒を飲んで樂む、公曰く古より死なくんば其樂若何ぞやと、晏子對へて曰く、古より死なくんば古の樂なり、君何ぞ得ん、爽鳩氏始め此地に居る、季萴之に因り、而して逢伯陵之に因り、蒲姑氏之に因り、太公之に因る云云」とあり。

【一〇二】吾子。齊侯をいふ。

日出東南隅行
或は曰ふ羅敷歌

(一〇三)扶桑朝暉升り、此の高臺の端を照す。高臺に(一〇四)妖麗多く、(一〇五)濬房淸顏を出す。(一〇六)淑貌皎日に耀き(一〇七)惠心淸且つ閑なり。美目(一〇八)玉澤を揚げ、(一〇九)蛾眉翠翰に象る。鮮膚一に何ぞ潤へ

【一〇三】扶桑。東方日出の處にある木の名。朝暉は旭日。

【一〇四】妖麗。美女なり。

【一〇五】濬房。深閨なり。

【一〇六】淑貌。美貌なり。皎日は白日。

【一〇七】惠心。順好の心。

【一〇八】玉澤。美しき光澤。

【一〇九】蛾眉。美しき眉。翠翰は翡翠鳥の羽。

る。秀色餐ふべきが若し。(二一〇)窈窕として容儀多く、(二一一)婉媚にして笑言に巧なり。暮春に(二一二)春服成り、(二一三)粲粲たり(二一四)綺と紈と。(二一五)金雀藻翹を垂れ、(二一六)瓊珮瑤璠を結ぶ。駕を方べて清塵を揚げ、足を(二一七)洛水の瀾に濯ぐ。(二一八)藹藹たり風雲の會、佳人一に何ぞ繁き。南崖(二一九)羅幕充ち、北渚(二二〇)軿軒盈つ。清川(二二一)藻景を含み、高崖(二二二)華丹を被る。(二二三)馥馥として芳袖揮り、(二二四)泠泠として纖指彈ず。悲歌清響を吐き、雅舞(二二五)幽蘭を播く。丹脣(二二六)九秋を含み、(二二七)妍迹七盤を陵ぐ。曲に赴くこと驚鴻より迅く、(二二八)節を蹈むこと集鸞の如し。(二二九)綺態顏に隨つて變じ、沈姿(二三〇)乏源なし。俯仰紛として(二三一)阿那たり。顧歩咸懽ぶべし。遺芳(二三二)飛飈に結び、浮景清湍に映ず。(二三三)冶容詠ずるに足らず、春游良に歎ずべし。

【大意】旭日東方より出で、高樓の端を照す。樓中美女多く、常に深閨の中に在り。美貌白日に輝

【二一〇】窈窕。美しき貌。
【二一一】婉媚。美しき貌。
【二一二】春服。春著なり。
【二一三】粲粲。鮮明なる貌。
【二一四】綺紈。絹の類。
【二一五】金雀。釵の飾なる黄金の雀。藻翹は美しき羽。
【二一六】瓊珮。玉の佩物。瑤璠は美玉。
【二一七】洛水。川の名。
【二一八】藹藹。盛なる貌。風雲は多きをいふ。
【二一九】羅幕。薄絹の帳。
【二二〇】軿軒。車なり。
【二二一】藻景。美しき日光。
【二二二】華丹。赤き花。
【二二三】馥馥。芳しき貌。
【二二四】泠泠。箏聲をいふ。纖指は細き指。
【二二五】幽蘭。曲の名。
【二二六】九秋。曲の名。
【二二七】妍迹。美しき足。七盤は楚舞。
【二二八】節。調曲なり。
【二二九】綺態。美しき態度。
【二三〇】乏源。一本に定源に作る。
【二三一】阿那。しなやかなる貌。
【二三二】飛飈。飛風なり。
【二三三】冶容。美しき容姿。

き、其心順好なり。目には珠玉の光澤を含み、眉は翡翠の羽に似たり。肌膚潤美にして言笑共に好し。粲粲たる春服を著、金雀の釵を揷み、玉珮を佩び、車を馳せて洛水の邊に遊ぶ。その衆盛なること、風雲の會の如し。南岸には羅幕充ち、北岸には車輿滿つ。ここに淸歌妙舞して其輕捷なること、驚鴻集鸞の如く、姿態舞容に隨つて變じ、深沈の姿縱横に出で、其源定まらず。芳香飛風に交り、舞影波瀾に映ず。其事詠歌するに足らずと雖も、芳春の遊誠に歎美すべし。

(一三四)長安有狹邪行

(一三五)伊洛に岐路あり、岐路(一三六)朱輪を交ふ。(一三七)輕蓋華景を承け、(一三八)騰歩飛塵を躡む。玉を鳴らす豈(一三九)樸儒ならんや、(一四〇)軾に憑る皆俊民なり。烈心勁秋より厲しく、麗服芳春より鮮なり。余本倦遊の客、(一四一)豪彥舊親多し。(一四二)蓋を傾けて芳訊を承く。(一四三)鳴かんと欲せば當に晨に及ぶべし。一を守るは矜るに足らず、岐路良に遵ふべし。(一四四)規行曠迹なく、(一四五)矩歩豈人に逮ばんや。

【一三四】長安。京師なり。狹邪は邪曲の路。岐路なり。
【一三五】伊洛。川の名、長安と洛陽との附近に在り。
【一三六】朱輪。朱塗の車。
【一三七】輕蓋。輕き車蓋。華景は日光。
【一三八】騰歩。歩を擧ぐること。
【一三九】樸儒。朴實なる儒士。
【一四〇】軾。車上の横木。俊民は輕俊の士。
【一四一】豪彥。朝廷の俊傑。
【一四二】蓋を傾く。從來面識なき者途上に相會し、車蓋を傾けて相語るなり。一見して相親むをいふ。芳訊は美言なり。
【一四三】鳴かんと云云。雞は晨に及んで鳴く、人の時に及んで仕ふるに喩ふ。
【一四四】規行。規則正しき行歩。曠迹は遠迹なり。
【一四五】矩歩。規則正しき歩行。

足を投じて（一四六）緒已に爾り、（一四七）四時必しも循はず。將に（一四八）殊塗の軌を遂げ、子を（一四九）同歸の津に要せんとす。

【大意】京師に岐路多く、岐路の間貴人の車馬往來頻なり。日光を車蓋に承け、歩を擧げて淸塵を躡む。佩玉の人皆朴實の儒士にあらず、乘車の人悉く輕俊の士なり。其心秋霜よりも厲しく、其服春華よりも麗し。余は本遊宦を疲厭せる者なり。既に朝士と親舊なり、今又新知の人あり。美言を以て我に勸めて曰く、宜しく早く進仕し、雞の晨に及んで鳴くが如くなるべし。貞一の道を守り、自ら苦辛を取るは、何ぞ矜るに足らん。世路に遵ひ委曲して俗に從ふべし。行歩の規矩に中る者は、曠遠の道に達すべからずと。余之に答へて曰く、余が足を投ずること既に足下に異れり。余は余が前緒を追ひて進むべし。四時の節を異にし、必ずしも相循はざるが如く、足下と趣を同うせず。途を異にして進み、竟に足下と同じく會合の處に歸せんと。

前緩聲歌

（一五〇）游仙靈族を聚め、（一五一）曾城の阿に高會す。長風萬里に擧り、（一五二）慶雲鬱として嵯峨たり。（一五三）虚

【一四六】緒。事なり。
【一四七】四時。春夏秋冬なり。
【一四八】殊塗。道を異にすること。
【一四九】同歸。歸著する所を同うすること。

【一五〇】游仙。仙人なり。
【一五一】曾城。仙人西王母の居る處、崑崙山上に在り。
【一五二】慶雲。瑞雲なり。嵯峨は

妃洛浦に興り、（一五四）王韓太華に起る。北のかた（一五五）瑤臺の女を徵し、南のかた（一五六）湘川の娥を要す。（一五七）肅肅として霄駕動き、（一五八）翩翩として翠蓋羅る。羽旗（一五九）瓊鑾を棲ましめ、（一六〇）玉衡鳴和を吐く。（一六一）太容高絃を揮ひ、（一六二）洪崖清歌を發す。（一六三）獻酬既已に周く、輕擧して紫霞に乘る。轡を（一六四）扶桑の枝に摠へ、足を（一六五）湯谷の波に濯ぐ。淸輝天門に溢れ、慶を垂れて皇家に惠す。

【大意】仙靈、族を聚めて曾城の曲に會合す。時に長風擧り瑞雲起る。虙妃は洛浦より來り王韓は華山より來り、北のかた瑤臺の佚女を召し、南のかた湘川の神女を迎ふ。皆輕車に駕して天上を翔り、旗上に鑾あり衡端に和あり。太容洪崖乃ち絃歌を奏し、酒宴既に畢り、霞に乘りて去らんとし、轡を扶桑の下に整へ、足を暘谷の波に濯げば、光輝天門に溢れ、慶福を降して我が皇家に惠賜す。

長歌行

雲の盛なる貌。
【一五三】虙妃。洛水の神女。
【一五四】王韓。王子晉、韓衆の二仙人、華山に博す。
【一五五】瑤臺。仙宮の名。
【一五六】湘川。川の名、堯の二女娥皇女英、湘川に墮ちて死し神女となる。要は迎ふること。
【一五七】肅肅。車の行く貌。霄駕は天に薄りて行く車。
【一五八】翩翩。輕き貌。翠蓋は翡翠の羽を以て作りし車蓋。
【一五九】瓊鑾。鈴なり。
【一六〇】玉衡。車の横木。鳴和は鈴。
【一六一】太容。黄帝の樂師。
【一六二】洪崖。三皇の時の樂師。
【一六三】獻酬。杯のやりとりすること。
【一六四】扶桑。日の出づる處にある木。
【一六五】湯谷。一本に暘谷に作る、日の出づる處。湯は音ヤウ。暘と通ず。

逝きぬ天を經るの日、悲しい哉地を帶る川。寸陰(一六六)晷を停るなく、尺波豈徒に旋らんや。年の往くこと勁矢よりも迅く、時の來ること亮に(一六七)急弦なり。(一六八)遠期克く及ぶこと鮮く、(一六九)盈數固に全きこと希なり。(一七〇)容華夙夜に零ち、(一七一)體澤坐に自ら損つ。(一七二)茲物苟も停め難し、吾が壽安んぞ延ぶるを得ん。(一七三)俛仰逝ふ將に過ぎんとす、倏忽幾何の間ぞ。慷慨して亦焉にか訴へん、天道良に自然なり。但恨むらくは功名薄く、(一七四)竹帛宣ぶる所なきを。歲の未だ暮れざるに迨及び、長歌して我が閑を承けん。

【大意】日は行きて天を經、川は流れて地を繞り、日景暫くも留まらず、川流去つて返らず。年往き時來る。その迅速なること信に急弦の勁矢を發するが如く、人よく上壽の數に滿つるを得る者稀なり。紅顏も忽ちにして衰へ、體澤もいつしか滅ゆ。歲月俯仰の間に過ぎ、人命倏忽にして能く幾時をか保たん。これ天道の自然にして、亦訴ふるに處なし。ただ功名の竹帛に垂るるなきを恨むのみ。願くは老の未だ至らざるに及び、閑暇の日を承け、長歌して自ら慰めん。

【一六六】晷。日景なり。
【一六七】急弦。強く張りし弓弦。
【一六八】遠期。上壽百二十歲をいふ。
【一六九】盈數。百二十の數に滿つること。
【一七〇】容華。美しき容貌。夙夜は忽ちなり。
【一七一】體澤。身の光潤なり。
【一七二】茲物。容華體澤を指す。
【一七三】俛仰。俯仰なり。
【一七四】竹帛。史籍なり。

吳趨行

(一七五)楚妃且く歎ずること勿れ、(一七六)齊娥且く謳ふこと莫れ。四坐竝に清聽し、我が(一七七)吳趨を歌ふを聽け。吳趨自ら始あり、請ふ(一七八)昌門より起さん。昌門何ぞ(一七九)嵯峨たる、(一八〇)飛閣通波に跨る。(一八一)重欒游極に承け、(一八二)回軒曲阿に啓く。(一八三)藹藹として慶雲被り、(一八四)泠泠として祥風過ぐ。山澤(一八五)藏育多く、土風淸くして且つ嘉し。(一八六)泰伯仁風を導き、仲雍其波を揚ぐ。(一八七)穆穆たる延陵子、(一八八)灼灼として諸華を光す。王迹(一八九)陽九に隤れ、帝功(一九〇)四遐に興る。(一九一)大皇富春より、手を矯げて(一九二)世羅を頓ふ。(一九三)邦彥運に應じて興り、粲として春林の葩の若し。(一九四)屬城咸士あり、吳邑最も多しとな

【一七五】楚妃。楚の樊姬なり、德を立て勳を著し、名を後世に垂る、因つて楚妃歎を作りて之を歎詠す。
【一七六】齊娥。齊后なり、よく謳歌をなす、人皆取りて曲となす。
【一七七】吳趨。吳の風土を歌ふ歌。
【一七八】昌門。吳王闔閭昌門を立て天の閶闔門に象る。
【一七九】嵯峨。高き貌。
【一八〇】飛閣。高閣なり。通波は江海なり。
【一八一】重欒。重れるマスガタ。游極は浮棟。
【一八二】回軒。長窓なり。曲阿は曲屋の角。
【一八三】藹藹。雲の盛なる貌。慶雲は瑞雲。
【一八四】泠泠。風の聲。
【一八五】藏育。包容生長すること。
【一八六】泰伯。周の太王の子にして仲雍、季歷の兄なり。季歷賢にして聖子昌あり、太王季歷を立て以て昌に及ばんとす是に於て泰伯仲雍二人荊蠻に奔りて以て季歷を避く、季歷果して立つ、故に泰伯仁風を導くといふ。泰伯立ちて吳の太伯となり、早く卒す、子なし、仲雍立つ、故に其波を揚ぐといふ。
【一八七】穆穆。美なる貌。延陵子は吳の公子季札なり、賢を以て當時に稱せらる。
【一八八】灼灼。明なる貌。諸華は中國なり。
【一八九】陽九。災厄なり。
【一九〇】四遐。四方なり。
【一九一】大皇。吳王孫權を指す、孫權は吳の富春の人なり。
【一九二】世羅。世變といふが如し。

す。(一九五)八族未だ侈るに足らず、(一九六)四姓實に名家、文德(一九七)淳懿を煕め、武功山河に侔し。禮讓何ぞ(一九八)濟濟たる、流化自ら(一九九)滂沱たり。淑美(二〇〇)窮紀し難し。(二〇一)商搉して此歌を爲る。

【一九三】邦彥。國家の美士。
【一九四】屬城。十縣を屬城となす。
【一九五】八族。張勃吳錄に「陳、桓、呂、竇、公孫、司馬、徐、傅」とあり。
【一九六】四姓。朱、張、顧、陸なり。
【一九七】淳懿。厚美なり。
【一九八】濟濟。威儀多き貌。
【一九九】滂沱。充溢の貌。
【二〇〇】窮紀。記錄し盡すこと。
【二〇一】商搉。はかり定むること。

【大意】楚妃歎を歌ふを休めよ、齊娥謳を唱ふるなかれ。四坐の人願くは我が吳趨行を歌ふを聽け。吳趨は昌門より始まる。昌門の高閣江海に連り、重栱浮棟を支へ、屋角に長窓を開く。瑞雲之を罩め清風之を拂ふ。土風清美にして山澤は萬物を包容生育す。昔泰伯仁讓の風を開き、仲雍之を承け、季札賢にして中國に輝く。漢王災厄に遇ひて王業頽壞するや、英雄四方に起る。吳王孫權富春より起りて世變を整へ、美士時運に應じて出で、粲然として春花の如し。屬城には皆奇士あり、吳邑最も多し。八族四姓皆わが吳をして重からしむ。相は文德を昭にし、將は武功を烈にし、禮儀よく行はれ、敎化徧く及ぶ。善美なること一一記錄し難し。今その大略を量度して此歌を作る。

(二〇二)塘上行

(二〇三)江蘺幽渚に生じ、微芳宣ぶるに足らず。(二〇四)風雲の會を被蒙して、華池の邊に移居す。(二〇五)藻を玉臺の下に發き、影を(二〇六)滄浪の泉に垂る。沾潤既已に渥く、根を結ぶこと奥くして且つ堅し。(二〇七)四節逝いて處らず、華繁きも久しく鮮なり難し。(二〇八)淑氣時とともに殞ち、餘芳風に隨つて損つ。天道遷易あり、人理常全なし。男は智の愚を傾くるを懽び、女は衰へて(二〇九)妍を避くるを愛す。(二一〇)微軀の退くを惜まず、但(二一一)蒼蠅の前むを懼る。願くは君(二一二)末光を廣めて、妾が薄暮の年を照せ。

【大意】江蘺微香ありと雖も、幽渚に生ず。一たび華池に移りてより、花を玉樓に開き、影を滄浪に垂れ、恩に潤ふこと既に渥く、根を結ぶこと固に堅し。(己微賤なりと雖も、君王に配するを得、永く以て好をなすべきに比す。)四時去つて留まらず、芳華も久しく妍なり難く、佳氣時に因つて落ち、餘香風に隨つて損つ。(色衰へて棄てらるるに比す。)夫れ天人の理倶に一定なし。男女の愛豈又常あらんや。男は智を以て愚を傾く

【二〇二】塘上行。婦人衰老して寵を失ひ、塘上に行いて歌を作るなり。
【二〇三】江蘺。香草なり。婦人自ら喩ふ。
【二〇四】風雲の會。兩姓の好に喩ふ。
【二〇五】藻。文彩なり、花をいふ。
【二〇六】滄浪。水色の淸きをいふ。
【二〇七】四節。四季なり。
【二〇八】淑氣。美貌に喩ふ。
【二〇九】妍。美女なり。
【二一〇】微軀。己の身をいふ。
【二一一】蒼蠅。讒人に喩ふ。
【二一二】末光。將に沒せんとする日光、衰へたる君寵に喩ふ。

るを好み、女は衰へて姸を避くるを好む。己の衰へて退くは、固より惜まざる所なるも、ただ讒人の言を懼る。願くは君讒言を聽くことなく、餘光を以て妾を照し、其衰老の年を終るを得しめよ。

(二三)悲哉行

游客春林を芳とす。春芳客心を傷ましむ。和風淸響を飛ばし、(二四)鮮雲薄陰を垂る。(二五)蕙草淑氣饒く、(二六)時鳥好音多し。(二七)翩翩たる鳴鳩の羽、(二八)喈喈たる倉庚の音。幽蘭(二九)通谷に盈ち、(三〇)長秀高岑に被る。(三一)女蘿亦託するあり、蔓葛亦尋るあり。傷ましい哉游客の士、憂思一に何ぞ深き。目は氣に隨ふ草に感じ、耳は時を詠ずる禽を悲む。(三二)寤寐遠念多く、(三三)緬然として飛沈の若し。願くは歸風の響に託し、言を寄せて(三四)欽する所に遺らん。

【二三】悲哉行。客游して物に感じ、憂思して作る。
【二四】鮮雲。輕雲なり。
【二五】蕙草。香草なり。淑氣は美香なり。
【二六】時鳥。春鳴く鳥。
【二七】翩翩。飛ぶ貌。
【二八】喈喈。鳥聲の貌。倉庚はウグヒス。
【二九】通谷。深谷なり。
【三〇】長秀。草木の長茂せるもの。高岑は高山。
【三一】女蘿。蔓草の名。
【三二】寤寐。ねてもさめても。
【三三】緬然。遠き貌。
【三四】欽。敬なり。

【大意】客游の身は春林を芳とするも、春芳は却つて客心を傷ましむ。和風の響、輕雲の陰、蕙草の香、時鳥の聲、いづれか傷心の種ならざらん。幽蘭は深谷に生じ、草木は高山に茂り、女蘿

蔓葛皆依託する所あり。然も客遊の身は獨り依託する所なし。故に耳目の觸る所、ただ憂思を增すのみ。其心邈然として魚鳥の飛沈するが如し。願くは南歸の風に託し（陸機は南方呉の人なり）言を敬慕する所の知友に寄せ、聊か以て自ら慰めん。

短歌行

高堂に置酒し、悲歌して觴に臨む。人壽幾何ぞ、逝くこと朝霜の如し。時は重ねて至るなく、華は再び陽かず。(三三五)蘋は春を以て暉き、蘭は秋を以て芳し。來日短きを苦み、去日長きを苦む。今我れ樂まずんば、(三三六)蟋蟀房に在らん。樂は會を以て興り、悲は別を以て章る。豈感なしと曰んや、憂(三三七)子が爲に忘る。我が酒既に旨く、我が肴既に臧し。短歌詠ずるあり、長夜荒むことなけん。

【三三五】蘋。水草の名。

【三三六】蟋蟀。こほろぎ。房は堂なり。詩經に「蟋蟀堂に在り歲聿に其れ暮れん。今我れ樂まずんば、日月其れ除らん」とあり。

【三三七】子。知友を指す。

【大意】高堂の上に酒宴を設け、悲歌して觴を擧ぐ。それ人生の倏忽なること霜露の如し。時は一たび去れば復た來らず、花は一たび開けば復た開かず。蘋は春に生じ、蘭は秋に茂る。人も亦然り、年歲一たび過れば、少年復た來らず。將來の日は少く、已に去るの日は多く、漸くにして老い

んとす。今にして樂まずんば、遂に老年に至らん。歡會は則ち樂を起し、離別は則ち其悲を催す。我れ年命の促なるを感ぜざるにあらざれども、子と歡會するを得ば、遂に其憂を忘るるを得ん。我が酒肴既に美なり。歌詠して共に酒を酌み、節を守りて度を失ふことなけん。

樂府の詩　　謝靈運

(一)會吟行

(二)六引淸唱を緩うし、(三)三調繁音を佇つ。(四)列筵皆靜寂、咸共に會吟を聆け。會吟自ら初あり、請ふ(五)文命の敷くよりせん。績を敷くこと(六)壺冀より始まり、木を刊りて(七)江汜に至る。(八)列宿天文を炳にし、負海地理に横はる。連峰千仞を競ひ、背流各々百里。(九)滮地粳稻に漑ぎ、輕雲(一〇)松杞に曖し。(一一)兩京佳麗を愧づ。(一二)三都豈能く似かんや。層臺中天を指し、(一三)高墉崇雉を積む。(一四)飛燕廣途に躍り、(一五)

【一】會吟行。會稽は呉の會稽郡なり。會稽の風土を詠ず。
【二】六引。古歌曲の名。
【三】三調。六引に三調あり。
【四】列筵。列坐の人をいふ。
【五】文命。禹の名なり。書經に「日若に古の大禹を稽ふるに曰く文命四海に敷く」とあり。禹諸侯を塗山に會す、塗山は會稽に在り。
【六】壺冀。壺口及び冀州。
【七】江汜。江のほとり。
【八】列宿。列星なり。
【九】滮池。流るる池。粳稻は稻粱なり。
【一〇】松杞。二木の名。
【一一】兩京。洛陽長安なり。
【一二】三都。蜀呉魏なり。
【一三】高墉。高き墻。崇は重、雉は高さ三丈をいふ。
【一四】飛燕。良馬の名。

鷁首清沚に戲る。(一六)肆は窈窕の容を呈し、路は(一七)便娟の子を曜かす。(一八)自來年代を彌り、賢達(一九)紀すべからず。(二〇)勾踐廢興を善くし、(二一)越叟行止を識る。(二二)范蠡江湖に出で、(二三)梅福城市に入る。(二四)東方旅逸に就き、(二五)梁鴻桑梓を去る。牽綴して土風を書す。辭殫くれども意未だ已まず。

【大意】六引三調の曲を奏すること、緩にして人皆繁音の起るを待つ。四坐の人請ふ靜かに吾が會吟行を歌ふを聽け。會吟自ら始あり、先づ大禹の功を四海に敷けるより始めん。大禹洪水を治むるや、壺口、冀州を以て初となし、木を斬り道を通じて江の汜に至る。呉の地たる斗の分野にし

【一五】鷁首。舟の名。沚は渚なり。

【一六】肆。市なり。窈窕は美好の貌。

【一七】便娟。好き貌。

【一八】自來。從來なり。

【一九】紀。記なり。

【二〇】勾踐。呉越を伐つ、越王勾踐敗れて會稽山に棲む、後勾踐呉を平ぐ、故に廢興を善くすといふ。

【二一】越叟。越公なり、越絶書に「呉越携離に戰ふ、呉王闔閭を傷け軍敗れて還り、其讐を復せんと欲し越公に師事し、其術を錄す」とあり。

【二二】范蠡。勾踐を佐けて呉を平げ、乃ち扁舟に乘り江湖に浮び、名を變じ姓を易へ、齊に適きて鴟夷子と稱す。

【二三】梅福。漢の九江の人、少くして長安に學ぶ、元始中王莽政を專にす、福一朝妻子を棄て九江を去る、其後人福を會稽に見し者あり、姓名を變じて呉の市門の卒となる。

【二四】東方。名は朔、久しく呉中に在りて書師となる、漢の武帝の時、上書し拜せられて郎となる、宣帝の時郎を棄てて去り以て亂政を避く、後會稽に藥を賣る。旅逸は客となりて放逸すること。

【二五】梁鴻。漢の扶風の人、關を出でて呉に至り、人の爲に賃舂す、書十餘篇を著す。桑梓は郷里。

て列星天文を炳かし、大海背より横に地理を鎮じ、山峰連りて千仞の高きをなし、水流背向して百里の曲あり。池水稻田に漑ぎ、輕雲松杞を罩む。兩京三都も此土（會稽）の美艶なるに及ばず。高臺中天に聳え、高墻の數丈なるあり。駿馬道に馳せ舟船清波に泛び、市路に美女あり。年を經ること久しきを以て、賢達の士少からず。今之を略記すれば、興廢を善くせる勾踐、行止の理に通せる越叟、江湖に出でし范蠡、城市に入りし梅福、旅逸となりし東方朔、故郷を去りし梁鴻の如きは、其傑出せる者なり。文を綴りて此地の土風を記するに、詞盡れども意は窮りなし。

樂府の詩八首

鮑明遠

東武吟

（一）主人且く諠しくすること勿れ、（二）賤子一言を歌はん。僕は本寒鄉の士、身を出して漢恩を蒙る。始めに（三）張校尉に隨ひ、（四）占募して河源に到る。後には（五）李輕車を逐ひ、虜を追ひて（六）塞垣を窮む。（七）密塗萬里を亙り、（八）寧歲猶ほ七奔

【一】主人。國君を指して言ふ。
【二】賤子。老卒自ら謂ふ。
【三】張校尉。張騫は漢の漢中の人、校尉を以て大將軍衞青に從ひて匈奴を擊つ。
【四】占募。一本召募に作る。河源は黄河の源。
【五】李輕車。漢の李廣、輕車將軍となり、大將軍に隨つて匈奴の右賢王を擊つ。
【六】塞垣。長城なり。
【七】密塗。近途なり。

す。肌力鞍甲に盡き、心思(九)涼溫を歷。將軍既に(一〇)下世し、(一一)部曲亦存すること罕なり。時事一朝に異り、(一二)孤績誰か復た論ぜん。少壯家を辭して去り、窮老還りて門に入る。鎌を腰にして(一三)葵藿を刈り、杖に倚りて(一四)雞㹠を收ふ。昔は(一五)韝上の鷹の如く、今は(一六)檻中の猿に似たり。徒に(一七)千載の恨を結び、空しく百年の怨を負ふ。(一八)弃席君の幄を思ひ、(一九)疲馬君の軒を戀ふ。願くは(二〇)晉主の惠を垂れ、田子の魂に愧ぢざらんことを。

【大意】此れ從軍せる老卒に代り、苦を訴へ卹を望むの詩なり。君公願くは吾が訴を聽き給へ。吾は寒村の產にして、出でて漢皇の恩を蒙り、張騫、李廣等の名將に從ひ、行

【八】寧歲。賊の來寇なき年。七奔は七度命に奔ること。
【九】涼溫。春秋なり。
【一〇】下世。死すること。
【一一】部曲。部隊なり。
【一二】孤績。人に知られぬ功績。
【一三】葵藿。野菜の名。
【一四】雞㹠。雞豚なり。收は一本に牧に作る。
【一五】韝上。韝は皮を以て作り手を蔽ひて鷹を載するもの。
【一六】檻中。檻は獸を入るるをり。
【一七】千載。千年なり。
【一八】弃席。棄てられし臥席、自ら喩ふ。韓子に「晉の文公河に至り令して曰く、籩豆は之を捐てよ、席蓐は之を捐てよ、手足胼胝、面目黧黑なる者は之を後にせよと。咎犯之を聞きて夜哭す、公曰く寡人出亡すること二十年、今乃ち國に返るを得、咎犯之を聞き喜ばずして哭す、意ふに寡人の國に反るを欲せざるかと。咎犯對へて曰く、籩豆は食ふ所以なり、而るに君之を捐つ、席蓐は臥する所以なり、而るに君之を棄つ、手足胝胼面目黧黑なるは勞功ある者なり、而るに君之を後にす、今臣與りて後中に在り、其哀に勝へず故に哭すと、文公乃ち止む」とあり。幄は帳なり。
【一九】疲馬。又自ら喩ふ。韓詩外傳に「昔田子方出でて老馬を道に見、喟然として志あり以て御者に問うて曰く、此れ何馬ぞと、曰くもと公家の畜なり、罷れて用をなさず、故に出て放つなりと、田子方曰く、少くして其力を盡し老い

きて外夷を攘ひ、近途を行くも猶ほ長さ萬里に亙り、賊の來寇なきも、一歳に七たび奔命し、體力戰鬪の間に盡き、悲傷の心を抱きて春秋を送れり。やがて將軍死亡し部隊敗亡し、時事一變するに及んで、微功爲に賞せられず。老年に至りて家鄕に歸り、農牧を以て自ら養ふ。昔少壯の時には鷹の韝上に在るが如く、禽獸を攻むるの勇ありしも、今既に老いて猿の檻中に在るが如く、巧捷を肆にする能はず。徒に怨恨を抱くのみ。吾れ既に棄席疲馬に同じ、願くは晉主、田子の惠を垂れ、我を救卹せられんことを。

て其身を去るは、仁者はなさずと、遂に之を贖ふ」とあり。

【二〇】晉主。晉の文公。

出自薊北門行

(二一)羽檄邊亭に起り、(二二)烽火咸陽に入る。騎を徵して(二三)廣武に屯せしめ、兵を分ちて(二四)朔方を救ふ。(二五)嚴秋筋竿勁く、(二六)虜陣精且つ彊。天子劍を按じて怒り、使者遙に相望む。(二七)鴈行して石徑に緣り、(二八)魚貫して飛梁を度る。簫鼓(二九)漢思を流し、(三〇)旌甲胡霜を被る。疾風(三一)塞

【二一】羽檄。兵を徵す文書。邊亭は邊地の宿驛。

【二二】烽火。警を傳ふるノロシ。咸陽は京都。

【二三】廣武。縣名、太原郡に屬す。

【二四】朔方。郡名、邊地に在り。

【二五】嚴秋。秋氣嚴厲の時。筋竿は弓箭なり。

【二六】虜陣。匈奴の陣。

【二七】鴈行。鴈列の如くならびて進むこと。

【二八】魚貫。魚を貫きしが如くならびて進むこと。飛梁は浮橋なり。

【二九】漢思。漢を思ふこと。

を銜いて起り、砂礫自ら飄揚す。馬毛縮まりて（三二）蝟の如く、（三三）角弓張るべからず。時危くして臣節を見、世亂れて忠良を識る。軀を投じて明主に報じ、身死して（三四）國殤と爲る。

【大意】薊は漁陽郡にして故の燕國なり。其北門を出で行きて功を邊塞に立てんと擬するの詩なり。邊城に羽檄飛び、警報京師に傳はる。乃ち兵を徵して廣武に駐屯せしめ、兵を分ちて朔方を救はしむ。匈奴は寒に慣れ、秋に乘じて益〻猛威を振ふ。天子赫怒し、速に使を發して命を傳ふ。從軍の士或は鴈行して石山に登り、或は魚貫して浮橋を渡る。簫鼓の聲を聞いては漢土を思ひ、胡地に臥しては旌甲霜に霑ひ、疾風沙礫を捲き、馬毛凍りて蝟の如く、角弓張る能はず。然りと雖も國難に遇ひて始めて忠良の節を見すを得。願くは身命を棄てて國事に斃れんことを。

【三〇】旌甲。旗及び甲冑。胡霜は胡地の霜。
【三一】塞。城塞なり。
【三二】蝟。獸名、はりねずみ。
【三三】角弓。角にて飾れる弓をいふ。
【三四】國殤。王事に死せし者をいふ。

結客少年場行

（三五）驄馬金絡頭、錦帶（三六）吳鉤を佩ぶ。意を杯酒の間に失ひ、白刃起つて相讎ゆ。（三七）追兵一旦至り、劍を負ひて遠く行遊す。鄉を去つて三十載、復た（三八）舊丘に還るを得たり。高きに升りて（三九）四關

【三五】驄馬。青白雜毛の馬。金絡頭は黃金のオモツラ。
【三六】吳鉤。刀劍の類なり。
【三七】追兵。己を捕ふる吏。

に臨み、(四〇)表裏皇州を望む。(四一)九塗平なること水の若く、(四二)雙闕雲の浮べるに似たり。宮を扶んで將相羅り、道を夾んで王侯列ぶ。日中市朝滿ち、車馬川流の若し。鐘を撃ちて鼎を陳ねて食ひ、駕を方べて自ら相求む。今我れ獨り何爲ぞ、(四三)埳壈として百憂を懷ける。

【三八】舊丘。郷里なり。
【三九】四關。洛陽に四關あり、東を城皐、南を伊闕、北を孟津、西を函谷となす。
【四〇】表裏。內外といふが如し。皇州は畿內の地。
【四一】九塗。大道なり。九軌を竝ぶべし故に九塗といふ。
【四二】雙闕。宮門なり、兩兩相竝んで立つ、故に雙闕といふ。
【四三】埳壈。不遇の貌。

【大意】少年の時任俠の客に結びて遊樂をなし、晩年成ることなくして作れるなり。われ少年の時、肥馬に跨り、錦帶をまとひ、吳鉤を佩び、好んで豪俠の士と交る。忽ち酒杯の間に意を失ひ、遂に鬪爭をなす。捕吏我を索むること急なり。因つて劍を負ひ遠行して之を避け、郷を去つて三十年にして復た還る。今高處に登りて四方を望めば、大道平なること水の如く、門闕高く聳え、將相の邸皇宮を挾み、王侯の宅道を夾み、日中には市朝人を以て埋まり、車馬の往來波瀾の如く、富貴の人鐘を撃ち（合圖をなすこと）鼎を陳ねて食ひ、車に駕して相尋求す。我れ獨り零落して成る事なく、不遇にして此憂を抱く。誠に悲むべきなり。

東門行

傷禽は（四四）弦驚を惡み、倦客は（四五）離聲を惡む。離聲客情を斷ち、（四六）賓御皆涕零つ。涕零ちて心斷絕し、將に去らんとして復た還りて訣る。（四七）一息相知らず、何ぞ況んや異鄕の別をや。（四八）遙遙として征駕遠く、（四九）杳杳として落日晩る。居人は閨を掩ひて臥し、（五〇）行子は夜中に飯す。野風秋木を吹き、行子心腸斷つ。梅を食ひて常に酸きに苦み、葛を衣て常に寒きに苦む。絲竹徒に坐に滿つるも、憂人顏を解かず。長歌して自ら慰めんと欲すれば、彌〻長恨の端を起す。

【大意】　禽弓に傷けば弦聲を聞くを惡み、客行旅に倦みては、離聲を聞くを惡む。離聲一たび起れば客心忽ち悲み、送客僕御亦皆涙を垂る。夫れ涕垂れて心斷絕す。去らんと欲して忍びず。還りて更に別辭を述ぶ。暫時の別すら尙ほ悲んで自ら知らざること此の如し。況んや他鄕に於て遠く別るるをや。既に去りて征途遠く、日將に暮れんとす。家人の寢に就く頃吾獨り飯を食ひ、野風の吹くを聞きて獨り心腸を斷つ。吾れ梅を食ひて酸きに苦み、葛衣を著て寒きに苦むが如く、衣食共に其所を得ず。絲竹の樂なきにあらざるも、吾が情を樂ましむるに足らず。長歌して自ら慰めんと欲すれば、ただ長恨の端を催すのみ。

【四四】弦驚。弦聲の發すること。
【四五】離聲。別離の歌。
【四六】賓御。送客と馭者。
【四七】一息。暫時なり。
【四八】遙遙。行く貌。征駕は行車なり。
【四九】杳杳。暮る貌。
【五〇】行子。行客なり。

苦熱行

赤阪（五一）西阻に横はり、火山（五二）南威に赫なり。身熱くして頭且つ痛み、鳥墮ちて魂來歸す。湯泉（五三）雲潭に發し、（五四）焦煙石圻に起る。日月恆に昏きあり、雨露未だ常て晞かず。（五五）丹蛇百尺に踰え、（五六）玄蜂十圍に盈つ。沙を含んで（五七）流影を射、（五八）吹蠱行暉を痛ましむ。（五九）障氣晝體に熏じ、（六〇）菵露夜衣を沾す。饑猨も下り食するなく、晨禽も敢て飛ばず。（六一）涇に毒するすら尚ほ多く死す。（六二）瀘を渡りて寧ろ具に腓まんや。生軀死地を蹈み、（六三）昌志禍機に登る。（六四）戈船榮既に薄く、（六五）伏波賞亦微なり。爵輕きも君尚ほ惜む、（六六）士の重んずる所安んぞ希ふべけん。

【大意】南方瘴癘の地に往き、節を盡して征伐し、然も國家の之を賞すること甚だ薄きをいふ。西方に赤土身熱の阪あり。南方に火山の滅えざるあり。此を過ぐれば身熱し頭痛み、鳥死して魂獨り歸る。湯泉山に流れ焦煙岸に起り、

【五一】西阻。西方の山。
【五二】南威。南方の地。
【五三】雲潭。山泉なり。
【五四】焦煙。熱氣なり。石圻は石岸。
【五五】丹蛇。赤き蛇。
【五六】玄蜂。黑き蜂。
【五七】流影。人影なり。搜神記に「物あり江水に處る、其名を蜮といふ、一に短狐といふ、能く沙を含みて人を射。中る所の者頭痛發熱し、劇しき者は死に至る」とあり。
【五八】吹蠱。毒蟲の名。行暉は行人の光。
【五九】障氣。一本に瘴氣に作る。毒熱の氣なり。
【六〇】菵露。菵は毒草の名。其上の露なり。
【六一】涇。川の名。左傳に「秦人涇の上流に毒す、師人多く死す」とあり。
【六二】瀘。南方熱地の川の名。
【六三】昌志。壯心なり。
【六四】戈船。漢書に「歸義侯嚴戈船將軍となり零陵を出で離水を下る」とあり。
【六五】伏波。後漢書に「馬援を拜して伏波將軍となし交阯を擊たしむ」とあり。
【六六】士の重。節に死すること。

熱氣上騰して日月常に暗く、雨露冬夏常に乾かず。赤蛇黑蜂あり。其大なること百尺十圍に餘り、水中に短狐あり、沙を含んで人を射、吹蠱ありて人を害し、瘴氣茵露衣體に熏じ、猿鳥も之を畏れて近づかず。昔秦人涇水に毒を流せるすら、多く人を殺すを得たり。況んや瀘水を渡るをや。人皆死に至る。啻に病むのみにあらざるなり。ああ生軀と壯志とを以て此の死亡の地を蹈ましむ。何ぞ禍の機兆とならざらん。戰士苦熱の狀かくの如し。然も國家の之を賞すること甚だ薄し。夫れ君の輕んずる所のものは爵なり。然も君尚ほ之を惜めり。何ぞ戰士をして身命を棄てて節に死せしむるを得んや。

白頭吟

直きこと（六七）朱絲の繩の如く、淸きこと玉壺の冰の如し。何ぞ（六八）宿昔の意に慙ぢん、（六九）猜恨坐に相仍る。人情恩舊を賤み、（七〇）世議衰興を逐ふ。（七一）毫髮一たび瑕をなさば、丘山も勝ふべからず。苗を食ふは實に（七二）碩鼠、白を玷すは信に（七三）蒼蠅。（七四）鳧鵠遠くして美を成し、（七五）薪芻

【六七】朱絲。琴瑟の朱絃なり。
【六八】宿昔。昔時なり。
【六九】猜恨。疑恨なり。
【七〇】世議。世人の批評。
【七一】毫髮。些細なり。
【七二】碩鼠。大鼠なり。讒人に比す。詩經に「碩鼠碩鼠、我が苗を食ふなかれ」とあり。
【七三】蒼蠅。讒人に比す。詩經に「蒼蠅の蟲たる、白を汙して黑からしむ」とあり。
【七四】鳧鵠。水鳥の名。韓詩外傳に「田饒、魯の哀公に事へて察せられず。哀公に謂つて曰く、雞に五德あり、君猶ほ日に瀹して之を食ふは、其の從來する所のもの近きを以てなり。黃鵠は一擧千里、君の

前は陵がる。(七六)申黜けられて褒女進み、(七七)班去りて趙姫昇る。周王日に淪惑し、漢帝益ゝ嗟稱す。(七八)心賞猶は恃み難し、(七九)貌恭豈憑み易からんや。古來共に此の如し、(八〇)君のみ獨り膺を撫つにあらず。

【大意】此れ棄婦の自ら傷むに擬せる詩なり。吾れ清直にして昔時の意に愆ちざるも、夫君の心忽ち疑恨を生ず。人には舊を厭ふの情あり、世評は身の盛衰に應じて異る。故に些細の過失あれば忽ち丘山の大となる。夫君の心の移れるも、畢竟この讒人の致す所なり。遠き者は貴ばれ、前者は後者の輕侮を受くるは世の習なり。故に幽王は申后を黜けて褒姒を愛し、日に以て沈溺迷惑し、成帝は班婕妤を去りて趙飛燕を寵し、益ゝ以て嗟嘆稱美す。深心相賞するすら、尚ほ恃み難し。ただ外貌に敬美するは、豈憑むに足らんや。古來皆此の如し。胸を拊ちて棄てられしを悲む者、獨り我のみにあらざるなり。

國地に止り君の粱稻を食ひ、この五德なくして之を貴ぶは、其の從來する所のもの遠きを以てなり云云」とあり。

【七五】薪芻。芻は草なり。漢書に「汲黯武帝に謂つて曰く、陛下の羣臣を用ふるは薪を積むが如く、後れて至る者上に居ると」とあり。

【七六】申。毛詩の序に「幽王申女を取りて后となし、褒姒を得て申后を黜く」とあり。

【七七】班。班婕妤なり。漢の成帝班婕妤を去りて趙飛燕を寵す。

【七八】心賞。心に深く相賞すること。

【七九】貌恭。外貌のみ恭敬すること。

【八〇】君。己を指して言ふ。

放歌行

（八一）蓼蟲は葵菫を避け、苦きに習ひて非を言はず。小人は自ら（八二）齷齪たり、安んぞ（八三）曠士の懷を知らんや。雞（八四）洛城の裏に鳴き、（八五）禁門平旦に開く。（八六）冠蓋縱横に至り、車騎四方より來る。（八七）素帶長飈を曳き、（八八）華纓遠埃を結ぶ。日中安んぞ能く止まん、鐘鳴りて猶ほ未だ歸らず。（八九）夷世逢ふべからず、賢君信に才を愛す。明慮（九〇）天より斷じ、外の（九一）嫌猜を受けず。一言（九二）珪爵を分ち、片善（九三）草萊を辭す。豈伊れ白璧の賜のみならんや。將に（九四）黃金の臺を起さんとす。今（九五）君何の疾あり、路に臨んで獨り（九六）遲廻する。

【大意】　小人の曠士の心を知らざるを慨するなり。小人の名利に奔競して曠士の心を知らざるは、猶ほ蓼蟲の苦に習ひて甘菜あるを知らざるが如し。彼の小人は雞鳴いて禁門の開くを待ち、車騎を連ねて四方より來り、帶を長風に曳き、冠纓を遠塵に結び、晩鐘を聞くも猶ほ未だ歸らず。名利に齷齪たること此の如し。然も自ら恥づる

【八一】蓼蟲。蓼は苦菜、たで。葵菫は甘菜。
【八二】齷齪。名利に奔競する貌。
【八三】曠士。達人なり。
【八四】洛城。洛陽城。
【八五】禁門。宮門なり。
【八六】冠蓋。衣冠と車蓋。
【八七】素帶。大夫の帶。長飈は長風。
【八八】華纓。美しき冠の紐。遠埃は遠方より飛び來る塵。
【八九】夷世。太平の世。
【九〇】天。君を指して言ふ。
【九一】嫌猜。嫌疑なり。
【九二】珪爵。珪は公侯の執る所の玉。
【九三】草萊。草野なり。
【九四】黃金臺。燕の昭王、黃金臺を築き、千金を臺上に置き以て天下の士を延く。
【九五】君。曠士の仕へざる者を指して言ふ。
【九六】遲廻。躊躇して仕へざること。

を知らず。却つて我に謂ひて曰く、今や太平にして復た逢ふべからざるの時なり。且つ天子誠に賢才を愛す。故に天子の明慮によりて我等を登庸し、外間の嫌疑を容れず。一言半善の君意に合ふものなれば、珪爵を賜ひ草野を出でて仕へしむ。ただに白璧を賜ふのみにあらず、又黄金臺を起して之を待たんとす。君何を苦んで躊躇して仕へざると。

(九七)升天行

家世ゝ(九八)關輔に宅り、(九九)帶に勝へて王城に官す。備に(一〇〇)十帝の事を聞き、(一〇一)兩都の情を委曲にす。物の興衰を見るに倦み、驟ゝ俗の(一〇二)屯平を覩る。翩翻として(一〇三)廻掌に類し、(一〇四)怳惚として朝榮に似たり。(一〇五)窮途短計を悔い、(一〇六)晩志長生を重んず。師に從つて遠岳に入り、友を結んで仙靈を事とす。(一〇七)五圖金記を發し、(一〇八)九籥丹經を隱す。風餐松宿に委し、雲臥天行を恣にす。霞を冠して(一〇九)綵閣に登り、玉

【九七】升天行。仙を學ぶをいふ。
【九八】關輔。畿内なり。關は關中。右扶風、左馮翊、京兆を三輔といふ。
【九九】帶に勝へ。冠帶に勝ふるの時。
【一〇〇】十帝。前後漢ともに十餘帝。
【一〇一】兩都。漢の西京長安、東京洛陽。
【一〇二】屯平。難易なり。
【一〇三】廻掌。掌を運らすこと。疾きをいふ。
【一〇四】怳惚。速なる貌。朝榮は朝花。
【一〇五】窮塗。窮途なり。短計は拙謀。
【一〇六】晩志。晩年の志。
【一〇七】五圖。仙書なり。五岳眞形圖。金記も仙書の名、太淸金匱記。
【一〇八】九籥。籥は書を藏する管なり。仙經に九轉金液丹法あり、故に九籥といふ。
【一〇九】綵閣。仙居なり。

を解いて(二〇)椒庭に飲む。暫く游んで萬里に越え、近く別れて(二一)數千齡。(二二)鳳臺還駕なく、(二三)簫管遺聲あり。何時にか(二四)爾が曹と與に、腐を啄んで共に腥を吞まん。

【大意】われ世世京畿の間に住み、冠帶するに及んで王城に仕官す。兩漢の情事盡く之を聞知し、屢ゝ世の盛衰難易を見る。その倏忽なること迴掌の反覆するが如く、朝花の開落するに似たり。是に於て從來の拙謀を悟り、長生を希ふの志を立て、遠く山中に入りて仙道を修め、日夕仙書を侶とし、風雲の之く所に任せて、或は松下に宿し或は天上を行き、霞を冠し玉珮を解いて、仙居に玉醴を飲み、一擧千萬里、一別數千年。ただ鳳臺を現世に留め、簫聲永く絕えざるのみ。又腐を食ひ腥を吞むの俗輩と相伍せず。

【二〇】椒庭。仙居なり。
【二一】數千齡。數千年。
【二二】鳳臺。列仙傳に「簫史は秦の穆公の時の人なり、よく簫を吹く。穆公女あり弄玉と號す、公遂に以て妻す、遂に弄玉に敎へて鳳鳴をなさしむ。居ること數十年、鳳凰來りて其屋に止る、爲に鳳臺を作る、夫婦其上に止り下らざること數年、一旦皆鳳凰に隨つて飛び去る」とあり。
【二三】簫管。樂器の名。
【二四】爾。世俗の人を指す。

(一)鼓吹曲　謝玄暉

江南佳麗の地、(二)金陵帝王の州。(三)逶迤として淥水を帶び、(四)迢遞として朱

【一】鼓吹曲。軍樂なり。玄暉の集に「隋王の敎を奉じ古入朝曲を作る」とあり。
【二】金陵。地名。

樓を起す。(五)飛甍馳道を夾み、垂楊(六)御溝を蔭ふ。(七)笳を凝らして高蓋を翼り、鼓を疊ねて(八)華輈を送る。(九)雲臺の表に獻納すれば、功名良に收むべし。

【大意】金陵は佳麗の地にして、帝王の居るべき處なり。淥水遠く繞り樓閣高く聳え、屋檐馳道を夾み、楊柳溝渠に垂る。今鼓を鳴らし簫を吹きて、王が入朝の車を送る。往きて忠直を天子に獻納せば、其功名天子の收錄する所となるべし。

【三】逶迤。長き貌。淥水は清き川流。
【四】迢遞。高き貌。朱樓は朱塗の樓閣。
【五】飛甍。高き屋檐。馳道は天子の御成道。
【六】御溝。宮城を繞る溝。
【七】笳。簫なり。高蓋は車蓋。
【八】華輈。車の轅。
【九】雲臺。天子の宮。

挽歌

(一)挽歌の詩　(二)繆熙伯

生時國都に游び、死沒して中野に弃らる。朝に高堂の上を發し、暮に黄泉の下に宿す。白日(三)虞淵に入り、(四)車を懸けて駟馬を息はしむ。造化神明なりと雖も、安んぞ能く復た(五)我を存せ

【一】挽歌。喪を送る詩なり。柩を挽く者をして之を歌はしむ。
【二】繆熙伯。名は襲、字は熙伯、魏の東海蘭陵の人。
【三】虞淵。日の入る處。
【四】車を懸け。淮南子に「日暘谷を出で悲泉に至り、爰に其馬を息はしむ、是を懸車となす、虞淵に至る、是を黄昏

ん。形容稍(六)歇滅せば、齒髮行〻當に墮つべし。古より皆然るあり、誰か能く此を離るる者ぞ。

【大意】生時には都邑に遊樂するも、死すれば草野の間に棄てらる。即ち朝に高堂の上を發し、夕に黃泉の下に宿するなり。是れ恰も日の虞淵に入り、車を懸け馬を息はしむるが如し。造化の理は神明なりと雖も、焉んぞ能く我を長存せしむるを得んや。形容稍衰ふれば、齒髮程なく拔け墮ち、遂に死に入るなり。古より皆然らざるはなし。誰か能く此理に漏るる者あらん。

といふ」とあり。駟馬は四匹の馬。一車に四馬を駕す。

【五】我。死者自ら謂ふ。

【六】歇滅。消盡なり。

挽歌の詩三首　　陸士衡

(一)卜擇休貞を考へ、(二)嘉命咸茲に在り。夙に駕して(三)徒御を警め、轡を結んで(四)重基を頓す。(五)龍幌廣柳を被ひ、前驅輕旗を矯ぐ。(六)殯宮何ぞ嘈嘈たる、哀響(七)中闈に沸く。中闈且く讙しうする勿れ、我が(八)薤露の詩を聽け。死生各〻(九)倫を異にす。(一〇)祖載當に時あるべし。爵

【一】卜擇。卜筮によりて葬地を擇ぶこと。休貞は貞吉。

【二】嘉命。善美なる命。

【三】徒御。僕御なり。

【四】重基。山なり。頓は上下すること。

【五】龍幌。幌は蒙なり、傍に在るを帷といひ、上に在るを幌といふ、龍を畫きし帷。廣柳は棺車なり。

【六】殯宮。天子崩じて葬送するまで暫く靈柩を置く宮殿。嘈嘈は衆哭の聲。

【七】中闈。殯宮の門。

【八】薤露。喪詩なり。

【九】倫。理なり。

を（一一）兩楹の位に含き、殯を啓いて（一二）靈轜を進む。（一三）飲餞して觴擧ぐるなく、出宿して歸ること期なし。（一四）帷袵曠しく影を遺し、棟宇（一五）子と辭す。（一六）周親咸奔湊し、友朋遠きより來る。（一七）翼翼として輕軒を飛ばし、（一八）駸駸として素騏に策うつ。轡を按じて（一九）長薄に遵ひ、子を（二〇）長夜の臺に送る。子を呼べども子聞かず、子に泣けども子知らず。（二一）重櫬の側に歎息し、我が（二二）疇昔の時を念ふ。（二三）三秋猶ほ收むるに足る。萬世安んぞ思ふべき。沒に殉して身亡し易し、子を（二四）殺すは能くする所にあらず。言を含めば言（二五）哽咽し、涕を揮へば涕（二六）流離たり。

【大意】卜筮して葬地を擇び、其の貞吉を考ふるに、吉命此土に在り、かくて葬地を定め、早く僕御を戒めて山丘を上下し、以て壙穴を掘り、帷帳を以て棺車を掩ひ、前驅旗を擧げて葬列を促す。然も殯宮の中には尙ほ衆哭の聲嘈嘈たり。我れ因つて挽歌を歌ふ。夫れ死生は理を異にす。永く歎

【一〇】紐載。柩車を移して葬行の始をなすこと。
【一一】兩楹。二本の圓柱。葬るに先だち柩を兩楹の間に置き酒食を奠するを禮とす。
【一二】靈轜。柩車なり。
【一三】飲餞。離杯を擧ぐること。
【一四】帷袵。帳帷及び臥席。
【一五】子。死者を指して言ふ。
【一六】周親。至親の人。奔湊は來り集ること。
【一七】翼翼。車の輕き貌。輕軒は輕車。
【一八】駸駸。馬の奔る貌。素騏は白馬。
【一九】長薄。草木の叢生する處を薄といふ。
【二〇】長夜の臺。墳墓をいふ。
【二一】重櫬。棺なり。
【二二】疇昔。生前なり。
【二三】三秋。三年なり。詩經に「一日見ずんば三秋の如し」とあり。
【二四】殺。一本に救に作る。
【二五】哽咽。涙にむせぶこと。
【二六】流離。涙の流るる貌。

くも又詮なし。葬行當に始まらんとす。柩を兩楹の間に置き、酒食を奠し終れば、殯宮を開いて柩車を進む。死車能く杯を擧ぐるなく、一たび去りて復た還らず。ただ帷帳を留むるのみにして、舊居復た見るべからず。親戚朋友遠く來りて相送り、輕車を飛ばし白馬に鞭うち、長林に循ひ行きて、死者を墳墓の中に送る。呼べども答へず泣けども知らず。ただ棺側に嘆息して、生時の交游を念ふのみ。三年相見ざるの念は、猶ほ收むるに足る。萬世永く絶ゆるは、何ぞ思ふに堪へんや。死者に殉するは甚だ易きも、死者を救ふは人力の能くする所にあらず。言はんと欲するも言咽んで出でず、涙を拭へば涙潸然たり。

流離たり親友の思、惆悵して神泰からず。(二七)素驂輜軒を佇ち、(二八)玄駟飛蓋を鶩す。哀鳴殯宮に興り、(二九)廻遲して野外に悲む。(三〇)魂輿寂として響なく、但冠と帶とを見る。物を備ふること平生に象たり、(三一)長旂誰が爲にか旆する。悲風(三二)行軌を徼め、傾雲(三三)流藹を結ぶ。策を振げて(三四)靈丘を指し、駕して言に此れより逝かん。

【大意】親友の死を悲みて心安からず。馬を馳せて葬を送る。殯宮に啼泣して野外に低回すれば、

【二七】素驂。白馬なり。輜軒は柩車。
【二八】玄駟。黑馬なり。飛蓋は車蓋。
【二九】廻遲。躊躇なり。
【三〇】魂輿。柩車なり。
【三一】長旂。銘旗なり。
【三二】行軌。行車なり。
【三三】流藹。行車の蓋なり。
【三四】靈丘。墓なり。

柩車寂として聲なく、ただ冠帶の垂るるを見る。服用の物生時に變らざれども、銘旗は正に親友の死を語れり。悲風吾が車を止め、傾雲吾が車蓋に交り、墳墓を指して葬を送る。

(三五)重阜何ぞ崔嵬たる、(三六)玄廬其間に竄る。(三七)旁薄として四極を立て、(三八)穹隆として蒼天に放ふ。側に聽く(三九)陰溝の涌くを、臥して觀る(四〇)天井の懸るを。(四一)廣宵何ぞ寥廓たる、(四二)大暮安んぞ晨くべき。人往いて(四三)反歲あり、我行いて歸年なし。昔は(四四)四民の宅に居り、今は萬鬼の鄰に託す。昔は七尺の軀たり、今は灰と塵となる。金玉素より佩ぶる所、(四五)鴻毛今振らず。豐肌(四六)螻蟻に饗し、(四七)妍骸永く夷泯す。(四八)壽堂螭魅を延き、虛無自ら相賓す。螻蟻爾何をか怨む。螭魅我れ何の親ある。心を拊ちて(四九)荼毒を痛む。永歎爲に陳ぶるなし。

【大意】わが墓は高岡の間に在り、穴中に天地を象り、側に陰溝の涌くを聽き、臥して天象の懸る

【三五】重阜。高岡なり。崔嵬は高き貌。
【三六】玄廬。墓なり。
【三七】旁薄。四方に廣がること。地の形なり。四極は四方。
【三八】穹隆。弓形をなすこと。天の形なり。
【三九】陰溝。墓穴の中に作れる溝。
【四〇】天井。天象なり、墓穴の中に作るなり。
【四一】廣宵。墓穴をいふ。寥廓は深空なり。
【四二】大暮。墓穴をいふ。
【四三】反歲。還る年。
【四四】四民。士農工商。
【四五】鴻毛。輕き物の稱。
【四六】螻蟻。蟲の名。
【四七】妍骸。美姿なり。夷泯は消滅なり。
【四八】壽堂。祭祀の處。螭魅は邪鬼なり。
【四九】荼毒。苦痛なり。

を觀る。一たび穴中に入りては又出づべからず。生人の往く者は皆其家に還れども、死者は一たび去りて歸り生くる能はず。昔は生きて人間に在り、今は死して萬鬼と鄰す。生きては金玉を佩びて重しとせず、死しては鴻毛の輕きも尙ほ擧ぐる能はず。美好の姿を以て螻蟻の餌食となし、祭祀の場には邪鬼と虛無と相延いて賓主となる。ああ螻蟻は何の怨ありてか我を食ふ。邪鬼何の親ありて我に就く。わが胸中の苦痛一一述べ盡し難し。

挽歌の詩

陶淵明

荒草何ぞ(一)茫茫たる、(二)白楊亦蕭蕭たり。嚴霜九月の中、(三)我を送りて遠郊に出づ。四面人居なく、高墳正に(四)嶕嶢たり。馬爲に天を仰いで鳴き、風爲に自ら(五)蕭條たり。(六)幽室一たび已に閉ぢ、千年復た朝あらず。千年復た朝あらず、賢達奈何ともするなし。(七)向來相送りし人、各〻已に其家に歸る。親戚餘悲あり、他人亦已に歌ふ。死去何の道ふ所ぞ、體を託して(八)山阿に同じ。

【大意】墳墓の在る所を見れば、荒草茫茫として白楊蕭蕭たり。悲秋嚴

【一】茫茫。廣大なる貌。
【二】白楊。木の名、墳墓に植う。蕭蕭は風の吹く聲。
【三】我。死者自ら謂ふ。
【四】嶕嶢。高き貌。
【五】蕭條。淋しき貌。
【六】幽室。墳墓なり。
【七】向來。先刻といふが如し。
【八】山阿。山陵なり。

霜の時、親戚朋友我を送りて此處に來る、四方に人家を見ず、ただ高墳の聳ゆるのみ。馬も之が爲に悲鳴し、風も之が爲に蕭條たり。吾が墓一たび閉ぢて、復た生くべからず。賢達の士も如何ともすべからず。向に我を送りし者皆其家に歸り、我が死を悲しんで長歌す。死何ぞ道ふに足らん、身を山陵に託して同じく土に化するのみ。

雜歌

荊軻の歌

燕の太子丹、(一)荊軻をして(二)秦王を刺さしむ。丹(三)易水の上に祖送す。(四)高漸離筑を撃ち、荊軻歌ひ、(五)宋如意之に和す。曰く、

風(六)蕭蕭として易水寒し。(七)壯士一たび去りて
復た還らず。

【大意】われ此地を去らんとすれば、風蕭蕭として物凄く、易水の流特に寒きを覺ゆ。われ一たび去りては事の成敗に拘はらず、生還を期せざるなり。

【一】荊軻。衞の人なり、燕の太子の爲に秦王を刺し、克たずして秦に誅せらる。
【二】秦王。秦の始皇帝。
【三】易水。川の名。祖送は送別すること。
【四】高漸離。人名。筑は樂器の名。
【五】宋如意。人名。
【六】蕭蕭。風の聲。
【七】壯士。軻自ら謂ふ。

漢の高祖の歌

高祖(一)還りて沛を過り、留りて沛宮に(二)置酒し、悉く(三)故人父老子弟を召し、酒を佐けしむ。沛中の兒を發して百二十人を得、之に歌を敎ふ。酒酣なるとき(四)上筑を撃ちて自ら歌つて曰く、

(五)大風起りて(六)雲飛揚す。威海內に加はりて故鄕に歸る。安にか猛士を得て四方を守らしめん。

【大意】我れ起ちて風の雲を吹拂へるが如く世の禍亂を平定せり。吾が威今や海內に偏く、ここに錦を著て故鄕に歸るを得たり。願くは勇猛の士を得て、四方を守禦せしめんことを。

【一】還。黥布を撃ちて還るなり。沛は高祖の鄕里。
【二】置酒。酒宴を設くること。
【三】故人。舊友なり。
【四】上。天子の稱。高祖なり。筑は樂器の名。
【五】大風。高祖自ら喩ふ。
【六】雲飛揚。世亂の平定に喩ふ。

(一)扶風歌　劉越石

朝に(二)廣莫の門を發し、暮に(三)丹水の山に

【一】扶風歌。扶風は地名、蓋し古曲なり。越石之に擬して自ら喩ふるなり。
【二】廣莫。洛陽城門の名。
【三】丹水。川の名、その水源の山なり、故に丹水の山とい

に宿す。左手に(四)繁弱を彎り、右手に(五)龍淵を揮ふ。(六)顧瞻して宮闕を望み、俯仰して(七)飛軒に御る。鞍に據りて長く歎息し、涙下りて流泉の如し。馬を長松の下に繋ぎ、鞍を高岳の頭に發す。(八)烈烈として悲風起り、(九)冷冷として澗水流る。手を揮つて長く相謝し、(一〇)哽咽して言ふ能はず。浮雲我が爲に結び、歸鳥我が爲に旋る。家を去りて日已に遠し。安んぞ存と亡とを知らん。窮林の中に慷慨し、膝を抱いて獨り(一一)摧藏す。(一二)麋鹿我が前に遊び、猨猴我が側に戯る。資糧既に乏盡し、(一三)薇蕨安んぞ食ふべけん。轡を攬りて(一四)徒侶に命じ、絶巖の中に吟嘯す。君子の道微なれば、(一五)夫子も故に窮するあり。惟れ昔(一六)李期を騫り、寄せて匈奴の庭にあり。忠信反りて罪を獲、(一七)漢武明されず。我れ(一八)此曲を競はんと欲すれば、此曲悲くして且つ長し。弃て置いて重ねて陳ぶるなけん。重ねて陳ぶれば心をして傷ましむ。

【大意】朝に洛陽の城門を發し、暮に丹水山に宿し、左手に弓を執り、右手に劍を携へ、往きて

ふ。
【四】繁弱。弓の名。
【五】龍淵。劍の名。
【六】顧瞻。顧望なり。
【七】飛軒。廊宇なり。
【八】烈烈。風の聲。
【九】冷冷。水の聲。澗は溪谷なり。
【一〇】哽咽。涙にむせぶこと。
【一一】摧藏。憂傷なり。
【一二】麋鹿。麋も鹿の類。
【一三】薇蕨。草の名。わらび。
【一四】徒侶。従者なり。
【一五】夫子。孔子なり。
【一六】李。漢將李陵なり。
【一七】漢武。漢の武帝。
【一八】此曲。此歌なり。

胡虜を掃滅せんとす。高廊に登りて宮闕を望み、馬に跨りて高岳を發す。時に悲風烈烈として澗水冷冷たり。手を揮つて別れんとすれば、涙に咽んで聲出でず。雲鳥亦吾が宮闕を戀ふの情を助くるが如し。家を去りて已に遠く、家人の存亡亦知るに由なし。林中に膝を抱いて獨り長歎すれば、麋鹿猿猴遊戲して吾が心の悲しきを知らず。食物既に盡くれども吾れ伯夷にあらず、何ぞ薇蕨を食ふべけんや。從者を顧みて吟嘯す。君子の道消するの時に當りては、孔子すら猶ほ窮厄せり。窮厄何ぞ顧慮するに足らん。昔李陵は期を誤りて匈奴に捕へられ、固く忠信の節を執りしも、武帝其の志を明にせずして其親族を誅せり。誠に慨嘆すべきなり。我れ此歌を歌はんとすれば、心悲傷して歌ふべからず。

(一)中山王孺子妾の歌　陸韓卿

(二)如姬臥內に寢ね、(三)班婕坐して車を同うす。(四)洪波飲帳に陪し、(五)林光秦餘に宴す。歲暮れて(六)寒飇及び、秋水(七)芙蕖に落つ。(八)子瑕後駕を(九)矯り、安陵前魚に泣く。賤妾終に已んぬるか

【一】中山王。漢の中山靖王噲なり。孺子妾は王の宮人なり。
【二】如姬。魏王の寵姬。
【三】班婕。班婕妤なり、漢の成帝の寵姬。
【四】洪波。趙簡子の臺の名。
【五】林光。秦の殿の名。漢之に因る、故に秦餘といふ。
【六】寒飇。寒風なり。
【七】芙蕖。芙蓉なり。

な

（一〇）君子定めて焉にか如かん。

【大意】昔如姫は常に魏王の臥内に出入し、班婕妤は成帝と車を同うし、洪波臺の宴に侍し、林光殿の飲に陪し、一時の寵幸を專にせり。然も年漸く老い色稍衰ふるに至りて則ち棄てらる。これ彌子瑕、安陵の寵の衰へんことを悲みし所以なり。我れ亦色衰へて將に棄てられんとす。君王の心果して何人に移り行かんを知らず。悲しいかな。

【八】子瑕。韓子に「彌子瑕衞君に寵あり、衞國の法に竊に君の車に駕する者は刖る。彌子瑕の母病む、人夜彌子瑕に告ぐ、彌子瑕矯りて君の車に駕し以て門を出づ、衞君聞きて之を賢として曰く、孝なるかな母の爲の故に刖罪を犯せりと」とあり。

【九】安陵。戰國策に「魏王龍陽君と船を共にして釣る、龍陽君十餘魚を釣り得、之を棄てて泣下る、王曰く安んぜざる所あるかと、對へて曰く、臣始め魚を得て甚だ喜ぶ、後得ると益多くして、前に得し所を棄てんと欲す、今臣の凶惡を以て枕席を拂ふを得、四海の內其れ美人甚だ多し、臣の幸を王に得るを聞かば、畢く裳を褰げて王に趨らん、臣も亦曩に得し所の魚に同じ、亦將に棄てられんとすと」とあり。今安陵となすは龍陽の誤なり。

【一〇】君子。孺子妾、中山王を指して言ふなり。

卷の第十五

詩　己

雜詩

古詩十九首

行き行いて重ねて行き行き、(一)君と生別離す。相去ること萬餘里、各〻天の一涯に在り。道路阻りて且つ長し。會面安んぞ知るべけん。(二)胡馬北風に依り、(三)越鳥南枝に巣ふ。相去る日に已に遠く、衣帶日に已に緩し。(四)浮雲白日を蔽ひ、(五)游子顧返せず。君を思へば人をして老いしむ。歲月忽として已に晚る。(六)棄捐復た道ふことなけん、努力して餐飯を加へよ。

【大意】此れ遠行の夫を思ふ詩なり。吾が夫は遠行して止まず、吾ここに生離別の悲に遇ふ。今や相去ること萬里なれば、面會の期も知るべからず。夫は北に在りて胡馬の北風に依望するが如く、吾は南に在りて越鳥の南枝に巣ふが如し。日

【一】君。夫をいふ。
【二】胡馬。北方胡地に產する馬。
【三】越鳥。南方越國に產ずる鳥。
【四】浮雲云云。夫の惑ふ所あるに喩ふ。
【五】游子。遠行せる夫を指す。
【六】棄捐。夫に棄てられしこと。

を經るに隨ひて吾身益〻瘦するも、夫は他の美女に惑へるにや、一たび去りて復た返らず。之を思へば吾をして益〻衰老せしむ。况んや歳將に暮れんとするをや。然れども我が身の棄てられしは敢て言ふに足らず。ただ偏に夫の攝養を加へ疾病に侵されざらんことを望むのみ。

青青たる河畔の草、(七)鬱鬱たる園中の柳。(八)盈盈たる樓上の女、(九)皎皎として窓牖に當る。(一〇)娥娥たる紅粉の粧、(一一)纖纖として素手を出す。昔は(一二)倡家の女たり、今は(一三)蕩子の婦となる。蕩子行いて歸らず、(一四)空牀獨り守り難し。

【大意】河畔には春草萋萋たり。園中には新柳毿毿たり。樓上に美女あり。窓に憑りて之を觀る。紅粉の粧をこらし、玉の如き纖手を露せり。此女はもと遊女にして今は遊冶郎の妻たるも、夫は遠行して歸らざるを以て獨り空閨を守る能はず。故に冶容をなして、人を誘はんとするなり。

青青たる(一五)陵上の柏、(一六)磊磊たる澗中の石。人天地の間に生れ、忽として遠行の客の如し。斗酒相娛樂し、聊か厚しとして薄しとなさず。車を驅りて駑馬に策うち、(一七)宛と洛とに遊戲す。洛中何ぞ

【七】鬱鬱。茂盛の貌。
【八】盈盈。容貌充美の貌。
【九】皎皎。白き貌。
【一〇】娥娥。美なる貌。紅粉はベニオシロイ。
【一一】纖纖。細くしなやかなる貌。素手は白き手。
【一二】倡家。遊女屋。
【一三】蕩子。遊冶郎。
【一四】空牀。空閨なり。
【一五】陵上。丘上なり。
【一六】磊磊。衆石の貌。澗は溪流。
【一七】宛。縣名、後の南陽なり。洛は洛陽。

（一八）鬱鬱たる、（一九）冠帶自ら相索む。長衢（二〇）夾巷に羅り、王侯第宅多し。（二一）兩宮遙に相望み、（二二）雙闕百餘尺。宴を極めて心意を娛ましめば、（二三）戚戚として何の迫る所あらん。

【大意】此れ行樂を以て興を遣るの詩なり。丘上の柏、澗中の石は、常に存して變ることなしと雖も、人の世に在るは遠行の客の如く、一たび去つて復た還らず。如かず時に及んで行樂せんには、因つて斗酒相娛んで以て薄しとなさず。時ありて車馬を驅り宛洛の間に遊ぶ。洛陽には貴人の往來して相訪ふあり。王侯の邸宅街衢に列るあり。南北二宮遙に相望み、宮門の高さ百餘尺なるあり。亦以て心目を娛ましむるに足る。人宴樂して心を娛ましめば、何の憂か來り迫らん。

今日良宴會、歡樂具に陳べ難し。箏を彈じて（二四）逸響を奮ひ、（二五）新聲妙にして神に入る。（二六）令德高言を唱ふるも、曲を識りて其眞を聽く。心を齊うし願ふ所を同うするも、意を含んで倶に未だ申べず。人生一世に寄り、（二七）奄忽として飈塵の若し。何ぞ（二八）高足に策うち、先づ（二九）要路の津に據らざる。無爲し窮賤を守り、（三〇）轗軻して長に苦辛す。

【一八】鬱鬱。盛なる貌。
【一九】冠帶。貴人をいふ。相索は相訪求すること。
【二〇】夾巷。狹巷なり。
【二一】兩宮。洛陽に南北二宮あり。
【二二】雙闕。左右對立する宮門。
【二三】戚戚。憂思なり。
【二四】逸響。高調なり。
【二五】新聲。新曲なり。
【二六】令德。善德ある人。高言は高尙なる言。
【二七】奄忽。迅速なること。飈塵は風に吹かるる塵。
【二八】高足。駿馬なり。
【二九】要路の津。權要の地位をいふ。
【三〇】轗軻。不遇なり。

【大意】盛宴に列し豪華の曲を聞きて、自ら貧賤を嘲る詩なり。今日盛宴に列し、箏を弾じて高調を發し、新曲の妙神に入るを聴き、其樂具に述べ盡し難し。古人は善徳の貴ぶべきを言へども、豪華の曲を聴けば、人皆之を以て信となし、心を一にして富貴を願はざるはなし。ただ意を含んで未だ之を言はざるのみ。ああ人の此世に在るは、塵の風に吹かるるが如し。須く一躍して富貴に登るべし。貧賤を守りて永く苦辛すべきにあらざるなり。

〔二一〕西北に高樓あり、上浮雲と齊し。〔二二〕交疏綺窗を結び、〔二三〕阿閣三重の階。上に〔二四〕絃歌の聲あり、音響一に何ぞ悲しき。誰か能く此曲を爲る、乃ち〔二五〕杞梁の妻なるなからんや。〔二六〕清商風に隨つて發し、〔二七〕中曲正に徘徊す。一たび彈じて再三歎じ、慷慨して餘哀あり。歌者の苦を惜まず、但〔二八〕知音の稀なるを傷む。願くは雙鳴鶴となり、翅を奮ひ起ちて高く飛ばん。

〔二一〕西北。乾の方角にて君位なり。高樓は高位に居るをいふ。

〔二二〕交疏。刻鏤疏通なり。綺窗は丹青を以て綺文を飾りし窓。

〔二三〕阿閣。阿は隅なり。閣に四隅あるをいふ。階は梯なり。閣に階三重なれば閣も亦三重なり、以て樓の高きを知るべし。

〔二四〕絃歌。忠言に喩ふ。

〔二五〕杞梁。琴操に「杞梁妻歎は齊の杞梁殖が妻の作る所なり、殖死す、妻嘆じて曰く、上は則ち父なく、中は則ち夫なく、下は則ち子なし、はた何を以てか吾が節を立てん、亦死せんのみと、琴を援きて之を鼓し、曲終りて遂に自ら淄水に投じて死す」とあり。寡婦を以て孤臣に喩ふ。

〔二六〕清商。悲哀の調。

〔二七〕中曲。曲のなかごろ。徘徊は音の高低遠近あること。

〔二八〕知音。音樂を知る人、以て君主に喩ふ。

【大意】此れ忠言の用ひられざるを悲み、遠引を思ふの詩なり。通首比喩を以て成る。西北に高樓あり。其高さ雲と齊し。結窓重階の飾あり。(讒諂の明を蔽ふに喩ふ) 樓上に絃歌の聲あり。其調極めて悲し。(忠言の用ひられざるに喩ふ) 此曲を作る者は必ず杞梁の妻なるべし。(孤臣の悲嘆するに喩ふ) 一彈三嘆、慷慨して餘哀を含み、歌ふことの苦しきを痛まず、ただ知音の少きを傷む。(忠諫の苦を思はず、ただ君主の用ひざるを痛むに喩ふ) 願くは鳴鶴となりて、天上に飛び去らんことを。(已むを得ずして、引退せんことを欲するに喩ふ)

江を渉りて (三九)芙蓉を采る。蘭澤芳草多し。之を采りて誰にか遺らんと欲する、思ふ所遠道に在り。還顧して舊鄕を望めば、長路漫として (四〇)浩浩たり。心を同うして離居し、憂傷して以て老を終ふ。

【大意】此れ人を懷ふ詩なり。江澤に往きて蓮花と芳草とを採り、遠地に在る知友に贈らんとするも、路遠くして致すに由なし。思ふに友も亦必ず故鄕を回顧して、長途を嘆じつつあらん。ああ同心の友東西に離居し、憂傷して終老するは、誠に悲に堪へず。

明月夜光皎たり。(四一)促織東壁に鳴く。(四二)玉衡孟冬を指し、衆星何ぞ (四三)歷歷たる。(四四)白露野草を霑し、

(三九) 芙蓉。蓮花なり。
(四〇) 浩浩。廣き貌。
(四一) 促織。蟲の名、蟋蟀なり。禮記に「季夏に蟋蟀壁に居る」とあり。
(四二) 玉衡。北斗七星の第五星をいふ。孟冬は初冬。漢は十月を以て歲首となす。漢の孟冬は夏正の七月なり。
(四三) 歷歷。明なる貌。
(四四) 白露。禮記に「孟秋の月白露降る」とあり。

時節忽ち復た易る。(四五)秋蟬樹間に鳴き、(四六)玄鳥逝きて安にか適く。昔我が同門の友、(四七)高擧して六翮を振ふ。手を攜へし好を念はず、我を棄つること遺跡の如し。南に(四八)箕あり北に斗あり、(四九)牽牛軛を負はず。良に盤石の固なし。虚名復た何の益かあらん。

【大意】此れ貴人の舊交を念はざるを刺れる詩なり。月明かに露零ち、蟲鳴き燕歸り、時節忽ち復た易りて、皆秋景ならざるはなし。炎に就き涼を去る交情の變幻亦此の如し。我が友今高位に登り、勢力を振ふ者あり。然も昔日の交を念はず。我を棄てて復た顧みず、猶ほ天に箕あるも以て簸揚すべからず、斗あるも以て酒漿を挹むべからず、牽牛あるも以て車に駕し軛を負はざるが如く、ただ朋友の虚名ありて堅交の實なし。

(五〇)冉冉たる孤生の竹、根を(五一)泰山の阿に結ぶ。君と新婚を爲し、(五二)兎絲女蘿に附かん。兎絲の生ずること時あり、夫婦の會すること宜しきあり。千里遠く婚を結び、(五三)悠悠として山陂を隔つ。(五四)君を思へば人をして老い

【四五】秋蟬。禮記に「孟秋寒蟬鳴く」とあり。

【四六】玄鳥。燕なり、禮記に「仲秋の月、玄鳥歸る」とあり。

【四七】高擧。高位に登るをいふ、鳥に喩ふ。翮は羽莖。

【四八】箕。星の名、斗は北斗星、又箕は物を簸揚する具にして斗は酒漿を酌む具なり。

【四九】牽牛。星の名。軛はクビキ、牛車に駕すれば之を負ふ。

【五〇】冉冉。漸く生長する貌。竹は以て婦人に喩ふ。

【五一】泰山。山の名、以て夫に喩ふ。

【五二】兎絲、女蘿。共に蔓草の名、松に附くを女蘿といひ、草に纏ふを兎絲といふ。

【五三】悠悠。遠き貌。山陂は阪なり。

【五四】君。夫を指す。

しむ。(五五)軒車來ること何ぞ遲き。傷む彼の(五六)蕙蘭の花、英を含んで光輝を揚ぐるを。時を過ぎて采らずんば、將に秋草に隨つて萎まんとす。君亮に高節を執らば、賤妾亦何をか爲さん。

【大意】此れ女子自ら結婚の遲きを傷む詩なり。孤生の竹の根を泰山に託し、兎絲の女蘿に纏ふが如く、女子嫁して人の妻となるは、人の道なり。然れども兎絲の生ずるに季節あるが如く、夫婦の會合にも亦宜しき時あり。今千里遠く離れ山阪之を隔て、婚を結ばんとするも能はず。我を迎ふるの車その來ること甚だ遲し。之を思へば我をして老いしむ。彼の蕙蘭正に內に芳華を含んで外に光華を揚ぐ、早く之を採らずんば、秋草と同じく萎まん。(盛年の逝き易きに喩ふ)然れども君ただ貞節を執りて心を移さずんば、我れ亦何ぞ憂ふるをなさんや。

庭中に奇樹あり、綠葉(五七)華滋を發く。條を攀ぢて其榮を折り、將に以て思ふ所に遺らんとす。馨香懷袖に盈つれども、路遠くして之を致すなし。此物何ぞ貴ぶに足らん、但別れて時を經たるを感ず。

【大意】此れ亦人を懷ふ詩なり。庭中に奇樹あり、其花潤澤ありて正に盛なり。之を折りて思ふ所の人に贈らんとす。芳香袖に盈つれども、路遠くして致すに由なし。我の之を贈らんとするは、此花の貴きが爲にあらず、ただ相別れて日久しく、時物改まりて復た此花を見るに至り、感念特に深

【五五】軒車。馬車なり。
【五六】蕙蘭。香草なり。婦人自ら喩ふ。
【五七】華滋。潤澤ある花。

ければなり。

(五八)迢迢たる牽牛星、(五九)皎皎たる河漢の女。(六〇)纖纖として素手を擢げ、(六一)札札として機杼を弄す。終日(六二)章を成さず、(六三)泣涕零ちて雨の如し。河漢淸く且つ淺し。相去ること復た幾許ぞ。(六四)盈盈として一水間り、(六五)脈脈として語るを得ず。

【大意】此詩は二星を借りて男女の間を詠じたるなり。牽牛星と織女星と天河を隔てて相對し、織女星は白き腕を擧げ、孜孜として布を織りつつあれども、牽牛星を思ふこと頻なるを以て、終日織れども章を成さず、ただ涙を垂るるのみなり。天河は淸くして且つ淺く、相去ること亦遠きにあらず。然れども一語を交ふる能はず、之を隔てて相凝視するのみ。

車を廻らし駕して言に邁き、悠悠として長道を渉る。四顧何ぞ(六六)茫茫たる、(六七)東風百草を搖かす。遇ふ所(六八)故物なし。焉んぞ速に老いざるを得ん。盛衰各ゝ時あり、身を立つること早からざるを苦む。人生金石にあらず。豈能く長く(六九)壽考ならんや。(七〇)奄忽として物に隨つて化す。榮名以

【五八】迢迢。遠き貌。牽牛星は星の名。夫に喩ふ。
【五九】皎皎。明なる貌。河漢は天河。女は織女星なり、天河を隔てて牽牛星と相對す。
【六〇】纖纖。細くしなやかなる貌。素手は白き手。
【六一】札札。機杼の聲。機はハタ、杼はヒ。
【六二】章。織布の文章。
【六三】泣涕。涙なり。
【六四】盈盈。水の滿つる貌。
【六五】脈脈。相望んで凝視する貌。
【六六】茫茫。廣遠の貌。
【六七】東風。春風なり。
【六八】故物。舊き物。
【六九】壽考。長壽を保つこと。
【七〇】奄忽。倏忽なり。

て寶となさん。

【大意】此れ自ら警むる詩なり。車を廻らして遠く出遊すれば、四顧茫茫として春風の百草を搖かすを見る。目の觸るる所皆青春の裝を成し一も舊物を見ず。人亦何ぞ速に老いざるを得ん。ああ盛時將に遷らんとす。事功を立つるの早からざるを恐る。人生は金石にあらず、誰か千歳の壽を保つを得ん。ただ榮名獨り不朽なるを得るのみ。

東城高く且つ長く、(七一)委迤として自ら相屬す。廻風地を動かして起り、秋草(七二)萋として已に綠なり。四時更ゝ變化し、歳の暮るる一に何ぞ速なる。(七三)晨風苦心を懷き、(七四)蟋蟀局促を傷む。(七五)蕩滌して情志を放にせん、何爲れぞ自ら(七六)結束する。燕趙佳人多く、美なる者顏玉の如し。羅の裳衣を被服し、戶に當りて(七七)清曲を理む。音響一に何ぞ悲しき、絃急にして柱の(七八)促なるを知る。情を馳せて巾帶を整へ、(七九)沈吟して聊か躑躅す。思ふ雙飛燕となり、泥を銜んで君が屋に巢くはんことを。

【大意】此れ歳月逝き易く、未だ君に事ふるを得ざるを傷む詩なり。城高く且つ長く、自ら相連續

【七一】委迤。長き貌。相屬は連ろこと。
【七二】萋。草の盛なる貌。
【七三】晨風。詩經の篇の名。君子を思へども見るを得ずして作る、故に苦心を懷くといふ。
【七四】蟋蟀。詩經の篇の名、晉の僖公の儉にして禮に中らざるを刺る。故に局促を傷むといふ。局促は器量の小き貌。
【七五】蕩滌。汙穢を洗ひ去ること。
【七六】結束。拘束なり。
【七七】清曲。清商曲なり。
【七八】促。柱と柱と近く相迫れること。
【七九】沈吟。思案すること。躑躅は、ためらふこと。

す。城に登りて以て望めば、秋風地を動かして起り、秋草萋然として綠なり。之を見て坐に四時の更變を感ず。ああ歲月の移る何ぞ此の如く速なる。因つて思ふに晨風の詩は君を見んことを欲して得ざるの苦心を述べ、蟋蟀の詩は局量の狹小なるを傷めり。徒に苦心を抱き局促を傷むも益なきなり。宜しく心情を蕩開して、自ら放にすべきのみ。自ら拘束すべきにあらざるなり。燕趙には美女多く、顏貌玉の如く被服鮮麗なり。窓に當りて淸曲を奏す。その聲極めて悲し。聽く者絃の急にして柱の促れるを知る。（賢士才學ありて未だ仕へず、徒に歲暮の嘆を發するに比す）我れ之を聽きて心動き情馳せ、衣帶を整へ往きて之に從はんと欲するも、亦沈吟して躊躇す。願くは雙飛燕となり、共に泥を銜んで巢を作り、以て君が室に依棲せんことを。

【八〇】上東門。洛陽城門の名。
【八一】郭北。洛陽の北に北邙山あり、墳墓多し。
【八二】白楊。木の名、墓に植う。蕭蕭は風の淋しき貌。
【八三】陳死。死して久しき人。
【八四】杳杳。暗き貌。長暮は墓中なり。
【八五】千載。千年なり。
【八六】浩浩。流るる貌。
【八七】服食。仙藥を服用すること。

車を(八〇)上東門に驅り、遙に(八一)郭北の墓を望む。(八二)白楊何ぞ蕭蕭たる、松柏廣路を夾む。下に(八三)陳死の人あり、(八四)杳杳として長暮に卽く。黃泉の下に潛み寐ね、(八五)千載永く寤めず。(八六)浩浩として陰陽移り、年命朝露の如し。人生忽として寄るが如く、壽金石の固きなし。萬歲更ゝ相送り、聖賢も能く度るなし。(八七)服食して神仙を求むれば、多くは藥の爲に悞らる。如かず美

酒を飲み、（八）紈と素とを被服せんには。

【大意】上東門より北邙山上の墳墓を望めば、松柏墓道を夾みて植ち、墓上には白楊蕭蕭として立てり。其下に久死の人あり、黄泉の下に眠りて復た寤むるの期なし。陰陽二氣流轉して已まず。人生亦倏忽にして宿れるが如し。古より生死遞に送り、聖賢と雖も此分を脫すること能はず。夫れ死は人の常分なり。不死を求めて仙藥を服すれば、却つて藥の悞る所となりて死を速く。如かず生時に於て美酒を飲み美服を纏ひ、以て適を目前に取らんには。

去る者は日に以て疎く、生る者は日に以て親し。郭門を出でて直視すれば、但丘と墳とを見る。古墓犂かれて田となり、松柏摧かれて薪となる。白楊悲風多く、蕭蕭として人を愁殺す。故の里閭に還らんことを思ふ。歸らんと欲するも道因るなし。

【大意】此れ客中墳墓を過ぎ、感ありて歸らんことを思ふ詩なり。死して世を去る者は日に疎く、生れて我と相接する者は日に親む。郭門を出でて直視すれば、墳墓の纍纍たるあり。甚しきに至りては、古墓開墾せられて田圃となり、墓上の松栢摧かれて薪となれるもあり。ただ白楊の蕭蕭として人を愁へしむるのみ。あゝ死しては萬事休す。生時宜しく相親むべきなり。因つて故鄉に歸らんと欲するも、道の因るべきなし。

【八】紈素。白き薄絹・美服をいふ。

生年百に滿たず、常に千歳の憂を懷く。晝短くして夜の長きを苦しむ。何ぞ燭を秉りて遊ばざる。樂をなすは當に時に及ぶべし、何ぞ能く（八九）來茲を待たん。愚者は費を愛惜して、但後世の嗤となる。仙人（九〇）王子喬、與に期を等うすべきこと難し。

【大意】人生は百年に滿たず。然も人みな千歳の計を營み、以て憂となすは愚の至なり。日の短くして夜の長きを苦まば、宜しく燭を張りて夜遊び、以て日の短きを補ふべし。當に時に臨んで樂を取るべく、徒に後日を待つべきにあらず。ただ愚人は遊樂の費を惜んで後世の笑となる。王子喬と長壽を競はんとするは、人力の能くする所にあらず。

（九一）凜凜として歳云に暮れ、（九二）螻蛄夕に鳴き悲む。涼風率に已に厲しく、（九三）游子寒くして衣なし。錦衾（九四）洛浦に遺り、（九五）同袍我と違ふ。獨宿して長夜を累ね、夢想して（九六）容輝を見る。（九七）良人古懽を惟ひ、駕を枉げて（九八）前綏を惠む。願くは常に巧笑するを得て、手を攜へ車を同うして歸らん。既に來りて須臾ならず、又（九九）重闈に處らず。亮に（一〇〇）晨風の翼なし。焉んぞ能く風を淩いで飛ばん。（一〇一）眄睞して以て意に適へ、頸を引きて遙に相睎む。（一〇二）徒倚して感傷を懷き、

【八九】來茲。來年なり。
【九〇】王子喬。仙人の名。
【九一】凜凜。寒き貌。
【九二】螻蛄。寒吟蟲なり。
【九三】游子。他鄉に在る夫を指す。
【九四】洛浦。神女宓妃の居る處、己の處に喩ふ。
【九五】同袍。袍を共にする人、夫をいふ。
【九六】容輝。夫の美貌。
【九七】良人。夫をいふ。古懽は舊好。
【九八】前綏。車前の把索。
【九九】重闈。閨中なり。
【一〇〇】晨風。鳥の名、鸇なり。
【一〇一】眄睞。斜に視ること。
【一〇二】徒倚。行きて進まざる貌。

涕を垂れて雙扉を霑す。

【大意】此れ亦思婦の詩なり。寒氣凛冽として歲ここに暮れんとし、螻蛄夕に哀鳴す。近來寒風俄に嚴厲を加へたれば、客地の夫君は定めて寒に苦みつつあらん。夫君は空しく錦衾を吾が許に留め、獨り去りて他鄕に在り。我れ獨り空閨を守りて長夜を累ね、一夜夢に夫君の姿を見たり。夫君は舊好を思ひ車を以て我を迎へんとするなり。因つて常に愛好するを得んことを思ひ、我れ夫君と車を同うして歸る。暫くにして覺むれば夫君また閨中に居らず。あゝ我に鶉の翼なし。如何ぞ夫君の許に飛び往くを得ん。眷顧して心を慰め、頸を延べて遙に望めば、淚流れて門扉を沾しぬ。

(一〇三)孟冬寒氣至り、北風何ぞ(一〇四)慘慄たる。愁多くして夜の長きを知り、仰いで衆星の列るを觀る。(一〇五)三五明月滿ち、(一〇六)四五蟾兎缺く。客遠方より來り、我に(一〇七)一書札を遺る。上には長く相思ふを言ひ、下には久しく離別するを言ふ。書を懷袖の中に置く、三歲字滅えず。一心(一〇八)區區を抱くも、(一〇九)君の識察せざらんことを懼る。

【大意】此れ亦思婦の詩なり。今や冬の初となり、寒氣嚴しく、北風凛冽たるの時、夫君を思ふのあまり、特に夜の長きを感じ、仰いで衆星の天に列るを見れば、過ぎし十五夜には滿月なりしも、

【一〇三】孟冬。初冬なり。
【一〇四】慘慄。寒氣甚しき貌。
【一〇五】三五。十五日なり。
【一〇六】四五。二十日なり、蟾兎は月の異名。
【一〇七】一書札。一封の手紙。
【一〇八】區區。夫に對する愛情。
【一〇九】君。夫を指す。

二十日には漸く缺けぬ。(月の滿ち月の缺くるを以て昔合ひ今離るるに比す)之を見て坐に歳月の移り易きを感じぬ。憶へば三年の前、客遠方より來り、我に一封の書信を遺りぬ。そは夫君よりの音信なりき。その始には長く我を思ひつつある由を言ひ、終には久しく離別するの悲を言へり。我れ此書を懷中にして今日に至り、既に三年を經たるも、其字猶ほ滅えず。我れ區區として夫君を思ひつつあれども、夫君は之を察知せざるにや、今尚ほ歸り給はず。誠に悲むべきなり。

客遠方より來り、我に一端の綺を遺る。相去ること萬餘里、(二〇)故人心尙ほ爾り。(二一)文綵鴛鴦を雙ぶ。裁ちて(二二)合歡被となす。(二三)著するに長く相思ふを以てし、(二四)緣するに結んで解けざるを以てす。膠を以て漆中に投ず。誰か能く此を別離せん。

【大意】此れ亦思婦の詩なり。夫君の使者來りて我に一端の綺を遺りぬ。夫君と我とは相去ること萬餘里なれども、夫君の愛惜に變らざれば、かくは綺を贈り越したるなり。この綺には番離れぬ鴛鴦を織出せり。我れ乃ち之を裁ちて同寢の夜具となし、綿を入るるに綿綿として相思ふの意を籠め、緣を綴るに結んで解けざるの意を籠めたり。夫君と我との間は膠漆の堅きに同じ。誰か其間を裂く

【二〇】故人。舊好ある人、ここは夫を指す。
【二一】文綵。綺の模様。
【二二】合歡被。夫妻同歡の夜具。
【二三】著。綿を入るること。綿綿不盡の意あるにより長相思といふ。
【二四】緣。へりを縫ひつくること。

者あらんや。願くは早く歸りて此被を共にせんことを。

明月何ぞ(二五)皎皎たる、我が羅の(二六)牀帷を照す。憂愁して寐ぬる能はず、衣を攬げて起ちて徘徊す。客行樂しと云ふと雖も、早く(二七)旋歸するに如かず。戶を出でて獨り(二八)彷徨し、愁思當に誰にか告ぐべき。領を引きて還りて(二九)房に入れば、涙下りて裳衣を霑す。

【大意】此れ亦思婦の詩なり。明月皎皎として閨の帳を照すにより、坐に夫君を思ひて寐ぬる能はず、衣を攬げ起ちて徘徊す。夫君は客地に在りて樂かるべきも、早く故鄕に歸るの勝れるに如かず。戶を出でて獨りさまよふも愁思を告ぐべき人なし。心を抑へて閨に歸れば、涙流れて衣裳を沾しぬ。

【二五】皎皎。明なる貌。
【二六】牀帷。閨の帳。
【二七】旋歸。故鄕に歸ること。
【二八】彷徨。徘徊に同じ。
【二九】房。閨なり。

(一)蘇武に與ふる詩三首　(二)李少卿

良時再び至らず、離別須臾に在り。衢路の側に(三)屛營し、手

【一】蘇武。漢の杜陵の人、字は子卿。武帝の時、中郎將を以て匈奴に使し、留められて海上に居り、匈奴に在ること十九年にして漢に還るを得たり。
【二】李少卿。名は陵、字は少卿、漢の李廣の孫なり、天漢中步卒五千を率ゐて匈奴を擊ち、克たずして遂に匈奴に降る。
【三】屛營。恐懼して安んぜざ

を執りて野に（四）踟蹰す。仰いで浮雲の馳するを視るに、（五）奄忽として互に相踰ゆ。風波一たび所を失へば、各〻天の一隅に在り。長く當に此より別るべし。且く復た立ちて（六）斯須す。（七）晨風の發するに因りて、子を送るに（八）賤軀を以てせんと欲す。

る貌。
【四】踟蹰。躊躇なり。
【五】奄忽。倏忽なり。
【六】斯須。須臾に同じ。
【七】晨風。鳥の名、鸇なり。
【八】賤軀。いやしき身。

【大意】蘇武の漢に歸るを送る詩なり。好會の期は再び來らざるに、暫時の後君と相別れざるを得ず。因つて路傍に恐懼し、手を執りて彷徨す。仰いで浮雲を視れば彼此交〻馳せて相踰越し、茫として定りなし。人も亦此の如し。風波一たび所を失へば、相離れて各〻天の一角に在り。今日の別必ず當に久しかるべし。暫く立ちて復た須臾の歡を盡さん。鸇の翼に乘り子を送りて共に行かんとするも能はず。悲しいかな。（九）嘉會再び遇ひ難し。（一〇）三載千秋をなさん。河に臨んで（一一）長纓を濯ひ、子を念ひ悵として（一二）悠悠たり。遠く悲風の至るを望み、酒に對して（一三）酬ゆる能はず。（一四）行人往路を懷ふ。何を以てか我が愁を

【九】嘉會。好會といふが如し。
【一〇】三載。三年なり、千秋は千年。
【一一】長纓。冠の紐、別涙に汙れたるを洗ふなり。
【一二】悠悠。遠き貌。
【一三】酬。返杯すること。
【一四】行人。蘇武を指す。

慰めん。獨り觴に盈つるの酒あり、子と(一五)綢繆を結ばん。

【大意】蘇武の出でて匈奴に使するを送る詩なり。一別の後再會復に期すべからず、若し別れて三年を經ば、恰も千年を經るが如き思をなさん。故に今別るるに際し、河に臨んで遠きを望めば、緒に觸れて悲來り、酒に對するも酬い難し。行く者は往路を思ひて悲む。何ぞ能く我が悲を慰むるを得ん。ただ暫く留り共に樽酒を酌んで纏綿の情を敍べん。

手を攜へて(一六)河梁に上る。(一七)遊子暮に何にか之く。(一八)蹊路の側を徘徊し、(一九)悢悢として辭する能はず。(二〇)行人久しく留り難し。各ゝ長く相思ふを言ふ。安んぞ日月にあらざるを知らん。(二一)弦望自ら時あり。努力して明德を崇くし、(二二)皓首以て期となさん。

【大意】是れ亦匈奴に使するを送る詩なり。君が行を送りて橋上に至れば日將に暮れんとす。君今何處にか行かんとする。相俱に路傍に徘徊して別辭を述ぶる能はず。然れども朝命を奉じて使する身は、久しく留るべきにあらず。因つて生死相忘れざらんことを誓ふ。夫れ人の離合は日月の如し。月に弦時あり望時あり。今暫く相離るるも、終に當に會合すべし。ただ各ゝ務めて明德を高くし、晩年の功を期せん。

【一五】綢繆。纏綿といふが如し、交情の密なること。
【一六】河梁。橋なり。
【一七】遊子。蘇武を指す。
【一八】蹊路。徑路なり。
【一九】悢悢。眷眷の貌。
【二〇】行人。蘇武を指す。
【二一】弦望。弦は半月、望は滿月。
【二二】皓首。白頭なり。

詩四首　蘇子卿

(一)骨肉枝葉に緣り、交を結ぶも亦相因る。四海皆兄弟なり、誰か行路の人となさん。況んや我が連枝の樹、子と同一身なるをや。昔は(二)鴛と鴦ととなり、今は(三)參と辰ととなる。昔者は常に相近づく。(四)邈として胡と秦との若し。惟念ふ離別に當り、恩情日に以て新なるを。(五)鹿鳴いて野草を思ふ。以て嘉賓に喩ふべし。我に(六)一罇の酒あり、以て(七)遠人に贈らんと欲す。願くは子留りて(八)斟酌し、此の平生の親を敍せよ。

【大意】此れ遠く遊びて友に交らんとし、兄弟に別るる詩なり。兄弟は幹を同うする枝葉なれば、固より至親なり。然れども朋友の情亦相親むべきなり。古人も四海の内皆兄弟なりといへり。何ぞ路人と同一視すべけんや。況んや我と君とは兄弟にして枝を連ね幹を同うするをや。されば兄弟と朋友とは、固より輕重なきなり。我と君とは嘗て鴛鴦の如く相離れざりしも、今や參辰二星の如く離れ去らんとす。昔は相親近せし

【一】骨肉。兄弟をいふ。
【二】鴛鴦。をしどり、常に相離れざる鳥なり。
【三】參辰。二星の名、此の二星常に出沒して相見ることなし。
【四】邈。遠き貌。胡は北にあり、秦は西にあり、相隔るをいふ。
【五】鹿鳴。詩經の篇の名、「呦呦として鹿鳴き、野の苹を食ふ、我に嘉賓あり、瑟を鼓し笙を吹く」とあり。
【六】一罇。一樽なり。
【七】遠人。遠く送り來りし兄弟。
【八】斟酌。酒を酌みて飲むこと。

も、今や胡と秦との如く遠ざからんとす。然りと雖も請ふ悲むを休めよ。相離れて後始めて恩情の日に濃なるを得べければなり。今鹿鳴を聞きて嘉賓を宴すべきを想ふ。我に一樽の酒あり、願くは此酒を酌んで、平生の親情を敍べられよ。

黄鵠一たび遠く別れ、千里顧みて徘徊す。（九）胡馬其羣を失ひ、思心常に（一〇）依依たり。何ぞ況んや（一一）雙飛龍、羽翼乖くべきに臨めるをや。幸に絃歌の曲あり、以て（一二）中懷を喩すべし。請うて游子の吟をなせば、（一三）泠泠として一に何ぞ悲しき。（一四）絲竹清聲を厲くし、慷慨餘哀あり。長歌正に激烈、中心（一五）愴として以て摧く。（一六）清商の曲を展べんと欲して、子の歸る能はざるを念ふ。（一七）俛仰して内に心を傷ましめ、涙下りて揮ふべからず。願くは雙黄鵠となり、子を送りて倶に遠く飛ばん。

【大意】此れ匈奴より漢に歸る時、李陵に別れし詩なり。黄鵠遠く別るるも、猶ほ顧戀して進まず。胡馬羣を離るるも、常に故土に戀戀たり。何ぞ況んや君と我と遠く相別れんとするをや。幸に絃歌の中情を慰むべきあり。因つて游子吟（游子故郷を思ふの歌）をなせば、音聲凄涼にして悲哀に堪へず。是れ己歸りて君と乖くを悲むが爲なり。乃ち更に清商悲痛の曲

【九】胡馬。北方胡地に産する馬。
【一〇】依依。思戀の貌。
【一一】雙飛龍。己と李陵とに喩ふ。
【一二】中懷。心中なり。
【一三】泠泠。音聲の盛なる貌。
【一四】絲竹。管絃なり。
【一五】愴。傷むなり。
【一六】清商。聲の澄み調の悲しき曲。
【一七】俛仰。俯仰に同じ。

を奏せんと欲し、忽ち君の歸る能はずして我と乖くの一層悲しかるべきを思ひて止みぬ。俯仰して心を傷ましめ、淚下りて拭ふべからず。ただ君と我と、相與に手を攜へて歸るを得ば、則ち會心の至なるも、是れ不可能の事なり。悲しいかな。

(一八)結髮して夫妻となり、恩愛兩ながら疑はず。歡娛今夕に在り、(一九)嬿婉良時に及ばん。(二〇)征夫往路を懷ひ、起ちて夜の何其を視る。(二一)參辰皆已に沒しぬ。去去して此より辭せん。(二二)行役して戰場に在り、相見んこと未だ期あらず。手を握りて一たび長歎すれば、淚生別の爲に滋し。努力して(二三)春華を愛し、歡樂の時を忘るるなかれ。生きては當に復た來り歸るべく、死しては當に長く相思ふべし。

【大意】此れ匈奴に使する時、妻に別るる詩なり。汝と夫妻となり、互に恩愛を盡し來りしも、今や匈奴に使することとなり、歡娛今夕を以て限となる。務めて此の良時に負くことなかるべきなり。我れ前途を思ひ、起ちて窓外を見れば、星既に沒して夜將に明けんとす。いざ此より別れ去らん。夫れ使命を奉じて戰地に往く。再會復た期すべからず。手を握りて長嘆し、互に生別の淚を濺ぐ。願くは今の容姿を失はざらんことを勉め、平生の歡を忘るるなかれ。

【一八】結髮。成人となること。男年二十、女年十五にして髮を結んで成人となる。
【一九】嬿婉。歡好なり。
【二〇】征夫。行人なり、蘇武自ら謂ふ。往路は前途。
【二一】參辰。二星の名。
【二二】行役。使命を奉じて遠行すること。
【二三】春華。少時の美貌に喩ふ。

幸に生くるを得ば、必ず復た歸り來るべく、不幸にして死せば、地下に長く汝を相思はん。

（二四）燭燭たる晨の明月、（二五）馥馥たる我が蘭芳。芬馨良夜に發し、風に隨つて我が堂に聞ゆ。（二六）征夫遠路を懷ひ、（二七）游子故鄕を戀ふ。（二八）寒冬十二月、晨に起きて嚴霜を踐む。俯して（二九）江漢の流るるを觀、仰いで浮雲の翔るを視る。良友遠く離別し、各〻天の一方に在り。（三〇）山海中州を隔て、相去ること悠く且つ長し。（三一）嘉會再び遇ひ難く、歡樂殊に未だ央きず。願くは君（三二）令德を崇くし、時に隨つて（三三）景光を愛せよ。

【大意】此れ出でて匈奴に使する時、李陵に別るる詩なり。我れ今君と別れんとすれば、晨月明にして秋蘭芳しく、芳香風に隨つて堂中に至り時物の感殊に深し。是に於て一には往路の難を想ひ、一には故鄕の樂を戀ふ。然も君命もだし難く、嚴霜を踐んで北行せんとす。一別の後は江流流れて息まず、浮雲去つて歸らざるが如く、君と我と相離れて各〻天の一方に在り。我れ帝都を顧るも遠く幾山川を隔つるならん。好會再び期し難く、歡樂猶は

【二四】燭燭。明なる貌。
【二五】馥馥。芳ばしき貌。我の字、一本に秋に作る、之に從へば秋蘭芳しと讀む。
【二六】征夫。行人なり、蘇武自ら謂ふ。
【二七】游子。蘇武自ら謂ふ。
【二八】寒冬。漢書に「武帝の太初元年、改めて夏正に從ふ」とあり。
【二九】江漢。この二句は水流れ雲散ずるをいひ、以て良友の遠く離れ長く隔るに喩ふ。
【三〇】山海。往路をいふ。中州は帝都。
【三一】嘉會。好會なり、歡會なり。
【三二】令德。善德なり。
【三三】景光。光景に同じ。

未だ盡きず。願くは善德を積み、時に隨つて光景を賞愛し、我を以て憂となすこと勿れ。

四愁の詩四首

張子平

(一)張衡久しく機密に處るを樂まず。(二)陽嘉中、出でて(三)河間の相となる。時に國王驕奢にして法度に遵はず。又(四)豪右幷兼の家多し。衡車を下りて治威嚴あり、能く內に屬縣を察す。姦猾巧劫を行へば皆密に名を知り、吏に下して收捕し、盡く擒に服く。諸の豪俠游客悉く惶懼し、逃れて境を出で、郡中大に治り、爭訟息んで獄に繫囚なし。時に天下漸く弊え、鬱鬱として志を得ず。四愁の詩を爲る。屈原美人を以て君子となし、珍寶を以て仁義となし、水深(五)雪雰を以て小人となす。道術を以て相報じ、時君に貽らんことを思ふ。而も讒邪の以て通ずるを得ざらんことを懼る。其辭に曰く、

一思に曰く、我が思ふ所(六)太山に在り。往いて之に從はんと欲すれば(七)梁父艱なり。身を側てて東

【一】張衡。字は子平、後漢の南陽西鄂の人、安帝の時徵されて郎中となり太史令に遷り、順帝の陽嘉中、侍中に遷る、宦官其の己を毀らんことを懼れ、共に之を讒す、出でて河間王の相となり、徵されて尙書に拜せられて卒す。

【二】陽嘉。後漢の順帝の年號。

【三】河間。國名、王は和帝の子なり。

【四】豪右幷兼。富みて權勢ある家。

【五】雪雰。雪氣なり。

【六】太山。泰山なり、東方に在り、以て時君に喩ふ。

【七】梁父。泰山の下の小山の名。讒邪の小人に喩ふ。

望すれば涕(八)翰を霑す。(九)美人我に金錯刀を贈る。何を以てか之に報いん、(一〇)英瓊瑤。路遠くして致すなく倚りて逍遙す。何爲れぞ憂を懷いて心煩勞する。

【大意】我れ君側に近づかんことを思へども、小人の間阻に遇ひて近づく能はず。之を悲んで涙衣襟を沾す。君已に我を待つこと甚だ厚し。我亦厚く之に報いんと欲するも、惓惓の忠遠くして達し難し。是を以て常に憂を抱くのみ。

二思に曰く、我が思ふ所(一一)桂林に在り。往いて之に從はんと欲すれば(一二)湘水深し。身を側てて南望すれば涕襟を霑す。美人我に(一三)金琅玕を贈る。何を以てか之に報いん(一四)雙玉盤。路遠くして致すなく倚りて惆悵す。何爲れぞ憂を懷いて心煩傷する。

【大意】第一首に同じ。

三思に曰く、我が思ふ所(一五)漢陽に在り。往いて之に從はんと欲すれば(一六)隴阪長し。身を側

【八】翰。衣襟をいふ、鳥の羽翰あるが如くなればなり。

【九】美人。君に喩ふ。金錯刀は黄金を以て其環を鍍めし刀、榮爵に喩ふ。

【一〇】英瓊瑤。美玉なり、仁義の道に喩ふ。

【一一】桂林。秦の郡名。漢の鬱林郡なり、南方に在り、舜嘗て此に遊びしを以て君に喩ふ。

【一二】湘水、河の名。讒邪の小人に喩ふ。

【一三】金琅玕。黄金及び美玉厚祿に喩ふ。

【一四】雙玉盤　二個の玉の皿。

【一五】漢陽。漢書に「天水郡明帝改めて漢陽といふ」とあり、西に在り、喩意前に同じ。

【一六】隴阪。阪の名。喩意前に

てて西望すれば涕裳を霑す。美人我に(一七)貂襜褕を贈る。何を以てか之に報いん(一八)明月の珠。路遠くして致すなく倚りて(一九)踟蹰す。何爲れぞ憂を懷いて心(二〇)煩紆する。

【大意】第一首に同じ。

同じ。
【一七】貂襜褕。貂は貂蟬の冠、襜褕は蔽膝なり、冠服をいふ。
【一八】明月の珠。隨侯の珠又は夜光の珠ともいふ。
【一九】踟蹰。行きて進まざる貌。

【二〇】煩紆。心亂ろるなり。
【二一】鴈門。郡名、北に在り、喩意前に同じ。
【二二】錦繡段。美錦なり。
【二三】青玉案。青玉のテーブル。
【二四】煩惋。亂れ怨むこと。

四思に曰く、我が思ふ所(二一)鴈門に在り。往いて之に從はんと欲すれば雪紛紛たり。身を側てて北望すれば涕巾を霑す。美人我に(二二)錦繡段を贈る。何を以てか之に報いん(二三)青玉案。路遠くして致すなく倚りて歎を增す。何爲れぞ憂を懷いて心(二四)煩惋する。

【大意】第一首に同じ。

(一)雜詩　王仲宣

日暮(二)西園に游ぶ。冀くは憂思の情を寫かん。曲池(三)素波を揚げ、列樹(四)丹榮を敷く。上に(五)特棲の鳥あり、春を懷ひ我に向つて鳴く。袵を褰

【一】雜詩。流例に拘らず、物に遇へば卽ち言ふ、故に雜といふ。
【二】西園。鄴都の西園なり。

【三】素波。白波なり。
【四】丹榮。紅花なり。
【五】特栖。孤棲なり。

げて之に從はんと欲するも、路險にして征くを得ず。徘徊して去る能はず、佇立して爾の形を望む。(六)風飇塵を揚げて起り、白日忽ち已に冥し。身を廻らして(七)空房に入り、夢に託して精誠を通ず。人欲天違はず、何ぞ合幷せざるを懼れん。

【大意】此れ友を思ふ詩なり。夕に西園に遊びて憂情を慰めんとすれば、曲池は微波を揚げ、列樹は紅花を綴れり。樹上に孤棲の鳥（友に喩ふ）あり、春愁に堪へず、我に向つて鳴けり。我れ因つて衣を褰げて近づかんとすれば、路險（戰亂に喩ふ）にして行く能はず。ただ徘徊して遠く之を望むのみ。忽ち疾風起りて日既に暮れぬ。歸りて虛室に入り、夢に由りて我が精誠を通ぜんとす。人の欲する所は天必ず之に從ふ。何ぞ君と相會するを得ざることあらんや。

【六】風飇。疾風なり、戰亂に喩ふ。
【七】空房。虛室なり。

雜詩　劉公幹

職事煩として(一)塡委し、(二)文墨紛として消散す。翰を馳せて未だ食ふに暇あらず、日昃いて晏ふを知らず。(三)簿領の書に沈迷し、(四)回回として自ら昏亂す。此を釋てて西城を出で、高きに登りて

【一】塡委。委積すること。
【二】文墨。案牘なり。消散は疏理せらるること。
【三】簿領。文書なり。

且く游觀す。方塘白水を含み、中に鳧と鴈とあり。安んぞ（五）肅肅たる羽を得て、爾の波瀾に浮ぶに從はん。

【大意】職事多忙にして文書の疏理すべきもの多く、日夜筆を馳せて休息するに暇あらず。心之が爲に沈迷昏亂せんとす。因つて西城を出でて遊觀し、自ら慰めんとすれば、池水白を湛へ中に鳧鴈の游べるを見、羽翼を得て此鳥と同じく波瀾の中に游ばんことを願ひぬ。

【四】回回。心の亂るる貌。

【五】肅肅。飛ぶ貌。

雜詩二首　魏文帝

（一）漫漫として秋夜長く、（二）烈烈として北風涼し。（三）展轉して寐ぬる能はず、衣を披て起ちて（四）彷徨す。彷徨忽ち已に久しく、白露我が裳を霑す。俯して清水の波を視、仰いで明月の光を看る。（五）天漢廻りて西に流れ、（六）三五正に從横。草蟲鳴くこと何ぞ悲しき、孤鴈獨り南に翔る。鬱鬱として悲思多く、（七）緜緜として故鄕を思ふ。飛ばんことを願ふも安にか翼を得ん、濟らんと欲するも河に梁なし。風に向つて長く歎息し、我が中腸を斷絶す。

【一】漫漫。夜の長き貌。
【二】烈烈。詩經に「冬日烈烈たり」とあり。
【三】展轉。ねがへりすること。
【四】彷徨。徘徊なり。
【五】天漢。あまのがは、以下四句は羣小君を惑し身を安んずる能はざるに喩ふ。
【六】三五。星なり。詩經に「三五東に在り」とあり。從横は縱横。多きなり。
【七】緜緜。絶えざる貌。

【大意】この詩疑ふらくは魏武曹操が太子（文帝）を易へんと欲せし時、憂へて作りしものならん。秋夜長くして北風寒く、寐ねて安んずる能はず。衣を著て起ちて徘徊すれば、白露降りて我が衣を沾せり。仰いで天上を望めば星斗縱橫なり。（羣小君を惑すに喩ふ）。俯して耳を傾くれば草蟲悲鳴し孤鴈南に飛ぶ。（己の身を安んずる能はざるに喩ふ）憂愁の極、故鄕を思ふこと頻なるも、（離間の懼明言すべからず、故に故鄕を思ふを借りて言ふ。眞に故鄕を思ふにあらずと知るべし）其道なきを如何せん。因つて獨り長嘆して心腸を摧く。

西北に浮雲あり、(八)亭亭として車蓋の如し。惜しいかな時遇はず、適〻飄風と會ふ。我を吹きて東南に行き、行き行きて(九)吳會に至る。吳會は我が鄕にあらず、安んぞ能く久しく留滯せん。(一〇)棄置復た陳ぶるなけん、(一一)客子常に人を畏る。

【大意】作意は前首に同じ。西北に浮雲（自ら喩ふ）あり。依託する所なくして其形車蓋を張れるが如し。たまたま飄風（離間する人に喩ふ）に遇ひ、吹かれて南方吳地に至る。（泰伯の逃れて吳に至り、弟季歷に天下を讓りし故事に倣はんとせるに喩ふ）然も吳會は我が故鄕にあらず、焉んぞ永く滯留するを得んや。身は棄置せられて客地に在り、常に人を畏れて惴惴たるのみ。

【八】亭亭。廻遠して依る所なき貌。

【九】吳會。吳郡と會稽郡とをいふ。

【一〇】棄置。己の棄て置かるること。

【一一】客子。旅客なり、文帝自ら謂ふ。

朔風の詩

曹子建

彼の(一)朔風を仰ぎ、用て(二)魏都を懷ふ。願くは(三)代馬を騁せ、倏忽として北に徂かん。(四)凱風永く至り、彼の(五)蠻方を思ふ。願くは(六)越鳥に隨ひ、翻飛して南に翔らん。(七)四氣代謝し、(八)懸景運周す。別(九)俯仰の如く、脫ち(一〇)三秋の若し。昔我れ初めて遷りしとき、(一一)朱華未だ希ならず。今我れ旋り止れば、(一二)素雪云に飛ぶ。俯して(一三)千仞に降り、仰いで(一四)天阻に登り、(一五)風飄蓬飛し、載ち寒暑に離ふ。千仞は陟り易く、天阻は越ゆべし。昔我が(一六)同袍、今永く乖き別れぬ。(一七)子は芳草を好む。豈爾に貽るを忘れんや。(一八)繁華將に茂らんとし、(一九)秋霜之を悴らす。君眷を垂れざるは、豈其の誠なりと云はんや。(二〇)秋蘭喩ふべく、桂樹冬榮く。絃歌思を蕩すも、誰と與にか憂

【一】朔風。北風なり。
【二】魏都。鄴都なり、今の河南臨漳縣。
【三】代馬。代は北方の郡名、代郡に產する馬。
【四】凱風。南風なり。
【五】蠻方。南國なり、東阿を指す、東阿は魏都の南に在り。
【六】越鳥。南方越國に產する鳥。
【七】四氣。四時なり。代謝は往來すること。
【八】懸景。日月なり。
【九】俯仰。暫時なるをいふ。
【一〇】三秋。三年なり。
【一一】朱華。紅花なり。
【一二】素雪。白雪なり。
【一三】千仞。深谷なり。
【一四】天阻。高山なり。
【一五】風飄蓬飛。風の如く飄り蓬の如く飛ぶ。
【一六】同袍。文帝を指して言ふ。
【一七】子。文帝を指して言ふ。
【一八】繁華。己の忠心に喩ふ。
【一九】秋霜。讒人に喩ふ。
【二〇】秋蘭・桂樹。己に喩ふ。

を銷さん。川に臨んで暮に思ふも、何爲れぞ舟を泛べん。豈和樂なからんや、遊ぶこと我が（二）鄰にあらず。誰か舟を泛ぶるを忘れんや、愧らくは（三）榜人なきを。

【大意】久しく外に役し、將に藩邑（子建は文帝の弟にして東阿王に封ぜらる）に歸らんとし、途に在りて感懷を述べし詩なり。北風を仰いでは鄴都を慕ひ、代馬に跨りて北（鄴都）に行かんことを思ひ、南風に遇ひては南國（東阿を指す）を慕ひ、越鳥に隨つて南に行かんことを思ふ。歲月は移り易く、藩を去りて暫くなるも、既に三年を經たるの思あり。嘗て征途に上りし時は、花未だ凋まざりしに、今歸途に就けば白雪紛紛たり。山路險難にして寒暑を冒して進む。險路は過ぎ易きも、君（文帝）と我との乖離は耐ふべからず。君もと賢臣を好めり、我亦君恩に報いんことを思ふ。精忠を盡さんとすれば、讒人ありて之を間つ。然れども君の我を眷愛せざるの君の本心にあらざるは、我よく之を知れり。故に事功を晩年に建て、君の恩に報いんと期す。今や絃歌の以て憂を銷すなきにあらざれども、誰と與にか之を樂まん。川に臨んで濟らんと思へども、何を以て舟を泛べん。樂遊するも吾が親にあらず、舟を泛べんとするも舟人なし。（君に親まんと欲すれども、良友の調護する者なきに喩ふ）獨り自ら愧づるのみ。

【二】鄰。親といふが如し。
【三】榜人。舟人なり、己を調護する良友に喩ふ。

雜詩六首

曹子建

(一)高臺悲風多く、(二)朝日北林を照す。(三)之子萬里に在り、江湖迥に且つ深し。舟を方ぶるも安んぞ極るべき、離思故に任へ難し。孤鴈飛んで南に遊び、庭を過ぎて長く哀吟す。思を翹げて(四)遠人を慕ふ。願くは(五)遺音を託せんと欲す。形影忽ち見えず、(六)翩翩として我が心を傷ましむ。

【一】高臺。京師に喩ふ。悲風多しとは氣象愁慘なるをいふ。

【二】朝日。文帝に喩ふ。北林を照すは小人を任用するをいふ。

【三】之子。子建自ら謂ふ。

【四】遠人。遠方に居る人、文帝を指す。

【五】遺音。傳言といふが如し。

【六】翩翩。飛ぶ貌。

【大意】忠を抱きて忌まれ、君に近づくを得ざるを傷む詩なり。京師を望めば氣象愁慘にして、君正に小人を任用す。是を以て我れ放たれて藩國（鄄城）に在り、江湖遠く且つ深し。舟を方ぶるも渡るを得ず、獨り離別を悲むのみ。時に孤鴈あり、來りて我が庭に鳴く。我之を見て坐に君を思ひ、書信を託せんと欲すれば、忽ち去りて其影を留めず。悵然として心を傷ましめぬ。

(七)轉蓬本根を離れ、(八)飄颻して長風に隨ふ。何ぞ意はん(九)廻飆擧り、(一〇)我を吹いて雲中に入れ

【七】轉蓬。風に吹かれて飛ぶ蓬。

【八】飄颻。風にひろがへること。

んとは。高高として上りて極なし。天路安んぞ窮むべけんや。類す此の（一一）游客の子、軀を捐てて遠く（一二）戎に從ひ、（一三）毛褐形を掩はず、（一四）薇藿常に充たざるに。去り去りて復た道ふこと莫けん、沈憂人をして老いしむ。

【大意】己の遷徙常なく甚だ貧困なるを傷むなり。轉蓬風に隨つて飜り高く雲中に至る。何ぞ我の遠く軍役に從ひ（託言なり事實にあらず）衣食常に足らざると相似たるや。然れども飢寒困窮を訴ふるも益なし。ただ帝京を去りて復た言ふことなからん。憂は人をして老いしむるのみ。

西北に織婦あり、（一五）綺縞何ぞ繽紛たる。（一六）明晨機杼を乘り、日昃くも文を成さず。太息して長夜を終へ、悲嘯して青雲に入る。妾が身空閨を守り、（一七）良人行いて軍に從ふ。自ら期す三年にして歸らんと。今已に（一八）九春を歷たり。飛鳥樹を繞りて翔り、（一九）嗷嗷として鳴いて羣を索む。願くは南流の（二〇）景となり、光を馳せて我が君を見ん。

【大意】西北に織婦あり。常に白絹を織る。然も愁思多くして心亂れ、早朝機杼を執りて夕に至るも竟に文章を成す能はず。ただ太息して天に向ひ獨り悲嘯するのみ。因つて曰く妾は空閨を守り、

【九】廻飈。旋風なり。
【一〇】我。蓬をいふなり。
【一一】游客の子。子建自ら謂ふ。
【一二】戎。軍役なり。
【一三】毛褐。粗服なり。
【一四】薇藿。野菜の名。
【一五】綺縞。白絹なり。繽紛は多き貌。
【一六】明晨。朝なり。
【一七】良人。夫なり。
【一八】九春。一年に三春あり、故に三年を九春といふ。
【一九】嗷嗷。鳥の鳴く聲。
【二〇】景。日なり。

夫は軍に從ふ。夫去るとき三年にして歸らんと約し、今既に其期に滿てるも、尚ほ未だ歸らず。彼の飛鳥すら友を求めて鳴けり、況んや人に於てをや。願くは日景となり、光を馳せて夫を見んことをと。

南國に佳人あり、(二一)容華桃李の若し。朝に江の北岸に游び、夕に(二二)瀟湘の沚に宿す。時俗(二三)朱顏を薄んず、誰が爲にか(二四)皓齒を發かん。(二五)俛仰して歲將に暮れんとす、(二六)榮耀久しく恃み難し。

【大意】江南に美女あり、美貌桃李の花の如し。朝夕江畔に行遊す。然も時俗その美貌を尙ばざるを以て、之と言笑するに由なし。惜いかな歲月過ぎ易く、美貌亦衰へんとす。是れ誠に慨すべきなり。此首己の徒に偉才を抱き屢ゝ藩邑を移され、人の調護するなくして、年將に老いんとするを傷むものの如し。

(二七)僕夫早く駕を嚴めよ、吾將に遠く行きて游ばんとす。遠く游んで何に之かんと欲する。吳國我が仇たり。將に萬里の塗に騁せんとす。(二八)東路安んぞ由るに足らん。(二九)江介悲風多く、(三〇)淮泗急流を馳す。願くは一たび輕く濟らんと欲すれども、惜しい哉(三一)方舟なし。閑居は

【二一】容華。美貌なり。
【二二】瀟湘。江南の川の名。
【二三】朱顏。紅顏なり。
【二四】皓齒。白き齒。
【二五】俛仰。俯仰に同じ。
【二六】榮耀。美容なり。
【二七】僕夫。車を御する人。
【二八】東路。江東なる吳に行く道。
【二九】江介。江間といふが如し。
【三〇】淮泗。二川の名。江蘇地方を指す。
【三一】方舟。駢舟なり。

吾が志にあらず、(三二)甘心して國憂に赴かん。

【大意】僕夫早く駕を用意せよ。吾將に行きて吳を伐たんとす。國家當に萬里の外に土宇を開かんとす。吳地の近き之に行くは易易たるのみ。行きて淮泗長江の間に至れば、悲風吹き急流馳せ、一擧して濟らんとするも舟船なし。然りと雖も、閑居は我が志にあらず。自ら行きて國憂を除かんのみ。

(三三)飛觀百餘尺、牖に臨んで(三四)欞軒に御る。遠望千里に周く、朝夕平原を見る。烈士は悲心多く、小人は自閑を偸む。(三五)國讎亮に塞がらず、甘心して元を喪はんことを思ふ。劍を拊でて西南を望み、(三六)泰山に赴かんと思欲す。絃急にして悲聲發す。我が慷慨の言を聆け。

【大意】高樓高きこと百餘尺なり。我れ此樓に登り欄に憑りて四方を望む。夫れ烈士は國の未だ安からざるを見て常に悲心多く、小人は唯身の安逸を貪りて成す所なし。今や國讎未だ滅びず、我れ一身を抛ちて之を滅さん。因つて劍を撫して西南を望み、更に轉じて東方を望み、行いて將に之を征せんとす。我が情切にして聲悲し。人當に我が歎言を聽くべし。

【三二】甘心。自ら好んで。
【三三】飛觀。高樓なり。
【三四】欞軒。欄干なり。
【三五】國讎。國家の仇。塞は滅なり。
【三六】泰山。山東省にある山の名。

情詩　曹子建

(一)微陰陽景を翳ひ、(二)清風我が衣を飄す。(三)游魚綠水に潛み、翔鳥天に薄りて飛ぶ。(四)眇眇たる客行の士、遙役して歸るを得ず。始め出でしとき嚴霜結び、今來れば白露晞く。游子は(五)黍離を歎じ、處る者は(六)式微を歌ふ。慷慨して(七)嘉賓に對し、悽愴して內に傷悲す。

【大意】今や佞臣君明を蔽ひ、敎令嚴にして征役多く、小人各〻其志を得たり。我れ獨り行役して歸るを得ず、時を經ること既に久し。役に從ふ者は戰苦を歎き、國に留る者は歸らざるを悲む。我れ乃ち良友と相對し、國政の否なるを嘆く。

【一】微陰。讒人に喩ふ。陽景は日なり。君に喩ふ。
【二】清風。敎令に喩ふ。
【三】游魚、翔鳥。佞人の時を得たるに喩ふ。
【四】眇眇。遠き貌。客行の士は子建自ら謂ふ。
【五】黍離。行役の難を歌へる詩。
【六】式微。行役して歸らざるを刺れる詩。
【七】嘉賓。良友なり。

雜詩　嵆叔夜

微風淸く扇ぎ、雲氣四に除る。(一)皎皎たる亮月、(二)高隅に麗けり。輿つて公

【一】皎皎。月の明なる貌。亮月は明月。
【二】高隅。高城の一角。

子に命じ、手を攜へて車を同うす。(三)龍驤翼翼として、鑣を揚げて(四)踟蹰す。(五)肅肅として宵征き、我が友の廬に造る。光燈輝を吐き、(六)華幔長く舒ぶ。(七)鸞觴醴を酌み、神鼎魚を烹る。絃は(八)子野に超え、(九)歎は緜駒に過ぐ。(一〇)太素を流詠し、俯して(一一)玄虛を讃す。孰か克く英賢なる、爾と符を剖かん。

【大意】微風吹きて雲散じ、明月高く城角に懸れり。因つて起ちて公子と共に馬車に乗り、行きて吾友の草廬を訪へば、燈火明光を吐き幔帷長く垂る。卽ち酒を酌み魚を烹、絃歌を奏すれば、琴は子野よりも巧に、歌は緜駒に勝れり。かくて詠歌して虛無自然の道を樂めり。世に英賢の士あらば、共に此樂を同うせん。

【三】龍驤。駿馬なり。翼翼は飛ぶ貌。
【四】踟蹰。緩く行くこと。
【五】肅肅。靜に行く貌。
【六】華幔。美しき帳帷。
【七】鸞觴。杯なり。
【八】子野。師曠、字は子野。古の琴に巧なる人。
【九】歎。歌なり。緜駒は古の歌に巧なる人。
【一〇】太素。虛無の道なり。
【一一】玄虛。太素に同じ。

雜詩　(一)傅休奕

志士は日の短きを惜み、愁人は夜の長きを知る。
衣を攝げて前庭を歩し、仰いで南鴈の翔るを觀

【一】傅休奕。傅玄、字は休奕。晉の北地の人。

る。(二)玄景形に隨つて運り、流響空房に歸す。淸風何ぞ(三)飄飆たる、微月西方に出づ。繁星靑天に依り、(四)列宿自ら行を成す。蟬は高樹の間に鳴き、野鳥東廂に號く。(五)纖雲時に髣髴たり、(六)渥露我が裳を霑す。良時景を停むるなく、北斗忽ち低昂す。常に恐る寒節至り、凝氣結んで霜とならんことを。落葉風に隨つて摧け、一絶(七)流光の如し。

【大意】我れ愁へて眠る能はず寢衣を攝げて前庭を歩し、南飛の鴈を見る。其影忽ち雲中に消え、其聲ただ風に隨つて虛室に聞ゆ。淸風吹いて微月西天に懸り、列星靑天に布列し、鳥蟬樹間に鳴き、雲露我が衣を沾す。良時久しく留まらず、北斗忽ち廻轉す。恐らくは寒節至りて遂に霜を結び、落葉風に隨つて散じ去ること、彼の月光の流沒するが如くならんことを。

【二】玄景。鴈の黑き影。
【三】飄飆。風の吹く貌。
【四】列宿。二十八宿の星。行は行列。
【五】纖雲。輕雲なり。髣髴は分明ならざる貌。
【六】渥露。濃き露。
【七】流光。月をいふ。

雜詩　張茂先

(一)晷度天に隨つて運り、四時互に相承け、(二)東壁正に昏に中し、(三)固陰寒節升る。繁霜(四)當夕に降り、悲風中夜に興る。(五)朱火靑くして光なく、(六)蘭

【一】晷度。日景なり。
【二】東壁。星の名、禮記に「仲冬の月、昏に東壁中す」とあり、夕暮に正南に現はるるを中すといふ。
【三】固陰。陰氣の結ぶこと。
【四】當夕。日暮なり。
【五】朱火。燈火なり。

膏坐ながら自ら凝る。衾を重ぬるも暖氣なく、纊を挾むも冰を懷けるが如し。枕に伏して(七)遙昔を終へ、(八)寤言するも予に應ふるなし。永く思ひて(九)崇替を慮り、慨然として獨り膺を撫づ。

【大意】天運循環して四時代謝し、今や東壁星天に中する仲冬の時節となり、風霜嚴厲にして燈火光なく、燈油忽ち凍り、衾を重ぬるも寒に耐へず、獨り枕に伏して長夜を過ぎ、覺めて語るも應答する者なし。因つて人事の興廢を感じ、慨然として胸を打ちぬ。

【六】蘭膏。燈油なり。
【七】遙昔。長夜なり。
【八】寤言。覺めて語ること。
【九】崇替。興廢盛衰なり。

情詩二首　張茂先

清風帷簾を動かし、(一)晨月幽房を照す。(二)佳人遐遠に處り、蘭室(三)容光なし。(四)襟懷虛景を擁し、輕衾空牀を覆ふ。歡に居ては夜の促きを悁り、感に在りては宵の長きを怨む。枕を拊ちて獨り嘯歎し、感慨して心內に傷む。

【大意】此れ閨情の詩なり。清風帷帳を動かし、明月幽閨を照し、我が情思をそそること急なり。夫は遠地に客遊して今閨中に在らず。ただ心中に虛影を抱き、輕衾を以て空牀を蔽ふのみ。嘗て歡を共にせし時は、

【一】晨月。夜の將に明けんとする頃の月。
【二】佳人。夫をいふ、遐遠は遠地なり。
【三】容光。夫の姿なり。
【四】襟懷。心中なり。

夜の短きを惜みたるに、今や却つて夜の長きを怨み、胸を拊つて獨り歎嘯するのみ。目を(五)四野の外に遊ばしめ、逍遙して獨り(六)延佇す。(七)蘭蕙清渠に緣り、(八)繁華綠渚を蔭ふ。(九)佳人茲に在らず、此を取りて誰にか與へんと欲する。巣居しては風の寒きを知り、穴處しては陰雨を識る。曾て遠く別離せずんば、安んぞ(一〇)儔侶を慕ふを知らんや。

【大意】此れ亦夫を戀ふる詩なり。獨り野外に出でて逍遙すれば、香草清渠の邊に生じ、美花綠渚を掩へり。吾が夫は遠く客遊して在らざれば、此花を採るも贈るべき人なし。それ巣居の鳥は風の寒きを知り、穴居の蟲は陰雨の來るを知る。人も亦然り、別離の經驗なき者は焉んぞ戀情の憂を知らんや。

【五】四野。四方の野邊。
【六】延佇。留まりたたずむこと。
【七】蘭蕙。香草の名。清渠は清き溝。
【八】繁華。しげき花。
【九】佳人。夫をいふ。
【一〇】儔侶。夫を指して言ふ。

(一)園葵の詩　陸士衡

(二)葵を北園の中に種う。葵生じ鬱として(三)萋萋たり。(四)朝榮

【一】園葵。趙王倫位を簒ひて晉の惠帝を金墉城に遷す、後諸王共に倫を誅し帝を位に復す。齊王冏、士衡倫の爲に禪文を作ると譖す、成都王穎之を救ひしに賴り死を免るるを得たり、故に此詩を作り葵を以て自ら喩へ、穎に謝せしなり。
【二】葵。其花は常に日に向ふ。
【三】萋萋。茂る貌。

東北に傾き、(五)夕穎西南に晞く。(六)零露鮮澤を垂れ、朗月其輝を耀かす。時逝いて(七)柔風戢り、歳暮れて(八)商猋飛ぶ。(九)曾雲溫液なく、嚴霜凝威あり。幸に(一〇)高墉の德を蒙り、(一一)玄景素蕤を蔭ふ。(一二)豐條春に竝びて盛に、落葉秋に後れて衰ふ。彼の(一三)晩彫の福を慶び、此の孤生の悲を忘る。

【四】朝榮。朝咲く花。
【五】夕穎。夕に咲く花。
【六】零露。落つる露。
【七】柔風。春風なり。

【八】商猋。秋風なり。
【九】曾雲。重雲なり。溫液は潤雨なり。
【一〇】高墉。高き墻。

【一一】玄景。墻の黑き影。素蕤は白き花。
【一二】豐條。太き枝。
【一三】晩彫。後れて凋むこと。

【大意】葵を北園の中に植ゑしが、萋萋として繁茂し、朝夕その花を開いて日に向へり。(己の吳滅びて後來りて晉に仕へ、常に忠義の心を失はざるに喩ふ)乃ち露は鮮澤を垂れて之を潤し、月は淸光を舒べて之を照せり。(君恩の己に及べるに喩ふ)嘗て春風絶えて秋風來り、重雲雨なく、嚴霜威を逞うするや、(己の吳に在りて苦みしに喩ふ)幸に高墻の庇蔭を受け、(晉室の恩を蒙りしに喩ふ)春盛の時に隨つて盛え、凋落の秋に後れて凋むを得、心に晩凋を喜んで幸となし、孤生の悲を忘れつつあり。

友人を思ふ詩

(一)曹　顏　遠

【一】曹顏遠。曹攄、字は顏遠、晉の譙國の人。

密雲(二)陽景を翳ひ、(三)霖潦庭除を淹す。嚴霜翠草を彫ましめ、寒風(四)纖枯を振ふ。(五)凜凜として天氣淸く、落落として(六)卉木疎なり。時に感じて(七)蟋蟀を歌ひ、賢を思ひて(八)白駒を詠ず。情は玄陰に隨ひて滯り、心は(九)廻飄と倶なり。思心何の懷ふ所ぞ、我が(一〇)歐陽子を懷ふ。精義神奧を測り、淸機妙理を發す。我が(一一)旬朔を別れしより、(一二)微言耳に絕ゆ。(一三)裳を褰ぐること難しとするに足らざるも、(一四)淸揚未だ俟つべからず。首を延べて階檐を出で、佇立して增〻似たるを想ふ。

【大意】これ友人歐陽建を思ふ詩なり。密雲日を掩ひて霽れず。淫雨庭階を沾し、風霜枯葉を振ひ、天寒くして草木稀疎なり。因つて時物の變に感じて蟋蟀の詩を歌ひ、賢者を思ひて白駒の詩を誦すれば、情結んで黑雲に似、心飛んで旋風の如し。我が思ふ所は他にあらず、卽ち歐陽子を思ふなり。歐陽子は精義よく鬼神の深奧を測り、淸機よく神妙の理を剖つの賢士なり。我れ暫時彼と別れしより、また其微言を聽く能はず。彼れ溱水を涉りて來ること難きにあらざるも、彼

【二】陽景。日なり。
【三】霖潦。ながあめ。庭除は庭階。
【四】纖枯。細き枯木。
【五】凜凜。寒き貌。
【六】卉木。草木なり。
【七】蟋蟀。詩經の篇の名、歲の暮るゝを感ずる詩なり。
【八】白駒。詩經の篇の名、賢人を思ふ詩なり。
【九】廻飄。旋風なり。
【一〇】歐陽子。歐陽建、字は堅石。
【一一】旬朔。十日を旬といひ、月の初を朔といふ、暫時といふが如し。
【一二】微言。微妙の言。
【一三】裳を褰ぐ。詩經に「子我を惠思せば、裳を褰げて溱を涉れ」とあり。
【一四】淸揚。眉目なり。

の眉目待ちて之を見るべからず。因つて階檐を出でて遙に望み、彼を思ふこと切にして、彼を見ざればその似たる人を見て甘心せんと欲す。

感舊の詩

曹顔遠

富貴なれば他人も合ひ、貧賤なれば親戚も離る。(一)廉藺門軌を易へ、(二)田竇相奪移す。(三)晨風茂林に集り、棲鳥枯枝を去る。今我れ唯困蒙す、(四)郡士背馳する所なり。鄕人(五)懿義を敦うし、(六)濟濟として光儀を蔭す。(七)賓に對して(八)有客を頌し、觴を擧げて(九)露斯を詠ず。樂に臨んで何の歎ずる所ぞ、(一〇)素絲と(一一)路岐と。

【大意】　富貴なれば他人も來り就き、貧賤なれば親戚も背き去るは、世の常情なり。されば廉頗の勢を失ふや、賓客皆藺相如の

【一】廉藺。廉頗の權を失ふや門下の賓客皆藺相如の門を望む、後位に復するや門客また來る。

【二】田竇。漢の竇太后怒りて丞相竇嬰、太尉田蚡を免ず、嬰蚡侯を以て家に居る、蚡職に任ぜずと雖太后の故を以て親幸せられ、しばしば事を言ひ効多し、士の勢利に趨く者皆嬰を去りて蚡に歸す。

【三】晨風。鶚なり。

【四】郡士。一本に羣士に作る。

【五】懿義。美義なり。

【六】濟濟。衆盛の貌。

【七】賓。客なり、顔遠自ら謂ふ。

【八】有客。詩經の篇の名、「客あり宿宿し、客あり信信す、言に之に縶を授け、以て其馬を縶がん」とあり。

【九】露斯。詩經の篇の名、「湛湛たる露斯、陽に匪れば晞かず、厭厭たる夜飮、醉はずんば歸るなかれ」とあり。

【一〇】素絲。白き絲、墨子は素絲を見て泣けり、その以て黃にすべく以て黑にすべきを以てなり。

【一一】路岐。わかれ道、楊子は

門に趨り、竇嬰の權を失ふや、人皆田蚡に歸す。鳥も亦人に同じく、茂林には鵲集り、棲鳥も枯枝を去る。今我れ困蒙なるを以て、衆士に背馳せらるるも亦宜なり。獨り鄕人は美義を重んじ、我に假すに光儀を以てし、酒杯を擧げて我を饗す。これ俗情に勝ること遠しと謂ふべし。吾が歎ずる所は、彼の貧富貴賤によりて去就を異にするに在り。

路歧を見て泣けり、以て南すべく以て北すべきを以てなり。

雜詩　　何敬祖

秋風夕に乘じて起り、明月高樹を照す。(一)閑房淸風來り、廣庭(二)暉素を發す。靜寂にして(三)愴然として歎き、惆悵として出でて游顧す。仰いで垣上の草を視、俯して階下の露を察る。心虛うして體自ら輕く、(四)飄颻として仙步の若し。彼の陵上の栢を瞻、神人と遇はんことを想ふ。道深くして期すべきこと難く、精微慕ふ所にあらず。思を勤めて(五)遙夕を終へ、言を永うして情慮を寫く。

【大意】秋風夕に起り、明月高樹を照し、淸風閑室に入り、月色空庭に滿つ。閑夜友なく愀然として戶を出でて顧望し、俯仰して草露を見、乃ち虛無の理を悟り、身の

【一】閑房。閑室なり。
【二】暉素。月色なり。
【三】愴然。愁ふる貌。
【四】飄颻。輕步の貌。
【五】遙夕。長夜なり。

輕きこと飛仙の如きを覺ゆ。轉じて丘上の柏の、寒に耐へて凋まざるを見、神仙と遇合して長生を求めんことを思ふ。然も仙道は深遠精微にして、容易に希ふべからず。因つて沈思して長夜を過ぎ、詠歌して情思を舒ぶ。

雜詩　(一)王正長

(二)朔風秋草を動かせば、(三)邊馬歸心あり。胡寧ぞ
久しく(四)分析し、(五)靡靡として忽ち今に至る。
王事我が志に離り、(六)殊隔して商參に過ぐ。
昔往くとき(七)鶬鶊鳴き、今來るとき(八)蟋蟀吟ず。
人情舊鄉を懷ひ、客鳥故林を思ふ。(九)師涓久し
く奏せず、誰か能く我が心を宣べん。

【大意】北風の秋草を拂ふを見ては、胡馬忽ち北歸の心を起す。況んや人に於てをや。我れ久しく親舊に離れて官遊し、遲遲として今

【一】王正長。王讚、字は正長、晉の義陽の人。
【二】朔風。北風なり。
【三】邊馬。北方胡地に產せる馬。
【四】分析。親舊に離るること。
【五】靡靡。漸進の貌。遲遲といふが如し。
【六】殊隔。離隔なり。商參は二星の名、この二星常に相隔りて會ふことなし。
【七】鶬鶊。鶯なり。
【八】蟋蟀。こほろぎ。
【九】師涓。古の喜く琴を鼓せし人の名。韓非子に「衞の靈公新聲を鼓する者あるを聞きて之を悅び、師涓を召して曰く、新聲を鼓する者あり、其狀鬼神に似たり、子我が爲に聽きて之を寫せと。師涓曰く諾と。因つて端坐し琴を撫して之を寫す。明日報じて曰く、臣之を得たりと」とあり。

日に至れり。是れ皆王事に志すの致す所にして、遂に此の離居をなしぬ。昔郷を出づる時は春なりしも、今や既に秋となれり。人の故郷を思ふは猶ほ鳥の舊林を戀ふが如し。我が心は師涓の如き明察の士にあらずんば知り難し。願くは師涓の如き人あり、我が心を宣通せんことを。

雜詩　(一)棗道彥

(二)吳寇未だ殄滅せず、亂象(三)邊疆を侵す。天子(四)上宰に命じ、漢陽に(五)蕃たらしむ。國を開いて(六)元士を建て、(七)玉帛賢良を聘す。予は(八)荊山の璞にあらず、謬りて和氏の場に登る。羊質にして虎文を服し、燕翼にして鳳翔を假る。既に任ふる所にあらざるを懼れ、彼の南路の長きを怨む。千里既に(九)悠邈たり、(一〇)路次關梁を限る。(一一)僕夫遠涉に罷れ、車駕山岡に困む。深谷下底なく、高巖(一二)穹蒼に曁ぶ。豐草滋潤を停め、霧露衣裳を沾す。(一三)玄林陰氣を結び、風ふかずして自ら寒涼なり。顧瞻して情感切に、(一四)惻愴

【一】棗道彥。名は據、字は道彥、晉の潁川の人、太尉賈充征吳都督となるや、辟して從事中郎となす。
【二】吳寇。吳主孫權。
【三】邊疆。晉の國境。
【四】上宰。宰相賈充を指す。
【五】蕃。藩に通ず、國家の藩屛とすること。
【六】元士。善士なり。
【七】玉帛。玉と絹、賢を聘する禮物。
【八】荊山。楚山なり。韓非子に「楚人和氏璞玉を楚山の中に得たり」とあり。
【九】悠邈。遠きこと。
【一〇】路次。途中なり。關梁は關所及び橋。

して心哀傷す。士生れて則ち弧を懸く、事あり四方に在り。安んぞ恆に逍遙するを得、端坐して閨房を守らん。義を引いて外情を割く。內感實に忘れ難し。

【一】僕夫。御者なり。
【二】穹蒼。天なり。
【三】玄竹。暗林なり。
【四】惻愴。悲痛なり。

【大意】吳寇未だ滅亡せず、來りて我が邊境を侵す。天子乃ち賈太尉に命じ、漢陽に都督たらしむ。太尉因つて國を開きて善士を招き、玉帛を厚くして賢良を聘す。我れ不才にして謬りて登庸せられしも、羊にして虎皮を被り、燕にして鳳翔に倣はんとするが如し。常に重任に耐へざるを懼る。況んや道遠くして關橋の隔あり、谷深く巖高く、草に潤澤なく、衣は毒霧に沾ひ、林暗くして風寒きをや。心之が爲に益ゝ悲傷す。然れども士生れて弓を門左に懸け、志四方に在るを示す。何ぞ安閑として閨房の樂に耽るを得んや。ただ道義を引いて外情を抑ふ。然も心中の離情亦忘れ難きものあり。

雜詩　左太沖

秋風何ぞ(一)洌洌たる、白露朝霜をなす。(二)柔條旦夕に勁く、綠葉日夜に黃なり。明月(三)雲崖を

【一】洌洌。寒き貌。
【二】柔條。柔き枝。
【三】雲崖。雲畔といふが如し。

出で、(四)皦皦として素光を流す。軒を披いて前庭に臨めば、(五)嗷嗷として晨鴈翔る。高志四海を局とし、(六)塊然として空堂を守る。(七)壯齒愜に居らず、(八)歳暮常に慷慨す。

【大意】此れ壯志の展ぶるを得ざるを傷む詩なり。今や寒風霜露の秋となり、條勁く葉黃ばみ、明月雲端に出で、鴻鴈南に飛ぶ。此景を觀て豈感なきを得んや。我れ壯志を抱き、天下を以て局小となし、終に志を遂げずして獨り空室を守る。然るに少壯幾時ならずして過ぎ、今衰老に至りて徒に慷慨するのみ。

【四】皦皦。明なる貌。素光は白き光。
【五】嗷嗷。鴈の聲。
【六】塊然。獨居の貌。
【七】壯齒。少壯の年。
【八】歳暮。老年なり。

雑詩　(一)張季鷹

暮春(二)和風應じ、白日園林を照す。(三)青條揔翠の若く、(四)黃花散金の如し。(五)嘉卉亮に觀あり、顧ふに此れ久しく耽り難し。頸を延ぶるも良塗なく、足を頓めて(七)幽深に託す。榮と壯と倶

【一】張季鷹。張翰、字は季鷹、晉の呉郡の人。
【二】和風應ず。時節に應じて和風の吹くこと。
【三】青條。青葉の茂れる枝。揔翠は翡翠の羽を聚めたること。
【四】黃花。菜の花。
【五】嘉卉。よき草。觀は好觀なり。

に去り、賤と老と相尋ぬ。歡樂顏を照さず、（八）慘愴して謳吟を發す。謳吟するも何ぞ嗟及ばん、古人心を慰むべし。

【大意】此れ老大の歡樂すくなきを傷むなり。和風時に應じて吹き、白日園林を照し、枝葉綠を疊み、榮花黃金の如し。この好觀ありと雖も、榮あれば必ず衰あり、久しく之を樂み難し。故に出遊せんとするも良途なく、退いて陋巷の中に伏するのみ。人も亦然り、榮と壯と忽ち去り、賤と老と相尋いで來り、顏に歡樂の色なく、悲傷して詠歌す。然れども徒に悲むも亦益なし。ただ貧賤に甘んじ天命を樂める古人を思ひて、自ら慰むべきのみ。

【六】良塗。よき道、官途に喩ふ。

【七】幽深。陋巷といふが如し。

【八】慘愴。悲傷なり。謳吟は歌なり。

雜詩十首　張景陽

秋夜涼風起り、淸氣（一）暄濁を蕩す。（二）蜻蛚階下に吟じ、（三）飛蛾明燭を拂ふ。（四）君子遠役に從ひ、（五）佳人煢獨を守る。離居幾何時ぞ、（六）燧を鑽りて忽ち木を改む。（七）房櫳行迹なく、庭草（八）萋とし

【一】暄濁。暖く汙れたる氣。蕩は洗ふこと。

【二】蜻蛚。蟋蟀なり。

【三】飛蛾。蛾は好んで燈火に集る。

【四】君子。夫をいふ。

【五】佳人。婦人なり。煢獨は孤獨。

【六】燧を鑽り。燧は火なり。火を鑽るの木を改むとは久し

て以て綠なり。靑苔空牆に依り、蜘蛛四屋に網す。物に感じて懷ふ所多く、沈憂（九）心曲に結ぶ。

【大意】閨怨の詩なり。秋風起りて溽熱の氣を一洗し、蟋蟀階下に鳴き飛蛾燈火に集る。時に夫は遠征して在らず。其妻獨り空閨を守る。夫去りて既に久しく、室に影なく庭に跡なく、靑苔牆を侵し蜘網四檐に張る。此景を見て感を起し、深憂胸に滿つ。

（一〇）大火坤維に流れ、白日（一一）西陸に馳す。（一二）浮陽翠林に映じ、（一三）廻猋綠竹を扇ぐ。飛雨朝蘭に灑ぎ、輕露叢菊に栖まる。龍蟄して（一四）喧氣凝り、天高くして萬物肅る。（一五）弱條重ねて結ばず、（一六）芳蕤豈再び馥しからんや。人（一七）瀛海の內に生れ、忽たること鳥の目を過ぐるが如し。川上に逝くを歎じ、（一八）前脩以て自ら勗む。

【大意】心星西南に下り、天日西陸を行くの秋となれば、風日翠綠の林を照し、雨露蘭菊の叢に降り、暖氣凝りて肅殺の氣天地に滿ち、枝枯れて華落つ。人の海內に生るるも亦此の如し。死生の疾かなること、鳥の目前を過ぐるが如し。

きを經たるをいふ。

【七】房櫳。櫳は窓なり。房室といふが如し。行迹は足跡。

【八】萋。茂る貌。

【九】心曲。心の底。

【一〇】大火。心星なり。坤維は西南隅。七月には大火西南に見ゆ。

【一一】西陸。續漢書に、「日西陸を行く之を秋といふ」とあり。

【一二】浮陽。日光なり。

【一三】廻猋。旋風なり。

【一四】喧氣。暖氣なり。

【一五】弱條。わかき枝。

【一六】芳蕤。芳ばしき花。

【一七】瀛海。大海なり。

【一八】前脩。古の賢人。

孔子の川上に於て、逝く者は斯の如し、晝夜を舍かずと長嘆し、自ら奮勉せるは卽ち此が爲なり。
(一九)金風素節を扇ぎ、丹霞(二〇)陰期を啓く。騰雲涌煙に似、密雨散絲の如し。(二一)寒花黃采を發し、秋草(二二)綠滋を含む。閑居して萬物を玩び、羣を離れて思ふ所を戀ふ。(二三)案には蕭氏の牘なく、庭には(二四)貢公の綦なし。(二五)高尙にして王侯を遺れ、(二六)至人は物に嬰らず、道積りて自ら基を成す。餘風時を染むるに足れり。

【大意】己の隱棲の感を述べたる詩なり。秋風吹いて陰氣到り、白雲飛び密雨散じ、菊は黃花を開き草木潤澤あり。我れ閑居して此景を眺め、そぞろに友を思へども、机上に友の書信なく、庭に友の足跡なし。既に交友を絕ち、又自ら高尙にして王侯に仕へず、道を積んで身の基となす。夫れ達人は物に紛亂せられず、其餘風亦能く時人を感化するに足るものあり。

朝霞白日を迎へ、(二七)丹氣暘谷に臨む。(二八)翳翳として繁雲結び、(二九)森森として雨足散ず。輕風(三〇)

【一九】金風。秋風なり。素節は秋の氣節。
【二〇】陰期。陰の氣候。
【二一】寒花。菊なり。黃采は黃色。
【二二】綠滋。綠潤なり。
【二三】案。机なり。蕭氏は漢の蕭育なり、蕭育、朱博と友たり。己を朱博に喩へ、友を蕭育に喩へていへり。牘は書信。
【二四】貢公。漢の貢禹なり、王陽貢禹と友たり。喩意前に同じ。綦は行跡。
【二五】高尙。易經に「王侯に事へず其事を高尙にす」とあり。
【二六】至人。達人といふが如し。
【二七】丹氣。赤氣なり。暘谷は日の出づる處。
【二八】翳翳。雲の蒸す貌。
【二九】森森。雨の散する貌。

勁草を摧き、凝霜高木を竦す。密葉日夜に疎にして、叢林森として束ぬるが如し。疇昔は時の遲きを歎き、(三一)晩節には年の促るを悲む。(三二)歳暮れて百憂を懷き、將に(三三)季主に從つて卜せんとす。

【大意】衰老の嘆を述べし詩なり。秋日將に出でんとし、東方に赤氣あり。恰も出日を迎ふるが如し。忽ちにして重雲結び雨靡靡として濺ぎ、風霜草樹を枯らし、葉は日に疎にして梢森森然として束ねたるが如し。少時には歳時の來ること遲きを歎ぜしも、老年には其の去ること速なるを悲み、百憂交ゝ心に滿ち、季主の卜を請ひて身の吉凶を知らんと欲す。

昔我れ(三四)章甫を資し、聊か以て(三五)諸越に適く。行き行いて幽荒に入れば(三六)歐駱祝髮に從ふ。年を窮めて用ふる所にあらず、(三七)此貨將に安に設けんとする。(三八)瓴甋璵璠に夸り、(三九)魚目明月を笑ふ。見ずや(四〇)郢中の歌、(四一)能否居然として別るるを。(四二)陽春は和する者なく、(四三)巴人は皆

【三〇】勁草。强き草。

【三一】晩節。晩年なり。

【三二】歳暮。衰老をいふ。

【三三】季主。卜者の名、史記に「司馬季主は楚人なり、長安の東市に卜す」とあり。

【三四】章甫。冠の名、莊子に「宋人章甫を資して諸越に適く、越人は髮を斷ち身を文ぐ、之を用ふる所なし」とあり。章甫は以て明德に喩ふ。

【三五】諸越。越の國。流俗に喩ふ。

【三六】歐駱。越王の姓號。祝髮は斷髮。

【三七】此貨。此品、卽ち章甫。

【三八】瓴甋。瓦なり。璵璠は美玉。

【三九】魚目。魚の目玉。明月は寶珠なり。

【四〇】郢中の歌。郢は楚の都、戰國策に「宋玉曰く客郢中に歌ふ者あり、其始を下里巴人といふ、國中屬して和する者

下節なり。流俗多くは昏迷す、此理誰か能く察せん。

【大意】才を抱いて用ひられざるは、世に眞識なきに由るを述べ、以て自ら傷むなり。我れ章甫の冠を買入れ、之を賣らんとして越に往けり。（明德を積みて世に用ひられんことを冀へるに喩ふ）遠く國中に入れども、越人の風俗は斷髮にして冠を用ひず。故に終年の間一個も售れず。（時君の賢者を用ひざるに喩ふ）ああ我れ誤れり。今や世人は瓦を貴んで玉を賤み、魚目を賞して美珠を笑ふ。（時君の小人を以て賢となすに喩ふ）かの郢中の歌を見ずや、高尙なる調には和する者少く、卑俗なる調には和する者多し。賢者の用ひられずして、小人の貴ばるるは、古よりして然り。智識昏迷して是非顚到す。然も此理を悟る者なし。歎ずべきの至なり。

朝に（四四）魯陽關に登れば、狹路峭うして且つ深し。（四五）流澗萬餘丈、（四六）圍木數千尋。（四七）咆虎窮山に響き、鳴鶴空林に聒し。（四八）凄風我が爲に嘯き、（四九）百籟坐に自ら吟ず。物に感じて思情

數千人、其陽春白雪をなすや、國中屬して和する者數十人に過ぎず」とあり。

【四一】能否。善惡といふが如し。

【四二】陽春。高尙なる歌曲の名。

【四三】巴人。俗調の名、下節は俗調といふが如し。

【四四】魯陽關。關の名。

【四五】流澗。澗は溪谷。

【四六】圍木。合抱の木。

【四七】咆虎。ほゆる虎。

【四八】凄風。寒風なり。

【四九】百籟。大木の孔穴。風に激して聲をなすなり。

多く、險に在りて(五〇)常心を易ふ。(五一)朅來不虞を戒め、轡を挺りて(五二)飛岑を越ゆ。(五三)王陽九折に驅り、(五四)周文岑崟に走る。阻を經ては遲るなきを貴ぶ。此理(五五)來今に著る。

【大意】山路の險を述べて世路の險に喩ふ。魯陽關に登れば其路險にして狹く、溪谷深さ萬餘丈、大木高さ數千尋なり、虎吼え鶴鳴き風籟自ら鳴る。此險阻を見て感慨を催し、顚墜を恐れて恆心を失ひ、警戒して高山を越ゆ。昔王陽は馬を驅りて九折坂を去り、文王は殽の險を過ぐること風雨を避くるが如し。是れ顚墜を避くるの道なり。此道傳りて今に存せり。我又之に則り、顚墜の災を避けんとす。

此郷は吾が地にあらず、此郭は吾が城にあらず。(五六)羇旅して定心なく、(五七)翩翩として懸旌の如し。出でては軍馬の陣を觀、入りては(五八)鞞鼓の聲を聞く。常に懼る(五九)羽檄飛び、(六〇)神武一朝に征せん

【五〇】常心。恆心なり。

【五一】朅來。去り來ること。不虞は不測の險なり。

【五二】飛岑。高山なり。

【五三】王陽。漢書に「琅邪の王陽、益州刺史となり部をめぐりて九折坂に至り、嘆じて曰く先人の遺體を奉じ、奈何ぞ數〻此險に乘ぜんやと、病を以て去る」とあり。

【五四】周文。周の文王、公羊傳に「百里奚、蹇叔と其子を送り之を戒めて曰く、爾もし死せば、必ず殽の厥巖ならん、是れ文王の風雨を避けし所なり」とあり。何休註に「其處阻險也、故に文王之を過ぐれば驅馳して常に風雨を避くるが若し」とあり。岑崟は險阻の貌。

【五五】來今。今日なり。

【五六】羇旅。行旅なり。

【五七】翩翩。動搖する貌。

【五八】鞞鼓。鞞は小鼓。

【五九】羽檄。兵を徵す文書。

ことを。(六一)長鋏鞘中に鳴り、烽火(六二)邊亭に列る。我が(六三)衡門の衣を捨て、更に(六四)縵胡の纓を被る。疇昔微志を懷き、(六五)帷幕竊に經し所なり。何ぞ必しも干戈を操らん、堂上に奇兵あり。衝を(六六)樽俎の間に折き、勝を制するは(六七)兩楹に在り。巧遲は稱するに足らず、拙速乃ち名を垂る。

【大意】此れ從軍の詩なり。鄕里を離れて遠く邊城に在れば、心搖搖として旌の風に飜るが如く、常に軍馬の陣、鞞鼓の聲を見聞し、羽檄一たび飛んで天子の親征を見んことを懼る。寇敵將に至らんとすれば、長劍必ず鞘中に鳴り、烽火列りて遠近を警戒す。我れ既に野人の服を脫ざて軍裝をなせり。昔微志を抱きて籌を帷幄の中に運らせる經驗あり。何ぞ自ら干戈を執るをなさん。堂上に坐し奇策を以て敵を破るこそ卽ち奇兵なり。杯酒談笑の間に衝を折き勝を制するは戰の上乘なり。巧遲は稱するに足らず、拙速なれば勝を得て名を著すに足る。

(六八)述職して邊城に投り、(六九)戎旅の間に羈束せらる。車を下ること昨日の如きも(七〇)望舒四五

【六〇】神武。天子なり。
【六一】長鋏。劍の名。
【六二】邊亭。邊驛なり。
【六三】衡門。カブキ門なり、詩經に「衡門の下、以て棲遲すべし」とあり、故に隱者の服を衡門の衣といへり。
【六四】縵胡の纓。軍服なり。
【六五】帷幕。謀略を運らす所。
【六六】樽俎。樽は酒樽、俎は肉を盛る具、杯酒談笑の間といふが如し。
【六七】兩楹。賓主の位なり。
【六八】述職。諸侯の天子に朝すろをいふ。ここは單に職に供する意。
【六九】戎旅。軍隊なり。羈束は

たび圓なり。借問す此れ何の時ぞ、胡蝶南園に飛ぶ。流波舊浦を戀ひ、行雲故山を思ふ。(七一)閩越文蛇を衣、(七二)胡馬燕に渡らんことを願ふ。土風習ふ所に安んず。由來固に然るあり。

拘束なり。

【七〇】望舒。月をいふ。

【七一】閩越。南方の地名。文蛇は模様ある蛇。

【七二】胡馬。北方胡地に產せる馬。燕は北方の國の名。

【大意】遠く邊地に宦するを苦みて、故鄉を懷ふ詩なり。われ職を奉じて邊境に在り。常に軍隊の中に拘束せらる。著任せしは昨日の如くなるも、既に數月を經たり。況んや故鄉は今や胡蝶南園に飛ぶの好季なるをや。何ぞ之を懷はざるを得ん。夫れ流水は舊淵を戀ひ、行雲は舊山を思ひ、閩越の人は文蛇の皮を衣となし、胡馬は北風に向つて鳴く。是れ皆故鄉を懷へばなり。住み習へる處を懷ふは物の常情なり。

宇を窮岡の曲に結び、幽藪の陰に(七三)耦耕す。荒庭寂として以て閑なり、(七四)幽岫峭くして且つ深し。凄風東谷に起り、(七五)渰として南岑に興るあり。(七六)箕畢の期なしと雖も、(七七)膚寸にして自ら霖を成す。澤雉壟に登りて雊き、寒猨條を擁して吟す。磎壑人跡な

【七三】耦耕。耕作なり。

【七四】幽岫。幽遠の山。

【七五】渰。雲の起る貌。南岑は南方の山。

【七六】箕畢。二星の名。期は會なり。月と箕と會すれば風吹き、月と畢と會すれば雨ふる。

【七七】膚寸。膚は四指の幅、寸は一寸。公羊傳に「石に觸れて出で、膚寸にして合し、朝をへずして天下に徧きものは唯泰山の雲なり」とあり。

く、(七八)荒楚鬱として蕭森たり。耒を投じて(七九)岸垂に循ひ、時に(八〇)樵采の音を聞く。(八一)重基 志を擬すべく、迴淵心を比ぶべし。眞を養ふは無爲を尙び、(八二)道勝は陸沈を貴ぶ。思を(八三)竹素の園に游ばしめ、辭を(八四)翰墨の林に寄す。

【大意】己の隱居して道を樂むを述ぶ。われ屋宇を深山の隈に構へ、藪澤の間に耕作す。庭には草木自ら生じ、山は遠くして險なり。寒風東より來りて雲油然として起り、星月の會なきも膚寸にして忽ち風雨を成し、雉鳴き猨吟じ、人の來り訪ふなく、ただ草木の繁茂するあり。耒を投じ岸邊に沿ひ、行きて樵者の歌を聞く。山の高きは以て志を擬すべく、淵の深きは以て心を比ぶべし。天眞を養ふには無爲を尙び、道勝を得んと欲せば隱居に如くはなし。因つて古人の書を讀み、文筆を弄して山中に在り。

(八五)黑蜧重淵に躍り、
(八六)商羊野庭に儛ふ。
(八七)飛廉南箕に應じ、

霖は淫雨なり。

【七八】荒楚。草木の叢生する處、蕭森は茂る貌。

【七九】岸垂。岸邊なり。

【八〇】樵采。きこり。

【八一】重基。山をいふ。

【八二】道勝。道のすぐれたる者。陸沈は隱れて俗間にひそみ居ること。

【八三】竹素。典籍なり。

【八四】翰墨。筆墨なり。

【八五】黑蜧。黑蛇なり。淮南子に「犧牛は騂毛にして廟牲に宜しきも、其の雨を致すに於ては黑蜧に若かず」とあり。

【八六】商羊。鳥の名、孔子家語に「齊に一足の鳥あり公朝に飛集す、齊侯大に怪み使をして孔子に訪はしむ、孔子曰く此名を商羊といふ、水祥なり、昔童兒其一脚を屈し兩臂を振起して跳るあり、且つ謠つて曰く、天將に大に雨ふらんと

(八八)豐隆號屏を迎ふ。雲根(八九)八極に臨み、雨足(九〇)四溟に灑ぐ。(九一)霖瀝二旬を過ぎ、(九二)散漫九齡に亞ぐ。階下伏泉涌き、堂上(九三)水衣生ず。(九四)洪潦浩として方に割ひ、人は(九五)昏墊の情を懷く。(九六)沈液陳根を漱ぎ、綠葉秋莖腐る。里には(九七)曲突の煙なく、路には行輪の聲なし。(九八)環堵自ら頽毀し、垣間形を隱さず。(九九)尺燼は尋桂より重く、(一〇〇)紅粒は瑤瓊より貴し。君子固窮を守り、(一〇一)約に在りて貞に爽はず。(一〇二)田方の贈を榮とすと雖

すと、商羊鼓儛す、今齊に之あり、其應至らん、將に大水の災をなすあらんとすと」とあり。

【八七】飛廉。風の神。南箕は星の名。月此星と會すれば風吹く。

【八八】豐隆。雲の神。號屏は雨の神。

【八九】八極。八方の極。

【九〇】四溟。四海なり、天下といふが如し。

【九一】霖瀝。淫雨のふりそそぐこと。二旬は二十日。

【九二】散漫。水の流ること。九齡は九年、堯の時九年の洪水あり。

【九三】水衣。苔なり。

【九四】洪潦。洪水なり。浩は大なる貌。

【九五】昏墊。溺ること。

【九六】沈液。雨水なり。陳根は古き木根。

【九七】曲突。曲れる煙突。

【九八】環堵。小屋をいふ。

【九九】尺燼。少しの薪。尋桂は八尺の桂樹。戰國策に「薪桂よりも貴し」とあり。

【一〇〇】紅粒。紅腐せる米。瑤瓊は美玉。

【一〇一】約。困窮なり。

【一〇二】田方。說苑に「子思、衞に居り縕袍裏なく、二旬に九食す、田子方、人をして狐白裘を遺らしめ、其の受けざらんことを恐れ、因つて之に謂つて曰く、吾れ人に假せば遂に之を忘る、吾れ人に與ふるは之を棄つるが如しと、子思辭して曰く、伋聞く忘と棄とは物を溝壑に遺つるが如しと、伋貧しと雖身を溝壑となすに忍びず、故に敢て當らずと、つひに受くるを肯んぜず」

も、溝壑の名をなすを慚づ。志を（一〇三）於陵子に取り、足るを（一〇四）黔婁生に比す。

とあり。
【一〇三】於陵子。陳仲子なり、於陵の地に隱居し、貧居して屈せず。
【一〇四】黔婁生。賢人の名、魯侯用ひて相となさんとすれども辭して就かず。

【大意】窮乏を忍び清廉を守るをいふ。今や雲結んで收まらず、霖雨二十日にわたり、流水漫漫として、堯の九年の洪水に次ぐ。其害甚しく人皆溺れんとし、草木悉く腐萎し、煙突も水に流され、路上に車聲なく、家頽れ垣傾き、尺薪は尋桂より貴く米は玉よりも貴し。ただ君子は窮約に在りと雖も、貞正の志に差はず、他人の惠與を受くるを屑しとせず。貧苦を忍んで清廉を守らんことを期す。

㈠時興の詩　盧子諒

㈡亹亹として圓象運り、㈢悠悠として方儀廓なり。㈣忽忽として歳云に暮れ、原に游んで㈤蕭藿を采る。北のかた㈥芒と河とを踰え、南の

【一】時興。時物に感じて情を興喩するなり。亦雜詩の類なり。
【二】亹亹。進み行く貌。圓象は天なり。
【三】悠悠。遠き貌。方儀は地なり。
【四】忽忽。速なる貌。

かた(七)伊と洛とに臨む。凝霜蔓草を霑し、悲風(八)林薄を振ふ。(九)摵摵として芳葉零ち、(一〇)榮榮として芬華落つ。(一一)下泉冽清を激し、(一二)曠野遼索を增す。高きに登りて(一三)遐荒を眺め、極望すれば(一四)崖崿なし。形變時に隨つて化し、神感物に因りて作る。(一五)澹乎たり至人の心、(一六)恬然として玄漠を存す。

【大意】天地轉運して歳將に暮れんとする時北のかた邙山と黄河とを越え、南のかた伊水と洛水とに遊べば、風霜寒涼にして、葉落ち花凋み、水流淸澈にして廣野荒涼たり。高處に登りて遠く望めば、四方茫茫として限際なし。夫れ萬物は時に隨つて形を變じ、人心之を觀て感を起す。ただ達人は心常に安靜にして虛無の道を抱く。故に物に因りて悲喜を生ずることなし。

【五】蕭藿。よもぎ及び萩なり。詩經に「歳聿に云に暮れ、蕭を采り菽を穫る」とあり。

【六】芒。北邙山なり。洛陽の北に在り。

【七】伊洛。二川の名。

【八】林薄。草木の叢生する處を薄といふ。

【九】摵摵。葉の落つる聲。

【一〇】榮榮。垂るる貌。芬華は芳しき花。

【一一】下泉。流泉なり。冽淸は寒淸なり。

【一二】曠野。廣き野原。遼索は荒涼なり。

【一三】遐荒。遠き野原。

【一四】崖崿。限際なり。

【一五】澹乎。安き貌。至人は達人といふが如し。

【一六】恬然。靜なる貌。玄漠は虛無の道。

雜詩二首

陶淵明

廬を結んで人境に在り、而も車馬の（一）喧なし。（二）君に問ふ何ぞ能く爾る、心遠くして地自ら（三）偏なり。菊を東籬の下に采り、（四）悠然として南山を望む。山氣日夕佳く、飛鳥相與に還る。此に還りて眞意あり、辯ぜんと欲すれば已に言を忘る。

【大意】貧に安んじ道を樂むの眞意を述ぶ。我れ居室を構へて俗界に居れども、貴人の來り訪ふ者なければ、車馬の喧騷を覺えず。是れ他に在らず、我が心超遠にして、物慾の蔽ふ所となるざるを以て、自然に閑靜にして偏僻の地に在るが如きなり。菊花を籬の下に採り、悠然として南山を望めば、山氣夕に佳色あり、飛鳥相與に塒に還るを見る。此れ皆天眞の自然を得たるものなり。我れ此眞意を言はんと欲すれども、吾亦眞意の中に冥合せるを以て、其言を忘れて言ふ能はず。

秋菊佳色あり、（五）裛露其英を掇る。此の（六）忘憂の物に泛べて、我が（七）達世の情を遠くす。（八）一觴獨り進むと雖も、盃盡きて壺自ら傾く。日入りて羣動息み、歸鳥林に趨きて鳴く。（九）東軒の下に嘯傲し、

【一】喧。騷がしき物音。
【二】君。淵明自ら謂ふ。自ら問を發し、下句之に答ふるなり。
【三】偏。偏僻なり。
【四】悠然。自得の貌。南山は居宅の南に在る山。望の字一本見に作る。
【五】裛露。露にうるほへるまに。
【六】忘憂の物。酒をいふ。
【七】達世。世情に通達せること。
【八】一觴。一杯なり。
【九】東軒。東の檐。嘯傲は嘯歌して世に傲ること。

聊か復た此生を得たり。

【大意】飲酒の眞意をいふ。菊に佳色あり。故に露を帶びしままに其花を採り、酒に泛べて之を飲み、以て遠く世情を遺る。一觴獨り自ら進むれば、杯盡きて壺自ら傾く。衆物の羣動する者日入りて皆息み、鳥の飛ぶに倦みて歸る者林に趨きて喧しく鳴く。我れ亦嘯歌して傲を東軒の下に寄せ、聊か此生を樂むを得たり。

貧士を詠ず

陶淵明

(一)萬族各〻託するあり。(二)孤雲獨り依るなし。(三)曖曖として虚中に滅ゆ。何の時にか餘輝を見ん。朝霞(四)宿霧を開き、衆鳥相與に飛ぶ。遲遲として林を出づる翮、未だ夕ならざるに復た來り歸る。力を量りて(五)故轍を守る。豈寒と饑とにあらざらんや。(六)知音苟に存せず、已ぬる矣何の悲む所ぞ。

【大意】萬物各〻依託する所あれども、孤雲は逈に山を出でて、獨り依託する所なく、暗昧にして空中に消滅し、復た光輝あることなし。(貧士の身を託する所なく、富榮の望なきに喩ふ。)天明くれば衆鳥相率ゐて飛

【一】萬族。萬物なり。
【二】孤雲。貧士に喩ふ。
【三】曖曖。暗き貌。虚中は空中。
【四】宿霧。夜來の霧。
【五】故轍。從來の業跡。
【六】知音。知己なり。

べども、困鳥獨り遲遲として林を出で、未だ夕ならずして歸り來る。(衆人は各〻營求する所あれども、貧士は力足らずして衆人と競爭する能はざるに喩ふ。)ああ貧士は己の微力なるを知り、其舊跡を守りて營求せず、常に飢寒に苦めり。然りと雖も、世既に知己なし。悲むと雖も何の益あらんや。宜しく自ら安んずべきなり。

(一)山海經を讀む　　陶淵明

(二)孟夏草木長じ、屋を繞りて樹(三)扶疎たり。衆鳥託するあるを欣び、吾亦吾が廬を愛す。既に耕して亦已に種ゑ、且く還りて我が書を讀む。窮巷(四)深轍を隔て、頗る故人の車を廻す。歡んで言に春酒を酌み、我が園中の(五)蔬を摘む。微雨東より來り、好風之と倶にす。泛く(六)周王の傳を覽、流く山海の圖を觀る。(七)俛仰して宇宙を終ふ。樂まずして復た何如せん。

【一】山海經。衆山百川草木禽獸を記せる書なり。
【二】孟夏。初夏なり。
【三】扶疎。枝葉の四方にひろがる貌。
【四】深轍。大路は車馬の往來多し、故に轍跡深し。窮巷は大路を隔つること遠きを以て、我を訪ふ友の車を廻らして始めて我が家に到らしむとの意。
【五】蔬。野菜なり。
【六】周王の傳。穆天子傳なり、周の穆王が天下を周遊せし事を記せし書。
【七】俛仰。俯仰に同じ。暫時をいふ。

【大意】此詩凡て十三首あり、此れ其第一首

なり。故に通首空寫し、只末處に於て題を點ず。初夏の候、草木既に長じ、屋を繞りて枝葉茂り、衆鳥此の茂林の扶疎たるを欣び、我も亦其中の居を愛す。耕種既に終り、室に歸りて書を讀む。我が居幽僻にして大路を隔つ。故に友の我を訪ふ者遠く車を廻らして來り到る。因つて共に春酒を酌み園蔬を烹て食ふ。時に微雨好風を帶びて來る。乃ち穆天子傳を通覽し、次に山海經の畫圖を觀る。暫時にして天下の珍奇を見盡すを得て、其樂言ふべからず。

七月七日夜、(一)牛女を詠ず

謝惠連

落日(二)櫩楹に隱れ、(三)升月簾櫳を照す。(四)團團たり葉に滿つる露、(五)析析たり條を振ふ風。足を躡んで(六)廣除に循ひ、目を瞬ぎて(七)曾穹を矖る。(八)雲漢に靈匹あり、年を彌りて相從ふを闕く。(九)遐川昵愛を阻て、(一〇)脩渚淸容を曠うす。杼を弄して(一一)藻を成さず、轡を聳げて(一二)前蹤に鶩す。昔離れて秋已に兩び、今聚りて夕(一三)雙な

【一】牛女。牽牛・織女の二星、七月七日の夜、天河を渡りて相會すといふ。
【二】櫩楹。のきはしら。
【三】升月。のぼる月。櫳は窓。
【四】團團。露の貌。
【五】析析。風の聲。
【六】廣除。廣き庭。
【七】曾穹。天なり。
【八】雲漢。あまのがは。靈匹は牛女二星の相配偶すること。
【九】遐川。長き川、天河なり。昵愛は親愛。
【一〇】脩渚。長き渚。淸容は麗貌。
【一一】藻。あや模樣。
【一二】前蹤。前路なり。
【一三】雙。二なり、今夜聚りて

し。(二四)傾河廻幹し易く、(二五)款情久しく悰み難し。(二六)沃若として靈駕旋り、寂寥として(二七)雲幄空し。情を留めて華寢を顧み、心を遙にして奔龍を逐ふ。沈吟して(二八)爾が爲に感ず、情深くして意彌〻重る。

忽ち別る、二夜をかさぬる能はず。
【二四】傾河。天河の傾くこと。廻幹は廻轉。
【二五】款情。愛情なり。
【二六】沃若。龍の行く貌。
【二七】雲幄。雲の帳。
【二八】爾。牛女を指す。

【大意】日入りて月出で、露結び風涼しき時、廣庭を歩して高天を望めば、天河の中に牛女二星あり。年を終へて相會合するを得ず。長川その親愛を隔て、長渚その美容を隔つ。織女は終日機杼を弄すれども章を成さず、龍車に駕して前路に驅る。昔離れて今會ふまで、秋に遇ふこと既に再なるに、今會ひて忽ち別れ夜を重ぬる能はず。天河廻轉して夜將に明けんとし、愛情久しく樂み難し。各〻龍車を旋らして歸り、雲帳空しく殘る。情を留めて寢處を顧戀し、心を遠くして龍車を驅る。吾れ之を觀て深慨を生ず。

(一)擣衣　　謝惠連

(二)衡紀度を淹むるなく、(三)晷運倏ち催すが如し。白露園菊を滋くし、秋風庭槐を落す。

【一】擣衣。きぬた。
【二】衡紀。玉衡星と牽牛星。度は廻轉の度。
【三】晷運。日の運行。

(四)肅肅たり莎雞の羽、(五)烈烈たり寒螿の啼。夕陰(六)空幕に結び、(七)霄月中閨に皓し。美人(八)裳服を戒め、(九)端飾して相招攜す。玉を簪にして(一〇)北房を出で、(一一)金を鳴らして南階を歩す。欄高くして(一二)砧響發し、楹長くして杵聲哀し。微芳兩袖に起り、輕汗(一三)雙題を染む。(一四)紈素既已に成り、(一五)君子行きて未だ歸らず。裁つに(一六)笥中の刀を用てし、縫ひて(一七)萬里の衣となす。篋に盈つるは余が手よりし、(一八)幽緘は君が開くを俟つ。(一九)腰帶疇昔に准へ、今の(二〇)是非を知らず。

【大意】日星運行して歳月移り、今や白露西風の秋となり、園菊茂り槐葉落ち、蟋蟀羽を振ひ寒蟬啼き、夜陰の氣空帷に結び、月閨中を照せり。時に美人衣裳を整へ、相携へて出で、玉釵を戴き金佩を鳴らして南庭を歩し、將に衣を搗たんとす。忽ちにして砧響杵聲高堂の間に起り、其聲誠に哀し。兩人相對して擣つこと暫時にして、白絹ここに成る。乃ち之を裁縫して遠方の夫君に贈る。美人手自ら箱に收め、夫君

【四】肅肅。羽の動く聲。莎雞は蟋蟀。
【五】烈烈。聲の多き貌。寒螿は蟬の類。
【六】空幕。空閨の帳。
【七】霄月。天空の月。
【八】裳服。衣服なり。戒は整なり。
【九】端飾。正しく裝ふこと。招攜は相携へて出づること。
【一〇】北房。婦人の室。
【一一】金。金佩なり。
【一二】砧響。きぬたの音。
【一三】雙題。二人の額、砧を打つには二人相對して打つ。
【一四】紈素、白絹。
【一五】君子。夫をいふ。
【一六】笥中。箱の中。刀は剪刀。
【一七】萬里の衣。遠方に居る夫に贈る衣。
【一八】幽緘。密封なり。
【一九】腰帶。衣の長短廣狹なり。疇昔は舊日。
【二〇】是非。適否なり。

の自ら開くを待つ。衣の長短は全く舊日に準ぜり、故に今能く身に適ふや否やを知らず。

南樓の中、遲つ所の客を望む　謝靈運

(一)杳杳として日西に頽れ、(二)漫漫として長路迫る。樓に登りて誰が爲にか思ふ。江に臨んで來客を遲つ。我と別れしとき期する所、期は(三)三五の夕に在り。(四)圓景早く已に滿つるも、(五)佳人殊に未だ適らず。事に卽いて(六)睽攜を怨み、(七)物に感じて方に悽戚す。(八)孟夏長夜にあらざるも、(九)晦明歲の隔るが如し。(一〇)瑤華未だ折るに堪へず、(一一)蘭苕已に屢ゝ摘む。路阻りて(一二)贈問するなし。云何ぞ(一三)離析を慰めん。首を搔いて行人に訪ひ、領を引いて(一四)良覿を冀ふ。

【一】杳杳。遠き貌。
【二】漫漫。長き貌。
【三】三五。十五夜なり。
【四】圓景。圓月なり。
【五】佳人。君子といふが如し。前文の來客なり。
【六】睽攜。乖離なり。
【七】物。見る所の景物。悽戚は憂ふること。
【八】孟夏。初夏なり。
【九】晦明。夜の明くること。
【一〇】瑤華。麻の花なり、其色白し故に瑤に比す、此花を服食すれば長壽を致すべし、故に以て美となして遠人に贈らんとするなり。
【一一】蘭苕。香草なり。以て君子に比す、故に摘みて人に贈る。
【一二】贈問。贈遺なり。
【一三】離析。離居なり。
【一四】良覿。良友との會合。

【大意】年冉冉として漸く老い、人生の長路漸く迫るを覺ゆ。乃ち樓に登り江に臨み、友の來るを待ちて以て憂思を慰めんとす。初め友と別るる時、十五日を以て會合せんと期し、其期既に至れ

ども友は未だ來らず。因つて此の離別を怨み、景を見て悲を起す。夏夜短しと雖も、友を待てるを以て其長きこと一歲の如し。瑤華未だ開かざれば、折りて贈るべからざれども、蘭苕は屢〻之を摘みて、將に友に贈らんとす。然も道遠くして贈る能はず、何を以てか離情を慰めん。首を搔いて行路の人を訪ひ、良友に會せんことを冀ふ。

田南に園を樹て流を激ぎ(一)援を植う　謝靈運

(二)樵隱倶に山に在れども、由來事同じからず。同じからざるは一事にあらず、痾を養ふも亦園中。園中(三)氛雜を屛け、(四)清曠遠風を招く。室を卜して(五)北阜に倚り、扉を啓いて南江に面す。澗を激いで汲井に代へ、(六)槿を揷して列墉に當つ。羣木既に戶に羅り、衆山亦窓に當る。(七)靡迤として下田に趨き、(八)迢遞として高峯を瞰る。欲を寡くして勞を期せず、事に卽いて人功罕なり。唯(九)蔣生が徑を開き、永く求羊が蹤を懷ふ。(一〇)賞

【一】援。衞なり、屋舍の傍に樹木を植ゑて屛牆となすなり。
【二】樵隱。樵者と隱者。
【三】氛雜。穢氣喧雜。
【四】淸曠。淸淨廣濶。
【五】北阜。北の岡。
【六】槿。木の名、むくげ。列墉は周牆。
【七】靡迤。細走の貌。下田は山下の田。
【八】迢遞。高遠の貌。
【九】蔣生。蔣詡、字は元卿。杜陵に隱る、舍中の三徑唯羊仲、求仲之に從つて遊ぶ、二仲は皆廉を挫き名を逃れし人なり。
【一〇】賞心。友人なり。

心忘るべからず。妙善冀くは能く同じからんことを。

【大意】樵者と隱者と倶に山に居れども、其の爲す所同じからず。其の同じからざるも亦一樣にあらず。我の病を養ふが如き者も、亦山園の中に在り。園中に穢氣喧雜を屛け、居を淸曠に卜して長風を招き、北は岡を負ひて室を占め、南は江に面して門を設け、溪水を引きて井水を汲むに代へ、槿を挿して周牆となし、羣木既に門に列り、衆山また窓に當りて見ゆ。或は走りて山下の田に趨き或は遠く高峰を瞰る。欲を寡くせんことを欲して勞役をなさず、營室の事亦己の力を用ふること罕なり。唯三徑を開きて、良友の來り訪ふを待つ。交友の樂は病むと雖も忘るべからず、妙善の道希くは古人と之を同うせん。

(一)齋中に書を讀む　謝靈運

昔余(二)京華に游びしも、未だ嘗て(三)丘壑を廢てず。矧や乃ち山川に歸り、(四)心跡雙ながら寂漠たるをや。虛館諍訟絕え、空庭鳥雀來る。疾に臥して(五)暇豫豐に、(六)翰墨時に間作る。(七)懷抱

【一】齋中。齋は靜室、卽ち永嘉郡齋なり。
【二】京華。帝都なり。建康をいふ。
【三】丘壑。山水の樂なり。
【四】心跡。心及び事。
【五】暇豫。閑樂。
【六】翰墨。文詩なり。
【七】懷抱。心なり、古今を觀るとは書を讀むをいふ。

古今を觀、寢食（八）戲謔を展ぶ。既に沮溺の苦を笑ひ、又子雲の閣を哂ふ。（九）執戟亦以に疲る。耕稼豈云に樂まんや。萬事竝び歡び難し。（一〇）達生幸に託すべし。

【大意】余は昔帝都に官遊せしも、未だ嘗て山水の樂を忘れず。況んや今山川に歸り、心と事と共に閑なるをや。館に諍訟の事なく、庭に鳥雀の遊ぶあり。疾を養ひて閑樂多く、興に觸れて詩文を作り、書を讀んで古今を知り、寢食して戲言を弄し、長沮桀溺耦耕の事（論語に出づ）を讀みて其苦を笑ひ、揚雄（字は子雲）が閣上より自ら投じて死せる事（漢書に出づ）を讀みて其愚を哂ふ。執戟（揚雄）は既に勞苦多し。耕作（沮溺）も亦樂事にあらず。世間の萬事は歡樂を幷せ得ること難し。ただ達生の理即ち身を託するに足るのみ。

【八】戲謔。たはむれ言。
【九】執戟。揚子雲郎となり、戟を執りて宿衞す。
【一〇】達生。人生の眞情に通達して虚無恬淡の生活をなすこと。

（二）石門に新に住する所を營む、四面は高山廻溪石瀨茂林（三）脩竹なり　謝　靈　運

【二】石門。永嘉郡に在り。
【三】脩竹。脩は長なり。

險に躋りて幽居を築き、雲を披て石門に臥す。苔滑かにして誰か能く歩せん、葛弱くして豈捫るべけ

んや。(三)嫋嫋として秋風過ぎ、(四)萋萋として春草繁し。(五)美人游んで還らず、(六)佳期何に由りてか敦うせん。芳塵瑤席に凝り、(七)淸醑金罇に滿つ。(八)洞庭空しく波瀾、桂枝徒に攀翻。結念(九)霄漢に屬し、(一〇)孤景與に諼るるなし。俯して石下の潭に濯ぎ、仰いで(一一)條上の猨を看る。早に(一二)夕飇の急なるを聞き、晩に朝日の(一三)暾たるを見る。崖傾きて光留り難く、林深くして響奔り易し。感往きて慮復るあり、理來りて情存するなし。庶くは特に日用に乘じ、以て(一四)營魂を慰するを得んことを。(一五)衆人の爲に說くにあらず、冀はくは智者と論ぜん。

【大意】此れ友を懷ふ詩なり。我れ山雲の間に幽居を構ふ。其地は石上苔滑かにして到り易からず、葛藟細くして攀づべからず。草木常に萋萋として塵俗の氣なし。吾が友は遠游して還らず。何れの時か會合するを得ん。人來らずして經塵席に集り、友を待ちて酒樽に滿てり。洞庭波たちて秋季至れども、友人還らずして與に桂樹を攀づべからず。天を仰いで憂を結び、孤影を顧みて友を懷ふ。林暗くして朝にも風夜の如く、

【三】嫋嫋。風の吹く貌。
【四】萋萋。草の盛なる貌。
【五】美人。君子なり、友を指す。
【六】佳期。會合なり。
【七】淸醑。酒なり。
【八】洞庭。湖の名。此句秋の至れるをいふ。楚辭に「洞庭波たちて木葉下り、桂枝を攀ぢて聊か淹留す」とあり。
【九】霄漢。天空なり。
【一〇】孤景。孤影なり。
【一一】條上。枝の上。
【一二】夕飇。夜風なり。
【一三】暾。日の初めて出づる貌。
【一四】營魂。心をいふ。
【一五】衆人。俗人なり。

山高くして夕にも日朝の如し。崖傾いて日光久しく留り難く、林深くして風奔るが如し。此を觀て感慨反復し、物理を悟りて情乃ち安し。庶くは恬淡無爲にして自然に任せ、以て我が心を慰むるを得ん。此道は俗人と語るべからず、智者と論ぜんことを思ふ。友よ願くは早く來り遊べ。

雜詩一首

（一）王景玄

（二）思婦高臺に臨み、長く想ひて（三）華軒に憑る。絃を弄すれども曲を成さず、哀歌して（四）苦言を送る。（五）箕箒江介に留り、（六）良人鴈門に處る。詎ぞ無衣の苦を憶はん、但（七）狐白の溫かなるを知る。日暗れて牛羊下り、野雀空園に滿つ。（八）孟冬寒風起り、（九）東壁正に中昏す。（一〇）朱火獨り人を照し、景を抱いて自ら愁怨す。誰か知らん（一一）心曲の亂るるを、思ふ所論ずべからず。

【大意】思婦あり。高臺に登り鉤欄に憑りて夫を想ひ、絃歌すれども曲調を成さず。唯苦

【一】王景玄。王徽、字は景玄、宋人なり。
【二】思婦。遠行の夫を思ふ妻。
【三】華軒。樓の鉤欄。
【四】苦言。相思の苦を述ぶる言。
【五】箕箒。箕と箒、婦人の執りて掃除する具。江介は江間なり。
【六】良人。夫をいふ。鴈門は北方の郡名。
【七】狐白。裘なり、狐の腋の皮を以て作る。
【八】孟冬。初冬なり。
【九】東壁。星の名。中昏とは夕に正南に見ゆること。
【一〇】朱火。燈なり。人とは妻自ら謂ふ。
【一一】心曲。心緒といふが如し。

言を漏すのみ。身は箕箒を執りて江間に留まり、夫は征戍して北塞に在り。夫は狐白裘の温きを著て我が無衣の苦を憶はざらん。日暮れて牛羊山を下り、鳥雀亦塒に歸り、各〻その棲息する所に安んずれども、われ獨り空閨に在り、冬風の聲を聞き星斗の影を望み、獨り燈下に愁怨すれば、心緒亂れて言ふべからず。

數詩　鮑明遠

一身關西に仕へ、家族山東に滿つ。二年車駕に從ひ、甘泉宮に齋祭す。(一)三朝國慶畢り、(二)休沐して舊邦に還る。(三)四牡長路を曜かし、(四)輕蓋飛鴻の若し。(五)五侯相餞送し、高會して(六)新豐に集る。(七)六樂廣坐に陳り、(八)組帳春風に揚る。(九)七盤長袖を起し、庭下歌鐘を列ぬ。(一〇)八珍彫俎に盈ち、(一一)綺肴紛として錯重す。(一二)九族共に瞻遲し、賓友(一三)徽容を仰ぐ。(一四)十載學就るなく、

【一】三朝。正月元日なり、歲の朝、月の朝、日の朝なればなり。國慶は朝會の儀式。
【二】休沐。休暇を賜ること。舊邦は故鄉。
【三】四牡。四馬なり。
【四】輕蓋。輕き車蓋。
【五】五侯。漢の成帝悉く舅王譚、王立、王根、王逢、王商を封じて列侯となす、世に之を五侯といふ。ここは王公といふ意。
【六】新豐。邑の名。
【七】六樂。六代の音樂。
【八】組帳。とばり。
【九】七盤。舞の名。
【一〇】八珍。八種の珍味。彫俎は彫飾を施したる器。
【一一】綺肴。佳肴なり。
【一二】九族。己の親族。瞻遲は望み待つこと。
【一三】徽容。美姿なり。

(一三)善官一朝通ず。

【大意】我來りて關西に仕へ、家族は留りて山東（明遠は東海の人なり）に在り。二年車駕に從ひて甘泉宮に祭り、三朝の儀終りて休暇を賜り、故郷に歸る。駟馬疾走すること飛鴈の如し。王侯送別の宴を新豐邑に設け、歌舞音樂を奏し、珍味佳肴座に滿ち、親族舊友亦我を迎へて美姿を仰ぐ。我れ學ぶこと十年にして、學業成らずと雖も、幸にして此の高官を得たり。

【一四】十載。十年なり。

【一五】善官。高官なり。

月を城の西門(一)廨中に翫ぶ

鮑明遠

始め西南の樓に出で、(二)纖纖として玉鉤の如し。末に東北の(三)墀に映じ、(四)娟娟として娥眉に似たり。蛾眉(五)珠櫳に蔽はれ、玉鉤(六)瑣窗に隔る。(七)三五二八の時、千里君と同うす。夜移り(八)衡漢落れば、(九)徘徊す帷戸の中。(一〇)歸華先づ露に委し、(一一)別葉早く風に辭す。客游苦辛を厭ひ、

【一】廨中。廨は役所なり、時に明遠は秣陵令たり。

【二】纖纖。細き貌。玉鉤は玉のかぎ。

【三】墀。石を敷きたる庭。階上に設く。

【四】娟娟。美好の貌。娥眉は婦人の眉。

【五】珠櫳。珠を以て飾りし大窓。

【六】瑣窗。瑣文を畫きし窓。

【七】三五。十五夜。二八は十六夜。

【八】衡漢。衡は北斗星、漢は天河。

【九】徘徊。月光のゆらゆらす

(二二)仕子飄塵に倦む。(二三)休澣して公よりする日、宴慰して(二四)私に及ぶの辰。(二五)蜀琴白雪を抽んで、(二六)郢曲陽春を發す。肴乾けども酒未だ缺まず、(二七)金臺夕淪を啓く。軒を迴らして(二八)輕蓋を駐め、酌を留めて(二九)情人を待つ。

【大意】月初め西南に出で、細くして玉鉤の如し。後漸く升りて東北の階に映じ、美人の眉の如し。遂に欄檻に蔽はれ、窓牖に阻てらる。若夫れ十五十六夜に至れば、皎皎として千里を照し、離居の人も同じく之を仰ぐを得べく、更闌なるに至れば其光帷戸の中に廻旋す。月を翫ぶの時草木の花葉を見れば、皆早く風露に委して落つ。人も亦かくの如く、微より著に至り、終に衰謝するなり。宦遊の身は既に風塵の苦に倦めり。休暇を得て自宅に歸れば、琴を抱きて陽春白雪の曲を奏し、以て自ら慰む。肴既に乾けども酒未だ止まず。金壺の漏水漸く滴りて夜將に盡きんとす。因つて車を迴らして將に歸らんとし、復た車を駐めて酒を酌み、遠行の友を思ふ。

ること。

【二〇】歸華。落ちて本に歸る花。

【二一】別葉。落ちて枝に離るる葉。

【二二】仕子。宦遊の人。

【二三】休澣。休暇なり。公は役所。

【二四】私。私宅なり。及は在なり。

【二五】蜀琴。琴なり。蜀は國名。白雪は曲の名。

【二六】郢曲。樂曲なり、郢は地名。陽春は曲の名。

【二七】金臺。一本金壺に作る。刻漏水を貯ふるもの、銅を以て之を作る。故に金壺といふ。夕淪は夜の波。

【二八】輕蓋。前詩に見ゆ。

【二九】情人。友人なり。

始めて(一)尚書省を出づ

謝玄暉

惟ふ昔(二)休明に逢ひ、(三)十載雲陛に朝す。既に(四)金閨の籍を通じ、復た(五)瓊筵の醴を酌む。(六)宸景照臨を厭ひ、(七)昏風繼體に淪む。(八)紛虹朝日を亂し、(九)濁河清濟を穢す。(一〇)口を防ぐは猶ほ寛政なり、荼を餐ひて更に薺の如し。(一一)英袞人謀を暢べ、文明固に天啓。(一二)青精紫軑を翼け、(一三)黄旗朱邸を映す。還りて(一四)司隷の章を覩、復た(一五)東都の禮を見る。(一六)中區咸已に泰に、(一七)輕生諒に昭洒す。事に趨りて宮闕を辭し、(一八)筆を載せて旌棨に陪す。(一九)邑里疏蕪に向ひ、寒流自ら(二〇)清泚な

【一】尚書省。官署の名、時に玄暉は尚書殿中郎たり。
【二】休明。徳の美明なる人の意、齊の武帝を指す。
【三】十載。十年なり。
【四】金閨。金門なり、名籍を門に懸け乃ち出入を通ず、所謂禁門なり。
【五】瓊筵。天子羣臣を宴する席。醴は酒。
【六】宸景。宸は天帝の居、景は日、因つて天子に喩ふ。
【七】昏風。亂風といふが如し。繼體は繼嗣なり。
【八】紛虹。邪陰の氣なり。
【九】濁河、清濟。共に川の名。
【一〇】口を防ぐ。周の厲王暴虐にして國人を殺し以て謗者を止む、召穆公諫めて曰く、人の口を防ぐは川を防ぐより甚しと、王之を聽かず。
【一一】英袞。袞は三公の服なり、明帝を謂ふ、帝初め尚書令たりしを以てなり。
【一二】青精。星の名、齊は木徳なり、故に此星之を翼く。紫軑は天子の車。
【一三】黄旗。瑞雲なり。朱邸は明帝の居る所。
【一四】司隷。更始將軍劉秀(後漢の光武帝)を以て司隷校尉となす、三輔の府吏皆秀を洛陽に迎ふ。章は儀なり。
【一五】東都。洛陽なり。
【一六】中區。中國なり。
【一七】輕生。下民をいふ。昭洒は昭明洗滌なり。
【一八】筆を載せ。明帝、玄暉を以て尚書殿中郎より諮議とな

り。(三一)衰柳尚ほ沈沈たり、(三二)凝露方に泥泥たり。零落して友朋を悲み、(三三)歡虞して兄弟を讌す。既に(三四)丹石の心を秉る。寧んぞ(三五)素絲の涕を流さんや。此に乘じて終に(三六)蕭散し、竿を深淵の底に垂れん。

【大意】我れ昔明君（齊の武帝）に逢ひ、陛下に侍すること十年、禁門に出入し盛宴に與るを得たり。武帝の崩ずるや、鬱林王位に即く。然も昏亂淪溺して武帝の體を繼がず。邪陰の氣朝日を蔽ひ、濁河の水清濟の流を穢す。(鬱林王の昏亂に喩ふ) 周の厲王の暴虐も之に比すれば、猶ほ寛政となすべく、民其政に苦むこと荼を食ふよりも甚し。時に明帝丞相として國政を輔けしが、遂に民望に從つて帝位に即く。明帝文明の德は、實に天の啓く所なり。故に其の位に即かんとするや、星雲の瑞現はれ、民の之を迎ふること、司隸校尉たる光武を洛陽に迎へたる儀禮に同じ。かくて聖政下民に流通し、穢濁を昭洗せり。我れ又文吏の職を以て陛下に仕へ、功の成れるを見て將に

し記室を領せしむ。旌棨は門の列戟。

【二九】邑里。鄕里なり。

【三〇】清沚。水の清き貌。

【三一】衰柳。自ら喩ふ。沈沈は茂盛の貌。

【三二】凝露。君恩に喩ふ。泥泥は沾ふ貌。

【三三】歡虞。歡娛なり。

【三四】丹石。移らざるをいふ、呂氏春秋に「石は破るべくして其堅を奪ふべからず、丹は磨すべくして其赤を奪ふべからず」とあり。

【三五】素絲の涕。素絲は白絲なり、淮南子に「墨子練絲を見て泣く、其の以て黃にすべく以て黑にすべきが爲なり」とあり。

【三六】蕭散。志を肆にすると。

郷里に歸らんとす。今や我が郷里は人物漸く疎に、田園亦荒れんとし、ただ寒流の自ら流るるのみ。我れ衰老せりと雖も、尚は天子の恩顧を蒙り、常に洪澤に沾へり。郷友の漸く零落せるを悲み、歸りて兄弟と歡を盡さんことを思ふ。我れ既に忠貞の志を執りて變移することなし。ここに志を肆にして竿を垂れ魚を釣り、悠悠自適せんことを思ふ。

中書省に(一)直す　　謝玄暉

(二)紫殿肅として陰陰たり、(三)彤庭赫として弘敞なり。風は(四)萬年の枝を動かし、日は(五)承露の掌に華し。(六)玲瓏として綺錢を結び、深沈として(七)朱綱に映ず。(八)紅藥階に當りて翻り、蒼苔(九)砌に依りて上る。茲に言(一〇)鳳池に翔り、(一一)鳴珮清響多し。信に美なれども吾が室にあらず、中園に(一二)偃仰せんことを思ふ。(一三)朋情以て鬱陶たり、春物方に(一四)駘蕩たり。安んぞ

【一】直。役所に宿直すること。
【二】紫殿。天子の宮殿。肅は嚴なり。陰陰は沈靜なる貌。
【三】彤庭。禁中の朱塗の庭。赫は盛なり。弘敞は廣大なり。
【四】萬年。木の名。
【五】承露。高臺を起し、仙人の形を作り、掌を以て盤を承け、盤を以て甘露を承くるなり。
【六】玲瓏。鮮明なる貌。綺錢は綺文の連錢をなせるもの。
【七】朱綱。宮殿の飾。宮殿の飾なり。
【八】紅藥。赤き芍藥。
【九】砌。階段の石疊。
【一〇】鳳池。中書省をいふ。
【一一】鳴珮。佩ぶるところの玉なり。
【一二】偃仰。俯仰なり。
【一三】朋情。朋友を思ふ情。鬱陶は憂結びて解けざる貌。

凌風の翰を得て、聊か山泉の賞を恣にせん。

【大意】此れ中書郎たりし時の作。省中に在りて歸隱を思ふなり。宮殿嚴靜にして彤庭廣濶なり。庭には風萬年の枝を動かし、日仙人掌の上に輝き、殿には綺錢朱網の鮮麗なるあり。芍藥の花階に當りて亂れ、青苔は砌に沿うて生ず。我れ此に宿直して緩歩すれば、佩玉の聲鏘鏘然として淸し。ああ中書は眞に美なりと雖も、吾が居室にあらず。丘園の中に偃息するの自由なるに如かず。況んや友朋を思ふの情結んで解けず、春光の駘蕩として賞すべきあるをや。願くは鳥の飛翼を得て、恣に山水の勝を賞せんことを。

【四】駘蕩。春光のうららかなる貌。

朝雨を觀る

謝玄暉

(一)朔風飛雨を吹き、(二)蕭條として江上より來る。既に(三)百常の觀に灑ぎ、復た(四)九成の臺に集る。空濛にして薄霧の如く、散漫として(五)輕埃に似たり。(六)平明衣を振ひて坐すれば、(七)重門猶は未だ開かず。耳目暫く擾るるなく、古を懷ふこと信に悠なる哉。(八)翼

【一】朔風。北風なり。
【二】蕭條。淋しき貌。
【三】百常。觀の名。觀は樓閣なり。
【四】九成。臺の名。呂氏春秋に「有娀氏に二佚女あり、九成臺を爲る」とあり。
【五】輕埃。輕塵なり。
【六】平明。早曉なり。
【七】重門。宮門なり。
【八】翼を戢む。成公綏の慰情賦に「惟れ潛龍の用ふるなき、

を戩めては首を驤げんことを希ひ、流に乘じては(九)鰓を曝さんことを畏る。(一〇)動息兼ね遂ぐるなく、歧路多くは徘徊す。方に(一一)戰勝の者に同うし、去つて北山の(一二)萊を翦らん。

【大意】朝雨を觀て所感を述べたる詩なり。風雨蕭條として江上より來り、高臺の間に降り灑ぎ、空濛にして煙霧の如し。旦に衣を整へて坐すれば、宮門尚ほ未だ開かず。因つて暫く雨を觀つつあれば、心自ら靜まり坐に古人盛衰の理を思ふ。人或は貧賤に居て富貴を望み、或は富貴に居て衰敗を畏る。然れども人の出處進退は兩ながら兼ぬるを得ず。是れ人の歧路に彷徨して決する能はざる所以なり。我は彼の戰勝者に倣ひ、道を樂み官を退き、隱居して北山の萊を採らんことを願ふ。

(一)郡内登望　謝玄暉

鱗翼を戩めて以て影を匿す」とあり。

【九】鰓を曝す。三秦記に「江海の大魚龍門の下に薄り集り、上れば則ち龍となり、上るを得ざれば鰓を水次に曝す」とあり。

【一〇】動息。出處進退なり。

【一一】戰勝。韓非子に「子夏肥えたり、或人之を問ふ、子夏曰く吾れ戰勝てりと、人問ひて曰く何をか戰勝といふと、曰く吾れ入りて夫子の義を見て之を榮とし、出でて富貴を見て又之を榮とす、二者胸臆に戰ふ、而して夫子の義勝てり、故に肥えたりと」あり。

【一二】萊。賤草なり、詩經に「南山に臺あり、北山に萊あり」とあり。

【一】郡内。郡は宣城郡なり、玄暉時に宣城太守たり。

(二)借問す車を下るの日、直に(三)望舒の圓なるのみにあらず。寒城一たび以て眺れば、(四)平楚正に蒼然たり。山は(五)陵陽の阻を積み、溪は(六)春穀の泉を流し、(七)威紆として遙甸に距り、(八)巉喦として遠天を帶ぶ。(九)切切として陰風暮れ、(一〇)桑柘寒烟起る。悵望して心已に極り、(一一)惝怳として魂屢〻遷る。(一二)結髮して旅の爲に倦み、平生早く(一三)邊を事とす。誰か(一四)鼎食の盛を規らん、寧んぞ(一五)狐白の鮮を要めん。方に(一六)汝南の諾を弃て、言に(一七)遼東の田に稅かん。

【大意】此れ登望に因りて歸を思ふの詩なり。我れ著任以來時を經ること既に久し。今城に登りて遠望すれば、平野蒼然として、中に陵陽の山あり、春穀の川あり。蜿蜒として遠く流れ、巉然として天に聳え、陰風切切と

【二】借問。假に自ら問ふなり。車を下るとは著任せしこと。
【三】望舒。月なり。
【四】平楚。平林といふが如し。楚は叢木。蒼然は草木の色なり。
【五】陵陽。山の名。阻は險なり。
【六】春穀。川の名。
【七】威紆。長く曲れる貌。遙甸は遠地なり。
【八】巉喦。高峻の貌。
【九】切切。急迫の貌。
【一〇】桑柘。木の名。
【一一】惝怳。自失する貌。
【一二】結髮。元服すること。旅は旅客なり。
【一三】邊を事とす。邊境の戍役に從事すること。
【一四】鼎食。鼎を竝べて食ふこと、豪奢なる生活をいふ。
【一五】狐白。狐の腋の皮にて作れる裘、裘の最上等なるもの。鮮は麗なり。
【一六】汝南。後漢の宗資、汝南郡守となり、每事功曹范滂に委し、ただ唯諾するのみ。一句の意は官を辭するをいふ。
【一七】遼東。魏の管寧遼東に至る、牛寧が田を暴するものあり、寧之を牽きて爲に之を飼ふ、其人大に慙づ、是に於て禮讓大に行はる。一句の意は其事に倣はんとするなり。稅は稅駕にて致仕すること。

して寒煙桑柘の間に起る。之を見て心魂爲に憂ふ。我れ少年の時より常に客となり、早く邊境の事に從ひ、苦艱の間に年を經たり。然れども榮達豪華は敢て望む所にあらず。願くは官を退きて鄕黨に歸り、德を脩めて俗を化せんことを。

(一)伏武昌が孫權の故城に登るに和す　　謝玄暉

(二)炎靈劍璽を遺て、(三)當塗龍戰に駭く。(四)聖期中壤に缺け、霸功(五)寓縣に興る。(六)鵲起して吳山に登り、(七)鳳翔して楚甸を陵ぐ。(八)衿帶巖險を窮め、(九)帷帟謀選を盡す。(一〇)北に拒ぎて驂鑣を溺らし、(一一)西に龕ちて組練を收む。江海旣に波なく、俯仰して(一二)英盼を流

【一】伏武昌。伏曼容、武昌太守たり。孫權の故都は武昌に在り。後建業に徙る。

【二】炎靈。漢をいふ、漢は火德の王なればなり。劍璽は帝位に喩ふ。

【三】當塗。魏をいふ、後漢書獻帝紀に「許昌氣見はれ塗に當る、蓋し道に當りて高きものは魏なり」とあり。龍戰は羣雄の戰爭。

【四】聖期。論衡に「孟子に云く五百年にして王者の興るありと、五百年は以て天聖を出すの期となすなり」とあり。中壤は中國。

【五】寓縣。寓は宇なり、邊地なり、吳の興りしをいふ。

【六】鵲起。鵲の如く急に飛ぶこと、莊子に「君子時を得れば則ち蟻の如く行き、時を失へば則ち鵲の如く起る」とあり。吳山は吳なり。

【七】鳳翔。鳳の如く翔ること。楚甸は楚國。

【八】衿帶。帶の如く繞ること。

【九】帷帟。帷幄なり。謀選は謀略にすぐれたる人。

【一〇】北に云云。魏の曹操を禦ぎしこと。驂鑣は馬のくつわ。

【一一】西に云云。蜀の劉備を取りしこと。組練は甲冑。

【一二】英盼。英氣ある目つき。

す。(二三)袞冕して禋郊に類し、(二四)卜揆して離殿を崇くす。(二五)釣臺講閲に臨み、(二六)樊山廣讌を開く。文物共に(二七)葳蕤として、(二八)聲明且つ葱蒨たり。(二九)三光景を分つを厭ひ、書軌(三〇)薦を同うせんと欲す。(三一)參差として世祀忽たり、寂寞として市朝變ず。舞館餘基を識り、(三二)歌梁遺囀を想ふ。故林衰木平に、荒池秋草徧し。(三三)雄圖悵として茲の若し。(三四)茂宰深く遐瞻す。(三五)幽客江皐に滯り、(三六)從賞纓弁に乖く。(三七)清卮獻酬を阻て、(三八)良書聞見を限る。幸に(三九)芳音の多きに籍り、風を承けて(四〇)餘絢を采る。(四一)于役儻し期あらば、(四二)鄂渚游衍を同うせん。

【大意】此れ伏曼容が武昌に在る呉王孫權の故城に登りて作りし詩を讀み、遙に之に和せしなり。

中原を圖らんとせしこと。
【二三】袞冕。衣冠なり。禋郊は天帝の祭。類は祭ること。
【二四】卜揆。卜筮し日景をはかりて地を相すること。離殿は離宮。
【二五】釣臺。臺の名。武昌にあり。
【二六】樊山。山の名、一名袁山。武昌にあり。
【二七】葳蕤。盛なる貌。
【二八】聲明。禮樂なり。葱蒨は盛なる貌。
【二九】三光。日月星なり、三國に喩ふ。
【三〇】薦。獻なり。
【三一】參差。時の停まらざる貌。世祀は呉の宗廟の祭。忽は忽ちに過ぐること。
【三二】歌梁。妙歌の聲發すれば梁を繞りて塵起る、故に梁を見て其餘聲を想ふなり。
【三三】雄圖。呉國の壯圖。
【三四】茂宰。すぐれたる長官。伏武昌を指す。遐瞻は遠想して詩を作りしこと。
【三五】幽客。玄暉自ら謂ふ。江皐は江邊なり。
【三六】從賞。伏武昌に從ひ行きて賞樂すること。纓弁は冠の紐及び冠、賓從の士に喩ふ。
【三七】清卮。酒杯なり。
【三八】良書。古人の典籍。
【三九】芳音。伏武昌の詩。
【四〇】餘絢。餘美なり。
【四一】于役。行役なり。
【四二】鄂渚。武昌の渚の名。游衍は遊樂なり。

漢帝位を失ひ魏之に代らんとするや、羣雄交〻爭ひて王者未だ出でず。時に呉興りて霸業を邊地に立て、忽ち起りて呉を領し、更に進んで楚を併せ、巖險を以て襟帶となし、帷幄の謀臣亦妙選を盡し、北のかた曹操を江淮に禦ぎて驂馬を溺らし、西のかた劉備を敗りて甲兵を收め、國内清平にして進んで中原を圖らんと欲し、先づ衣冠を整へて祭祀を行ひ、地の宜しきを相て宮館を營み、釣臺に登りて武事を講じ、兵車を閲し、樊山に於て盛宴を開き、文物禮樂盛美を極めたり。然も三國（呉魏蜀）その土地を分つを厭ひ、書は文を同うし、車は軌を同うし、天下一統の世となさんと欲す。是に於て孫氏國亡び、其都（武昌城）荒墟となり、今や舞館は僅に餘基を存し、歌梁を見て餘聲を思ふのみ。舊林荒池また當時の盛を留めず。霸圖悵として休み、滿目荒涼たり。賢宰（伏曼容を指す）その故城に登りて詩を賦す。我れ江畔に客となり、賞樂に從ふ能はず。共に酒杯の獻酬をなし、共に先王の典籍を讀む能はず。幸に其佳什を誦するを得、茲に餘美を拾ひて和詩を作りぬ。若し行役して武昌に赴くの期あらば、當に遊樂を同うすべし。

(一)王著作が(二)八公山の詩に和す　謝玄暉

(三)二別漢坻に阻り、

【一】王著作。王融なり。【二】八公山。山の名、安徽省の北部に在り。晉將謝玄の苻

(四)雙崤河澳を望む。(五)茲嶺復た巑岏、區を分ちて(六)淮服を奠む。東は(七)瑯邪の臺を限り、西は(八)孟諸の陸に距る。(九)阡眠として雜樹起り、(一〇)檀欒として脩竹蔭ふ。日隱れて澗空しきかと疑はれ、雲聚りて岫複れるが如し。出沒(一一)樓雉を眺め、遠近春目を送る。(一二)戎州昔華を亂し、(一三)素景伊穀に淪む。危きに阽んで(一四)宗袞に賴り、(一五)管微くして明牧に寄る。(一六)長蛇固に能く翦り、(一七)奔鯨此れより曝す。道峻くして(一八)芳塵流れ、業遙にして

堅を破りし處なり。

【三】二別。大別小別の二山。漢坻は漢水の渚。

【四】雙崤。殽谷をいふ。殽に二陵あり故に雙崤といふ。河澳は黄河の隈。

【五】茲嶺。八公山を指す。巑岏は高峻の貌。

【六】淮服。淮水の流域。

【七】瑯邪の臺。山海經に「瑯邪臺は渤海の間、瑯邪の東に在り」とあり。

【八】孟諸。澤の名、八公山の東に在り、而して西は云云と云ふは、澤の西此山に至るを謂ひ、上句の東の字を避けたるなり。陸は澤なり。

【九】阡眠。茂密の貌。

【一〇】檀欒。竹の茂る貌。脩竹は長き竹。

【一一】樓雉。樓は城樓、城高さ一丈長さ一丈なるを堵といひ、三堵を雉といふ。出沒は樓雉の出沒なり。

【一二】戎州。夷狄なり、氐族の酋長にして關中に據りて秦王と稱したる苻堅をいふ。華は中華なり。苻堅の晉を伐ちしをいふ。

【一三】素景。素は白なり、晉は金德の王なり故に素景といふ。伊穀は洛陽の近くに在る川の名、苻堅の晉を伐ちし時、晉は洛陽を去り江を渡りて之を避けしをいふ。

【一四】宗袞。謝安をいふ。

【一五】管微く。管仲なしの意。明牧は謝玄をいふ。此一句は霸者の佐たる管仲はなけれども、明牧謝玄の大命を寄するに足るありとの意。

【一六】長蛇。苻堅に喩ふ。

【一七】奔鯨。苻堅に喩ふ。

【一八】芳塵。美譽に喩ふ。

年運倏なり。平生（一九）令圖を仰ぐも、吁嗟命淑からず。（二〇）浩蕩として親知に別れ、（二一）連翩として征軸を戒む。再び（二二）館娃の宮に遠ざかり、兩び（二三）河陽の谷に去る。風煙四時に犯し、霜雨朝夜に沐す。（二四）春秀良に已に凋む。（二五）秋場庶くは能く築かん。

【大意】大別、小別の二山、漢水の曲に相隔り、崤谷の二陵黄河の隈に相望む。（八公山を起す陪筆なり）此山（八公山）復た峻嶮にして淮水の流域を分ち奠め、東は琅邪臺を限り、孟諸澤西に延びて此山に至る。此に登りて遙に望めば、雜樹茂り脩竹生じ、山林幽邃にして日光隱蔽し、澗暗くして空きが如く、雲氣密聚して山峰重複し、城樓の遠近に出沒するを見る。昔秦王苻堅の中華を亂しし時、晉は洛陽を去りて南に遷り、謝安、謝玄に賴りて討賊興復の事を託す。謝玄乃ち苻堅を此山に破る。其道高邁にして英名後世に傳はれども、其身は忽ちにして死亡せり。我れ平生二公の善謀を仰慕すれども、命拙くして要職を得ず。親戚舊知に別れて宦遊を事とし、再び吳都を去りて河陽に客となり、奔馳して休息するに遑なく、常に風塵の犯す所となり、

【一九】令圖。善謀なり。
【二〇】浩蕩。宏遠なる貌。親知は親族舊知。
【二一】連翩。鳥の飛ぶ貌。征軸は行車。
【二二】館娃宮。吳に在り、昔吳王夫差の築きて以て西施を置きし宮。
【二三】河陽谷。石崇の別業のありし處。
【二四】春秀。春の花、少壯の時に喩ふ。
【二五】秋場。晩年の隱居に喩ふ。

今や既に衰老に及びぬ。庶はくは早く老を告げて歸田せんことを。

(一)徐都曹に和す

謝　玄　暉

(二)宛洛遨遊するに佳く、春色(三)皇州に滿つ。軫を(四)青郊の路に結び、迥に蒼江の流を瞰る。(五)日華川上に動き、風光草際に浮ぶ。桃李(六)蹊徑を成し、(七)桑楡道周を陰ふ。(八)東都已に載を俶む。言に歸りて(九)綠疇を望め。

【大意】此れ徐勉が新亭渚を出で、帝都に遊ばんとするを送るなり。帝都は遊樂の好地にして、今や春色正に闌なり。車を郊外に驅り江流を眺めつつ往けば、日出でて風吹き草木光華あり。桃李の蹊を成し、桑楡の茂盛するを見る。君帝都に往きて春耕の始まるを見ば、宜しく歸りて田疇を治むべし。

【一】徐都曹。徐勉なり。
【二】宛洛。河南省の二縣の名。
【三】皇州。帝都なり。卽ち宛洛。時に都は江東に在り、ここに宛洛といふは古都を借りて言ふのみ。
【四】青郊。春郊なり。
【五】日華。日光なり。
【六】蹊徑。こみち。
【七】桑楡。木の名。道周は道のほとり。
【八】東都。卽ち宛洛なり。載は事なり、春耕の事をいふ。詩經に「俶めて南畝に載あり」とあり。
【九】綠疇。綠田なり。

(一)王主簿が怨情に和す

謝　玄　暉

【一】王主簿。名は季哲。

(二)掖庭絶國に聘せられ、(三)長門歡宴を失ふ。相逢ひて(四)蘼蕪を詠じ、寵を辭して(五)班扇を悲む。花叢數蝶亂れ、風簾雙燕入る。徒に春帶をして賒からしめ、坐に紅裝の變ずるを惜む。平生一顧重く、宿昔千金賤し。(六)故人心尙ほ爾り、(七)故心人見えず。

【大意】 王昭君は匈奴に嫁し、陳皇后は君寵を失ふ。女子の末路は皆此の如し。故に故夫に逢ひては蘼蕪の詩を詠じ、寵を失ひては團扇の歌を作れり。蝶燕皆耦ありて花叢風簾に居れども、我れ獨り匹儔を得ざるを悲み、身痩せて衣帶緩く、年逝きて紅顏衰ふ。是れ我が少年の時、顧眄を重んじ、千金を賤みて、容易に人に許さざりしが爲なり。故夫すら心變りて舊妻を棄つ。故心を執りて變らざる者、世にあることとなし。嘆ずべきかな。

【二】 掖庭。宮の名。王昭君の居りし處、因つて王昭君に喩ふ。絶國は匈奴なり。
【三】 長門。宮の名、漢の陳皇后の寵を失ひて幽閉せられし處。因つて陳皇后に喩ふ。
【四】 蘼蕪。草の名、古樂府に「山に上りて蘼蕪を採り、山を下りて故夫に逢ふ」とあり。
【五】 班扇。漢の班婕妤君寵を失ひて團扇歌を作る。
【六】 故人。舊夫なり。
【七】 故心。もとの如く變らざる心。

(一)謝宣城に和す　沈休文

(二)王喬飛鳧の舄、(三)東

【一】 謝宣城。謝朓宣城太守となり。病に臥して詩を作る。休文因つて之に和す。

方金馬門。宦に從へども宦侶にあらず、世を避くれども喧を避くるにあらず。余を揆りて(四)皇鑒を發し、(五)短翮屢ゝ飛翻す。晨に趨りて(六)建禮に游び、晩に(七)沐して郊園に臥す。賓至れば(八)塵榻を下し、憂來れば綠罇を命ず。昔賢は(九)時雨に侔しく、(一〇)今守は蘭蓀より馥し。神交夢寐に疲れ、路遠くして思存を隔つ。拙に牽かれて(一一)東汜を謬り、浮惰して(一二)西崐に及ぶ。(一三)顧循するに良に菲薄、何を以てか(一四)璵璠に儷はん。將に(一五)渤澥に隨ひて去り、羽を刷めて清源に汎ばんとす。

【大意】我れ王喬の如く宦に從へども宦侶にあらず、又東方朔の如く仕官して世を避くれども喧を避くるにあらず。天子我が才器を揆り、短才を以て登庸せられ、晨には建禮門に出仕し、暮には歸

【二】王喬。後漢書に「王喬は河東の人なり、顯宗の時葉令となる、喬神術あり、每月朔望參朝す、帝其來ること數にして車騎を見ざるを怪み、密に太史をして之を伺はしむ。其去るに臨んで輒ち雙鳧あり、東南より飛び來る、羅を擧げて之を張る、ただ一雙の舃を得たり」とあり。

【三】東方。史記に「漢の武帝の時、齊人東方朔といふ者あり、時に席中に坐し、酒酣なれば地に據りて歌つて曰く、俗に陸沈し、世を金馬門に避くと」とあり。

【四】皇鑒。天子の鑒識。

【五】短翮。短才に喩ふ。

【六】建禮。宮門の名。

【七】沐。休暇を賜ふこと。

【八】塵榻。塵のかかれる腰掛。

【九】時雨。時を得たる雨。

【一〇】今守。宣城太守謝朓を指す。蘭蓀は香草の名。

【一一】東汜。日の初めて出づる處、少壯に比す。

【一二】西崐。日の入る處。衰老に比す。

【一三】顧循。自ら顧思すること。菲薄は才能の薄きこと。

【一四】璵璠。美玉なり。謝朓に喩ふ。

【一五】渤澥。海の名。

りて郊園に臥し、塵榻を下して客と語り、綠酒を酌んで憂を忘る。昔賢は時雨の化の如く、宣城太守たる足下の德は蘭よりも香し。我れ足下と離居して思を馳せ、夢に神魂相交るのみ。余や少年の時、拙才に牽かれ、謬りて王事に就き、浮惰疎昧にして衰老に至る。自ら顧るに我が才誠に薄し。何ぞ足下の偉才に比するを得ん。願くは彼の鳥の如く渤澥の水に泛び、羽毛を洗ひて清波を弄せんことを。

(一)王中丞思遠が月を詠ずるに(二)應ず　沈休文

(三)月華靜夜に臨み、夜靜にして(四)氛埃を滅す。(五)方暉戸を竟りて入り、(六)圓影隙中より來る。高樓(七)思婦を切にし、(八)西園上才を游ばしむ。(九)網軒珠綴に映じ、(一〇)應門綠苔を照す。(一一)洞房殊に未だ曉けず。清光信に悠な

【一】王中丞。名は思遠、御史中丞たり。
【二】應。和なり。
【三】月華。月なり。
【四】氛埃。塵なり。
【五】方暉。戸は方形なり、戸よりさし込む光なる故方暉といふ。
【六】圓影。隙穴圓し、故に影も亦圓し。
【七】思婦。夫を思ふ妻。
【八】西園。魏の鄴都の西園なり、魏の文帝毎に月夜を以て文人才子を集めて此に遊べり。
【九】網軒。軒は檐なり、網及び珠綴を以て之を飾る。
【一〇】應門。門の名、班婕妤の自傷賦に「應門閉ぢて楚闥扃せり」とあり。
【一一】洞房。深閨なり。

る哉。

【大意】夜靜に月淸くして塵氛なく、光輝戶隙より入りて、或は方或は圓なり。高樓の思婦は、之を見て思切なるべく、西園には才子相集りて宴遊すらん。或は網軒の珠綴を照し、或は應門の綠苔を照し、淸光曉に至るまで去らず。信に悠遠なり。

(一)冬節の後(二)丞相の第に至り(三)世子に詣づる車中の作　沈休文

(四)廉公權勢を失ひ、(五)門館虛盈あり。貴賤猶ほ此の如し。況んや乃ち(六)曲池の平なるをや。高車塵未だ滅えず、珠履故より餘聲あり。賓階(七)綠錢滿ち、(八)客位紫苔生ず。誰か(九)九原の上に當り、(一〇)鬱鬱として佳城を望

【一】冬節。冬至の日。
【二】丞相。齊の豫章王嶷は太祖の第二子なり、薨じて丞相揚州牧を贈らる。第は宅なり。
【三】世子。諸侯の嫡子をいふ、嶷の長子廉なり。
【四】廉公。趙の廉頗、權を失ふや門下の客皆去る、復た將となるに及んで客復た來る。
【五】門館。賓客の居る處。
【六】曲池平。桓子新論に「雍門周、孟嘗君に謂ひて曰く、千秋萬歲の後、高臺旣已に傾き、曲池又以て平ならんと」とあり。主人の死をいふ。
【七】綠錢。靑苔なり。
【八】客位。客の席。
【九】九原。墓地なり。
【一〇】鬱鬱。憂ふる貌。佳城は墳墓。

まん。

【大意】此れ盛に就き衰を去る世態の輕薄なるを慨し、己獨り然らざるを言ふなり。昔廉頗の勢を失ふや賓客皆去り、復た將となるや客復た來れりといふ。貴ければ就き、賤しければ去ること此の如し。況んや主人の死後をや。人の來り就く者なきは、固より宜なり。丞相の車塵未だ滅えず、珠履の聲尚ほ殘れるに、(死して未だ幾ならざるをいふ)賓客の階席已に苔を生じ、(來り訪ふ者なければなり)復た憂思を抱いて其墳墓を弔ふ者なし。世態の輕薄なること誠に慨すべきなり。

(一)學省の愁臥一首　沈休文

秋風(二)廣陌を吹き、(三)蕭瑟として南闈に入る。愁人(四)軒を掩ひて臥せば、高窓時に扉を動かす。虛館清陰滿ち、(五)神宇曖として微微たり。(六)網蟲戶に垂れて織り、夕鳥欄に傍ひて飛ぶ。(七)纓珮空しく忝をなし、(八)江海事多く違ふ。山中(九)桂樹あり、(一〇)歲暮言に歸るべし。

【一】學省。國學なり、齊の明帝の卽位するや、休文國子祭酒(大學總長)に遷る。
【二】廣陌。廣き街路。
【三】蕭瑟。淋しき聲。南闈は南門。
【四】軒。門なり。
【五】神宇。屋室美しくして神の如きなり。曖は暗なり。微微は明かならざる貌。
【六】網蟲。蜘蛛なり。
【七】纓珮。官服の飾なり。
【八】江海。隱遁なり。
【九】桂樹。芳香にして貞堅なり、故に君子之を尙ぶ。
【一〇】歲暮。衰老なり。

【大意】秋風蕭條として南門に入る時、我れ愁思を抱き門を閉ぢて獨り臥せば、室宇高深にして淸陰の氣自ら滿ち、日暮れんとして四方漸く暗く、蜘蛛は戶外に網を結び、鳥は欄干に傍ひて塒に歸る。我れ官に在るも徒に身の辱をなすのみ、隱遁の志久しく遂げず。山中に桂樹の賞すべきあり。願くは衰老を待ちて山中に歸休せんことを。

湖中の鴈を詠ず　　沈休文

白水春塘に滿ち、旅鴈每に廻翔す。流に唼みて（一）弱藻を牽き、翮を斂めて餘霜を帶ぶ。羣り浮んで輕浪を動かし、單り汎んで（二）孤光を逐ふ。懸に飛んで竟に下らず、亂れ起ちて未だ行を成さず。羽を刷めて（三）搖漾を同うし、一擧して故鄕に還らん。

【大意】春水滿つるとき旅鴈其間に飛翔し、藻を唼みて之を食ひ、羽を斂めて餘霜を拂ひ、羣り浮んで浪を動かし、獨り泛んで遠光を逐ひ、高く飛んで下らず。亂れ起ちて未だ列を成さず。願くは此鳥と同じく飛び、去つて故鄕に還らんことを。

【一】弱藻。水草なり。
【二】孤光。遠光といふが如し。
【三】搖漾。飛ぶ貌。

三月三日(一)率爾に篇を成す

沈休文

麗日(二)元巳に屬し、(三)年芳具に斯に在り。開花已に樹を匝り、(四)流嚶復た枝に滿つ。洛陽繁華の子、長安輕薄の兒。東のかた(五)千金堰に出で、西のかた(六)鴈鶩陂に臨む。(七)游絲空に映じて轉じ、高楊地を拂ひて垂る。(八)綠幘文照曜し、(九)紫燕光陸離たり。淸晨(一〇)伊水に戲れ、薄暮(一一)蘭池に宿す。(一二)象筵寶瑟を鳴し、(一三)金瓶羽卮を汎ぶ。寧ろ憶はんや春蠶起き、日暮れて桑萎まんと欲するを。(一四)長袂屢以て拂ひ、(一五)彫胡方に自ら炊ぐ。愛すれども見るべからず、(一六)宿昔容儀を減ぜり。且く當に情を忘れて去るべし。歎息するも獨り何をか爲さん。

【大意】今日は上巳の節句にして、折しも天

【一】率爾。突然といふが如し。
【二】元巳。上巳の節句。
【三】年芳。春花のうるはしさ。
【四】流嚶。一本流鸎に作る、鸎は鶯なり。
【五】千金堰。堤の名。洛陽の東に在り。
【六】鴈鶩陂。堤の名、長安の西に在り。
【七】游絲。かげろふ。
【八】綠幘。冠なり。
【九】紫燕。良馬の名。陸離は光色の貌。
【一〇】伊水。川の名。洛陽の附近にあり。
【一一】蘭池。宮の名。長安に在り。
【一二】象筵。簟なり。飾るに象牙を以てす。寶瑟は樂器。
【一三】金瓶。酒を貯ふる器。羽卮は杯。
【一四】長袂。長袖なり。楚辭に「長袂面を拂つて善く客を留む」とあり。
【一五】彫胡。草の名、其實美味なり。宋玉の諷賦に「彫胡の飯、露葵の羹を炊ぎ來りて臣に勸めて食はしむ」とあり。
【一六】宿昔。舊來の愛をいふ。

氣晴朗なれば、花は樹を匝りて開き、鶯は枝を繞りて鳴けり。想ふに洛陽長安の貴公子は、或は千金堰に遊び、或は鴟鷲陂に遊び、遊絲天に映じ、楊柳地を拂ふ所、綠冠の美しきを戴き、駿馬の色よきに跨り、伊水に蘭池に憩宿し、酒筵を開きて樂を奏し杯を銜み、美女も亦行樂して蠶の起き桑の凋めるをも打ち忘れ、長袖を拂つて客を留め彫胡の飯を炊きて客に勸め、共に享樂に耽りつつあらん。我れ之を好めども、行きて樂を共にする能はず。宿昔の憂徒に我が美容を損するのみ。如かず喜憂を忘れ去らんには。獨り憂ふるも何をかなさん。

雜擬上

古詩に擬す十二首　　陸士衡

『行き行き重ねて行き行く』に擬す

(一)悠悠として行邁遠く、(二)戚戚として憂思深し。此思亦何をか思ふ。(三)君が徽と音とを思ふ。音徽日夜離れ、(四)緬邈たること飛沈の若し。(五)王鮪河岫を懷ひ、(六)晨風北林を思ふ。(七)遊子天末に眇

【一】悠悠。遠き貌。行邁は行くこと。
【二】戚戚。憂ふる貌。
【三】君。夫を指す、徽は美德、音は音信。
【四】緬邈。遠きなり。
【五】王鮪。魚の名。
【六】晨風。くまだか。
【七】遊子。遠行せる夫を指す。天末は遠方なり。

なり、(八)遠期尋ぬべからず。(九)驚飇反信を褰ち、歸雲音を寄せ難し。佇立して萬里を想へば、沈憂我が心に萃る。衣を攬れば餘帶あり、形を循れば衿に盈たず。去り去りて(一〇)情累を遺て、安處して淸琴を撫せん。

【大意】閨怨の詩なり。我が夫遠行して在らず。我れ之を思ふこと深し。我れ何をか思ふ。夫の美德と音信とを思ふなり。然も美德音信の接すべからざること、飛沈せるが如し。夫れ魚鳥すら猶ほ其居を思ふ。我が夫も必ず我を思ひつつあらん。然も遠く離れて歸期知るべからず。廻風來れども反信を絕ち、歸雲去れども以て音信を寄せ難し。佇立して遠方を望めば、深憂我が心に萃り、身瘦せて帶長く衿寬し。ああ此憂を捨て去り、琴を彈じて自ら慰めん。

『今日良宴會』に擬す

閑夜(一一)懽友に命じ、(一二)迎風館に置酒す。(一三)齊僮梁甫の吟、(一四)秦娥張女の彈。哀音棟宇を繞り、遺響(一五)雲漢に入る。四坐咸志を同うし、(一六)羽觴算ふべからず。(一七)高譚一に何ぞ綺なる、蔚たること朝霞の爛たるが若し。人生幾何もなし、樂をなすこと常に晏きを苦む。彼の

【八】遠期。一本還期に作る。
【九】驚飇。廻風なり。
【一〇】情累。心の煩ひ。
【一一】懽友。親友なり。
【一二】迎風館。館の名。西京賦に見ゆ。
【一三】齊僮。古の善く歌ふ者。梁甫吟は歌曲の名。
【一四】秦娥。古の善く歌ふ者。張女彈は歌曲の名。
【一五】雲漢。天上なり。
【一六】羽觴。杯なり。
【一七】高譚。高尚なる談話。

(一八)伺晨の鳥に譬ふ。聲を揚げて當に旦に及ぶべし。曷爲れぞ恆に憂苦し、此の貧と賤とを守らん。

【大意】人當に歡樂を盡すべきを言ふ。閑夜無事の時賓友を會して宴し、美歌を歌ひ妙樂を奏すれば、餘聲梁を繞り、遙に散じて天に入る。坐客皆飽醉して、杯を擧ぐること多く、談話綺美にして人品盛美なり。人の世に在ること幾何ならず、樂をなすこと常に晩し。彼の雞の晨を待ちて鳴くが如く、人の樂をなすも宜しく早きに及ぶべきなり。何ぞ永く貧賤に在りて憂苦するを爲すべけんや。

「迢迢たる牽牛星」に擬す

(一九)昭昭たる清漢の暉、(二〇)粲粲として天步を光す。(二一)牽牛西北に廻り、(二二)織女東南に顧る。(二三)華容一に何ぞ冶しき、手を揮ふこと(二四)素を振ふが如し。彼の河の梁なきを怨み、此の年歲の暮るるを悲む。(二五)跂として彼れ良緣なく、(二六)睆焉として度るを得ず。領を引きて(二七)大川を望めば、雙涕霑露の如し。

【大意】天河天上に明なり。之を隔てて牽牛織女の二星あり。織女は容姿艷冶にして手の白きこと練の如し。天河に橋なきを以て、牽牛に會せんことを望めども良緣なく、ただ相視て悲むの

【一八】伺晨の鳥。雞をいふ。
【一九】昭昭。明なる貌。清漢は天河。
【二〇】粲粲。鮮美の貌。
【二一】牽牛。星の名。
【二二】織女。星の名。
【二三】華容。美姿なり。
【二四】素。ねりぎぬ。
【二五】跂。踵を擧げて待つこと。詩經に「跂たる彼の織女、終日七襄す」とあり。
【二六】睆焉。相視る貌。
【二七】大川。天河なり。

み。雙涙流れて露の如し。

『江を渉りて芙蓉を采る』に擬す

山に上りて（二八）瓊蘂を采る。（二九）穹谷芳蘭饒し。采り采れども（三〇）掬に盈たず、（三一）悠悠として所歡を懷ふ。故郷一に何ぞ曠なる、山川阻りて且つ難し。沈思萬里に錘り、（三二）躑躅して獨り吟歎す。

【大意】思婦遠行の夫を思ふなり。山に上りて玉華を採り、谷に臨みて芳蘭を採る。之を採りて未だ把に盈たざるに、忽ち遠行の夫を思ふ。夫は山川萬里の外に在り。我れ之を思ひ徘徊して長嘆す。

『青青たる河畔の草』に擬す

（三三）靡靡たる江蘺の草、（三四）熠燿として河側に生ず。（三五）皎皎たる彼の姝女、（三六）阿那として軒に當りて織る。粲粲として容姿妖しく、（三七）灼灼として顏色美し。（三八）良人遊んで歸らず、偏り棲みて獨り（三九）隻翼。（四〇）空房悲風來り、中夜起ちて歎息す。

【大意】美女あり、窓に當りて織る。その容姿極めて美艶にして、江蘺の河畔に生ずるが如し。

【二八】瓊蘂。玉華といふが如し。
【二九】穹谷。深き谷。
【三〇】掬。ひとにぎり。
【三一】悠悠。遠き貌。所歡は夫なり。
【三二】躑躅。徘徊なり。
【三三】靡靡。細く弱き貌。江蘺は香草なり。
【三四】熠燿。光色の貌。
【三五】皎皎。明潔の貌。姝女は美女。
【三六】阿那。柔順の貌。軒は窓なり。
【三七】灼灼。ひかりかがやく貌。
【三八】良人。夫をいふ。
【三九】隻翼。相手のなきこと。
【四〇】空房。空閨なり。

夫は遠遊して歸らず。鳥の孤棲して翼を比ぶるなきが如し。空閨に孤居して悲風の聲を聞き、忽ち起つて嘆息す。

『明月何ぞ皎皎たる』に擬す

安に北堂の上に寢ぬれば、明月我が牖に入り、之を照して餘暉あり、之を攬れば手に盈たず。涼風曲房を繞り、寒蟬高柳に鳴く。(四一)踟蹰して節物に感ず。(四二)我が行永く已に久し。遊宦成るなきに會し、離思常に守り難し。

【大意】我れ靜に北堂の上に臥すれば、明月來りて我を照す。光輝を取らんとするも手に盈たず。(虛しく夫の名ありて、見る能はざるに喩ふ)今や涼風閨に入り、寒蟬柳に鳴くの時候となり、夫の去ること日既に久し。夫は遊宦して業未だ成らず。我が離別の思自ら堪へ難し。

(四三)『蘭若朝陽生ず』に擬す

(四四)嘉樹朝陽に生じ、凝霜其條を封ず。心を執りて時信を守り、歲寒きも終に彫まず。(四五)美人何ぞ其れ曠き、灼灼として(四六)雲霄に在り。隆想年月を彌へ、長嘯飛飆に入る。領を引きて(四七)天末を望む。彼の陽に向ふの(四八)翹に譬ふ。

(四一) 踟蹰。徘徊なり。
(四二) 我。夫を指して我とす。
(四三) 蘭若。皆香草なり。
(四四) 嘉樹。松栢なり。朝陽とは山の東をいふ。
(四五) 美人。夫を指す。
(四六) 雲霄。天空なり。
(四七) 天末。天外といふが如し。
(四八) 翹。花の秀でしもの。

【大意】我れ貞堅の志を執ること松栢の寒を經るも凋落せざるが如し。我が夫は遠く天外に客たり。我れ之を思ふこと久しく、常に風に對して吟嘯す。又遙に天外を望むこと、葵藿の頭を傾けて日に向ふが如し。

『青青たる陵上の柏』に擬す

(四九)冉冉たる高陵の蘋、(五〇)習習たる風に隨ふ翰。人生當に幾時ぞ、彼の濁水の瀾に譬ふ。(五一)戚戚として滯念多く、置酒して(五二)所歡を宴す。駕を方べて飛轡を振ひ、遠遊して長安に入る。(五三)名都一に何ぞ綺なる、城闕鬱として(五四)盤桓たり。(五五)飛閣虹帶を纓し、(五六)曾臺雲冠を冒ふ。高門北闕に羅り、(五七)甲第椒と蘭と。俠客(五八)絕景を控き、都人(五九)玉軒に驂す。遨遊して情願を放にす。慷慨して誰が爲にか歎かん。

【大意】山上に生ずる靈草は、枝を高風の間に振ひて枯死することなきも、人生の果敢なきは、濁水の竭き易きが如し。何ぞ憂念を抱くをなさん。宜しく朋友と歡宴すべきなり。馬に跨りて長安

【四九】冉冉。進長の貌。高陵は高丘。山海經に「崑崙の丘に草あり、名づけて蕡といふ、葵の如し」とあり、字書に「蕡も亦蘋の字」とあり。
【五〇】習習。しばしば飛ぶ貌。
【五一】戚戚。憂ふる貌。
【五二】所歡。朋友なり。
【五三】名都。長安なり。綺は美なり。
【五四】盤桓。廣大の貌。
【五五】飛閣。高閣なり。
【五六】曾臺。層臺なり。
【五七】甲第。甲乙次第ある大邸。椒蘭は室に塗りて芳香を取る。
【五八】絕景。馬の名。
【五九】玉軒。玉を以て飾れる車。驂は駕なり。

に遊べは、城闕廣大にして美麗に、高閣虹を繞らし、層臺雲外に聳え、王公の邸宅相竝んで立ち、行遊の人駿馬を控き玉車に乘りて、往來織るが如し。我れ亦行きて遊樂を放にせん。何ぞ獨り嘆息するをなさんや。

『東城一に何ぞ高き』に擬す

西山何ぞ其れ峻き、(六〇)曾曲鬱として崔嵬たり。(六一)零露天に彌りて墜ち、(六二)蕙葉林に憑りて衰ふ。寒暑相因り襲り、時の逝くこと忽として頽るるが如し。(六三)三閭飛轡を結び、(六四)大耋落暉を嗟く。曷爲れぞ世務に牽かれ、中心違ふあるが若くなる。(六五)京洛妖麗多く、玉顏(六六)瓊蕤に侔し。閑夜鳴琴を撫し、(六七)惠音淸く且つ悲し。長歌(六八)促節に赴き、哀響(六九)高徽を逐ふ。一唱すれば萬夫歎き、再唱すれば梁塵飛ぶ。(七〇)河曲の鳥となり、(七一)豐水の湄に雙遊せんことを思ふ。

【大意】山は千歳を經て崩れざるも、露や香草や、或は零ち或は凋む。人も亦此の如し。寒暑逝

【六〇】曾曲。重疊せる山曲。崔嵬は高大の貌。
【六一】零露。零は落なり。
【六二】蕙葉。蕙は香草。
【六三】三閭。楚の屈原をいふ。離騷に「余が馬を咸池に飲ひ、余が轡を扶桑に總ぶ」とあり。
【六四】大耋。老人なり。易經に「日昃の離、缶を鼓して歌はずんば則ち大耋の嗟あり」とあり。落暉は落日。
【六五】京洛。洛陽の都。
【六六】瓊蕤。玉花なり。
【六七】惠音。順和なる聲。
【六八】促節。急調なり。
【六九】高徽。急調なり。
【七〇】河曲。河のほとり。
【七一】豐水。一本灃水に作る。川の名。

きて人亦老ゆ。屈原の遠遊して以て長生を求め、老人の日暮を嘆じて之を惜む所以なり。何ぞ俗務に拘束せられ、歡賞の心に違ふべけんや。都會には美女多く容貌玉花の如し。琴を鼓し歌を發すれば、人皆その妙を稱し、淸韻梁を繞りて塵を動かす。我れ願くは此女と相雙ぶこと鴛鴦の如く、共に灃水の湄に遊ばんことを。

『西北に高樓あり』に擬す

高樓一に何ぞ峻き、(七二)迢迢として峻く且つ安し。(七三)綺窻塵冥を出で、(七四)飛陛雲端を躡む。佳人琴瑟を撫し、(七五)纖手淸く且つ閑なり。芳氣風に隨ひて結び、哀響馥しきこと蘭の若し。(七六)玉容誰か顧みるを待ん、城を傾くること(七七)一彈に在り。佇立して日の昃くを望み、(七八)躑躅して再三歎く。佇立の久しきを怨みず。但(七九)歌者の歡を願ふ。(八〇)歸鴻の羽に駕して、翼を雙飛の翰に比べんことを思ふ。

【大意】美人に喩へて賢才の用ひられざるを嘆くなり。高樓あり綺窻塵埃の外に聳え、閣道雲表に立つ。美人あり其上に坐し琴瑟を彈ず。芳氣風に隨つて凝り、哀韻蘭香の如し。(君子美德あり哀歎するに喩ふ)玉姿人の顧みるなきも、彈奏の妙は城國を傾くるに足る。

【七二】迢迢。高き貌。
【七三】綺窻。うすぎぬにて飾れる窻。塵冥は昏塵。
【七四】飛陛。閣道なり。雲端は雲上。
【七五】纖手。きやしやなる手。
【七六】玉容。美しき容姿。
【七七】一彈。一たび琴瑟を彈ずること。
【七八】躑躅。徘徊なり。
【七九】歌者。唱和する人。
【八〇】歸鴻。歸雁なり。

(才能の凡ならざるに喩ふ) 佇立して落日を望み嘆聲を漏らすと再三なり。(用ひられずして衰老の嘆を發するに喩ふ) 佇立の久しきを怨みず、ただ唱和する者の歡を得、(時を待つの久しきを怨みず、ただ知己の來らんことを願ふに喩ふ) 心を同うして共に翔らんことを願ふ。

『庭中に奇樹あり』に擬す

(八一)歡友蘭時に往き、迢迢として(八二)音徽を匿す。(八三)虞淵絶景を引き、(八四)四節逝くこと飛ぶが若し。(八五)芳草久しく已に茂るも、佳人竟に歸らず。躑躅して林洛に遵へば、(八六)惠風我が懷に入る。物に感じて(八七)所歡を戀ひ、此を采りて誰にか貽らんと欲する。

【大意】友を思ふ詩なり。友は秋蘭花を開く頃此地を去り、爾來絶えて音信なし。歲月の逝くこと飛ぶが如く、今や春草の萋萋たるを見るも、吾が友尚ほ未だ歸らず。獨り林池の間を漫歩すれば、和風我が襟懷に入る。春色に感じて友を思ふこと轉切なり。此の芳草を採りて將た誰にか贈るべき。

『明月夜光に皎たり』に擬す

【八一】歡友。親友なり、蘭時は秋時なり。
【八二】音徽。音信なり。
【八三】虞淵。日の入る處。絶景は落日。
【八四】四節。四季なり。
【八五】芳草。春草なり。佳人は歡友を指す。楚辭に「王孫遊んで歸らず、春草生じて萋萋たり」とあり。
【八六】惠風。春風なり。
【八七】所歡。歡友なり。

歳暮れて涼風發り、(八八)昊天肅として明明たり。(八九)招搖西北に指し、(九〇)天漢東南に傾く。(九一)朗月閑房を照し、蟋蟀戸庭に吟ず。翩翩として歸鴈集り、(九二)嘒嘒として寒蟬鳴く。疇昔同宴の友、翰く飛んで(九三)高冥に戻れり。美を服して聲聽を改め、愉に居て舊情を遣る。(九四)織女機杼なく、(九五)大梁楹を架せず。

【大意】貴人の舊交を念はざるを刺る詩なり。今や涼風起りて天澄み氣清く、招搖は西北を指し、天河は東南に傾き、明月閑室を照し蟋蟀戸庭に鳴き、歸鴈翔り寒蟬咽ぶ。見るもの聞くもの、悉く悲秋の色ならざるはなし。昔我と歡宴を共にせし友は、今既に貴顯の位に升り、美服を纏ひ愉樂に安んじ、昔時の聲聽を改めて、友人の故情を棄つ。恰も織女大梁の其名のみありて、機杼を操り楹を架する能はざるが如く、虚しく相知の名ありて、其實なきを悲まざるを得ず。

【八八】昊天。昊は大なり。肅は嚴なり。
【八九】招搖。星の名。呂氏春秋に「季秋の月招搖戌を指す」とあり。
【九〇】天漢。あまのがは。
【九一】朗月。明月なり。閑房は靜室。
【九二】嘒嘒。小聲なり。
【九三】高冥。天邊なり。
【九四】織女。星の名。
【九五】大梁。星の名。楹は柱。

『四愁の詩』に擬す

張孟陽

我が思ふ所（一）營州に在り、往いて之に從はんと欲すれば路阻りて脩し。崖に登り遠く望めば（二）涕泗流る。我の懷へる心傷憂す。（三）佳人我に綠綺琴を遺る。何を以てか之に贈らん（四）雙南金。願くは流波に因りて（五）重深を超えん。（六）終然致すなくして永吟を增す。

【大意】己明君を得て之に事へんとするも、讒佞の阻つる所となりて親近する能はざるを嘆ずるなり。我が思ふ所の人は營州に在り。之に親近せんとするも、路隔りて且つ遠し。高處に登りて遠望すれば心憂へて涙流る。佳人我に綠綺琴を贈れり。我之に酬ゆるに雙南金を以てせんとす（君我を待つこと甚だ深し、故に之に事ふるに忠誠を以てせんとするとの意）我れ流波に因り（忠信に喩ふ）て、重深（讒佞に喩ふ）を越えんと欲すれども能はず。ただ益々長嘆するのみ。

【一】營州。北方の州の名。
【二】涕泗。なみだ。
【三】佳人。賢君に喩ふ。綠綺は琴の名。
【四】雙南金。美金なり。忠義に喩ふ。
【五】重深。讒佞に喩ふ。
【六】終然。つひに。

古詩に擬す　　陶淵明

日暮れて天に雲なく、春風（一）微和を扇ぐ。佳人清夜を美し。曙に達するまで（二）酣み且つ歌ふ。歌竟りて長く歎息し、此を持して人を感ぜしむるこ

【一】微和。和げる微風。
【二】酣。酒を飲みて樂むこと。

と多し。明明たる雲間の月、(三)灼灼たる葉中の花。豈一時の好なからんや、久しからざる當に如何すべき。

【三】灼灼。明なる貌。

【大意】歡樂の久しからざるを嘆ずるなり。日暮れて天に雲なく春風和かなるとき、美人此の良夜を愛し、夜を徹して酣歌せるも、歌終りて歎息せり。此事人をして疑を起さしむ。ああ我れ此意を知れり。夫れ雲間の月、葉中の花、豈一時の盛美なからんや。然れども盛なるものは衰へ、美なるものは褪せ、其の久しからざるを如何せん。これ美人の歎息を發せる所以なり。

(一)魏の太子の鄴中集に擬す八首　謝靈運

(二)建安の末、(三)余時に鄴宮に在り。朝に遊び夕に讌し、歡愉の極を究む。天下の良辰美景賞心樂事、四者并せ難し。今(四)昆弟友朋、二三の(五)諸彥共に之を盡せり。古來この娛、書籍に未だ見えず。何となれば楚の襄王の時、(六)宋玉唐景あり。梁の孝王の時、(七)鄒枚嚴馬あり、遊ぶ者美なりとす。而も(八)其主は文ならず。漢の武帝の時、

【一】魏太子。曹丕なり。鄴は魏の都。
【二】建安は、後漢の獻帝の年號。
【三】余。曹丕に代りて謂ふ。
【四】昆弟。兄弟なり、後の平原侯植は丕の弟なり。友朋は王粲、陳琳等をいふ。
【五】諸彥。美士を彥といふ。
【六】宋玉唐景。宋玉、唐勒、景差なり。皆楚の大夫にして辭賦に巧なり。
【七】鄒枚嚴馬。鄒陽、枚乘、嚴忌、司馬相如なり、皆梁王

(九)徐樂諸才應對の能に備はれり、而も(一〇)雄猜多忌なり。豈(一一)晤言の適を獲んや。(一二)方將を誣ひず庶くは必ず今日を賢れりとせんのみ。歳月流るるが如く、(一三)零落して將に盡きんとす。文を撰し人を懷ひ、往に感じて愴を增す。其辭に曰く、

魏太子

百川巨海に赴き、衆星(一四)北辰を環る。照灼として(一五)霄漢に爛き、(一六)遙裔として長津に起る。天地中ごろ横潰し、(一七)家王生民を拯ふ。(一八)區宇既に滌蕩せられ、(一九)羣英必ず來り臻る。此の賢を欽ふの性を忝うし、由來常に仁を懷ふ。況んや(二〇)衆君子に値ふをや。心を傾けて日新を隆にす。物を論ずるに浮説なく、理を析ちて實に敷陳す。(二一)羅縷豈に辭を闕かんや、(二二)窈窕として天人を究む。(二三)澄觴金罍に滿ち、(二四)連榻華茵を設く。

の賓客たり、詞賦に巧なり。
【八】其主。梁の孝王。
【九】徐樂。燕の無終の人、武帝に仕へて郎中たり。
【一〇】雄猜多忌。武帝の猜疑心多きをいふ。

【一一】晤言。歡談なり。適は樂なり。
【一二】方將。まさに壯なること。
【一三】零落。應瑒、劉楨等の死をいふ。

【一四】北辰。北極星。
【一五】霄漢。天空なり。
【一六】遙裔。遠き貌。
【一七】家王。魏の太祖武帝をいふ。
【一八】區宇。天下なり。滌蕩は清淨なり。

【一九】羣英。王粲、陳琳等をいふ。
【二〇】衆君子。王粲、陳琳等をいふ。
【二一】羅縷。詳述といふが如し。
【二二】窈窕。深邃の貌。
【二三】澄觴。清酒なり。金罍は

(二五)急絃飛聽を動かし、淸歌梁塵を拂ふ。何ぞ言はん相遇ふこと易しと、此歡信に珍とすべし。

【大意】百川は海を以て尊しとなす、故に皆之に赴く。衆星は北辰を以て主となす、故に皆之を繞る。萬民の君に歸するも亦かくの如し。漢末に至りて天下忽ち爭亂するや、我が父（魏武曹操）起ちて之を鎭め、天下復た平安なり。是に於て羣英爭つて之に歸服す。我既に賢を尊ぶの性を稟け、常に仁德の人を見んことを思ふ。今羣英に値ふを得、心を傾けて日新の德を脩め、論を著し理を析ち、必ず其實を敷陳して浮說なく、文章を詳述して闕失あるなく、皆天人の理を究め、榻を連ねて美酒を酌み、絃歌の妙飛鳥を感ぜしめ、梁上の塵を飛ばす。その歡樂再び遇ひ難し。

金樽。

【二四】連榻。こしかけ。華茵は美しき敷物。

【二五】急絃。急調なり。飛聽は飛鳥の下りて聽くこと。

王粲

家もと(二六)秦川貴公の子孫なり。亂に遭ひて流寓し、自ら傷み情多し。

(二七)幽厲昔崩亂、(二八)桓靈今板蕩。(二九)伊洛既に燎煙、(三〇)函嶠沒して像なし。裝を整へて秦川を辭

【二六】秦川。地名、王粲の鄕里。

【二七】幽厲。周の二王なり。

【二八】桓靈。後漢の二帝なり。板蕩は世の亂れ敗るるをいふ。

【二九】伊洛。二川の名、洛陽の附近にあり、因つて洛陽をいふ。燎煙は焚燒せられしこと。

【三〇】函嶠。二關の名、長安をいふ。

し、馬に秣ひて（三一）楚壤に赴く。（三二）沮漳自ら美なるべきも、客心（三三）外奬にあらず。常に（三四）詩人の言を歎く、（三五）式微何に由りてか往かん。（三六）上宰皇靈を奉じ、（三七）侯伯咸宗長とす。（三八）雲騎漢南を亂め、（三九）宛郢皆掃盪す。霧を排して（四〇）盛明に屬し、雲を披いて（四一）淸朗に對す。（四二）慶泰重疊を欲し、（四三）公子特り先づ賞す。謂はざりき肩を息ふの願、一旦（四四）明兩に値はんとは。竝び載りて鄴京に遊び、舟を方べて河の廣きに汎ぶ。淸讌の娛に（四五）綢繆し、梁棟の響を寂寥す。既に長夜の飲を作す。豈（四六）乘日の養を顧みんや。

【大意】後漢の桓帝靈帝の時、天下の壞亂せしこと、恰も周の幽王厲王の時の如く、洛陽の宮室は悉く董卓の燒滅する所となり、長安の舊都亦陷沒して跡なし。我れ（王粲）秦川を去りて荊州に赴き劉表に依る。沮漳の風景佳ならざるにあらざれども、中に歸心を抱きて、外物の能

【三一】楚壤。荊州をいふ。
【三二】沮漳。二川の名。
【三三】外奬。外部より勵すこと。
【三四】詩人。詩經の詩を作りし人。
【三五】式微。詩經に「式微式微、胡ぞ歸らざる」とあり。
【三六】上宰。宰相曹操なり。皇靈は後漢の獻帝を指す。
【三七】侯伯。諸侯なり。宗長は盟主。
【三八】雲騎。衆騎なり。漢南は漢江の南。
【三九】宛郢。楚の二縣の名。掃盪は平定なり。
【四〇】盛明。曹操に喩ふ。
【四一】淸朗。曹操に喩ふ。
【四二】慶泰。幸福なり。
【四三】公子。曹丕を指す。
【四四】明兩。太祖既に明にして太子又明なり、故に太子を明兩となす。
【四五】綢繆。交ること。
【四六】乘日。日車に乘りて遊ぶこと。

く勵し留むる所にあらず。常に詩人の言を歎じて歸らんことを思へども歸るに由なし。時に曹公（魏の太祖）獻帝を戴きて天下に號令し、諸侯皆之を盟主とす。乃ち大軍を率ゐて漢南地方を平定す。我れ茲に雲霧を披いて曹公を拜するを得たり。幸福竝び至り、又太子を識るを得たり。初め暫く肩を息めんことを願ひしも、圖らずして太子の厚恩を蒙り、太子と舟車を同うして遊樂し、靜深の宇に淸宴し、歌聲梁棟に響く、既に此の長夜の飲をなせり。又何ぞ彼の日車に乘るの遊を願はんや。

陳琳

（四七）袁本初が書記の士なり。故に喪亂の事を述ぶること多し。

（四八）皇漢屯邅に逢ひ、天下（四九）氛慝に遭ふ。董氏關西を淪め、袁家河北を擁す。（五〇）單民周章し易く、身を窘めて（五一）羈勒に就く。豈意はんや事己に乖くを、永懷して故國を戀ふ。（五二）相公實に勤王、信に能く（五三）蝥賊を定む。復た（五四）東都の輝を覩、重ねて漢朝の則を見る。餘生幸に已に多し。矧んや迺ち（五五）明德に値へるをや。客を愛して疲を告げず、飲讌して（五六）景刻を遺る。夜聽星爛を極め、朝遊（五七）曛黑を窮む。（五八）哀哇梁埃を動かし、（五九）急觴幽默を盪す。

【四七】袁本初。袁紹、字は本初。陳琳初め之に事へて掌書記たり。
【四八】皇漢。漢の皇室。屯邅は艱難。
【四九】氛慝。亂賊なり。
【五〇】單民。單身なり。陳琳自ら謂ふ。周章は狼狽。
【五一】羈勒。束縛なり。
【五二】相公。曹操を指す。
【五三】蝥賊。亂賊なり。
【五四】東都。洛陽なり。

且つ一日の娯を盡し、(六〇)古來の惑を知ることなし。

【五五】明德。曹丕を指す。
【五六】景刻。時刻なり。
【五七】曛黑。日の暮るること。
【五八】哀哇。哀歌なり。
【五九】急觴。杯を促すこと。
【六〇】古來の惑。後漢書に「楊秉曰く、我三不惑あり、酒と色と財となり」とあり。

【大意】漢末天下大に亂れ、董卓は長安を陷れ袁紹は兵を起して河北に據る。我れ(陳琳)孤獨にして惶懼し易く、遂に身を屈して袁紹に仕ふ。然も事己の志に乖ひ常に故郷に歸らんことを思ふ。時に曹公よく王事に勤め紹卓の徒を平ぐ。是に於て再び洛陽の光輝、漢朝の法度を見るを得たり。我れ亂に死せざるを得て幸既に多し。今又太子の厚遇を蒙る。太子客を愛して倦まず、飲宴して日夜を忘れ、音樂を聽きては夜の闌くるに至り、行遊しては日の暮るるに至り、歌聲は梁上の塵を動かし、杯を促して沈默を破る。既に一日の歡を盡す。焉んぞ古人の惑となせるを知らんや。

○ 徐幹

少くして(六一)宦情なく(六二)箕潁の心あり、事故ありて世に仕ふ。(六三)素辭多し。

伊れ昔(六四)臨淄に家し、(六五)提攜して齊瑟を弄す。

【六一】宦情。仕官の心。
【六二】箕潁。箕は山の名、潁は川の名。許由・巣父の隱居せし處。
【六三】素辭。質素の言。
【六四】臨淄。齊の都。徐幹の郷里なり。
【六五】提攜。朋友と共に。齊瑟

置酒して(六六)膠東に飲み、(六七)淹留して高密に憩ふ。此歡終ふべしと謂へり、(六八)外物始めて畢へ難し。(六九)箕濮の情を搖蕩し、年を窮めて憂慄に迫る。(七〇)末塗幸に休明、棲集薄質を建つ。已に(七一)負薪の苦を免れ、仍りて(七二)椒蘭の室に游ぶ。淸論事萬を究め、美話信に一にあらず。行觴悲歌を奏し、永夜白日に繋ぐ。華屋(七三)蓬居にあらず、(七四)時髦豈余が匹ならんや。中飲にして昔心を顧みれば、(七五)悵焉として失ふあるが若し。

【大意】我れ（徐幹）昔臨淄に仕し朋友と相携へて琴瑟を弄し、膠東高密の間に周遊し、歡を盡して世を終へんことを願へり。豈圖らんや世事に拘牽せられ、願を遂ぐる能はず、末年世亂に逢ひ憂懼の迫る所となり、遂に隱遁の志を棄つ。幸に美德の太子に遇ひ、恩厚賤陋の身に及び、茲に賤役を離れて貴人の室に遊ぶを得、淸雅の論萬物の理を究め、酒を飲み悲歌を奏し、夜を以て日に繼ぐ。華屋は吾が居るべき處にあらず、俊傑は吾が友にあらず、然も幸にして共に伍するを得たり。酒半にして昔日隱遁の志を顧れば、惘然として失ふ所あるが如し。

の齊は國の名。
【六六】膠東。齊の地名。
【六七】淹留。滯留なり、高密は齊の地名。
【六八】外物。世事なり。
【六九】箕濮。箕は山の名。許由の隱れし處。濮は川の名、莊周の釣りし處。搖蕩は動亂なり。

【七〇】末塗。晩年なり。休明は美德の人。太子丕を指す。
【七一】負薪。賤役なり。
【七二】椒蘭。山椒及び蘭を塗りし室。
【七三】蓬居。野人の居。
【七四】時髦。當代の俊傑。
【七五】悵焉。惘然なり。

劉楨

(七六)卓犖たる偏人にして文最も氣あり。得る所頗る經に奇なり。貧居して(七七)里閈に晏んじ、(七八)少小にして東平に長ず。(七九)河兗衝要に當り、淪飄して(八〇)許京に薄る。

(八一)廣川逆流なく、招納せられて(八二)羣英に厠る。北のかた(八三)黎陽の津を渡り、南のかた(八四)紀郢の城に登る。既に古今の事を覽、頗る治亂の情を識る。(八五)歡友相解達し、(八六)敷奏して平生を究む。矧んや(八七)明哲の顧を荷ひ、知深くして命の輕きを覺るをや。朝に遊んで(八八)牛羊下り、暮に坐して(八九)揭鳴に括る。終歲一日にあらず、厄を傳へて新聲を弄す。(九〇)辰事既に諧ひ難し、歡願如今幷す。唯羨む(九一)肅肅たる翰、(九二)繽紛として高冥に戻らんことを。

【七六】卓犖。高絕の貌。偏人は一方に傑出せる人。
【七七】里閈。鄉里なり。
【七八】少小。幼少なり。東平は縣の名、兗州に屬す。
【七九】河兗。濟河及び兗州。衝要は要衝。
【八〇】許京。獻帝亂を避けて許州に遷る。故に許京といふ。
【八一】廣川。曹操に喩ふ。
【八二】羣英。羣賢なり。
【八三】黎陽。津の名。
【八四】紀郢。楚の地名。
【八五】歡友。親友なり。解達とは談說して進達するなり。
【八六】敷奏。陳奏なり。
【八七】明哲。太子丕を指す。
【八八】牛羊下。暮をいふ。詩經に「日の夕、牛羊下り括る」とあり。
【八九】揭鳴。揭は雞の棲木、雞の鳴く時をいふ。
【九〇】辰事。時と事と。
【九一】肅肅。羽の聲。
【九二】繽紛。飛ぶ貌。高冥は天空なり。

【大意】われ(劉楨)少小より東平に長ず。其地天下の要衝に當れるを以て、遂に許都に至る。曹

公（曹操）我が微賤なるを顧みず、納れて羣賢の中に伍せしむ。乃ち公に從つて北のかた袁紹を征し、又南のかた劉表を伐つ。我れ古今治亂の事に通ぜるを以て、朋友相進達して陳奏の事に充て、以て平生の才を盡さしむ。後又太子の眷顧を蒙り、知遇の深くして身命の輕きを覺る。朝に遊んでは暮に至り、暮に坐しては明に至り、終歲歡宴歌曲の樂を盡し、明時と樂事と幷せ遇ふを得たり。ただ願くは羽を整へて高遠に上らんことを。（貴仕を求めんとするに喩ふ）

應瑒

（九三）汝潁の士なり、（九四）世故に流離し、頗る（九五）飄薄の歎あり。

（九六）嗷嗷たる雲中の鴈、翮を擧げて（九七）委羽よりす。涼を（九八）弱水の湄に求め、寒を（九九）長沙の渚に違く。顧ふに我れ（一〇〇）梁川の時、緩歩して（一〇一）潁許に集る。一旦世難に逢ひ、（一〇二）淪薄して恆に羇旅す。天下昔未だ定らず、身を託して早く所を得たり。（一〇三）官度一卒に厠り、（一〇四）烏林艱阻に預る。（一〇五）晩節衆賢に値ひ、會同して（一〇六）天宇に庇はる。坐を列ねて（一〇七）華榱に廕れ、金樽（一〇八）淸醑を盈す。

【九三】汝潁。地名。
【九四】世故。世亂なり。流離は流浪すること。
【九五】飄薄。さまよふこと。
【九六】嗷嗷。哀鳴の聲。
【九七】委羽。北方の山の名。
【九八】弱水。北方の川の名。
【九九】長沙。南方の地名。

【一〇〇】梁川。地名。
【一〇一】潁許。地名。
【一〇二】淪薄。飄薄に同じ。
【一〇三】官度。官渡なり。川の名。
【一〇四】烏林。地名、荊州記に「周瑜黃蓋、魏武の兵を烏林に破る」とあり。
【一〇五】晩節。晩年なり。

始め(一〇九)延露の曲を奏し、繼ぐに(一一〇)闌夕の語を以てす。(一一一)調笑して輒ち酬答し、(一一二)嘲謔して慙沮するなし。軀を傾けて遺慮なく、心に在りて良に已に敍ぶ。

【大意】飛鴈哀鳴して委羽山より來り、春は北に向つて涼を求め、冬は南に向つて陽に就く。(應瑒の國難に遇ひて飄薄せるに喩ふ)顧ふに我れ故鄕に在りし時、往きて許京に至り、世の亂離に遇ひて東西に放浪せしも、早く既に身を曹公(曹操)に託し、士卒に交りて艱苦に參與す。晚年衆賢に値ひ、天子の宮に會合し、酒を酌み曲を奏し、夜を以て日に繼ぎ、嘲戲して相應酬し、恥ぢて止むることなし。身を公に委ねて復た遺恨なく、心に在るの事皆既に伸べ盡せり。

(一一三)阮瑀

書記の任を管る。故に優渥の言あり。河洲に沙塵多く、風悲みて(一一四)黃雲起る。(一一五)金羈相馳逐し、(一一六)聯翩何ぞ窮り已まん。(一一七)慶雲惠優渥、(一一八)微薄多士を擧づ。念ふ昔(一一九)渤海

【一〇六】天宇。天子の宮。
【一〇七】華榱。華屋なり。
【一〇八】清醑。清酒なり。
【一〇九】延露。歌曲の名。

【一一〇】闌夕。夜闌なり。
【一一一】調笑。あざけり笑ふこと。
【一一二】嘲謔。あざけりなぶること。慙沮は恥ぢて止むこと。

【一一三】阮瑀。字は元瑜、曹操に仕へて記室となる、書檄多くは其手に出づ。
【一一四】黃雲。塵埃上りて雲の如きなり、戰亂に喩ふ。

【一一五】金羈。金を以て飾りしオモツラ。
【一一六】聯翩。馬の奔走する貌。
【一一七】慶雲。瑞雲なり。魏の太祖に喩ふ。

の時、(二二〇)南皮清沚に戯る。今復た(二二一)河曲の游、(二二二)葭を鳴らして蘭氾に汎ぶ。(二二三)躧歩して丹梯を陵ぎ、並び坐して(二二四)君子に侍す。(二二五)妍談既に心を愉ましめ、(二二六)哀弄信に耳を睦ぐ。(二二七)酤を傾けて芳醑に係ぎ、(二二八)酌言豈終始あらんや。(二二九)蓱を食ひしより來、唯今日の美を見る。

【大意】河洲に沙塵多く、風急に塵を揚ぐること雲の如し。(漢末の騒亂に喩ふ)羣雄馬を馳せて相爭ふ。時に曹公(魏の太祖)出でて我に厚恩を賜ひ、我れ微賤にして衆賢と伍するを得たり。嘗て太祖に從ひて渤海の南皮に遊び、今復た太子に從ひて河曲に遊び、遂に朱殿に登り、諸賢と太子に侍す。談話の美は以て心を樂ましめ、哀弄の音は以て耳を和らげ、宴樂して休息するなし。我れ嘉賓に預りしより以來、今日の遊を以て最も美なりとす。

(二三〇)平原侯植

【二一八】微薄。微賤の身、阮瑀自ら謂ふ。多士は衆賢なり。
【二一九】渤海。郡名。
【二二〇】南皮。縣名、渤海郡に屬す。清沚は清渚なり。太祖嘗て此に遊ぶ。
【二二一】河曲。黄河のほとり。曹丕嘗て此に遊ぶ。
【二二二】葭。笛なり。蘭氾は蘭の生ずる岸。
【二二三】躧歩。履行なり。丹梯は朱塗の階。

【二二四】君子。太子曹丕を指す。
【二二五】妍談。美談なり。
【二二六】哀弄。哀歌の聲。
【二二七】酤。酒なり。
【二二八】酌言。言は助辭、酒を酌むこと、詩經に「酌みて言に之を嘗む」とあり。
【二二九】蓱を食ふ。詩經に「呦呦たる鹿鳴、野の苹を食ふ」とあり、苹は蓱なり、草の名。この詩は天子諸侯を宴する時歌ふなり。

【二三〇】平原侯植。太子丕の弟曹植なり、平原侯に封ぜらる。

(二三一)公子世事に及ばず。ただ遨遊を美す。然れども頗る憂生の嗟あり。朝に遊びて(二三二)鳳閣に登り、日暮れて(二三三)華沼に集る。柯を傾けて弱枝を引き、條を攀ぢて(二三四)蕙草を摘む。(二三五)徙倚して騁望を窮め、目極まりて討ぬる所を盡す。西のかた(二三六)太行の山を顧み、北のかた(二三七)邯鄲の道を眺む。平衢脩くして且つ直く、白楊信に(二三八)裊裊たり。(二三九)副君歡宴を命じ、歡娛して懷抱を寫く。良遊晝夜にあらず、豈云んや晩と早と。衆賓悉く精妙、淸辭蘭藻を灑ぐ。哀音(二四〇)廻鵠を下し、(二四一)餘哇淸昊に徹す。(二四二)中山醉ふを知らず、(二四三)德を飮んで方に飽くを覺ゆ。願くは(二四四)黃髮の期を以て、生を養ひて將に老せんとするを念はん。

【大意】朝に中書省に登り、暮に池沼(太子宴樂の處)に至り、弱柳を引き香草を摘み、四方を望めば、西は太行山を見、北は邯鄲の道を見る。長道直きこと絲の如く、白楊風に搖く。太子盛宴を賜ひ、各〻歡樂を盡さしめ、晝夜曉暮を問はず。衆賓皆俊秀の士にして、言辭の妙香蘭文藻の如く、

【二三一】公子。曹植を指す。
【二三二】鳳閣。中書省なり。
【二三三】華沼。池なり。
【二三四】蕙草。香草なり。
【二三五】徙倚。徘徊なり。騁望は眺望。
【二三六】太行。山の名。
【二三七】邯鄲。地名。
【二三八】裊裊。風の木を搖す貌。
【二三九】副君。太子丕をいふ。
【二四〇】廻鵠。昔師曠淸徵の聲を奏せしに玄鵠下り舞へり。
【二四一】餘哇。淫歌なり。淸昊は天なり。
【二四二】中山。地名、美酒を出す。
【二四三】德を飮む。詩經に「既に醉ふに酒を以てし、既に飽くに德を以てす」とあり。
【二四四】黃髮。老人なり。

歌聲飛鵠を舞はしめ、清天に徹し、飲宴して醉ふを知らず。ただ道德に飽くを覺ゆ。願くは生を養ひて長壽を保ち以て老年に至らんことを。

卷の第十六

詩

庚

雜擬下

曹子建の樂府(一)白馬篇に倣ふ　(二)袁陽源

劍騎何ぞ(三)翩翩たる、長安(四)五陵の間。(五)秦地は天下の樞、八方より才賢湊る。(六)荊魏に壯士多く、(七)宛洛少年に富む。意氣深く自ら負む。肯て郡邑の權に事へんや。(八)籍籍として關外より來り、(九)車徒國鄽を傾く。(一〇)五侯競つて書幣し、羣公亟ゝ言をなす。(一一)義分霜よりも明に、信行直きこと弦の如し。歡を(一二)池陽の下に交へ、(一三)汾陰の西に宴す。一朝人に諾を許す。

【一】白馬篇。卷十四に見ゆ。
【二】袁陽源。名は淑、字は陽源、宋の陳郡陽夏の人。
【三】翩翩。輕健の貌。
【四】五陵。漢の帝陵のある處、長安の近郊にあり、豪俠の居る所なり。
【五】秦地。長安なり。樞は樞要の地をいふ。
【六】荊魏。楚魏の二國。
【七】宛洛。二都の名。
【八】籍籍。諠盛の貌。
【九】車徒。從者なり。國鄽は都市なり。
【一〇】五侯。卷十五、鮑明遠の數詩に見ゆ。書幣は書及び贈物。
【一一】義分。分義なり。
【一二】池陽。縣名、左馮翊にあり。
【一三】汾陰。縣名、河東郡にあり。

何ぞ能く坐ながら相捐てん。（一四）節を彯てて函谷を去り、（一五）珮を投じて甘泉を出づ。嗟す此の遠圖を務め、心四海の爲に懸るを。但身意の遂ぐるを榮とす。豈耳目の前を校らんや。（一六）俠烈良に聞ゆるあり、古來共に然るを知る。

【大意】俠士の豪快の狀を述ぶ。遊俠の士劍を佩び騎を結びて、五陵長安の間に遊ぶ。此士もと荆魏宛洛の壯士なりしが、天下の中樞たる長安に向ひて、四方より集り來りしなり。各〻意氣を恃み、肯て郡邑執權の人に事へず。その長安に來るや、從者の衆きこと都市を傾くるばかりなり。長安の王公亦書幣を贈りて之を迎ふ。此士分義明にして嚴直なること弦の如く、池陽汾陰の間に歡宴を交へ、一たび許諾すれば決して乖違せず。官位を拋ちて義に趨り、心を天下の公事に懸け、己の志を成さんことを務めて、目前の榮利を顧みず。俠士獨り名を後世に傳ふ。古今共に此の如し。

【一四】節。使者のシルシたる信節なり。函谷は關の名。

【一五】珮。佩物なり。珮を投ずとは官を去るなり。甘泉は宮名。

【一六】俠烈。豪俠なり。

古に倣ふ　　袁陽源

此の倦遊の士を諦へば、本家（一）遼東よりす。昔（二）李將軍に隷し、（三）十載西

【一】遼東。北方の郡名。

戎を事とす。車を(四)高闕の下に結び、極望して(五)雲中を見る。四面各〻千里、(六)從橫嚴風起る。(七)寒燠豈節の如くならんや、霜雪異同多し。夕に北河の陰に寐ね、夢に(八)甘泉宮に還る。勤役未だ云に已まず、壯年徒に空きをなす。迺ち知る古時の人、(九)轉蓬を悲める所以を。

【大意】倦遊の人あり。試に之に問へば答へて曰く、吾れ本遼東の人なり。嘗て李將軍に從ひて匈奴を征し、邊塞に在ること十年なり。邊塞は地偏にして氣節中國と同じからず。寒風縱橫に吹き荒び、夕に困臥しては夢に甘泉宮に還りて天子に謁するを見る。然も勞役未だ已まずして、空しく壯盛の年を度る。古人の飄迫を悲みし眞情、吾亦具に之を知ると。

【二】李將軍。漢の武帝の時の名將李廣なり。
【三】十載。十年なり。西戎は匈奴。
【四】高闕。北邊の山の名。
【五】雲中。北邊の郡名。
【六】從橫。縱橫なり。嚴風は寒風。
【七】寒燠。寒暖なり。
【八】甘泉宮。長安の宮の名。
【九】轉蓬。蓬の風に飄る如く飄迫すること。

擬古二首　(一)劉休玄

『行き行き重ねて行き行く』に擬す

(二)眇眇として長道を陵ぎ、(三)遙遙として行きて遠く之く。車を回して京里に背き、手を揮つて

【一】劉休玄。南平穆王鑠、字は休玄、宋の文帝の第四子なり。
【二】眇眇。遠き貌。

此より辭す。堂上流塵生じ、庭中綠草滋し。(四)寒蛩水曲に翔り、秋兎(五)山基に依る。芳年に華月あり、(六)佳人還期なし。日夕涼風起り、酒に對して長く相思ふ。悲は(七)江南の調を發し、憂は(八)子衿の詩に委す。臥して明燈の晦きを覺え、坐して(九)輕紈の緇きを見る。淚容飾るべからず、幽鏡復た治め難し。願くは薄暮の景を垂れ、妾が(一〇)桑楡の時を照せ。

【大意】閨怨の詩なり。吾が夫は帝都を去りて遠行し、今や堂庭人なきを以て徒に塵と草とを生ず。寒蛩は水に依り秋兎は山に依り、皆其所を得たり、芳年には花月の盛あり。然も吾が夫は一たび去りて還るの期なし。我れ乃ち秋風に對して相思の情を起し、悲憂のあまり唯心を詩歌に委ぬ。臥しては燈の暗きを感じ、坐しては衣裳の京塵に汙れしを見る。涕泣の容は脩飾すべからず、幽匣の鏡は誰か復た理めん。せめては吾が夫の微光を垂れて我が老年を照さんことを願ふのみ。

【三】遙遙。心の安からざる貌。
【四】寒蛩。水鳥なり。
【五】山基。山麓なり。
【六】佳人。夫をいふ。
【七】江南の調。采蓮の曲なり。
【八】子衿の詩。詩經に「青青たる子が衿、悠悠たる我が心」とあり、音信なきを嘆ずる詩なり。
【九】輕紈。白絹なり。
【一〇】桑楡。日の沒する處にある木、老年に喩ふ。

『明月何ぞ皎皎たる』に擬す

(一一)落宿遙城に半なり、浮雲層闕を藹ふ。(一二)玉宇清風來り、(一三)羅帳秋月を

【一一】落宿。傾きし星。

延く。思を結んで(一四)伊人を想ひ、沈憂して(一五)明發まで懷ふ。誰か爲はん客行の久しく、屢(一六)流芳の歇るを見んとは。河廣くして川に梁なく、山高くして路越え難し。

【大意】閨怨の詩なり。星流れて城角に傾き浮雲飛んで高闕を蓋ふ時、獨り玉堂に坐して淸風に對し、帳帷を揭げて月光を引く。忽ち遠行の夫を思ひて、曉に達するまで寐ねられず。誰か謂はん、夫去りて既に久しく、芳春の消歇するに至らんとは。夫の許に行かんと欲するも、河廣く山高くして行くべからず。

【一二】玉宇。玉堂なり。
【一三】羅帳。薄絹のトバリ。
【一四】伊人。夫をいふ。
【一五】明發。翌曉なり。
【一六】流芳。春芳の移ること。

瑯邪王の古に(一)依るに和す　王僧達

少年(二)馳俠を好み、(三)旅宦して關源に遊ぶ。既に、(四)終古の跡を踐み、聊か興亡の言を訊ふ。(五)隆周藪澤となり、皇漢(六)山樊と成る。久しく離宮の地を沒す。安んぞ(七)壽陵の園を識らんや。仲秋邊風起り、孤蓬霜根を卷く。白日精景なく、黃沙千里昏し。(八)顯軌轍を殊にするなし。(九)幽塗豈魂を異にせんや。聖賢良に已ぬる矣、命を抱いて復た何

【一】依。擬なり。
【二】馳俠。遊俠なり。
【三】旅宦。遊學なり。關源は關中、河源の地方。
【四】終古。古來なり。
【五】隆周。隆盛なりし周。
【六】山樊。山林なり。
【七】壽陵。漢帝の山陵の名、

をか怨みん。

【大意】我れ少年にして遊俠を好み、關源に旅遊し、古代の跡を歷へ、興亡の事を問へるに、周漢の故城は盡く山澤となり、離宮園陵蕪沒して其處を識らず。今や風起り蓬絶え、黄沙昏亂し日に精景なし。（世の亂離に喩ふ）世人皆生きては戰亂に苦み、死しては寃魂となる。ああ盛なるものは衰へ、生あれば死あるは世の習なり。古來の聖賢亦皆死を免れず。吾亦天命に安んじて復た何ぞ怨みんや。

【八】顯軌。生理なり。

【九】幽塗。死者の行く道。

擬古三首　　鮑明遠

(一)幽幷騎射を重んじ、少年にして馳逐を好む。(二)氈帶雙鞬を佩び、(三)象弧彫服を插む。獸肥えて春草短く、(四)鞚を飛ばして平陸を越ゆ。朝に(五)鴈門の上に遊び、暮に(六)樓煩に還りて宿す。(七)石梁餘勁あり、鷩雀(八)全目なし。漢と虜と方に未だ和せず、邊城屢ふ翻覆す。我が一(九)白

【一】幽幷。北方の二州の名。

【二】氈帶。毛織の帶。雙鞬は二個の弓袋。

【三】象弧。象牙にて飾れる弓。彫服は彫服を施せし箙。

【四】鞚。くつわ。馬の意なり。平陸は平野。

【五】鴈門。北方の郡名。

【六】樓煩。縣名。鴈門郡に屬す。

【七】石梁。闕子に「宋の景公工人をして弓を作らしむ、九年にして成る、公虎圈の臺に登り弓を援り東面して之を射る、矢西霜の山を踰え彭城の

羽を留めて、將に以て（一〇）虎竹を分たんとす。

【大意】　少年邊功を建てんことを思ふに擬す。幽幷の地は騎射を重んずるを以て、少年の時より騎射逐獵を習ひ、鞬を帶び弓を執り、肥獸を逐ひて平野を越え、鴈門樓煩の間に往來し、射術神妙を極む。今や漢と匈奴と未だ和親せず、邊城屢〻事を生ず。願くは一矢を放ちて軍功を建て、以て封侯を分ち取らんことを。

（一一）魯客楚王に事へ、（一二）金を懷にして丹素を襲ぬ。既に（一三）主人の恩を荷ひ、又（一四）令尹の顧を蒙る。日晏れ朝を罷めて歸れば、輿馬衢路に塞る。（一五）宗黨光華を生じ、賓僕遠く傾慕す。富貴は人の欲する所、道を得ては亦何をか懼れん。南國に（一六）儒生あり、方に迷ひて獨り淪誤す。（一七）木を清江の湄に伐り、罝を設けて（一八）毚兎を守る。

東に集り、其餘力逸勁して猶ほ羽を石梁に飲む」とあり。

【八】全目。帝王世紀に「羿、吳賀と北遊す、賀羿をして雀を射しむ、羿曰く之を生さんか之を殺さんかと、賀曰く其左目を射よと、羿弓を引き之を射、誤りて右目に中つ、羿首を抑へて愧ぢ、終身忘れず」とあり。

【九】白羽。箭の名。

【一〇】虎竹。銅虎符、竹使符なり、郡守に與ふる符なり。

【一一】魯客。魯人なり。

【一二】金。金印なり。丹素は中衣。

【一三】主人。楚王なり。

【一四】令尹。官名、楚の相なり。

【一五】宗黨。宗族鄕黨。

【一六】儒生。明遠自ら謂ふ。

【一七】木を云云。詩經伐檀篇に「坎坎として檀を伐り、之を河の干に寘く、河水淸く且つ漣猗す」とあり、賢者の貧窮に居りて其力に食むことを美せし詩なり。

【一八】毚兎。狡兎なり、詩經に「肅肅たる兎罝、之を椓つこと丁丁たり、赳赳たる武夫は公侯の干城」とあり。

【大意】賢者貧に居りて自ら勉むる意なり。魯人あり來りて楚王に事へ金印を抱き朱衣を纏ひ、君王の恩寵を蒙り、又宰相の眷愛を受け、日暮れて退朝するや、從者路を塞ぐ。宗黨亦之が爲に光を生じ、賓客遙に此人を仰慕す。既に道によりて富貴を得たり。何の畏れ憚る所あらんや。ここに一儒生あり。向ふ所に迷ひて自ら沈淪せるも、貧に居りて自ら勵み、事功を立てて登庸せられんことを待てり。

十五にして(一九)詩書を諷し、(二〇)篇翰通ぜざるはなし。弱冠にして(二一)多士に參り、(二二)飛歩して秦宮に遊ぶ。側に君子の論を覩、預め古人の風を見る。(二三)兩説舌端を窮め、(二四)五車筆鋒を摧く。(二五)白璧の貺に當るを羞ぢ、(二六)聊城の功を受くるを恥づ。(二七)晩節世務に從ひ、(二八)障に乘りて遠く戎を和す。佩を解いて(二九)犀渠を襲ね、(三〇)袠を巻

【一九】詩書。詩經書經。諷は誦なり。

【二〇】篇翰。翰は筆なり、篇章に同じ。

【二一】多士。多くの朝臣。

【二二】飛歩。高歩なり。

【二三】兩説。二回の論説。史記に「秦邯鄲を圍む、魏王新垣衍をして邯鄲に入り平原君に説かしむ、秦の昭王を尊んで帝となさば秦必ず兵を罷めて去らんと、魯仲連之を聞き乃ち垣衍を責む、垣衍乃ち敢て秦を帝とするを言はず」と。又曰く、「田單聊城を攻む、下らず、魯仲連乃ち書を爲り之を矢に約し以て聊城の中に射る燕將書を得て自殺す」とあり。

【二四】五車。多くの書を讀めること。莊子に「惠施其書五車」とあり。

【二五】白璧の貺。韓詩外傳に「楚の襄王使者を遣し金千斤白璧百雙を持ち莊子を聘せしめ以て相となさんとす、莊子許さず」とあり。

【二六】聊城の功。史記に「田單聊城を屠りて歸り、魯仲連を爵せんと欲するを言ふ、魯連逃れて海上に隱る」とあり。

いて盧弓を奉ず。始願力及ばず、安んぞ今の終る所を知らんや。

【二七】晩節。晩年なり。
【二八】障。邊城なり。
【二九】犀渠。よろひ。
【三〇】袠。書帙なり。盧弓は征伐の弓。

【大意】筆を投じて軍に從ひ、功業未だ就らざるを言ふ。吾れ十五にして詩書を誦し、いづれの篇章と雖も通曉せざるはなし。二十にして秦宮に仕へ、朝臣の間に伍す。嘗て古君子の德風を見聞し、辯舌を揮へば魯仲連の如く、博識なること惠施の如し。然も恩賞を受くるに至らず。晩年時事に從ひ、邊城に往きて戎狄を伐ち、文服を脫して武裝をなす。然りと雖も始め文に志して力既に及ばず。今武士となるも其の結果如何を知らざるなり。

劉公幹が體を學ぶ　鮑明遠

(一)胡風朔雪を吹き、千里(二)龍山を度る。君が(三)瑤臺の裏に集り、(四)兩楹の前に飛舞す。茲辰自ら美となす、當に(五)豔陽の年を避くべし。豔陽桃李の節には、皎潔も妍を成さず。

【一】胡風。北風なり。朔雪は北地の雪。
【二】龍山。山の名。
【三】瑤臺。玉を以て飾れる樓閣。
【四】兩楹。人君正坐の處。
【五】豔陽。春なり。

【大意】 雪を借りて自ら比するなり。風雪北より來りて龍山を度り、玉樓の前玉座の邊に舞ふ。(出でて君に仕ふるに喩ふ)この時獨り自ら美となし、春に至らば宜しく避けて退くべし。桃李の春には雪の皎潔なるも以て美となすに足らざればなり。(高位を避くべきに喩ふ)

君子思ふ所あるに代る　　鮑明遠

西に出でて(一)雀臺に登り、東に下りて(二)雲闕を望む。(三)層閣天居肅たり。(四)馳道直きこと髪の如し。(五)繡甍飛霞を結び、(六)琁題行月を納る。山を築いて(七)蓬壺に擬し、池を穿ちて(八)溟渤に類す。(九)色を選んで齊代に遍く、聲を徵して(一〇)邛越に匝し。鐘を陳ねて夕讌に陪し、笙歌して(一一)明發を待つ。年貌還すべからず、身意(一二)盈歇に會す。(一三)蟻壤山阿を漏らし、(一四)絲涙金骨を毀る。(一五)器は滿を含んで欹くを惡み、物は生を厚うして沒するを忌む。智なる哉衆多の士、理

【一】雀臺。銅雀臺なり、鄴都の西にあり。
【二】雲闕。雲に聳ゆる宮闕。
【三】層閣。高閣なり。天居は天子の宮。
【四】馳道。天子の道路。
【五】繡甍。美しき棟。
【六】琁題。玉を飾りし椽頭。
【七】蓬壺。仙山の名。
【八】溟渤。海なり。
【九】色。美女なり。齊代は二國の名。
【一〇】邛越。二地の名。
【一一】明發。翌曉なり。
【一二】盈歇。盛衰なり。
【一三】蟻壤。蟻穴なり。山阿は大隄。
【一四】絲涙。細き涙。
【一五】器。欹器なり。虛しければ傾き、中すれば正しく、滿つれば覆る器。

を服して（二六）昭昧を辨ず。

【大意】滿を戒むる詩なり。出でて銅雀臺に登り雲闕を望めば、天子の高閣嚴然として聳え、其の馳道端直なること髮の如く、棟は飛霞に連り椽は月行を障へ、山を築きて仙山に擬し、池を穿ちて大海に象り、遍く美女を求めて此に置き、善歌者を求めて此に集め、笙歌夜飲して夜を徹す。是れ實に滿盈の極なり。然れども人の年齡容色は一たび移れば又還らず、身意の望亦盛衰なき能はず。大隄の頽るるは蟻穴の漏に由り、金骨の堅きも絲涙に銷く。欹器の滿ちて覆るは滿を惡む所以にして、生を養ひて厚くするは、生理却つて滅する所以なり。ただ世の智者獨り能く道理に習ひて、物情の明暗を知る。

【二六】昭昧。明暗なり。

古に倣ふ　　范彥龍

寒沙四面に平に、飛雪千里に驚く。風は（一）陰山の樹を斷ち、霧は（二）交河の城を失ふ。朝に（三）左賢の陣に驅り、夜は（四）休屠の營に薄る。昔は（五）前軍の幕に事へ、今は（六）嫖姚の兵を逐ふ。道を失

【一】陰山。匈奴の山の名。
【二】交河。邊城の名。
【三】左賢。匈奴の王。
【四】休屠。夷狄の王。
【五】前軍。漢將李廣匈奴を擊ち前將軍となる。
【六】嫖姚。漢將霍去病、匈奴を擊ち嫖姚校尉となる。

ひて刑既に重く、(七)遲留して法未だ輕からず。賴む所は今の天子、漢道日に(八)休明なり。

【大意】從軍の詩なり。寒風飛雪千里に亙り、風は陰山の木を折り、霧は交河の城を罩むる處、日夜夷狄と戰ひて其陣營に迫り、嘗て前將軍に從ひ、今は嫖姚校尉に隷す。若し道に迷ひ遲滯することあらば忽ち刑殺せらる。ただ我が天子、道を漢王と同うし、其德日日美明なり。是れ我が賴む所なり。

【七】遲留。留滯すること。
【八】休明。美明なり。

雜體詩三十首　　江文通

夫れ(一)楚謠漢風既に一骨にあらず、(二)魏製晉造固より亦二體なり。譬へば猶ほ藍朱彩を成し、雜錯の變窮りなく、(三)宮商音をなし(四)靡曼の態極まらざるがごとし。故に(五)蛾眉詎ぞ貌を同うせん。而も俱に魄を動かす。芳草寧んぞ氣を共にせん。而も皆魂を悅ばしむ。其れ然らずや。世の諸賢の各〻迷ふ所に滯るに至りては、甘を論じては辛を忌み、丹を好んで素を非らざるはなし。豈所謂(六)方を通じ恕を廣め、遠きを好んで兼愛する者ならんや。(七)公幹、仲宣の家を論ずるに曲直あ

【一】楚謠。楚辭なり。漢風は漢代の詩。
【二】魏製晉造。魏晉時代に成れる詩。
【三】宮商。音の調子の名。
【四】靡曼。柔美なる貌。
【五】蛾眉。美女なり。
【六】方。道なり。
【七】公幹。劉楨なり。仲宣は王粲。

り、〔八〕安仁、士衡の人を評するに〔九〕矯抗を立つるに及んでは、況んや復た此に殊なる者ならんや。又遠きを貴び近きを賤むるは人の常情、耳を重んじ目を輕んずるは俗の恆蔽なり。是を以て邯鄲曲を李奇に託し、士季論を〔一〇〕嗣宗に假る。此れ〔一一〕其效なり。然れども五言の興れるは諒に〔一二〕夐古にあらず。但〔一三〕關西鄴下既に已に同じきこと罕に、〔一四〕河外江南頗る法を異にするをなす。故に玄黃經緯の辨、金碧沈浮の殊、僕以爲らく亦其美を合せ善を竝ぶるのみと。今三十首の詩を作り、其文體に斅ふ。〔一五〕品藻淵流すといふに足らずと雖も、庶はくは亦〔一六〕商搉に乖くなしと云爾。

古離別

遠く君と別れて、乃ち〔一七〕鴈門の關に至る。〔一八〕黃雲千里を蔽ふ。遊子何れの時にか還らん。君を送りしは昨日の如きも、簷前露已に團なり。〔一九〕蕙草の晩るを惜まず、悲む所は道里の寒きなり。君は天の一涯にあり、妾が身長く別離す。一たび顏色を見んことを願ふも、〔二〇〕瓊樹の枝に異らず。〔二一〕兎絲

【八】安仁。潘岳なり。士衡は陸機。
【九】矯抗。反對說。
【一〇】嗣宗。阮籍なり。
【一一】其效。其證なり。
【一二】夐古。遙古なり。
【一三】關西。前漢をいふ。鄴下は魏なり。
【一四】河外。北朝をいふ。江南は南朝。
【一五】品藻淵流。原作の風味を體得して巧に之に摸すること。
【一六】商搉。量度なり。
【一七】鴈門。北方の山上にある關所の名。
【一八】黃雲。塵埃雲の如きなり。
【一九】蕙草。香草なり。晩は衰落すること。
【二〇】瓊樹。崑崙山上にある玉樹なり、故に容易に見難し。
【二一】兎絲。女蘿なり、蔓草の名。水萍はウキクサ。

と水萍と、寄る所終に移らず。

【大意】是れ閨怨の詩なり。我れ夫と別れてより夫は遠く黄雲千里の鴈門關に至り、復た還るの期なし。夫に別れしは昨日の如きも、今や既に露繁き秋となりぬ。蕙草の凋衰は惜むに足らざれども、夫の行路の苦を思ひては悲に堪へず。一別の後相見るの難きは、瓊樹の見難きに異ならず。然りと雖も女蘿の松栢に託し、水萍の水に依るが如く、己も堅く夫に附きて心を移すことなきなり。

（三二）李都尉從軍　陵

（三三）罇酒征人を送り、（三四）踟蹰親宴に在り。日暮れて浮雲滋し、手を握りて涙霰の如し。（三五）悠悠たる清川の水、（三六）嘉魴薦むる所を得たり。而るに我れ萬里に在り、（三七）結髮して相見ず。袖中に短書あり、願くは雙飛の燕に寄せん。

【大意】酒宴を開いて行人（漢に歸らんとする蘇武を指す）を送り、浮雲を見て特に感を深うし、手を握りて別を惜む。思ふに清川の魴魚は味の美なるを以て薦むる所を得、我は命拙きを以て夫妻相見るを得ず。願くは書を南飛の燕に寄せ、以て妻に與へんと欲す。

【三二】李都尉。都尉は官名、漢の李陵なり。
【三三】罇酒。樽酒なり。征人は行人なり。
【三四】踟蹰。徘徊なり。
【三五】悠悠。流水の貌。
【三六】嘉魴。魴は魚の名、嘉はよきこと。
【三七】結髮。夫妻となること。一本に結友に作る。

(二八)班婕妤　詠扇

(二九)紈扇圓月の如く、機中の(三〇)素より出づ。畫き作す(三一)秦王の女、鸞に乘りて煙霧に向ふ。彩色は世の重んずる所、新なりと雖も故きに代らず。竊に愁ふ涼風至り、我が玉階の樹を吹かんことを。君子恩未だ畢へず、零落して(三二)中路に在り。

【大意】機中に紈素を織り、之を以て團扇を作る。其形圓くして月の如し。上に弄玉の鳳凰に乘りて天に昇る圖を描き、以て自ら慕ふ。彩色重んずべしと雖も、新を以て故に代ふべからず。常に秋風至り棄てて用ひられず、君子の恩愛中途にして絕えんことを恐る。

【二八】班婕妤。卷十四に見ゆ。
【二九】紈扇。白絹にて作りし團扇。
【三〇】素。白き絲。
【三一】秦王の女。列仙傳に「簫史は秦の穆公の時の人、よく簫を吹く、穆公に女あり弄玉と字す、之を好む、公遂に以て史に妻す、一旦皆鳳凰に隨って飛び去る」とあり。
【三二】中路。中途なり。
【三三】飛閣。高閣なり。
【三四】神飆。靈風なり。
【三五】芙蓉。蓮花なり。
【三六】冠珮。近臣をいふ。
【三七】參差。簫なり。
【三八】小儒。文帝に擬して自ら謂ふ。

魏文帝　遊宴　曹丕

置酒して(三三)飛閣に坐し、逍遙して華池に臨む。(三四)神飆遠きより至り、左右に(三五)芙蓉披く。綠竹淸水を夾み、秋蘭幽崖を被ふ。月出でて園中を照し、(三六)冠珮相追隨す。客南楚より來り、我が爲に(三七)參差を吹く。淵魚猶ほ伏浦し、聽く者未だ云に疲れず。高文一に何ぞ綺き、(三八)小儒安んぞ爲すに足ら

ん。(三九)肅肅として廣殿陰り、雀聲北林に愁ふ。衆賓城邑に還る、何を以てか吾が心を慰めん。

【大意】高閣の上に宴し、下りて華池の側を歩すれば、清風遠きより來り、蓮花左右に開き、綠竹秋蘭水涯に茂る。折しも月出でて園を照し、近臣衣冠を整へて我に隨ふ。我に遠來の客あり。我が爲に簫を吹けば、淵魚出でて聽き、聽く者疲るるを覺えず。從遊の人各〻佳詩を作り、我の能く及ぶ所にあらず。忽ち日暮れ鳥塒に就くに至り、衆賓各〻散じ去り、また我が心を慰むるなし。

(四〇)陳思王 贈友 曹植

君王英賢を禮し、千金の璧を惜まず。雙闕(四一)馳道を指し、(四二)朱宮第宅を羅ぬ。(四三)冰井の臺に從容すれば、淸池(四四)華薄に映ず。涼風芳氣を盪し、碧樹秋に先だちて落つ。朝に(四五)佳人と期し、日夕(四六)靑閣を望む。裳を褰げて明珠を摘り、(四七)徙倚して蕙若を拾ふ。我が二三子を眷みるに、辭義(四八)金雘より麗し。(四九)延陵寶劍を輕んじ、(五〇)季布然諾を重んず。富に處て貧を忘れ

【三九】肅肅。靜なる貌。
【四〇】陳思王。曹植は陳王に封ぜられ謚して思といふ。
【四一】馳道。天子通行の道。
【四二】朱宮。朱塗の宮殿。
【四三】冰井。魏都に在る臺の名。
【四四】華薄。花叢なり。
【四五】佳人。良友なり。
【四六】靑閣。佳人の居る樓閣。
【四七】徙倚。徘徊なり。蕙若は香草なり。
【四八】金雘。丹靑といふが如し。
【四九】延陵。吳の公子季札延陵に封ぜられ、延陵季子といふ。嘗て上國に使し徐君に過る、徐君其寶劍を愛す、季子心に之を許す、使して還れば徐君旣に死せり、乃ち劍を墓樹に挂けて去る。
【五〇】季布。漢書に「楚人なり。楚の諺に曰く、黃金百を得るは季布の諾を得るに如かず」

ず、有道（五一）葵藿に在り。

【大意】君王賢士を禮遇し、千金の璧を惜まず。故に馳道を夾んで王侯の邸宅相列れり。我れ冰井臺に遊び、清池の花叢と相映ずるを見る。時正に秋にして清風至り、芳樹既に凋落せり。我れ佳人の來るを待ちて青樓を望み、明珠と蕙草とを採りて之に贈らんとす。諸子（友を指す）の文辭は金玉より美なり。我れ因つて諸子と交り、寶劍を輕んじ信義を重んず。富に居て貧者を忘れざるは、有道の士の草野に在るを知ればなり。

【五一】葵藿。草野といふが如し。とあり。

劉文學感遇　楨

蒼蒼たる山中の桂、（五二）團團たる霜露の色。霜露一に何ぞ緊なる、桂枝生じて自ら直し。橘柚南國に在り、（五三）君に因りて羽翼をなす。謬りて（五四）聖王の私を蒙り、身を文墨の職に託す。（五五）丹彩既已に過ぐ。敢て自ら彫飾せざらんや。華月方池を照すとき、金殿の側に列坐す。微臣固より賜を受け、鴻恩良に未だ測らず。

【大意】君（曹植を指す）は山中の桂樹の如く、霜露嚴急なりと雖も、勁直の性を渝へず。我れは南國の橘柚の如く、君が力によりて聲譽を得、遂に聖主の恩を蒙り、君が文墨の臣となれり。（平原侯の庶子となれるをいふ）恩遇を受くること此の如し。當に自ら勉勵彫

【五二】團團。霜露の凝る貌。
【五三】君。曹植をいふ。
【五四】聖王。魏の文帝を指す。
【五五】丹彩。恩遇に喩ふ。

飾すべきなり。今花月の方池を照す處、金殿の側に列坐して盛宴に預る。鴻恩を受くること測り知るべからず。

王侍中 懷德 粲

伊れ昔(五六)世亂に値ひ、馬に秣ひて帝京を辭す。既に(五七)蔓草の別を傷み、方に(五八)杕杜の情を知る。(五九)崤函復た丘墟、(六〇)冀闕緬に縱橫。棹に倚りて(六一)涇渭に汎び、日暮れて山河淸し。蟋蟀桑野に依り、嚴風枯莖を吹く。(六二)鸛鷂幽草に在り、(六三)客子涙已に零つ。鄕を去つて(六四)二十載、幸に天下の平なるに遭ふ。(六五)賢主嘉賞を降し、(六六)金貂して玄纓を服す。宴に侍して(六七)河曲に出で、(六八)蓋を飛ばして鄴城に遊ぶ。(六九)朝露竟に幾何ぞ、忽たること水上の蓱の如し。君子恵義を篤くし、(七〇)柯葉終に傾かず。(七一)福履既に綏んずる所、千載令名を垂る。

【五六】世亂。漢末董卓の亂をいふ。
【五七】蔓草。詩經の篇名、野有蔓草なり。
【五八】杕杜。詩經の篇名。
【五九】崤函。崤山及び函谷關。
【六〇】冀闕。象闕なり、敎令を記列するを以て冀闕といふ、冀は記なり。
【六一】涇渭。二川の名。
【六二】鸛鷂。ともに水鳥の名。
【六三】客子。王粲に代りて謂ふ。
【六四】二十載。二十年なり。
【六五】賢王。魏の太祖を指す。
【六六】金貂。玄纓は侍中の服飾なり。
【六七】河曲。河のほとり。
【六八】蓋。車蓋なり。鄴城は魏の都。
【六九】朝露。人命に喩ふ。
【七〇】柯葉。枝葉なり。
【七一】福履。福祿なり。

【大意】此れ魏武帝(曹操)の德を懷ふなり。われ昔漢末董卓の亂に遇ひ、帝都を去りて亂を避け、

既に別離行旅の苦を傷み、秦時の舊關城闕の丘墟となれるを見、或は川に棹さし或は山を越え、蟋蟀の草野に鳴き急風の枯草を吹き、水鳥の深草に隱るるに遇ひ、涙を流して亂離を悲めり。家を離れて二十年にして戰亂平ぎ、賢主（魏の武帝）我を擧げて侍中となす。乃ち駕に從ひて宴遊をなす。夫れ人命は朝露の如し。武帝忽焉として崩じぬ。然れども恩義を厚うせるを以て、その遺澤永く盡きず。既に天の福祿を得て美名を後世に垂る。

嵆中散言志　康

曰に余師訓あらず、志を潛めて世塵を去る。遠く想ひて宏域を出で、高歩して常倫を超ゆ。靈鳳羽儀を振ひ、景を西海の濱に戢む。朝に（七二）琅玕の實を食ひ、夕に玉池の（七三）津を飲む。順に處て故より累なく、徳を養ひて乃ち神に入る。曠なる哉宇宙の惠、（七四）雲羅更ゝ四陳す。（七五）哲人は義を識るを貴び、（七六）大雅身を庇ふを明にす。莊生は無爲を悟り、老氏は其眞を守る。天下皆（七七）一を得、（七八）名實久しく相賓たり。（七九）咸池爰居

【七二】琅玕。美玉なり。
【七三】津。液なり。
【七四】雲羅。雲の網。四陳は四方に張ること。
【七五】哲人。智者なり。
【七六】大雅。詩經の篇名。
【七七】一を得。老子に「天は一を得て以て清く、地は一を得て以て寧く、王侯は一を得て以て天下の正をなす」とあり。
【七八】名實。莊子に「名は實の賓たり」とあり。
【七九】咸池。黄帝の音樂。爰居は海鳥の名、莊子に「海鳥魯郊に止る、魯侯之を廟に觴し九韶を奏して以て樂となし、太牢を具へて以て膳となす。鳥眩視憂悲して敢て一臠を食はず、敢て一杯を飲まず、三日にして死す、此れ己の養を

を饗せば、鍾鼓或は愁辛。（八〇）柳惠直道を善し、（八一）孫登人を知るに庶し。寫懷良に未だ遠からず、感贈して以て紳に書す。

【大意】われ師の教訓を受けず。故に俗事に疎し。乃ち世間を出で俗輩を越え、鳳凰と同じく光景を匿し、瓊樹の實を食ひ、玉池の水を飮み、隱遁高潔の行をなす。既に順に處て累なく、道德を以て自ら養ふ。天地の惠廣大にして、雲羅の四方に布陳するが如し。夫れ智者は義理を識るを貴び、大雅は其身を庇ふべきを明にす。故に老子莊子は天眞を守り無爲を道とす。天下皆一を得、名實互に賓主となる。禮樂は美なりと雖も、鳥之を聞かば却つて悲愁辛酸す。（榮祿は美ならざるにあらざれども、之を視ること鳥の鐘鼓の音を聞くが如きに喩ふ）われ直道を以て幽縶せらるること、柳下惠の如し。かの孫登實に人を知るの明ありと謂ふべし。既に幽憤の懷を寫して、未だ眞理を盡さず、故に所感を述べて世人に贈り、又紳に書して自ら戒む。

阮步兵 詠懷 籍

以て鳥を養へばなり」とあり。

【八〇】柳惠。柳下惠なり。嘗て士師となりて三たび黜けらる人曰く子未だ以て去るべからざるかと、曰く道を直くして人に事へば焉に往くとして三たび黜けられざらんやと。

【八一】孫登。魏氏春秋に「初め嵇康藥を中山に採り隱者孫登を見る、康之と言はんと欲す登默然として對へず、年を踰えて將に去らんとす、康曰く先生竟に言ふなきかと、登乃ち曰く、子は才多く識寡し、難いかな今の世に免るるやと」とあり。

(八二)青鳥海上に遊び、(八三)鸒斯蒿下に飛ぶ。(八四)沈浮相宜しからず、羽翼各〻歸あり。(八五)飄颻して年を終ふべし、(八六)沆瀁安んぞ是非あらん。朝雲變化に乘ず、光耀世の希なる所。(八七)精衞木石を銜む、誰か能く幽微を測らん。

【大意】海鳥は海上に遊び、小鳥は蓬下に飛ぶ。その高下相同からずと雖も、其の性に適して逍遙するは則ち相同じ。一は蓬下に飄颻し、一は大海に沆瀁するも、その樂は則ち一なり。何ぞ是非優劣あらんや。昔高唐の女神、化して朝雲となる。其の光色當代に稀なりしも、榮華は妄に冀ふべからず。精衞木石を銜みて大海を塡め、日夕勞苦すれども、蓬下幽微の處にあれば、誰か之を妨ぐる者あらんや。我れ之に倣はんのみ。

離情　張司空華

秋月(八八)簾櫳に映じ、光を懸けて(八九)丹墀に入る。佳人鳴琴を撫し、清夜(九〇)空帷を守る。蘭逕行迹

【八二】青鳥。海鳥なり。
【八三】鸒斯。からすの一種、詩經に「弁たる彼の鸒斯」とあり。蒿は蓬。
【八四】沈浮。沈は蒿下をいひ、浮は海上をいふ。
【八五】飄颻。輕飛の貌。
【八六】沆瀁。廣大の貌。
【八七】精衞。鳥の名、山海經に「發鳩の山に鳥あり精衞と名づく、赤帝の女娃東海に遊び溺死して反らず、化して精衞となり、常に西山の木石を取り以て東海を塡む」とあり。
【八八】簾櫳。櫳はオホマド。
【八九】丹墀。朱を以て塗りし階上の地。
【九〇】空帷。空閨といふが如し。

少く、玉臺(九一)網絲を生ず。庭樹(九二)紅彩を發し、閨草(九三)碧滋を含む。(九四)延佇して綾綺を整へ、萬里(九五)所思に贈る。願くは(九六)湛露の惠を垂れ、我が(九七)皎日の期を信にせんことを。

【大意】明月簾窓に映じ、光を垂れて丹墀に入る。一美女あり空閨を守りて琴瑟を弄す。徑に往來の人なく、樓に人影なし。庭樹花を開き草は綠を含む。佇立して綾綺を整理し、以て遠く夫に贈らんとす。偏に夫の恩惠を垂れて、我が此心を信せんことを望む。

潘黄門岳 述哀

青春(九八)天機を速にし、(九九)素秋白日を馳す。(一〇〇)美人重泉に歸し、(一〇一)悽愴して終畢なし。(一〇二)殯宮已に肅淸、(一〇三)松栢轉た蕭瑟たり。俯仰して未だ弭む能はず、尋念ただ一のみにあらず。衿を撫でて寂寞を悼み、(一〇四)怳然として失ふあるが若し。明月(一〇五)綺窓に入り、髣髴として(一〇六)蕙質を想ふ。憂を銷すること(一〇七)萱草にあ

【九一】網絲。蜘蛛の巣。
【九二】紅彩。花なり。
【九三】碧滋。綠にして繁ること。
【九四】延佇。久しく立つこと。綾綺はアヤギヌ。
【九五】所思。夫をいふ。
【九六】湛露。夫の恩惠に喩ふ。
【九七】皎日。明なる日、堅き誓に喩ふ。
【九八】天機。天の運行。
【九九】素秋。秋の色は白、故に秋を素秋といふ。
【一〇〇】美人。潘岳の妻を指す。重泉は黄泉。
【一〇一】悽愴。悲傷なり。
【一〇二】殯宮。葬るまでの間、柩を安置する室。肅淸は寂寞。
【一〇三】松栢。墓に植ゑし木。蕭瑟は風の淋しく吹く聲。
【一〇四】怳然。自失の貌。
【一〇五】綺窓。アヤギヌを以て飾りし窓。
【一〇六】蕙質。美しき姿。
【一〇七】萱草。草の名、此草人を

らず、永懷夢寐に寄す。夢寐復た(一〇八)冥冥たり、何に由りてか爾の形を覿ん。我れ(一〇九)北海の術に慙ぢ、爾(一一〇)帝女の靈なし。駕して言に(一一一)遠山に出で、徘徊して(一一二)松銘に泣く。雨絶えて還雲なく、花落ちて豈英を留めんや。日月方に序を代ふ、(一一三)寢興何れの時か平ならん。

【大意】此れ亡婦を悼む詩なり。春忽ち去りて今既に秋となりしも、妻の死を悲んで極り已むことなし。殯宮寂寞として墓上の松柏風淋し。我が尋思哀念ただ一途にあらず、寂寞を傷んで惘然として自失せるが如し。明月を見ては其姿を見るが如し。我が憂は萱草の能く消す所にあらず、ただ夢寐を借りて相見んことを思ふも、夢中見る所明瞭ならず。然れども我に北海の術なく、汝亦巫山神女の靈なし。何に由りてか相見るを得ん。出でて墓を弔ひ碑に對して涙を濺ぐ。ああ雨絶えては雲還らず、花落ちては英を留めず。(人の死して還らざるに喩ふ)復た如何ともすべきなし。日を經ること既に久しきも、追慕の情かくの如し。何れの時にか安んじて起臥するを得ん。

して憂を忘れしむ。

【一〇八】冥冥。暗昧なり。

【一〇九】北海。列異傳に「北海の營陵に道人あり、能く人をして死人と相見しむ」とあり。

【一一〇】帝女。宋玉集に「楚の襄王宋玉と雲夢の野に遊び朝雲の館を望むに氣あり須臾の間變化窮りなし、王問ふ此は是れ何の氣ぞと、玉對へて曰く昔先王高唐に遊び怠りて晝寢ぬ、夢に一婦人あり自ら云ふ我は帝の季女、名を瑤姬といふ、王の來遊を聞く、願くは枕席を薦めんと、王因つて之を幸す」とあり。

【一一一】遠山。墓なり。

【一一二】松銘。松下の碑なり。

【一一三】寢興。起臥なり。

陸平原 羇旅 機

(二四)儲后嘉命を降し、恩紀(二五)微身に被る。(二六)明發桑梓を眷み、永歎して密親を懷ふ。念を流して(二七)南澨を辭し、怨を銜んで(二八)西津に別る。馬を馳せて淮泗に遵ひ、旦夕梁陳を見る。義に服して(二九)上列を追ひ、迹を矯げて宮臣に厠る。(三〇)朱黻咸髦士、(三一)長纓皆俊人。(三二)承華の內に契闊し、(三三)綢繆して歲年を踰ゆ。日暮聊か駕を揔べ、逍遙して(三四)洛川を觀る。(三五)徂沒拱木多く、(三六)宿草寒煙を陵ぐ。遊子(三七)感慨し易く、(三八)躑躅して還りて自ら憐む。願うて言に(三九)三鳥に寄す、離思徒然にあらず。

【二四】儲后。太子なり。嘉命は美命なり。
【二五】微身。陸機自ら謂ふ。
【二六】明發。早曉なり。桑梓は故鄉。
【二七】南澨。南方の江岸。
【二八】西津。西方の渡場。
【二九】上列。貴官の人。
【三〇】朱黻。赤き膝蔽を著けし侍臣。髦士は俊傑。
【三一】長纓。長き冠の紐。
【三二】承華。太子の宮門の名。契闊は勤苦すること。
【三三】綢繆。纏綿なり。
【三四】洛川。川の名、洛水なり。
【三五】徂沒。死亡なり。拱木は墓上の大木。
【三六】宿草。墓上の草。
【三七】感慨。一に感慨に作る。
【三八】躑躅。徘徊なり。
【三九】三鳥。楚辭に見ゆ、當時見る所の鳥を指して言ふ。定名にあらず。

【大意】われ太子の恩命を蒙り、太子洗馬に任ぜられ、洛陽に客となりて、常に故鄉の親舊を懷ひ、嘗て江岸を辭し渡津に別れ、淮泗梁陳を經て來りし時を憶ふ。既に古人の道に遵ひて高官に伍し貴人に交る。その人皆英傑の士なり。かくて太子に事へて數年を過ぎぬ。夕に馬を驅りて

洛水の邊に遊び、墳墓の多きを見、忽ち感慨を起して自ら憐れみ、離思を三鳥に寄せて故郷に傳へんと欲す。

左記室　詠史　思

(一三〇)韓公賣藥に淪み、(一三一)梅生市門に隱る。(一三二)百年信に荏苒、何を用てか心魂を苦むる。當に(一三三)衞霍の將たるを學ぶべし、功を建てて(一三四)河源に在り。(一三五)珪組賢君の眄、(一三六)靑紫明主の恩。(一三七)終軍才始めて達し、(一三八)賈誼位方に尊し。(一三九)金張貂冕を服し、(一四〇)許史華軒に乘る。王侯片議を貴び、公卿一言を重んず。太平歡娛多く、(一四一)蓋を東都の門に飛ばす。顧みて(一四二)張仲蔚を念ふ、(一四三)蓬蒿中園に滿つるを。

【大意】　昔韓康は身を賣藥に淪め、梅福は門卒となりて隱れたりといふ。人生は暫時の夢の如し。何ぞ心を苦めて淪隱をなすべけんや。宜しく

【一三〇】韓公。後漢の韓康、字は伯休、常に名藥を長安市中に賣る。
【一三一】梅生。漢の梅福一朝妻子を棄てて去り名姓を變じて吳市の門卒となる。
【一三二】百年。人の壽命をいふ。荏苒は暫時なり。
【一三三】衞霍。衞靑、霍去病、ともに漢の名將なり。
【一三四】河源。西域をいふ。
【一三五】珪組。珪は玉。組は綬。
【一三六】靑紫。綬の色なり。
【一三七】終軍。漢書に「終軍長安に至りて上書す、武帝其文を異とし拜して謁者給事中となす」とあり。
【一三八】賈誼。漢書に「賈誼博士となる、文帝之を悅び超遷して歲中に太中大夫に至る」とあり。
【一三九】金張。金日磾、張安世、並に累代漢に仕ふ。貂冕は冠なり。
【一四〇】許史。漢の許皇后、史良娣の家盛に奢侈をなす。華軒は美しき車。
【一四一】蓋。車蓋なり。
【一四二】張仲蔚。漢の扶風の人、隱れて仕へず、天官博物に明に好んで詩賦を作る、居る所蓬蒿人を沒す。
【一四三】蓬蒿。よもぎ。

衞青、霍去病の將となりて匈奴を征し、大功を建てしに倣ふべきなり。一たび功を建つれば、天子の恩顧を蒙りて金印紫綬を佩び、榮達すること終軍、賈誼の如く、衣冠を著け高車に乘ること金張許史の如くなるべく、王侯も其言を尊重するに至り、車を馳せて都門に遨遊するを得。翻つて張仲蔚を念ふに、蓬園中に茂りて人を沒せりといふ。何ぞかかる隱士に倣ふべけんや。

張黄門協　苦雨

(一四四)丹霞陽景を蔽ひ、綠泉陰渚に涌く。(一四五)水鸛層甍に巣くひ、山雲柱礎を潤す。(一四六)有弇春節に興り、愁霖(一四七)秋序を貫く。(一四八)燮燮として涼葉奪ち、(一四九)戾戾として飈風擧る。高談して四時を玩び、(一五〇)索居して儔侶を慕ふ。靑苔日夜黄なり、(一五一)芳蕤宿楚を成す。歲暮れて百慮交り、以て(一五二)延佇を慰むるなし。

【大意】雲集りて日を蔽ひ陰渚に綠水涌き、水鳥も高棟に巣くひ、雲氣柱礎を潤し、霖雨春より秋に至り、木葉漸く落ち急風頻に至る。われ高談して四時の景を玩び、離居して友を慕ふ。今や靑苔漸く黄にして花草枯叢を成し、年將に盡きんとし、百慮心中に交れど

【一四四】丹霞。赤雲なり。陽景は日なり。
【一四五】水鸛。水鳥の名。層甍は高棟。
【一四六】有弇。雨の神。
【一四七】秋序。秋節なり。
【一四八】燮燮。漸漸なり。
【一四九】戾戾。急なり。飈風は風。
【一五〇】索居。離居なり。
【一五一】芳蕤。草木華盛の貌。宿楚は叢木。
【一五二】延佇。久しく待つこと。

も、友人の來るなく、我が久待の情を慰むるなし。

劉大尉琨　傷亂

(一五三)皇晉陽九に遭ひ、天下(一五四)氛霧横はる。(一五五)秦趙薄蝕に値ひ、(一五六)幽幷虎據に逢ふ。伊れ余龍靈を荷ひ、感激して(一五七)馳鶩に徇ふ。(一五八)六奇の術なしと雖も、冀くは(一五九)張韓と遇はんことを。(一六〇)寗戚角を扣いて歌ひ、桓公遭ひて乃ち擧ぐ。(一六一)荀息險難を冒す、實に忠貞を以ての故なり。空しく日月をして逝かしめ、愧づらくは(一六二)古人の度なきを。馬に飲ひて(一六三)城濠を出で、北のかた沙漠の路を望む。千里何ぞ(一六四)蕭條たる、白日寒樹に隱る。袂を投じて既に憤懣し、枕を撫でて百慮を懷く。功名惜むらくは未だ立たず、(一六五)玄髮已に素に改まる。時なる哉苟に

【一五三】皇晉。大晉といふに同じ　陽九は災厄なり。

【一五四】氛霧。亂賊に喩ふ。

【一五五】秦趙。秦は姚弘の據る所　趙は石勒の據る所。薄蝕は侵略。

【一五六】幽幷。幽州は段匹磾の領する所。幷州は劉琨の領する所。虎據は威武の盛なるをいふ。

【一五七】馳鶩。奔走して賊を拒ぐこと。

【一五八】六奇。漢書に「陳平、常に護軍中尉を以て從ひて臧荼陳豨を擊ち、凡そ六たび奇計を出す」とあり。

【一五九】張韓。張良、韓信。

【一六〇】寗戚。淮南子に「寗戚牛角を擊ちて歌ふ、桓公擧げて以て大田となす」とあり。

【一六一】荀息。晉の大夫なり、左傳に「初め獻公荀息をして奚齊に傳たらしむ、公疾む、之を召して曰く、是の藐たる諸孤を以て大夫に辱在す、其れ之を若何せんと、稽首し對へて曰く、臣股肱の力を竭し之に加ふるに忠貞を以てせん、其の濟るは君の靈なり、濟らずんば死を以て之に繼がん」とあり。

【一六二】古人。寗戚荀息を指す。度は才略。

(一六六)會あり、治亂惟れ(一六七)冥數なり。

【一六三】城濠。城の周圍の溝。
【一六四】蕭條。淋しき貌。
【一六五】玄髪。黑髪なり。素は白髪。
【一六六】會。運會なり。
【一六七】冥數。運命なり。

【大意】此れ盧諶に贈る詩に擬せるなり。晉室災厄に遇ひ、亂賊四方に興り、秦趙皆賊の侵略に遇ふ。余乃ち段匹磾と幽并二州に據りて之を拒ぐ。余既に君恩を蒙ること厚し。故に感激して討賊の事に從ふ。かの陳平が六奇の策なしと雖も、張良、韓信の漢の高祖に遇へるに同じからんことを望み、寗戚、荀息の忠貞を抱けるも、空しく歳月を送りて才略古人に及ばざるを恥づ。城を出でて北方沙漠の地に向ひ、天下を平定せんとすれば、戰亂を經て千里蕭條、荒野に人影なし。乃ち自ら憤怨憂慮し、安臥する能はず。功名未だ立たずして、白髪漸く多きを悲む。然りと雖も世の治亂は天命あり。徐に其機の至るを待たんと欲す。

感諶 盧郎中交

大厦異材を須ち、(一六八)廊廟庸器にあらず。英俊世功を著し、多士(一六九)斯位を濟す。眷顧して(一七〇)綢繆を成し、廼ち(一七一)時髦と匹す。(一七二)姻媾久しく虛からず、(一七三)契闊豈ただ一のみならんや。厄に逢ふこと既に同じく、危きに處るは恤ふる所にあ

【一六八】廊廟。宰臣に喩ふ。庸器は凡庸の才。
【一六九】斯位。天子の位。
【一七〇】綢繆。親密なり。
【一七一】時髦。當時の俊傑。
【一七二】姻媾。婚姻を結ぶこと。

らず。常に先達の（一七四）槩を慕ひ、古を觀て得失を論ず。（一七五）馬服趙將となり、（一七六）疆場淸謐を得たり。（一七七）信陵魏印を佩び、秦兵敢て出でず。（一七八）幄中の策なきを慨し、徒に（一七九）素絲の質に慙づ。覊旅して舊鄕を去り、感遇琴瑟に喩ふ。自ら顧るに（一八〇）杞梓にあらず、勉力（一八一）無逸に在り。更に以て友朋を畏る、（一八二）濫吹名實に乖く。

【一七三】契闊。勤苦なり。

【一七四】槩。志節なり。

【一七五】馬服。史記に「趙奢、大に秦軍を破る、趙の惠文王奢に號を賜ひて馬服君となす」とあり。

【一七六】疆場。境内なり。淸謐は靜なり。

【一七七】信陵。史記に「魏の公子無忌、信陵君と號す」とあり。魏印は魏の將印。

【一七八】幄中。帷幄なり。

【一七九】素絲。白絲なり。淮南子に「墨子練絲を見て泣く、其の以て黃にすべく以て黑にすべきを以てなり」とあり。

【一八〇】杞梓。美材なり。

【一八一】無逸。逸樂に耽らざること。

【一八二】濫吹。韓非子に「韓の昭侯曰く竽を吹く者衆し、吾以て其善き者を知るなしと、田嚴對へて曰く、一一之を聽けば乃ち濫を知る」とあり。

【大意】劉琨に贈りて交情を謝するに擬するなり。大屋を構ふるには必ず瑰異の材を用ふべく、宰臣の職は凡庸の人に任ずべからず。英俊の人濟世の功を著し、衆士共に天子の位を翼く。我れ足下（劉琨を指す）の眷顧を受けて懇親を結び、當時の俊傑と相伍するを得、又婚姻を結び、（諶の妹、琨の弟に嫁す）同じく爭亂に遇ひて父母を喪ひ、勤苦すること一事に止らず。險厄に遇ふこと相同じきを以て自ら以て憂となさず。常に古人の志節を慕ひ其得失を觀、趙奢と信陵君とに則らんと

す。然も帷幄に參して奇謀なく、善惡屢變ずるを慚づ。今や舊郷を去りて幷州に在れども、尙ほ足下の恩遇琴瑟の和の如くなりしを懷ふ。自ら顧るに美材にあらず。勉めて逸樂に耽ることなきを期し、更に無能にして足下の下に在り、名其實に過ぎしを畏る。

(一八三)郭弘農 遊仙 璞

(一八四)崦山靈草多く、海濱(一八五)奇石饒し。(一八六)偃蹇として青雲を尋ね、(一八七)隱淪して精魄を駐む。道人(一八八)丹經を讀み、(一八九)方士玉液を錬る。(一九〇)朱霞窻牖に入り、(一九一)曜靈空隙を照す。(一九二)傲睨して木芝を摘り、波を陵いで(一九三)水碧を采る。(一九四)眇然たり萬里の遊、掌を矯げて(一九五)煙客を望む。永く(一九六)安期の術を得ば、豈(一九七)濛汜の迫るを愁へんや。

【大意】仙山には靈草あり、海濱には奇石あり、之を服用して以て仙となるべし。高山に登りて身を隱し、魂魄を留めて長壽を保つ。(魂魄身を去れば死するなり)山中には道士の仙書を讀み仙藥を

【一八三】郭弘農。郭璞卒して後弘農太守を贈らる。
【一八四】崦山。山なり。靈草は芝草、卽ち仙草なり。
【一八五】奇石。之を服して仙となるべし。
【一八六】偃蹇。高山に緣る貌。
【一八七】隱淪。迹をひそむること。精魄は魂魄。
【一八八】丹經。仙書なり。
【一八九】方士。道人に同じ。玉液は玉膏、仙藥なり。
【一九〇】朱霞。赤雲なり。
【一九一】曜靈。日なり。
【一九二】傲睨。縱誕の貌。木芝は紫芝、仙草なり。
【一九三】水碧。仙藥なり。
【一九四】眇然。遠き貌。
【一九五】煙客。仙人なり。
【一九六】安期。古の仙人の名。
【一九七】濛汜。日の入る處。

錬るあり、赤雲窓に入り日戸間を照す。ここに仙草を拾ひ仙藥を採り、一擧萬里に升り、手を擧げて飛仙を望む。よく仙術を脩め得ること安期の如くならば、豈歳月の身に迫るを愁へんや。

（一九八）張廷尉雜述　綽

（一九九）太素既已に分れ、（二〇〇）吹萬形兆を著す。（二〇一）寂動苟に源あり、因つて（二〇二）殤子を夭なりと謂ふ。道喪びて（二〇三）千載を渉る。（二〇四）津梁誰か能く了にせん。思ふ（二〇五）扶搖の翰に乘り、卓然として風を陵いで矯らんことを。靜に（二〇六）尺棰の義を觀るに、理足りて未だ嘗て少からず。（二〇七）罔罔として秋月明に、（二〇八）軒に憑りて堯老を詠ず。迹を浪にして（二〇九）蚩妍なく、然る後に君子の道なり。（二一〇）領略一致に歸し、（二一一）南山綺皓あり。臂を交へて久しく變化し。火を傳ふるは乃ち薪草。（二一二）亹亹として玄思清く、胸中機巧を去る。物我俱に懷に忘るれば、以

【一九八】張廷尉。一本に孫廷尉に作るに從ふべし。
【一九九】太素。天地未だ分れざるをいふ。
【二〇〇】吹萬。元氣の萬物を生養すること。形兆は萬物のきざし。
【二〇一】寂動。靜動なり。
【二〇二】殤子。幼にして死せる人。夭はワカジニ。莊子に「殤子より壽なるはなし、而して彭祖を夭となす」とあり。
【二〇三】千載。千年なり。
【二〇四】津梁。道に喩ふ。
【二〇五】扶搖。風なり。
【二〇六】尺棰。一尺の杖。莊子に「一尺の棰日に其半を取れば、萬世竭きず」とあり。
【二〇七】罔罔。明なる貌。
【二〇八】軒。欄干なり。堯老は堯及び老子。
【二〇九】蚩妍。好惡なり。
【二一〇】領略。理要なり。
【二一一】南山。商洛山なり。綺皓は商山の隱者。
【二一二】亹亹。勉むる貌。玄思は深遠なる思。

て（三三）鷗鳥に狎るべし。

【大意】天地の氣分れて萬物ここに生ず。大道の要はもと動靜源なし。今既に源あり。故に壽天轍を異にし、殤子を以て夭となすに至る。大道喪びて今既に千年を歷、世復た之を明にする者なし。われ乃ち之を體得し、風に乘りて高く擧らんとす。かの一尺の棰を取りて其半を折れば、萬世を經るも窮り竭ることなし。欄に憑りて明月を望み、唐堯老子の徳を歌ひ、混然として好惡を絕ち、乃ち君子の道となすに足る。大道の要は途を異にして一致に歸す。夫れ變化は執りて留むべからず、故に孔子と顏回と臂を交へて相守ると雖も、變化を停むる能はず。薪相繼ぎて火傳はる。甲死して乙生れ、乙來りて、甲去る。死生何ぞ哀むに足らんや。（事は莊子に出づ）此の深理を悟り、機巧の心を棄て、物我の差別を忘るれば、禽獸も我と狎れて懼るることなかるべし。

【三三】鷗鳥。かもめ。莊子に「海上に人の鷗鳥を好む者あり、旦にして海上に之き鷗鳥に從つて遊ぶ、鷗鳥至る者百數、其父曰く吾聞く鷗汝に從つて遊ぶと、試に取り來れ吾之を玩ばんと、曰く諾と、明旦海上に之くに鷗鳥舞ひて下らず」とあり。

（三四）許徵君 自序 詢

（三五）張子內機に闇く、
單生外像に蔽はる。

【三四】許徵君。徵召に應じて仕へざる士を徵君といふ。許詢 字は玄度、晉の高陽の人、會稽に寓居す。

【三五】張子。莊子に「單豹といふ者あり巖居して水飮す、行

一時(二六)冥筌を排せば、(二七)冷然たり空中の賞。此の(二八)弱喪の情を遣り、神を資りて獨往に任す。藥を白雲の隈に采り、聊か以て養ふ所を肆にす。(二九)丹葩芳蕤を曜し、綠竹(三〇)閑敞を陰ふ。(三一)苕苕として意勝を寄せ、覺えず虛を陵いで上る。(三二)曲櫺鮮飈を激し、石室幽響あり。去りて欲する所に從はん、得失(三三)外奬にあらず。至れる哉(三四)斤を操るの客、(三五)重明固より已に朗なり。(三六)五難既に灑落す。迹を超げて塵網を絕たん。

年七十にして猶ほ嬰兒の色の如し、不幸にして餓虎の殺して之を食ふに遇ふ、張毅といふ者あり高門懸薄趣き詣らざるはなし、行年四十にして內熱の病あり以て死す、豹は其內を養ひて虎其外を食ひ、毅は其外を養ひて其病其內を攻む」とあり。外像は外治の法なり。

【二六】冥筌。筌は魚を捕ふる器なり。塵俗に喩ふ。

【二七】冷然。涼しき貌。

【二八】弱喪。少にして故居を失ひし者をいふ。莊子に「予いづくんぞ死を惡むの弱喪にして歸るを知らざる者にあらざるを知らんや」とあり。

【二九】丹葩。紅花なり。芳蕤は枝葉。

【三〇】閑敞。靜廣の貌。

【三一】苕苕。遠き貌。意勝は俗に勝れる情。

【三二】曲櫺。曲窓なり。鮮飈は涼風。

【三三】外奬。外部より勸勵すること。

【三四】斤を操るの客。莊子に「莊子曰く、郢人其鼻端を堊漫すること蠅翼の若し、匠石をして之を斲らしむ、匠石斤を運らし風を成す、聽して之を斲らしむ、堊を盡して鼻傷かず、郢人立ちて容を失はず、宋の元君之を聞き匠石を召して曰く、試に寡人の爲に之をなせと、匠石曰く臣嘗て能く之を斲れり、然りと雖も臣の質(容を動かざる人)死せること久し云云」とあり。

【三五】重明。鼻を傷けずして堊を斲る人と、容を動かさずして鼻を斲らせし人とをいふ。

【三六】五難。向秀嵇康の養生論を難じて曰く、養生に五難あり、名利滅せず此れ一難、喜怒除かず此れ二難、聲色去らず此れ三難、滋味絕えず此れ四難、神慮消散す此れ五難と。灑落は脫落なり。

【大意】張毅は内治の幾微に暗く、單豹は外治の法則に暗し。此れ皆一方に偏して廣からざるなり。如かず塵俗の外に去り、冷然として空中を涉らんには。我れ既に生を好み死を惡むの情を棄て、わが神を持して獨往に任せ、仙藥を白雲の間に採り、紅花綠竹の閑地に居り、時に勝情を馳せて虛空に登り、或は曲窓石室に歸りて風響を聽く。願くは我が欲する所の道に從はん。得失は己の心に由る。何ぞ外物の勸勵する所ならんや。鼻上の堊を斲る者、容を動かさずして鼻上の堊を斲らしめし者、兩兩相待ちて始めて鼻を傷けずして堊を斲るを得るなり。今や世に相知の士なし。如かず養生の五難を脫落し、超絕して世事を去らんには。

殷東陽 興矚 仲文

晨に遊んで萃る所に任す。悠悠として眞趣を蘊めり。雲天亦(三二七)遼亮、時に賞心と遇ふ。青松(三二八)秀蕚を挺で、(三二九)惠色喬樹を出づ。淸波の深きを極眺すれば、緬に石壁の素きに映ず。情を瑩きて(三三〇)餘滓なく、衣を拂ひて塵務を釋つ。仁を求むること既に我よりす。(三三一)玄風豈外に慕はんや。直置 宰る所を忘れ (三三二)蕭散慮を遺るるを得たり。

【大意】朝に遊んで觀望すれば、萬物竝に目中に聚り。悠悠として道の眞趣を蘊積し、雲天亦高明

【三二七】遼亮。高明なり。
【三二八】秀蕚。花なり。
【三二九】惠色。媚色なり。喬樹は高樹。
【三三〇】餘滓。汚穢なり。
【三三一】玄風。道をいふ。
【三三二】蕭散。空遠なり。

にして我が心に適し、青松花を開きて媚色あり。遠く山水を視れば、心中の汙穢を磨き去り、塵俗の事を解散す。われ既に道を我が身に求む。豈道を外物に求めんや。心專一にして主宰する所を忘れ、空遠にして思慮を遣れぬ。

謝僕射遊覧　混

信なる矣（二三三）物化に勞し、（二三四）憂矜未だ整ふる能はず。薄か言に郊衢に遵ひ、轡を摠べて（二三五）臺省を出づ。（二三六）淒淒として節序高く、（二三七）寥寥として心悟永し。（二三八）時菊巖阿に曜き、雲霞秋嶺に冠す。（二三九）眷然として良辰を惜み、徘徊して（二四〇）落景を踐む。（二四一）卷舒萬緒なりと雖も、動復（二四二）有靜に歸す。曾ち是れ（二四三）桑榆に迫し。歳暮れて乘る所に從ふ。（二四四）舟壑攀むべからず、懷を忘れて（二四五）匠郢に寄す。

【大意】我れ心を生死悲喜の事に勞し、常に憂を抱いて未だ安んずる能はず。乃ち郊外の道に遊び

【二三三】物化。萬物の生死。莊子に「既に化して生れ又化して死す」とあり。
【二三四】憂矜。憂心なり。
【二三五】臺省。役所の名、尚書省なり。
【二三六】淒淒。風寒き貌。節序は氣節。
【二三七】寥寥。心の清淨なる貌。
【二三八】時菊。秋菊なり。巖阿は山曲なり。
【二三九】眷然。顧戀の貌。良辰は好時。
【二四〇】落景。日暮の景。
【二四一】卷舒。盈縮變化なり。萬緒は萬端なり、多きをいふ。
【二四二】有靜。有の字意味なし、靜なり。老子に「夫れ物云云として其根に復歸す、根に歸るを靜といふ」とあり。
【二四三】桑榆。日の入る處、老年に喩ふ。
【二四四】舟壑。莊子大宗師篇に「夫れ舟を壑に藏し山を澤に藏する之を固といふ。然れども夜半に有力者之を負ひて走る、昧者は知らざるなり」とあり。
【二四五】匠郢。二二四を見よ。知己者に喩ふ。

て情思を慰めんとし、車に駕して官署を出づ。時に秋風淒淒として心之が爲に覺悟し、秋菊を巖角に見、雲霞の山を蔽ふを見る。良辰の景に眷戀して、覺えず晩景に至る。萬物變化して止まずと雖も、皆同じく至靜に歸す。今我れ漸く老ゆ、亦心を執りて靜理に就かんと欲す。舟を海壑に藏すれば、人之を安固なりとなす。然も夜半に有力者（造物主）ありて之を負ひて走り、亦之を留むべきにあらず。人も亦是に同じ。自ら以て安固なりとなせども、四時變遷して留むべからず。遂に死に歸するなり。如かず百慮を忘れて知己に寄らんには。

陶徵君　田居　潛

苗を種ゑて（二四六）東皐に在り、苗生じて（二四七）阡陌に滿つ。鉏を荷ふの倦ありと雖も、濁酒聊か自適す。日暮（二四八）柴車を巾る。路闇くして光已に夕なり。（二四九）歸人煙火を望み、（二五〇）稚子檐隙に候つ。（二五一）君に問ふ亦何の爲ぞ、百年會ず役あり。ただ願くは桑麻成り、（二五二）蠶月紡績するを得んことを。（二五三）素心正に此の如し。（二五四）逕を開いて三益を望む。

【大意】我れ隱居して農耕を事とす。身勞すと雖も酒を酌んで自ら慰するを得。夕に煙火を望んで

【二四六】東皐。東方の澤。
【二四七】阡陌。田のアゼ。
【二四八】柴車。粗惡なる車。
【二四九】歸人。陶潛自ら謂ふ。煙火は炊事の煙。
【二五〇】稚子。小子なり。
【二五一】君。陶潛自ら謂ふ。
【二五二】蠶月。養蠶の月。
【二五三】素心。本心なり。
【二五四】逕。庭中の小徑。漢の蔣詡、庭中に三逕を開けり。三益は三種の益友、論語に「益者三友、直を友とし諒を友とし多聞を友とするは益なり」とあり。

家に歸れば、童子喜んで我を簷下に待つ。因つて自ら問ふ。何が爲に自ら勞苦すると。自ら答へて曰く、人生百年皆勞役あり。誰か勞を免るる者あらんや。我れ耕織して自ら活計を營む。宿願ただ此の如し。時に益友を招きて、共に桑麻を談ずるのみ。

謝臨川 遊山 靈運

江海（二五五）邅迴を經にし、（二五六）山嶠盈缺を備ふ。（二五七）靈境信に淹留す、賞心徒設にあらず。（二五八）平明雲峯に登れば、杳として（二五九）廬霍と絕つ。（二六〇）碧障長く周流し、（二六一）金潭恆に澄澈す。桐林晨霞を帶び、石壁（二六二）初晣に映ず。（二六三）乳竇既に滴瀝、（二六四）丹井復た寥泬。（二六五）嵒崿轉た奇秀、（二六六）岑崟還て相蔽ふ。赤玉（二六七）瑤溪に隱れ、雲錦（二六八）沙汭に被る。夜は（二六九）猩猩の啼くを聞き、朝に（二七〇）鼯鼠の逝くを見る。（二七一）南中氣候暖に、（二七二）朱華白雪を凌ぐ。幸に（二七三）建德の鄉に遊び、奇を觀て（二七四）禹穴を經。身名竟に誰か辨ぜん、圖史終に磨滅す。

【二五五】邅迴。轉運なり。
【二五六】山嶠。山岳なり。盈は山をいひ、缺は谷をいふ。
【二五七】靈境。會稽をいふ。淹留は久しく留まること。
【二五八】平明。早曉なり。
【二五九】廬霍。二山の名。
【二六〇】碧障。玉山なり。
【二六一】金潭。臨海記に「白石山下に金潭あり、金光煥然たり」とあり。
【二六二】初晣。旭光なり。
【二六三】乳竇。鍾乳の穴。滴瀝は滴ること。
【二六四】丹井。朱砂の井。寥泬は深きこと。
【二六五】嵒崿。巖崖なり。
【二六六】岑崟。峻嶮の貌。
【二六七】瑤溪。玉溪なり。
【二六八】沙汭。沙岸なり。
【二六九】猩猩。鳥の名。
【二七〇】鼯鼠。むささび。
【二七一】南中。南方の國。
【二七二】朱華。紅花なり。
【二七三】建德。國の名、莊子に「南越に邑あり名けて建德の國と

且く(二七五)桂水の潮に泛び、月に映じて(二七六)海澨に游ばん。攝生は順に處るを貴ぶ。將に智者と爲に說かんとす。

いふ、其民愚朴にして私少く欲寡し」とあり。

【二七四】禹穴。夏禹の圖書を藏せし所。

【二七五】桂水。川の名。

【二七六】海澨。海岸なり。

【大意】江海は常に轉運して窮らず、山岳は高低の姿を備ふ。我れ久しく會稽の勝地に留り、山水の景を賞するは、孔子の所謂智者は水を樂み仁者は山を樂むものにして、決して偶然にあらず。朝に雲外の峰に登れば、杳然として高く廬霍二山に超え、衆山の竝び立てるを見、金水の淸く流るるを見る。更に赤霞と桐林と相映じ、旭光石壁を照し、鍾乳谷に滴り丹砂深井に湛へ、巖崖峻嶮にして沙石の美しきこと雲錦の如きあり。夜は猩猩の啼くを聞き朝には鼯鼠の飛ぶを見る。南方は溫暖なるを以て百花白雪を犯して開くあり。我れ嘗て建德の鄕に遊び、又禹穴の奇を探りしも、身名共に滅ひて今識る者なく、記錄する所の圖書亦見るべからず。願くは更に桂水に泛びて海上に遊ばん。時に安んじ順に處れば憂樂心に入らず。是れ攝生の理なり。我れ智者と此理を論ぜんと欲す。

顏特進 侍宴 延之

(二七七)太微帝宇を凝し、(二七八)瑤光神縣を正す。日を

【二七七】太微。星宮の名。帝宇は天子の宮殿。

【二七八】瑤光。北斗の第七星なり。神縣は赤縣神州なり。

揆りて書史を粲にし、都を相て聞見を麗にす。(二七九)漢に列りて仙宮を構へ、天を開いて寶殿を製す。桂棟(二八〇)夏飇を留め、(二八一)蘭橑冬霰を停む。青林(二八二)冥濛を結び、(二八三)丹巘葱蒨を被らしむ。山雲(二八四)卿靄を備へ、(二八五)池卉靈變を具ふ。(二八六)重陽清氣を集め、輦を下りて(二八七)玄宴を降す。(二八八)鶩望して寰隧を分ち、(二八九)矖目して都甸を盡す。氣生じて川岳陰り、煙滅えて淮海見る。(二九〇)中坐朱組溢れ、(二九一)步櫚瓊弁遒る。禮登りて(二九二)睿情佇うし、樂闋りて(二九三)皇眄を延く。(二九四)測恩踰逸に躋り、(二九五)牒に沿つて浮賤に懵し。榮は(二九六)兼金を餽るより重く、(二九七)華を巡りて盈瑱に過ぐ。敢て(二九八)輿人の詠を飾り、方に(二九九)綠水の薦に慚づ。

【大意】匠人星宮に法りて天子の宮を作り、

【二七九】漢。天河、あまのがは。仙宮は天子の宮殿。
【二八〇】夏飇。夏の風。
【二八一】蘭橑。木蘭の椽。
【二八二】冥濛。樹茂りて暗きなり。
【二八三】丹巘。赤き山。葱蒨は樹木の茂ろ貌。
【二八四】卿靄。瑞雲なり。
【二八五】池卉。池草なり。靈變は異狀。
【二八六】重陽。楚辭に「重陽を集めて帝宮に入ろ」とあり。
【二八七】玄宴。幽宴なり。
【二八八】鶩望。遠望なり。寰隧は邦邑といふが如し。
【二八九】矖目。廣く視ろこと。都甸は邑郊なり。
【二九〇】中坐。坐中なり。朱組は朱色の印綬。
【二九一】步櫚。長廊なり。瓊弁は玉冠。
【二九二】睿情。天子の感情。
【二九三】皇眄。天子の顧眄。
【二九四】測恩。深恩なり。踰逸は一本愉逸に作ろ、逸樂を極むろこと。
【二九五】牒。辭令書なり。浮賤は浮名ありて微賤なろこと。
【二九六】兼金。好金なり。
【二九七】華を巡ろ。未だ詳ならず盈瑱は盈尺の玉なり。
【二九八】輿人。衆人なり。左傳に「晉侯輿人の誦を聽く」とあり。
【二九九】綠水。古詩なり。

星斗を觀測して方角を正し、書史に據りて日景を揆り、都（丹陽なり）を奠めて見聞を美麗にし、宮殿高く雲漢に聳え、香木を以て棟椽となし、夏涼しくして冬暖なり。宮を繞りて綠樹鬱葱として茂り、瑞雲搖曳して池草奇異なり。車駕ここに臨みて淸宴を賜ふ。四方を遠望して雲煙の集散するを見、衣冠の臣の往來して樂めるを見る。禮成り樂終りて客將に散ぜんとするや、天子情を含んで顧眄すること之を久うす。ああ我れ深恩を賜りて逸樂を極め、職に任じて浮賤を恥づ。宴に侍するの榮華は兼金を賜るより重く、盈尺の璧に過ぎたり。我れ今輿人に倣ひて此詩を作り、以て陛下に獻ぜんとするも、終に古人綠水の詩に及ばざるを慚づ。

謝法曹 贈別惠連

昨（三〇〇）赤亭の渚を發し、今（三〇一）浦陽の汭に宿す。方に雲峯の異なるを作す、豈伊れ（三〇二）千里の別のみならんや。芳塵未だ席に歇きず、（三〇三）涔淚猶ほ袂に在り。艫を停めて極浦を望み、棹を弭めて風雪に阻らる。風雪既に時を經、夜永くして起ちて懷思す。（三〇四）汎濫たり北湖の游、（三〇五）苕亭たり南樓の期。翰を點じて新賞を詠じ、（三〇六）袠を開いて疑ふ所を瑩く。芳を摘みて氣の馥しきを愛し、蘂を拾ひて色の滋きを憐む。色滋きも（三〇七）沃若を畏れ、人事亦

【三〇〇】赤亭。驛の名。
【三〇一】浦陽。江口の名。
【三〇二】千里別。古曲の名。
【三〇三】涔淚。落淚なり。
【三〇四】汎濫。廣く遊ぶこと。
【三〇五】苕亭。樓の高き貌。

(三〇八)銷鑠す。(三〇九)子衿往く勿きを怨み、(三一〇)谷風輕薄を誚る。共に(三一一)延州の信を秉り、(三一二)仲路の諾に慙づるなし。(三一三)靈芝三秀を望み、(三一四)孤筠情の託する所。託する所已に殷勤、祇人を懷ふを攪すに足る。今(三一五)崿嶸の外に行き、思を銜んで海濱に至る。子を覿んとするも杳として未だ僻えず、(三一六)款睇何れの辰にか在らん。(三一七)雜珮贈るべしと雖も、(三一八)疏華竟に陳ぬるなし。陳ぬるなくして心(三一九)悁勞す。(三二〇)旅人豈遊遨せんや。幸に風雪霽れ、青春(三二一)江皐に滿つるに及び、纜を解いて(三二二)前侶を候ち、(三二三)還望して方に鬱陶たり。煙景離遠するが若く、末響(三二四)瓊瑤を寄す。

【大意】此れ遠行の途上より鄉里の友に寄するに擬するなり。我れ昨日赤亭驛を發して、今日浦陽

【三〇六】袠。帙なり。
【三〇七】沃若。盛なる貌。
【三〇八】銷鑠。衰散なり。
【三〇九】子衿。詩經の篇名。朋友の道絕えて相往來せざるを詠す。
【三一〇】谷風。詩經の篇の名。
【三一一】延州。吳の季札なり、四九を見よ。
【三一二】仲路。仲由、字は子路、孔子の弟子なり。論語に「子路宿諾なし」とあり。
【三一三】靈芝。神芝なり。三秀は芝草、皆仙草なり。
【三一四】孤筠。竹なり。竹は四時色を改むることなし。
【三一五】崿嶸。二山の名。
【三一】款睇。相見て懇歡すること。
【三一七】雜珮。腰に佩ぶる玉なり詩經に「雜珮以て之に贈らん」とあり。
【三一八】疏華。瑤華なり。楚辭に「疏麻の瑤華を折り、將に以て離居に遺らんとす」とあり。
【三一九】悁勞。憂ふること。
【三二〇】旅人。謝惠連自ら謂ふ。
【三二一】江皐。江澤なり。
【三二二】前侶。前行の徒。
【三二三】還望。顧望なり。鬱陶は哀思すること。
【三二四】瓊瑤。音信なり。

に宿せり。既に足下と雲山を隔つ。豈古人千里の曲あるのみならんや。足下の芳塵尙ほ席に殘り、別離の涙猶ほ我が袖に在り。風雪に阻てられて舟を停むるに因り、遙に足下を廻顧し、深夜起坐して思を馳す。乃ち嘗て共に北湖に遊び南樓に會し、筆を執りて新詩を詠じ、書帙を開いて疑義を尋ね、芳草を摘みて香色の盛美なるを愛し、坐に草木の枯槁し人事の衰散し易きを畏れ、子衿谷風の篇は輕薄にして友道の絕ゆるを誚れども、吾等は信を執りて、季札、子路の二人に慚ず、心を芝筠の芳堅なるに託せしことを思ふ。我が心を託すること既に此の如く深し。今却つて足下を懷ふの情を亂すに足るのみ。今嶢嵲二山の外を過ぎ、海濱に至らんとするに、足下を見ることを思へども杳として見るべからず。歡會の期亦知るべからず。疏麻の華を折りて足下に贈らんとするも、道遠くして前に致す能はず。空しく憂を增すのみ。幸に風雪霽れて春色江畔に滿つるに因り、舟を發せんとし、廻顧して又憂ふ。相去ること既に遠し。乃ち此詩を贈りて音信を通ず。

王徵君養疾　微

(三三五)窈藹として瀟湘空し。(三三六)翠磵澹として滋なし。(三三七)寂歷として百草晦き、(三三八)欻吸として鵾雞悲む。(三三九)清陰往來遠く、(三三〇)月華前墀に散ず。藥

【三三五】窈藹。深遠の貌。瀟湘は二川の名。
【三三六】翠磵。綠の溪谷。
【三三七】寂歷。凋疎の貌。
【三三八】欻吸。疾き貌。鵾雞は鳥の名。
【三三九】清陰。日なり。
【三三〇】月華。月光なり。前墀は

を錬りて(三三一)虚幌を矚、瑟を汎して遙帷に臥す。(三三二)水碧驗未だ黷まず、(三三三)金膏靈詎ぞ緇まん。北渚に(三三四)帝子あり、(三三五)蕩瀁として期すべからず。悵然たり山中の暮、痾を懷いて此詩を屬す。

【大意】瀟湘の間に病臥する意なり。瀟湘幽深にして澹然として滋味なく、百草枯れて鶗雞悲鳴す。われ山中の虚室に在りて、藥を錬り琴を彈ず。仙藥の靈驗尙ほ未だ顯れず。北渚に神女あれども、波に隨つて上下し、之と期會を結ぶべからず。悵然として病に臥し、遂に此詩を作りぬ。

從駕　袁太尉 淑

宮廟は禮哀敬、(三三六)枌邑は道嚴玄なり。恭潔明祀に由り、肅駕(三三七)祈年に在り。徒に詔して(三三八)季月に登り、(三三九)鳳を戒めて行川を藻す。(三四〇)雲旆漢の徙るに象り、(三四一)宸綱星の懸るに擬す。(三四二)朱櫂寒渚に麗く、(三四三)金鍐秋山に映ず。(三四四)羽衞流景に藹たり、(三四五)綵吹沈淵に震ふ。(三四六)詩を辨べ

前階。
【三三一】虚幌。虚窓なり。
【三三二】水碧。水玉、仙藥なり。
【三三三】金膏。仙藥なり。
【三三四】帝子。湘水の女神。娥皇女英。
【三三五】蕩瀁。波に隨つて上下すること。
【三三六】枌邑。漢の豐邑に枌社あり、宋は漢の子孫なるを以て枌社を祭る。
【三三七】祈年。豐年を祈ること。
【三三八】季月。三六九十二、四季の月をいふ、ここは九月なり。
【三三九】鳳。鳳蓋なり。行川は行く所の川。藻は麗なり。
【三四〇】雲旆。天子の旗。漢はアマノガハ。
【三四一】宸綱。天子の車上の珠網。
【三四二】朱櫂。朱漆を以て飾れる艣竿。
【三四三】金鍐。馬冠なり。
【三四四】羽衞。羽を負へる衞兵。
流景は日。藹は映なり。

て京國を測り、(二四七)籍を履んで都壥を鑑る。(二四八)萠謠玉律に響き、(二四九)邑頌丹絃に被らしむ。(二五〇)文軫桂海に薄り、聲教(二五一)冰天を燭す。和惠(二五二)上笏を頒ち、(二五三)恩渥下筵に浹し。幸に(二五四)洛を觀るの後に侍す。豈(二五五)河を巡るの前を慕はんや。義に服して方に沬むことなし。歌を展べて殊に未だ宣べず。

【大意】袁淑の御史中丞たりし時、宋の高祖が廟を拜し、竝に南郊に祭るに從ひて作れる詩に擬せるなり。禮祭の道哀敬を致し嚴肅を極め、恭潔にして事を脩め、親しく臨んで豐年を祈る。乃ち徒衆を戒めて宮殿を發し、車駕山川を照し、雲旗は天漢の廻旋するが如く、車上の珠綱は天星の懸れるが如く、侍衞の士日光に輝き、簫管の聲深淵に震ふ。詩を陳べて京邑の風を觀、聽斷の書を視て都邑の宛枉を知り、田夫野老の歌頌を採りて、玉律朱絃の樂を製す。かくて聲敎洽く海内に及び、和澤大臣に及び、施いて微臣に及ぶ。我れ既に扈從して洛を觀るの幸を得たり。何ぞ前君河を巡るの美を慕はんや。天子の道義に服し

【二四五】綵吹。綵衣を著たる人簫管を吹くなり。沈淵は深淵なり。
【二四六】詩を辨べ。辨は陳なり、禮記に「天子五年に一たび巡狩し太師に命じて詩を陳べしめ以て民風を觀る」とあり。
【二四七】籍。聽斷の書なり。都壥は都邑なり。
【二四八】萠謠。田夫の歌。
【二四九】邑頌。邑老の頌。

【二五〇】文軫。軫は車なり。禮記に「書は文を同うし、車は軌を同うす」とあり、天下一統の證なり。桂海は南海。
【二五一】冰天。北方の土。
【二五二】上笏。大夫の笏なり。
【二五三】恩渥。厚恩なり。
【二五四】洛を觀る。湯王洛を觀、黄魚の瑞あり。
【二五五】河を巡る。堯河濱に居る神龜圖を負ひて至る。

て已むことなく、歌詩を展ぶと雖も、未だ其美化を宣揚する能はず。

謝光祿 郊遊莊

舲を肅へて郊際を出で、樂を徙して江陰に逗る。翠山方に(三五六)藹藹たり、青浦正に(三五七)沈沈たり。涼葉沙嶼を照し、(三五八)秋榮水潯を冒ふ。風散じて松架險に、雲鬱して石道深し。靜默して(三五九)緜野を鏡、(三六〇)四睇すれば曾岑亂る。氣清くして(三六一)鴈引を知り、露華にして猨音を識る。(三六二)雲裝信に黻を解き、(三六三)煙駕金を辭すべし。始めは(三六四)丹泉の術を整へ、終には(三六五)紫芳の心を覩ん。(三六六)行光自ら容裔たり、(三六七)弱思をして侵さしむるなし。

【大意】 舟を整へて郊端を出で樂を奏して江陰に止れば、山は翠色を疊み、江水は深靜なり。花葉沙洲を蔽ひ風雲去來し、松危く道幽なり。眸を放ちて山野を望めば、氣清く露白く、鴈行猿聲耳目に爽なり。ここに以て紫綬金印を棄て雲衣を纏ひ、煙車に乗り仙道を脩むべし。我が神滅びずして自在を得たり。故に俗念をして侵害せし

【三五六】藹藹。盛なる貌。
【三五七】沈沈。深靜の貌。
【三五八】秋榮。秋花なり。水潯は水濱。
【三五九】緜野。遠野なり。
【三六〇】四睇。四方を望むこと。曾岑は高山。
【三六一】鴈引。鴈行なり。
【三六二】雲裝。雲霓を以て衣裳となすなり。黻は印綬。
【三六三】煙駕。煙車なり。金は金印。
【三六四】丹泉。仙泉なり。之を飲めば死せず。
【三六五】紫芳。紫芝、仙草なり。
【三六六】行光。精神の滅びざるをいふ。容裔は自在の貌。
【三六七】弱思。俗慮なり。

めず。

鮑參軍昭 戎行

豪士は(三六八)尺壁を枉げ、(三六九)宵人は恩光を重んず。義に徇ひて利の爲にするに非ず、(三七〇)羈を執りて輕ろしく鄕を去る。(三七一)孟冬郊祀の月、(三七二)殺氣嚴霜を起す。戎馬粟煖ならず、軍士冰を漿となす。晨に(三七三)城皐の坂に上れば、(三七四)磧礫皆羊腸。(三七五)寒陰白日を籠め、太谷晦くして(三七六)蒼蒼たり。徒を息はしめて征駕を稅き、劍に倚りて(三七七)八荒に臨む。(三七八)鵾鵬飛ぶ能はず、(三七九)玄武川梁に伏す。翮を鎩ぐこと時に由りて至り、物に感じて聊か自ら傷む。(三八〇)豎儒一經を守る。未だ(三八一)行藏を識るに足らず。

【三六八】尺壁。盈尺の玉。
【三六九】宵人。小人なり。
【三七〇】羈。馬を制馭する絆。
【三七一】孟冬。初冬十月、この月天子冬を北郊に迎ふ。
【三七二】殺氣。寒氣なり。
【三七三】城皐。坂の名。
【三七四】磧礫。小石なり。羊腸は屈曲なり。
【三七五】寒陰。寒雲なり。
【三七六】蒼蒼。昏冥なり。
【三七七】八荒。八方なり。
【三七八】鵾鵬。一は小鳥。一は大鳥。
【三七九】玄武。龜なり。
【三八〇】豎儒。賤儒なり。
【三八一】行藏。出處といふが如し。

【大意】小人は禮遇の恩に戀戀たるも豪傑の士は厚祿を辭して顧みず。我れ義に徇ひて利を求めず、馬を驅りて故鄕を去り、以て遠征の軍に從ふ。北地は寒氣烈しくして、飲食の物忽ち凍り、坂路屈曲して太谷晝暗く、大鳥も飛ぶ能はず、魚鼈も水中に潛む。此の苦寒の身を害する時に當りて

は、聊か自ら傷まざるを得ず。かの一經を守るの腐儒の如きは、何ぞ出處進退の理を知るに足らんや。我の如き豪士にして、始めて身を挺して王事に勤むべきを知るなり。

(三八二)休上人 怨別

西北秋風至り、(三八三)楚客心悠なる哉。日暮(三八四)碧雲合し、(三八五)佳人殊に未だ來らず。露彩方に(三八六)泛豔、(三八七)月華始めて徘徊。(三八八)寶書君が爲に掩ひ、(三八九)瑤琴詎ぞ能く開かん。(三九〇)巫山の渚を相思ひ、陽雲の臺を悵望す。(三九一)膏鑪沈燎を絶ち、(三九二)綺席浮埃を生ず。(三九三)桂水日に千里、之に平生の懷を因す。

【大意】秋風西北より來り、吾が客心を憂へしむ。日暮れ雲合して吾が友來らず。白露光を浮べ、月光流動するも、共に眞經を披き讀む能はず、玉琴亦彈ずべからず。遙に友の處を悵望すれば、香鑪火滅えて薰せず、宴席塵埃を生ず。因つて桂水の急流に託し、平生の情を通ず。

【三八二】休上人。惠休、姓は湯氏宋人なり。上人は沙門の尊稱。
【三八三】楚客。休上人自ら謂ふ。悠は志を失ふ貌。
【三八四】碧雲。青雲なり。
【三八五】佳人。友人なり。
【三八六】泛豔。浮光の貌。
【三八七】月華。月光なり。
【三八八】寶書。眞經なり。
【三八九】瑤琴。玉琴なり。
【三九〇】巫山、陽臺。皆楚の地名神女を以て朋友に喩ふ。
【三九一】膏鑪。香鑪なり。
【三九二】綺席。絹を張りし席。
【三九三】桂水。川の名。

騷上

(一)離騷經

(二)屈平

(三)帝高陽の苗裔、朕が(四)皇考を伯庸といふ。(五)攝提を孟陬に貞し、惟れ庚寅吾以て降る。皇覽て余を(六)初度に揆り、肇めて余に錫ふに(七)嘉名を以てし、余を名けて正則といひ、余を字して靈均といふ。(八)紛として吾れ既に此の(九)內美あり、又之に重ぬるに(一〇)脩能を以てす。(一一)江蘺と辟芷とを扈り、秋蘭を紉んで以て佩となす。(一二)汩として余將に及ばざらんとするが若し。年歲の吾と與ならざらんことを恐る。朝には(一三)阰の木蘭を搴り、夕には洲の(一四)宿莽を攬る。日月忽として其れ淹しからず、春と秋と其れ(一五)序を代

【一】離騷經。離は遭なり、騷は愁なり、後人之を尊んで經となす。

【二】屈平。名は平、字は原、楚と同姓なり、楚の懷王に仕へて三閭大夫となる、同列の大夫上官靳尙、其能を妬みて之を王に譖す、王乃ち屈原を江南に流す、原乃ち離騷を作り、遂に自ら汨羅に投じて死す。

【三】帝高陽。太古の帝顓頊なり。苗裔は後裔。

【四】皇考。考は亡父なり、皇は美稱。

【五】攝提。歲星の寅をさす年即ち寅の年。孟陬は正月。

【六】初度。初めて生れし時の規度。

【七】嘉名。美名なり。

【八】紛。盛なる貌。

【九】內美。內質の美。忠貞なり。

【一〇】脩能。脩は長なり。長遠なる材藝。

【一一】江蘺。香草なり、辟芷も香草。

【一二】汩。急速なる貌。

【一三】阰。陂に同じ、西山の間をいふ。木蘭は香木。

【一四】宿莽。冬に遇ふも枯れざる草。

ふ。草木の零落を惟ひ、(一六)美人の遲暮を恐る。壯を撫して穢を棄てず、何ぞ(一七)此度を改めざる。(一八)騏驥に乘りて以て馳騁し、來れ吾れ夫の(一九)先路に導かん。

【一五】序。順序。
【一六】美人。楚王をいふ。遲暮は老衰なり。
【一七】此度。惡行なり。
【一八】騏驥。駿馬なり。賢人に喩ふ。
【一九】先路。先王の道。

【大意】吾は顓頊高陽氏（五帝の一人）の末孫にして吾が父を伯庸といふ。攝提の歲正月庚寅の日を以て、我れ母體を降りて此世に生る。余の初めて生るるや父其規度を覽て後日必ず善行あらんことを測り、余に名くるに美名を以てして正則といひ、字を靈均といふ。（屈原、名は平、字は原なり、今正則といひ靈均といふは、其意義を釋きて美稱となせるなり）我れ既に天賦の美質あり紛然として內に具る。又之に加ふるに材藝を以てし、香草を結んで衣佩となす。（博く衆善を採りて自ら約束するに喩ふ）己の自ら脩むるに汲汲として、常に及ばざるが如きは、歲月人を待たず、事成らずして老い去らんことを恐るればなり。故に山間の木蘭、沙洲の宿莽を採り、以て益〻我が身を脩む。天時過ぎ易く春去り秋來り、次を以て相代る。かくて我が君老衰して其盛時に仕ふる能はざるを恐る。君宜しく壯盛の時に及び、佞人を遠ざけ讒に惑ふことを改むべし。若し此態度を改め賢士を用ひば、我れ當に君を導いて先王の道に進ましめん。

昔(二〇)三后の純粹なる、固に(二一)衆芳の在る所なり。(二二)申椒と菌桂とを雜ふ。豈維夫の(二三)蕙茝を紉ぶのみならんや。彼の堯舜の(二四)耿介なる、既に道に遵ひて路を得たり。何ぞ桀紂の(二五)昌披なる、夫れ唯(二六)捷徑以て窘歩せり。惟れ(二七)黨人の偸樂する、路幽昧にして以て險隘なり。豈余が身の殃を憚らんや、(二八)皇輿の敗績せんことを恐る。忽として奔走して以て先後し、(二九)前王の踵武に及ばんとす。(三〇)荃余が中情を察せず。反つて讒を信じて齊く怒る。余固に(三一)謇謇の患たるを知れども、忍んで舍む能はざるなり。(三二)九天を指して以て正すことをなすも、夫れ唯(三三)靈脩の故なり。初め既に余と(三四)成言し、後に(三五)悔遯して佗あり。余既に離別を難らざるも、靈脩の數ゞ化するを傷む。余既に(三六)蘭を九畹に滋ゑ、又蕙を百畝に樹う。(三七)畱荑と揭車とを畦にし、(三八)杜衡と芳芷とを雜ふ。冀くは枝葉の(三九)峻茂せんこ

【二〇】三后。三王なり、禹湯文王をいふ。

【二一】衆芳。羣賢に喩ふ。

【二二】申椒、菌桂。並に香木の名。賢者に喩ふ。

【二三】蕙茝。共に香草の名。賢者に喩ふ。

【二四】耿介。光大なり。

【二五】昌披。衣を被りて帶せざる貌、放縱にして檢束なき也。

【二六】捷徑。邪道なり。窘歩は窮歩なり。

【二七】黨人。讒人の黨。偸樂は苟且偸安なり。

【二八】皇輿。皇は君、輿は君の乘る所、國に喩ふ。

【二九】前王。先王なり。踵武は遺迹。

【三〇】荃。香草なり。君に喩ふ。

【三一】謇謇。忠言の貌。

【三二】九天。天なり。神明なり。

【三三】靈脩。君をいふ。

【三四】成言。要約を結ぶこと。

【三五】悔遯。悔い遁ろること。佗は他志なり。

【三六】蘭、蕙。香草なり、忠信に喩ふ。十二畝を畹といふ。

【三七】畱荑、揭車。皆香草なり忠信に喩ふ。

【三八】杜衡、芳芷。皆香草なり忠信に喩ふ。

【三九】峻茂。長茂なり。

とを、願はくは時を竢ちて吾將に刈らんとす。(四〇)萎絕すと雖も其れ亦何ぞ傷まん、衆芳の蕪穢せんことを哀しむ。衆皆競ひ進んで以て(四一)貪婪なり、憑つれども求索に厭かず。羌内己を恕して以て人を量り、各〻心を興して嫉妬す。忽として(四二)馳騖して以て追逐するも、余が心の急にする所にあらず。老(四三)冉冉として其れ將に至らんとす、恐くは(四四)脩名の立たざらんことを。

【大意】禹湯文三王の純德ありしは、羣賢を登庸せしを以てなり。豈ただ一二の賢臣を用ひし故のみならんや。堯舜の光德ありしは、よく正道に遵ひしを以てなり。彼の桀紂の如きは放縱にして檢束なかりしを以て、邪路に迷ひて困窮せり。今や讒人黨を成し苟も身の逸樂を圖り、行ふ所暗昧險狹なり。我れ殃の身に及ぶを畏れずして諫諍するは、唯國家の傾頽せんことを恐るればなり。故に常に奔走先後して君を輔佐し、先王の遺迹を繼がしめんとするも、君我が衷情を察知せず。却つて讒を信じて我を斥く。我れ直言の禍を招くを知れり。然も默視するに忍びず。是れ偏に君を愛し國を思へばなり。豈他意あらんや。今天日に誓つて之を斷言す。君初め余を信任し後讒を信じて志を改む。然も余は疏斥せられしを怨みず、ただ君が志屢〻變じて常操なきを傷むのみ。因つて益〻忠信を勉め時を以て進用せられんことを願へり。然も

(四〇)萎絕。萎み落つること。
(四一)貪婪。貪慾なり。
(四二)馳騖。奔走なり。追逐は求索すること。
(四三)冉冉。漸漸なり。
(四四)脩名。脩潔の名聲。

未だ進用を經ずして廢棄せられしを悲む。今の衆臣は財利を貪りて飽くことを知らず、私心を以て他人を忖度し、心を同うせざる者あれば之を嫉妬す。財利を求むるは余が急務にあらず。空しく老衰して美名を得ざるは、余の最も恐るる所なり。

朝には木蘭の墜露を飲み、夕には秋菊の(四五)落英を餐ふ。苟も余が情其れ(四六)信姱にして練要ならば、長く(四七)顑頷するも亦何ぞ傷まん。木根を擥りて以て茝を結び、(四八)薜茘の落蘂を貫き、菌桂を矯げて以て蕙を紉び、(四九)胡繩の纚纚たるを索にす。謇吾れ夫の(五〇)前脩に法るは、時俗の服する所にあらず。今の人に周はずと雖も、願くは(五一)彭咸の遺則に依らん。長太息して以て涕を掩ひ、人生の艱多きを哀む。余好く脩姱し以て(五二)鞿羈すと雖も、謇朝に誶めて夕に替てらる。既に余を替つるに(五三)蕙纕を以てし、又之に申ぬるに(五四)攬茝を以てす。亦余が心の善する所、九死すと雖も其れ猶ほ未だ悔いず。怨むらくは靈脩の(五五)浩蕩として、終に夫の(五六)人心を察せざらんことを。(五七)衆女余の蛾眉を嫉み、(五八)謠諑して余以て善淫すと

【四五】落英。落花なり。
【四六】信姱。信實美好なり。練要は精練要約なり。
【四七】顑頷。飢うること。
【四八】薜茘。香草なり。落蘂は落ちし蘂。
【四九】胡繩。香草なり。纚纚は索の長き貌。
【五〇】前脩。前代脩德の人。
【五一】彭咸。殷の賢大夫なり。
【五二】鞿羈。自ら拘束して放縱ならざるなり。
【五三】蕙纕。香草の佩、忠信に喩ふ。
【五四】攬茝。香草を取ること。益忠信を勵むに喩ふ。
【五五】浩蕩。思慮なき貌。
【五六】人心。人民の疾苦。
【五七】衆女。讒臣に喩ふ。蛾眉は美貌なり、忠直に喩ふ。

謂ふ。固に時俗の工巧なる、(五九)規矩に偭いて改め錯き、(六〇)繩墨に背いて以て曲れるに追ひ、(六一)周容を競ひて以て度となす。(六二)忳として鬱悒して余(六三)侘傺し、吾獨り此時に窮困す。寧ろ溘に死して以て流亡すとも、余は(六四)此態を爲すに忍びず。(六五)鷙鳥の羣せざるは、前代よりして固に然り。何ぞ(六六)方圓の能く周はん。夫れ孰か道を異にして相安んぜん。心を屈して志を抑へ、尤を忍んで詬を攘はん。淸白に伏して以て直に死するは、固に前聖の厚うする所なり。

【大意】木蘭の露を飲み秋菊の華を食ひ、香潔を以て自ら潤澤す。苟も我が脩むる所信實美好にして精練要約ならば、長飢すと雖も悔いず。余の香潔を以て自ら脩むるは、古人に倣はんと欲するのみ。然も是れ今の俗人の好まざる所なり。因つて涙を拭ひて人生の多艱なるを悲む。既に脩潔美好にして自ら檢束して放縱ならざるも、一たび君を諫めて忽ち疏斥せらる。脩潔忠信は余の善しとする所なれば、之が爲に誅殺せらるるも悔ゆる所にあらず。ただ君の民の疾苦を思はず、讒人余の忠正を嫉み、余を毀るに淫行あるを以てするを怨む。今の俗人は先王の法度に遵はず、道を曲げて

【五八】謠諑。譖ること。
【五九】規矩。法則なり。
【六〇】繩墨。規矩に同じ。
【六一】周容。迎合なり。
【六二】忳。憂ふる貌。鬱悒は心結ぼれて舒びさる貌。
【六三】侘傺。志を失ふ貌。
【六四】此態。邪佞の態度。
【六五】鷙鳥。鷹の類の猛鳥、忠正の士に喩ふ。
【六六】方圓。方木圓穴なり。

苟も容れられんことを求む。我れ如何に窮困すとも、此の陋態を爲すに忍びず。忠正の士の俗人と合はざるは、敢て今日に始まるにあらず。方木と圓穴との相合はず、忠邪道を異にする者の共に安んずる能はざるは、古より然り。余ただ心を屈し志を抑へて隱忍し、正道を守りて死に就かん。是れ古聖人の重んずる所なり。

道を相るの察ならざるを悔い、(六七)延佇して吾將に反らんとす。朕が車を廻らして以て路に復り、(六八)行迷の未だ遠からざるに及ばん。余が馬を(六九)蘭皐に步ませ、(七〇)椒丘に馳せて且焉に止息す。進んで入らず以て尤に離はば、退いて將に復た吾が(七一)初服を脩めんとす。(七二)芰荷を制ちて以て衣となし、(七三)芙蓉を集めて以て裳となす。吾を知らずんば其れ亦已まん。苟も余が情其れ信に芳し。余が冠の(七四)岌岌たるを高くし、余が佩の(七五)陸離たるを長くし、芳と澤と其れ(七六)雜糅し、唯(七七)昭質其れ猶ほ未だ虧けず。忽ち反顧して以て目を游ばしめ、將に往いて(七八)四荒を觀んとす。佩(七九)繽紛として其れ繁飾し、芳(八〇)菲菲として其れ彌ゝ章なり。(八一)人生各ゝ樂ふ所あり、余獨り好脩して以て常となす。(八二)體解すと雖も吾猶ほ未だ變へ

【六七】延佇。長立なり。
【六八】行迷。道に迷ふこと。
【六九】蘭皐。香蘭の生ずる澤。
【七〇】椒丘。丘上に椒あるなり 椒は香木。
【七一】初服。初めの行。
【七二】芰荷。芰は菱、荷は蓮葉なり。
【七三】芙蓉。蓮花なり。
【七四】岌岌。高き貌。
【七五】陸離。長き貌。
【七六】雜糅。相交ること。
【七七】昭質。昭明の美質。
【七八】四荒。四方絕遠の地。

せず。豈余が心の懲るべけんや。

【大意】忽ち自ら疑ふ、前日君に事ふるの道を視ること未だ明ならざるなきや否やと。遂に車を廻らして舊路に歸り、迷の未だ遠からざるに及ばんとす。乃ち馬を芳澤の中に歩ませ、椒丘に登りて休息し、進んで諫め、聽かれずして禍に遇はば、復た退いて初めの善行に服せんとす、益〻我身を脩潔し服飾を整へ威儀を盛にし、昭明の美質を損せざらんことを期す。然も君の顧る所とならず。故に忽ち反顧して去り、四方絶遠の地に遊ばんとし、因つて益〻服佩を盛にし志意を脩潔す。人の好む所各自同じからず、或は財利を好み或は邪佞を愛す。我れ獨り脩潔を好み、之を以て常行となす。たとひ此が爲に殺戮せらるるも、其の操守を變ずることなきなり。

(八二)女嬃の嬋媛たる、(八三)申申として其れ予を詈る。曰く(八四)鮌婞直にして以て身を亡し、(八五)終然として羽の野に夭せり。汝何ぞ(八六)博謇にして好脩し、(八七)紛として獨り此の姱節ある。(八八)薋菉葹以て室に盈てるに、(八九)判として獨り離れて服せざると。衆には(九〇)戸說

【七九】繽紛。盛なる貌。
【八〇】菲菲。芳香の貌。
【八一】體解。殺戮せらるること。

【八二】女嬃。屈原の姉なり。嬋媛は牽戀の貌。
【八三】申申。丁寧反復なり。
【八四】鮌。鯀なり、禹の父、堯の臣なり。堯鯀をして水を治めしむ、鯀狷介剛直にして堯の命を用ひず、終に羽山に殛せらる。
【八五】終然。つひに。夭は死なり。
【八六】博謇。廣博忠直なること。
【八七】紛。盛なる貌。姱節は美

すべからず。孰か云に余の中情を察せん。世並び擧りて朋を好めり。夫れ何ぞ(九一)煢獨にして予に聽かざる。

節。

【八八】薋菉葹。皆惡草なり、讒佞に喩ふ。

【八九】判。別るる貌。

【九〇】戸說。戸ごとに說き人ごとに告ぐること。

【九一】煢獨。孤獨なり。

【大意】吾が姊女嬃吾が行衆と合はずして放流せられしを見、反復我を罵りて曰く、昔鯀の水を治むるや、剛直狷介にして堯の命を用ひざりしを以て、終に羽山に殛せられて死せり。汝何ぞ博廣忠直にして自ら脩潔し、獨り美節をなす。今や讒佞の人朝廷に滿てるに、汝獨り蘭蕙を服し忠直を守り、判然として衆と離れて棄斥せらるるは何ぞやと。ああ外には羣佞に困められ、内には姊の詈に遇ふ。余の心は戸毎に說き人毎に告ぐべからざれば、誰か我が中情を察知する者あらん。況んや世人並に朋黨をなせるに、我れ孤獨にして忠直を守るをや。誰か我が言を聽いて之を用ふる者あらん。

前聖に依りて(九二)節中せんとし、(九三)喟として心に憑りて茲を歷、(九四)沅湘を濟りて以て南に征き、(九五)重華に就いて詞を陳ぶ。(九六)啓九辯と九歌とあるも、(九七)夏康娛んで以て自ら縱にし、難を顧みて以

【九二】節中。折衷なり。

【九三】喟。歎く貌。

【九四】沅湘。二川の名。

【九五】重華。舜なり。九疑山に葬る、沅湘の南に在り。

【九六】啓。禹の子なり、九辯九歌は禹の樂章なり。

【九七】夏康。啓の子太康なり。

て後を圖らざりしかば、（九八）五子用て家巷に失へり。（九九）羿淫遊して以て（一〇〇）佚田し、又好んで夫の（一〇一）封狐を射る。固に（一〇二）亂流して其れ終ること鮮し。（一〇三）浞又夫の厥の家を貪れり。（一〇四）澆が身彊圉に被服し、欲を縱にして忍びず。日に（一〇五）康娛して自ら忘れしかば、厥首用て夫れ顚隕せり。夏桀の（一〇六）常に違へる、乃ち遂に焉に殃に逢へり。（一〇七）后辛の葅醢にする、（一〇八）殷宗用て長からず。湯禹嚴にして祗敬し、周は道を論じて差ふなし。賢を擧げて能に授け、繩墨を脩めて頗かず。（一〇九）皇天は私阿なし。人德を覽て焉に輔を錯く。夫れ維れ聖哲にして以て茂行あれば、苟に此の（一一〇）下土を用ふるを得。前を瞻て後を顧み、人の計を相觀して極む。夫れ孰か義にあらずして用ふべけん、孰か善にあらずして服すべけん。余が身を阽くして死に危づくも、余が初を覽て其れ猶は未だ悔いず。（一一一）鑿を量らずして枘を正せば、固に前脩も以て葅醢にせられぬ。曾て（一一二）歔欷して余が鬱悒し、朕が時の當らざるを哀み、（一一三）茹蕙を攬りて以て涕を

【九八】五子。太康の兄弟五人なり。
【九九】羿。夏の諸侯なり。
【一〇〇】佚田。遊獵に耽ること。
【一〇一】封狐。大狐なり。
【一〇二】亂流。亂行なり、水に喩へて言ふ。
【一〇三】浞。羿の相寒浞。家は妻なり。
【一〇四】澆。寒浞の子なり。彊圉は多力なり。
【一〇五】康娛。安樂なり。
【一〇六】常。道なり。
【一〇七】后辛。殷の紂王なり。葅醢は鹽漬にすること。
【一〇八】殷宗。殷の家系。
【一〇九】皇天。天帝なり。私阿は私親阿附なり。
【一一〇】下土。天下なり。
【一一一】鑿。孔を穿つ具、ノミ。枘はホゾ、木端を刻みて孔に入るるなり。
【一一二】歔欷。哀泣の聲。
【一一三】茹蕙。軟かなる香草。

掩へば、余が襟を霑して（二四）浪浪たり。

【大意】乃ち前聖に依りて折衷せんとし、嘆息憤懣して沅湘を濟り、舜に就きて陳述して曰く、啓よく禹の業を繼ぎ九州の物皆辯數すべく、九功の德皆歌ふべし。乃ち九辯九歌の歌章あり。其子太康欲を縱にして安逸に耽り、患難を思ひて後圖をなさざりしかば、終に以て國を失ひ、兄弟五人亦閭巷に居りて尊位を失へり。羿乃ち夏の衰亂に乘じ、之に代りて政をなししも、狩獵を樂みて民事を恤へず、寒浞を信任して相となすや、浞射て羿を殺し、又其妻を奪ふ。羿既に亂を以て政を得。其の終を克くせざるは固より宜なり。寒浞羿の妻を取りて澆を生む。多力を恃み情欲を肆にして自ら忍びず。終に少康の爲に誅せらる。夏桀は無道を以て湯王の誅する所となり、殷紂は忠臣を葅醢にせるを以て國を亡せり。獨り湯禹周文は天を畏れ賢を敬ひ、道義に遵ひて違ふことなし。夫れ天帝は聖明にして偏頗なし。萬民の中、德ある者を觀れば輔けて之を天子となす。是を以て明知德行あれば、終に天子となりて天下を有つなり。余既に古人の迹を觀て、將來の事を察するに、不義の用ふべからず、不善の行ふべからざるを明にせり。我れ既に危地に陷れるも、猶ほ初志を執りて悔ゆるなし。孔を量らずして枘を正うせば（君の賢愚を量らずして忠信を竭すに喩ふ）古賢哲と雖も罪過を蒙れり。詞を述べて終

【二四】浪浪。涙の流るる貌。

り、自ら明時に逢はざるを悲み、香草を取りて涙を拭へば、涙流れて襟を霑す。跪きて(二二五)袵を敷き以て辭を陳べ、耿に吾既に此の中正を得たり。(二二六)玉虬を駟にして以て(二二七)鷖に乘り、(二二八)埃風に溘して余上り征く。朝に(二二九)軔を蒼梧に發し、夕に余(二三〇)縣圃に至り、少く此の(二三一)靈瑣に留らんと欲すれば、日忽忽として其れ將に暮れんとす。吾(二三二)羲和をして節を弭め、(二三三)崦嵫を望んで迫づくなからしむ。路(二三四)漫漫として其れ脩遠なり、吾將に上下して求索せんとす。余が馬に(二三五)咸池に飲ひ、余が轡を(二三六)扶桑に揔び、(二三七)若木を折りて以て日を拂ち、聊か(二三八)須臾して以て相羊す。(二三九)望舒を前にして先驅せしめ、(二四〇)飛廉を後にして奔屬せしむれば、(二四一)鸞皇余が爲に先づ戒め、(二四二)雷師余に告ぐるに未だ具はらざるを以てす。吾れ鳳凰をして飛騰せしめ、又之に繼ぐに日夜を以てす。飄風屯りて其れ相離れ、雲霓を帥て來り御ふ。(二四三)紛總總として其れ離合し、(二四四)班陸離として其れ上下す。吾れ(二四五)帝閽をし

【二二五】袵。裳際なり。
【二二六】玉虬。玉龍なり。
【二二七】鷖。鳳凰の類。
【二二八】埃風。塵風なり。溘は掩はること。
【二二九】軔。輪を支ふる木。蒼梧は舜を葬りし處。
【二三〇】縣圃。崑崙山上にある仙山なり。
【二三一】靈瑣。神靈の居る所の門。
【二三二】羲和。日輪の御者。
【二三三】崦嵫。日の入る處の山。
【二三四】漫漫。遠き貌。脩遠は長遠。
【二三五】咸池。日の浴する處。
【二三六】扶桑。木の名、日其下より出づ。
【二三七】若木。木の名、崑崙の西極にあり。
【二三八】須臾、相羊。皆遊ぶこと。
【二三九】望舒。月の御者。
【二四〇】飛廉。風の神。奔屬は走り從ふこと。
【二四一】鸞皇。靈鳥なり。
【二四二】雷師。雷神なり。
【二四三】紛總總。盛に聚る貌。
【二四四】班陸離。亂れて分散する

て關を開かしむ、(一三六)閶闔に倚りて予を望めり。時(一三七)曖曖として其れ將に罷らんとす。幽蘭を結んで延佇す。世溷濁にして分れず、好んで美を蔽ひて嫉妬す。

貌。【一三五】帝閽。天門の番人。閽は門なり。【一三六】閶闔。天門なり。【一三七】曖曖。暗き貌。

【大意】跪きて如上の詞を舜の前に述べ、耿然として自ら覺るらく、吾が心已に此の中正の道を得、上天と通じ間隔する所なしと。乃ち玉龍を以て鳳車に駕し、塵風に掩はれて天に上る。朝に蒼梧の野を發し、夕に縣圃に至り、暫く門外に留らんとすれば日忽ち暮れなんとす。乃ち日御に命じて徐行せしめ崦嵫を望んで之に近づくなからむ。我が前途長遠なるも、日の未だ暮れざるに及んで賢君に遇はんと欲すればなり。因つて轡を扶桑に結びて以て日行を留め、西極の若木を折り日御を撃ちて還らしめ、月御を先驅となし風神を從者となし、奮飛して天に上らんとすれば、鸞鳳先づ我が行を沮み、雷神亦騶從の未だ具らざるを告ぐ。因つて鳳凰をして飛騰して先づ往かしめ、日夜相繼ぎて姑くも停ることなからしむ。然も中途にして回風に遇ひ、忽ち離散して去り、尋で雲霓を率ゐ來りて我を迎ふ。その盛衆なること總總として陸離たり。吾れ既に雲霓の輔を得たり。乃ち入りて天帝に謁せんとし、復た天門に倚り躊躇して敢て進まず。時に日將に暮れんとす。乃ち幽蘭を

結んで天帝に進めんとして又久立す。顧ふに世亂れて善否を分たず、好んで人の美を蔽ひて嫉妬す。天帝の左右亦此輩なきを保し難し。是れ余の遽に進見せざる所以なり。

朝に吾將に（二三八）白水を濟り、（二三九）閬風に登りて馬を緤がんとす。忽ち反顧して以て涕を流し、（二四〇）高丘の女なきを哀む。溘に吾れ此の（二四一）春宮に遊び、（二四二）瓊枝を折りて以て佩に繼ぎ、（二四三）榮華の未だ落ちざるに及び、（二四四）下女の貽るべきを相る。吾れ（二四五）豐隆をして雲に乘り、（二四六）虙妃の在る所を求めしむ。（二四七）佩纕を解いて以て言を結び、吾れ（二四八）蹇脩をして以て理を爲さしむ。紛總總として其れ離合し、忽ち（二四九）緯繣して其れ遷し難し。夕に歸りて（二五〇）窮石に次り、朝に髮を（二五一）洧槃に濯ふ。厥美を保ちて以て驕傲し、日に康娛して以て淫遊す。信に美なりと雖も禮なし。來りて違棄して改め求む。（二五二）四極を覽相觀し、天に周流して余乃ち下る。（二五三）瑤臺の偃蹇たるを望み、（二五四）有娀の佚女を見る。吾れ（二五五）鴆をして媒をなさしむ。鴆余に告ぐるに好からざるを以てす。雄鳩の鳴きつつ逝く、余猶

【二三八】白水。淮南子に「白水は崑崙の源より出づ、之を飲めば死せず」とあり。

【二三九】閬風。山の名、崑崙山上にあり。

【二四〇】高丘。閬風を指す。女は賢君に喩ふ。

【二四一】春宮。東方青帝の舍。

【二四二】瓊枝。玉樹の枝。

【二四三】榮華。顏色に喩ふ。

【二四四】下女。神女の侍女。神女は賢君に喩ふ。

【二四五】豐隆。雷神なり。

【二四六】虙妃。伏犧氏の女、溺れて洛水の女神となる。賢君に喩ふ。

【二四七】佩纕。佩帶なり。

【二四八】蹇脩。伏犧氏の臣の名。理とは媒して言を通ずること。

【二四九】緯繣。乖戾なり。

【二五〇】窮石。山の名、弱水の出づる所。

【二五一】洧槃。川の名、崦嵫山よ

ほ其(一五六)佻巧を惡む。心猶豫して孤疑す。自ら適かんと欲すれども不可なり。鳳凰既に詒を受く。(一五七)高辛の我に先だたんことを恐る。遠く集らんと欲すれども止る所なし。聊か浮遊して以て逍遙す。(一五八)少康の未だ家せざるに及び、(一五九)有虞の二姚を留めん。理弱りて媒拙く、導言の固からざるを恐る。時溷濁して賢を嫉み、好んで美を蔽ひて惡を稱ぐ。閨中既に以て邃遠なり、(一六〇)哲王又寤らず。朕が情を懷いて發せず、余焉んぞ能く忍んで此と(一六一)終古せん。

【大意】吾既に天門に進んで天帝に謁するを得ず。更に路を轉じて西のかた閬風山に遊ばんとし、半途にして顧望流涕して以爲らく、恐らくは閬風にも亦美女(賢君に喩ふ)なからんと。乃ち亦棄て去り更に東のかた青帝の宮に遊ばんとし、瓊枝を折りて佩に繼ぎ益〻長美ならしめ、年德猶ほ盛なるに及び、慇懃を青帝の女(賢君に喩ふ)に通ぜんことを冀ひ、因つて侍女の吾が媒をなすべき者を求む。然れども青帝の女果して我と歡をなすべきや否やを知らず。故に又雷神をして別

り出づ。

【一五二】四極。四方極遠の地。覽相觀は見ること。

【一五三】瑤臺。玉臺なり。偃蹇は高き貌。

【一五四】有娀。國の名。佚は美なり、佚女とは帝嚳の妃、契の母たる簡狄なり。

【一五五】鴆。惡鳥なり、羽に毒あり人を殺す、以て讒賊に喩ふ。

【一五六】佻巧。輕佻巧利なり。

【一五七】高辛。帝嚳なり。

【一五八】少康。夏后相の子なり。

【一五九】有虞。國の名、舜の後なり。姚は姓なり。昔寒浞、澆をして夏后相を殺さしむ、少康有虞に逃る、虞因つて妻すに二女を以てせり、事左傳に詳なり。

【一六〇】哲王。賢知の主。

【一六一】終古。永遠なり。

に虙妃（賢君に喩ふ）の居る所を求めしめ、蹇脩をして媒をなさしむ。然も讒人復た相聚りて毀敗し、吾が意離合乖戾して通ぜず。吾が意亦移し難し。故に歸りて窮石山に宿り髮を洧槃に濯ひて以て自ら潔うす。かの虙妃己の美を恃みて驕傲なり。日に淫遊を事として禮法に循はず。故に棄て去りて別に美女を求めんとす。既に徧く天上界を周流し、青帝の女と虙妃とを見たるも、吾が意に適する者なし。故に下りて地上に求めんとし、忽ち瑤臺の佚女を認めぬ。因つて鴆鳥をして媒せしめしも、鴆鳥詐り告ぐるに好からざるを以てせり。更に雄鳩をして命を銜んで往かしめんと欲せしも、その輕佻巧利にして信任すべからざるを惡みて遣らず。因つて自ら往かんと欲すれども、禮に於て不可なるを如何せん。聞く彼の鳳凰既に高辛の幣物を受け、往きて佚女を求めんとすと。我に先だちて佚女を娶り去らんことを恐る。既に佚女を失ひ又他方に求めんとするも、向ふ所を知らず。暫く逍遙して悶を慰し、少康の未だ娶らざるに及び、己先づ二姚を娶らんとす。然も辭理少康に劣り、媒亦拙なるを以て、言を通ずるの堅固ならざるを恐る。ああ世亂れて賢を嫉み、美を掩ひて惡を擧ぐ。天上天下皆一なり。閨中深遠にして虙妃の輩求むべからず、賢主亦悟らず。我れ忠信の情を抱くも發用する能はず。焉んぞ能く久しく濁世に居るに忍びんや。

（一六二）瓊茅と筳篿とを索り、（一六三）靈氛に命じて余が

【一六二】瓊茅。靈草なり。筳は小竹なり、楚人結草折竹を以

爲に之を占はしむ。曰く兩ながら美ならば其れ必ず合はん。孰か脩まれるを信じて之を慕はん。(一六四)九州の博大なるを思ふに、豈唯是にのみ其れ女あらんや。曰く勉めて遠く逝きて狐疑するなかれ、孰か美を求めて女を釋てん。何れの所か獨り芳草なからん、爾何ぞ故宇を懷へると。時幽昧にして以て(一六五)眩曜せり、孰か云に余の美惡を察せん。人の好惡其れ同じからず、惟此の黨人其れ獨り異り、戸ごとに艾を服して以て要に盈て、幽蘭は其れ佩ぶべからずと謂ふ。草木を覽察するも其れ猶ほ未だ得ず、豈(一六六)珵美の能く當らんや。糞壤を蘇りて以て(一六七)幃に充て、申椒は其れ芳しからずと謂ふ。

【大意】草竹を取り靈氛に命じて占はしむるに、曰く男女共に美ならば(君臣ともに賢なるに喩ふ)相合はざるなし。然れども楚國今溷亂の中に在るを以て、誰か汝の脩潔を慕ふ者あらんや。宜しく時を以て去るべきなり。天下の廣大なる、獨り楚にのみ美女あるにあらず。當に遠く往きて求むべし。今や美女賢夫を求めつつあり。豈汝を棄つることあらんや。何れの處か芳草(賢君に喩ふ)なからん。汝何ぞ故宇(故居なり)を思ひて去らざるやと。因つて自ら思ふに、世溷濁して余の善を知る者なし。他に往くと雖も合ふ所なかるべし。人の好惡は固より同じからざれども、楚國の黨人

てトふを篿といふ。

【一六三】靈氛。古の占を善くせし者の名。

【一六四】九州。支那全土の稱。

【一六五】眩曜。惑亂の貌。

【一六六】珵美。珵は美玉なり。

【一六七】幃。香嚢なり。

に於て其最も甚しきを見る。艾は香草にあらず、然も皆之を服して腰に滿て、幽蘭を以て臭惡となす。（讒人を親みて忠直の士を遠くるに喩ふ）草木の香臭すら辨ずる能はず。豈よく美玉の良否を辨ぜんや。糞土を取りて香嚢に充て申椒を以て芳しからずとなす。（小人を近づけ君子を遠くるに喩ふ）是非顚倒せること此の如し。余豈よく之と合はんや。

靈氛の吉占に從はんと欲すれども、心猶豫して狐疑す。（一六八）巫咸將に夕に降らんとす。（一六九）椒糈を懷いて之を要せん。百神翳ひて其れ備に降り、（一七〇）九疑繽として其れ竝び迎ふ。（一七一）皇剡剡として其れ靈を揚げ、余に告ぐるに（一七二）吉故を以てす。曰く勉めて升降して以て上下し、（一七三）矩矱の同じき所を求めよ。湯禹儼にして合はんことを求めしかば、（一七四）摯皐繇も能く調へり。苟に中情其れ好脩ならば、何ぞ必しも夫の（一七五）行媒を用ひん。（一七六）說築を傅巖に操りしも、（一七七）武丁用ひて疑はず。（一七八）呂望の刀を鼓せるも、周文に遭ひて擧げらるるを得たり。（一七九）甯戚の謳歌せるも、齊桓聞いて以て輔に該へぬ。年歲の未だ晏れざるに及べ、時亦猶ほ其れ

【一六八】巫咸。古の神巫なり。
【一六九】椒糈。椒は香物、神を降す所以なり。糈は精米、神に享する所以なり。要は迎なり。
【一七〇】九疑。舜を葬りし山。繽は盛なる貌。
【一七一】皇。百神をいふ。剡剡は光る貌。
【一七二】吉故。吉占なり。
【一七三】矩矱。法度なり。
【一七四】摯。湯の臣、伊尹なり。皐繇は禹の臣、皐陶なり。
【一七五】行媒。なかだち、左右の臣に喩ふ。
【一七六】說。傅說なり、殷の高宗の賢臣。築は土工の道具。傅巖は地名。
【一七七】武丁。殷の高宗。
【一七八】呂望。太公望呂尙なり。鼓は鳴らすこと。

未だ央きず。恐らくは（一八〇）鵜鴂の先づ鳴いて、百草をして之が爲に芳しからざらしめんことをと。

【大意】靈氛の占斷に從ひ楚を去らんと欲するも、楚は吾が宗國にして余は楚の世卿なれば、躊躇して去就を決する能はず。時しも巫咸今夕を以て天上より降ると聞く。乃ち椒糈を供へて之を迎へ、更に其の占斷を請はんとす。忽ち百神巫咸を擁して天上より降り、舜亦九疑の羣神をして來り迎へしむ。百神乃ち其光靈を揚げ、巫咸余に告ぐるに吉占を以てして曰く、勉めて天地に上下し、己と法度を同うする賢君を求むべし。昔禹湯は其身を處すること儼厲にして心常に己と合ふ者を求めしかは、伊尹、臯陶の如き賢臣を得、君臣よく和合せり。苟も中心善を好みて自ら脩潔せば、明君自ら擧用すべし。何ぞ左右の薦達を須ひんや。傅說は罪人となり版築を執りて傅巖に築きしも、高宗疑はずして之を擧用し、太公望呂尚は貧困にして自ら刀を振ひて屠者となりしも、文王に遭ひて擧用せられ、甯戚は牛角を叩きて不遇を嘆ぜしも、桓公之を擧げて輔相となせり。身未だ老いざるに及び、宜しく去りて賢君を求むべし。空しく時を失ふべからずと。

何ぞ（一八一）瓊佩の偃蹇たる、衆（一八二）薆然として之を

【一七九】甯戚。衞の人なり、德を脩めて用ひられず、退いて商賈し、齊の東門外に宿す、桓公夜出づ、甯戚まさに牛に飯す、角を叩いて歌ふ、桓公之を聞き其賢なるを知り擧げ用ひて卿となす。

【一八〇】鵜鴂。鳥の名、秋分の前鳴く、此鳥鳴けば草木凋落す。

【一八一】瓊佩。玉のおびもの。偃蹇は衆盛の貌。

蔽ふ。惟此の黨人の亮あらざる、恐らくは嫉妬して之を折かんことを。時（一八三）繽紛として其れ變易す。又何ぞ以て（一八四）淹留すべけん。（一八五）蘭芷も變じて芳しからず、（一八六）荃蕙も化して茅となりぬ。何ぞ昔日の芳草、今直に此の（一八七）蕭艾となれる。豈其れ他故あらんや、好脩の害なるなからんや。余蘭を以て恃むべしとなす、羌實なくして容長し。厥美を委てて以て俗に從ひ、苟に衆芳を（一八八）引くを得たり。椒は專ら佞して以て慢諂し、（一八九）椴は又其の（一九〇）佩幃に充たんと欲す。既に進まんとを干めて入らんとを務む。又何の芳か之れ能く祗まん。固に時俗の從流する、又孰か能く變化することなからん。椒蘭を覽るに其れ茲の若し。又況んや（一九一）揭車と江離とをや。

【大意】我れ瓊玉の美を佩ぶるも（德の美なるに喩ふ）衆之を蔽ひて顯るるを得ざらしむ。彼の黨人の我を諒とせざる、遂に嫉妬して之を毀らんことを恐る。時世溷濁して善惡變易し、香草も變じて醜草となり、君子も變じて小人となりぬ。此れ他なし。好んで自ら脩潔する者は、往往にして禍に遭ふも、節を變じて俗に徇へば此患なければなり。余初め蘭を以て恃むべしとなせり。然も

【一八二】薆然。聚り蔽ふ貌。
【一八三】繽紛。亂るる貌。
【一八四】淹留。久しく留まること。
【一八五】蘭芷。香草なり。君子に喩ふ。
【一八六】荃蕙。香草なり、君子に喩ふ。茅は惡草、小人に喩ふ。
【一八七】蕭艾。賤草なり、不肖者に喩ふ。
【一八八】引。一本列に作る。
【一八九】椴。茱萸なり、椒に似て非なるもの。
【一九〇】佩幃。香囊なり。
【一九一】揭車、江離。皆香草の名。

誠實なくして唯外貌の美好なるのみ。且つ其美を棄てて流俗に化し、苟も衆芳の列に伍せんと欲す。椒も亦芳烈の物なり。而も今變じて邪佞となり、茱萸は固より臭物なり。今香囊に滿たんと欲し、ただ進んで君に容れられんことを務む。又何ぞ能く其節を敬守する者あらんや。俗人上の化に從ふこと水の流るるが如し。誰か節を變じ行を改めざらん。椒蘭すら此の如し。況んや揭車と江離とをや。

惟茲の佩の貴ぶべき、厥美を委てて茲を歷るも、芳菲菲として虧け難く、芬今に至るまで猶ほ未だ沬まず。(一九二)調度を和して以て自ら娛み、聊か浮游して(一九三)女を求め、余が飾の方に壯なるに及び、周流して上下を觀ん。靈氛既に余に告ぐるに吉占を以てす。吉日を歷んで吾れ將に行らんとす。瓊枝を折りて以て(一九四)羞となし、(一九五)瓊靡を精げて以て粻となさん。余が爲に飛龍に駕し、(一九六)瑤象を雜へて以て車となす。何ぞ(一九七)離心の同じうすべけんや、吾れ將に遠く逝きて自ら疏にせんとす。邅りて吾れ夫の崑崙に道し、路脩遠にして以て周流す。(一九八)志雲霓の晻藹たるを揚げ、(一九九)玉鸞の啾啾たるを鳴らし、朝に軔を(二〇〇)天津に發し、夕に余西極に至る。鳳皇翼んで其れ旂を承け、高く翺翔し

【一九二】調度。格調法度なり。
【一九三】女。賢君に喩ふ。
【一九四】羞。食料なり。
【一九五】瓊靡。玉屑なり。
【一九六】瑤象。玉及び象牙。
【一九七】離心。己と志を同うせざる者。
【一九八】志雲霓。一本に志字なし。雲霓は以て旗とせるなり。晻藹は日を蔽ふ貌。

て(二〇一)翼翼たり。忽ち吾れ此の(二〇二)流沙に行き、(二〇三)赤水に遵ひて容與し、蛟龍を麾いて津に梁せしめ、(二〇四)西皇に詔げて予を渉さしむ。路脩遠にして以て艱多し。衆車を騰げて徑に待たしめ、(二〇五)不周に路して以て左轉し、西海を指して以て(二〇六)期となす。余が車を屯むること其れ千乘なり、(二〇七)玉軑を齊へて竝び馳せ、八龍の(二〇八)婉婉たるに駕し、雲旗の(二〇九)委移たるを載つ。志を抑へて節を弭むるも、神高く馳せて(二一〇)邈邈たり。(二一一)九歌を奏して韶を舞ひ、聊か日を假りて以て媮樂す。(二一二)升皇の赫戲たるに陟り、忽ち夫の(二一三)舊鄕を臨睨すれば、(二一四)僕夫は悲み余が馬は懷ひ、(二一五)蜷局して顧みて行かず。

【大意】我に瓊玉の美質あり、我れ自ら之を恃みて敢て苟も容れられんことを求めず。終に此の苦境に逢ひしも、今尚ほ其芳芬を毀損せず。法度を守りて自ら樂み年德の未だ衰へざるに及び、四方に遊びて賢君を求め、靈氛の吉占に從ひ、吉日を擇んで遠行せんとす。因つて香潔の物を取りて

【一九九】玉鸞。車の鈴。啾啾は鈴の聲。
【二〇〇】天津。東極なり。
【二〇一】翼翼。高く翼を張る貌。
【二〇二】流沙。地名なり。
【二〇三】赤水。地名なり。容與は游戲する貌。
【二〇四】西皇。帝少皞なり。
【二〇五】不周。山の名。崑崙山の西北にあり。
【二〇六】期。會合すること。
【二〇七】玉軑。車のクサビ。
【二〇八】婉婉。龍の卷曲する貌。
【二〇九】委移。垂れて動く貌。
【二一〇】邈邈。遠き貌。
【二一一】九歌。九德の歌、禹の樂なり。韶は九韶、舜の樂なり。
【二一二】升皇。天の堂なり。赫戲は光明の貌。
【二一三】舊鄕。楚國なり。
【二一四】僕夫。御者なり。
【二一五】蜷局。詰屈して行かざる貌。

糧食となし、明智の獸に駕し象玉の車に乘り、異心の者を棄てて自ら遠ざかり、雲旗を飜し玉鸞を鳴らして崑崙の長途を經、朝に東極を發して夕に西極に至り、忽ち流沙を渡りて赤水に遊ぶ。其道長遠にして艱難なるを以て、衆車をして我に從はずして捷徑に由らしめ、我は不周山より左に轉じ西海の上に相會せんとす。我乃ち從車千乘を伴ひて馳すれば、志を抑へて徐行せんとするも、我が精神得て制すべからず。乃ち九歌を奏し韶を舞ひ、暫く時を借りて娛樂し、天堂に上りて楚國を顧望すれば、僕馬悲傷して歸らんことを思ふ。

(二六)亂に曰く、已ぬるかな、國に人なく我を知るなし。又何ぞ(二七)故都を懷はん。既に與に美政をなすに足るなし。吾將に彭咸の居る所に從はんとす。

【大意】ああ楚に賢人なく我を知る者なし。我亦何ぞ之を念はんや。既に與に美政をなすに足る者なし。願くは彭咸の爲す所に倣はんことを。

【二六】亂。結末に於て一篇の大旨を總括する詞。

【二七】故都。楚國なり。

九歌四首　屈平

(一)東皇太一

【一】東皇太一。天神の最も貴き者。

吉日(二)辰良、穆んで將に(三)上皇を愉ましめんとし、長劍の(四)玉珥を撫し、(五)璆として鏘鳴する琳琅あり。(六)瑤席玉瑱、盍に將た瓊芳を把る。蕙の(七)肴蒸蘭の藉あり。(八)桂酒と椒漿とを奠く。(九)枹を揚げて鼓を拊ち、節を疏緩にして安に歌ひ、(一〇)竽瑟を陳ねて浩に倡ふ。(一一)靈偃蹇として姣服し、(一二)芳菲菲として堂に滿つ。(一三)五音紛として繁く會ひ、(一四)君欣欣として樂康す。

【大意】吉日を卜して東皇の神を祀らんとし、長劍を撫し珮玉を鳴らして、事に從ひ、玉の席を敷き玉の鎭を加へ、芳香の酒肴を設け、歌舞を奏して之を迎ふれば、羣神美服を纏ひて格り芳香堂に滿ち、樂聲の高調するを聞きて、東皇の神欣然として喜ぶ。(神を以て君に喩へ、神を祭るを以て君に奉事するに喩へ、以て君臣遇合の美をいふ。)

【二】辰良。良辰に同じ、吉日なり。
【三】上皇。東皇太一なり。
【四】玉珥。玉のツバ。
【五】璆。玉の鳴る聲。鏘鳴は鳴ること。琳琅は美玉なり。以て佩となす。
【六】瑤席。玉の敷物。瑱は敷物のオモシなり。
【七】肴蒸。蒸は烝に同じ、俎に盛れる切肉。藉は肉に敷くなり。
【八】桂酒。桂を切りて酒中に置くなり。椒漿は椒を漿中に置くなり。
【九】枹。鼓を撃つバチ。
【一〇】竽瑟。共に樂器の名。
【一一】靈。多くの神、東皇に隨ひて來る者をいふ。偃蹇は舞ふ貌。姣服は美服を纏ふこと。
【一二】芳菲菲。芳香のただよふ貌。
【一三】五音。宮商角徵羽なり。紛は盛なる貌。
【一四】君。專ら東皇をいふ。
【一五】雲中君。雲神なり。

(一五)雲中君

蘭湯に浴して芳に沐し、(一六)華采の衣英の若し。(一七)靈連蜷として既に留り、(一八)爛昭昭として未だ央きず。蹇將に(一九)壽宮に憺んぜんとし、日月と光を齊うす。(二〇)龍駕して帝服し、聊か翱遊して(二一)周章す。靈(二二)皇皇として既に降り、(二三)猋として遠く雲中に擧る。(二四)冀州を覽んで餘あり、四海に横るも焉んぞ窮りあらん。(二五)夫君を思ひて太息し、勞心を極めて(二六)憺憺たり。

【大意】饗祭を脩めて以て雲神に事へんとし、芳蘭の湯に沐浴し、五彩の美服をまとひて之を迎ふ。雲神既に降りて祭場に留り、我と相得て意未だ盡きず。神乃ち憺然として安樂し久しく此に留まらんとするが如く、日月と光明を齊うし、龍車に乘り帝服をまとひ、暫く周旋優遊せり。何ぞ意はん忽然我を棄てて遠く去る。夫れ雲神は靈威赫赫たれば、冀州を望むも固より綽綽として餘裕あり、四海を横行するも復た何の窮極する所あらんや。(暗に楚王尊嚴、行くとして意の如くならざるなきに喩ふ）今我を棄てて遠く去り。我をして心を勞せしむ。(此篇雲中君を借りて、己楚王と乖離せる事を

【一六】華采。五色なり。英は瑛に同じ、玉なり。
【一七】靈。神なり、雲中君を指す。連蜷は連りて宛曲すること。
【一八】爛昭昭。光りかがやく貌。
【一九】壽宮。神を供するの處。
【二〇】龍駕。龍をして車を引かしむるなり。帝服は服飾盛美にして天帝の如きなり。
【二一】周章。周流の如きなり。
【二二】皇皇。美なる貌。
【二三】猋。忽然なり。
【二四】冀州。州の名、古の帝王多くは此州に都す。
【二五】夫君。雲中君なり。
【二六】憺憺。憂ふる貌。

述ぶ）

(二七)湘君

君行かずして(二八)夷猶し、蹇に誰をか中洲に留つ。美(二九)要眇にして脩むるに宜し。(三〇)沛として吾れ桂舟に乘る。(三一)沅湘をして波なからしめ、江水をして安流せしめよ。(三二)夫君の歸來を望む。(三三)參差を吹いて誰をか思はん。飛龍に駕して北に征く。邅りて吾れ(三四)洞庭に道し、(三五)薜荔は拍け蕙は綢ね、(三六)荃橈と蘭旌とを承り、(三七)涔陽の極浦を望めば、大江に横りて(三八)靈を揚ぐ。靈を揚ぐること未だ極らず、(三九)女嬋媛として余が爲に太息す。横流する涕(四〇)潺湲たり。君を隱み思ひて(四一)悱側す。(四二)桂櫂蘭枻、冰を斲り雪を積み、薜荔を水中に采り、(四三)芙蓉を木末に搴る。心同じからずして(四四)媒勞し、恩甚しからずして輕〻しく絶つ。石瀨(四五)淺淺たり、飛龍翩翩たり。交忠ならずして怨長く、期信ならずして余に告ぐる

【二七】湘君。堯の二女娥皇女英舜の妃たり、舜南巡して蒼梧の野に死す、二妃舜を追ひて南行し、湘水に溺死し、湘水の神となる、娥皇を湘君となし女英を湘夫人となす。
【二八】夷猶。猶豫なり。
【二九】要眇。美好の貌。
【三〇】沛。行く貌。
【三一】沅湘。二川の名。
【三二】夫君。湘君をいふ。
【三三】參差。洞簫なり、樂器の名。
【三四】洞庭、大湖の名、山海經に「洞庭の山、二女之に居る」とあり。
【三五】薜荔。香草なり。
【三六】荃橈。荃は香草、橈は船をこぐ楫。
【三七】涔陽。江碕の名。
【三八】靈。威靈なり。
【三九】女。湘君の侍女なり。嬋媛は牽戀の貌。
【四〇】潺湲。流る貌。
【四一】悱側。悱惻なり。
【四二】桂櫂、蘭枻。香木の楫。

に間あらざるを以てす。朝に(四六)江皐に騁騖し、夕に節を北渚に弭むれば、鳥屋上に次り、水堂下を周る。余が(四七)玦を江中に捐て、余が珮を(四八)澧浦に遺て、芳洲の(四九)杜若を采り、將に以て(五〇)下女に遺らんとす。時は再び得べからず、聊か逍遙して(五一)容與す。

【大意】我れ湘君を迎へんと欲するも躊躇して肯て來らず。洲中に留りて何人をか待てる。其形美好にして粧飾と能く稱へり。我れ桂舟に乘り往きて之を迎へんとす。願くは沅湘をして波なからしめ、湘君の來るを妨げざらんことを。因つて更に湘君を望めども來らず、洞簫を吹いて思を寄す。湘君中洲より飛龍に駕し將に北に去らんとす。吾亦廻轉して道を洞庭に取り、且つ屋を水中に構へ、四壁を飾るに香草を以てし、又舟枻旌旗を具へ、將に必ず之を邀へんと欲す。適〻潯陽の極浦を望めば、湘君既に北大江に横りて其威靈を揚ぐるを見る。北に去りて未だ全く江を過ぎざれども、復た肯て來りて我を見ず。故に侍女我が爲に太息し、吾亦君を慕ひて涙を流せり。況んや又氷雪の艱に遇ひ、舟急に進むべからず。遂に湘君と相遇ふを得ず。恰も薜茘（木に縁りて生ずる香草）を

【四三】芙蓉。蓮花なり。木末は梢。
【四四】媒。上文の女なり。
【四五】淺淺。流の疾き貌。
【四六】江皐。江澤なり。騁騖は走ること。

【四七】玦。玉佩なり。珮に同じ
【四八】澧浦。澧水のほとり。
【四九】杜若。香草の名。
【五〇】下女。侍女なり。
【五一】容與。遊戲なり。

水中に求め、蓮花を樹梢に採るが如し。畢竟湘君の意我と同じからず。故に侍女媒をなして徒に勞し、恩意初めより厚からず。故に輕〻しく棄て去る。俯視すれば石瀨淺淺として我が舟進み難く。仰望すれば湘君翩翩として北に去る。顧ふに我の湘君と交る、未だ忠なりとなさず。是を以て終に相見るを得ず。我の湘君と期約する、未だ信なりとなさず。故に湘君我に告ぐるに暇なきを以てし、北に去れる所以なり。然も吾れ尚ほ之を追求せんとし、朝に馬を江澤に馳せ夕に北渚に至れば、天既に暮れて鳥の屋上に棲み、水の堂下を周るを見るのみ。既に湘君と相見るを得ざれば、自ら粧飾するも益なきなり。乃ち玦珮を江中に棄つ。ただ侍女我が爲に心を勞せり。以て之に報いざるべからず。故に杜若を採りて之に贈らんとす。ああ時は再び得べからず。後會また期し難し。終に決然として歸り去る能はず。聊か逍遙して自ら慰む。(君と相得ざるの意を寓す)

【五二】湘夫人。二七を見よ。
【五三】帝子。堯の女、女英卽ち湘夫人をいふ。
【五四】眇眇。杳杳の如し、遙なる貌。
【五五】嫋嫋。秋風木を搖す貌。
【五六】白蘋。水草の名。

(五二)湘夫人

(五三)帝子北渚に降る。目(五四)眇眇として予を愁へしむ。(五五)嫋嫋たる秋風、洞庭波たちて木葉下つ。(五六)白

蘋に登りて望を騁せ、(五七)佳期を與にせんとして夕に張る。鳥蘋中に萃る。罾何爲れぞ木上にある。沅に(五八)茝あり澧に蘭あり。(五九)公子を思へども未だ敢て言はず。(六〇)慌忽として遠く望み、流水の(六一)潺湲たるを觀る。(六二)麋何爲れぞ庭中にある、(六三)蛟何爲れぞ水裔にある。朝に余が馬を江皐に馳せ、夕に(六四)西澨を濟る。(六五)佳人の予を召すを聞き、將に騰駕して偕に逝かんとす。室を水中に築き、之を葺くに(六六)荷蓋を以てす。(六七)荃壁紫壇、芳椒を播して堂を成し、桂棟(六八)蘭橑、(六九)辛夷の楣葯の房、薜荔を罔んで帷となし、蕙を擗きて(七〇)櫋既に張り、白玉を(七一)鎭となし、(七二)石蘭を疏きて以て芳となし、茝を以て(七三)荷屋を葺き、之に繚ふに(七四)杜衡を以てす。百草を合せて庭に實て、芳馨を建て門に廡す。(七五)九疑繽として竝び迎へ、(七六)靈の來ること雲の如し。余が袂を江中に捐て、余が(七七)褋を澧浦に遺て、汀洲の杜若を搴り、將に以て(七八)遠者に遺らんとす。時は驟〻得べからず、

【五七】佳期。會合すること。
【五八】茝。香草なり。
【五九】公子。湘夫人をいふ。
【六〇】慌忽。恍惚に同じ。
【六一】潺湲。水の流るゝ聲。
【六二】麋。大鹿なり。
【六三】蛟。龍なり。水裔は水涯なり。
【六四】西澨。西涯なり。
【六五】佳人。湘夫人をいふ。
【六六】荷蓋。蓮葉なり。
【六七】荃壁。荃は香草、之を以て室壁を飾るなり。紫壇は紫貝を累ねて室壇となす。
【六八】蘭橑。木蘭のタルキ。
【六九】辛夷。木の名。楣は門戶の上の梁なり。葯は香草。房は室なり。
【七〇】櫋。梠なり、のきつけ。
【七一】鎭。敷物のオモシ。
【七二】石蘭。香草なり。
【七三】荷屋。蓮葉の屋根。
【七四】杜蘅。香草なり。
【七五】九疑。山の名、舜ここに葬る。ここは九疑の山神をいふ。繽は盛なる貌。
【七六】靈。羣神なり。
【七七】褋。ひとへぎぬ。

聊か逍遙して容與す。

【大意】湘夫人方に北渚に降れり。目を擧げて之を望めば、杳然として遠きに在り。相見んと欲すれども得べからず。我をして愁思せしむ。況んや秋風起りて水波興り木葉落ち、急に舟を進めて相見るべからざるをや。因つて白蘋の葉に登りて遠く望み、將に夕を待つて供張して之を迎へんとす。然れども吾の爲す所、譬へば鳥もと木巓に集るべきに、却つて蘋中に集り、網もと水中に設くべきに、之を木巓に設くるが如し。固より湘夫人と相見るべからざるを知る。沅澧に芷蘭あり以て夫人に贈るに足る。吾れ夫人を思へども、其尊を瀆さんことを懼れて敢て言はず。恍惚として遙に望めば、唯流水の潺湲たるを觀る。之を邀へて相見んと欲するも、麋もと山林に在るべくして、却つて庭中に在り、蛟もと深淵に在るべくして、却つて水涯に在るが如く、既に其宜しきを失へるを以て、相見る能はざるを知れども、尚ほ心に已む能はず。朝に馬を江澤に馳せて、夕に西澨に至り、必ず夫人を邀へんとす。適〻夫人余を召すと聞き、奔馳して此と遊ばんとし、因つて室を水中に築き、之を葺くに蓮葉を以てし、衆芳を積聚し、修飾いよいよ盛にし以て夫人を待つの所となす。圖らざりき舜亦九疑の山神をして、繽然として雲の如くに來り、夫人を迎へしめんとは。我れ夫人の去らんとするを見、袂褋を棄て更に輕裝して之

【七八】遠者。遠く去りし湘夫人。

に從はんとし、且つ芳草を採りて之に贈らんと欲す。顧ふに吾既に夫人と遊ぶを得ず。然れども猶ほ遠く之を望見するを得たるは、亦一時の幸なり。固より屢得べきにあらず。故に夫人既に去ると雖も、此心牽戀し、遽に棄て去るに忍びざるなり。

卷の第十七

騷　下

九歌二首　屈平

(一)少司命

秋蘭(二)麋蕪、堂下に(三)羅生す。綠葉(四)素華、(五)芳菲菲として予に襲く。夫れ人自ら美子あり、(六)蓀何を以てか愁苦する。秋蘭青青として、綠葉紫莖あり。堂に滿つる(七)美人、忽ち獨り余と(八)目成す。入るにも言はず出るにも辭せず。回風に乘りて雲旗を載つ。悲は(九)生別離より悲きはなく、樂は(一〇)新相知より樂きはなし。(一一)荷衣蕙帶、儵として來り忽として逝き、夕に(一二)帝郊に宿す。(一三)君誰をか雲の際に須つ。(一四)(汝

【一】少司命。天神の名。人命を司る。
【二】麋蕪。香草の名。
【三】羅生。羅は列なり。
【四】素華。白花なり。
【五】芳菲菲。芳しき貌。
【六】蓀。香草なり、司命を謂ふ。
【七】美人。羣神をいふ。
【八】目成。相視て親好すること。
【九】生別離。司命の我を棄てて去るをいふ。
【一〇】新相知。司命さきに我と目成するをいふ。
【一一】荷衣。蓮葉の衣。
【一二】帝郊。天帝の郊。
【一三】君。司命を指す。
【一四】汝と云云。此の二句河伯篇中の語なり、刪り去るべし。

と九河に游べば、衝飈起りて水波を揚ぐ）（二五）汝と咸池に沐し、汝が髮を（二六）陽の阿に晞かさん。（二七）美人を望めども未だ來らず、風に臨んで（二八）怳として浩歌す。（二九）孔蓋翠旌、九天に登りて（三〇）彗星を撫ひ、長劍を竦てて（三一）幼艾を擁す。（三二）荃獨り民の正たるに宜し。

【大意】新に神を會するの堂を造り、芳草を堂下に雜植すれば、綠葉白花芳香を放ちて人の衣に襲く。因つて司命神に告げて曰く、天下の人各〻自ら美子孫あり、司命何爲れぞ其壽命を主りて愁苦するやと。己神に事へて之を崇敬し、莖葉紫綠芬芳益〻暢ぶ。是に於てか羣神同じく一堂に會す。司命獨り吾と相視て以て親好を成せり。（蓋し懷王嘗て屈原を羣臣中に拔き國事に任せしめしを謂ふ）然も其來るや一言を交へず、今我を棄てて去るや、復た一辭を告げず。回風に乘り雲旗を飜して遠く去りぬ。ああ悲は生別離を以て最となし、樂は新相知を以て最となす。生別離の此の如く早きを知らば、寧ろ初より相知らざるの勝れるに如かず。（懷王に斥けられし悲を謂ふ）司命荷衣をまとひ蕙帶を

【二五】汝。司命を指す。咸池は天池なり。
【二六】陽の阿。陽は日、阿は隅たり、日あたりのよき處。
【二七】美人。司命をいふ。
【二八】怳。自失の貌。浩歌は大聲を擧げて憂を紓うするなり。
【二九】孔蓋。孔雀の羽を以て車蓋となすなり。翠旌は翡翠の羽を以て旗となすなり。
【三〇】彗星。はうき星、妖星なり、邪惡に喩ふ。
【三一】幼艾。年少美好の者をいふ。
【三二】荃。香草なり、司命をいふ。正は儀正なり。

垂れ、忽然として來り又忽然として去り、夕に天帝の郊に宿し久しく留りて天際に在り。その待つ所果して何人ぞや。夫れ或は意ありて我を顧戀するか。我れ既に司命に棄てられたるも、猶ほ牽戀の情に堪へず。因つて邀へて與に天池に沐し、髮を向陽の山曲に晞かさんと欲すれども、司命肯て降り來らず。徒に風に臨んで浩嘆するのみ。司命今や天に登りて邪惡の者を掃ひ、善美の者を擁護し、心を執ること公正にして民の儀正となすに足れり。（懷王も亦此の如くならんことを希ふなり）

（二三）山鬼

山の阿に人あるが若し。（二四）薜荔を被り女蘿を帶ぶ。既に（二五）睇を含み又笑ふに宜し。（二六）子予が善く窈窕たるを慕ふ。（二七）赤豹に乘り文貍を從へ、（二八）辛夷の車桂旗を結び、（二九）石蘭を被りて杜衡を帶び、芳馨を折りて思ふ所に遺る。余（三〇）幽篁に處りて終に天を見ず、路險難にして獨り後れて來る。（三一）表として獨り山の上に立てば、雲（三二）容容として下に在り。（三三）杳杳冥冥として羌晝晦し。東風飄りて神靈雨ふらし、（三四）靈脩を留めて憺とし

【二三】山鬼。山神なり。
【二四】薜荔。香草なり。女蘿は蔓草なり。
【二五】睇。微眄の貌。
【二六】子。山鬼をいふ。窈窕は好姿なり、善行に喩ふ。
【二七】赤豹文貍。奇獸なり。
【二八】辛夷。香木なり。
【二九】石蘭杜衡。香草なり。
【三〇】幽篁。竹林なり。
【三一】表。特立して儔なき貌。
【三二】容容。飛揚する貌。
【三三】杳杳冥冥。暗き貌。
【三四】靈脩。神靈にして能く自

て歸るを忘る。歳既に晏れぬ孰か予を華にせん。(三五)三秀を山間に采れば、石(三六)磊磊として葛蔓蔓たり。(三七)公子を怨んで悵として歸るを忘る。(三八)君我を思ふも間を得ず。山中の人(三九)杜若を芳とし、石泉を飲んで松栢に蔭る。君我を思ふも(四〇)然疑作る。雷(四一)塡塡として雨(四二)冥冥たり。(四三)猨啾啾として狖夜鳴き、風颯颯として木(四四)蕭蕭たり。公子を思ひて徒に憂に離ふ。

【大意】山鬼あり山隈に立つこと宛ら人の如し。薜茘女蘿を以て衣帶となし、美目眄然として口もと愛嬌あり。吾が善行あるを悦び、來りて我と歡を結ばんと欲す。乃ち赤豹に乘り服飾を改めて山隈より來り、芳馨を折りて思慕する所の人に贈らんとす。吾れ竹林中に在りて朝暮を知らず、且つ道路險難なるを以て、遂に期に後れて贈物を受くる能はず。獨り山上に立てば雲飛揚して脚下に在り、晝尙ほ暗く、東風吹きて神靈雨を降らし、竟に山鬼と相見るに難し。然も吾が心山鬼を留むるに專にして終に竹林中に歸るを忘れぬ。何となれば予年既に老い、山鬼にあらざれば共に遊ぶべき者なきを以てなり。石徑を涉り榛莽を披き、芝草を採りて山鬼に贈らんとすれば、山鬼我を思

ら脩飾する者、山鬼をいふ。
憺は安んずること。
(三五)三秀。芝草なり。
(三六)磊磊。石の多き貌。
(三七)公子。山鬼の侍者をいふ子蘭をいふ。
(三八)君。山鬼をいふ。
(三九)杜若。香草なり。
(四〇)然疑。信疑なり。
(四一)塡塡。雷の聲。
(四二)冥冥。雨ふりて暗き貌。
(四三)猨。てながざる。啾啾は小聲なり。狖は尾ながざる。
(四四)蕭蕭。風木を拂ふ聲。

はざるにあらざれども、我と相見るの暇なし。これ蓋し侍者我を阻つるが爲なり。因つて侍者を怨んで歸るを忘る。吾れ山中に在りて杜若を採り、石泉を飲み松柏に憩ひ、香潔を以て自ら脩飾せり。されば山鬼我を思はざるにあらざれども、侍者の阻あるが爲に我を信せざるなり。折しも雷轟き雨益〻急に天適〻夜なり。加ふるに猿狖哀鳴し林木蕭蕭たり。吾れ乃ち侍者の我を阻つるを思ひて憂に沈みぬ。

九章　屈平

(一)涉江

余幼にして此の(二)奇服を好む。年既に老ゆるも衰へず。(三)長鋏の陸離たるを帶び、(四)切雲の崔嵬たるを冠し、(五)明月を被りて寶璐を佩ぶ。世溷濁にして余を知るなし。吾れ方に高く馳せて顧みず。(六)青虬に駕し白螭を驂にし、吾れ(七)重華と瑤圃に游ばん。(八)崑崙に登りて玉英を食ひ、天

【一】涉江。九章もと九篇あり涉江は其一なり。此篇江南に遷されて作る。
【二】奇服。奇偉の服なり、下文の冠劍被服是れなり、以て高潔の行に喩ふ。
【三】長鋏。刀のツカ。陸離は長き貌。
【四】切雲。冠の名。崔嵬は高き貌。
【五】明月。珠の名。寶璐は美玉。
【六】青虬。青龍なり。白螭は神獸。驂はソヘウマ。
【七】重華。舜の名。
【八】崑崙。仙山なり。玉英は

地と壽を比し、日月と光を齊うせん。（九）南夷の吾を知るなきを哀み、旦に余江湘を濟る。（一〇）鄂渚に乘りて反顧し、秋冬の（一一）緒風を欸き、余が馬を（一二）山皐に歩ませ、余が車を（一三）方林に低し、（一四）舲船に乘りて余（一五）沅に上り、（一六）呉榜を齊うして以て汰を擊つ。船（一七）容與して進まず、（一八）回水に淹りて疑滯す。

【大意】余幼より奇偉の行を好み年老ゆるも衰へず。然も世貪婪にして我の賢を知る者なし。故に獨り己の志行を高遠にし、高明の地に居りて益々脩潔し、其養ふ所天地日月と共に不朽なるを得たり。然も楚人の我が賢を知らざるを哀み、旦に江湘を渡りて南に行かんとし、鄂渚に登りて楚都を回顧し、車を驅りて方林に至り、船に乘りて沅水を泝り、衆人力を併せて櫂を擧ぐれども船遲遲として進まず。因つて回流に留りて楚都を戀ふ。

朝に（一九）枉渚を發し、夕に（二〇）辰陽に宿す。苟に余其れ端直なり、僻遠と雖も何をか傷まん。（二一）

美玉なり。
【九】南夷。楚國をいふ。
【一〇】鄂渚。地名、今の鄂州なり。
【一一】緒風。餘風なり、春寒尙ほ冬の餘威あるをいふ。屈平の放たれしは中春なり。
【一二】山皐。山澤なり。
【一三】方林。地名なり。

【一四】舲船。船の窓あるもの。
【一五】沅。川の名。
【一六】呉榜。榜は櫂なり、呉人作る所の制に倣ふ、故に呉榜といふ。
【一七】容與。徐緩の貌。
【一八】回水。回流なり。疑滯は惑ひ留るなり。

【一九】枉渚。地名なり。
【二〇】辰陽。地名なり。
【二一】漵浦。水濱なり。儃佪は進まざる貌。

溆浦に入りて余儃佪し、迷ひて吾が如く所を知らず。深林(二二)杳として以て冥冥たり。乃ち(二三)猨狖の居る所なり。山峻高にして以て日を蔽ひ、下幽晦にして以て雨多し。霰雪紛として其れ垠なく、雲(二四)霏霏として宇に承く。吾が生の樂なきを哀み、幽獨にして山中に處る。吾れ心を變じて俗に從ふ能はず、固に將に愁苦して終に窮らんとす。(二五)接輿は髡首し、(二六)桑扈は臝行す。忠必しも用ひられず、賢必しも以ひられず。(二七)伍子は殃に逢ひ(二八)比干は葅醢にせらる。前世を與ふに皆然り。吾又何ぞ今の人を怨みんや。余將に道を董さんとして(二九)豫せず、固に將に(三〇)重昏して身を終へんとす。

【大意】朝に枉渚を發して夕に辰陽に宿す。楚都を去ること益〻遠しと雖も、吾が心端直なれば固より傷む所なし。既に舟を下りて更に水濱に循ひ、迷ひて行く所を知らず。猿聲を聞きつつ深林に入り、更に高山の下に到る。夏は幽晦多雨にして冬は霰雪檐を打つ。我れ心を變へて俗に從ふ能はず。將に愁苦して此地に終らんとす。昔接輿は世を避け佯り狂して頭髮を剃り、桑扈は貧にして衣なく常に裸行し、伍子胥は劍を賜りて

【二二】杳冥冥。暗き貌。
【二三】猨狖。猿なり。
【二四】霏霏。雲の飛ぶ貌。
【二五】接輿。人名。髡首は頭髮を剃り落すこと。
【二六】桑扈。人名。臝行は貧にして衣なく裸體にて行くこと。
【二七】伍子。伍子胥なり、吳王夫差に仕へ劍を賜りて死す。
【二八】比干。人名、紂の叔父なり、紂を諫めて殺さる。葅醢は鹽漬にすること。
【二九】豫。猶豫なり。
【三〇】重昏。益〻暗昧にして光明を見ざること。

自殺し、比干は殺戮せらる。忠賢の必しも用ひられざること古今皆然り、吾れ何ぞ今の人を怨みんや。ただ身を正し行を直くして猶豫せず、暗黒の裏に吾が生を終へんとす。

卜居　屈平

屈平既に放たれて三年、復た見ゆるを得ず。智を竭し忠を盡し、讒に蔽鄣せられ、心煩ひ意亂れ、從ふ所を知らず。乃ち往きて（一）太卜鄭詹尹に見えて曰く、余疑ふ所あり。願くは先生に因りて之を決せんと。詹尹乃ち（二）策を端うし龜を拂ひて曰く、君將に何を以てか之に敎へんとすると。

【一】太卜。卜筮を掌る者の長なり。
【二】策。めどき、卽ち筮竹なり。龜甲は燒きて卜ふもの。
【三】悃悃款款。誠實の貌。朴は質直なり。
【四】草茅。穢草なり。誅鉏は刈り去ること。
【五】大人。貴人なり。

【大意】屈原放逐せられて既に三年、其間復た君に見えて己の志を伸ぶる能はず。憂愁して適從する所を知らず。因つて卜者鄭詹尹を訪ひ、卜筮によりて己の疑惑を決せんとす。詹尹乃ち筮竹を机上に立て、龜甲の塵を拂ひて曰く、足下の卜筮に問はんとするは何事ぞと。

屈原曰く、吾れ寧ろ（三）悃悃款款として朴にして以て忠ならんか、將た往を送り來を勞ひ、斯に窮ならんか、寧ろ（四）草茅を誅鉏し以て力耕せんか、將た（五）大人と遊び以て名を成さんか、寧ろ言を正

うして諱まず、以て身を危うせんか、將た俗に從ひ富貴にして、以て生を媮まんか、寧ろ超然として高く擧り、以て眞を保たんか、將た（六）哫訾慄斯、（七）喔咿嚅唲し、以て婦人に事へんか、寧ろ廉潔正直にして、以て自ら淸うせんか、將た（八）突梯滑稽、脂の如く韋の如くにして、以て（九）絜楹せんか、寧ろ（一〇）昂昂として千里の駒の若くならんか、將た（一一）氾氾として水中の鳧の若くならんか、波と上下し偸くも以て吾が軀を全うせんか、寧ろ（一二）騏驥と軛を抗げんか、將た駑馬の迹に隨はんか、寧ろ黃鵠と翼を比べんか、將た（一三）雞鶩と食を爭はんか。此れ孰れか吉孰れか凶、何をか去り何をか從はん。世溷濁にして淸まず、蟬翼を重しとなし（一四）千鈞を輕しとなし、（一五）黃鐘は毀ち棄てられ瓦釜は雷鳴し、讒人高く張り賢士名なし。于嗟（一六）嘿嘿たり。誰か吾の廉貞を知らんやと。

【六】哫訾慄斯。趦趄して妄動せざるをいふ。
【七】喔咿嚅唲。囁嚅して妄語せざるをいふ。
【八】突梯、俗に隨ひて逆はざる貌、滑稽は圓轉自在の貌、脂は膏、韋はナメシカハ。
【九】絜楹。觸犯せざること。
【一〇】昂昂。志行の高き貌。
【一一】氾氾。汎汎に同じ、浮漂する貌。
【一二】騏驥。駿馬なり。
【一三】雞鶩。鶩は鴨なり。
【一四】千鈞。鈞は二十四兩なり
【一五】黃鐘。大鐘なり。
【一六】嘿嘿。默默なり。

【大意】屈原曰く、吾れ誠實質直にして心を君國に盡さんか、去る者は送り來る者は迎へ、世俗の儘に任せて已まんか、官仕を辭して躬耕を業とせんか、交を貴人に納れて名を揚げんか、趦趄囁嚅して言動を愼み、容れられん事を務めんか、世俗を超脫し吾が本領を固守せんか、從媚して婦女子

に事へんか、廉潔にして身を清くせんか、己の才力を發揮し千里の馬の如くならんか、水中の鳧の如く俗流と浮沈せんか、高士と共に翺翔し網羅の禍を避くべきか、小人と共に伍して爵祿を爭ふべきか、請ふ其吉凶を判斷せられよ。ああ今や世亂れて輕重大小を誤り、蟬翼を以て重しとなし、千鈞を以て輕しとなし、大鐘は破り棄てられて、瓦釜は鳴ること雷の如し。(忠臣隱れて佞人進むに喩ふ)世亦默默として之を論ずる者なし。誰か吾が廉直を知る者あらんやと。

詹尹乃ち策を釋てて謝して曰く、夫れ尺も短き所あり、寸も長き所あり、(一七)物も足らざる所あり、智も明ならざる所あり、(一八)數も逮ばざる所あり、神も通ぜざる所あり。君の心を用ひ君の意を行へ。龜策は誠に此事を知る能はずと。

【一七】物。龜を指して言ふ。
【一八】數。策を指して言ふ。

【大意】詹尹陳謝して曰く、尺は寸より長きも、以て河嶽の大を度る能はざれば、尙ほ短しと謂はざるべからず。寸は尺より短きも、毫釐の微を度る能はざれば、尙ほ長しと謂はざるべからず。世事の一概に論斷すべからざる所以なり。されば龜策も此事を判斷する能はず。宜しく足下の志の儘に行ふべきなりと。

漁父　　屈平

屈原既に放たれて江潭に遊び、澤畔に行吟す。顏色(一)憔悴し形容枯槁せり。漁父見て之に問ひて曰く、子は(二)三閭大夫にあらずや、何が故に斯に至ると。屈原曰く、世人皆濁り、我獨り清めり。衆人皆醉ひ我獨り醒めたり。是を以て放たれたりと。漁父曰く、聖人は(三)萬物に凝滯せずして能く世と推し移る。世皆濁らば何ぞ其泥を淈らして其波を揚げざる。衆人皆醉はば何ぞ其糟を餔ひて其釃を歠らざる。何が故に深く思ひ高く擧り、自ら放たれしむるをなすと。屈原曰く、吾れ之を聞く、新に沐する者は必ず冠を彈き、新に浴する者は必ず衣を振ふと。安んぞ能く身の(四)察察たるを以て、物の(五)汶汶たるを受くる者あらんや。寧ろ(六)湘流に赴きて江魚の腹中に葬られん。安んぞ能く(七)皓皓の白きを以て、世俗の塵埃を蒙らんやと。漁父(八)莞爾として笑ひ、(九)枻を鼓して去る。乃ち歌ひて曰く、(一〇)滄浪の水清まば、以て我が(一一)纓を濯ふべし。滄浪の水濁らば、以て我が足を濯ふべしと。遂に去りて復た與に言はず。

【一】憔悴。瘦せ衰ふること。枯槁は枯るること。
【二】三閭大夫。三閭の職は楚の王族昭、屈、景三姓の譜屬を敍し其賢良を率ゐて國士を勵すことを掌る、屈原此職に任ぜらる。
【三】萬物。一本に萬の字なし。
【四】察察。潔白の貌、
【五】汶汶。汚れたる貌。
【六】湘流。湘は川の名。
【七】皓皓。潔白の貌。
【八】莞爾。微笑の貌。
【九】枻を鼓す。楫を搖すなり。
【一〇】滄浪。川の名。
【一一】纓。冠の紐。

【大意】屈原既に放逐せられて江畔に行吟す。顏色衰へ形體瘦せて枯木の如し。漁父之を見て問

うて曰く、君何の故に此地に至れると。屈原曰く、今や人皆利慾に汙れざるはなきに、我獨り潔白なり、人皆善惡を識別せざるに、我獨り事理に明なり。是の故に放逐の禍に遭ひて、此地に來れるなりと。漁父曰く、聖人は能く世俗と俯仰屈伸し、初めより主持する所なし。世人皆汙れなば君も共に汙るべく、人皆事理に暗からば君も亦自ら暗くすべきなり。何ぞ獨り衆と志行を異にして放逐の禍を買ふべけんやと。屈原曰く、聞く新に沐浴せる者は必ず衣を振ひ冠を彈きて塵垢を蒙るを避くと。吾が深く思ひ高く擧れるは、猶ほ新に沐浴せる者の如し。何ぞ潔白の身を以て塵垢を蒙るに忍びんや。寧ろ湘水に投じて江魚の餌食となるとも、世俗の醜行を爲すに忍びんやと。漁父之を聞きて笑ひ楫を搖して去り、歌つて曰く、滄浪の水清まば吾が冠纓を洗ひ、濁らば足を洗はんのみ（所謂物に凝滯せず、世と推し移る意なり）と。遂に去りて復た相見ることなかりき。

九辯五首　　宋玉

悲い哉秋の氣たるや。(一)蕭瑟として草木搖落して變衰す。(二)憭慄として遠行に在りて山に登り水に臨みて、將に歸らんとするを送るが若し。(三)泬寥として天高くして氣清く、(四)寂漻として潦を收めて水清し。(五)憯悽として增〻

【一】蕭瑟。淋しき貌。
【二】憭慄。悽愴なり。
【三】泬寥。空豁澄清の貌。
【四】寂漻。虛靜の貌。潦は流水。
【五】憯悽。悲痛の貌。

薄寒の人に中るを欷き。(六)愴怳懭悢として、故を去りて新に就く。(七)坎壈として貧士職を失ひて志平ならず。(八)廓落として羇旅して友生なし。惆悵して私に自ら憐む。燕(九)翩翩として其れ辭し歸り、蟬寂寞として聲なし。鴈(一〇)噰噰として南に游び、(一一)鵾雞啁哳として悲み鳴く。獨り(一二)申旦まで寐ねられず、蟋蟀の宵征くを哀む。時(一三)亹亹として中を過ぐ。蹇淹留して成すことなし。(其一)

【大意】秋は萬物凋衰の時にして、人をして悲傷せしむること、恰も山に登り水に臨み他郷に在りて歸郷する人を送るが如し。天高く氣澄み水流減退して聲なし。是時に當り逐臣たる者寒涼の身に迫るを嘆じ、盛を經て衰に入るの感に堪へず。心に不平を抱いて友の之を慰むるなし。況んや燕去り蟬死し、鴈飛び鵾雞鳴くをや。乃ち曉に達するまで眠る能はず。蟋蟀の夜鳴くを聞き、歳月漸く進みて歳既に半を過ぐるも、他郷に留滯して成す所なきを悲む。

悲憂窮蹙して獨り廓きに處る。美なる(一四)一人あり心繹けず。郷を去り家を離れ來りて遠客たり。超に逍遙して今焉に薄る。專ら(一五)君を思ひて化

【六】愴怳懭悢。失意の貌。
【七】坎壈。特立して耦なき貌。
【八】廓落。特立の貌。羇旅は行旅なり。友生は朋友。
【九】翩翩。飛ぶ貌。
【一〇】噰噰。鴈の聲。
【一一】鵾雞。鳥の名。啁哳は繁細の貌。
【一二】申旦。曉に達するまで。
【一三】亹亹。進む貌。
【一四】一人。屈原をいふ。
【一五】君。楚王をいふ。化は志

すべからず。君知らず奈何すべき。怨を蓄へて思を積み、心（一六）煩憺して食事を忘る。願くは一たび見えて余が意を道はん。君の心余と異なり。車駕して朅りて歸り、見ゆるを得ずして心悲む。（一七）結軨に倚りて太息すれば、涕（一八）潺湲として軾を霑す。慷慨して絶えて得ず、（一九）中瞀亂して迷惑し、私に自ら憐むこと何ぞ極らん。心（二〇）怦怦として諒直なり。（其二）

を變ずること。
【一六】煩憺。亂れ動く貌。
【一七】結軨。軨は軾下に縱横せる木なり。
【一八】潺湲。涙の流るる貌。
【一九】中瞀亂。心の亂るること。
【二〇】怦怦。忠正の貌。諒直は誠直なり。

【大意】美丈夫あり心に憂を抱きて獨居し家郷を離れて此地に客たり。心に君を思ひて自ら變改すべからざるも、君其心を知らざるを奈何せん。一たび進謁して心中を述べんと欲するも、君の心我と異なり。故に駕して故國に還りしも、終に謁見するを得ず。心益〻悲傷す。軨に倚りて長嘆すれば、涙流れて軾を沾し、慷慨殞絶して志を得ず。中情亂れて自ら憐むも、心常に忠貞を失はず。

（二一）皇天四時を平分す。竊に獨り此の（二二）凛秋を悲む。白露既に下りて百草に降り、奄ち此の（二三）梧楸を離披す。白日の昭昭たるを去り、長夜の

【二一】皇天。天なり。
【二二】凛秋。秋氣凛然として寒きなり。
【二三】梧楸。木の名、秋至れば其葉最も早く落つ。離披は分散なり。

(二四)悠悠たるに襲く。(二五)芳藹の方に壯なるを離れ、余(二六)委約して悲愁す。秋既に先づ戒むるに白露を以てし、冬又之に申ぬるに嚴霜を以てす。(二七)恢台の孟夏を收め、然く(二八)坎傺して沈藏す。葉(二九)菸邑して色なく、枝(三〇)煩挐して交横す。(三一)顔淫溢して將に罷れんとす。柯彷彿として(三二)委黃し、(三三)萷櫹槮として哀むべし。(三四)形銷鑠して瘀傷す。其の紛糅して將に落ちんとするを惟ひ、其の時を失ひて當るなきを恨む。(三五)騑轡を覽りて節を下し、聊か逍遙して以て(三六)相羊す。歲忽忽として遒り盡き、余が壽の將からざるを恐る。余が生の時ならずして、此世の(三七)俇攘に逢へるを悼む。(三八)澹として容與して獨り倚れば、蟋蟀此の西堂に鳴き、心怵惕して(三九)震盪す。何ぞ憂ふる所の(四〇)多方なる。明月を仰いで太息し、列星に歩して明に極る。（其三）

【大意】天は一年を四時に平分し、秋を以て最も悲むべきの時となす。白露既に降れば、梧楸の

【二四】悠悠。長き貌。
【二五】芳藹。芳草長茂すること。
【二六】委約。委は萎なり、約は窮なり。
【二七】恢台。恢は大なり。台は胎なり、夏氣の萬物を長養すること。
【二八】坎傺。陷止なり。
【二九】菸邑。傷壞なり。
【三〇】煩挐。擾亂なり。
【三一】顔。木葉の光彩、人の顔色の如し故にいふ。淫溢は幽濕なり。
【三二】委黃。萎みて黃色になること。
【三三】萷。木葉凋落の貌。櫹槮は木葉衰敗の貌。
【三四】銷鑠。焦枯なり。瘀は血敗なり。
【三五】騑轡。馬の手綱。覽は擥に同じ。節を下すとは徐行するなり。
【三六】相羊。逍遙に同じ。
【三七】俇攘。亂るる貌。
【三八】澹容與。徐歩すること。
【三九】震盪。盪は搖動なり。
【四〇】多方。多端なり。

葉先づ凋落し、日は短くして夜徒に長く、芳草繁茂の時を去りて、萎縮窮迫の節に入る。豈悲愁に堪ふべけんや。霜露結んで盛夏長養の氣を收藏すれば、枝葉萎黄凋落す。既に時を失ひて好時に當るなきを恨む。己の不遇を悲み明月を仰ぎて長嘆し、列星の下に歩して一夜を明かす。

竊に悲む夫の蕙華の（四一）曾敷し、紛として（四二）都房に旖旎たりしを。何ぞ曾華の實なく、風雨に從つて飛颺せる。以爲らく君獨り此の蕙を服すと、嗟以て衆芳に異るなし。（四三）奇思の通ぜざるを閔み、將に君を去りて高く翔らんとす。心閔憐して慘悽し、一たび見えて明すあらんことを願ふ。怨なくして生がら離れしを重へば、（四四）中結軫して傷を増す。豈（四五）鬱陶として君を思はざらんや、君の門以に九重なり。（四六）猛犬狺狺として迎へ吠え、（四七）關梁閉ぢて通せず。（四八）皇天淫溢して秋霖す。（四九）后土何れの時か乾くを得ん。（五〇）塊として獨り此の無澤を守り、浮雲を仰いで永歎す。（其四）

【大意】蕙華嘗て堂下に咲き滿ちたりしも、風雨に從つて飄零しぬ。吾れ初め君（楚王を謂ふ）此の芳華を佩服するならんと思ひしに、竟に衆芳と同じく衰敗せるは、悲に堪へず。（楚王初め屈原を

【四一】曾敷。重り布くこと。
【四二】都房。大なる堂。旖旎は盛なる貌。
【四三】奇思。忠信なり。
【四四】中結軫。心の結ぼふること。
【四五】鬱陶。憤念の心に滿つる貌。
【四六】猛犬。讒人に喩ふ。狺狺は吠ゆる聲。
【四七】關梁。門のクワンヌキ。
【四八】皇天淫溢。前首に見ゆ。
【四九】后土。地なり。
【五〇】塊。獨居の貌。無澤は君の恩澤を被らざること。

信任せしも、後之を廢斥せるを謂ふ）吾が忠信の君に通ぜざるを悲み、國を棄てて去らんとするも、亦悲に堪へず。更に一たび君に見えて所思を明さんと欲す。吾れ君を怨まざるも、君却つて我を離絶す。之を思へば中情悲傷を増す。吾が心君を思はざるにあらざれども、君門深遠にして猛犬吠え、門關閉ぢたるを以て、亦至るを得ず。天既に淫雨すれば、地何ぞ乾くを得ん。（君澤衆に及べるに喩ふ）吾獨り塊然として君澤に潤ふを得ず。浮雲を仰いで長嘆するのみ。

何ぞ時俗の工巧なる、（五一）繩墨に背いて改め錯く。（五二）騏驥を却けて乘らず、（五三）駑駘に策ちて路を取る。當世豈騏驥なからんや。誠に之を能く善く御するなし。轡を執る者を見るに其人にあらず、故に駒跳りて遠く去る。（五四）鳧鴈皆夫の粱藻を唼ふ。鳳愈〻飄翔して高く擧る。（五五）圜鑿にして方枘なれば、吾れ固に其の（五六）鉏鋙して入り難きを知る。衆鳥皆登り棲む所あり、鳳獨り（五七）遑遑として集る所なし。（五八）枚を銜んで言ふなからんことを願ふも、常て君の（五九）渥洽を被れり。太公九十にして乃ち顯榮す。誠に未だ其の（六〇）匹合に遇はず。騏驥を安にか歸ると謂ひ、鳳皇を安にか棲むと謂ふ。

【五一】繩墨。法度なり。
【五二】騏驥。駿馬なり、賢才に喩ふ。
【五三】駑駘。鈍馬なり、不肖者に喩ふ。
【五四】鳧鴈。不肖者に喩ふ。粱藻は重祿に喩ふ。
【五五】圜鑿。圓き穴。方枘は四角なるホゾ。
【五六】鉏鋙。くひちがふこと。
【五七】遑遑。暇なき貌。
【五八】枚。形箸の如く横に之を銜み兩頭に繦あり頂後に結び以て言を止むる具。
【五九】渥洽。厚恩なり。
【六〇】匹合。遇合なり。

古を變へ俗を易へて世衰ふ。今の相る者肥えたるを擧ぐ。騏驥は伏し匿れて見えず、鳳皇は高く飛んで下らず。鳥獸すら猶ほ德に懷くを知る、何ぞ賢士を處らずと云はんや。驥は驟に進んで（六一）服せんことを求めず、鳳も亦（六二）餧を貪りて妄に食はず。君棄て遠けて察せず。忠を願ふと雖も其れ焉んぞ得ん。寂寞として端を絕たんと欲するも、竊に敢て初の厚德を忘れず。獨り悲愁すれば其れ人を傷ましめ、（六三）馮鬱鬱として其れ何ぞ極まらん。（其五）

【大意】世人詐僞を好みて法度に遵はず、賢人を却けて用ひず、不肖者を擧げて之を用ふ、世豈に賢者なからんや、ただ賢を知るの明君なきのみ。是を以て賢者は世を遯れて山谷に匿る。吾れ既に世人と趨向を同うせざれば、固より其の容るる所とならざるを知る。ただ口を緘して言はざらんと欲すれども、嘗て君の厚恩を受けたるを思へば、復た默視する能はず。昔太公望は年九十にして初めて顯榮せり。吾れ老いたりと雖も豈顯榮の時なきを保せんや。ただ未だ遇合の時に遇はざるのみ。世人は賢者を疎外して深く意を留めず。古の法を變じて俗衰へたれば、馬を相する者も徒に肥馬を良しとして之を擧げ、眞の駿馬は却つて之を逸す。鳥獸すら德なければ懷かず、獨り賢者の遠く去るを怪まんや。吾れ寂寞として跡を滅して去らんと欲するも、尙ほ當初の厚恩を忘るる能はず。憂心胸に滿ち

【六一】服。車に著くこと。
【六二】餧。餌なり。
【六三】馮鬱鬱。馮は滿盛の貌。

て極る所なし。

(一)招魂　　宋玉

(二)朕幼より清にして以て廉潔なり、身義を服ひて未だ沬まず。此の盛德を主とするも、俗に牽かれて蕪穢す。(三)上此の盛德を考ふる所なく、長く殃に離りて愁苦す。(四)帝巫陽に告げて曰く、(五)人あり下に在り、我之を輔けんと欲す。魂魄離散す、汝(六)筮して之に予へよと。巫陽對へて曰く、(七)夢を掌る。(八)上帝其命從ひ難し。若し必ず筮して之を予へば、恐らくは後之を謝りて復た用ふる能はざらんと。

【大意】吾少小より清廉の德を脩め仁義の行をなし、常に道德を以て主眼とすれども、世俗に牽かれて時に曠廢することなき能はず。常に自ら奮勵しつつあり。然るに楚王我が盛德を察知せず、遂に廢黜の厄に遇ひて自ら愁苦す。乃ち天帝之を知りて巫陽に命ずらく、下土に賢人屈原あ

【一】招魂。此篇古來宋玉の作となせども屈原の作となすものもあり、今後說に從ひ屈原自ら己の魂を招くものとなして解す。
【二】朕。屈原自ら謂ふ。
【三】上。君なり。楚王をいふ。
【四】帝。天帝なり。巫陽は巫の名。
【五】人。賢人なり、屈原をいふ。
【六】筮。うらなふこと。
【七】夢を掌る。巫陽自ら其の職掌を述ぶるなり。夢を占ひて吉凶を判斷する事を掌るとなり。
【八】上帝。天帝なり。天帝を呼びかけて言ふなり。

り、我之を輔けて其志を成さしめんと欲すれども、其魂魄既に離散せり、汝宜しく筮して魂魄の所在を問ひ、之を其身に反らしめよと。巫陽之に對へて曰く、天帝よ我れ其命に從ひ難し。何となれば夢を占ふは吾が職なり。魂魄の所在に至りては、占筮の能く知る所にあらず。然も必ず之を筮せば、後人占筮を蔑視し、之を棄て去りて復た用ひざるに至らん。唯之を招くに如かざるなりと。巫陽焉に乃ち下り招きて曰く、魂來り歸れ、君の(九)恆幹を去り、何爲れぞ四方にする。君の樂處を舍てて、彼の(一〇)不祥に離ふ。魂歸り來れ、東方には以て託すべからず、(一一)長人の千仞なるあり、唯魂を是れ索む。十日代ゝ出で、金を流し石を鑠す。彼皆之に習へり。魂往かば必ず釋けん。歸り來れ歸り來れ、以て託すべからず。魂歸り來れ、南方には以て止るべからず。(一二)雕題墨齒、人肉を得て以て祀り、其骨を以て醢となす。(一三)蝮蛇蓁蓁として、(一四)封狐千里なり。(一五)雄虺九首、往來倏忽として、人を呑み以て其心を益す。歸り來れ歸り來れ、以て久しく淫るべからず。魂歸り來れ、西方の害、(一六)流沙千里、旋りて(一七)雷泉に入り、(一八)靡散して止るべからず。幸にして脱るるを得るも、其外に(一九)曠宇あり。赤蟻象の若く、(二〇)玄蠭壺の若し。五穀生せず(二一)叢菅を

【九】恆幹。常體なり。
【一〇】不祥。不善の物。
【一一】長人。たけたかき人。
【一二】雕題。額にいれずみすること。墨齒は齒を染むること。
【一三】蝮蛇。まむし。蓁蓁は聚ろ貌。
【一四】封狐。大狐なり。
【一五】雄虺。蛇なり。
【一六】流沙。沙漠なり。
【一七】雷泉。雷澤なり。
【一八】靡散。碎け散ること。

是れ食ふ。其土人を爛し、水を求むれども得る所なし。(二二)彷徉して倚る所なく、廣大にして極る所なし。歸り來れ歸り來れ、恐くは自ら賊を遺さん。魂歸り來れ、北方には以て止るべからず、(二三)增冰峨峨として飛雪千里なり。歸り來れ歸り來れ、以て久うすべからず。魂歸り來れ、君天に上るなかれ、(二四)虎豹九關、下人を啄害す。一夫九首、木を拔くこと九千なり。豺狼(二五)從目、往來(二六)侁侁たり。人を懸けて以て嬉れ、之を深淵に投ず。命を帝に致し、然る後瞑るを得。歸り來れ歸り來れ、往かば恐くは身を危うせん。魂歸り來れ、君此の(二七)幽都に下るなかれ。(二八)土伯九約、其角(二九)觺觺たり。(三〇)敦脄血拇、人を逐ひて(三一)駓駓たり。參目虎首、其身牛の若し。(三二)此れ皆人を甘しとす。歸り來れ歸り來れ、恐くは自ら災を遺さん。

【大意】巫陽乃ち天より下り屈原の魂を招きて曰く、魂屈原が身に反れ、何爲れぞ汝の常居を

【一九】曠宇。無人の土なり。
【二〇】玄蠭。黑蜂。
【二一】叢菅。菅は草の名。
【二二】彷徉。彷徨なり。
【二三】增冰。層氷なり。峨峨は高き貌。
【二四】虎豹。天門に九關あり、虎豹之を守る。

【二五】從目。目の縱につけること。
【二六】侁侁。羣行の貌。
【二七】幽都。地下、后土の治むる所なり。
【二八】土伯。后土の侯伯。約は屈なり。
【二九】觺觺。角の聳ゆる貌。

【三〇】敦脄。厚き脊肉。血拇は血に染める拇指。人を攫みて之を食ふを以てなり。
【三一】駓駓。走る貌。
【三二】此れ皆。此一句は竄入か或は此下に脱文ありといふ。前後の例に據るに當に然るべし。

離れて四方に遊ぶ。何爲れぞ樂土（楚國を指す）を棄てて不善の鄉に走る。魂よ東方には居るべからず。何となれば身長千仞の巨人あり、魂を以て常食となす。又扶桑の木あり其下より十日竝び出で、酷熱にして金石も爲に鎔く。彼土の人は之に慣れて驚かざれども、魂若し其地に至らば必ず銷釋せん。南方にも亦居るべからず、額に黥し齒を染めたる土人あり、其族人肉を供へて祖先を祀り、其骨を以て醢醬となす。又毒蛇大狐あり。皆人を殺して之を食ふ。西方にも亦居るべからず。沙漠千里に亙り、一たび此に入れば沙土散亂して深淵に墮つるが如く。幸に陷沒の災を脫るるを得るも、其外に無人の境あり。ここに害蟲多く廣大にして涯なし。北方にも亦居るべからず。飛雪層氷千里に亙れり。魂又天に上るなかれ。天門九重ありて虎豹之を守り、人の天に升らんとする者あれば、忽ち之を囓み殺す。又丈夫あり一身にして九首、其力一日に九千本の大樹を拔く、又縱目の豺狼あり、羣行して人を害し、人を得れば先づ其頭を木に懸けて之を弄し、然る後深淵に投棄し、天帝に復命して初めて臥眠す。魂又地に入るべからず。其の侯伯に身九屈し其角高く聳え、脊肉厚く拇指常に血に染み、目三個ありて首は虎の如く、身は牛の如きあり。其害測るべからず。魂よ宜しく歸りて屈原の身に入るべきなり。

魂歸り來りて（三三）脩門に入れ。（三四）工祝君を招き

【三三】脩門。楚都郢城の門。

【三四】工祝。男巫の巧辯なる者

背行して先だつ。(三五)秦篝齊縷鄭緜絡ひ、招具該ね備りて永く嘯呼す。魂歸り來りて故居に反れ。天地四方賊姦多し。君が室を(三六)像設し靜間にして安し。(三七)高堂邃宇檻軒を層ね、層臺累榭高山に臨み、(三八)網戶朱綴刻方連り、冬は(三九)突廈あり夏室は寒し。川谷(四〇)徑復して流潺湲たり。光風蕙を轉じて(四一)崇蘭を氾はし、堂を經て奥に入れば(四二)朱塵筵あり。(四三)砥室翠翹曲瓊を絓け、(四四)翡翠珠被爛として光を齊うす。(四五)蒻阿壁を拂ひ羅幬張り、(四六)纂組綺縞奇璜を結ぶ。室中の觀珍怪多く、(四七)蘭膏明燭華容備り、(四八)二八侍宿して射へば遞に代る。(四九)九侯の淑女多くして衆より迅く、(五〇)盛鬋制を同うせずして滿宮に實つ。容態(五一)好比順彌ゝ代り、弱顏(五二)固植謇其れ意あり。(五三)姱容脩態洞房に絚り、蛾眉(五四)曼睩

背は倍なり、倍行は晝夜兼行して魂を迎ふるをいふ。

【三五】秦篝。篝は絲を入るる籠。縷は絲。秦齊は其產地を示す。

【三六】像設。像は法なり、のつとること。靜間は閑靜なり。

【三七】高堂邃宇。魂の居室をいふ。檻は欄干。

【三八】網戶。戶扉皆網の目の模樣を刻み、塡むるに朱泥を以てす、故に朱綴といふ。刻方は網の目の形を刻して方形をなせるもの相連るなり。

【三九】突廈。深邃なる大屋。

【四〇】徑復。交流すること。

【四一】崇蘭。叢蘭なり。

【四二】朱塵筵。塵は承塵、ナゲシなり、塵及び筵を飾るに朱を以てす。

【四三】砥室。砥石を以て壁とせる室。翠翹は翡翠鳥の羽なり以て飾となす。曲瓊はマガタマ。

【四四】翡翠珠被。翡翠鳥の羽及び珠玉を以て飾りし衾。

【四五】蒻阿。蒻は弱なり、阿は細繒なり。羅幬はウスギヌのトバリ。

【四六】纂組。くみひも。綺縞は模樣ある絹。奇璜は美玉なり。

【四七】蘭膏。香蘭を以て煉りしアブラ。

【四八】二八。十六人の女樂。

【四九】九侯。九國諸侯。

【五〇】盛鬋。雲鬢なり。

【五一】好比。和交親比なり。

目光を騰ぐ。(五五)靡顏膩理遺視矊なり。(五六)離樹脩幕君の間に侍す。翡帷翠幬高堂を飾り、紅壁沙版(五七)玄玉の梁。仰いで(五八)刻桷を觀れば龍蛇を畫き、堂に坐し檻に伏して曲池に臨む。(五九)芙蓉始めて發いて芰荷を雜ふ。紫莖(六〇)屏風文波に緣る。(六一)文異豹飾陂陁に侍す。(六二)軒輬既に低りて步騎羅る。(六三)蘭薄戶樹瓊木の籬あり。魂歸り來れ、何ぞ遠ざかるをなさん。

【大意】魂歸り來りて郢都の門に入れ、巫祝汝を迎へ道を倍して先導し、汝の服既に備れり。宜しく早く歸るべきなり。天地四方害賊多きこと上に述べたるが如し。今汝の居室を造營すること法の如くす。是を以て寬宏にして安靜なり。何ぞ早く歸らざる。汝の室は冬暖に夏涼しく、珍奇を盡して粧飾し、夜は明燭晃晃として、美女十六人をして侍宿せしめ、厭倦すれば更に他の女を以て之に代らしむ。又九國諸侯の美女あり、奔走便捷なること衆女にまさり、盛に鬢髮を飾理し各〻體制を異にす。此の如き美女後宮に充滿せ

【五二】固植。堅固なる志。
【五三】姱容脩態。美好なる容姿。洞房は閑室なり。
【五四】曼睩。曼は長細の貌。睩は謹視の貌。
【五五】靡顏。靡は緻なり。膩理はキメのこまかなること。遺視はナガシメに見ること。
【五六】離樹。離れ座敷。脩幕は長きトバリ。
【五七】玄玉。黑色の玉。
【五八】刻桷。雕刻を施したるタルキ。
【五九】芙蓉。蓮花なり。芰荷は菱。
【六〇】屏風。水草の名。
【六一】文異豹飾。侍從の人皆虎豹の文、異彩の飾をなす。陂陁は長陛なり。
【六二】軒輬。輕車なり。
【六三】蘭薄。蘭叢なり。戶樹は門戶の兩傍に佳樹を植うること。

り。其の顏貌柔和、心志堅固にして意態の愛好すべきものあり。又虎豹の文、異彩の飾をなせる侍衞の士あり。汝に侍して陛階をまもり、門戸の傍には芳蘭を植ゑたり。魂よ早く此の室に歸るべし。

室家遂に宗くして食(六四)多方なり。(六五)稻粢穱麥黃粱を挐へ、大苦鹹酸辛甘行り、肥牛の(六六)腱臑若として芳し。酸若び苦を和して(六七)呉羹を陳ね、濡鼈炮羔(六八)柘漿あり。(六九)鵠酸臇鳧鴻鶬を煎にし、(七〇)露雞臛蠵厲にして爽らず。(七一)粔籹蜜餌餦餭あり、(七二)瑤漿蜜勺羽觴に實ち、糟を挫り(七三)凍飲して酎清涼なり。(七四)華酌既に陳りて瓊漿あり。歸り來れ歸り來れ、故室に反れ、敬して妨ぐるなけん。(七五)肴羞未だ通せざるに女樂羅り、鐘を陳ね鼓を按ちて新歌を造す。(七六)涉江采菱揚荷を發す。美人既に醉ひて(七七)朱顏酡き、(七八)娭光眇視して目波を曾ぬ。文を被り纖を服

【六四】多方。多種なり。
【六五】稻粢。米及びキビ。穱麥は燕麥なり。黃粱も穀物の名。
【六六】腱。筋頭なり。臑若は熟爛の貌。
【六七】呉羹。呉人の製法によれるアツモノ。
【六八】柘漿。諸蔗の汁を以て作りし飲物。
【六九】鵠酸。鵠肉を煮て味を酸くせし物。臇鳧は鳧肉の羹。鴻鶬は鳥の名。
【七〇】露雞。雞のマルニ。臛蠵は大龜の羹。厲は味淸烈なるも口に乖かざるなり。
【七一】粔籹。米の粉を水にてこれ環狀にして油を以て煎りたる物。蜜餌は蜜を和したる餅。餦餭はアメ。
【七二】瑤漿。玉の如き飲物。勺は酒を挹む具。
【七三】凍飲。氷を和して飲む。酎は醇酒。
【七四】華酌。華盛の飲宴。
【七五】肴羞。食饌なり。通は徹なり、膳部を取り下ぐること。
【七六】涉江。以下皆歌曲の名。
【七七】朱顏。赤き顏。
【七八】娭光。戯るる目つき。眇

し麗にして（七九）奇ならず。長髪曼鬋艶にして（八〇）陸離たり。二八容を齊へ起ちて（八一）鄭舞す。衽は交竿の若く（八二）案を撫して下り、（八三）竽瑟狂會して鳴鼓を擫つ。宮庭震驚して（八四）激楚を發し、（八五）吳歈蔡謳大呂を奏す。士女雜り坐し亂れて分れず。（八六）組纓を放陳し班として其れ相紛れ、鄭衞の妖玩來りて雜陳し、激楚の結獨り秀で先だつ。（八七）箟蔽象棊六簙あり。曹を分ち竝び進み遒りて相迫る。（八八）梟を成して牟ち（八九）五白を呼ぶ。（九〇）晉制犀比白日を費し、鐘を鏗き（九一）簴を揺し梓瑟を揳き、酒を娛みて廢せず日夜に沈み、蘭膏明燭（九二）華鐙錯り、（九三）至思を結撰して蘭芳假り、人極る所あり心を同うして賦す。酎飲既に歡を盡して（九四）先故を樂まん。魂歸り來りて故居に反れ。

視は微睇なり。
【七九】奇。奇邪なり。
【八〇】陸離。長き貌。
【八一】鄭舞。鄭國の舞なり。
【八二】案。几案なり。
【八三】竽瑟。樂器の名。
【八四】激楚。激越せる聲。
【八五】吳歈。以下皆各國の歌。
【八六】組纓。印綬及び冠の紐。班は交り亂るる貌。
【八七】箟蔽。箟は琨なり、玉なり、蔽は博箸、サイなり。象棊は象牙のコマ。六簙は箸即ちサイを投げ、其のあらはれたる數によりて棊即ちコマを行りて勝負を爭ふ遊戲なり、箸棊ともに六個あり、故に六簙といふ。
【八八】梟。博采の名、梟を以て勝とし、倍勝を牟といふ。
【八九】五白。杜詩の註に局戲の采白黑各六、白の多きを以て勝となすとあり、故に五白を呼ぶなり。
【九〇】晉制犀比。晉國の工匠の作れる犀角を比集して雕飾せる棊箸をいふ。白日を費すとは簙戲に耽りて日を送るなり。
【九一】簴。鐘を懸くる架。梓瑟は梓材を以て作れる瑟。
【九二】華鐙。華飾の燈。
【九三】至思。至深の情思。結撰は述ぶること。
【九四】先故。舊事なり。

【大意】堂室既に高崇にして食饌亦多種なり。膳羞未だ取り去らざるに、女樂早くも羅列し、鐘を列ね鼓を擊ちて新曲を奏し、美女半醉半醒にして、嬉戲の目光波紋の轉ずるが如く、被服亦纖麗にして鬢髮艷美なり。美女十六八一齊に起ちて鄭舞を演じ、衣襟の回旋すること竹竿を交ふるが如く、歌鼓の聲之に從つて湧く。宴樂既に終れば更に博戲を設けて興を添へ、夜は明燭を置きて各思ふ所を賦す。詞華盛美なること蘭芳の如く、各歡樂を極め賦する所皆其趣を同うす。飲宴して歡を盡すこと此の如く、また舊時の歡を再びするに足る。魂よ早く歸り來りて此樂を受けよ。

（九五）亂に曰く、（九六）獻歲發春汩として吾れ南に征く。（九七）菉蘋葉を齊うして白芷生ず。路（九八）廬江を貫いて長薄を左にし、沼に倚り瀛を畦にし遙に望むこと博し。（九九）靑驪駟を結んで千乘を齊うし、（一〇〇）懸火延き起して玄顏烝し、步及び（一〇一）驟處誘き騁せ先だつ。騖するを抑へ若ひ通り車を引いて右に還り、王と（一〇二）夢に趨りて後先を課す。君王親く發して靑兕を憚れしむ。（一〇三）朱明夜に承ぎて時淹うすべからず。皐蘭徑に被りて斯路漸さる。

【九五】亂。篇末に置きて一篇の大旨を總括する詞。
【九六】獻歲。年頭なり。發春は春初なり。汩は去る貌。
【九七】菉蘋。水草の名。白芷は香草。
【九八】廬江、長薄。地名なり。
【九九】靑驪。あを毛の馬。駟は四匹の馬なり。
【一〇〇】懸火。燈を林中に懸くること。玄顏は天の色。
【一〇一】驟處。馬に乘りて走る者止りて獸を圍む者。
【一〇二】夢。雲夢澤、楚の大澤の名。
【一〇三】朱明。日なり。

(一四)湛湛たる江水上に楓あり。目千里を極めて春心を傷ましむ。魂歸り來れ江南を哀む。

【大意】亂に曰く、(以下屈原自ら實事を敍す)初春の時吾廢黜せられて南方に行く。時に菉蘋葉を齊うし白芷路傍に生ぜり。廬江を過ぎ長薄を左に見、池邊に徙倚し池澤を徑りて行けば、一望ただ渺然として廣し。吾嘗て楚王に從つて狩し、兵車千乘驪馬を駕し、燈を林木に懸け、其光天を焦す。歩する者驟る者止りて獸を圍む者あり。吾れ之を誘導して先驅し、馳する者を抑へて獵事を順通せしめ、車を引き右に轉じて王と雲夢澤に走り、ここに士卒の先後を校す。王終に矢を發して青兕を獲たり。其後幾星霜を經、今放逐せられて此路を經れば、芳蘭徑を蔽ひ春水漲りて路を沒し、江水深くして其上ただ楓樹あり。一望千里坐に人をして心を傷ましむ。魂よ歸り來れ江南眞に哀むべきなり。

【一四】湛湛。水深き貌。

(一)招隱士　劉安

桂樹山の幽に叢生し、(二)偃蹇連卷として枝相繚る。山氣(三)巃嵸として石嵯峨たり。谿谷(四)嶄巖として水曾り波たつ。(五)猨狖羣り嘯き虎豹嗥

【一】招隱士。屈原を招く意を寓せるなり。

【二】偃蹇連卷。屈曲する貌。

【三】巃嵸。山氣のかさなる貌。嵯峨は高き貌。

【四】嶄巖。險峻の貌。

【五】猨狖。猿の類。

ゆ。桂枝を攀援して聊か(六)淹留す。(七)王孫游びて歸らず。春草生じて萋萋たり。歳暮自ら聊んぜず。(八)蟪蛄鳴いて啾啾たり。(九)坱たり軋たり山曲(一〇)岪たり。心淹留して(一一)洞として荒忽たり。(一二)罔たり沕たり。(一三)憭たり慄たり。虎豹(一四)穴す。叢薄深林人上り慄る。(一五)嶔崟碕礒として硱磈磳硊たり。(一六)樹輪相糺ひて林木(一七)茷骫たり。(一八)青莎雜り樹ち薠草(一九)靃靡たり。白鹿(二〇)麏麚あり或は騰り或は倚る。狀貌(二一)崟崟として峨峨たり。(二二)凄凄として漇漇たり。獼猴熊羆類を慕ひて以て悲む。桂枝を攀援して聊か淹留す。虎豹闘ひて熊羆咆え、禽獸駭いて其曹を亡ふ。王孫歸り來れ、山中は以て久しく留るべからず。

【大意】山中幽深險阻にして虎豹猿猴常に咆哮す。君子（屈原を指す）ここに居り他に倚るべきなく、ただ桂樹の芳潔なるを慕ひ、其枝に攀援して留滯す。王孫（屈原を指す）の出でて山中に遊びしは、春草萋萋の時なりしが、今既に歳暮に至るも尚ほ歸らず。ただ山中に在りて寒蟬の

【六】淹留。滯留なり。
【七】王孫。屈原は楚王と同姓たり、故に王孫と稱す。
【八】蟪蛄。秋蟬なり。
【九】坱軋。山巖巨大にして相切磨する貌。
【一〇】岪。山巖相拂戾すること。
【一一】洞。憂ふる貌。荒忽は恍惚なり。
【一二】罔。志を失ふ貌。沕は心の潛藏する貌。
【一三】憭慄。畏懼する貌。

【一四】穴。穴に棲むこと。
【一五】嶔崟。以下皆山石の貌。
【一六】樹輪。樹枝盤屈して車輪の如きなり。
【一七】茷骫。屈曲すること。
【一八】青莎。草の名。
【一九】靃靡。柔弱の貌。
【二〇】麏麚。鹿の類。
【二一】崟崟峨峨。頭角高き貌。
【二二】凄凄漇漇。毛の潤ふが如きなり。

悲鳴を聞き、其心に猶ほ歸るを肯んぜず。毎に虎豹の害を懼る。今や虎豹鬪ひ熊羆吼え、鳥獸すら驚き走りて羣を失ふ。山中には久しく居るべからず。王孫宜しく早く歸るべし。

七　上

(一)七發八首　(二)枚　叔

楚の太子疾あり。吳客往きて之を問ひて曰く、伏して聞く太子玉體安からずと。亦少しく間えたりやと。太子曰く憊れたり。謹んで客に謝すと。客因りて稱して曰く、今の時天下安寧、(三)四宇和平にして、太子方に年に富めり。意ふに久しく安樂に耽り日夜極りなく、邪氣襲逆して中(四)結轖の若く、(五)紛屯澹淡として(六)噓唏煩醒し、(七)惕惕怵怵として臥して瞑るを得ず。(八)虛中重聽して人聲を聞くを惡み、精神(九)越渫して百病咸く生じ、(一〇)聰明眩曜して悅怒平ならず。久しく執りて廢せずんば(一一)大命乃ち傾かん。太子豈是れあ

【一】七發。七事を說きて太子を啓發するなり、猶ほ楚辭七諫の流の如し。
【二】枚叔。枚乘、字は叔、漢の淮陰の人なり、初め吳王濞の郎中令となる、吳王反す、乘諫むれども從はず、乃ち梁の孝王に事ふ。孝王薨ぜし後入りて武帝に仕ふ。
【三】四宇。四方といふが如し。
【四】結轖。氣結の病をいふ。
【五】紛屯澹淡。混亂の貌。
【六】噓唏。哀歎なり。煩醒は酒に病むが如きなり。
【七】惕惕怵怵。驚く貌。
【八】虛中。精氣の竭くること。重聽は耳の遠きこと。
【九】越渫。散發なり。
【一〇】聰明。耳目なり。眩曜は

りやと。太子曰く謹んで客に謝す。君の力に賴り時時之れあり。然れども未だ是に至らざるなりと。

目のくるめくこと。

【一一】大命。壽命なり。

【大意】此篇の大意は聲色遊觀の娯むべきは要言妙道の聽くべきに如かずといふに在り。楚の太子の病むや、呉客往きて其病を問ひ、且つ曰く今天下太平にして太子年方に盛なり。意ふに日夜歡樂に耽りし爲邪氣の襲ふ所となり、心氣結んで解けず、夜安眠する能はず、精神衰耗して喜怒常ならざるに至りしならん。久しく癒えずんば、之が爲に命を殞さん。太子の病既にここに至れるかと。太子曰く我が君の力に賴り、天下太平なるを以て、久しく安樂に耽り、時に此疾あれども、未だ足下の言の如く甚しきに至らずと。

客曰く今夫れ貴人の子は必ず宮居して（一二）閨處す。内に保母あり外に傅父あり。交らんと欲する所なし。飮食は則ち溫淳（一三）甘膬、（一四）脭醲肥厚なり。衣裳は則ち（一五）雜遝曼煖、（一六）燂爍熱著なり。金石の堅きありと雖も猶ほ將に（一七）銷鑠して挺解せんとす。況んや其の筋骨の間に在るを

【一二】閨處。深閨の中に居ること。

【一三】甘膬。甘美なり。

【一四】脭醲。脭は精肉、醲は厚味なり。

【一五】雜遝。複雜なり。曼は輕細なり。

【一六】燂爍。煖なり。

【一七】銷鑠。消散なり。挺は動なり。

や。故に曰く、耳目の欲を縱にし（一八）支體の安きを恣にする者は、血脈の和を傷ると。且つ夫れ出づるに輿し入るに輦す。命けて（一九）蹷痿の機といふ。（二〇）洞房淸宮、命けて寒熱の媒といふ。（二一）皓齒蛾眉、命けて伐性の斧といふ。甘脆肥醲、命けて腐腸の藥といふ。今太子膚色（二二）靡曼し（二三）四支委隨し、筋骨挺解し血脈（二四）淫濯し、手足（二五）惰窳するは、（二六）越女前に侍り（二七）齊姫後に奉へ、往來游讌して、（二八）曲房隱間の中に縱恣すればなり。此れ毒藥を甘餐し、猛獸の爪牙に戲るるなり。從つて來る所の者至つて深遠なり。淹滯永久にして廢せずんば、（二九）扁鵲をして內を治め（三〇）巫咸をして外を治めしむと雖も、尚ほ何ぞ及ばんや。今太子の病の如きは、獨り宜しく世の君子、博見彊識、間を承けて事を語り、度を變じて意を易へ、常に側を離るるなく、以て（三一）羽翼をなすべし。淹沈の樂、（三二）浩唐の心、（三三）遁佚の志、其れ奚に由りてか至らんやと。太子曰く諾、病已えば請ふ此言を事とせんと。

【一八】支體。肢體なり。
【一九】蹷痿。足行くこと能はざる病。
【二〇】洞房。深閨なり。
【二一】皓齒。白き齒。蛾眉は美しき眉。美人の稱。
【二二】靡曼。細美なり。
【二三】四支。四肢なり、手足をいふ。委隨は屈伸する能はざるなり。

【二四】淫濯。過度に大なること。
【二五】惰窳。力なきこと。
【二六】越女。越國の美女。
【二七】齊姫。齊國の美女。
【二八】曲房隱間。深閨なり。
【二九】扁鵲。古の名醫なり。
【三〇】巫咸。祈禱者の名。
【三一】羽翼。補佐なり。
【三二】浩唐。浩蕩なり。
【三三】遁佚。過度なり。

【大意】客曰く、貴人は常に深閨の中に居り、左右に傅母あり、廣く交遊して自ら放にせんと欲するも自由ならず。飲食は濃厚にして、衣服は複雜なり。故に金石の堅きも、尙ほ之を消弊し盡すべし。況んや人の筋骨をや。且つ出入に輿車に乘る。此れ蹷痿の機なり。深閨は寒熱病の養成所なり。美女は性命を伐るの斧なり。濃厚の食は腸を腐らすの藥なり。今太子の肌膚虛弱にして四肢力なく、血脈昂奮するは、美女往來遊宴して嗜慾を深閨の中に恣にすればなり。是れ實に毒藥を甘しとし、猛獸の爪牙に戲るる者といふべし。久しく之を續くれば、如何なる名醫祈禱者と雖も、此病を除くべからざるに至らん。宜しく博識の君子を左右に置きて、補佐せしむべし。然らば、耽溺の樂、放蕩の心、過淫の志を起さざるに至らんと。太子曰く吾が病癒えなば、必ず足下の言に從はんと。（以上第一章）

客曰く、今太子の病は藥石（三四）針刺灸療して已ゆるなかるべし。要言妙道を以て說いて去るべきなり。之を聞くを欲せざるかと。太子曰く僕願くは之を聞かんと。客曰く、（三五）龍門の桐高さ百尺にして枝なし。中鬱結して（三六）輪菌たり。根（三七）扶疏として以て分離せり。上に千仞の峯あり下百丈の谿に臨み、湍流（三八）遡波又之を澹淡し、其根半死し半生く。冬は則ち烈風漂霰飛雪の激する所なり。夏は則ち雷

【三四】針刺。針治なり。灸療は灸を燒きて治療すること。
【三五】龍門。山の名。
【三六】輪菌。文理委曲の貌。
【三七】扶疏。四方に布くこと。
【三八】遡波。逆流の波。澹淡は搖蕩なり。

霆霹靂の感ずる所なり。朝には則ち（三九）鸝黄鳱鴠鳴き、暮には則ち（四〇）羇雌迷鳥宿る。獨鵠晨に其上に號び（四一）鵾雞哀鳴して其下に翔る。是に於て秋に背き冬に涉り、（四二）琴摯をして斫斬して以て琴を爲らしめ、（四三）野繭の絲以て絃となし、（四四）孤子の鉤以て隱となし、（四五）九寡の珥以て約となし、（四六）師堂をして操暢し、（四七）伯子牙をして之が爲に歌はしむ。歌に曰く、麥秀でて（四八）漸たり雉朝に飛ぶ。虛壑に向ひ（四九）槁槐に背き、（五〇）絕區に依り廻溪に臨む。飛鳥之を聞き翼を翕めて去る能はず。野獸之を聞き耳を垂れて行く能はず。（五一）蚑蟜螻蟻も之を聞き喙を柱へて前む能はず。此れ亦天下の至悲なり。太子能く彊めて起きて之を聽かんかと。太子曰く僕病んで未だ能はざるなりと。

【三九】鸝黄鳱鴠。鳥の名。
【四〇】羇雌。孤鳥なり。
【四一】鵾雞。鳥の名。
【四二】琴摯。師摯なり、琴の名手。斫斬は斬ること。
【四三】野繭。野蠶の繭。
【四四】孤子の鉤。鉤は帶鉤なり、古樂府に孤子生行あり。隱は琴上の飾。悲聲多からしめんが爲に孤子の帶鉤を取りて飾となすなり。
【四五】九寡の珥。列女傳に九子の寡母あり。珥はミミダマ。約は的なり、琴徽なり。
【四六】師堂。古の琴を善くする者。
【四七】伯子牙。一本に子の字なし。古の琴の名手。
【四八】漸。麥芒の貌。
【四九】槁槐。枯れたる槐。
【五〇】絕區。危絕の地。
【五一】蚑蟜螻蟻。小蟲の名。

【大意】客曰く太子の病は藥石針灸の能く癒やす所にあらず。ただ要言妙道を說きて、之を癒やすべきのみ。太子之を聞くを欲するかと。太子曰く願くは之を聞かんと。客徐に曰く龍門山に桐樹あり、木理盤屈して根四方に張り、湍水之を搖蕩し、其根半枯れ半生く。更に烈風飛雪、雷霆霹

靂の觸犯する所となり、悲鳥其上下に鳴く。秋冬の候に至り、師摯をして之を斬りて琴を作らしめ、孤子の鉤、九寡の珥を以て飾となし、師堂伯牙をして之を彈じて歌はしむれば、其聲極めて悲哀にして、鳥獸も之を聞きて沈吟す。太子病を强めて起き此の妙音を聞くを欲せざるかと。太子曰く吾れ病みて未だ能はざるなりと。（以上第二章）

客曰く　(五二)犓牛の腴、菜するに　(五三)筍蒲を以てし、肥狗の　(五四)和、冒ふに　(五五)山膚を以てし、(五六)楚苗の食、(五七)安胡の飯、之を摶するに解けず、一啜して散ず。是に於て　(五八)伊尹をして煎熬し、(五九)易牙をして調和せしむ。(六〇)熊蹯の臑、(六一)勺藥の醬、(六二)薄耆の炙、鮮鯉の鱠、(六三)秋黃の蘇、白露の　(六四)茹、蘭英の酒、酌んで以て口を滌ぎ、(六五)山梁の餐、豢豹の胎、小しく飯し大に歠み、湯の雪に沃ぐが如し。此れ亦天下の至美なり。太子能く彊め起きて之を嘗めんかと。太子曰く僕病んで未だ能はざるなりと。

【五二】犓牛。芻を以て養ひし牛。腴は腹下の肉。
【五三】筍蒲。菜の名。詩經に「維れ筍及び蒲」とあり。
【五四】和。和羹なり、料理の名。
【五五】山膚。註に未詳とあり、察するに菜の名なり。
【五六】楚苗。楚の苗山の粳稻。
【五七】安胡。彫胡。草實の名。
【五八】伊尹。料理人として湯に仕へし人。煎熬は料理すること。
【五九】易牙。齊の桓公の料理人。
【六〇】熊蹯。熊の掌。美味を以て名あり。臑は煮ること。
【六一】勺藥。鹹酸美味を調和せし物。
【六二】薄耆。獸の脊肉。
【六三】秋黃。秋になりて色づくこと。蘇は菜の名。
【六四】茹。菜の名。
【六五】山梁。雉なり。論語に「山梁の雌雉、時なる哉時なる哉」とあり。

【大意】客曰く肥牛の肉に和するに筍蒲の菜を以てし、狗肉に和するに山膚を以てし、楚地の粳稻を以て食となし、彫胡を以て飯となし、之を摶べども解けず、一嘗すれば忽ち散ず。其の黏りて滑なること知るべし。更に伊尹、易牙をして調理せしめ、熊掌を煮て勺藥の醬を和し、脊肉を炙り鮮鯉を鱠とし、蘭香の酒を以て口を漱ぎ、又雌雉の餐、豹胎の饗あり。飲啜し易きこと湯の雪に沃ぐが如し。此れ亦天下の美食なり。太子起きて之を食はんと欲するかと。太子曰く僕病んで未だ能はざるなりと。（以上第三章）

客曰く、(六六)鍾岱の牡、(六七)齒至の車、前は飛鳥に似、後は(六八)駏虛に類し、(六九)穱麥服處し、中に躁がしく外に煩じく、堅轡を羈して(七〇)易路に附く。是に於て(七一)伯樂其前を相、(七二)王良造父之が御となり、(七三)秦缺、樓季之が右となる。此の兩人は馬佚すれば能く之を止め、車覆へれば能く之を起す。是に於て(七四)千鎰の重きを射、千里の逐を爭はしむ。此れ亦天下の至駿なり。太子能く彊め起きて之に乘らんかと。太子曰く僕病んで未だ能はざるなりと。

【六六】鍾岱。地名、馬の產地なり。牡は馬なり。
【六七】齒至。齒至馬を以て車に駕するなり。
【六八】駏虛。善く走る獸の名。
【六九】穱麥。燕麥なり。服處は馬を飼ふこと。
【七〇】易路。平坦なる道。
【七一】伯樂。善く馬を相する人。
【七二】王良、造父。善く馬を御する人。
【七三】秦缺、樓季。善く走る人、右は車右なり。
【七四】千鎰。一鎰は二十四兩。射は賭なり。

【大意】客曰く駿馬を以て輕車に駕し、其疾きこと鳥獸の如し。燕麥を以て此馬を飼ふを以て、馬肥えて力強し。況んや伯樂之を相し王良造父之を御し、秦缺樓季之が車右となるをや。乃ち千鎰の金を賭けて千里の道を馳逐す。此れ亦天下の至駿なり。太子之に乘らんことを願ふかと。太子曰く僕病んで未だ能はざるなりと。（以上第四章）

客曰く、既に（七五）景夷の臺に登り、南のかた（七六）荊山を望み、北のかた（七七）汝海を望み、江を左にし湖を右にす。其樂有ることなし。是に於て博辯の士をして山川を原ね本け、草木を極め命け、物を比し事を屬し、辭を離ち類を連ねしめ、浮游覽觀し乃ち下りて（七八）虞懷の宮に置酒す。連廊四に注り臺城層ね構へ、（七九）紛紜たる玄綠、輦道邪に交り（八〇）黃池紆曲し、（八一）溷章白鷺、孔鳥鶤鵠、鵷雛鵁鶄、（八二）翠鬣紫纓、（八三）螭龍德牧、（八四）邕邕として羣鳴し、陽魚騰躍し、翼を奮ひ鱗を振ひ、（八五）漃漻たる蔞蓼、蔓草（八六）芳苓あり。（八七）女桑河柳、素葉紫莖あり。（八八）苗松豫章條上りて天に造り、梧桐（八九）幷閭極め望むに林を成せり。衆芳芬鬱として五

【七五】景夷。臺の名。
【七六】荊山。山の名
【七七】汝海。汝は川の名。
【七八】虞懷。宮の名。
【七九】紛紜。盛なる貌。玄綠は黑色綠色なり。
【八〇】黃池。黃は湟に作るべし城池なり。
【八一】溷章。以下皆鳥の名。
【八二】翠鬣。綠の首毛。紫纓は紫の頸毛。
【八三】螭龍德牧。鳥の形なり。
【八四】邕邕。和鳴の貌。
【八五】漃漻。草の水中に在る貌。蔞蓼は水草の名。
【八六】芳苓。苓は蓮の古字。
【八七】女桑河柳。木の名。素葉は白き葉。
【八八】苗松。苗山の松。豫章は木の名。

風より亂れ、從容（九〇）猗靡として（九一）消息陽陰す。列坐縱酒して樂を蕩し心を娛ましめ、（九二）景春酒を佐け（九三）杜連音を理し、滋味雜陳して肴（九四）糅錯して該り、練色目を娛ましめ流聲耳を悅ばす。是に於て乃ち（九五）激楚の結風を發し、鄭衞の（九六）皓樂を揚げ、（九七）先施、徵舒、陽文、段干、吳娃、閭娵、傅予の徒をして、裾を雜へ髾を垂れ、目窕み心與へ、流波を揄き（九八）杜若を雜へ、淸塵を蒙り（九九）蘭澤を被り、（一〇〇）嬿服して御せしむ。此れ亦天下の（一〇一）靡麗皓侈廣博の樂なり。太子能く彊め起きて游ばんかと。太子曰く、僕病んで未だ能はざるなりと。

【八九】幷閭。木の名。
【九〇】猗靡。風に隨ふ貌。
【九一】消息陽陰。陰と共に滅し陽と共に生ず。
【九二】景春。人名なり。
【九三】杜連。人名なり。
【九四】糅錯。相交ること。
【九五】激楚。激越なり。結風は急風。
【九六】皓樂。善倡なり。
【九七】先施。以下皆美女の名。
【九八】杜若。香草の名。
【九九】蘭澤。蘭香を以て煉りし膏。
【一〇〇】嬿服。美服なり。御は侍なり。
【一〇一】靡麗。美麗なり。

【大意】客曰く景夷の臺に登りて山川を望めば、其樂天下復た比すべきものなし。乃ち博學辯辭の士をして山川を陳說し、草木を命名し、文辭を作らしめ、乃ち下りて虞懷宮に宴す。此宮たる連廊四方に通じ、臺城高く構へ、黑綠の色相交り、池には羣鳥和鳴し游魚鱗を振ひ、其側には草木林を成し、芳氣風に漂ふ。列坐して酒を縱にすれば佳肴席に滿ち美樂耳を悅ばし、美女其間を

周旋し、目挑み心許し、目光流波の如く、衣香杜若の如し。此れ亦天下の至樂なり。太子之を樂しまんことを欲するかと。太子曰く僕病んで未だ能はざるなりと。（以上第五章）

客曰く將た太子の爲に（一〇二）騏驥の馬を馴し、（一〇三）飛軨の輿に駕し、牡駿の乘に乘り、（一〇四）夏服の勁箭を右にし、（一〇五）烏號の雕弓を左にし、（一〇六）雲林に游涉し蘭澤に周馳し、（一〇七）節を江潯に弭め、靑蘋に掩はれ淸風に遊び、陽氣を陶べ春心を蕩し、狡獸を逐ひ輕禽を集め、是に於て犬馬の才を極め、野獸の足を困め、（一〇八）相御の智巧を窮め、虎豹を恐し（一〇九）鷙鳥を慴らし、逐馬鑣を鳴らし、魚に跨り麋を角とり、麕兎を履游し麖鹿を蹈踐し、汗流れ沫墜ち、（一一〇）宛伏陵窘し、創なくして死する者、固に（一一一）後乘に充つるに足る。此れ（一一二）校獵の至壯なり。太子能く彊め起きて游ばんかと。太子曰く僕病んで未だ能はざるなりと。然れども（一一三）陽氣眉宇の間に見え、（一一四）侵淫して上り、幾んど（一一五）大宅に滿てり。

【大意】客曰く、又太子の爲に駿馬を以て輕車に駕し、弓箭を執りて山澤に馳驅し、鳥獸を狩獵せ

【一〇二】騏驥。駿馬なり。
【一〇三】飛軨。輕輿なり。
【一〇四】夏服。箭の名。
【一〇五】烏號。弓の名。
【一〇六】雲林、雲夢の林。
【一〇七】節を弭む、徐行すること。江潯は江畔なり。
【一〇八】相御。馬を相する者、馬を御する者。
【一〇九】鷙鳥。猛鳥なり。
【一一〇】宛伏。屈伏なり。陵窘は侵迫なり。
【一一一】後乘。後車なり。
【一一二】校獵。狩獵なり。
【一一三】陽氣。喜色なり。
【一一四】侵淫。漸進なり。
【一一五】大宅。面をいふ。

んか。麕兎麖鹿皆汗流れ沫落ち創を被らずして死する者車に滿たん。此れ狩獵の樂なり。太子之を樂まんことを欲するかと。太子曰く僕病んで未だ能はざるなりと。然れども喜色面に溢れて、此を樂まんことを欲するものの如し。

客太子の悅色あるを見るや、遂に推して之を進めて曰く、(二六)冥火天に薄り兵車雷のごとく運り、旌旗(二七)偃蹇、(二八)羽旄肅紛として、馳騁角逐して味を慕ひ先を爭ひ、(二九)徼墨廣博にして之を觀望するに圻あり。純粹の全犧は之を公門に獻ぜんと。太子曰く善し、願くは復た之を聞かんと。客曰く未だ既さず。是に於て(三〇)榛林深澤、煙雲(三一)闇莫として兕虎竝び作り、毅武(三二)孔猛袒裼自づから薄り白刃(三三)磑磑として矛戟交錯し、獲を收め功を掌りて金帛を賞賜し、蘋に掩はれ(三四)若を肆ねて牧人の席となし、旨酒嘉肴、(三五)羞炰膾炙以て賓客に御む。涌觸竝び起り心を動かし耳を驚かし、誠ありて必ず悔いず、決絶して以て諾す。貞信の色金石に形れ、高歌陳唱萬歲斁ふなし。此れ眞に太子の喜ぶ所なり。能く彊め起きて游ばんかと。太子曰く僕甚だ從はんことを願ふ。直恐らくは諸大夫の累とならんのみと。然れども起きんとする色あり。

【二六】冥火。遠火なり。
【二七】偃蹇。高き貌。
【二八】羽旄。指揮旗なり。
【二九】徼墨。燒田たり。
【三〇】榛林。叢林なり。
【三一】闇莫。不明の貌。
【三二】孔猛。甚しき猛者。袒裼はハダヌキになること。
【三三】磑磑。一本に皚皚に作る白き貌。
【三四】若。杜若なり、香草の名。
【三五】羞炰膾炙。種種の料理。

【大意】客太子の喜色あるを見て、更に語を進めて曰く、既にして遠火天に迫り兵車雷の如く運り、旌旗を飜し羽旄を振ひ、馳驅して先を爭ひ、燒田廣大にして限界あり。獸を獲て色純に體全きものあれば、之を君侯に獻ぜんと。太子乃ち喜びて尙ほ之が詳を聞かんことを願ふ。客更に語を進めて曰く、是に於て叢林雲煙の間に兕虎躍り出づるや、勇者袒裼して之に迫り、白刃を揮ひて之を斃す。乃ち獲を計りて功を賞し、靑蘋杜若の草を陳ねて牧人の席となし、美酒佳肴を供して賓客に進む。歌唱盛に起りて心を動かし耳を驚かし、忠誠之を爲して悔ゆるなく、一諾して再三するを俟たず。貞信の色金石(樂器)に形れ、萬歲を經るも尙厭はざるなり。其樂かくの如し。太子共に游獵せんことを欲するかと。太子曰く僕固より從遊せんことを願ふ。ただ我が病他人の累となることを慮るのみと。然れども病を彊めて起たんと欲するものの如し。(以上第六章)

客曰く將た八月の（二二六）望を以て、諸侯遠方の交游兄弟と竝に往きて濤を（二二七）廣陵の曲江に觀る。至れば則ち未だ濤の形を見ず、徒水力の到る處を觀るのみ。則ち（二二八）卹然として以て駭くに足れり。其の（二二九）駕軼する所の者、擢拔する所の者、（二三〇）揚汨する所の者、（二三一）溫汾する所の者、（二三二）滌汔する所の者

【二二六】望。十五日をいふ。
【二二七】廣陵。漢書に「廣陵國は吳に屬す」とあり、疑ふらくは浙江を指す、浙江の潮は天下の壯觀なり。
【二二八】卹然。驚恐の貌。
【二二九】駕軼。凌突なり。
【二三〇】揚汨。汨は亂なり。
【二三一】溫汾。回轉なり。
【二三二】滌汔。洗蕩なり。

を觀れば、心に略り辭に給するありと雖も、固に未だ其の由りて然る所を(一三三)縷形する能はず。(一三四)恍たり忽たり聊たり慓たり。混れて汨汨たり。(一三五)忽たり慌たり俶たり儻たり。浩として瀇瀁たり。慌として曠曠たり。意を南山に秉り望を東海に通じ、蒼天に(一三六)虹洞として慮を崖涘に極め、(一三七)流攬して窮なく神を(一三八)日母に歸す。(一三九)汩として流に乘じて下降し、或は其の止る所を知らず。或は(一四〇)紛紜として其流折れ、忽ち(一四一)繆往して來らず。(一四二)朱汜に臨んで遠く逝き、中虛しく煩ひて益ゝ怠り、離散するなくして(一四三)曙に發し、內心を存して自ら持す。是に於て胸中を(一四四)澡槩し(一四五)五藏を灑練し、手足を(一四六)澹澉し、髮齒を(一四七)頹濯し、恬怠を揄弃し、(一四八)洪濁を輸寫し、狐疑を分決し、耳目を(一四九)發皇す。是の時に當りては、(一五〇)淹病滯疾ありと雖も、猶ほ將に傴を伸べ躄を起し、瞽を發き聾を披いて之を觀望せんとす。況んや直に(一五一)眇小煩懣、醲に酲し酒に病むの徒をや。故に曰く蒙を發き惑を解くは、以て言

【一三三】縷形。詳細に形容すること。
【一三四】恍忽聊慓。驚狂戰懼の貌。
【一三五】忽慌、俶儻、瀇瀁、曠曠。幽深卓異廣大含虛にして平に行く貌。
【一三六】虹洞。相連る貌。
【一三七】流攬。周流すること。
【一三八】日母。日の出づる所。
【一三九】汩。疾き貌。
【一四〇】紛紜。混亂すること。
【一四一】繆往。錯行なり。
【一四二】朱汜。地名なり。
【一四三】曙に發す。曉に至るなり。
【一四四】澡槩。洗滌なり。
【一四五】五藏。五臟なり。
【一四六】澹澉。洗滌なり。
【一四七】頹濯。洗滌なり。
【一四八】洪濁。垢穢なり。輸寫は除くこと。
【一四九】發皇。發明なり。
【一五〇】淹病滯疾。久病なり。
【一五一】眇小煩懣。少しの煩悶。

ふこ足らざるなりと。太子曰く善し。然らば則ち濤は何の氣ぞやと。

【大意】客曰く、中秋明月の夜、交游兄弟相伴ひて浙江の潮を觀んか、始め未だ濤の形を見ず、ただ水力の到るを見るも、尚ほ驚恐するに足る。後その拂亂突起回轉するに至りては、心計に長じ文辭に巧なる者と雖も、一一其形を名狀すべからず。其の勢幽深卓異廣大含虛にして、濤の意を乘ること將に南山を淩いで東海と相望まんとし、天と連りて崖涘を極めんとするが如し。周流して窮らず。日の出づる所に至り、或は降り下りて止る所を知らず。或は曲折錯繆して返らず。觀る者をして中心虛煩して疲怠を增し、離散する能はずして天明に至らしむ。是に於て憂悶を一掃し耳目を一洗するを得、久病の人と雖も、傴れるを伸べ躄へるを起し、盲せるを開き聾せるを披いて之を望觀せんと欲す。況んや酒に中れるが如き者をや。其の精神を爽快ならしむること言ふべからずと。太子曰く甚だ善し。抑ゝ濤とは何の氣ぞやと。

客曰く記せざる也。然れども師に聞けり。曰く神に似て非なる者三、疾雷のごとく百里に聞え、江水逆流して海水潮を上げ、山のごとく雲を(一五二)出內して日夜止まず。(一五三)衍溢漂疾して波涌いて濤起る。其の始め起るや(一五四)洪淋淋焉として白鷺の下り翔るが若く、其の少しく進むや(一五五)浩浩溰溰として素車白馬

【一五二】出內。出納に同じ。
【一五三】衍溢。あふるること。漂疾は急に流るること。
【一五四】洪淋淋焉。波の聲。
【一五五】浩浩。深廣の貌。溰溰は高白の貌。

帷蓋の張れるが如く、其の波涌いて雲のごとく亂るるや、(一五六)擾擾焉として三軍の騰裝するが如く、其の旁作りて奔起するや、飄飄焉として輕車の(一五七)兵を勒し蛟龍を(一五八)六駕し(一五九)太白を附從するが如く、純ら(一六〇)浩蜺を馳せ前後駱驛たり。(一六一)顒顒卬卬、(一六二)椐椐彊彊、(一六三)莘莘將將として、壁壘重堅、沓雜して軍行に似たり。(一六四)訇隱匈礚、(一六五)軋盤涌裔して原ぬるに當るべからず。其の兩傍を觀れば則ち(一六六)滂渤怫鬱、(一六七)闇漠感突として上擊(一六八)下律し、勇壯の卒に似たるあり。突怒して畏るるなく、壁を蹈み津を衝き、曲を窮め隈に隨ひ、岸を踰え(一六九)追を出で、遇ふ者は死し當る者は壞る。初め(一七〇)或圍の津涯を發し、(一七一)荄のごとく軫り谷のごとく分れ、(一七二)青篾を廻翔し、枚を(一七三)檀桓に銜み、(一七四)節を伍子の山に弭め、(一七五)厲を骨母の場に通じ、(一七六)赤岸を凌ぎ扶桑を篲ひ、横に奔りて雷の行くに似たり。誠に厥武を奮ひ、振ふが如く怒るが如く、(一七七)沌沌渾渾として狀奔馬の如く、(一七八)混混庉庉として聲雷鼓の如く、怒

【一五六】擾擾焉。亂るる貌。
【一五七】兵を勒し。兵を習ふなり。
【一五八】六駕。六龍を駕するなり。
【一五九】太白。河伯なり。
【一六〇】浩蜺。虹なり。
【一六一】顒顒卬卬　波の高き貌。
【一六二】椐椐彊彊。相隨ふ貌。
【一六三】莘莘將將。相激する貌。

【一六四】訇隱匈礚。大聲なり。
【一六五】軋盤涌裔。沸騰なり。
【一六六】滂渤怫鬱。怒激する貌。
【一六七】闇漠感突。衝起する貌。感は惑の誤。
【一六八】下律。律は硉に作るべし轉下すること。
【一六九】追。堆なり。

【一七〇】或圍。津の名。
【一七一】荄。隴なり。
【一七二】青篾。地名。
【一七三】檀桓。地名。
【一七四】節を弭む。徐行すること。伍子の山とは伍子胥を葬りし山卽ち胥山。
【一七五】厲を通ず。高處に上るこ

を發して(一七九)座沓し、清く升りて(一八〇)踰跇し、(一八一)侯波奮振して藉藉の口に合戰す。鳥も飛ぶに及ばず、魚も廻るに及ばず、獸も走るに及ばず。(一八二)紛紛翼翼として波のごとく涌き雲のごとく亂れ、南山を蕩取し、北岸を背撃し、丘陵を覆虧し、西畔を平夷し、(一八三)險險戲戲として陂池を崩壞し、勝を決して乃ち罷む。(一八四)瀄汩潺湲として披揚流灑し、横暴の極、魚鼈勢を失ひ顚倒偃側し、(一八五)沈沈湲湲として(一八六)蒲伏連延し、神物の怪疑勝げて言ふべらず。直人をして(一八七)踣焉として(一八八)洄闇悽愴せしむ。此れ天下の怪異詭觀なり。太子能く彊め起きて之を觀んかと。太子曰く僕病んで未だ能はざるなりと。

【大意】客曰く、吾よく之を知らず。然れども嘗て師に聞けるに、曰く、濤勢神に似て非なる者三あり。聲疾雷の如く千里に聞ゆるは一なり。江水逆流し海水潮を上ぐるは二なり。山の如く雲を出納し、日夜止まざるは三なり。其の始めて起るや、其形白鷺の翔るが如く、其の少しく進むや、素車白馬の帷を張りて走るが如く、其の涌き且つ亂るるや、三軍の奔騰するが如く、其の横出するや、

と。骨母は一に胥母に作る、呉に胥母山あり。
【一七六】赤岸。地名。
【一七七】沌沌渾渾。波の相隨ふ貌。
【一七八】混混庉庉。波浪の聲なり。
【一七九】座沓。礙止して合ふこと。
【一八〇】踰跇。超踰なり。
【一八一】侯波。大波なり。藉藉は地名。
【一八二】紛紛翼翼。交錯する貌。
【一八三】險險戲戲。危き貌。
【一八四】瀄汩。鼓動する貌。潺湲は流るる貌。
【一八五】沈沈湲湲。轉倒する貌。
【一八六】蒲伏。匍匐なり。
【一八七】踣焉。たふるる貌。
【一八八】洄闇。深くして明ならざる貌。

輕車に六龍を駕し、太白を從へて馳するが如く、其の形勢を原ぬるに、盛にして當るべからず。其の兩邊を觀れば、激怒衝起して勇壯の卒の如く、遇ふ者は皆死し、當る者は皆壞る。初めは或圍の津涯より起り、靑篾、檀桓を過ぎ、胥山と骨母山とを過ぎ、赤岸、扶桑を經て、奔勢雷の行くが如く、憤を發して馳騰すること奔馬の如く、其の急激なること、鳥も飛ぶに及ばず、獸も走るに及ばず、南北西の三面に折れ、衝激する所の者勝を決せざるはなし。其の怪奇なること、一一名狀すべからず。太子之を觀んことを欲するかと。太子曰く僕病んで未だ能はざるなりと。(以上第七章)

客曰く、將た太子の爲に方術の士の(一八九)資略ある者、莊周、魏牟、楊朱、墨翟、便蜎、詹何の倫の若きを奏めん。之をして天下の精微を論じ、萬物の是非を理め、孔老をして覽觀し、孟子をして之を籌らしめば、萬に一を失はじ。此れ亦天下の要言妙道なり。太子豈之を聞かんことを欲するかと。是に於て太子几に據りて起きて曰く、(一九〇)渙乎として一に聖人辯士の言を聽くが若く、(一九一)涊然として汗出で、(一九二)霍然として病已えぬと。

【大意】客曰く、又太子の爲に才智の士を進め、之をして天下萬物の精理を論せしめ、孔老孟子をして之を度らしめん。此れ天下の要言妙道にして萬に一失なし。太子之を聞かんことを願ふかと。

【一八九】資略。才智なり。
【一九〇】渙乎。明なる貌。
【一九一】涊然。汗出づる貌。
【一九二】霍然。忽然といふが如し。

太子乃ち起きて曰く、聖人辯士の言を聽けるが如く、我が病忽ち癒えぬと。(以上第八章)

(一)七啓八首　曹子建

昔枚乘は七發を作り、傅毅は七激を作り、張衡は七辯を作り、崔駰は七依を作る。辭各美麗なり。余之を慕ふあり。遂に七啓を作り、幷せて王粲に命じて作らしむ。

玄微子(二)大荒の庭に隱居し、(三)飛遯して俗を離れ、神を澄まし靈を定め、祿を輕んじ貴に傲り、物と營むなく、虛に耽り靜を好み、此の永生を羨み、獨り思を天雲の際に馳せ、物象の能く傾くるなし。是に於て(四)鏡機子聞いて將に往いて說んとし、(五)超野の駟に駕し追風の輿に乘り、(六)逈漠を經幽墟を出で、(七)泱漭の野に入り、遂に玄微子の居る所に屆る。其居や激水を左にし、(八)高岑を右にし、洞溪に背き芳林に對す。皮弁を冠り文裘を被り、山岫の(九)潛穴を出で、峻崖に倚りて嬉游し、志(一〇)飄飄焉たり(一一)嶢嶢焉たり。六合を狹しとして九州を隘とするが若きに似たり。將に飛ばんとして未だ逝かざるが若く、翼を擧て中ごろ留るが若し。是に於て鏡機子葛藟を攀ぢて登り、巖に距りて立ち、風に順ひて稱

【一】七啓。啓は發なり。
【二】大荒。日月の入る所の地。
【三】飛遯。遯世なり。
【四】鏡機子。鏡は照、機は微。假設の人名。
【五】超野、追風。疾きを言ふ。
【六】逈漠・幽墟。皆遠方の地。
【七】泱漭。廣大なり。
【八】高岑。高峯なり。
【九】潛穴。深穴なり。
【一〇】飄飄焉。遠き貌。
【一一】嶢嶢焉。高き貌。

して曰く、予聞く君子は俗を遯れて名を遺てず、智士は世を背いて勳を滅せずと。今（一二）吾子道藝の華を弃て、仁義の英を遺て、精神を（一三）虚廓に耗し、人事の（一四）紀經を廢す。譬へば形を無象に畫き、響を無聲に造すが若し。未だ之を思はざるか。何ぞ規る所の通せざると。玄微子俯して之に應へて曰く、嘻この言あるか。夫れ太極の初、渾沌未だ分れず。萬物紛錯して道と倶に隆なり。蓋し形あれば必ず朽ち、跡あれば必ず窮る。（一五）芒芒たる元氣誰か其終を知らん。名は我身を穢し、位は我躬を累はす。竊に古人の志す所を慕ひ、老莊の遺風を仰ぎ、（一六）靈龜を假りて以て喩を託し、寧ろ尾を塗中に掉さんと。鏡機子曰く、夫れ辯言の豔なる、能く（一七）窮澤をして流を生じ、枯木をして榮を發かしむ。庶はくは靈を感じて神を激せしめん。況んや近く人情に在るをや。僕將に吾子の爲に游觀の至娛を説き、聲色の（一八）妖靡を演じ、變化の至妙を論じ、道德の弘麗を敷べんとす。之を聞かんことを願ふかと。玄微子曰く吾子身を整へ世に倦み、隱を探り沈を拯はんとし、（一九）遐路を遠し

【一二】吾子。玄微子を指して言ふ。

【一三】虚廓。空虚なり。

【一四】紀經。常理なり。

【一五】芒芒。廣大の貌。元氣は太極。

【一六】靈龜。莊子に「楚王大夫をして、往きて莊子を聘せしむ、莊子曰く吾聞く楚に神龜あり、死して已に三千歲。王之を廟堂の上に藏すと、此龜や寧ろ死して骨を留めて貴ばるるをなさんか、寧ろ生きて尾を塗中に曳かんかと、大夫曰く寧ろ生きて尾を塗中に曳かんと、莊子曰く往け吾將に尾を塗中に曳かんとすと」とあり。塗は泥なり。

【一七】窮澤。涸澤なり。

【一八】妖靡。美妙なり。

【一九】遐路。遠路なり。

とせず、幸に光臨せらる。將に敬んで耳を滌ぎ以て玉音を聽かんとすと。

【大意】玄微子世に背き俗を離れ、祿爵を貴ばず、物慾を棄て、靜虛の道を樂み、長生の術を脩む。鏡機子之を說破せんとし、玄微子の居に至る。玄微子皮弁を冠り文裘を著て、巖穴の間に逍遙す。其志高遠にして、六合を狹しとするが如く、中空に飄飄たるが如し。鏡機子順風に依りて颺言して曰く、君子は俗を遯れて名を遺てず、智士は世に背いて勳を滅せずと聞けり。今足下道德仁義の英華を棄て、虛無の道に精を耗し、人間の常理を廢す。是れ譬へば形なきに像を畫き、聲なきに響を成さんとするが如しと。玄微子俯して答へて曰く、ああ其れ然るか。夫れ太極の初め、渾沌として元氣未だ分れず、萬物未だ形を成さず。この時道と倶に隆なり。一たび分れて形を成し跡を生ずるに至れば、則ち朽ち則ち盡く。ただ其れ分れず、故に元氣は無始にして無終なるを得。世の名位は我身を穢すに足るのみ。吾が願ふ所にあらず。吾は老莊の遺風を慕ひ、泥中の龜と共に生を全うせんのみと。鏡機子曰く、吾れ足下に豔言を呈し、足下の神靈を感發し、游觀の娛、聲色の美、道德の大を說かんとす。足下之を聞かんことを願ふかと。玄微子曰く、足下我が沈隱を救はんとし、遠路を厭はずして來る。吾謹んで其言を聽かんと。(以上第一章)

鏡機子曰く、(二〇)芳菰精粺、(二一)霜蓄露葵、(二二)玄熊

【二〇】芳菰精粺　菰粺は草の名、其實細米の如し、以て飯とな

の素膚、(二三)肥豢の膿肌、蟬翼の割、纖を剖き微を析ち、累ること穀を疊むが如く、離ること雪を散ずるが若く、輕くして風に隨ひて飛び、刃轉切せず。(二四)山鷄斥鷃、(二五)珠翠の珍、(二六)芳苓の巢龜を寒にし、西海の飛鱗を膾にし、江東の潛鼉を臛にし、漢南の鳴鶉を臇にし、糅ふるに芳酸を以てし、甘和既に醇し。(二七)玄冥鹹を適へ(二八)蓐收辛を調へ、紫蘭丹椒、施和必ず節あり。滋味既に殊に、遺芳(二九)射越す。乃ち春清の(三〇)縹酒あり、(三一)康狄の營む所、化に應じて則ち變じ、氣に感じて成る。(三二)徵を彈ずれば則ち苦發し、(三三)宮を叩けば則ち甘生ず。是に於て盛るに翠樽を以てし、酌むに彫觴を以てし、(三四)浮蟻鼎沸し、酷烈馨香あり。以て神を和ぐべく、以て腸を娛ましむべし。此れ肴饌の妙なり。子能く我に從つて之を食はんかと。玄微子曰く、予は(三五)藜藿を甘しとす。未だ此食に暇あらざるなりと。

すべし。

【二一】霜蓄露葵。蓄葵は菜の名、共に霜露の時に宜し。

【二二】玄熊は黒熊。素膚は白き肉。

【二三】肥豢。大豕を豢といふ。膿肌は肥肉なり。

【二四】山鷄、斥鷃。鳥の名。

【二五】珠翠。貝の柱肉。

【二六】芳苓。苓は蓮と同じ、史記に「神龜あり江南嘉林の中に在り、常に芳蓮の上に巢ふ」とあり。寒は肶肉なり。

【二七】玄冥。北方の神、北は水にして鹹なり。

【二八】蓐收。西方の神、西は金にして辛なり。

【二九】射越。遠く及ぶこと。

【三〇】縹酒。綠酒なり。

【三一】康狄。杜康及び儀狄、古の酒を釀せし人。

【三二】徵。五聲の一、月令に「孟夏の月其音は徵、其味は苦」とあり。

【三三】宮。五聲の一、月令に「中央の土、其音は宮、其味は甘」とあり。

【三四】浮蟻。酒滓の浮び上るもの。鼎沸は鼎の沸くが如きなり。

【三五】藜藿。賤菜なり。

【大意】鏡機子曰く、菰粺の飯に美菜あり、更に熊豕の肥肉を添へ、之を割切すること細薄なり。又鳥肉珠肉の珍あり。此他各地の珍禽奇獸の肉あり。辛鹹其味を調へ、香氣遠く及ぶ。乃ち春酒を酌み樂を奏すれば、以て精神を娛ましむるに足る。此れ酒食の最も美なるものなり。足下よく我と共に之を食はんことを欲するかと。玄微子曰く、予は藜藿を以て甘しとす。未だ此の美食を求めざるなりと。(以上第二章)

鏡機子曰く、(三六)歩光の劍、(三七)華藻の繁縟、飾るに(三八)文犀を以てし、彫るに翠綠を以てし、綴るに(三九)驪龍の珠を以てし、錯ふるに(四〇)荆山の玉を以てし、陸に犀象を斷つも、未だ(四一)儁と稱するに足らず。波に隨ひて鴻を截るも、水刃を漸さず。(四二)九旒の冕耀を散じ文を垂れ、(四三)華組の纓風に從つて紛紜たり。佩は則ち(四四)結綠懸黎、寶の妙微なり。(四五)符采照爛し景を流し輝を揚ぐ。(四六)黼黻の服、紗縠の裳、金華の舄、趾を動かし光を遺し、繁飾參差として微鮮霜の若し。(四七)緄佩綢繆して或は彫り或は錯り、

【三六】歩光。越王の劍の名。

【三七】華藻。劍上の文飾。繁縟は彩色なり。

【三八】文犀。犀角の文章あるもの。

【三九】驪龍。莊子に「千金の珠は九重の淵、驪龍の頷下に在り」とあり。

【四〇】荆山。楚山なり。

【四一】儁。銳利なり。

【四二】九旒。冕の旒の九本あるもの。公侯の冠するもの。

【四三】華組。美しき綬。纓は冠の紐。

【四四】結綠、懸黎。戰國策に「梁に懸黎あり宋に結綠あり、天下の名器たり」とあり。

【四五】符采。玉の横文なり。

【四六】黼黻。文章ある衣服。

【四七】緄佩。緄は織帶なり。綢

薰ずるに（四八）幽若を以てし、流芳肆り布き、（四九）雍容閑歩し周旋して燿を馳す。（五〇）南威之が爲に顔を解き、（五一）西施之が爲に巧笑す。此れ容飾の妙なり。子能く我に從つて之を服せんかと。玄微子曰く、予（五二）毛褐を好む。未だ此服に暇あらざるなりと。

【大意】歩光の名劍あり、之を飾るに珠玉文犀を以てす。その利、陸には犀象を斷ち、水には鴻鴈を截る。今この劍を帶し九旒の冕を戴き、華組の紐を垂れ、結綠、懸黎の寶器を珮とし、身に文彩爛然たる衣裳を纏ひ、足に金華の履を穿てば、微妙鮮明なること、霜の潔白なるが如し。南威、西施の美姫も之が爲に微笑を含む。此れ服飾の至美なり。足下我と之を服せんことを願ふかと。玄微子曰く、予は毛布を服するを好む。華美の裝は、予の求むる所にあらざるなりと。（以上第三章）

鏡機子曰く、馳騁は用て思を（五三）蕩するに足り、游獵は以て情を娛ましむべし。僕將た吾子の爲に（五四）雲龍の飛駟に駕し、（五五）玉輅の繁纓を飾り、（五六）宛虹の長綏を垂れ、（五七）招搖の華旍を抗げ、

繆は交連なり。

【四八】幽若。若は香草なり。

【四九】雍容。美好の貌。

【五〇】南威。晉の文公の時の美人。

【五一】西施。呉王夫差の美人。

【五二】毛褐。毛布なり。

【五三】蕩。散なり。

【五四】雲龍。駿馬なり。

【五五】玉輅。玉を以て飾りし車。繁纓は馬の飾。

(五八)忘歸の矢を捷み、(五九)繁弱の弓を乗り、忽として(六〇)景を躡んで輕く鶩せ、奔驥を逸ぎて(六一)遺風を超えん。是に於て磎塡まり谷塞がり、(六二)榛藪平夷なり。山に緣りて罝を置き、野に彌りて罘を張り、下に(六三)滿跡なく上に逸飛なく、鳥集り獸屯り、然る後に會圍す。(六四)獠徒雲のごとく布き、武騎霧のごとく散じ、(六五)丹旗野を曜し、(六六)戈殳晧旰たり。文狐を曳き狡兎を掩り、(六七)鷫鷞を捎ち(六八)振鷺を拂ち、(六九)軌に當りて藉かれ、足に値ひて踐まれ、(七〇)飛軒電のごとく逝き、獸輪に隨つて轉り、翼張るに暇あらず、足騰るに及ばず。動けば(七一)飛鋒に觸れ、擧れば(七二)輕罥に挂る。林を捜り險を索め、(七三)薄を探り阻を窮め、山に騰り峯に赴き、風のごとく厲しく焱のごとく擧る。(七四)機は虛しく發せず、中れば必ず羽を飲む。是に於て人稠く網密く、地逼り勢脅り、(七五)哮闞の獸、牙を張り鬣を奮ひ、志觸突に在り、猛氣慴れず。乃ち(七六)北宮東郭の疇をして、生きなが

【五六】宛虹。曲れる虹。長綾は旗なり。
【五七】招搖。星の名。華旍は美旗。
【五八】忘歸。矢の名。
【五九】繁弱。弓の名。
【六〇】景。日景なり。
【六一】遺風。馬の名。
【六二】榛藪。叢澤なり。
【六三】滿跡。滿一に漏に作る。
【六四】獠徒。獵卒なり。
【六五】丹旗。赤旗なり。
【六六】戈殳。武器の名。晧旰は白き貌。
【六七】鷫鷞。鳥の名。
【六八】振鷺。鳥の名。
【六九】軌。車轍なり。
【七〇】飛軒。輕車なり。
【七一】飛鋒。箭なり。
【七二】輕罥。網なり。
【七三】薄。草の叢生する處。
【七四】機。弩牙なり。
【七五】哮闞。怒ること。
【七六】北宮。古の勇者北宮黝。東郭は呂氏春秋に「齊に勇を

ら豹尾を抽き、（七七）貙肩を分裂せしむ。形手に抗せず骨拳を隱かず。熊を批ちて掌を碎き、虎を拉りて斑を摧き、野に毛類なく林に羽羣なく、積獸陵の如く、（七八）飛翮雲を成す。是に於て鍾を駴らし鼓を鳴らし、旌を收め旆を弛げ、網を頓て綱を縱め、獠を罷めて廻り邁く。（七九）駿騄齊しく驤り、鑾を揚げ沫を飛ばし、俯して（八〇）金較に倚り、仰いで（八一）翠蓋に撫ひ、（八二）雍容暇豫して、志を方外に娛ましむ。此れ羽獵の妙なり。子能く我に從つて之を觀んかと。玄微子曰く、余（八三）恬靜を樂む。未だ此觀に暇あらざるなりと。

【大意】鏡機子曰く、馳逐遊獵は亦以て鬱を散じ情を樂ましむるに足る。僕足下の爲に駿馬を輕車に駕し、長旗を其上に建て、弓矢を挾みて奔馳せんか。先づ網を廣野に張り、鳥獸の屯集するを見て、乃ち之を包圍す。獵卒雲の如く聚り、赤旗日に輝き、白刃天に閃く。鳥獸車馬に觸れて忽ち斃れ、鳥飛ぶに遑なく、獸走るに暇なく、飛べば箭に當り、躍れば網に罹る。更に險阻を搜り叢野を索め、發すれば必ず中り、中れば必ず矢を飲んで羽に至る。猛獸怒りて牙を張れば、勇士躍りて之を捉へ、捕獲する所積んで山を成す。乃ち鐘鼓を撃ちて、旗を收め網を解き、獵を罷めて歸る。

好む者あり一人は東郭に居り一人は西郭に居る」とあり。

【七七】貙肩。貙は猛獸の名。

【七八】飛翮。鳥なり。

【七九】駿騄。良馬なり。

【八〇】金較。金を以て飾りし車の横木。

【八一】翠蓋。翡翠の羽を以て飾りし車蓋。

【八二】雍容暇豫。安樂なり。

【八三】恬靜。閑靜なり。

此時に當り、車に乘りて之を觀れば、其樂言ふべからず。足下我に從つて之を觀んことを願ふかと。玄微子曰く、予は閑靜を以て樂となす。未だ之を觀るを欲せざるなりと。(以上第四章)

鏡機子曰く、閑宮(八四)顯敞に、雲屋(八五)皓旰なり。(八六)景山の高基を崇くし、淸風を迎へて(八七)觀を立て、(八八)彤軒紫柱、(八九)文榱華梁、(九〇)綺井葩を含み(九一)金墀玉箱あり。溫房には則ち冬(九二)絺綌を服し、淸室には則ち中夏に霜を含み、華閣雲に緣り、(九三)飛陛虛を陵ぎ、頫して流星を眺め、仰いで(九四)八隅を觀る。升龍攀づれども逮ばず、天際に眇にして高く居り、繁巧神怪、名を變じ形を異にし、(九五)班輸も其斧斤を措く所なく、(九六)離婁も之が爲に睛を失ふ。麗草交植し(九七)殊品詭類、綠葉(九八)朱榮、天を熙し日に曜き、(九九)素水沼に盈ち、叢木林を成し、飛翮高きを陵ぎ、鱗甲深きに隱る。是に於て逍遙暇豫し、忽として歸るを忘るるが若し。乃ち(一〇〇)任子をして釣を垂れ、(一〇一)魏氏をして機を發せしむ。芳餌水に沈み、(一〇二)輕繳飛ぶを弋、翳雲の翔鳥を落し、九淵の靈龜を援く。然る後

【八四】顯敞。高顯なり。
【八五】皓旰。明なる貌。
【八六】景山。大山なり。
【八七】觀。樓閣なり。
【八八】彤軒。赤欄なり。
【八九】文榱。文飾を加へし椽。
【九〇】綺井。屋間に於て井の形をなし、中に蓮花ありて下垂するなり。
【九一】金墀。金を地に塗るなり。玉箱は玉房。
【九二】絺綌。かたびら。
【九三】飛陛。高階なり。
【九四】八隅。八方なり。
【九五】班輸。公輸班なり、古の技巧者。斧斤はチノ。
【九六】離婁。古の明目者。
【九七】殊品詭類。珍奇の物。
【九八】朱榮。紅花なり。
【九九】素水。白水なり。
【一〇〇】任子。古の釣を善くする者。

菱華を采り水蘋を擢き、(一〇三)珠蚌を弄し(一〇四)鮫人を戯れしむ。(一〇五)漢廣の詠ずる所を諷し、游女を水濱に覩、神景を(一〇六)中沚に燿かし、輕縠の(一〇七)纖羅を被り、芳烈を遺して靖に歩し、(一〇八)皓手を抗げて清歌す。歌に曰く、雲際を望めば(一〇九)好仇あり。天路長くして往くに由なし。(一一〇)蘭蕙を佩びて誰が爲にか脩らん。(一一一)宴婉絶えて我が心愁ふと。此れ宮館の妙なり。子能く我に從つて之に居らんかと。玄微子曰く、予は巖穴を耽む。未だ此居に暇あらざるなりと。

【大意】鏡機子曰く、廣大なる樓閣を築き、文彩を施し彫飾を加へ、冬暖に夏涼しく、俯して流星を見、仰いで八方を望み、高く天際に聳えて飛龍も及ぶ能はず。周圍に麗草を交へ植ゑ、花葉天日に輝き、白水沼に湛へ、樹木林を成し、鳥魚其中に游樂す。乃ち釣を垂れ弋を發し、飛鳥を落し、魚鼈を捉へ、或は菱花を採り、蘋を擢き、人魚を戯れしめ、水濱に女神を觀れば、光を中渚に耀かして、羅縠を被り、素手を擧げて歌ふ。歌に曰く、遠く靈仙を望み、與に匹偶をなさんとするも、天路長くして致すに由なし。誰が爲にか自ら脩飾するをなさん。靈仙見るべからず。我をし

【一〇一】魏氏。古の射を善くする者。
【一〇二】輕繳。いぐるみ。
【一〇三】珠蚌。はまぐり。
【一〇四】鮫人。人魚なり。
【一〇五】漢廣。詩經の篇の名。「漢に游女あり、求むべからず云云」とあり。游女は漢水の女神なり。
【一〇六】中沚。中渚なり。
【一〇七】纖羅。うすぎぬ。
【一〇八】皓手。白き手。
【一〇九】好仇。よき友。
【一一〇】蘭蕙。香草の名。
【一一一】宴婉。歡を結ぶべき人。

て心を憂へしむと。此れ宮館の樂なり。足下我と此に居らんことを願ふかと。玄微子曰く、予は巖穴に棲まんことを好む。宮館の美は、予の欲する所にあらずと。（以上第五章）

鏡機子曰く、既に中原に游觀し、閑宮に逍遥し、情放に志蕩け、淫樂未だ終らず、亦將に才人妙技あり、世を遺れ俗を越え、(二二)北里の流聲を揚げ、(二三)陽阿の妙曲を紹がんとす。爾して乃ち(二四)文軒に御り、(二五)洞庭に臨めば、琴瑟交〻揮ひ、(二六)篪を左にし笙を右にし、鍾鼓俱に振ひ、簫管齊しく鳴る。然る後(二七)姣人乃ち文縠の華袿を被り、輕綺の(二八)飄颻たるを振ひ、(二九)金搖の熠燿たるを戴き、(三〇)翠羽の雙翹を揚げ、流芳を揮ひ飛文を燿かし、(三一)盤鼓を歷煥として繽紛たり。長裾風に隨ひ悲歌雲に入り、(三二)蹻捷飛ぶが若く、虛を蹈んで遠く蹠み、淩躍超驤、(三三)蜿蟬として揮霍す。翔爾として鴻のごとく翥り、(三四)濈然として鳧のごとく沒し、輕體を縱にして以て迅く赴き、景形を追ふも逮ばず。飛聲塵を激し、(三五)依違して響を厲し、才の捷きこと神の若く、形象を

【二二】北里。紂の音樂。
【二三】陽阿。古曲の名。
【二四】文軒。文飾を加へたる殿檻。
【二五】洞庭。廣庭なり。
【二六】篪。笛の類。
【二七】姣人。美人なり。華袿は婦人の上服。
【二八】飄颻。飛揚する貌。
【二九】金搖。金釵なり。熠燿は光ること。
【三〇】翠羽。翡翠の羽。翹は羽の名。
【三一】盤鼓。曲の名。煥は明なる貌。繽紛は盛なる貌。
【三二】蹻捷。輕敏なり。
【三三】蜿蟬。盤屈なり。揮霍は舞ふこと。
【三四】濈然。沈む貌。
【三五】依違。徘徊といふが如し。

なし難し。是に於て歡をなすこと未だ渫きず、白日西に頽る。樂を散じ飾を變じ、中閨に(二二六)微歩す。(二二七)玄眉弛んで鉛華落ち、亂髮を收めて(二二八)蘭澤を拂ひ、(二二九)婧服を形して幽若を揚ぐ。紅顏笑ふに宜しく、(二三〇)睇眄光を流す。時に吾子と手を攜へて行を同うし、(二三一)飛除を踐み閑房に卽けば、(二三二)華爥爛として幄幙張り、朱脣を動かし(二三三)清商を發し、羅袂を揚げ華裳を振ひ、(二三四)九秋の夕、歡をなして未だ央きず。此れ聲色の妙なり。子能く我に從つて之に游ばんかと。玄微子曰く、予は清虛を願ふ。未だ此游に暇あらざるなりと。

【大意】 鏡機子曰く、既に中原を周遊し、歸りて閑室に入れば、情思和暢す。時に妙妓あり。亦北里、陽阿の美曲を奏す。乃ち欄に憑り廣庭に臨めば、琴瑟鐘鼓一齊に湧き、美人錦繡の衣を纏ひ、輕裾を飄し、金釵雙翹を戴き、舞ふこと飛ぶが如く、虛を蹈むが如く、鴻の擧るが如く、鳧の沒するが如く、輕捷なること神の如く、名狀すべからず。歡樂未だ盡きざるに、白日將に暮れんとす。乃ち音樂を罷め、服飾を改め、閨中に逍遙す。粉黛微しく落ち、復た鬢髮を整理し蘭膏を拂塗し、衣るに好服を以てし、其芳香を揚ぐ。眼波光彩を發し、紅

【二二六】微歩。緩歩なり。
【二二七】玄眉。黒き眉。鉛華はオシロイ。
【二二八】蘭澤。蘭膏なり。
【二二九】婧服。美服なり。若は杜若なり、香草の名。
【二三〇】睇眄。斜視なり。
【二三一】飛除。高階なり。閑房は閑室。
【二三二】華爥。華燭なり。幄幙はトバリ。
【二三三】清商。澄みたる歌聲。
【二三四】九秋。秋九十日をいふ。

顏笑ふに宜し。時に足下と手を携へて共に行き、階を升りて閑室に就けば、燭光明にして帳帷静に垂るる處、紅脣を開いて淸歌を揚げ、又衣裳を振ひて舞ふ。秋夜の長きも、歡與の盡くるを知らず。此れ聲色の至樂なり。足下我に從つて共に遊ぶことを願ふかと。玄微子曰く、予は淸虛を樂む。此樂を求めざるなりと。(以上第六章)

鏡機子曰く、予聞く君子は節を奮ひて以て義を顯すを樂み、烈士は軀を危くし以て仁を成すを甘んずと。是を以て雄俊の徒、黨を交へ(一三五)倫を結び、氣を重んじ命を輕んじ、(一三六)分に感じて身を遺る。故に(一三七)田光は劍に北燕に伏し、(一三八)公叔は命を西秦に畢ふ。果毅輕斷して(一三九)谷風に虎歩し、威(一四〇)萬乘を慴れしめ、(一四一)華夏雄と稱すと。辭未だ終るに及ばざるに、玄微子曰く、善しと。鏡機子曰く、此れ乃ち游俠の徒のみ。未だ妙と稱するに足らざるなり。夫の(一四二)田文、無忌の儔の若きは、乃ち上古の俊公子なり。皆仁を飛ばし義を揚げ、道藝に騰躍し、心を無方に游ばしめ、志を雲際に抗げ、諸侯を(一四三)凌轢し、當世に

【一三五】倫。黨與なり。
【一三六】分。分義なり。
【一三七】田光。燕の太子丹の爲に荊軻を激厲せんとして自刎す。
【一三八】公叔。或る說に荊軻の字なりといふ。荊軻は燕の太子丹の爲に秦王を刺さんとして果さず、遂に秦に死す。
【一三九】谷風。春秋元命苞に「猛虎嘯いて谷風起る」とあり。虎步。虎の如く歩むこと。
【一四〇】萬乘。天子をいふ。
【一四一】華夏。中國なり。
【一四二】田文。齊の公子孟嘗君なり。無忌は魏の公子信陵君なり。
【一四三】凌轢。凌辱なり。

驅馳す。袂を揮へば則ち九野風を生じ、慷慨すれば則ち氣虹蜺を成す。吾子若し此時に當り能く我に從つて之に友たらんかと。玄微子曰く、予亮に願ふ。然れども大道に方ぶるに、累あるを如何せんと。

【大意】鏡機子曰く、君子は節義を樂み、烈士は身を殺して仁を成す。故に互に黨を結び羣を連ね、分義を重んじ身命を輕んず。田光、公叔の如きは、卽ち是れなり。是等の人は皆果斷にして能く天子を慴れしむ。故に人皆之を稱して英雄となすと。鏡機子更に語を續けて曰く、然れども此等は遊俠の徒にして、未だ妙と稱するに足らず。かの田文、無忌の如きは、皆仁義を重んじ道藝に通じ、其志甚だ高尙なり。故に一擧一動天下を風動せざるはなし。足下能く我に從つて之が友たらんとを願ふかと。玄微子曰く、予誠に之が友たらんことを願ふ。然れども此れ勢利を以て相傾くるものにして、大道に於て累あるを如何せんと。(以上第七章)

鏡機子曰く、世に(一四四)聖宰あり、帝を翼け世に霸たり。量を(一四五)乾坤に同うし、曜を日月に等うし、(一四六)玄化神に參り、靈と契を合せ、惠澤(一四七)黎苗に播き、威靈無外に震ひ、隆平を殷周に超え、(一四八)羲皇に踵いで泰を齊うし、顯朝惟れ淸み、

【一四四】聖宰。賢宰相なり、曹操を指す。
【一四五】乾坤。天地なり。
【一四六】玄化。治化なり。
【一四七】黎苗。小昊の時、九黎德を亂り、舜の時、三苗命を用ひず。
【一四八】羲皇。伏犧なり。泰は泰

王道遐に均しく、民の望むこと草の如く、我が澤春の如く、河濱に(一四九)耳を洗ふの士なく、(一五〇)喬岳に巣居の民なし。是を以て(一五一)俊乂來り仕へ、國の光を觀す。擧ぐること才を遺さず、進むること各〻方を異にし、典禮を(一五二)辟雍に讃し、文德を(一五三)明堂に講じ、流俗の(一五四)華說を正し、孔氏の舊章を綜め、樂を散じ風を移し、國富み民康く、神應じ休臻り、屢〻嘉祥を獲。故に甘露紛として晨に降り、(一五五)景星宵すがら光を舒べ、游龍を神淵に觀、鳴鳳を高岡に聆く。此れ霸道の至隆にして(一五六)雍熙の盛際なり。然れども主上猶ほ沈恩の未だ廣からざるを以ひ、聲敎の未だ厲からざるを懼れ、(一五七)英奇を仄陋に采り、皇明を巖穴に宣ぶ。此れ(一五八)寗子商歌の秋にして、(一五九)呂望が綸を投じて逝く所以なり。吾子(一六〇)太和の民となり、(一六一)陶唐の世に仕ふるを欲せざるかと。是に於て玄微子袂を攘げて興きて曰く、韡なる哉言や、近者吾子の述ぶる所、華淫以て我を厲さんと欲し、祗に予が心を攪すのみ。天下の(一六二)穆淸にして明

平なり。

【一四九】耳を洗ふ。堯、許由の志を大とし禪るに天子の位を以てせんとす、許由之を汙とし河に臨んで耳を洗ふ。

【一五〇】喬岳。高山なり。巢父は堯の時の隱者なり、常に樹上に棲む、故に時人號して巢父といふ。

【一五一】俊乂。俊傑なり。

【一五二】辟雍。大學なり。

【一五三】明堂。天子政を布くの處。

【一五四】華說。浮華の言。

【一五五】景星。めでたき星。

【一五六】雍熙。和平なり。

【一五七】英奇。賢才なり。仄陋は微賤なり。

【一五八】寗子。寗戚。車下に商歌す、齊桓公其の賢なるを知りて登庸す。

【一五九】呂望。太公望なり、嘗て渭水に釣す、文王に遭ひて登庸せらる。綸はツリイト。

【一六〇】太和。太平なり。

君の國に莅むを聞き、盈虚の正義を覽、(二六三)頑素の迷惑を知るに至り、今予(二六四)廓爾として身の輕きこと飛ぶが若し。願くは(二六五)初服に反り、子に從つて歸らんと。

【大意】鏡機子曰く、今の世に賢宰相あり。天子を輔けて霸業を成し、功德天地日月に等しく、惠澤遠く及び。世の治平なること堯舜三代に同じ。世に隱遁の人なく、俊傑來り仕へ、典禮を脩め文德を講じ、國富み民康く、祥瑞屢出づ。此れ霸道の至治にして、和平の極なり。然れども天子猶ほ聲敎の及ばざるを懼れ、賢才を微賤より擧げ、巖穴の士を招く、是れ宜しく出でて仕ふべきの秋なり。足下も亦太平の民となり、聖代に仕ふるを欲せざるかと。玄微子大に感動して曰く、近ごろ足下の述ぶる所の言は、華淫に流れて徒に予が心を亂すに過ぎざりき。今明君國に臨むを聞き、吾が頑愚なりしを悟り、始めて出で仕へんと欲するに至れり。願くは初服に反り、足下に從つて世間に歸らんと。(以上第八章)

【二六一】陶唐。堯なり。
【二六二】穆淸。和淸なり。
【二六三】頑素。玄微子自ら謙して言ふ。
【二六四】廓爾。開悟の貌。
【二六五】初服。未だ隱遁せざる時の服。

卷の第十八

七　下

七命八首　　張景陽

(一)沖漠公子華を含み曜を隱し、(二)嘉遯して龍盤し、世を翫んで(三)高蹈し、心を(四)浩然に游ばしめ、志を(五)衆妙に玩び、景を(六)大荒の遐阻に絕ち、響を幽山の窮奧に呑む。是に於て(七)徇華大夫聞いて焉に造らんとし、乃ち(八)雲輅を勑め(九)飛黃を驂にし、奔沙を越え流霜を輾み、(一〇)扶搖の風を陵ぎ、堅冰の津を躡み、旌(一一)霄堮を拂ひ、軌(一二)蒼垠を出づ。天清冷にして霞なく、野曠朗にして塵なし。重岫に臨んで轡を攬り、石室を顧みて輪を廻らし、遂に沖漠の居る所に適く、其居や、(一三)崢嶸幽藹にして(一四)蕭瑟虛玄なり、

【一】沖漠公子。沖漠は虛恬なり、假に設けて人名とす。
【二】嘉遯。隱遁なり。
【三】高蹈。官を去りて身を潔くすること。
【四】浩然。大道の氣。孟子に「我よく吾が浩然の氣を養ふ」とあり。
【五】衆妙。大道の門。老子に「玄の又玄、衆妙の門」とあり。
【六】大荒。山海經に「日月の入る處、是を大荒の野といふ」とあり。
【七】徇華大夫。徇は求、華は浮華、假に設けて人名とす。
【八】雲輅。輅は車なり。
【九】飛黃。神馬なり。
【一〇】扶搖。飆風なり。
【一一】霄　。雲崖なり。
【一二】蒼垠。蒼天の畔なり。

(一五)溟海渾濩として其後に涌き、(一六)嶰谷嵺嶆として其前に張り、(一七)尋竹莖を竦てて其壑を蔭し、(一八)百籟羣鳴して其山を聾し、(一九)衝飈發して日を廻らし、飛礫起りて天に麗く。是に於て(二〇)絶巘に登り長風に遡ひ、(二一)辯惑の辭を陳べ、公子に巖中に命じて曰く、蓋し聞く聖人は道を卷いて時に背かず、智士は身を遺てて跡を匿さず、生きては必ず華名を(二二)玉牒に耀かし、歿しては則ち(二三)洪伐を金册に勒すと。今公子は世を違けて(二四)陸沈し、地を避けて獨り竄れ、有生の歡滅び、(二五)資父の義廢れ、愁百年に洽く、苦千歲に溢る。何ぞ(二六)促鱗の汀濘に游ぎ、(二七)短羽の翳蒼に棲むに異らんや。今將に子を榮するに(二八)天人の大寶を以てし、子を悅ばすに(二九)縱性の至娛を以てし、地を窮めて游び、天に中して居り、四海の歡を傾け、九州の腴を殫し、(三〇)屈轂の瓠を鑽り、(三一)疏屬の拘を解かんとす。子之を欲するかと。

【一三】峥嶸幽藹。深冥なり。
【一四】蕭瑟虛玄。寂靜なり。
【一五】溟海。海の名。渾濩は水の湧く聲。
【一六】嶰谷。谷の名。嵺嶆は險なる貌。
【一七】尋竹。大竹なり。
【一八】百籟。林木の孔穴、風に激して聲を成すもの、及び鳥獸の聲。
【一九】衝飈。急風なり。
【二〇】絶巘。高山なり。
【二一】辯惑。論語に「德を崇くし惑を辯ず」とあり。
【二二】玉牒。國史なり。
【二三】洪伐。大功なり。金册も國史。勒は記なり。
【二四】陸沈。世を避けて自ら隱るること。
【二五】資父。君臣の義をいふ。孝經に「父に事ふるに資り以て君に事ふるも敬同じ」とあり。
【二六】促鱗。小魚なり。汀濘は淺水。
【二七】短羽。小鳥なり。翳蒼は蒿草。
【二八】天人の大寶。富貴榮華なり。
【二九】縱性の至娛。聲色滋味な

公子曰く、大夫遺れず、來りて荒外に辱る。不敏に在りと雖も、敬んで（三二）嘉話を聽かんと。

【大意】沖漠公子美徳を含み光曜を隱し、人世を避くること龍の山川に屈するが如く、心を大道に潛め、幽山極深の處に居る。徇華大夫之を訪はんとし、車馬に乘り沙霜を越え、風を陵ぎ氷を履みて行く。其居や、幽深靜寂にして、後に溟海あり前に谿谷あり。急風忽ち日光を廻らし、礫石飛んで天に至る。大夫乃ち山巓に登り、長風に向ひ、疑惑を辯ずるの辭を公子に述べて曰く、聖人は、其道を卷き藏めて以て時君に背かず、其身を棄てて名跡を匿さず。生死必ず功名を史籍に傳ふ。今公子は世を避けて自ら隱れ、歡娯の道を絶ち、君臣の大義を廢し、愁苦を以て生を終らんとす。局量甚だ狹しといはざるべからず。今われ富貴聲色の樂を與へ、高大の處に游ばしめ、進んで仕へ窮苦を脱せしめんと欲す。公子之を願ふかと。公子曰く、足下我の不材を棄てず、此の荒外の地に來る。吾不敏と雖も、その美言を聽かんと。（以上第一章）

り。

【三〇】屈穀の瓠。韓非子に「齊に居士田仲といふ者あり、宋人屈穀往きて之に見えて曰く穀巨瓠あり堅きこと石の如く厚くして竅なしと、田仲曰く堅きこと石の如くなれば剖くべからず、厚くして竅なければ以て水漿を受くべからずと穀曰く然らば其れ棄物ならんかと、曰く然りと、穀曰く今先生人の食を恃まずと雖亦人の國に益なし、猶ほ棄つべきの瓠の如しと、田仲失ふ所あるが如く慙ぢて對へず」とあり。

【三一】疏屬の梏。山海經に「貳負猰貐を殺す、黃帝乃ち之を疏屬の山に梏す」とあり。

【三二】嘉話。善說なり。

大夫曰く、寒山の桐（三三）太冥より出づ。（三四）黄鐘を含んで以て幹を吐き、（三五）蒼岑に據りて孤生す。既に乃ち（三六）瓊巘嶒崚として金岸（三七）崥崹たり。左は（三八）風谷に當り右は（三九）雲谿に臨み、上に（四〇）陵虛の巢なく、下に（四一）跖實の蹊なく、（四二）搖刖峻挺、（四三）茗邈苕嶢たり。三春の溢露を晞かし、九秋の鳴飇に遡ひ、雲雪其根に寫ぎ、霏霜其條を封ず。木既に繁くして後綠に、草未だ素へずして先づ凋む。是に於て雲梯を構へ峥嶸に陟り、（四四）蕤賓の陽柯を翦り（四五）大呂の陰莖を剖き、（四六）營匠其樸を斲り（四七）伶倫其聲を均へ、器擧りて樂奏し（四八）促調高く張り、音（四九）號鐘よりも朗に、韻（五〇）繞梁より淸めり。逸響を（五一）八風に追ひ奇律を（五二）歸昌に采り、（五三）中黃の少宮を啓き、（五四）蓐收の變商を發す。若し乃ち（五五）龍火西に

【三三】太冥。北方なり。
【三四】黃鐘。十二律の一。
【三五】蒼岑。靑山なり。
【三六】瓊巘。玉山なり。嶒崚險高の貌。
【三七】崥崹。漸く平なる貌。
【三八】風谷。風の生ずる所の谷。
【三九】雲谿。雲の出づる所の溪。
【四〇】陵虛。淮南子に「鳥は虛を排して飛ぶ」とあり。
【四一】跖實。跖は蹋、實は地なり、淮南子に「獸は實を蹠んで走る」とあり。
【四二】搖刖。危き貌。峻挺は高き貌。
【四三】茗邈苕嶢。高遠の貌。
【四四】蕤賓。禮記に「仲夏の月律蕤賓に中る」とあり。陽柯は山南に生ずる枝。
【四五】大呂。禮記に「季冬の月律大呂に中る」とあり。陰莖は山木に生ずる幹。
【四六】營匠。工人なり。
【四七】伶倫。古の音樂家。
【四八】促調。急調なり。
【四九】號鐘。琴の名。
【五〇】繞梁。琴の名。
【五一】八風。八方の風。
【五二】歸昌。鳳鳴なり。
【五三】中黃。土の色なり。劉向の雅琴賦に「少宮を彈じて天に際し、中徵を授けて以て泉に及ぶ」とあり。
【五四】蓐收。秋の神。變商は五聲の名。
【五五】龍火。火星なり、秋には西南に見ゆ。

積れ（五六）暄氣初めて收まり、飛霜節を迎へ高風秋を送るとき、羇旅懷土の徒、（五七）流宕百罹の疇、（五八）促柱を撫すれば則ち（五九）酸鼻し、（六〇）危絃を揮へば則ち流涕す。若し乃ち（六一）清哇を追ひ（六二）嚴節に赴き、（六三）綠水を奏し（六四）白雪を吐けば、（六五）激楚迴り（六六）流風結ぼれ、（六七）蓂莢の朝に落つるを悲み、（六八）望舒の夕に缺くるを悼み、（六九）煢釐之が爲に擗摽し（七〇）孀老之が爲に嗚咽し、（七一）王子纓を拂つて耳を傾け、六馬天に噓いて秣を仰ぐ。此れ蓋し音曲の至妙なり。子豈能く我に從つて之を聽かんかと。公子曰く、余病んで未だ能はざるなりと。

【大意】大夫曰く、北方寒山に桐樹あり。玉山金岸の間に生じ、風雲の生ずる所の溪谷に立ち、上に飛鳥の巢なく、下に走獸の蹊なく、獨り亭亭として聳え、風露霜雪を陵ぎ、衆木既に繁りて然る後に綠に、秋草未だ衰へざるに先づ落つ。乃ち梯を作りて高山に登り、之を伐りて琴となし、伶倫をして其聲を均へしむ。聲韻極めて淸高にして、八風に應じ鳳鳴に似たり。故に

【五六】暄氣。暖氣なり。
【五七】流宕百罹。遠遊して種種の憂に遇ふこと。
【五八】促柱。急絃といふが如し。
【五九】酸鼻。悲むこと。
【六〇】危絃。高絃なり。
【六一】清哇。淸唱なり。
【六二】嚴節。急節なり。
【六三】綠水。琴曲の名。
【六四】白雪。琴曲の名。
【六五】激楚。激越の聲。
【六六】流風。急風なり。
【六七】蓂莢。瑞草なり、堯天子となるや蓂莢庭に生じ日に一葉を生じ十六日に至りて後、日に一葉を落す。
【六八】望舒。月なり。
【六九】煢釐。寡婦なり。擗摽は胸を打つて悲むこと。
【七〇】孀老。老寡婦なり。
【七一】王子。仙人の名、周の靈王の太子晉なり。よく笙を吹く。纓は冠の紐。

悲秋の時、遠遊郷を懐ふの士、一たび之を奏すれば、悲傷して涕を流し、綠水、白雪の曲を奏すれば、聲激越して廻風起り、歲月の往き易きを歎じ、寡婦胸を打つて嗚咽し、仙人も耳を傾けて聽き、馬も首を仰いで之を聽く。此れ音曲の妙なり。足下之を聽かんことを願ふかと。公子曰く、余病んで未だ之を聽く能はざるなりと。(以上第二章)

大夫曰く、(七二)蘭宮祕宇、(七三)彫堂綺櫳、(七四)雲屛爛汗として(七五)瓊壁青葱たり。(七六)應門八襲にして(七七)旋臺九重なり。表するに(七八)百常の闕を以てし、圍らすに(七九)萬雉の墉を以てす。爾して乃ち(八〇)嶢榭風を迎へて中天に秀出し、(八一)翠觀岑のごとく青く彫閣霞のごとく連り、長翼雲に臨み(八二)飛陛山を陵ぎ、(八三)玉繩を望んで極を結び(八四)倒景を承けて軒を開き、(八五)赬素炳煥として(八六)枌栱嵯峨たり。(八七)陰虬檐を負ひ(八八)陽馬阿を承け、

【七二】蘭宮。香宮なり。祕宇は深宮。

【七三】彫堂。彫飾を加へし堂。綺櫳は文綺をはりし大窓。

【七四】雲屛。雲を畫ける牆。爛汗は文色の貌。

【七五】瓊壁。玉を以て飾れる壁青葱は玉の色。

【七六】應門。正南の門。八襲は八重なり。

【七七】旋臺。曲臺なり。

【七八】百常。一丈六尺を常といふ。

【七九】萬雉。高さ一丈長さ三丈を雉といふ。

【八〇】嶢榭。高臺なり。

【八一】翠觀。碧樓なり。

【八二】飛陛。高階なり。

【八三】玉繩。星の名。

【八四】倒景。極めて高き處。

【八五】赬素。紅白なり。炳煥は光る貌。

【八六】枌栱。枌は複棟。栱はマスガタ。嵯峨は高く重る貌。

【八七】陰虬。龍なり。龍は陰なり。

【八八】陽馬。馬は陽なり。阿に曲なり。

錯ふるに（八九）瑤英を以てし、鏤むるに金華を以てし、（九〇）方疏秀を含み、（九一）圓井葩を吐き、重殿疊起して交綺（九二）榥を對し、幽堂晝密しく明室夜朗なり。（九三）焦螟飛んで風を生じ、（九四）尺蠖動いて響を成す。若し乃ち目常玩を厭ひ體帷幄に倦むとき、公子を攜へて雙び遊び、時に林麓に娛觀し、翠阜に登り丹谷に臨めば、華草錦のごとく繁り飛釆星のごとく燭き、陽葉春青く陰條秋綠に、華實代る新にして意を承け歡を恣にす。仰いで（九五）神藹を折り俯して朝蘭を采り、惠風に（九六）蘅薄に迎ひ、（九七）椒塗を瑤壇に眷る。爾して乃ち（九八）三翼を浮べて中沚に戲るれば、（九九）潛鰓駭き驚翰起り、沈絲結び（一〇〇）飛矰理り、（一〇一）歸翮を赤霄の表に挂け、華鱗を紫淵の裏に出す。然る後棹を縱にし風に隨ひ、楫を弭めて波に乘り、（一〇二）孤竹を吹き雲和を拊ち、淵客（一〇三）淮南の曲を唱へ（一〇四）榜人釆菱の歌を奏す。歌に曰く、（一〇五）鳧舟に乘りて水嬉をなし、芳洲に臨んで（一〇六）雲芝を拔き、樂んで以て戚

【八九】瑤英。玉なり。
【九〇】方疏。窓なり。秀は花。
【九一】圓井。屋内下に向つて井形を作り畫くに蓮花を以てす。
【九二】榥。絹ばりの窓。
【九三】焦螟。微蟲の名。
【九四】尺蠖。しやくとり蟲。
【九五】神藹。香草なり。
【九六】蘅薄。香草の叢。
【九七】椒塗。香木の道。瑤壇は玉階。
【九八】三翼。舟なり。中沚は中渚。
【九九】潛鰓。沈魚なり。驚翰は驚鳥。
【一〇〇】飛矰。いぐるみ。
【一〇一】歸翮。歸鳥なり。赤霄は紅雲。
【一〇二】孤竹。笛なり。雲和は琴瑟。
【一〇三】淮南。歌曲の名。
【一〇四】榜人。舟人なり。釆菱は歌曲の名。
【一〇五】鳧舟。舟の名。鳧の形をなせり。
【一〇六】雲芝。香草なり。

を忘れ、游んで以て時を卒へ、夜を窮めて日となし、歳を畢へて期となすと。此れ蓋し（一〇七）宴居の浩麗なり。子豈能く我に從つて之に處らんかと。公子曰く、余病んで未だ能はざるなりと。

【大意】大夫曰く、香宮深殿彫飾の美を極め、玉壁雲墻之を繞り、八重の門を設け九曲の臺を築き、金碧燦爛として目を奪ふ。室深くして焦螟の微蟲も、飛んで風を成し、尺蠖の小物も、動けば響を成す。此に安居して倦むや、足下と相携へて林麓に遊び、山に登り谷に臨めば、花草色を雜へて錦の如く星の如し。乃ち意に任せて觀賞を恣にし、和風に浴して香木の道を歩し、更に舟を池中に浮ぶれば、魚沈み鳥飛ぶ。乃ち釣弋を以て樂となし、歸鳥を射、華鱗を獲。然る後風に順つて流を下り、楫を止めて波に任せ、笛を吹き瑟を鼓し、舟人聲を齊うして歌ふ。歌に曰く、舟遊をなして香草を採り、樂んで戚を忘れ、夜を日に繼ぎて限となすと。此れ宮室安居の樂なり。足下我と共に之を樂まんことを願ふかと。公子曰く予病んで未だ能はざるなりと。（以上第三章）

大夫曰く、若し乃ち（一〇八）白商の素節、月既に（一〇九）衣を授くれば、天凝り地閉ぢ、風厲しく霜飛び、（一一〇）柔條夕に勁く、密葉晨に稀なり。將に氣に因りて以て殺を效し、（一一一）金郊に臨んで（一一二）師を

【一〇七】宴居。安居なり。

【一〇八】白商の素節。秋をいふ。周禮に「西方は白」とあり、秋は五行に於て西なり。禮記に「孟秋の月、其音は商」とあり

【一〇九】衣を授く。詩經に「九月衣を授く」とあり。

【一一〇】柔條。やはらかなる樹枝。

【一一一】金郊。西郊なり。

【一一二】師を講ず。武を講じ戰を

講ぜんとす。爾して乃ち(二一三)輕武を列ね(二一四)戎剛を整へ、(二一五)雲髦を建て雄芒を啓き、(二一六)紅陽の飛鸞に駕し、(二一七)唐公の驌驦を駿にし、(二一八)羽隊を外林に屯め(二一九)輕翼を中荒に縱つ。爾して乃ち(二二〇)飛羂を布き脩罠を張り、黃岑を陵ぎ青巒に挂け、長罭を畫りて以て限となし、流谿を帶びて以て闕となす。既にして乃ち內に(二二一)疏蹊なく、外に漏跡なし。鉦を叩いて(二二二)校を數へ、麾を擧げて獲を旌し、(二二三)金機を設り鳴鏑を馳せ、(二二四)剛豪を翦り勁翮を落し、車騎競ひ騖せ武を駢べ轍を齊うし、(二二五)翕忽揮霍として雲廻風列し、聲動き響飛び、形移り景發し、戈を擧ぐれば林竦し、鋒を揮へば電滅し、仰いで(二二六)雲巢を傾け、俯して地穴を殫す。乃ち(二二七)圓文の豣、(二二八)斑題の豵あり。鬣を鼓かせば風生じ、目を怒らせば電瞛り、口霜刃を斂み、足飛鋒を撥ひ、林を飄かし石

教ふること。

【二一三】輕武。兵車の名。

【二一四】戎剛。兵車の名。

【二一五】雲髦。旌旗の類なり。雄芒は劍戟の利刃。

【二一六】紅陽。人名。飛鸞は良馬の名。

【二一七】唐公。人名。驌驦は良馬の名。

【二一八】羽隊。士羽を負ひて隊を成すなり。

【二一九】輕翼。隊の左右翼なり。中荒は荒野の中。

【二二〇】飛羂。高き網なり。脩罠は長き網。

【二二一】疏蹊。通路なり。

【二二二】校。獲る所の多寡を量ること。

【二二三】金機。弩牙なり。鳴鏑はカブラ矢。

【二二四】剛豪。獸なり。勁翮は鳥。

【二二五】翕忽揮霍。飛走倏忽の貌。

【二二六】雲巢。高巢なり。

【二二七】圓文。圓き文章。豣は豕の一歲なるもの。

【二二八】斑題。額のまだらなること。豵は豕の三子を生めるもの。

を蹶かし、幽叢を(一二九)扣跋す。是に於て(一三〇)飛黃鋭を奮ひ、(一三一)賁石伎を逞うし、(一三二)封狶を蹙み、馮豕を僨し、(一三三)甝虪を拉ぎ、獬廌を挫き、(一三四)句爪摧け、鋸牙捭れ、(一三五)瀾漫狼藉して、榛を傾け壑を倒にし、(一三六)殞胔山に挂り、(一三七)僵踣澤を掩ひ、藪は毛林をなし、隰は(一三八)丹薄をなす。是に於て圍を撤し罔を頓て、旆を巻き(一三九)鳶を收め、(一四〇)虞人獸を數へ、林衡鮮を計へ、(一四一)最を論じ勤を犒ひ、馬を息へ弦を韜む。肴駟鑣を連ね、酒駕軒を方べ、(一四二)千鍾電釂、(一四三)萬燧星繁、陵阜流膏に霑ひ、谿谷芳煙に厭き、歡極り樂殫き、(一四四)節を廻らして旋る。此れ亦(一四五)田游の壯觀なり。子豈能く我に從つて之をなさんかと。公子曰く、余病んで未だ能はざるなりと。

【大意】大夫曰く、秋風一たび至り、天地凝閉し、弱枝既に勁く、葉落ちて漸く稀なるに及べば、殺氣に因りて狩獵をなし、西郊に出でて武を演ず。先づ兵車を列ね、旗戟を建て、駿馬に駕して林

【一二九】扣跋。撃排なり。
【一三〇】飛黃。飛廉及び中黃、古の捷勇の人。
【一三一】賁石。孟賁及び石蕃、古の勇者。
【一三二】封狶。大豬なり。馮豕は大豕。
【一三三】甝虪。白虎及び黑虎。獬廌は猛獸の名。
【一三四】句爪。曲れる爪。
【一三五】瀾漫狼藉。獸の死する者多きをいふ。榛は林叢。
【一三六】殞胔。死屍なり。四足の死する者を胔といふ。
【一三七】僵踣。斃死する者。
【一三八】丹薄。血に染まりし叢。
【一三九】鳶。鳥の皮を剝ぎて之を竿上に置くなり。
【一四〇】虞人、林衡。並に山澤を掌る官。鳥獸の新に殺せるものを鮮といふ。
【一四一】最。功の第一なるをいふ。
【一四二】千鍾。鍾は酒器。
【一四三】萬燧。かがり火。
【一四四】節。信節なり、使臣の執る所のもの。
【一四五】田游。遊獵なり。

野に臨み、網を山澤に張り、上下内外、また遁走の道なし。鉦を鳴らし麾を擧げて、賞罰の制を示し、弩を張り鳴鏑を飛ばして鳥獸を射、車騎縱横に馳せ、疾きこと風雲の如く、鳥巣を傾け獸穴を盡す。猛獸躍り出でて、目を怒らし鬣を奮ひて、霜刃を嚙み飛鋒を撥ひ、林石を動かす。乃ち勇士鋭を奮ひて之を斃す。死屍累累として山澤に滿つ。是に於て圍を解き網を除き、官人獲を數へて功勞を賞す。駟馬を連ねて酒肴を運び、燧を擧げて夜飲し、畢つて乃ち還る。此れ狩獵の壯觀なり。公子之をなさんことを欲するかと。公子曰く、余病んで未だ能はざるなりと。（以上第四章）

大夫曰く、楚の（二四六）陽劍は歐冶の營る所なり。（二四七）耶谿の鋌、（二四八）赤山の精。（二四九）銷羊頭に踰え、（二五〇）鏷鍛成に越ゆ。乃ち錬し乃ち（二五一）鑠し、（二五二）萬辟千灌し、（二五三）豐隆椎を奮ひ、（二五四）飛廉炭を扇ぎ、神器化成して、陽は文陰は（二五五）縵、（二五六）流綺（二五七）星連し、浮彩豔發し、光散電の如く、質耀雪の如く、（二五八）霜鍔水凝、

【二四六】陽劍。劒の名。歐冶は鍛工の名。
【二四七】耶谿。溪名。鋌は鐵名。
【二四八】赤山。山の名。精は銅鐵の美なるもの。
【二四九】銷。生鐵なり。羊頭は地名。淮南子に「苗山の鋌、羊頭の銷」とあり。
【二五〇】鏷。鋌なり。鍛成は人名。謝承後漢書に「孝章皇帝諸尚書に劒を賜へ、手自ら姓名を署す、尚書陳寵、濟南の鍛成」とあり。
【二五一】鑠。銷鎔するなり。
【二五二】萬辟。辟は疊むこと。灌は鑄ること。
【二五三】豐隆。雷の神。
【二五四】飛廉。風の神。
【二五五】縵。無文の絹。
【二五六】流綺。文章をいふ。
【二五七】星連。星の如く連る也。
【二五八】霜鍔。鍔は刀刃なり。

冰刃露潔、形(二五九)豪曹に冠たり、名(二六〇)巨闕よりも珍く、鄭を指せば則ち三軍(二六一)白首、晉を麾げば則ち千里流血す。豈ただ水には蛟鴻を截り、陸には奔駟を灑ち、(二六二)浮翮を斷ちて以て工となし、(二六三)重甲を絕ちて利と稱すと云爾ふのみならんや。若し其靈寶は、則ち(二六四)舒辟方なく、奇鋒模を異にし、形(二六五)薛燭を震かし、光風胡を駭かし、價(二六六)三鄉を兼ね、聲二都より貴し。或は名を馳せて(二六七)秦を傾け、或は夜飛んで吳を去る。是を以て功(二六八)萬載に冠し、威無窮に曜き、之を揮ふ者は前なく、之を擁する者は身雄なり。以て(二六九)九國を從服し、橫に(二七〇)八戎を制すべし。(二七一)爪牙景附し、(二七二)函夏風を承く。此れ蓋し(二七三)希世の神兵なり。子豈能く我に從つて之を服せんかと。公子曰く、余病んで未だ能はざ

【二五九】豪曹。劍の名。

【二六〇】巨闕。劍の名。

【二六一】白首。白頭なり。越絕書に「楚王鐵劍三枚を作る、晉鄭聞いて之を求むれども得ず師を興して楚城を圍む、楚王太阿の劍を引き城に登りて之を麾く、三軍破敗し血を千里に流し、晉鄭の軍頭畢く白し」とあり。

【二六二】浮翮。飛鳥なり。

【二六三】重甲。堅甲なり。

【二六四】舒辟。舒は伸、辟は疊なり。方は常なり。

【二六五】薛燭、風胡。劍を鑑定する者の名。

【二六六】三鄉。越絕書に「句踐薛燭に純鈎を示して曰く、客之を買はんとする者あり、市の鄉二、駿馬千匹、千戸の都二あらば可ならんか云云」とあり。

【二六七】秦を傾く。吳に湛盧の劍あり、夜飛んで去る、楚王之を得、秦求むれども與へず。事越絕書に見ゆ。此れ先づ吳を去りて後秦を傾くるなり、今秦を先にするは韻を取るが爲なり。

【二六八】萬載。萬年なり。

【二六九】九國。九州なり。

【二七〇】八戎。八方の戎狄。

【二七一】爪牙。英雄なり。

【二七二】函夏。中國なり。

【二七三】希世。世に稀なること。神兵は靈劍。

るなりと。

【大意】大夫曰く、楚の陽劍は歐冶の作る所なり。銅鐵の精なるを取り、千鍛萬錬して始めて成る。陽には文章ありて陰は無地なり。その文章星の連るが如く、光彩水の流るるが如く、古名劍と雖も復た比すべからず。豈ただ水には龍鴻を截り、陸には奔馬を撃つのみならんや。且つ舒卷常ならず、形狀凡ならず。故に其功萬歳に傳はり、威無窮に及び、之を揮へば敵敢て前まず、之を執れば雄長となり、夏夷を制馭するに足り、天下の英雄皆來り就き、四方風を望んで懼れざるはなし。是れ稀世の靈劍なり。足下之を佩服せんことを願ふかと。公子曰く、予病んで未だ能はざるなりと。（以上第五章）

大夫曰く、(一七四)天驥の駿は逸態超越なり。氣を靈淵に禀け、精を(一七五)皎月に受け、(一七六)眸瞯黑照して、(一七七)玄采紺發し、沫は紅を揮ふが如く、汗は(一七八)血を振ふが如く、(一七九)秦青も其衆尺を識る能はず、(一八〇)方堙も其の滅ゆるが若きを視る能はず。爾して乃ち(一八一)雲軒を巾り、朝霧を踐み、(一八二)春衢に赴き、秋御を整へ、蚪踊螭騰、麟超龍翥し、山を望んで載

【一七四】天驥。天馬なり。
【一七五】皎月。明月なり。
【一七六】眸瞯。目のヒトミ。
【一七七】玄采。黑色なり。紺は深青にして赤を含める色なり。
【一七八】血を振ふ。大宛の馬は血を汗すといふ。
【一七九】秦青。二人の名、よく馬を相す。衆尺は衆相及び尺度。
【一八〇】方堙。人の名。よく馬を相す。
【一八一】雲軒。雲氣を畫ける車。
【一八二】春衢。春路なり。

ち奔り、林を覩て載ち赴き、氣盛に怒發し、星飛電駭し、志九州を陵ぎ、勢四海を越え、影形に及ばず、塵起るに暇あらず、(一八三)浮箭未だ移らざるに、再び千里を踐む。爾して乃ち(一八四)天垠を踰え、地隔を越え、(一八五)汗漫の游ばざる所を過ぎ、(一八六)章亥の未だ跡せざる所を躡む。(一八七)陽烏も之が爲に羽を頓し、(一八八)夸父も之が爲に策を投ず。斯れ蓋し天下の(一八九)儁乘なり。子豈我に從つて之を御せんかと。公子曰く余病んで未だ能はざるなりと。

【大意】大夫曰く、天馬は形態奇逸なること衆馬にまさり、靈淵の氣を受け、明月の精を受けて生れ、瞳子黑く輝き、毛色黑光を放ち、紅の沫を嚙み、血色の汗を流し、秦靑方堙の如き善く馬を相する者と雖も、その尺寸遲速衆相を知る能はず。之に車を駕し春路秋郊を馳すれば、疾きこと龍麟の飛ぶが如く、影其形に隨ふに及ばず、塵起るに暇あらず。刻未だ移らざるに、旣に千里を過ぐ。陽烏も之が爲に羽を下し、夸父も驚いて杖を投ず。此れ誠に天下の駿良なり。足下此馬を御せんことを願ふかと。公子曰く、余病んで未だ能はざるなりと。(以上第六章)

大夫曰く、(一九〇)大梁の黍、(一九一)瓊山の禾、(一九二)唐稷其根を播き、

【一八三】浮箭。漏刻の箭なり。
【一八四】天垠。天涯なり。
【一八五】汗漫。能く天に游ぶ者。
【一八六】章亥。大章と豎亥となり亦行步に速なる人。
【一八七】陽烏　日中の烏なり。
【一八八】夸父。日と競走せる人。
【一八九】儁乘。駿馬なり。
【一九〇】大梁。郡名、其地黍を出す。
【一九一】瓊山。山海經に「崑崙の上に木禾あり、長さ五尋大き

(一九三)農帝其華を嘗む。爾して乃ち(一九四)六禽の殊珍、(一九五)四膳の異肴あり。海の(一九六)錯を窮め、陸の(一九七)毛を極め、(一九八)伊公鼎に爨ぎ、(一九九)庖子刀を揮ひ、味(二〇〇)九沸を重ね、和(二〇一)勺藥を兼ね、(二〇二)晨鳧露鵠、霜鶏黄雀あり。(二〇三)圜棪星のごとく亂れ、(二〇四)方丈華のごとく錯り、(二〇五)封熊の蹯、(二〇六)翰音の跖、(二〇七)鸏鸍猩脣、(二〇八)髦殘象白、靈淵の龜、(二〇九)萊黄の鮐、(二一〇)丹穴の鷚、(二一一)玄豹の胎あり。燀るに秋橙を以てし、酟ゆるに春梅を以てし、接るに(二一二)商王の箸を以てし、承くるに(二一三)帝辛の杯を以てし、(二一四)范公の鱗九溪より出で、(二一五)赬尾丹鰓、(二一六)紫翼青鬐あり。爾して乃ち(二一七)支離に命じて霜鍔を飛ばさしめ、紅肌綺の

さ五園」とあり。

【一九二】唐稷。唐堯の時后稷農官となり百穀を播く。

【一九三】農帝。神農百草の實を嘗め、人に教へて穀を食はしむ。

【一九四】六禽。鳫鶉鷃雉鳩鴿なり。

【一九五】四膳。四時の食なり。

【一九六】錯。雜なり。書經に「海物惟れ錯る」とあり。

【一九七】毛。草なり。

【一九八】伊公。伊尹なり、初め料理人として殷の湯王に仕ふ。

【一九九】庖子。庖丁なり，古の料理人の名。

【二〇〇】九沸。呂氏春秋に「伊尹湯に說いて曰く、凡そ味の本は水最も始たり，五味三和九沸九變、火の紀たり」とあり。

【二〇一】勺藥。五味の和なり。

【二〇二】晨鳧。以下皆鳥の名。

【二〇三】圜棪。圓き食卓。

【二〇四】方丈。一丈四方に食器を竝ぶること。

【二〇五】封熊。大熊なり。

【二〇六】翰音。雞なり。

【二〇七】鸏鸍。燕の股。猩脣は猩猩の脣。

【二〇八】髦殘。髦は髦牛、殘は蓋し煮肉の異名。象白は象の脂。

【二〇九】萊黃。地名なり。鮐は魚の名。

【二一〇】丹穴。山の名。

【二一一】玄豹。黒豹。

【二一二】商王。殷の紂王。紂象牙の箸を作る。

【二一三】帝辛。紂なり。紂玉杯を作る。

【二一四】范公。范蠡なり。蠡が養魚の浦に九溪なり。

【二一五】赬尾。赤き尾。丹鰓は赤きアギト。

【二一六】紫翼。紫のヒレ。

如く散じ、(三一八)素膚雪の如く落つ。(三一九)婁子の豪も其細を厠ふる能はず、秋蟬の翼も其薄に擬するに足らず。繁肴既に闋りて亦(三二〇)寒羞あり。(三二一)商山の果、(三二二)漢皐の榛、(三二三)龍眼の房を析き、椰子の殼を剖き、芳旨萬選し、意を承けて代ゝ奏む。乃ち荊南の(三二四)烏程、(三二五)豫北の竹葉あり。(三二六)浮蟻星のごとく沸き、飛華蓱のごとく接る。(三二七)玄石其味を嘗め、(三二八)儀氏其法を進め、(三二九)罍を傾くると一朝にして、以て(三三〇)流湎千日なるべし。(三三一)箪醪川に投ずれば、三軍をして捷を告げしむべし。斯れ人神の(三三二)歆羨する所、觀聽の(三三三)煒曄なり。子豈能く彊め起きて之を(三三四)御せんかと。公子曰く、(三三五)口爽の饌に耽り、(三三六)腊毒の味を甘しとし、腐腸の藥を服し、(三三七)亡國の器を御するは、子

【三一七】支離。古の居人なり。霜鍔は上文に見ゆ。

【三一八】素膚。白き膚。

【三一九】婁子。古の明目者離婁。豪は毫よく秋毫の末を見るなり。

【三二〇】寒羞。果實の類。

【三二一】商山。山の名。

【三二二】漢皐。漢水の畔。榛は果の名。

【三二三】龍眼、椰子。果の名。

【三二四】烏程。地名、美酒を出す。

【三二五】豫北。豫章郡の北。竹葉は酒の名。

【三二六】浮蟻。酒上に浮ぶ滓。

【三二七】玄石。古の能く酒味を知る者。

【三二八】儀氏。儀狄なり。古の善く酒を造る者。

【三二九】罍。酒樽。

【三三〇】流湎。醉ふこと。

【三三一】箪醪。一樽の酒。黃石公記に「昔良將の兵を用ふるや人一箪の醪を饋るものあれば河に投じ衆をして流を迎へて之を飲ましむ、而して三軍爲に死を致さんことを願ふ」とあり。

【三三二】歆羨。うらやむこと。

【三三三】煒曄。盛なる貌。

【三三四】御。食ふこと。

【三三五】口爽。老子に「五味は人の口をして爽はしむ」とあり爽は傷なり。

【三三六】腊毒。國語に「厚味は寔に腊毒」とあり。腊は久なり。

【三三七】亡國の器。玉杯象箸の類。

大夫の榮とする所なりと雖も、故に亦吾人の畏るる所なり。余病んで未だ能はざるなりと。

【大意】大夫曰く、大梁の黍、瓊山の禾を以て飯となし、海陸の美味を供へ、種種の調理を加へ、象牙の箸を以て之を取り、玉杯を以て之を承け、繁多の膳食既に終れば、亦寒涼の滋味あり。香美の果幾度か選擇し、意の欲するがままに代る代る之を進む。又美酒の玄石其味を嘗め、儀狄の法に從つて釀せるあり。一たび之を飲めば、醉ふこと千日に亙り、一樽を川に投ずれば、士氣忽ち奮ひて捷を奏す。斯の滋味と美酒とは、人神の共に飲食せんことを願ふ所にして、觀る者の共に盛美とする所なり。足下彊め起きて之を飲食せんことを願ふかと。公子曰く、口を爽ふの美味を食ひ、久毒の厚味を甘しとし、腸を腐らすの滋味を食ひ、亡國の器物を用ふるは、世人の榮とする所なれども、予輩の畏れて愼む所なり。余病みて之を飲食する能はざるなりと。(以上第七章)

大夫曰く、蓋し(二三八)有晉の皇風を融するや、(二三九)金華徵を啓き、(二四〇)大人作るあり。明を繼ぎて代る照し、天に配して(二四一)光宅す。其の德を基とするや、(二四二)姬公の岐に處るより隆に、其の仁を垂るるや、(二四三)有

【二三八】有晉。晉朝をいふ。有は意義なし。融は通なり。
【二三九】金華。晉は金德の王なり故に金華といふ。徵は應なり。
【二四〇】大人。天子をいふ。
【二四一】光宅。光は大、宅は居ること。
【二四二】姬公。周の文王。岐は山の名。
【二四三】有殷。殷の湯王。亳は湯の都。

殷の亳に在るより富み、(二四四)南箕の風も、其化を暢ぶる能はず、(二四五)離畢の雲も、以て其澤を豐にするなし。(二四六)皇道煥炳として、(二四七)帝載緝熙たり。氣を導くに樂を以てし、德を宣ぶるに(二四八)語を以てし、教(二四九)雲官の世よりも淸み、治(二五〇)鳥紀の時よりも穆ぎ、(二五一)王猷四に塞り、(二五二)函夏謐寧なり。(二五三)丹冥烽を投じ、(二五四)靑徼警を釋き、馬を糞車の轅に却け、德を(二五五)昆吳の鼎に銘し、(二五六)羣萠素に反り、(二五七)時文載ち郁たり。耕父畔を推り、(二五八)魚豎陸を讓り、樵夫(二五九)危冠の飾を恥ぢ、(二六〇)輿臺短後の服を笑ふ。六合時れ邕ぎ、(二六一)巍巍蕩蕩たり。(二六二)玄齠巷に歌ひ、(二六三)黃髮擊壤し、(二六四)羲皇の繩を解き、

【二四四】南箕。星の名、風をつかさどる。風は物を養ふ所以なり。

【二四五】離畢。畢は星の名、雨をつかさどる。離は著なり。月行いて畢に著けば卽ち雨ふる雨は以て物を潤すべし。

【二四六】皇道。大道なり。煥炳は昭明なり。

【二四七】帝載。帝の事業。緝熙は安廣なり。

【二四八】語。一本詩に作る。

【二四九】雲官。黃帝の時、雲を以て官を紀す。

【二五〇】鳥紀。少皞の時、鳥を以て官を紀す。

【二五一】王猷。王道なり。

【二五二】函夏。中國なり。謐寧は安靜なり。

【二五三】丹冥。南方の遠處。

【二五四】靑徼。東方なり。

【二五五】昆吳。墨子に「昔夏金を山に採り以て鼎を昆吳に鑄しむ」とあり。

【二五六】羣萠。衆民なり。素は素樸。

【二五七】時文。當時の禮樂。郁は美なり。

【二五八】漁豎。漁夫なり。

【二五九】危冠。高冠なり。

【二六〇】輿臺。賤人なり。短後は軍士の服。

【二六一】巍巍。功高き貌。蕩蕩は德廣き貌。

【二六二】玄齠。黑髮の童子。堯微服して康衢に遊び童謠を聞く曰く「我が烝民を立つるは爾の極にあらざるはなし、識らず知らず帝の則に順ふ」と。

【二六三】黃髮。老人なり。堯の時擊壤の歌あり、曰く「日出でて作し日入りて息ふ、帝力我に於て何かあらんや」と。

【二六四】羲皇。伏犧なり。伏犧氏八卦を畫し以て結繩の政に代

(二六五)陶唐の象を錯く。若し乃ち(二六六)華裔の夷、(二六七)流荒の貊、語(二六八)輶軒に傳はらず、(二六九)地正朔を被らざるも、(二七〇)駿奔稽顙し、(二七一)質を委し譯を重ねざるはなし。時に(二七二)昆蚑恵に感じ、思ひて擾れざるはなく、苑には九尾の禽を戯れしめ、囿には三足の烏を棲ましむ。鳴鳳の林に在るは、黄帝の園よりも夥く、(二七三)有龍の淵に游ぶは、(二七四)孔甲の沼よりも盈てり。萬物(二七五)烟熅として、天地(二七六)交泰し、義懷內なく、化感外なし。林には(二七七)褐を被るものなく、山には(二七八)韋帶せるものなし。皆象(二七九)百工に刻せられ、兆(二八〇)靈蔡に發し、(二八一)搢紳濟濟として、(二八二)軒冕藹藹たり。功造化と流を爭ひ、德(二八三)二儀と大を

ふ。

【二六五】陶唐。堯なり。堯象刑を作る。象は法なり。

【二六六】華裔。華は中國、裔は遠なり。

【二六七】流荒。窮遠の地。貊は夷狄なり。

【二六八】輶軒。輕車なり。風俗通に「秦周常に八月を以て輶軒の使、異代の方言を採り之を祕府に藏す」とあり。

【二六九】正朔。暦なり。

【二七〇】駿奔。疾走なり。稽顙は頓首といふが如し。

【二七一】質を委す。身を屈すること。

【二七二】昆蚑。昆蟲なり。毛詩序に「文王の德鳥獸昆蟲に及ぶ」とあり。

【二七三】有龍。龍なり。有の字は意義なし。

【二七四】孔甲。夏の天子。

【二七五】烟熅。和氣なり。易經に「天地絪縕として萬物化醇す」とあり。

【二七六】交泰。交通なり。

【二七七】褐を被る。隱遁者なり。

【二七八】韋帶。野人の帶なり。

【二七九】百工。書經に「高宗夢に傅說を得、百工をして野に營求せしむ、乃ち象を審にし旁く天下に求む」とあり。

【二八〇】靈蔡。靈龜なり。兆はウラカタ。卜筮にあらはるること。史記に「呂尙年老い、漁釣を以て周の西伯を干す、西伯將に畋せんとす、之を卜するに曰く、獲る所は覇王の輔ならんと」。

【二八一】搢紳。笏を挿み大帶を垂るる大官。濟濟は衆盛の貌。

【二八二】軒冕。軒は車、冕は朝冠なり。大官をいふ。藹藹は美盛の貌。

【二八三】二儀。天地なり。

比ぶと。言未だ終らざるに、公子(二八四)蹶然として興きて曰く、鄙夫固陋にして、此の(二八五)狂狷を守る。蓋し理之を毀るありて、(二八六)寶を爭ふの訟解け、言之を怒るありて、(二八七)齊王の疾瘥えぬ。向に子我を誘ふに聾耳の樂を以てし、我を棲ましむるに(二八八)蔀家の屋を以てす。(二八九)田游馳蕩利刃駿足は、既に老氏の戒むる攸なり。吾人の欲する所にあらず。故に得て子に應ずることなし。皇風載ち蹇く、時聖道淳く、實を擧げては秋となし、藻を摛べては春となし、下に封ずべきの民あり、上に(二九〇)大哉の君あるを聞くに至る。余不敏と雖も、請ふ後塵に尋がんと。

【大意】大夫曰く、我が晉の天下に君たるや、金德に應じて聖人の德あり。天に配して大に中土に居り、德を尙ぶこと文王に過ぎ、仁を垂るること殷湯にまさり、風の物を養ひ雨の物を潤すが如く、鬱氣を引くに音樂を以てし、帝德を宣ぶるに歌詩を以てし、治化黃帝少皞の世にまさり、王道充塞して天下和靜なり。故に邊疆警戒を解き、走馬を却けて耕車に駕せしめ、鼎を鑄て其德

【二八四】蹶然。疾く起くる貌。
【二八五】狂狷。愚蒙なり。
【二八六】寶を爭ふ。淮南子莊子后解に曰く「人財を爭ひて相鬪ふ者あり、庚市子玉を其間に毀りて鬪ふ者止む」とあり。
【二八七】齊王の疾。呂氏春秋に「齊の閔王病む、宋に往いて文摯を迎へしむ、文摯王の疾を視て太子に謂つて曰く、王の病は怒を得ば愈ゆべし、愈ゆれば則ち摯を殺さん如何と、太子曰く、我れ王に請ひ必ず子を殺さざらんと。摯履を解かずして牀に登り衣を履んで王の疾を問ふ、王怒り叱して起つ、病卽ち愈ゆ云云」とあり。
【二八八】蔀家。幽闇なり。
【二八九】田游。狩獵なり。
【二九〇】大哉。論語に「大なる哉堯の君たるや云云」とあり。

を銘し、民俗純樸にして禮樂則ち美なり。是を以て推讓して爭はず、仕官を願ひて戎事を好まず。德化四夷に及び、重譯して來朝せざるはなく、恩澤禽獸に及び、惠に感じて擾れざるはなし。山林の隱者も皆出でて仕へ、野に遺賢なく、功德天地と其大を爭ふと謂ふも可なりと。言未だ畢らざるに、公子忽ち起きて曰く、余もと固陋にして此の愚蒙を守れるも、今晉德の盛美なるを聞き、怒解け疾痊え、恰も二人の寶を爭ふを見て、仙人自ら千金の璧を毀りて其爭を止め、文摯怒りて王の疾則ち痊えしが如し。嚮に足下は音樂、樓居、遊獵、利刃等の樂を以て我を誘へるも、此れ昔老子の戒めし所にして、予輩の好む所にあらず。余故に應ぜざりしなり。今晉德の善美にして、賢能を擧用すること、秋時の萬物實を成すが如く、禮樂文章を發すること、春時の榮を敷くが如く、下民皆善に遷りて封爵すべく、天子堯の大德あるを聞くに至り、自ら不敏を顧みず、大夫の後塵に從つて仕へんと欲するに至れりと。（以上第八章）

詔

詔　　漢の武帝

詔して曰く、蓋し非常の功あるは、必ず非常の人を待つ。故に馬或は（一）奔

【一】奔踶。馬奔り立ちて人を踶むなり。

踶して千里を致し、士或は㈡負俗の累ひありて功名を立つ。夫れ㈢泛駕の馬、㈣跅弛の士、亦之を御するに在るのみ。其れ州縣をして吏民の茂才異等あり、以て將相となし、及び㈤絶國に使せしむべき者を察せしめよと。

【大意】此れ郡國に詔して賢良を求むるなり。詔に曰く、非常の功は非常の人を待ちて始めて成る。故に馬の奔踶の癖ある者も、よく之を御すれば千里を致すべく、時俗の非難ある士も、能く之を用ふれば功名を立つるに足る。要は之を御するに在り。宜しく州縣に命じて、美材等輩に勝り、將相に任ずるに足り、遠國に使するに足る者を求め、之を薦めしむべきなりと。

【二】負俗の累。世俗の非難。
【三】泛駕。駕を覆すこと。
【四】跅弛。跅は逐、弛は廢なり。
【五】絶國。遠國なり。

賢良の詔　　漢の武帝

朕聞く、昔在唐虞は象を畫いて民犯さず、日月の燭す所㈠率俾せざるはなく、周の㈡成康は刑錯いて用ひず、徳鳥獸に及び、敎四海に通じ、海外㈢肅愼、北發、渠搜、氐羌來り服し、星辰孛れず、日月蝕せず、山陵崩れず、川谷塞がらず、麟鳳郊藪に在り、㈣河洛圖書を出すと。烏虖何を施し

【一】率俾。順ひ服すること。
【二】成康。成王康王。
【三】肅愼。以下皆國名。
【四】河洛。川の名。易經に「河

て此に臻るや。今朕宗廟に奉ふるを獲て、夙に興きて以て求め、夜に寐ねて以て思ひ、淵水を渉り未だ濟る所を知らざるが若し。猗歟偉なる歟。何を行ひて以て先帝の(五)洪業休德を彰し、上は堯舜に參り、下は(六)三王に配すべき。朕の不敏なる、德を遠くする能はず。此れ(七)子大夫の覩聞する所なり。賢良は古今王事の體に明なり。(八)策を受け問を察し、咸な書を以て對へ、之を篇に著せ。朕親ら覽ん。

【大意】是れ賢良の臣に詔して策問するなり。朕聞く昔堯舜の時、ただ五刑の象を畫いて之を服せしめ、以て刑罰に當るのみ、而して民乃ち敢て犯す者なく、日月の照す所皆順服せざるはなし。周の成康の世、刑置いて用ひざること四十年、德禽獸に及ぶ。故に聲敎遠く外夷に及び、天變地異その跡を絶ち、麟鳳佳瑞連に至りぬと。朕天子の位に卽き、夙夜之を思ふも未だ爲すべきの道を知らず。何を行はば以て先帝の盛德大業を彰し、以て堯舜三王に比するを得べき。諸子は古今の事に精通せり。宜しく朕が策問に對ふべし。

洛圖書を出し、聖人之に則る」とあり。

【五】洪業。大業なり。休德は美德。

【六】三王。禹湯武王。

【七】子大夫。賢良の人を指して言ふ。

【八】策。天子の質問書。

册

(一)魏公九錫を册する文

(二)潘元茂

(三)使持節丞相、領冀州の牧武平侯に制詔す。(四)朕不徳を以て少くして(五)閔凶に遭ひ、(六)西土に越在し(七)唐衛に遷る。此の時に當り(八)綴旒の若く然り。宗廟祀に乏しく、社稷位なく、(九)羣凶覬覦し、城邑を運帶す。一人尺土も、朕獲ることなし。卽ち我が高祖の命將に地に墜ちんとす。朕用て夙に興き(一〇)假寐し、厥心に震悼して曰く、惟れ祖惟れ父、(一一)股肱先正、其れ孰か朕が躬を恤ふると。乃ち天衷を誘き、(一二)丞相を誕育す。我が皇家を(一三)保乂し、弘に艱難を濟ふ。朕實に之に賴る。今將に君に典禮を授けんとす。其れ敬んで朕が命を聽け。

【一】魏公。曹操なり。册は符命なり、封爵等を授くる時の勅語なり。九錫は車馬、衣服、虎賁、樂器、納陛、朱戸、弓矢、鈇鉞、秬鬯を賜ふこと。
【二】潘元茂。潘勗、字は元茂、後漢の獻帝の時の人。
【三】使持節。以下皆曹操の官職なり。
【四】朕。後漢の獻帝。
【五】閔凶。父母の喪をいふ。
【六】西土。長安なり。越在は遠方に居ること。
【七】唐衛。唐は安邑、堯の居りし所、衛は河内をいふ。
【八】綴旒。旒は絲を以て玉を貫き冕の前後に垂るるもの。
【九】羣凶。多くの奸雄。覬覦は上位を冀望すること。
【一〇】假寐。衣冠を脱せずして寐ぬること。
【一一】股肱。輔弼の臣をいふ。先正は先賢。
【一二】丞相。曹操をいふ。誕育は生むこと。
【一三】保乂。安んじ治むること。

【大意】 朕今汝曹公に詔す。朕不德にして少くして父を喪ひ、都を離れて遠く他鄕に流離し、皇室の微弱なること、唯旒の懸るが如きのみ。且つ奸雄竝び起りて國土を兼幷し、朕は一民尺地も之を有する能はず。獨り心を傷めて祖宗臣僚の靈に祈り、其救を求む。遂に天心を感ぜしめ、曹公ここに生る。公よく皇室の艱難を濟ひ、朕實に其功德に依賴す。因つて公に授くるに典禮を以てせんとす。謹んで朕が命を聽け。

昔者(一四)董卓初めて國難を興す。(一五)羣后位を釋てて以て王室を謀る。(一六)君則ち攝進し、首として(一七)戎行を啓く。此れ君の本朝に忠なるなり。後(一八)黃巾天常に反易し、我が(一九)三州を侵し、平民に延くに及び、君又之を討ちて其跡を翦除し、以て(二〇)東夏を寧んず。此れ又君の功なり。(二一)韓暹、楊奉專ら威命を用ふ。又君が勳に賴り、其難を剋ち黜け、遂に許都を建て、其京畿を造し、官を設け、(二二)兆祀して、舊物を失はず。天地鬼神是に於て乂るを獲たり。此れ又君の功なり。(二三)袁術僭逆にして淮南に肆なり、君が靈を懾れ憚る。(二四)丕顯なる謀を用ひ、(二五)蘄陽の役に(二六)橋蕤首を授く。

【一四】董卓。靈帝を廢して弘農王となし獻帝を立つ。
【一五】羣后。諸侯なり。
【一六】君。曹操をいふ。攝は進なり。
【一七】戎行。軍行なり。
【一八】黃巾。賊軍の名。天常は常道。
【一九】三州。青州交州東平郡也。
【二〇】東夏。洛陽をいふ。
【二一】韓暹、楊奉。竝に董卓の將なり。
【二二】兆祀。壇を築きて祭ると。
【二三】袁術。字は公路、帝を淮南に稱す。
【二四】丕顯。明顯なり。
【二五】蘄陽。地名。
【二六】橋蕤。袁術の將なり。

（二七）稜威南厲し、術以て殞潰す。此れ又君の功なり。戈を廻らして東を指せば、（二八）呂布戮に就く。（二九）乘軒將に返らんとして、（三〇）張楊沮斃し。（三一）眭固罪に伏し、（三二）張繡稽伏す。此れ又君の功なり。

【大意】昔董卓の國難を興すや、諸侯皆其私政を棄てて皇室を佐け、安定の策を謀る。公乃ち先づ軍行を啓き、以て亂を除く。此れ公の忠なり。其後黄巾の賊起り、天理を亂し、我が三州を侵略し、禍人民に及ぶや、公又之を絶滅し、以て洛陽を安んず。時に韓暹、楊奉專ら威を關中に擅にす。公又其難を戡定し、遂に都を許に遷し、宮を設け職を分ち、壇を築いて祭祀を營み、漢家の禮樂その舊を失はず。袁術の淮南に僭號するや、公又之を討つ。術、公の威靈を畏れ、軍を棄てて走る。公因つて其將橋蕤を蘄陽に斬り、威力淮南に及びて袁術遂に死す。更に兵を廻らして呂布を殺し、歸途また張楊、眭固、張繡を破り、或は殺し或は降す。此れ皆公の功なり。

（三三）袁紹常に逆ひ、社稷を危うせんことを謀り、其衆を（三四）憑恃し、兵を稱げて内に侮る。此の時に當り、王師寡弱にして、天下（三五）寒心し、固志あるなし。君大節を執り、精白日を貫き、其

【二七】稜威。威力なり。南厲は淮南に震ふこと。
【二八】呂布。建安三年曹操東征して之を破る。
【二九】乘軒。車なり。
【三〇】張楊。董卓の將なり。
【三一】眭固。張楊の將なり。
【三二】張繡。驃騎將軍濟の族子なり、衆を領して宛に屯す。稽伏は拜伏なり。
【三三】袁紹。字は本初、獻帝紹を以て太尉となす、會ゝ曹操天子を迎へて許に都す、紹精兵十萬を率ゐて將に許を攻めんとす。
【三四】憑恃。自ら恃むこと。

武怒を奮ひ、諸の神策を運らし、(三六)官度に屆るに致んで、大に(三七)醜類を殲し、我が國家をして危墜を拯はしむ。此れ又君の功なり。師を(三八)洪河に濟し、(三九)四州を拓き定む。(四〇)袁譚高幹咸な其首を梟す。(四一)海盜奔迸し(四二)黑山軌に順ふ。此れ又君の功なり。(四三)烏丸三種亂を二世に崇ね、袁尙之に因り塞北に逼據す。(四四)馬を束ね車を懸け、一征して滅す。此れ又君の功なり。劉表背き誕き貢職を供せず、王師路に首ひ、威風(四五)先逝し、百城八郡質を交へ膝を屈す。此れ又君の功なり。(四六)馬超成宜惡を同うして相濟し、(四七)河潼に濱據し、欲を逞うする所を求む。之を(四八)渭南に殄し、(四九)馘を獻ずること萬計、遂に邊城を定め、戎狄を撫和す。此れ又君の功なり。(五〇)鮮卑丁令譯を重ねて至り、(五一)單于白屋吏を請ひ

【三五】寒心。戰慄し懼ろること。固志は堅固なる志。

【三六】官度。地名、一に官渡に作る。建安五年曹操官渡に軍す。紹が衆大に潰ゆ。

【三七】醜類。惡類、袁紹の軍を指す。

【三八】洪河。大河なり。

【三九】四州。靑冀幽幷の四州。

【四〇】袁譚。紹の長子なり、靑州を領す、建安十年曹操之を斬る。高幹は紹の甥なり、幷州の牧を領す。

【四一】海盜。曹操東のかた海賊管承を征し、淳于に至り樂進をして之を擊破せしむ。

【四二】黑山。賊の據りし地。軌に順ふとは降りしこと。

【四三】烏丸三種。北狄なり。魏志に「三郡の烏丸、天下の亂を承け幽州を破り漢民を略有す、袁紹皆其首豪を立てて單于となす、故に袁尙兄弟之に歸し數〻塞に入りて害をなす」とあり。

【四四】馬を束ね車を懸け。險阻を行くこと。

【四五】先逝。軍行に先だちて威風の聞ゆること。

【四六】馬超、成宜。二人關中に據りて反す。

【四七】河潼。二川の名。

【四八】渭南。渭水の南。

【四九】馘。截りたる耳。戰勝てば死人の耳を截りて君に獻ず。

【五〇】鮮卑丁令。二國の名。

【五一】單于白屋。單于は後世の契丹、白屋は靺鞨。

職に帥ふ。此れ又君の功なり。

【大意】袁紹常道に悖り、其衆を恃み、內に天子を輕侮するの心を抱く。此時王師微力にして戰士堅固の志なし。公の精誠天日を貫き、武略を運らし、大に賊徒を官渡に破り、國家の危墜を免れしむ。更に大河を濟りて軍を進め、四州の地を拓き、袁譚高幹二人の首を梟す。又東海の賊を討つや、一は奔散し一は來り降る。又北狄烏丸二世亂をなし、袁尙之に因りて塞北に據るや、公險阻を越えて行き、一征して之を滅す。劉表國恩に背き貢賦を供せず。公之を征するや、遂に膝を屈して降る。又關中の賊馬超成宜を渭水の南に殄し、馘を獻ずること萬を以て算ふ。かくて邊城を定め戎狄を撫し、外夷來り服し、爲に吏を置かんことを請ふに至れり。此れ皆公の功なり。

【五二】班敍。秩序を立つること。
【五三】旁施。あまねく施す。
【五四】回慝。奸惡なり。
【五五】敦崇。尊崇なり。
【五六】皇天。天帝なり。
【五七】蔑如。遙に劣るをいふ。

君天下を定むるの功あり、重ぬるに明德を以てし、海內を（五二）班敍し、風俗を宣美し、勤教を（五三）旁施し、刑獄を恤愼し、吏に苛政なく、民（五四）回慝せず、帝族を（五五）敦崇し、絕世を援繼し、舊德前功咸く秩でざるはなし。伊尹（五六）皇天に格り、周公四海に光くと雖も、之に方ぶれば（五七）蔑如たり。朕聞く先王竝に明德を建て、之に胙ゆるに土を以てし、之に分つに民を以てし、其寵章を崇くし、其禮物を備

ふるは、王室に(五八)蕃衞とし、厥世を(五九)左右する所以なりと。其れ(六〇)周成に在り、管蔡靖ならず。難に懲り功を念ひ、乃ち邵康公をして齊の太公に(六一)履を錫はしめ、東は海に至り西は河に至り、南は穆陵に至り北は無棣に至り、(六二)五侯九伯實に之を征するを得しめ、世〻太師を祚い以て東海に表せしむ。爰に襄王に及び、亦楚人王職に供せざるあり。又(六三)晉文に命じ登げて(六四)侯伯たらしめ、錫ふに(六五)二輅、虎賁、鈇鉞、秬鬯、弓矢を以てし、大に(六六)南陽を啓き、世〻盟主とならしむ。故に周室の壞れざるは、繄二國に是れ頼る。今君丕顯の德を稱げ、明に朕が躬を保んじ、天命に奉答し、(六七)弘烈を導揚し、爰の(六八)九域を綏んじ、率俾せざるはなし。功(六九)伊周よりも高く、賞齊晉よりも卑し。朕甚だ恧づ。朕(七〇)眇身を以て兆民の上に託し、永く厥艱を思ふこと淵水を渉るが若し。君の濟す攸にあらずんば、朕任ふるなし。

【大意】公既に天下を定むるの功あり、又之に重ぬるに明德を天下に敷き、吏に苛政なく民奸惡なきを致す。伊尹、周公の德も之に比するに足らざるなり。朕聞く先王は明德ある人を建て、之に邦

【五八】蕃衞。援護なり。
【五九】左右。輔翼すること。
【六〇】周成。周の成王。管蔡は武王の弟管叔、蔡叔なり。
【六一】履。領地なり。
【六二】五侯。公侯伯子男。九伯は九州の長。
【六三】晉文。晉の文公。
【六四】侯伯。諸侯の長。
【六五】二輅。二種の車。虎賁は勇士。鈇鉞は兵器。秬鬯は黑黍の酒、宗廟の祭に用ふるもの。
【六六】南陽。地名。
【六七】弘烈。大業なり。
【六八】九域。九州なり。
【六九】伊周。伊尹周公。
【七〇】眇身。微力といふが如し。

土を與へ禮章を賜ひ、以て王室を援護せるの功に報ゆ。故に周の成王の時、管叔蔡叔の亂をなすや、齊の太公の功を念ひ、邵康公に命じて之に領土を賜ひ、諸侯を專征するを得しめ、世々太師の官を與へて、東海に表たらしむ。其後襄王の時に至り、楚人貢賦を供せざるや、又晉の文公に命じて諸侯に長たらしめ、二輅以下の器物を賜ひ、南陽の地を與へ、世々盟主たらしむ。周室の壞れざるは實に齊晉二國の力なり。今公明顯の德を以て、朕を輔けて大業を成さしめ、天下率服せざるはなし。公の功德伊尹周公に過ぎ、而も賞は齊晉に劣れり。是れ朕の大に恥づる所なり。況んや朕微力を以て、天子の位に在り、常に艱難を思ひて危懼を抱き、君の援護にあらずんば、朕の能く任ふる所にあらざるをや。

今冀州の河東、河內、魏郡、趙國、中山、鉅鹿、常山、安平、甘陵、平原、凡て十郡を以て、君を封じて魏公となし、使持節御史大夫(七一)慮をして、君に印綬、册書、金虎符第一より第五に至る、竹使符第一より第十に至るまでを授けしむ。(七二)右君に(七三)玄土を錫ひ苴ぐに(七四)白茅を以てす。爰に爾の龜を契き、用て(七五)冢社を建てしむ。昔在周室、畢公毛公入りて卿佐となり、周邵(七六)師保と

【七一】慮。郗慮、字は鴻豫、山陽の人。
【七二】右。一本此字なし。
【七三】玄土。黑土なり。古諸侯を封するには各方土を取り苴くに白茅を以てし以て社を作らしむ。東方は青、南方は赤、西方は白、北方は黑、魏は北に在り故に玄といふ。
【七四】白茅。白きチガヤ。

して出でて（七七）二伯となる。外內の任君實に之に宜し。其れ丞相を以て冀州の牧を領すること故の如し。今更に（七八）傳璽を下す。肅んで朕が命を將ひ、以て華夏に允にせよ。其れ故の傳武平侯の印綬を上つれ。

【大意】今因つて冀州の十郡を以て公を封じて魏公となし、郗慮に命じて印綬冊書等を公に授けしめ、又黑土を賜ひ、敷くに白茅を以てし、龜甲を灼きて卜し、以て大社を建てしむ。昔周王の時畢毛二公入りて卿となり、周邵二公出でて諸侯に長たり。今公宜しく內外を兼ね統ぶべし。丞相を以て冀州の牧を統領すること故の如くなれ。今更に魏公の印を授く。もと授けし所の武平侯の印は之を返納すべし。

今又君に九錫を加ふ。其れ敬んで後命を聽け。君が禮律を經緯し、民の軌儀となり、職業に安んじて（七九）遷志あるなからしむるを以て、是を用て君に（八〇）大輅戎輅各〻一、（八一）玄牡二駟を錫ふ。君分を勸め本を務め、民を嗇みて（八二）昏作せしめ、粟帛滯積して大業惟れ興る。是を用て君に（八三）袞冕の服を錫ひ、赤舄副へたり。君謙讓を（八四）敦尚し、民をし

【七五】冢社。大社なり。
【七六】師保。邵公太保となり、周公太師となる。
【七七】二伯。伯は諸侯の長。
【七八】傳璽。魏國を傳ふるの印。
【七九】遷志。心を他に遷すこと。
【八〇】大輅。金輅なり。戎輅は兵車。
【八一】玄牡。黑馬なり。二駟は八匹。
【八二】昏作。勉めて働くこと。
【八三】袞冕。禮服なり。赤舄は赤履。
【八四】敦尚。厚くしたつとぶ。

て興行し、少長禮あり、上下咸く和せしむ。是を用て君に(八五)軒懸の樂、(八六)六佾の舞を錫ふ。君風化を翼け宣べ、爰に四方に發し、遠人(八七)面を回らし、華夏充實す。是を用て君に(八八)朱戶を錫ひ以て居らしむ。君その(八九)明哲を研き、帝の難んずる所を思ひ、才を官にし賢に任じ、羣善必ず擧ぐ。是を用て君に(九〇)納陛を錫ひ以て登らしむ。君國の(九一)均を秉り、色を正し中に處り、(九二)纖毫の惡も抑退せざるはなし。是を用て君に虎賁の士三百人を錫ふ。君(九三)天刑を糾し虔み、厥の有罪を章かにし、(九四)闕を犯し紀を干せば、(九五)誅殛せざるはなし。是を用て君に鈇鉞各〻一を錫ふ。君龍驤虎視して、旁く(九六)八維を眺、掩に逆節を討ち、四海に折衝す。是を用て君に(九七)彤弓一、彤矢百、(九八)玈弓十、玈矢千を錫ふ。君溫恭を以て基となし、孝友を德となし、明允篤誠朕が思を感ぜしむ。是を用て君に秬鬯(九九)一卣を錫ひ、(一〇〇)珪瓚副へたり。魏國に丞相以下羣卿百僚を置くは、皆漢初諸王の制の如くせよ。君往いて欽めや、敬んで朕が命を服ひよ。簡に爾が衆を恤へ、時に(一〇一)庶功

【八五】軒懸。諸侯の樂なり。
【八六】六佾。佾は列なり。六列の舞。
【八七】面を回らす、臣服するを。
【八八】朱戶。赤戶なり。
【八九】明哲。明智なり。書經に「皐陶曰く、人を知るに在りと、禹曰く、咸く時の若きは惟れ帝も其れ之を難んず」とあり。帝は堯なり。
【九〇】納陛。階段なり。
【九一】均。政事なり。
【九二】纖毫。微細なり。
【九三】天刑。天子の刑法。
【九四】闕紀。禁制なり。
【九五】誅殛。誅罰なり。
【九六】八維。八方の隅。
【九七】彤弓。朱塗の弓。
【九八】玈弓。黑塗の弓。
【九九】一卣。一樽なり。
【一〇〇】珪瓚。玉の杓。
【一〇一】庶功。衆功なり。

を亮にし、用て爾の顯德を終へ、我が高祖の（一〇三）休命を對揚せよ。

【大意】今又公に九錫を加ふ。公よく禮樂を脩め、民の儀表となり、民をして其職に安んじ、心を遷さざらしむ。故に輅馬を錫ふ。公また職分を勸め、農事に勉めしめしを以て、粟帛多く產す。因つて袞冕の服と赤舃とを錫ふ。公また謙讓を以て民を導き、上下咸く和せしむ。故に舞樂を錫ふ。公また朕を輔けて風化を宣布し、遠人來り服し、中國殷富なり。又賢能を擧げて官に就かしむ。因つて朱戶納陛を錫ふ。公また國政を秉るに、大中の道を以てし、微細の惡も之を抑退せざるはなし。因つて虎賁三百人を錫ふ。又刑罰を謹み、四方を討伐す。因つて鈇鉞弓矢を錫ふ。また溫恭孝友の情朕を感ぜしむ。故に秬鬯と玉杓とを錫ふ。魏國に丞相以下の官を置くは、漢の諸侯の制の如くすべし。公往き愼んで朕が命を用ひ、朕が高祖の美命を明にし、漢の社稷を安んずべし。

【一〇三】休命。天より受けたる美命。對揚は天意に答へ揚ぐること。

令

（一）宣德皇后の令　任彥升

宣德皇后敬んで（二）

【一】宣德皇后。姓は王氏、諱は寶明、琅邪臨沂の人。齊の武帝、文惠太子の爲に后を納

具位に問ふ。夫れ功(三)不賞に在り、故に(四)庸勳の典蓋し闕く施造物に佇しければ、則ち謝德の途已に寡し。要は彊ひて之が名をなし、(五)荃宰をして寄するあらしめざるを得ず。(六)公實に天生の德、齊聖廣淵なり。(七)參辰を改めずして(八)九星仰止し、月月を易へずして(九)二儀貞觀す。在昔(一〇)晦明にして鱗を隱し翼を戢め、博く羣籍に通じて(一一)齒を一卷の師に讓り、(一二)劍氣雲を陵ぎて迹を萬夫の下に屈す。辯は天口を析てども言ふ能はざるに似、文は(一三)雕龍を擅にすれども成れば輒ち藁を削る。爰に(一四)弱冠に在り、首として(一五)弓旌に應じ、(一六)梁朝に客游すれば、則ち聲華籍甚し、名を(一七)宰府に薦む

ろ、鬱林王の位に卽くや尊んで皇太后となし、宣德宮と稱す、梁王蕭衍京邑を定め后を迎へて宮に入れ制を稱せしむ太后位を梁王に禪らんとす、王固辭す、沈約等太后に奏し任昉をして太后の令を作らしむ、梁王乃ち禪を受く。皇后太子の命を令といふ。

【二】具位。梁王蕭衍を指していふ。

【三】不賞。史記に「功天下を蓋ふ者は賞せられず」とあり

【四】庸勳。功勳なり。

【五】荃宰。君王をいふ。

【六】公。梁王を指す。

【七】參辰。星なり、參辰を改めずとは久時を經ざるをいふ。

【八】九星。九州をいふ。仰止の止は助辭。

【九】二儀。天地なり。貞觀は正しく視るなり。

【一〇】晦明。明を内に藏すること。

【一一】齒を讓る。推尊すること。

【一二】劍氣。勇氣なり。

【一三】雕龍。文章に巧なること。

【一四】弱冠。二十歲。

【一五】弓旌。詩經に「我を招くに弓を以てす」孟子に「大夫を招くに旌を以てす」とあり。

【一六】梁朝。漢の時、司馬相如枚乘の徒が梁の孝王の門に客遊せしに比し、梁王衍が巴陵王府の法曹となりしをいふ。

【一七】宰府。蕭衍の太尉となり

れば、則ち延譽自ら高し。(一八)隆昌の季年王に勤むること始めて著れ、(一九)建武の維新(二〇)締構斯に在り。功隆く賞薄く(二一)嘉庸疇ゆるなし。一馬の田、(二二)介山の志愈〻厲く、六百の秩、(二三)大樹の號斯に存す。

【大意】宣德皇后ここに梁王に問ふ。梁王の功極めて大なるを以て、却つて賞せられず。恩施既に隆くして造化に等しきを以て、謝恩の道なし。然れども强ひて酬謝の名をなし、君主をして寄託の意を表せしめざるを得ず。王の德は實に天生にして且つ廣深なり。故に暫くにして天下を定め、人皆其功德を仰がざるはなし。その微なるや、能く其明を包藏し、博く羣書に通ぜるも其師を推尊し、勇氣天を衝くも萬夫の下に屈し、辯は事理を分別すれども、言ふ能はざるが如く、文は巧麗なれども、成れば乃ち稿を削る。弱冠にして召聘に應じ、巴陵王に仕へて聲名を博し、遂に大尉に登りて美譽を揚げ、其後王事に勤勞して建武維新の事を畫策し、其功極めて大なるも、其賞甚だ薄し。然れども祿爵を辭し、介山馮異が己の功に伐らざるの心を以て心となせり。

しことをいふ。
【一八】隆昌。鬱林王の年號。季年は末年。
【一九】建武。齊の明帝の年號。
【二〇】締構。結合なり。
【二一】嘉庸。善功なり。
【二二】介山。介之推をいふ。左傳に「介之推祿を言はず、祿亦及ばず」とあり。
【二三】大樹。後漢書に「諸將竝び坐して功を論ず、馮異獨り大樹の下に屛き共に功を論ぜず、軍中號して大樹將軍となす」とあり。

旄を（二四）司部に擁するに及び、（二五）代馬敢て南に牧せず。（二六）轂を樊鄧に推せば胡塵嘗て夕に起ること罕なり。惟れ彼の（二七）狡童凶を窮め虐を極め、衣冠泯絕し、禮樂崩喪す。既にして旅に鞠げ衆に誓ひ、言に王室を謀る。（二八）白羽一たび麾きて（二九）黃鳥底し定む。甲既に鱗のごとく下り、車亦瓦のごとく裂く。天の（三〇）屆を致して（三一）羣后に拱揖す。豐功厚利得て稱するなし。是を以て祥光總て至り、（三二）休氣四に塞り、（三三）五老河に游び、飛星昴に入る。（三四）元功茂勳斯の若く盛なり。而も地（三五）四履よりも狹く、勢（三六）九伯よりも卑し。帝悪づるあり。（三七）輶軒萃り止る。今某位某甲等を遣し、茲の（三八）百辟を率ゐ人々をして其誠を致さしむ。庶くは（三九）匪席の旨遠からずして復せんことを。

【二四】司部。司州なり。
【二五】代馬。代は北胡なり。
【二六】轂を推す。天子將を遣す時は必ず跪いて其車轂を推す。樊鄧は二城の名。
【二七】狡童。東昏侯をいふ。
【二八】白羽。白旄なり。
【二九】黃鳥。地名なり。鬻子に「武王兵車を率ゐて以て紂を伐ち、黃鳥より起りて赤斧に至る」とあり。
【三〇】屆。誅なり。
【三一】羣后。百官なり。
【三二】休氣。祥瑞なり。
【三三】五老。論語比考讖に「帝堯首山に升り河渚を觀る、乃ち五老あり渚に游ぶ、飛んで流星となり上りて昴に入る」とあり。
【三四】元功。大功なり。
【三五】四履。履は領土なり。左傳に「昔我が先君太公に履を賜ひ、東は海に至り西は河に至り南は穆陵に至り北は無棣に至る」とあり。
【三六】九伯。九州の長なり。左傳に「昔我が先君太公に命じて曰く、五侯九伯汝實に之を征せよ」とあり。
【三七】輶軒。輕車の使。
【三八】百辟。百官なり。
【三九】匪席の旨。旨は意志なり詩經に「我が心席に匪ず、卷くべからず」とあり。

【大意】王出でて司州を鎭ずるに及び、胡馬敢て南牧せず。兵に將として樊鄧二城を守れば胡兵侵入せず。東昏侯の位に卽くや、暴虐を行ひ善良を誅戮し、禮樂悉く壞る。王乃ち軍旅に告げ恢復を謀り、凶徒忽ち滅ぶ。其の大功盡く說くべからず。故に祥瑞屢至れり。然も其領土は太公より狹く、其勢は侯伯より卑し。今某等を遣し、百官を率ゐて其誠信を披瀝し、天子の位を禪らしむ。庶くは從來の志を改め固辭するなからんことを。

敎

(一)宋公が張良の廟を脩むるが爲の敎　　傅季友

(二)綱紀、夫れ盛德泯びず、義(三)祀典に存す。(四)微管の歎、事を撫すること彌〻深し。(五)張子房道(六)黃中に亞ぎ、照(七)殆庶

【一】宋公。劉裕なり。晉の時宋公に封ぜらる。義熙十三年劉裕北伐して彭城を過ぎ張良の廟を脩めんとし、乃ち此敎を下す。諸侯の命を敎といふ。

【二】綱紀。主簿の官をいふ。敎は皆主簿之を宣す。故に先づ之を呼ぶ。

【三】祀典。常祭なり。

【四】微管。微は無なり。論語に「孔子歎じて曰く、管仲なかりせば吾其れ被髮左衽せん」とあり。

【五】張子房。張良、字は子房。

【六】黃中。易經に「君子は黃中にして理に通じ位を正し體に居る」とあり。

【七】殆庶。易經に「顏氏の子其れ殆ど庶幾きか」とあり。

に隣し。(八)風雲玄感、(九)蔚として帝師となり、(一〇)項を夷げ漢を定め、大に橫流を拯ふ。固より已に軌を(一一)伊望に參へ、德を(一二)如仁に冠たらしむ。若し乃ち神(一三)圯上に交り、道(一四)商洛に契ふ。顯默の際(一五)窅然として究め難く、淵流(一六)浩瀁として其端を測るなし。塗舊沛に次り、駕を(一七)留城に佇む。靈廟(一八)荒頓し、遺像(一九)陳昧す。跡を撫し人を懷ひ、永歎寔に深し。(二〇)大梁を過ぐる者、或は想を夷門に佇め、(二一)九原に游ぶ者は、亦隨會に流連す。之を若人に擬するに、亦以て云ふに足る。棟宇を改構し丹靑を脩飾し、(二二)蘋蘩行潦時を以て薦を致すべし。懷古の情を抒べ、(二三)不刊の烈を存せん。主者施行せよ。

【大意】夫れ盛德ある者は百世必ず之を祀る。吾れ張良の功を懷ふこと深し。彼の道

【八】風雲玄感。易經に「雲は龍に從ひ風は虎に從ふ」とあり、此れ感應を深くする也。

【九】蔚。盛なる貌。

【一〇】項。項羽。

【一一】伊望。伊尹及び太公望。

【一二】如仁。論語に「桓公諸侯を九合し兵車を以てせざるは管仲の力なり、其仁に如かんや、其仁に如かんや」とあり。

【一三】圯上。圯は土橋なり。張良嘗て下邳の圯上に於て老人に遇ひ、太公の兵法を授けらる。

【一四】商洛。商山の四皓。

【一五】窅然。深遠なり。

【一六】浩瀁。深廣なり。

【一七】留城。張良の封ぜられし地。

【一八】荒頓。荒廢なり。

【一九】陳昧。陳は古、昧は暗。

【二〇】大梁。地名。史記に「侯嬴年七十、家貧にして大梁夷門の監者となる、太史公大梁の墟を過ぎ其の所謂夷門を問ふ」とあり。

【二一】九原。晉の大夫を葬りし處。禮記に「趙文子九原に遊びて曰く、死して作くべくんば吾誰にか歸せん、君を利して其身を忘れず、身を謀りて其友を遺れず、我は則ち隨武子か」とあり。武子は卽ち士會なり、邑を隨に食む。

【二二】蘋蘩行潦。藻及び水。左傳に「蘋蘩の菜、行潦の水、鬼神に薦むべし」とあり。

【二三】不刊。不朽なり。烈は業。

は黄中に次ぎ、行は顔回に近く、肝膽相照して漢の高祖の師となり、項羽を滅して大亂を救ひ、功德伊尹管仲にまさる。圯上の老人と神交し、商山の四皓と默契す。其の廣深なること測り知るべからず。余今北伐して沛國に次り留城に佇るに、其廟荒壞して遺像塵に汙る。抑ゝ大梁を過ぐる者は侯嬴を懷ひ、九原に遊べば隨會を懷ふ。是れ實に人の情なり。今留城を經て豈この情なからんや。宜しく廟を脩理し、時を以て祀るべし。聊か懷古の情を表し、不朽の業を傳へん。主任者此の敎を宣下せよ。

(一)宋公が(二)楚の元王の墓を脩むるが爲の敎　傅季友

綱紀、夫れ賢を褒し德を崇べば、千載彌ゝ光り、本を尊び始を敬するは、義の隆なること遠きよりす。楚の元王、仁を積み德を基し、(三)蕃を斯境に啓き、(四)素風道業範を後昆に作せり。(五)本支の祚實に鄙宗に隆に、遺芳餘烈百世に奮ふ。而して(六)丘封翳然として墳塋翦るなし。遠きに感じ往を存し、慨然として永懷す。夫れ人を愛し

【一】宋公。劉裕なり。晉の時宋公に封ぜらる。
【二】楚の元王。漢の高祖の異母弟にして楚に封ぜらる。墓は彭城に在り。
【三】蕃。藩なり。斯境は彭城。
【四】素風。儉約純素の風。
【五】本支。本家及び分家。
【六】丘封。墳墓なり。翳然は荒蕪なり。

て樹を懷ひ、(七)甘棠すら且つ猶ほ翦るなし。墟墓を(八)追甄すれば、信陵も尙ほ或は泯びず。況んや(九)瓜瓞の興る所、源を開き本よりする者をや。墓に近き五家を(一〇)蠲復し、長く灑掃に給すべし。便ち施行すべし。

【大意】賢を崇べば千歲光輝を增す。祖先を敬するは古來の道なり。楚の元王は仁德を積みて此地に封ぜられ、德風を子孫に垂れ、我が身に至りて餘澤を受く。而も其墳墓荒蕪して灑掃する者なし。今往事を追懷し、慨然として長歎す。昔は其人を愛して樹木を斬らず、墳墓を脩めて信陵君を表せるあり。況んや元王は吾が祖先なるをや。宜しく墓に近き五家の賦稅を免じ、之をして長く墳墓を灑掃せしむべし。

【七】甘棠。木の名。召公嘗て甘棠の下に息ふ、後人其德を慕ひ其樹を愛して敢て伐らず。

【八】追甄。甄は表示すること。信陵は魏の公子信陵君なり。漢の高祖信陵君の爲に守家五家を置けり。

【九】瓜瓞。瓜の蔓。

【一〇】蠲復。租稅を免除すること。

文

(一)永明九年、秀才に策せし文五首　(二)王元長

秀才の(三)高第明經に

【一】永明。齊の武帝の年號。〔〜〕策は策問なり。

〔〜〕【二】王元長。王融、字は元長、

問ふ。朕聞く神靈文思の君、聰明聖徳の(四)后は、道を體して居らず、善を見て及ばざるが如くす。是を以て(五)崆峒に順風の請あり、(六)華封に乘雲の拜を致す。或は旌を揚げて士を求め、或は(七)虡を設けて賢を待ち、用て能く化を一時に敷き。烈を千古に餘す。朕寅んで天命を奉け恭しく永圖を惟ふ。審聽高居して戴ち(八)祇懼を懷く。(九)言事史に必すと雖も、(一〇)象闕未だ箴あらず。(一一)嘉猷を寤寐し。忠實を(一二)延佇す。(一三)子大夫名を選ばれ學に升り、以て王に賓たるに利あり。懋めて(一四)三道の要を陳べ、以て(一五)四科の

齊の琅邪の人。
【三】高第明經。明經科に及第せる者。
【四】后。君なり。
【五】崆峒。莊子に「黄帝廣成子の崆峒に在るを聞き、往きて之に見ゆ、廣成南首して臥す、黄帝下風に順つて膝行して進み、再拜して問ひて曰く身を治むること奈何にして以て長久なるべきと、廣成子曰く、來れ吾れ汝に至道を語らんと」とあり。
【六】華封。莊子に「堯華封を觀る、華の封人曰く、ああ聖人をして壽にして且つ富み且つ男子多からしめんと、堯皆辭して曰く、男子多ければ懼多く、富めば事多く、壽なれば辱多しと、封人曰く、天の萬民を生むや、必ず之に職を授く、男子多くして之に職を授けば何の懼か之れあらん、富んで人をして之を分たしめば何の事か之れあらん、天下道なければ德を脩めて閑に就き、千歲世を厭はば去つて上僊す、彼の白雲に乘りて帝鄕に至らん、何の辱か之れあらんと」とあり。
【七】虡。鐘虡なり。
【八】祇懼。愼懼なり。
【九】言事。禮記に「言へば則ち左史之を書し、動けば則ち右史之を書す」とあり。
【一〇】象闕。宮闕なり。
【一一】嘉猷。善謀なり。寤寐はねてもさめても。
【一二】延佇。希望すること。
【一三】子大夫。秀才等を指す。
【一四】三道。國體人事直言。
【一五】四科。一に曰く德行高妙志節清白、二に曰く學通行脩經博士に中る、三に曰く法令を明曉し以て疑を決するに足る、四に曰く剛毅多略、事に遭ひて惑はず。

首を光せ。(二六)鹽梅の和、屬して望むあり。

【大意】朕今汝等明經に高第せる秀才に策問す。聰明の君主は道を體得し、功成りて居らず。善人を見ては之を望むこと及ばざるが如し。故に黃帝は崆峒に廣成子を訪ひ、堯は華の封人に就きて乘雲の敎を受け、舜は旌を揚げて士を求め、禹は鍾虡を設けて賢才を待つ。是を以て治化一時に敷き、功を千歲に傳ふ。今朕天命を受けて天子となり國家の長久を圖り、常に危懼を抱けり。言事必ず史官の記錄するあるも、宮闕の上未だ直言の士あらず。故に夢寐の間も忠言を聞かんことを望まざるはなし。汝等名を選ばれて大學に升り、王者の賓たるに至れり。宜しく三道四科の道を述ぶべし。是れ朕の汝等に望む所なり。

又問ふ。昔(二七)周宣千畝の禮を惰りて、虢公諫を納れ、(二八)漢文三推の義を缺きて賈生直言す。良に以ふに食は惟れ民の天、農は政の本たり。(二九)金湯も粟にあらざれば守らず、水旱も待つことあれば遷るなし。朕式て前經を照にし、茲の稼穡を寶とす。(三〇)祥正しくして(三一)青旗事を肅

【二六】鹽梅。輔佐の臣をいふ。書經に「若し和羹を作らば爾は惟れ鹽梅」とあり。

【二七】周宣。周の宣王。千畝とは籍田なり。賦の部に見ゆ。

【二八】漢文。漢の文帝。三推も籍田なり。

【二九】金湯。金城湯池なり。

【三〇】祥正し。國語に「農祥晨に正しく土乃ち脈發す」韋昭注に「農祥は房星なり、晨正は立春の日、晨に午に中するなり」とあり。

み、(二二)土膏して朱紘典を戒む。將に(二三)杏花菖葉をして耕穫愆らず、(二四)淸甽冷風述べ遵つて廢するなからしめんとす。而るに(二五)耒を釋て牛を佩び、相沿りて反するなく、貧を兼ね富を擅にし、浸く以て俗をなす。若し(二六)井を爰へ制を開かば、懼くは愚民を驚擾せん。(二七)舃鹵腴やすべきも、恐くは時に(二八)史白なきを。興廢の術厥謀を(二九)矢陳せよ。

【大意】昔周の宣王、漢の文帝は籍田の禮を惰りしを以て、虢公、賈誼の爲に諫められぬ。誠に農は政事の根本にして、穀は民の恃んで以て生くる所なり。城池堅固なるも、糧粟なければ守るべからず。水旱の災あるも、粟ありて之を恃めば、流亡の患なし。朕故に稼穡の道を重んじ、籍田の禮を行ひ、古義に遵ひ、民をして之に則らしめ、農事を廢することなからしめんと

【二一】靑旗。籍田の旗。禮記に「孟春の月、天子蒼龍に駕し靑旗を載て、躬ら帝籍を耕す」とあり。

【二二】土膏。土の潤ふこと。朱紘は冠の飾。典は法なり。

【二三】杏花。禮記月令に「杏花生じて百穀を種う」とあり。呂氏春秋に「冬至より五旬七日に菖始めて生ず、是に於て始めて耕す」とあり。菖は菖蒲。

【二四】淸甽。甽は田間の溝。呂氏春秋に「凡そ耕の道、甽は小にして以て淸きを欲す」とあり。冷風は和風、苗を養ふ所以なり。

【二五】耒を釋て。鹽鐵論に「儒者は耒耜を釋てて不驗の語を學ぶ」とあり。漢書に「龔遂渤海太守となる、民に刀劍を帶ぶる者あれば、刀劍を賣りて牛犢を買はしむ、何爲れぞ牛を帶び犢を佩ぶると」とあり。

【二六】井を爰ふ。爰は易なり。井は周禮に「畝百を夫となし夫三を屋となし屋三を井となす」とあり。

【二七】舃鹵。薄地なり。

【二八】史白。史起、白公、ともに渠を爲り水を引き田に漑ぎて大功ありし人。

【二九】矢陳。陳述なり。

す。今や民或は農を惰り、相傚ひて改むるを知らず。富家は貧人を兼幷し、常に其利を奪ひて自ら專にし、漸く以て風を成す。今俄に易田の制を開かば、恐くは愚民を煩亂せしめん。溝渠を作りて水を引かば、薄地も尙ほ肥沃なるべきも、恐くは其事に通達する者なからん。易田引渠の事は實に國家興廢の術なり。汝等宜しく其謀を陳述すべし。

又問ふ。獄を議し死を緩くするは、(三〇)大易の深規。法を敬み刑を卹ふるは、(三一)虞書の茂典なり。(三二)氓俗澆弛し、法令滋〻彰れしより、(三三)肺石不寃の民少く、(三四)棘林夜哭の鬼多し。朕の(三五)明發まで容を動かし、(三六)昃食して慮を興し、(三七)秋荼の密網を傷み、夏日の嚴威を惻み、永く(三八)畫冠を念ひ、緬く(三九)刑厝を追ふ所以なり。徒以ふに(四〇)百鍰の輕科、反つて(四一)季葉に行はれ、

【三〇】大易。易經なり。深規は重則。易經に「君子以て獄を議し死を緩くす」とあり。

【三一】虞書。書經舜典なり。茂典は盛法。舜典に「欽めや欽めや、惟れ刑を之れ卹へよや」とあり。

【三二】氓俗。民俗なり。

【三三】肺石。周禮に「大司寇は肺石を以て窮民の寃を達す」とあり、肺石は赤石なり、之を闕に致し寃訟の者あれば傍に立ちて主司之を收む。

【三四】棘林。春秋元命苞に「棘槐を樹ゑて訟を其下に聽く」とあり。無辜を誅すれば鬼夜哭す。

【三五】明發。曉なり。

【三六】昃食。晚食なり。

【三七】秋荼。荼は草の名。鹽鐵論に「秦法は秋荼よりも繁し」とあり。

【三八】畫冠。堯の時、衣冠を畫くこと常人の飾に異らしめ、罪ある者をして之を服せしめしに人皆罪を犯さず。

【三九】刑厝。厝は措なり、周の成王の世刑措いて用ひざること四十年なり。

【四〇】百鍰。今の罰金なり。書經の呂刑に出づ。

【四一】季葉。衰世なり、周の穆王の時を指す。

(四一)四支の重罰、爰に前古に創まる。(四二)游禽を絶澗に訪ひて、霸を秦基に作し、(四四)雞鳴を闕下に歌ひて、仁を漢牘に稱す。二途爽へるが如きも、卽ち用て兼通す。(四五)昌言の安んずる所、朕將に親覽せんとす。

【大意】 罪の輕重を議り、以て人命を緩赦すべきは、易經の敎ふる所にして、法を愼み刑を輕〻しくせざらんことは舜典の訓ふる所なり。民俗澆薄にして法網益〻密なるに至りしより、寃罪を以て刑せらるる者多し。是れ朕の夙に起き晩く食ひ、容貌を動かし思慮を用ひ、刑法の酷暴なること夏日の畏るべきが如くなるを悲み、堯の時衣冠に畫けば法を犯さず、周成の時刑を用ひざること四十年なりしを追慕する所以なり。思ふに金刑は後世に行はれ、體刑は遠く上古に始まれり。峻法を用ひて秦霸をなし、肉刑を除きて文帝仁を成す。一は峻法を用ひ一は寬法を用ふ。此の二途各〻異れるも、兼用して始めて可なるが如し。汝等自ら信ずる所を述ぶべし。朕將に之を親覽せんとす。

【四一】 四支。身體なり。

【四二】 游禽。韓非子に「董閼于趙の上地の守となり、石邑山中を行く、深澗深さ百仞、其左右の人に問うて曰く、嘗て人の此に入りし者ありやと、對へて曰く有るなしと、牛馬犬彘の嘗て此に入りし者ありやと、對へて曰く有るなしと、董閼于喟然として曰く、吾能く治めん吾が法をして赦すなからしむること、猶ほ澗に入れば必ず死するが如くならば民敢て犯すなし、何爲れぞ治まらざらんやと」とあり。

【四四】 雞鳴。漢の淳于公罪あり刑に當す、淳于公の少女緹縈闕に詣り雞鳴の詩を歌ふ、文帝其意を憐み遂に之を赦し、肉刑を除く。漢牘は漢の史籍。

【四五】 昌言。美言なり。

又問ふ。人を聚むるに(四六)財といひ、政を次づるに(四七)貨といふ。泉流して其の匱しからざるを表し、(四八)懋遷して其の有無を通ず。既に(四九)龜貝積く寢み、(五〇)緡纆専ら用ふ。世代茲れ多く、(五一)銷漏參倍す。下貧(五二)兼辰の業なく、中產(五三)洊歲の貲を闕く。瘼を惟ひ隱を鄙へ、矜歎を捨つるなし。上帝溥く臨み、朕に(五四)休寶を賜ひ、(五五)邛斜の谷開いて銅を出す。且つ後命あり、茲の(五六)鎔範を事とし、都内の金を充て、(五七)圓府の職に紹ぐ。ただ(五八)赤仄巧學の患を深うし、(五九)榆莢輕重の權に難し。(六〇)開塞の宜しき所、心を悉して以て對せよ。

【大意】財貨は政事の要件にして人の利して聚る所なり。泉の如く流れて乏しからざらしめ、勉めて有無を通ずべきなり。古は龜甲貝殼を用ひしも、其制廢して今專ら錢を用ふ。然れども既に之を用ふること久しきを以て、銷磨缺漏して三倍を減薄せり。隨つて貧人兩日再歲の用を缺き、憂隱して嗟嘆す。上天下民に臨み、朕に美寶を賜ひ、山谷開けて銅を出す。乃ち錢を鑄て都

【四六】財。易經に「何を以てか人を聚むる曰く財」とあり。
【四七】貨。書經に「八政、一に曰く食、二に曰く貨」とあり。
【四八】懋遷。勉めて融通すること。
【四九】龜貝。昔は錢のかはりに龜甲貝殼を用ひたり。
【五〇】緡纆。錢を貫く索、ここは錢の意に用ふ。
【五一】銷漏。銷磨缺漏。
【五二】兼辰。兩日なり。
【五三】洊歲。再歲なり。
【五四】休寶。美寶なり。
【五五】邛斜。蜀の山名。
【五六】鎔範。錢を鑄ること。
【五七】圓府。太公周の爲に九府圓法を立つ。圓法は錢なり。
【五八】赤仄。漢の錢の名。赤銅を以て郭となす。
【五九】榆莢。漢の錢の名。
【六〇】開塞。取捨なり。

内に充たし、太公の職事を繼がんとす。ただ赤仄は重く楡莢は輕く、共に權宜をなし難し。汝等心を悉して取捨の宜しきを思ひ、以て奉答すべし。

又問ふ。歷を治め時を明にし、遷革の運を昭にし、憲を改め法を勑へ、(六一)刑德の原を審にす。(六二)分命唐官に顯れ、文條(六三)鄒說に炳なり。嵎夷職を廢し、昧谷方を虧くに及び、漢(六四)素祇の徵を秉り、魏黃星の驗を稱す。紛諍空しく紾り、疑論歸するなし。朕(六五)洪基を纂ぐを獲て、至道を弘めんことを思ふ。庶くは日月をして(六六)休徵し、風雨をして(六七)玉燭し、(六八)克明の旨遠からず、(六九)欽若の義復た還らしめんことを。子大夫に於て何如ぞや。其れ(七〇)驪翰色を改め、寅丑建を殊にす。(七一)別白して之を書せよ。

【六一】刑德。淮南子に「冬至を德となし、夏至を刑となす」とあり。

【六二】分命。書經堯典に「分ちて義仲に命じて嵎夷に宅らしむ暘谷といふ、分ちて和仲に命じて西に宅らしむ昧谷といふ云云」とあり。唐官は堯の官なり。

【六三】鄒說。鄒衍、天の五勝歷數の事を說けるをいふ。

【六四】素祇。祇は神なり。漢の高祖白蛇を斬りしこと。

【六五】洪基。大業なり、帝位をいふ。

【六六】休徵。祥瑞をあらはすこと。

【六七】玉燭。爾雅に「四氣の和する之を玉燭といふ」とあり。

【六八】克明。書經堯典に「克く俊德を明にす」とあり。

【六九】欽若。書經堯典に「堯義和に命ず、欽んで昊天に若ひ云云」とあり。

【七〇】驪翰。夏后氏は黑を尙ぶ、戎事には驪に乘る、驪は黑馬なり。建寅の月を正月となす。殷人は白を尙ぶ、翰は白馬なり、戎事には翰に乘る、建丑の月を正月となす。

【七一】別白。分別明白なり。

【大意】暦數を理めて其時を明にすれば、帝王變遷改革の運を知る。帝王の興る其法度を改むるは、以て刑德の本を審かにする所以なり。唐堯の分命、鄒衍の歷數之を明證せり。司曆の官廢するに及び、漢の高祖は白蛇を斬りし事を以て自負し、魏の興らんとするや、黃星楚宋の間に現る。此等五行日月の理、其事を紛爭する者甚多くして歸一する所なし。朕帝位に卽き、此に至道を弘めんことを思ふ。希くは日月祥瑞を呈し、四時和順にして、俊德を明にすること堯の如く、天時に順ふこと羲和の如くならんことを。此道を致すには、當に如何にすべき。又夏殷黑白色を改め、寅丑建を異にするは何故ぞや。汝等宜しく分別明白にして之に答ふべし。

㈠永明十一年秀才に策せし文五首　王元長

秀才に問ふ。朕㈡籙を秉り天に㈢御し、㈣樞を握り極に臨み、㈤五辰空しく撫ひ、㈥九序未だ歌はず。政を㈦明臺に思ひ、道を㈧宣室に訪ふに至りて、墜つるが若きの惻每に勤め。傷むが如きの念恆に軫る。故に貧を恤み賦を緩くし、

【一】永明。齊の武帝の年號。
【二】籙。未來記なり。天子天命を受くる符なり。
【三】御。升ること。
【四】樞。北斗の第一星。極は八極。
【五】五辰。春夏秋冬と土用となり。書經に「五辰に撫ひて庶績其れ凝る」とあり。
【六】九序。六府（水火金木土穀）三事（正德、利用、厚生）をいふ。書經に「九功惟れ敍し九敍惟れ歌ふ」とあり。
【七】明臺。明堂なり、天子政

（九）徭を省き、獄を愼む。幸に四境虞なく、三秋式て稔す。而して黍多く（一〇）稌多きも兩穗の謠を興さず。褐なく衣なくして必ず（一一）七月の歎を盈つ。豈政を布くこと未だ優ならざるか、將た（一二）罷民業を難んずるか。爾を朝に登げ、是に（一三）宏議を屬す。心を同うし以て厥辟を匡さざること罔かれ。

【大意】朕天命を受けて天下に君臨するも、庶政未だ至からず。常に惻傷憂念せり。故に賦稅を寛にし徭役を輕くし刑獄を愼みて民を恤まんことを期せり。幸に邊境事なく五穀豐饒なるも、未だ兩穗の瑞なく、民褐衣なきを歎ず。豈政を布くこと未だ優ならざるが爲か、將た民疲弊して産業を成し難きが爲か。汝等を登げて大議に參せしむ。宜しく心を一にして其君を匡すべし。

又問ふ。惟れ王國を建て、惟れ（一四）典官を命ず。上は（一五）星象に叶ひ、下は川嶽に符ふ。必ず天爵具に脩まり、（一六）人紀咸く事とするを待ち、然る後才に沿りて職を授け、務を揆りて司を分つ。是を以て（一七）五正朱宣に置き、下民忒はず。（一八）九工

を布くの宮。
【八】宣室。漢賢良を召す所の殿の名。
【九】徭。夫役なり。
【一〇】稌。稻穀なり。詩經に「豐年には黍多く稌多し」とあり。
【一一】七月。詩經豳風の篇の名其句に「衣なく褐なくんば、何を以てか歲を卒へん」とあり。
【一二】罷民。疲民なり。
【一三】宏議。大議。
【一四】典。常なり。
【一五】星象。春秋含命孳に「三公は五岳に象り九卿は河海に法る、三公は三台に法り九卿は北斗に法る」とあり。
【一六】人紀。人事の綱紀。
【一七】五正。左傳に「郯子昭子に謂つて曰く、少皞の立つや

黄序に開いて庶績其れ凝る。(一九)周官三百、漢位兼倍す。茲を歴て以降、(二〇)游惰塞に繁し。若し(二一)閑冗畢く弃つれば、則ち横議已むなく、(二二)冕笏澄まずんば、則ち坐談彌ゝ積まん。何の則か脩むべき。善く其對を詳にせよ。

【大意】王者の國を立つるや、常に賢良に命じて官職に居らしむ。而して其職星象川嶽に叶ふ。故に天爵人道倶に備はる者を得て然る後之に職司を授く。是を以て少皥五正を置きて民差はず、虞舜九官を設けて庶績成る。周は官を建つること三百、漢は殆ど之に倍す。其後閑冗の官ますます多し。然れども一時に之を廢棄すれば、怨嗟を招き、曠官多ければ、物議を生ぜん。之を如何にして可なる。汝等詳に之に奉答すべし。

又問ふ。昔者(二三)賢牧陝を分ち、良守共に治め、下邑必ず其風を樹て、一郷以て績をなすべし。旦に(二四)鳴琴を撫し、日に(二五)醇酒を置くあるに至る。文にして害なく、嚴にして殘はれず。故

鳳鳥適至る。故に鳥を以て官に名づけ五工正となす」とあり。朱宣は少皥の號。

【一八】九工。九官なり。書經に「舜九官を命す」とあり。黄序は舜をいふ。帝王世紀に「舜土を以て火を承く、色は黄を尙ぶ」とあり。

【一九】周官三百。禮記に「殷官二百周官三百」とあり。

【二〇】游惰。游散の官、怠惰の職をいふ。

【二一】閑冗。閑職冗員。

【二二】冕笏。官の服飾なり。こゝは官職の意。

【二三】賢牧。賢主長なり。公羊傳に「陝より以東は周公之を主り、陝より以西は召公之を主る」とあり。

【二四】鳴琴。呂氏春秋に「宓子賤單父を治め、琴を彈じて身堂を下らず、而して單父治る」とあり。

【二五】醇酒。漢書に「曹參相國となる、日夜酒を飲む云云」

に能く人を(二六)阽危の域より出し、俗を仁壽の地に躋す。是を以て賈誼言ふ、天下の惡あるは吏の罪なりと。頃ろ深く(二七)珪符を汰び、妙に(二八)銅墨を簡ぶ。而して(二九)春雉未だ馴れず、秋螟散ぜず。入りて朕が前に在れば、其智略を湊め、出でて城守を連ねては、闕爾として聞ゆるなし。豈(三〇)薪槱の道未だ弘からず、網羅の目をなすこと尚ほ簡なるか。意を悉し辭を正うし、執事に侵さるるなかれ。

【大意】賢牧士を分けて治むれば、鄕邑美風をなし、功績を擧ぐるを得。日に琴を鼓し酒を飲みて、治功觀るべきもののあるに至りては、文法を守ると雖も人を害せず、嚴肅なりと雖も下を害せず。故に能く民を危難より救ひ、人をして仁壽ならしむ。是を以て賈誼は『民の不善なるは吏の罪なり』といへり。このごろ郡守縣令の任命を愼むと雖も、尙ほ未だ十分の成績あらず。朕が前に居りては、智略輻輳すれども、一たび各地に赴任すれば功績擧らず。豈賢牧を求むるの道疏なるに因るか。汝

とあり。

【二六】阽危。危難に臨むこと。

【二七】珪符。刺史のシルシ。

【二八】銅墨。銅印墨綬。縣令のシルシ。

【二九】春雉。東觀漢記に「魯恭中牟の令となる、この時郡國螟苗稼を傷ふ、獨り中牟に入らず、肥親、恭と倶に桑下に坐す、雉あり其傍に止る、傍に兒童あり、親曰く何ぞ之を捕へざると、兒曰く雉方に子を育すと、親歎じ曰く、蟲の境を犯さざるは一の異なり、化鳥獸に及ぶは二の異なり、童子仁心あるは三の異なりと」とあり。

【三〇】薪槱。詩經に「芃芃たる棫樸、之を薪にし之を槱にす」と、毛傳に「山木茂盛なれば萬人得て之を薪にし、賢人衆ければ國家得て用つて蕃興す」とあり。

等辭を正しくして之に奉答せよ。有司に枉橈せらるるなかれ。

又問ふ。朕聞く上智の民を利するは禮に述はず。大賢の國を彊くするは惟れ舊に圖るなしと。豈飢を療するは（三一）鼎食を期せず、溺を拯ふは（三二）規行を待つなきにあらずや。是を以て（三三）三王道を異にして共に昌え、五霸風を殊にして（三四）烈を竝ぶ。今農戰脩まらず文儒是れ競ひ、（三五）本を弃て末に徇ひ、厥弊滋ゝ多し。昔（三六）宋臣禮樂を以て殘賊となし、（三七）漢主文章を鄭衞に比す。豈に聖を非り法を無せんと欲するか、將た以て道を旣くして（三八）權するか。今士女を耕桑に專にし、鄉閭に習はすに弓騎を以てし、（三九）五都復して庠序を事とし、（四〇）四民富んで文學に歸せんことを欲す。その道奚若。爾（四一）面從するなかれ。

【大意】朕聞く上智の民を利するは、必ずしも禮に順はず、大賢の國を強くするは、必ずしも舊法に據らず。皆權宜を取りて法度となすと。要は時の宜しきに應ずるを貴ぶに在り。故に三王五霸其政

【三一】鼎食。鼎を列れて食ふ。
【三二】規行。禮の規定にかなへる行。抱朴子に「規行矩步は以て火を救ひ溺を拯ふべからず」とあり。
【三三】三王。禹湯武王。
【三四】烈。功業なり。
【三五】本。農なり。末は商なり。
【三六】宋臣。墨翟なり。
【三七】漢主。漢の宣帝。
【三八】權。公羊傳に「權とは何ぞや、權とは經に反して然る後善ある者なり」とあり。
【三九】五都。王莽五都に於て均官を立つ、五都は洛陽、邯鄲、臨淄、宛、成都なり。庠序は學校。
【四〇】四民。士農工商なり。
【四一】面從。面前に於てのみ從ひ、實は異見を抱くこと。

道を異にすれども、其功業は相同じ。今や農兵の事を務めずして、文儒相競ひ、農を棄てて商に走り、其弊ますます甚し。昔墨翟は禮樂を賤んで暴賊となし、漢の宣帝は詩賦を以て鄭衞の淫聲に比す。此れ先聖の道を非り、法を無するものか、抑ゝ又道を窮めて權宜を取るものか。今民をして農織に勉めしめ、更に騎射を習はしめ、學校の敎を謹み、遂に文學に歸せしめんと欲す。其術之を如何にすべき。忌憚なく之を述べよ。

又問ふ。晉氏(四二)綱せず、(四三)關河蕩析し、宋人馭を失ひ、淮汴(四四)崩離せしより、朕(四五)舊民を思念し、永く濟す攸を言ふ。故に將を選び邊を開き、(四六)勞來安集す。加ふるに(四七)款を納れ和を通じ、德を布き禮を脩むるを以てし、(四八)皇華を歌ひて使を遣り、(四九)膏雨を賦して賓を懷く。(五〇)關洛南望の懷を動かし、(五一)獯夷北歸の念を遽にする所以なり。夫れ(五二)危葉風を畏れ、驚禽落ち易し。干戈を待つなく、聊か辭辯を用ひ、片言にして(五三)三輔

【四二】綱。綱紀なり。
【四三】關河。州郡といふが如し蕩析は分裂なり。
【四四】崩離。分崩離散なり。
【四五】舊民。晉宋の民。
【四六】勞來。勞は勤苦を慰すること、來は至る者を撫すること。
【四七】款を納る。款は誠なり。戎狄の誠を納れて和親すること。
【四八】皇華。詩經に皇皇者華の篇あり、君使臣を遣すの詩なり。
【四九】膏雨。左傳に「季武子晉にゆく、晉侯之を饗す、武子再拜して曰く、小國の大國を仰ぐや百穀の膏雨を仰ぐが如し」とあり。
【五〇】關洛。洛陽長安地方。
【五一】獯夷。北狄なり。
【五二】危葉驚禽。北齊、後魏に喩ふ。
【五三】三輔。後魏の都する所。

を求め、一說にして(一四)五州を定めん。斯路何にか陪らん。人誰か或は謀を進むべき。志を誦し以て朕が心を沃げ。

【大意】晉綱紀を失ひて、州郡羣盜に分割せられ、宋勢を失ひて淮汴分裂す。朕民の亂離に苦めるを思ひ、之を救はんことを期す。故に將を選び兵を練りて邊境を開き、百姓を慰勞安集し、戎狄の誠を納れて和親を結び、德を布き禮を脩めて之を制し、使臣を遣りて之を懷け、我を仰ぐこと膏雨の如くならしむ。是を以て北齊、後魏南望（齊は江南に都す）の志を起し、北狄故地に歸り入る。朕干戈を用ひず、辯辭を以て之を臣服せしめんと欲す。其道果して如何、汝等各〻思ふ所を述べよ。

【一四】五州。豫靑徐兗冀をいふ。北齊の據る所。

(一)天監三年秀才に策せし文三首　任彥升

秀才に問ふ。朕(二)樊鄧に長驅し、直に(三)商郊を指す。時來るに因藉して、此の(四)歷運に乘ず。(五)扆に當りて永く念ひ、猶ほ慙德を懷く。何者百王の獘、(六)齊季斯れ甚し。衣冠禮樂地を

【一】天監。梁の武帝の年號。
【二】樊鄧。地名。
【三】商郊。商は殷なり。齊の東昏侯無道なり。故に之を殷紂に喩ふ。
【四】歷運。天子たるべき順序。
【五】扆。天子の屏風。
【六】齊季。齊の末。

掃つて餘すなし。彫斲して方を刓るも經綸（七）草昧なり。（八）三王の禮を採り冠履粗分れ、（九）六代の樂に因りて宮判始めて辨ず。而かも（一〇）百度草創、倉廩未だ實たず。若し（一一）終畝税せずんば、則ち國用資るなし。百姓足らずんば則ち（一二）惻隱慮に深し。時に（一三）芻槀を入れ、歳に田租を課する毎に、愀然として懷を疚しめ、（一四）赤子を憐むが如し。今朕をして（一五）滿堂の念なく、民をして（一六）家給の饒あらしめ、漸く（一七）九年の蓄を登し、稍（一八）關市の賦を去らんと欲す。（一九）子大夫此の（二〇）三道に當り用て王に賓たるに利あり。斯理何にか從はん。良説を聞かんことを佇つ。

【大意】齊の東昏侯無道なりしを以て朕之を伐ち、時來の運に遭ひ其禪を受けて帝位に卽く。然も不德にして人君となりしは、自ら慚づる所なり。況んや齊末弊政最も甚しく、衣冠の制、禮樂の法悉く廢棄して餘すなきをや。今

【七】草昧。未だ秩序の整はざること。
【八】三王。禹湯武王。
【九】六代。黃帝堯舜及び夏殷周。宮は天子の懸樂。判は卿大夫の懸樂。
【一〇】百度。すべての制度。
【一一】終畝。民の田地全部。
【一二】惻隱。悲傷なり。
【一三】芻槀。枯草なり。以て馬の食に供す。
【一四】赤子。嬰兒なり。
【一五】滿堂。說苑に「古人の天下に於けるや、譬へば一堂の上今滿堂酒を飲むあり、一人あり獨り索然として隅に向つて泣けば、則ち一堂の人皆樂まざるが如し」とあり。
【一六】家給。給は足なり。民皆富みて衣食足ること。
【一七】九年の蓄。禮記に「國に九年の蓄なきを不足といふ」とあり。
【一八】關市の賦。關所及び市場の税。
【一九】子大夫。秀才等を指して言ふ。
【二〇】三道。國體人事直言をいふ。

先王の法度を採り、法制を定めたれども、百事草創にして未だ完備せず。倉廩また未だ實たず。若し賦税を免じて取らずんば、國用給せず。百姓窮すれば、朕が心を憂へしむ。是を以て租税を課する毎に獨り心を痛む。今朕をして不樂の念なく、民をして給足せしめ、國用足り闕市の税廢するに至らしめんと欲す。汝等各〻意見を陳述すべし。

問ふ。朕ちと諸生よりし、(二一)弱齡にして志あり。戸を閉ぢて自ら精くし、卷を開いて獨り得たり。(二二)九流七略頗る嘗て觀覽し、六藝百家(二三)牆面にあらざるに庶し。(二四)一日萬機、早く朝し晏く罷むと雖も、聽覽の暇、(二五)三餘失ふなし。上の下を化する、草偃風從す。惟れ此の虛寡、俗を動かす能はず。昔(二六)紫衣の賤服、猶ほ齊風を化し、(二七)長纓の鄙好なる、且つ鄒俗を變ぜり。德は往賢に慙づと雖も業は前事に優れり。且夫れ(二八)搢紳の道行はるるは祿利然るなり。朕心を(二九)駿骨に傾く。(三〇)眞龍を懼るるに非ず。(三一)輜軿靑紫地芥を拾ふが如し。而も惰游して業を廢

【二一】弱齡。少年なり。
【二二】九流。儒家、道家、陰陽家、法家、名家、墨家、縱横家・雜家、農家なり。漢書に「劉歆羣書を總べて其七略を奏す」とあり。
【二三】牆面。面墻に向ひて見る所なきをいふ。
【二四】一日萬機。書經に「一日二日萬機あり」とあり、天子の職事をいふ。
【二五】三餘。冬は歲の餘、夜は日の餘、陰雨は時の餘。
【二六】紫衣。韓非子に「齊の桓公紫を服するを好む、一國盡く紫を服す」とあり。
【二七】長纓。長き冠の紐。韓非子に「鄒君長纓を好む、左右皆長纓を服す」とあり。
【二八】搢紳。大官をいふ。
【二九】駿骨。賢才に喩ふ。
【三〇】眞龍。賢才に喩ふ。

するもの、十室にして九なり。(三二)鳴鳥聞くなく、(三三)子衿作らず。(三四)弘奬の路斯れ既に然り。猶ほ其れ寂寞たるも、應に(三五)良規あるべし。

【大意】 朕は本書生より起る。故に九流百家の書悉く誦讀せざるはなし。既に天子となりし後も、萬機の暇三餘の時を以て猶は勉學を怠らず。夫れ上の下を化するは風の草を靡かすが如きも、我が學を好むこと虛寡なることを以て、未だ時俗を動かすに至らず。朕が德往賢に劣れりと雖も、事功は往時にまされり。且つ官吏の道行はるるは、祿利を饒にすればなり。朕は賢才を得て之を用ひんことを思ふ。故に學成りて經術に明ならば、貴位高官を取ること塵を拾ふの易きが如くならん。然も學業を惰る者多く、未だ鳳鳴を聞くに至らざるは何ぞや。ただ奬勵の一途に在り。汝等意見を陳述せよ。

問ふ。朕諫鼓を立て謗木を設くること茲に三年。比ろ闕下に輻湊すと雖も、多くは政要にあらず。日に(三六)青蒲に伏すれども能く切直なること罕なり。將た齊季(三七)多諱にして風流遂に往けるか、將た朕空前古を慕ひ、(三八)虛受弘からずと謂へるか。然れども(三九)萬寓に君臨し、民上に(四〇)介在

【三一】輜軿。車なり。青紫は高官の服。

【三二】鳴鳥。鳳なり。天子聖明にして功業成れば鳳凰見はれ然らずんば鳳凰至らず。

【三三】子衿。詩經の篇の名。序に「學校の廢せるを刺るなり」とあり。

【三四】弘奬。大に勸むること。

【三五】良規。善き意見。

【三六】青蒲。天子の內庭。

【三七】多諱。忌諱多きなり。

【三八】虛受。虛心にして人言を容ること。

してより、何ぞ嘗て一言旨を失するを以て、(四一)朔方に轉徙し、(四二)睚眦違ふありて左校に論輸し、直臣をして口を杜ぎ、(四三)忠讜をして路絶えしめんや。將た恐くは(四四)弘長の道、別に未だ周からざるあらんことを。意を悉し以て陳べ、極言して隱すなかれ。

【大意】朕鼓を朝に立て、諫めんと欲する者あれば之を撃たしめ、誹謗の木を闕に設け、誹らんと欲する者あらば之を撃たしめ、以て直諫を歡迎す。乃ち諫むる者多しと雖も、政事の要にあらず。日に內庭に來れども直言する者少し。夫れ或は齊末多忌なりしを以て、直諫の風廢れたるか。或は朕を以て空しく古を慕ひ、眞に虛受の心なしとなすか。然れども天子となりてより以來、朕が旨に逆へるを以て、官職を黜けたる事あらず、又忠言の路を塞ぎし事なし。夫れ或は獎勵の法未だ完からざるに因るか。汝等意見を陳述すべし。

【三九】萬寓。萬國なり。

【四〇】介在。介は特なり。

【四一】朔方。北方なり。後漢書に「蔡邕上疏す、帝覽て歎息す、邕を洛陽の獄に下す、詔して死一等を減じて朔方に徙す」とあり。

【四二】睚眦。疾視すること。後漢書に「李膺河南尹となる、時に宛陵の大姓羊元羣、北海郡を罷め贓罪狼藉たり、膺其罪を罰せんと欲す、元羣賂を官豎に行ふ、膺反つて坐して左校に輸作す」とあり。論輸は罪を論じて官を徙すなり。

【四三】忠讜。忠直の言。

【四四】弘長。獎勵なり。

卷の第十九

表

禰衡を薦むる(一)表

孔文擧

臣聞く、洪水横流して(二)帝乂め俾めんことを思ひ、旁く四方に求め以て賢俊を招くと。昔(三)世宗統を繼ぎ、將に祖業を弘めんとす。疇か咨載を熙めん。羣士響のごとく臻る。(四)陛下叡聖にして纂ぎて基緒を承け、(五)厄運に遭遇して、日の仄くに勞謙す。惟れ(六)岳神を降し、異人竝び出づ。

【大意】堯の時、洪水天下に横流するや、之を治めんが爲に賢俊異能の士を四方に招き、武帝位を繼ぎ祖業を弘めんとし、廣く賢才を求むるや、衆士響應して至れり。陛下大業を繼承するや、董卓の難起る。乃ち勤勞恭謙して、日晚るるまで食はず、以て賢才を求む。是に於て山岳靈を降し、異人を生めり。禰衡是れなり。

【一】表。天子に進むる文をいふ。
【二】帝。堯なり。書經に「湯湯たる洪水方に割ふ、能くするあらば乂めしめん」とあり。
【三】世宗。漢の武帝。
【四】陛下。後漢の獻帝を指す。
【五】厄運。董卓洛陽を破り帝を長安に遷せるをいふ。
【六】岳。山の神なり。詩經に「維れ嶽神を降し、甫及び申を生む」とあり。

竊に見るに（七）處士平原の禰衡、年二十四、字は正平、（八）淑質貞亮にして英才（九）卓躒たり。初め藝文を渉り、堂に升り奥を觀る。目一たび見る所輙ち口に誦し、耳暫く聞く所心に忘れず。性道と合ひ、思神あるが若し。（一〇）弘羊が潛計、（一一）安世が默識、衡を以て之に準ずるに、誠に怪むに足らず。忠果正直にして志（一二）霜雪を懷き、善を見ては驚くが若く、惡を疾むこと讎の若し。（一三）任座が抗行、（一四）史魚が厲節も、殆んど以て過ぐるなし。（一五）鷙鳥百を累ぬるは、一鶚に如かず。衡をして朝に立たしめば、必ず觀るべきあらん。辯を飛ばし辭を騁せ、溢氣坌涌し、疑を解き結を釋き、敵に臨んで餘あり。昔賈誼（一六）屬國に試みられ、詭りて（一七）單于を係がんことを求め、（一八）終軍長纓を以て勁越を牽き致さんと欲す。弱冠にして慷慨なる、前代之を美とす。近日

【七】處士。仕官せざる士をいふ。平原は郡名。
【八】淑質。天質善良なり。
【九】卓躒。高絶なり。
【一〇】弘羊。漢書に「桑弘羊心計を以て年十三にして侍中に拜せらる」とあり。
【一一】安世。漢書に「張安世郎となる、上河東に行幸す、嘗て書三篋を亡ふ、詔問するに能く知る者なし、唯安世之を識る」とあり。
【一二】霜雪。潔白なること。
【一三】任座。呂氏春秋に「魏の文侯諸大夫に問ふ、寡人は何如なる主ぞやと、任座曰く、君は不肖の君なり、中山に克ちて弟を封ぜず、是を以て不肖の君なるを知る」とあり。抗行は高行なり。
【一四】史魚。論語に「直なるかな史魚云云」とあり。厲節は高節。
【一五】鷙鳥。鷹の類の猛鳥、鶚はワシ。此一句は衆凡人は一傑士に如かざるをいふ。
【一六】屬國。夷狄をつかさどる官名。
【一七】單于。匈奴の王。
【一八】終軍。人名。長纓は長き紐。勁越は强き南越王。

路粹、嚴象も亦異才を用て擢んでられて（一九）臺郎に拜せり。衡は宜しく與に比たるべし。如し（二〇）天衢に龍躍し、翼を（二一）雲漢に振ひ、聲を（二二）紫微に揚げ、光を（二三）虹蜺に垂るるを得ば、以て（二四）近署の多士を昭にし、（二五）四門の穆穆を增すに足らん。（二六）鈞天廣樂必ず奇麗の觀あり。帝室皇居必ず非常の寶を畜ふ。衡等の輩の若きは多く得べからず。（二七）激楚陽阿、至妙の容は、掌技者の貪る所、（二八）飛兎騕褭、絕足奔放は、（二九）良樂の急にする所なり。臣等區區として敢て以聞せざらんや。陛下篤く士を取るを愼めり。必ず須らく効し試みるべし。乞ふ衡をして（三〇）褐衣を以て召見せしめよ。必ず（三一）觀采すべきなくんば、臣等（三二）面欺の罪を受けん。

【一九】臺郎。尙書郎。
【二〇】天衢。天路なり。
【二一】雲漢。あまのがは。
【二二】紫微。天子の宮殿。
【二三】虹蜺。虹なり。
【二四】近署。天子の左右。
【二五】四門。四方の門。穆穆は和親なり。
【二六】鈞天廣樂。天帝の音樂。
【二七】激楚陽阿。歌曲の名。
【二八】飛兎、騕褭。古の駿馬の名。
【二九】良樂。王良、伯樂。古の能く馬を御せし人。
【三〇】褐衣。賤人の服。
【三一】觀采。觀て採用すること。
【三二】面欺。まのあたり欺くこと。

【大意】思ふに平原の禰衡は、天質善良にして才能高絕なり。學藝を脩めて蘊奧を窮め、思謀深遠にして神明の如し。桑弘羊、張安世の如きも、之を衡に比すれば敢て異とするに足らず。且つ果決にして潔白、善を見ては及ばざるが如くし、惡を見ては之を憎むこと讎の如し。辯論風發し、疑團

を氷釋し、敵を屈して餘裕あり。宜しく之を擢んで、路粹、嚴象の輩と肩を比せしむべし。若し一たび宮廷に用ひらるるを得ば、必ず官僚の面目を一新するに足らん。陛下須らく褐衣を以て召見すべし。若し採るに足らざる所あらば、臣甘んじて面欺の罪に服せん。

一　出師の表

(一)諸葛孔明

臣亮言す。(二)先帝業を創むること未だ半ならずして、(三)中道に崩殂す。今天下(四)三分して(五)益州罷弊す。此れ誠に危急存亡の秋なり。然れども侍衛の臣(六)内に懈らず、忠志の士身を(七)外に亡るる者は、蓋し先帝の遇を追ひ、之を陛下に報いんと欲すればなり。誠に宜しく聖聽を開張し、以て先帝の遺德を光にし、志士の氣を恢にすべし。宜しく妄に自ら(八)菲薄し、喩を引き義を失ひ、以て忠諫の路を塞ぐべからず。(九)宮中府中倶に一體となり、(一〇)臧否を陟罰し宜しく(一一)異同あるべからず。若し姦を作し科を犯し、及び忠善をなす

【一】諸葛孔明。名は亮、字は孔明、蜀に仕ふ、後主の建興五年、亮軍を率ゐて北のかた漢中に駐る、發するに臨んで上疏す。此篇是れなり。
【二】先帝。蜀の先主、劉備を指す。
【三】中道。中途なり。崩殂は死なり。
【四】三分。呉魏蜀の分立すること。
【五】益州。蜀なり。罷弊は疲弊なり。
【六】内。宮中なり。
【七】外。邊疆なり。
【八】菲薄。自ら輕んずること。
【九】宮中。禁中なり。府中は大將軍の幕府なり。
【一〇】臧否。善惡なり。陟罰。陟は升なり。

者あらば、宜しく（一二）有司に付し、其刑賞を論じ、以て陛下平明の治を昭にすべし。宜しく（一三）偏私して（一四）內外をして法を異にせしむべからず。

【大意】先帝漢室興復の大事（劉備は漢の裔なり）を創め帝位に卽きしも、僅に三年ならずして崩御し、今天下は呉魏蜀の三國に分れ、而して我が蜀尤も微弱なり。誠に危急存亡の秋と謂ふべし。然れども侍衞の臣忠勤を宮中に勵み、志士身を忘れて邊疆に勇戰するは、先帝の恩遇を追想し、之を陛下（後主を指す）に報いんと欲すればなり。故に陛下は能く忠諫の言を納れ、先帝の遺德を大にし、志士の意氣を通達せしむべきなり。決して自ら輕んじ非義の喩を引きて、諫言を納れざるが如き事あるべからず。宮中と府中とは、宜しく步調を一にし、善人を陟せ惡人を罰するに、法を異にすべからず。姦惡をなし罪科を犯し、或は忠善をなす者あらば、有司に付託して、賞すべきは賞し罰すべきは罰し、以て公平明白の治道を示すべし。偏頗私曲に流れて宮中府中其法を異にすべきにあらず。

（一五）侍中侍郎郭攸之、費禕、董允等は、此れ皆良實にして志慮忠純なり。是を以て先帝（一六）簡拔し、

【一一】異同。異ること。
【一二】有司。かかりの役人。
【一三】偏私。偏頗なり。
【一四】內外。宮中と府中と。
【一五】侍中。官名。郭攸之、費禕、ともに侍中となる。侍郎は官名。董允黃門侍郎たり。
【一六】簡拔。選拔なり。

以て陛下に遺せり。(一七)愚以爲へらく宮中の事、事大小となく、悉く以て之に咨り、然る後施行せば、必ず能く(一八)闕漏を裨補し、廣益する所あらん。將軍向寵は性行(一九)淑均にして、軍事に(二〇)曉暢す。昔日に試用せらる。先帝之を稱して能といへり。是を以て衆議寵を擧げて(二一)督となす。愚以爲へらく、營中の事、悉く以て之に諮らば、必ず能く(二二)行陳をして和穆せしめ、優劣をして所を得しめん。賢臣を親み小人を遠けしは、此れ(二三)先漢の興隆せし所以なり。小人を親み賢士を遠けしは、此れ後漢の傾頽せし所以なり。先帝在しし時、毎に臣と此事を論じ、未だ嘗て(二四)桓靈に歎息痛恨せずんばあらざりしなり。(二五)侍中尙書(二六)長史、參軍、此れ悉く(二七)貞亮死節の臣なり。願くは陛下之を親み之を信ぜよ。則ち漢室の隆、日を計りて待つべし。

【一七】愚。諸葛亮自ら謂ふ。
【一八】闕漏。闕失遺漏。
【一九】淑均。善良公平なり。
【二〇】曉暢。通達なり。
【二一】督。總督なり。
【二二】行陳。陣中の士卒。和穆は和睦なり。
【二三】先漢。前漢なり。
【二四】桓靈。後漢の末の天子、ともに宦官を用ひて失敗せり。
【二五】侍中尙書。官名、陳震をいふ。
【二六】長史。官名、張裔をいふ。參軍も官名、蔣琬をいふ。
【二七】貞亮死節。忠誠にして節義の爲に死すること。

【大意】郭攸之、費禕、董允等は、忠良貞實にして純忠の士なり。故に先帝之を選拔して陛下に遺せり。陛下事を行ふに方り、此三人に諮詢せば、闕失を補ふを得べし。向寵は善良公平にして

軍事に明なり。先帝も嘗て之を許して能者といへり。故に衆議により寵を擧げて總督となしぬ。軍事は宜しく彼に諮詢せらるべし。然らば陳中の士卒をして、能く一致和合せしめ、優者劣者各〻宜しきを得べきなり。前漢は賢士を親任して興隆し、後漢は小人を親任して傾頽せり。國家の盛衰は用ふる所の臣に因る。陳震、張裔、蔣琬の三人は忠貞死節の臣なり。願くは陛下の之を親任せんことを。然らば漢室の興復は期して待つべきなり。

臣もと（二八）布衣、躬ら（二九）南陽に耕し、苟も（三〇）性命を亂世に全うし、聞達を諸侯に求めず。先帝臣の卑鄙なるを以てせず、猥に自ら（三一）枉屈し、臣を草廬の中に三顧し、臣に諮るに（三二）當世の事を以てす。是に由りて感激し、遂に先帝に許すに驅馳を以てす。後（三三）傾覆に値ひ、任を敗軍の際に受け、命を危難の間に奉ず。爾來二十有一年なり。先帝臣の謹愼なるを知る。故に崩ずるに臨み、臣に寄するに（三四）大事を以てす。命を受けて以來、夙夜憂歎し、（三五）託付の效あらずして、以て先帝の明を傷けんことを恐る。故に五月（三六）瀘を渡り深く（三七）不毛に入る。今南方已に定り、兵甲已に足る。

【二八】布衣。賤人なり。
【二九】南陽。郡名。
【三〇】性命。生命といふが如し。
【三一】枉屈。尊を屈すること。
【三二】當世の事。漢室興復の事。
【三三】傾覆。獻帝の建安十三年、劉備曹操と當陽長坂に戰ひて敗れしをいふ。
【三四】大事。討賊興復の事。
【三五】託付。依託なり。
【三六】瀘。川の名。
【三七】不毛。炎熱の爲に草木の生ぜざる地。

當に三軍を帥將し、北のかた〔三八〕中原を定むべし。庶くは駑鈍を竭し〔三九〕姦凶を攘除し、漢室を興復し、〔四〇〕舊都に還さんことを。此れ臣の先帝に報いて陛下に忠なる所以の職分なり。

【大意】臣はもと微賤の身にして、南陽に躬耕し苟も生命を亂世に全うし、諸侯に仕へて名聞利達を求めざりき。然るに先帝は臣の微賤なるを顧みず。猥に尊貴を屈して三たび臣を草廬の中に訪ひ、興復の事を諮詢せらる。臣その意氣に感じ先帝の爲に奔走せんことを許しぬ。其後當陽長坂の敗戰に値ひ、命を受けて救援を吳に求め、危難の間に奔走す。指を屈すれば今既に二十一年を經たり。先帝又臣の謹愼なるを知り、崩御に際し、臣に委するに討賊興復の大事を以てせらる。此委託を受けてより、夙夜憂慮し、委託の實効なくして先帝の明鑑を害せんことを恐れ、建興三年炎熱を犯して南征し、今南方既に平定し、また後顧の憂なし。當に大軍を率ゐて北方魏國を平定すべきなり。願くは魏王を討伐し漢室を興復し舊都に還さんことを。此れ臣の先帝の恩に報い、陛下に對して忠なるべき當然の務なり。

〔四一〕規益を斟酌し忠言を進め盡すに至りては、則ち攸之、禕、允の任なり。願くは陛下臣に託するに討賊興復の效を以てせよ。效あらずんば則ち臣の罪を治め、以て先帝の靈に告げよ。若し德を興すの

【三八】中原。魏を指す。
【三九】姦凶。魏を指す。
【四〇】舊都。雍洛の二州をいふ、兩漢の都せし地なり。
【四一】規益。一本に損益に作る斟酌は加減すること。

言なくんば、則ち允等を戮し以て其慢を章せ。陛下亦宜しく自ら謀り、以て善道を(四二)咨諏し、(四三)雅言を察納し、深く先帝を追ふべし。臣恩を受くるの感に勝へず。遠く離るるに當り、表に臨んで涕泣し、云ふ所を知らず。

【大意】害を損し利を益し、忠言を進むるは、郭攸之等の任務なり。願くは陛下臣に託するに專ら討賊興復の事を以てせよ。若し其効なくんば、臣を罪に處し、先帝の靈に告げよ。若し陛下の德を興すべき忠言なくんば、攸之等を罪し、其怠慢を天下に公表せよ。陛下も亦自ら勘考し、正言を納れ、先帝の意を遂げんことを期せよ。今遠く去るに當り、此表を草するも、涕泣して云ふべき所を知らず。

【四二】咨諏。とひはかること。
【四三】雅言。正言なり。

(一)自試を求むる表　　曹子建

臣植言す。臣聞く士の世に生るるや、入りては則ち父に事へ、出でては則ち君に事ふと。父に事ふるには親を榮するを尙び、君に事ふるには國を興すを貴ぶ。故に慈父も無益の子を愛する能はず、仁君も無用の臣を畜ふ能はず。夫れ德を論

【一】自試。魏志に太和二年曹植雍丘に還り、常に自ら利器を抱いて施す所なきを憤怨す、乃ち上疏して試用せられんことを求む。

じて官を授くるは成功の君なり。能を量りて爵を受くるは（二）畢命の臣なり。故に君に虚授なく、臣に虚受なし。虚授之を謬擧といひ、虚受之を（三）尸祿といふ。詩の（四）素餐の由りて作る所なり。昔（五）二虢兩國の任を辭せざるは、其德厚ければなり。（六）旦奭燕魯の封を讓らざるは、其功大なればなり。今臣國の重恩を蒙ること今に（七）三世、正に（八）陛下升平の際に値ひ、聖澤に沐浴し德教に潛潤す。厚幸と謂ふべし。而も位東藩を竊み、爵上列に在り。身輕煖を被り口百味に厭き、目（九）華靡を極め耳絲竹に倦む者は、爵重く祿厚きの致す所なり。退いて古の爵祿を受けし者を念ふに此に異るあり。皆功勤國を濟ひ、主を輔け民を惠むを以てなり。今臣は德の述ぶべきなく、功の紀すべきなし。此の若くにして年を終らば、國朝に益なく、將に（一〇）風人彼己の譏に挂らんとす。是を以て上は（一一）玄冕に慙ぢ、俯しては（一二）朱紱に媿づ。

【大意】人の生くるや當に忠孝を全うすべし。孝は爵祿名譽を得て、親を榮するを尚び、忠は君に

【二】畢命。命を盡すこと。
【三】尸祿。無能にして祿を食むこと。
【四】素餐。尸祿に同じ。詩經に「彼の君子、素餐せず」とあり。
【五】二虢。虢仲、虢叔の二人。共に文王の卿士たり。
【六】旦奭。周公旦は魯に封ぜられ、召公奭は燕に封ぜらる。
【七】三世。魏の武帝、文帝、明帝をいふ。
【八】陛下。明帝を指す。升平は泰平。
【九】華靡。華美なり。
【一〇】風人。詩經の詩を作れる人。彼己は詩經に「彼己の子、其服に稱はず」とありて、不德にして高位に在るを譏れるなり。
【一一】玄冕。黒き冠、官服なり。
【一二】朱紱。赤き綬、官服なり。

事へて國を盛にするを尙ぶ。故に慈父も無益の子を愛する能はず、仁君も無能の臣を畜ふ能はざるなり。君臣德の優劣を觀て、之に官爵を授くれば成功あり。臣己の材能を量りて官爵を受くれば、君命を全うするを得。故に明君は虛授せず、忠臣は虛受せず、無能にして君の祿を食めば素餐の譏を招く。昔二虢周召の封爵を辭せざりしは、周室に功德ありし故なり。今臣は國の重恩を受くること既に三世に及ぶ。誠に厚幸と謂ふべきなり。東藩に封ぜられて榮爵に列し、榮華を窮むるは、爵祿の厚きが爲なり。然も功德の稱述すべきなし。此の如くにして生を終らば、素餐の譏を免る能はず。常に衣冠に對して自ら恥づ。

方今天下一統して（一三）九州晏如たり。顧ふに西のかた尙は違命の蜀あり、東のかた不臣の呉あり。邊境をして未だ甲を稅ぐを得ず、謀士をして未だ枕を高うするを得ざらしむる者は、誠に宇內を混同し以て太和を致さんと欲すればなり。故に（一四）啓有扈を滅して夏功昭に、（一五）成商奄に克ちて周德著る。今陛下聖明を以て世を統べ、將に（一六）文武の功を卒へ（一七）成康の隆に繼がんと欲す。良を簡び能に授け、（一八）方叔、邵虎の臣を以て四境を鎭衞す。國の爪牙たる者當れりと謂ふべし。然れども（一九）高

【一三】九州。天下なり。晏如は無事。

【一四】啓。夏王の名、禹の子なり。有扈は夏の諸侯、貢職を供せず。

【一五】成。周の成王。商奄は二國の名。

【一六】文武。周の文王武王。創業の君なり。

【一七】成康。周の成王康王、守

鳥未だ輕繳に挂らず、(二〇)淵魚未だ鈎餌に懸らざる者は、恐くは釣射の術或は未だ盡さざればなり。昔耿弇光武を俟たず、亟に張歩を撃つ。言ふ賊を以て君父に遺らじと。故に(二一)車右劍に鳴轂に伏し、雍門首を齊境に刎ぬ。此の二子の若きは、豈生を惡んで死を尙ばんや。誠に其主を慢りて君を陵ぐを忿ればなり。夫れ君の臣を寵する、以て患を除き利を興さんと欲す。臣の君に事ふる、必ず身を殺し亂を靜め、功を以て主に報いんとす。昔賈誼は弱冠にして(二二)屬國に試みられんことを求め、(二三)單于の頸を係ぎて其命を制せんことを請ひ、終軍は妙年を以て越に使し、(二四)長纓を得て其王を占り、(二五)北闕に羈致せんと欲す。此の二臣、豈好んで主に夸りて世俗に燿かすをなさんや。志 或は鬱結し、才力を 逞うし能を名君に輸さんと欲すればなり。昔漢武霍去病の爲に第を治む。辭して曰く、匈奴未だ滅びず。臣家を以て爲すなきなりと。固より夫れ國を憂へ家を忘

成の君なり。

【一八】方叔邵虎。周の宣王の賢臣。

【一九】高鳥。蜀に喩ふ。輕繳はイグルミ。

【二〇】淵魚。吳に喩ふ。鈎はツリバリ。

【二一】車右。車上にて君に侍する臣。鳴轂は車轂の軋りて音を發するを。說苑に「越兵齊に至る、雍門狄死を請ふ、齊王曰く矢石未だ交らず、長兵未だ接せず、子の死を請ふは何ぞやと、狄對へて曰く、昔王囿に田す、左轂鳴る、車右死を請ふ。王曰く子何ぞ死する、車右曰く、轂鳴るが爲なりと、王曰く此れ工師の罪なり子何ぞ死すると、車右曰く臣轂の鳴るを見て工師を見ずと、遂に頸を刎れて死す。今越兵至る、轂の鳴るより甚し、安んぞ死せざらんやと、遂に劍に伏して死す」とあり。

【二二】屬國。夷狄を掌る官。

【二三】單于。匈奴の王。

【二四】長纓。長き紐。

【二五】北闕。天子の宮殿。羈致は縛送なり。

れ、軀を捐て難を濟ふは、忠臣の志なり。

【大意】今天下一統、四海無事なりと雖も、尙ほ吳蜀二國の臣服せざるあり。武士甲冑を脫するを得ず、謀臣枕を高うするを得ず。宜しく之を討滅し眞の一統を圖るべきなり。今陛下聖明の資を以て天下を統べ、祖業を全うし守成の功を成さんと欲し、賢能の臣を用ふること當れり。然も吳蜀の未だ滅びざるは征伐の術尙ほ未だ全からざるに由る。昔耿弇、張步の攻むる所となるや、光武帝將に往きて之を救はんとす。耿弇曰く賊虜を以て君父に遺るべけんやと、救援を待たずして進み戰ふ。齊王の車右、齊王の臣雍門狄、亦皆君の爲に身を殺しぬ。此二子豈身を惜まざらんや。君を慢り君を凌ぐ者を憎めばなり。賈誼、終軍亦君の爲に外敵を縛せんことを請へり。是れ皆志鬱結する所あり、誠を君に致さんと欲すればなり。漢の武帝、將軍霍去病の爲に邸宅を築かんとするや、去病は匈奴の未だ平がざるを以て之を辭せり。國を憂へ家を忘れ、身を棄てて難を救ふは、忠臣の志なればなり。

今臣外に居て厚からざるにあらざるなり。而も寢ねては席を安んぜず、食ひては味ふに遑あらざる者は、(二六)伏して(二七)二方未だ剋たざるを以て念となせばなり。伏して見るに(二八)先帝の武臣宿兵、年耆い

【二六】伏して。一本に伏の字なし。

【二七】二方。吳蜀なり。

【二八】先帝。武帝を指す。

て(二九)世に卽ける者聞ゆるあり。賢世に乏しからずと雖も、宿將舊卒由ほ戰を習ふ。竊に自ら量らず、志(三〇)命を效すに在り。庶くは(三一)毛髮の功を立て、以て受けし所の恩に報いん。若し陛下をして(三二)不世の詔を出し、臣をして(三三)錐刀の用を效さしめ、西のかた(三四)大將軍に屬し、(三五)一校の隊に當り、若くは東のかた(三六)大司馬に屬し、(三七)偏師の任を統ぶるを得しめば、必ず危きに乘り險を蹈み、舟を騁せ驪を奮ひ、刃を突き鋒に觸れ、士卒の先とならん。未だ(三八)權を禽にし(三九)亮を馘る能はずと雖も、庶くは將に其(四〇)雄率を虜にし、其醜類を殲さんとす。必ず(四一)須臾の捷を效し、以て終身の愧を滅し、名を史筆に挂け、事を(四二)朝榮に列せしめば、身は蜀境に分れ、首は吳闕に懸ると雖も、猶ほ生くるの年のごとくならん。如し微才試みられず、世を沒ふるまで聞ゆるなく、徒に其軀を榮して其體を豐にし、生きて事に益なく死して數に損なく、虛しく上位を荷ひて重祿を忝うし、禽息鳥視して、白首に終らば、此れ徒(四三)圈牢の養物なり。臣の志す所にあらざるなり。

【二九】世に卽く。死すること。
【三〇】命を效す。君の爲に身命を棄つること。
【三一】毛髮の功。微功なり。
【三二】不世。世に稀なること。
【三三】錐刀の用。小用なり。
【三四】大將軍。曹眞をいふ。
【三五】一校。偏軍なり。
【三六】大司馬。曹休をいふ。
【三七】偏師。一部隊なり。
【三八】權。吳主孫權。
【三九】亮。蜀の諸葛亮。
【四〇】雄率。首長なり。
【四一】須臾。少時なり。
【四二】朝榮。朝廷の榮譽。
【四三】圈牢。獸を養ふ檻。

【大意】今臣東藩に居て祿爵厚からざるにあらず。然れども寢食を安んせざるは、吳蜀二國の未

だ平定せざるを憂ふればなり。今や武帝の宿將多くは老死せるも、世尙ほ賢將に乏しからず。然れども宿將舊卒尙ほ戰を習ひ、報效の事に勤む。臣が志亦君の爲に一身を投ずるに在り。今若し陛下の詔により臣をして軍伍に加はらしめば、たとひ吳主蜀相を擒殺する能はざるも、必ず其首長を虜にし、賊黨を殄すを得べし。若し少時の勝を得て、素餐の愧を雪ぎ、名を史乘に揭ぐるを得ば、死するも猶ほ生くるが如し。若し然らずして徒に厚祿を食みて世に益なくんば、檻中に飼養せらるる禽鳥に異らず。此れ臣の志にあらざるなり。

(四四)流聞するに(四五)東軍備を失ひ、(四六)師徒小衄すと。食を輟め餐を弃て、袂を奮ひ衽を攘げ、劍を撫して東顧し、而して心已に(四七)吳會に馳す。臣昔(四八)先武皇帝に從ひ、南のかた赤岸を極め、東のかた滄海に臨み、西のかた玉門を望み、北のかた玄塞を出づ。伏して軍を行り兵を用ふる所以の勢を見るに、神妙と謂ふべし。故に兵は豫言すべからず、難に臨みて變を制する者なり。志自ら(四九)明時に效し、功を聖世に立てんと欲す。史籍を覽て古の忠臣義士、(五〇)一朝の命を出し、以て國家の難に殉し、身屠裂せらると雖も、功銘(五一)景鍾に著しく、(五二)名稱竹帛に垂るるを觀る每に、

【四四】流聞。傳聞なり。
【四五】東軍。曹休吳を伐ちて皖に至り、吳將陸遜と石亭に戰ひて敗る。
【四六】師徒。兵衆なり。小衄は敗績。
【四七】吳會。吳郡會稽郡。
【四八】先武皇帝。曹操をいふ。
【四九】明時。昭代なり。
【五〇】一朝の命。久しからざる

未だ嘗て心を拊ちて歎息せずんばあらざるなり。臣聞く明主の臣を使ふや、有罪を廢てず。故に奔北敗軍の將(五三)秦魯に用ひられて以て其功を成し、(五四)纓を絶ち(五五)馬を盜むの臣、楚趙に赦されて以て其難を濟へり。臣竊に(五六)先帝早く崩じ、(五七)威王世を弃てしに感ず。臣獨り何人ぞ以て長久なるに堪へん。常に恐くは朝露に先だちて(五八)溝壑に塡し、墳土未だ乾かずして身名並に滅びんことを。臣聞く(五九)騏驥長鳴して伯樂其能を昭にし、(六〇)盧狗悲號して韓國其才を知る。是を以て之を齊楚の路に效し、以て千里の任を逞うし、之を(六一)狡兎の捷に試みて以て搏噬の用に驗せりと。今臣狗馬の微功に志す。竊に自ら惟度するに、終に伯樂韓國の擧な

生命。

【五一】景鍾。大鐘なり。

【五二】名稱。一本に名績に作る。

【五三】秦。秦の繆公の時、孟明視、西乞術、白乙丙の三將晉と戰つて敗ろ、後復た之を將として勝てり。魯の莊公曹沫を將とし齊と戰つて敗ろ、後復た之を將として勝てり。

【五四】纓を絶つ。纓は冠の紐。說苑に「楚の莊王羣臣に酒を賜ふ、日暮れ燭滅す、王の美人の衣を引く者あり、美人乃ち挽きて冠纓を絶ち以て告ぐ、王曰く人に飮ましむるに酒を以てす、如何ぞ人を責むるに禮を以てせんと、乃ち左右に命じて火を上ろなからしめて曰く、寡人と飮み纓を絶たざる者は懽せざるなりと、羣臣皆纓を絶つ。然る後火を擧ぐ、後晉と戰ふ、美人の衣を引きし者五合五獲し以て莊王に報ゆ」とあり。

【五五】馬を盜む。秦の穆公馬を失ふ、野人之を取りて食ふ、公曰く駿馬の肉を食ひて酒を飮まずんば恐くは汝を傷はんと、乃ち酒を賜ふ、後穆公晉と戰ひ其の圍む所となる、野人三百餘人を率ゐて力戰し、公の圍を解き其恩に報ゆ。此れ秦の事なるに今趙となすは趙と秦とは、其祖を同うすればなり。

【五六】先帝。文帝を指す。曹植の兄なり。

【五七】威王。任城王彰、諡して威といふ。曹植の兄なり。

【五八】溝壑に塡す。己の死することを謙していふ。

【五九】騏驥。駿馬なり。伯樂は馬を知る人の名。

【六〇】盧狗。名犬の名。韓國は

し。是を以て【六二】於邑して竊に自ら痛む者なり。

【大意】傳聞する所に據れば、東伐の軍少しく利あらずといふ。臣乃ち憤慨して心を呉に馳す。臣は嘗て武帝に從つて東西に轉戰し、頗る軍を行るの術に通じ。又よく機に臨み變に應ずるの策を知れり。因つて功を聖世に立てんことを願へり。史籍を觀て古の忠臣義士、國家の難に殉し、功名を竹帛に垂るるを見る毎に、未だ嘗て胸を打つて嘆息せずんばあらざるなり。且つ明主の臣を用ふるや、有罪の人を廢てず、故に能く大功を成す。(武帝嘗て植を立てて世子となさんとす。賈詡の諫に因りて止む。文帝乃ち植と隙あり。因つて植を貶せり。故に此言あるなり）臣竊に思ふに、二兄皆早世せり。臣亦當に長壽を保つ能はざるべし。若し一朝忽然として死せば身命ともに滅びん。是れ事功を立つるに急なる所以なり。然も知己の擧用に遇はず。是を以て嘆息して自ら傷む。

夫れ【六三】博に臨んで企竦し、樂を聞いて竊に抃つ者は、或は音を賞して【六四】道を識るあればなり。昔毛遂は趙の【六五】陪隸なり。猶ほ錐嚢の喩を假りて以て主を寤し功を立つ。何ぞ況んや【六六】巍巍たる大魏、多士の朝にして、慷慨難に死するの臣

犬を知る人の名。
【六一】狡兎の捷。捷は敏速。

【六二】於邑。嘆息なり。

【六三】博。局戯なり。雙陸の類。企竦は足を爪だてて見ること。

【六四】道。棊道なり。
【六五】陪隸。陪臣なり。
【六六】巍巍。盛なる貌。

なからんや。夫れ自ら衒ひ自ら媒するは、士女の醜行なり。時を干し進を求むるは、道家の明忌なり。而かも臣敢て陛下に陳聞する者は、誠に(六七)國と形を分ち氣を同うし、憂患之を共にする者なればなり。冀くは塵露の微を以て山海を補益し、螢燭の末光を日月に增さんことを。是を以て敢て其醜を冒して其忠を獻ず。必ず朝士の爲に笑はるるを知るも、聖主は人を以て言を廢てず。伏して惟るに陛下少しく神聽を垂れなば、臣則ち幸なり。

【大意】人の博するを見、立つて之を覗ひ、樂を奏するを聞き、竊に節を擊つ者は、博と樂とに心得ある者なり。己の試みられんことを求むるも、身に兵術の素養あればなり。自ら衒ひ自ら薦むるは醜行なり。然も臣が自ら求めて試用を請ふは陛下と骨肉の親あり、憂患を共にするが爲なり。固より微力にして國家の補をなすに足らず。敢て醜行を冒して自ら薦むるは、朝士の笑を買ふべしと雖も、陛下は必ず臣の言を棄てざらん。若し聽許を賜はば臣の大幸なり。

【六七】國。天子をいふ。形を分ち氣を同うすとは文帝と兄弟なるをいふ。

(二)親親を通ぜんことを求むる表　曹子建

臣植言す。臣聞く、天その高きを稱する者は、

【一】親親云云。文帝の諸王の入朝を聽さざるを以て表を上

覆はざるなきを以てなり。地その廣きを稱する者は、載せざるなきを以てなり。日月その明を稱する者は照さざるなきを以てなり。江海その大を稱する者は、容れざるなきを以てなりと。故に孔子曰く、(二)大なる哉堯の君たるや、惟れ天を大なりとなす。惟れ堯之に則ると。夫れ天德の萬物に於ける、弘廣と謂ふべし。蓋し堯の敎たる、親を先にして疏を後にし、近きより遠きに及ぼす。其傳に曰く、(三)克く俊德を明にして以て九族を親み、九族既に睦しくして(四)百姓を平章すと。周の文王に及び、亦その化を崇ぶ。其詩に曰く、(五)寡妻に刑り、兄弟に至り、以て家邦を御むと。是を以て(六)雍雍穆穆として(七)風人之を詠ず。昔周公(八)管蔡の咸ならざるを弔み、廣く(九)懿親を封じて以て王室に(一〇)蕃屛とす。傳に曰く、周の(一一)宗盟、異姓を後となすと。誠に骨肉の恩爽へども離れず、親を親むの義寔に(一二)敦固に在り。未だ義にして其君を後にし、仁にして其親を遺る者あらざるなり。

【大意】天地日月は覆載照臨せざる所なし。故に其德弘廣なり。堯之に則り以て天下を治む。周の

りて親戚を存問せんことを求む。

【二】大なる哉。論語の文なり。

【三】克く云云。書經堯典の文なり。

【四】百姓。百官なり。平章は平和章明なり。

【五】寡妻。嫡妻なり。文王の妃大姒を指す。

【六】雍雍穆穆。和睦なり。

【七】風人。詩經の詩を作れる人。

【八】管蔡。周公の弟管叔蔡叔なり。

【九】懿親。親族なり。

【一〇】蕃屛。藩屛なり。

【一一】宗盟。盟會なり。

【一二】敦固。厚固なり。

文王亦同じ。周公亦この道を以て親戚を親めり。兄弟の親は一時差舛することなきにあらざれども、竟に離隔に至らざればなり。固より當に敦厚なるべし。蓋し仁者は其親を弃てず。親を弃てて能く仁義を行ふ者は未だ之れあらざるなり。

伏して惟るに陛下〔一三〕帝唐欽明の德を咨ひ、文王〔一四〕翼翼の仁を體し、惠〔一五〕椒房に洽く、恩〔一六〕九親に昭に、羣臣〔一七〕百寮番に休ひ遞に上り、執政公朝に廢せず、下情私室に展ぶるを得、親理の路通じ慶弔の情展ぶ。誠に己を恕して人を治め、惠を推し恩を施す者と謂ふべし。臣に至りては人道緒を絶ち〔一八〕明時に禁固せらるゝ。臣竊に自ら傷む。敢て乃ち氣類を交へ人事を脩め、〔一九〕人倫を敍べんことを望まず。近ごろ且つ〔二〇〕婚媾通せず、兄弟永く絶え、吉凶の問塞がり、慶弔の禮廢し、〔二一〕恩紀の違へること路人よりも甚しく、〔二二〕隔閡の異なること〔二三〕胡越よりも殊なり。今臣一切の制を以て、永く〔二四〕朝覲の望なし。心を〔二五〕皇極に注ぎ情を〔二六〕紫闥に結ぶに至りては、神明之を知れり。然れども天實に之を爲せり。之を何と

【一三】帝唐。堯なり。欽は恭敬なり、明は聰明なり。書經堯典に「放勳欽明」とあり。
【一四】翼翼。恭敬の貌。詩經に「惟れ此の文王、小心翼翼」とあり。
【一五】椒房。皇后をいふ。
【一六】九親。九族に同じ。
【一七】百寮。百官なり。
【一八】明時。昭代なり。禁固は禁錮なり。文帝の時より入朝を禁ぜられし事をいふ。
【一九】人倫。人道なり。
【二〇】婚媾。婚姻なり。
【二一】恩紀。恩義なり。
【二二】隔閡。隔絶なり。
【二三】胡越。胡は北、越は南に在り。
【二四】朝覲。入朝して天子を拜すること。

か謂はん。退いて諸王を省るに、常に(二七)戚戚具爾の心あり。願くは陛下(二八)沛然として詔を垂れ、諸國をして慶問し、(二九)四節展ぶるを得以て骨肉の歡恩を敍べ、(三〇)怡怡の篤義を全うし、妃妾の家、(三一)膏沐の遺、歲ゝ再び通ずるを得、義を(三二)貴宗に齊うし、惠を(三三)百司に等うせしめんことを。此の如くなれば則ち古人の歎ずる所、(三四)風雅の詠ずる所、復た聖世に存せん。

【二五】皇極。天子の居る所。
【二六】紫闥。天子の宮殿。
【二七】戚戚具爾。詩經に「戚戚たる兄弟、遠きことなく具に爾づく」とあり、爾は邇に同じ、戚戚は內相親むなり。
【二八】沛然。恩澤の下る貌。
【二九】四節。四時の佳節。
【三〇】怡怡。兄弟和樂の貌。
【三一】膏沐。髮を洗ふ水及び脂。詩經衞風に「豈膏沐なからんや、誰を適として容をなさん」とあり。
【三二】貴宗。外戚及び諸公。
【三三】百司。百官なり。
【三四】風雅。詩經の國風及び大小雅。

【大意】伏して惟るに陛下、帝堯周文の仁德あり、恩惠皇妃親戚に及ぶ。故に羣臣亦之に化して互に次を以て休息し、互に上下をなし、公私ともに情誼の通せざるはなし。是れ誠に己を恕して人を治むるものといふべし。臣の如きに至りては兄弟相親むの道を絕ち、朝拜を許されず、人倫を全うすること能はず、親戚相見ゆるを得ず、恩義の隔絕せること胡越の如し。臣が心情を陛下に注ぐの厚きは神明の知る所なるも、陛下の禁せらるるを如何せん。諸王亦皆陛下を慕ふの情切なれども、今皆其情を遂ぐる能はず。陛下一たび詔を下し、骨肉の歡恩を敍ぶるを得しめば、是れ古人の歎

美せる所の道、復た今の世に行はるるなり。臣伏して自ら惟省するに、(三五)錐刀の用なし。陛下の拔授する所を觀るに及び、若し臣を以て異姓となさば、竊に自ら料度するに朝士に後れず。若し(三六)遠游を辭し(三七)武弁を戴き、(三八)朱組を解き青紱を佩び、(三九)駙馬奉車、趣に(四〇)一號を得、宅を(四一)京室に安んじ、鞭を執り筆を珥み、出でては(四二)華蓋に從ひ、入りては(四三)輦轂に侍し、聖問に承答し、左右に(四四)拾遺するを得ば、乃ち臣が(四五)丹情の至願にして、夢想を離れざる者なり。遠くは(四六)鹿鳴君臣の宴を慕ひ、中ごろ(四七)棠棣匪他の誡を詠じ、下には(四八)伐木友生の義を思ひ、終は(四九)蓼莪罔極の哀を懷き、四節の會毎に(五〇)塊然として獨り處り、左右ただ僕隷のみ、對する所は唯妻子のみ。高談も與に陳ぶ

【三五】錐刀の用。小用なり。
【三六】遠游。遠地に封ぜらるるをいふ。
【三七】武弁。武士の冠。
【三八】朱組。諸侯の綬。青紱は將軍の青綬。
【三九】駙馬。都尉をいふ。奉車は天子の車輿を掌る官。
【四〇】一號。勳號なり。
【四一】京室。京師なり。
【四二】華蓋。天子の車蓋。
【四三】輦轂。天子の車。
【四四】拾遺。君の闕失を補ふこと。
【四五】丹情。赤心なり。
【四六】鹿鳴。詩經の篇の名。序に「鹿鳴は羣臣嘉賓を宴するなり」とあり。
【四七】棠棣。詩經の篇の名。序に「棠棣は兄弟を燕するなり」とあり、中に「豈伊れ異人ならんや、兄弟にして他に匪ず」とあり。
【四八】伐木。詩經の篇の名。序に「伐木は朋友故舊を燕するなり」とあり。中に「矧んや伊の人、友生を求めざらんや」とあり。
【四九】蓼莪。詩經の篇の名。「父や我を生み、母や我を鞠ふ、之が德に報いんと欲するも、昊天極なし」とあり。
【五〇】塊然。獨居の貌。

る所なく、發義も與に展ぶる所なし。未だ嘗て樂を聞いて心を拊ち、觴に臨んで歎息せずんばあらざるなり。臣伏して以爲らく犬馬の誠は人を動かす能はず。譬へば人の誠の天を動かす能はざるがごとし。(五一)城を崩し(五二)霜を隕す。臣初め之を信ず。臣が心を以て況ふれば徒虛語のみ。(五三)葵藿の葉を傾くるが若きは、太陽之が爲に光を廻らさずと雖も、終に之に向ふ者は誠なり。臣竊に自ら葵藿に比す。若し天地の施を降し。(五四)三光の明を垂るる者は、寔に陛下に在り。

【大意】臣は固より無能なれども、臣をして異姓の臣たらしめば、敢て朝士に劣らず。若し封侯たるを免じて武將に任ぜられ、或は駙馬、奉車の職を命ぜられ、或は京師に在りて陛下に侍するを得しめば、臣の至願にして、夢寐に忘れざる所なり。今常に骨肉相親むを得ざるを嘆き、塊然として獨居す。ああ臣の至誠も陛下の心を動かす能はず。然も尙ほ此表を上りて以て歎願するは、卽ち葵藿の誠あればなり。陛下願くは天地日月の恩を垂れ給へ。

臣聞く、(五五)文子曰く、福の始とならず、禍の先とならずと。今の(五六)否隔、(五七)友于憂を同うす。而るに臣獨り唱言するは何ぞや。竊に聖代に於

【五一】城を崩す。列女傳に「齊の莊公莒を襲ひ、杞梁殖戰死す、其妻其夫の屍に就き城下に哭す、十日にして城之が爲に崩る」とあり。

【五二】霜を隕す。淮南子に「鄒衍忠を燕の惠王に盡す、王讒を信じて之を繫ぐ、衍天を仰いで哭す、正夏にして天之が爲に霜を降す」とあり。

【五三】葵藿。草の名、ひまはり。

【五四】三光。日月星なり。

【五五】文子。姓は辛、葵丘濮上の人なり、稱して計然といふ。

て施を蒙らざる物あり、必ず（五八）慘毒の懐あらしむるを願はざればなり。故に（五九）栢舟に天只の怨あり、（六〇）谷風に弃予の歎あり。（六一）伊尹は其君の堯舜たらざるを恥づ。孟子曰く、舜の堯に事ふる所以を以て其君に事へざる者は、其君を敬せざる者なりと。臣の愚蔽固より（六二）虞伊にあらず。陛下をして（六三）光被時雍の美を崇び、（六四）緝熙章明の徳を宣べしめんと欲するに至りては、是れ臣が（六五）慺慺の誠、竊に獨り守る所なり。寔に（六六）鶴立企佇の心を懐き、敢て復た陳聞する者は、陛下の儻くは天聽を發して、神聽を垂れんことを冀へばなり。

【大意】文子曰く、福の始とならず、又禍の先とならざれと。今諸王隔絶の憂を抱けども、未だ陛下に上表せる者あらず。臣獨り率先して此表を上つるは何ぞや。聖代に於て恩澤を蒙むる能はず、爲に憂怨を抱く者あるを好まざればなり。夫れ臣たる者は、舜の堯に事へし所以の心を以て其君に事ふべきなり。臣の固陋なる、固より舜に及ばず。然れども陛下をして堯の盛徳あらしめんことは

范蠡之に師事す。
【五六】否隔。兄弟の隔絶せること。
【五七】友于。兄弟なり。
【五八】慘毒。憂怨なり。
【五九】栢舟。詩經の篇の名。「母也天只、不諒人只」の句あり。
【六〇】谷風。詩經の篇の名。「將安將樂、汝轉弃予」の句あり。
【六一】伊尹。殷の賢臣なり。
【六二】虞伊。舜と伊尹となり。
【六三】光被時雍。書經堯典に「允に恭しく克く讓り、四表に光被す」、「萬邦を協和し、黎民於變り時れ雍ぐ」とあり。
【六四】緝熙章明。詩經に「維れ清く緝熙たり、文王の典」、書經堯典に「百姓章明」とあり。
【六五】慺慺。謹愼なり。
【六六】鶴立。轉ぜざること。企佇は踵を擧げて待つこと。

臣の願なり。故に儻くは陛下の神聽を垂れ給はんことを冀ひ、此表を上る所以なり。

開府を讓る表

（一）羊　叔　子

臣祜言す。臣昨出づ。伏して恩詔を聞くに、臣を拔いて（二）台司に同じからしむと。臣出身より以來、適に十數年。任を外内に受け、每に顯重の地を極む。常に以らく智力は彊めて進むべからず、恩寵は久しく謬るべからずと。夙夜戰慄し榮を以て憂となす。臣（三）古人の言を聞くに、德未だ衆の服する所とならずして高爵を受くれば、則ち才臣をして進まざらしめ、功未だ衆の歸する所とならずして厚祿を荷へば、則ち勞臣をして勸まざらしむと。今臣身（四）外戚に託し、事（五）運會に遭ふ。誠過寵に在りて遺てらるるを患へず。而るに猥に超然として（六）發中の詔を降し、（七）非次の榮を加ふ。臣何の功ありてか以て之に堪ふべき。何の心か以て之に安んずべき。身を以て陛下を誤り、高位を辱うせば、傾覆も亦尋で至らん。復た

【一】羊叔子。羊祜、字は叔子。晉の泰山の人、晉の武帝祜を以て荊州諸軍事を都督せしめ、又車騎將軍開府儀同三司となす、祜表を上りて讓る。
【二】台司。三公なり。開府儀同三司とは威儀百物三公に同じからしむるなり。
【三】古人。管子なり。
【四】外戚。祜の姉司馬師に配す。
【五】運會。よき時運。晉の初めて興るをいふ。
【六】發中。中心より發すること。
【七】非次。班次に依らざること。

(八)先人の弊廬を守らんとを願ふも、豈得べけんや。命に違へば誠に天威に忤ふ。曲從すれば卽ち復た此の若し。蓋し聞く、古人は知らるるに申び、大臣の節不可なれば則ち止むと。臣は小人なりと雖も、敢て蒙る所に緣りて、斯義を存せんことを念ふ。

【大意】 臣昨日休沐を賜りて歸る。詔あり臣を拔擢して開府儀同三司となす。臣は出身より以來、常に顯要の位にあり。然れども臣が智は自ら勉めて進むる能はず。恩寵は虛しして之を受くべからず。是を以て日夜憂慮しつつあり。今又詔ありて非次の榮に浴す。何ぞ自ら堪ふるを得んや。然れども詔に違へば天威に背き、曲げて從へば禍敗の本となる。是れ臣の大に惑ふ所なり。古人曰く、士は己を知らざる者に屈して己を知る者に伸び、大臣は道を以て君に事へ不可なれば則ち止むと。臣は固より小人なれども、今開府の職を蒙るに際し、不可なれば則ち止むの義に從はんと欲す。今天下化に服してより已來、方に八年に漸とす。(九)側席して賢を求め、幽賤を遺さずと雖も、然れども臣等有德を推し有功を進め、聖聽をして臣に勝る者多くして、未だ達せざる者少からざるを知らしむる能はず。假令德を(一〇)版築の下に遺つるあり、才を(一一)屠釣の間に隱すあらば、(一二)令朝議臣を用ひ、以て非となさず、臣之に處て以て

【八】先人。父祖なり。

【九】側席。席を空うして賢者を待つこと。

【一〇】版築。版は牆の上下の板、築は杵。孟子に「傳說は板築の間より擧げらる」とあり。

愧となさざるも、失ふ所豈大ならずや。

【大意】　今天下晉室の政化に服してより已に八年なり。其間常に賢者を幽隱の間に求めたりと雖も、猶ほ野に遺賢なきにあらず。若し才徳を微賤の間に隱す者あらば、たとひ朝議臣を重用し、臣之に處りて愧ぢずとするも、國家の損失豈大ならずや。

且つ臣（一三）忝竊すること久しと雖も、未だ今日文武の極寵を兼ね、宰輔の高位に等うするが若くならざるなり。臣の見る所狹しと雖も、光祿大夫（一四）李喜、節を秉ると（一五）高亮にして、身を正うして朝に在り、光祿大夫（一六）魯芝、身を絜くし欲を寡くし、和して同せず、光祿大夫（一七）李胤、政に蒞みて弘簡に、公に在りて色を正うし、皆（一八）服事華髮、禮を以て始終し、内外の寵を歷と雖も、（一九）寒賤の家に異らざるに據るに、猶ほ未だ（二〇）此選を蒙らず。臣更に之に越ゆ、何を以てか天下の望を塞ぎ、少しく（二一）日月を益せん。是を以て

傅説は殷の賢臣。

【一一】屠釣。尉繚子に「太公牛を朝歌に屠る」、史記に「太公望漁釣を以て周の西伯を干す」とあり。

【一二】令。一本此字なし。或は今の誤か。

【一三】忝竊。高位を辱うすること。

【一四】李喜。字は季和。

【一五】高亮。高明なり。

【一六】魯芝。字は世英。

【一七】李胤。字は宣伯

【一八】服事。君に事ふること。華髮は白髮なり。

【一九】寒賤。貧賤なり。

【二〇】此選。開府儀同三司。

【二一】日月。天子に喩ふ。

心に誓ひ節を守り、苟進の志なし。今道路未だ通せず、方隅事多し。乞ふ前恩を留め臣をして速に(二二)屯に還るを得しめよ。爾らずして(二三)留連せば、必ず(二四)外虞に於て闕くるあらん。臣憂懼に勝へず。謹んで(二五)觸冒拜表す。惟陛下、匹夫の志、以て奪ふべからざるを察せよ。

【大意】且つ臣重位に在ること久しと雖も、未だ今日文武の職を兼ね、儀三公に同うするが如きに至らず。臣の見る所狹しと雖も、光祿大夫李喜、魯芝、李胤ば、皆忠良の君子にして、老年に至るまで陛下に服事し、禮を以て終始し、將相の重職に在るも、其の奢らざること貧賤の人に異らず。此三人の如きは、宜しく開府となすべきなり。然も未だ此選に入らず。臣却つて之に越ゆ。何ぞ能く天下の望に副ひ、陛下の明を益すを得んや。今盜賊横行して邊境未だ靜ならず。願くは臣をして從來の職に留り荊州に還らしめよ。若し滯留して還らずんば、警備に於て缺くる所あらん。願くは臣が微衷を察せられんことを。

【二二】屯。荊州の鎭臺。
【二三】留連。速に還らざること。
【二四】外虞。外敵の防備。
【二五】觸冒。天子の威を冒すこと。

陳情表

(一)李令伯

臣密言す。臣(二)險釁

【一】李令伯。李密、字は令伯、晉の武帝徵して太子洗馬となさんとす、密上書して之を辭

を以て夙に(三)閔凶に遭ひ、(四)生孩六月にして、慈父に背かる。行年四歳にして舅母の志を奪ふ。祖母劉臣の(五)孤弱を愍み、躬親ら撫養す。臣疾病多く九歳にして行かず。(六)零丁孤苦して(七)成立に至る。既に(八)叔伯なく、終に(九)兄弟鮮し。門衰へ祚薄く、晩に(一〇)兒息あり。外には(一一)朞功彊近の親なく、内には(一二)應門五尺の僮なく、(一三)煢煢として獨立し、形影相弔ふ。而して劉夙に疾病に嬰り、常に牀蓐に在り。臣湯藥に侍し、未だ嘗て廢離せず。

【大意】臣は不幸にして、生れて六月の時父を喪ひ、四歳の時、舅(母の兄弟)母の志を奪ひて、節を守るを得ざらしめ、他家に再嫁せしむ。ただ祖母劉氏あり、臣の幼にして孤なるを憫み、臣を養育せるも、性來病弱にして九歳に至るまで歩行するを得ず。祖母の養育により纔に成人するを得たり。既に兄弟なく、ただ臣の晩年兒息を擧げたるのみ。他に依賴すべき親類緣者なし。祖母近來病床に在り。臣之を看護して未だ嘗て其側を離れず。

す。
【二】險釁。艱難禍罪なり。
【三】閔凶。父を喪へること。
【四】生孩。赤子なり。
【五】孤弱。孤兒にして幼弱なること。

【六】零丁。危弱の貌。
【七】成立。二十成人なり。
【八】叔伯。兄弟なり。
【九】兄弟。詩經に「終に兄弟鮮し、維れ予と汝と」とあり。
【一〇】兒息。子息なり。

【一一】朞功彊近。大功小功の喪に服すべき家運の榮えつゝある親戚。
【一二】應門。門に於て客の取次をすること。
【一三】煢煢。孤立の貌。

（二四）聖朝に奉じ、淸化に沐浴するに逮び、前に（二五）太守臣逵、臣を（二六）孝廉に察し、後に（二七）刺史臣榮、臣を（二八）秀才に擧ぐ。臣（二九）供養主なきを以て辭して赴かず。會〻詔書特に下り、臣を（三〇）郎中に拜し、尋で國恩を蒙り、臣を（三一）洗馬に除す。猥に微賤を以て（三二）東宮に侍するに當る。臣首を隕すも能く上報する所にあらず。臣具に表を以て聞し、辭して職に就かず。詔書（三三）切峻にして、臣が（三四）逋慢を責め、郡縣逼迫して臣に（三五）上道を催し、（三六）州司門に臨むこと（三七）星火よりも急なり。臣詔を奉じて奔馳せんと欲すれば、則ち劉が病日に篤く、苟も私情に順はんと欲すれば、則ち告訴すれども許されず。臣の進退實に狼狽を爲す。

【二四】聖朝。晉をいふ。
【二五】太守。郡の長官。逵は其名。晉の臣なる故臣の字を冠す。
【二六】孝廉。科目の名。
【二七】刺史。郡の長官。榮は其名。
【二八】秀才。科目の名。
【二九】供養。祖母を侍養すること。
【三〇】郎中。官名。
【三一】洗馬。皇太子に侍する官なり。除は任なり。
【三二】東宮。太子なり。
【三三】切峻。きびしきこと。
【三四】逋慢。緩怠なり。
【三五】上道。入京の途に上ること。
【三六】州司。郡吏なり。
【三七】星火。流星なり。

【大意】聖朝（晉は魏の禪を受けて天子となる）の政化に浴するに及び、陛下の臣逵、榮等臣を擧げて孝廉、秀才となさんとす。然れども一たび官に就けば祖母を養ふ者なきを以て、辭して就かず。たまたま詔書特に下り、臣を郎中、洗馬に任ぜられんとす。臣が微賤の身を以て、太子に侍するは、

たとひ粉骨碎身するも其厚恩に報ゆるに足らざるなり。故に表を上り辭して就かず。詔書再び下りて、臣の怠慢を責め、郡縣の吏臣を促して京に上らしむ。臣詔に從ひて入京せんとすれば、祖母の病日に篤く、私情に順つて侍養せんとすれば、辭するも許されず。進退これ谷まれりと謂ふべし。

伏して惟るに聖朝孝を以て天下を治む。凡そ故老に在りて猶ほ(二八)矜育を蒙る。況んや臣が孤苦、特に尤も甚しとなすをや。且つ臣少くして(二九)僞朝に仕へ、職を(三〇)郎署に歴たり。本より(三一)官達を圖り、名節に矜らず。今臣は(三二)亡國の賤俘にして、至微至陋なり。過りて拔擢を蒙り、寵命優渥なり。豈敢て(三三)盤桓して希冀する所あらんや。但以ふに劉日(三四)西山に薄り、(三五)氣息奄奄たり。人命は危淺にして朝に夕を慮らず。臣祖母なくんば以て今日に至るなく、祖母臣なくんば以て(三六)餘年を終るなし。母孫二人更〻命を相爲す。是を以て區區として廢て遠ざかる能はざるなり。臣密今年四十有四、祖母劉今年九十有六。是れ臣の節を陛下に盡すの日は長く、劉に報ゆるの日は短し、(三七)

【二八】矜育。憐み養ふこと。
【二九】僞朝。蜀をいふ。
【三〇】郎署。尚書郎。
【三一】官達。官吏として立身すること。
【三二】亡國。蜀をいふ。賤俘は卑賤なる俘虜。
【三三】盤桓。進まざる貌。
【三四】西山に薄る。年老いたるをいふ。
【三五】氣息奄奄。息の將に絕えんとすること。
【三六】餘年。殘年なり。
【三七】烏鳥。烏は孝鳥なり。

烏鳥の私情願くは養を終へんことを乞ふ。

【大意】伏して惟るに聖朝に於ては孝道を主として天下を治め（晉の喪を長くせる事などを指す）養老を重んじ給ふ。臣の如き孤苦尤も甚しき者は、當に哀憐を加へらるべきなり。臣は嘗て蜀に仕へ、尚書郎に任ぜられ、本より官職の榮達を願ふ者にして、隱逸して名節に矜らんとする者にあらず。今非常の拔擢に遇ふ。敢て更に一層の高官を希ひて躊躇せるにはあらず。ただ祖母年老いて死に瀕し、臣なくんば餘年を終り天壽を全うする能はざるなり。祖母の死後は必ず陛下に仕へて節を盡すべし。陛下願くは臣の私情を許し、祖母の養を終へしめ給はんことを。

臣の辛苦は、獨り蜀の人士、及び（三八）二州の牧伯の明に知らるる所なるのみにあらず、（三九）皇天后土も實に共に鑒る所なり。願くは陛下愚誠を矜愍し、臣が微志を聽されんことを。庶くは劉僥倖して餘年を保ち卒へん。臣生きては當に首を隕すべく、死しては當に（四〇）草を結ぶべし。臣犬馬怖懼の情に勝へず。謹んで拜表して以聞す。

【大意】臣の辛苦は、人の皆知る所なるのみならず、天地も亦之を知れり。願くは陛下臣

【三八】二州。梁州、益州なり。牧伯は地方長官、即ち榮、逵なり。

【三九】皇天后土。天の神、地の神。

【四〇】草を結ぶ。晉の魏武子嬖妾あり、武子疾みし時、子顆に命じて曰く、吾死せば之を嫁せよと、困するに及び又曰く、殺して以て殉せよと、武子死す、顆乃ち初の言に從ひ之を嫁せしむ、顆後秦將杜回と戰ふ、顆老人の草を結んで以て杜回に亢するを見る、回

の微志を聽し、養を終へしめんことを。然らば生時は言ふに及ばず、死後にも猶ほ其恩に報いんとす。茲に謹んで此表を上りて奏聞す。

躓き顛の獲る所となる、中夜夢に草を結びし老人を見る、曰く予は妾の父なり、君が殺さざるの心に報ゆと。事左傳に見ゆ。

(一)平原内史を謝する表　　陸士衡

(二)陪臣陸機言す。今月九日、魏郡太守、兼丞張含を遣し(三)板詔書印授を賫し、臣に假して平原内史となさしむ。拜受して祇み竦れ、裁する所を知らず。臣もと(四)敵國より出で、世〻(五)先臣力を宣ぶるの效なく、才(六)丘園耿介の秀にあらず。皇澤廣く被り惠濟遠きなし。羣萃より擢んでられ、累に榮進を蒙る。入朝(七)九載、歷官有六、身(八)三閣に登り、官(九)兩宮に成る。(一〇)冕を服し軒に乘り、仰いで貴游

【一】平原内史。晉の成都王穎、士衡を表して平原内史となす、士衡惠帝に上表して恩を謝す。

【二】陪臣。諸侯の臣、天子に對して陪臣と稱す。士衡は前に吳王の郎中令たり、故に陪臣と稱す。

【三】板詔書。時に成都王政を攝す。故に其命を板詔といふ。

【四】敵國。吳をいふ。士衡は吳滅びて晉に仕ふ。

【五】先臣。父祖をいふ。

【六】丘園耿介。隱居して俗に隨はざること。

【七】九載。九年なり。

【八】三閣。秘書郎たりしこと。中外三閣の經書を掌る。

に齒し、景を振ひ迹を拔き、顧るに同列に邈なり。施山岳より重く、義(一一)灰沒するに足る。國の(一二)顚沛するに遭ひ、節の紀すべきなし。(一三)曠盪を蒙れりと雖も、臣獨り何の顏ぞ。首を俛し(一四)膝を頓し、憂愧すること厲きが若し。

【大意】今月九日、魏郡太守、(是時士衡鄴下に在り、魏郡太守は鄴を治む、故に詔書魏郡太守に下り、太守また丞を遣して士衡に授けしなり)下丞張含を遣し、成都王の冊文印綬を齎し、臣を平原内史たらしむ。臣之を拜受し敬懼して自ら制する能はず。臣はもと敵國人にして、父祖の功德あるにあらず、又身に隱逸の高德あるにあらず。然も皇澤臣が身に及び、累に拔擢を蒙り、聖朝に仕ふること九年にして、六たび官を遷され、高冠を戴き軒車に乘り、常に貴游子弟と相伍す。皇恩山よく、身を碎くも以て報ゆるに足らず。嘗て國の顚覆に遇ふも、危きを見て命を授け、以て臣節を盡す能はず。幸に寬宥を賜れりと雖も、自ら恥ぢて心に安んぜず。而かも横に故の(一五)齊王冏の爲に枉陷せられ、臣を衆人と共に(一六)禪文を作ると誣ひ、(一七)囹圄に

【九】兩宮。東宮及び上臺。
【一〇】冕。冠なり。軒は車。
【一一】灰沒。身灰の滅ゆるが如く報ゆるに足らざるをいふ。
【一二】顚沛。顚覆なり。趙王倫位を簒し帝を金墉に遷ししことをいふ。
【一三】曠盪。寬宥なり。
【一四】膝を頓す。拜跪すること。
【一五】齊王冏。字は景治、趙王倫の位を簒するや、冏兵を擧げて倫を討ち、陣に臨んで之を斬る。
【一六】禪文。趙王倫に帝位を禪る文。

幽執せられ、（一八）誅始たるに當す。臣の微誠天地に負かざれども、倉卒の際逼迫あらんことを慮り、乃ち弟雲及び散騎侍郎袁瑜、中書侍郎馮熊、尚書右丞崔基、廷尉正顧榮、汝陰太守曹武と免るるを獲る所以を思ひ、陰蒙避廻し、（一九）崎嶇として自ら列す。片言隻字も其間に闕らず、事蹤筆跡皆推校すべしと。而も一朝翻然として更に以て罪となす。（二〇）蕞爾の生は尚ほ恡むに足らざるも、區區の本懷實に悲むべきあり。天威に畏逼し、罪に即いて惟れ謹み、口を鉗み舌を結んで、敢て（二一）所天に上訴せず。莫大の釁日に聖聽を經たれば、（二二）肝血の誠終に一聞せず。難に臨んで慷慨し、恨恨せざる能はざる所以の者ただ此れのみ。重ねて陛下（二三）愷悌の宥を蒙り、霜を廻し電を收めて（二四）隕越せざらしむ。復た老を扶け幼を攜へ、生きて獄戶を出で、（二五）金を懷き紫を拖き、退いて（二六）散輩に就くを得たり。恩に感じ咎を惟ひ、五情震悼し、天に跼し地に蹐して、容るる所なきが若し。

【大意】嘗て趙王倫の爲に禪文を草せりと誣ひられ、齊王冏の爲に獄に下され、將に誅罰せられんとす。臣の微誠決して天地を欺かずと雖も、倉卒の際辯解するを得ざるを知り、弟雲等と罪を免

【一七】囹圄。獄舍なり。
【一八】誅始。誅罰のさきがけ。
【一九】崎嶇。傾側なり。列は陳辯すること。
【二〇】蕞爾。小なる貌。
【二一】所天。君なり。君は臣の天とする所なればなり。
【二二】肝血。赤心なり。
【二三】愷悌。溫和なり。
【二四】隕越。死なり。
【二五】金。金印なり。紫は紫綬なり。
【二六】散輩。閑散の職。

るるの計を思ひ、一言半句も趙王の事に關與せざりし由を陳べたり。然るに却つて更に罪を蒙りぬ。微賤の身は敢て惜むに足らざれども、此の横屈に遭ふは、實に悲しみに堪へず。然れども天威を畏れ、謹んで罪に服し、敢て訴ふる所あらず。其後やや陛下の聽察を經たれば、復た赤心を披瀝することをなさず。其後陛下の寬宥を蒙り、又獄を出でて散官に列するを得たり。恩に感じ罪を思ひて、身を置くに處なし。

悟らざりき(二七)日月の明、遂に曲照を垂れ、(二八)雲雨の澤、朽瘁に播き及ぼし、臣が弱才にして身忝るに足るなきを忘れ、臣が零落して罪察すべきあるを哀み、苟も(二九)丹書を削り、平民に夷きを得、則ち塵(三〇)天波に洗がれ、謗衆口に絶えんとは。臣の始望尙ほ未だ是に至らず。猥に大命を辱くし、顯に(三一)符虎を授けられ、春枯の條をして、更に秋蘭と芳を垂れ、(三二)陸沈の羽をして、復た翔鴻と翼を撫せしむ。(三三)安國徒を免れ、起ちて青組を紆ひ、(三四)張敞亡命し、坐ながら朱軒を致すと雖も、臣が荷ふ所に方ぶれば、未だ泰となすに

【二七】日月。惠帝に喩ふ。
【二八】雲雨。惠帝に喩ふ。朽瘁は病衰の身、士衡自ら謂ふ。
【二九】丹書。罪を定むる書。平民は凡民なり。
【三〇】天波。天子の恩澤に喩ふ。
【三一】符虎。金虎符なり。內史のシルシ。
【三二】陸沈。沈衰なり。
【三三】安國。韓安國、梁の孝王に事へて中大夫となり、罪ありて徒中に在り、漢張羽をして安國を拜して內史となさしむ。青組は印綬なり。
【三四】張敞。京兆の尹となり、人を殺して罪を被り遂に逃走す，後冀州に賊あり、天子敞をして之を治めしむ、又冀州刺史となる。亡命は逃亡すること。朱軒は赤塗の車。

足らず。豈臣が垢を蒙り吝を含むの忝竊すべき所ならんや。臣宗を毀り族を夷すも、能く上報する所にあらず。喜懼（三五）參并し、悲慙（三六）哽結す。（三七）常憲を拘守し、當に便道官に之くべし。身を束ねて奔走し、城闕に（三八）稽顙し、（三九）天衢を瞻係し、心を輦轂に馳するを得ず。臣（四〇）屏營延仰に勝へず。謹んで拜表して以聞す。

【大意】豈期せんや皇恩微臣に及び、臣の罪書を除き、平民に等からしめ、汙名を一洗するを得んとは、是れ實に望外の大幸なり。今又大命を以て平原内史に任ぜられ、又朝士に列するを得たり。臣が汙濁の身を以て此位を僭竊すべきにあらず。族を毀るも以て此恩に報ゆるに足らず。臣が胸中悲喜交ゝ至る。乃ち常法に遵ひ、當に便道を取りて任に赴かん。今俄に宮闕に詣りて陛下を拜するを得ず。謹んで表を上りて厚恩を謝す。

【三五】參并。竝び至ること。
【三六】哽結。涙にむせぶこと。
【三七】常憲。常法なり。
【三八】稽顙。頓首といふが如し。
【三九】天衢。天子の街衢。
【四〇】屏營。廻惶なり。

（一）勸進表　劉越石

（二）建興五年三月（三）癸未朔、十八日（四）辛丑、

【一】勸進表。晉の愍帝、漢の劉曜の爲に殺さる、時に琅邪王睿江南に在り、劉琨は并州に在り、段匹磾は冀州に在り、睿に勸めて天子たらしむ、是を晉の元帝となす。

(五)使持節、散騎常侍、都督河北幷冀幽三州諸軍事、領護軍匈奴中郎將、司空、幷州刺史、廣武侯、臣琨、使持節、侍中、都督冀州諸軍事、撫軍大將軍、冀州刺史、左賢王渤海公、臣匹磾、頓首死罪、上書す。臣琨臣匹磾、頓首頓首、死罪死罪。臣聞く天(六)蒸民を生じ、之に樹つるに君を以てするは、天地に(七)對越し(八)黎元を司牧せしむる所以なりと。聖帝明王、其の此の若くなるに鑒み、天地の以て(九)饗に乏しかるべからざるを知る。故に其身を屈して以て之に奉じ、黎元の以て主なかるべからざるを知る。故に已むを得ずして之に臨む。社稷時に難あれば、則ち戚藩其の傾けるを定め、郊廟或は替るれば、則ち(一〇)宗哲其の祀を纂ぐ。弘く(一一)遐風を振ひ式て萬世を固うする所以なり。(一二)三五より以降之に由らざるはなし。

【大意】建興五年三月十八日、臣琨臣匹磾、頓首再拜して白す。天衆民を生み、之が爲に君主を建つるは、天地に配して衆民を養はしめんが爲なり。故に聖帝明王は祭祀を重んじ、已むを得ずして

【二】建興。晉の愍帝の年號。
【三】癸未朔。一日が癸未の日にあたる。
【四】辛丑。一日が癸未にて十八日が辛丑なり。此表は十八日に上るなれども、かかる儀式的の文には其朔の干支をも幷せ記するものとす。
【五】使持節。以下皆劉琨の官名なり。
【六】蒸民。衆民なり。
【七】對越。配揚なり。
【八】黎元。人民なり。司牧は司配すること。
【九】饗。獻なり祭祀なり。
【一〇】宗哲。親戚の賢者。
【一一】遐風。高遠の風。
【一二】三五。三皇五帝。

天子の位に卽く。國難ありて國家傾覆すれば、親戚の賢者立ちて之を繼ぐ。三皇五帝以來皆然らざるはなし。

臣琨臣匹磾、頓首頓首、死罪死罪、伏して惟るに（一三）高祖宣皇帝基を肇め（一四）命を景にし、（一五）世祖武皇帝、遂に（一六）區夏を造し、（一七）三葉光を重ね、（一八）四聖軌を繼ぎ、惠澤（一九）有虞に侔しく、年を卜すること（二〇）周氏に過ぐ。（二一）元康より以來、艱禍繁く興り、（二二）永嘉の際氛厲彌〻昏く、（二三）宸極御を失ひて（二四）醜裔に登遐し、國家の危きこと（二五）綴旒の若きあり。（二六）先后の德、宗廟の靈に賴り、（二七）皇帝嗣ぎ建ち、舊物克く甄なり。誕に（二八）欽明を授け、聰哲に服膺し、玉質幼にして彰れ、金聲夙に振ふ。（二九）冢宰其綱を攝し、（三〇）百辟其治を輔く。四海中興の美を想ひ、

【一三】高祖宣皇帝。司馬懿なり。晉天子となるに及び追尊して宣皇帝といふ。
【一四】命。天命なり。
【一五】世祖武皇帝。司馬懿の孫なり、魏の禪を受けて天子となる。
【一六】區夏。天下なり。
【一七】三葉。三世なり。司馬懿は宣、其長子師は景、次子昭は文と諡す。
【一八】四聖。晉の武帝惠帝懷帝愍帝。
【一九】有虞。舜なり。
【二〇】周氏。左傳に「王孫滿曰く、成王鼎を郟鄏に定め、世を卜すること三十、年を卜すること七百」とあり。
【二一】元康。惠帝の年號、艱禍とは趙王倫の亂をいふ。
【二二】永嘉。懷帝の年號、氛厲は惡氣なり、劉聰石勒等の亂をいふ。
【二三】宸極。天子に喩ふ。羯賊劉曜洛陽を破り、懷帝平陽に崩ず。
【二四】醜裔。遠方の賊廷、登遐は崩御。
【二五】綴旒。ただ冠の旒の垂るるが如く、實力なきをいふ。
【二六】先后。上の四帝をいふ。
【二七】皇帝。愍帝なり。
【二八】欽明。敬明の德。
【二九】冢宰。宰相なり。綱は綱紀。
【三〇】百辟。百官なり。

羣生（三一）來蘇の望を懷けり。圖らざりき天禍を悔いず、大災荐に臻らんとは。國未だ難を忘れざるに、寇害尋で興り、逆胡劉曜、（三二）西都に縱逸し、敢て（三三）犬羊を肆にし、（三四）天邑を陵虐す。臣等の奉表使還る。仍つて（三五）西朝去年十一月を以て守らず、主上幽劫せられて復た（三六）虜廷に沈み、（三七）神器流離して再び（三八）荒逆に辱めらると承る。臣每に史籍を覽、之を（三九）前載に觀るに、厄運の極古今未だ有らず。苟も土の（四〇）毛を食ひ、氣を含むの類に在りて、心を叩き氣を絕ち、行號巷哭せざるはなし。況んや臣等寵を（四一）三世に荷ひ、位（四二）鼎司に厠れるをや。（四三）問を承りて震惶し、（四四）精爽飛越し、且つ悲み且つ惋へ、五情主なく、哀を（四五）朔垂に擧げ、上下血に泣く。

【大意】伏して惟るに宣帝皇基を開いてより、世ゝ光德を布き、恩澤帝舜に等しく、世を有つこ

【三一】來蘇。書經に「我が后を徯つ、后來らば其れ蘇せん」とあり。
【三二】西都。長安をいふ。
【三三】犬羊。虐害に喩ふ。
【三四】天邑。天子の都、長安をいふ。
【三五】西朝。長安の朝廷。
【三六】虜廷。平陽に在り。
【三七】神器。天子の璽符服御の物。
【三八】荒逆。劉曜をいふ。再とは懷帝先づ沒し愍帝又沒するをいふ。
【三九】前載。載は事なり。故事先例なり。
【四〇】毛。草なり。
【四一】三世。琨の祖邁、相國參軍たり、父蕃太子洗馬侍御史たり、琨は司空なり。
【四二】鼎司。三公なり。
【四三】問。崩御の報。
【四四】精爽。精神なり。飛越は飛揚なり。
【四五】朔垂。北邊なり。幷州をいふ。

と當に周室に超ゆべし。然るに元康より以來國難起り、永嘉に至りて特に甚しく、天皇賊廷に崩じて國家危殆に瀕せり。幸に祖宗神靈の加護に賴り、愍帝立ちて舊禮を失はざるを得。天敬明の德を授け幼にして聰智、宰相百官また之を輔佐す。是を以て衆民皆中興の感を抱けり。豈圖らんや羯賊劉聰長安の帝都を侵害せんとは。臣等の遣しし所の奉表紙還り報じて曰く、皇帝昨年十一月を以て虜廷に幽せられ遂に害に遇ふと。是れ前代未聞の悲慘事なり。誰か痛哭せざらん。況んや臣等世〻重職に在り、恩寵を蒙れる者に於てをや。此報を得て殆んど精神を失ひ悲嘆泣血す。

臣琨臣匹磾、頓首頓首、死罪死罪。臣聞く（四六）昏明迭に用ひ（四七）否泰相濟すと。天命未だ改まらず、（四八）歷數歸するあり。或は多難にして以て邦國を固うし、或は（四九）殷憂して以て聖明を啓く。是を以て齊に（五〇）無知の禍ありて、（五一）小白五伯の長となり、晉に（五二）驪姬の難ありて（五三）重耳諸侯の盟を主る。社稷安きことなくんば、必ず將に以て其危を扶くるあらんとす。（五四）黔首幾んど絕えんとして必ず將に以て其緒を繼ぐあらんとす。伏して惟るに（五五）陛下玄德神明に通じ、聖姿（五六）兩儀に合ひ、（五七）命世の期に應じ、（五八）千載の運を紹ぐ。

【四六】昏明。晝夜なり。
【四七】否泰。通塞なり。
【四八】歷數。天子たるべき順序。
【四九】殷憂。憂愁なり。
【五〇】無知。齊の公子の名。
【五一】小白。齊の桓公の名。五伯は五霸なり。
【五二】驪姬。晉の獻公の寵姬。
【五三】重耳。晉の文公の名。
【五四】黔首。人民なり。
【五五】陛下。元帝をいふ。玄德は高德といふが如し。
【五六】兩儀。天地なり。
【五七】命世。孟子に「五百年に

夫れ符瑞の表、天人徴あり、中興の兆、(五九)圖讖典を垂る。京畿隕喪し(六〇)九服崩離せしより、天下囂然として歸懷する所なし。(六一)有夏の夷羿に遘ひ、(六二)宗姬の犬戎に離へると雖も、以て之に過ぐるなし。陛下(六三)江左を撫寧し、舊呉を(六四)奄有し、服を柔ぐるに德を以てし、叛を伐つに刑を以てし、(六五)明威を抗げて以て(六六)不類を攝んじ、大順に仗りて以て宇内を肅め、純化既に敷けば則ち(六七)率土心を宅き、義風既に暢ぶれば、則ち(六八)遐方踵を企て、(六九)百揆時に上に序で、(七〇)四門下に穆穆たり。

【大意】然れども物暗塞すれば復た必ず明通するの時あり。晉室衰へたりと雖も、天の歷數未だ改まらず。當に復た復歸すべきなり。禍亂の起るは將に聖人を開かんとするが爲なり。伏して惟るに陛下、道德神明に通じ、擧動天地に合ひ、よく國家の危きを持し、人民の命を繼がんとし、符瑞あり圖讖に應ず。嘗て江東を鎭撫し呉郡を領し、服する者を柔ぐるに德を以てし、叛く者を伐つ

して必ず王者の興るあり、其間必ず命世の者あり」とあり。
【五八】千載。桓子新論に「夫れ聖人は乃ち千載に一たび出づ」とあり。
【五九】圖讖　未來記なり。
【六〇】九服　天下といふが如し。
【六一】有夏。夏の太康出でて狩す。羿の爲に逐はる、夷は羿の氏。
【六二】宗姬。周なり、姬は周の姓。犬戎は西戎の名。
【六三】江左。江東なり。元帝もと揚州諸軍事を統ぶ。
【六四】奄有。領有すること。
【六五】明威。嚴罰なり。
【六六】不類。異國なり。
【六七】率土。天下なり。
【六八】遐方。遠方なり。
【六九】百揆。もろもろの政事。
【七〇】四門。四方の門。穆穆は和悅の貌

に刑を以てし、大順の道を以て天下を安んず。是を以て純化義風遠近に洽く、百事次序あり四方和悅す。

昔(七一)少康の隆なる、(七二)夏訓以て美談となし、(七三)宣王の興る、周詩以て休詠をなす。況んや茂勳皇天に格り、淸輝四海に光き、(七四)蒼生顒然として欣戴せざるなく、聲敎の加はる所、臣妾たらんことを願ふ者をや。且つ宣皇の胤、惟陛下あるのみ。

(七五)億兆の歸する攸、曾て與に二なし。天大晉に祚し、必ず將に主あらんとす。晉の祀を主る者は陛下にあらずして誰ぞや。是を以て邇に異言なく、遠に異望なし。謳歌する者は(七六)徽猷を吟詠せざるはなく、獄訟する者は聖德を思はざるはなし。天地の際既に交り、華裔の情允に洽し。一角の獸、連理の木、以て(七七)休徵をなす者、蓋し(七八)百數あり。(七九)冠帶の倫、(八〇)要荒の衆、謀らずして辭を同うする者、動もすれば萬を以て計ふ。是を以て臣等敢て天地の心を考へ、(八一)函夏の趣に因り、(八二)昧死して以て(八三)尊號を上る。願くは陛下(八四)舜禹至公の情を存し、

【七一】少康。殷の中興の君。
【七二】夏訓。夏書、卽ち書經。
【七三】宣王。周の中興の君。周詩は詩經。休は美なり。
【七四】蒼生。衆民なり。顒然は德を仰ぐ貌。
【七五】億兆。人民なり。
【七六】徽猷。美道なり。
【七七】休徵。美瑞なり。
【七八】百數。百を以て數ふ。
【七九】冠帶の倫。中國の人。
【八〇】要荒の衆。邊境の人。
【八一】函夏。中國をいふ。
【八二】昧死。死罪を冒して。
【八三】尊號。天子の稱號。
【八四】舜禹。皆禪を受けて以て時を濟へり。

(八五)巢由抗矯の節を狹しとし、社稷を以て務となし、小行を以て先となさず、黔首を以て憂となし、(八六)克讓を以て事となさず、上は以て宗廟乃顧の懷を慰め、下は以て(八七)溥天傾首の望を釋かんことを。則ち所謂繁華を(八八)枯荑に生じ、豐肌を朽骨に育ひ、神人安きを獲て幸甚ならざるはなけん。

【大意】 昔少康、宣王、皆中興の業を以て詩書に著る。況んや勳德四海に輝き、衆民欣戴せざるなきこと陛下の如きをや。且つ宣皇帝の裔は唯陛下の存するのみ。是を以て百姓歸附して二心なし。晉室を繼ぐ者陛下を置きて復た誰かあらんや。是を以て祥瑞頻に現れ、內外心を寄す。是れ臣等の敢て天子たらんことを乞ふ所以なり。願くは陛下、舜禹の受禪に倣ひ、巢由の推讓に倣はず、上は以て祖宗の顧を慰め、下は以て天下首を傾くるの望に副ひ給はんことを。

臣琨臣匹磾、頓首頓首、死罪死罪。臣聞く尊位は久しく虛うすべからず、(八九)萬機は久しく曠うすべからず。之を虛うすること一日なれば、則ち尊位以て殆く、之を曠うすること(九〇)浹辰すれば、則ち萬機以て亂ると。方今百王の季に鍾り、(九一)陽九の會に當り、(九二)狡寇窺窬して國の(九三)瑕隙を伺ひ、(九四)齊人波蕩して心を繫くる所なし。

【八五】巢由。巢父及び許由、堯天下を禪らんとせしも之を拒む。
【八六】克讓。書經堯典に「允に恭しく、克く讓る」とあり。
【八七】溥天。普天に同じ。
【八八】枯荑。枯楊なり。

【八九】萬機。天子の位。
【九〇】浹辰。十二日をいふ。
【九一】陽九。災厄なり。
【九二】狡寇。劉聰劉曜をいふ。窺窬は上位を冀望すること。
【九三】瑕隙。間隙なり。
【九四】齊人。平民なり。波蕩は

安んぞ以て廢てて恤へざるべけんや。陛下逡巡せんと欲すと雖も、其れ宗廟を若何せん、其れ百姓を若何せん。昔（九五）惠公秦に虜にせられて晉國震駭す。（九六）呂郤の謀子圉を立て、外は以て敵人の志を絶ち、內は以て闔境の情を固うせんと欲す。故に曰く、君を喪ひて君あり、羣臣（九七）輯穆す。我を好する者は勸み、我を惡む者は懼れんと。前事の忘れざるは後代の（九八）元龜なり。陛下明日月に竝び、幽きとして燭さざるはなく、深謀遠慮胸懷より出づ。犬馬憂國の情に勝へず、人神（九九）開泰の路を觀んことを遲つ。是を以て其の（一〇〇）乃誠を陳べ、之を（一〇一）執事に布く。

【大意】天子の位は一日も之を曠うすべからず。況んや方今寇賊隙を伺ひ、百姓心を寄する所なきをや。たとひ陛下退讓せんと欲するも、宗廟社稷を奈何せん。昔晉の惠公の秦に虜となるや、呂郤の二臣幼主を輔け立て、以て敵國の志を絶ち、國民の望を繫げり。此事以て今の軌範となすべし。臣等憂國の情に勝へず。敢て陛下の帝位に上らんことを乞ふ。

動散なり。

【九五】惠公。晉の君。

【九六】呂郤。晉の二臣の名。左傳僖公十五年に「晉秦と韓原に戰ふ、秦伯晉侯を獲て以て歸る、呂甥曰く、將に君を若何せんとすると、衆皆曰く、何をなして可ならんと、對へて曰く、征繕して以て孺子を輔けん、諸侯之を聞かば君を喪ひて君あり、羣臣輯睦し、甲兵益多し、我を好する者は勸み、我を惡む者は懼れんと」とあり。子圉は孺子の名。

【九七】輯穆。和睦なり。

【九八】元龜。大なる手本といふが如し。

【九九】開泰。開通なり、泰平なり。

【一〇〇】乃誠。勸進の誠なり。

【一〇一】執事。天子の左右の臣。

臣等各(一〇二)方任を忝守し、職(一〇三)遐外に在り。闕庭に陪列し、共に(一〇四)盛禮を觀るを得ず。(一〇五)踊躍の懷ひ、南望極なし。謹んで上る。臣琨謹んで兼左長史、右司馬、臣溫嶠、主簿、臣(一〇六)辟閭訓を遣し、臣匹磾、散騎常侍、征虜將軍、淸河太守、領右長史、高平亭侯、臣榮劭、輕車將軍、關內侯、臣郭穆を遣し表を奉る。臣琨臣匹磾等、頓首頓首、死罪死罪。

【大意】臣等各〻地方を鎭撫するの任を辱うし、遠く離れて外に在り。朝廷に列して盛典を拜觀する能はず。ただ歡喜して遙に南望するのみ。

【一〇二】方任。地方を鎭撫する任務。忝は辱なり。
【一〇三】遐外。遠地なり。
【一〇四】盛禮。尊號を册するの禮。
【一〇五】踊躍。歡喜なり。
【一〇六】辟閭訓。辟一本に薛に作る。

(一)吳令謝詢の爲に、(二)諸孫の爲に守家人を置かんことを求むる表

(三)張士然

臣聞く、成湯夏を革めて(四)杞に封じ、武王殷に入りて宋を建て、(五)春秋征伐すれば則ち晉虞の祀を脩め、燕齊の廟を祭ると。夫れ一國は一人の爲に興り、先賢は後愚の爲に廢す。誠に仁聖

【一】吳令。官名。
【二】諸孫。諸の孫氏。吳王孫堅の裔。守家人は墓を守る人。
【三】張士然。名は悛、字は士然、吳國の人。此篇は謝詢の爲に代作せるなり。
【四】杞。國の名。
【五】春秋。時代の名。

の哀悼して忍びざる所なり。故に（六）三王は絶を繼ぐの德を敦うし、春秋は服を柔ぐるの義を貴ぶ。昔漢高命を受けて六國を追存し、凡そ諸の絶祚一時並べ祀り、親ら項羽と對して存亡を爭ひしも、羽の死するに逮んで其喪に臨哭す。將た位嘗て尊を侔うし、力嘗て勢を均うせしを以て、功（七）其成を奪ひ恩（八）其敗に與へ、且つ暴に興り疾く顚ると雖も、之を禮すること舊の若く、殘戮せる尸は乃ち（九）公を以て葬る。若し羽をして位前緒に承ぎ、世〻哲王あり、一朝力屈し身を全うして命に從はしめば、則ち楚廟墮れず、後あること冀ふべし。

【大意】　昔湯の夏桀を伐つや、其後を杞に封じ、武王の殷紂を滅すや、其後を宋に封じ、晉の虞國を滅すや其祀を脩め、燕將樂毅の齊を下すや、又齊國の宗廟を脩めぬ。夫れ先賢よく國を興すも、後愚遂に國を亡す。是れ湯武仁聖の哀悼して國を絶つに忍びず、其後を立つる所以なり。是を以て漢の高祖の立つや、六國を追存し絶祚皆祀り、嘗て項羽と存亡を爭ひしも、その死するや屍に伏して哭し、之を葬るに魯公の禮を以てせり。若し項羽をして諸侯の緒を承け、世〻賢王あり、力漢に屈して降服せしめば、必ず楚の後を絶たず、永く之を存せしならん。

【六】三王。禹湯武王なり。
【七】其成を奪ひ。項羽を破りしをいふ。
【八】其敗に與へ。項羽を哭せるをいふ。
【九】公。懷王羽を封じて魯公となす、故に高祖羽を葬るに魯公の禮を以てす。

伏して惟るに大晉天に應じ民に順ひ、武(一〇)戈を止むるを成す。(一一)西戎卽序の人あり、(一二)京邑吳蜀の館を開き、滅を興すこと萬國に加はり、絕を繼ぐこと百世に接す。(一三)三五道を弘め(一四)商周仁と稱すと雖も、洋洋の美未だ以て喩ふるに足らず。是を以て孫氏家は(一五)吳祚を失へりと雖も、而も族は晉榮を蒙り、子弟才を量り肩を比べて進取し、(一六)金を侯服に懷き(一七)青を千里に佩ぶ。當時恩を受けしこと多く望に過ぐるあり。臣聞く春雨の木を潤すは、葉より根に流れ、(一八)鴟鴞の功を恤ふるは子を愛して室に及ぶと。故に天(一九)罔極の恩を稱し、聖(二〇)綢繆の惠あり。追ひて惟るに(二一)吳僞武烈皇帝、漢室の弱きに遭ひ、亂臣の彊きに値ひ、首として義兵を唱へ、衆に先だちて難を犯し、董卓を(二二)陽人に破り、(二三)神器を甄井に濟ふ。威(二四)羣狡に震ひ、名(二五)往

【一〇】戈を止む。左傳に「文に戈を止むるを武となす」とあり、武の字は戈止の二字より成るとの意にて、文德を用ひて干戈を用ひざるを眞の武といふとなり。
【一一】西戎卽序。書經に「西戎序につく」とあり、遠國朝聘の次序あるをいふ。
【一二】京邑。京師なり。
【一三】三五。三皇五帝。
【一四】商周。殷周なり。
【一五】吳祚。吳王の位。
【一六】金。金印なり。
【一七】青。青綬なり。千里は諸侯の封疆をいふ。
【一八】鴟鴞。詩經の篇の名。「鴟鴞鴟鴞、既に我が子を取る、我が室を毀るなかれ」とあり。子は孫皓に室は吳國に喩ふ。
【一九】罔極。極りなきなり。
【二〇】綢繆。親切なり。
【二一】吳僞。晉に對して吳を僞となすなり、武烈皇帝は吳主孫堅なり。
【二二】陽人。地名。
【二三】神器。天子の璽符服御の物。甄井は甄宮井なり。吳書に「初め堅洛に入り城南に軍す、甄宮井の上毎旦五色の氣あり、堅人に命じて探らしむ、漢の傳國璽を得たり」とあり。
【二四】羣狡。董卓の徒をいふ。
【二五】往朝。漢朝をいふ。

朝に顯る。(二六)桓王才武、弱冠にして業を承け、(二七)百越の士を招き、(二八)鷹揚の勢を奮ひ、西のかた許都に赴き、將に(二九)幼主を迎へんとす。(三〇)元勳未だ終へずと雖も、然も至忠已に著る。夫れ家は義勇の基を積み、世は危きを扶くるの業を傳へ、進んでは漢に殉するの臣となり、退いては吳を開くの主となり、而して(三一)蒸嘗三葉に絕え、(三二)園陵薪采に殘はる。臣竊に之を悼む。

【大意】伏して惟るに我が大晉は天意人心に應じ、文德を敷きて干戈を收め、遠夷來り服し、京師に吳蜀二王の館を設く。(晉は魏の禪を受けて天子となり、吳蜀二國を滅したり)滅を興し絕を繼ぐの德、三五殷周の仁と雖も比するに足らず。故に吳は國を失ひたれども、其子弟晉に仕へて諸侯となる。夫れ子孫既に晉の官爵を蒙る。宜しく亦其祖先を榮すべきなり。況んや吳祖孫堅は漢末の亂に遇ひ、率先して義兵を起し、董卓を破り神器を濟ひ、其子策才武を以て父業を繼ぎ、許都に赴きて獻帝を迎へんとし、橫死して功を全うせずと雖も、忠誠天下に著るるをや。今や國亡びて三世祭祀を廢し、墳墓採薪者の爲に毀損せらる。是れ臣の竊に悼む所なり。

【二六】桓王。堅の子策才武を以て亂を定む、諡して長沙桓王といふ。
【二七】百越。南越なり。
【二八】鷹揚。鷹の飛揚するが如き勢。
【二九】幼主。後漢の獻帝。
【三〇】元勳。大功なり。
【三一】蒸嘗。祭祀なり。三葉は堅策權三世。
【三二】園陵。墳墓なり。薪采は薪を採ること。

伏して見るに呉平ぎし初、明詔して先賢を追錄し、其墓を封せんと欲す。（三三）愚謂へらく（三四）二君竝に宜しく應に書すべし。故に勞を擧ぐれば則ち力（三五）先代に輸し、德を論ずれば則ち惠江南に存し、刑を正せば則ち罪晉寇にあらず、（三六）坐に從へば則ち異世已に輕し。若し先賢の數に列し、詔書の恩を蒙り、裁に表異を加へて以て亡靈を寵せば、則ち人望克く厭る。誰か宜しと曰はざらんと。二君の私奴、多く墓側に在り。今平民たり。乞ふ五人を差して其（三七）徭役を蠲き、四時穨毀を修護し（三八）塋壟を掃除せしめ、永く以て常となさんことを。

【大意】 嚮に呉の平ぎし時、詔（晉の武帝）を下して呉の先賢を追賞し其墓を築かんとす。時に愚臣謂らく、堅策二君亦宜しく先賢の數に列すべし。何となれば功勞を論ずれば、力を漢室に效し、德惠は則ち江南の民を存養し、刑を正すに於ては、敢て晉の寇をなさず、孫皓罪に坐するも、遠祖は應に輕くすべければなり。若し先賢の列に加へ、亡者を寵貴せば、人皆望に滿ちて宜しといはんと。堅策の私奴、多く其墓側に在り。其五人を以て守冢となし、徭役を免除して墳墓を掃除せしめ、永く以て常となさんことを乞ふ。

【三三】愚。謝詢の自稱。
【三四】二君。堅策なり。
【三五】先代。漢なり。
【三六】坐。呉主孫皓の罪に坐したること。
【三七】徭役。ぶやく。
【三八】塋壟。墳墓。

(一)中書令を讓る表

(二)庾元規

臣亮言す。臣凡庸固陋、少くして(三)檢操なし。昔(四)中州故多く、舊邦喪亂せるを以て、(五)先臣に隨侍し遠く(六)有道に庇はれ、爰に客として難を逃れ食を求むるのみ。悟らざりき時の福を邀め、(七)嘉運に遭遇し、(八)先帝龍興して異常の顧を垂れんとは。既に眷國士に同じく、又之に(九)婚姻を申ぬ。遂に親寵に階りて累に(一〇)非服を忝うし、弱冠にして(一一)纓を濯ひ、(一二)玄風に沐浴し、(一三)省闥に頻繁し、出でて六軍を領す。十餘年間、位(一四)先達に越ゆ。勞なくして遇せらるること、臣と比するものなし。小人祿薄し。福過ぐれば災生ず。止足の分臣が宜しく守るべき所なり。而も榮を偸み進を昧ること、日一日より爾り。(一五)謗讟既に集りて上聖朝を塵す。始め自ら聞せんと欲す。

【一】中書令。官名、晉書に中書監に作る。ここに令といふは恐くは誤ならん。
【二】庾元規。名は亮、字は元規。
【三】檢操。節操なり。
【四】中州。洛陽なり。劉聰、劉曜の侵略に遇ふ。
【五】先臣。亮の父琛なり。
【六】有道。晉の元帝をいふ。元帝もと鎭東將軍として建業に鎭ず。
【七】嘉運。好運なり。
【八】先帝。元帝なり。
【九】婚姻。元帝亮の妹を聘して皇太子の妃となす。
【一〇】非服。非常の任。
【一一】纓を濯ふ。纓は冠の紐。入りて仕ふること。
【一二】玄風。天子の德。
【一三】省闥。黄門郎、散騎常侍をいふ。
【一四】先達。先進なり。
【一五】謗讟。誹謗なり。

而して先帝（二六）登遐し、區區の微誠竟に未だ上達せず。（二七）陛下踐祚して聖政維れ新なり。宰輔賢明にして（二八）庶寮咸な允なり。（二九）康哉の歌實に至公に在り。而して國恩已まず、復た臣を以て中書を領せしむるは、則ち天下に示すに私を以てするなり。何者臣陛下に於て、后の兄なり。（三〇）姻婭の嫌、實に（三一）骨肉中表と同じからず。（三二）太上至公にして聖德私なしと雖も、然れども世の道を喪ふこと、自りて來るあり。悠悠たる（三三）六合、皆其姻に私する者なり。人皆私あれば則ち天下に公なしと謂はん。

【大意】臣は固陋にして節操なし。昔劉聰、劉曜の洛陽を侵略するや、亡父（會稽太守たり）に隨つて南方に客遊し、難を逃れて以て食を求めぬ。幸にして先帝（元帝）の中興に遇ひ、特別の恩顧を蒙り、又婚姻を結ぶ。乃ち少くして仕官に登り、天子の德教に浴し、頻に重任を辱うす。然れども德なくして厚祿を食めば災害必ず來る。足るを知るの分、臣宜しく自ら守るべきなり。然るに榮進を貪ること日復た一日、是を以て誹謗既に集り、爲に明朝を穢せり。一たび之を上聞せんと欲せしも、先帝の崩御に遇ひて果さず。陛下位に卽きて宰相賢明、百官誠信、至公にして

【二六】登遐。崩御なり
【二七】陛下。晉の明帝を指す。踐祚は位に卽くこと。
【二八】庶寮。衆官なり。
【二九】康哉の歌。書經益稷篇に「庶事康いかな」とあり。
【三〇】姻婭。妻族の親をいふ。
【三一】骨肉。兄弟をいふ。中表は内外姨舅兄弟をいふ。
【三二】太上。天子の德をいふ。
【三三】六合。天下なり。

私なし。乃ち復た臣をして中書を領せしむ。是れ至公の道にあらず、天下に私情を示すものなり。何となれば臣は陛下の后の兄なり。妻族の嫌疑は特に尤も甚し。陛下たとひ至公にして私なきも、世の喪亂恐くは此より起らん。

是を以て前後二漢、咸以て(二四)后黨を抑ふれば安く、(二五)婚族を進むれば危し。向に(二六)西京の七族、(二七)東京の六姓をして、皆(二八)姻黨にあらずして、各ゝ以て(二九)平進せしめば、縦ひ悉く全からざるも、決して盡く敗れざりしならん。今の盡く敗れしは、更に(三〇)姻昵に由りてなり。臣歴觀するに(三一)庶姓世に在る、朝に黨なく時に援なければ、根を植つるの本輕く薄し。苟も(三二)大瑕なければ、猶ほ或は容れらる。外戚に至りては(三三)天地に憑託し、勢(三四)四時に連り、根援(三五)扶疎たり。重く大なり。而して財に權寵に居れば、四海目を側つ。事允ならざるあれば罪誅を容れず。身既に殃を招き國之が爲に弊る。其故何ぞや。直に(三六)婚媾の私、羣情の免るる能はざる

【二四】后黨。皇后の一族。
【二五】婚族。外戚即ち皇后の族。
【二六】西京。前漢なり。七族は呂、霍、上官、趙、丁、傅、王なり。皆外戚なり。
【二七】東京。後漢なり。六姓は章帝の竇后、和帝の鄧后、安帝の閻后、桓帝の竇后、順帝の梁后、靈帝の何后。
【二八】姻黨。后黨なり。
【二九】平進。自己の才能によりて陞進すること。
【三〇】姻昵。外戚の親。
【三一】庶姓。國家と特別の親なき家。
【三二】大瑕。大なる過失。
【三三】天地。天子皇后に喩ふ。
【三四】四時。諸王に喩ふ。
【三五】扶疎。茂ること。
【三六】婚媾。婚姻なり。

所に由るのみ。故に其の嫌ふ所に率つて之を國に嫌ふ。是を以て（三七）疏附けば則ち信ぜられ、姻進めば則ち疑はる。疑百姓の心に積れば、則ち禍（三八）重闥の内に成る。此れ皆（三九）往代の成鑒、寒心を爲すべき者なり。

【大意】前後二漢を觀るに、后黨を抑ふれば其族安く、后黨を進むれば其族危かりき。若し彼の后黨をして、各〻其才能に賴りて進ましめば、決して盡く敗るることなかりしならん。ただ姻親に賴りて進みしを以て盡く敗れたるなり。世の庶姓は朝に黨援なく、根を張ること輕く薄しと雖も、苟も大過なければ、猶ほ容れらるるに足る。外戚に至りては天子諸王に緣親を結び、其根を張ること重く大なり。然れども少しく權寵を得れば世人の怨府となり、小罪過あれば身誅せられ國亦破る。是れ皆皇室と親緣あり、衆情の嫌疑を招くを以てなり。是を以て疏遠の人信任せらるれば、國人之を信じ、外戚の臣用ひらるれば國人之を疑ふ。國人疑へば禍亂國家に及ぶ。是れ古來の明鑑にして懼れざるべからざるなり。

夫れ萬物の通ぜざる所は、聖賢も因りて奪はず。親を冒して以て一才の用を求むるは、未だ嫌を防ぎて以て公道を明にするに若かず。今臣の才を以て此の如きの嫌を兼ね、而して內（四〇）心膂に處り、

【三七】疏。異姓の臣なり。
【三八】重闥。宮門なり。
【三九】往代。漢代を指す。成鑒は明鑑。
【四〇】心膂。膂は脊なり、重臣をいふ。書經に、穆王曰く、「今汝に命じて朕が股肱心膂となす」とあり。

外(四一)兵權を捴べしむ。此を以て治を求むるは、未だ之を聞かざるなり。此を以て禍を招くは、立ちて待つべし。陛下の(四二)二相其(四三)愚款を明にし、朝士(四四)百寮頗る其情を識ると雖も、天下の人何ぞ門ごとに到り戸ごとに說き、皆(四五)坦然たらしむべけんや。夫れ富貴寵榮は臣の忘るる能はざる所なり。刑罰貧賤は臣の甘んずる能はざる所なり。今命を恭くすれば則ち愈ち、命に違へば則ち苦し。臣達せずと雖も何事ぞ時に背き上に違ひ、自ら患責を貽さんや。仰いで(四六)殷鑒を覽、己を量り繳るるを知る。身は惜むに足らざるも、國の爲に侮を取らん。是を以て(四七)悾悾として屢丹款を陳ぶ。而も微誠淺薄にして未だ察諒を垂れず。憂惶(四八)屛營して居く所を知らず。臣が(四九)今の地を以てするに、以て進むべからざること明なり。且つ命に違ふこと已に久し。臣の罪又積れり。骸を私門に歸し、以て刑書を待たん。願くは陛下天地の鑒を垂れ、臣の愚を察せば、則ち死するの日と雖も、猶は生くるの年のごとくならん。

【大意】夫れ物の通達せざるあれば、聖賢も因りて之に任す。陛下親戚の嫌疑を冒し、一小才の用を求むるは、疑慮を防ぎて公道を明にするに如かず。今臣小才を以て嫌疑の地に在り。之をして

【四一】兵權。王敦の中領軍となすこと。
【四二】二相。王敦王導をいふ。
【四三】愚款。愚誠なり。
【四四】百寮。百官なり。
【四五】坦然。明白なる貌。
【四六】殷鑒。前代の明鑑。
【四七】悾悾。誠なり。丹款は赤誠。
【四八】屛營。驚惶なり。
【四九】今の地。嫌疑の地位。

內外の重職に當らしめば、禍敗を招くこと必せり。たとひ陛下の二相以下百官、皆臣の愚誠を知ると雖も、天下萬人の嫌疑を解くは、不可能の事なり。今君命を恭くして職に就けば身の榮となり、君命に從はざれば身の憂となる。臣は無智なりと雖も豈好んで君命に違ひ、自ら患責を招くの愚をなさんや。ただ前代の明鑑を觀て己の必ず斂るるを知り、遂に國家の禍とならんことを恐るればなり。故に屢辭避すれども陛下未だ聽察を垂れ給はず。願くは骸骨を乞ひ家に歸り以て罪を待たん。又願くは更に陛下の明察を垂れ給はんことを。

(一)譙元彦を薦むる表

(二)桓元子

臣聞く(三)太朴既に虧くれば、則ち(四)高尚の標顯はれ、道喪び時昏ければ、則ち忠貞の義彰ると。故に(五)耳を洗ひ(六)淵に投じ、以て(七)玄邈の風を振ふあり。亦心を秉り跡を矯び、以て(八)在三の節を敦くするあり。是の故に上代の君、斯軌を崇重せざるなきは、俗を篤くし民を訓へ、流

【一】譙元彦。名は秀、字は元彦。
【二】桓元子。名は溫、字は元子、晉の人。
【三】大朴。大道なり。
【四】高尚の標。隱逸の節。
【五】耳を洗ふ。堯天下を許由に讓らんとす、許由以て耳を汚せりとなし其耳を洗ふ。
【六】淵に投ず。舜天下を其友北人無擇に讓らんとす、北人無擇之を以て辱となし、自ら清冷の淵に投じて死す。
【七】玄邈。玄遠なり。
【八】在三の節。國語に「人生

競を靜一にする所以なり。伏して惟るに大晉(九)符に應じ世を御し、運に常通なく時に(一〇)屯蹇あり。(一一)神州丘墟となり三方(一二)圮裂し、(一三)兎罝嚮を中林に絶ち、(一四)白駒空谷に聞ゆるなし。斯れ有識の心を悼ましむる所、大雅の歎息する所の者なり。

【大意】大道すたれて隱逸乃ち顯れ、昏亂の時忠貞乃ち明なり。故に太古純朴の世には天下を讓らるるを恥ぢ、耳を洗ひ淵に投じ、以て玄遠の風を振ひし者あり。心を執り迹を擇び、君父の節を厚うせる者あり。上古の君之を尊べるは、此を以て人俗を厚うし、人を訓へて奔競せざらしめんが爲なり。我が大晉は天命に應じて天子となり、寇賊の侵掠に遇ひて洛陽を破られ、僅に江南の一方に偏居す。是を以て賢者の隱居する者なく、皆出でて任に就けり。是れ大雅君子の傷歎する所なり。

(一五)陛下聖德嗣いで興り、方に天緒を恢にす。臣昔役を奉じて、(一六)西土に事あり。(一七)鯨鯢既に懸り、大化を宣べんことを思ふ。諸の故

れて三に於て之に事ふること一の如し、父之を生み師之を教へ君之に食ましむ」とあり。

【九】符。符瑞なり。

【一〇】屯蹇。險難なり。

【一一】神州。洛陽なり、晉の都。

【一二】圮裂。分裂なり。

【一三】兎罝。兎を捕ふる網。詩經の篇の名。賢人の退いて禽獸を狩りて食ふをいふ。

【一四】白駒。詩經の篇の名。賢人の隱居するをいふ。

【一五】陛下。晉の穆帝。

【一六】西土。蜀をいふ。李勢蜀を盜む、桓溫伐ちて之を殺す。

【一七】鯨鯢。李勢に喩ふ。

【一八】潛逸。隱逸なり。

老に訪ひ（一八）潛逸を捜揚し、（一九）武羅を羿浞の墟に庶ひ、（二〇）王蠋を亡齊の境に想ふ。竊に聞く（二一）巴西の譙秀操を植つること貞固、德を抱いて（二二）肥遯し、（二三）清渭の波を揚ぐと。時に（二四）皇極道消するの會に遭ひ、（二五）羣黎顚沛の艱を蹈む。中華顧瞻の哀あり、幽谷（二六）遷喬の望なし。（二七）凶命屢招き（二八）姧威仍に逼り、身（二九）虎吻に寄せ、危きこと朝露に同じ。而も能く節を抗げて（三〇）玉立し、誓つて降辱せず。門を杜ぢ跡を絶ちて（三一）僞庭に面はず。進んでは（三二）龔勝亡身の禍を免れ、退いては（三三）薛方詭對の譏なし。（三四）園綺の商洛に棲み、（三五）管寧の遼海に默るると雖も、之を秀に方ぶるに、殆ど以て過ぐるなし。今に西土以て美談となす。夫れ德を旌

【一九】武羅。左傳に「昔羿夏の政に代る、武羅を弃てて寒浞を用ふ。寒浞羿を滅して其國家を取る」とあり。

【二〇】王蠋。燕人齊を伐ち王蠋を獲て之を將とせんとす、王蠋曰く、忠臣は二君に事へず貞女は二夫を更へずと、遂に自殺す。

【二一】巴西。蜀の地名。

【二二】肥遯。隱遁なり。

【二三】清渭。川の名。清潔の行に喩ふ。

【二四】皇極。天子の道。

【二五】羣黎。衆民なり。顚沛は僵仆。

【二六】遷喬。喬木に遷ること。登仕の意なり。

【二七】凶命。李雄李壽等の召命。

【二八】姧威。李雄李壽等の脅迫。

【二九】虎吻。虎口なり。

【三〇】玉立。潔白を守ること。

【三一】僞庭。李雄の廷なり。

【三二】龔勝。漢書に「王莽既に漢を簒ひ、安車駟馬もて龔勝を招く、勝曰く吾れ漢室の厚恩を受け以て報ゆるなし、豈一身を以て二姓に事へ地下に故主に見えんやと、飲食せずして死す」とあり。

【三三】薛方。漢書に「王莽安馬を以て薛方を迎ふ、方使者に因りて辭謝して曰く、堯舜上に在れば下に巢許あり、今明王唐虞の德を隆にす、小臣箕山の節を守らんと欲すと、使者以聞す、莽其言を悅び强ひて之を致さず」とあり。

【三四】園綺。隱者の名。商洛は山の名。

【三五】管寧。後漢の末の人、亂を避けて遼東に居ること三十

し賢を禮するは、化道の先にする所、殊節を崇表するは（三六）聖喆の上務なり。方今（三七）六合未だ康からず、（三八）豺豕路に當り、（三九）遺黎偸薄にして義聲聞えず。益〻宜しく道義の徒を振起し、以て流遯の敝を敦うすべし。若し秀（四〇）蒲帛の徵を蒙らば、以て頽風を鎭靜し、囂俗を軌訓し、（四一）幽遐流を仰ぎ（四二）九服化を知るに足らん。

【大意】陛下聖德を以て位を嗣ぎ、祖業を弘恢す。臣嘗て李勢を征し、首を梟して、蜀を平ぐるや、治化を布かんことを思ひ、隱逸の士を亡國の墟に求め、譙秀の貞固を守り隱逸の德を抱くを聞けり。時恰も皇道衰へて國民安んぜず、賢者は中國を顧望して、登仕の道絕えたるを哀む。然も秀や李雄、李壽（李勢の父祖なり）等或は禮を以て招き、或は威を以て迫れども、終に其命に應ぜず。誓つて亂朝に仕へず。其の潔白なること龔勝、薛方の比にあらず。園綺管寧と雖も及ぶ能はず。是を以て蜀人皆秀の節を稱す。夫れ賢德を禮し、異行を表すは、聖主の務なり。今や盜賊路に當り、民心澆薄なり。宜しく道義の人を振起し、以て流俗の弊を厚うすべきなり。秀若し徵命を蒙らば、必ず能く壞風を鎭め薄俗を敦うし、遠近聖化を仰ぐに至らん。

七年。
【三六】聖喆。喆は哲の古字。
【三七】六合。天下なり。
【三八】豺豕。亂賊に喩ふ。
【三九】遺黎。遺民なり。

【四〇】蒲帛。漢書に「武帝使者を遣し、束帛加璧、安車蒲輪以て申公を迎へしむ」とあり。
【四一】幽遐。遠土なり。
【四二】九服。天下なり。

(一)尙書を解く表　　殷仲文

臣聞く(二)洪波壑に振へば、川に(三)恬鱗なく。(四)驚飇野を拂へば、林に靜柯なしと。何者勢弱ければ則ち制を巨力に受け、質微なれば則ち以て自ら保んずるなければなり。理に於て得て言ふべしと雖も、臣に於て寔に敢て喩る所ならんや。昔(五)桓玄の世、誠に復た驅迫せらるる者衆し。愚臣に至りては罪實に深し。進んでは危を見て命を授け、身を忘れて國に殉する能はず。退いては粟を首陽に辭し、衣を拂つて高く謝する能はず。遂に乃ち(六)昏寵に宴安し(七)僞封を叨昧し、(八)錫文篡事曾て獨り固きことなし。名義之を以て倶に淪び、情節茲より兼ね撓る。宜しく其れ法を極めて以て忠邪を判すべし。

【一】尙書。官名。
【二】洪波。大波なり。
【三】恬鱗。安靜なる魚。
【四】驚飇。疾風なり。靜柯は靜なる枝。
【五】桓玄。大司馬桓溫の孽子なり、江陵に據りて兵を擧げ建康に入り、安帝に迫りて位を讓らしむ、劉裕兵を起して玄を討つ、玄走りて首を江陵に斬らる。
【六】昏寵。桓玄の寵。宴安は安んずること。
【七】僞封。桓玄の爲に東興公に封ぜられしこと。叨昧は貪ること。
【八】錫文篡事。桓玄に九錫を加ふる文、及び禪位の文なり。

【大意】大波壑を振へば、魚安きを得ず、疾風林を搖かせば、枝靜なる能はず。何となれば微弱なる者は剛强の爲に制せらるればなり。嘗て桓玄の叛するや、吾亦その制する所となり、進んで國家の

爲に賊を征する能はず、退いて衣を拂つて世事を謝する能はず。遂に桓玄に仕へて親寵を蒙りぬ。然も桓玄忽ち誅せられ、吾亦之と倶に淪沒せり。臣が罪大なり。宜しく重法を加へて邪惡を罰すべきなり。

鎭軍臣（九）裕、社稷を匡復し、大に（一〇）善貸を弘む。一戮を微命に佇べ、（一一）三驅を大信に申べ、既に之に惠むに（一二）首領を以てし、復た之を引くに（一三）縶維を以てす。時に（一四）皇輿否隔して天人未だ泰からず。用て進退を忘れ、唯力を是れ視る。是を以て（一五）僶俛して事に從ひ、自ら（一六）全人に同うす。今（一七）宸極正に反り、維新始めを告げ（一八）憲章既に明にして、（一九）品物舊を思ふ。臣亦胡ぞ顏の厚くして、以て（二〇）榮次に顯居すべけんや。乞ふ（二一）所職を解き罪を私門に待たん。闕庭に違謝し、乃ち心に愧戀す。謹んで拜表して以聞す。

【九】裕。宋の高祖。卽ち劉裕。
【一〇】善貸。人の罪を宥すこと。
【一一】三驅。三面の網を解いて一面を留むること。寛仁を言ふ。
【一二】首領。頸なり。
【一三】縶維。詩經白駒篇に「之を縶し之を維し、以て今朝を永うせん」とあり、賢人を引きとどむるに喩ふ。
【一四】皇輿。天子の位。
【一五】僶俛。俯仰なり。
【一六】全人。全德の人。
【一七】宸極。帝位なり。
【一八】憲章。禮法制度。
【一九】品物。憲章に同じ。
【二〇】榮次。顯榮の地位。
【二一】所職。尙書をいふ。

【大意】劉裕桓玄を誅して國家を恢復するや、臣が罪を宥して誅戮を加へず。時に天下猶ほ未だ安

からざりしを以て、進退の理を忘れ、尚書となりて力を軍旅に效し、自ら全德の人に同うせり。今や帝位既に安く、維新の業を開き、禮法制度舊時に異らず。是れ臣の當に退くべき時なり。何ぞ厚顏無恥にして高位に居らんや。願くは尚書の職を解き、私家に歸らんことを。宮闕を去り顧戀の情に勝へず。

(一)宋公の爲に、洛陽に至り五陵に謁する表　傅季友

臣裕言す。近ごろ(二)河の湄に振旅し、旆を揚げて西に邁く。將に(三)舊京に屆り威を以て(四)司雍を懷けんとす。河流(五)遄疾にして道阻り且つ長し。加以ず(六)伊洛榛蕪し、(七)津塗久しく廢し、木を伐り徑を通じ、淹しく時月を引く。始めて今月十二日を以て故の洛水の浮橋に次る。山川改るなきも城闕墟となり、宮廟(八)隳頓して(九)鍾簴空しく列り、(一〇)觀宇の餘鞠く禾黍となり、(一一)廛里蕭條として雞犬音罕なり。舊に感じて永懷

【一】宋公。劉裕なり。晉書に「義熙十二年、洛陽平ぐ、裕命じて晉の五陵を脩め、守備を置く」とあり。
【二】河。黄河なり。振旅は兵を整ふること。
【三】舊京。洛陽をいふ、晉の舊都なればなり。
【四】司雍。二州の名。
【五】遄疾。急速なり。
【六】伊洛。二川の名。榛蕪は荒穢なり。
【七】津塗。わたしば及び道路。
【八】隳頓。廢壞なり。
【九】鍾簴。鍾は鐘、簴は鐘を懸くる架。
【一〇】觀宇。宮闕なり。
【一一】廛里。街里なり。

し、痛心目に在り。其月十五日を以て、（一二）五陵に奉謁す。墳塋幽淪し（一三）百年荒翳せるも、（一四）天衢泰を開き、情禮申ぶるを獲たり。故老涕を掩ひて三軍悽感す。瞻拜の日憤慨交ゝ集る。行河南太守毛脩之等既に（一五）荊棘を開翦し、毀垣を繕脩し、職司既に備り、（一六）蕃衞舊の如し。伏して惟るに聖懷遠慕兼ねて慰んせん。下情に勝へず。謹んで傳詔殿中中郞臣某を遣し、表を奉りて以聞せしむ。

【大意】臣近ごろ兵を整へて西行し、將に洛陽に至り、司雍二州を威撫せんとす。道路長遠にして津途塞がれるを以て、豫想外に時日を要し、今月十二日、始めて洛水の浮橋に次れり。山川舊容を變せずと雖も、城闕丘墟と化し、宮閣破れて盡ぐ田疇となり、昔全盛の時を追想し、見る所のもの悉く傷心の種ならざるはなし。臣十五日を以て五陵に參拜す。陵墓荒廢せること既に百年。今墓門を開き、禮祭の情を盡し、憤慨交ゝ至れり。行河南太守毛脩之等既に荒穢を脩理し警衞を置くこと舊の如し。陛下遠慕の情また當に慰安せらるべきを信ず。今臣某を遣し、表を奉りて上聞せしむ。

【一二】五陵。文帝の崇陽陵、武帝の峻陽陵、宣帝の高原陵、景帝の峻平陵、及び景帝の陵。
【一三】百年。懷帝の時洛陽を去りてより安帝に至るまで百年に近し。
【一四】天衢。天路といふが如し。
【一五】荊棘。いばら。
【一六】蕃衞。警衞といふが如し。

(一)宋公の爲に、(二)劉前軍に加贈せんことを求むる表

傅季友

臣聞く、賢を崇び善を旌すは、王化の先にする所、功を念ひ勞を簡ぶは、義遠きを追ふに深しと。故に(三)司勳策を秉り、勤を在ては必ず記す。徳の(四)休明なる、沒して彌〻著る。故の尚書左僕射前軍將軍臣(五)劉穆之、爰に布衣より(六)義始に協佐し、内(七)謀猷を竭し外庶政を勤め、軍國に(八)密勿して心力倶に盡す。(九)朝右に登庸せられ京畿に(一〇)尹司たるに及び、(一一)百揆を敷讚し大猷を翼新す。頃ろ(一二)戎車遠く役するや、中に居て(一三)捍を作し、撫寧の勳實に朝野に洽く、識量局に致り、(一四)棟幹の器なり。方に盛化を宣讚し、聖世を緝隆し、志績未だ究めず、(一五)遠邇心を悼ましむ。皇恩褒述し(一六)班三事に同じ。榮哀既に備り、寵靈已に泰なり。

【一】宋公。劉裕なり。晉の時宋公に封ぜらる。
【二】劉前軍。前軍將軍劉穆之なり。
【三】司勳。官名。公勳を錄することを掌る。
【四】休明。休は美なり。
【五】劉穆之。一本に劉の字なし。
【六】義始。劉裕の義兵を起す始め。
【七】謀猷。猷も謀なり。
【八】密勿。僶俛なり。
【九】朝右。僕射なり。
【一〇】尹司。丹陽尹たりしこと。
【一一】百揆。庶政なり。
【一二】戎車。兵車なり。
【一三】捍。ふせぎまもること。
【一四】棟幹。棟梁貞幹なり。
【一五】遠邇。遠近なり。
【一六】班。位階なり。三事は儀同三司を贈りしこと。

【大意】賢を尊び善を表すは、王化の尙ぶ所、勤勞を念ひて之を厚くするは、追遠の道なり。故に勤勞ある者は沒して其名必ず著る。故の劉穆之は布衣より起りて臣に事へ、臣を佐けて共に義兵を起し、内には謀策を盡し、外には軍事に勤め、具に心力を竭せり。尙書左僕射、丹陽尹に登庸せらるるに及び、庶政に參して治化を翼く。臣このごろ兵を率ゐて北伐するに當り、中に居て捍禦をなし、持安の大功あり。識量實に棟梁の材なり。然も未だ其志を盡すに及ばずして死し、遠近之が爲に心を傷ましむ。皇恩其功を賞し、以て儀同三司を贈り、哀榮既に備はれり。臣伏して思尋するに(一七)義熙草創より(一八)艱患未だ弭まず。(一九)外虞既に殷にして内難亦荐なり。時(二〇)屯に世故あり、寧歲あることなし。臣寡劣を以て國の重きを負荷す。實に穆之が匡翼の勳に賴れり。豈唯(二一)讜言嘉謀の民聽に溢るるのみならんや。若し乃ち(二二)忠規密謨帷幕に潛慮し、(二三)造膝詭辭其際を見るなし。事皇朝に隔り功視聽に隱るる者、勝げて記すべからず。力を(二四)一紀に陳べ遂に克く成すある所以なり。出でて征し入りて輔け、幸に命を辱めず。(二五)夫人の左右する微せば、未だ

【一七】義熙、晉の安帝の年號。草創は事を始むること。
【一八】艱患、桓玄の亂をいふ。
【一九】外虞、外患なり。慕容超の屢邊患をなししこと。
【二〇】屯。難なり。
【二一】讜言。善言なり。嘉謀は善謀。
【二二】忠規。忠言なり。密謨は密謀。
【二三】造膝。君に近づいて諫言を納ること。詭辭は人問へば詭りて之に對ふること。
【二四】一紀、十二年をいふ。
【二五】夫人。穆之を指す。左右は輔佐なり。

其事を寧濟する者あらざりしなり。謙を履み寡に居り、之を守ること彌ゝ固し。議封爵に及ぶ毎に、輙ち深く自ら抑絶す。勳當年に高くして、(二六)茅土の及ばざる所以なり。事を撫して永く念ひ、胡寧ぞ昧ますべけんや。謂く宜しく(二七)正司を加贈し、追ひて(二八)土宇を甄し、忠貞の(二九)烈をして身後に泯びざらしめ、(三〇)大賚の及ぶ所善人を(三一)永秩すべしと。(三二)臣屯夷に契闊し(三三)終始を旋觀し、(三四)金蘭の分、義情感に深し。是を以て其(三五)乃懷を獻じ、之を朝聽に布く。啓する所(三六)上合せば、請ふ外に付し詳議せしめんことを。

【大意】臣伏して思ふに、義熙より以來內外事多くして寧歲なし。臣庸劣の身を以て國の重職を帶ぶるは、是れ皆穆之が輔翼の力に賴るなり。故に其善言善謀人よく之を聞知すれども、密謀潛慮に至りては、人の知らざる者甚だ多し。陛下の視聽に達せざる者に至りては、勝げて記すべからず。然れども穆之は謙虛にして每に封爵を辭して受けず。臣謂へらく宜しく三公を追贈し、忠貞の業をして永く朽ちざらしむべしと。臣は穆之と金蘭の契あり分義既に深し。所懷を陳べて加贈を乞ふ所以なり。若し上意に合はば、外臣に命じて審議せしめられよ。

(二六)茅土。封爵なり。
(二七)正司。三公なり。
(二八)土宇。穆之の居りし土地。
(二九)烈。業なり。
(三〇)大賚。大なる賜。
(三一)永秩。永久に祿秩を賜ふこと。
(三二)屯夷。屯は難、夷は易也。契闊は勤苦なり。
(三三)終始。穆之の始終なり。
(三四)金蘭。深き交。
(三五)乃懷。己の思ふ所。
(三六)上合。上意に合ふこと。

齊の(一)明皇帝の爲に、相となり宣城郡公を讓る第一表

任彦升

臣鸞言す。(二)臺司の召を被る。臣を以て侍中中書監、驃騎大將軍、開府儀同三司、揚州刺史、錄尚書事となし、宣城郡開國公、食邑三千戶、加兵五千人に封ず。臣もと庸才、智力淺短なり。太祖高皇帝、(三)猶子の愛を篤くし、(四)家人の慈を降す。世祖武皇帝、情布衣に等しく、寄(五)同氣より深し。武皇(六)大漸せしとき、實に(七)話言を奉ず。自見の明と雖も、庸近に蔽はる。愚夫の(八)一至、(九)偏識己を量り、實に自ら(一〇)綴衣の辰に固うし、(一一)玉几の側に拒違するに忍びず。遂に顧託を荷ひ(一二)末命を導揚す。(一三)嗣君常を弃て罪を(一四)宣德に獲たりと雖も、王室の造らざる

【一】明皇帝。齊の明帝、名は鸞、太祖之を宣城郡公に封ず、後帝位に卽く。
【二】臺司。朝廷の官。
【三】猶子。ヲヒなり。鸞は太祖の兄の子なり。
【四】家人。庶人なり。
【五】同氣。兄弟なり。
【六】大漸。病進んで將に死せんとすること。
【七】話言。善言なり。後事を屬せしこと。
【八】一至。劉劭の人物志に「一至之を偏材といふ」とあり。
【九】偏識。偏見なり。
【一〇】綴衣。書經顧命に「綴衣を庭に出す、越えて翼日乙丑王崩ず」とあり。綴衣は病室に設けたる幄帳。
【一一】玉几。玉にて飾りし几。王の命を下す時憑る所のもの。
【一二】末命。王の臨終の時の命令。
【一三】嗣君。鬱林王をいふ。
【一四】宣德。宣德太后、武帝の皇后なり。

は、職として臣に之れ由る。何者、親は則ち(一五)東牟、任は惟れ博陸、徒に(一六)子孟が社稷の對を懐ふも、何ぞ昌邑爭臣の譏を救はん。四海の議何に於てか責を逃れん。且つ(一七)陵土未だ乾かず、(一八)訓誓耳に在り。家國の事一に斯に至れり。臣の尤にあらずんば誰か其咎に任ぜん。將た何を以てか肅んで(一九)高寢を拜し、虔んで(二〇)武園に奉ぜん。心に悼みて圖を失ひ、血に泣いて旦を待つ。寧ろ復た榮を家恥に徼め、國危に(二一)宴安す容けんや。

【大意】 臣召を被りて朝せしに、臣を以て驃騎大將軍、揚州刺史、錄尙書事、侍中中書監となし、更に臣を封ずるに宣城郡開國公を以てせらる。臣もと智力淺陋にして、太祖武帝二世の寵遇を蒙り、特に武帝の崩御に際し、後事を屬せらる。偏識を以て過つて己の能を量り、且つ臨終の命に違ふを憚り、遂に其依託に從ふ。嗣君鬱林王常道を棄てて荒淫なり。乃ち宣德太后の廢する所となる。然れども王を輔けて功を成す能はざりしは、其罪臣に在り。其責何ぞ逃るる所あらんや。武帝の遺詔猶は耳に在り。然も終に王を廢せざるを得ざるに至る。臣何を以て太祖武帝の陵墓に拜するを得んや。況んや此の家國の危恥

【一五】 東牟。漢の東牟侯興居は惠王の子なり、諸呂を誅して功あり、博陸侯に封ぜらる。

【一六】 子孟。霍光、字は子孟、昌邑王賀を輔く、賀無道なり、太后の命を以て賀を廢す、賀曰く天子爭臣あれば天下を失はずと、光曰く、臣寧ろ王に負くも社稷に負かずと。

【一七】 陵土云云。武帝崩じて未だ久しからざるをいふ。

【一八】 訓誓。顧託の命。

【一九】 高寢。太祖高皇帝の廟。

【二〇】 武園。武帝の陵。

【二一】 宴安。安逸なり。

に際し、重封を受けて安逸を計るをや。驃騎は上將の元勳、(二二)神州は儀刑の列岳、尙書は古司會と稱し、中書は實に王言を管る。且つ(二三)寵章を虛飾し(二四)禦侮を委成するは、臣愜はざるを知る。(二五)物誰か宜しと謂はんや。ただ命鴻毛より輕く責山岳より重し。存沒歸を同うし毀譽(二六)一貫なり。一官を辭するも身累を減ぜず、一職を增して已に朝經を黷せり。便ち當に自ら體國を同うし、飾讓をなさざるべし。功(二七)一匡に均しく賞(二八)千室に同じく、(二九)近甸に光宅し全邦を(三〇)奄有するに至りては、(三一)隕越を期となすも、敢て命を聞かず。亦願くは(三二)降鑒を曲留し、即ち順許を垂れんことを。(三三)鉅平の懇誠彌ゝ固く、(三四)永昌の丹慊申ぶるを獲ば、乃ち君臣の道(三五)綽として餘裕あるを知る。苟も昭にし易しといふも、敢て(三六)奪ひ難きを守る。故に心に庶ひ議を弘

【二二】神州。揚州をいふ。儀刑は儀表なり。列岳は諸侯。
【二三】寵章。封侯をいふ。
【二四】禦侮。驃騎將軍となるをいふ。
【二五】物。人なり。
【二六】一貫。一事なり。同じきをいふ。
【二七】一匡。論語に「管仲桓公に相として天下を一匡す」とあり。
【二八】千室。諸侯の封をいふ。
【二九】近甸。都に近き地、宣城郡をいふ。光宅は大居なり。
【三〇】奄有。領有なり。
【三一】隕越。墜落して死すること。
【三二】降鑒。上意なり。
【三三】鉅平。晉の羊祜、鉅平侯となる、表を奉りて讓る。表卷第十九に出づ。
【三四】永昌。晉の庾亮、字は元規、中書監となり、上疏（卷第十九に出づ）して讓る。乃ち永昌公に封ず。丹慊は熱誠なる謙讓。
【三五】綽として云云。孟子に「官守ある者は其職を得ざれば則ち去る、言責ある者は其言を得ざれば則ち去る、我れ官守

にし、己を酌み物を親むべき者なり。荷懼(三七)屛營の誠に勝へず。謹んで某官某甲に附し、表を奉りて以聞す。

【大意】驃騎ほ上將の元勳にして、揚州刺史は天下の儀表たるべき諸侯なり。尙書は古司會と稱し、天下の事を綜べ、中書は王言を出納する事を掌る。この大任を受くるは、臣の宜しき所にあらず。ただ身命は鴻毛よりも輕く、罪責を負ふこと山岳よりも重し。故に存沒毀譽を同一視し、粉骨碎身以て國家と同體たるべし。故に敢て假飾をなして辭讓せず。ただ宣城郡に封ぜられ、邦土を領有するに至りては、死すとも命を受くる能はず。願くは聖意を曲げ、臣の願を容れ給はんことを。若し臣の辭意を容れ給はば、臣たるの道に於て、始めて綽然たるを得べし。若し臣の情を以て昭察し易しとなし、許容せられずんば、臣は永く此志を守りて變ふることなからん。宜しく己を度りて人を察し給ふべきなり。謹んで表を奉りて上聞す。

(一)范尙書の爲に、吏部封侯を讓る第一表　任彥升

臣雲言す。尙書の召

なく言責なし、則ち吾が進退豈綽綽然とし、餘裕あらざらんや」とあり。【三六】奪ひ難し。論語に「匹夫も志を奪ふべからず」とあり。【三七】屛營。驚惶なり。

【一】范尙書。名は雲。字は彥龍、梁の武帝と同じく、齊の竟陵王に事ふ、天子となるに及

を被る。臣を以て散騎常侍、吏部尚書となし、雩城縣開國侯、食邑千戸に封ず。命を奉じて震驚し心顔措くことなし。(二)臣雲臣は(三)素門の凡流にして(四)輪翮取るなし。進んでは(五)中庸に謝し、退いては(六)狂狷に慙づ。固より嘗て鑽厲して學を求め、而も一經治まらず。(七)篆刻文を爲して三冬就るなし。書を(八)燕魏に負ひ、空しく(九)菽粟を殫し、屩を(一〇)齊楚に躡み、徒に貧賤を知る。既にして(一一)虎を分ちて出守すれば、(一二)囊被を以て嗤はれ、(一三)斧を持して牧となれば、(一四)薏苡を以て謗を興し、(一五)赭衣して虜となりては、獄吏の尊きを見、名を除かれて民となりては、(一六)井臼の逸きを知る。百年の

び、雲を以て吏部尙書となす。

【二】臣雲。一本この下に頓首頓首死罪死罪の八字あり。

【三】素門。寒素の家。

【四】輪翮。輔佐の能をいふ。張載の詩に「輶車の運るは輪に在り、飛骨は六翮を須ふ」とあり。

【五】中庸。平凡なる人。

【六】狂狷。狂は志極めて高くして行稱はざる者。狷は知及ばずして守餘りある者。

【七】篆刻。文章を彫琢すること。三冬は冬三個月。

【八】燕魏。蘇秦書を負ひて燕魏二國に遊說す。

【九】菽粟。菽は豆。

【一〇】齊楚。韓詩外傳に「田子方魏の太子に謂つて曰く、志得ずんば則ち屩を受けて秦楚に適かんのみ、安くに往くとして貧賤を得ざらん」とあり。

【一一】虎を分つ。銅虎符を賜りて郡守となること。

【一二】囊被。漢書に「王陽父子皆車馬衣服を好み、其の自ら奉養する極めて鮮明となす。遷徙して處を去るに及び、載する所囊衣に過ぎざるのみ」とあり。

【一三】斧を持す。斧鉞を賜りて太守となること。牧は太守なり。

【一四】薏苡。草の名、馬援交趾太守となりて出づ、薏苡は瘴氣を治すべしと、遂に一車を取りて還る、時人因つて之を謗る。

【一五】赭衣。辠人の衣。虜は罪囚なり。

【一六】井臼。舂汲なり。

(二七)上壽既に徒然といふ。如し其れ誠説なるも、亦以て半を過ぐ。(二八)亂離斯に瘼みぬ。以て安に歸せんと欲する。門を荒郊に閉ぢ、再び寒暑に離ふ。兼ねるに(二九)東皐の數畝、(三〇)朝夕を控帶し、(三一)闕外の一區、(三二)鍾皐を悵望するを以てす。室に(三三)趙女なしと雖も而も門に(三四)好事多く、祿微なれども金を賜り、歡同うして老を娛み、(三五)芰を折り(三六)枯を燔き、此に自ら足れりとす。

【大意】臣は寒素の家に生れ、又輔翼の能なし。嘗て學問文章を學びたるも、少しも成就する所なく、出でて太守となりしも、徒に世の誹謗を招き、罪を得て獄に下りては、執法の官を畏れて之を尊び、官爵を除かれて平民となり、始めて衣食の安樂なるを知る。上壽は百年なりといふも、是れ固より虛言なり。たとひ虛言ならずとするも、臣が年已に其半を過ぎたり。荒郊に隱居してより既に二年を經、常に鍾山を悵望せり。家に歌舞の妓なしと雖も、好事者の時に來り訪ふあり。祿薄しと雖も賜金の以て老を娛むべきあり。因つて芰を折りて坐し、乾魚を

【二七】上壽。莊子に「盜跖孔子に謂つて曰く、人上壽は百歲、中壽は八十」とあり。徒然は空言なり。

【二八】亂離。東昏侯の亂を作せるをいふ。

【二九】東皐。東方の澤。

【三〇】朝夕。海をいふ。

【三一】闕外。范雲丹陽に在り、丹陽は齊の門外なり。一區は雲の宅をいふ。

【三二】鍾皐。鍾山なり。

【三三】趙女。歌舞の妓。

【三四】好事。漢書に「揚雄貧にして酒を嗜む、時に好事者あり酒肴を載せて從遊す」とあり。

【三五】芰。菱なり。菱を折りて敷物とす。

【三六】枯。乾魚なり。

焼いて食ひ、自ら以て足れりとなす。(二七)陛下期に(二八)萬世に應じ、統を(二九)千祀に接ぐ。(三〇)三千景のごとく附き(三一)八百謀らず。臣が釁(三二)離心に等しく、功同徳に慙づ。(三三)泥首顏に在り(三四)輿棺未だ毀れず。(三五)締構草昧、敢て(三六)天功を叨り、(三七)獄訟謳歌、民志に同じきを示す。而して(三八)隆器大名、一朝總て集る。己を顧み躬に及ぼすに、何を以てか此に臻らん。政に當に閑を(三九)白水に接し、宅を(四〇)舊豐に列し、(四一)捨講の尤を忘れ、(四二)諸公の費を存せるを以てな

【二七】陛下。梁の武帝を指す。
【二八】萬世。莊子に「萬世の後にして大聖に遇ふ」とあり。
【二九】千祀。千年なり。漢書に「司馬談曰く、今天子千歳の統を接ぐ」とあり。
【三〇】三千。書經に「湯桀を放ちて亳に歸る、三千の諸侯大に會す」とあり。
【三一】八百。周の武王の紂を伐つや、八百諸侯謀らずして辭を同うし、期せずして時を同じうし、同じく孟津に會す。
【三二】離心。書經に「武王曰く、受億兆の夷人あるも離心離徳なり、予亂臣十人あり、同心同徳なり」とあり。
【三三】泥首。降る者は闕下に泥首す。
【三四】輿棺。輿は荷ふこと、降る者は棺を荷ひて降る。
【三五】締構。結成なり。草昧は事の始をいふ。
【三六】天功。天子の功。
【三七】獄訟謳歌。孟子に「訟獄する者堯の子に歸せずして舜に歸し、謳歌する者堯の子に謳歌せずして舜に謳歌す」とあり。
【三八】隆器大名。重位に任ぜられしこと。
【三九】白水。南陽の鄉名、後漢の光武帝の鄉閈なり。
【四〇】舊豐。漢の高祖は豐邑の人なり。
【四一】捨講。東觀漢記に「初め光武帝長安に學ぶ時、朱祐が宅を過る、祐帝を留めて講を待たしむ、帝位に登るに及び祐が宅に幸し、問うて曰く我が講を去るなきを得んやと、祐曰く敢てせずと」とあり。
【四二】諸公の費。東觀漢記に「初め光武帝長安に學ぶ、南陽の大人賢者長安に往來し、資用乏し、同舍生韓子と錢を合せ驢を買ひ、從者をして僦ひて以て諸公の費を給せしむ」とあり。

るべし。俯して(四三)青紫を拾ふ。豈明經を待たんや。(四四)臣雲夫れ(四五)銓衡の重きは(四六)隆替に關す。遠く惟ふは則ち哲、帝に在りても猶ほ難んず。漢魏より以降、達識軌を繼ぐ。雅俗の歸する所、唯(四七)許郭を稱す。十を拔いて五を得るも、尚ほ(四八)肩を比ぶといふ。(四九)其餘の得失未だ聞かず。偶〻童幼を察するに天機暫く發す。顧ふに算ふるに足るなし。魏に在りては則ち(五〇)毛玠の公方、晉に居りては則ち(五一)山濤が識量なり。臣を以て之に況ふるに、一に何ぞ(五二)遼落なる。(五三)齊季陵遲して官方に淆亂し、鴻都綱せず(五五)西園市を成す、(五六)金章盈笥の談あり、(五七)華貂不足の歎を深うす。(五八)草創惟れ

【四三】青紫。印綬なり。官職をいふ。漢書に「士苟も經術を明にせば、靑紫を取ること俛して地芥を拾ふが如し」とあり。

【四四】臣雲。一本に此下頓首頓首死罪死罪の八字あり。

【四五】銓衡。人物を選定すること。

【四六】隆替。國家の盛衰。

【四七】許郭。後漢の許劭、好んで人物を奬め、賞識する所多し。郭泰、人を知るに明なり、好んで士類を奬む。

【四八】肩を比ぶ。戰國策に「淳于髡一日にして七人を薦む宣王曰く、寡人聞く千里にして一士、是れ肩を比べて至るなり、今子一朝にして七人を見る、亦衆からずや」とあり。

【四九】其餘。許郭以外の人。

【五〇】毛玠。尙書僕射となり選擧を典り、性雅亮公正なり。

【五一】山濤、選曹郞となり亦正直の人を取る。

【五二】遼落。遠く及ばざること。

【五三】齊季。齊の末。陵遲は勢の衰ふること。

【五四】鴻都。學府なり。綱は綱紀なり。

【五五】西園。漢の靈帝の時、太后朝に臨み、西園に於て官を賣る。

【五六】金章。金印なり。笥は箱。

【五七】華貂。侍臣の服飾なり。晉錄に「趙王倫位を簒ふ、侍中常侍九十七人、小人廷に滿つ、時人諺つて曰く、貂足らず狗尾續ぐと」とあり。

【五八】草創。創業なり。

始め義改作に存す。(五九)己を恭しうして南面し、(六〇)成を責めて斯に在り。豈宜しく妄に寵私を加へ、以て王事に乏しくし、(六一)附蟬の飾空しく寵章を成すべけんや。之を公私に求むるに授受交ゝ失せり。

【大意】　陛下の德は萬世一出の聖に應じ、天下の人之に就くこと影の形に附くが如し。臣は前朝の微臣にして陛下の功臣にあらず。然るに貴官重職臣の身に及ぶ。自ら顧るに臣が力の能く任ふる所にあらず。顧ふに臣が陛下の親幸を辱うするは、ただ同鄕の誼あるに因る。經術を明にするの致す所にあらず。夫れ吏部尙書は人物銓衡の事に當る。人を知るは堯舜さへ之を難しとせり。是を以て漢魏より以來ただ許郭二人よく人を知ると稱せられ、其餘は未だ嘗て聞かず。之に次ぐ者は魏の毛玠、晉の山濤あり。また人を知るを以て聞ゆ。臣を以て之に比するに、及ばざること遠し。況んや晉末國勢陵夷し官界紊亂し、學府は綱紀なく賣官の弊甚しきをや。今や陛下王業を創め舊弊を改作すべき時なり。今臣に加ふるに私恩を以てし、王事を闕乏するに至る。公に於ては授を失し、私に於ては受を失す。是れ臣の敢て拜辭する所以なり。

【五九】己を恭うす。論語に「舜は己を恭うして、南面するのみ」とあり。
【六〇】成を責む。淮南子に「人主の術は、成を責めて勞せず」とあり。
【六一】附蟬の飾。侍中の冠は飾るに黃金の蟬を以す。

近世の侯たる者、(六二)功緒參差たり。或は(六三)食を關中に足し、或は軍を(六四)河內に成し、或は勝を(六五)帷幄に制し、或は(六六)門人親を加へ、或は(六七)時と抑揚し、或は隱として(六八)敵國の若く、或は策(六九)禁中に定まり、或は功(七〇)野戰に成り、或は盛德(七一)卓茂の如く、或は師道(七二)桓榮の如く、或は(七三)四姓侍祀す。已に紀するに足るなし。(七四)五侯外戚且つ(七五)舊章にあらず。而して臣の附く所、唯(七六)恩澤に在り。既に義(七七)疇庸に異り、實に榮

【六二】功緒、功業なり。參差は同一ならざること。

【六三】食を云云。漢の高祖、蕭何を留めて關中を鎭ぜしめ、軍の糧食を給せしむ、蕭何後酇侯となる。

【六四】河內。後漢の光武帝、寇恂をして河內を守らしむ、恂後雍奴侯となる。

【六五】帷幄。漢の高祖の臣張良、籌を帷幄の中に運らし、後留侯に封ぜらる。

【六六】門人。東觀漢記に「光武位に卽き、鄧禹を拜して大司徒となし、制して曰く、孔子云く吾れ回ありてより門人益親めりと、封じて酇侯となす」とあり。

【六七】時と云云。漢書に「漢の叔孫通、常を奉じ時と抑揚し勝ちて胄を免がず云云」とあり、通は稷嗣君となる。

【六八】敵國。後漢の光武帝、吳漢を評して曰く、隱として一敵國の若しと、漢を廣平侯に封ず。

【六九】禁中。東觀漢記に「殤帝崩じ、ただ安帝宜しく大統を承くべし、車騎將軍鄧隲、策を禁中に定む、隲を封じて上蔡侯となす」とあり。

【七〇】野戰。曹參野戰略地の功あり、平陽侯に封ぜらる。

【七一】卓茂。字は子容、後漢の南陽の人、宣德侯に封ぜらる。

【七二】桓榮。字は春卿、歐陽の尙書を始め師道を窮極す、爵關內侯を賜ふ。

【七三】四姓。後漢の明帝の時、外戚に樊氏郭氏陰氏馬氏あり、是を四姓となし、侍祀侯たり。又小侯といふ。

【七四】五侯。漢の成帝、舅王譚王立、王根、王逢、王商を封じ列侯となす、五人同日に封ぜらる、世之を五侯といふ。

【七五】舊章。舊來の規定。

【七六】恩澤。漢に恩澤侯あり、功勳なく唯恩澤を以て侯に封ぜらる。

【七七】疇庸。疇は酬、庸は効なり。功に酬ゆること。

儒者に乖けり。小人幸を貪ると雖も豈獨り心なからんや。臣は本(七八)諸生よりし、家(七九)素業を承け、門に富貴なく、農に易へて仕ふ。(八〇)乃祖玄平、道風世に秀づ。爰に(八一)中興に在り、(八二)多士に儀刑たりしも、位裁に(八三)元凱にして任牧伯に止る。高祖少連夙に(八四)高尙を秉り、富める所の者は義、乏しき所の者は時。(八五)東朝に薄宦たりしも、病を(八六)下邑に謝す。(八七)先志忘れず、愚臣是れ庶ふ。且つ去歳冬初、國學の(八八)老博士のみ。今茲首夏、將に(八九)冢司に亞がんとす。(九〇)千秋の一日九遷、(九一)荀爽の十旬遠至と雖も、之を微臣に方ぶるに、未だ速達となさず。臣識なく唯利を是れ視ると雖も、名を虧き實を損するに至りては、國の爲身の爲、其の不可なるを知る。敢て妄に冒さず。陛下(九二)菅蒯を弃てず、愛(九三)絲麻に同じ。儻くは平生の言猶ほ(九四)聽覽に

【七八】諸生。書生なり。
【七九】素業。朴素の業。
【八〇】乃祖。范雲が高祖の父、名は注、字は玄平。道風は老莊の學。
【八一】中興。晉の元帝。
【八二】多士。衆士なり。儀刑は儀表。
【八三】元凱。倘書なり。牧伯は刺史。
【八四】高尙。仕官せざること。易經に「王侯に事へず其事を高尙にす」とあり。
【八五】東朝。宋の太子の諸議郎たりしをいふ。
【八六】下邑。居る所の邑。
【八七】先志。祖先隱逸の志。
【八八】老博士。范雲國子博士となる。
【八九】冢司。吏部倘書をいふ。
【九〇】千秋。車千秋は漢の高祖の園寢郎たり。一月に九たび遷りて丞相となる。日の字は月の字の誤。
【九一】荀爽。後漢の荀爽、徵命を被りてより台司に登るに及ぶまで九十五日なり。
【九二】菅蒯。草の名、以て索となすべし、雲自ら喩ふ。
【九三】絲麻。賢良に喩ふ。左傳に「詩に云く、絲麻ありと雖、菅蒯を弃つるなかれ」とあり。
【九四】聽覽。耳目なり。

在らん。宿心素志復た（九五）貳辭なし。臣が乞ふ所を矜み、特に寵命を廻さば、則ち（九六）彝章載ち穆ぎ、（九七）微物免るるを知らん。臣今（九八）假に在り、省に詣る容からず。荷懼の至りに任へず。謹んで表を奉じて以聞す。

【大意】近世の侯たる者は、其功業同一ならずと雖も、皆各〻功業あらざるはなし。今臣の封侯たるは、ただ陛下の恩澤に由るのみ。固より功徳の酬ゆべきあるにあらず。又臣の此榮を受くるは、儒者の徳にあらず。小人の性寵幸を貪ると雖も、豈心に愧づるなからんや。臣は書生より起り、家世〻貧素なり。ただ祿仕を以て農耕に易ひしのみ。遠祖玄平は道學を以て一時に秀で、晉の元帝の時、衆士の儀表たりしも、位纔に尚書たり、職刺史たりしに過ぎず。高祖少連は高尚の志を抱きて仕へず。徳義に富めりと雖も、時に逢はず。宋に仕へしも病を以て官を辭せり。臣亦祖先の志を以て志となし、隱逸を願へり。然るに去冬は國子博士たりしに今將に吏部尚書たらんとす。臣の榮達の速なること車千秋、荀爽の比にあらず。臣無識にして利を好むと雖も、名實を虧くは、國と身との爲に不可なるを知る。故に敢て冒進せず。臣平生隱逸の言あり。今猶は陛下の耳目に在らん。今日と雖も復た其志を渝へず。臣の乞を哀み寵命

【九五】貳辭。平生の言を變ふること。
【九六】彝章。常法なり。
【九七】微物。微身なり。雲自ら謂ふ。
【九八】假。休沐なり。

を撤回し給はば、常法に叶ひ、臣亦咎を免るるを得ん。因つて表を奉りて奏聞す。

(一)蕭揚州の爲に作れる、士を薦むる表　任彥昇

(二)臣王言す。臣聞く、賢を求めて暫く勞すれば、(三)垂拱して永く逸すと。之を壤を疏するに方べ、類を川を導くに取る。伏して惟るに陛下道(四)旒纊に隱れ、信(五)符爾に充ひ、(六)六飛塵を同うし、(七)五讓世に高し。(八)白駒空谷、(九)振鷺庭に在り。猶ほ鱗を(一〇)卜祝に隱し、器を(一一)屠保に藏すを懼れ、(一二)闕下

【一】蕭揚州。齊の始安王蕭遙光、揚州刺史たり、建武の初詔ありて士を擧げしむ、始安王表して瑯邪の王暕、及び王僧孺を薦む。

【二】臣王。任彥昇、始安王の爲に作る、故に本集に臣王となす。今舊文に隨つて選錄す故に同じく臣王となす。

【三】垂拱。無爲にして治むるをいふ。

【四】旒纊。大戴禮に「孔子曰く、古は冕して旒を前にす、明を蔽ふ所以なり、黈纊、耳を塞ぐ、聽を掩ふ所以なり」とあり。

【五】符璽。印なり。

【六】六飛。漢書に「爰盎文帝に謂つて曰く、陛下六飛を騁せて不測に馳す」とあり。

【七】五讓。漢書に「爰盎文帝に謂つて曰く、夫れ許由は一讓し陛下は五たび天下を以て讓る」とあり。

【八】白駒。詩經の篇の名「皎皎たる白駒、彼の空谷に在り」とあり。賢人皆出で仕へて谷空しとの意。

【九】振鷺。詩經の篇の名。「振鷺于に飛ぶ、彼の西雝に」とあり。潔白の士の王庭に仕ふるをいふ。

【一〇】卜祝。嚴君平卜者となりて蜀の成都に隱れしこと。

【一一】屠保。太公望、牛を朝歌に屠る、後文王を佐けて大功あり。伊尹嘗て酒家の傭保たり、後湯を佐けて大功あり。

【一二】闕下。列仙傳に「關令尹喜、內老子を學ぶ、西遊して先づ其氣を見、眞人の過ぐべきを知り、物色して之を遮る。果して老子を得たり」とあり。

に物色し、(一三)河上に委裘す。製を(一四)一狐に取るにあらず、諒に味を(一五)兼采に求む。而して(一六)五聲響に倦み、(一七)九工に是れ詢り、議を(一八)廟堂に寢め、聽を(一九)輿皁に借る。臣は位任隆重、義(二〇)家邦を兼ぬ。實に名實違はず、(二一)徼倖路絶えしめんと欲す。(二二)勢門の上品は猶ほ當に格ぐるに淸談を以てすべし。英俊の下僚は限るに位貌を以てすべからず。

【大意】賢人を求めて暫く勞すと雖も、一たび得て之に任ずれば、君主は衣を垂れ手を拱きて、永く逸樂するを得。故に之を壤を疏し川を導くに譬ふ。蓋し川を導けば溺るる者安く、賢に任ずれば亂るる者治まればなり。伏して惟るに陛下道潛隱して、(老子に大象は形なく、道隱れて名なしとあり)信印符の如く、漢の文帝と塵迹を同うす。今や賢人出で仕へ、潔士朝に滿つと雖も、猶ほ隱遁の傑士あらんことを懼れ、天下に物色して之を登庸す。夫れ國を爲む

【一三】河上。神仙傳に「河上公常に老子道德經を讀む、漢の文帝駕從して之に詣る」とあり。委裘は賢者を用ふること。

【一四】一狐。王褒の講德論に「千金の裘は一狐の腋にあらず」とあり。

【一五】兼采。張璠の易注序に「蜜蜂は兼采を以て味をなす」とあり。

【一六】五聲。鬻子に「昔大禹天下を治むるに五聲を以て治を聽く」とあり。

【一七】九工。九官なり。書經舜典に、司空、后稷、司徒、士、共工、虞、秩宗、典樂、納言の九官あり。

【一八】廟堂。貴臣に喩ふ。

【一九】輿皁。賤士をいふ。

【二〇】家邦を兼ぬ。始安王は皇族なり、故に國と家を同うすとなり。

【二一】徼倖。實材なくして高位に登ること。

【二二】勢門。權勢家。

るには衆賢の力に頼らざるべからず。故に卿相の議を終れば、更に微賤の言を聽き、以て國事を決す。臣は位隆く任重く、且つ國家と家を同うす。因つて任ずる所の者皆實材を取り、徼倖にして榮進する者なからしめんと欲す。是れ臣の陛下に忠なる所以なり。權勢の家淸談ある者は、宜しく之を登庸すべし。英俊の下僚に沈淪する者、豈位卑く貌陋なるを以て用ひざるべけんや。

竊に見るに祕書丞(二三)琅邪の臣王暕、年二十一、字は思晦、(二四)七葉光を重ね、海內の冠冕なり。神淸み氣茂にして允に中和を廸む。(二五)叔寶理遣の談、(二六)彥輔名敎の樂あり。故に以て(二七)先達に暉映し、後進に領袖たり。居に塵雜なく、家に賜書あり。辭賦淸新にして屬言玄遠なり。室邇く人曠く、物疏に道親し。(二八)素を丘園に養へば(二九)台階位を虛うす。(三〇)庠序公朝、萬夫望を傾く。豈徒(三一)荀令思ふべく、(三二)李公亡びざるのみならんや。

【二三】琅邪。郡名。
【二四】七葉。七世なり。
【二五】叔寶。晉の衞玠、字は叔寶、好んで玄理を言ふ、常に謂へらく、人及ばざるあれば情を以て恕すべし、悲意相干さば理を以て遣るべしと、故に終身喜慍の色を見ず。
【二六】玄輔。世說に「胡毋彥國、放任を以て達となし、或は衣を去りて裸體す。樂廣曰く、名敎の中自ら樂地あり、何爲れぞ乃ち爾ると」とあり。彥輔は彥國なり。

【二七】先達。先進先輩なり。
【二八】素。朴なり。
【二九】台階。三公なり。
【三〇】庠序。學宮なり。
【三一】荀令。荀顗は魏の太尉彧の第六子なり、黃初の末、中郎に除せらる、晉の高祖顗を見て之を異として曰く。顗令は君の子なり、近ごろ袁侃を見ろ、亦曜卿の子なり、皆父の風あり。
【三二】李公。後漢書に「李固は司徒郃の子なり、少くして學を好む、四方の士多く其風を

【大意】臣竊に見るに琅邪の王暕は七世冠冕（高官となりしことを絶たず、海内の推尊する所なり。神情俊茂にして中和の道を行ひ、よく理を以て心を遣り、名敎を以て樂となす。故に光輝先進にまさり、又よく後進の儀表たり。門に雜賓なく家に賜書あり。文辭亦淸新玄遠にして道に親み物を疎んず。此人退いて田園に在れば、三公たるべき人を缺き、學宮公朝に立てば、人皆之を欽慕す。實に父祖の德を繼ぐ者と謂ふべし。前の晉安郡侯官の令、東海の王僧孺、年三十五、（三三）理尙棲約、思致（三四）恬敏なり。既に筆耕して養となし、亦（三五）傭書して學を成す。乃ち螢を集め雪に映じ、（三六）蒲を編み（三七）柳を緝むるに至り、先言往行、人物雅俗、（三八）甘泉の遺儀、（三九）南宮の故事、地に畫いて圖を成し、掌を抵ちて述ぶべし。豈直（四〇）鼮鼠必對の辯あり、

慕ひて來り學ぶ、京師皆歎じて曰く、是れ復た李公となす」とあり。

【三三】理尙。意趣なり。

【三四】恬敏。靜達なり。

【三五】傭書。人に雇れて書寫すること。

【三六】蒲を編む。漢書に「路溫舒、澤中の蒲を取り、截りて牒となし編みて以て書を寫す」とあり。

【三七】柳を緝む。楚國先賢傳に「孫敬、洛に至り太學の左右に在り、一小屋に母を安止し、然る後入りて學ぶ、楊柳の簡を編みて以て經となす」とあり。

【三八】甘泉。宮の名、天子出づる時、車駕の次第之を鹵簿といふ、時に出でて天を甘泉に祀るに之を用ふ、名づけて甘泉鹵簿といふ。

【三九】南宮。後漢書に「鄭弘尙書令となる、弘前後陳ぶる所皆王政を補益する者なり、之を南宮に著して以て故事となす」とあり。

(四一)竹書落簡の謬なきのみならんや。陳は坐して雅俗を鎭め、弘益已に多く、僧孺は訪對休せず、質疑斯に在り。竝に(四二)東序の祕寶(四三)瑚璉の茂器なり、誠に言は人を以て廢するも、才は實に世の資なり。表に臨んで(四四)悚戰するも、猶ほ懼らくは未だ允されざらんことを。下情に任へず。

【大意】東海の王僧孺は意を儉約に棲め、思致靜達にして、刻苦して研學す。故に古今の言行雅俗より故事來歷に至るまで、盡く精通せざるはなし。陳は坐して俗に益あること多く、僧孺は應對質疑の美あり。此二人は共に國家の重器なり。言は人を以て廢すべきも、實材は世の資用となすに足る。今此二人を薦めんとし、表を奉るに際し、恐懼して其の或は裁可せられざらんことを懼る。

(一)褚諮議蓁の爲に、兄に代りて封を襲ぐを讓る表　任彦昇

臣蓁言す。昨(二)司徒

【四〇】鼷鼠。三輔決錄に「光武帝鼠を得たり、豹の文の如し、光武之を異み以て羣臣に問ふ、能く知る者なし、竇攸對へて曰く鼷鼠なりと、詔して問ふ何を以てか知ると、攸曰く爾雅に見ゆと、詔して祕書を按ぜしむるに攸が言の如し」とあり。

【四一】竹書。張隲の文士傳に「人嵩山の下にて簡一枚を得し者あり、兩行科斗の書なり、人能く識るなし、司空張華以て束晳に問ふ、晳曰く此れ明帝の顯節陵中の策文なりと、之を驗するに果して然り」とあり。

【四二】東序。學宮なり。

【四三】瑚璉。宗廟の器。

【四四】悚戰。恐懼なり。

【一】褚諮議蓁。諮議は官名、蓁は南康郡公褚淵の嫡子なり、少くして外に出づ、庶兄

の符を被る。詔旨を仰稱するに、臣が兄賁の請ふ所を許し、臣を以て南康郡公を襲封せしむ。臣(三)門籍勳蔭をもて光に(四)土宇を錫ふ。臣賁は(五)世載家を承け、允に長徳に膺る。而も深く(六)止足を鑒み、(七)千乘を脫屣す。遂に乃ち達く推恩を謬り、近く庸薄に萃る。能く國を以て讓る。弘義歸するあり。(八)匹夫も奪ひ難し。守るに貳なきを以てす。昔(九)武始家臣の策に迫られ、(一〇)陵陽鮑生の言に感ず。張は誠を以て請ひ、丁は理の爲に屈す。且つ(一一)先臣大宗緒を絕つを以て、臣に命じて出でて傍統を纂がしむ。(一二)在昔に稟承

賁爵を襲ぐ、蓁既に長大なり、賁上表して封を蓁に歸さんことを請ふ、天子之を許す、而して蓁此表を上り賁に讓る。

【二】司徒。官名。

【三】門籍勳蔭。門地及び祖先の餘澤。

【四】土宇。領土なり。

【五】世載。國語に「世を奕ぎて徳を載す」とあり。載は成なり。

【六】止足。老子に「止まるを知れば殆からず、足るを知れば辱められず」とあり。

【七】千乘。封土なり。脫屣は履を脫ぎ棄つるが如く棄つること。

【八】匹夫。論語に「匹夫も志を奪ふべからず」とあり。

【九】武始。東觀漢記に「張純字は伯仁、武始侯に封ぜらる、子奮の兄常に病を被る、純病困の時家丞翕を勑む、爵嗣に傳ふべからずと、純薨ず翕上書して奮をして襲封せしめんことを乞ふ、奮上書して曰く、兄根病衰せず、今翕臣を移す云云と」となり。

【一〇】陵陽。東觀漢記に「丁綝陵陽侯となりて薨ず、長子鴻字は季公、位を弟盛に讓りて逃れ去る、鴻初め鮑駿と友とし善し、駿曰く、今子兄弟の私恩を以て父が不滅の基を絕つは智といふべけんやと、鴻感悟し還りて國に就く」とあり。

【一一】先臣。亡父をいふ。大宗は伯父の宗をいふ。

【一二】在昔。父存生の時の命をいふ。

理。(一三)終天に絶ゆ。永く情事を惟ひ、觸目崩隕す。若し賁をして(一四)延陵の風を高うし、臣をして子臧の節を忘れしめば、是れ德擧を廢するなり。豈能く賢なりといはんや。陛下その(一五)丹款を察し、特に停絶を賜へ。然らずんば身を草澤に投じ、苟も愚誠を遂げんのみ。(一六)丹慊の至に任へず。謹んで闕に詣り、拜表して以聞す。臣誠惶誠恐。

【大意】臣昨日司徒の符章を受く。詔書を拜誦するに、臣が兄賁の願を許し、臣をして襲封せしめんとす。賁は世を奕ぎて德を成し、且つ年長なり。宜しく家を繼ぐべきなり。然るに止足の鑒ありて其封土を棄つ。是れ謬りて陛下の恩を愚臣に推すものなり。賁たとひ義を以て讓るも、臣は匹夫の志を執りて心を變へず。兄賁よろしく丁綝が理に屈して封を襲ぎしに倣ふべきなり。且つ亡父は伯父の宗の絶えんとするを以て、臣に命じて其統を繼がしむ。若し臣にして兄賁の讓を受けなば、是れ亡父の德を擧げしを廢するなり。豈賢といふべけんや。願くは陛下臣の赤誠を察し、封を襲がざらしめよ。然らずんば臣自ら草澤に投竄し、以て己が志を遂げん

【一三】終天。父の死をいふ。

【一四】延陵。吳の季札をいふ。左傳に「吳子諸樊既に喪を除き、將に季札を立てんとす、對へて曰く、曹の宣公の卒するや、諸侯と曹人と曹君を不義とし、將に子臧を立てんとす、子臧之を去り遂に爲らず以て曹君を成せり、君子曰く、能く節を守れり、君は義嗣なり、誰か敢て君を奸さんと、國を有つは吾が節にあらざるなり、札不才と雖も願くは子臧の節に附かんと」とあり。

【一五】丹款。赤誠なり。

【一六】丹慊。熱誠なる謙讓。

のみ。

(一)范始興の爲に作り、(二)太宰の碑を立てんことを求むる表

任彦昇

臣雲言す。夫の存しては(三)風猷を樹て、沒しては(四)徽烈を著すを原ぬるに、既に故老の口に絶ゆれば、必ず(五)不刊の書に資る。而して諸を名山に藏すれば、則ち陵谷(六)遷貿し、之を(七)延閣に府すれば、則ち青編簡を落す。然らば則ち(八)天に配するの迹、泗水の上に存し、(九)素王の道沂川の側に紀す。是に由りて師を崇ぶの義、迹を(一〇)西河に擬し、主を尊ぶの情、之を(一一)堯禹に致す。故に(一二)精廬妄に啓けば、必ず(一三)鐫勒の盛を窮め、一城に

【一】范始興。范雲なり。
【二】太宰。齊の竟陵文宣王子良、太宰を贈らる。
【三】風猷。風教道德なり。
【四】徽烈。美業なり。
【五】不刊。不滅といふが如し。
【六】遷貿。移易なり。
【七】延閣。藏書の庫の名。府は藏なり。
【八】天に配す。漢の高祖の事迹をいふ。水經注に「泗水の南に泗水亭あり、漢の高祖の廟前に碑あり云云」とあり。
【九】素王。孔子をいふ。沂水の南に孔子の舊廟あり。
【一〇】西河。子夏孔子に洙泗の間に事へ、退いて西河に居る。西河の人皆之を疑ひて以て孔子となす。
【一一】堯禹。伊尹其主を尊び、其主の堯舜の如くならざるを恥づ。
【一二】精廬。寺觀をいふ。
【一三】鐫勒。碑に刻すること。

君長たるも亦刊刻の美を盡す。況んや（一四）周召を甄陶し（一五）伊顏を孕育するをや。

【大意】生きて道德風敎の美を樹て、死して偉業を著す者は、故老の口碑に傳はり、口碑既に絶ゆれば又書史に賴りて傳はる。然れども書を著して名山に藏すれば山谷移易し、之を書庫に藏すれば編簡殘毀す。碑を立つるの長久なるに如かざるなり。故に漢高の業、孔子の道、皆碑を以て傳はる。是を以て寺觀を開ける、牧宰（地方官）の美なる、猶ほ且つ碑を建てて其功を錄す。況んや竟陵王の如き、周召の化、伊顏の德あるをや。

【一四】周召。周公旦、召公奭、共に周の成王の叔父にして王室の功臣なり。甄陶は作成すること。

【一五】伊顏。伊尹及び顏回。

故の太宰竟陵文宣王臣某、（一六）存を與にし亡を與にするは、則ち義社稷に形れ、（一七）天に嚴し帝に配するは則ち周公其人なり。國を體し朝を端し、出でては藩たり入りては守たり。進んでは必告の道を思ひ、退いては苟利の專なし。（一八）五敎以て倫し（一九）百揆時れ序づ。若し夫れ一言一行は盛德の風、琴書藝業は述作の茂、道兼濟にあらず、事樂善に止る。亦得て稱するなし。人の

【一六】存を與にし。漢書に「社稷の臣は主存すれば存を與にし、主亡すれば亡を與にす」とあり。

【一七】天に嚴す。孝經に「孝は父を嚴にするより大なるはなし、父を嚴にするは天に配するより大なるはなし。則ち周公其人なり」とあり。

【一八】五敎。五倫なり、孟子の「父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり」是れなり。倫は脩まること。

【一九】百揆。庶政なり。

云に亡する、忽ち歳序を移す。(二〇)鵰鶚東に徙り、(二一)松檟行を成す。(二二)六府の臣僚、(二三)三藩の士女、人々(二四)油素を蓄へ、家々(二五)鉛筆を懐き、彼の(二六)景山を瞻て、徒然として望慕す。

【大意】故の文宣王子良は、所謂社稷の臣にして、主を尊び天に配するは、周公と功を同うす。出でては刺史となり、入りては司徒となり、進んでは君に告ぐるに美道を以てし、退いては利を苟もして事を專にせず。故に五教よく脩まり庶政次序あり。若し夫れ言行の美、道藝の美に至りては、得て稱するなし。今や既に死して久しきを經たるも、藩府の吏民皆素筆を懐きて其墓を望み、思慕して碑を立てんことを欲す。

昔晉氏の初、碑を立つるを禁ず。魏舒の亡せしとき、亦班列に從ふ。而して(二七)阮略既に泯ぶ。故に首めて(二八)嚴科を冒す。之を爲る者竟に刑戮を免れ、之を置く者反つて嘉歎を蒙る。道(二九)如仁

【二〇】鵰鶚。詩經の篇の名、周の成王未だ周公の志を知らず、乃ち詩を作りて以て王に遺る、名づけて鵰鶚といふ。子良に喩ふ。

【二一】松檟。墓上の木なり。

【二二】六府。子良、輔國將軍、征虜將軍、竟陵王、鎭北將軍、征北將軍、護軍將軍となる、是を六府といふ。

【二三】三藩。子良、會稽太守、南徐州刺史、南交州刺史たり、是を三藩といふ。

【二四】油素。白絹なり。文を書するに用ふ。

【二五】鉛筆。粉筆なり。

【二六】景山。高山なり。子良の墓をいふ。

【二七】阮略。字は德規。

【二八】嚴科。嚴罰なり。

【二九】如仁。孔子管仲を評して曰く「其仁に如かんや、其仁

に被び功（三〇）微管に參るに至りては、本より宜しく（三一）常均の外に在るべし。故の太宰淵、丞相嶷、親賢軌を竝べ、卽ち成規を爲す。乞ふ二公の前例に依り（三二）刊立を許すを賜へ。寧ろ長く（三三）九原を想ひ、（三四）樵蘇其禁を識るなく、蹕を（三五）長陵に駐めて（三六）輶軒適く所を知らざらしむ容げんや。

【大意】昔晉の初め、碑を立つることを禁ず。司徒魏舒の死せし時、固より禁制に由りて碑を立つる能はず。其後阮略の死するや、人略を思ひて已まず。遂に禁を冒して碑を立て、闕に詣りて罪を待つ。朝廷之を聞き文を爲りし者及び之を立てし者を歎稱せり。管仲の如き大功あらば、宜しく常法の外に置くべきなり。是を以て故の太宰褚淵、文獻王嶷、皆碑あり。今竟陵王の賢は褚と迹を同うし、親は嶷と規を同うす。願くは碑を立て以て二公の例に依らんことを。寧ろ民をして空しく其墓を長望せしめ、採樵者をして禁を知らざらしめ、陛下駕を駐めて長陵を望む時、觀て感を起すべき碑なからしむべけんや。

に如かんや」と。

【三〇】微管。論語に「管仲微りせば、吾れ其れ被髮左衽せん」とあり。

【三一】常均。常法なり。

【三二】刊立。碑を刻して立つること。

【三三】九原。墓をいふ。

【三四】樵蘇。草を刈り薪を採る者。柳下惠の墓五十步、採樵を禁ず。

【三五】長陵。漢の高祖の墓。和帝詔して曰く、高祖の功臣蕭曹を首となす、朕長陵の東門を望み、二臣の隴を見て感ありと。

【三六】輶軒。輕車なり。

臣は里閭の孤賤なり、才の甄すべきなし。(三七)齊網の弘きに値ひ賓客の禁を弛められ、名を策し(三八)質を委ね、忽焉として(三九)二紀なり。(四〇)犬馬に先ちて厚恩の答へざるを慮る。而るに(四一)弊帷毀蓋、未だ(四二)螻蟻に蓐せず。(四三)珠襦玉匣遽に(四四)幽泉を飾る。陛下弘く名教を奬め、(四五)微物を隔てず。臣をして駿く(四六)南浦に奔り、長く(四七)北陵に號くを得しむ。既に曲げて(四八)前施に逢ひ、實に仰いで(四九)後澤を覬ふ。儻くは(五〇)杜預山頂の言を驗し、庶はくは(五一)馬駿必拜の感を存せんことを。表に臨んで悲懼し、言自ら宣べず。

【大意】臣は里巷の賤民にして才の世に表すべきなし。齊法の寛なるに逢ひ、賓客として

【三七】齊網。齊の法網。
【三八】質を委ぬ。身を捧げて仕ふること。
【三九】二紀。十二年を一紀とす。
【四〇】犬馬に先ち。列女傳に「梁寡高行曰く、妾の夫不幸にして早く死し、犬馬に先ちて溝壑に塡つ」とあり。
【四一】弊帷。破れたる帳。禮記に「弊帷は棄てず、馬を埋むるが爲なり、弊蓋は棄てず、狗を埋むるが爲なり」とあり。
【四二】螻蟻。蟲の名。延叔堅の戰國策論に「王の爲に先づ以て黃泉に塡し、王の爲に蓐となり、以て螻蟻を禦がん」とあり。
【四三】珠襦玉匣。西京雜記に「漢帝及び諸侯王の死を送る、皆珠襦玉匣を以てす」とあり。
【四四】幽泉。黃泉なり。
【四五】微物。物は人なり。范雲自ら謂ふ。
【四六】南浦。喪を迎ふる處。
【四七】北陵。竟陵王を葬りし處。
【四八】前施。先に葬を送るを許されしこと。
【四九】後澤。碑を立つるを許すこと。
【五〇】杜預。襄陽記に「杜預好んで身後の名を爲さんとす、常に自ら言ふ、百年の後、必ず高岸谷となり、深谷陵とならん。二碑を作りて呉を平ぐるの勳を敍し、一は萬山の下に沈め、一は峴山の下に沈め、何ぞ後代山頭に在らざるを知らんやと」とあり。
【五一】馬駿。扶風王司馬駿は晉

竟陵王の門に遊ぶを許され、身を委ねて之に事ふること二十四年なり。常に先づ死して王の恩に報ゆる能はざらんことを恐る。焉んぞ知らん我未だ螻蟻の蓐とならざるに、王已に黄泉に入らんとは。陛下名教を奬め、臣の心を蔽はず、臣をして王の喪を送迎せるを許し給ふ。願くは又碑を立つるを許し給はんことを。表を奉るに臨み、悲懼して言ふ所を知らず。

の宣帝の第七子なり、民吏碑を樹てて德範を讃述す、長老の碑を見る者之を拜せざるはなし。

國譯文選中卷終

文選卷十

賦癸　情

高唐賦 并序

宋玉

昔者楚襄王。與宋玉游於雲夢之臺。望高唐之觀。其上獨有雲氣。崪兮直上。忽兮改容。須臾之間。變化無窮。王問玉曰。此何氣也。玉對曰。所謂朝雲者也。王曰。何謂朝雲。玉曰。昔者先王嘗游高唐。怠而晝寢。夢見一婦人。曰。妾巫山之女也。爲高唐之客。聞君游高唐。願薦枕席。王因幸之。去而辭曰。妾在巫山之陽。高丘之岨。旦爲朝雲。暮爲行雨。朝朝暮暮。陽臺之下。旦朝視之如言。故爲立廟。號曰朝雲。王曰。朝雲始出。狀若何也。玉對曰。其始出也。䁜兮若松榯。其少進也。晣兮若姣姬揚袂。鄣日而望所思。忽兮改容。偈兮若駕駟馬建羽旗。湫兮如風。凄兮如雨。風止雨霽。雲無處所。王曰。寡人方今可以游乎。玉曰可。王曰。其何如矣。玉曰。高矣顯矣。臨望遠矣。廣矣普矣。萬物祖矣。上屬於天。下見於淵。珍怪奇偉。不可稱論。王曰。試爲寡人賦之。玉曰。唯唯。

惟高唐之大體兮。殊無物類之可儀比。巫山赫其無疇兮。道互折而曾累。登巉巖而下望兮。臨大阺之稸水。遇天雨之新霽兮。觀百谷之俱集。濞洶洶其無聲兮。潰淡淡而並入。滂洋洋而四施兮。蓊湛湛而不止。長風至而波起兮。若麗山之孤畝。勢薄岸而相擊兮。隘交引而却會。崪中怒而特高兮。若浮海而望碣石。礫磥磥而相摩兮。巆震天之磕磕。巨石溺溺之瀺灂兮。沫潼潼而高厲。水澹澹而盤紆兮。洪波淫淫之溶㵟。奔揚踊而相擊兮。雲興聲之霈霈。猛獸驚而跳駭兮。妄奔走而

駹邁。虎豹豺兕。失氣恐喙。鵰鶚鷹鷂。飛揚伏竄。股戰脅息。安敢妄摯。於是水蟲盡暴。乘渚之陽。黿鼉鱣鮪。交積縱橫。振鱗奮翼。蜲蜲蜿蜿。中阪遙望。玄木冬榮。煌煌熒熒。奪人目精。爛兮若列星。曾不可殫形。榛林鬱盛。葩華覆蓋。雙椅垂房。料枝還會。徙靡澹淡。隨波闇藹。東西施翼。猗狔豐沛。綠葉紫裹。朱莖白蔕。纖條悲鳴。聲似竽籟。清濁相和。五變四會。感心動耳。迴腸傷氣。孤子寡婦。寒心酸鼻。長吏隳官。賢士失志。愁思無已。歎息垂淚。登高遠望。使人心瘁。盤岸巑岏。振陳磑磑。磐石險峻。傾崎崖隤。巖嶇參差。縱橫相追。陬互橫啎。背穴偃蹠。交加累積。重疊增益。狀似砥柱。在巫山之下。仰視山巔。肅何芊芊。炫燿虹蜺。俯視崝嶸。窐寥窈冥。不見其底。虛聞松聲。傾岸洋洋。立而熊經。久而不去。足盡汗出。悠悠忽忽。怊悵自失。使人心動。無故自恐。賁育之斷。不能為勇。卒愕異物。不知所出。縱縱莘莘。若生於鬼。若出於神。狀似走獸。或象飛禽。譎詭奇偉。不可究陳。上至觀側。地蓋底平。箕踵漫衍。芳草羅生。秋蘭茝蕙。江蘺載菁。青荃射干。揭車苞并。薄草靡靡。聯延夭夭。越香掩掩。衆雀嗷嗷。雌雄相失。哀鳴相號。王雎鸝黃。正冥楚鳩。姊歸思婦。垂雞高巢。其鳴喈喈。當年遨遊。更唱迭和。赴曲隨流。有方之士。羨門高谿。上成鬱林。公樂聚穀。進純犧。禱琁室。醮諸神。禮太一。傳祝已具。言辭已畢。王乃乘玉輿。駟蒼螭。垂旒旌。旆合諧。紬大弦而雅聲流。冽風過而增悲哀。於是調謳。令人惏悷憯悽。脅息增欷。於是乃縱獵者。基趾如星。傳言羽獵。銜枚無聲。弓弩不發。罘罕不傾。涉漭漭。馳苹苹。飛鳥未及起。走獸未及發。弭節奄忽。蹄足灑血。舉功先得。獲車已實。王將欲往見之。必先齋戒。差時擇日。簡輿玄服。建雲旆。蜺為旌。翠為蓋。風起雨止。千里而逝。蓋發蒙往自會。思萬方。憂國害。開賢聖。輔不逮。九竅通鬱。精神察滯。延年益壽千萬歲。

神女賦 并序

宋玉

楚襄王與宋玉游於雲夢之浦。使玉賦高唐之事。其夜王寢。夢與神女遇。其狀甚麗。玉異之。明日

以白王。王曰。其夢若何。玉對曰。晡夕之後。精神怳忽。若有所喜。紛紛擾擾。未知何意。目色髣髴。乍若有記。見一婦人。狀甚奇異。寐而夢之。寤不自識。罔兮不樂。悵爾失志。於是撫心定氣。復見所夢。王曰。狀如何也。玉曰。茂矣美矣。諸好備矣。盛矣麗矣。難測究矣。上古既無。世所未見。瓌姿瑋態。不可勝讚。其始來也。耀乎若白日初出照屋梁。其少進也。皎若明月舒其光。須臾之間。美貌橫生。燁兮如花。溫乎如瑩。五色並馳。不可殫形。詳而視之。奪人目精。其盛飾也。則羅紈綺繢盛文章。極服妙綵照萬方。振繡衣。被袿裳。穠不短。纖不長。步裔裔兮曜殿堂。忽兮改容。婉若游龍乘雲翔。嫷被服。侻薄裝。沐蘭澤。含若芳。性和適。宜侍旁。順序卑。調心腸。王曰。若此盛矣。試爲寡人賦之。玉曰。唯唯。

夫何神女之姣麗兮。含陰陽之渥飾。被華藻之可好兮。若翡翠之奮翼。其象無雙。其美無極。毛嬙鄣袂。不足程式。西施掩面。比之無色。近之既妖。遠之有望。骨法多奇。應君之相。視之盈目。孰者克尚。私心獨悅。樂之無量。交希恩疎。不可盡暢。他人莫覩。玉覽其狀。其狀峩峩。何可極言。貌豐盈以莊姝兮。苞溫潤之玉顏。眸子炯其精朗兮。瞭多美而可觀。眉聯娟以蛾揚兮。朱脣的其若丹。素質幹之醲實兮。志解泰而體閑。既姽嫿於幽靜兮。又婆娑乎人間。宜高殿以廣意兮。翼放縱而綽寬。動霧縠以徐步兮。拂墀聲之珊珊。望余帷而延視兮。若流波之將瀾。奮長袖以正衽兮。立躑躅而不安。澹清靜其愔嫕兮。性沈詳而不煩。時容與以微動兮。志未可乎得原。意似近而既遠兮。若將來而復旋。褰余幬而請御兮。願盡心之惓惓。懷貞亮之絜清兮。卒與我乎相難。陳嘉辭而云對兮。吐芬芳其若蘭。精交接以來往兮。心凱康以樂歡。神獨亨而未結兮。魂煢煢以無端。含然諾其不分兮。喟揚音而哀歎。頩薄怒以自持兮。曾不可乎犯干。於是搖珮飾。鳴玉鸞。整衣服。斂容顏。顧女師。命大傅。歡情未接。將辭而去。遷延引身。不可親附。似逝未行。中若相首。目略微眄。精彩相授。志態橫出。不可勝記。意離未絕。神心怖覆。禮不遑訖。辭不及究。願假須臾。神女稱遽。徊腸傷氣。顛倒失據。闇然而冥。忽不知處。情獨私懷。誰者可語。惆悵垂涕。求之至曙。

登徒子好色賦 并序

宋玉

大夫登徒子。侍於楚襄王。短宋玉曰。玉爲人。體貌閑麗。口多微辭。又性好色。願王勿與出入後宮。王以登徒子之言。問於宋玉。玉曰。體貌閑麗。所受於天也。口多微辭。所學於師也。至於好色。臣無有也。王曰。子不好色。亦有說乎。有說則止。無說則退。玉曰。天下之佳人。莫若楚國。楚國之麗者。莫若臣里。臣里之美者。莫若臣東家之子。臣東家之子。增之一分則太長。減之一分則太短。著粉則太白。施朱則太赤。眉如翠羽。肌如白雪。腰如束素。齒如含貝。嫣然一笑。惑陽城。迷下蔡。然此女登牆闚臣三年。至今未許也。登徒子則不然。其妻蓬頭攣耳。齞脣歷齒。旁行踽僂。又疥且痔。登徒子悅之。使有五子。王孰察之。誰爲好色者矣。是時秦章華大夫在側。因進而稱曰。今夫宋玉盛稱鄰之女。以爲美色。愚亂之邪臣。自以爲守德。謂不如彼矣。且夫南楚窮巷之妾。焉足爲大王言乎。若臣之陋目所曾覩者。未敢云也。王曰。試爲寡人說之。大夫曰。唯唯。

臣少曾遠游。周覽九土。足歷五都。出咸陽。熙邯鄲。從容鄭衞溱洧之間。是時向春之末。迎夏之陽。鶬鶊喈喈。羣女出桑。此郊之姝。華色含光。體美容冶。不待飾粧。臣觀其麗者。因稱詩曰。遵大路兮攬子袪。贈以芳華。辭甚妙。於是處子悅若有望而不來。忽若有來而不見。意密體疏。俯仰異觀。含喜微笑。竊視流眄。復稱詩曰。寤春風兮發鮮榮。絜齋俟兮惠音聲。贈我如此兮不如無生。因遷延而辭避。蓋徒以微辭相感動。精神相依憑。目欲其顏。心顧其義。揚詩守禮。終不過差。故足稱也。於是楚王稱善。宋玉遂不退。

洛神賦 并序

曹子建

黃初三年。余朝京師。還濟洛川。古人有言。斯水之神。名曰宓妃。感宋玉對楚王說神女之事。遂作

斯賦。其詞曰。

余從京師。言歸東藩。背伊闕。越轘轅。經通谷。陵景山。日既西傾。車殆馬煩。爾迺稅駕乎蘅皋。秣駟乎芝田。容與乎陽林。流眄乎洛川。於是精移神駭。忽焉思散。俯則未察。仰以殊觀。覩一麗人于巖之畔。爾迺援御者而告之曰。爾有覿於彼者乎。彼何人斯。若此之豔也。御者對曰。臣聞河洛之神。名曰宓妃。則君王之所見也。無迺是乎。其狀若何。臣願聞之。余告之曰。其形也。翩若驚鴻。婉若游龍。榮曜秋菊。華茂春松。髣髴兮若輕雲之蔽月。飄颻兮若流風之廻雪。遠而望之。皎若太陽升朝霞。迫而察之。灼若芙蕖出淥波。襛纖得中。脩短合度。肩若削成。腰如約素。延頸秀項。皓質呈露。芳澤無加。鉛華不御。雲髻峨峨。脩眉聯娟。丹脣外朗。皓齒內鮮。明眸善睞。靨輔承權。瓌姿豔逸。儀靜體閑。柔情綽態。媚於語言。奇服曠世。骨像應圖。披羅衣之璀粲兮。珥瑤碧之華琚。戴金翠之首飾。綴明珠以耀軀。踐遠游之文履。曳霧綃之輕裾。微幽蘭之芳藹兮。步踟躕於山隅。於是忽焉縱體。以遨以嬉。左倚采旄。右蔭桂旗。攘皓腕於神滸兮。采湍瀨之玄芝。余情悅其淑美兮。心振蕩而不怡。無良媒以接歡兮。託微波而通辭。願誠素之先達。解玉佩以要之。嗟佳人之信脩。羌習禮而明詩。抗瓊珶以和予兮。指潛淵而為期。執眷眷之款實兮。懼斯靈之我欺。感交甫之棄言兮。悵猶豫而狐疑。收和顏而靜志兮。申禮防以自持。於是洛靈感焉。徙倚彷徨。神光離合。乍陰乍陽。竦輕軀以鶴立。若將飛而未翔。踐椒塗之郁烈。步蘅薄而流芳。超長吟以永慕兮。聲哀厲而彌長。爾迺衆靈雜遝。命儔嘯侶。或戲清流。或翔神渚。或采明珠。或拾翠羽。從南湘之二妃。攜漢濱之游女。歎匏瓜之無匹。詠牽牛之獨處。揚輕袿之綺靡。翳脩袖以延佇。體迅飛鳧。飄忽若神。陵波微步。羅襪生塵。動無常則。若危若安。進止難期。若往若還。轉眄流精。光潤玉顏。含辭未吐。氣若幽蘭。華容婀娜。令我忘餐。於是屏翳收風。川后靜波。馮夷鳴鼓。女媧清歌。騰文魚以警乘。鳴玉鸞以偕逝。六龍儼其齊首。載雲車之容裔。鯨鯢踊而夾轂。水禽翔而為衞。於是越北沚。過南岡。紆素領。廻清陽。動朱

脣以徐言。陳交接之大綱。恨人神之道殊。怨盛年之莫當。抗羅袂以掩涕兮。淚流襟之浪浪。悼良會之永絕兮。哀一逝而異鄉。無微情以效愛兮。獻江南之明璫。雖潛處於太陰。長寄心於君王。忽不悟其所舍。悵神宵而蔽光。於是背下陵高。足往神留。遺情想象。顧望懷愁。冀靈體之復形。御輕舟而上泝。浮長川而忘反。思緜緜而增慕。夜耿耿而不寐。霑繁霜而至曙。命僕夫而就駕。吾將歸乎東路。攬騑轡以抗策。悵盤桓而不能去。

詩　甲　補亡　述德　勸勵　獻詩　公讌　祖餞

補亡詩六首　幷序　束廣微

南陔孝子相戒以養也。

循彼南陔。言採其蘭。眷戀庭闈。心不遑安。彼居之子。罔或游盤。馨爾夕膳。絜爾晨餐。循彼南陔。厥草油油。彼居之子。色思其柔。眷戀庭闈。心不遑留。馨爾夕膳。絜爾晨羞。有獺有獺。在河之涘。淩波赴汨。噬魴捕鯉。嗷嗷林烏。受哺于子。養隆敬薄。惟禽之似。勗增爾虔。以介丕祉。

白華孝子之絜白也。

白華朱萼。被於幽薄。粲粲門子。如磨如錯。終晨三省。匪惰其恪。白華絳趺。在陵之陬。蒨蒨士子。涅而不渝。竭誠盡敬。亹亹忘劬。白華玄足。在丘之曲。堂堂處子。無營無欲。鮮侔晨葩。莫之點辱。

華黍時和歲豐宜黍稷也。

黮黮重雲。習習和風。黍華陵巔。麥秀丘中。靡田不播。九穀斯豐。奕奕玄霄。濛濛甘霤。黍發稠華。禾挺其秀。靡田不殖。九穀斯茂。無高不播。無下不植。芒芒其稼。參參其穡。稸我王委。充我民食。玉燭陽明。顯猷翼翼。

由庚萬物得由其道也。

蕩蕩夷庚。物則由之。蠢蠢庶類。王亦柔之。道之既由。化之既柔。木以秋零。草以春抽。獸在于草。魚躍順流。四時遞謝。八風代扇。纖阿案晷。星變其躔。五緯不愆。六氣無易。愔愔我王。紹文之跡。

崇丘萬物得極其高大也。

瞻彼崇丘。其林藹藹。植物斯高。動類斯大。周風既洽。王猷允泰。漫漫方輿。廻廻洪覆。何類不繁。何生不茂。物極其性。人永其壽。恢恢大圓。茫茫九壤。資生仰化。于何不養。人無道夭。物極則長。

由儀萬物之生各得其儀也。

肅肅君子。由儀率性。明明后辟。仁以爲政。魚游清沼。鳥萃平林。濯鱗鼓翼。振振其音。賓寫爾誠。主竭其心。時之和矣。何思何脩。文化內輯。武功外悠。

述祖德詩二首　謝靈運

達人貴自我。高情屬天雲。兼抱濟物性。而不纓垢氛。段生藩魏國。展季救魯人。弦高犒晉師。仲連却秦軍。臨組乍不緤。對珪寧肯分。惠物辭所賞。勵志故絕人。苕苕歷千載。遙遙播清塵。清塵竟誰嗣。明哲時經綸。委講綴道論。改服康世屯。屯難既云康。尊主隆斯民。

中原昔喪亂。喪亂豈解已。崩騰永嘉末。逼迫太元始。河外無反正。江介有蹙圮。萬邦咸振懾。橫流賴君子。拯溺由道情。龕暴資神理。秦趙欣來蘇。燕魏遲文軌。賢相謝世運。遠圖因事止。高揖七州外。拂衣五湖裏。隨山疏濬潭。傍巖藝枌梓。遺情捨塵物。貞觀丘壑美。

諷諫詩并序　韋孟

孟爲元王傅。子夷王及孫王戊。戊荒淫不遵道。作詩諷諫。

肅肅我祖。國自豕韋。黼衣朱紱。四牡龍旂。彤弓斯征。撫寧遐荒。摠齊羣邦。以翼大商。迭彼大彭。勳績惟光。至于有周。歷世會同。王赧聽譖。寔絕我邦。我邦既絕。厥政斯逸。賞罰之行。非由王室。庶尹羣后。靡扶靡衞。五服崩離。宗周以墜。我祖斯微。遷于彭城。在予小子。勤唉厥生。阨此嫚秦。耒耜斯耕。悠悠嫚秦。上天不寧。乃眷南顧。授漢于京。於赫有漢。四方是征。靡適不懷。萬國攸平。乃命厥弟。建侯于楚。俾我小臣。惟傅是輔。矜矜元王。恭儉靜一。惠此黎民。納彼輔弼。享國漸世。垂烈於後。乃及夷王。尅奉厥次。咨命不永。惟王統祀。左右陪臣。斯惟皇士。如何我王。不思守保。不惟履冰。以繼祖考。邦事是廢。逸游是娛。犬馬悠悠。是放是驅。務此鳥獸。忽此稼苗。烝民以匱。我王以媮。所弘匪德。所親匪俊。唯囿是恢。唯諛是信。睮睮諂夫。諤諤黃髮。如何我王。曾不是察。既藐下臣。追欲縱逸。嫚彼顯祖。輕此削黜。嗟嗟我王。漢之睦親。曾不夙夜。以休令聞。穆穆天子。臨照下土。明明羣司。執憲靡顧。正遐由近。殆其茲怙。嗟嗟我王。曷不斯思。匪思匪監。嗣其罔則。彌彌其逸。岌岌其國。致冰匪霜。致墜匪嫚。瞻惟我王。時靡不練。興國救顛。孰違悔過。追思黃髮。秦繆以霸。歲月其徂。年其逮耇。於赫君子。庶顯于後。我王如何。曾不斯覽。黃髮不近。胡不時鑒。

勵志詩　張茂先

大儀斡運。天迴地游。四氣鱗次。寒暑環周。星火既夕。忽焉素秋。涼風振落。熠燿宵流。其一

吉士思秋。寔感物化。日歟月歟。荏苒代謝。逝者如斯。曾無日夜。嗟爾庶士。胡寧自舍。其二

仁道不遐。德輶如羽。求焉斯至。衆鮮克擧。大猷玄漠。將抽厥緒。先民有作。貽我高矩。其三

雖有淑姿。放心縱逸。出般于游。居多暇日。如彼梓材。弗勤丹漆。雖勞朴斲。終負素質。其四

養由矯矢。獸號于林。蒲盧縈繳。神感飛禽。末伎之妙。動物應心。研精耽道。安有幽深。其五

安心恬蕩。棲志浮雲。體之以質。彪之以文。如彼南畝。力耒既勤。藨蓘致功。必有豐殷。其六

水積成川。載瀾載淸。土積成山。歊蒸鬱冥。山不讓塵。

川不辭盈。勉志含弘。以隆德聲。其七高以下基。洪由纖起。川廣自源。成人在始。累微以著。乃物之理。纆牽之長。實累千里。其八復禮終朝。天下歸仁。若金受礪。若泥在鈞。進德脩業。暉光日新。隰朋仰慕。予亦何人。其九

上責躬應詔詩表

曹子建

臣植言。臣自抱釁歸藩。刻肌刻骨。追思罪戾。晝分而食。夜分而寢。誠以天網不可重罹。聖恩難可再恃。竊感相鼠之篇。無禮遄死之義。形影相弔。五情愧赧。以罪弃生。則違古賢夕改之勸。忍垢苟全。則犯詩人胡顏之譏。伏惟陛下。德象天地。恩隆父母。施暢春風。澤如時雨。是以不別荊棘者。慶雲之惠也。七子均養者。鳲鳩之仁也。舍罪責功者。明君之舉也。矜愚愛能者。慈父之恩也。是以愚臣徘徊於恩澤。而不敢自弃者也。前奉詔書。臣等絕朝。心離志絕。自分黃耇。永無執珪之望。不圖聖詔。猥垂齒召。至止之日。馳心輦轂。僻處西館。未奉闕庭。踊躍之懷。瞻望反側。不勝犬馬戀主之情。謹拜表并獻詩二篇。詞旨淺末。不足采覽。貴露下情。冒顏以聞。臣植誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪。

責躬詩

於穆顯考。時惟武皇。受命于天。寧濟四方。朱旗所拂。九土披攘。玄化滂流。荒服來王。超商越周。與唐比蹤。篤生我皇。奕世載聰。武則肅烈。文則時雍。受禪于漢。君臨萬邦。萬邦既化。率由舊則。廣命懿親。以藩王國。帝曰爾侯。君茲青土。奄有海濱。方周于魯。車服有輝。旗章有敘。濟濟俊乂。我弼我輔。伊余小子。恃寵驕盈。擧挂時網。動亂國經。作藩作屏。先軌是隳。傲我皇使。犯我朝儀。國有典刑。我削我黜。將寘于理。元凶是率。明明天子。時惟篤類。不忍我刑。暴之朝肆。違彼執憲。哀予小子。改

封兗邑。于河之濱。股肱弗置。有君無臣。荒淫之闕。誰弼余身。煢煢僕夫。于彼冀方。嗟予小子。乃罹斯殃。赫赫天子。恩不遺物。冠我玄冕。要我朱紱。光光大使。我榮我華。剖符授玉。王爵是加。仰齒金璽。俯執聖策。皇恩過隆。祗承怵惕。咨我小子。頑凶是嬰。逝慚陵墓。存愧闕庭。匪敢傲德。寔恩是恃。威靈改加。足以沒齒。昊天罔極。生命不圖。常懼顛沛。抱罪黃壚。願蒙矢石。建旗東嶽。庶立毫氂。微功自贖。危軀授命。知足免戾。甘赴江湘。奮戈吳越。天啓其衷。得會京畿。遲奉聖顏。如渴如飢。心之云慕。愴矣其悲。天高聽卑。皇肯照微。

應詔詩

肅承明詔。應會皇都。星陳夙駕。秣馬脂車。命彼掌徒。肅我征旅。朝發鸞臺。夕宿蘭渚。芒芒原隰。祁祁士女。經彼公田。樂我稷黍。爰有樛木。重陰匪息。雖有糇糧。飢不遑食。望城不過。面邑不游。僕夫警策。平路是由。玄駟藹藹。揚鑣漂沫。流風翼衡。輕雲承蓋。涉澗之濱。緣山之隈。遵彼河滸。黃坂是階。西濟關谷。或降或升。騑驂倦路。載寢載興。將朝聖皇。匪敢晏寧。弭節長騖。指日遄征。前驅舉燧。後乘抗旃。輪不輟運。鑾無廢聲。爰暨帝室。稅此西墉。嘉詔未賜。朝覲莫從。仰瞻城閾。俯惟闕庭。長懷永慕。憂心如酲。

關中詩

潘安仁

於皇時晉。受命既固。三祖在天。聖皇紹祚。德博化光。刑簡枉錯。微火不戒。延我寶庫。其一

蠢爾戎狄。狡焉思肆。虞我國眚。窺我利器。嶽牧慮殊。威懷理二。將無專策。兵不素肄。其二

翹翹趙王。請徒三萬。朝議惟疑。未逞斯願。桓桓梁征。高牙乃建。旗蓋相望。偏師作援。其三

虎視眈眈。威彼好畤。素甲日耀。玄幕雲起。誰其繼之。夏侯卿士。惟系惟處。別營棊跱。其四

夫豈無謀。戎士承平。守有完郛。

戰無全兵。鋒交卒奔。孰免孟明。飛轍秦郊。告敗上京。其五　周徇師令。身膏氏斧。人之云亡。貞節克擧。盧播違命。投畀朔土。爲法受惡。誰謂荼苦。其六　哀此黎元。無罪無辜。肝腦塗地。白骨交衢。夫行妻寡。父出子孤。俾我晉民。化爲狄俘。其七　亂離斯瘼。日月其稔。天子是矜。旰食晏寢。主憂臣勞。孰不祗懔。愧無獻納。尸素以甚。其八　皇赫斯怒。爰整精銳。命彼上谷。指日遄逝。親奉成規。稜威遐厲。首陷中亭。揚聲萬計。其九　兵固詭道。先聲後實。聞之有司。以萬爲一。紂之不善。我未之必。虛皛湳德。謬彰甲吉。其十　雍門不啓。陳汧危逼。觀遂虎奮。感恩輸力。重圍克解。危城載色。豈曰無過。功亦不測。其十一　情固萬端。于何不有。紛紜齊萬。亦孔之醜。曰納其降。曰梟其首。疇眞可掩。孰僞可久。其十二　旣徽爾辭。旣蔽爾訟。當乃明實。否則證空。好爵旣靡。顯戮亦從。不見竇林。伏尸漢邦。其十三　周人之詩。寔曰采薇。北難獫狁。西患昆夷。以古況今。何足曜威。徒愍斯民。我心傷悲。其十四　斯民如何。荼毒于秦。師旅旣加。饑饉是因。疫癘淫行。荊棘成榛。絳陽之粟。浮于渭濱。其十五　明明天子。視民如傷。申命羣司。保爾封疆。靡暴于衆。無陵于彊。惴惴寡弱。如熙春陽。其十六

公讌詩　曹子建

公子敬愛客。終宴不知疲。清夜游西園。飛蓋相追隨。明月澄清景。列宿正參差。秋蘭被長坂。朱華冒綠池。潛魚躍清波。好鳥鳴高枝。神飈接丹轂。輕輦隨風移。飄颻放志意。千秋長若斯。

公讌詩　王仲宣

昊天降豐澤。百卉挺葳蕤。涼風撤蒸暑。清雲却炎暉。高會君子堂。竝坐蔭華榱。嘉肴充圓方。旨酒盈金罍。管絃發徽音。曲度清且悲。合坐同所樂。但愬杯行遲。常聞詩人語。不醉且無歸。今日不極歡。含情欲待誰。見眷良不翅。守分豈能違。古人有遺言。君子福所綏。願我賢主人。與天享巍巍。克

符周公業。奕世不可追。

公讌詩　劉公幹

永日行游戲。歡樂猶未央。遺思在玄夜。相與復翱翔。輦車飛素蓋。從者盈路傍。月出照園中。珍木鬱蒼蒼。清川過石渠。流波爲魚防。芙蓉散其華。菡萏溢金塘。靈鳥宿水裔。仁獸游飛梁。華館寄流波。豁達來風涼。生平未始聞。歌之安能詳。投翰長歎息。綺麗不可忘。

侍五官中郎將建章臺集詩　應德璉

朝鴈鳴雲中。音響一何哀。問子游何鄉。戢翼正徘徊。言我寒門來。將就衡陽棲。往春翔北土。今冬客南淮。遠行蒙霜雪。毛羽日摧頹。常恐傷肌骨。身隕沈黃泥。簡珠墮沙石。何能中自諧。欲因雲雨會。濯翼陵高梯。良遇不可値。伸眉路何階。公子敬愛客。樂飲不知疲。和顏既以暢。乃肯顧細微。贈詩見存慰。小子非所宜。爲且極歡情。不醉其無歸。凡百敬爾位。以副飢渴懷。

皇太子宴玄圃宣猷堂有令賦詩　陸士衡

三正迭紹。洪聖啓運。自昔哲王。先天而順。羣辟崇替。降及近古。黃暉既渝。素靈承祜。乃眷斯顧。祚之宅土。三后始基。世武丕承。協風傍駭。天晷仰澄。淳曜六合。皇慶攸興。自彼河汾。奄齊七政。時文惟晉。世篤其聖。欽翼昊天。對揚成命。九區克咸。讌歌以詠。皇上纂隆。經教弘道。于化既豐。在工載考。俯釐庶績。仰荒大造。儀刑祖宗。妥綏天保。篤生我后。克明克秀。體輝重光。承規景數。茂德淵沖。天姿玉裕。蕞爾小臣。邈彼荒遐。弛厥負擔。振纓承華。匪願伊始。惟命之嘉。

大將軍宴會被命作詩　　陸士龍

皇皇帝祜。誕隆駿命。四祖正家。天祿安定。叡哲惟晉。世有明聖。如彼日月。萬景攸正。其一 巍巍明聖。道隆自天。則明分爽。觀象洞玄。陵風協紀。絕輝照淵。肅雍往播。福祿來臻。其二 在昔姦臣。稱亂紫微。神風潛駭。有赫茲威。靈旗樹旆。如電斯揮。致天之屆。于河之沂。有命再集。皇輿凱歸。其三 頹綱既振。品物咸秩。神道見素。遺華反質。辰晷重光。協風應律。函夏無塵。海外有謐。其四 芒芒宇宙。天地交泰。王在華堂。式宴嘉會。玄暉峻朗。翠雲崇靄。冕弁振纓。服藻垂帶。其五 祁祁臣僚。有來雍雍。薄言載考。承顏下風。俯覿嘉客。仰瞻玉容。施己唯約。于禮斯豐。天錫難老。如岳之崇。其六

晉武帝華林園集詩　　應吉甫

悠悠太上。民之厥初。皇極肇建。彝倫攸敷。五德更運。膺籙受符。陶唐既謝。天歷在虞。其一 於時上帝。乃顧惟眷。光我先祚。應期納禪。位以龍飛。文以虎變。玄澤滂流。仁風潛扇。區內宅心。方隅回面。其二 天垂其象。地曜其文。鳳鳴朝陽。龍翔景雲。嘉禾重穎。蓂莢載芬。率士咸序。人胥悅欣。其三 恢恢皇度。穆穆聖容。言思其順。貌思其恭。在視斯明。在聽斯聰。登庸以德。明試以功。其四 其恭惟何。昧旦丕顯。無理不經。無義不踐。行捨其華。言去其辯。游心至虛。同規易簡。六府孔修。九有斯靖。其五 澤靡不被。化罔不加。聲教南暨。西漸流沙。幽人肆險。遠國忘遐。越裳重譯。充我皇家。其六 峩峩列辟。赫赫虎臣。內和五品。外威四賓。脩時貢職。入覲天人。備言錫命。羽蓋朱輪。其七 貽宴好會。不常厥數。神心所受。不言而喻。於是肆射。弓矢斯御。發彼五的。有酒斯飫。其八 文武之道。厥猷未墜。在昔先王。射御茲器。示武懼荒。過亦為失。凡厥羣后。無懈于位。其九

九日從宋公戲馬臺集送孔令詩　謝宣遠

風至授寒服。霜降休百工。繁林收陽彩。密苑解華叢。巢幕無留鷰。遵渚有來鴻。輕霞冠秋日。迅商薄清穹。聖心眷嘉節。揚鑾戾行宮。四筵霑芳醴。中堂起絲桐。扶光迫西汜。歡餘宴有窮。逝矣將歸客。養素克有終。臨流怨莫從。歡心歎飛蓬。

樂游應詔詩　范蔚宗

崇盛歸朝闕。虛寂在川岑。山梁協孔性。黃屋非堯心。軒駕時未肅。文囿降照臨。流雲起行蓋。晨風引鑾音。原薄信平蔚。臺澗備曾深。蘭池清夏氣。脩帳含秋陰。遵渚攀蒙密。隨山上嶇嶔。睇目有極覽。游情無近尋。聞道雖已積。年力互頹侵。探己謝丹黻。感事懷長林。

九日從宋公戲馬臺集送孔令詩　謝靈運

季秋邊朔苦。旅鴈違霜雪。淒淒陽卉腓。皎皎寒潭潔。良辰感聖心。雲旗興暮節。鳴葭戾朱宮。蘭卮獻時哲。餞宴光有孚。和樂隆所缺。在宥天下理。吹萬羣方悅。歸客遂海隅。脫冠謝朝列。弭棹薄枉渚。指景待樂闋。河流有急瀾。浮驂無緩轍。豈伊川途念。宿心愧將別。彼美丘園道。喟焉傷薄劣。

應詔讌曲水作詩　顏延年

道隱未形。治彰既亂。帝迹懸衡。皇流共貫。惟王創物。永錫洪算。仁固開周。義高登漢。其一　祚融世哲。業光列聖。太上正位。天臨海鏡。制以化裁。樹之形性。惠浸萌生。信及翔泳。其二　崇虛非徵。積實莫尙。豈伊人和。寔靈所貺。日完其朔。月不掩望。航琛越水。輦賮踰嶂。其三　帝體麗明。儀辰作貳。君

彼東朝。金昭玉粹。德有潤身。禮不愆器。柔中淵映。芳猷蘭祕。其四 昔在文昭。今惟武穆。烏赫王宰。方旦居叔。有睟叡蕃。爰履奠牧。寧極和鈞。屏京維服。其五 朏魄雙交。月氣參變。開榮灑澤。舒虹爍電。化際無間。皇情爰眷。伊思鎬飲。每惟洛宴。其六 郊餞有壇。君擧有禮。幙帷蘭甸。畫流高陛。分庭薦樂。析波浮醴。豫同夏諺。事兼出濟。其七 仰閟豐施。降惟微物。三妨儲隸。五塵朝黻。途泰命屯。恩充報屈。有悔可悛。滯瑕難拂。其八

皇太子釋奠會作詩　顏延年

國尙師位。家崇儒門。稟道毓德。講藝立言。浚明爽曙。達義茲昏。永瞻先覺。顧惟後昆。其一 大人長物。繼天接聖。時屯必亨。運蒙則正。偃閉武術。闡揚文令。庶士傾風。萬流仰鏡。其二 虞庠飾館。睿圖炳睟。懷仁憬集。抱智麕至。踵門陳書。躡屩獻器。澡身玄淵。宅心道祕。其三 伊昔周儲。聿光往記。思皇世哲。體元作嗣。資此夙知。降從經志。逷彼前文。矩周規値。其四 正殿虛筵。司分簡日。尙席函杖。丞疑奉帙。侍言稱辭。惇史秉筆。妙識幾音。王載有述。其五 肆議芳訊。大教克明。敬躬祀典。告奠聖靈。禮屬觀盥。樂薦歌笙。昭事是肅。俎實非馨。其六 獻終襲吉。卽宮廣讌。堂設象筵。庭宿金懸。台保兼徽。皇戚比彥。肴乾酒澄。端服整弁。其七 六官視命。九賓相儀。纓笏匝序。巾卷充街。都莊雲動。野馗風馳。倫周伍漢。超哉邈猗。其八 清暉在天。容光必照。物性其情。理宣其奧。妄先國冑。側閭邦教。徒愧微冥。終謝智效。其九

侍宴樂游苑送張徐州應詔詩　丘希範

詰旦閶闔開。馳道聞鳳吹。輕荑承玉輦。細草藉龍騎。風遲山尙響。雨息雲猶積。巢空初鳥飛。荇亂新魚戲。寔惟北門重。匪親孰爲寄。參差別念擧。肅穆恩波被。小臣信多幸。投生豈酬義。

應詔樂游苑餞呂僧珍詩　沈休文

丹浦非樂戰。負重切君臨。我皇秉至德。忘己用堯心。愍茲區宇內。魚鳥失飛沈。推轂二崤道。揚旆九河陰。超乘盡三屬。選士皆百金。戎車出細柳。餞席樽上林。命師誅後服。授律綏前禽。函轘方解帶。嶢武稍披襟。伐罪芒山曲。弔民伊水潯。將陪告成禮。待此未抽簪。

送應氏詩二首　曹子建

步登北芒阪。遙望洛陽山。洛陽何寂寞。宮室盡燒焚。垣墻皆頓擗。荊棘上參天。不見舊耆老。但覩新少年。側足無行徑。荒疇不復田。遊子久不歸。不識陌與阡。中野何蕭條。千里無人煙。念我平常居。氣結不能言。其一 清時難屢得。嘉會不可常。天地無終極。人命若朝霜。願得展嬿婉。我友之朔方。親昵並集送。置酒此河陽。中饋豈獨薄。賓飲不盡觴。愛至望苦深。豈不愧中腸。山川阻且遠。別促會日長。願爲比翼鳥。施翮起高翔。其二

征西官屬送於陟陽候作詩　孫子荊

晨風飄歧路。零雨被秋草。傾城遠追送。餞我千里道。三命皆有極。咄嗟安可保。莫大於殤子。彭聃猶爲夭。吉凶如糾纆。憂喜相紛繞。天地爲我鑪。萬物一何小。達人垂大觀。誡此苦不早。乖離卽長衢。惆悵盈懷抱。孰能察其心。鑒之以蒼昊。齊契在今朝。守之與偕老。

金谷集作詩　潘安仁

王生和鼎實。石子鎭海沂。親友各言邁。中心悵有違。何以叙離思。攜手游郊畿。朝發晉京陽。夕次

金谷湄。廻谿縈曲阻。峻阪路威夷。綠池泛淡淡。青柳何依依。濫泉龍鱗瀾。激波連珠揮。前庭樹沙棠。後園植烏椑。靈囿繁石榴。茂林列芳梨。飲至臨華沼。遷坐登隆坻。玄醴染朱顏。但愬杯行遲。揚桴撫靈鼓。簫管清且悲。春榮誰不慕。歲寒良獨希。投分寄石友。白首同所歸。

王撫軍庾西陽集別作　謝宣遠

祗召旋北京。守官反南服。方舟析舊知。對筵曠明牧。舉觴矜飲餞。指途念出宿。來晨無定端。別晷有成速。頹陽照通津。夕陰曖平陸。榜人理行艫。輶軒命歸僕。分手東城闉。發櫂西江隩。離會雖相雜。逝川豈往復。誰謂情可書。盡言非尺牘。

鄰里相送方山詩　謝靈運

祗役出皇邑。相期憩甌越。解纜及流潮。懷舊不能發。析析就衰林。皎皎明秋月。含情易為盈。遇物難可歇。積痾謝生慮。寡欲罕所闕。資此永幽棲。豈伊年歲別。各勉日新志。音塵慰寂蔑。

新亭渚別范零陵詩　謝玄暉

洞庭張樂地。瀟湘帝子游。雲去蒼梧野。水還江漢流。停驂我悵望。輟棹子夷猶。廣平聽方籍。茂陵將見求。心事俱已矣。江上徒離憂。

別范安成詩　沈休文

生平少年日。分手易前期。及爾同衰暮。非復別離時。勿言一樽酒。明日難重持。夢中不識路。何以慰相思。

文選卷十 終

文選卷十一

詩乙　詠史　百一　遊仙　招隱　反招隱　遊覽

詠史詩　王仲宣

自古無殉死。達人所共知。秦穆殺三良。惜哉空爾爲。結髮事明君。受恩良不訾。臨沒要之死・焉得不相隨。妻子當門泣。兄弟哭路垂。臨穴呼蒼天。涕下如綆縻。人生各有志。終不爲此移。同知埋身劇。心亦有所施。生爲百夫雄。死爲壯士規。黃鳥作悲詩。至今聲不虧。

三良詩　曹子建

功名不可爲。忠義我所安。秦穆先下世。三臣皆自殘。生時等榮樂。既沒同憂患。誰言捐軀易。殺身誠獨難。攬涕登君墓。臨穴仰天歎。長夜何冥冥・一往不復還。黃鳥爲悲鳴。哀哉傷肺肝。

詠史詩八首　左太沖

弱冠弄柔翰。卓犖觀羣書。著論准過秦。作賦擬子虛。邊城苦鳴鏑。羽檄飛京都。雖非甲冑士・疇昔覽穰苴。長嘯激淸風。志若無東吳。鉛刀貴一割。夢想騁良圖。左眄澄江湘。右盼定羌胡。功成不受爵。長揖歸田廬。鬱鬱澗底松・離離山上苗。以彼徑寸莖。蔭此百尺條。世胄躡高位。英俊沈下僚。地勢使之然。由來非一朝。金張藉舊業。七葉珥漢貂。馮公豈不偉。白首不見招。吾希段干木・偃息藩

魏君。吾慕魯仲連。談笑却秦軍。當世貴不羈。遭難能解紛。功成恥受賞。高節卓不羣。臨組不肯緤。對珪寧肯分。連璽曜前庭。比之猶浮雲。濟濟京城內。赫赫王侯居。冠蓋蔭四術。朱輪竟長衢。朝集金張館。暮宿許史廬。南鄰擊鐘磬。北里吹笙竽。寂寂楊子宅。門無卿相輿。寥寥空宇內。所講在玄虛。言論準宣尼。辭賦擬相如。悠悠百世後。英名擅八區。皓天舒白日。靈景耀神州。列宅紫宮裏。飛宇若雲浮。峩峩高門內。藹藹皆王侯。自非攀龍客。何爲欻來游。被褐出閶闔。高步追許由。振衣千仞岡。濯足萬里流。荊軻飮燕市。酒酣氣益震。哀歌和漸離。謂若傍無人。雖無壯士節。與世亦殊倫。高眄邈四海。豪右何足陳。貴者雖自貴。視之若埃塵。賤者雖自賤。重之若千鈞。主父宦不達。骨肉還相薄。買臣困樵采。伉儷不安宅。陳平無產業。歸來翳負郭。長卿還成都。壁立何寥廓。四賢豈不偉。遺烈光篇籍。當其未遇時。憂在塡溝壑。英雄有迍邅。由來自古昔。何世無奇才。遺之在草澤。習習籠中鳥。擧翮觸四隅。落落窮巷士。抱影守空廬。出門無通路。枳棘塞中塗。計策棄不收。塊若枯池魚。外望無寸祿。內顧無斗儲。親戚還相蔑。朋友日夜疎。蘇秦北游說。李斯西上書。俛仰生榮華。咄嗟復彫枯。飮河期滿腹。貴足不願餘。巢林棲一枝。可爲達士模。

詠史詩　張景陽

昔在西京時。朝野多歡娛。藹藹東都門。羣公祖二疎。朱軒曜金城。供帳臨長衢。達人知止足。遺榮忽如無。抽簪解朝衣。散髮歸海隅。行人爲隕涕。賢哉此丈夫。揮金樂當年。歲暮不留儲。顧謂四座賓。多財爲累愚。清風激萬代。名與天壤俱。咄此蟬冕客。君紳宜見書。

覽古詩　盧子諒

趙氏有和璧。天下無不傳。秦人來求市。厥價徒空言。與之將見賣。不與恐致患。簡才備行李。圖令

國命全。藺生在下位。繆子稱其賢。奉辭馳出境。伏軾徑入關。秦王御殿坐。趙使擁節前。揮袂睨金柱。身玉要俱捐。連城既僞往。荊玉亦眞還。爰在澠池會。二主剋交歡。昭襄欲負力。相如折其端。眥血下霑襟。怒髮上衝冠。西缶終雙擊。東瑟不隻彈。捨生豈不易。處死誠獨難。稜威章臺顚。彊禦亦不干。屈節邯鄲中。俛首忍廻軒。廉公何爲者。負荊謝厥愆。智勇冠當世。弛張使我歎。

張子房詩

謝宣遠

王風哀以思。周道蕩無章。卜洛易隆替。興亂罔不亡。力政吞九鼎。苛慝暴三殤。息肩纓民思。靈鑒集朱光。伊人感代工。聿來扶興王。婉婉幙中畫。輝輝天業昌。鴻門銷薄蝕。垓下隕攙搶。爵仇建蕭宰。定都護儲皇。肇允契幽叟。翻飛指帝鄉。惠心奮千祀。清埃播無疆。神武睦三正。裁成被八荒。明兩燭河陰。慶霄薄汾陽。鑾旍歷頹寢。飾像薦嘉嘗。聖心豈徒甄。惟德在無忘。逝者如可作。揆子慕周行。濟濟屬車士。粲粲翰墨場。瞽夫違盛觀。竦踊企一方。四達雖平直。蹇步愧無良。餐和忘微遠。延首詠太康。

秋胡詩

顔延年

椅梧傾高鳳。寒谷待鳴律。影響豈不懷。自遠每相匹。婉彼幽閑女。作嬪君子室。峻節貫秋霜。明豔侔朝日。嘉運既我從。欣願自此畢。其一

燕居未及好。良人顧有違。脫巾千里外。結綬登王畿。戒徒在昧旦。左右來相依。驅車出郊郭。行路正威遲。存爲久離別。沒爲長不歸。其二

嗟余怨行役。三陟窮晨暮。嚴駕越風寒。解鞍犯霜露。原隰多悲涼。廻飆卷高樹。離獸起荒蹊。驚鳥縱橫去。悲哉游宦子。勞此山川路。其三

超遙行人遠。宛轉年運徂。良時爲此別。日月方向除。孰知寒暑積。僶俛見榮枯。歲暮臨空房。涼風起坐隅。寢興日已寒。白露生庭蕪。其四

勤役從歸願。反路遵山河。昔辭秋未

素。今也歲載華。蠶月觀時暇。桑野多經過。佳人從所務。窈窕援高柯。傾城誰不顧。弭節停中阿。其五
年往誠思勞。路遠濶音形。雖爲五載別。相與昧平生。捨車遵往路。鳬藻馳目成。南金豈不重。聊自意所輕。義心多苦調。密比金玉聲。其六
高節難久淹。朅來空復辭。遲遲前途盡。依依造門基。上堂拜嘉慶。入室問何之。日暮行采歸。物色桑榆時。美人望昏至。慙歎前相持。其七
有懷誰能已。聊用申苦難。離居殊年載。一別阻河關。春來無時豫。秋至恆早寒。明發動愁心。閨中起長歎。慘悽歲方晏。日落游子顏。其八
高張生絕絃。聲急由調起。自昔枉光塵。結言固終始。如何久爲別。百行愆諸己。君子失明義。誰與偕沒齒。愧彼行露詩。甘之長川汜。其九

五君詠五首　　顏延年

阮步兵

阮公雖淪跡。識密鑒亦洞。沈醉似埋照。寓辭類託諷。長嘯若懷人。越禮自驚衆。物故不可論。途窮能無慟。

嵇中散

中散不偶世。本自餐霞人。形解驗默仙。吐論知凝神。立俗迕流議。尋仙洽隱淪。鸞翮有時鎩。龍性誰能馴。

劉參軍

劉伶善閉關。懷情滅聞見。鼓鐘不足歡。榮色豈能眩。韜精日沈飲。誰知非荒宴。頌酒雖短章。深衷自此見。

阮始平

仲容青雲器。實稟生民秀。達音何用深。識微在金奏。郭奕已心醉。山公非虛覯。屢薦不入官。一麾

乃出守。

向常侍

向秀甘淡薄。深心託毫素。探道好淵玄。觀書鄙章句。交呂既鴻軒。攀嵇亦鳳擧。流連河裏游。惻愴山陽賦。

詠史詩　鮑明遠

五都矜財雄。三川養聲利。百金不市死。明經有高位。京城十二衢。飛甍各鱗次。仕子彯華纓。遊客竦輕轡。明星晨未稀。軒蓋已雲至。賓御紛颯沓。鞍馬光照地。寒暑在一時。繁華及春媚。君平獨寂寞。身世兩相棄。

詠霍將軍北伐詩　虞子陽

擁旄爲漢將。汗馬出長城。長城地勢險。萬里與雲平。涼秋八九月。虜騎入幽幷。飛狐白日晚。瀚海愁雲生。羽書時斷絕。刁斗晝夜驚。乘墉揮寶劍。蔽日引高旍。雲屯七萃士。魚麗六郡兵。胡笳關下思。羌笛隴頭鳴。骨都先自讐。日逐次亡精。玉門罷斥候。甲第始修營。位登萬庾積。功立百行成。天長地自久。人道有虧盈。未窮激楚樂。已見高臺傾。當令麟閣上。千載有雄名。

百一詩　應休璉

下流不可處。君子愼厥初。名高不宿著。易用受侵誣。前者隳官去。有人適我閭。田家無所有。酌醴焚枯魚。問我何功德。三入承明廬。所占於此土。是謂仁智居。文章不經國。筐篋無尺書。用等稱才學。往往見歎譽。避席跪自陳。賤子實空虛。宋人遇周客。慙愧靡所如。

遊仙詩　何敬祖

青青陵上松。亭亭高山栢。光色冬夏茂。根柢無凋落。吉士懷貞心。悟物思遠託。揚志玄雲際。流目矚巖石。羨昔王子喬。友道發伊洛。迢遞陵峻岳。連翩御飛鶴。抗跡遺萬里。豈戀生民樂。長懷慕仙類。眇然心緜邈。

遊仙詩七首　郭景純

京華遊俠窟。山林隱遯棲。朱門何足榮。未若託蓬萊。臨源挹清波。陵岡掇丹荑。靈谿可潛盤。安事登雲梯。漆園有傲吏。萊氏有逸妻。進則保龍見。退爲觸藩羝。高蹈風塵外。長揖謝夷齊。青谿千餘仞。中有一道士。雲生梁棟間。風出窗戶裏。借問此何誰。云是鬼谷子。翹迹企潁陽。臨河思洗耳。閶闔西南來。潛波渙鱗起。靈妃顧我笑。粲然啓玉齒。蹇脩時不存。要之將誰使。翡翠戲蘭苕。容色更相鮮。綠蘿結高林。蒙籠蓋一山。中有冥寂士。靜嘯撫清絃。放情淩霄外。嚼蘂挹飛泉。赤松臨上游。駕鴻乘紫煙。左挹浮丘袖。右拍洪崖肩。借問蜉蝣輩。寧知龜鶴年。六龍安可頓。運流有代謝。時變感人思。已秋復願夏。淮海變微禽。吾生獨不化。雖欲騰丹谿。雲螭非我駕。愧無魯陽德。迴日向三舍。臨川哀年邁。撫心獨悲吒。逸翮思拂霄。迅足羨遠游。清源無增瀾。安得運吞舟。珪璋雖特達。明月難闇投。潛穎怨青陽。陵苕哀素秋。悲來惻丹心。零淚緣纓流。雜縣寓魯門。風煖將爲災。吞舟湧海底。高浪駕蓬萊。神仙排雲出。但見金銀臺。陵陽挹丹溜。容成揮玉杯。姮娥揚妙音。洪崖頷其頤。升降隨長煙。飄飄戲九垓。奇齡邁五龍。千歲方嬰孩。燕昭無靈氣。漢武非仙才。晦朔如循環。月盈已復魄。蓐收清西陸。朱羲將由白。寒露拂陵苕。女蘿辭松栢。蕣榮不終朝。蜉蝣豈見夕。圓丘有奇草。鍾山出靈液。王孫列八珍。安期鍊五石。長揖當途人。去來山林客。

招隱詩二首

左太沖

杖策招隱士。荒塗橫古今。巖穴無結構。丘中有鳴琴。白雲停陰岡。丹葩曜陽林。石泉漱瓊瑤。纖鱗或浮沈。非必絲與竹。山水有淸音。何事待嘯歌。灌木自悲吟。秋菊兼糇糧。幽蘭間重襟。躊躇足力煩。聊欲投吾簪。經始東山廬。果下自成榛。前有寒泉井。聊可瑩心神。峭蒨青蔥間。竹柏得其眞。弱葉栖霜雪。飛榮流餘津。爵服無常玩。好惡有屈伸。結綬生纏牽。彈冠去埃塵。惠連非吾屈。首陽非吾仁。相與觀所尙。逍遙撰良辰。

招隱詩

陸士衡

明發心不夷。振衣聊躑躅。躑躅欲安之。幽人在浚谷。朝采南澗藻。夕息西山足。輕條象雲構。密葉成翠幄。激楚佇蘭林。囘芳薄秀木。山溜何泠泠。飛泉漱鳴玉。哀音附靈波。頹響赴曾曲。至樂非有假。安事澆淳樸。富貴苟難圖。稅駕從所欲。

反招隱詩

王康琚

小隱隱陵藪。大隱隱朝市。伯夷竄首陽。老聃伏柱史。昔在太平時。亦有巢居子。今雖盛明世。能無中林士。放神青雲外。絕迹窮山裏。鵾雞先晨鳴。哀風迎夜起。凝霜凋朱顏。寒泉傷玉趾。周才信衆人。偏智任諸己。推分得天和。矯性失至理。歸來安所期。與物齊終始。

芙蓉池作

魏文帝

乘輦夜行遊。逍遙步西園。雙渠相漑灌。嘉木繞通川。卑枝拂羽蓋。脩條摩蒼天。驚風扶輪轂。飛鳥

翔我前。丹霞夾明月。華星出雲間。上天垂光采。五色一何鮮。壽命非松喬。誰能得神仙。遨遊快心意。保已終百年。

南州桓公九井作　殷仲文

四運雖鱗次。理化各有準。獨有清秋日。能使高興盡。景氣多明遠。風物自凄緊。爽籟驚幽律。哀壑叩虛牝。歲寒無早秀。浮榮甘夙隕。何以標貞脆。薄言寄松菌。哲匠感蕭晨。肅此塵外軫。廣筵散泛愛。逸爵紆勝引。伊余樂好仁。惑袪吝亦泯。猥首阿衡朝。將貽匈奴哂。

游西池　謝叔源

悟彼蟋蟀唱。信此勞者歌。有來豈不疾。良遊常蹉跎。逍遙越城肆。願言屢經過。迴阡被陵闕。高臺眺飛霞。惠風蕩繁囿。白雲屯曾阿。景昃鳴禽集。水木湛清華。褰裳順蘭沚。徙倚引芳柯。美人愆歲月。遲暮獨如何。無爲牽所思。南榮戒其多。

泛湖歸出樓中翫月　謝惠連

日落泛澄瀛。星羅游輕橈。憩謝面曲汜。臨流對迴潮。輟策共駢筵。並坐相招要。哀鴻鳴沙渚。悲猨響山椒。亭亭映江月。瀏瀏出谷飇。斐斐氣幕岫。泫泫露盈條。近矚袪幽蘊。遠視盪諠囂。晤言不知罷。從夕至清朝。

從游京口北固應詔　謝靈運

玉璽戒誠信。黃屋示崇高。事爲名教用。道以神理超。昔聞汾水游。今見塵外鑣。鳴笳發春渚。稅鑾

登山椒張組眺倒景。列筵矚歸潮。遠巖映蘭薄。白日麗江皐。原隰荑綠柳。墟囿散紅桃。皇心美陽澤。萬象咸光昭。顧己枉維縶。撫志慚場苗。工拙各所宜。終以反林巢。曾是縈舊想。覽物奏長謠。

晩出西射堂　謝靈運

步出西城門。遙望城西岑。連障疊巘崿。青翠杳深沈。曉霜楓葉丹。夕曛嵐氣陰。節往感不淺。感來念已深。羈雌戀舊侶。迷鳥懷故林。含情尙勞愛。如何離賞心。撫鏡華緇鬢。攬帶緩促衿。安排徒空言。幽獨賴鳴琴。

登池上樓　謝靈運

潛虬媚幽姿。飛鴻響遠音。薄霄愧雲浮。棲川怍淵沈。進德智所拙。退耕力不任。徇祿反窮海。臥痾對空林。衾枕昧節候。褰開暫窺臨。傾耳聆波瀾。擧目眺嶇嶔。初景革緒風。新陽改故陰。池塘生春草。園柳變鳴禽。祁祁傷豳歌。萋萋感楚吟。索居易永久。離羣難處心。持操豈獨古。無悶徵在今。

遊南亭　謝靈運

時竟夕澄霽。雲歸日西馳。密林含餘淸。遠峯隱半規。久痗昏墊苦。旅館眺郊岐。澤蘭漸被徑。芙蓉始發池。未厭青春好。已觀朱明移。慼慼感物歎。星星白髮垂。藥餌情所止。衰疾忽在斯。逝將候秋水。息景偃舊崖。我志誰與亮。賞心惟良知。

游赤石進帆海　謝靈運

首夏猶淸和。芳草亦未歇。水宿淹晨暮。陰霞屢興沒。周覽倦瀛壖。況乃凌窮髮。川后時安流。天吳

靜不發。揚帆采石華。挂席拾海月。溟漲無端倪。虛舟有超越。仲連輕齊組。子牟眷魏闕。矜名道不足。適己物可忽。請附任公言。終然謝天伐。

石壁精舍還湖中　謝靈運

昏旦變氣候。山水含清暉。清暉能娛人。游子澹忘歸。出谷日尚早。入舟陽已微。林壑斂暝色。雲霞收夕霏。芰荷迭映蔚。蒲稗相因依。披拂趨南徑。愉悅偃東扉。慮澹物自輕。意愜理無違。寄言攝生客。試用此道推。

登石門最高頂　謝靈運

晨策尋絕壁。夕息在山棲。疏峯抗高館。對嶺臨迴谿。長林羅戶庭。積石擁基階。連巖覺路塞。密竹使徑迷。來人忘新術。去子惑故蹊。活活夕流駛。噭噭夜猿啼。沈冥豈別理。守道自不攜。心契九秋幹。目翫三春荑。居常以待終。處順故安排。惜無同懷客。共登青雲梯。

於南山往北山經湖中瞻眺　謝靈運

朝旦發陽崖。景落憩陰峯。舍舟眺迴渚。停策倚茂松。側徑既窈窕。環洲亦玲瓏。俛視喬木杪。仰聆大壑淙。石橫水分流。林密蹊絕蹤。解作竟何感。升長皆丰容。初篁苞綠籜。新蒲含紫茸。海鷗戲春岸。天雞弄和風。撫化心無厭。覽物眷彌重。不惜去人遠。但恨莫與同。孤遊非情歎。賞廢理誰通。

從斤竹澗越嶺溪行　謝靈運

猿鳴誠知曙。谷幽光未顯。巖下雲方合。花上露猶泫。逶迤傍隈隩。迢遞陟陘峴。過澗既厲急。登棧

亦陵緬。川渚屢逕復。乘流翫迴轉。蘋萍泛沈深・菰蒲冒清淺。企石挹飛泉。攀林摘葉卷。想見山阿人。薜蘿若在眼。握蘭勤徒結。折麻心莫展。情用賞爲美。事味竟誰辨。觀此遺物慮。一悟得所遣。

應詔觀北湖田收

顏　延　年

周御窮轍跡。夏載歷山川。蓄軫豈明懋。善游皆聖仙。帝暉膺順動。清蹕巡廣廛。樓觀眺豐穎。金駕映松山。飛奔互流綴。緹轂代迴環。神行埒浮景。爭光溢中天。開冬眷徂物。殘悴盈化先。陽陸團精氣。陰谷曳寒煙。攢素既森藹。積翠亦蔥芊。息饗報嘉歲。通急戒無年。溫渥浹輿隸。和惠屬後筵。觀風久有作。陳詩愧未妍。疲弱謝淩遽。取累非纆牽。

車駕幸京口侍遊蒜山作

顏　延　年

元天高北列・日觀臨東溟。入河起陽峽。踐華因削成。巖險去漢宇・襟衞徙吳京。流池自化造。山關固神營。園縣極方望。邑社摠地靈。宅道炳星緯。誕曜應辰明。睿思纏故里。巡駕匝舊坰。陟峯騰輦路。尋雲抗瑤甍。春江壯風濤。蘭野茂荑英。宣遊弘下濟。窮遠凝聖情。岳濱有和會。祥習在卜征。周南悲昔老。留滯感遺萌。空食疲廊肆。反稅事巖耕・

車駕幸京口三月三日侍遊曲阿後湖作

顏　延　年

虞風載帝狩・夏諺頌王遊。春方動宸駕・望幸傾五州。山祇蹕嶠路。水若警滄流。神御出瑤軫・天儀降藻舟。萬軸胤行衞。千翼泛飛浮。彫雲麗琁蓋。祥飈被綵斿。江南進荆豔。河激獻趙謳。金練照海

沭。笳鼓震溟洲。藐眄覯靑崖。衍漾觀綠疇。民靈騫都野。鱗翰聳淵丘。德禮既普洽。川岳徧懷柔。

行藥至城東橋　鮑明遠

雞鳴關吏起。伐鼓早通晨。嚴車臨迥陌。延瞰歷城闉。蔓草緣高隅。脩楊夾廣津。迅風首旦發。平路塞飛塵。擾擾遊宦子。營營市井人。懷金近從利。撫劍遠辭親。爭先萬里途。各事百年身。開芳及稚節。含彩吝驚春。尊賢永照灼。孤賤長隱淪。容華坐消歇。端爲誰苦辛。

遊東田　謝玄暉

戚戚苦無悰。攜手共行樂。尋雲陟累榭。隨山望菌閣。遠樹曖仟仟。生煙紛漠漠。魚戲新荷動。鳥散餘花落。不對芳春酒。還望靑山郭。

從冠軍建平王登廬山香鑪峯　江文通

廣成愛神鼎。淮南好丹經。此山具鸞鶴。往來盡仙靈。瑤草正翕艶。玉樹信葱靑。絳氣下縈薄。白雲上杳冥。中坐瞰蜿虹。俛伏視流星。不尋遐怪極。則知耳目驚。日落長沙渚。曾陰萬里生。藉蘭素多意。臨風默含情。方學松柏隱。羞逐市井名。幸承光誦末。伏思託後旌。

鍾山詩應西陽王教　沈休文

靈山紀地德。險嶠資岳靈。終南表秦觀。少室邇王城。翠鳳翔淮海。衿帶繞神坰。北阜何其峻。林薄杳葱靑。其一 發地多奇嶺。干雲非一狀。合沓共隱天。參差互相望。鬱律構丹巘。崚嶒起靑嶂。勢隨九疑高。氣與三山壯。其二 即事既多美。臨眺殊復奇。南瞻儲胥觀。西望昆明池。山中咸可悅。賞逐

四時移・春光發隴首。秋風生桂枝。其三

多値息心侶。結架山之足。八解鳴澗流。四禪隱巖曲。窈冥終不見。蕭條無可欲。所願從之遊。寸心於此足。其四

君王挺逸趣。羽旆臨崇基。白雲隨玉趾。青霞雜桂旗。淹留訪五藥。顧步佇三芝。於焉仰鑣駕。歲暮以爲期。其五

宿東園　沈休文

陳王鬪雞道。安仁采樵路。東郊豈異昔。聊可閑余步。野徑既盤紆。荒阡亦交互。槿籬疏復密・荊扉新且故。樹頂鳴風飈。草根積霜露。驚麏去不息。征鳥時相顧。茅棟嘯愁鴟。平岡走寒兎。夕陰帶曾阜。長煙引輕素。飛光忽我遒。豈止歲云暮。若蒙西山藥。頹齡儻能度。

遊沈道士館　沈休文

秦皇御宇宙。漢帝恢武功。歡娛人事盡。情性猶未充。銳意三山上。託慕九霄中。既表祈年觀。復立望仙宮。寧爲心好道。直由意無窮。曰余知止足。是願不須豐。遇可淹留處。便欲息微躬。山嶂遠重疊。竹樹近蒙籠。開衿濯寒水。解帶臨清風。所累非外物。爲念在玄空。朋來握石髓。賓至駕輕鴻。都令人徑絕。唯使雲路通。一舉凌倒景。無事適華嵩。寄言賞心客。歲暮爾來同。

古意酬到長史溉登琅邪城　徐敬業

甘泉警烽候。上谷抵樓蘭。此江稱豁險。茲山復鬱盤。表裏窮形勝。襟帶盡巖巒。脩篁壯下屬。危樓峻上干。登陴起遐望。迴首見長安。金溝朝灞滻。甬道入鴛鸞。鮮車騖華轂。汗馬躍銀鞍。少年負壯氣。耿介立衝冠。懷紀燕山石。思開函谷丸。豈如霸上戲。羞取路傍觀。寄言封侯者。數奇良可歎。

文選卷十一終

文選卷十二

詩丙　詠懷　哀傷　贈答

詠懷詩十七首

阮嗣宗

夜中不能寐。起坐彈鳴琴。薄帷鑒明月。清風吹我衿。孤鴻號外野。翔鳥鳴北林。徘徊將何見。憂思獨傷心。

二妃遊江濱。逍遙順風翔。交甫懷環珮。婉孌有芬芳。猗靡情歡愛。千載不相忘。傾城迷下蔡。容好結中腸。感激生憂思。萱草樹蘭房。膏沐爲誰施。其雨怨朝陽。如何金石交。一旦更離傷。

嘉樹下成蹊。東園桃與李。秋風吹飛藿。零落從此始。繁華有憔悴。堂上生荊杞。驅馬舍之去。去上西山趾。一身不自保。何況戀妻子。凝霜被野草。歲暮亦云已。

昔日繁華子。安陵與龍陽。夭夭桃李花。灼灼有輝光。悅懌若九春。磬折似秋霜。流眄發姿媚。言笑吐芬芳。攜手等歡愛。宿昔同衣裳。願爲雙飛鳥。比翼共翶翔。丹青著明誓。永世不相忘。

天馬出西北。由來從東道。春秋非有託。富貴焉常保。清露被皐蘭。凝霜霑野草。朝爲媚少年。夕暮成醜老。自非王子晉。誰能常美好。

登高臨四野。北望青山阿。松栢翳岡岑。飛鳥鳴相過。感慨懷辛酸。怨毒常苦多。李公悲東門。蘇子狹三河。求仁自得仁。豈復歎咨嗟。

開秋兆涼氣。蟋蟀鳴牀帷。感物懷殷憂。悄悄令心悲。多言焉所告。繁辭將訴誰。微風吹羅袂。明月

耀清暉。晨雞鳴高樹。命駕起旋歸。

平生少年時。輕薄好絃歌。西游咸陽中。趙李相經過。娛樂未終極。白日忽蹉跎。驅馬復來歸。反顧望三河。黃金百鎰盡。資用常苦多。北臨太行道。失路將如何。

昔聞東陵瓜。近在青門外。連畛距阡陌。子母相鉤帶。五色曜朝日。嘉賓四面會。膏火自煎熬。多財爲患害。布衣可終身。寵祿豈足賴。

步出上東門。北望首陽岑。下有采薇士。上有嘉樹林。良辰在何許。凝霜霑衣襟。寒風振山岡。玄雲起重陰。鳴鴈飛南征。鶗鴂發哀音。素質由商聲。悽愴傷我心。

昔年十四五。志尚好書詩。被褐懷珠玉。顏閔相與期。開軒臨四野。登高有所思。丘墓蔽山岡。萬代同一時。千秋萬歲後。榮名安所之。乃悟羨門子。噭噭今自嗤。

徘徊蓬池上。還顧望太梁。綠水揚洪波。曠野莽茫茫。走獸交橫馳。飛鳥相隨翔。是時鶉火中。日月正相望。朔風厲嚴寒。陰氣下微霜。羈旅無疇匹。俛仰懷哀傷。小人計其功。君子道其常。豈惜終憔悴。詠言著斯章。

炎暑惟茲夏。三旬將欲移。芳樹垂綠葉。清雲自逶迤。四時更代謝。日月遞差馳。徘徊空堂上。忉怛莫我知。願覩卒歡好。不見悲別離。

灼灼西頹日。餘光照我衣。迴風吹四壁。寒鳥相因依。周周尚銜羽。蛩蛩亦念飢。如何當路子。磬折忘所歸。豈爲夸譽名。憔悴使心悲。寧與燕雀翔。不隨黃鵠飛。黃鵠游四海。中路將安歸。

獨坐空堂上。誰可與歡者。出門臨永路。不見行車馬。登高望九州。悠悠分曠野。孤鳥西北飛。離獸東南下。日暮思親友。晤言用自寫。

北里多奇舞。濮上有微音。輕薄閑游子。俯仰乍浮沈。捷徑從狹路。僶俛趣荒淫。焉見王子喬。乘雲翔鄧林。獨有延年術。可以慰我心。

湛湛長江水・上有楓樹林・皐蘭被徑路・靑驪逝駸駸。遠望令人悲・春氣感我心・三楚多秀士・朝雲進荒淫。朱華振芬芳。高蔡相追尋。一爲黄雀哀。涕下誰能禁。

秋懷詩　謝惠連

平生無志意。少小嬰憂患。如何乘苦心。矧復値秋晏。皎皎天月明。奕奕河宿爛。蕭瑟含風蟬。寥唳度雲鴈。寒商動淸閨。孤燈曖幽幔。耿介繁慮積。展轉長宵半。夷險難預謀。倚伏昧前算。雖好相如達。不同長卿慢。頗悅鄭生偃。無取白衣宦。未知古人心。且從性所翫。賓至可命觴。朋來當染翰。高臺驟登踐。淸淺時陵亂。頽魄不再圓。傾羲無兩旦。金石終消毀。丹靑暫彫煥。各勉玄髮歡。無貽白首歎。因歌遂成賦。聊用布親串。

臨終詩　歐陽堅石

伯陽適西戎。孔子欲居蠻。苟懷四方志。所在可游盤。況乃遭屯蹇。顚沛遇災患。古人達機兆・策馬游近關。咨余冲且暗。抱責守微官。潛圖密已構。成此禍福端。恢恢六合間。四海一何寬。天網布紘綱。投足不獲安。松栢隆冬悴。然後知歲寒。不涉太行險。誰知斯路難。直僞因事顯。人情難豫觀。窮達有定分。慷慨復何歎。上負慈母恩。痛酷摧心肝。下顧所憐女。惻惻心中酸。二子弃若遺。念皆遘・凶殘。不惜一身死。惟此如循環。執紙五情塞。揮筆涕汍瀾。

幽憤詩　嵆叔夜

嗟余薄祜。少遭不造。哀煢靡識。越在襁褓。母兄鞠育。有慈無威。恃愛肆姐。不訓不師。爰及冠帶。憑寵自放。抗心希古。任其所尙。託好老莊。賤物貴身。志在守樸。養素全眞。曰余不敏。好善闇人。子玉之敗。屢增惟塵。大人含弘。藏垢懷恥。民之多僻。政不由己。惟此褊心。顯明臧否。感悟思愆。怛若創

痡。欲寡其過。謗議沸騰。性不傷物。頻致怨憎。昔慙柳惠。今愧孫登。內負宿心。外恧良朋。仰慕嚴鄭。樂道閑居。與世無營。神氣晏如。咨予不淑。嬰累多虞。匪降自天。寔由頑疎。理蔽患結。卒致囹圄。對答鄙訊。縶此幽阻。實恥訟冤。時不我與。雖曰義直。神辱志沮。澡身滄浪。豈云能補。嗈嗈鳴鴈。奮翼北游。順時而動。得意忘憂。嗟我憤歎。曾莫能儔。事與願違。遘茲淹留。窮達有命。亦又何求。古人有言。善莫近名。奉時恭默。咎悔不生。萬石周慎。安親保榮。世務紛紜。祇攪予情。安樂必誠。乃終利貞。煌煌靈芝。一年三秀。予獨何爲。有志不就。懲難思復。心焉內疚。庶勗將來。無馨無臭。采薇山阿。散髮巖岫。永嘯長吟。頤性養壽。

七哀詩　曹子建

明月照高樓。流光正徘徊。上有愁思婦。悲歎有餘哀。借問歎者誰。言是宕子妻。君行踰十年。孤妾常獨棲。君若清路塵。妾若濁水泥。浮沈各異勢。會合何時諧。願爲西南風。長逝入君懷。君懷良不開。賤妾當何依。

七哀詩二首　王仲宣

西京亂無象。豺虎方遘患。復棄中國去。遠身適荊蠻。親戚對我悲。朋友相追攀。出門無所見。白骨蔽平原。路有飢婦人。抱子棄草間。顧聞號泣聲。揮涕獨不還。未知身死處。何能兩相完。驅馬棄之去。不忍聽此言。南登霸陵岸。迴首望長安。悟彼下泉人。喟然傷心肝。

荊蠻非我鄉。何爲久滯淫。方舟溯大江。日暮愁我心。山岡有餘暎。巖阿增重陰。狐狸馳赴穴。飛鳥翔故林。流波激清響。猨猱臨岸吟。迅風拂裳袂。白露霑衣襟。獨夜不能寐。攝衣起撫琴。絲桐感人情。爲我發悲音。羇旅無終極。憂思壯難任。

七哀詩二首　張孟陽

北芒何壘壘。高陵有四五。借問誰家墳。皆云漢世主。恭文遙相望。原陵鬱膴膴。季世喪亂起。賊盜如豺虎。毀壤過一抔。便房啓幽戶。珠柙離玉體。珍寶見剽虜。園寢化爲墟。周墉無遺堵。蒙蘢荊棘生。蹊逕登童豎。狐兎窟其中。蕪穢不復掃。頹隴並墾發。萌隸營農圃。昔爲萬乘君。今爲丘山土。感彼雍門言。悽愴哀往古。

秋風吐商氣。蕭瑟掃前林。陽鳥收和響。寒蟬無餘音。白露中夜結。木落柯條森。朱光馳北陸。浮景忽西沈。顧望無所見。唯覩松栢陰。肅肅高桐枝。翩翩棲孤禽。仰聽離鴻鳴。俯聞蜻蛚吟。哀人易感傷。觸物增悲心。丘隴日已遠。纏綿彌思深。憂來令髮白。誰云愁可任。徘徊向長風。淚下霑衣襟。

悼亡詩三首　潘安仁

荏苒冬春謝。寒暑忽流易。之子歸窮泉。重壤永幽隔。私懷誰克從。淹留亦何益。僶俛恭朝命。廻心反初役。望廬思其人。入室想所歷。幃屏無髣髴。翰墨有餘跡。流芳未及歇。遺挂猶在壁。悵怳如或存。周遑忡驚惕。如彼翰林鳥。雙棲一朝隻。如彼游川魚。比目中路析。春風緣隙來。晨霤承檐滴。寢息何時忘。沈憂日盈積。庶幾有時衰。莊缶猶可擊。

皎皎窻中月。照我室南端。清商應秋至。溽暑隨節闌。凜凜涼風升。始覺夏衾單。豈曰無重纊。誰與同歲寒。歲寒無與同。朗月何朧朧。展轉眄枕席。長簟竟牀空。牀空委淸塵。室虛來悲風。獨無李氏靈。髣髴覩爾容。撫衿長歎息。不覺涕霑胷。霑胷安能已。悲懷從中起。寢興目存形。遺音猶在耳。上慙東門吳。下愧蒙莊子。賦詩欲言志。此志難具紀。命也可奈何。長戚自令鄙。

曜靈運天機。四節代遷逝。凄凄朝露凝。烈烈夕風厲。奈何悼淑儷。儀容永潛翳。念此如昨日。誰知

已卒歲。改服從朝政。哀心寄私制。茵幬張故房。朔望臨爾祭。爾祭詎幾時。朔望忽復盡。衾裳一毀撤。千載不復引。亹亹朞月周。戚戚彌相愍。悲懷感物來。泣涕應情隕。駕言陟東皐。望墳思紆軫。徘徊墟墓間。欲去復不忍。徘徊不忍去。徙倚歩踟躕。落葉委埏側。枯荄帶墳隅。孤魂獨煢煢。安知靈與無。投心遵朝命。揮涕強就車。誰謂帝宮遠。路極悲有餘。

廬陵王墓下作　謝靈運

曉月發雲陽。落日次朱方。含悽泛廣川。灑淚眺連岡。眷言懷君子。沈痛結中腸。道消結憤懣。運開申悲涼。神期恆若存。德音初不忘。徂謝易永久。松栢森已行。延州協心許。楚老惜蘭芳。解劍竟何及。撫墳徒自傷。平生疑若人。通蔽互相妨。理感深情慟。定非識所將。脆促良可哀。夭枉特兼常。一隨往化滅。安用空名揚。舉聲泣已灑。長歎不成章。

拜陵廟作　顏延年

周德恭明祀。漢道尊光靈。哀敬隆祖廟。崇樹加園塋。逮事休命始。投迹陪王庭。陪廁迴天顧。朝讌流聖情。早服身義重。晚達生戒輕。否來王澤竭。泰往人悔形。勑躬慙積素。復與昌運幷。恩合非漸漬。榮會在逢迎。夙御嚴清制。朝駕守禁城。束紳入西寢。伏軫出東坰。衣冠終冥漠。陵邑轉葱青。松風遵路急。山煙冒壠生。皇心憑容物。民思被歌聲。萬紀載絃吹。千載託旒旌。未殊帝世遠。已同淪化萌。幼壯困孤介。末暮謝幽貞。發軌喪夷易。歸軫慎崎傾。

同謝諮議銅爵臺詩　謝玄暉

繐帷飄井幹。罇酒若平生。鬱鬱西陵樹。詎聞歌吹聲。芳襟染淚迹。嬋媛空傷情。玉座猶寂寞。況迺

妾身輕。

出郡傳舍哭范僕射三首　任彥昇

平生禮數絕。式瞻在國楨。一朝萬化盡。猶我故人情。待時屬興運。王佐俟民英。結歡三十載。生死一交情。攜手遁衰孽。接景事休明。運阻衡言革。時泰玉階平。濬沖得茂彥。夫子值狂生。伊人有涇渭。非余揚濁淸。將乖不忍別。欲以遣離情。不忍一辰意。千齡萬恨生。其一　已矣平生事。詠歌盈篋笥。兼復相嘲謔。常與虛舟値。何時見范侯。還敍平生意。其二　與子別幾辰。經塗不盈旬。弗覩朱顏改。徒想平生人。寧知安歌日。非君撤瑟晨。已矣余何歎。輟舂哀國均。其三

贈蔡子篤詩　王仲宣

翼翼飛鸞。載飛載東。我友云徂。言戾舊邦。舫舟翩翩。以泝大江。蔚矣荒塗。時行靡通。慨我懷慕。君子所同。悠悠世路。亂離多阻。濟岱江行。邈焉異處。風流雲散。一別如雨。人生實難。願其弗與。瞻望遐路。允企伊佇。烈烈冬日。肅肅淒風。潛鱗在淵。歸鴈載軒。苟非鴻鵰。孰能飛翻。雖則追慕。予思罔宣。瞻望東路。慘愴增歎。率彼江流。爰逝靡期。君子信誓。不遷於時。及子同寮。生死固之。何以贈行。言授斯詩。中心孔悼。涕淚漣洏。嗟爾君子。如何勿思。

贈士孫文始　王仲宣

天降喪亂。靡國不夷。我曁我友。自彼京師。宗守盪失。越用遁違。遷于荊楚。在漳之湄。在漳之湄。亦克宴處。和通篪塤。比德車輔。既度禮義。卒獲笑語。庶茲永日。無愆厥緒。雖曰無愆。時不我已。同心離事。乃有逝止。橫此大江。淹彼南汜。我思弗及。載坐載起。惟彼南汜。君子居之。悠悠我心。薄言慕

之。人亦有言、靡喆不思。矧伊嬿婉。胡不悽而。晨風夕逝。託與之期。瞻仰王室。慨其永歎、良人在外。誰佐天官。四國方阻。俾爾歸蕃。爾之歸蕃。作式下國。無曰蠻裔。不虞汝德。愼爾所主。率由嘉則。龍雖勿用。志亦靡忒。悠悠澹澧。鬱彼唐林。雖則同域。邈其迴深。白駒遠志。古人所箴。允矣君子。不遐厥心。旣往旣來。無密爾音。

贈文叔良　王仲宣

翩翩者鴻。率彼江濱。君子于征。爰聘西鄰。臨此洪渚。伊思梁岷。爾行孔邈。如何勿勤。君子敬始。愼爾所主。謀言必賢。錯說申輔。延陵有作。喬肸是與。先民遺跡。來世之矩。旣愼爾主。亦迪知幾。探情以華。覩著知微。視明聽聰。靡事不惟。董褐荷名。胡寧不師。衆不可蓋。無尚我言。梧宮致辯。齊楚構患。成功有要。在衆思歡。人之多忌。掩之實難。瞻彼黑水。滔滔其流。江漢有卷。允來厥休。二邦若否。職汝之由。緬彼行人。鮮克弗留。尚哉君子。異于他仇。人誰不勤。無厚我憂。惟詩作贈。敢詠在舟。

贈五官中郎將四首　劉公幹

昔我從元后。整駕至南鄉。過彼豐沛都。與君共翺翔。四節相推斥。季冬風且涼。衆賓會廣座。明鐙熺炎光。清歌製妙聲。萬舞在中堂。金罍含甘醴。羽觴行無方。長夜忘歸來。聊且爲大康。四牡向路馳。歡悅誠未央。

余嬰沈痼疾。竄身清漳濱。自夏涉玄冬。彌曠十餘旬。常恐遊岱宗。不復見故人。所親一何篤。步趾慰我身。清談同日夕。情眄敍憂勤。便復爲別辭。游車歸西鄰。素葉隨風起。廣路揚埃塵。逝者如流水。哀此遂離分。追問何時會。要我以陽春。望慕結不解。貽爾新詩文。勉哉脩令德。北面自寵珍。

秋日多悲懷。感慨以長歎。終夜不遑寐。敍意於濡翰。明鐙曜閨中。清風淒已寒。白露塗前庭。應門

亘其關。四節相推斥。歲月忽欲殫。壯士遠出征。戎事將獨難。涕泣灑衣裳。能不懷所歡。
凉風吹沙礫。霜氣何皚皚。明月照緹幕。華燈散炎輝。賦詩連篇章。極夜不知歸。君侯多壯思。文雅縱橫飛。小臣信頑魯。僶俛安能追。

贈徐幹　劉公幹

誰謂相去遠。隔此西掖垣。拘限淸切禁。中情無由宣。思子沈心曲。長歎不能言。起坐失次第。一日三四遷。步出北寺門。遙望西苑園。細柳夾道生。方塘含淸源。輕葉隨風轉。飛鳥何翻翻。乖人易感動。涕下與衿連。仰視白日光。皦皦高且懸。秉燭八紘內。物類無頗偏。我獨抱深感。不得與比焉。

贈從弟三首　劉公幹

汎汎東流水。磷磷水中石。蘋藻生其涯。華葉紛擾溺。采之薦宗廟。可以羞嘉客。豈無園中葵。懿此出深澤。

亭亭山上松。瑟瑟谷中風。風聲一何盛。松枝一何勁。冰霜正慘悽。終歲常端正。豈不罹凝寒。松栢有本性。

鳳凰集南嶽。徘徊孤竹根。於心有不厭。奮翅凌紫氛。豈不常勤苦。羞與黃雀羣。何時當來儀。將須聖明君。

贈徐幹　曹子建

驚風飄白日。忽然歸西山。圓景光未滿。衆星粲以繁。志士營世業。小人亦不閑。聊且夜行游。游彼雙闕間。文昌鬱雲興。迎風高中天。春鳩鳴飛棟。流猋激櫺軒。顧念蓬室士。貧賤誠足憐。薇藿弗充

虛皮褐猶不全。忼慨有悲心。興文自成篇。寶棄怨何人。和氏有其愆。彈冠俟知己。知己誰不然。良田無晩歲。膏澤多豐年。亮懷璵璠美。積久德逾宣。親交義在敦。申章復何言。

贈丁儀　曹子建

初秋涼氣發。庭樹微銷落。凝霜依玉除。淸風飄飛閣。朝雲不歸山。霖雨成川澤。黍稷委疇隴。農夫安所獲。在貴多忘賤。爲恩誰能博。狐白足禦冬。焉念無衣客。思慕延陵子。寶劍非所惜。子其寧爾心。親交義不薄。

贈王粲　曹子建

端坐苦愁思。攬衣起西游。樹木發春華。淸池激長流。中有孤鴛鴦。哀鳴求匹儔。我願執此鳥。惜哉無輕舟。欲歸忘故道。顧望但懷愁。悲風鳴我側。羲和逝不留。重陰潤萬物。何懼澤不周。誰令君多念。自使懷百憂。

又贈丁儀王粲　曹子建

從軍度函谷。驅馬過西京。山岑高無極。涇渭揚濁淸。壯哉帝王居。佳麗殊百城。員闕出浮雲。承露槩泰淸。皇佐揚天惠。四海無交兵。權家雖愛勝。全國爲令名。君子在末位。不能歌德聲。丁生怨在朝。王子歡自營。歡怨非貞則。中和誠可經。

贈白馬王彪　曹子建

謁帝承明廬。逝將歸舊疆。淸晨發皇邑。日夕過首陽。伊洛廣且深。欲濟川無梁。汎舟越洪濤。怨彼

東路長。顧瞻戀城闕。引領情內傷。其一 太谷何寥廓。山樹鬱蒼蒼。霖雨泥我塗。流潦浩縱橫。中逵絕無軌。改轍登高岡。脩坂造雲日。我馬玄以黃。其二 玄黃猶能進。我思鬱以紆。鬱紆將難進。親愛在離居。本圖相與偕。中更不克俱。鴟梟鳴衡枙。豺狼當路衢。蒼蠅間白黑。讒巧令親疎。欲還絕無蹊。攬轡止踟蹰。其三 踟蹰亦何留。相思無終極。秋風發微涼。寒蟬鳴我側。原野何蕭條。白日忽西匿。歸鳥赴喬林。翩翩厲羽翼。孤獸走索羣。銜草不遑食。感物傷我懷。撫心長太息。其四 太息將何爲。天命與我違。奈何念同生。一往形不歸。孤魂翔故域。靈柩寄京師。存者忽復過。亡沒身自衰。人生處一世。去若朝露晞。年在桑榆間。影響不能追。自顧非金石。咄唶令心悲。其五 心悲動我神。棄置莫復陳。丈夫志四海。萬里猶比隣。恩愛苟不虧。在遠分日親。何必同衾幬。然後展殷勤。憂思成疾疢。無乃兒女仁。倉卒骨肉情。能不懷苦辛。其六 苦辛何慮思。天命信可疑。虛無求列仙。松子久吾欺。變故在須臾。百年誰能持。離別永無會。執手將何時。王其愛玉體。俱享黃髮期。收淚即長路。援筆從此辭。其七

贈丁翼　　曹子建

嘉賓塡城闕。豐膳出中廚。吾與二三子。曲宴此城隅。秦箏發西氣。齊瑟揚東謳。肴來不虛歸。觴至反無餘。我豈狎異人。朋友與我俱。大國多良材。譬海出明珠。君子義休偫。小人德無儲。積善有餘慶。榮枯立可須。滔蕩固大節。時俗多所拘。君子通大道。無願爲世儒。

贈秀才入軍五首　　嵆叔夜

良馬既閑。麗服有暉。左攬繁弱。右接忘歸。風馳電逝。躡景追飛。凌厲中原。顧盼生姿。擕我好仇。載我輕車。南凌長阜。北厲清渠。仰落驚鴻。俯引淵魚。盤于游田。其樂只且。

輕車迅邁。息彼長林。春木載榮。布葉垂陰。習習谷風。吹我素琴。咬咬黃鳥。顧疇弄音。感悟馳情。思我所欽。心之憂矣。永嘯長吟。

浩浩洪流。帶我邦畿。萋萋綠林。奮榮揚暉。魚龍瀺灂。山鳥羣飛。駕言出遊。日夕忘歸。思我良朋。如渴如飢。願言不獲。愴矣其悲。

息徒蘭圃。秣馬華山。流磻平皐。垂綸長川。目送歸鴻。手揮五絃。俯仰自得。游心太玄。嘉彼釣叟。得魚忘筌。郢人逝矣。誰與盡言。

閑夜肅清。朗月照軒。微風動袿。組帳高褰。旨酒盈樽。莫與交歡。鳴琴在御。誰與鼓彈。仰慕同趣。其馨若蘭。佳人不在。能不永歎。

贈山濤　司馬紹統

苕苕椅桐樹。寄生於南岳。上凌青雲霓。下臨千仞谷。處身孤且危。於何託余足。昔也植朝陽。傾枝俟鸞鷟。今者絕世用。倥傯見迫束。班匠不我顧。牙曠不我錄。焉得成琴瑟。何由揚妙曲。冉冉三光馳。逝者一何速。中夜不能寐。撫劒起躑躅。感彼孔聖歎。哀此年命促。卞和潛幽冥。誰能證奇璞。冀願神龍來。揚光以見燭。

答何劭二首　張茂先

吏道何其迫。窘然坐自拘。纓綏爲徽纆。文憲焉可踰。恬曠苦不足。煩促每有餘。良朋貽新詩。示我以游娛。穆如灑清風。煥若春華敷。自昔同寮寀。於今比園廬。衰疾近辱殆。庶幾並懸輿。散髮重陰下。抱杖臨清渠。屬耳聽鶯鳴。流目翫鯈魚。從容養餘日。取樂於桑榆。

洪鈞陶萬類。大塊稟羣生。明闇信異姿。靜躁亦殊形。自予及有識。志不在功名。虛恬竊所好。文學

少所經。忝荷既過任。白日已西傾。道長苦智短。責重困才輕。周任有遺規。其言明且清。負乘爲我戒。夕惕坐自驚。是用感嘉貺。寫心出中誠。發篇雖溫麗。無乃違其情。

贈張華　何敬祖

四時更代謝。懸象迭卷舒。暮春忽復來。和風與節俱。俯臨淸泉涌。仰觀嘉木敷。周旋我陋圃。西瞻廣武廬。既貴不忘儉。處有能存無。鎭俗在簡約。樹塞焉足摹。在昔同班司。今者並園墟。私願偕黃髮。逍遙綜琴書。擧爵茂陰下。攜手共躊躇。奚用遺形骸。忘筌在得魚。

贈馮文羆遷斥丘令　陸士衡

於皇聖世。時文惟晉。受命自天。奄有黎獻。閶闔既闢。承華再建。明明在上。有集惟彥。其一　奕奕馮生。哲問允迪。天保定子。靡德不鑠。邁心玄曠。矯志崇邈。遵彼承華。其容灼灼。其二　嗟我人斯。戢翼江潭。有命集止。翻飛自南。出自幽谷。及爾同林。雙情交映。遺物識心。其三　人亦有言。交道實難。有頍者弁。千載一彈。今我與子。曠世齊歡。利斷金石。氣惠秋蘭。其四　羣黎未綏。帝用勤止。我求明德。肆于百里。僉曰爾諧。俾民是紀。乃眷北徂。對揚帝祉。其五　疇昔之游。好合纏緜。借曰未給。亦既三年。居陪華幄。出從朱輪。方驥齊鑣。比迹同塵。其六　之子既命。四牡項領。遵塗遠蹈。騰軌高騁。慶雲扶質。淸風承景。嗟我懷人。其邁惟永。其七　否泰有殊。窮達有違。及子春華。後爾秋暉。逝將去我。陟彼朔陲。非子之念。心孰爲悲。其八

答賈長淵　幷序　陸士衡

余昔爲太子洗馬。魯公賈長淵。以散騎常侍。侍東宮積年。余出補吳王郎中令。元康六年。入爲

尙書郎。魯公贈詩一篇。作此詩答之云爾。

伊昔有皇。肇濟黎蒸。先天創物。景命是膺。降及群后。迭毀迭興。邈矣終古。崇替有徵。其一 在漢之季。皇綱幅裂。火辰匿暉。金虎曜質。雄臣馳騖。義夫赴節。釋位揮戈。言謀王室。其二 王室之亂。靡邦不泯。如彼墜景。曾不可振。乃眷三哲。俾乂斯民。啓土雖難。改物承天。其三 爰茲有魏。卽宮天邑。吳實龍飛。劉亦岳立。干戈載揚。俎豆載戢。民勞師興。國玩凱入。其四 天厭霸德。黃祚告釁。獄訟違魏。謳歌適晉。陳留歸藩。我皇登禪。庸岷稽顙。三江改獻。其五 赫矣隆晉。奄宅率土。對揚天人。有秩斯祜。惟公太宰。光翼二祖。誕育洪胄。纂戎于魯。其六 東朝既建。淑問峩峩。我求明德。濟同以和。魯公戾止。袞服委蛇。思媚皇儲。高步承華。其七 昔我逮茲。時惟下僚。及子棲遲。同林異條。年殊志比。服舛義稠。游跨三春。情固二秋。其八 祗承皇命。出納無違。往踐蕃朝。來步紫微。升降祕閣。我服載暉。孰云匪懼。仰肅明威。其九 分索則易。攜手實難。念昔良游。茲焉永歎。公之云感。貽此音翰。蔚彼高藻。如玉如蘭。其十 惟漢有木。曾不踰境。惟南有金。萬邦作詠。民之胥好。狂猖厲聖。儀形在昔。予聞子命。其十一

於承明作與士龍　陸士衡

牽世嬰時網。駕言遠徂征。飮餞豈異族。親戚弟與兄。婉孌居人思。紆鬱游子情。明發遺安寐。寤言涕交纓。分塗長林側。揮袂萬始亭。佇眄要遐景。傾耳玩餘聲。南歸憩永安。北邁頓承明。永安有昨軌。承明子弃予。俯仰悲林薄。慷慨含辛楚。懷往歡絕端。悼來憂成緒。感別慘舒翮。思歸樂遵渚。

贈尙書郎顧彥先二首　陸士衡

大火貞朱光。積陽熙自南。望舒離金虎。屏翳吐重陰。淒風迕時序。苦雨遂成霖。朝游忘輕羽。夕息

憶重衾。感物百憂生。纏綿自相尋。與子隔蕭墻。蕭墻阻且深。形影曠不接。所託聲與音。音聲日夜闊。何用慰吾心。

朝游游曾城。夕息旋直廬。迅雷中霄激。驚電光夜舒。玄雲拖朱閣。振風薄綺疏。豐注溢脩霤。潢潦浸階除。停陰結不解。通衢化為渠。沈稼湮梁潁。流民泝荊徐。眷言懷桑梓。無乃將為魚。

贈顧交阯公眞　陸士衡

顧侯體明德。清風肅已邁。發迹翼藩后。改授撫南裔。伐鼓五嶺表。揚旌萬里外。遠績不辭小。立德不在大。高山安足凌。巨海猶縈帶。惆悵瞻飛駕。引領望歸旆。

贈從兄車騎　陸士衡

孤獸思故藪。離鳥悲舊林。翩翩游宦子。辛苦誰為心。髣髴谷水陽。婉孌崐山陰。營魄懷茲土。精爽若飛沈。寤寐靡安豫。願言思所欽。感彼歸塗艱。使我怨慕深。安得忘歸草。言樹背與襟。斯言豈虛作。思鳥有悲音。

答張士然　陸士衡

絜身躋祕閣。祕閣峻且玄。終朝理文案。薄暮不遑眠。駕言巡明祀。致敬在祈年。逍遙春王圃。躑躅千畝田。迴渠繞曲陌。通波扶直阡。嘉穀垂重穎。芳樹發華顚。余固水鄉士。摠轡臨清淵。戚戚多遠念。行行遂成篇。

為顧彥先贈婦二首　陸士衡

辭家遠行游。悠悠三千里。京洛多風塵。素衣化爲緇。脩身悼憂苦。感念同懷子。隆思亂心曲。沈歡滯不起。歡沈難剋興。心亂誰爲理。願假歸鴻翼。翻飛游江汜。

東南有思婦。長歎充幽闥。借問歎何爲。佳人眇天末。游宦久不歸。山川脩且闊。形影參商乖。音息曠不達。離合非有常。譬彼弦與筈。願保金石軀。慰妾長饑渴。

贈馮文羆　陸士衡

昔與二三子。游息承華南。拊翼同枝條。翻飛各異尋。苟無凌風翮。徘徊守故林。慷慨誰爲感。願言懷所欽。發軫清洛汭。驅馬大河陰。佇立望朔塗。悠悠迥且深。分索古所悲。志士多苦心。悲情臨川結。苦言隨風吟。愧無雜佩贈。良訊代兼金。夫子茂遠猷。款誠寄惠音。

贈弟士龍　陸士衡

行矣怨路長。惄焉傷別促。指途悲有餘。臨觴歡不足。我若西流水。子爲東跱岳。慷慨逝言感。徘徊居情育。安得攜手俱。契闊成騑服。

爲賈謐作贈陸機　潘安仁

肇自初創。二儀烟熅。粤有生民。伏羲始君。結繩闡化。八象成文。芒芒九有。區域以分。其一 神農更王。軒轅承紀。畫野離疆。爰封衆子。夏殷既襲。宗周繼祀。緜緜瓜瓞。六國互峙。其二 彊秦兼并。吞滅四隅。子嬰面櫬。漢祖膺圖。靈獻微弱。在涅則渝。三雄鼎足。孫啓南吳。其三 南吳伊何。僭號稱王。大晉統天。仁風遐揚。僞孫銜璧。奉土歸疆。婉婉長離。凌江而翔。其四 長離云誰。咨爾陸生。鶴鳴九皐。猶載厥聲。況廼海隅。播名上京。爰應旌招。撫翼宰庭。其五 儲皇之選。實簡惟良。英英朱鸞。來自南

岡。曜藻崇正。玄冕丹裳。如彼蘭蕙。載採其芳。其六 藩岳作鎮。輔我京室。旋反桑梓。帝弟作弼。或云國宦。清塗攸失。吾子洗然。恬淡自逸。其七 廊廟惟清。俊乂是延。擢應嘉擧。自國而遷。齊轡羣龍。光讚納言。優游省闥。珥筆華軒。其八 昔余與子。繾綣東朝。雖禮以賓。情同友僚。嬉娛絲竹。撫鞞舞韶。脩日朗月。攜手逍遙。其九 自我離羣。二周于今。雖簡其面。分著情深。子其超矣。實慰我心。發言爲詩。俟望好音。其十 欲崇其高。必重其層。立德之柄。莫匪安恆。在南稱甘。度北則橙。崇子鋒穎。不穨不崩。其十一

贈陸機出爲吳王郎中令　　潘正叔

東南之美。曩惟延州。顯允陸生。於今鼓儔。振鱗南海。濯翼清流。婆娑翰林。容與墳丘。其一 玉以瑜潤。隋以光融。乃漸上京。羽儀儲宮。玩爾清藻。味爾芳風。泳之彌廣。挹之彌冲。其二 崑山何有。有瑤有珉。及爾同僚。具惟近臣。予涉素秋。子登青春。愧無老成。厠彼日新。其三 祁祁大邦。惟桑惟梓。穆穆伊人。南國之紀。帝曰爾諧。惟王卿士。俯僂從命。奚恤奚喜。其四 我車既巾。我馬既秣。星陳夙駕。載脂載轄。婉孌二宮。徘徊殿闥。醪澄莫饗。孰慰饑渴。其五 昔子忝私。貽我蕙蘭。今子徂東。何以贈旃。寸晷惟寶。豈無璵璠。彼美陸生。可與晤言。其六

贈河陽　　潘正叔

虙生化單父。子奇涖東阿。桐鄉建遺烈。武城播絃歌。逸驥騰夷路。潛龍躍洪波。弱冠步鼎鉉。既立宰三河。流聲馥秋蘭。摛藻豔春華。徒美天姿茂。豈謂人爵多。

贈侍御史王元貺　　潘正叔

崑山積瓊玉。廣廈構衆材。游鱗萃靈沼。撫翼希天階。膏蘭孰爲消。濟治由賢能。王侯厭崇禮。迴迹清憲臺。蠖屈固小往。龍翔迺大來。協心毗聖世。畢力讚康哉。

文選卷十二終

文選卷十三

詩　丁　贈答二　行旅上

贈何劭王濟　并序　　傅長虞

朗陵公何敬祖。咸之從內兄。國子祭酒王武子。咸從姑之外孫也。並以明德見重於世。咸親之重之。情猶同生。義則師友。何公既登侍中。武子俄而亦作。二賢相得甚歡。咸亦慶之。然自恨闇劣。雖願其繾綣。而從之末由。歷試無效。且有家艱。心存目替。賦詩申懷。以貽之云爾。

日月光太清。列宿曜紫微。赫赫大晉朝。明明闢皇闈。吾兄既鳳翔。王子亦龍飛。雙鸞游蘭渚。二離揚清暉。攜手升玉階。並坐侍丹帷。金璫綴惠文。煌煌發令姿。斯榮非攸庶。繾綣情所希。豈不企高蹤。麟趾邈難追。臨川靡芳餌。何為守空坻。槁葉待風飄。逝將與君違。違君能無戀。尸素當言歸。歸身蓬蓽廬。樂道以忘飢。進則無云補。退則恤其私。但願隆弘美。王度日清夷。

答傅咸　　郭泰機

皎皎白素絲。織為寒女衣。寒女雖妙巧。不得秉杼機。天寒知運速。況復鴈南飛。衣工秉刀尺。棄我忽若遺。人不取諸身。世事焉所希。況復已朝餐。曷由知我飢。

為顧彥先贈婦二首　　陸士龍

悠悠君行邁。煢煢妾獨止。山河安可踰。永路隔萬里。京室多妖冶。粲粲都人子。雅步擢纖腰。巧笑發皓齒。佳麗良可美。衰賤焉足紀。遠蒙眷顧言。銜恩非望始。

浮海難爲水。游林難爲觀。容色貴及時。朝華忌日晏。皎皎彼姝子。灼灼懷春粲。西城善雅舞。總章饒清彈。鳴簧發丹脣。朱絃繞素腕。輕裾猶電揮。雙袂如霧散。華容溢藻幄。哀響入雲漢。知音世所希。非君誰能讚。棄置北辰星。問此玄龍煥。時暮復何言。華落理必賤。

答兄機　陸士

悠遠途可極。別促怨會長。銜思戀行邁。興言在臨觴。南津有絕濟。北渚無河梁。神往同逝感。形留悲參商。銜軌若殊迹。牽牛非服箱。

答張士然　陸士龍

行邁越長川。飄颻冒風塵。通波激枉渚。悲風薄丘榛。脩路無窮迹。井邑自相循。百城各異俗。千室非良鄰。歎舊難假合。風土豈虛親。感念桑梓域。髣髴眼中人。靡靡日夜遠。眷眷懷苦辛。

答盧諶并序　劉越石

琨頓首。損書及詩。備辛酸之苦言。暢經通之遠旨。執玩反覆。不能釋手。慨然以悲。歡然以喜。昔在少壯。未嘗檢括。遠慕老莊之齊物。近嘉阮生之放曠。怪厚薄何從而生。哀樂何由而至。自頃輈張。困於逆亂。國破家亡。親友彫殘。塊然獨坐。則哀憤兩集。負杖行吟。則百憂俱至。時復相與舉觴對膝。破涕爲笑。排終身之積慘。求數刻之暫歡。譬由疾疢彌年。而欲一丸銷之。其可得乎。夫才生於世。世實須才。和氏之璧。焉得獨曜於郢握。夜光之珠。何得專玩於隨掌。天下之寶。固當與天下共。

之。但分析之日。不能不悵恨爾。然後知聃周之爲虛誕。嗣宗之爲妄作也。昔騄驥倚輈於吳阪。鳴於良樂。知與不知也。百里奚愚於虞。而智於秦。遇與不遇也。今君遇之矣。勗之而已。不復屬意於文。二十餘年矣。久廢則無次。想必欲其一反。故稱指送一篇。適足以彰來詩之益美耳。琨頓首頓首。

厄運初遘。陽爻在六。乾象棟傾。坤儀舟覆。橫厲糾紛。羣妖競逐。火燎神州。洪流華域。彼黍離離。彼稷育育。哀我皇晉。痛在心目。其一 天地無心。萬物同塗。禍淫莫驗。福善則虛。逆有全邑。義無完都。英蘂夏落。毒卉冬敷。如彼龜玉。韞櫝毀諸。芻狗之談。其最得乎。其二 咨余軟弱。弗克負荷。愆釁仍彰。榮寵屢加。威之不建。禍延凶播。忠隕于國。孝愆于家。斯罪之積。如彼山河。斯釁之深。終莫能磨。其三 郁穆舊姻。嬿婉新婚。不慮其敗。唯義是敦。褰裳攜弱。俯匐星奔。未輟爾駕。已隳我門。二族偕覆。三孽竝根。長慙舊孤。永負寃魂。其四 亭亭孤幹。獨生無伴。綠葉繁縟。柔條脩罕。朝採爾實。夕捋爾竿。竿翠豐尋。逸珠盈椀。實消我憂。憂急用緩。逝將去矣。庭虛情滿。其五 虛滿伊何。蘭桂移植。茂彼春林。瘁此秋棘。有鳥翻飛。不遑休息。匪桐不棲。匪竹不食。永戢東羽。翰撫西翼。我之敬之。廢歡輟職。其六 音以賞奏。味以殊珍。文以明言。言以暢神。之子之往。四美不臻。澄醪覆觴。絲竹生塵。素卷莫啓。幄無談賓。既孤我德。又闕我鄰。其七 光光段生。出幽遷喬。資忠履信。武烈文昭。旌弓騂騂。輿馬翹翹。乃奮長縻。是縶是鑣。何以贈子。竭心公朝。何以敍懷。引領長謠。其八

重贈盧諶　　劉越石

握中有懸璧。本自荊山璆。惟彼太公望。昔在渭濱叟。鄧生何感激。千里來相求。白登幸曲逆。鴻門賴留侯。重耳任五賢。小白相射鉤。苟能隆二伯。安問黨與讎。中夜撫枕歎。想與數子游。吾衰久矣夫。何其不夢周。誰云聖達節。知命故不憂。宣尼悲獲麟。西狩涕孔丘。功業未及建。夕陽忽西流。時

哉不我與。去乎若雲浮。朱實隕勁風。繁英落素秋。狹路傾華蓋。駭駟摧雙輈。何意百鍊剛。化爲繞指柔。

贈劉琨 并書　盧子諒

故吏從事中郎盧諶。死罪死罪。諶禀性短弱。當世罕任。因其自然。用安靜退。在木闕不材之資。處鴈乏善鳴之分。卷異蘧子。愚殊甯生。匠者時眄。不免饌賓。嘗自思惟。因緣運會。得蒙接事。自奉清塵。于今五稔。謨明之效不著。候人之譏已彰。大雅含弘。量苞山藪。加以待接彌優。款眷逾昵。與運籌之謀。厕讌私之歡。綢繆之旨。有同骨肉。其爲知己。古人罔喩。昔聶政殉嚴遂之顧。荊軻慕燕丹之義。意氣之間。靡軀不悔。雖微達節。謂之可庶。然苟曰有情。孰能不懷。故委身之日。夷險已之。事與願違。當忝外役。遂去左右。收迹府朝。蓋本同末異。楊朱興哀。始素終玄。墨翟垂涕。分乖之際。咸可歎慨。致感之途。或迫于茲。亦奚必臨路而後長號。覩絲而後歔欷哉。是以仰惟先情。俯覽今遇。感存念亡。觸物增眷。易曰。書不盡言。言不盡意。然則書非盡言之器。言非盡意之具矣。況言有不得至於盡意。書有不得至於盡言耶。不勝猥濊。謹貢詩一篇。抑不足以揄揚弘美。亦以攄其所抱而已。若公肆大惠。遂其厚恩。錫以咳唾之音。慰其違離之意。則所謂咸池酬於北里。夜光報於魚目。諶之願也。非所敢望也。諶死罪死罪。

濬哲惟皇。紹熙有晉。振厥弛維。光闡遠韻。有來斯雍。至止伊順。三台摛朗。四岳增峻。其一 伊陟佐商。山甫翼周。弘濟艱難。對揚王休。苟非異德。曠世同流。加其忠貞。宣其徽猷。其二 伊諶陋宗。昔遘嘉惠。申以婚姻。著以累世。義等休戚。好同興廢。孰云匪諧。如樂之契。其三 王室喪師。私門播遷。望公歸之。視險忽艱。茲願不遂。中路阻顚。仰悲先意。俯思身愆。其四 大鈞載運。良辰遂往。瞻彼日月。迅過俯仰。感今惟昔。口存心想。借曰如昨。忽爲疇曩。其五 疇曩伊何。逝者彌疎。溫溫恭人。愼終如

初。覽彼遺音。恤此窮孤。譬彼樛木。蔓葛以敷。其六　妙哉蔓葛。得託樛木。葉不雲布。華不星燭。承倖卞和。質非荊璞。眷同尤良。用乏驥騄。其七　承亦既篤。眷亦既親。飾獎駑猥。方駕駿珍。弼諧靡成。良謨莫陳。無覬狐趙。有與五臣。其八　五臣爰與。契闊百罹。身經險阻。足蹈幽遐。義由恩深。分隨昵加。綢繆委心。自同匪他。其九　昔在暇日。妙尋通理。尤彼意氣。狹是節士。情以禮生。感以情起。趣舍同要。窮達斯已。其十　由余片言。秦人是憚。日磾效忠。飛聲有漢。桓桓撫軍。古賢作冠。來牧幽都。濟厥途炭。其十一　塗炭既濟。寇挫民阜。謬其疲隸。授之朝右。上懼任大。下欣施厚。實祗高明。敢忘所守。其十二　相彼反哺。尚在翔禽。孰是人斯。而忍斯心。每憑山海。庶覿高深。遐眺存亡。緬成飛沈。其十三　長徽已纓。逝將徙擧。收跡西踐。銜哀東顧。曷云塗遼。曾不咫步。豈不夙夜。謂行多露。其十四　緜緜女蘿。施于松標。稟澤洪幹。晞陽豐條。根淺難固。莖弱易彫。操彼纖質。承此衝飇。其十五　纖質寔微。衝飇斯值。誰謂言精。致在賞意。不見得魚。亦忘厥餌。遺其形骸。寄之深識。其十六　先民頤意。潛山隱几。仰熙丹崖。俯澡綠水。無求於和。自附衆美。慷慨遐蹤。有愧高旨。其十七　爰造異論。肝膽楚越。惟同大觀。萬塗一轍。死生既齊。榮辱奚別。處其玄根。廓焉靡結。其十八　福爲禍始。禍作福階。天地盈虛。寒暑周迴。夫差不祀。釁在勝齊。句踐作伯。祚自會稽。其十九　邈矣達度。唯道是杖。形有未泰。神無不暢。如川之流。如淵之量。上弘棟隆。下塞民望。其二十

贈崔溫　盧子諒

逍遙步城隅。暇日聊游豫。北眺沙漠垂。南望舊京路。平陸引長流。岡巒挺茂樹。中原厲迅飇。山阿起雲霧。游子恆悲懷。擧目增永慕。良儔不獲偕。舒情將焉訴。遠念賢士風。遂存往古務。朔鄙多俠氣。豈唯地所固。李牧鎭邊城。荒夷懷南懼。趙奢正疆場。秦人折北慮。羈旅及寬政。委質與時遇。恨以駑蹇姿。徒煩非子御。亦既弛負擔。忝位宰黔庶。苟云免罪戾。何暇收民譽。倪寬以殿黜。終乃最

來賦。何武不赫赫。遺愛常在去。古人非所希。短弱自有素。何以敷斯辭。惟以二子故。

答魏子悌　盧子諒

崇臺非一幹。珍裘非一腋。多士成大業。羣賢濟弘績。遇蒙時來會。聊齊朝彥跡。顧此腹背羽。愧彼排虛翮。寄身蔭四岳。託好憑三益。傾蓋雖終朝。大分邁疇昔。在危每同險。處安不異易。俱涉晉昌艱。共更飛狐厄。恩由契闊生。義隨周旋積。豈謂鄉曲譽。謬充本州役。乖離令我感。悲欣使情惕。理以精神通。匪曰形骸隔。妙詩申篤好。清義貫幽賾。恨無隨侯珠。以酬荊文璧。

答靈運　謝宣遠

夕霽風氣涼。閑房有餘清。開軒滅華燭。月露皓已盈。獨夜無物役。寢者亦云寧。忽獲愁霖唱。懷勞奏所誠。歎彼行旅艱。深茲眷言情。伊余雖寡慰。殷憂暫爲輕。牽率酬嘉藻。長揖愧吾生。

於安城答靈運　謝宣遠

條繁林彌蔚。波清源逾濬。華宗誕吾秀。之子紹前胤。綢繆結風徽。烟熅吐芳訊。鴻漸隨事變。靈臺與年峻。其一

華萼相光飾。嚶鳴悅同響。親親子敦余。賢賢吾爾賞。比景後鮮輝。方年一日長。萎葉愛榮條。涸流好河廣。其二

黽勉謝成操。復禮愧貧樂。幸會果代耕。符守江南曲。履運傷荏苒。遵塗歎緬邈。布懷存所欽。我勞一何篤。其三

肇允雖同規。翻飛各異槩。迢遞封畿外。窈窕承明內。尋塗塗既睽。卽理理已對。絲路有恆悲。矧迺在吾愛。其四

跬行安步武。鎩翮周數仞。豈不識高遠。違方往有吝。歲寒霜雪嚴。過半路逾峻。量己畏友朋。勇退不敢進。行矣勵令猷。寫誠酬來訊。其五

西陵遇風獻康樂

謝惠連

我行指孟春。春仲尚未發。趣途遠有期。念離情無歇。成裝候良辰。漾舟陶嘉月。瞻塗意少悰。還顧情多闕。其一

哲兄感仳別。相送越坰林。飲餞野亭館。分袂澄湖陰。悽悽留子言。眷眷浮客心。迴塘隱艫栧。遠望絕形音。其二

靡靡即長路。戚戚抱遙悲。悲遙但自弭。路長當語誰。行行道轉遠。去去情彌遲。昨發浦陽汭。今宿浙江湄。其三

屯雲蔽曾嶺。驚風涌飛流。零雨潤墳澤。落雪灑林丘。浮氛晦崖巘。積素惑原疇。曲汜薄停旅。通川絕行舟。其四

臨津不得濟。佇楫阻風波。蕭條洲渚際。氣色少諧和。西瞻興游歎。東睇起悽歌。積憤成疢痗。無萱將如何。其五

還舊園作見顏范二中書

謝靈運

辭滿豈多秩。謝病不待年。偶與張邴合。久欲還東山。聖靈昔迴眷。微尚不及宣。何意衝飆激。烈火縱炎煙。焚玉發崐峯。餘燎遂見遷。投沙理既迫。如卭願亦愆。長與懽愛別。永絕平生緣。浮舟千仞壑。揔轡萬尋巔。流沫不足險。石林豈爲艱。閩中安可處。日夜念歸旋。事躓兩如直。心愜三避賢。託身靑雲上。棲巖挹飛泉。盛明盪氛昏。貞休康屯邅。殊方咸成貸。微物豫采甄。感深操不固。質弱易板纏。曾是反昔園。語往實款然。曩基即先築。故池不更穿。果木有舊行。壤石無遠延。雖非休憩地。聊取永日閑。衞生自有經。息陰謝所牽。夫子照情素。探懷授往篇。

登臨海嶠初發彊中作與從弟惠連可見羊何共和之

謝靈運

杪秋尋遠山。山遠行不近。與子別山阿。含酸赴修畛。中流袂就判。欲去情不忍。顧望脰未悁。汀曲

舟已隱。隱汀絶望舟。騖棹逐驚流。欲抑一生歡。幷奔千里游。日落當棲薄。繫纜臨江樓。豈惟夕情斂。憶爾共淹留。淹留昔時歡。復增今日歎。茲情已分慮。況乃協悲端。秋泉鳴北澗。哀猨響南巒。戚戚新別心。悽悽久念攢。攢念攻別心。旦發靑谿陰。暝投剡中宿。明登天姥岑。高高入雲霓。還期那可尋。儻遇浮丘公。長絶子徽音。

酬從弟惠連　謝靈運

寢瘵謝人徒。滅迹入雲峯。巖壑寓耳目。歡愛隔音容。永絶賞心望。長懷莫與同。末路値令弟。開顏披心胷。其一

心胷既云披。意得咸在斯。淩澗尋我室。散帙問所知。夕慮曉月流。朝忌曛日馳。悟對無厭歇。聚散成分離。其二

分離別西川。迴景歸東山。別時悲已甚。別後情更延。傾想遲嘉音。果枉濟江篇。辛勤風波事。款曲洲渚言。其三

洲渚既淹時。風波子行遲。務協華京想。詎存空谷期。猶復惠來章。祗足攪余思。儻若果歸言。共陶暮春時。其四

暮春雖未交。仲春善遊遨。山桃發紅蕚。野蕨漸紫苞。嚶鳴已悅豫。幽居猶鬱陶。夢寐佇歸舟。釋我吝與勞。其五

贈王太常　顏延年

玉水記方流。琁源載圓折。蓄寶每希聲。雖祕猶彰徹。聆龍睒九淵。聞鳳窺丹穴。歷聽豈多士。唯然覯時哲。舒文廣國華。敷言遠朝列。德輝灼邦懋。芳風被鄉耋。側同幽人居。郊扉常晝閉。林閭時晏開。亟迴長者轍。庭昏見野陰。山明望松雪。靜惟浹羣化。徂生入窮節。豫往誠歡歇。悲來非樂闋。屬美謝繁翰。遙懷具短札。

夏夜呈從兄散騎車長沙　顏延年

炎天方埃鬱。暑晏闋塵紛。獨靜闕偶坐。臨堂對星分。側聽風薄木。遙睇月開雲。夜蟬當夏急。陰蟲先秋聞。歲候初過半。荃蕙豈久芬。屏居惻物變。慕類抱情殷。九逝非空思。七襄無成文。

直東宮答鄭尚書　顏延年

皇居體環極。設險祇天工。兩闈阻通軌。對禁限清風。跂予旅東館。徒歌屬南墉。寢興鬱無已。起觀辰漢中。流雲藹青闕。皓月鑒丹宮。踟蹰清防密。徒倚恆漏窮。君子吐芳訊。感物惻余衷。惜無丘園秀。景行彼高松。知言有誠貫。美價難克充。何以銘嘉貺。言樹絲與桐。

和謝監靈運　顏延年

弱植慕端操。窘步懼先迷。寡立非擇方。刻意藉窮棲。伊昔遘多幸。秉筆侍兩閨。雖慙丹雘施。未謂玄素睽。徒遭良時詖。王道奄昏霾。人神幽明絕。朋好雲雨乖。弔屈汀洲浦。謁帝蒼山蹊。倚巖聽緒風。攀林結留荑。跂予間衡嶠。曷月瞻秦稽。皇聖昭天德。豐澤振沈泥。惜無雀雉化。何用充海淮。去國還故里。幽門樹蓬藜。采茨葺昔宇。翦棘開舊畦。物謝時既晏。年往志不偕。親仁敷情昵。與玩究辭悽。芬馥歇蘭若。清越奪琳珪。盡言非報章。聊用布所懷。

答顏延年　王僧達

長卿冠華陽。仲連擅海陰。珪璋既文府。精理亦道心。君子聳高駕。塵軌實爲林。崇情符遠迹。清氣溢素襟。結游略年義。篤顧棄浮沈。寒榮共偃曝。春醖時獻斟。聿來歲序喧。輕雲出東岑。麥壟多秀色。楊園流好音。歡此乘日暇。忽忘逝景侵。幽衷何用慰。翰墨久謠吟。棲鳳難爲條。淑貺非所臨。誦以永周旋。匣以代兼金。

郡內高齋閑坐答呂法曹　謝玄暉

結構何迢遰。曠望極高深。窻中列遠岫。庭際俯喬林。日出衆鳥散。山暝孤猨吟。已有池上酌。復此風中琴。非君子無度。孰爲勞寸心。惠而能好我。問以瑤華音。若遺金門步。見就玉山岑。

在郡臥病呈沈尚書　謝玄暉

淮陽股肱守。高臥猶在茲。況復南山曲。何異幽棲時。連陰盛農節。籉笠聚東菑。高閣常晝掩。荒階少諍辭。珍簟清夏室。輕扇動涼颸。嘉魴聊可薦。綠蟻方獨持。夏李沈朱實。秋藕折輕絲。良辰竟何許。夙昔夢佳期。坐嘯徒可積。爲邦歲已朞。絃歌終莫取。撫机令自嗤。

暫使下都夜發新林至京邑贈西府同僚　謝玄暉

大江流日夜。客心悲未央。徒念關山近。終知返路長。秋河曙耿耿。寒渚夜蒼蒼。引領見京室。宮雉正相望。金波麗鳷鵲。玉繩低建章。驅車鼎門外。思見昭丘陽。馳暉不可接。何況隔兩鄉。風雲有鳥路。江漢限無梁。常恐鷹隼擊。時菊委嚴霜。寄言罻羅者。寥廓已高翔。

酬王晉安　謝玄暉

梢梢枝早勁。塗塗露晚晞。南中榮橘柚。寧知鴻鴈飛。拂霧朝靑閤。日旰坐彤闈。悵望一塗阻。參差百慮依。春草秋更綠。公子未西歸。誰能久京洛。緇塵染素衣。

奉答內兄希叔

陸韓卿

嘉惠承帝子。躡履奉王孫。屬叨金馬署・又點銅龍門・出入平津邸。一見孟嘗尊・歸來翳桑柘。朝夕異涼溫。其一

殂落固云是・寂寞終如斯。杜門淸三徑。坐檻臨曲池。鳧鵠嘯儔侶。荷芰始參差。雖無田田葉。及爾汎漣漪。其二

春華與秋實・庶子及家臣・王門所以貴。自古多俊民。離宮收杞梓。華屋富徐陳。平旦上林苑・日入伊水濱。其三

書記旣翩翩。賦歌能妙絕。相如惡溫麗。子雲慚筆札・駿足思長阪。柴車畏危轍。愧茲山陽讌。空此河陽別。其四

平原十日飲。中散千里遊。渤海方淫滯。宣城誰獻酬。屏居南山下。臨此歲方秋。惜哉時不與・日暮無輕舟・其五

贈張徐州謖

范彥龍

田家樵採去。薄暮方來歸。還聞稚子說・有客款柴扉・儐從皆珠玳。裘馬悉輕肥。軒蓋照墟落・傳瑞生光輝。疑是徐方牧。旣是復疑非。思舊昔言有・此道今已微。物情棄疵賤。何獨顧衡闈。恨不具雞黍。得與故人揮。懷情徒草草。淚下空霏霏。寄書雲間鴈。爲我西北飛・

古意贈王中書

范彥龍

攝官靑瑣闥・遙望鳳皇池。誰云相去遠・脈脈阻光儀。岱山饒靈異。沂水富英奇・逸翮陵北海・摶飛出南皮。遭逢聖明后。來棲桐樹枝。竹花何莫莫。桐葉何離離。可棲復可食。此外亦何爲。豈知鷦鷯者。一粒有餘貲。

贈郭桐廬出谿口見候余旣未至郭仍進村維舟久之

郭生方至　任彥昇

朝發富春渚。蓄意忍相思。涿令行春返。冠蓋溢川坻。望久方來萃。悲歡不自持。滄江路窮此。湍險方自茲。疊嶂易成響。重以夜猨悲。客心幸自弭。中道遇心期。親好自斯絕。孤游從此辭。

河陽縣作二首　潘安仁

微身輕蟬翼。弱冠忝嘉招。在疚妨賢路。再升上宰朝。猥荷公叔舉。連陪廁王寮。長嘯歸東山。擁耒耨時苗。幽谷茂纖葛。峻巖敷榮條。落英隕林趾。飛莖秀陵喬。卑高亦何常。升降在一朝。徒恨良時泰。小人道遂消。譬如野田蓬。斡流隨風飄。昔倦都邑游。今掌河朔徭。登城眷南顧。凱風揚微綃。洪流何浩蕩。脩芒鬱岩嶤。誰謂晉京遠。室邇身實遼。誰謂邑宰輕。令名患不劭。人生天地間。百年孰能要。熲如槁石火。瞥若截道飈。齊都無遺聲。桐鄉有餘謠。福謙在純約。害盈由矜驕。雖無君人德。視民庶不恌。」日夕陰雲起。登城望洪河。川氣冒山嶺。驚湍激巖阿。歸鴈映蘭畤。游魚動圓波。鳴蟬厲寒音。時菊耀秋華。引領望京室。南路在伐柯。大厦緬無覿。崇芒鬱嵯峨。揔揔都邑人。擾擾俗化訛。依水類浮萍。寄松似懸蘿。朱博糾舒慢。楚風被琅邪。曲蓬何以直。託身依叢麻。黔黎竟何常。政成在民和。位同單父邑。愧無子賤歌。豈敢陋微官。但恐忝所荷。

在懷縣作二首　潘安仁

南陸迎修景。朱明送末垂。初伏啓新節。隆暑方赫羲。朝想慶雲興。夕遲白日移。揮汗辭中宇。登城臨清池。涼飈自遠集。輕襟隨風吹。靈圃耀華果。通衢列高椅。瓜瓞蔓長苞。薑芋紛廣畦。稻栽肅仟仟。黍苗何離離。虛薄乏時用。位微名日卑。驅役宰兩邑。政績竟無施。自我違京輦。四載迄于斯。器

非廊廟姿。屢出固其宜。徒懷越鳥志。眷戀想南枝。

春秋代遷逝。四運紛可喜。寵辱易不驚。戀本難爲思。我來冰未泮。時暑忽隆熾。感此還期淹。歎彼年往駛。登城望郊甸。游目歷朝寺。小國寡民務。終日寂無事。白水過庭激。綠槐夾門植。信美非吾土。秖攪懷歸志。眷然顧鞏洛。山川邈離異。願言旋舊鄉。畏此簡書忌。祗奉社稷守。恪居處職司。

迎大駕　　潘正叔

南山鬱岑崟。洛川迅且急。青松蔭修嶺。綠蘩被廣隰。朝日順長塗。夕暮無所集。歸雲乘幰浮。淒風尋帷入。道逢深識士。舉手對吾揖。世故尚未夷。崤函方嶮澁。狐貍夾兩轅。豺狼當路立。翔鳳嬰籠檻。騏驥見維縶。俎豆昔常聞。軍旅素未習。且少停君駕。徐待干戈戢。

赴洛詩二首　　陸士衡

希世無高符。營道無烈心。靖端肅有命。假檝越江潭。親友贈予邁。揮淚廣川陰。撫膺解攜手。永歎結遺音。無迹有所匿。寂漠聲必沈。肆目眇不及。緬然若雙潛。南望泣玄渚。北邁涉長林。谷風拂修薄。油雲翳高岑。亹亹孤獸騁。嚶嚶思鳥吟。感物戀堂室。離思一何深。佇立慨我歎。寤寐涕盈衿。惜無懷歸志。辛苦誰爲心。

羈旅遠游宦。託身承華側。撫劍遵銅輦。振纓盡祗肅。歲月一何易。寒暑忽已革。載離多悲心。感物情悽惻。慷慨遺安愈。永歎廢餐食。思樂樂難誘。曰歸歸未克。憂苦欲何爲。纏緜胷與臆。仰瞻陵霄鳥。羡爾歸飛翼。

赴洛道中作二首　　陸士衡

揔轡登長路、嗚咽辭密親。借問子何之、世網嬰我身。永歎遵北渚。遺思結南津、行行遂已遠。野途曠無人。山澤紛紆餘。林薄杳阡眠。虎嘯深谷底。雞鳴高樹巔。哀風中夜流。孤獸更我前。悲情觸物感。沈思鬱纏緜。佇立望故鄉。顧影悽自憐。

遠游越山川。山川修且廣。振策陟崇丘。案轡遵平莽、夕息抱影寐。朝徂銜思往。頓轡倚嵩巖。側聽悲風響。清露墜素輝。明月一何朗。撫几不能寐。振衣獨長想、

吳王郎中時從梁陳作　陸士衡

在昔蒙嘉運。矯迹入崇賢。假翼鳴鳳條。濯足升龍淵、玄冕無醜士、冶服使我妍、輕劍拂鞶厲。長纓麗且鮮。誰謂伏事淺、契闊踰三年。薄言肅後命。改服就藩臣。夙駕尋清軌。遠游越梁陳。感物多遠念。慷慨懷古人、

始作鎭軍參軍經曲阿作　陶淵明

弱齡寄事外、委懷在琴書。被褐欣自得。屢空常晏如、時來苟宜會。宛轡憩通衢、投策命晨旅。暫與園田疏。眇眇孤舟逝、緜緜歸思紆、我行豈不遙。登降千里餘。目倦修塗異、心念山澤居。望雲慙高鳥。臨水愧遊魚。眞想初在衿。誰謂形迹拘、聊且憑化遷。終反班生廬。

辛丑歲七月赴假還江陵夜行塗口作　陶淵明

閑居三十載、遂與塵事冥。詩書敦宿好。林園無世情。如何舍此去。遙遙至西荊。叩栧親月船、臨流別友生。涼風起將夕。夜景湛虛明。昭昭天宇闊。皛皛川上平。懷役不遑寐。中宵尙孤征。商歌非吾事、依依在耦耕。投冠旋舊墟。不爲好爵縈。養眞衡茅下。庶以善自名。

永初三年七月十六日之郡初發都　謝靈運

述職期闌暑。理棹變金素。秋岸澄夕陰。火旻團朝露。辛苦誰爲情。遊子値頽暮。愛似莊念昔。久敬曾存故。如何懷土心。持此謝遠度。李牧愧長袖。郤克慙躧步。良時不見遺。醜狀不成惡。曰余亦支離。依方早有慕。生幸休明世。親蒙英達顧。空班趙氏璧。徒乖魏王瓠。從來漸二紀。始得傍歸路。將窮山海迹。永絕賞心悟。

過始寧墅　謝靈運

束髮懷耿介。逐物遂推遷。違志似如昨。二紀及茲年。緇磷謝淸曠。疲薾慙貞堅。拙疾相倚薄。還得靜者便。剖竹守滄海。枉帆過舊山。山行窮登頓。水涉盡洄沿。巖峭嶺稠疊。洲縈渚連緜。白雲抱幽石。綠篠媚淸漣。葺宇臨迴江。築觀基曾巓。揮手告鄉曲。三載期歸旋。且爲樹枌檟。無令孤願言。

富春渚　謝靈運

宵濟漁浦潭。旦及富春郭。定山緬雲霧。赤亭無淹薄。遡流觸驚急。臨圻阻參錯。亮乏伯昏分。險過呂梁壑。洊至宜便習。兼山貴止託。平生協幽期。淪躓困微弱。久露干祿請。始果遠遊諾。宿心漸申寫。萬事俱零落。懷抱旣昭曠。外物徒龍蠖。

七里瀨　謝靈運

羈心積秋晨。晨積展遊眺。孤客傷逝湍。徒旅苦奔峭。石淺水潺湲。日落山照曜。荒林紛沃若。哀禽相叫嘯。遭物悼遷斥。存期得要妙。旣秉上皇心。豈屑末代誚。目覩嚴子瀨。想屬任公鉤。誰謂古今

殊。異代可同調。

登江中孤嶼　謝靈運

江南倦歷覽。江北曠周旋。懷雜道轉迥。尋異景不延。亂流趨正絕。孤嶼媚中川。雲日相輝映。空水共澄鮮。表靈物莫賞。蘊眞誰爲傳。想像崑山姿。緬邈區中緣。始信安期術。得盡養生年。

初去郡　謝靈運

彭薛裁知恥。貢公未遺榮。或可優貪競。豈足稱達生。伊予秉微尚。拙訥謝浮名。廬園當栖巖。卑位代躬耕。顧已雖自許。心迹猶未并。無庸妨周任。有疾像長卿。畢娶類尚子。薄游似邴生。恭承古人意。促裝返柴荊。牽絲及元興。解龜在景平。負心二十載。於今廢將迎。理棹遄還期。遵渚騖修坰。遡谿終水涉。登嶺始山行。野曠沙岸淨。天高秋月明。憩石挹飛泉。攀林搴落英。戰勝臞者肥。止鑒流歸停。即是羲唐化。獲我擊壤聲。

初發石首城　謝靈運

白珪尚可磨。斯言易爲緇。雖抱中孚爻。猶勞貝錦詩。寸心若不亮。微命察如絲。日月垂光景。成貸遂兼茲。出宿薄京畿。晨裝摶曾颸。重經平生別。再與朋知辭。故山日已遠。風波豈還時。迢迢萬里帆。茫茫終何之。游當羅浮行。息必廬霍期。越海陵三山。游湘歷九嶷。欽聖若旦暮。懷賢亦悽其。皎皎明發心。不爲歲寒欺。

道路憶山中　謝靈運

采菱調易急。江南歌不緩。楚人心昔絕。越客腸今斷。斷絕雖殊念。俱爲歸慮款。存鄉爾思積。憶山我憤懣。追尋棲息時。偃臥任縱誕。得性非外求。自已爲誰纂。不怨秋夕長。恆苦夏日短。濯流激浮湍。息陰倚密竿。懷故叵新歡。含悲忘春暖。悽悽明月吹。惻惻廣陵散。殷勤訴危柱。慷慨命促管。

入彭蠡湖口作　謝靈運

客游倦水宿。風潮難具論。洲島驟迴合。圻岸屢崩奔。乘月聽哀狖。浥露馥芳蓀。春晚綠野秀。巖高白雲屯。千念集日夜。萬感盈朝昏。攀崖照石鏡。牽葉入松門。三江事多往。九派理空存。靈物𢘟珍怪。異人祕精魂。金膏滅明光。水碧綴流溫。徒作千里曲。絃絕念彌敦。

入華子崗是麻源第三谷　謝靈運

南州實炎德。桂樹陵寒山。銅陵映碧澗。石磴瀉紅泉。既枉隱淪客。亦棲肥遁賢。險徑無測度。天路非術阡。遂登羣峯首。邈若升雲煙。羽人絕髣髴。丹丘徒空筌。圖牒復摩滅。碑版誰聞傳。莫辨百世後。安知千載前。且申獨往意。乘月弄潺湲。恆充俄頃用。豈爲古今然。

文選卷十三終

文選卷十四

詩戊　行旅下　軍戎　郊廟　樂府　挽歌　雜歌

北使洛　　顏延年

改服飭徒旅。首路跼險艱。振楫發吳洲。秣馬陵楚山。塗出梁宋郊。道由周鄭間。前登陽城路。日夕望三川。在昔輟期運。經始闊聖賢。伊瀔絕津濟。臺館無尺椽。宮陛多巢穴。城闕生雲煙。王猷升八表。嗟行方暮年。陰風振涼野。飛雲瞀窮天。臨塗未及引。置酒慘無言。隱憫徒御悲。威遲良馬煩。遊役去芳時。歸來屢徂諐。蓬心既已矣。飛薄殊亦然。

還至梁城作　　顏延年

眇默軌路長。憔悴征戍勤。昔邁先徂師。今來後歸軍。振策睠東路。傾側不及羣。息徒顧將夕。極望梁陳分。故國多喬木。空城凝寒雲。丘隴塡郛郭。銘誌滅無文。木石扃幽闥。黍苗延高墳。惟彼雍門子。吁嗟孟嘗君。愚賤同堙滅。尊貴誰獨聞。曷爲久游客。憂念坐自殷。

始安郡還都與張湘州登巴陵城樓作　　顏延年

江漢分楚望。衡巫奠南服。三湘淪洞庭。七澤藹荊牧。經塗延舊軌。登闉訪川陸。水國周地險。河山信重複。却倚雲夢林。前瞻京臺囿。清氛霽岳陽。曾暉薄瀾澳。悽矣自遠風。傷哉千里目。萬古陳往

還。百代勞起伏。存沒竟何人。炯介在明淑。請從上世人。歸來藝桑竹。

還都道中作　　鮑明遠

昨夜宿南陵。今旦入蘆洲。客行惜日月。崩波不可留。侵星赴早路。畢景逐前儔。鱗鱗夕雲起。獵獵晩風遒。騰沙鬱黃霧。翻浪揚白鷗。登艫眺淮甸。掩泣望荊流。絕目盡平原。時見遠煙浮。倏悲坐還合。俄思甚兼秋。未嘗違戸庭。安能千里游。誰令乏古節。貽此越鄉憂。

之宣城出新林浦向版橋　　謝玄暉

江路西南永。歸流東北鶩。天際識歸舟。雲中辨江樹。旅思倦搖搖。孤游昔已屢。既懽懷祿情。復協滄洲趣。囂塵自茲隔。賞心於此遇。雖無玄豹姿。終隱南山霧。

敬亭山　　謝玄暉

茲山亙百里。合沓與雲齊。隱淪既已託。靈異居然棲。上干蔽白日。下屬帶迴谿。交藤荒且蔓。樛枝聳復低。獨鶴方朝唳。饑鼯此夜啼。渫雲已漫漫。多雨亦凄凄。我行雖紆組。兼得尋幽蹊。緣源殊未極。歸徑窅如迷。要欲追奇趣。即此陵丹梯。皇恩竟已矣。茲理庶無睽。

休沐重還道中　　謝玄暉

薄游第從告。思閑願罷歸。還邛歌賦似。休汝車騎非。灞池不可別。伊川難重違。汀葭稍靡靡。江菼復依依。田鶴遠相叫。沙鴇忽爭飛。雲端楚山見。林表吳岫微。試與征徒望。鄉淚盡霑衣。賴此盈罇酌。含景望芳菲。問我勞何事。霑沐仰清徽。志狹輕軒冕。恩甚戀重闈。歲華春有酒。初服偃郊扉。

晚登三山還望京邑　謝玄暉

灞涘望長安。河陽視京縣。白日麗飛甍。參差皆可見。餘霞散成綺。澄江靜如練。喧鳥覆春洲。雜英滿芳甸。去矣方滯淫。懷哉罷歡宴。佳期悵何許。淚下如流霰。有情知望鄉。誰能鬒不變。

京路夜發　謝玄暉

擾擾整夜裝。肅肅戒徂兩。曉星正寥落。晨光復泱漭。猶霑餘露團。稍見朝霞上。故鄉邈已夐。山川脩且廣。文奏方盈前。懷人去心賞。勑躬每跼蹐。瞻恩唯震蕩。行矣倦路長。無由稅歸鞅。

望荊山　江文通

奉義至江漢。始知楚塞長。南關繞桐柏。西岳出魯陽。寒郊無留影。秋日懸清光。悲風橈重林。雲霞肅川漲。歲晏君如何。零淚霑衣裳。玉柱空掩露。金樽坐含霜。一聞苦寒奏。再使豔歌傷。

旦發漁浦潭　丘希範

漁潭霧未開。赤亭風已颺。櫂歌發中流。鳴鞞響沓障。村童忽相聚。野老時一望。詭怪石異象。嶄絕峯殊狀。森森荒樹齊。析析寒沙漲。藤垂島易陟。崖傾嶼難傍。信是永幽棲。豈徒暫清曠。坐嘯昔有委。臥治今可尙。

早發定山　沈休文

夙齡愛遠壑。晚涖見奇山。標峯綵虹外。置嶺白雲間。傾壁忽斜豎。絕頂復孤圓。歸海流漫漫。出浦

水濺濺。野棠開未落。山櫻發欲然。忘歸屬蘭杜。懷祿寄芳荃。眷言採三秀。徘徊望九仙。

新安江水至清。淺深見底。貽京邑游好　沈休文

眷言訪舟客。茲川信可珍。洞澈隨深淺。皎鏡無冬春。千仞寫喬樹。百丈見游鱗。滄浪有時濁。清濟涸無津。豈若乘斯去。俯映石磷磷。紛吾隔囂滓。寧假濯衣巾。願以潺湲水。霑君纓上塵。

從軍詩五首　王仲宣

從軍有苦樂。但問所從誰。所從神且武。焉得久勞師。相公征關右。赫怒震天威。一擧滅獯虜。再擧服羌夷。西收邊地賊。忽若俯拾遺。陳賞越丘山。酒肉踰川坻。軍中多飫饒。人馬皆溢肥。徒行兼乘還。空出有餘資。拓地三千里。往返速若飛。歌舞入鄴城。所願獲無違。晝日處大朝。日暮薄言歸。外參時明政。內不廢家私。禽獸憚為犧。良苗實已揮。竊慕負鼎翁。願厲朽鈍姿。不能效沮溺。相隨把鋤犂。孰覽夫子詩。信知所言非。

涼風厲秋節。司典告詳刑。我君順時發。桓桓東南征。汎舟蓋長川。陳卒被隰坰。征夫懷親戚。誰能無戀情。拊衿倚舟檣。眷眷思鄴城。哀彼東山人。喟然感鸛鳴。日月不安處。人誰獲恆寧。昔人從公旦。一徂輒三齡。今我神武師。暫往必速平。弃余親睦恩。輸力竭忠貞。懼無一夫用。報我素餐誠。夙夜自怵性。思逝若抽縈。將秉先登羽。豈敢聽金聲。

從軍征遐路。討彼東南夷。方舟順廣川。薄暮未安坻。白日半西山。桑梓有餘暉。蟋蟀夾岸鳴。孤鳥翩翩飛。征夫心多懷。悽愴令吾悲。下船登高防。草露霑我衣。迴身赴牀寢。此愁當告誰。身服干戈事。豈得念所私。卽戎有授命。茲理不可違。

朝發鄴都橋。暮濟白馬津。逍遙河隄上。左右望我軍。連舫踰萬艘。帶甲千萬人。率彼東南路。將定

擧勳。籌策運帷幄。一由我聖君。恨我無時謀。譬諸具官臣。鞠躬中堅內。微畫無所陳。許歷爲完士。一言猶敗秦。我有素餐責。誠愧伐檀人。雖無鉛刀用。庶幾奮薄身。

悠悠涉荒路。靡靡我心愁。四望無煙火。但見林與丘。城郭生榛棘。蹊徑無所由。蓷蒲竟廣澤。葭葦夾長流。日夕涼風發。翩翩漂吾舟。寒蟬在樹鳴。鸛鵠摩天游。客子多悲傷。淚下不可收。朝入譙郡界。曠然消人憂。雞鳴達四境。黍稷盈原疇。館宅充鄽里。士女滿莊馗。自非聖賢國。誰能享斯休。詩人美樂土。雖客猶願留。

宋郊祀歌二首　顏延年

寅威寶命。嚴恭帝祖。炳海表岱。系唐胄楚。靈監睿文。民屬睿武。奄受敷錫。宅中拓宇。亙地稱皇。罄天作主。月竁來賓。日際奉土。開元首正。禮交樂擧。六典聯事。九官列序。有牷在滌。有絜在俎。以薦王衷。以答神祜。

維聖饗帝。維孝饗親。皇乎備矣。有事上春。禮行宗祀。敬達郊禋。金枝中樹。廣樂四陳。陟配在京。降德在民。奔精昭夜。高燎煬晨。陰明浮爍。沈禜深淪。告成大報。受釐元神。月御案節。星驅扶輪。遙興遠駕。曜曜振振。

樂府四首　古辭

飮馬長城窟行

靑靑河畔草。緜緜思遠道。遠道不可思。夙昔夢見之。夢見在我傍。忽覺在他鄉。他鄉各異縣。展轉不可見。枯桑知天風。海水知天寒。入門各自媚。誰肯相爲言。客從遠方來。遺我雙鯉魚。呼兒烹鯉魚。中有尺素書。長跪讀素書。書中竟何如。上有加餐食。下有長相憶。

君子行

君子防未然。不處嫌疑間。瓜田不納履。李下不正冠。嫂叔不親授。長幼不比肩。勞謙得其柄。和光甚獨難。周公下白屋。吐哺不及餐。一沐三握髮。後世稱聖賢。

傷歌行

昭昭素明月。暉光燭我牀。憂人不能寐。耿耿夜何長。微風吹閨闥。羅帷自飄颺。攬衣曳長帶。屣履下高堂。東西安所之。徘徊以彷徨。春鳥翻南飛。翩翩獨翺翔。悲聲命儔匹。哀鳴傷我腸。感物懷所思。泣涕忽霑裳。佇立吐高吟。舒憤訴穹蒼。

長歌行

青青園中葵。朝露待日晞。陽春布德澤。萬物生光輝。常恐秋節至。焜黃華葉衰。百川東到海。何時復西歸。少壯不努力。老大徒傷悲。

怨歌行　　班婕妤

新裂齊紈素。鮮絜如霜雪。裁成合歡扇。團團似明月。出入君懷袖。動搖微風發。常恐秋節至。涼飈奪炎熱。弃捐篋笥中。恩情中道絕。

樂府一首　　魏武帝

短歌行

對酒當歌。人生幾何。譬如朝露。去日苦多。慨當以慷。憂思難忘。何以解憂。唯有杜康。青青子衿。悠悠我心。但爲君故。沈吟至今。呦呦鹿鳴。食野之苹。我有嘉賓。鼓瑟吹笙。明明如月。何時可掇。憂從

中來，不可斷絕。越陌度阡。枉用相存。契闊談讌。心念舊恩。月明星希。烏鵲南飛。繞樹三匝。何枝可依。山不厭高。海不厭深。周公吐哺。天下歸心。

苦寒行

北上太行山。艱哉何巍巍。羊腸阪詰屈。車輪為之摧。樹木何蕭索。北風聲正悲。熊羆對我蹲。虎豹夾路啼。谿谷少人民。雪落何霏霏。延頸長歎息。遠行多所懷。我心何怫鬱。思欲一東歸。水深橋梁絕。中道正徘徊。迷惑失故路。薄暮無宿棲。行行日已遠。人馬同時饑。擔囊行取薪。斧冰持作糜。悲彼東山詩。悠悠使我哀。

樂府二首　　魏文帝

善哉行

上山采薇。薄暮苦饑。谿谷多風。霜露沾衣。野雉羣雊。猴猨相追。還望故鄉。鬱何壘壘。高山有崖。林木有枝。憂來無方。人莫之知。人生如寄。多憂何為。今我不樂。日月如馳。湯湯川流。中有行舟。隨波轉薄。有似客遊。策我良馬。被我輕裘。載馳載驅。聊以忘憂。

燕歌行

秋風蕭瑟天氣涼。草木搖落露為霜。羣鷰辭歸鴈南翔。念君客遊思斷腸。慊慊思歸戀故鄉。何為淹留寄他方。賤妾煢煢守空房。憂來思君不敢忘。不覺淚下霑衣裳。援琴鳴絃發清商。短歌微吟不能長。明月皎皎照我牀。星漢西流夜未央。牽牛織女遙相望。爾獨何辜恨河梁。

樂府詩四首　曹子建

箜篌引

置酒高殿上。親友從我遊。中厨辦豐膳。烹羊宰肥牛。秦箏何慷慨。齊瑟和且柔。陽阿奏奇舞。京洛出名謳。樂飲過三爵。緩帶傾庶羞。主稱千金壽。賓奉萬年酬。久要不可忘。薄終義所尤。謙謙君子德。磬折欲何求。驚風飄白日。光景馳西流。盛時不可再。百年忽我遒。生在華屋處。零落歸山丘。先民誰不死。知命復何憂。

名都篇

名都多妖女。京洛出少年。寶劍直千金。被服麗且鮮。鬭雞東郊道。走馬長楸間。馳騁未能半。雙兎過我前。攬弓捷鳴鏑。長驅上南山。左挽因右發。一縱兩禽連。餘巧未及展。仰手接飛鳶。觀者咸稱善。衆工歸我妍。歸來宴平樂。美酒斗十千。膾鯉臇胎鰕。炮鼈炙熊蹯。鳴儔嘯匹侶。列坐竟長筵。連翩擊鞠壤。巧捷惟萬端。白日西南馳。光景不可攀。雲散還城邑。清晨復來還。

美女篇

美女妖且閑。采桑岐路間。柔條紛冉冉。葉落何翩翩。攘袖見素手。皓腕約金環。頭上金爵釵。腰佩翠琅玕。明珠交玉體。珊瑚間木難。羅衣何飄飄。輕裾隨風還。顧眄遺光彩。長嘯氣若蘭。行徒用息駕。休者以忘餐。借問女安居。乃在城南端。青樓臨大路。高門結重關。容華耀朝日。誰不希令顏。媒氏何所營。玉帛不時安。佳人慕高義。求賢良獨難。衆人徒嗷嗷。安知彼所觀。盛年處房室。中夜起長歎。

白馬篇

白馬飾金羈。連翩西北馳。借問誰家子。幽幷遊俠兒。少小去鄉邑。揚聲沙漠垂。宿昔秉良弓。楛矢何參差。控弦破左的。右發摧月支。仰手接飛猱。俯身散馬蹄。狡捷過猴猨。勇剽若豹螭。邊城多警急。虜騎數遷移。羽檄從北來。厲馬登高隄。長驅蹈匈奴。左顧陵鮮卑。弃身鋒刃端。性命安可懷。父母且不顧。何言子與妻。名編壯士籍。不得中顧私。捐軀赴國難。視死忽如歸。

王明君辭 幷序　　石季倫

王明君者。本是王昭君。以觸文帝諱改之。匈奴盛請婚於漢。元帝以後宮良家子昭君配焉。昔公主嫁烏孫。令琵琶馬上作樂。以慰其道路之思。其送明君。亦必爾也。其造新曲。多哀怨之聲。故敍之於紙云爾。

我本漢家子。將適單于庭。辭訣未及終。前驅已抗旌。僕御涕流離。轅馬悲且鳴。哀鬱傷五內。泣淚霑珠纓。行行日已遠。遂造匈奴城。延我於穹廬。加我閼氏名。殊類非所安。雖貴非所榮。父子見陵辱。對之慙且驚。殺身良不易。默默以苟生。苟生亦何聊。積思常憤盈。願假飛鴻翼。乘之以遐征。飛鴻不我顧。佇立以屛營。昔爲匣中玉。今爲糞上英。朝華不足歡。甘與秋草幷。傳語後世人。遠嫁難爲情。

樂府詩十七首　　陸士衡

猛虎行

渴不飲盜泉水・熱不息惡木陰。惡木豈無枝。志士多苦心・整駕肅時命。杖策將遠尋。饑食猛虎窟・寒栖野雀林。日歸功未建。時往歲載陰。崇雲臨岸駭。鳴條隨風吟。靜言幽谷底。長嘯高山岑。急絃無懦響。亮節難爲音。人生誠未易。曷云開此衿。眷我耿介懷。俯仰愧古今。

君子行

天道夷且簡。人道嶮而難。休咎相乘躡。翻覆若波瀾。去疾苦不遠。疑似實生患。近火固宜熱。履冰豈惡寒。撥蜂滅天道。拾塵惑孔顏。逐臣尚何有。弃友焉足歎。福鍾恆有兆。禍集非無端。天損未易辭。人益猶可懽。朗鑒豈遠假。取之在傾冠。近情苦自信。君子防未然。

從軍行

苦哉遠征人。飄飄窮四遐。南陟五嶺巓。北戍長城阿・深谷邈無底・崇山鬱嵯峨。奮臂攀喬木・振迹涉流沙。隆暑固已慘。涼風嚴且苛。夏條焦鮮藻。寒冰結衝波。胡馬如雲屯。越旗亦星羅。飛鋒無絕影。鳴鏑自相和。朝食不免冑。夕息常負戈。苦哉遠征人。撫心悲如何・

豫章行

汎舟清山渚。遙望高山陰。川陸殊途軌・懿親將遠尋。三荊歡同株。四鳥悲異林。樂會良自古。悼別豈獨今。寄世將幾何。日昃無停陰。前路既已多。後塗隨年侵。促促薄暮景。亹亹鮮克禁。曷爲復以茲。曾是懷苦心。遠節嬰物淺。近情能不深。行矣保嘉福。景絕繼以音。

苦寒行

北游幽朔城。涼野多嶮難。俯入穹谷底。仰陟高山盤。凝冰結重澗。積雪被長巒。陰雲興巖側。悲風鳴樹端。不覩白日景。但聞寒鳥喧。猛虎憑林嘯。玄猿臨岸歎。夕宿喬木下。慘愴恆鮮歡。渴飲堅冰漿。饑待零露餐。離思固已久。寤寐莫與言。劇哉行役人。慊慊恆苦寒。

飲馬長城窟行

驅馬陟陰山。山高馬不前。往問陰山候。勁虜在燕然。戎車無停軌。旌旆屢徂遷。仰憑積雪巖。俯涉堅冰川。冬來秋未反。去家邈以緜。玁狁亮未夷。征人豈徒旋。末德爭先鳴。凶器無兩全。師克薄賞行。軍沒微軀捐。將遵甘陳迹。收功單于旃。振旅勞歸士。受爵槀街傳。

門有車馬客行

門有車馬客。駕言發故鄉。念君久不歸。濡跡涉江湘。投袂赴門塗。攬衣不及裳。撫膺攜客泣。掩淚敍溫涼。借問邦族間。惻愴論存亡。親友多零落。舊齒皆凋喪。市朝互遷易。城闕或丘荒。墳壟日月多。松柏鬱芒芒。天道信崇替。人生安得長。慷慨惟平生。俛仰獨悲傷。

君子有所思行

命駕登北山。延佇望城郭。廛里一何盛。街巷紛漠漠。甲第崇高闥。洞房結阿閣。曲池何湛湛。清川帶華薄。邃宇列綺窗。蘭室接羅幕。淑貌色斯升。哀音承顏作。人生誠行邁。容華隨年落。善哉膏粱士。營生奥且博。宴安消靈根。酖毒不可恪。無以肉食資。取笑葵與藿。

齊謳行

營丘負海曲。沃野爽且平。洪川控河濟。崇山入高冥。東被姑尤側。南界聊攝城。海物錯萬類。陸產尙千名。孟諸吞楚夢。百二侔秦京。惟師恢東表。桓后定周傾。天道有迭代。人道無久盈。鄙哉牛山歎。未及至人情。爽鳩苟已徂。吾子安得停。行行將復去。長存非所營。

日出東南隅行

或曰羅敷豔歌

扶桑升朝暉。照此高臺端。高臺多妖麗。濬房出清顏。淑貌耀皎日。惠心清且閑。美目揚玉澤。蛾眉象翠翰。鮮膚一何潤。秀色若可餐。窈窕多容儀。婉媚巧笑言。暮春春服成。粲粲綺與紈。金雀垂藻翹。瓊珮結瑤璠。方駕揚清塵。濯足洛水瀾。藹藹風雲會。佳人一何繁。南崖充羅幕。北渚盈軿軒。清川含藻景。高崖被華丹。馥馥芳袖揮。泠泠纖指彈。悲歌吐清響。雅舞播幽蘭。丹脣含九秋。妍迹陵七盤。赴曲迅驚鴻。蹈節如集鸞。綺態隨顏變。沈姿無乏源。俯仰紛阿那。顧步咸可懽。遺芳結飛飈。浮景映清湍。冶容不足詠。春游良可歎。

長安有狹邪行

伊洛有岐路。岐路交朱輪。輕蓋承華景。騰步躡飛塵。鳴玉豈樸儒。憑軾皆俊民。烈心厲勁秋。麗服鮮芳春。余本倦游客。豪彥多舊親。傾蓋承芳訊。欲鳴當及晨。守一不足矜。歧路良可遵。規行無曠迹。矩步豈逮人。投足緖已爾。四時不必循。將遂殊塗軌。要子同歸津。

前緩聲歌

游仙聚靈族。高會曾城阿。長風萬里擧。慶雲鬱嵯峨。宓妃與洛浦。王韓起太華。北徵瑤臺女。南要湘川娥。蕭蕭霄駕動。翩翩翠蓋羅。羽旗棲瓊鸞。玉衡吐鳴和。太容揮高絃。洪崖發清歌。獻酬既已周。輕擧乘紫霞。摠轡扶桑枝。濯足湯谷波。清輝溢天門。垂慶惠皇家。

長歌行

逝矣經天日。悲哉帶地川。寸陰無停晷。尺波豈徒旋。年往迅勁矢。時來亮急弦。遠期鮮克及。盈數固希全。容華夙夜零。體澤坐自捐。茲物苟難停。吾壽安得延。俛仰逝將過。倏忽幾何間。慷慨亦焉訴。天道良自然。但恨功名薄。竹帛無所宣。迨及歲未暮。長歌承我閑。

吳趨行

楚妃且勿歎。齊娥且莫謳。四坐並清聽。聽我歌吳趨。吳趨自有始。請從昌門起。昌門何嵯峨。飛閣跨通波。重欒承游極。回軒啓曲阿。藹藹慶雲被。泠泠祥風過。山澤多藏育。土風清且嘉。泰伯導仁風。仲雍揚其波。穆穆延陵子。灼灼光諸華。王迹隤陽九。帝功興四遐。大皇自富春。矯手頓世羅。邦彥應運興。粲若春林葩。屬城咸有士。吳邑最爲多。八族未足侈。四姓實名家。文德熙淳懿。武功侔山河。禮讓何濟濟。流化自滂沱。淑美難窮紀。商推爲此歌。

塘上行

江蘺生幽渚。微芳不足宣。被蒙風雲會。移居華池邊。發藻玉臺下。垂影滄浪泉。沾潤既已渥。結根奧且堅。四節逝不處。華繁難久鮮。淑氣與時殞。餘芳隨風捐。天道有遷易。人理無常全。男懽智傾愚。女愛衰避妍。不惜微軀退。但懼蒼蠅前。願君廣末光。照妾薄暮年。

悲哉行

游客芳春林。春芳傷客心。和風飛清響。鮮雲垂薄陰。蕙草饒淑氣。時鳥多好音。翩翩鳴鳩羽。喈喈倉庚音。幽蘭盈通谷。長秀被高岑。女蘿亦有託。蔓葛亦有尋。傷哉遊客士。憂思一何深。目感隨氣草。耳悲詠時禽。寤寐多遠念。緬然若飛沈。願託歸風響。寄言遺所欽。

短歌行

置酒高堂。悲歌臨觴。人壽幾何。逝如朝霜。時無重至。華不再陽。蘋以春暉。蘭以秋芳。來日苦短。去日苦長。今我不樂。蟋蟀在房。樂以會興。悲以別章。豈曰無感。憂爲子忘。我酒旣旨。我肴旣臧。短歌有詠。長夜無荒。

樂府詩　謝靈運

會吟行

六引緩清唱。三調佇繁音。列筵皆靜寂。咸共聆會吟。會吟自有初。請從文命敷。敷績壺冀始。刋木至江汜。列宿炳天文。負海橫地理。連峯競千仞。背流各百里。滮池溉粳稻。輕雲曖松杞。兩京愧佳麗。三都豈能似。層臺指中天。高墉積崇雉。飛燕躍廣途。鷁首戲清沚。肆呈窈窕容。路曜便娟子。自來彌年代。賢達不可紀。勾踐善廢興。越叟識行止。范蠡出江湖。梅福入城市。東方就旅逸。梁鴻去桑梓。牽綴書土風。辭殫意未已。

樂府詩八首　　鮑明遠

東武吟

主人且勿諠。賤子歌一言。僕本寒鄉士。出身蒙漢恩。始隨張校尉。占募到河源。後逐李輕車。追虜窮塞垣。密塗亙萬里。寧歲猶七奔。肌力盡鞍甲。心思歷涼溫。將軍既下世。部曲亦罕存。時事一朝異。孤績誰復論。少壯辭家去。窮老還入門。腰鎌刈葵藿。倚杖牧雞豚。昔如韝上鷹。今似檻中猿。徒結千載恨。空負百年怨。弃席思君幄。疲馬戀君軒。願垂晉主惠。不愧田子魂。

出自薊北門行

羽檄起邊亭。烽火入咸陽。徵騎屯廣武。分兵救朔方。嚴秋筋竿勁。虜陣精且彊。天子按劍怒。使者遙相望。鴈行緣石徑。魚貫度飛梁。簫鼓流漢思。旌甲被胡霜。疾風衝塞起。沙礫自飄揚。馬毛縮如蝟。角弓不可張。時危見臣節。世亂識忠良。投軀報明主。身死爲國殤。

結客少年場行

驄馬金絡頭。錦帶佩吳鉤。失意杯酒間。白刃起相讐。追兵一旦至。負劍遠行遊。去鄉三十載。復得還舊丘。升高臨四關。表裏望皇州。九塗平若水。雙闕似雲浮。扶宮羅將相。夾道列王侯。日中市朝滿。車馬若川流。擊鍾陳鼎食。方駕自相求。今我獨何爲。埳壈懷百憂。

東門行

傷禽惡弦驚。倦客惡離聲。離聲斷客情。賓御皆涕零。涕零心斷絕。將去復還訣。一息不相知。何況異鄉別。遙遙征駕遠。杳杳落日晚。居人掩閨臥。行子夜中飯。野風吹秋木。行子心腸斷。食梅常苦酸。衣葛常苦寒。絲竹徒滿坐。憂人不解顏。長歌欲自慰。彌起長恨端。

苦熱行

赤阪橫西阻。火山赫南威。身熱頭且痛。鳥墮魂來歸。湯泉發雲潭。焦煙起石圻。日月有恆昏。雨露未常晞。丹蛇踰百尺。玄蜂盈十圍。含沙射流影。吹蠱痛行暉。瘴氣晝熏體。菵露夜沾衣。饑猨莫下食。晨禽不敢飛。毒涇尚多死。渡瀘寧具腓。生軀蹈死地。昌志登禍機。戈船榮既薄。伏波賞亦微。爵輕君尚惜。士重安可希。

白頭吟

直如朱絲繩。清如玉壺冰。何慚宿昔意。猜恨坐相仍。人情賤恩舊。世議逐衰興。毫髮一爲瑕。丘山不可勝。食苗實碩鼠。玷白信蒼蠅。鳧鵠遠成美。薪芻前見陵。申黜褒女進。班去趙姬昇。周王日淪惑。漢帝益嗟稱。心賞猶難恃。貌恭豈易憑。古來共如此。非君獨撫膺。

放歌行

蓼蟲避葵堇。習苦不言非。小人自齷齪。安知曠士懷。雞鳴洛城裏。禁門平旦開。冠蓋縱橫至。車騎四方來。素帶曳長飇。華纓結遠埃。日中安能止。鐘鳴猶未歸。夷世不可逢。賢君信愛才。明慮自天斷。不受外嫌猜。一言分珪爵。片善辭草萊。豈伊白璧賜。將起黃金臺。今君有何疾。臨路獨遲迴。

升天行

家世宅關輔。勝帶宦王城。備聞十帝事。委曲兩都情。倦見物興衰。驟覩俗屯平。翩翻類迴掌。怳惚似朝榮。窮塗悔短計。晚志重長生。從師入遠岳。結友事仙靈。五圖發金記。九籥隱丹經。風餐委松宿。雲臥恣天行。冠霞登綵閣。解玉飲椒庭。蹔游越萬里。近別數千齡。鳳臺無還駕。簫管有遺聲。何時與爾曹。啄腐共吞腥。

鼓吹曲　謝玄暉

江南佳麗地。金陵帝王州。逶迤帶淥水。迢遞起朱樓。飛甍夾馳道。垂楊蔭御溝。凝笳翼高蓋。疊鼓送華輈。獻納雲臺表。功名良可收。

挽歌詩　繆熙伯

生時游國都。死沒弃中野。朝發高堂上。暮宿黃泉下。白日入虞淵。懸車息駟馬。造化雖神明。安能復存我。形容稍歇滅。齒髮行當墮。自古皆有然。誰能離此者。

挽歌詩三首　陸士衡

卜擇考休貞。嘉命咸在玆。夙駕警徒御。結轡頓重基。龍帾被廣柳。前驅矯輕旗。殯宮何嘈嘈。哀響沸中闈。中闈且勿讙。聽我薤露詩。死生各異倫。祖載當有時。舍爵兩楹位。啟殯進靈轜。飲餞觴莫舉。出宿歸無期。帷袵曠遺影。棟宇與子辭。周親咸奔湊。友朋自遠來。翼翼飛輕軒。駸駸策素騏。按轡遵長薄。送子長夜臺。呼子子不聞。泣子子不知。歎息重櫬側。念我疇昔時。三秋猶足收。萬世安

可思。殆沒身易亡。殺子非所能。含言言哽咽。揮涕涕流離。流離親友思。惆悵神不泰。素驂佇轜軒。玄駟騖飛蓋。哀鳴興殯宮。廻遲悲野外。魂輿寂無響。但見冠與帶。備物象平生。長旌誰爲旆。悲風徽行軌。傾雲結流藹。振策指靈丘。駕言從此逝。重阜何崔嵬。玄廬竄其間。旁薄立四極。穹隆放蒼天。側聽陰溝涌。臥觀天井懸。廣宵何寥廓。大暮安可晨。人往有反歲。我行無歸年。昔居四民宅。今託萬鬼隣。昔爲七尺軀。今成灰與塵。金玉素所佩。鴻毛今不振。豐肌饗螻蟻。妍骸永夷泯。壽堂延魑魅。虛無自相賓。螻蟻爾何怨。魑魅我何親。拊心痛荼毒。永歎莫爲陳。

挽歌詩　陶淵明

荒草何茫茫。白楊亦蕭蕭。嚴霜九月中。送我出遠郊。四面無人居。高墳正嶕嶢。馬爲仰天鳴。風爲自蕭條。幽室一已閉。千年不復朝。千年不復朝。賢達無奈何。向來相送人。各已歸其家。親戚或餘悲。他人亦已歌。死去何所道。託體同山阿。

雜歌

荊軻歌　幷序

燕太子丹。使荊軻刺秦王。丹祖送於易水上。高漸離擊筑。荊軻歌。宋如意和之。曰。

風蕭蕭兮易水寒。壯士一去兮不復還。

漢高祖歌　幷序

高祖還過沛。留置酒沛宮。悉召故人父老子弟佐酒。發沛中兒。得百二十人。教之歌。酒酣。上擊筑

自歌曰。

大風起兮雲飛揚。威加海內兮歸故鄉。安得猛士兮守四方。

扶風歌　劉越石

朝發廣莫門。暮宿丹水山。左手彎繁弱。右手揮龍淵。顧瞻望宮闕。俯仰御飛軒。據鞍長歎息。淚下如流泉。繫馬長松下。發鞍高岳頭。烈烈悲風起。泠泠澗水流。揮手長相謝。哽咽不能言。浮雲爲我結。歸鳥爲我旋。去家日已遠。安知存與亡。慷慨窮林中。抱膝獨摧藏。麋鹿遊我前。猨猴戲我側。資糧既乏盡。薇蕨安可食。攬轡命徒侶。吟嘯絕巖中。君子道微矣。夫子故有窮。惟昔李騫期。寄在匈奴庭。忠信反獲罪。漢武不見明。我欲竟此曲。此曲悲且長。弃置勿重陳。重陳令心傷。

中山王孺子妾歌　陸韓卿

如姬寢臥內。班婕坐同車。洪波陪飲帳。林光宴秦餘。歲暮寒飇及。秋水落芙蕖。子瑕矯後駕。安陵泣前魚。賤妾終已矣。君子定焉如。

文選卷十四終

文選卷十五

詩己　雜詩

古詩十九首

行行重行行。與君生別離。相去萬餘里。各在天一涯。道路阻且長。會面安可知。胡馬依北風。越鳥巢南枝。相去日已遠。衣帶日已緩。浮雲蔽白日。游子不顧返。思君令人老。歲月忽已晚。棄捐勿復道。努力加餐飯。青青河畔草。鬱鬱園中柳。盈盈樓上女。皎皎當窗牖。娥娥紅粉粧。纖纖出素手。昔爲倡家女。今爲蕩子婦。蕩子行不歸。空牀難獨守。青青陵上柏。磊磊澗中石。人生天地間。忽如遠行客。斗酒相娛樂。聊厚不爲薄。驅車策駑馬。游戲宛與洛。洛中何鬱鬱。冠帶自相索。長衢羅夾巷。王侯多第宅。兩宮遙相望。雙闕百餘尺。極宴娛心意。戚戚何所迫。今日良宴會。歡樂難具陳。彈箏奮逸響。新聲妙入神。令德唱高言。識曲聽其眞。齊心同所願。含意俱未申。人生寄一世。奄忽若飇塵。何不策高足。先據要路津。無爲守窮賤。轗軻長苦辛。西北有高樓。上與浮雲齊。交疏結綺窗。阿閣三重階。上有絃歌聲。音響一何悲。誰能爲此曲。無乃杞梁妻。淸商隨風發。中曲正徘徊。一彈再三歎。慷慨有餘哀。不惜歌者苦。但傷知音稀。願爲雙鳴鶴。奮翅起高飛。涉江采芙蓉。蘭澤多芳草。采之欲遺誰。所思在遠道。還顧望舊鄉。長路漫浩浩。同心而離居。憂傷以終老。明月皎夜光。促織鳴東壁。玉衡指孟冬。衆星何歷歷。白露霑野草。時節忽復易。秋蟬鳴樹間。玄鳥逝安適。昔我同門友。高擧振六翮。不念攜手好。棄我如遺跡。南箕北有斗。牽牛不負軛。良無磐石固。虛名復何益。冉冉孤生

竹。結根泰山阿。與君爲新婚。兔絲附女蘿。兔絲生有時。夫婦會有宜。千里遠結婚。悠悠隔山陂。思君令人老。軒車來何遲。傷彼蕙蘭花。含英揚光輝。過時而不采。將隨秋草萎。君亮執高節。賤妾亦何爲。庭中有奇樹。綠葉發華滋。攀條折其榮。將以遺所思。馨香盈懷袖。路遠莫致之。此物何足貴。但感別經時。迢迢牽牛星。皎皎河漢女。纖纖擢素手。札札弄機杼。終日不成章。泣涕零如雨。河漢淸且淺。相去復幾許。盈盈一水間。脈脈不得語。迴車駕言邁。悠悠涉長道。四顧何茫茫。東風搖百草。所遇無故物。焉得不速老。盛衰各有時。立身苦不早。人生非金石。豈能長壽考。奄忽隨物化。榮名以爲寶。東城高且長。逶迤自相屬。迴風動地起。秋草萋已綠。四時更變化。歲暮一何速。晨風懷苦心。蟋蟀傷局促。蕩滌放情志。何爲自結束。燕趙多佳人。美者顏如玉。被服羅裳衣。當戶理淸曲。音響一何悲。絃急知柱促。馳情整巾帶。沈吟聊躑躅。思爲雙飛鷰。銜泥巢君屋。驅車上東門。遙望郭北墓。白楊何蕭蕭。松柏夾廣路。下有陳死人。杳杳卽長暮。潛寐黃泉下。千載永不寤。浩浩陰陽移。年命如朝露。人生忽如寄。壽無金石固。萬歲更相送。聖賢莫能度。服食求神仙。多爲藥所悞。不如飮美酒。被服紈與素。去者日以疎。生者日以親。出郭門直視。但見丘與墳。古墓犂爲田。松柏摧爲薪。白楊多悲風。蕭蕭愁殺人。思還故里閭。欲歸道無因。生年不滿百。常懷千歲憂。晝短苦夜長。何不秉燭遊。爲樂當及時。何能待來茲。愚者愛惜費。但爲後世嗤。仙人王子喬。難可與等期。凜凜歲云暮。螻蛄夕鳴悲。凉風率已厲。游子寒無衣。錦衾遺洛浦。同袍與我違。獨宿累長夜。夢想見容輝。良人惟古懽。枉駕惠前綏。願得常巧笑。攜手同車歸。既來不須臾。又不處重闈。亮無晨風翼。焉能凌風飛。眄睞以適意。引領遙相晞。徙倚懷感傷。垂涕霑雙扉。孟冬寒氣至。北風何慘慄。愁多知夜長。仰觀衆星列。三五明月滿。四五蟾兔缺。客從遠方來。遺我一書札。上言長相思。下言久離別。置書懷袖中。三歲字不滅。一心抱區區。懼君不識察。客從遠方來。遺我一端綺。相去萬餘里。故人心尚爾。文綵雙鴛鴦。裁爲合歡被。著以長相思。緣以結不解。以膠投漆中。誰能別離此。明月何皎皎。照我羅牀

帷。憂愁不能寐。攬衣起徘徊。客行雖云樂。不如早旋歸。出戶獨彷徨。愁思當告誰。引領還入房。淚下霑裳衣。

與蘇武詩三首　李少卿

良時不再至。離別在須臾。屏營衢路側。執手野踟蹰。仰視浮雲馳。奄忽互相踰。風波一失所。各在天一隅。長當從此別。且復立斯須。欲因晨風發。送子以賤軀。

嘉會難再遇。三載爲千秋。臨河濯長纓。念子悵悠悠。遠望悲風至。對酒不能酬。行人懷往路。何以慰我愁。獨有盈觴酒。與子結綢繆。

攜手上河梁。游子暮何之。徘徊蹊路側。悢悢不能辭。行人難久留。各言長相思。安知非日月。弦望自有時。努力崇明德。皓首以爲期。

詩四首　蘇子卿

骨肉緣枝葉。結交亦相因。四海皆兄弟。誰爲行路人。況我連枝樹。與子同一身。昔爲鴛與鴦。今爲參與辰。昔者常相近。邈若胡與秦。惟念當離別。恩情日以新。鹿鳴思野草。可以喩嘉賓。我有一罇酒。欲以贈遠人。願子留斟酌。敍此平生親。

黃鵠一遠別。千里顧徘徊。胡馬失其羣。思心常依依。何況雙飛龍。羽翼臨當乖。幸有絃歌曲。可以喩中懷。請爲游子吟。泠泠一何悲。絲竹厲清聲。慷慨有餘哀。長歌正激烈。中心愴以摧。欲展清商曲。念子不能歸。俛仰內傷心。淚下不可揮。願爲雙黃鵠。送子俱遠飛。

結髮爲夫妻。恩愛兩不疑。歡娛在今夕。嬿婉及良時。征夫懷往路。起視夜何其。參辰皆已沒。去去從此辭。行役在戰場。相見未有期。握手一長歎。淚爲生別滋。努力愛春花。莫忘歡樂時。生當復來

歸。死當長相思。

燭燭晨明月。馥馥我蘭芳。芬馨良夜發。隨風聞我堂。征夫懷遠路。游子戀故鄉。寒冬十二月。晨起踐嚴霜。俯觀江漢流。仰視浮雲翔。良友遠離別。各在天一方。山海隔中州。相去悠且長。嘉會難兩遇。歡樂殊未央。願君崇令德。隨時愛景光。

四愁詩四首 幷序

張子平

張衡不樂久處機密。陽嘉中。出爲河間相。時國王驕奢不遵法度。又多豪右幷兼之家。衡下車治威嚴。能內察屬縣。姦猾行巧劫。皆密知名。下吏收捕。盡服擒。諸豪俠游客悉惶懼。逃出境。郡中大治。爭訟息。獄無繫囚。時天下漸弊。鬱鬱不得志。爲四愁詩。屈原以美人爲君子。以珍寶爲仁義。以水深雪雰爲小人。思以道術相報貽於時君。而懼讒邪不得以通。其辭曰。

一思曰。我所思兮在太山。欲往從之梁父艱。側身東望涕霑翰。美人贈我金錯刀。何以報之英瓊瑤。路遠莫致倚逍遙。何爲懷憂心煩勞。

二思曰。我所思兮在桂林。欲往從之湘水深。側身南望涕霑襟。美人贈我金琅玕。何以報之雙玉盤。路遠莫致倚惆悵。何爲懷憂心煩傷。

三思曰。我所思兮在漢陽。欲往從之隴阪長。側身西望涕霑裳。美人贈我貂襜褕。何以報之明月珠。路遠莫致倚踟躕。何爲懷憂心煩紆。

四思曰。我所思兮在鴈門。欲往從之雪紛紛。側身北望涕霑巾。美人贈我錦繡段。何以報之青玉案。路遠莫致倚增歎。何爲懷憂心煩惋。

雜詩

王仲宣

日暮游西園。冀寫憂思情。曲池揚素波。列樹敷丹榮。上有特栖鳥。懷春向我鳴。褰衽欲從之。路險不得征。徘徊不能去。佇立望爾形。風飈揚塵起。白日忽已冥。廻身入空房。託夢通精誠。人欲天不違。何懼不合幷。

雜詩　劉公幹

職事煩塡委。文墨紛消散。馳翰未暇食。日昃不知晏。沈迷簿領書。回回自昏亂。釋此出西城。登高且游觀。方塘含白水。中有鳧與鴈。安得肅肅羽。從爾浮波瀾。

雜詩二首　魏文帝

漫漫秋夜長。烈烈北風涼。展轉不能寐。披衣起彷徨。彷徨忽已久。白露霑我裳。俯視淸水波。仰看明月光。天漢廻西流。三五正從橫。草蟲鳴何悲。孤鴈獨南翔。鬱鬱多悲思。緜緜思故鄉。願飛安得翼。欲濟河無梁。向風長歎息。斷絕我中腸。

西北有浮雲。亭亭如車蓋。惜哉時不遇。適與飄風會。吹我東南行。行行至吳會。吳會非我鄉。安能久留滯。棄置勿復陳。客子常畏人。

朔風詩　曹子建

仰彼朔風。用懷魏都。願騁代馬。倏忽北徂。凱風永至。思彼蠻方。願隨越鳥。翻飛南翔。四氣代謝。懸景運周。別如俯仰。脫若三秋。昔我初遷。朱華未希。今我旋止。素雪云飛。俯降千仞。仰登天阻。風飄蓬飛。載離寒暑。千仞易陟。天阻可越。昔我同袍。今永乖別。子好芳草。豈忘爾貽。繁華將茂。秋霜悴之。君不垂眷。豈云其誠。秋蘭可喩。桂樹冬榮。絃歌蕩思。誰與銷憂。臨川暮思。何爲泛舟。豈無和樂。

游非我鄰。誰忘泛舟。愧無榜人。

雜詩六首　　曹子建

高臺多悲風。朝日照北林。之子在萬里。江湖迥且深。方舟安可極。離思故難任。孤鴈飛南遊。過庭長哀吟。翹思慕遠人。願欲託遺音。形影忽不見。翩翩傷我心。

轉蓬離本根。飄颻隨長風。何意迴飈舉。吹我入雲中。高高上無極。天路安可窮。類此游客子。捐軀遠從戎。毛褐不掩形。薇藿常不充。去去莫復道。沈憂令人老。

西北有織婦。綺縞何繽紛。明晨秉機杼。日昃不成文。太息終長夜。悲嘯入青雲。妾身守空閨。良人行從軍。自期三年歸。今已歷九春。飛鳥繞樹翔。噭噭鳴索羣。願爲南流景。馳光見我君。

南國有佳人。容華若桃李。朝游江北岸。夕宿瀟湘沚。時俗薄朱顏。誰爲發皓齒。俛仰歲將暮。榮耀難久恃。

僕夫早嚴駕。吾將遠行游。遠游欲何之。吳國爲我仇。將騁萬里塗。東路安足由。江介多悲風。淮泗馳急流。願欲一輕濟。惜哉無方舟。閑居非吾志。甘心赴國憂。

飛觀百餘尺。臨牖御櫺軒。遠望周千里。朝夕見平原。烈士多悲心。小人媮自閑。國讎亮不塞。甘心思喪元。拊劍西南望。思欲赴泰山。絃急悲聲發。聆我慷慨言。

情詩　　曹子建

微陰翳陽景。清風飄我衣。游魚潛淥水。翔鳥薄天飛。眇眇客行士。遙役不得歸。始出嚴霜結。今來白露晞。游子歎黍離。處者歌式微。慷慨對嘉賓。悽愴內傷悲。

雜詩　嵇叔夜

微風清扇。雲氣四除。皎皎亮月。麗于高隅。興命公子。攜手同車。龍驥翼翼。揚鑣踟躕。肅肅宵征。造我友廬。光燈吐輝。華幔長舒。鸞觴酌醴。神鼎烹魚。絃超子野。歎過緜駒。流詠太素。俯讚玄虛。孰克英賢。與爾剖符。

雜詩　傅休奕

志士惜日短。愁人知夜長。攝衣步前庭。仰觀南鴈翔。玄景隨形運。流響歸空房。清風何飄颻。微月出西方。繁星依青天。列宿自成行。蟬鳴高樹間。野鳥號東廂。纖雲時髣髴。渥露霑我裳。良時無停景。北斗忽低昂。常恐寒節至。凝氣結爲霜。落葉隨風摧。一絕如流光。

雜詩　張茂先

暑度隨天運。四時互相承。東壁正昏中。固陰寒節升。繁霜降當夕。悲風中夜興。朱火青無光。蘭膏坐自凝。重衾無暖氣。挾纊如懷冰。伏枕終遙昔。寤言莫予應。永思慮崇替。慨然獨撫膺。

情詩二首　張茂先

清風動帷簾。晨月照幽房。佳人處遐遠。蘭室無容光。襟懷擁虛景。輕衾覆空牀。居歡惕夜促。在感怨宵長。拊枕獨嘯歎。感慨心內傷。

游目四野外。逍遙獨延佇。蘭蕙緣清渠。繁華蔭綠渚。佳人不在茲。取此欲誰與。巢居知風寒。穴處識陰雨。不曾遠別離。安知慕儔侶。

園葵詩　陸士衡

種葵北園中。葵生鬱萋萋。朝榮東北傾。夕穎西南晞。零露垂鮮澤。朗月耀其輝。時逝柔風戢。歲暮商猋飛。曾雲無溫液。嚴霜有凝威。幸蒙高墉德。玄景蔭素蕤。豐條竝春盛。落葉後秋衰。慶彼晚彫福。忘此孤生悲。

思友人詩　曹顏遠

密雲翳陽景。霖潦淹庭除。嚴霜彫翠草。寒風振纖枯。凜凜天氣清。落落卉木疎。感時歌蟋蟀。思賢詠白駒。情隨玄陰滯。心與迴飄俱。思心何所懷。懷我歐陽子。精義測神奧。清機發妙理。自我別旬朔。微言絕于耳。褰裳不足難。清揚未可俟。延首出階檐。佇立增想似。

感舊詩　曹顏遠

富貴他人合。貧賤親戚離。廉藺門易軌。田竇相奪移。晨風集茂林。棲鳥去枯枝。今我唯困蒙。郡士所背馳。鄉人敦懿義。濟濟蔭光儀。對賓頌有客。舉觴詠露斯。臨樂何所歎。素絲與路歧。

雜詩　何敬祖

秋風乘夕起。明月照高樹。閑房來清氣。廣庭發暉素。靜寂愴然歎。惆悵出游顧。仰視垣上草。俯察階下露。心虛體自輕。飄颻若仙步。瞻彼陵上栢。想與神人遇。道深難可期。精微非所慕。勤思終遙夕。永言寫情慮。

雜詩　王正長

朔風動秋草。邊馬有歸心。胡寧久分析。靡靡忽至今。王事離我志。殊隔過商參。昔往鶬鶊鳴。今來蟋蟀吟。人情懷舊鄉。客鳥思故林。師涓久不奏。誰能宣我心。

雜詩　棗道彥

吳寇未殄滅。亂象侵邊疆。天子命上宰。作蕃于漢陽。開國建元士。玉帛聘賢良。予非荊山璞。謬登和氏場。羊質服虎文。燕翼假鳳翔。既懼非所任。怨彼南路長。千里既悠邈。路次限關梁。僕夫罷遠涉。車馬困山岡。深谷下無底。高巖暨穹蒼。豐草停滋潤。霧露沾衣裳。玄林結陰氣。不風自寒涼。顧瞻情感切。惻愴心哀傷。士生則懸弧。有事在四方。安得恆逍遙。端坐守閨房。引義割外情。內感實難忘。

雜詩　左太沖

秋風何冽冽。白露為朝霜。柔條旦夕勁。綠葉日夜黃。明月出雲崖。皦皦流素光。披軒臨前庭。嗷嗷晨鴈翔。高志局四海。塊然守空堂。壯齒不恆居。歲暮常慨慷。

雜詩　張季鷹

暮春和氣應。白日照園林。青條若總翠。黃華如散金。嘉卉亮有觀。顧此難久耽。延頸無良塗。頓足託幽深。榮與壯俱去。賤與老相尋。歡樂不照顏。慘愴發謳吟。謳吟何嗟及。古人可慰心。

雜詩十首　張景陽

秋夜涼風起。清氣蕩暄濁。蜻蛚吟階下。飛蛾拂明燭。君子從遠役。佳人守煢獨。離居幾何時。鑽燧

忽改木。房櫳無行跡。庭草萋以綠。青苔依空牆。蜘蛛網四屋。感物多所懷。沈憂結心曲。

大火流坤維。白日馳西陸。浮陽映翠林。迴猋扇綠竹。飛雨灑朝蘭。輕露棲叢菊。龍蟄暄氣凝。天高萬物肅。弱條不重結。芳蕤豈再馥。人生瀛海內。忽如鳥過目。川上之歎逝。前脩以自勗。

金風扇素節。丹霞啓陰期。騰雲似涌煙。密雨如散絲。寒花發黃采。秋草含綠滋。閑居玩萬物。離羣戀所思。案無蕭氏牘。庭無貢公綦。高尚遺王侯。道積自成基。至人不嬰物。餘風足染時。

朝霞迎白日。丹氣臨暘谷。翳翳結繁雲。森森散雨足。輕風摧勁草。凝霜竦高木。密葉日夜疎。叢林森如束。疇昔歎時遲。晚節悲年促。歲暮懷百憂。將從季主卜。

昔我資章甫。聊以適諸越。行行入幽荒。歐駱從祝髮。窮年非所用。此貨將安設。瓴甋夸璵璠。魚目笑明月。不見郢中歌。能否居然別。陽春無和者。巴人皆下節。流俗多昏迷。此理誰能察。

朝登魯陽關。狹路峭且深。流澗萬餘丈。圍木數千尋。咆虎響窮山。鳴鶴聒空林。淒風爲我嘯。百籟坐自吟。感物多思情。在險易常心。揭來戒不虞。挺轡越飛岑。王陽驅九折。周文走岑崟。經阻貴勿遲。此理著來今。

此鄉非吾地。此郭非吾城。羈旅無定心。翩翩如懸旌。出覩軍馬陣。入聞鞞鼓聲。常懼羽檄飛。神武一朝征。長鋏鳴鞘中。烽火列邊亭。捨我衡門衣。更被縵胡纓。疇昔懷微志。帷幕竊所經。何必操干戈。堂上有奇兵。折衝樽俎間。制勝在兩楹。巧遲不足稱。拙速乃垂名。

逃職投邊城。羈束戎旅間。下車如昨日。望舒四五圓。借問此何時。胡蝶飛南園。流波戀舊浦。行雲思故山。閩越衣文蛇。胡馬願度燕。士風安所習。由來有固然。

結宇窮岡曲。耦耕幽藪陰。荒庭寂以閑。幽岫峭且深。淒風起東谷。有渰興南岑。雖無箕畢期。膚寸自成霖。澤雉登壟雊。寒猨擁條吟。谿壑無人跡。荒楚鬱蕭森。投耒循岸垂。時聞樵采音。重基可擬志。迴淵可比心。養眞尙無爲。道勝貴陸沈。游思竹素園。寄辭翰墨林。

黑蜧躍重淵。商羊儛野庭。飛廉應南箕。豐隆迎號屏。雲根臨八極。雨足灑四溟。霖瀝過二旬。散漫亞九齡。階下伏泉涌。堂上水衣生。洪潦浩方割。人懷昏墊情。沈液漱陳根。綠葉腐秋莖。里無曲突煙。路無行輪聲。環堵自頹毀。垣閭不隱形。尺燼重尋桂。紅粒貴瑤瓊。君子守固窮。在約不爽貞。雖榮田方贈。慙爲溝壑名。取志於陵子。比足黔婁生。

時興詩　盧子諒

亹亹圓象運。悠悠方儀廓。忽忽歲云暮。游原采蕭藿。北踰芒與河。南臨伊與洛。凝霜霑蔓草。悲風振林薄。摵摵芳葉零。橤橤芬華落。下泉激洌清。曠野增遼索。登高眺遐荒。極望無崖崿。形變隨時化。神感因物作。澹乎至人心。恬然存玄漠。

雜詩二首　陶淵明

結廬在人境。而無車馬喧。問君何能爾。心遠地自偏。采菊東籬下。悠然望南山。山氣日夕佳。飛鳥相與還。此還有眞意。欲辯已忘言。

秋菊有佳色。裛露掇其英。泛此忘憂物。遠我達世情。一觴雖獨進。盃盡壺自傾。日入羣動息。歸鳥趨林鳴。嘯傲東軒下。聊復得此生。

詠貧士　陶淵明

萬族各有託。孤雲獨無依。曖曖虛中滅。何時見餘輝。朝霞開宿霧。衆鳥相與飛。遲遲出林翮。未夕復來歸。量力守故轍。豈不寒與饑。知音苟不存。已矣何所悲。

讀山海經　陶淵明

孟夏草木長。繞屋樹扶疎。衆鳥欣有託。吾亦愛吾廬。旣耕亦已種。且還讀我書。窮巷隔深轍。頗迴故人車。歡言酌春酒。摘我園中蔬。微雨從東來。好風與之俱。泛覽周王傳。流觀山海圖。俛仰終宇宙。不樂復何如。

七月七日夜詠牛女　謝惠連

落日隱櫩楹。升月照簾櫳。團團滿葉露。析析振條風。蹀足循廣除。瞬目矖曾穹。雲漢有靈匹。彌年闕相從。遐川阻昵愛。脩渚曠淸容。弄杼不成藻。聳轡騖前蹤。昔離秋已兩。今聚夕無雙。傾河易迴斡。款情難久悰。沃若靈駕旋。寂寥雲幄空。留情顧華寢。遙心逐奔龍。沈吟爲爾感。情深意彌重。

擣衣　謝惠連

衡紀無淹度。晷運倏如催。白露滋園菊。秋風落庭槐。肅肅莎雞羽。烈烈寒螿啼。夕陰結空幕。霄月皓中閨。美人戒裳服。端飾相招攜。簪玉出北房。鳴金步南階。櫩高砧響發。楹長杵聲哀。微芳起兩袖。輕汗染雙題。紈素旣已成。君子行未歸。裁用笥中刀。縫爲萬里衣。盈篋自余手。幽緘俟君開。腰帶準疇昔。不知今是非。

南樓中望所遲客　謝靈運

杳杳日西頹。漫漫長路迫。登樓爲誰思。臨江遲來客。與我別所期。期在三五夕。圓景早已滿。佳人殊未適。即事怨睽攜。感物方悽戚。孟夏非長夜。晦明如歲隔。瑤華未堪折。蘭苕已屢摘。路阻莫贈

問云何慰離析。搔首訪行人。引領冀良覿。

田南樹園激流植援　謝靈運

樵隱俱在山。由來事不同。不同非一事。養痾亦園中。園中屏氛雜。清曠招遠風。卜室倚北阜。啓扉面南江。激澗代汲井。插槿當列墉。羣木既羅戶。衆山亦當窻。靡迆趨下田。迢遞瞰高峯。寡欲不期勞。卽事罕人功。唯開蔣生徑。永懷求羊蹤。賞心不可忘。妙善冀能同。

齋中讀書　謝靈運

昔余游京華。未嘗廢丘壑。矧乃歸山川。心跡雙寂漠。虛館絕諍訟。空庭來鳥雀。臥疾豐暇豫。翰墨時間作。懷抱觀古今。寢食展戲謔。既笑沮溺苦。又哂子雲閣。執戟亦以疲。耕稼豈云樂。萬事難竝歡。達生幸可託。

石門新營所住四面高山迴溪石瀨茂林脩竹　謝靈運

躋險築幽居。披雲臥石門。苔滑誰能步。葛弱豈可捫。嫋嫋秋風過。萋萋春草繁。美人游不還。佳期何由敦。芳塵凝瑤席。淸醑滿金樽。洞庭空波瀾。桂枝徒攀翻。結念屬霄漢。孤景莫與諼。俯濯石下潭。仰看條上猨。早聞夕飇急。晚見朝日暾。崖傾光難留。林深響易奔。感往慮有復。理來情無存。庶特乘日用。得以慰營魂。匪爲衆人說。冀與智者論。

雜詩一首　王景玄

思婦臨高臺。長想憑華軒。弄絃不成曲。哀歌送苦言。箕帚留江介。良人處鴈門。詎憶無衣苦。但知狐白溫。日暗牛羊下。野雀滿空園。孟冬寒風起。東壁正中昏。朱火獨照人。抱景自愁怨。誰知心曲亂。所思不可論。

數詩 鮑明遠

一身仕關西。家族滿山東。二年從車駕。齋祭甘泉宮。三朝國慶畢。休沐還舊邦。四牡曜長路。輕蓋若飛鴻。五侯相餞送。高會集新豐。六樂陳廣坐。組帳揚春風。七盤起長袖。庭下列歌鐘。八珍盈彫俎。綺肴紛錯重。九族共瞻遲。賓友仰徽容。十載學無就。善宦一朝通。

翫月城西門廨中 鮑明遠

始出西南樓。纖纖如玉鉤。末映東北墀。娟娟似娥眉。娥眉蔽珠櫳。玉鉤隔瑣窻。三五二八時。千里與君同。夜移衡漢落。徘徊帷戶中。歸華先委露。別葉早辭風。客游厭苦辛。仕子倦飄塵。休澣自公日。宴慰及私辰。蜀琴抽白雪。郢曲發陽春。肴乾酒未缺。金壺啓夕淪。迴軒駐輕蓋。留酌待情人。

始出尚書省 謝玄暉

惟昔逢休明。十載朝雲陛。既通金閨籍。復酌瓊筵醴。宸景厭照臨。昏風淪繼體。紛虹亂朝日。濁河穢清濟。防口猶寬政。餐荼更如薺。英袞暢人謀。文明固天啓。青精翼紫軑。黃旗映朱邸。還覩司隸章。復見東都禮。中區咸已泰。輕生諒昭灑。趨事辭宮闕。載筆陪旌棨。邑里向疎蕪。寒流自清泚。衰柳尚沈沈。凝露方泥泥。零落悲友朋。歡虞讌兄弟。既秉丹石心。寧流素絲涕。乘此終蕭散。垂竿深澗底。

直中書省　謝玄暉

紫殿肅陰陰。彤庭赫弘敞。風動萬年枝。日華承露掌。玲瓏結綺錢。深沈映朱網。紅藥當階翻。蒼苔依砌上。茲言翔鳳池。鳴珮多清響。信美非吾室。中園思偃仰。朋情以鬱陶。春物方駘蕩。安得凌風翰。聊恣山泉賞。

觀朝雨　謝玄暉

朔風吹飛雨。蕭條江上來。既灑百常觀。復集九成臺。空濛如薄霧。散漫似輕埃。平明振衣坐。重門猶未開。耳目暫無擾。懷古信悠哉。戢翼希驤首。乘流畏曝鰓。動息無兼遂。歧路多徘徊。方同戰勝者。去翦北山萊。

郡內登望　謝玄暉

借問下車日。匪直望舒圓。寒城一以眺。平楚正蒼然。山積陵陽阻。溪流春穀泉。威紆距遙甸。巉嵒帶遠天。切切陰風暮。桑柘起寒煙。悵望心已極。惝怳魂屢遷。結髮倦爲旅。平生早事邊。誰規鼎食盛。寧要狐白鮮。方弃汝南諾。言稅遼東田。

和伏武昌登孫權故城　謝玄暉

炎靈遺劍璽。當塗駭龍戰。聖期缺中壤。霸功興寓縣。鵲起登吳山。鳳翔陵楚甸。衿帶窮巖險。帷帟盡謀選。北拒溺驂鑣。西龕收組練。江海既無波。俯仰流英盼。裘冕類禋郊。卜揆崇離殿。鈞臺臨講閱。樊山開廣讌。文物共葳蕤。聲明且葱蒨。三光厭分景。書軌欲同薦。參差世祀忽。寂寞市朝變。舞

館識徐基。歌梁想遺韓。故林衰木平。荒池秋草徧。雄圖悵若茲。茂宰深遐睠。幽客滯江皐。從賞乖纓弁。清卮阻獻酬。良書限聞見。幸籍芳音多。承風采餘絢。于役儻有期。鄂渚同游衍。

和王著作八公山詩　謝玄暉

二別阻漢坻。雙崤望河澳。茲嶺復巑岏。分區奠淮服。東限琅邪臺。西距孟諸陸。阡眠起雜樹。檀欒蔭脩竹。日隱澗疑空。雲聚岫如複。出沒眺樓雉。遠近送春目。戎州昔亂華。素景淪伊穀。阽危賴宗衮。微管寄明牧。長蛇固能翦。奔鯨自此曝。道峻芳塵流。業遙年運倏。平生仰令圖。吁嗟命不淑。浩蕩別親知。連翩戒征軸。再遠館娃宮。兩去河陽谷。風煙四時犯。霜雨朝夜沐。春秀良已凋。秋場庶能築。

和徐都曹　謝玄暉

宛洛佳遨遊。春色滿皇州。結軫青郊路。迴瞰蒼江流。日華川上動。風光草際浮。桃李成蹊徑。桑榆陰道周。東都已俶載。言歸望綠疇。

和王主簿怨情　謝玄暉

掖庭聘絕國。長門失歡宴。相逢詠蘼蕪。辭寵悲班扇。花叢亂數蝶。風簾入雙燕。徒使春帶賒。坐惜紅妝變。平生一顧重。宿昔千金賤。故人心尚爾。故心人不見。

和謝宣城　沈休文

王喬飛鳧舄。東方金馬門。從宦非宦侶。避世非避喧。揆余發皇鑒。短翮屢飛翻。晨趨游建禮。晚沐臥郊園。賓至下塵榻。憂來命綠罇。昔賢侔時雨。今守馥蘭蓀。神交疲夢寐。路遠隔思存。牽拙謬東

汜。浮情及西崑。顧循良菲薄。何以儷璵璠。將隨渤澥去。刷羽汎清源。

應王中丞思遠詠月　沈休文

月華臨靜夜。夜靜滅氛埃。方暉竟戶入。圓影隙中來。高樓切思婦。西園游上才。網軒映珠綴。應門照綠苔。洞房殊未曉。清光信悠哉。

冬節後至丞相第詣世子車中作　沈休文

廉公失權勢。門館有虛盈。貴賤猶如此。況乃曲池平。高車塵未滅。珠履故餘聲。賓階綠錢滿。客位紫苔生。誰當九原上。鬱鬱望佳城。

學省愁臥　沈休文

秋風吹廣陌。蕭瑟入南闈。愁人掩軒臥。高窻時動扉。虛館清陰滿。神宇曖微微。網蟲垂戶織。夕鳥傍櫚飛。纓珮空爲忝。江海事多違。山中有桂樹。歲暮可言歸。

詠湖中鴈　沈休文

白水滿春塘。旅鴈每迴翔。唼流牽弱藻。斂翮帶餘霜。羣浮動輕浪。單汎逐孤光。懸飛竟不下。亂起未成行。刷羽同搖漾。一舉還故鄉。

三月三日率爾成篇　沈休文

麗日屬元巳。年芳具在斯。開花已匝樹。流嚶復滿枝。洛陽繁華子。長安輕薄兒。東出千金堰。西臨

鴈鶩陂。游絲映空轉。高楊拂地垂。綠幘文照曜。紫燕光陸離。淸晨戲伊水。薄暮宿蘭池。象筵鳴寶瑟。金瓶汎羽巵。寧憶春蠶起。日暮桑欲萎。長袂屢以拂。彫胡方自炊。愛而不可見。宿昔減容儀。且當忘情去。歎息獨何爲。

雜擬上

擬古詩十二首　陸士衡

擬行行重行行

悠悠行邁遠。戚戚憂思深。此思亦何思。思君徽與音。音徽日夜離。緬邈若飛沈。王鮪懷河岫。晨風思北林。遊子眇天末。遠期不可尋。驚飈褰反信。歸雲難寄音。佇立想萬里。沈憂萃我心。攬衣有餘帶。循形不盈衿。去去遺情累。安處撫淸琴。

擬今日良宴會

閑夜命懽友。置酒迎風館。齊僮梁甫吟。秦娥張女彈。哀音繞棟宇。遺響入雲漢。四坐咸同志。羽觴不可算。高談一何綺。蔚若朝霞爛。人生無幾何。爲樂常苦晏。譬彼伺晨鳥。揚聲當及旦。曷爲恆憂苦。守此貧與賤。

擬迢迢牽牛星

昭昭淸漢暉。粲粲光天步。牽牛西北迴。織女東南顧。華容一何冶。揮手如振素。怨彼河無梁。悲此

年歲暮。踐彼無良緣。睆焉不得度。引領望大川。雙涕如霑露。

擬涉江采芙蓉

上山采瓊蘂。穹谷饒芳蘭。采采不盈掬。悠悠懷所歡。故鄉一何曠。山川阻且難。沈思鍾萬里。躑躅獨吟歎。

擬青青河畔草

靡靡江蘺草。熠燿生河側。皎皎彼姝女。阿那當軒織。粲粲妖容姿。灼灼美顏色。良人遊不歸。偏棲獨隻翼。空房來悲風。中夜起歎息。

擬明月何皎皎

安寢北堂上。明月入我牖。照之有餘暉。攬之不盈手。涼風繞曲房。寒蟬鳴高柳。踟躕感節物。我行永已久。遊宦會無成。離思難常守。

擬蘭若生朝陽

嘉樹生朝陽。凝霜封其條。執心守時信。歲寒終不彫。美人何其曠。灼灼在雲霄。隆想彌年月。長嘯入飛飇。引領望天末。譬彼向陽翹。

擬青青陵上栢

冉冉高陵蘋。習習隨風翰。人生當幾時。譬彼濁水瀾。戚戚多滯念。置酒宴所歡。方駕振飛轡。遠遊

入長安。名都一何綺。城闕鬱盤桓。飛閣纓虹帶。曾臺冒雲冠。高門羅北闕。甲第椒與蘭。俠客控絕景。都人驂玉軒。遨遊放情願。慷慨為誰歎。

擬東城一何高

西山何其峻。曾曲鬱崔嵬。零露彌天墜。蕙葉憑林衰。寒暑相因襲。時逝忽如頹。三閭結飛轡。大耋嗟落暉。曷為牽世務。中心若有違。京洛多妖麗。玉顏侔瓊蕤。閑夜撫鳴琴。惠音清且悲。長歌赴促節。哀響逐高徽。一唱萬夫歎。再唱梁塵飛。思為河曲鳥。雙遊豐水湄。

擬西北有高樓

高樓一何峻。迢迢峻而安。綺窗出塵冥。飛陛躡雲端。佳人撫琴瑟。纖手清且閑。芳氣隨風結。哀響馥若蘭。玉容誰得顧。傾城在一彈。佇立望日昃。躑躅再三歎。不怨佇立久。但願歌者歡。思駕歸鴻羽。比翼雙飛翰。

擬庭中有奇樹

歡友蘭時往。迢迢匿音徽。虞淵引絕景。四節逝若飛。芳草久已茂。佳人竟不歸。躑躅遵林渚。惠風入我懷。感物戀所歡。采此欲貽誰。

擬明月皎夜光

歲暮涼風發。昊天肅明明。招搖西北指。天漢東南傾。朗月照閑房。蟋蟀吟戶庭。翻翻歸鴈集。嘒嘒寒蟬鳴。疇昔同宴友。翰飛戾高冥。服美改聲聽。居愉遺舊情。織女無機杼。大梁不架楹。

擬四愁詩　張孟陽

我所思兮在營州。欲往從之路阻脩。登崖遠望涕泗流。我之懷矣心傷憂。佳人遺我綠綺琴。何以贈之雙南金。願因流波超重深。終然莫致增永吟。

擬古詩　陶淵明

日暮天無雲。春風扇微和。佳人美清夜。達曙酣且歌。歌竟長歎息。持此感人多。明明雲間月。灼灼葉中花。豈無一時好。不久當如何。

擬魏太子鄴中集八首 幷序　謝靈運

建安末。余時在鄴宮。朝遊夕讌。究歡愉之極。天下良辰。美景。賞心。樂事。四者難幷。今昆弟友朋。二三諸彥。共盡之矣。古來此娛。書籍未見。何者。楚襄王時。有宋玉唐景。梁孝王時。有鄒枚嚴馬。遊者美矣。而其主不文。漢武帝時。徐樂諸才。備應對之能。而雄猜多忌。豈獲晤言之適。不誣方將。庶必賢於今日爾。歲月如流。零落將盡。撰文懷人。感往增愴。其辭曰。

魏太子

百川赴巨海。衆星環北辰。照灼爛霄漢。遙裔起長津。天地中橫潰。家王拯生民。區宇既滌蕩。羣英必來臻。忝此欽賢性。由來常懷仁。況值衆君子。傾心隆日新。論物靡浮說。析理實敷陳。羅縷豈闕辭。窈窕究天人。澄觴滿金罍。連榻設華茵。急絃動飛聽。清歌拂梁塵。何言相遇易。此歡信可珍。

王粲

家本秦川。貴公子孫。遭亂流寓。自傷情多。

幽厲昔崩亂。桓靈今板蕩。伊洛既燎煙。函崤沒無像。整裝辭秦川。秣馬赴楚壤。沮漳自可美。客心非外奬。常歎詩人言。式微何由往。上宰奉皇靈。侯伯咸宗長。雲騎亂漢南。宛郢皆掃盪。排霧屬盛明。披雲對清朗。慶泰欲重疊。公子特先賞。不謂息肩願。一旦値明兩。竝載遊鄴京。方舟汎河廣。綢繆清讌娛。寂寥梁棟響。既作長夜飲。豈顧乘日養。

陳琳

袁本初書記之士。故述喪亂事多。

皇漢逢屯邅。天下遭氛慝。董氏淪關西。袁家擁河北。單民易周章。窘身就羈勒。豈意事乖己。永懷戀故國。相公實勤王。信能定蝥賊。復覩東都輝。重見漢朝則。餘生幸已多。矧迺値明德。愛客不告疲。飲讌遺景刻。夜聽極星爛。朝遊窮曛黑。哀哇動梁埃。急觴盪幽默。且盡一日娛。莫知古來惑。

徐幹

少無宦情。有箕潁之心。事故仕世。多素辭。

伊昔家臨淄。提攜弄齊瑟。置酒飲膠東。淹留憩高密。此歡謂可終。外物始難畢。搖蕩箕濮情。窮年迫憂慄。末塗幸休明。棲集建薄質。已免負薪苦。仍游椒蘭室。清論事究萬。美話信非一。行觴奏悲歌。永夜繫白日。華屋非蓬居。時髦豈余匹。中飲顧昔心。悵焉若有失。

劉楨

卓犖偏人。而文最有氣。所得頗經奇。

貧居晏里閈。少小長東平。河兗當衝要。淪飄薄許京。廣川無逆流。招納厠羣英。北渡黎陽津。南登紀郢城。既覽古今事。頗識治亂情。歡友相解達。敷奏究平生。矧荷明哲顧。知深覺命輕。朝遊牛羊下。暮坐括揭鳴。終歲非一日。傳卮弄新聲。辰事既難諧。歡願如今幷。唯羨肅肅翰。繽紛戾高冥。

應瑒

汝潁之士。流離世故。頗有飄薄之歎。

嗷嗷雲中鴈。舉翮自委羽。求涼弱水湄。違寒長沙渚。顧我梁川時。緩步集潁許。一旦逢世難。淪薄恆羈旅。天下昔未定。託身早得所。官度厠一卒。烏林預艱阻。晚節值衆賢。會同庇天宇。列坐廕華榱。金樽盈清醑。始奏延露曲。繼以闌夕語。調笑輒酬答。嘲謔無慙沮。傾軀無遺慮。在心良已敘。

阮瑀

管書記之任。故有優渥之言。

河洲多沙塵。風悲黃雲起。金羈相馳逐。聯翩何窮已。慶雲惠優渥。微薄攀多士。念昔渤海時。南皮戲清沚。今復河曲游。鳴葭汎蘭汜。躧步陵丹梯。並坐侍君子。妍談既愉心。哀弄信睦耳。傾酤係芳醑。酌言豈終始。自從食蓱來。唯見今日美。

平原侯植

公子不及世事。但美遨遊。然頗有憂生之嗟。

朝遊登鳳閣。日暮集華沼。傾柯引弱枝。攀條摘蕙草。徙倚窮騁望。目極盡所討。西顧太行山。北眺邯鄲道。平衢脩且直。白楊信裊裊。副君命飲宴。歡娛寫懷抱。良遊匪晝夜。豈云晚與早。衆賓悉精妙。清辭灑蘭藻。哀音下迴鵠。餘哇徹清昊。中山不知醉。飲德方覺飽。願以黃髮期。養生念將老。

文選卷十五終

文選卷十六

詩庚　雜擬下

倣曹子建樂府白馬篇　袁陽源

劍騎何翩翩。長安五陵間。秦地天下樞。八方湊才賢。荊魏多壯士。宛洛富少年。意氣深自負。肯事郡邑權。籍籍關外來。車徒傾國鄽。五侯競書幣。羣公亟爲言。義分明於霜。信行直如弦。交歡池陽下。留宴汾陰西。一朝許人諾。何能坐相捐。彯節去函谷。投珮出甘泉。嗟此務遠圖。心爲四海懸。但營身意遂。豈校耳目前。俠烈良有聞。古來共知然。

倣古　袁陽源

訴此倦遊士。本家自遼東。昔隸李將軍。十載事西戎。結車高闕下。極望見雲中。四面各千里。從橫起嚴風。寒燠豈如節。霜雨多異同。夕寐北河陰。夢還甘泉宮。勤役未云已。壯年徒爲空。迺知古時人。所以悲轉蓬。

擬古二首　劉休玄

擬行行重行行

眇眇陵長道。遙遙行遠之。回車背京里。揮手從此辭。堂上流塵生。庭中綠草滋。寒螿翔水曲。秋兎

依山基。芳年有華月。佳人無還期。日夕涼風起。對酒長相思。悲發江南調。憂委子衿詩。臥覺明燈晦。坐見輕紈緇。淚容不可飾。幽鏡難復治。願垂薄暮景。照妾桑榆時。

擬明月何皎皎

落宿半遙城。浮雲藹層闕。玉宇來清風。羅帳延秋月。結思想伊人。沈憂懷明發。誰爲客行久。屢見流芳歇。河廣川無梁。山高路難越。

和琅邪王依古　王僧達

少年好馳俠。旅宦遊關源。既踐終古跡。聊訊興亡言。隆周爲藪澤。皇漢成山樊。久沒離宮地。安識壽陵園。仲秋邊風起。孤蓬卷霜根。白日無精景。黃沙千里昏。顯軌莫殊轍。幽塗豈異魂。聖賢良已矣。抱命復何怨。

擬古三首　鮑明遠

幽并重騎射。少年好馳逐。氈帶佩雙鞬。象弧插彫服。獸肥春草短。飛鞚越平陸。朝遊鴈門上。暮還樓煩宿。石梁有餘勁。驚雀無全目。漢虜方未和。邊城屢翻覆。留我一白羽。將以分虎竹。

魯客事楚王。懷金襲丹素。既荷主人恩。又蒙令尹顧。日晏罷朝歸。輿馬塞衢路。宗黨生光華。賓僕遠傾慕。富貴人所欲。道得亦何懼。南國有儒生。迷方獨淪誤。伐木清江湄。設罝守毚兎。

十五諷詩書。篇翰靡不通。弱冠參多士。飛步遊秦宮。側覩君子論。預見古人風。兩說窮舌端。五車摧筆鋒。羞當白璧貺。恥受聊城功。晚節從世務。乘障遠和戎。解佩襲犀渠。卷袠奉盧弓。始願力不及。安知今所終。

學劉公幹體　鮑明遠

胡風吹朔雪。千里度龍山。集君瑤臺裏。飛舞兩楹前。茲辰自爲美。當避豔陽年。豔陽桃李節。皎潔不成妍。

代君子有所思　鮑明遠

西出登雀臺。東下望雲闕。層閣肅天居。馳道直如髮。繡甍結飛霞。琁題納行月。築山擬蓬壺。穿池類溟渤。選色遍齊代。徵聲匝邛越。陳鐘陪夕讌。笙歌待明發。年貌不可還。身意會盈歇。蟻壤漏山阿。絲淚毀金骨。器惡含滿欹。物忌厚生沒。智哉衆多士。服理辨昭昧。

倣古　范彥龍

寒沙四面平。飛雪千里驚。風斷陰山樹。霧失交河城。朝驅左賢陣。夜薄休屠營。昔事前軍幕。今逐嫖姚兵。失道刑既重。遲留法未輕。所賴今天子。漢道日休明。

雜體詩三十首　幷序　江文通

夫楚謠漢風。既非一骨。魏製晉造。固亦二體。譬猶藍朱成彩。雜錯之變無窮。宮商爲音。靡曼之態不極。故蛾眉詎同貌。而俱動於魄。芳草寧共氣。而皆悅於魂。不其然歟。至於世之諸賢。各滯所迷。莫不論甘而忌辛。好丹而非素。豈所謂通方廣恕。好遠兼愛者哉。及公幹仲宣之論家有曲直。安仁士衡之評人立矯抗。況復殊於此者乎。又貴遠賤近。人之常情。重耳輕目。俗之恆蔽。是以邯鄲託曲於李奇。士季假論於嗣宗。此其效也。然五言之興。諒非夐古。但關西鄴下。既已罕同。河外江

南。頗爲異法。故玄黃經緯之辨。金碧沈浮之殊。僕以爲亦合其美並善而已。今作三十首詩。斆其文體。雖不足品藻淵流。庶亦無乖商摧云爾。

古離別

遠與君別者。乃至鴈門關。黃雲蔽千里。遊子何時還。送君如昨日。簷前露已團。不惜蕙草晚。所悲道里寒。君在天一涯。妾身長別離。願一見顏色。不異瓊樹枝。兎絲及水萍。所寄終不移。

李都尉 從軍 陵

樽酒送征人。踟蹰在親宴。日暮浮雲滋。握手淚如霰。悠悠清川水。嘉魴得所薦。而我在萬里。結髮不相見。袖中有短書。願寄雙飛鷰。

班婕妤 詠扇

紈扇如圓月。出自機中素。畫作秦王女。乘鸞向煙霧。彩色世所重。雖新不代故。竊愁涼風至。吹我玉階樹。君子恩未畢。零落在中路。

魏文帝 遊宴 曹丕

置酒坐飛閣。逍遙臨華池。神飇自遠至。左右芙蓉披。綠竹夾清水。秋蘭被幽崖。月出照園中。冠珮相追隨。客從南楚來。爲我吹參差。淵魚猶伏浦。聽者未云疲。高文一何綺。小儒安足爲。肅肅廣殿陰。雀聲愁北林。衆賓還城邑。何以慰吾心。

陳思王贈友 曹植

君王禮英賢。不恡千金璧。雙闕指馳道。朱宮羅第宅。從容冰井臺。清池映華薄。涼風盪芳氣。碧樹先秋落。朝與佳人期。日夕望青閣。褰裳摘明珠。徙倚拾蕙若。眷我二三子。辭義麗金雘。延陵輕寶劍。季布重然諾。處富不忘貧。有道在葵藿。

劉文學感遇 楨

蒼蒼山中桂。團團霜露色。霜露一何緊。桂枝生自直。橘柚在南國。因君爲羽翼。謬蒙聖王私。託身文墨職。丹彩既已過。敢不自彫飾。華月照方池。列坐金殿側。微臣固受賜。鴻恩良未測。

王侍中懷德 粲

伊昔值世亂。秣馬辭帝京。既傷蔓草別。方知杕杜情。崤函復丘墟。冀闕緬縱橫。倚棹汎涇渭。日暮山河淸。蟋蟀依桑野。嚴風吹枯莖。鸛鴿在幽草。客子淚已零。去鄉二十載。幸遭天下平。賢主降嘉賞。金貂服玄纓。侍宴出河曲。飛蓋遊鄴城。朝露竟幾何。忽如水上萍。君子篤惠義。柯葉終不傾。福履既所綏。千載垂令名。

嵇中散言志 康

曰余不師訓。潛志去世塵。遠想出宏域。高步超常倫。靈鳳振羽儀。戢景西海濱。朝食琅玕實。夕飲玉池津。處順故無累。養德乃入神。曠哉宇宙惠。雲羅更四陳。哲人貴識義。大雅明庇身。莊生悟無爲。老氏守其眞。天下皆得一。名實久相賓。咸池饗爰居。鍾鼓或愁辛。柳惠善直道。孫登庶知人。寫

懷良未遠。感贈以書紳。

阮步兵 籍 詠懷

青鳥海上遊。鸒斯蒿下飛。沈浮不相宜。羽翼各有歸。飄颻可終年。沆瀁安是非。朝雲乘變化。光耀世所希。精衛銜木石。誰能測幽微。

張司空 華 離情

秋月映簾櫳。懸光入丹墀。佳人撫鳴琴。清夜守空帷。蘭逕少行迹。玉臺生網絲。庭樹發紅彩。閨草含碧滋。延佇整綾綺。萬里贈所思。願垂湛露惠。信我皎日期。

潘黃門 岳 述哀

青春速天機。素秋馳白日。美人歸重泉。悽愴無終畢。殯宮已肅清。松柏轉蕭瑟。俯仰未能弭。尋念非但一。撫衿悼寂寞。怳然若有失。明月入綺窗。髣髴想蕙質。銷憂非萱草。永懷寄夢寐。夢寐復冥冥。何由覿爾形。我慙北海術。爾無帝女靈。駕言出遠山。徘徊泣松銘。雨絕無還雲。花落豈留英。日月方代序。寢興何時平。

陸平原 機 羈宦

儲后降嘉命。恩紀被微身。明發眷桑梓。永歎懷密親。流念辭南澨。銜怨別西津。馳馬遵淮泗。旦夕見梁陳。服義追上列。矯迹厠宮臣。朱黻咸髦士。長纓皆俊人。契闊承華內。綢繆踰歲年。日暮聊揔駕。逍遙觀洛川。徂沒多拱木。宿草陵寒煙。遊子易感愾。躑躅還自憐。願言寄三鳥。離思非徒然。

左記室思 詠史

韓公淪賣藥。梅生隱市門。百年信荏苒。何用苦心魂。當學衞霍將。建功在河源。珪組賢君眄。青紫明主恩。終軍才始達。賈誼位方尊。金張服貂冕。許史乘華軒。王侯貴片議。公卿重一言。太平多歡娛。飛蓋東都門。顧念張仲蔚。蓬蒿滿中園。

張黃門協 苦雨

丹霞蔽陽景。綠泉涌陰渚。水鸛巢層甍。山雲潤柱礎。有弇興春節。愁霖貫秋序。燮燮涼葉奪。戾戾颸風舉。高談玩四時。索居慕儔侶。青苔日夜黃。芳蕤成宿楚。歲暮百慮交。無以慰延佇。

劉太尉琨 傷亂

皇晉遘陽九。天下橫氛霧。秦趙值薄蝕。幽并逢虎據。伊余荷寵靈。感激徇馳騖。雖無六奇術。冀與張韓遇。甯戚扣角歌。桓公遭乃舉。荀息冒險難。實以忠貞故。空令日月逝。愧無古人度。飲馬出城濠。北望沙漠路。千里何蕭條。白日隱寒樹。投袂旣憤懣。撫枕懷百慮。功名惜未立。玄髮已改素。時哉苟有會。治亂惟冥數。

盧郎中諶 感交

大廈須異材。廊廟非庸器。英俊著世功。多士濟斯位。眷顧成綢繆。迺與時髦匹。姻媾久不虛。契闊豈但一。逢厄旣已同。處危非所恤。常慕先達槩。觀古論得失。馬服爲趙將。疆場得淸謐。信陵佩魏印。秦兵不敢出。慨無握中策。徒慙素絲質。羈旅去舊鄉。感遇喩琴瑟。自顧非杞梓。勉力在無逸。更

以畏友朋。濫吹乖名實。

郭弘農 遊仙 璞

崦山多靈草。海濱饒奇石。偃蹇尋青雲。隱淪駐精魄。道人讀丹經。方士鍊玉液。朱霞入窻牖。曜靈照空隙。傲睨摘木芝。陵波采水碧。眇然萬里遊。矯掌望煙客。永得安期術。豈愁濛汜迫。

張廷尉 雜述 綽

太素既已分。吹萬著形兆。寂動苟有源。因謂殤子夭。道喪涉千載。津梁誰能了。思乘扶搖翰。卓然陵風矯。靜觀尺棰義。理足未嘗少。冏冏秋月明。憑軒詠堯老。浪迹無蚩妍。然後君子道。領略歸一致。南山有綺皓。交臂久變化。傳火乃薪草。亹亹玄思淸。胷中去機巧。物我俱忘懷。可以狎鷗鳥。

許徵君 自序 詢

張子闔內機。單生蔽外像。一時排冥筌。泠然空中賞。遺此弱喪情。資神任獨往。采藥白雲隈。聊以肆所養。丹葩曜芳蕤。綠竹陰閑敞。苕苕寄意勝。不覺陵虛上。曲櫺激鮮飇。石室有幽響。去矣從所欲。得失非外奬。至哉操斤客。重明固已朗。五難既灑落。超迹絕塵網。

段東陽 興矚 仲文

晨遊任所萃。悠悠蘊眞趣。雲天亦遼亮。時與賞心遇。青松挺秀蕚。惠色出喬樹。極眺淸波深。緬映石壁素。瑩情無餘滓。拂衣釋塵務。求仁既自我。玄風豈外慕。直置忘所宰。蕭散得遺慮。

謝僕射混 遊覽

信矣勞物化。憂矜未能整。薄言遵郊衢。揔轡出臺省。淒淒節序高。寥寥心悟永。時菊曜巖阿。雲霞冠秋嶺。眷然惜良辰。徘徊踐落景。卷舒雖萬緒。動復歸有靜。曾是迫桑榆。歲暮從所秉。舟壑不可攀。忘懷寄匠郢。

陶徵君潛 田居

種苗在東皐。苗生滿阡陌。雖有荷鉏倦。濁酒聊自適。日暮巾柴車。路闇光已夕。歸人望煙火。稚子候檐隙。問君亦何爲。百年會有役。但願桑麻成。蠶月得紡績。素心正如此。開逕望三益。

謝臨川靈運 遊山

江海經邅迴。山嶠備盈缺。靈境信淹留。賞心非徒設。平明登雲峯。杳與廬霍絕。碧障長周流。金潭恆澄澈。桐林帶晨霞。石壁映初晰。乳竇既滴瀝。丹井復寥泬。嵒崿轉奇秀。岑崟還相蔽。赤玉隱瑤溪。雲錦被沙汭。夜聞猩猩啼。朝見鼯鼠逝。南中氣候暖。朱華凌白雪。幸遊建德鄉。觀奇經禹穴。身名竟誰辨。圖史終磨滅。且泛桂水潮。映月游海澨。攝生貴處順。將爲智者說。

顏特進延之 侍宴

太微凝帝宇。瑤光正神縣。揆日粲書史。相都麗聞見。列漢構仙宮。開天製寶殿。桂棟留夏飆。蘭橑停冬霰。青林結冥濛。丹巘被葱蒨。山雲備卿靄。池卉具靈變。重陽集清氛。下輦降玄宴。鶩望分寰隧。矚目盡都甸。氣生川岳陰。煙滅淮海見。中坐溢朱組。步櫚簉瓊弁。禮登佇睿情。樂闋延皇眄。測

恩蹐踰逸。沿牒懵浮賤。榮重餽兼金。巡華過盈瑱。敢飾輿人詠。方慙綠水薦。

謝法曹 贈別 惠連

昨發赤亭渚。今宿浦陽汭。方作雲峯異。豈伊千里別。芳塵未歇席。涔淚猶在袂。停艫望極浦。弭棹阻風雪。風雪既經時。夜永起懷思。汎濫北湖游。苕亭南樓期。點翰詠新賞。開袠瑩所疑。摘芳愛氣馥。拾蘂憐色滋。色滋畏沃若。人事亦銷鑠。子衿怨勿往。谷風誚輕薄。共秉延州信。無慙仲路諾。靈芝望三秀。孤筠情所託。所託已殷勤。祗足攪懷人。今行嶀嵊外。銜思至海濱。覿子杳未儕。款睇在何辰。雜珮雖可贈。疏華竟無陳。無陳心悁勞。旅人豈遊遨。幸及風雪霽。靑春滿江皐。解纜候前侶。還望方鬱陶。煙景若離遠。未響寄瓊瑤。

王徵君 養疾 微

窈藹瀟湘空。翠磵澹無滋。寂歷百草晦。欻吸鵾雞悲。淸陰往來遠。月華散前墀。鍊藥矚虛幌。汎瑟臥遙帷。水碧驗未黷。金膏靈詎緇。北渚有帝子。蕩瀁不可期。悵然山中暮。懷痾屬此詩。

袁太尉 從駕 淑

宮廟禮哀敬。枌邑道嚴玄。恭潔由明祀。肅駕在祈年。詔徒登季月。戒鳳藻行川。雲旆象漢徙。宸網擬星懸。朱櫂麗寒渚。金鍐映秋山。羽衞藹流景。綵吹震沈淵。辨詩測京國。履籍鑑都壥。萌謠響玉律。邑頌被丹絃。文軫薄桂海。聲教燭冰天。和惠頒上笏。恩渥浹下筵。幸侍觀洛後。豈慕巡河前。服義方無沫。展歌殊未宣。

謝光祿 郊遊 莊

肅舲出郊際。徙樂逗江陰。翠山方藹藹。青浦正沈沈。涼葉照沙嶼。秋榮冒水潯。風散松架險。雲鬱石道深。靜默鏡綿野。四睇亂曾岑。氣淸知鴈引。露華識猨音。雲裝信解黻。煙駕可辭金。始整丹泉術。終覿紫芳心。行光自容裔。無使弱思侵。

鮑參軍 戎行 昭

豪士枉尺璧。宵人重恩光。徇義非爲利。執羈輕去鄉。孟冬郊祀月。殺氣起嚴霜。戎馬粟不煖。軍士冰爲漿。晨上城皐坂。積礫皆羊腸。寒陰籠白日。太谷晦蒼蒼。息徒稅征駕。倚劍臨八荒。鷦鵬不能飛。玄武伏川梁。鍛翮由時至。感物聊自傷。豎儒守一經。未足識行藏。

休上人 怨別

西北秋風至。楚客心悠哉。日暮碧雲合。佳人殊未來。露彩方泛豔。月華始徘徊。寶書爲君掩。瑤琴詎能開。相思巫山渚。悵望陽雲臺。膏鑪絕沈燎。綺席生浮埃。桂水日千里。因之平生懷。

騷上

離騷經 屈平

帝高陽之苗裔兮。朕皇考曰伯庸。攝提貞于孟陬兮。惟庚寅吾以降。皇覽揆余于初度兮。肇錫余以嘉名。名余曰正則兮。字余曰靈均。紛吾既有此內美兮。又重之以脩能。扈江蘺與辟芷兮。紉秋

蘭以爲佩。汨余若將不及兮。恐年歲之不吾與。朝搴阰之木蘭兮。夕攬洲之宿莽。日月忽其不淹兮。春與秋其代序。惟草木之零落兮。恐美人之遲暮。不撫壯而棄穢兮。何不改乎此度也。乘騏驥以馳騁兮。來吾導夫先路。昔三后之純粹兮。固衆芳之所在。雜申椒與菌桂兮。豈維紉夫蕙茝。彼堯舜之耿介兮。既遵道而得路。何桀紂之昌披兮。夫唯捷徑以窘步。惟黨人之偸樂兮。路幽昧以險隘。豈余身之憚殃兮。恐皇輿之敗績。忽奔走以先後兮。及前王之踵武。荃不察余之中情兮。反信讒而齊怒。余固知謇謇之爲患兮。忍而不能舍也。指九天以爲正兮。夫唯靈脩之故也。初既與余成言兮。後悔遁而有他。余既不難離別兮。傷靈脩之數化。余既滋蘭之九畹兮。又樹蕙之百畝。畦藰荑與揭車兮。雜杜蘅與芳芷。冀枝葉之峻茂兮。願竢時乎吾將刈。雖萎絕其亦何傷兮。哀衆芳之蕪穢。衆皆競進以貪婪兮。憑不厭乎求索。羌內恕己以量人兮。各興心而嫉妬。忽馳騖以追逐兮。非余心之所急。老冉冉其將至兮。恐脩名之不立。朝飮木蘭之墜露兮。夕餐秋菊之落英。苟余情其信姱以練要兮。長顑頷亦何傷。擥木根以結茝兮。貫薜荔之落蘂。矯菌桂以紉蕙兮。索胡繩之纚纚。謇吾法夫前脩兮。非時俗之所服。雖不周於今之人兮。願依彭咸之遺則。長太息以掩涕兮。哀人生之多艱。余雖好脩姱以鞿羈兮。謇朝誶而夕替。既替余以蕙纕兮。又申之以攬茝。亦余心之所善兮。雖九死其猶未悔。怨靈脩之浩蕩兮。終不察夫人心。衆女嫉余之蛾眉兮。謠諑謂余以善淫。固時俗之工巧兮。偭規矩而改錯。背繩墨以追曲兮。競周容以爲度。忳鬱悒余侘傺兮。吾獨窮困乎此時也。寧溘死以流亡兮。余不忍爲此態也。鷙鳥之不羣兮。自前代而固然。何方圜之能周兮。夫孰異道而相安。屈心而抑志兮。忍尤而攘詬。伏清白以死直兮。固前聖之所厚。悔相道之不察兮。延佇乎吾將反。迴朕車以復路兮。及行迷之未遠。步余馬於蘭皐兮。馳椒丘且焉止息。進不入以離尤兮。退將復脩吾初服。製芰荷以爲衣兮。集芙蓉以爲裳。不吾知其亦已兮。苟余情其信芳。高余冠之岌岌兮。長余佩之陸離。芳與澤其雜糅兮。唯昭質其猶未虧。忽反顧以游目兮。

將往觀乎四荒。佩繽紛其繁飾兮。芳菲菲其彌章。人生各有所樂兮。余獨好脩以爲常。雖體解吾猶未變兮。豈余心之可懲。女嬃之嬋媛兮。申申其詈予。曰鮌婞直以亡身兮。終然夭乎羽之野。汝何博謇而好脩兮。紛獨有此姱節。薋菉葹以盈室兮。判獨離而不服。衆不可戶說兮。孰云察余之中情。世並擧而好朋兮。夫何煢獨而不予聽。依前聖之節中兮。喟憑心而歷茲。濟沅湘以南征兮。就重華而陳詞。啓九辯與九歌兮。夏康娛以自縱。不顧難以圖後兮。五子用失乎家巷。羿淫遊以佚田兮。又好射夫封狐。固亂流其鮮終兮。浞又貪夫厥家。澆身被服彊圉兮。縱欲而不忍。日康娛而自忘兮。厥首用夫顚隕。夏桀之常違兮。乃遂焉而逢殃。后辛之菹醢兮。殷宗用而不長。湯禹儼而祗敬兮。周論道而莫差。擧賢而授能兮。脩繩墨而不頗。皇天無私阿兮。覽人德焉錯輔。夫維聖哲以茂行兮。苟得用此下土。瞻前而顧後兮。相觀人之計極。夫孰非義而可用兮。孰非善而可服。阽余身而危死兮。覽余初其猶未悔。不量鑿而正枘兮。固前脩以菹醢。曾歔欷余鬱邑兮。哀朕時之不當。攬茹蕙以掩涕兮。霑余襟之浪浪。跪敷衽以陳辭兮。耿吾既得此中正。駟玉虬以乘鷖兮。溘埃風余上征。朝發軔於蒼梧兮。夕余至乎縣圃。欲少留此靈瑣兮。日忽忽其將暮。吾令羲和弭節兮。望崦嵫而勿迫。路漫漫其脩遠兮。吾將上下而求索。飮余馬於咸池兮。摠余轡乎扶桑。折若木以拂日兮。聊須臾以相羊。前望舒使先驅兮。後飛廉使奔屬。鸞皇爲余先戒兮。雷師告余以未具。吾令鳳凰飛騰兮。又繼之以日夜。飄風屯其相離兮。帥雲霓而來御。紛總總其離合兮。班陸離其上下。吾令帝閽開關兮。倚閶闔而望予。時曖曖其將罷兮。結幽蘭而延佇。世溷濁而不分兮。好蔽美而嫉妬。朝吾將濟於白水兮。登閬風而緤馬。忽反顧以流涕兮。哀高丘之無女。溘吾遊此春宮兮。折瓊枝以繼佩。及榮華之未落兮。相下女之可貽。吾令豐隆垂雲兮。求虙妃之所在。解佩纕以結言兮。吾令蹇脩以爲理。紛總總其離合兮。忽緯繣其難遷。夕歸次於窮石兮。朝濯髮乎洧盤。保厥美以驕傲兮。日康娛以淫遊。雖信美而無禮兮。來違棄而改求。覽相觀於四極兮。周流乎天余乃下。望

瑤臺之偃蹇兮。見有娀之佚女。吾令鴆爲媒兮。鴆告余以不好。雄鳩之鳴逝兮。余猶惡其佻巧。心猶豫而狐疑兮。欲自適而不可。鳳凰既受詒兮。恐高辛之先我。欲遠集而無所止兮。聊浮遊以逍遙。及少康之未家兮。留有虞之二姚。理弱而媒拙兮。恐導言之不固。時溷濁而嫉賢兮。好蔽美而稱惡。閨中既以邃遠兮。哲王又不寤。懷朕情而不發兮。余焉能忍與此終古。索瓊茅以筳篿兮。命靈氛爲余占之。曰兩美其必合兮。孰信脩而慕之。思九州之博大兮。豈唯是其有女。曰勉遠逝而無狐疑兮。孰求美而釋女。何所獨無芳草兮。爾何懷乎故宇。時幽昧以眩曜兮。孰云察余之美惡。人好惡其不同兮。惟此黨人其獨異。戶服艾以盈要兮。謂幽蘭其不可佩。覽察草木其猶未得兮。豈珵美之能當。蘇糞壤以充幃兮。謂申椒其不芳。欲從靈氛之吉占兮。心猶豫而狐疑。巫咸將夕降兮。懷椒糈而要之。百神翳其備降兮。九疑繽其並迎。皇剡剡其揚靈兮。告余以吉故。曰勉升降以上下兮。求矩矱之所同。湯禹儼而求合兮。摯咎繇而能調。苟中情其好脩兮。何必用夫行媒。說操築於傅巖兮。武丁用而不疑。呂望之鼓刀兮。遭周文而得舉。甯戚之謳歌兮。齊桓聞以該輔。及年歲之未晏兮。時亦猶其未央。恐鵜鴂之先鳴兮。使百草爲之不芳。何瓊佩之偃蹇兮。衆薆然而蔽之。惟此黨人之不亮兮。恐嫉妬而折之。時繽紛其變易兮。又何可以淹留。蘭芷變而不芳兮。荃蕙化而爲茅。何昔日之芳草兮。今直爲此蕭艾也。豈其有他故兮。莫好脩之害也。余以蘭爲可恃兮。羌無實而容長。委厥美以從俗兮。苟得引乎衆芳。椒專佞以慢慆兮。樧又欲充其佩幃。既干進而務入兮。又何芳之能祗。固時俗之從流兮。又孰能無變化。覽椒蘭其若茲兮。又況揭車與江離。惟茲佩之可貴兮。委厥美而歷茲。芳菲菲而難虧兮。芬至今猶未沬。和調度以自娛兮。聊浮游而求女。及余飾之方壯兮。周流觀乎上下。靈氛既告余以吉占兮。歷吉日乎吾將行。折瓊枝以爲羞兮。精瓊爢以爲粻。爲余駕飛龍兮。雜瑤象以爲車。何離心之可同兮。吾將遠逝以自疏。邅吾道夫崑崙兮。路脩遠以周流。揚雲霓之晻藹兮。鳴玉鸞之啾啾。朝發軔於天津兮。夕余至乎西極。鳳皇

翼其承旂兮。高翺翔之翼翼。忽吾行此流沙兮。遵赤水而容與。麾蛟龍使梁津兮。詔西皇使涉予。路脩遠以多艱兮。騰衆車使徑待。路不周以左轉兮。指西海以爲期。屯余車其千乘兮。齊玉軑而並馳。駕八龍之婉婉兮。載雲旗之委移。抑志而弭節兮。神高馳之邈邈。奏九歌而舞韶兮。聊假日以媮樂。陟升皇之赫戲兮。忽臨睨夫舊鄉。僕夫悲余馬懷兮。蜷局顧而不行。亂曰。已矣哉。國無人莫我知兮。又何懷乎故都。既莫足與爲美政兮。吾將從彭咸之所居。

九歌四首　屈平

東皇太一

吉日兮辰良。穆將愉兮上皇。撫長劍兮玉珥。璆鏘鳴兮琳琅。瑤席兮玉瑱。盍將把兮瓊芳。蕙肴蒸兮蘭藉。奠桂酒兮椒漿。揚枹兮拊鼓。疏緩節兮安歌。陳竽瑟兮浩倡。靈偃蹇兮姣服。芳菲菲兮滿堂。五音紛兮繁會。君欣欣兮樂康。

雲中君

浴蘭湯兮沐芳。華采衣兮若英。靈連蜷兮既留。爛昭昭兮未央。蹇將憺兮壽宮。與日月兮齊光。龍駕兮帝服。聊翺游兮周章。靈皇皇兮既降。猋遠擧兮雲中。覽冀州兮有餘。橫四海兮焉窮。思夫君兮太息。極勞心兮𢥞𢥞。

湘君

君不行兮夷猶。蹇誰留兮中洲。美要眇兮宜脩。沛吾乘兮桂舟。令沅湘兮無波。使江水兮安流。望

夫君兮歸來。吹參差兮誰思。駕飛龍兮北征。邅吾道兮洞庭。薜荔拍兮蕙綢。承荃橈兮蘭旌。望涔陽兮極浦。橫大江兮揚靈。揚靈兮未極。女嬋媛兮爲余太息。橫流涕兮潺湲。隱思君兮陫側。桂櫂兮蘭枻。斲冰兮積雪。采薜荔兮水中。搴芙蓉兮木末。心不同兮媒勞。恩不甚兮輕絕。石瀨兮淺淺。飛龍兮翩翩。交不忠兮怨長。期不信兮告余以不閒。朝騁鶩兮江皐。夕弭節兮北渚。鳥次兮屋上。水周兮堂下。捐余玦兮江中。遺余珮兮澧浦。采芳洲兮杜若。將以遺兮下女。時不可兮再得。聊逍遙兮容與。

湘夫人

帝子降兮北渚。目眇眇兮愁予。嫋嫋兮秋風。洞庭波兮木葉下。登白薠兮騁望。與佳期兮夕張。鳥萃兮蘋中。罾何爲兮木上。沅有茝兮澧有蘭。思公子兮未敢言。慌忽兮遠望。觀流水兮潺湲。麋何爲兮庭中。蛟何爲兮水裔。朝馳余馬兮江皐。夕濟兮西澨。聞佳人兮召予。將騰駕兮偕逝。築室兮水中。葺之兮以荷蓋。荃壁兮紫壇。播芳椒兮成堂。桂棟兮蘭橑。辛夷楣兮葯房。罔薜荔兮爲帷。擗蕙櫋兮既張。白玉兮爲鎭。疏石蘭以爲芳。芷葺兮荷屋。繚之兮以杜衡。合百草兮實庭。建芳馨兮廡門。九嶷繽兮並迎。靈之來兮如雲。捐余袂兮江中。遺余褋兮澧浦。搴汀洲兮杜若。將以遺兮遠者。時不可兮驟得。聊逍遙兮容與。

文選卷十六終

文選卷十七

騷下

九歌二首　屈平

少司命

秋蘭兮蘼蕪。羅生兮堂下。綠葉兮素華。芳菲菲兮襲予。夫人自有兮美子。蓀何以兮愁苦。秋蘭兮青青。綠葉兮紫莖。滿堂兮美人。忽獨與余兮目成。入不言兮出不辭。乘回風兮載雲旗。悲莫悲兮生別離。樂莫樂兮新相知。荷衣兮蕙帶。儵而來兮忽而逝。夕宿兮帝郊。君誰須兮雲之際。與汝遊兮九河。衝飆起兮水揚波。與汝沐兮咸池。晞汝髮兮陽之阿。望美人兮未來。臨風怳兮浩歌。孔蓋兮翠旌。登九天兮撫彗星。竦長劍兮擁幼艾。荃獨宜兮爲民正。

山鬼

若有人兮山之阿。被薜荔兮帶女蘿。旣含睇兮又宜笑。子慕予兮善窈窕。乘赤豹兮從文貍。辛夷車兮結桂旗。被石蘭兮帶杜衡。折芳馨兮遺所思。余處幽篁兮終不見天。路險難兮獨後來。表獨立兮山之上。雲容容兮而在下。杳冥冥兮羌晝晦。東風飄兮神靈雨。留靈脩兮憺忘歸。歲旣晏兮孰華予。采三秀兮於山間。石磊磊兮葛蔓蔓。怨公子兮悵忘歸。君思我兮不得閒。山中人兮芳杜若。飲石泉兮蔭松柏。君思我兮然疑作。雷塡塡兮雨冥冥。猨啾啾兮狖夜鳴。風颯颯兮木蕭蕭。

思公子兮徒離憂。

九章　屈平

涉江

余幼好此奇服兮。年既老而不衰。帶長鋏之陸離兮。冠切雲之崔嵬。被明月兮佩寶璐。世溷濁而莫余知兮。吾方高馳而不顧。駕青虬兮驂白螭。吾與重華游兮瑤之圃。登崑崙兮食玉英。與天地兮比壽。與日月兮齊光。哀南夷之莫吾知兮。旦余濟乎江湘。乘鄂渚而反顧兮。欸秋冬之緒風。步余馬兮山皐。低余車兮方林。乘舲船余上沅兮。齊吳榜以擊汰。船容與而不進兮。淹回水而疑滯。朝發枉渚兮。夕宿辰陽。苟余其端直兮。雖僻遠之何傷。入漵浦余儃佪兮。迷不知吾之所如。深林杳以冥冥兮。乃猨狖之所居。山峻高以蔽日兮。下幽晦以多雨。霰雪紛其無垠兮。雲霏霏而承宇。哀吾生之無樂兮。幽獨處乎山中。吾不能變心而從俗兮。固將愁苦而終窮。接輿髡首兮。桑扈臝行。忠不必用兮。賢不必以。伍子逢殃兮。比干菹醢。與前世而皆然兮。吾又何怨乎今之人。余將董道而不豫兮。固將重昏而終身。

卜居　屈平

屈平既放三年。不得復見。竭智盡忠。蔽鄣於讒。心煩意亂。不知所從。乃往見太卜鄭詹尹。曰。余有所疑。願因先生決之。詹尹乃端策拂龜。曰。君將何以教之。屈原曰。吾寧悃悃款款。朴以忠乎。將送往勞來斯無窮乎。寧誅鉏草茅以力耕乎。將遊大人以成名乎。寧正言不諱以危身乎。將從俗富貴以媮生乎。寧超然高擧以保眞乎。將哫訾慄斯。喔咿嚅唲以事婦人乎。寧廉潔正直以自淸乎。

將突梯滑稽。如脂如韋。以絜楹乎。寧昂昂若千里之駒乎。將氾氾若水中之鳧乎。與波上下。偸以全吾軀乎。寧與騏驥抗軛乎。將隨駑馬之迹乎。寧與黃鵠比翼乎。將與雞鶩爭食乎。此孰吉孰凶。何去何從。世溷濁而不淸。蟬翼爲重。千鈞爲輕。黃鍾毀棄。瓦釜雷鳴。讒人高張。賢士無名。吁嗟默默兮。誰知吾之廉貞。詹尹乃釋策而謝。曰。夫尺有所短。寸有所長。物有所不足。智有所不明。數有所不逮。神有所不通。用君之心。行君之意。龜策誠不能知此事。

漁父　屈平

屈原既放。遊於江潭。行吟澤畔。顏色憔悴。形容枯槁。漁父見而問之曰。子非三閭大夫與。何故至於斯。屈原曰。世人皆濁。我獨淸。衆人皆醉。我獨醒。是以見放。漁父曰。聖人不凝滯於萬物。而能與世推移。世皆濁。何不淈其泥。而揚其波。衆人皆醉。何不餔其糟。而歠其釃。何故深思高擧。自令放爲。屈原曰。吾聞之。新沐者必彈冠。新浴者必振衣。安能以身之察察。受物之汶汶者乎。寧赴湘流。葬於江魚腹中。安能以皓皓之白。蒙世俗之塵埃乎。漁父莞爾而笑。鼓枻而去。乃歌曰。滄浪之水淸兮。可以濯我纓。滄浪之水濁兮。可以濯我足。遂去不復與言。

九辯五首　宋玉

悲哉秋之爲氣也。蕭瑟兮草木搖落而變衰。憭慄兮若在遠行。登山臨水兮送將歸。泬寥兮天高而氣淸。寂寥兮收潦而水淸。憯悽增欷兮薄寒之中人。愴怳懭悢兮去故而就新。坎廩兮貧士失職而志不平。廓落兮羇旅而無友生。惆悵兮而私自憐。燕翩翩其辭歸兮。蟬寂寞而無聲。鴈廱廱而南遊兮。鵾雞啁哳而悲鳴。獨申旦而不寐兮。哀蟋蟀之宵征。時亹亹而過中兮。蹇淹留而無成。悲憂窮蹙兮獨處廓。有美一人兮心不繹。去鄉離家兮來遠客。超逍遙兮今焉薄。專思君兮不可

化。君不知兮可奈何。蓄怨兮積思。心煩憺兮忘食事。願一見兮道余意。君之心兮與余異。車駕兮朅而歸。不得見兮心悲。倚結軨兮太息。涕潺湲兮霑軾。慷慨絕兮不得。中瞀亂兮迷惑。私自憐兮何極。心怦怦兮諒直。

皇天平分四時兮。竊獨悲此凛秋。白露既下降百草兮。奄離披此梧楸。去白日之昭昭兮。襲長夜之悠悠。離芳藹之方壯兮。余萎約而悲愁。秋既先戒以白露兮。冬又申之以嚴霜。收恢台之孟夏兮。然欿傺而沈藏。葉菸邑而無色兮。枝煩挐而交橫。顏淫溢而將罷兮。柯彷彿而萎黃。蕭櫹槮之可哀兮。形銷鑠而瘀傷。惟其紛糅而將落兮。恨其失時而無當。攬騑轡而下節兮。聊逍遙以相羊。歲忽忽而遒盡兮。恐余壽之弗將。悼余生之不時兮。逢此世之俇攘。澹容與而獨倚兮。蟋蟀鳴此西堂。心怵惕而震盪兮。何所憂之多方。卬明月而太息兮。步列星而極明。

竊悲夫蕙華之曾敷兮。紛旖旎乎都房。何曾華之無實兮。從風雨而飛颺。以爲君獨服此蕙兮。嗟無以異於衆芳。閔奇思之不通兮。將去君而高翔。心閔憐之慘悽兮。願一見而有明。重無怨而生離兮。中結軫而增傷。豈不鬱陶而思君兮。君之門以九重。猛犬狺狺而迎吠兮。關梁閉而不通。皇天淫溢而秋霖兮。后土何時而得乾。塊獨守此無澤兮。仰浮雲而永歎。

何時俗之工巧兮。背繩墨而改錯。卻騏驥而不乘兮。策駑駘而取路。當世豈無騏驥兮。誠莫之能善御。見執轡者非其人兮。故駶跳而遠去。鳧鴈皆唼夫粱藻兮。鳳愈飄翔而高舉。圜鑿而方枘兮。吾固知其鉏鋙而難入。衆鳥皆有所登棲兮。鳳獨遑遑而無所集。願銜枚而無言兮。常被君之渥洽。太公九十乃顯榮兮。誠未遇其匹合。謂騏驥兮安歸。謂鳳皇兮安棲。變古易俗兮世衰。今之相者兮舉肥。騏驥伏匿而不見兮。鳳皇高飛而不下。鳥獸猶知懷德兮。何云賢士之不處。驥不驟進而求服兮。鳳亦不貪餧而妄食。君棄遠而不察兮。雖願忠其焉得。欲寂寞而絕端兮。竊不敢忘初之厚德。獨悲愁其傷人兮。馮鬱鬱其何極。

招魂

宋玉

朕幼清以廉絜兮。身服義而未沫。主此盛德兮。牽於俗而蕪穢。上無所考此盛德兮。長離殃而愁苦。帝告巫陽曰。有人在下。我欲輔之。魂魄離散。汝筮予之。巫陽對曰。掌夢。上帝其命難從。若必筮予之。恐後謝之不能復用。巫陽焉乃下招曰。魂兮來歸。去君之恆幹。何爲兮四方些。舍君之樂處。而離彼不祥些。魂兮歸來。東方不可以託些。長人千仞。唯魂是索些。十日代出。流金鑠石些。彼皆習之。魂往必釋些。歸來歸來。不可以託些。魂兮歸來。南方不可以止些。雕題黑齒。得人肉以祀。以其骨爲醢些。蝮蛇蓁蓁。封狐千里些。雄虺九首。往來倏忽。呑人以益其心些。歸來歸來。不可久淫些。魂兮歸來。西方之害。流沙千里些。旋入雷泉。爢散而不可止些。幸而得脫。其外曠宇些。赤蟻若象。玄蠭若壺些。五穀不生。藂菅是食些。其土爛人。求水無所得些。彷徉無所倚。廣大無所極些。歸來歸來。恐自遺賊些。魂兮歸來。北方不可以止些。增冰峨峨。飛雪千里些。歸來歸來。不可以久些。魂兮歸來。君無上天些。虎豹九關。啄害下人些。一夫九首。拔木九千些。豺狼從目。往來侁侁些。懸人以嬉。投之深淵些。致命於帝。然後得瞑些。歸來歸來。往恐危身些。魂兮歸來。君無下此幽都些。土伯九約。其角觺觺些。敦脄血拇。逐人駓駓些。參目虎首。其身若牛些。此皆甘人。歸來歸來。恐自遺災些。魂兮歸來入脩門些。工祝招君。背行先些。秦篝齊縷。鄭緜絡些。招具該備。永嘯呼些。魂兮歸來反故居些。天地四方。多賊姦些。像設君室。靜閒安些。高堂邃宇。檻層軒些。層臺累榭。臨高山些。網戶朱綴。刻方連些。冬有突廈。夏室寒些。川谷徑復。流潺湲些。光風轉蕙。氾崇蘭些。經堂入奧。朱塵筵些。砥室翠翹。絓曲瓊些。翡翠珠被。爛齊光些。蒻阿拂壁。羅幬張些。纂組綺縞。結琦璜些。室中之觀。多珍怪些。蘭膏明燭。華容備些。二八侍宿。射遞代些。九侯淑女。多迅衆些。盛鬋不同制。實滿宮些。容態好比。順彌代些。弱顏固植。謇其有意些。姱容脩態。絙洞房些。蛾眉曼睩。目騰光些。靡顏膩

理遺視䁾些。離榭脩幕侍君之閒些。翡帷翠幬飾高堂些。紅壁沙版玄玉之梁些。仰觀刻桷畫龍蛇些。坐堂伏檻臨曲池些。芙蓉始發雜芰荷些。紫莖屛風文緣波些。文異豹飾侍陂陁些。軒輬既低步騎羅些。蘭薄戶樹瓊木籬些。魂兮歸來何遠爲些。室家遂宗食多方些。稻粢穱麥挐黃粱些。大苦醎酸辛甘行些。肥牛之腱臑若芳些。和酸若苦陳吳羹些。胹鼈炮羔有柘漿些。鵠酸臇鳧煎鴻鶬些。露鷄臛蠵厲而不爽些。粔籹蜜餌有餦餭些。瑤漿蜜勺實羽觴些。挫糟凍飲酎清涼些。華酌既陳有瓊漿些。歸來歸來反故室。敬而無妨些。肴羞未通女樂羅些。陳鐘按鼓造新歌些。涉江采菱發揚荷些。美人既醉朱顏酡些。娭光眇視目曾波些。被文服纖麗而不奇些。長髮曼鬋艷陸離些。二八齊容起鄭舞些。衽若交竿撫案下些。竽瑟狂會搷鳴鼓些。宮庭震驚發激楚些。吳歈蔡謳奏大呂些。士女雜坐亂而不分些。放陳組纓班其相紛些。鄭衞妖玩來雜陳些。激楚之結獨秀先些。箟蔽象棊有六簙些。分曹並進遒相迫些。成梟而牟呼五白些。晉制犀比費白日些。鏗鐘搖簴揳梓瑟些。娛酒不廢沈日夜些。蘭膏明燭華鐙錯些。結撰至思蘭芳假些。人有所極同心賦些。酎飲既盡歡樂先故些。魂兮歸來反故居些。亂曰。獻歲發春兮汩吾南征些。菉蘋齊葉兮白芷生些。路貫廬江兮左長薄。倚沼畦瀛兮遙望博。青驪結駟兮齊千乘。懸火延起兮玄顏烝。步及驟處兮誘騁先。抑騖若通兮引車右還。與王趨夢兮課後先。君王親發兮憚青兕。朱明承夜兮時不可淹。皐蘭被徑兮斯路漸。湛湛江水兮上有楓。目極千里兮傷春心。魂兮歸來哀江南。

招隱士　劉安

桂樹叢生兮山之幽。偃蹇連卷兮枝相繚。山氣巃嵸兮石嵯峨。谿谷嶄巖兮水曾波。猨狖羣嘯兮虎豹嘷。攀援桂枝兮聊淹留。王孫游兮不歸。春草生兮萋萋。歲暮兮不自聊。蟪蛄鳴兮啾啾。坱兮軋山曲岪。心淹留兮洞荒忽。罔兮沕憭兮慄。虎豹穴。叢薄深林兮人上慄。嶔崟碕礒兮碅磳磈硊。

樹輪相糾兮林木茇骩。青莎雜樹兮薠草靃靡。白鹿麏麚兮或騰或倚。狀貌崟崟兮峨峨。凄凄兮漇漇。獼猴兮熊羆。慕類兮以悲。攀援桂枝兮聊淹留。虎豹鬭兮熊羆咆。禽獸駭兮亡其曹。王孫兮歸來。山中兮不可以久留。

七上

七發八首　枚叔

楚太子有疾。而吳客往問之曰。伏聞太子玉體不安。亦少間乎。太子曰。憊。謹謝客。客因稱曰。今時天下安寧。四宇和平。太子方富於年。意者久耽安樂。日夜無極。邪氣襲逆。中若結轖。紛屯澹淡。噓唏煩酲。惕惕怵怵。臥不得瞑。虛中重聽。惡聞人聲。精神越渫。百病咸生。聰明眩曜。悅怒不平。久執不廢。大命乃傾。太子豈有是乎。太子曰。謹謝客。賴君之力。時時有之。然未至於是也。客曰。今夫貴人之子。必宮居而閨處。內有保母。外有傅父。欲交無所。飲食則溫淳甘膬。腥醲肥厚。衣裳則雜遝曼煖。燂爍熱暑。雖有金石之堅。猶將銷鑠而挺解也。況其在筋骨之間乎哉。故曰。縱耳目之欲。恣支體之安者。傷血脈之和。且夫出輿入輦。命曰蹷痿之機。洞房清宮。命曰寒熱之媒。皓齒蛾眉。命曰伐性之斧。甘脆肥醲。命曰腐腸之藥。今太子膚色靡曼。四支委隨。筋骨挺解。血脈淫濯。手足惰窳。越女侍前。齊姬奉後。往來游讌。縱恣乎曲房隱間之中。此甘餐毒藥。戲猛獸之爪牙也。所從來者至深遠。淹滯永久而不廢。雖令扁鵲治內。巫咸治外。尚何及哉。今如太子之病者。獨宜世之君子。博見彊識。承閒語事。變度易意。常無離側。以爲羽翼。淹沈之樂。浩唐之心。遁佚之志。其奚由至哉。

太子曰。諾。病已。請事此言。

客曰。今太子之病。可無藥石針刺灸療而已。可以要言妙道說而去也。不欲聞之乎。太子曰。僕願

聞之。客曰。龍門之桐。高百尺而無枝。中鬱結之輪菌。根扶疏以分離。上有千仞之峯。下臨百丈之谿。湍流遡波。又澹淡之。其根半死半生。冬則烈風漂霰飛雪之所激也。夏則雷霆霹靂之所感也。朝則鸝黃鳱鴠鳴焉。暮則羈雌迷鳥宿焉。獨鵠晨號乎其上。鵾雞哀鳴翔乎其下。於是背秋涉冬。使琴摯斫斬以爲琴。野繭之絲以爲絃。孤子之鉤以爲隱。九寡之珥以爲約。使師堂操暢。伯子牙爲之歌。歌曰。麥秀蔪兮雉朝飛。向虛壑兮背槁槐。依絕區兮臨迴溪。飛鳥聞之翕翼而不能去。野獸聞之垂耳而不能行。蚑蟜螻蟻聞之柱喙而不能前。此亦天下之至悲也。太子能彊起聽之乎。

太子曰。僕病未能也。

客曰。犓牛之腴。菜以筍蒲。肥狗之和。冒以山膚。楚苗之食。安胡之飯。摶之不解。一啜而散。於是使伊尹煎熬。易牙調和。熊蹯之臑。勺藥之醬。薄耆之炙。鮮鯉之鱠。秋黃之蘇。白露之茹。蘭英之酒。酌以滌口。山梁之餐。豢豹之胎。小飯大歠。如湯沃雪。此亦天下之至美也。太子能彊起嘗之乎。太子曰。僕病未能也。

客曰。鍾岱之牡。齒至之車。前似飛鳥。後類距虛。穱麥服處。躁中煩外。羈堅轡。附易路。於是伯樂相其前。王良造父爲之御。秦缺樓季爲之右。此兩人者。馬佚能止之。車覆能起之。於是使射千鎰之重。爭千里之逐。此亦天下之至駿也。太子能彊起而乘之乎。太子曰。僕病未能也。

客曰。既登景夷之臺。南望荊山。北望汝海。左江右湖。其樂無有。於是使博辯之士。原本山川。極命草木。比物屬事。離辭連類。浮游覽觀。乃下置酒於虞懷之宮。連廊四注。臺城層構。紛紜玄綠。輦道邪交。黃池紆曲。溷章白鷺。孔鳥鶤鵠。鵷鶵鵁鶄。翠鬣紫纓。螭龍德牧。邕邕羣鳴。陽魚騰躍。奮翼振鱗。漃漻薵蓼。蔓草芳苓。女桑河柳。素葉紫莖。苗松豫章。條上造天。梧桐并閭。極望成林。衆芳芬鬱。亂於五風。從容猗靡。消息陽陰。列坐縱酒。蕩樂娛心。景春佐酒。杜連理音。滋味雜陳。肴糅錯該。練色娛目。流聲悅耳。於是乃發激楚之結風。揚鄭衛之皓樂。使先施·徵舒·陽文·段干·吳娃·閭娵·傅予

之徒。雜裾垂髾。目窕心與。揄流波。雜杜若。蒙清塵。被蘭澤。嬿服而御。此亦天下之靡麗。皓侈廣博之樂也。太子能彊起游乎。太子曰。僕病未能也。

客曰。將爲太子馴騏驥之馬。駕飛軨之輿。乘牡駿之乘。右夏服之勁箭。左烏號之雕弓。游涉乎雲林。周馳乎蘭澤。弭節乎江潯。掩青蘋。游清風。陶陽氣。蕩春心。逐狡獸。集輕禽。於是極犬馬之才。困野獸之足。窮相御之智巧。恐虎豹。慴鷙鳥。逐馬鳴鑣。魚跨麋角。履游麕兎。蹈踐麖鹿。汗流沫墜。寃伏陵窘。無創而死者。固足充後乘矣。此校獵之至壯也。太子能彊起游乎。太子曰。僕病未能也。然陽氣見於眉宇之間。侵淫而上。幾滿大宅。客見太子有悅色也。遂推而進之曰。冥火薄天。兵車雷運。旌旗偃蹇。羽旄肅紛。馳騁角逐。慕味爭先。徼墨廣博。觀望之有圻。純粹全犧。獻之公門。太子曰。善。願復聞之。客曰。未既。於是榛林深澤。煙雲闇莫。兕虎並作。毅武孔猛。袒裼身薄。白刃磑磑。矛戟交錯。收獲掌功。賞賜金帛。掩蘋肆若。爲牧人席。旨酒嘉肴。羞炰膾炙。以御賓客。涌觸並起。動心驚耳。誠必不悔。決絕以諾。貞信之色。形于金石。高歌陳唱。萬歲無斁。此眞太子之所喜也。能彊起而游乎。太子曰。僕甚願從。直恐爲諸大夫累耳。然而有起色矣。

客曰。將以八月之望。與諸侯遠方交游兄弟。並往觀濤乎廣陵之曲江。至則未見濤之形也。徒觀水力之所到。則卹然足以駭矣。觀其所駕軼者。所擢拔者。所揚汩者。所溫汾者。所滌汔者。雖有心略辭給。固未能縷形其所由然也。怳兮忽兮。聊兮慄兮。混汩汩兮。忽兮慌兮。俶兮儻兮。浩瀇瀁兮。慌曠曠兮。秉意乎南山。通望乎東海。虹洞兮蒼天。極慮乎崖涘。流攬無窮。歸神日母。汩乘流而下降兮。或不知其所止。或紛紜其流折兮。忽繆往而不來。臨朱汜而遠逝兮。中虛煩而益怠。莫離散而發曙兮。內存心而自持。於是澡槩胷中。灑練五藏。澹澉手足。頮濯髮齒。揄弃恬怠。輸寫淟濁。分決狐疑。發皇耳目。當是之時。雖有淹病滯疾。猶將伸傴起躄。發瞽披聾。而觀望之也。況直眇小煩懣。酲醲病酒之徒哉。故曰。發蒙解惑。不足以言也。太子曰。善。然則濤何氣哉。客曰。不記也。然聞於

師曰。似神而非者三。疾雷聞百里。江水逆流。海水上潮。山出內雲。日夜不止。衍溢漂疾。波涌而濤起。其始起也。洪淋淋焉。若白鷺之下翔。其少進也。浩浩澧澧。如素車白馬。帷蓋之張。其波涌而雲亂。擾擾焉如三軍之騰裝。其旁作而奔起也。飄飄焉。如輕車之勒兵。六駕蛟龍。附從太白。純馳浩蜺。前後駱驛。顒顒卬卬。椐椐彊彊。莘莘將將。壁壘重堅。沓雜似軍行。訇隱匈礚。軋盤涌裔。原不可當。觀其兩傍。則滂渤怫鬱。闇漠感突。上擊下律。有似勇壯之卒。突怒而無畏。蹈壁衝津。窮曲隨隈・踰岸出追。遇者死。當者壞。初發乎或圍之津涯。荄軫谷分。迴翔青篾。銜枚檀桓。弭節伍子之山。通厲骨母之場。凌赤岸。篲扶桑。橫奔似雷行。誠奮厥武。如振如怒。沌沌渾渾。狀如奔馬。混混庉庉。聲如雷鼓。發怒庢沓。清升踰跇。侯波奮振。合戰於藉藉之口。鳥不及飛。魚不及迴。獸不及走。紛紛翼翼。波涌雲亂。蕩取南山。背擊北岸。覆虧丘陵。平夷西畔。險險戲戲。崩壞陂池。決勝乃罷。瀄汩潺湲。披揚流灑。橫暴之極。魚鼈失勢。顚倒偃側。沈沈湲湲。蒲伏連延。神物怪疑。不可勝言。直使人踣焉。洄闇悽愴焉。此天下怪異詭觀也。太子能彊起觀之乎。太子曰。僕病未能也。

客曰。將爲太子。奏方術之士。有資略者。若莊周・魏牟・楊朱・墨翟・便蜎・詹何之倫。使之論天下之精微。理萬物之是非。孔老覽觀。孟子籌之。萬不失一。此亦天下要言妙道也。太子豈欲聞之乎。於是太子據几而起曰。渙乎若一聽聖人辯士之言。涊然汗出。霍然病已。

七啓八首 幷序

曹子建

昔枚乘作七發。傅毅作七激。張衡作七辯。崔駰作七依。辭各美麗。余有慕之焉。遂作七啓。幷命王粲作焉。

玄微子隱居大荒之庭。飛遯離俗。澄神定靈。輕祿傲貴。與物無營。耽虛好靜。羨此永生。獨馳思乎天雲之際・無物象而能傾。於是鏡機子聞而將往說焉。駕超野之駟。乘追風之輿。經迥漠出幽墟。

入乎泱漭之野。遂屆玄微子之所居。其居也左激水。右高岑。背洞溪。對芳林。冠皮弁。被文裘。出山岫之潛穴。倚峻崖而嬉游。志飄飄焉。嶢嶢焉。似若狹六合而隘九州。若將飛而未逝。若舉翼而中留。於是鏡機子攀葛藟而登。距巖而立。順風而稱曰。予聞。君子不遯俗而遺名。智士不背世而滅勳。今吾子弃道藝之華。遺仁義之英。耗精神乎虛廓。廢人事之紀經。譬若畫形於無象。造響於無聲。未之思乎。何所規之不通也。玄微子俯而應之曰。嘻。有是言乎。夫太極之初。渾沌未分。萬物紛錯。與道俱隆。蓋有形必朽。有跡必窮。芒芒元氣。誰知其終。名穢我身。位累我躬。竊慕古人之所志。仰老莊之遺風。假靈龜以託喩。寧掉尾於塗中。鏡機子曰。夫辯言之豔。能使窮澤生流。枯木發榮。庶感靈而激神。況近在乎人情。僕將爲吾子說游觀之至娛。演聲色之妖靡。論變化之至妙。敷道德之弘麗。願聞之乎。玄微子曰。吾子整身倦世。探隱拯沈。不遠遐路。幸見光臨。將敬滌耳。以聽玉音。

鏡機子曰。芳菰精粺。霜蓄露葵。玄熊素膚。肥豢膿肌。蟬翼之割。剖纖析微。累如疊縠。離若散雪。輕隨風飛。刃不轉切。山𪊟斥鷃。珠翠之珍。寒芳苓之巢龜。膾西海之飛鱗。臛江東之潛鼉。臇漢南之鳴鶉。糅以芳酸。甘和既醇。玄冥適鹹。蓐收調辛。紫蘭丹椒。施和必節。滋味既殊。遺芳射越。乃有春清縹酒。康狄所營。應化則變。感氣而成。彈徵則苦發。叩宮則甘生。於是盛以翠樽。酌以彫觴。浮蟻鼎沸。酷烈馨香。可以和神。可以娛腸。此肴饌之妙也。子能從我而食之乎。玄微子曰。予甘藜藿。未暇此食也。

鏡機子曰。步光之劍。華藻繁縟。飾以文犀。彫以翠綠。綴以驪龍之珠。錯以荊山之玉。陸斷犀象。未足稱儁。隨波截鴻。水不漸刃。九旒之冕。散燿垂文。華組之纓。從風紛紜。佩則結綠懸黎。寶之妙微。符采照爛。流景揚煇。黼黻之服。紗縠之裳。金華之舄。動趾遺光。繁飾參差。微鮮若霜。緄佩綢繆。或彫或錯。薰以幽若。流芳肆布。雍容閑步。周旋馳燿。南威爲之解顏。西施爲之巧笑。此容飾之妙也。

子能從我而服之乎。玄微子曰。予好毛褐。未暇此服也。

鏡機子曰。馳騁足用蕩思。游獵可以娛情。僕將爲吾子。駕雲龍之飛駟。飾玉輅之繁纓。垂宛虹之長綏。抗招搖之華旍。捷忘歸之矢。秉繁弱之弓。忽躡景而輕騖。逸奔驥而超遺風。於是磎塡谷塞。榛藪平夷。緣山置罝。彌野張罘。下無滿跡。上無逸飛。鳥集獸屯。然後會圍。獠徒雲布。武騎霧散。丹旗曜野。戈殳晧旰。曳文狐。掩狡兎。捎鷫鸘。拂振鷺。當軌見藉。値足遇踐。飛軒電逝。獸隨輪轉。翼不暇張。足不及騰。動觸飛鋒。擧挂輕罾。搜林索險。探薄窮阻。騰山赴壑。風厲猋擧。機不虛發。中必飮羽。於是人稠網密。地逼勢脅。哮闞之獸。張牙奮鬣。志在觸突。猛氣不懾。乃使北宮東郭之疇。生抽豹尾。分裂貙肩。形不抗手。骨不隱拳。批熊碎掌。拉虎摧斑。野無毛類。林無羽羣。積獸如陵。飛翮成雲。於是駴鍾鳴鼓。收旌弛旆。頓網縱綱。罷獠迴邁。駿騄齊驤。揚鑾飛沫。俯倚金較。仰撫翠蓋。雍容暇豫。娛志方外。此羽獵之妙也。子能從我而觀之乎。玄微子曰。余樂恬靜。未暇此觀也。

鏡機子曰。閑宮顯敞。雲屋晧旰。崇景山之高基。迎淸風而立觀。彤軒紫柱。文榱華梁。綺井含葩。金墀玉箱。溫房則冬服絺綌。淸室則中夏含霜。華閣緣雲。飛陛陵虛。頫眺流星。仰觀八隅。升龍攀而不逮。眇天際而高居。繁巧神怪。變名異形。班輸無所措其斧斤。離婁爲之失睛。麗草交植。殊品詭類。綠葉朱榮。熙天曜日。素水盈沼。叢木成林。飛翮陵高。鱗甲隱深。於是逍遙暇豫。忽若忘歸。乃使任子垂釣。魏氏發機。芳餌沈水。輕繳弋飛。落翳雲之翔鳥。援九淵之靈龜。然後采菱華。擢水蘋。弄珠蜯。戲鮫人。諷漢廣之所詠。覿游女於水濱。燿神景於中沚。被輕縠之纖羅。遺芳烈而靖步。抗皓手而淸歌。歌曰。望雲際兮有好仇。天路長兮往無由。佩蘭蕙兮爲誰脩。宴婉絕兮我心愁。此宮館之妙也。子能從我而居之乎。玄微子曰。予耽巖穴。未暇此居也。

鏡機子曰。旣游觀中原。逍遙閑宮。情放志蕩。淫樂未終。亦將有才人妙妓。遺世越俗。揚北里之流聲。紹陽阿之妙曲。爾乃御文軒。臨洞庭。琴瑟交揮。左篪右笙。鍾鼓俱振。簫管齊鳴。然後姣人乃被

文轂之華袿。振輕綺之飄颻。戴金搖之熠燿。揚翠羽之雙翹。揮流芳燿飛文・歷盤鼓煥繽紛。長裾隨風。悲歌入雲。蹻捷若飛。蹈虛遠蹠。淩躍超驤。蜿蟬揮霍。翔爾鴻翥。濈然鳧沒。縱輕體以迅赴。景追形而不逮。飛聲激塵。依違厲響。才捷若神。形難爲象。於是爲歡未渫。白日西頹。散樂變飾。微步中閨。玄眉弛兮鉛華落。收亂髮兮拂蘭澤。形媠服兮揚幽若。紅顏宜笑。睇眄流光。時與吾子。攜手同行。踐飛除。即閑房。華燭爛。幄幕張。動朱脣。發清商。揚羅袂。振華裳。九秋之夕。爲歡未央。此聲色之妙也。子能從我而游之乎。玄微子曰。予願清虛。未暇此游也。

鏡機子曰。予聞君子樂奮節以顯義。烈士甘危軀以成仁。是以雄俊之徒。交黨結倫・重氣輕命。感分遺身。故田光伏劍於北燕。公叔畢命於西秦。果毅輕斷。虎步谷風。威慴萬乘。華夏稱雄。辭未及終。而玄微子曰。善。鏡機子曰。此乃游俠之徒耳。未足稱妙也。若夫田文無忌之儔。乃上古之俊公子也。皆飛仁揚義。騰躍道藝。游心無力。抗志雲際。淩轢諸侯。驅馳當世。揮袂則九野生風。慷慨則氣成虹蜺。吾子若當此之時。能從我而友之乎。玄微子曰。予亮願焉。然方於大道。有累如何。

鏡機子曰。世有聖宰。翼帝霸世。同量乾坤。等曜日月。玄化參神。與靈合契。惠澤播於黎苗。威靈震乎無外。超隆平於殷周。踵羲皇而齊泰。顯朝惟清。王道遐均。民望如草。我澤如春。河濱無洗耳之士。喬岳無巢居之民。是以俊乂來仕。觀國之光。舉不遺才。進各異方。讚典禮於辟雍。講文德於明堂。正流俗之華說。綜孔氏之舊章。散樂移風。國富民康。神應休臻。屢獲嘉祥。故甘露紛而晨降。景星宵而舒光。觀游龍於神淵。聆鳴鳳於高岡。此霸道之至隆。而雍熙之盛際。然主上猶以沈恩之未廣。懼聲教之未厲。采英奇於仄陋。宣皇明於巖穴。此甯子商歌之秋。而呂望所以投綸而逝也。吾子爲太和之民。不欲仕陶唐之世乎。於是玄微子攘袂而興曰。韓哉言乎・近者吾子所述。華淫欲以厲我。祇攪予心。至聞天下穆清。明君莅國。覽盈虛之正義。知頑素之迷惑。今予廓爾身輕若飛・願反初服。從子而歸・

文選卷十七終

文選卷十八

七下

七命八首

張景陽

沖漠公子。含華隱曜。嘉遯龍盤。翫世高蹈。游心於浩然。玩志乎衆妙。絕景乎大荒之遐阻。吞響乎幽山之窮奧。於是徇華大夫聞而造焉。乃勑雲輅。驂飛黃。越奔沙。輾流霜。陵扶搖之風。躡堅冰之津。旌拂霄堮。軌出蒼垠。天清泠而無霞。野曠朗而無塵。臨重岫而攬轡。顧石室而迴輪。遂適沖漠之所居。其居也崢嶸幽藹。蕭瑟虛玄。溟海渾濩涌其後。嶰谷嘲嶆張其前。尋竹竦莖。蔭其壑。百籟羣鳴。籠其山。衝飈發而迴日。飛礫起而灑天。於是登絕巘。遡長風。陳辯惑之辭。命公子於巖中曰。蓋聞聖人不卷道而背時。智士不遺身而匿跡。生必耀華名於玉牒。歿則勒洪伐於金冊。今公子違世陸沈。避地獨竄。有生之歡滅。資父之義廢。愁洽百年。苦溢千歲。何異促鱗之游汀濘。短羽之棲翳薈。今將榮子以天人之大寶。悅子以縱性之至娛。窮地而游。中天而居。傾四海之歡。殫九州之腴。鑽屈轂之瓠。解疏屬之拘。子欲之乎。公子曰。大夫不遺。來萃荒外。雖在不敏。敬聽嘉話。

大夫曰。寒山之桐。出自太冥。含黃鐘以吐幹。據蒼岑而孤生。既乃瓊巘嶒崚。金岸崥崹。左當風谷。右臨雲谿。上無陵虛之巢。下無跖實之蹊。搖刖峻挺。茗邈苕嶢。晞三春之溢露。遡九秋之鳴飈。雲雪寫其根。霏霜封其條。木既繁而後綠。草未素而先凋。於是構雲梯。陟崢嶸。翦藉賓之陽柯。剖大呂之陰莖。營匠斲其樸。伶倫均其聲。器舉樂奏。促調高張。音朗號鐘。韻清繞梁。追逸響於八風。采

奇律於歸昌。啓中黃之少宮。發蓐收之變商。若乃龍火西穨。暄氣初收。飛霜迎節。高風送秋。羇旅懷土之徒。流宕百罹之疇。撫促柱則酸鼻。揮危絃則流涕。若乃追清哇。赴嚴節。奏綠水。吐白雪。激楚迴。流風結。悲蕢荻之朝落。悼望舒之夕缺。犇鼈爲之擗摽。孀老爲之嗚咽。王子拂纓而傾耳。六馬噓天而仰秣。此蓋音曲之至妙。子豈能從我而聽之乎。公子曰。余病未能也。

大夫曰。蘭宮祕宇。雕堂綺櫳。雲屏爛汗。瓊壁青葱。應門八襲。旋臺九重。表以百常之闕。圜以萬雉之墉。爾乃嶢榭迎風。秀出中天。翠觀岑青。雕閣霞連。長翼臨雲。飛陛陵山。望玉繩而結極。承倒景而開軒。赬素炳煥。枌栱嵯峨。陰虬負檐。陽馬承阿。錯以瑤英。鏤以金華。方疏含秀。圓井吐葩。重殿疊起。交綺對幌。幽堂晝密。明室夜朗。焦螟飛而生風。尺蠖動而成響。若乃目厭常玩。體倦帷幄。攜公子而雙游。時娛觀於林麓。登翠阜。臨丹谷。華草錦繁。飛采星燭。陽葉春青。陰條秋綠。華實代新。承意恣歡。仰折神藂。俯采朝蘭。迴惠風於蘅薄。眷椒塗於瑤壇。爾乃浮三翼。戲中沚。潛鰓駭。驚翰起。沈絲結。飛矰理。挂歸翮於赤霄之表。出華鱗於紫淵之裏。然後縱棹隨風。弭楫乘波。吹孤竹。撫雲和。淵客唱淮南之曲。榜人奏采菱之歌。歌曰。乘鷁舟兮爲水嬉。臨芳洲兮拔雲芝。樂以忘戚。游以卒時。窮夜爲日。畢歲爲期。此蓋宴居之浩麗。子豈能從我而處之乎。公子曰。余病未能也。

大夫曰。若乃白商素節。月既授衣。天凝地閉。風厲霜飛。柔條夕勁。密葉晨稀。將因氣以效殺。臨金郊而講師。爾乃列輕武。整戎剛。建雲髦。啓雄芒。鑣紅陽之飛驀。驂唐公之驌驦。屯羽隊於外林。縱輕翼於中荒。爾乃布飛羉。張脩罠。陵黃岑。挂青巒。畫長壑以爲限。帶流谿以爲關。既乃內無疏蹊。外無漏跡。叩鉦數校。舉麾旌獲。彀金機。馳鳴鏑。翦剛豪。落勁翮。車騎競鶩。駢武齊轍。翕忽揮霍。雲迴風列。聲動響飛。形移景發。舉戈林竦。揮鋒電滅。仰傾雲巢。俯殫地穴。乃有圓文之犴。斑題之貙。鼓髯風生。怒目電瞛。口歕霜刃。足撥飛鋒。飆林蹶石。扣跋幽叢。於是飛黃奮銳。賁石逞伎。蹙封豨。僨馮豕。拉甝虪。挫獬廌。句爪摧。鋸牙捭。瀾漫狼藉。傾榛倒壑。殞巓挂山。僵踣掩澤。藪爲毛林。隰爲

丹薄。於是撤圍頓罔。卷旆收鳶。虞人數獸。林衡計鮮。論最犒勤。息馬韜弦。肴驪連鑣。酒駕方軒。千鍾電釂。萬燈星繁。陵阜霑流膏。谿谷厭芳煙。歡極樂殫。迴節而旋。此亦田游之壯觀。子豈能從我而爲之乎。公子曰。余病未能也。

大夫曰。楚之陽劒。歐冶所營。耶谿之鋌。赤山之精。銷踰羊頭。鏷越鍛成。乃鍊乃鑠。萬辟千灌。豐隆奮椎。飛廉扇炭。神器化成。陽文陰縵。流綺星連。浮彩豔發。光如散電。質如耀雪。霜鍔水凝。冰刃露潔。形冠豪曹。名珍巨闕。指鄭則三軍白首。麾晉則千里流血。豈徒水截蛟鴻。陸灑奔駟。斷浮翮以爲工。絕重甲而稱利云爾而已哉。若其靈寶。則舒辟無方。奇鋒異模。形震薛燭。光駭風胡。價兼三鄉。聲貴二都。或馳名傾秦。或夜飛去吳。是以功冠萬載。威曜無窮。揮之者無前。擁之者身雄。可以從服九國。横制八戎。爪牙景附。函夏承風。此蓋希世之神兵。子豈能從我而服之乎。公子曰。余病未能也。」

大夫曰。天驥之駿。逸態超越。稟氣靈淵。受精皎月。眸矚黑照。玄采紺發。沫如揮紅。汗如振血。秦青不能識其衆尺。方堙不能覩其若滅。爾乃巾雲軒。踐朝霧。赴春衢。整秋御。蚪踊螭騰。麟超龍翥。望山載奔。視林載赴。氣盛怒發。星飛電駭。志陵九州。勢越四海。影不及形。塵不暇起。浮箭未移。再踐千里。爾乃踰天垠。越地隔。過汗漫之所不游。躡章亥之所未跡。陽烏爲之頓羽。夸父爲之投策。斯蓋天下之儁乘。子豈從我而御之乎。公子曰。余病未能也。

大夫曰。大梁之黍。瓊山之禾。唐稷播其根。農帝嘗其華。爾乃六禽殊珍。四膳異肴。窮海之錯。極陸之毛。伊公爨鼎。庖子揮刀。味重九沸。和兼勺藥。晨鳧露鵠。霜鵽黄雀。圓案星亂。方丈華錯。封熊之蹯。翰音之跖。鷰髀猩脣。髦殘象白。靈淵之龜。萊黄之鮐。丹穴之鷚。玄豹之胎。燀以秋橙。酤以春梅。接以商王之箸。承以帝辛之杯。范公之鱗。出自九溪。赬尾丹鰓。紫翼青鬐。爾乃命支離。飛霜鍔。紅肌綺散。素膚雪落。婁子之豪。不能厠其細。秋蟬之翼。不足擬其薄。繁肴既闋。亦有寒羞。商山之果。漢皋之楱。析龍眼之房。剖椰子之殼。芳旨萬選。承意代奏。乃有荊南烏程。豫北竹葉。浮蟻星沸。飛

華薜接。玄石嘗其味。儀氏進其法。傾罍一朝。可以流湎千日。簞醪投川。可使三軍告捷。斯人神之所歆羨。觀聽之煒曄也。子豈能彊起而御之乎。公子曰。耽口爽之饌。甘腊毒之味。服腐腸之藥。御亡國之器。雖子大夫之所榮。故亦吾人之所畏。余病未能也。

大夫曰。蓋有晉之融皇風也。金華啓徵。大人有作。繼明代照。配天光宅。其基德也。隆於姬公之處岐。其垂仁也。富乎有殷之在亳。南箕之風。不能暢其化。離畢之雲。無以豐其澤。皇道煥炳。帝載緝熙。導氣以樂。宣德以語。教清於雲官之世。治穆乎鳥紀之時。王猷四塞。函夏謐寧。丹冥投烽。青徼釋警。却馬於糞車之轅。銘德於昆吾之鼎。韋萌反素。時文載郁。耕父推畔。魚豎讓陸。樵夫恥危冠之飾。輿臺笑短後之服。六合時邕。巍巍蕩蕩。玄齠巷歌。黃髮擊壤。解羲皇之繩。錯陶唐之象。若乃華裔之夷。流荒之貊。語不傳於輶軒。地不被乎正朔。莫不駿奔稽顙。委質重譯。于時昆蚑感惠。無思不擾。苑戲九尾之禽。囿棲三足之烏。鳴鳳在林。夥於黃帝之園。有龍游淵。盈於孔甲之沼。萬物烟熅。天地交泰。義懷靡內。化感無外。林無被褐。山無韋帶。皆象刻於百工。兆發乎靈蔡。搢紳濟濟。軒冕藹藹。功與造化爭流。德與二儀比大。言未終。公子蹶然而興。曰。鄙夫固陋。守此狂狷。蓋理有毀之。而爭寶之訟解。言有怒之。而齊王之疾痊。向子誘我以聾耳之樂。棲我以蔀家之屋。田游馳蕩。利刃駿足。既老氏之攸戒。非吾人之所欲。故靡得而應子。至聞皇風載韙。時聖道淳。舉實爲秋。摛藻爲春。下有可封之民。上有大哉之君。余雖不敏。請尋後塵。

詔

詔　　漢武帝

詔曰。蓋有非常之功。必待非常之人。故馬或奔踶。而致千里。士或有負俗之累。而立功名。夫泛駕

之馬。跅弛之士。亦在御之而已。其令州縣察吏民有茂才異等。可以爲將相及使絕國者。

賢良詔

漢武帝

朕聞。昔在唐虞。畫象而民不犯。日月所燭。莫不率俾。周之成康。刑錯不用。德及鳥獸。敎通四海。海外肅愼。北發。渠搜。氐羌來服。星辰不孛。日月不蝕。山陵不崩。川谷不塞。麟鳳在郊藪。河洛出圖書。烏虖何施而臻此乎。今朕獲奉宗廟。夙興以求。夜寐以思。若涉淵水。未知所濟。猗歟偉歟。何行而可以彰先帝之洪業休德。上參堯舜。下配三王。朕之不敏。不能遠德。此子大夫之所覩聞也。賢良明於古今王事之體。受策察問。咸以書對。著之于篇。朕親覽焉。

册

册魏公九錫文

潘元茂

制詔使持節丞相領冀州牧武平侯。朕以不德。少遭閔凶。越在西土。遷于唐衞。當此之時。若綴旒然。宗廟乏祀。社稷無位。羣凶覬覦。連帶城邑。一人尺土。朕無獲焉。即我高祖之命。將墜於地。朕用夙興假寐。震悼于厥心。曰。惟祖惟父。股肱先正。其孰恤朕躬。乃誘天衷。誕育丞相。保乂我皇家。弘濟于艱難。朕實賴之。今將授君典禮。其敬聽朕命。昔者董卓初興國難。羣后釋位。以謀王室。君則攝進首啓戎行。此君之忠於本朝也。後及黃巾。反易天常。侵我三州。延于平民。君又討之。翦除其跡。以寧東夏。此又君之功也。韓暹楊奉。專用威命。又賴君勳。克黜其難。遂建許都。造其京畿。設官兆祀。不失舊物。天地鬼神。於是獲乂。此又君之功也。袁術僭逆。肆于淮南。懾憚君靈。用丕顯謀。蘄陽之役。橋蕤授首。稜威南厲。術以殞潰。此又君之功也。迴戈東指。呂布就戮。乘軒將返。張楊沮斃。

畦固伏罪・張繡稽伏・此又君之功也。袁紹逆常。謀危社稷。憑恃其衆・稱兵內侮。當此之時・王師寡弱。天下寒心。莫有固志。君執大節。精貫白日。奮其武怒。運諸神策。致屆官度。大殲醜類。俾我國家。拯於危墜。此又君之功也。濟師洪河。拓定四州。袁譚高幹。咸梟其首。海盜奔迸。黑山順軌。此又君之功也。烏丸三種。崇亂二世。袁尙因之。逼據塞北。東馬懸車。一征而滅。此又君之功也。劉表背誕。不供貢職。王師首路。威風先逝。百城八郡。交臂屈膝。此又君之功也。馬超成宜。同惡相濟。濱據河潼。求所逞欲。殄之渭南。獻馘萬計。遂定邊城。撫和戎狄。此又君之功也。鮮卑丁令。重譯而至。單于白屋。請吏帥職。此又君之功也。君有定天下之功。重以明德。班敍海內。宣美風俗。旁施勤敎。恤愼刑獄。吏無苛政。民不回慝。敦崇帝族。援繼絕世。舊德前功。罔不咸秩。雖伊尹格于皇天。周公光于四海。方之蔑如也。朕聞先王竝建明德。胙之以土。分之以民。崇其寵章。備其禮物。所以藩衞王室。左右厥世也。其在周成。管蔡不靖。懲難念功。乃使邵康公。錫齊太公履。東至于海。西至於河。南至于穆陵。北至于無棣。五侯九伯。實得征之。世祚太師。以表東海。爰及襄王。亦有楚人不供王職。又命晉文。登爲侯伯。錫以二輅。虎賁。鈇鉞・秬鬯。弓矢。大啓南陽。世作盟主。故周室之不壞。繫二國之是賴・今君稱丕顯德。明保朕躬。奉答天命。導揚弘烈。綏爰九域。罔不率俾。功高乎伊周。而賞卑乎齊晉。朕甚恧焉。朕以眇身。託于兆民之上。永思厥艱。若涉淵水。非君攸濟。朕無任焉。今以冀州之河東。河內。魏郡。趙國。中山。鉅鹿。常山。安平。甘陵。平原。凡十郡。封君爲魏公。使使持節御史大夫慮。授君印綬冊書。金虎符第一至第五。竹使符第一至第十。右錫君玄土。苴以白茅。爰契爾龜。用建家社。昔在周室。畢公毛公。入爲卿佐。周邵師保。出爲二伯。外內之任。君實宜之。其以丞相。領冀州牧如故。今更下傳璽。肅將朕命。以允華夏。其上故傳武平侯印綬。今又加君九錫。其敬聽後命。以君經緯禮律。爲民軌儀。使安職業。無或遷志。是用錫君大輅戎輅各一。玄牡二駟。君勸分務本。嗇民昏作。粟帛滯積。大業惟興。是用錫君袞冕之服。赤舄副焉。君敦尙謙讓。俾民興行。少長有禮。上下

咸和。是用錫君軒懸之樂。六佾之舞。君翼宣風化。爰發四方。遠人回面。華夏充實。是用錫君朱戶以居。君研其明哲。思帝所難。官才任賢。羣善必擧。是用錫君納陛以登。君秉國之均。正色處中。纖毫之惡。靡不抑退。是用錫君虎賁之士三百人。君糾虔天刑。章厥有罪。犯關干紀。莫不誅殛。是用錫君鈇鉞各一。君龍驤虎視。旁眺八維。掩討逆節。折衝四海。是用錫君彤弓一。彤矢百。玈弓十。玈矢千。君以溫恭爲基。孝友爲德。明允篤誠。感乎朕思。是用錫君秬鬯一卣。珪瓚副焉。魏國置丞相以下。羣卿百僚。皆如漢初諸王之制。君往欽哉。敬服朕命。簡恤爾衆。時亮庶功。用終爾顯德。對揚我高祖之休命。

令

宣德皇后令

任彥升

宣德皇后。敬問具位。夫功在不賞。故庸勳之典蓋闕。施侔造物。則謝德之途已寡。要不得不彊爲之名。使荃宰有寄。公實天生德。齊聖廣淵。不改參辰。而九星仰止。不易日月。而二儀貞觀。在昔晦明。隱鱗戢翼。博通羣籍。而讓齒乎一卷之師。劒氣陵雲。而屈迹於萬夫之下。辯析天口。而似不能言。文擅雕龍。而成輒削藁。爰在弱冠。首應弓旌。客游梁朝。則聲華籍甚。薦名宰府。則延譽自高。隆昌季年。勤王始著。建武惟新。締構斯在。功隆賞薄。嘉庸莫疇。一馬之田。介山之志愈厲。六百之秩。大樹之號斯存。及擁旄司部。代馬不敢南牧。推轂樊鄧。胡塵罕嘗夕起。惟彼狡童。窮凶極虐。衣冠泯絕。禮樂崩喪。既而鞠旅誓衆。言謀王室。白羽一麾。黃鳥底定。甲既鱗下。車亦瓦裂。致天之屆。拱揖羣后。豐功厚利。無得而稱。是以祥光總至。休氣四塞。五老游河。飛星入昴。元功茂勳。若斯之盛。而地狹乎四履。勢卑乎九伯。帝有惡焉。輶軒莘止。今遣某位某甲等。率茲百辟。人致其誠。庶匪席之

旨。不遠而復。

教

為宋公脩張良廟教　傅季友

綱紀。夫盛德不泯。義存祀典。微管之歎。撫事彌深。張子房。道亞黃中。照鄰殆庶。風雲玄感。蔚為帝師。夷項定漢。大拯橫流。固已參軌伊望。冠德如仁。若乃神交圯上。道契商洛。顯默之際。窅然難究。淵流浩瀁。莫測其端矣。塗次舊沛。佇駕留城。靈廟荒頓。遺像陳昧。撫跡懷人。永歎寔深。過大梁者。或佇想於夷門。游九原者。亦流連於隨會。擬之若人。亦足以云。可改構棟宇。脩飾丹青。蘋蘩行潦。以時致薦。抒懷古之情。存不刊之烈。主者施行。

為宋公脩楚元王墓教　傅季友

綱紀。夫褒賢崇德。千載彌光。尊本敬始。義隆自遠。楚元王。積仁基德。啓藩斯境。素風道業。作範後昆。本支之祚。實隆鄙宗。遺芳餘烈。奮乎百世。而丘封翳然。墳塋莫翦。感遠存往。慨然永懷。夫愛人懷樹。甘棠且猶勿翦。追甄墟墓。信陵尚或不泯。況瓜瓞所興。開源自本者乎。可蠲復近墓五家。長給灑掃。便可施行。

文

永明九年策秀才文五首　王元長

問秀才高第明經。朕聞神靈文思之君。聰明聖德之后。體道而不居。見善如不及。是以崆峒有順風之請。華封致乘雲之拜。或揚旌求士。或設虛待賢。用能敷化一時。餘烈千古。朕叨奉天命。恭惟永圖。審聽高居。載懷祗懼。雖言事必史。而象闕未箴。寤寐嘉猷。延佇忠實。子大夫選名升學。利用賓王。懋陳三道之要。以光四科之首。鹽梅之和。屬有望焉。

又問。昔周宣惰千畝之禮。虢公納諫。漢文缺三推之義。賈生直言。良以食惟民天。農爲政本。金湯非粟而不守。水旱有待而無遷。朕式照前經。寶茲稼穡。祥正而青旗肅事。土膏而朱紘戒典。將使杏花菖葉。耕穫不愆。清畎泠風。述遵無廢。而釋耒佩牛。相沿莫反。兼貧擅富。浸以爲俗。若爰井開制。懼驚擾愚民。舄鹵可腴。恐時無史白。興廢之術。矢陳厥謀。

又問。議獄緩死。大易深規。敬法卹刑。虞書茂典。自呧俗澆弛。法令滋彰。肺石少不冤之民。棘林多夜哭之鬼。朕所以明發動容。昃食興慮。傷秋荼之密網。惻夏日之嚴威。永念畫冠。緬追刑厝。徒以百鍰輕科。反行季葉。四支重罰。爰創前古。訪游禽於絕澗。作霸秦基。歌雞鳴於闕下。稱仁漢牘。二途如爽。即用兼通。昌言所安。朕將親覽。

又問。聚人曰財。次政曰貨。泉流表其不匱。懋遷通其有無。既龜貝積寢。緡纏專用。世代茲多。銷漏參倍。下貧無兼辰之業。中產闕洊歲之貲。惟瘼卹隱。無捨矜歎。上帝溥臨。賜朕休寶。邛斜之谷。開而出銅。且有後命。事茲鎔範。充都內之金。紹圜府之職。但赤仄深巧學之患。榆莢難輕重之權。開塞所宜。悉心以對。

又問。治歷明時。昭遷革之運。改憲勅法。審刑德之原。分命顯於唐官。文條炳於鄒說。及嵎夷廢職。昧谷虧方。漢秉素祇之徵。魏稱黃星之驗。紛諍空軫。疑論無歸。朕獲纂洪基。思弘至道。庶令日月休徵。風雨玉燭。克明之旨弗遠。欽若之義復還。於子大夫何如哉。其驪翰改色。寅丑殊建。別白書之

永明十一年策秀才文五首

王元長

問秀才。朕秉籙御天。握樞臨極。五辰咨撫。九序未歌。至於思政明臺。訪道宣室。若墜之惻每勤。如傷之念恆軫。故恤貧緩賦。省徭慎獄。幸四境無虞。三秋式稔。而多黍多稌。不興兩穗之謠。無褐無衣。必盈七月之歎。豈布政未優。將罷民難業。登爾於朝。是屬宏議。罔弗同心。以匡厥辟。

又問。惟王建國。惟典命官。上叶星象。下符川嶽。必待天爵具脩。人紀咸事。然後沿才授職。揆務分司。是以五正置於朱宣。下民不忒。九工開於黃序。庶績其凝。周官三百。漢位兼倍。歷茲以降。游惰寔繁。若閑冗畢棄。則橫議無已。冕笏不澄。則坐談彌積。何則可脩。善詳其對。

又問。昔者賢牧分陝。良守共治。下邑必樹其風。一鄉可以爲績。至有旦撫鳴琴。日置醇酒。文而無害。嚴而不殘。故能出入於阽危之域。躋俗於仁壽之地。是以賈誼言。天下之有惡。吏之罪也。頃深汰珪符。妙簡銅墨。而春雉未馴。秋螟不散。入在朕前。湊其智略。出連城守。闕爾無聞。豈薪槱之道未弘。爲網羅之目尙簡。悉意正辭。無侵執事。

又問。朕聞上智利民。不述於禮。大賢彊國。罔圖惟舊。豈非瘵飢不期於鼎食。拯溺無待於規行。是以三王異道而共昌。五霸殊風而竝烈。今農戰不脩。文儒是競。弃本徇末。厥弊滋多。昔宋臣以禮樂爲殘賊。漢主比文章於鄭衛。豈欲非聖無法。將以旣道而權。今欲專士女於耕桑。習鄉閭以弓騎。五都復而事庠序。四民富而歸文學。其道奚若。爾無面從。

又問。自晉氏不綱。關河蕩析。宋人失馭。淮汴崩離。朕思念舊民。永言攸濟。故選將開邊。勞來安集。加以納款通和。布德脩禮。歌皇華而遣使。賦膏雨而懷賓。所以關洛動南望之懷。獯夷遽北歸之念。夫危葉畏風。驚禽易落。無待干戈。聊用辭辯。片言而求三輔。一說而定五州。斯路何階。人誰或可。進諫誦志。以沃朕心。

天監三年策秀才文三首

任彥升

問。秀才。朕長驅樊鄧。直指商郊。因藉時來。乘此歷運。當扆永念。猶懷慙德。何者百王之敝。齊季斯甚。衣冠禮樂。掃地無餘。雕斲刓方。經綸草昧。採三王之禮。冠履粗分。因六代之樂。宮判始辨。而百度草創。倉廩未實。若終畝不稅。則國用靡資。百姓不足。則惻隱深慮。每時入𥳑稾。歲課田租。愀然疚懷。如憐赤子。今欲使朕無滿堂之念。民有家給之饒。漸登九年之蓄。稍去關市之賦。子大夫當此三道。利用賓王。斯理何從。佇聞良說。

問。朕本自諸生。弱齡有志。閉戶自精。開卷獨得。九流七略。頗嘗觀覽。六藝百家。庶非牆面。雖一日萬機。早朝晏罷。聽覽之暇。三餘靡失。上之化下。草偃風從。惟此虛寡。弗能動俗。昔紫衣賤服。猶化齊風。長纓鄙好。且變鄒俗。雖德慙往賢。業優前事。且夫搢紳道行。祿利然也。朕傾心駿骨。非懼眞龍。輜軿靑紫。如拾地芥。而惰游廢業。十室而九。鳴鳥蔑聞。子衿不作。弘奬之路。斯既然矣。猶其寂寞。應有良規。

問。朕立諫鼓。設謗木。於茲三年矣。比雖輻湊闕下。多非政要。日伏靑蒲。罕能切直。將齊季多諱。風流遂往。將謂朕空然慕古。虛受弗弘。然自君臨萬寓。介在民上。何嘗以一言失旨。轉徙朔方。睚眦有違。論輸左校。而使直臣杜口。忠讜路絕。將恐弘長之道。別有未周。悉意以陳。極言無隱。

文選卷十八終

文選卷十九

表

薦禰衡表　孔文擧

臣聞。洪水橫流。帝思俾乂。旁求四方。以招賢俊。昔世宗繼統。將弘祖業。疇咨熙載。羣士響臻。陛下叡聖。纂承基緒。遭遇厄運。勞謙日昃。惟岳降神。異人並出。竊見處士平原禰衡。年二十四。字正平。淑質貞亮。英才卓躒。初涉藝文。升堂覩奧。目所一見。輒誦於口。耳所暫聞。不忘於心。性與道合。思若有神。弘羊潛計。安世默識。以衡準之。誠不足怪。忠果正直。志懷霜雪。見善若驚。疾惡若讎。任座抗行。史魚厲節。殆無以過也。鷙鳥累百。不如一鶚。使衡立朝。必有可觀。飛辯騁辭。溢氣坌涌。解疑釋結。臨敵有餘。昔賈誼求試屬國。詭係單于。終軍欲以長纓。牽致勁越。弱冠慷慨。前代美之。近日路粹嚴象。亦用異才。擢拜臺郎。衡宜與為比。如得龍躍天衢。振翼雲漢。揚聲紫微。垂光虹蜺。足以昭近署之多士。增四門之穆穆。鈞天廣樂。必有奇麗之觀。帝室皇居。必畜非常之寶。若衡等輩。不可多得。激楚陽阿。至妙之容。掌技者之所貪。飛兎騕褭。絕足奔放。良樂之所急也。臣等區區。敢不以聞。陛下篤愼取士。必須效試。乞令衡以褐衣召見。必無可觀采。臣等受面欺之罪。

出師表　諸葛孔明

臣亮言。先帝創業未半。而中道崩殂。今天下三分。益州罷弊。此誠危急存亡之秋也。然侍衞之臣。

不懈於內。忠志之士。亡身於外者。蓋追先帝之遇。欲報之於陛下也。誠宜開張聖聽。以光先帝遺德。恢志士之氣。不宜妄自菲薄。引喩失義。以塞忠諫之路也。宮中府中。俱爲一體。陟罰臧否。不宜異同。若有作姦犯科。及爲忠善者。宜付有司。論其刑賞。以昭陛下平明之治。不宜偏私。使內外異法也。侍中侍郎郭攸之。費褘。董允等。此皆良實。志慮忠純。是以先帝簡拔。以遺陛下。愚以爲宮中之事。事無大小。悉以咨之。然後施行。必能裨補闕漏。有所廣益也。將軍向寵。性行淑均。曉暢軍事。試用於昔日。先帝稱之曰能。是以衆議擧寵爲督。愚以爲營中之事。悉以諮之。必能使行陳和穆。優劣得所也。親賢臣。遠小人。此先漢所以興隆也。親小人。遠賢士。此後漢所以傾頹也。先帝在時。每與臣論此事。未嘗不歎息痛恨於桓靈也。侍中尚書。長史。參軍。此悉貞亮死節之臣也。願陛下親之信之。則漢室之隆。可計日而待也。臣本布衣。躬耕於南陽。苟全性命於亂世。不求聞達於諸侯。先帝不以臣卑鄙。猥自枉屈。三顧臣於草廬之中。諮臣以當世之事。由是感激。遂許先帝以驅馳。後值傾覆。受任於敗軍之際。奉命於危難之間。爾來二十有一年矣。先帝知臣謹愼。故臨崩寄臣以大事也。受命以來。夙夜憂歎。恐託付不效。以傷先帝之明。故五月渡瀘。深入不毛。今南方已定。兵甲已足。當帥將三軍。北定中原。庶竭駑鈍。攘除姦凶。興復漢室。還于舊都。此臣之所以報先帝。而忠陛下之職分也。至於斟酌損益。進盡忠言。則攸之。褘。允之任也。願陛下託臣以討賊興復之效。不效則治臣之罪。以告先帝之靈。若無興德之言。則戮允等。以章其慢。陛下亦宜自謀以咨諏善道。察納雅言。深追先帝。臣不勝受恩感。當遠離。臨表涕泣。不知所云。

求自試表　　曹子建

臣植言。臣聞。士之生世。入則事父。出則事君。事父尚於榮親。事君貴於興國。故慈父不能愛無益之子。仁君不能畜無用之臣。夫論德而授官者。成功之君也。量能而受爵者。畢命之臣也。故君無

虛授。臣無虛受。虛授謂之謬舉。虛受謂之尸祿。詩之素餐。所由作也。昔二虢不辭兩國之任。其德厚也。旦奭不讓燕魯之封。其功大也。今臣蒙國重恩。三世于今矣。正値陛下升平之際。沐浴聖澤。潛潤德敎。可謂厚幸矣。而位竊東藩。爵在上列。身被輕煖。口厭百味。目極華靡。耳倦絲竹者。爵重祿厚之所致也。退念古之受爵祿者。有異於此。皆以功勤濟國。輔主惠民。今臣無德可述。無功可紀。若此終年。無益國朝。將挂風人彼己之譏。是以上慙玄冕。俯媿朱紱。方今天下一統。九州晏如。顧西尚有違命之蜀。東有不臣之吳。使邊境未得稅甲。謀士未得高枕者。誠欲混同宇內。以致太和也。故啓滅有扈。而夏功昭。成克商奄。而周德著。今陛下以聖明統世。將欲卒文武之功。繼成康之隆。簡良授能。以方叔邵虎之臣。鎭衛四境。爲國爪牙者。可謂當矣。然而高鳥未挂於輕繳。淵魚未懸於鉤餌者。恐鉤射之術。或未盡也。昔耿弇不俟光武。亟擊張步。言不以賊遺於君父也。故車右伏劍於鳴轂。雍門刎首於齊境。若此二子。豈惡生而尙死哉。誠忿其慢主而陵君也。夫君之寵臣。欲以除患興利。臣之事君。必殺身靜亂。以功報主也。昔賈誼弱冠。求試屬國。請係單于之頸。而制其命。終軍以妙年使越。欲得長纓占其王。羈致北闕。此二臣。豈好爲夸主而燿世俗哉。志或鬱結。欲逞才力。輸能於明君也。昔漢武爲霍去病治第。辭曰。匈奴未滅。臣無以家爲。固夫憂國忘家。捐軀濟難。忠臣之志也。今臣居外。非不厚也。而寢不安席。食不遑味者。伏以二方未剋爲念。伏見先帝武臣宿兵。年耆卽世者有聞矣。雖賢不乏世。宿將舊卒。由習戰也。竊不自量。志在效命。庶立毛髮之功。以報所受之恩。若使陛下出不世之詔。效臣錐刀之用。使得西屬大將軍。當一校之隊。若東屬大司馬。統偏師之任。必乘危蹈險。騁舟奮驪。突刃觸鋒。爲士卒先。雖未能禽權馘亮。庶將虜其雄率。殲其醜類。必效須臾之捷。以滅終身之愧。使名挂史筆。事列朝榮。雖身分蜀境。首懸吳闕。猶生之年也。如微才不試。沒世無聞。徒榮其軀。而豐其體。生無益於事。死無損於數。虛荷上位。而忝重祿。禽息鳥視。終於白首。此徒圈牢之養物。非臣之所志也。流聞東軍失備。師徒小衄。輟食

弃餐。奮袂攘衽。撫劍東顧。而心已馳於吳會矣。臣昔從先武皇帝。南極赤岸。東臨滄海。西望玉門。北出玄塞。伏見所以行軍用兵之勢。可謂神妙矣。故兵者不可豫言。臨難而制變者也。志欲自效於明時。立功於聖世。每覽史籍。觀古忠臣義士。出一朝之命。以殉國家之難。身雖屠裂。而功銘著於景鍾。名稱垂於竹帛。未嘗不拊心而歎息也。臣聞。明主使臣。不廢有罪。故奔北敗軍之將。用秦魯以成其功。絕纓盜馬之臣。赦楚趙以濟其難。臣竊感先帝早崩。威王弃世。臣獨何人。以堪長久。常恐先朝露塡溝壑。墳土未乾。而身名並滅。臣聞。騏驥長鳴。伯樂昭其能。盧狗悲號。韓國知其才。是以效之齊楚之路。以逞千里之任。試之狡兎之捷。以驗搏噬之用。今臣志狗馬之微功。竊自惟度。終無伯樂韓國之擧。是以於邑而竊自痛者也。夫臨博而企竦。聞樂而竊抃者。或有賞音而識道也。昔毛遂趙之陪隸。猶假錐囊之喩。以寤主立功。何況巍巍大魏。多士之朝。而無慷慨死難之臣乎。夫自衒自媒者。士女之醜行也。干時求進者。道家之明忌也。而臣敢陳聞於陛下者。誠與國分形同氣。憂患共之者也。冀以塵露之微。補益山海。螢燭末光。增輝日月。是以敢冒其醜而獻其忠。知必爲朝士所笑。聖主不以人廢言。伏惟陛下。少垂神聽。臣則幸矣。

求通親親表

曹子建

臣植言。臣聞。天稱其高者。以無不覆。地稱其廣者。以無不載。日月稱其明者。以無不照。江海稱其大者。以無不容。故孔子曰。大哉堯之爲君。惟天爲大。惟堯則之。夫天德之於萬物。可謂弘廣矣。蓋堯之爲教。先親後疏。自近及遠。其傳曰。克明俊德。以親九族。九族既睦。平章百姓。及周之文王。亦崇厥化。其詩曰。刑于寡妻。至于兄弟。以御于家邦。是以雍雍穆穆。風人詠之。昔周公弔管蔡之不咸。廣封懿親。以藩屛王室。傳曰。周之宗盟。異姓爲後。誠骨肉之恩。爽而不離。親親之義。寔在敦固。未有義而後其君。仁而遺其親者也。伏惟陛下。資帝唐欽明之德。體文王翼翼之仁。惠洽椒房。恩昭九

親。羣臣百僚。番休遞上。執政不廢於公朝。下情得展於私室。親理之路通。慶弔之情展。誠可謂恕己治人。推惠施恩者矣。至於臣者。人道絕緒。禁錮明時。臣竊自傷也。不敢乃望交氣類。脩人事。敍人倫。近且婚媾不通。兄弟永絕。吉凶之問塞。慶弔之禮廢。恩紀之違。甚於路人。隔閡之異。殊於胡越。今臣以一切之制。永無朝覲之望。至於注心皇極。結情紫闥。神明知之矣。然天實爲之。謂之何哉。退省諸王。常有戚戚具爾之心。願陛下沛然垂詔。使諸國慶問。四節得展。以敍骨肉之歡恩。全怡怡之篤義。妃妾之家。膏沐之遺。歲得再通。齊義於貴宗。等惠於百司。如此則古人之所歎。風雅之所詠。復存於聖世矣。臣伏自惟省。無錐刀之用。及觀陛下之所拔授。若以臣爲異姓。竊自料度。不後於朝士矣。若得辭遠游。戴武弁。解朱組。佩青紱。駙馬奉車。趣得一號。安宅京室。執鞭珥筆。出從華蓋。入侍輦轂。承答聖問。拾遺左右。乃臣丹情之至願。不離於夢想者也。遠慕鹿鳴君臣之宴。中詠常棣匪他之誡。下思伐木友生之義。終懷蓼莪罔極之哀。每四節之會。塊然獨處。左右唯僕隸。所對唯妻子。高談無所與陳。發義無所與展。未嘗不聞樂而拊心。臨觴而歎息也。臣伏以爲。犬馬之誠。不能動人。譬人之誠。不能動天。崩城隕霜。臣初信之。以臣心況。徒虛語耳。若葵藿之傾葉。太陽雖不爲之迴光。終向之者誠也。臣竊自比葵藿。若降天地之施。垂三光之明者。寔在陛下。臣聞。文子曰。不爲福始。不爲禍先。今之否隔。友于同憂。而臣獨唱言者。何也。竊不願於聖代。使有不蒙施之物。必有慘毒之懷。故柏舟有天只之怨。谷風有弃予之歎。伊尹恥其君不爲堯舜。孟子曰。不以舜之所以事堯事其君者。不敬其君者也。臣之愚蔽。固非虞伊。至於欲使陛下崇光被時雍之美。宣緝熙章明之德者。是臣慺慺之誠。竊所獨守。寔懷鶴立企佇之心。敢復陳聞者。冀陛下儻發天聰。而垂神聽也。

讓開府表　羊叔子

臣祜言。臣昨出。伏聞恩詔。拔臣使同台司。臣自出身以來。適十數年。受任外內。每極顯重之地。常以智力不可彊進。恩寵不可久謬。夙夜戰慄。以榮爲憂。臣聞古人之言。德未爲衆所服。而受高爵。則使才臣不進。功未爲衆所歸。而荷厚祿。則使勞臣不勸。今臣身託外戚。事遭運會。誡在過寵。不患見遺。而猥超然降發中之詔。加非次之榮。臣有何功。可以堪之。何心可以安之。以身誤陛下。辱高位。傾覆亦尋而至。願復守先人弊廬。豈可得哉。違命誠忤天威。曲從卽復若此。蓋聞。古人申於見知。大臣之節。不可則止。臣雖小人。敢緣所蒙。念存斯義。今天下自服化已來。方漸八年。雖側席求賢。不遺幽賤。然臣等不能推有德進有功。使聖聽知勝臣者多。而未達者不少。假令有遺德於版築之下。有隱才於屠釣之間。而令朝議用臣。不以爲非。臣處之不以爲愧。所失豈不大哉。且臣忝竊雖久。未若今日兼文武之極寵。等宰輔之高位也。臣所見雖狹。據光祿大夫李喜。秉節高亮。正身在朝。光祿大夫魯芝。絜身寡欲。和而不同。光祿大夫李胤。莅政弘簡。在公正色。皆服事華髮。以禮始終。雖歷內外之寵。不異寒賤之家。而猶未蒙此選。臣更越之。何以塞天下之望。少益日月。是以誓心守節。無苟進之志。今道路未通。方隅多事。乞留前恩。使臣得速還屯。不爾留連。必於外虞有闕。臣不勝憂懼。謹觸冒拜表。惟陛下察匹夫之志不可以奪。

陳情表

李令伯

臣密言。臣以險釁。夙遭閔凶。生孩六月。慈父見背。行年四歲。舅奪母志。祖母劉。愍臣孤弱。躬親撫養。臣多疾病。九歲不行。零丁孤苦。至于成立。既無叔伯。終鮮兄弟。門衰祚薄。晩有兒息。外無朞功彊近之親。內無應門五尺之僮。煢煢獨立。形影相弔。而劉夙嬰疾病。常在牀蓐。臣侍湯藥。未曾廢離。逮奉聖朝。沐浴淸化。前太守臣逵。察臣孝廉。後刺史臣榮。擧臣秀才。臣以供養無主。辭不赴。會詔書特下。拜臣郎中。尋蒙國恩。除臣洗馬。猥以微賤。當侍東宮。非臣隕首所能上報。臣具以表聞。

辭不就職。詔書切峻。責臣逋慢。郡縣逼迫。催臣上道。州司臨門。急於星火。臣欲奉詔奔馳。則劉病日篤。欲苟順私情。則告訴不許。臣之進退。實爲狼狽。伏惟聖朝以孝治天下。凡在故老。猶蒙矜育。況臣孤苦。特爲尤甚。且臣少仕僞朝。歷職郎署。本圖宦達。不矜名節。今臣亡國賤俘。至微至陋。過蒙拔擢。寵命優渥。豈敢盤桓。有所希冀。但以劉日薄西山。氣息奄奄。人命危淺。朝不慮夕。臣無祖母。無以至今日。祖母無臣。無以終餘年。母孫二人。更相爲命。是以區區。不能廢遠。臣密今年四十有四。祖母劉今年九十有六。是臣盡節於陛下之日長。報劉之日短也。烏鳥私情。願乞終養。臣之辛苦。非獨蜀之人士。及二州牧伯。所見明知。皇天后土。實所共鑒。願陛下矜愍愚誠。聽臣微志。庶劉僥倖。保卒餘年。臣生當隕首。死當結草。臣不勝犬馬怖懼之情。謹拜表以聞。

謝平原內史表

陸士衡

陪臣陸機言。今月九日。魏郡太守。遣兼丞張含。齎板詔書印綬。假臣爲平原內史。拜受祗竦。不知所裁。臣本出自敵國。世無先臣宣力之效。才非丘園耿介之秀。皇澤廣被。惠濟無遠。擢自羣萃。累蒙榮進。入朝九載。歷官有六。身登三閣。官成兩宮。服冕乘軒。仰齒貴游。振景拔迹。顧邈同列。施重山岳。義足灰沒。遭國顚沛。無節可紀。雖蒙曠盪。臣獨何顏。俛首頓膝。憂愧若厲。而橫爲故齊王冏所見枉陷。誣臣與衆人共作禪文。幽執囹圄。當爲誅始。臣之微誠。不負天地。倉卒之際。慮有逼迫。乃與弟雲。及散騎侍郎袁瑜。中書侍郎馮熊。尚書右丞崔基。廷尉正顧榮。汝陰太守曹武。思所以獲免。陰蒙避迴。崎嶇自列。片言隻字。不關其間。事蹤筆跡。皆可推校。而一朝翻然。更以爲罪。蕞爾之生。尚不足恡。區區本懷。實有可悲。畏逼天威。卽罪惟謹。鉗口結舌。不敢上訴所天。莫大之釁。日經聖聽。肝血之誠。終不一聞。所以臨難慷慨。而不能不恨恨者。唯此而已。重蒙陛下愷悌之宥。迴霜收電。使不隕越。復得扶老攜幼。生出獄戶。懷金拖紫。退就散輩。感恩惟咎。五情震悼。跼天蹐地。

若無所容。不悟日月之明。遂垂曲照。雲雨之澤。播及朽瘁。忘臣弱才。身無足采。哀臣零落。罪有可察。苟削丹書。得夷平民。則塵洗天波。謗絕衆口。臣之始望。尙未至是。猥辱大命。顯授符虎。使春枯之條。更與秋蘭垂芳。陸沈之羽。復與翔鴻撫翼。雖安國免徒。起紆青組。張敞亡命。坐致朱軒。方臣所荷。未足爲泰。豈臣蒙垢含吝。所宜忝竊。非臣毀宗夷族。所能上報。喜懼參并。悲慚哽結。拘守常憲。當便道之官。不得束身奔走。稽顙城闕。瞻係天衢。馳心輦轂。臣不勝屏營延仰。謹拜表以聞。

勸進表

劉越石

建興五年。三月癸未朔。十八日辛丑。使持節。散騎常侍。都督河北幷冀幽三州諸軍事。領護軍匈奴中郞將。司空。幷州刺史。廣武侯臣琨。使持節。侍中。都督冀州諸軍事。撫軍大將軍。冀州刺史。左賢王渤海公臣匹磾。頓首死罪上書。臣琨臣匹磾。頓首頓首。死罪死罪。臣聞。天生蒸民。樹之以君。所以對越天地。司牧黎元。聖帝明王。鑒其若此。知天地不可以乏饗。故屈其身以奉之。知黎元不可以無主。故不得已而臨之。社稷時難。則戚藩定其傾。郊廟或替。則宗哲纂其祀。所以弘振遐風。式固萬世。三五以降。靡不由之。臣琨臣匹磾。頓首頓首。死罪死罪。伏惟高祖宣皇帝。肇基景命。世祖武皇帝。遂造區夏。三葉重光。四聖繼軌。惠澤侔於有虞。卜年過於周氏。自元康以來。艱禍繁興。永嘉之際。氛厲彌昏。宸極失御。登遐醜裔。國家之危。有若綴旒。賴先后之德。宗廟之靈。皇帝嗣建。舊物克甄。誕授欽明。服膺聰哲。玉質幼彰。金聲夙振。冢宰攝其綱。百辟輔其治。四海想中興之美。羣生懷來蘇之望。不圖天不悔禍。大災荐臻。國未忘難。寇害尋興。逆胡劉曜。縱逸西都。敢肆犬羊。陵虐天邑。臣等奉表使還。仍承西朝以去年十一月不守。主上幽劫。復沈虜廷。神器流離。再辱荒逆。臣每覽史籍。觀之前載。厄運之極。古今未有。苟在食土之毛。含氣之類。莫不叩心絕氣。行號巷哭。況臣等。荷寵三世。位厠鼎司。承問震惶。精爽飛越。且悲且惋。五情無主。舉哀朔垂。上下泣血。臣琨

臣匹磾。頓首頓首。死罪死罪。臣聞。昏明迭用。否泰相濟。天命未改。歷數有歸。或多難以固邦國。或殷憂以啓聖明。是以齊有無知之禍。而小白爲五伯之長。晉有驪姬之難。而重耳主諸侯之盟。社稷靡安。必將有以扶其危。黔首幾絕。必將有以繼其緒。伏惟陛下。玄德通於神明。聖姿合於兩儀。應命世之期。紹千載之運。夫符瑞之表。天人有徵。中興之兆。圖讖垂典。自京畿隕喪。九服崩離。天下囂然。無所歸懷。雖有夏之遘夷羿。宗姬之離犬戎。蔑以過之。陛下撫寧江左。奄有舊吳。柔服以德。伐叛以刑。抗明威以攝不類。仗大順以肅宇內。純化既敷。則率土宅心。義風既暢。則遐方企踵。百揆時序於上。四門穆穆於下。昔少康之隆。夏訓以爲美談。宣王之興。周詩以爲休詠。況茂勳格于皇天。清輝光于四海。蒼生顒然。莫不欣戴。聲教所加。願爲臣妾者哉。且宣皇之胤。唯有陛下。億兆攸歸。曾無與二。天祚大晉。必將有主。主晉祀者。非陛下而誰。是以邇無異言。遠無異望。謳歌者。無不吟詠徽猷。獄訟者。無不思于聖德。天地之際既交。華裔之情允洽。一角之獸。連理之木。以爲休徵者。蓋有百數。冠帶之倫。要荒之衆。不謀而同辭者。動以萬計。是以臣等敢考天地之心。因函夏之趣。昧死以上尊號。願陛下存舜禹至公之情。狹巢由抗矯之節。以社稷爲務。不以小行爲先。以黔首爲憂。不以克讓爲事。上以慰宗廟乃顧之懷。下以釋溥天傾首之望。則所謂生繁華於枯荑。育豐肌於朽骨。神人獲安。無不幸甚。臣琨臣匹磾。頓首頓首。死罪死罪。臣聞。尊位不可久虛。萬機不可久曠。虛之一日。則尊位以殆。曠之浹辰。則萬機以亂。方今鍾百王之季。當陽九之會。狡寇窺窬。伺國瑕隙。齊人波蕩。無所繫心。安可以廢而不恤哉。陛下雖欲逡巡。其若宗廟何。其若百姓何。昔惠公虜秦。晉國震駭。呂郤之謀。欲立子圉。外以絕敵人之志。內以固闔境之情。故曰。喪君有君。羣臣輯穆。好我者勸。惡我者懼。前事之不忘。後代之元龜也。陛下明並日月。無幽不燭。深謀遠慮。出自胷懷。不勝犬馬憂國之情。遲覩人神開泰之路。是以陳其乃誠。布之執事。臣等各忝守方任。職在遐外。不得陪列闕庭。共觀盛禮。踊躍之懷。南望罔極。謹上。臣琨。謹遣兼左長史。右司馬臣

溫嶠。主簿臣辟閭訓。臣匹磾。遣散騎常侍。征虜將軍。淸河太守。領右長史。高平亭侯臣榮劭。輕車將軍。關內侯臣郭穆奉表。臣琨臣匹磾等。頓首頓首。死罪死罪。

爲吳令謝詢求爲諸孫置守冢人表　張士然

臣聞。成湯革夏而封杞。武王入殷而建宋。春秋征伐。則晉脩虞祀。燕祭齊廟。夫一國爲一人興。先賢爲後愚廢。誠仁聖所哀悼而不忍也。故三王敦繼絕之德。春秋貴柔服之義。昔漢高受命。追存六國。凡諸絕祚。一時竝祀。觀與項羽對爭存亡。逮羽之死。臨哭其喪。將以位當侔尊。力當均勢。雖功奪其成。而恩與其敗。且暴興疾顚。禮之若舊。殘戮之尸。乃以公葬。若使羽位承前緖。世有哲王。一朝力屈。全身從命。則楚廟不墮。有後可冀。伏惟大晉。應天順民。武成止戈。西戎有卽序之人。京邑開吳蜀之館。興滅加乎萬國。繼絕接于百世。雖三五弘道。商周稱仁。洋洋之美。未足以喩。是以孫氏雖家失吳祚。而族蒙晉榮。子弟量才。比肩進取。懷金侯服。佩靑千里。當時受恩。多有過望。臣聞。春雨潤木。自葉流根。鴟鴞恤功。愛子及室。故天稱罔極之恩。聖有綢繆之惠。追惟吳僞武烈皇帝。遭漢室之弱。值亂臣之彊。首唱義兵。先衆犯難。破董卓於陽人。濟神器於甄井。威震羣狡。名顯往朝。桓王才武。弱冠承業。招百越之士。奮鷹揚之勢。西赴許都。將迎幼主。雖元勳未終。然至忠已著。夫家積義勇之基。世傳扶危之業。進爲狥漢之臣。退爲開吳之主。而蒸嘗絕於三葉。園陵殘於薪采。臣竊悼之。伏見吳平之初。明詔追錄先賢。欲封其墓。愚謂二君。竝宜應書。故舉勞則力輸先代。論德則惠存江南。正刑則罪非晉寇。從坐則異世已輕。若列先賢之數。蒙詔書之恩。裁加表異。以寵亡靈。則人望克厭。誰不曰宜。二君私奴。多在墓側。今爲平民。乞差五人。蠲其徭役。使四時修護頹毀。掃除塋壟。永以爲常。

讓中書令表

庾元規

臣亮言。臣凡庸固陋。少無檢操。昔以中州多故。舊邦喪亂。隨侍先臣。遠庇有道。爰客逃難。求食而已。不悟邀時之福。遭遇嘉運。先帝龍興。垂異常之顧。既眷同國士。又申之婚姻。遂階親寵。累忝非服。弱冠濯纓。沐浴玄風。頻繁省闥。出領六軍。十餘年間。位超先達。無勞被遇。無與臣比。小人祿薄。福過災生。止足之分。臣所宜守。而偸榮昧進。日爾一日。謗讟既集。上塵聖朝。始欲自聞。而先帝登遐。區區微誠。竟未上達。陛下踐祚。聖政維新。宰輔賢明。庶寮咸允。康哉之歌。實在至公。而國恩不已。復以臣領中書。則示天下以私矣。何者。臣於陛下。后之兄也。姻婭之嫌。實與骨肉中表不同。雖太上至公。聖德無私。然世之喪道。有自來矣。悠悠六合。皆私其姻者也。人皆有私。則謂天下無公矣。是以前後二漢。咸以抑后黨安。進婚族危。向使西京七族。東京六姓。皆非姻黨。各以平進。縱不悉全。決不盡敗。今之盡敗。更由姻昵。臣歷觀庶姓在世。無黨於朝。無援於時。植根之本。輕也薄也。苟無大瑕。猶或見容。至於外戚。憑託天地。勢連四時。根援扶疎。重矣大矣。而財居權寵。四海側目。事有不允。罪不容誅。身既招殃。國爲之弊。其故何耶。直由婚媾之私。羣情之所不能免。故率其所嫌。而嫌之於國。是以疏附則信。姻進則疑。疑積於百姓之心。則禍成重闥之內矣。此皆往代成鑒。可爲寒心者也。夫萬物之所不通。聖賢因而不奪。冒親以求一才之用。未若防嫌以明公道。今以臣之才。兼如此之嫌。而使內處心膂。外摠兵權。以此求治。未之聞也。以此招禍。可立待也。雖陛下二相。明其愚款。朝士百寮。頗識其情。天下之人。何可門到戶說。使皆坦然耶。夫富貴寵榮。臣所不能忘也。刑罰貧賤。臣所不能甘也。今恭命則愈。違命則苦。臣雖不達。何事背時違上。自貽患責哉。仰覽殷鑒。量己知敝。身不足惜。爲國取悔。是以悾悾屢陳丹款。而微誠淺薄。未垂察諒。憂惶屛營。不知所厝。以臣今地。不可以進明矣。且違命已久。臣之罪又積矣。歸骸私門。以待刑書。願陛下垂

天地之鑒。察臣之愚。則雖死之日。猶生之年矣。

薦譙元彥表　　桓元子

臣聞。太朴既虧。則高尚之標顯。道喪時昏。則忠貞之義彰。故有洗耳投淵。以振玄邈之風。亦有秉心矯跡。以敦在三之節。是故上代之君。莫不崇重斯軌。所以篤俗訓民。靜一流競。伏惟大晉。應符御世。運無常通。時有屯蹇。神州丘墟。三方圮裂。兎罝絕響於中林。白駒無聞於空谷。斯有識之所悼心。大雅之所歎息者也。陛下聖德嗣興。方恢天緒。臣昔奉役。有事西土。鯨鯢既懸。思宣大化。訪諸故老。搜揚潛逸。庶武羅於羿浞之墟。想王蠋於亡齊之境。竊聞巴西譙秀。植操貞固。抱德肥遯。揚清渭波。于時皇極遘道消之會。羣黎蹈顚沛之艱。中華有顧瞻之哀。幽谷無遷喬之望。凶命屢招。姦威仍逼。身寄虎吻。危同朝露。而能抗節玉立。誓不降辱。杜門絕跡。不面僞庭。進免襲勝亡身之禍。退無薛方詭對之譏。雖園綺之棲商洛。管寧之默遼海。方之於秀。殆無以過。于今西土。以爲美談。夫旌德禮賢。化道之所先。崇表殊節。聖喆之上務。方今六合未康。豺豕當路。遺黎偸薄。義聲不聞。益宜振起道義之徒。以敦流遯之儆。若秀蒙蒲帛之徵。足以鎭靜頽風。軌訓囂俗。幽遐仰流。九服知化矣。

解尚書表　　殷仲文

臣聞。洪波振壑。川無恬鱗。驚飈拂野。林無靜柯。何者。勢弱則受制於巨力。質微則莫以自保。於理雖可得而言。於臣寔所敢喩。昔桓玄之世。誠復驅迫者衆。至於愚臣。罪實深矣。進不能見危授命。忘身殉國。退不能辭粟首陽。拂衣高謝。遂乃宴安昏寵。叨昧僞封。錫文篡事。曾無獨固。名義以之俱淪。情節自茲兼撓。宜其極法。以判忠邪。鎭軍臣裕。匡復社稷。大弘善貸。佇一戮於微命。申三驅

於大信。既惠之以首領。復引之以縶維。于時皇輿否隔。天人未泰。用忘進退。唯力是視。是以僶俛從事。自同全人。今宸極反正。惟新告始。憲章既明。品物思舊。臣亦胡顏之厚。可以顯居榮次。乞解所職。待罪私門。違謝闕庭。乃心愧戀。謹拜表以聞。

爲宋公至洛陽謁五陵表　傅季友

臣裕言。近振旅河湄。揚旍西邁。將屆舊京。威懷司雍。河流遄疾。道阻且長。加以伊洛榛蕪。津塗久廢。伐木通徑。淹引時月。始以今月十二日。次故洛水浮橋。山川無改。城闕爲墟。宮廟隳頓。鍾簴空列。觀宇之餘。鞠爲禾黍。廛里蕭條。雞犬罕音。感舊永懷。痛心在目。以其月十五日。奉謁五陵。墳塋幽淪。百年荒翳。天衢開泰。情禮獲申。故老掩涕。三軍悽感。瞻拜之日。憤慨交集。行河南太守毛脩之等。既開翦荊棘。繕脩毀垣。職司既備。蕃衞如舊。伏惟聖懷遠慕兼慰。不勝下情。謹遣傳詔殿中中郎臣某。奉表以聞。

爲宋公求加贈劉前軍表　傅季友

臣聞。崇賢旌善。王化所先。念功簡勞。義深追遠。故司勳秉策。在勤必記。德之休明。沒而彌著。故尚書左僕射前軍將軍臣劉穆之。爰自布衣。協佐義始。內竭謀猷。外勤庶政。密勿軍國。心力俱盡。及登庸朝右。尹司京畿。敷讚百揆。翼新大猷。頃戎車遠役。居中作捍。撫寧之勳。實洽朝野。識量局致。棟幹之器也。方宜讚盛化。緝隆聖世。志績未究。遠邇悼心。皇恩褒述。班同三事。榮哀既備。寵靈已泰。臣伏思尋。自義熙草創。艱患未弭。外虞既殷。內難亦薦。時屯世故。靡有寧歲。臣以寡劣。負荷國重。實賴穆之匡翼之勳。豈唯讜言嘉謀。溢于民聽。若乃忠規密謨。潛慮帷幕。造膝詭辭。莫見其際。事隔於皇朝。功隱於視聽者。不可勝記。所以陳力一紀。遂克有成。出征入輔。幸不辱命。微夫人之

左右。未有寧濟其事者。履謙居寡守之彌固。每議及封爵。輒深自抑絕。所以勳高當年。而茅土弗及。撫事永念。胡寧可昧。謂宜加贈正司。追甄土宇。俾忠貞之烈。不泯於身後。大賚所及。永秩於善人。臣契闊屯夷。旋觀終始。金蘭之分。義深情感。是以獻其乃懷。布之朝聽。所啓上合。請付外詳議。

爲齊明皇帝作相讓宣城郡公第一表

任彥升

臣鸞言。被臺司召。以臣爲侍中中書監。驃騎大將軍。開府儀同三司。揚州刺史。錄尙書事。封宣城郡開國公。食邑三千戶。加兵五千人。臣本庸才。智力淺短。太祖高皇帝。篤猶子之愛。降家人之慈。世祖武皇帝。情等布衣。寄深同氣。武皇大漸。實奉話言。雖自見之明。庸近所蔽。愚夫一至。偏識量己。實不忍自固於綴衣之辰。拒違於玉几之側。遂荷顧託。導揚末命。雖嗣君弃常。獲罪宣德。王室不造。職臣之由。何者。親則東牟。任惟博陸。徒懷子孟社稷之對。何救昌邑爭臣之譏。四海之議。於何逃責。且陵土未乾。訓誓在耳。家國之事。一至於斯。非臣之尤。誰任其咎。將何以肅拜高寢。虔奉武園。悼心失圖。泣血待旦。寧容復徼榮於家恥。宴安於國危。驃騎上將之元勳。神州儀刑之列岳。尙書古稱司會。中書實管王言。且虛飾寵章。委成禦侮。臣知不愜。物誰謂宜。但命輕鴻毛。責重山岳。存沒同歸。毀譽一貫。辭一官不減身累。增一職已黷朝經。便當自同體國。不爲飾讓。至於功均一匡。賞同千室。光宅近甸。奄有全邦。隕越爲期。不敢聞命。亦願曲留降鑒。卽垂順許。鉅平之懇誠彌固。永昌之丹慊獲申。乃知君臣之道。綽有餘裕。苟曰易昭。敢守難奪。故可庶心弘議。酌己親物者矣。不勝荷懼屛營之誠。謹附某官某甲。奉表以聞。

爲范尙書讓吏部封侯第一表

任彥升

臣雲言。被尚書召。以臣爲散騎常侍。吏部尚書。封霄城縣開國侯。食邑千戶。奉命震驚。心顏無措。

臣雲。臣素門凡流。輪翮無取。進謝中庸。退慙狂狷。固嘗鑽厲求學。而一經不治。篆刻爲文。而三冬靡就。負書燕魏。空殫菽粟。躡屩齊楚。徒知貧賤。旣而分虎出守。以囊被見嗤。持斧作牧。以薏苡興謗。赭衣爲虜。見獄吏之尊。除名爲民。知井臼之逸。百年上壽。旣曰徒然。如其誠說。亦以過半。亂離斯瘼。欲以安歸。閉門荒郊。再離寒暑。兼以東皐數畝。控帶朝夕。關外一區。悵望鍾阜。雖室無趙女。而門多好事。祿微賜金。而歡同娛老。折芰燔枯。此焉自足。陛下應期萬世。接統千祀。三千景附。八百不謀。臣釁等離心。功慙同德。泥首在顏。輿棺未毀。締構草昧。敢叨天功。獄訟謳歌。示同民志。而隆器大名。一朝總集。顧己及躬。何以臻此。政當以接閈白水。列宅舊豐。忘拾講之尤。存諸公之費。俯拾青紫。豈待明經。臣雲。夫銓衡之重。關諸隆替。遠惟則哲。在帝猶難。漢魏以降。達識繼軌。雅俗所歸。唯稱許郭。拔十得五。尚曰比肩。其餘得失未聞。偶察童幼。天機暫發。顧無足算。在魏則毛玠公方。居晉則山濤識量。以臣況之。一何遼落。齊季陵遲。官方淆亂。鴻都不綱。西園成市。金章有盈筲之談。華貂深不足之歎。草創惟始。義存改作。恭己南面。責成斯在。豈宜妄加寵私。以乏王事。附蟬之飾。空成寵章。求之公私。授受交失。近世侯者。功緒參差。或足食關中。或成軍河內。或制勝帷幄。或門人加親。或與時抑揚。或隱若敵國。或策定禁中。或功成野戰。或盛德如卓茂。或師道如桓榮。或四姓侍祠。已無足紀。五侯外戚。且非舊章。而臣之所附。唯在恩澤。旣義異疇庸。實榮乖儒者。雖小人貪幸。豈獨無心。臣本自諸生。家承素業。門無富貴。易農而仕。乃祖玄平。道風秀世。爰在中興。儀刑多士。位裁元凱。任止牧伯。高祖少連。夙秉高尚。所富者義。所乏者時。薄宦東朝。謝病下邑。先志不忘。愚臣是庶。且去歲冬初。國學之老博士耳。今茲首夏。將亞冢司。雖千秋之一日九遷。荀爽之十旬遠至。方之微臣。未爲速達。臣雖無識。唯利是視。至於虧名損實。爲國爲身。知其不可。不敢妄冒。陛下不弃菅蒯。愛同絲麻。儻平生之言。猶在聽覽。宿心素志。無復貳辭。矜臣所乞。特迴寵命。則彝

章載穆。徵物知免。臣今在假。不容詣省。不任荷懼之至。謹奉表以聞。

爲蕭揚州作薦士表　　任彥昇

臣王言。臣聞。求賢暫勞。垂拱永逸。方之疏壤。取類導川。伏惟陛下。道隱旗纊。信充符璽。六飛同塵。五讓高世。白駒空谷。振鷺在庭。猶懼隱鱗卜祝。藏器屠保。物色關下。委裘河上。非取製於一狐。諒求味於兼采。而五聲倦響。九工是詢。寢議廟堂。借聽輿皁。臣位任隆重。義兼家邦。實欲使名實不違。徼倖路絕。勢門上品。猶當格以清談。英俊下僚。不可限以位貌。竊見祕書丞琅邪臣王暕。年二十一。字思晦。七葉重光。海內冠冕。神淸氣茂。允迪中和。叔寶理遣之談。彥輔名教之樂。故以暉映先達。領袖後進。居無塵雜。家有賜書。辭賦淸新。屬言玄遠。室邇人曠。物疎道親。養素丘園。台階虛位。庠序公朝。萬夫傾望。豈徒荀令可想。李公不亡而已哉。前晉安郡候官令。東海王僧孺。年三十五。理尙棲約。思致恬敏。旣筆耕爲養。亦傭書成學。至乃集螢映雪。編蒲緝柳。先言往行。人物雅俗。甘泉遺儀。南宮故事。畫地成圖。抵掌可述。豈直鼮鼠有必對之辯。竹書無落簡之謬。暕坐鎭雅俗。弘益已多。僧孺訪對不休。質疑斯在。竝東序之祕寶。瑚璉之茂器。誠言以人廢。而才實世資。臨表悚戰。猶懼未允。不任下情。

爲褚諮議蓁讓代兄襲封表　　任彥昇

臣蓁言。昨被司徒符。仰稱詔旨。許臣兄賁所請。以臣襲封南康郡公。臣門籍勳蔭。光錫土宇。臣賁世載承家。允膺長德。而深鑒止足。脫屣千乘。遂乃遠謬推恩。近萃庸薄。能以國讓。弘義有歸。匹夫難奪。守以勿貳。昔武始迫家臣之策。陵陽感鮑生之言。張以誠請。丁爲理屈。且先臣以大宗絕緖。命臣出纂傍統。稟承在昔。理絕終天。永惟情事。觸目崩隕。若使賁高延陵之風。臣忘子臧之節。是

廢德舉。豈曰能賢。陛下察其丹款。特賜停絕。不然投身草澤。苟遂愚誠爾。不任丹慊之至。謹詣闕拜表以聞。臣誠惶誠恐。

爲范始興作求立太宰碑表　任彥昇

臣雲言。原夫存樹風猷。沒著徽烈。既絕故老之口。必資不刊之書。而藏諸名山。則陵谷遷貿。府之延閣。則青編落簡。然則配天之迹。存乎泗水之上。素王之道。紀於沂川之側。由是崇師之義。擬迹於西河。尊主之情。致之於堯禹。故精廬妄啓。必窮鐫勒之盛。君長一城。亦盡刊刻之美。況乎甄陶周召。孕育伊顏。故太宰竟陵文宣王臣某。與存與亡。則義形社稷。嚴天配帝。則周公其人。體國端朝。出藩入守。進思必告之道。退無苟利之專。五教以倫。百揆時序。若夫一言一行。盛德之風。琴書藝業。述作之茂。道非兼濟。事止樂善。亦無得而稱焉。人之云亡。忽移歲序。鵩鴞東徙。松檟成行。六府臣僚。三藩士女。人蓄油素。家懷鉛筆。瞻彼景山。徒然望慕。昔晉氏初禁立碑。魏舒之亡。亦從班列。而阮略既泯。故首冒嚴科。爲之者。竟免刑戮。置之者。反蒙嘉歎。至於道被如仁。功參微管。本宜在常均之外。故太宰淵。丞相嶷。親賢並軌。卽爲成規。乞依二公前例。賜許刊立。寧容使長想九原。樵蘇罔識其禁。駐蹕長陵。輶軒不知所適。臣里閭孤賤。才無可甄。値齊網之弘。弛賓客之禁。策名委質。忽焉二紀。慮先犬馬。厚恩不答。而弊帷毀蓋。未夢螻蟻。珠襦玉匣。遽飾幽泉。陛下弘獎名教。不隔微物。使臣得駿奔南浦。長號北陵。既曲逢前施。實仰覬後澤。儻驗杜預山頂之言。庶存馬駿必拜之感。臨表悲懼。言不自宣。

文選卷十九終

大正十一年二月十七日印刷
大正十一年二月二十日發行
大正十一年五月九日再版發行
大正十三年一月卅一日三版發行
大正十四年四月十五日四版發行
昭和九年六月十五日五版發行

國譯漢文大成 文學部第三卷

【非賣品】

編輯兼發行者 東京市神田區小川町一丁目六番地 國民文庫刊行會
右代表者 東京市本郷區西片町十番地 鶴田久作
印刷者 東京市小石川區久堅町百八番地 君島潔
印刷所 東京市小石川區久堅町百八番地 共同印刷株式會社

發行所
電話神田 五三五番
　　　　 八三八番
振替東京一八五七二番
國民文庫刊行會